

ラブライブ！～1人の男 の歩む道～

シベリア@妄想作家

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

大阪にいた高校2年生香川ナオキは模擬男子生徒として東京の音ノ木坂学院に転入することに!?さらにナオキは生徒会役員になることとμsのサポート役を頼まれる。

そしてナオキはずっと好きだった絢瀬絵里はじめ、μsの面々とはなにかと繋がりがあった。

そんなナオキが過去を乗り越え、9人の女神たちと、その後歩んだ青春の日々をえがく物語!

総集編は次の回を読んでください。総話数（実際に書いている話数）

104 (92). 185 (Another way). 186 (Another way)

2015年12月27日にこの小説名を『シベリアのラブライブ！妄想物語』から変更しました。

Twitterのフォローもお待ちします！Twitter垢は@siberiana711です！

目次

1st Season ～君を思い続けて

第9話「あらたなSTARR」

69

第10話「月」

76

第11話 (1st Season ～君

を思い続けて～章末回)「あらたなライブ

の予感」

83

2nd Season ～愛しい君と～

第12話「ワンモワ!」

95

第13話「山で合宿!」

103

第14話「告白」

111

第15話「予選大会」

122

第16話「新しい生徒会」

137

第17話「にこぷり♡女子道」

5

序章 ～道のはじまり～

1

第1話「別れ」

8

第2話「再会」

16

第3話「再会その2」

23

第4話「再会その3」

31

第5話「事実」

39

第6話「新しい居場所」

46

第7話「No brand girl

1

s」

55

第8話「悔しみと進展」

63

第26話「Dancing star」	291				
第25話「初デート」	284				
妄想外伝「キャラ紹介」	263				
第24話「それは僕たちの奇跡」	251				
第23話「PV撮影」	242				
第22話「大事なお土産」	222				
第21話「Love wing be	208				
第20話「沖縄」	193				
第19話「確認と出発」	177				
第18話「再会その4」					155
妄想外伝「ことりの誕生日」					son me!
妄想外伝「ナオキの誕生日」					314
第28話「希の望みはμsの望み」	410				
第29話「ナオキのμsとの出会い」	455				
第30話「決戦前夜と雪の災難」	479				
第31話「Snow halatio					
第32話「恐怖の鍋パーティー」	509				

	549	第33話「特別企画ナオキと絵里の妄想ラジオ！」
		第34話「特別企画ナオキと絵里の妄想ラジオ! Part 2」
	580	第35話「クリスマスデート」
607		第36話「ナニワオトメ」
	623	第37話「みんなで叶える物語」
642		妄想外伝「絵里の誕生日」
	677	妄想外伝「凜の誕生日」
	710	第38話「本戦で戦うアイドルたち」
	724	第39話「受験」
		第40話「裏切ったものたち」
	744	第41話「辛い過去と大切な人たち」
	773	第42話「ナオキのやりたいこと」
	805	第43話「復活のナオキ」
		第44話「今度こそ復活のナオキ」
	834	第45話「決断の時」
		第46話「おれたちが決めたこと」
	872	

- 第47話「決戦前夜の死闘」―― 978
- 第48話「夢の中でMusic S.」――
- T・A・R・T!!――
- 第49話「届けたい想い」―― 10731042
- 妄想外伝「スクールアイドル紅白歌合戦!」―― 11671154
- 第50話「決着のとき」――
- 妄想外伝「KKE団創立の日記念く絵里のファングループ」―― 126112351212
- 第51話「贈る言葉」――
- 第52話「卒業式」―― 126112351212
- 第53話(2nd Season)く愛―― 14381429
- しい君とく章末回)「どんなときもずっと」―― 1301
- 東條希編
- 第54話「太陽みたいな笑顔」―― 1377
- 第55話「あなたを占って」―― 1389
- 第56話「運命を乗り越えて」―― 1407
- 第57話(東條希編章末回)「希、これから進む道」―― 1421
- 星空凜編
- 第58話「不思議な気持ち」―― 1429
- 第59話「わかった気持ち」―― 1438

	第60話「これってデート!？」		第67話「まさかの再会」	
1454	第61話(星空凜編章末回)「凜、これから進む道」	1470	第68話「2人をつなぐごはん」	1528
	園田海未編		第69話(小泉花陽編章末回)「花陽、これから進む道」	1542
	第62話「海色少女の初恋」	1478	南ことり編	
	第63話「そして私たちは巡り会う」		第70話「傷と初恋」	1549
1491	第64話「初恋はやがて」	1505	第71話「選択」	1559
	第65話(園田海未編章末回)「海未、これから進む道」	1512	第72話「隠し事」	1568
	小泉花陽編		妄想外伝(クリスマス)「聖夜の奇跡?」	1579
	第66話「先輩禁止2」	1520	第73話(南ことり編章末回)「ことり、これから進む道」	1601

高坂穂乃果編

第74話「太陽に憧れて」――

1608

第75話「大切なともだち」――

1615

第76話「リーダー」――

1625

第77話（高坂穂乃果編章末回）「穂乃

果、これから進む道」――

1631

Another way（大晦日）「も

う1つの大晦日」――

1637

Another way（お正月）「新

春スペシャル！μ'sic START

！〜2016〜」――

1657

矢澤にこ編

第78話「笑顔の魔法使い」――

1680

第79話「偶然の出会い」――

1688

第80話「喜びから」――

1696

第81話（矢澤にこ編章末回）「にこ、こ

れから進む道」――

1702

西木野真姫編

第82話「出会いのメロデー」

1711

第83話「偶然の再会」――

1719

第84話「もう少しだけ」――

1724

第85話（西木野真姫編章末回）「真姫、

これから進む道」――

1733

絢瀬絵里編

第86話「運命の出会い」――

1741

第87話「運命の人」—— 1752

第88話「運命のとき」—— 1760

第89話(絢瀬絵里編章末回)「絵里、これから進む道」—— 1770

香川ナオキ編

第90話「女神たちとの出会い」

1780 第91話(香川ナオキ編章末回)「ナオ

キ、これから進む道」—— 1791

Another way (小泉花陽の

誕生日)「ナオキと花陽の決闘…?」

1799 第92話(マジの香川ナオキ編章末回)

「約5分でわかる!これまでのラブライ

ブ!〜1人の男の歩む道〜」—— 1820

The school idol movie
view NEW STAGE

第93話「新しい知らせ」—— 1846

第94話「試練と準備」——

1887 第95話「初めての夜」—— 1860

第96話「アメリカに行く準備も楽
じゃないね」—— 1904

第97話(NEW STAGE章末回)

「いぎ、アメリカへ!」—— 1924

Another way (節分)「死ぬ

気で喰らえ!そして鬼になりきれ!〜こ

- れが節分の過ごし方」—— 1945
- The school idol movie 第2章くアメリカで舞う女神たち
- 第98話「旅のはじまり」—— 1971
- Another way (バレンタインデー)「これがバレンタインデーというものか!ハラショー!」—— 1983
- 第99話「ニューヨーク・パニック」
- 2015 第100話「みんなで作る1人の男の歩む道く少し先のミライ」—— 2046
- 第101話「アメリカンナイト」
- 2112 Another way (ホワイトデー)「苦勞と幸せのホワイトデー」
- 2145 Another way (海未の誕生日)「弥生の月に交わる劍」—— 2157
- Another way (UA5000突破記念)「IFくナオキと絵里の思いく」—— 2181
- 第102話「Hello?星を数えて」
- 第103話「ライブ前夜」—— 22522210
- 第104話「μsアメリカライブ」

Angelic Angels

日)「真姫、自転車に乗る(小並感)」

2291

2404

第105話(アメリカで舞う女神たち

第108話「葛藤の日々」

2432

章末回)「さらばアメリカ!おかえりμ,

第109話「ナオキの葛藤」

2452

!」

第110話「未来のカタチ」Future

2493

The school idol mo

re style」

2493

vie第3章く歩むべき道はく

Another way(お気に入り)

2493

第106話「?↑HEARTBEAT

200人突破記念)「スクールアイドル、

2514

《ハテナハートビート》・ランナウェイ!

プレイボール!」

2514

2346

第107話「やり残したこと」

200人突破記念)「お願い、シンデレラ

2524

2369

!

2524

Another way(真姫の誕生

第111話「未来へ羽ばたく10羽の

2524

鳥

2539

第112話「三大スクールアイドル」

2556

第113話「スクールアイドルフェス

ティバル開幕！」

2572

第114話「最高のライブに向けて！」

2594

第115話（歩むべき道は章末回）「ス

クールアイドルの最高のライブ」

NY DAY SONG」

The school idol mo

vie 完結編」そして最後のページには

）

第116話「祭りのあと」

第117話「思いを言葉に」

第118話「言葉を紡いで」

第119話「μ's Moment

Shine」最後を伝えるライブ」

2693

第120話（完結編最終回）「μ's、ラ

ストミュージックスタート！」僕たちは

ひとつの光」

Another way（希の誕生日）

「今日つてウチの誕生日やんな？」

2809

最後の一年のはじまり

268326712656

2773

第121話「2人の少女の試練」

2840

Another way (穂乃果の誕

2906

第122話「同じもの・新しいもの」

生日)「姉妹の”今”の理由」

2918

2853

コラボ回 (with 癸楓文音)「キミの

第123話「新たなる可能性」

いる国 || おれのいる国」

2927

2871

第126話 (最後の一年のはじまり章

第124話「Dancing new

末回)「伝説となりし者たちとその輝きを

stars on Ottonoki

目指す者たち」

2956

!

2883

Another way (にこの誕生

第127話「その願いは流れ星のよう

日)「パパがくれた笑顔のおかげで」

に」

2969

2894

第125話「一歩先に待つものは」

2989

第128話「嵐の予感……?」

- Another way (ナオキの誕生日) 「遠くから、近くから」 — 3005
- コラボ回 (Withウオール) 「香る絵と春の花々大人の味に魅せられて」 3019
- 第129話 「ゼロからの愛」 — 3052
- Another way (絵里の誕生日) 「2度目の……」 — 3080
- 第130話 「スピカテリブル」 3092
- 第131話 「3バカといとこ」 3115
- 第132話 「空」 — 3143
- Another way (U A I O 万突破記念) 「私を想ふ貴方の気持ちの大きさは」 — 3158
- Another way (お気に入り300件突破記念) 「ことばな事件簿」ポ
ンコツ化通り魔事件!？」 — 3192
- 第133話 「水着だ!合宿だ!先輩禁止だ!」 — 3212
- 第134話 「砂浜で輝く星たち」 3223
- Another way (クリスマス) 「仕事と私、どっちが大事なのよ!」 3240

第135話「First Night

Umii

3259

第136話「夏の日のもとで」

3274

第137話「夏合宿の思い出に」

3286

第138話「梨子と絢瀬姉妹!主に姉

の方」

3310

第139話「仲が良いのか悪いのか」

3326

第140話「夕日に照らされる一凜の

花」

3343

第141話「夏祭りと甘いかき氷」

3362

第142話「ドキドキ海水浴!」

3401

第143話「思い出のバレッタ」

3419

第144話「ぶつかる想いと奥義」

3435

第145話「熱い愛でアナタを想う」

3468

第146話「ナオキと絵里のハラ

シヨ!な旅行く前編く」

3513

第147話「ナオキと絵里のハラ

シヨ!な旅行く後編く」

3545

第148話「始まりの流れ星」

3578

第149話(章末回)「早すぎる終わり」

3601

ゴールまでの一歩

第150話「変わらぬ日常を変える日」

3615

第151話「帰省」

第152話「ナオキの何分かかるかわ

からないクッキング」

3647

第153話「共に歩む人」

第154話(章末回)「おれの夢、私の

夢」

3687

Another way「これまでの

ラブライブ!〜1人の男の歩む道〜映画

編」

3711

Another way「これまでの

ラブライブ!〜1人の男の歩む道〜アフ

ターストーリー編」

3744

最終章〜みんなで歩いた道、これから歩

く道〜

第155話「最後の文化祭」

3773

第156話「音ノ木坂学院の未来」

3801

第157話「みんなをつなぐ空に」

3813

第158話「大きくなる気持ち」	3833
第159話「夢の舞台」	3851
第160話「分裂」	3881
第161話「それぞれの輝き」	3898
第162話「旅立ちの日に」	3925
After way. 01 「記念遠足と決戦と」	3957
After way. 02 「卒業旅行と雪の結晶と」	3980
After way. 03 「2人の愛の巣と決断と」	3999

LAST Another way	
「田舎移住計画 in ラブライブ!村」	4013
最終回「1人の男の愛する人と歩む道」	4032
終章「これから歩む道」	4056

1st Season 君を思い続けてく 序章 道のはじまり

俺の名前はナオキ！みんなからはジャーナリストを目指しているから「ジャーナ」だとか生徒会長だから「会長」だとか呼ばれるように。下の名前で呼んでくれるのは東京にいる幼なじみぐらいいだ…あ、電話だ…噂をすればなんとやらってやつか（笑）

「もしもし？」

「あ、もしもし？電話大丈夫？」

「うん！大丈夫だよ！絵里」

「よかったー」

「それでなんのよう？」

「たいしたようじゃないんだけど最近どうかなーって」「うーん、そうだな…そう言えば最近生徒会長になったんだ！」

「へーすごいわねー！ハラショー！私と同じじゃない!!」

「うん！そっちは？」

「いつも通り、生徒会の仕事が忙しいのよ……」

「そっかー、あんまり無理しないようにな？」

「わかつてるわよー。うふふ……」

「それじゃおれは明日朝早いから」

「うん！それじゃ、またね。おやすみ…ナオキ」

「うん！おやすみ…絵里……」

ふうー……」

思わずため息を吐く……

実を言うと確かおれは絵里と初めて出会って遊んでるうちに好きになったんだよなー

あー愛の方な。

さーて……明日も頑張るか！

そして翌日もいつもどおりクラブも終わり、（あ、おれ部長なんだわ）家に帰り、ご飯を食べ、お風呂に入って寝た、いつもどおりだわなー（笑）

そしてその翌日、いつもどおり学校につき、朝のHRで予想もしなかったことが……

「おい、会長くん」

と先生、

「先生、その呼び方はやめてくださいよー……」

おれは笑っているのに……なんで……なんで先生は笑ってないんだ？逆に先生は険しい顔をしている……

「なにかしたのか？」

と隣の席の友達、

「いや、とくに何もしてないけど……」

「でも先生のおんな顔……」

「うん、見たことねー……」

「早くしなさい！」

先生が怒った？

「は、はい！」

そして先生に連れられて校長室へ、俺の中で不安が積もるばかり……

「失礼します！会長……ナオキくんを連れてきました！」「うん、入りなさい」

と校長。

「失礼します！」

「し、失礼します！」

おれも戸惑いながら入る……校長も険しい顔をしている……おれなにかしたのか？
「まあ、ナオキくんそこに座りなさい」

と校長。

「はい」

心臓がドキドキする……汗がタラタラ流れてくる……不安が積もるばかりだ……
「あの一、おれなにかしましたか？」

と恐る恐る聞いた……

「自覚は……ないのかい？」

と校長。

「はい、特にはなにも……」

「いいかい？ ナオキくん、よく聞いてくれ……ある生徒が……」

言葉をつまらせる校長。思わずつばを飲み込むおれ……

「ある生徒が……近所の人と喧嘩して、その人を殴ったらしいんだ」

「え？」

なーんだおれがしでかしたんじゃないんだ……じゃなくて！

「一体、誰が……」

「それは……キミの隣の席の……」

校長から思わぬ言葉、え、なんであいつが？まあいかついのは確かだけど……

「その子はキミの言うことならキミが聞くかも知れない……だから」

「おれに説得しろと？」

「そのとおりだ」

はあ、呆れた、でもあいつはこの学校にいたがっている、おれが一番わかる……でも

……

「お願いできるかね？」

と尋ねる校長。とっさに出た言葉……それは……

「それはできません」

驚く校長。

「な、なぜだ!? キミは生徒会長だろ！なのに、生徒が犯したことを放っておくつもりか

!？」

「それは!!」

もう、決めた！やるしかない!!

「それは……………おれです……………」

「は？今、なんと……………」

むっっちゃ驚いた校長。

「だから……………おれがやりました！おれが近所の人と喧嘩して殴りました！」

次回へ続く

第1話「別れ」

前回の妄想物語！

隣の席のいかつい友達がある日近所の人と喧嘩して殴ったらしい、そこで生徒会長でさらにそいつの友達であったこのおれが呼び出されたんだ……

そして……おれはあることを言ってしまったんだ……

それは………

「おれがやりました……おれが近所の人と喧嘩して、殴ったんです……」

とおれが言うとお校長は目を大きく開いて、口を大きくあけて驚いた……

「どうして……そんなことを……」

とお校長は聞いてきた……

「それはその人が友達を馬鹿にして……おれはそれを注意したらその人は逆ギレして

きて、それにカツとなつて……殴りました……」

なんでこんなこと言つたんだろ？ほんま馬鹿やわー

「そうか……こうなつた以上あまり大きくはしたくない……その人も警察ぎたにはしたくないと言っている……だから謝りに行くんだ……」

と校長は言つたからおれはそのままその人の家へ向かい、謝罪した。その人も自分が悪かつたと言つてくれた……だが本当はおれはやっていない……やったのは……たぶんあいつだろう……ま、これでいつか！ハハハハハハハ!!!

教室へ帰るとみんながおれをむいて、

「おー！会長！心配したぜ！」

「ほんまやでー」

「もう4時間目だけ？授業サボリやがつてー」

「別にサボつてねーよ（笑）」

しかし、この問題をおれが背負つた以上は責任をとらないと。席に戻ると友達が「おかえり……どうした？元氣ないな？」

さすがだわ（笑）

「いや、ちよつと……な」

まだ話さない……まだ

そして放課後、おれは担任と一緒に校長室へ行った。校長は

「どうしたんだい？担任と一緒に来て……」

「話があります……」

とおれはきりだす……

「おれはこういう問題を起こした以上、会長としてはいけません、この学校にはいれませ
ん………なので………退学させてください………」

校長は

「やはりか………キミなら私と同じ判断をすと思ったよ………わかった、今までありがと
う………ナオキくん………」

翌日はおれの最後の登校日となるのだ。

親もわかってくれた……あとは……クラスメイトや友達だけだ……

担任は翌日の朝のHRでおれが退学することとその経緯を話してくれた……だが……世の中って甘くないな……みんなおれに「ありがとな」とか「これからも元気でな」とか言ってくれると思っただけ……

「そんなやつとは思わなかったぜ……」

「マジ引くわー」

「はやく出てけよ……クズが」

人ってそんなものか……おれはこの日から人を簡単に信用しないことにしたんだ……

そして放課後、友達はおれを追いかけてきた。

「ちよつと待てよー!」

「どうした?こんなクズなおれに……」

「クズなのはお前じゃねえ！俺だろ？なんで嘘ついたんだ！あのじじいを殴ったのは俺だ!!それをわかっておまえは……………」

さすがだわ（笑）

そしておれは言った

「そうだよ…………お前には…………この学校を無事に卒業して欲しい…………だから…………お前をかばったんだ」

「すまないな……………」

「謝ることなんてないだろ？…………じゃーなー」

涙を堪えて別れるおれと…………高校で初めてできた…………友達…………ま、家で結構泣いちまったけどな（笑）

おれは落ち込んでしまった…………萎えてしまった…………もう…………信じない…………

そんなときある出会いがあつたんだがそれはまた後ほど…………

そして何日かたったあと一本の電話がかかってきた…………それは東京の学校の理事長をしていてさらには幼なじみのお母さんだった…………

「どうかしましたか?」

「あら、元氣?いきなりごめんなさいね。実はお願いがあるのよー」

「お願い?」

「実はね……私の学校……音ノ木坂学院がね……廃校の危機なのよ……」

「あ、絵里から聞きました」

「あら、そうだったの?そこで廃校の危機から音ノ木坂学院を救うためにあることを思いついたのよ!それはね……」

そこでおれは驚愕の理事長のアイデアを聞いたんだ……

ま、おれと理事長の娘……ことりととの関係は小さいときにさかのぼる。実は小さい時はおれは東京にいたんだ……

その時によく遊んだのがことりと和菓子屋の娘穂乃果、園田道場の海未この3人とは同い年だったし、絵里とは通りかかった教会でであったんだっただな……。

ま、それで幼なじみというわけさ、そしておれはなぜ大阪にいるか、まあただ引越しただけさ(笑)

で、理事長から頼まれたことはね……

~~~~~

そして音ノ木坂学院……

生徒たちが講堂に集められた……

「えりちー」

「どうしたの希？」

「なんで全校生徒が集められたん？」

「わからないわ」

そこで、ナオキと幼なじみの絢瀬絵里と知り合った東條希が話していた。

そして理事長が出てきた……

「えー皆さんに新しい生徒を紹介します」

と理事長が言った。

「へー新しい生徒かー、さーて大きさはどれほど……」

希は新しい”女子”生徒の胸の大きさを期待してかエアわしわしをしていた。



「希……」

絵里はジト目で希を見た。

「いやー冗談やって、えりちー」

「それでは紹介します！さ、こっちへ」

と理事長が言うと……

次回へ続く

## 第2話 「再会」

前回の妄想物語！

友達をかばい、退学することとなったナオキ…

だがそこへ一本の電話が……

「お願いがあるのよー」

そして音ノ木坂学院の朝、講堂に集められた生徒たちの前に現れた新しい生徒とは

……

「それでは紹介します！どうぞ」

と理事長が言うのと生徒たちは舞台袖に目を向けた……そこから出てきたのは……

「皆さんおはようございませーす」

とナオキは言った。

「え、なんで……なんで男子……?!」

と生徒たちの声が講堂に響く。

「あははは……驚くのは当たり前ですよ、女子校に男子が入ってきたんだから……とりあえず自己紹介を……」

どうも理事長に頼まれて模擬男子生徒としてこの音ノ木坂学院に転入することになりました、ナオキです。前の学校では『シベリア』とか『ジャーナ』とか呼ばれてました。2年生です。よろしく」

とナオキは台本通りに言った（笑）

『模擬男子生徒』とは『模擬』には本物に似せて行うという意味がある。

つまり、『模擬男子生徒』とは男子生徒が音ノ木坂学院に実際にいるようにすることである。

「なあ、えりち、あの子ってたしかえりちの幼なじみの子やんな？」

と希は絵里に尋ねる。

「ええ……そうよ……」

と答えると絵里はむすつとして

「こつちに来るなら知らせてくれればいいのに……」と呟いた。

同じくナオキの幼なじみの高坂穂乃果・園田海未・南ことりも驚きを隠せない。

「あれ？あの人どこかで……」

と考える1年生の西木野真姫。

「どうしたの？真姫ちゃん？」

と同じく1年生の花陽。

「もしかして知り合いにや？」

同じく1年生の星空凛も気になるようだ。

「んー、忘れたわ」

「真姫ちゃん……」

そして理事長は最後に言った。

「ま、新しい生徒を迎えたということで皆さん、今日も1日頑張りましょうね」

そしてみんな自教室へ戻る。

~~~~~

おれはは新しい先生に案内され自分の教室へ向かった。

女子生徒の視線は全ておれに向いていた。

教室へ入ると案の定教室はざわついた。

「はい、みんなよく聞けー。ナオキくんにはこのクラスへ入ってもらおう。自己紹介はい

らないな、お前の席は……高坂の後ろだ」

と担任の先生が言った。

「ん？高坂？……まさか」

席の方をむくと……

あ、やっぱり……

「あ、穂乃果！あ、ことり！あ、海未！」

やべえ、こんなカタチで幼なじみと再会するとは……

「やはりナオキくんでしたか……」

「へー大きくなつたねーナオキくん！」

「わあーい！ナオキくんだー！」

3人とも喜んでる。

「なんだ、お前ら知り合いなのか？なら安心だ！ハハハ」

と言っておれの背中をバンと叩く先生。

とりま座ろ……

そして休み時間、穂乃果・海未・ことりとおれは盛り上がりつついた。

「ま、あらためてよろしくな、3人とも」

「うん！よろしくねー！」

と穂乃果。

「でもお母さんがそんなこと考えてたなんて知らなかったなー」

とことり。

「え、そうなのですか？私はてつきりことは知っているのかと…」

と海未。

「ま、いいじゃんいいじゃん！これからまたみんなで遊べるんだからー！」

とはしやぐ穂乃果。

「できればこれからはナオキで呼んでくれよ？」

そしてなんで……なんで1時間目から数学なんだよ!!

「えー、それでは……模擬男子生徒のナオキくん。この問題わかりますか？」
と数学の先生。

うわー、みんなおれを期待の目で見てる……

「えっと……」

考え続けて導き出した答えは……

「わかりません！」

「え？」

みんな固まっていた。

だって……数学苦手やもん……

「まさか……ナオキく……ナオキがここまで数学がダメだとは……」

呆れる海未。

「ナオキー、うーん……ナオキくん！ファイトだよ！」

「あははは……でも穂乃果ちゃん、寝てたけどね」

「うっ……」

「これは穂乃果とナオキには徹底指導が必要ですな」

「そんなー」

とおれと穂乃果は言った。

そして昼休み、おれは絵里に生徒会室へ呼び出された。

「お弁当を持ってきてね」って言っていた。

久しぶりに会えるんだな、おれの大好きな……

絵里と……

次回へ続く

第3話 「再会その2」

前回の妄想物語！

ナオキはなんと音ノ木坂学院の模擬男子生徒になったのだった！そしてナオキは幼なじみの穂乃果・海未・ことりと再会するのだった。

そして昼休みにナオキは幼なじみの絵里に生徒会室へ呼び出されたのだった。

「絶対怒ってるよ……絵里……」

そうつぶやきながらも一度メールを確認……

「ナオキ、昼休みお弁当を持って生徒会室へ来てね。」

なにか威圧を感じる……

「……」が生徒会室か……」

唾を飲み込むのだが……

「でも絵里と会えるのかー……………」

そう考えるだけで胸がワクワクする。

「し、失礼しまーす」

とノックを入れて入ると

~~~~~

「あら、ナオキー！久しぶりねー！」

と絵里があいさつした。

「お久しぶりやーん」

そして希もあいさつした。

「あ、希さんもいたんですね。お久しぶりです。」

ナオキは一礼した。

ナオキと希は現3年生が修学旅行で大阪に来た時、たまたま絵里とナオキが再会した時に絵里と一緒にいたため知り合いに、絵里と希はそこでナオキと電話番号などを交換したのだ。

「ま、ナオキも座って座って、少しお話ししましょう。」

絵里は言った。

ナオキは言われた通りに空いていた席に座った。

「それで……なんの御用で？」

ナオキは尋ねる。

「なんの御用で？じやないわよ！なんで来るって言うてくれなかったの？」

絵里は怒ってた。

「いや、ちよつと驚かそうかなーって思ってたさ」

「でもなんであの学校をやめてここに来たの？あなた生徒会長だったんでしょ？」

「え、そうやったん？」

「まあ一応は……」

「へーえりちと同じやねー……」

希はなにやらイタズラな言い方で言った。

「ちよつ…希い！」

「はいはい」

「ん？どうしたんだ？」

「別に何もないわよ！」

絵里は顔をあかくして言った。

「で、話の続きは？」

「あ、そうだったわね」

絵里は「ホンと言った。

(……かわいい……)

「それでね、ナオキにお願いが2つほどあるのよ」

「え、2つも……」

「ええ……まず1つ目はね、ナオキに生徒会に入って欲しいのよ。」

「生徒会に!？」

「ええ……やっぱりナオキが模擬男子生徒として入ってきた以上これからも男子生徒が入ってきてもおかしくない。そこで、男子の目線で生徒会もある程度なにか変えていかないでしょ？」

「なるほどー」

おれは初めての自作弁当をたいらげて言った。

「え……ちよつとまって、食べ終わるの早くない？」

絵里が驚いて聞いてきた。

「だって量も少なかつたし」

「午後から大丈夫なの?……もう……」

すると希が

「ならえりちが作ってあげればいいやん！」

と言うと

「ちよつ…希い！何言ってるのよ！」

「ナオキくんもその方がええやろ？」

希が聞いてきたのでナオキは即答で…

「はい、そうですね」

絵里は顔をとてもあかくした。

「で、絵里、次の話は？」

ナオキは聞くと、

「空気よみなさい！」

「……あれ？怒った……？」

「もう…バカ……」

「かわりにウチがはなそーかな」

「あつ、はい」

「えつとー、2つ目はねー、なんと！ナオキくんには！なんと！」

「なんと……？」

「なんと！」

「……………あ、その前に私達がスクールアイドルをしているって知ってる？」

ナオキはずっこけた。

「し、知ってますけど……………」

「えー、そうなん！ねえ、えりちー、ナオキくん見てくれてたって！よかつたやん！」  
「もう…………やめてよー希い！」

絵里の顔がこの昼休みほとんどあかくなっている。

「ほんでなー、*μ's*のサポート役というかそんな感じのを頼みたいん！お願いできる？」

ナオキの答えは決まっていた。

それらはナオキが願ってもないこと

「2つとも喜んで引き受けましょう！」

ナオキは胸を勢い良くドンと叩いて咳き込んだ。

「ちよつとナオキ、大丈夫？」

絵里が心配そうに言った。

「だ、大丈夫だよ。あはははは……………。絵里、これからよろしくな！希さんもよろしくおね

「がいしますー！」

「いやーナオキくん……μ sはね…先輩禁止なの…だから……」

ナオキは察した。

「わかった！よろしく！希！」

「よろしい！」

希は言った。

「それじゃ、放課後もう一度ここへ来てね！待つてるから」

と絵里は言った。

「わかった！」

ナオキは返答し、教室へ帰るのだった。

教室へ帰ると穂乃果・海未・ことりに用事はなんだったのかと尋ねられてナオキは正直に全て話した。

すると穂乃果は喜び、海未も喜び、ことりも喜んだ。

ナオキは放課後をととても楽しみにしていた。

そのころ1年生の教室では

「やっぱりあの人……どこかで……」

真姫はまだ考えていたのだった。

次回へ続く



## 第4話「再会その3」

前回の妄想物語！

生徒会室へ呼び出されたナオキ、そこで絵里と希と再会する！

ナオキは絵里と希のお願いで生徒会に入り、さらにμsのサポート役的なやつになることになった！

だが真姫はナオキに見覚えがあるが気づかないまま放課後をむかえるのであった  
「あの人……やっぱりどこかで……」

そして放課後

「ナーオーキーくん！」

穂乃果はナオキの背後から大声で名前を呼んだ。

「わっ！びつくりしたー」

「ねえねえ、これから部室なんでしょう？一緒に行くこうよ！」

穂乃果はナオキを誘う。

「ごめん、絵里に生徒会室へ来てって言われてさ、絵里と一緒に行くと思う。」

ナオキは絵里に生徒会室へ呼び出されてたのだった。

「えーそうなのー。」

「それなら仕方ないね…」

「ことりが言う。」

「えーでもー!」

穂乃果は諦めない。

「もう…穂乃果! ナオキが困っているでしょう! え、絵里と一緒になら、も、問題ありませんから先に行きましょう。」

海未はなぜか震えながら言った。

「海未どうした? そんなに震えながら…」

ナオキが聞くと、

「ふ、震えてなどいません!」

「あつ、はい」

「もー…わかったよー。じゃ、ナオキくん! またあとでー」

「おう!」

穂乃果たちはナオキと一旦別れた。

「さて、生徒会室へむかうか」

ナオキは荷物をまとめ生徒会室へむかった。

そして生徒会室に到着した。

「ちーっす」

軽々なあいさつでナオキは生徒会室へ入った。

「え？……」

入るとそこには着替え中の絵里が。

「あ……」

ふたりは固まった。

「し、失礼しましたー」

ナオキはドアを閉めた。

「やばい……これは確実に怒ったな……とりあえず……」

ナオキは忍び足で教室へむかおうとした。

「ちよつと……ナオキ……」

「ひっ！」

絵里は練習着に着替え、ドアを開けて言った。

「なにか言うことは………?」

「え、えーつと……」

ナオキは迷った……そしてある一つの答えを導いた。

「お、大きくなったな……」

ナオキは誤った。

絵里の顔はどんどんあかくなっていた。

「ば……バカー……!!」

「ゴメンなさ……い!」

ふたりの声は廊下に響いた。

「ん? ナオキさんと絵里ちゃんの声?」

「なにかあったのでしょうか?」

「さ……さあ?」

穂乃果・海未・ことりはアイドル研究部部室の中から廊下の方をむいて言った。

「ふん、なによ絵里……あの男子生徒と仲いいじゃない。」そういうのはアイドル研究部長の矢澤にこだった。

「えー、にこつち知らんかったん？」

「当たり前でしょ、希」

「あれや……にこつち……ナオキくんとえりちはな……幼なじみなんや」

「あーだから」

「穂乃果と海未ちゃんのことりちゃんもナオキくんとは幼なじみなんだー」

穂乃果は希とにこが話しているのを聞いてそう言った。

「へーそうなの」

だが一方生徒会室でナオキは……正座されられていた。

「反省した？」

ナオキは絵里の説教を10分ほど聞かされていたのだ。

「はい、反省しました……ごめんなさい……」

「ふうー……わかった、許してあげるわ」

「ありがとう……絵里」

「それじゃ、そろそろ部室へ行きましょ」

「うん！」

ナオキは頑張ってたった。

「そうだ、絵里」

「どうしたの？」

「その練習着似合ってるな！」

絵里は顔をあかくした。

「も……もう……」

そしてふたりは部屋へむかった。

「遅いわねー」にこは言った。

「あれやない？生徒会室でナオキくとえりちが……」希がイタズラな言い方で海未の方をむいて言った。「は……破廉恥です!!」

海未は顔をあかくして言った。

「えーなにかー」

希は言った。

「お待たせー」

「し、失礼しまーす」

「あ、やっと来た！遅いよー絵里ちゃん、ナオキくん！」穂乃果は言った。

「ごめんなさい…」

「すまんすまん」

真姫が顔を上げ、ナオキの顔を見ると…

「あー！！」

真姫が大きな声をあげるとナオキも

「その赤髪は…西木野病院の!?!」

「あら、ナオキ、真姫を知ってるの?」

絵里が尋ねた。

「ああ…小さいとき西木野病院に行ったときよく遊んだんだ。そうかー、あの真姫かー」

ナオキは懐かしそうに言った。

「やっぱり真姫ちゃん知ってたんだ…」

「そうだにやー、なんですぐ思い出さないにやー!」

花陽と凜は言った。

「しよ…しよーがないでしよー！」

真姫は言った。

「真姫、これからまたよろしくな！」

「う、うん…」

次回へ続く



## 第5話「事実」

前回の妄想物語！

ナオキは絵里と部室へ行くため生徒会室へ、だがそこでトラブルが……

「バカーーーー!!」

許してもらって部室へむかったふたりだがナオキはそこで小さいとき遊んでいた真姫と再会。

そしてナオキには避けては通れない道が……

「はい、それでは改めて紹介するわね！私の幼なじみで今日から模擬男子生徒としてここに転入したナオキよ。」

穂乃果と海未とことりと真姫とも幼なじみで、希とは一度修学旅行で会ってるわ。」

絵里はナオキを改めて紹介した。

「へー」にこ・凜・花陽は声を合わせていった。

「それでは、にこ・凜・花陽から自己紹介ね、まずは花陽」

「は、はい！…えっと…こ…小泉花陽です…い…1年生です…よろしくお願いします…」  
小さい声だったがナオキは聞き取ったみたいだ。

「はいはーい！次は凜がするー！星空凜！1年生にやーよろしくにやー!!」  
凜は元気いっぱいな声で言った。

「じゃ、次は私ね……」

にこが立ち上がった。

「にっこにっこにー♪あなたのハートににっこににっこにー♪笑顔届ける矢澤ににっこにー♪に  
こにーって覚えてラブにこー!」

「……………ん?」

ナオキは固まった。

「ちよつと寒くないかにやー?」

「寒いって何よ!?!」

「いやーにこつち、初対面の人にそれは……」

「そ、そうねー、いきなりだったら戸惑うわよねー…だつてにこは大銀河宇宙No.1ア  
イドルだものねー、コホン、矢澤にこ3年生にこー、よろしくにこー!」

「この9人が音ノ木坂学院スクールアイドル、μ'sよ！ナオキ、改めてこれからよろしくね」

絵里が最後にしめた。

「ういーよろしく！」

ナオキは言った。

「そう言えばなんでナオキはここに来たんですか？」

海未が問いかけた。

「うっ……………そ、それは……………」

ナオキは戸惑った。

「なにかあったのー？」

穂乃果も続いて問いかけた。

「えっと……………これにはいろんな事情が……………」

「事情って何よ？」

真姫も問いかけた。

「あつ、メールだ……………!?……………ごめん、ちよつと電話してくる、話はそのあとで」

ナオキはメールの内容を見るなり部屋を出た。

みんな心配そうな顔をして目を合わせた。

「なんでいきなり……あ、もしもし、どうしたんだ？イズミ」

電話の相手は前の学校の部活仲間のイズミだった。

「シベ、すまんいきなりメールして、実はな……チングスカンのことなんだけど……」  
「あーあいつがどうした？」

チングスカンとはナオキの隣の席の友達である。

つまりはナオキはチングスカンをかばって退学したのだ。

「実は聞いちまったんだよ……」

「聞いちまったって……なにが？」

「実は……」

ナオキはイズミからとんでもない真実を聞いた。

「!?な……なんだって……、嘘だ、嘘なんだろう？」「いや、本当だ……嘘と思うならチングスカンに直接聞いてみな」

「わ、わかった……ありがとな……」

「おう……」

「……嘘だ、嘘に決まってる……」

そう思いながらチンギスカンに電話をかけるナオキ。

「もしもし、チンギスカン？時間大丈夫か？」

「おージャーナか、どうしたんだ？」

「実は、少し変な噂を聞いてさ、お前がわざとおれを騙して会長の座から引きずり落とし、ミツヒデを会長にしたっていうのなんだが…」

「……………」

チンギスカンは黙った。ミツヒデはナオキと会長の座をかけた選挙になり、敗北したクラスメイトだった人だ。

「嘘なんだろ？…………嘘だって言ってくれ！」

「…………残念ながら本当さ……………」

「!?……………どうして…………お前が……………」

「ふっ……………良いだろう……………教えてやるよ……………」

ナオキはつばを飲んだ。

「おれはミツヒデとは古くからの友達でな、お前より前からな。お前は1年生の時、ぼっちだった。最初はからかうつもりで声をかけたのさ、だがお前は話していくうちにおれを友達だと思っていた。……迷惑だったんだよ！お前みたいなやつと友達だったらな！ミツヒデもそう思っていたよ……。そして2年生の時に会長選でお前が勝った……。ミツヒデではなくお前が！そしておれはミツヒデと手を組んで例の問題を起こしたんだ！そしてそれを担任に『ナオキくんがしました』ってチクってやったのさ。」

ナオキは唾然した。

友達に：……いや友達と思っていたチンギスカンに裏切られたのだ……。最初から友達ではなかったのだ。

「これでわかっただろ？ははは！いい気味だぜ。せいぜい頑張るんだなジャーナ……。」  
電話はきれた。

ナオキはその場に崩れ落ちた。

「そう言えば校長も『身に覚えはないのか？』って言ってたな……。はは……。そうか……。そう言う事かよ……。……」

ナオキは悔しくて泣いた。

泣いた泣いた泣いた……  
涙で制服や廊下が濡れるほどに……

次回へ続く

## 第6話 「新しい居場所」

「ちくしょう……ちくしょう……」

ナオキは泣いていた。

ナオキはチンギスカンをかばって退学した……

だがそのチンギスカンはミツヒデを生徒会長にするためにナオキをこの学校から追い出すためにわざと問題をおこし、それをナオキがやったと担任に言ったのだ……

そんなナオキのもとへ来たのは……

「ナオキー？どうかしたの？叫び声が聞こえたんだけど……」

絵里がナオキを心配してナオキのもとへ来た。

「え……いや……なんでも……」

ナオキは涙をぬぐうが、それも無駄でどんどん涙があふれてきた。



「ど…………どうしたのよ？泣いてるじゃない…………」絵里が駆け寄ってきた。

「恥ずかしいとこ見られちゃったな…………ははは…………」

「……………とりあえずここでもあれだから部室へ行きましょう。みんなには席外してもら  
うから」

「わかった…………」

絵里はナオキを気遣ってみんなで集まる部屋の隣の部屋、練習スペースにむかった。

「ねえ、みんな」

「あ、えりち、ナオキくんは？」

「とりあえずナオキと2人で話したいの…隣の部屋、かりるわね…」

「わかった…………」

希は心配そうに返事をした。ほかのみんなも心配そうな顔をしている。

2人は隣り合わせで座った。

「すまん…………絵里…………」

「ううん…………それより、どうしたの？電話をしにいったとおもったらナオキ泣いてて

……………何かあったの？」

絵里はとても心配そうだ。

みんなはドアにはりついて耳をすましていた。

「ふう……………話したくなかったけど話すしかなさそうだな……………おれが前の学校をやめた理由……………そしてさつきあつたこと……………」

ナオキは絵里に全て話した。友達をかばって退学したこと、そしてさつきその友達はわざと問題をおこしてそれをナオキのせいにして退学させたこと……………全部話した。

「……………つていうことなんだ……………」

「そう……………だったの……………」

絵里は下をむいて言った。

「でも……………ここに來れてよかったよ……………絵里とも会えたし」

ナオキが言った。

すると絵里はナオキを抱きしめた。

「ちよ……………／＼／＼」

「ナオキ……………思いつきり泣いていいのよ……………私の胸で……………泣いていいのよ……………」

「くつ……………」

ナオキはまだたえていた。

すると絵里はそのままある歌をうたった。

「きつと知らずにいた方がよかった……………」

そう、それは『ありふれた悲しみの果て』、絵里のソロ曲だ。

ナオキは涙をたえることができなかった。まさに今の自分と同じような……心にその歌はその歌声は響いた。ついに声をあげ泣き出した……。

「いいのよ、ナオキ……かつこつけなくなつていい……思いつきり泣いて……」  
しばらくその部屋にはナオキの泣き声が響いた。

しばらくして、泣き止んだナオキは顔をあげた。

「ごめん……絵里……ありがとう……あつ、服……濡れちまつたな……」

絵里の服（とくに胸のあたり）がナオキの涙で濡れていた。

「いいのよ……別に……」

絵里は笑いながら言った。

するとナオキはなにかに気づいたか顔をあかくした。

「ん……どうしたの？ナオキ？」

「いや……今考えてみれば……その……絵里の胸で泣いてたん……だよな？／＼／＼」

「え？……そうだけど……あ……／＼／＼」

絵里も気づいたみたいか顔をあかくした。

沈黙が続いた。

そのころ隣の部屋ではみんなザワザワしていた。

「ちよつと……ナオキと絵里つてそういう関係なの？」

にこは希に聞いた。

「いやーウチも知らなかったわー…穂乃果ちゃん、知ってる？」

「え…ほ、穂乃果も知らないよ？ことりちゃんは？」

「なんでことり……ん……海未ちゃんは……」

とことりが海未に言うつと

「うーん……」

「海未ちゃん？」

バタツ……

「海未ちゃー……ん！」

海未は顔をあかくして机に倒れた。

「えつと……真姫ちゃんは知ってたの？」

花陽が尋ねた。

「知るわけないでしょー！」

「ご、ごめん……」

「んー……とりあえず、ナオキくんと絵里ちゃんはそういう関係つてことだよね！」

凜は尋ねた。

「たぶんやけど……」

希は答えた。

そこに絵里とナオキが入ってきた。

「ごめんなさい、みんな」

「すまんかったな……」

「うん！大丈夫だよー、それより絵里ちゃん」

「ん？どうしたの？穂乃果？」

「えっとねーナオキちゃんと絵里ちゃんって……」

「わー！！」

にこは穂乃果の口をおさえた。

「んー！！ぷはっ、ちよつとにこちゃん、なにをするのー!?せつかく聞くチャンスなのに……」

「そこはあえて聞かないのよ……しー」

「どうしたのよー？」

絵里は不思議そうに言った。

「な……なんでもないわよー……あははははは」

にこは答えた。

「で、なんで海未は倒れてるんだ？」

ナオキは尋ねた。

「えつと……」

こことは考えた。

「つ……疲れたんやないかな？海未ちゃん、起きいやー」希が答えた。

「うう……は……破廉恥です……」

海未はボソツと言った。

「ま、とりあえず、ナオキがなぜここに來ることになったかみんなにも話すわね。ナオ

キ、いいでしょ？」

「ああ……」

絵里はナオキがなぜここに來ることになったか全てみんなに話した。

みんなは不安そうな顔を浮かべた。

「……つていうことなの……」

絵里が話し終えるとみんなが言いだした。

「ひっどーい」

「そうだったんだ……」

「それは災難でしたね……」

穂乃果・ことり・海未は言った。

「ふん、そうなら早く言えばいいのになんで言わなかったのよ……」

にこは言った。

「にこっち、ナオキくんの気持ちも考えり……きつと話しくかつたんよ……」

希は言った。

「そう……だよね……」

花陽は言った。

「てか、ナオキはまだそれで落ち込んでるの？」

真姫は言った。

「いつまで落ち込んでるのよ……もう終わったことでしょう、切り替えなさい」

「はっ……」

ナオキは目を丸くした。

「そうにや！ナオキくんは今、音ノ木坂学院の生徒にや！切替えるにや!!」

凜は言った。

「そっだよな……ありがとう……」

ナオキの顔に笑顔が戻った。

次回に続く。



## 第7話「No brand girls」

前回の妄想物語！

ナオキの過去をついに知ったμ、sのメンバーたち！

さあ、ついに物語は動き出す！

「ところで今のところμ、sは廃校を阻止するためにそのいわゆるスクールアイドルの甲子園みたいな“ラブライブ！”出場を目指している、これでいいんだな？」

ナオキは今後の方針について考えることにした。

「ええ……そうよ」

絵里は答えた。

「それでね、今は次のライブのために練習してるんだー」穂乃果はワクワクしながら言った。

「次のライブ？」

「明日の文化祭でするのよ」

にっこが答えた。

そう、ナオキが転入したのは文化祭の前日だった。

そんな中でも授業をする先生たちを生徒たちは鬼と思っているだろう……

「でもにこつちが講堂の使用許可とられへんかったから……」

「わ、悪かったわよー」

「で、どこでライブするんだ？」

「一応……屋上ですることにしました……」

海未は答えた。

「簡易ステージをつくってそこでするんだにや！」

「うう……緊張します……」

「曲は？」

ナオキが聞くと真姫は音楽プレイヤーをだした。

「これよ……『No brand girls』っていうの」

ナオキがその曲を聞くと鳥肌がたった。

「いい曲だ……」

「でしょ!!穂乃果も好きなんだー!」

みんな盛り上がるが……

「ん?ことり……どうしたんですか？」

「……………」

「ことりが静かなのを見て海未が尋ねた。

「……………ことり？」

「え、ああ……………うん？どうしたの？海未ちゃん」

「ことり…何かあったのですか？」

「うん……………別になんでもないよ！ライブ、楽しみだね！」「ならいいのですが……………」

「ナオキ……………『No brand girls』…みてみたい？」

絵里が尋ねた。

「みたい！」

「よーし！なら屋上へレッツゴー!!」

穂乃果が合図を出してみんな屋上へむかった。

そして『No brand girls』をナオキに披露した。

「おー！すげー！すごかったよ！」

「ありがとう……………えへへ……………」

「それじゃ、今日は解散しましょうか…」

「うん！」

ナオキは前と同じあやまちをおかさないために先に正門で待つことにした。

「くっそ……………思い出しただけで顔があかくなる……………」

ナオキは生徒会室でのことと部室のことを思い出していた。

ナオキの顔はあかくなる。

「なあ…えりちー」

「どうしたの？希？」

「ちよつと聞きたいんやけど……………」

「なに？」

「その……………えりちとナオキくんって……………その……………付き合ってるん？」

「……………は？」

「え？違うの……………」

「ち、ちちちちち、違うにきまつてるでしょう！もう！／／／／／」

絵里は顔を真っ赤にした。

「もしかして……………えりち、ナオキくんのこと…好きなんちゃう？」

希はいたずらそうに聞いた。

「……………」

絵里は黙り込んでしまった。

「え？まさか……」

「……」

その場にいたμ sは衝撃の事実を知ってしまったのである。

「お、お待たせー……」

絵里は待つていたナオキに言った。

「あれ？みんなは？」

「みんなは……あとで行くから先に帰っててって」

「そうなのかー……なら絵里、話しながら帰ろうか……」「え……うん！」

ナオキと絵里は歩いていった。

その後ろにはみんなが覗いていた。

「やっぱりか……」

みんな声を合わせていった。

「……私の家だから……」

絵里はマンションの前に来ると言った。

「え……」

ナオキは唾然とした。

「どうしたの？」

「いや……おれもここに住んでんだけど……」 「え……え……え……!!!」

絵里の声が響いた。

そしてその夜、穂乃果は雨の中ランニングした。

ことりは海未にあの件を話していた。

穂乃果は起きるとくらくらして、そして倒れてしまった。

熱があり、声もかかれていた。

ピンポーン……

「ほーい、ちよつと待つてねー」

「わかった!」

絵里はナオキをむかえにきていた。同じマンションなんだからこれからは一緒に行こうということになった。

「絵里、お待たせー」

「いいのよ……それじゃ、行きましょうか……」

「いやーまさか絵里のこと俺のところが3部屋しか離れてないとは……」  
「ふふ…私もびつくりしたわよ…」

学校についてみんな衣装に着替えた。

しかし、穂乃果が来ない。しかも雨が降ってきた。

そして穂乃果がやつと来た。

穂乃果はまだくらくらしていて、声もへんだった。

「のど飴なめとくよー」

そして本番前

「よし、みんな！精一杯やってこい！」

「わかってるわよ、あんたに言われなくても」

「そうやね…」

「私たちのステージそこから見てなさい！」

「テンション上がるにゃー!!」

「き、緊張します……でも楽しみ……」

「うふふ、そうね……」

「ことり……」

「あ……うん……」

「今はライブに集中……ですよ？」

「……うん、わかった！」

「よし！いこう！」

そして『No brand girls』を披露したのだが……

穂乃果が倒れてしまう！

「ほ、穂乃果!？」

みんな駆け寄り、ナオキも飛び出した。

果たしてどうなるのか……

次回に続く



## 第8話「悔しさと進展」

文化祭のライブで穂乃果が倒れてしまう！

そしてその後、ラブライブ！出場を断念することを決めた。

それを穂乃果に伝えた。

穂乃果は1人涙を流すのだった……

「これで……よかったのかしら……」

絵里はナオキとの帰り道に言った。

「仕方ないよ……これでよかった……はずだ……」

ナオキが言った。

「うん……そうね……」

絵里はとても落ち込んでいた。

「そうだ、絵里の手料理久しぶりに食べたいな！」

ナオキは絵里を少しでも元気づけようとした。

「え……う、うん！わかった！じゃ、私先に帰って準備してくるわね！またあとで」  
そう言ううと絵里はダツシユで帰っていった。

「あ……白だ……」

ナオキは言った。

そしてその後ナオキは絵里のところへむかった。

ピンポン……

「はーい、あ、ナオキさんだー」

絵里の妹、絢瀬亜里沙が出てきた。

「亜里沙ちゃん、お邪魔します」

「はい！どうぞー、おねえちゃん、ナオキさん来たよー」

「わかった、リビングまで案内してあげて」

「はーい」

「亜里沙ちゃんと絵里はほんと仲良しだな…」

「ナオキさん！はやくはやくー」

「はいはい」

ナオキは亜里沙に案内されリビングにむかった。

「んー……いい匂い……」

リビングに近づくといい匂いが強くなる。

「ナオキ、いらっしやい！もうちよつと待つてね！」

「うん！」

「ナオキさんこつちこつちー」

「はいはい……」

「亜里沙、ナオキに迷惑かけちゃダメよー」

「全然大丈夫だよ絵里」

「そ、そう？ならいいけど」

絵里は笑顔で言った。

そして絵里の手料理が出来た。

「はい、お待たせー、エリチカ特製ロシア料理よ！」

「おー！！んー……いい匂いだな……もうペコペコだ……」

「さつすがおねえちゃん！」

「さ、熱いうちに食べて！」

「はーい！」

「いただきますーす！」

「いただきます！」

「どうぞ……」

ナオキと亜里沙は絵里のロシア料理を食べ始めた。

「んー……うまい!!」

「そ……そう？ありがとう……」

絵里は顔をあかくして言った。

「そう言えば……その……絵里のエプロン……似合ってるな……／／／／」

ナオキは絵里のエプロン姿を見て照れながら言った。

「も……もう……照れるじゃない……バカ……／／」

絵里は顔をあかくして言った。

「んー……美味しい」

亜里沙はふたりの会話を聞かず絵里の手料理を食べていた。

「ちそうさまー」

ナオキと亜里沙と絵里は声を合わせていった。

その後ナオキと絵里は絵里の部屋で話をすることにした。

「いいのか？おれが絵里の部屋に入って……」

「いいのよ……」

そして絵里はボソツと

「ナオキだからいいのよ……」

と言った。

そして絵里の部屋で昔話などをした。

そして話題はあのこと……

「本当にあれでよかったのかしら……」

「絵里……帰りにも行ったけどあれは仕方なかったと思う……穂乃果がおかしいと気づいていたのに止めなかった俺たちも悪かったし、そんな体調の中でやった穂乃果も悪い……」

「でも……」

「みんなで話し合った結果じゃないか……」

「そう……よね……」

「うん……」

すると絵里はナオキの肩に寄りかかった。

「ちよ……絵里……」

ナオキは顔をあかくして言った。

「お願い……このままでいさせて……」

「お……おう……／＼／＼」

ナオキは絵里を引き寄せようとしたが途中でやめた。

「ごめんなさい……その……／＼／＼」

「いや、大丈夫だよ……今日はごちそうさま！また食べさせてくれよ」

「うん！じゃまた明日！」

「おう！また明日な！」

ナオキは帰っていった。

絵里はその後一人でベットに下をむいて寝ころんだ。

「あーもー！！なんで私あんなことしたのよー！／＼／＼／＼」

絵里は顔をあかくして言った。

「でも……とつても……安心できたなあ……／＼／＼」

次回に続く

## 第9話「あらたなSTART」

前回の妄想物語！

自分たちの判断が本当に合っていたのか不安になる絵里、そんな絵里を元気づけようとしたナオキ。

そこでナオキは絵里の手料理を食べたいと言った。

そして絵里は元気になった。

なぜそうなったか……

それは……

「あ、もしもし希先輩？」

「先輩禁止や言うたやろナオキくん」

「あ、すみま……ごめん、希」

「よろしい、それでどうやった？えりちの様子は？」

「うん、希の行ったとおり手料理食べたっていったら元気になったよ」

「そう、ならよかったわー」

「でもなんで元気になったんだろう？んー……」

(ナオキくんにぶすぎやん……) 希はそう思つて苦笑いした。

「あれやない？きつとえりちは料理をすると元気になるんよ、カードもそう言うとし」

「そっかー、今回はありがとう」

「いえいえ、また明日なー」

「また明日……」

そうナオキが絵里の手料理を食べたいと言つた理由、それは希に言われたのだ。

「ふうー……やっぱり女の子は好きな人に手料理を食べさせてあげたいものやんなー、うんうん……」

希は鼻を高くして一人で言っていた。

そして翌日、音ノ木坂学院の廃校が見送られることがわかり、パーティーを開く

sだった。

ナオキは買い出しへ行つて帰ってきた。

すると……

「そんなの当たり前だよ！」



そう声があると部室からことりが飛び出してきた。

「わっ……どうしたことり……あれ？行っちゃった……」

ナオキは部室へむかった。

すると何か空気が……

「え……なんかあつたの……」

「ナオキには話してませんでしたね……」

海未が言った。

「おい海未、ことりどうかしたのか……」

「やっぱりナオキも知らなかったのね……」

絵里が言った。

「実は……ことりが……留学することになったんです……」

海未はナオキに言った。

「……そう……なのか……」

ナオキは驚きを隠せない……

そして翌日、ライブの話を屋上で穂乃果にしたが穂乃果は自分を責めて……そして

……

「私……スクールアイドル……やめます……」

「最低です……あなたは……あなたは最低です！」

そして、sは活動を休止することになった。

そしてしばらく経って穂乃果は海未を講堂へ呼びだして話をした。

それをナオキは外から覗いていた。

そして穂乃果はことりを連れ戻しに行くことにした。

海未はナオキの存在に気づいていたみたいだ。

「おっとと……ナオキくん、いたんだ」

「そんなことはいいから早くことりのところに行ってきな」「うん！」

そして穂乃果はことりの元へ走っていった。

「やはりそこで見てましたか……」

「バレてたか……そりゃあ心配するだろ？ 幼なじみなんだからさ」

「そうですね……さ、準備しましょうか！」

「ああ……講堂ライブの！」

そしてみんなに連絡をとり、講堂ライブをすることに！

そして……穂乃果はことりを連れて帰ってきた！

「よし……みんな！最高のライブにしよう！楽しんでいこう！」

「はい！」

「いち！」

「に！」

「さん！」

「よん！」

「ご！」

「ろく！」

「なな！」

「はち！」

「きゆう……何やってるの？次はナオキよ？」

「お、おれも!?えつとー……じゆう！」

「よーしいこう！」

そして披露したのは『START：DASH!!』

穂乃果の言っていることを聞いているとナオキは自然と泣いていた。

ナオキは、その歴史を絵里から少し聞いていた。

「また……穂乃果たちから話聞かなきゃな」

「やったー！大成功!!」

穂乃果はライブのあと飛び跳ねた！

「よっしゃ！俺のおごりだ！飯いくぞー!」

「わーい!!」

「ありがとうございます」

「ありがとう」

「テンションあがるにやー!」

「無駄に意地張って…」

「わ……私、白米が食べたいです!」

「相変わらずね……花陽は」

「ウチは焼肉がええなー」

「で、ナオキどこ行くの?」

「うーん、ワ○カルに行こうか!」

「おーナオキくん、太っ腹やん！」

「ナオキ、お金は大丈夫なの？」

「うん！今日は親の仕送りの日だからな！じゃ、ワ○カルにレッツゴー！」  
「おー!!」

μ s10人はナオキのおごりでワ○カルにむかうのであった。

次回に続く

## 第10話「月」

前回の妄想物語

講堂でのライブは大成功！

そしてそのあとナオキのおごりでワ○カルに行くことに！

「うーん……やっぱり焼肉は最高やねー」

「ふふふ……ほんと希は焼肉好きね……」

「それじゃ、みんな、今日はお疲れ！みんな家に帰ってゆっくり休むこと！明日から練習頑張ろう！」

「おー！！」

ナオキが言うのとみんな言った。

「じゃあみんなまた明日ー！」

穂乃果は海未とことりと一緒に帰っていった。

「バイバーイー！」

凜は花陽と真姫と一緒に帰っていった。

「じゃあ、私はこっちだから」

「ここは帰っていった。」

「なあえりち！」

「ん？どうしたの希？」

「ナオキさんと仲良く帰るんやで」

希はニヤニヤしながら絵里に耳打ちで言った。

「ちよつ…希！／＼／＼／＼」

絵里は顔をあかくして言った。

「じゃあ…絵里、帰ろうか？」

「え、う…うん」

絵里とナオキは帰っていった。

「いやー肉うまかったなー」

「そうね…」

「あ、そうだ…ガムそろそろ出すか？」

「あ…そうね…」

そう言うとなオキはポケットからティッシュをだした。

「はい、ティッシュ」

「ありがとう……」

「あ、はい、ゴミ袋」

「えつと……ナオキって…用意周到ね…」

「そ、そんなことないよ……たまたまだよ」

「ナオキって…ほんとに優しいわね…小さい頃もそうだったわね…（そういう所が好きになったんだけれど…）」

「お…おう…／／／／」

ナオキは顔をあかくして言った。

それからしばらく歩いて……

「絵里、疲れたのか？」

「え…ええ…少しね…」

「んー…そのベンチで休憩しようか…」

「うん…そうね……」

絵里とナオキは公園のベンチで休むことにした。

「ふうー……」

「ナオキも疲れてたのね…」

「いやー絵里ほどではないやろう」



「そ……そうね……」

ナオキと絵里は空を見上げた。

「星、きれいだなー」

「そうねー」

「大阪のおれんちの方は結構星見えたけど東京に来て星は見れてなかったな……」

「なに？ホームシックつてやつなの？」

「そ……そんなんじゃねーよ……」

「もしかして……凶星？」

「星だけに？」

「……………ナオキ……………」

「……………ごめん……………」

2人はまた空を見上げた。

「月が綺麗だな……………」

「え……………」

「ん？どうかしたのか絵里？」

「え……………その……………／／／／」

絵里は顔を真っ赤にしていた。

ナオキは自分の言ったことの意味をわかっていない。

「もう……ナオキったら……そういう意味で言ったの？それとも……」

「そういう意味？おれはただ月が綺麗だから……」

「もう……」

そう言うと絵里はナオキにもたれた。

「ちよつ……絵里……」

「いいでしょ……ナオキ……」

「うん……／＼／＼」

ナオキも顔をあかくした。

しばらくするとナオキにもたれたまま絵里は寝ていた。

「しよーがねーな……」

ナオキは絵里をおんぶして絵里の家までおくつた。

ピンポン……

「はーい……あ、ナオキさん！あれ？おねえちゃん寝ちやつたんですか？」

「うん……ごめんやけど絵里の部屋まで案内してくれるかな？ベッドに寝かせるわ」

「わっかかりました！」

「よいしょつと……」

「ん……………」

「ちよっ……………」

ナオキは絵里をベッドに寝かそうとしたら絵里は腕をはなさずナオキはそのままベッドに倒れ込んでしまった。

（絵里の顔がちか……………／＼／＼）

「ナオキさん、泊まっていつたらどうですか？」

「えっ……………それは……………」

「じゃ、おやすみなさーい」

「あ……亜里沙ちゃ……………まじかよ……………」

（絵里……………かわいいな……………あの頃よりもさらにかわいくなった……………）

「ん……………」

すると絵里は目をあけた。

「あ……………」

「あれ？……………なんで……………ナオキが……………」

自分のしていることに気づいた絵里の顔はどんどんあかくなりむこうをむいた。

「ぎ、ぎ、ぎ、ぎ、ぎ、ぎ、ぎ、ぎ、ぎ、ぎ、めんなさい！わ、わたし……………／＼／＼／＼」

「だ、大丈夫だよ……………」

2人の顔は真つ赤になった。

「亜里沙ちゃんに泊まっていつてつて言われたけど帰るな……」

ナオキが帰ろうとすると

「まって！」

「ん？」

「そ……その……泊まっていつて……」

「わ、わかった……じゃ、おれ床でねるわ……」

「いいえ……その……隣で寝て……／＼／＼／＼」

「は？／＼／＼／＼」

ナオキは一瞬聞き間違いかと思った。

「もう……何回も言わせないでよ……バカ……／＼／＼／＼」

「わ……わかった……」

2人は背合わせで寝ることにしたのだった……

次回へ続く

# 第11話 (1st Season) 君を思い続けて 章末回) 「あらたなライブの予感」

ナオキと絵里は隣り合わせで絵里のベッドで寝ていた。  
まわりは静かだ。

「ナオキ……起きてる？」

絵里は小声で言った。

「うん……起きてるよ……どうした？」

ナオキは小声で答えた。

「いや……なかなか寝付けなくて……」

「おれもだよ……」

2人はクスクス笑った。

そこからまた沈黙が続いた。

(やべえ……何か話さないと……)

「あ……暑いな」

「そ……そうね……」

「……………」

また沈黙になってしまった。

「もう！ナオキ…明日も学校なのよ？早く寝ましょう！」「そ…そうやね…あはははは…」

そして2人は寝付いたのだった。

そして朝…ナオキは起きると背中に何か当たっているのを感じた。

「ん…なんだこの感触は…一度味わったような…まで…これは…絵里の…  
!! // //」

「ん……………ナオキ……………」

絵里はナオキの後ろから抱きついていた。

「うっ……………(か…かわいい……………)// // //」

ナオキは顔を真っ赤にした。

「ん……………」

絵里がナオキに抱きつく強さがどんどん強くなるにつれナオキの背中には絵里の胸の感触が。

(やばい！もう…耐えられん！)

「おーい…絵里…朝だぞ……………」

「ん…………おはよう…………ナオキ…………」

「その…………そろそろ離してくれる…………かな？」

「離すってなにを？」

「だから…おれを」

「ナオキを？それはどういう…………あ…………」

状況に気づいた絵里は顔をどんどんあかくした。

「わ…………私つたら！ご、ごめんなさい！／／／／／」

「いや…………いいんだよ…………」

2人とも顔を真っ赤にして言った。

「じゃ、おれ1回帰るわ」

「そうね…準備もあるしね」

「じゃ、またあとで！」

「うん！」

そう言うとナオキは家へと帰った。

その後絵里は1人自分の部屋にいた。

「もう…………私のバカ…………／／／／」

絵里は涙目になって言った。

「ピンポーン……」

「ナオキー！むかえにきたわよー」

「おー！ちよつと待っててー」

「うん！わかった！」

「そしてしばらくして……」

「お待たせ！またした？」

「早いわね……ふふふ……」

「それじゃ、行こうか！」

「うん！」

ナオキと絵里は登校した。

「そう言えばナオキってお昼ご飯は自作のお弁当なの？」「うん……絵里は？」

「私もよ……同じね……ふふふ……」

「あ！えりち、おはよう！ナオキくんも！」

「おはよう、希」

「ちいーつす」

ナオキと絵里と希は生徒会の仕事で早めに登校したのだ。



「さー！仕事をはじめるわよー！」

するとナオキは大きなあくびをした。

「あれ？ナオキくんどうしたん？寝付けらへんかったん？」

「ナオキ…昨日あんなにぐっすり寝てたのに……」

「え？なんでえりちが知ってるん？」

「え……それは……／＼／＼」

絵里は顔をあかくした。

「ナオキくん……」

希がすごい威圧でナオキに言った。

「えっと……それは……」

「それは？」

「うう……昨日、絵里の家に泊めてもらいました……」「な……なんやてー!?まさか

……昨日…あんなことやこんなことを!？」

「してないわよー！」

「してねーよー！」

ナオキと絵里は声を合わせていった。

そして放課後、μ sは部室へ集まった。

「ナオキ…今日の授業…何度もあくびしてましたね…」

海未は言った。

「そうだよー！ナオキくん！」

穂乃果は言った。

「穂乃果ちゃんはずっと寝てたけどね…」

「こつりが苦笑いで言った。

「うっ……」

「海未ちゃん許したげてー」

「しかし！」

「仕方ないねん…だって昨日ナオキくんはえりちと……」 「希！」

絵里とナオキは声を合わせて顔をあかくして言った。

「おー怖い怖い……」

「なになに？なにかしたにや？」

凜は興味シンシンで聞いてきた。

「べ……別になんでも……」

ナオキは答えた。

「気になるわね……」

真姫は言った。

「そうよそうよー話なさいよー2人ともー」

にこも真姫に続いていった。

「うう………／／／」

ナオキと絵里は顔をあかくして下をむいた。

「実は………」

「つておい！絵里！」

「もう……いいでしょう？隠してたら変な方向に行きそうだし……」

「うっ………確かに………」

すると絵里は深呼吸を言った。

「あのね……昨日ナオキと一緒に帰って私、休憩してて寝ちやったの……それでナオキに家まで送ってもらって、それで家に……泊めたの……それで一緒に……寝たわ……」

全員が一気に顔をあかくした。

「は、ははははははははははははははははははははははははははははははははははは破廉恥ですう!!!／／／」

とくに海未は顔をあかくして頭から湯気をだした。

「ちよつとナオキ！」

「はっ……はい！」

「絵里に変なことしてないでしょうね？」

「ここはナオキを睨んで言った。」

「し……してねーよ！／＼／＼」

「それならいいけど……」

「もう！みんな……練習しましょう！」

「絵里はそう言うと一緒に屋上へむかった。」

「あ、待ってよ絵里ちゃんーん！」

「穂乃果が続いて行った。」

「ほら海未ちゃん、いつまでそうしてるん？はよ行こう？」

「はい……」

「希に連れられて海未もむかう。」

「そのほかのメンバーも続いて行った。」

「よし……みんな行ったな……」

「そう言うとなオキはスマホをひらいてある人物へ電話をかけた。」

「あ、もしもし……ツバサさん？」

「あら、ナオキくんじゃない？お久しぶりね」

「はい、元気そうで何よりです。それより少し…お願いが……」

「何かしら？ほかでもない恩人の頼みだもの……引き受けるわ」

「ありがとうございます！実は……」

そうその電話の相手はUTX高校のスクールアイドルA―RISEのリーダー綺羅ツバサだった。ツバサとナオキはツバサがナンパされてるところをナオキが助けたり合った。

詳しい話はまたいつかに……

「……つていうことなんですけど」

「なるほどね……ライバルだものね……μ sは……」

「はい！ありがとうございます！」

「それじゃ、頑張つてね！」

「はい！ツバサさんも！」

そして電話を終わった。

「ツバサ？さっきの相手はだーれ？」

そう話しかけたのは優木あんじゅ、ツバサと同じA―RISEのメンバーだ。

「この前話したでしょ？ナンパから助けてくれた」

「あーあの子ね…それで要件は？」

「それは英玲奈が来たら話すわ」

「呼んだか？」

「おつ、英玲奈！ナイスタイミングね！」

そこに同じくA—R—I—S—Eのメンバー、統堂英玲奈が来た。

「実はね……………」

「えー！」

「μ，sと…………ライブ？」

「おもしろそうね……………」

「μ，sの実力…………楽しみだ」

「ええ……………」

そして音ノ木坂学院屋上…

「あ、ナオキくん遅いよー」

「すまんすまん」

「さあ！練習はじめるわよー！」

「はい！」

(ふふふ……AIRISEとライブだつて言ったらみんな驚くだろうな……まだまだだ  
けど……)

だがナオキでも予想もしない展開でそのライブは開かれることになるのだった。

「最後にみんなで1曲踊ろうか」

「いいね！何にする？」

ナオキの提案にのった穂乃果は聞いた。

「そうだな……」

ぶるるる……ぶるるる……

「あ、電話だ……ちよつとでるね……」

花陽は言った。

「もしもし？あ、お母さん……うん……うん……えー!?わ……わかった！すぐ帰る！」

「ど……どうしたのかよちん？」

「あのね……」

花陽の表情に息を呑むみんな。

「私が応募した黄金米が当選して、それが届いたんだって！すぐに帰らなきゃ！」

(米かよ……)

「そうだな……今日は帰ろうか……あはははは……」

「それじゃ、みんなお疲れ様！気をつけて帰るのよー」

「はーい」

そして帰り道

「はあ……白米で練習を終わるとは……」

「あはははは……」

絵里とナオキは話していた。

次回、新章へ続く



2nd Season 愛しい君と

第12話「ワンモワ!」

「そう言えば花陽知ってる?」

「ん?何が?」

花陽の母は黄金米をほおぼる花陽に言った。

「これはね…一部の人しか知らないの………」

花陽は真剣な顔をした。と同時にほっぺについていたコメ粒を真顔でとって食べた。

「多分、ナオキくん?だっけ?その子なら運営側から言われてると思うけど…」

「え?ナオキくんが?運営側?」

「これはみんなに話しちゃダメよ?」

「はい!」

「実はね………」

花陽の母は花陽に衝撃の事実を伝えた。

「えええー!!!」

キンコンカンコーン……

「んー終わったー！」

体を伸ばす穂乃果。

「まだ午後の授業があるだろ？」

「うっ……言わないでよーナオキくん……」

ナオキはニカッと笑った。

「それじゃ、おれ生徒会室で飯食うから」

「はい！お仕事頑張ってください」

「おう！」

そう言うとナオキは生徒会室へむかった。

「おっ、一番のりー」

そう言うとナオキは座った。

「あら、ナオキ早いわねー」

絵里と希も入ってきた。

「ふうー腹へったー」

ナオキは自作弁当を開いた。

「ほんとナオキ、その量で大丈夫？」

「うーん……大丈夫!だと思おう……」

「なによそれ……ふふふ……」

「えりちえりち……」

「ん?どうしたの、希」

希は絵里に「こそこそと話した。」

「今日お弁当多めに作っちゃったって言うて食べさせるんやよ?」

「なっ……希!／／／／」

「ん?絵里どうしたんだ?」

弁当を食べ終わったナオキが聞く。

「えっと……その……お……お弁当……お……多めに作っちゃったの……その……よかったら……食べる?／／／／」

絵里は顔をあかくして言った。

「いいの!?!」

ナオキは目をキラキラさせて言った。

「ええ……どうぞ……」

「ありがとうー！」

ナオキは美味しそうに食べ終わった。

「ごちそうさまー！」

「よかつたやん！えりちー！」

「え…ええ…」

そしてみんなは仕事を終わらせて午後の授業に挑んだ。

「終わったー！」

ナオキは体を伸ばした。

「さー！部室へむかいますようー！」

「うんー！」

海未が声をかけると穂乃果・ことり・ナオキは返事をした。

「？かよちゃん、何かあったの？」

「そうよ…：様子が変よ？」

「え？べ、別になんでもないよー！」

花陽・凜・真姫は部室で話していた。

「ちいーつす」

ナオキが入ってくると花陽は立ち上がった。

「ナオキくん!ちよつと来て!」

「わわ…ちよつ花陽!」

花陽はナオキと端っこで話をした。

「あの話、今日するんですか?」

「あの話?…ああ…流石花陽だな…うん、今日するよ」

「何かあったの?」

穂乃果は不思議そうに聞いた。

「あとでちゃんと話すよ」

ナオキは笑顔で答えた。

「よし!みんな集まったな!少し話があるんだ」

ナオキはみんなが集まると言った。

「どうしたの?」

「こことは聞いた。」

「実は……」

「実は?……」

ナオキが言うのと花陽以外が声を合わせて言った。

「なんと！第2回ライブ！が開催することになりました！」

一瞬沈黙が続いた。

「えーーーーー!!!」

その沈黙を打ち破るかのようになんか一斉に声をあげた。

「ちよつと待って！そんなのホームページでは発表されてないのになんでナオキが知ってるのよ？」

にこが聞いてきた。

「いやーな、運営側から手紙が届いたんだよ」

「なんで？」

絵里は不思議そうに言った。

「それは……運営側の人……親戚だから……」

「えーーーーー!!!」

みんなはまた声をあげた。

「それでルールは……地区予選でまず4組を決定、そしてその4組のなかからさらに1

組に絞るんだ。そして全国大会に行ける……しかし、俺たちには超えなければならぬ壁がある……わかるな？」

ナオキはみんなに聞いた。

すると花陽が恐る恐る言った。

「認めたくはありませんが……A—RISE……ですよね……A—RISEを倒さなければ……全国大会に出れない……」

「あ、A—RISEに勝たないといけないの?!」  
にこは驚いた。

「でも……お前たちなら、μ sならA—RISEに勝てる!おれはそう信じている!苦戦するかもしれない!だが断言しよう!μ sはラブライブ!で優勝できる!!みんなで目指そう!てっぺんを!!」

ナオキがそう言うときみんな笑顔で言った。

「おー!!」

そしてμ sはラブライブ!にエントリーした。

「あ、そうだ!実はな……もう一つサプライズがあるんだ……」

「え?なに、ナオキ?」絵里はナオキに聞いた。

「A—R—R—I—S—Eと一緒のステージでライブをするんだ」  
ナオキは当たり前かのように言った。

「え……………え……………!!!」

みんなは今日一番の声をあげた。

しかし、ルールにあることが加えられた。

それは「未発表の曲で予選に挑まねばならないこと」

そして絵里の提案で合宿することになった！

次回へ続く



## 第13話「山で合宿！」

前回の妄想物語！

放課後、部室でナオキからとんでもないことが告げられる

「第2回ラブライブ！の開催」そして「A—RISEと一緒にステージでライブをする」という2つのこと

そして予選の曲は未発表の曲でないといけないということが発表された……………

「合宿よー！ー！！！！」

「あー！やつと着いたー！！」

ナオキは体を伸ばした。

「テンション上がるにやー！！」

凜は飛び跳ねる。

「もう…そんなことしてないで早く行くわよ。バスなくなっちゃうから」

真姫は呆れた顔で言った。

「でも真姫ちゃんすごいねー、こんなところにも別荘があるなんて！」  
穂乃果は言った。

「さ、行きましょ！時間がないんだから」

「そーやね」

絵里と希は言った。

ドン！

海未が大きなりユツクを置いたことでみんなが振り返った。

「みなさん、軽装すぎませんか？山ですよ？やーまー！」

「あつ…はい…なあ、絵里……」

「なに？ナオキ……」

「海未って登山マニアなのか……？」

「さ……さあ？」

「さー行きましょー！山が呼んでいますよー！」

海未はさっさと行った。

「でっけー!ー!ー!ー!!」

ナオキは真姫の別荘を見て声をあげた。

「そう? さ、入りましょう」

真姫は言った。

そして真姫がまさかのサンタさんを信じていたことが発覚した。

そろそろ練習の時間だ。

「じゃ、真姫と海未とことりは曲の準備を、それ以外のみんなは外で練習だ。なにかあつたらおれのとこまで来てくれ」

「はい」

「じゃ、私は海未とことりを部屋に連れて行ってこくるから。ナオキはあそこの部屋を使って、色々できるから」「わかった」

ナオキは別の部屋に移動した。

「さーて次のライブの準備するかー」

ナオキは作業をしていた。

すると

ドドドド……

「ん？誰か走ってきた？」

「ナオキくん!!」

そう入ってきたのは穂乃果だった。

「ど…どうした？」

「凜ちゃんここにちやんが…」

「凜とにこが!？」

「川に落ちちゃった!」

「まじか!?!すぐに行く!暖炉をたいて、ほんで毛布とか着替えを用意してやって」

「わかった!」

「もう…無事だからよかったけど…」

「すごい!本物の暖炉!」

「少しは心配しなさい!」

「ごめん!にちやん…」

「おーい、大丈夫か?凜、にこ」

「あ、ナオキくん、大丈夫にや!…ハックション!」「おいおい…ほんまにいけるん

かよ……ま、とりあえずお茶入れたから……はい」

「ありがとう……」

「ありがとうー」

ナオキはにこと凜にお茶を渡した。

「じゃ、ことりちゃん和海未ちゃんに持っていくよ！……あれ？真姫ちゃんは？」

穂乃果は言った。

「ほんまや……どこ行つたんやろ？」

希は言った。

「とりあえず、持っていくよー」

「ああ、頼む」

そしてしばらくすると、2階からドンドンと音が

「ん？なんだ？」

「穂乃果かしら？」

ナオキと絵里がそう言うのと穂乃果が飛び込んできた！

「大変だー！真姫ちゃんと海未ちゃんとことりちゃんが！」

そして3人のスランプが発覚し、みんなで力をあわせて曲を作ることに。

「はあ……」

ナオキは1人別荘でライブの準備をしていた。

みんなはユニットに別れて外でやっている。

「絵里と一緒にいたかったな……」

1人なのでナオキの独り言が口に出る。

そして夜になって、ナオキは1人ご飯を作って食べ終わった。

すると真姫が帰ってきた。

「お、真姫、どうしたんだ？」

「いや……その……曲、弾けそうだから……」

「そっか、聞かせてくれ……」

「しよ……しようがないわね……」

そして真姫のピアノの音が響く。すると海未とことりも帰ってきた。

「待ってろ、紅茶入れてくる……」

「はい、ありがとうございます」

「ありがとう！」

海未とことりは言った。

そして3人は曲を完成させ、寝付いた。

「つたく……………」

ナオキは3人に布団をきせた。

「ユメノトビラ……………か」

新曲の名前だ。

するとみんなが帰ってきた。

「ナオキ……………真姫たちいる？」

「お、絵里！ああ……………いるよ……………ここに」

みんな笑顔を浮かべた。

「さ、起きたら練習……………だ……………」

「ちよつとナオキ！」

ナオキは眠気にたえられず倒れ込んだ。それを絵里が受け止めた。

「流石えりちゃんね……………胸で受け止めるとは……………」

「た……………たまたまよ！／／／」

絵里は顔をあかくして言った。

そしてみんな起きて練習開始！

そして音ノ木坂学院に帰り、また練習した。

「んー……練習疲れたー」

「お疲れ様……」

ナオキと絵里は帰路についていた。

「いよいよ……だな……」

「ええ……」

さあ、予選大会まであと2週間だ！

次回へ続く



## 第14話「告白」

前回の妄想物語！

μ、sは真姫の別荘で曲作りをすることに！

だが真姫・海未・ことりがスランプに!?

そこでユニットで考えることに！

そして見事曲が完成！

μ、sは予選大会にむけて練習をするのだった。

そして男はある決意をしていた……

「できたわ！ 私たちの新曲が！」

「ええ！」

「μ、sとのライブが楽しみだ……」そういうのはUTX高校のスクールアイドルA—  
R I S Eだ。

「ふふっ、ナオキくんたちの驚く顔が目につかぶわ……」

「ハックション！」

「ちよつとナオキ、大丈夫？」

「だれかおれの噂でもしてるんかよ……ハックション！」「ナオキくんは人気者やねー」  
生徒会室で絵里と希とナオキは話していた。

「あ、でもそろそろ練習始まる時間だな」

「そうねー、でもまだ仕事全部終わってないし……」「あ、それならおれやつとくから絵里と希は練習行つてきな」

「ほな任しとくなー」

「ごめんねーナオキー」

そういうと絵里と希は練習にむかった。

「ワン・ツー・スリー・フォー・ファイブ・シックス・セブン・エイト！……」

ナオキが仕事をしていると外から聞こえてきた。

「はやく仕事終わらさな……」

「ナオキー？あら……寝てる……」

絵里は練習が終わって生徒会室へ戻るとナオキは寝ていた。

「きつと一人でしてたから疲れたんやね……えりち、起きるまでおつてあげたらー？」

「そうよね……仕事任せちゃったもんね……希は先に帰つてて」

「ほな！楽しんでやー」

「ちよつと！希！……行っちゃった……」

「スー……スー……」

「今……ナオキと2人きり……／／／／」

絵里はナオキの隣に座った。鼓動がはやくなる。

絵里はそんなナオキの寝顔を覗いた。

「ふふっ……可愛い寝顔……」

「ん……スー……スー……」

「そろそろ起こそうかしら……おい、ナオキー」「ん……ん……ん……あれ？寝ちゃつたの？」

「ふふっ…寝顔、可愛かったわよ…」

「なっ……／＼／＼」

ナオキは顔をあかくした。

「じゃ、帰りましょうか……」

「ああ……」

そして帰り道、実は $\mu$ sのメンバーは2人の後をつけていた。

「ふふふ……いい感じじゃん」

「むー……」

「本当に良いのですか？こんなことして？」

「いいじゃん！海未ちゃん、おもしろそうじゃん！」

「あはははは……」

「2人は付き合うのかにや？」

「大人気アイドル絢瀬絵里のスキヤンダル……」

「なに言ってるのよ……」

「ほらもう行つたで！ほな行くでー」

「ちよつと希ちゃん、待ってよー」

そして2人は校門のところで立ち止まった。

「あ、止まったよ……」

「ほんとだー」

「なにか話していますね……」

穂乃果とことりと海未は言った。

「なあ…絵里……」

「どうしたの？」

「お……おれ……小さいときから……」

「小さいときから……」

「こ……これは！」

「ま……まさか……」

「シツ、聞こえないでしょ……」

凜と花陽と真姫は言った。

ナオキは顔をあかくして深呼吸した。

「おれ……………絵里のことが……………」

「私の……………ことが？」

「す……………好きだ!!おれと……………おれと……………付き合ってください……………」

「え……………」

風がサーツと吹いた。

「き、キターー!!」

みんながそう言った。

「ふふつ……………あなたもだったのね……………」

「え?」

「私もよ……………私もナオキのこと……………ずっと好きだったわ……………小さいときからね……………」

「そ……………そうやったんか……………」

「絵里……………これからよろしくな……………おれの……………彼女として……………」

「私からもよろしく……………ナオキ……………私の……………彼氏として……………」

「ほ……ほんとうに付き合っちゃった……」

「ふふふ……カードの言うとおりにやってみたいやね……」  
にこと希は言った。

「でも……みんなには……内緒にする？」

絵里が言った。

「そうだな……みんなにバレたらいろいろと……あ  
するとナオキはなにかに気づいた。

「お前ら……!!!」

ナオキは叫んだ。

「あ………バレた……」

希は言った。

「ちよつと……みんな!／＼／＼／」

絵里は顔をあかくした。



「いやー……絵里ちゃんよかったねー…ナオキくと付き合えて……」

穂乃果は言った。

するとナオキはみんなの方にむかって歩き出した。

「ほほう……ずっとそこから盗み聞きしてた訳ね……なるほど……ふふふふ……」

「ちよつ……ナオキくん……怒ってるよー……ダレカタスケター……」

花陽が言った。

「とりあえず……みんな正座……」

「でも……ここは外……」

にこは言った。

「正座……」

「はい……」

みんな正座した。

「とりあえず……今日はこれぐらいにしてやる、予選が近いから……その代わり……」

5分ほど説教をうけたあとにみんなはナオキになにと言われようとしていた。

「その代わり……?」

みんなは息をのんだ。

「その代わり……明日は練習メニューきつくするからな」

「は……………はい……………」

そしてみんなは帰っていった。

「ふうー……………ちよつとキツすぎたかな？」

「さあ？明日どれくらいきつくするかによるわね……………」

「俺たちも帰ろうか……………」

「うん……………」

ナオキは歩き出したのだが絵里はナオキの腕にしがみついた。

「ちよつ……………絵里!？」

「いいでしょ……………私達付き合ってるんだから……………」

「う……………うん……………／／／／／」

「ふふつ……………照れちゃって……………可愛いんだから……………」

そして2人は帰っていった。

「ふふふ……………えりちとナオキくん、ラブラブやね……………」

次回へ続く

## 第15話 「予選大会」

「おいーどうした！もうばてたのか？」

ナオキの声が屋上に響く。

「さ……流石に3曲連続でさらに絵里抜きはきついわよー…  
にこは言った。

「そうか…なら踊るのはここまでにしようか…みんな水分とれよー」  
「ふうー……助かったー……」

穂乃果は座った。

ぶるるる……

「あ、電話だ……もしもし？あ、ツバサさん！」

「え……」

みんなが声を合わせた。

「はい、はい………はい、わかりました！それでは」

ナオキは電話をきった。

「ちよつと……ナオキ……ツバサさんって……まさか……」にこが恐る恐る聞いた。  
「ああ、A—R—R—I—S—Eの綺羅ツバサだ」  
「えー!!」

みんなの声が屋上に響いた。

そしてμ sはUTX高校へむかった。

「あ、ツバサさん!」

「あら、早かったわね! さあ、中へどうぞ」

「ほ……ほんものだ……」

「ほ……ほんもののツバサさん……」

にここと花陽は驚きを隠せない。

μ sはUTXのカフェスペースへ案内された。

「ようこそ、UTX高校へ」

「待っていたわ」

「さ、飲んで」

そういうのはA―RISEの統堂英玲奈、優木あんじゅ、綺羅ツバサだ。

「はい、いただきますー！」

「い……いただきます……」

ナオキ以外は驚きを隠せず動揺していた。

「ちよつと絵里……」

「どうしたの？にこ」

「なんでナオキはA―RISEと知り合いな訳？」

「わ……私に聞かれても……」

「それなら私から話すわ」

ツバサが答えた。

「あれはね……私が変装してアキバにいたとき……」

時期的には文化祭が終わったあとぐらい……

「へい、ねーちゃんちよつと遊ばないかい？」

一人の男が一人の女の子に何か言っている。

「ん？なんだ？」

ナオキは不思議そうに見ていた。

「や…やめてください」

「いいじゃねーか」

「あーナンパか…ちっ」

ナオキは歩き出した。

「ちよつとその人！」

「あ？なんじゃおらあ？」

「嫌がつてるでしょ？やめてあげなよ」

「あ？うつせーよ！しばくぞ」

「なら仕方がない…実はね…おれの親父は警察のお偉いさんなんだよな……」

すると男はビクツとなった。

「き…今日のところは許してやる……」

そういうと逃げていった。

「ふうー……大丈夫ですか？」

「ええ……ありがとうございます……あの……お名前は？」「ああ……名前はナオキです、そちらはっ？」

「わ……わたしは……」

すると女の子は戸惑っていた。

「ん？どうしたんですか？」

「ちよつとこつちへ来てくれる？」

「あ……はい」

そう言われるとナオキはUTX高校へ案内された。

(UTXの生徒か……)

「ここに座って……」

「はい……」

「あら、ツバサどうしたの？」

「なにかあったか？」

そうやって入ってきたのはA—RISEの優木あんじゅと統堂英玲奈だ。

「あ……A—RISE？ツバサって……まさか……」

「そうよ……わたしはA—RISEの綺羅ツバサ……助けてくれてありがとう」



「え……えー!!」

そして電話番号を交換し、今に至るのだ。

「……という訳なの」

「へー……ナオキくん、かつこいいところあるやん」

「お……おう……」

「流石、絵里が惚れることはあるわね……」

真姫は言った。

「ちよつとー!／／／」

絵里は顔をあかくした。

「と……とりあえず本題に入りましょう!／／／」

ナオキは照れて言った。

「そうね……わたし達とライブをするってことは知ってるわね?」

「はい」

ツバサが言うのと穂乃果は答えた。

「でも…なんでA—RISEがわたし達なんかと…A—RISEは1位でわたし達は…」

「それはもう過去の話よ……」

海未が言うのとあんじゅは答えた。

「それに…わたし達は、sを注目していたし、それに…ライバルだと思ってる…」

「え………」

ツバサが言うのとみんなは驚いた。

「高坂穂乃果…人をひきつける魅力…カリスマ性とでも言えばいいのだろうか10人いてもなお輝いている。」

絢瀬絵里…ロシアでは常にバレエコンクールで上位だったと聞いている」

「西木野真姫の作曲の才能は素晴らしく、園田海未の詩とともマッチしている」

「星空凛のバネと運動神経はスクールアイドルとして全国レベルだし、小泉花陽の歌声は個性の強いメンバーの歌に見事な調和を与えている」

「牽引する穂乃果のついでになる存在として9人を包み込む包容力をもった東條希…」

「それに…アキバのカリスマメイドさんもいるしね…いや…元と言った方がいいのかしら？…そして矢澤にこは……小悪魔的な存在かしらね？」

A—RISEから褒められた、sは驚いていた。

「ほんでにこはいつもA—RISEに花をおくっているらしいな…」

「え…」

にこは驚いた。

「にこ……………」

「ウチ…知らんかったんやけど……………」

「い…いやーずっとファンだったから…あはははは…」

「ということでおれがツバサさんに一緒にライブでも…っていったらOKしてくれたわけさ」

「なるほどね……………」

絵里は言った。

「来週のライブ……………楽しみにしてるわ……………μ sの皆さん…」

「はい！私達も楽しみです！」

穂乃果は言う。

「うふふふ……………穂乃果さんは面白いわね…」

「い…いやー」

「じゃ、また来週ね…」

「楽しみにしているぞ…」

あんじゅと英玲奈は言った。

そして次の日、部室に集まった後、s

「ほんとうに大丈夫なのかな……」花陽は不安そうに言う。

「自信を持つんだみんな！ここで上位4位に入れば、まだA—RISEに勝てるチャン  
スはあるってことだ！」

「あ……そっか……」

こころは答えた。

「それではみなさん、練習しましょう！」

「はい！」

みんな屋上へむかった。

そして帰り道

「ねえ、ナオキ……」

「どうした？」

「ほんとうに大丈夫と思う？」

「やってみなきゃ、わかんないじゃん？とりあえずまずは予選決勝まですすむことを考えよう！」

「そうね！」

そう言うのと絵里はナオキにくつついた。

「ちよっ……／＼／＼／＼」

「いつまで照れてるのよ？そろそろ慣れてよ……」

「ごめん……」

そして2人は笑い、家へと帰るのだった。

そして一週間後……

「なあ、まだかー」

「まだよー」

μ sはUTXで衣装に着替えていた。

ナオキはその部屋の外で待っていた。

「あれ？ナオキまだ入らないの？」

「あ、穂乃果、まだ着替えてないのかよ……」

「希ちゃんもだよ？」

「はやく着替えてこい」

「はーい」

「ナオキくん…覗いちやダメやで？」

「覗かねーよ！」

「あら？ナオキくん」

「あ、ツバサさん…」

「みんなは中？」

「そうですよ…」

「入るわね…」

「はい、みんなーA―RISEの皆さんが来たよー」

「え？ちよつと待ってねー」

「らしいです…」

「ふふふ……わかったわ」

「大丈夫だよー」

「ではどうぞ」

「はろー」

「準備はできたか？」

「はい！」

「穂乃果さん…いいライブにしましょう！お互い…ベストをつくして…」

「はい！こちらこそ！」

ツバサと穂乃果は握手を交わした。

「みなさん！お待たせしましたー！まずはA—RISEのライブをどうぞ！曲は『Shocking Party』です！」

そしてA—RISEのライブを間近に見たμ s……

「これが……A—RISE……」

「…私達……A—RISEには……」

「勝てない……」

自信を失うμ s。

「みんな！やってみなきゃ、わかんないじゃん？やろう！」

「ふふっ……そうね……」

「そうだよ！やろう！こんなすごい人達とライブができるなんてすごいよ！それじゃ、行くよー！」

「μ s！ミュージック……スタートー!!」

「それではみなさん！続いてはμ sのステージです！曲は『ユメノトビラ』です！どうぞー！」

ナオキが言うのと音楽が始まった。

曲が終わると拍手の音が聞こえてくる。

ナオキも拍手した。

「ふふっ……面白くなりそうね……今回のラブライブ！……」

ツバサはそう言った。

「A—RISEのみなさん、今日はありがとうございました！」「ありがとうございます」



たー！」

ナオキが言うともみんな続いていった。

「こちらこそ…楽しかったわ」

「結果が楽しみだ」

「お互い予選決勝に出れるといいわね」

「はい！」

そしてみんなは帰っていった。

「ナオキ」

「ん？……ああ……いいよ……」

「ふふっ……やったー」

そう言うのと絵里はナオキにくつついた。

「もう慣れた？」

「ああ…流石に慣れたよ…」

そして2人は帰っていった。

次回へ続く

## 第16話「新しい生徒会」

前回の妄想物語！

μ sはA—RISEと一緒にステージで予選に挑むことに！

とてつもないプレッシャーを受けるμ sだったがなんとかのりこえた！  
さて！その結果は!!

その次の日、ナオキは生徒会室へ呼び出されていた。

「ちーつす」

生徒会室へ入るナオキ。

「ごめんね、急に呼び出しちゃって」

「ごめんやでー」

そこには絵里と希はもちろん書記のキョウコ、会計のカオリとクルミがいた。

「あ、カキクのみなさんもいるんですね」

「略さないで！」

3人は声を合わせて言った。

「それでね、これからのことについて話したいのよ」

絵里は話をきりだした。

「ああ…そつか、今期のメンバーはもう終わりか」

「そうよ…それでね、みんなで決めたのよ。これは全員一致の答えよ」

「次期生徒会長は…」

「ナオキくんですーすー！」

絵里、希、カキクは順番に言った。

「え……えー……!!!」

ナオキは驚いた。

「これからやっぱり男子が入ってくるとしたら男の生徒会長がやった方がいいと思うの

よ…」

「それにここの生徒会は指名制やしね」

「どう?」

「やってみない?」

「お願い!」

5人は順番に言った。

「……わかりました！引き受けましょう！」

ナオキは立ち上がっていった。

「ハラシヨー！」

「後のことは任せただー」

「うん！」

「これで私たちの荷が下りるわー」

「そうだねー」

「頑張つてね！」

「はい！カキクのみなさん！お疲れ様でした！」

「まだ早いよー………つて………」

「略すなー！！！！」

そして6時間目の集会で全校生徒が講堂に集められた。

「えー、それでは生徒会長からお話があります…生徒会長…よろしくお願いします！」

誰もが絵里が挨拶するのかと思つたが絵里は立ち上がらない。するとスポットライ

トが舞台袖にむけられた。

そしてそこから出てきたのは一人の男子生徒、一人しかいないのだが……そう……ナオキだ。

「みなさん、こんにちは！新生徒会長に推薦されました、ナオキです！推薦理由としてはこれから学校をかえていくにあたって、男子生徒が会長をした方がいい……だそうです。あと……副会長などは生徒名簿から自分が選ばせてもらいましたのでご了承ください。あ、でも今、生徒会に入りたいという方はいますか？（……）……誰も手を挙げない）それでは発表させてもらいますね。呼ばれたらご起立お願いします！それでは……」

副会長……園田海未！書記……フミコ！会計……マチコ！そして西木野真姫！

そして自分を加えたこのメンバーで生徒会をしたいと思えます！

「ちよつと！なんで私なのよ！」

「異論……ありません……うう……恥ずかしいです……はやく座らせてください……」

「私は大丈夫だよー」

「お……お引き受けます！」

「真姫はダメなのか？」

「もう……仕方ないわね……」

「それではこれで終わります。これからよろしくお願いします！新生徒会のメンバーは

放課後に生徒会室へ来るように」

そして一礼して舞台を降りたナオキ。

そして教室……

「ちよつとナオキくん……なんでフミコを選んだの？」

ヒデコが聞いた。

「いや……字がうまかったからさ」

「なるほど……園田さんは？」

ミカが聞いた。

「なんか希が『カードがウチにそう告げるんや！』って言ってたし、おれも海未なら大丈夫かなーって」

「海未ちゃん、頑張つてね！」

「海未ちゃん、ファイトだよ！」

「ことりと穂乃果は言った。」

「それじゃ、フミコ、海未、生徒会室に行こっか」

「ええ！」

「はい……」

そして生徒会室……

「それではまずは自己紹介から……おれはナオキ、会長だ、よろしく」

「ふ……副会長の園田海未と申します……よろしくお願ひします……」

「海未もつとリラックスして、あと年上なんだからいつもみたいでいいんだぞ？」

「は……はい……」

「書記のフミコです！よろしくねー！」

「か……会計のマチコです……よ……よろしくお願ひします！」

「マチコさん、そんなに緊張しなくて大丈夫だよ？一緒に頑張ろ？」

「は……はい！がんばりまちゅ！」

（囁んだ……）

マチコ以外のみんながそう思った。

「西木野真姫です、よろしくお願ひします……」

「よし、このメンバーでやっていくからみんなよろしく！とりあえず、今日は引き継ぎの書類とかの整理とか会議の日とか決めていくから」

「はい！」



「生徒会長の仕事、忙しそうですね…」

海未は言った。

「おつ、緊張とけたか？」

「はい、おかげさまで…」

「副会長としてサポートよろしくな」

「はい、ナオキは昔からドンくさいですからね…」

「言うな…」

「へー、書記もいっぱい仕事あるんだな」

「結構大変だぞ？大丈夫か？」

「推薦理由が字がいいだからって…関係くない？」「ま、字がよかつたら見やすいからいいじゃん？」

「そうだけど…ま、頑張るよ！」

「西木野さん、こつちよろしくね…わたしはこつちやるから」

「わかつた…」

「おつ、真姫とマチコは仲がいいのか？」

「日直で一緒になって少し話しただけよ」

「ふふふ……」

「そうか…会計は重要だからな、成績から選ばしてもらった」

「それなら2年生から選ばばいいじゃない？」

「それだったら修学旅行のときに困るだろ…」

「そうですね」

「ま、頑張つて」

「終わったー！みんなお疲れ様、じゃ、会議は金曜日で、忙しい時は毎日とかあるけど金

曜日は全員参加で」

「はい！」

「それじゃ、解散！」

「お疲れ様でしたー」

部室……

「ふうー…生徒会は忙しいですね…」

「わかってくれた？」

「はい…希たちの苦勞がわかりました」

「それじゃ、みんな揃ったし、練習しよう！」

穂乃果が言った。

「よし！今日はこれくらいにしようか！お疲れ様！」

ナオキが言った。

「今日はメニニュー軽めだったね…」

花陽は言った。

「ま、ライブの次の日だからな」

「そうね…」

絵里は言った。

「とりあえず、みんな着替えて解散だ」

「はい！」

「ねえ…ナオキ！」

絵里はみんなが行ったあとに声をかけた。

「ん？」

「部室で待つててね？」

「わかつてるよ……」

「それならよかった……ふふっ……」

着替え中

「えりち、ナオキくんと何話してたん？」

「別に、一緒に帰るから待つててって言っただけよ」

「ふーん」

にこは言った。

「絵里ちゃんとナオキくん、仲いいねー」

穂乃果は言った。

「別に普通よ……」

「ま、小さい時から好きだったならあれだけ仲いいのかにやー？」

「もう……凜までやめてよー」

「お待たせー」

「よし、帰るか…」

「ええ…」

「それじゃ、お先にー」

「仲良く帰るんやでー」

「わかつてるよ」

ナオキは絵里の手を握って部室を出た。

「あらナオキ、大胆になったわね？」

「そうか？／＼／＼」

ナオキは顔をあかくした。

「じゃ、絵里また明日な」

「うん！また明日！」

「そういや、おじさんからメール来てたな…『ラブライブ！予選結果』…まじか…」  
メールの題名を見るなりすぐに帰った。

そして次の日……

「おはよー、ナオキ！」

「おっはよー絵里！」

「あら？ナオキ、今日は元気いいわね…何かあったの？」「別にー」

ナオキはなにやら嬉しそうだった。

「えー、話してよー」

「すぐわかるよ…」

「あ、アイコさん！」

「あら、ナオキくん、私に用事？」

「実は昼休み放送させて欲しいんだけどいいかな？」

「いいよー、生徒会長の頼みだしね」

「ありがとう！」

そして昼休み……………

キンコンカンコーン……………

「みなさん、ナオキです！」

「ナオキ？」

「なんでなんでー」

「なにかお知らせかな？」

海未・穂乃果・ことりは言った。

「突然ですが……………ここでラブライブ！地区予選の結果を発表します！」

「ふええええ！」

「流石親戚にラブライブ！運営側の人がいるだけのことあるにやー」

「ふん……………」

花陽・凛・真姫は言った。

「なお、この情報は今日の夕方にホームページにアップされますが音ノ木坂学院の生徒

だけ、早めに結果が確認できます！」

「き……緊張するわね……」

「そうやね……」

にこと希は言った。

「ふふっ……」

「えりち、どうしたん？」

「べつつにー（ナオキったら……私、わかっちゃったわ）」

絵里はそう思った。

「それでは発表します！一位……A—R—I—S—E、二位……E—a—s—t—h—e—a—r—t、三位……M—i—d—n—i—g—h—t—c—a—t—s、四位……」

この瞬間……みんなドキドキして、教室のスピーカーを見つめていた。

「四位………μ，s!!!この四組が予選決勝に進出です！」

……ハラショー！」



「やったー!!」

音ノ木坂学院の生徒、教師全員がそう言った。

「ふうー……ありがとうな…アイコさん…」

「いえいえ、それより、地区予選突破おめでとう!」

「ありがとう……だがまだ終わってない、予選決勝が残ってる…」

「大丈夫だよ……μ，sなら!」

「ああ……そうだな!」

そして放送室を出て、教室に帰ったナオキ。

「ナオキくん!やったね!」

帰るなり穂乃果は言った。

「本当だよー」

「びっくりしました…まさか放送で言うとは…」

「ははは…ごめん」

「おめでとう!四人とも!」

「おめでとう!」

「あの、sがここまで大きくなったんだね」

「うん！ありがとう！ヒフミ！」

「略すな！」

ヒフミは言った。

そして部屋……

「あらためて……みんな！予選決勝進出だ——！」

ナオキは言った。

「私たちやったんだね……」

花陽は言った。

「やったにや——！！」

凜は言った。

「喜びすぎよ……まだ全部終わってないわよ……」

真姫は言った。

「そーやね……」

希は言った。

「でも地区予選は突破できた！嬉しいことじゃない？」

絵里は言った。

「そうよ……にこのおかげね！」

にこは言った。

「でも……四位か……」

「ことり！」

「あつ……」

ことりが言うともみんな下をむいた。

「ふふふ……ビックニュース忘れてたな……」

ナオキが言った。

「え？なにになにー？」

穂乃果は言った。

「実はな……二位から四位は……一点ずつしか差はあいてないんだ！四位と五位は5点差、A—R—I—S—Eは二位に10点くらい差があったかな？」

「えー!!」

「それじゃ、二位から四位はあまり差がないってこと!?!」

「すごいにやー!!」

「でも流石A—RISEだね……」

「そうね……」

「でもウチたちならいける!」

「ええ……その通りよ」

「ああ……予選決勝でA—RISEに勝とう!」

「おー!」

μ sは気持ちをあらたにして練習に励むのだった。  
しかし、なにかが起ころうとしていたのだった……

次回へ続く

## 第17話「にこぷり♡女子道」

前回の妄想物語！

あらたな生徒会に入ったメンバーは会長はナオキ、副会長は海未、書記はフミコ、会計は真姫とマチコだ！

そしてナオキは放送で予選の結果を言った。

四位に $\mu$  sが入り、見事地区予選突破を果たした！

そして $\mu$  sは気持ちをあらたにして練習に励むのだったが……

「それじゃ、練習はじめるぞー！」

「はーい！」

「ちよつと待つてー！」

「どうしたんですか？ことり……」

「誰かいらないような……」

「そうかにゃ？」

「それでは出席をとるぞー、穂乃果！」

「はい！」

「海未！」

「はい……」

「ことり！」

「はい！」

「花陽！」

「はい……」

「凜！」

「はーい！」

「真姫！」

「はい……」

「希！」

「はい！」

「絵里！」

「はい……」

「全員いるにやー！」

「おいおい、一人忘れてるだろ？」

「……………」

みんなの頭には？が浮かんでいた。

「おいおい……………にこがないだろ？」

「あー！」

みんな声を合わせた。

「にこちゃんーん！」

穂乃果は外でにこを見つけた。

「なによ」

「なによじゃないよ！練習するよ！」

「しばらく私は練習休むから……………じゃ！」

「あ……………行っちゃった……………」

「にこちゃん、どうしたのかにゃ？」

「追いかける？」

「お、真姫ちゃん！ナイスアイデア！おもしろそうやん！」

「じゃ行こー！」

「おー！」

「おい！穂乃果！凜！希！真姫まで……しゃーねー、行くか……」  
「そうですね……」

海未は言った。

「やっと追いついたわ……」

「ああ……」

「穂乃果ちゃん……」

「ことりちゃん！しっ！」

「え？」

すると真姫はスーパールの方に指さした。

「あ、ここが買い物してる……」

絵里が言った。

「なんでだ？」

「まさか！」

凜が立ち上がり大声を出した。



するとドアが開き、にこがこちらをむいた。

「あ……」

「あんたたち……」

するとにこはダツシユした。

「あ！逃げた！」

「おえー！」

穂乃果と希は言った。

「絵里！」

「どうしたの？」

「にこのことだ裏口から出てくる可能性がある……」

「そうね……」

「ウチも行くでー」

ナオキと絵里と希は裏口の方へ外からむかった。

「ほら来た……」

「な……なんで!?!」

「流石にこね……」

「ふふふふ……にこつち、おとなしくしないとワシワシするで……」  
するとこはスルツと抜けた。

「希が抜かれた!?!」

「くつ……意地でもワシワシするでー!」

「話がかわつてるわよ!希ー!」

それをナオキと絵里がおうと希が車の前で止まっていた。

「どうしたんだ?」

すると希はナオキを見た。

「ナオキくん、ここ通つて!」

「わかった……(なるほど)にこー!いねえ……」

そしてナオキは戻った。

「すまん……見失った……」

「待つて!」

「どうしたんですか?花陽?」

「あれ……にこちゃん?」

花陽の指さす先にはにこ？が歩いていた。

「いや…ちよつと小さくない？」

「そんなことないよ、希ちゃん…：…つて、小さいにゃー!？」

するとその子はこちらをむいた。

「なにかごようですか？」

「ごめんなさい…：人違いだったみたい…：」

絵里が言った。

「あら？もしかして、sのみなさんですか？」

「そうですね…：」

「私たちのこと知ってるの？」

「もちろんです！矢澤にこの妹、矢澤ココロです！」

「えー！」

みんな声を合わせた。

「とりあえずみなさん、走って私についてきてくださいね」

「え？なんで？」

ナオキが言うところココロはダッシュした。

「はやー！」

「とりあえず行くか……」

そして、sはダツシユした。

「はあ……はあ……今日はよく走るな……」

「そうやね……」

「誰も来てませんね？」

「はい……おそらく……」

「もつと注意してください、奴らはプロなんですから……」

「プロ？」

花陽は不思議そうに聞いた。

「パパラッチですよ……それに来るなら来るで連絡をください……」

「なんでだ？」

「だって、おねえさまのバックダンサーのみなさんに召使いの方ですよね？」

「誰がバックダンサーよ！」

「誰が召使いだ！」

真姫とナオキは言った。

「え？ スーパーアイドルにこのバックダンサー……、s、そして召使いのナオキさんで

すよ……ね？」

「なるほどね……」

「そういうことでしたか……」

「にこつち……」

「忘れてたわ…相手はにこちゃんだものね…」

絵里と海未と希と真姫は言った。

「みなさん、そんなに怒らずに…いつも…にっこにっこに…ですよ…さあ、みなさんご」

「一緒に…にっこにっこに…にっこにっこにっこに…にっこに…」

「ココロちゃん…ちよつと電話していいかな？」

「はい…」

「ココロはずつとにっこにっこに…♪言っていた。

「もしもし?」

「あーもしもし?私、召使いのナオキと申しますが…」「え……」

「お嬢様…:すこしお話させていたきたいのですが…よろしいですか?」

「い……いま…どこ?」

「お嬢様の後ろでございます…」

「え!?!…なんだ…いないじゃない…:つて希!」

そうナオキはこの位置情報を希に送っており、希をむかわしたのだ。

「にこつち……覚悟しいや……」

「ごめんなさい……」

「それではお嬢様……お待ちしております……失礼いたします……ふうー……ココロちゃん……おねえちゃんもうすぐ帰ってくるみたいだから家に案内してくれる?」

「はい!どうぞ、こちらです!」

ココロに案内されマンションの一室へ案内された。

「ここがわたし達の家です!こつちは弟の虎太郎です!」

「バックダンサー?」

「あはははは……」

こつちは苦笑いした。

虎太郎はもぐらたたき?をしていた。

「ここがおねえ様の部屋です」

「ただいま」

「あら?ココア……おかえりなさい」

「あれ？誰か来てるの？」

「はい…バツクダンサーと召使いの方々です」

「へー」

「てか合成写真多いな……」

「だから私たちがバツクダンサーってことね……」

「た………ただいまー………」

「おねえ様！おかえりなさい！バツクダンサーと召使いの方々がお待ちですよ！」

「あ………ありがとうございます………ささ………みんな………こつちへどうぞ………」

「すみません………急にお邪魔してしまつて………」

（うう………海未ちゃんもナオキくんも怖いよー）

穂乃果はそう思った。

「で………どういふことだい？お・じよ・う・さ・まー！」

「え………えーと………」

「にこつち………正直に言つた方が身のためやで？」

「そう言うとは『death』のカードを出した。」

「は………はい………実はね………親が出張でしばらくいないのよ………だから練習を………」

「それとバツクダンサーとどういふ関係があるんですか？」

「元々よ………元々………いいから帰つて………」

ここは暗い顔をしていた。

「……………ここは帰ろう…」

「ナオキ！」

するとナオキは絵里に耳打ちした。

「ここに何かあったんだ…今は引こう…」

「わかったわ…」

「すまん…ここ、帰るわ…ココロちゃん、ココアちゃん、虎太朗くん、またね」

「はい！召使いさん！」

「ははは…」

「みんな…ここはおれに任せてくれ…おれから聞き出す」「わかったわ…ナオキ…任したわ」

「それじゃーね…」

ナオキ以外みんな帰った。

「みんな帰ったぞ、ここ」

「なんであんたは帰らないのよ…」



「お前…過去に何かあったのか？」

「それは……」

「お前のあの顔を見ればわかる……あれは…過去に何か辛い思いをしているやつの顔だ……」

「流石ナオキね……いいわ…話してあげる……」

「ああ……頼む」

「アイドル研究部は元々5人だった……だけど2人は家の事情で抜けて、私はカオリとキョウコと一緒にスクールアイドルをはじめたの……」

「え…カオリさんとキョウコさんもスクールアイドルだったのか……」

「ええ……でも…私についていけなくなったって……二人は抜けたわ……そして一人になった……」

「そうだったのか……だからお前は家族の中ではスーパードールにこーなのか……」

「ええ……でも今年、みんなと出会った……でも今更家族にチームになったって言えない……だからバックダンサーとか召使いとか言ったのよ……悪かったわね」

「ありがとうにこ…話してくれて……じゃあな……」

「ええ……」

ナオキは一人帰っていった。

家の前につくと絵里がいた。

「絵里……」

「聞いたのね……にこのこと……」

「ああ……」

「みんなには希と私で話したわ」

「知ってたのか？」

「ちよつとだけね……」

「そっか……」

「ナオキ、私の家に来て、ご飯作ってあるの」

「ありがとう……荷物置いたら行くわ」

「ええ……待ってるわ」

ピンポン……

「はい、あらナオキ早かったわね？」

「絵里の料理が食えるからとんできた」

「もう……さ、あがって……」

「お邪魔しまーす」

「ナオキさんだー!」

「亜里沙ちゃん、こんばんは」

「こんばんは!」

「さ、亜里沙……食べるわよ」

「はーい!」

「ふうー……うまかった……ごちそうさま!」

「ナオキ……私の部屋に来てくれる?」

「わかった……」

「お邪魔しまーす」

「そこに座って……」

「ああ……」

「でね、穂乃果がいいアイデア思いついたのよ……」

「アイデア? どんなん?」

「それはね……にこのソロライブをしたいのよ」

「ソロライブか……さすが穂乃果だ」

「曲は真姫と海未が考えるらしいんだけど……にこらしい曲とだけ指定したわ」

「大丈夫だろ……」

「そうね……」

翌日、生徒会室……

「じゃ、会議はここまで……お疲れ様」

「お疲れ様でしたー」

「あー真姫、海未！」

「何よ？」

「どうしました？」

「にこのソロ曲だけど……」

「ええ……バツチリです！」

「ま、にこちゃんらしい曲になったと思うわ」

「そうか……部室でみんな聞いてみようか」

「そうですね…」

そして部室……

「うん！いい曲だね！」

「海未がこの歌詞を考えたのか…」

ナオキがそう言うのとみんな海未の方へむいた。

「や……やめてください！／＼／＼／」

海未が顔をあかくして言った。

「さ、月曜日の作戦実行にむけて準備するぞ！」

「おー！」

そしてみんな土曜日も日曜日も準備した。

「よし！これで完成だ！」

「にこちゃんのステージ…」

「にこらしいですね…」

「ちよつと絵里たちを見てくる…」

「うん！」

「絵里ー希ー、入るぞー」

「あ、ナオキ！」

「衣装！完成したでー！」

「おー！にこらしい衣装だな！絶対似合うわ」

「たのしみね…明日のライブ！」

「さ、みんなで作戦会議だ」

「そうやね！」

「じゃ明日の予定はまず穂乃果はココロちゃんとココアちゃんと虎太郎くんを連れてきて、屋上まで連れてきてくれ」

「わかった！」

「真姫と凜と花陽はにこを絵里と希のとこまで」

「了解！」

3人は声を合わせた。

「絵里と希はにこがきたら衣装を着させてくれ」

「了解！」

二人は声を合わせた。

「そして海未とことりは俺と一緒に最終確認！」

「はい！」

二人は声を合わせた。

「じゃ、明日は成功させよう！」

「おー!!」

帰り道……

「ナオキ、かわらないわね……人のために全力でするのは……」

「そうか？でも元は穂乃果のアイデアだぞ？」

「でも、作戦とか考えたのはナオキでしょ？ハラショーよ！」

「照れるじゃん……」

「ふふふ……そんなナオキ大好きよ……」

そう言うときさつきよりもっとひつついた。

「うつ……おれも大好きだよ、絵里のこと……」

「ええ……」

「じゃ、また明日な」

「また明日ー」

そして翌日……作戦実行!!

「にーこちゃん!」

「穂乃果……練習は休むって……って……なんでココロたちを連れてきてるのよ!」

「にこちゃんのライブがあるからだよ!」

「私の……ライブ?」

「にこちゃん!こっちにやー!!」

「はやくはやくー!」

「これ歌詞ね……一瞬で覚えて……無理ならステージにカンニングペーパーあるからそれ見てもいいわよ……」

「みんなして……」

「さ、にここれに着替えて!」

「はやくしないとワシワシするでー!」

「わ……わかったわよ!」

「これって……」



「ハラショー！よく似合ってるわ！」

「ふふっ…スーパーアイドルにこにーにこちゃんにはぴったりやね！」

「いま、そこには！あなたのライブを心待ちにしているファンがいるわ！」

「さ、にこつち…行つてき！」

「ありがとう………」

にこは涙を浮かべていった。

「わたし達だけ？」

「屋上ー……」

「はい、これ」

「これは………」

「おねえちゃんを応援するにはこれがいりますよ？」

「ラブライブブレード、スーパーアイドルにこにーにこちゃんモード！」

「おねえ様だけの…ブレード…」

「ああ……しかもこれを持つてるのは世界で君たち3人だけだ…これでおねえちゃんを

応援しな……」

「ありがとうございます！」

そしてステージからこをセンターにみんなまできた。

「ココロ、ココア、虎太郎……スーパードールにこにーにこちゃんは今日でおしまいなの……勘違いしないでね？アイドルをやめるわけじゃない……私は宇宙No.1アイドルにこにーにこちゃんとして、宇宙No.1ユニットμsと一緒にラブライブ！に優勝するわ！A-R-I-S-Eだって倒せるんだから……だから聞いてね……『にこぷり♡女子道』」

そしてにこのソロライブは大成功！

μsはさらに結束を深めたのだ！

次回へ続く

## 第18話「再会その4」

前回の妄想物語！

にこの過去を知ったμ、sはこのためにソロライブを決行！  
『にこぷり♡女子道』を妹たちの前で披露したにこ、

ソロライブは大成功！μ、sはより結束を深めるのだった！

「ねえねえナオキ！」

「どうしたんだ…絵里？」

ソロライブの帰り道絵里はナオキに話していた。

「実はね…パパとママが帰ってくるのよ！」

「おー、そうなのか！いつ？」

「明日よ！」

「明日…」

## ナオキ宅

「やべえ！明日かよ！あ…挨拶しなきゃ！いつ以来だ？えーと……………小学校のときに大阪に行ったから……………10年ぶり？かな……………」

## 絢瀬宅

「亜里沙！はやく準備しなきゃ！」

「慌てすぎだよーおねえちゃん！」

そして朝…

「おはよう！絵里」

「おはよう！ナオキ」

「今日は楽しみだな？」

「そうねー……………ふふふ……………」

放課後…

「えー！絵里ちゃんのご両親が帰ってくるの？」

「そうなんだー」

「よかったですね…絵里」

「ふふふ…ナオキくんは挨拶するん？」

「え…するだろ普通…」

「（あ、わかつてないなこりや…）そ…そうやねー」

「さ！練習しましょ！」

「はーい！」

「よし！このくらいにしようか」

「お疲れ様でしたー」

「さ、ナオキ！早く行きましょ！」

「えりちノリノリやねー」

「私達先に帰るから！また明日！」

絵里はナオキの腕を引つ張った。

「ちよつと…あ…また明日なー」

「絵里のあんなにはしゃいであるところ、初めて見たわ…」「そうねー」  
真姫とにこは言った。

### 絢瀬宅

「ただいまー」

「お邪魔しまーす」

「あら、絵里お帰りなさい！」

「ママ！お帰りなさい！」

「おー絵里か！久しぶりだな！」

「パパも！」

そしてナオキも挨拶した。

「どうも…おじさん、おばさん、お久しぶりです…」

「もしかして…ナオキくん？」

「はい！」

「おーナオキくんかー！大きくなつたなー！」

「ささ、あがつてご飯作つてあるの…」

「え？ママの作るご飯！わーい！」

亜里沙は喜んだ。

「ごちそうさまでしたー！」

「どう？美味しかった？」

「はい！とても！」

「それはよかった…私も手伝ったんだよ」

「そうなんですかー…」

「で、ナオキくん…絵里と付き合ってるというのは…ほんとうかい？」

絵里パパは言った。

「あつ、はい！お付き合ひさせていただけます…」

「そうか…ナオキくんなら安心だ…絵里のこと…よろしく頼むぞ…」

「……はい！」

「絵里の花嫁衣装もはやく見たいわね…ふふっ…」

「ちよつと！ママ！／／／」

「ナオキくん…よろしく頼むわね？」

「あつ、はい！」

「もう……みんなして……／／／」

絵里は顔をあかくした。

「じゃ、おれはそろそろ帰ります」

「そうか…わたし達は明日ロシアに行かねばならないんだ…絵里のことよろしく頼むぞ

……」

「はい！お父さん！」

「ちよつとナオキ！」

「ははは…私が呼べと言ったんだ」

「もう…パパのバカ…／／／／」

絵里は顔をあかくした。

「元気でねー」

「はい！お母さんも！」

「私が玄関まで送る！さ、行きましょ！」

「お…おう…それでは…」

そう言ううと絵里はナオキの背中を押しして玄関まで行った。

「じゃ…ナオキ…またね……」

「ああ…また…」

「ねえ…ナオキ……」



「ん？」

「ナオキは本当に……その……そう思ってるの？……お父さんとかお母さんなんて……／＼」

ナオキはしばらく考えて意味を理解して言った。

「ああ……思ってるよ……／＼／＼／＼」

すると絵里は顔をもつとあかくした。

「ありがとう……チュッ……」

すると絵里はナオキの頬にキスをした。

「………久しぶりだな……頬にキスをされるのは……」

「また別の意味よ……」

「ん？」

「じゃ、また明日ね……」

「ああ……また明日……」

ナオキは帰っていった。

（小さい時は挨拶のキスだったけど……今回ののは……）

絵里はそう思った。

「んー……小さい時は挨拶のキスやったけど……別の意味？……あー……そう言う事か  
……／＼／＼」

ナオキは頬に手を当て、顔をあかくした。

ピンポン……

「はーい……あらナオキくん！絵里をむかえにきてくれたの？」

「はい！」

「絵里ー！ナオキくん、来てくれたわよー！」

「あつ、はーい！……おはよう！ナオキ！」

「おはよう！絵里！」

「じゃ、また会える日を楽しみにしてるわナオキくん……」「はい！お母さんもお元気で！」

「いつてきます！ほらナオキ！行くわよ！」

「ああ……」

放課後……

「ねえねえ……えりち！」

「希……どうしたの？」

「どうだった？」

「どうだったって…なにが？」

「ナオキくんとか両親…」

「ああ…仲良かったわよ…」

「そうなん？よかったやん！」

「もう…やめてよ…」

部室……

「ちいーつす…みんな揃ってるか？」

「はい！揃っていますよ」

「よし！じゃ、これからの予定を話すぞー」

ナオキはホワイトボードを出した。

「まず、おれ・穂乃果・海未・ことりは金曜から修学旅行でいない、そして帰ってきた次の日にファッションショーでのライブ、だから俺たちが帰ってくるまでに99%完成させといてくれ」

「わかったわ…」

絵里は言った。

「そしてファツションショーが終わったらライブも増えてくる…ハロウィンイベントでのライブはまだ計画段階で、あとは講堂でのライブとかもあるから…」

「なんでそんなにあるにゃ？」

凜は聞いた。

「やっぱり知名度とかそういうのをあげていかないといけないだろ？それはラブライブ！にも影響していく」

「めんどくさい……………」

真姫は言った。

「そんなこと言わずに…ファイトだよ！」

「穂乃果もね…」

「ここがツツコンだ。」

「ははは……………」

「穂乃果……………」

「ことりと海未が言った。」

「さー！練習しようか！」

「はい！」

「あ、絵里、希、ちよつといいか？」

「どうしたん？」

「頼み事があるんやけどさー…俺たちがいない間、生徒会手伝ってくれる？」

「やっぱり…1年生だけだと心配ですの…」

「わかったわ…任せて！」

「了解しましたー！」

「ありがとう…絵里、希！」

「さ、練習に行きましょう！」

「よし！今日はこれぐらいにするか！」

「はい！」

「明日は2年生は早めに帰るので練習は参加できませんね…」

「そうだね…」

「わーい！沖縄だー！」

「あー真姫！」

「ん？なに？」

「生徒会のことなんだけど絵里と希が手伝ってくれるみたいだから」  
「わかったわ……」

「ま、あんまり仕事はないと思うけど……ははは」

「それなら練習は凜・花陽・にこちゃんだけになるわね」

「え……」

「3人だけ……」

「ま、私に任せときなさい！」

「それじゃ、みんなお疲れ様！」

「お疲れ様でしたー」

「じゃ、絵里、校門で待ってるから」

「わかったわ！」

校門……

「おー亜里沙ちゃんじゃん！」

「あ、ナオキさん！」

「あれ？そつちは……もしかして雪穂ちゃん？」

「は……はい……あ！ナオキさんってあのナオキさんだったんだ！」

「ああ…大きくなつたなー！雪穂ちゃんはどうして亜里沙ちゃんど？」

「私と亜里沙は仲がいいんです。これから穂むらに連れていこうって思ってたんです！  
ナオキさんも行きますか？」「そうだな…お婆さんにも挨拶したいしな…絵里も行くかな  
？」

「聞いてみる！おねえちやーん！」

「あら、亜里沙…来てたのね、雪穂ちゃんも…」

「はい！」

「なあ絵里、これから穂むら行かない？」

「いいわね！穂乃果を待ちましょ」

「あれ？絵里ちゃん、ナオキくん、先に帰ったんじゃ…あ！雪穂だー！」

「おねえちゃん遅いよー！」

「待つてたの？」

「これからみんなを穂むらに連れていこうって思ってたの」

「そうなの？ナオキくん、お母さんと会うの久しぶりじゃない？」

「そうだな…」

「よし！レッツゴー！」

穂乃果は走り出した。

「おい！穂乃果待てよー！」

「穂むら、久しぶりに来たな…」

「お母さん！」

「あら穂乃果、お帰りなさい」

「お邪魔しまーす」

絵里と亜里沙とナオキは言った。

「あら？ナオキくん？久しぶりねー」

「はい！おばさんもお久しぶりです！」

「ささ、入って入って…懐かしのほむまん食べさせてあげる」

「ありがとうございます！」

「はい、どうぞ！」

「ありがとう…雪穂ちゃん！……んー!!うめえー!!」

「お父さん！ナオキくん来たわよー」

穂乃果のお父さんは無言で手を出してグツ！としてから戻っていった。

「相変わらず無口だなー……あ、そうだ！おばさん、ほむまん買いに来たんだ！ひと箱頂戴！」



「まいどありー！」

「それではわたし達はこれで…」

「えー絵里ちゃん！もうちよつといてよー」

「おねえちゃんも修学旅行の準備でしょ！」

「はっ！そうだった！ナオキくんもしなきやダメだよ！」「お前もな……」

「お邪魔しましたー」

亜里沙は言った。

「バイバーイー！！」

穂乃果は言った。

「それじゃ、ナオキ、また明日ね！」

「ああ…また明日！亜里沙ちゃんもバイバイ！」

「バイバーイー！」

「さて、準備するか！」

ナオキは修学旅行の準備をするのであった。

次回へ続く

## 第19話「確認と出発」

前回の妄想物語！

ナオキはロシアから帰ってきた絵里の両親と再開！

そしてナオキたち2年生は修学旅行の準備をはじめたのだった！

キンコンカンコーン……

「ちゃんとしおり見て準備しろー！じゃあまた明日！」

先生が言った。

「はーい」

「ナオキくんはすぐ帰るの？」

穂乃果が聞いた。

「いや、おれは帰りちよつと買い物あるから」

ナオキは言った。

「奇遇ですね、実は私も買い物に行くんですよ」

海未は言った。

「へえー、何買うの？」

こことは聞いた。

「ふふっ……内緒ですよ……」

海未は指を口にあてて言った。

「えー」

「海未ちゃんのいけずー！」

こことりと穂乃果は言った。

「やー4人は仲がいいねー」

「ほんとだよー」

「青春だねー」

ヒデコ・フミコ・ミカは言った。

「ヒフミもな」

ナオキは言った。

「略すなつて何回言わせんの！」

ヒデコ・フミコ・ミカは声を合わせて言った。

「ほら、息ピツタリ……」

ナオキは言った。

「コラ、お前ら！早く帰れ！」

先生が7人に言った。

「はっ…はい！さようならー！」

7人はダツシユで帰った。

「ふうー…：疲れたー」

穂乃果は言った。

「穂乃果たち早いよ…：」

「流石…：」

「スクールアイドルやってるだけのことはあるね…：」

ヒデコ・フミコ・ミカは言った。

「じゃ、海未一緒に買い物行くか？」

「そうですね…：」

「じゃ、穂乃果、ことり、ヒフミまた明日！」

「また明日ねー！」

「バイバイ！」

「バイバーイ！あと……」

「略すな！」

最後にヒデコ・フミコ・ミカは声を合わせて言った。

「穂乃果……寝坊してはいけませんよ」

「わかつてるよー、海未ちゃーん」

「で……海未、何買うんだ？」

ナオキは歩きながら聞いた。

「それは………ナオキこそ何買うんですか？」

「内緒だ……」

ナオキは指を口にあてて言った。

「たくさん買うんですねー」

ナオキの持っている買い物カゴを見て海未が言った。

「ああ……沖繩とか中学以来だしな……そんなときに持っていたやつは全部大阪だ」

「そうなのですか……」

「海未はもう済んだのか？」

「はい！」

「買ったやつはどこにあるんだ？」

「カバンの中です」

「何買ったんだ？」

「えっ……と……」

「ん？」

海未は顔をそむけていった。

「笑いませんか？」

「モノによるな」

「と……トランプを買いました……」

「ん？別に普通じゃんか……無駄に隠すからびつくりしたわ……それじゃ、会計行つてくるわ」

そう言うとナオキはレジへむかった。

海未は店の入口で待っていた。

「お待たせー」

「いえ…」

「家まで送るよ…おばさんにも久しぶりに会いたいし」「そうですか…ありがとうございます  
ます…」

園田宅……

「やっぱりでけーな…道場は」

「ただいま帰りましたー」

「おじやます…」

「海未、おかえりなさい…あら…そちらの男の子は？」

海未のお母さんはナオキの方をむいた。

「お母様、覚えてませんか？ナオキですよ？よく遊んだ」「あー！あのナオキくん？お久  
しぶりねー」

「はい！お久しぶりです！」

「海未を送ってくれたの？」

「はい！おばさんにも会いたかったですし」



「嬉しいこと言ってくれるわねー」

「いえいえ、ではそろそろ帰りますね」

「はい、ありがとうね」

「じゃあ海未、また明日な」

「はい！また明日…寝坊してはいけませんよ…ふふっ…」

「ああ…」

「ナオキは笑いながらドアを閉めた。  
そしてナオキは帰路についた。」

「ただいまー……さあ、昼飯食べよ…」

「ナオキは昼飯を食べて準備をはじめた。」

「えーつと…歯磨きセットとヒゲそりセット、着替えの服とかパンツ…」

「ナオキはしおりを見ながら入念にチェックした。」

「あとしおりを入れて…つと…よし！これでいいだろう…やべ、もうこんな時間じゃ

ん…腹へったな…晩飯しよう…」

「ナオキが晩飯を作ろうとすると…」

「ピンポーン……」

「あれ、誰か来た？はい……あ、絵里じゃん！おかえり！」

「ただいま……」

「なんでおれんちに？」

「その……晩御飯作ってあげようって思ってた……」

「まじか！でも……亜里沙ちゃんは？」

「亜里沙は穂乃果の家に泊まりに行ったわ」

「そうなのか……ま、入って……」

「おじやまします……」

「はい、どうぞ……」

「ありがとうございます！いただきます！……んー！！おいしい！」「ありがとうございます……」

すると絵里は心配そうな顔で言った。

「ねえ……ナオキ……海未と帰ったって……ほんと？」

「ん？ああ……ほんとだけど？どうしたんだ？」

「うう……それは……」

絵里は少し涙目に言った。

「それは？」

「その…ナオキはわたしより、海未のこと好きなのかなーって……噂があったから……ナオキと海未が仲良くデートしたって……」

「いや…あれはデートじゃないよ！あれは2人とも買い物あったからついでに一緒に行ったんだよ」

「そのあと海未の家に行ったのは？」

「あれは女の子を1人で帰すのもあれだし、それにおばさんにも会いたかったから」  
「信じてもいいの？」

するとナオキは立ち上がって絵里の後ろから抱きついた。

「当たり前だ……おれが絵里以外の人を好きになるわけ無いだろ……おれは絵里を愛してる……」

絵里は顔をあかくした。

「もう…私がナオキを信じないとも思う？」

「まさか…騙したのか？」

「ふふっ……ええ……ナオキに愛してるって言って欲しかったから……」

「なんだよそれ……」

ナオキは顔をあかくして言った。

「ねえ…今日…泊まっていい？」

「別にいいけど…怖いのか？」

「そ…そんなんじゃないわよー」

「お風呂ありがとー」

「ああ……」

ナオキは風呂上がりの絵里に見とれてしまった。

「ん…どうしたの？」

「い……いや、別に……／＼／＼」

ナオキは顔をあかくして言った。

「じゃ、おれも入ってくるわ…」

「ええ……」

ナオキは急いでお風呂へむかった。

「（風呂上がりの絵里……）ああああああ!!」

「ふうー……」

「あら、もうあがったの？」

「ああ……こんなもんだろ？」

「はいわよ……」

2人は笑った。

「絵里はベッドで寝な、おれは布団しいて寝るから」

「えー……一緒に寝ましょうよー」

「わ……わかった……／＼／＼」

「じゃ、電気消すぞー」

「ナオキ……その……豆球にしてね？」

「えー、電気代もつたいないから消すぞ……」

「ちよつと……」

ナオキは電気を消した。

すると……

「いやー!!」

絵里はナオキに抱きついた。

「ちよつ……絵里!？」

「ナオキ知ってるでしょ？…私が…その…」

「…ああ…そう言えば絵里って暗いの苦手だったな…」

「思い出したなら早くつけてー！」

「わ…わかった…」

ナオキは電気をつけた。

「うう…ほんとうにつけた？」

「つけたよ…」

「…ふうー…ああ…ごめんなさい…抱きついちゃって…」

「いや…大丈夫だよ…」

「離すわね…」

するとナオキは絵里を抱きしめた。

絵里は顔をあかくした。

「ちよつと…ナオキ？／＼／＼」

「絵里…」

「どうしたのよ…もう…」

「かわいい…愛おしい…だから抱きしめた…それだけだ…」

「なによそれ…ふふつ…私もナオキを愛してるわよ…」

「ああ……」

「おやすみ……ナオキ……」

「おやすみ……絵里……」

そして朝……

「んー？朝か……」

ナオキは絵里をまだ抱きしめていた。

「かわいいな……ほんとうに……」

ナオキは絵里の髪をなでた。

「ん……？ナオキ？」

「おつ、起きたか絵里……おはよう……」

「おはよう……ずっとこうしてたの？」

「そうみたいだな……」

「朝ごはん作ってあげるからはやく準備して……」

「はーい」

「じゃ、行ってくるわ」

「ええ……気を付けてね」

「ああ……寂しくないか？」

「ナオキこそ……部屋一人なんでしょ？大丈夫？」

「ああ……男子俺だけだから仕方ねえな」

「寂しくなったら電話してもいいのよ？」

「絵里もな」

「じゃ、いつてきます」

「いつてらっしゃい」

そう言うとき絵里はナオキに抱きつき、頬にキスをした。

ナオキもお返しとばかりに絵里の頬にキスをした。

「おはようございます！」

「おーナオキ、おはよう！一番だな」

「そうなんですか？」

「流石生徒会長と言ったところか……」

「そんなことは……」

「先に乗っつけ、お前の席わかるだろ？」



「はい！」

ナオキはバスに乗り込んだ。

「えっと…俺の席は…先生の後ろの…ここだ！…一人…か…」

「おはようございます…」

「おつはよー！」

「おはよう」

「おー！海未・穂乃果・ことり！おはよう！」

そしてみんな集まった。

「よし！出発するぞー！」

先生は点呼をとると言った。

「はーい！」

ナオキたち2年生は修学旅行へ出発するのだった。

次回へ続く

## 第20話 「沖縄」

「やっと着いたー！」

ナオキは飛行機を降りると背伸びして言った。

「いやー景色最高だったねー」

「そうだねー」

「はい、とても綺麗でした！」

穂乃果・ことり・海未が話していた。

「ナオキくんも見たでしょう？」

穂乃果はナオキに聞いた。

「えーつと………見てない………」

ナオキは答えた。

「えー！見てないのー？」

穂乃果は驚いた。

「なんで？寝てたの？」

ことりは聞いた。

「いや……その……高いところが苦手だから……／＼／＼」

ナオキは照れながら答えた。

「そうだったんですか……ふふっ……」

海未はそれを聞くと笑った。

「ちよっ……笑うな！／＼／＼」

ナオキは顔をあかくして言った。

「ナオキくん顔あかいよ……ハハハ……」

「そうだよ……ふふふ……」

穂乃果とことりも言った。

「ちよっ……お前からまで……／＼／＼／＼」

「ナオキくん意外だねー」

「まさか高いところが苦手なんだー」

「だからずつと下向いてたんだねー」

ヒデコ・フミコ・ミカも言った。

「ヒフミまで……／＼／＼」

「略すな！」

ヒデコ・フミコ・ミカは声を合わせて言った。

「お前ら！早くしろー！」先生が言った。

「はーい！ほら行くぞ」

ナオキはそう言うのと走り出した。

「あー！ナオキくん逃げたなー！待てー！！」

穂乃果はそう言うのと走り出した。

その後に続いてみんなも走り出した。

そしてバスの中

「到着時刻は12時だ！ホテルに着いたらまずは各自部屋の鍵を貰って部屋に向かって荷物整理な！そのあと13時から昼飯を食べるからちやんとそれまでに食堂に来るよ  
うに！」

先生が言った。

「はーい！」

「いやー楽しみだねー！」

「そうだね！穂乃果ちゃん！」

「はしやぎすぎてはいけませんよ……ふふっ」

穂乃果とことりと海未は話した。

「着いたら何するー?」

「トランプしようよー!」

「その前に準備だよ…」

ヒデコとミカとフミコが話した。

ホテル…

ナオキの部屋…

「ここがおれの部屋かー………1人とか……泣きたい」

穂乃果・ことり・海未の部屋……

「わーい!ホテルの部屋だー!」

穂乃果ははしゃぐ。

「コラ、穂乃果!荷物の整理が先ですよ!」

海未は怒った。

「ごめんなさい……」

穂乃果はシユンとした。

「あはははは……」  
「ことりは笑う。」

ヒフミの部屋………略すな！byヒデコ・フミコ・ミカ  
「んー！やつと着いたねー」

ヒデコは言った。

「さつき誰かに略されたような気がするんだけど気のせいだね？」

ミカは言った。

「何言ってるのよ……とりあえず、荷物の整理！」

フミコは言った。

「そろそろむかうか……あ、雨降ってる……」

「ナオキが外を見ると雨が降り出していた。」

食堂……

「あー！ナオキくーん！」

穂乃果はナオキを見つけると言った。

「おー、ちゃんと整理したか？」

ナオキは聞いた。

「はい、ちゃんと私が見てましたよ」

海未は言った。

「それなら安心だな」

ナオキは笑って言った。

「はやく席につけー！」

先生が言った。

「あつ、はい！」

「もうナオキくん、園田さん、遅いよー」

フミコが言った。

「すまん…」

「すみません…」

ナオキと海未は言った。

「それじゃ、ナオキ、よろしく頼む」

先生が言った。

「はい」

ナオキは前に出た。

「それでは皆さん、移動お疲れ様でしたー！お昼ご飯楽しんで食べましょう！それでは……いただきますー！」

「いただきますー！」

食事後……

「えー、お前らに話があるから聞いてくれー」

先生が言った。

「ん？なに？」

穂乃果は言った。

「穂乃果ちゃん……ほつぺたにご飯ついてるよ……」

……ことが言った。

「えつと……今台風が近づいているから今日はこれから部屋で待機だ」

先生が言った。

「えー！！」

全員が声を合わせた。



穂乃果・海未・ことりの部屋……

「なんでこんな時にくるのー!!?」

穂乃果は叫んだ。

「台風直撃するみたいだね……」

ことりがスマホを見ていった。

「えー!!?海は?!?真夏の太陽は?!?」

穂乃果はことりに引っ付いて言った。

「諦めるしかないようですね……」

海未は小説を手にして言った。

「高校の修学旅行なのになー……」

ナオキは言った。

「こうなったら……それろー!!!」

外にむかって穂乃果は言った。

「何やってんだよ……」

ナオキは言った。

ぶるるるる……ぶるるるる……

「ん?…あ、絵里ちゃんからだ!もしもし?」

穂乃果は電話をとった。

「もしもし、穂乃果？ どう？ 楽しんでる？」

「なにそれ？ 嫌味？」

「ん？ なんで？」

「台風来てんだよー」

ナオキは大きな声で言った。

「あ…：そうだったの…：」

「で、なんのよう？」

「練習の時の仮のリーダーを決めておこうと思っただけ？ 私と希は凜がいいって思うんだけど4人はどう？」

「あ、ちよつとまってるね…：…ねえ、みんなー、凜ちゃんに仮のリーダーやらしてみたらダメかな？」

「大丈夫じゃね？」

「そうですね…：」

「それでいいと思うよ！」

「いいだつてー」

「じゃ、そうするわね！ バイバイ！」

「バイバーイ」

絢瀬宅……

「だつて希」

絵里は言った。

「えりち、ナオキくんと話したかつたんちやう？」

希は言った。

「もう……希つたら……」

「ほんとのことやん……ふふ……」

穂乃果・ことり・海未の部屋……

「暇だなー……海未、トランプしようぜ」

ナオキは言った。

「え？海未ちゃん、トランプ持つてるの？」

穂乃果は言った。

「いがーい！」

ことりは言った。

「わかりました！ババ抜きをしましょう！」  
海未はやる気満々で言った。

10分後……

穂乃果……5勝

ことり……2勝

ナオキ……3勝

海未……

0勝……

「次こそ……次こそ勝ちます!!」

海未は言った。

「うーっ……こっちな？」

ことりがそう言うと海未は笑顔になった。

「やっぱりこっち！」

ことりがそう言うと海未驚いた顔をした。(あの変顔です)

「なぜ勝てないのですか……」

海未はそう言うのとトランプを強く握った。

「じゃ、おれはそろそろ戻るわ!」

ナオキは立ち上がった。

「うん! また明日ー!!」

穂乃果は言った。

「おやすみー」

こことは言った。

「おやすみなさい……」

海未は言った。

「おやすみ!」

ナオキは言った。

ナオキの部屋……

「ふうー………台風か………修学旅行どうなるんだろ………でもこのままやったら多分飛行機とまるやろうな………」

ナオキは一人で言っていた。

「ナオキ、入っていいか？」

先生がドア越しに言ってきた。

「はい、いいですよ……どうしました？」

「ああ……実はな、飛行機がとまって帰れないんだ……」「やっぱりですか……」

「いつまでとまるかもわかんないんだよ……」

「え……（それじゃ、ライブが!）」

ぶるるるる……ぶるるるる……

「あら、ナオキだわ……もしもし、どうしたの？」

「すまんな絵里……実は飛行機がとまっちゃってさ、いつまた動くかわかんないんだよ」

「え？それじゃ、今度のライブは!？」

「ああ……多分無理だろうな……とりあえず、みんなに伝えてくれ……多分6人ですることになると思う……」

「わかったわ！気をつけてね？」

「ああ……」

「みんなにメールしなきゃ！」

『沖繩に台風が直撃したため、2年生はいつ帰ってくるかわからなくなったのでライブは一応6人ですることになってもいいように明日から練習します』  
「……………つと……………大丈夫かしら……………」

次回へ続く

## 第21話「Love Wing bell」

前回の妄想物語！

ナオキたち2年生は修学旅行で沖縄に！

ファツションショーにむけて仮のリーダーを凧に決めた！

だが台風が直撃して2年生はホテルの中に……………

ファツションショーは2年生抜きになりそうで……………

「えー!!凧がリーダー!?!」

凧は教室で叫んでいた。

「ええ…ナオキたちと合同意見よ」

絵里は言った。

「でも……………」

凧は下をむいた。



「意外ね…凜ならすぐ引き受けると思っただけど？」

「ここは言った。」

「だって…でも…」

凜は少し戸惑って言った。

「凜ちゃん…」

花陽は心配そうに言った。

「ねえ…凜？あなたならできるわ…ナオキたちもそう思ってたんだと思うわ

…だからその言葉、少しだけでも信じてみない？」

絵里は言った。

「……………わかった…やってみる……」

凜は言った。

みんな笑顔をうかべるが花陽は心配そうな顔をしていた。

練習後……

「どうしたの凜…今日は凜らしくなかったわよ？」

真姫は心配そうに聞いた。

「だって凜なんて……リーダーに相応しくないよ……」

凜は下をむいて言った。

すると真姫は凜の頭にチョップした。

「っ……何するにゃ!」

「あなた、自分のことそんな風に思ってたの?」

「だって……凜は……凜は……」

凜は涙目で言った。

「凜ちゃん……」

「ちゃんと穂乃果ちゃんが帰ってくるまではリーダーはするよ……でもその間だけだか

ら!」

そう言うと凜は走り出した。

「凜!」

「凜ちゃん!」

真姫と花陽は言った。

「どうしたのよ凜は……花陽は知ってる?」

「多分、凜ちゃん……あの時のこと……」

「え?」

花陽は真姫に凜の過去を話した。

そして時間は戻りナオキの部屋……

「そういや、凜の私服でスカートとか見たことないな……あの衣装大丈夫かな？」  
ナオキはそう言つて布団に入った。

そして朝……

「起床！起床！起きて食堂に集合！」

先生の放送が響く。

「ふぁー……もう朝か……」

ナオキは起きて食堂にむかった。

穂乃果・海未・ことりの部屋……

「穂乃果！はやく起きなさい！」

海未が穂乃果を起こしている。

「あと5分……」

穂乃果は寝ぼけている。

「穂乃果ちゃん……………」

「ことりが言った。」

「仕方ありませんね……………」

「そう言おうと海未は手刀を構えた。」

「海未ちゃん！ダメだよ！」

「ことりが止めた。」

「離してください！穂乃果を起こすんです!!」

「ふえ？朝?……………つて海未ちゃん!!」

「穂乃果……………!!」

「海未ちゃん……………ん!!」

「ん？何騒いでんだあいつら？」

「ナオキは言った。」

「食堂……………」

「ファミコおはよう！」

「おはよう！園田さんは？」

「さあ？なんか騒いでたけど……」

「おはようございます……」

「噂をすればなんとやらってやつか……なに騒いでたんだ？」

「穂乃果が起きなかつたので……」

「大体わかつた……」

「穂乃果は相変わらずだねー」

フミコとナオキは笑った。

「そーいやまだ台風おんの？」

ナオキは言った。

「うん……明日には晴れると思うけど……」

フミコは言った。

「凜たち……大丈夫でしょうか？」

「そう……だな……」

ナオキは心配そうにしていた。

音ノ木坂学院……

「この衣装を着るの？」

「ええ…ナオキがね、ファッションショーの人がセンターはこれを着てくれて言ってきたんだって…」

「へー、可愛いじゃない?」

そう言う先には指定された花嫁衣装をモチーフにした衣装があった。

「ハハハ…ハハハハハハ!!」

凜が急に笑いだした。

「どうしたのよ凜?」

「ここが聞いた。

「シャーーーーー!!」

「うわあ!」

「凜が壊れた!!」

沖縄…

穂乃果・海未・ことりの部屋…

「もしもし絵里ちゃん?練習はどう?」

穂乃果は絵里に電話をかけていた。

「ええ…順調よ、センターは花陽になったわ」

「え？花陽ちゃんが？……」

「どうしたの？」

「ううん、なんでもない！練習頑張ってる！」

そして穂乃果はなにかを考え込んだ。

ナオキの部屋……

「絵里、どうした？」

絵里から電話がかかってきて絵里と話すナオキ。

「実はね、センターは花陽になったのよ……」

「え、なんでだ？凜って言ったじゃん……」

「ごめんなさい……でも凜……結構嫌がってたから……」

「そう……なのか……」

「そういえばナオキ、そっちはどう？」

「い、いやーまだ台風がいるみたいだ（笑）はやく帰って絵里に会いたいな……」

「もう……私もよ……」

「ああ……じゃ、ファッションショー頑張れよ！」

「ええ！」

そしてナオキもまたなにかを考え込んだ。

「真姫なら知ってるかな……」

ナオキは真姫に電話をかけた。

「もしもし？」

「あー真姫か、時間いいか？」

「別にいいけど……」

「ならよかった……凧のことなんだが……」

「うん……」

「なんで断ったかわかるか？」

「なんで私？花陽にすれば……」

「花陽には穂乃果が電話をかけてると思う……」

「わかるの？」

「なんとなく……」

「わかった……話すわ……この前花陽から教えてもらったことなんだけど……」

凧が小学生の時……

「凧ちゃん！そのスカートかわいいよ！」



花陽（小学生）が言った。

「えへへー！昨日買ってもらったんだー！」

そう言うのと凜はくるつとまわった。

するとそこへ男子が現れた。

「あー！星空がスカート履いてる！」

ケンタが言った。

「ほんとだー」

コウジが言った。

「らしくねーな！」

クウタロウが言った。

「ちよつと……クケコくんたち……」

花陽が恐る恐る言った。

「略すんじゃないー！」

クウタロウ・ケンタ・コウジが声を合わせていった。

「よし！学校まで競争だー！」

クケコは走って行った。

「凜……着替えてくる!!」

「凜ちゃん!!」

凜は走って帰った。

そしてその日はズボンを履いて再び登校してきた。

「……………つていうことらしいの」

「そういうことか……………てかクケコつて…………」

「なぜか多いわよね…………略される人たちつて…………つて!そんなことはどうでもよくて!」

「あーすまんすまん…………」

「だから凜はずっと女の子っぽい格好は似合わないって、そして凜にはリーダーなんてふさわしくないってまで…………」

「そうなのか……………ありがとうな真姫」

「いいのよ別に…………」

「フアツションショー頑張れよ」

「わかってるわよ」そして電話をきった。

「……………そういうことかよ…………」

ナオキは窓の外を見た。

ロビー……

「なんだそういうことなの……」

「うん……凜ちゃん嫌がってたから私……」

穂乃果は花陽と電話をしていた。

「穂乃果ちゃん……私……どうしたら……」

「そうだね……でもそれは花陽ちゃんが決めることだよ……」

「私が？」

「うん！（わかってるでしょ、花陽ちゃんなら……）」

「……わかった！ありがとう穂乃果ちゃん！」

そして電話をきった。

「花陽ちゃん！フアイトだよ！」

穂乃果は空を見て言った。

そしてフアツションショー当日……

沖繩……

「あ！晴れてるー!!」

穂乃果は叫んだ。

「ほんとだー！」

「こつりは言った。

「よかつたですわね……」

海未は言った。

「今日はファッションショーか……」

ナオキは言った。

「そうだね……」

「うん……」

「うまく……いくといいのですが……」

「ああ……」

4人は話していた。

「花陽ちゃん……どうするんだろう？」

穂乃果は言った。

「わかるだろ？」

ナオキは言った。

「ええ……花陽が、sに入ったときと同じですよ……」

海未は言った。

「そっか！」

そしてファッションショー会場…

花陽は凜と真姫に背中を押されて、sに入った…花陽と真姫はあのとときと同じように凜の背中を押した…

「わかった！凜！これ着るよ！」

「凜ちゃん!!」

「ふふっ…」

「かよちゃんも真姫ちゃんも大好きにやー！」

凜は2人に抱きついた。

そして本番の時…

「えー…みなさん、こんにちは！私たちは音ノ木坂学院のスクールアイドル、sです！今日は3名が出られないため6人で歌います！出られない3人と、サポートの人の分まで歌います！聞いてください！『Love wing bell』」  
そしてファッションショーは大成功した。

沖繩……………

「いやー遊んだねー……………」

「穂乃果ははしやぎすぎです……………」

「アハハハハ……………」

「おれはもう疲れた……………ん？絵里から電話だ……………もしもし？」

「ナオキ！大成功したわよ！」

「おーマジか！凜は？」

「ええ…ちやんとあの衣装でセンターをしたわよ！」

「そうか……………よかった！じゃ、お疲れ様！」

電話をきった。

「凜がセンター！そして大成功だつてよ！」

「やったー！」

穂乃果・海未・ことりは声を合わせていった。

「じゃ、お土産買っていくか！」

そして4人はお土産を探した。

そして空港……

「ナオキは絵里になにを買ったんですか？」

海未は聞いた。

「な……なんでもいいだろ……／＼／＼／＼」

ナオキは顔をあかくした。

「あー照れてるー!!」

穂乃果は言った。

「穂乃果ちゃんケータイ鳴ってるよ？」

「……」

「あ、ほんとだ!……:凛ちゃんからメールだ!」

「おっ……:内容は？」

「えつとねー……:」

「大成功にや!!」

「だって……:集合写真も貼ってる!」

「へー……まだ絵里がスカウトされてる……」

「ほんとだ……」

「さすが絵里ですね……」

「穂乃果、おれたちの写真も送ってやったらどうだ？」「そうだね！」

凜の家……

「あ！穂乃果ちゃんからメールだ！」

「大成功おめでとう！可愛かったよ！お土産買ったから楽しみにしててね！あと写真貼っておくから！」

「ぷぷぷ……」

凜は写真を見て笑った。

そして凜は可愛い服を着て出かけて行った。

「こんな私さえも……へんしんにゃ!!」

「あー……やっと帰ってこれた……」



ナオキはマンションの廊下を歩いていった。

「久しぶりだなーここに入るのは……あれ？鍵あいてる？……ただいまー……誰もいない？絵里がいると思ったんだが……でもリビング電気ついてら……」

ナオキは部屋に荷物を置いてリビングにむかった。

「ただいまー……あ……」

「スー……スー……」

ナオキが入ると絵里が机で寝ていた。

「なんだよ……寝てんのか……寝顔、かわいいな……」

ナオキは絵里の顔をのぞいた。

「スー……ナオキ……」

「……っ／＼／」

ナオキは顔をあかくした。

そして絵里の隣に座った。

「ただいま……絵里……」

ナオキは絵里の頭を撫でた。

「ん……ナオキ？……」

「あ、起こしたか？」

「ナオキ！おかえり!!」

すると絵里はナオキに抱きついた。

「おっと！」

ナオキは絵里を抱きしめた。

「もう……遅いわよ……」

「ごめんごめん……」

ナオキは絵里の頭を撫でた。

「ふふっ……さみしかった？」

「ああ……」

「私もよ……」

「亜里沙ちゃんは？」

「ウチにいるわ」

「そうか……帰らなくてもいいのか？」

「ええ……亜里沙が別にいいって……」

「そうか……一緒に寝るか？」

「うん！」

ナオキの部屋

「てか絵里明日学校だろ？おれらは休みだけど…」

「わかってるわよ…朝になったら帰るから」

「ああ…：わかった」

「じゃ、おやすみなさい…：」

「ああ…おやすみ…」

そしてナオキと絵里は寝付いたのだった。

次回へ続く

## 第22話 「大事なお土産」

朝……

「ん？絵里いないな……」

ナオキが起きると隣に絵里はいなかった。

リビングへ行くと机の上にはメモとご飯があった。

「おはようナオキ！よく眠れた？」ご飯作っておいしかったからあたたためて食べてね！

絵里より」

「食べるか」

ナオキは「ご飯を食べるのだった。」

音ノ木坂学院……

「やっと終わったにやー！」

凜は授業が終わって喜んでた。

「ほら、練習行くわよ」

真姫が言った。

「うん！」

花陽は言った。

「あ、凜やることあるから先いつてて！」

「わかった！」

屋上……

「凜……遅いな……」

ナオキは言った。

「そうですね……先に始めますか？」

海未は言った。

「そうだな……ほんならみんなストレッチ！」

「はい！」

みんながストレッチしているとドアが開いた。

「あー凜来たか…おせー……よ……」

ナオキは驚いた目をした。

そしてみんなの顔に笑顔が浮かぶ。

その理由は……

「どうかにや？練習着変えてみたんだ…」

凜は少し照れながら言った。

「おー！」

「似合ってるじゃないですか…」

「凜ちゃんかわいい！」

「似合ってるわよ…」

「凜ちゃんらしいやん…」

「ハラシヨー！」

「凜……！」

「凜ちゃん……！」

「さあ！今日も練習……いつくにやー！！」

凜が叫んだ。

「とりあえずストレッチ」

「……わかったにゃ！」

「ストレッチ終わったら1曲通すぞー」

「はい」

ナオキの手拍子に合わせて、1曲踊った。

そして部屋……

「それじゃ、次のライブのこと話すからなー」

「はい！」

「sはお土産を食べながら話をしていた。」

「次のライブはここでする」

「ここで？」

穂乃果が言った。

「ああ……曲は『それは僕たちの奇跡』『ユメノトビラ』『僕らのL I V E 君とのL I F E』だ」

「3曲だけですか？」

海未が言った。

「ああ……だがここからがすごいんだよ！今回のライブは『それは僕たちの奇跡』のPVを撮影する！しかも音ノ木の生徒もエキストラで参加してもらおう」

「えー！」

「す……すごいです！」

「こ」と花陽は言った。

「ま、構造としてはメインを体育館で撮るんだけど……繋ぎの映像は各自で撮るからな」

「各自で？」

真姫は言った。

「ああ……例えば……真姫がピアノを弾いてるところを撮るとかな」

「なら凜は水遊びするにやー!!」

凜は立ち上がって言った。

「ならうちは神田明神で巫女服で撮ろかなー」

希は言った。

「その撮影、面白そうね」

「こ」は言った。

「私はどんなのにしようかしら？」



絵里は言った。

「ま、本番はまだだからみんな明日までに考えといてくれ」

「はい！」

「次はハロウィンイベントのことだ」

「ハロウィンイベント？」

穂乃果は言った。

「ああ……今詳しいところを決めるとこなんだけど、アキバをハロウィンストリートにするんだ！その最終日にライブだ！」

「しかもそれには……」

絵里が言った。

「A—R—I—S—Eもでるんだよね……」

花陽が言った。

「ああ……多分その日の注目はA—R—I—S—Eにむくだろう……」ナオキが言った。

「そんな……」

「でも、仕方ありませんね……」

「ことりと海未は言った。」

「ま、今は次のライブに集中しよう！」

「はい！」

「じゃ、今日は解散だ！」

「お疲れ様でしたー」

校門……

「ナオキー！お待たせー！」

「いや全然待ってないよ」

「じゃ、帰りましょー！」

「ああ」

「……………」

「どうしたんだ？」

「むう……………」

絵里は手をもじもじさせながら膨れていた。

「……………ああ…なるほど…はい」

ナオキは手を広げた。

「うん！」

絵里は笑顔でナオキの手を握った。

そして2人は帰って行った。

「ククク……なによ絵里……結構甘えん坊じゃない……」にこは言った。

「そうみたいやね……」

希は言った。

帰り道……

「そうだ絵里、お土産があるんだ」

「え？それならちんすこうが……」

「いや……その……絵里個人にだ……」

ナオキは顔をあかくしていった。

「そうなの？嬉しい！」

絵里は目をキラキラさせて言った。

ナオキはカバンから袋を取り出した。

「はい」

「ありがとう！」

そう言うと絵里は早速袋を開けはじめた。

「これは……」

『誓いの石』らしい……」

「誓いの石？」

「ああ……何種類かあったんだがな」

「これは……ピンク色と水色ね……意味ってあるの？」「あ……ああ……それは……」

ナオキは顔をあかくして斜め上をむいて照れながら言った。

「それは？」

「片方は絵里のイメージカラー……もうひとつは……」「もう……ひとつは？」

「誰よりも……愛する……」

「そ……そう……」

絵里は顔をあかくしていった。

「ずっと……愛してるから……」

「うん……」

そう言うと絵里はナオキに寄り添った。

次回へ続く

## 第23話「PV撮影」

前回の妄想物語！

修学旅行から帰ってきたナオキたち2年生！

そして凜は練習着を変えて練習にのぞんだ！

そして次のライブは体育館ですること！

そして『それは僕たちの奇跡』はPVも撮影することになった！

そしてナオキは絵里に誓いの石を渡したのだった……

絢瀬宅……

絵里は自分の部屋で御機嫌だった。鼻歌までうたっていた。

「『誓いの石』……か……ふふっ……ナオキったら／／／／」絵里は呟いた。

翌日、3年生教室……

「えりちどうしたん？御機嫌やねー」

「そうよ……なにかあったの？」

絵里が御機嫌だったので希とにこが話しかけた。

「ナオキにお土産貰ったのー」

（やはりか……）希とにこは思った。

「何貰ったん？」

「えつとー……『誓いの石』」

「ふーんどんなの？」

「えつとね、水色とピンク色でね、水色は私のイメージカラーでピンクは『誰よりも愛する』だって……」

「へー、ナオキにしてはいいセンスしてるじゃない……ね、希？」

「うーん……」

にこが聞いたが希は考え込んでいた。

「希、どうしたの？」

絵里が聞いた。

「えつと……その色の組み合わせは……」

「組み合わせ？それがどうしたの？」

「……ううん……なんでもない！えりち！大切にしいや！」

「え……ええ……（なにかあるのかな？）」

生徒会室……

「じゃ、今日の会議はここまで！お疲れ様」

「お疲れ様でしたー」

「あー真姫、マチコさん！」

「ん？」

「どうしたんですか？」

「俺たちがいないあいだありがとうな」

「いえいえ！お土産までいただいて、ありがとうございます！」

「こちらこそ！じゃ、お疲れ」

「お疲れ様です！」

部室……

「じゃ、今日は3曲の練習するからな、それとそれが終わったらPVのこと聞くからな  
「はーい」

## 屋上

「まずはストレッチからー」

「はい！」

「ねえ、ナオキ……」

「ん？どうした絵里……」

「ストレッチ……」

「……ああーそっか、わかったよ」

ナオキは絵里とペアを組んでストレッチをすることになった。

「やっぱり絵里は伸びるなー」

「でっしよー、伊達にバレエやってないわよ」

「あーそういうやよく見たなー…確かにバレエの絵里は輝いてた…見惚れちゃったぞ」

「もうなによ急に／＼／＼」

絵里は顔をあかくした。

「今もだ……」

「うん……」

「たしかおれが東京離れた時、絵里はロシアに行ったんだったよな？」

「そうよ」



「バレエしてた？」

「ええ…でもねコンクールで負けちゃってね…あの時は悔しかったな…でも、今も踊ってるってバレエしてた時と同じぐらい楽しいの…いえ…今の方が…楽しいかな？」

「絵里……」

「ちよつとお二人さーん！なにラブラブしてるんやー？」希が言ってきた。

絵里とナオキは顔をあかくした。

「よし！まずは『僕らのL I V E 君とのL I F E』からだ！」

「はい！」

そしてナオキは音楽を鳴らした。

（やっぱりこの曲はいいよな……）

「次は『ユメノトビラ』」

「はい！」

（これもいいよな……）

「ラストは『それは僕たちの奇跡』」

「はい！」

（これもハラショー！ライブが楽しみだ……）

「僕たちの季節ー」

「はい！お疲れ様！」

そう言うともみんな倒れ込んだ。

「ちよつときつかつたか？すまん」

「もう……容赦ないですね……」

海未は言った。

「海末ちゃんの夏の合宿のメニューぐらい厳しいよー……やってないけど」

穂乃果が言った。

「それじゃ、部室に戻ろうか」

「はい！」

部室………

「さて、早速だがみんなPVのあれ決まったか？」

「穂乃果は走る！」

「私は弓道で」

「私は衣装の試着！」

「わ…私は白米を！」

「凜は水遊び！」

「わ…私はピアノ」

「ここはストロークわえてるところにこ！」

「ウチは巫女服や」

「私はバレエ…」

「うーん……絵里かえていいか？」

「ダメ？」

絵里が甘えた顔で言ってきた。

（かわいいがこは……）

「いや、絵里は水着の方がいいと思うんだ！」

「たしかにえりちはスタイルいいしねー……」

「希までー……うう……わかつたわ！わ…わたし……やるわ！」

「じゃ、それを明日撮るからなー」

「はーい！」

帰り道……

「ナオキ……」

「ん？」

「水着……どんなのがいい？」

「なんでおれに……」

「ナオキが決めたんでしょ？」

「そうだなー……」

「とりあえずうちに来て」

「わかった」

絢瀬宅……

「どれがいい？」

ナオキは目を疑った。

なぜならナオキの目の前には絵里の水着が並べられたからだ……

（早く決めないと死ぬ！）

「えつと……これ！」

「ハラシヨー！流石ナオキ！」

ナオキが選んだのは白の上にピンクと白の下のやつだった。

「早くみたいなー」

「もう……また海に行きましようね？」

「お、おう……じゃ帰るわ！また明日！」

「ええ……また明日！」

翌日……

桜の道で走る穂乃果（桜はCG）

「よし！穂乃果OK！」

「楽しかったー！」

弓道の練習終わりで汗をぬぐう海未

「海未OK！」

「少し恥ずかしいです……」

衣装を作って試着することり

「ことりOK！」

「この衣装で踊りたいなー」

風が入ってくる音楽室でピアノを弾く真姫

「真姫OK！」

「気持ちいいわね……」

水遊びする凜（ナオキにかけた。）

「凜OK……」

「楽しかったにゃー！」

白米をほうばる花陽

「うーん……合わないな……」

「そうですか？」

「そうだなー……こんなのどうだ？」

傘をさして「あ、晴れたよー」のごとく振り向く花陽

「OK！」

「ありがとうございます！」

神田明神で空を見上げる希

「希OK！」

「当たり前やん！」

座ってストローを口にくわえてウイंकするにこ

「にこOK！」

「あつたりまえよ！」

水着の絵里

「まだかー」

「まって……まだ心の準備が……」

(これいいかも……)

「絵里、おれむこうに行ってるから準備できたら言ってくれ」

「わかった……」

ナオキはむこうに行くふりをしてすぐ戻った。

絵里は後ろをむいている。

「絵里……」

「ちよつと……もう……」

絵里は胸を隠してムスツとした。

「いいねー！ハラシヨー！」

「え？……もう……バカ……／／／」

PV撮影後……

「よし！みんなお疲れ！いいのが撮れたよ！あとはライブだけだ！」

「はい！」

「よし！解散！」

帰り道……

「もう……ナオキのバカ……」

絵里は涙目で言った。

「すまんすまん……」

「でもこれでよかったのよね？」

「ああ……バツチリだ！」

「わかった……」

「完成を楽しみにしといてくれ！」

「それじゃ、また明日ね」

「ああ、また明日」

明日から体育館で準備へ取り掛かるのだった！

次回へ続く……



## 第24話「それは僕たちの奇跡」

「それはこつち！あ、もうちよい右！」

明後日はライブ当日にナオキたちは体育館で準備をしていた。

「ナオキ先輩！これぐらいですか？」

マチコは聞いた。

「ああ！それでOKだ！」

「マイクテストー、マイクテストー、ナオキくんOKなら合図頂戴！」

ナオキは頭上で手を丸にした。

「よし！準備完了だ！ありがとう！」

明日のリハもよろしく！」

「はい」

「さ、屋上に行くか……」

ナオキは屋上へむかった。

屋上……

「あ、音楽が聞こえる…みんなもうやってるか」

ナオキは階段を登っていた。

「邪魔しないように開けなきゃな…」

ナオキはそつとドアを開けた。

「いまこゝでー出会えた奇跡

忘れないでー僕たちの季節ー」

パチパチパチパチパチ……

ナオキは拍手をした。

「あ、ナオキくん来てたんだけ！」

穂乃果は言った。

「おう！ー一番よかったぞ！」

ナオキは言った。

「当然よー」にこは自慢げに言った。

「明日はリハーサルだし、今日は終わりにしようか」

「はいー！」

翌日……………

「わぁー！すごい!!」

穂乃果は体育館の光景をみて声をあげた。

「さ、リハーサルだ!」

「はい!」

「本番通りに行くからな!まずは『僕らのL I V E 君とのL I F E』だ!」

そしてリハーサルも難なく終わった。

部室……………

「それじゃ明日の流れをもう一度確認するぞ」

「はい!」

「最初の曲は『僕らのL I V E 君とのL I F E』だ、そして『ユメノトビラ』、ラストに『それは僕たちの奇跡』P V撮影も兼ねてる。そして衣装は曲ごとに変える。あいだの繋ぎは任しとけ!」

「わかった!」

穂乃果は言った。

「よし！家に帰ってちゃんと寝ろよー」

「はーい」

帰り道……

「ねえナオキ……」

「ん？」

「……ううん……なんでもない……」

「なんかあるだろ？」

「ないってば……」

絵里は言った。

「そっか……何かあったらなんでもおれに言ってくれ……力になってやる」

「ありがとう……」

「じゃ、また明日な」

「ええ……」

ナオキは自分の部屋へと入って行った。

「ナオキ……なんで名字を言わないんだろう……部屋のふだもナオキだし……」  
絵里は疑問をもっていた。

翌日……音ノ木坂学院……

「体育館特別席の方はこちらです」

「ビューイング席はこちらです」

「この分なら満員になりそうですね」

「うん！」

ヒフミたちは客の整理をしていた。

ライブ30分前……

控え室……

「よし！みんな準備は出来てるか？」

「はい！」

「席は無事満席だ！絶対成功させよう！」

「はい！」

「軽く通そうか？」

「うん！」

穂乃果は言った。

μ sは軽く今日の曲を通した。

「本番10分前でーす！」

「よし！みんな準備は出来てるな？」

「はい！」

そして円陣を組む！

「いち！」

「に！」

「さん！」

「よん！」

「ご！」

「ろく！」

「なな！」

「はち！」

「きゅう！」

「じゅー！」

「μ s！ミュージック……スタート!!」

本番……

『僕らのLIVE 君とのLIFE』のイントロが流れると歓声がわいた。

今回のライブは体育館特別席と講堂のスクリーンを通してのライブビューイングで行っている。

たった3曲だがラストの『それは僕たちの奇跡』では公開PV撮影も行おうのだ！

「ゆずらない瞳がく大好き……」

「ダイスキ！」

「パチパチパチパチパチ……」

「まずは『僕らのLIVE 君とのLIFE』を聞いてもらいました！」

穂乃果が言った。

「この曲は私達9人の初めての曲……オーブンキャンパスで初披露した曲です！」

絵里は言った。

「そして……私達μ sはラブライブ！予選決勝に進出することができました！」

「ことりが言った。

「これもみなさんの応援のおかげです！ありがとうございます！」

「ありがとうございますー！」

海未が言うのとみんなが声を合わせて言った。

「ほな！次の曲のために着替えに行こかー！」

希は言った。

「いっくにゃーー！！」

凜は言った。

「お……お待ちください！」

花陽は言った。

「にっこにっこにー♪」

にこが言った。

「イミワカンナイ……」

真姫が言った。

そして一旦着替えに行った。

するとナオキが出てきた。



「はい、*μs*が着替えてるあいだに少し休憩…ブレードやサイリウムをにおいて……みんなで楽しく笑いましょう！やってくれるのは……ヒフミの皆さんです！」

「どうもーヒデコですー！」

「フミコですー！」

「ミカですー！」

「3人合わせてヒフミですー！」

突如始まったので一同哑然するがネタには大笑い！

「ヒデコ・フミコ・ミカ!？」

穂乃果が言った。

「なにあれ……ハハハハハ」

こつりが言った。

「はやく着替えますよー！」

海未が言った。

「ありがとうございますー！」

パチパチパチパチパチ……

「はい、ヒフミの皆さん、ありがとうございます！それでは皆さん、お待ちせしました！2曲目の準備ができました！それでは……暗転！」

電気が消え、『ユメノトビラ』のイントロが始まると電気がついて歓声がわいた。

「ユメノトビラくずっと探し続けた」

「君と僕との」

「繋がりを探しくて……」

「青春のプロローグ……」

パチパチパチパチ……

「ありがとうございます！」

「……」

「この曲はみんなで合宿に行つて作つた曲です！」

海未は言った。

「ラブライブ！の予選に挑んだ曲です！」

真姫は言った。

「みなさん、予選は見てくれましたかー？」

穂乃果は言った。

すると歓声かわいた。

「ハラショー！」

絵里が言った。

「あ…ありがとうございます！」

花陽は言った。

「でもー残念なお知らせがあるにこー」

にこが言った。

「このライブは次の曲で終わりなん…」

希が言った。

「えー…」

「でも…次の曲『それは僕たちの奇跡』ではPV撮影をしちやいまーす！」

にこが言った。

すると歓声かわいた。

「では準備してくるのでみんな待っててねー」

ことが言った。

そして、sは着替えに行った。

そしてナオキが出てきた。

「はい、それでは準備に入りますので少々お待ちください！」

ステージではみんな準備で大忙し。

5分後……

「それではお待ちせしました！公開PV撮影！『それは僕たちの奇跡』！」

するとステージ上には音ノ木の生徒が、そしてステージの下に、sが出てきた。

歓声がわいた。

電気が消え……

「さあ……夢を叶えるのはみんなの勇気」

「負けない」

「心で」

「明日へ駆けて行く」

ライトはみんなのイメージカラーだ。

後ろでは音ノ木の生徒が踊っている。

「今ここで出会えた奇跡

忘れないで僕たちの季節」

曲が終わると歓声がわいた。

「みなさん！今日はありがとうございました！私達はハロウィンイベントでもライブを  
やります！みなさん！見てくださいねー！！」

そしてライブは終わった……

「ふう……あとは編集か……」

ナオキは言った。

部室……

「お疲れ様ー！！」

みんなが声を合わせて言った。

「曲は少なかつたけど、すつごく楽しかつたねー！！」

穂乃果は言った。

「そうだね！」

ことりは言った。

「緊張しました……」

海未は言った。

「そうだね……」

花陽は言った。

「そう？ 私はそんなことないけど」

真姫は言った。

「えー、真姫ちゃん控え室で手に人の字書いて食べてたにやー」

凜はいたずらげに言った。

「ちゃんとカメラに撮ってあるからねー！」

にこは言った。

「もう……にこつち……あとで頂戴ね……」

希はぼそつと言った。

「トラナイデー！」

真姫は言った。

みんな笑った。

「うふふ……まあまあ……」

絵里は言った。

「よし！みんな今日は家に帰って早く寝ろよー。明日は練習休みにするからなー」

「はーい」

帰り道……

「あれ？えりち、ナオキくんは？」

「ナオキなら部室で作業してるわよ？」

「一緒におらんくていいの？」

「ええ……」

「もしかしてえりち……ナオキくんにご飯作って待つてようとか思ってるんちゃう？」

「もう……からかわないでよー」

「ほんとうは？」

「……まあ作るけど……／＼／＼」

絵里は顔をあかくした。

部室……

「よし！完成！……やべ、もうこんな時間か……帰ろ……その前にみんなにメール……」

「今日はお疲れ様！『それは僕たちの奇跡』のPVが無事に完成しました！

今日の夜にアップするのでみんな見てねー

ナオキ」

「……送信つと……よし、帰るか……」

ナオキ宅

「ただいまー」

「おかえりなさい！」

「おー絵里どうしたんだ？」

「ご飯作ってあげようと思つてね」

「ありがとう……亜里沙ちゃんは？」

「亜里沙ならうちで寝てるわよ」

「そっか……もうそんな時間か……」



「さ、はやくはやく!」

「わかったから引つ張るなって……」

「いただきまーす!!」

ナオキは勢いよく絵里の手料理を食べた。

「おいしい?」

「ああ!おいしいよ!」

「それならよかった……」

「ごちそうさまでした!」

「はやかったわね……ふふっ……」

ナオキと絵里は食器を洗っていた。

「ねえ……ナオキ……」

「ん?」

「その……明日、デートに行かない?」

「え……いいの!?!」

「いいに決まってるでしょ……私達……付き合ってるんだから……／＼／＼」

「そっか……なら付き合っただけで初めてのデートだな!」「そ……そうね……」

「どこがいい? 絵里の行きたいところでもいいよ」

「そうね……ショッピングモールに行きましょう!」

「わかった!」

そして『それは僕たちの奇跡』をアップし終わってナオキは絵里と一緒に見ていた。

「ハラシヨォー!」

「だろ?」

「あ、私のところだ……あのときはびっくりしたわ……」 「ごめん(笑)」

「じゃあ……絵里、明日むかえに行くからな」

「ええ……また明日……」

「ああ……また明日!」

絢瀬宅……

「ナオキとの初デート何着ていこうかしら……うふふ……」

ナオキ宅……

「なに着ていこうかな…ファツションとかおれ分かんねーし……」

ナオキは悩んでいた。

「でも……絵里とデートか………／／／／」

ナオキは顔をあかくした。

ぶるるるる……ぶるるるる……

「電話？こんな時間に……この番号は………」

ナオキはいやいや電話に出た。

「なんのようだ？」

「ひどいなージャーナ……おれの名前覚えてるか？」

「ああ……ミツヒデ……『香川ミツヒデ』……」

「覚えててくれたんだねー、嬉しいよ……」

『香川ナオキ』くん…」

「フルネームで呼ぶな！」

「おー怖い怖い…なんで呼んじやいけないのかな？同じ『香川』じやないか…」

「お前みたいなのやつと一緒にの名字なんて嫌なんだよ」

「そうだったのか…まあいい…ありがとうな…退学してくれて…」

「……っ!!」

「ジャーナが退学してくれたおかげで会長になれたよ……」

「用件はそれだけか？」

「まだあるんだよ…君なら知ってるだろ？おれの学校…『大坂学園』がラブライブ！の予

選決勝に進んだこと…」  
「ああ……お前の学校になんて負けねえよ…おれたち<sup>μ</sup>sは

……」

「ハハハ！お前らにあのA—RISEに勝ると？ついに頭までいかれちゃったか？」

「いまに見てろよ……おれたちは必ずA―RISEに勝つ！そしてお前たちにも勝つて……優勝してやる！」

「のぞむところだ……楽しみだな……また会えるのが」

「もう電話してくんなよ……」

「どうしよつかない、考えておくよ……じゃあな……ジャーナ……」

そして電話はきれた。

「はあ……嫌な声を聞いた……早く寝よう、明日はデートだ……」

ナオキは寝付いたのだった。

次回へ続く……

## 妄想外伝「キャラ紹介」

香川ナオキ……主人公。

高校2年生。

昔は東京にいたが大阪に引っ越す。

その後大坂学園にいたが退学し、音ノ木坂学院に模擬男子生徒として転入した。

絵里・穂乃果・海未・ことり・真姫とは幼なじみ。

絵里とは同じマンションで部屋は3部屋しか離れていない。

音ノ木坂学院の生徒会長！

『香川』という名字はあまり名乗らない。

絵里と付き合っている。

μ'sのサポート役、10人目のメンバー！

絢瀬絵里……高校3年生。

ナオキとは幼なじみ。

ナオキのことは『ナオキ』と呼ぶ。

ナオキが大阪に引っ越したときにロシアに行っていた。だけどすぐに帰ってきた。

音ノ木坂学院の元生徒会長！

ナオキと付き合っている。

μ, sのメンバー！

高坂穂乃果……高校2年生。

海未・ことり・ナオキとは幼なじみ。

地元の和菓子屋『穂むら』の娘。

μ, sのリーダー！

ナオキのことは『ナオキくん』と呼ぶ。

園田海未……高校2年生。

穂乃果・ことり・ナオキとは幼なじみ。

園田道場の娘。大和撫子という言葉が似合う。

音ノ木坂学院の生徒会副会長。

μ, sのメンバー！作詞担当。

ナオキのことは『ナオキ』と呼ぶ。

南ことり……高校2年生。

穂乃果・海未・ナオキとは幼なじみ。

音ノ木坂学院理事長の娘。

μ, sのメンバー！衣装担当。

ナオキのことは『ナオキくん』と呼ぶ。

星空凜……高校1年生。

花陽とは幼なじみ。

『にゃー』が語尾につくことが多い。

μ, sのメンバー！

運動神経は全国のスクールアイドルでもトップクラス！

ナオキのことは『ナオキくん』と呼ぶ。

小泉花陽……高校1年生。

凜とは幼なじみ。

白米大好き！

μ, sのメンバー！アイドルにかける思いは誰にも負けない！！

ナオキのことは『ナオキくん』と呼ぶ。

西木野真姫……高校1年生。

ナオキとは幼なじみ。

西木野病院の娘。

音ノ木坂学院の生徒会会計。



μ, sのメンバー！

ツンデレ！

作曲担当。

ナオキのことは『ナオキ』と呼ぶ。

矢澤にこ……高校3年生。

アイドル研究部部长！

『にっくにっくにー♪』が合言葉！

μ, sのメンバー！

大銀河宇宙No.1アイドル！

アイドルにかける情熱は誰よりも強い！

ナオキのことは『ナオキ』と呼ぶ。

東條希……高校3年生。

ナオキとは2年生の修学旅行の時に出会った。

エセ関西弁を話す。

神田明神でアルバイトをしている。

音ノ木坂学院の元生徒会副会長。

μ, sのメンバー！

『μ s』の名付け親。

ナオキのことは『ナオキくん』と呼ぶ。

ヒフミ（ヒデコ・フミコ・ミカ）……穂乃果・海未・ことり・ナオキとは同級生！

フミコは音ノ木坂学院生徒会書記。

μ sのライブの手伝いをファーストライブのときからよくしてくれる。

3人ともナオキのことを『ナオキくん』と呼ぶ。

A—R—I—S—E（綺羅ツバサ・優木あんじゅ・統堂英玲奈）……3人とも高校3年生。

UTX高校のスクールアイドル。

第1回ラブライブ！の優勝者。

μ sのライブ！

ナオキとはナオキがツバサをナンパから助けたことで知り合う。

3人ともナオキのことを『ナオキくん』と呼ぶ。

カキク（カオリ・キョウコ・クルミ）……3人とも高校3年生で音ノ木坂学院元生徒

会役員。

キョウコな書記、カオリとクルミは会計をしていた。

3人ともナオキのことは『ナオキくん』と呼ぶ。

マチコ……高校1年生。

真姫とは仲がいい。

音ノ木坂学院の生徒会会計。

実はマチコもナオキと同じく名字を隠している。

ナオキのことは『ナオキ先輩』と呼ぶ。

クケコ（クウタロウ・ケンタ・コウジ）……凛に大きな傷を与えたガキども。

高坂雪穂……中学3年生。

亜里沙とは同級生。

穂乃果の妹。

小さい時にナオキと遊んだことがある。

ナオキのことは『ナオキさん』と呼ぶ。

絢瀬亜里沙……中学3年生。

雪穂とは同級生。

絵里の妹。

絵里とは2人暮らし。

μ, sに憧れている。

ナオキのことは『ナオキさん』と呼ぶ。

香川ミツヒデ……高校2年生。

大坂学園の生徒会長。

チンギスカンと共謀しナオキを退学させた。

チンギスカン（佐藤英吉）……高校2年生。

大坂学園時代のナオキとは席が隣同士。

ナオキを騙し続け、ミツヒデと共謀し退学させた。

イズミ（岸和田イズミ）……高校2年生。

大坂学園時代のナオキの部活仲間。

## 第25話「初デート」

朝……

「楽しみで全然寝れなかった……」

ナオキは昨夜楽しみすぎて寝付けなかったのだ。

「顔洗おう……」

ナオキは洗面所へむかった。

「寝癖やば」

ナオキの頭は……爆発していた。

ナオキは着替えなどを済まし、絵里の部屋へむかう。

絢瀬宅……

リビング……

「うーん……服に迷っててなかなか寝れなかったわ……楽しみだったっていうのもあるけどね……」

絵里もナオキと同じようだった。

「おねえちゃん、大丈夫？」

亜里沙は言った。

「大丈夫よ。さ、準備しないとね」

絵里は自分の部屋にむかった。

ピンホーン……

「はーい！あ、ナオキさん！」

「よお、亜里沙ちゃん！絵里は？」

「おねえちゃん部屋にいますよー！あがって下さいー！」

「お邪魔しまーす」

ナオキはあがり、絵里の部屋にむかった。

「絵里ー、むかえにきたぞー」

ナオキは絵里部屋の前で言った。

「まって！まだ！入らないで！リビングで待ってて！」

絵里は慌ててるように言った。

「わかった……」

ナオキはリビングへとむかった。

「これどうぞー！」

「ありがとう亜里沙ちゃん……っつておでん？」

亜里沙はナオキにおでんの缶を出した。

「これ前に海未さんにもあげたんです！でも飲み物じゃないっつておねえちゃんに言われました……」

「じゃあなんでおれに出すの……」

「ナオキさんなら大丈夫かと！」

亜里沙は目をキラキラさせながら言った。

(……恐ろしい子……)

ナオキは思った。

「お茶どうぞー！そういうえばナオキさん！」

「どうしたんだ？」

ナオキはお茶を飲んだ。

「ナオキさんって私のおにいちちゃんになるんですか？」

ナオキは咳き込んだ。

「だ、誰がそんなことを！」

「パパが言っていましたよ」

「(お父さんか……)ま、まあ……だけど絵里には内緒な……」

「はい！」

「お待ちせー」

絵里がリビングへ来た。

ナオキは絵里をじっと見つめた。

「な……なによ……／／／」絵里は顔をあかくした。

「いや……その……似合ってるなって……綺麗だし……かわいいよ／／／」

ナオキは顔をあかくして言った。

「あ……ありがと……さ、行きましょ！」

「ああ！」

「2人とも！いつてらっしやい！」

「いつてきます！」

ナオキと絵里は声を合わせて言った。

「楽しみね……」

「ああ……」

そして2人は腕を組んでショッピングモールへむかった。



「あ、行きましたよ……」

「絵里ちゃんつて結構甘えん坊さんだね……」

「そうだね……」

「さ、行くわよ……」

その後ろから海未・ことり・穂乃果・真姫がつけていた。

シヨップピングモール……

「着いたわねー」

「でっけーなー」

「さ、まずはナオキの服を買いに行くわよ！」

「おれの?」

「ナオキファッションセンスなさすぎよ! 私が選んであげるわ!」

「あ……ありがとう……」

服屋さん『ミント』

「んーこれでもないわねー……」

絵里は真剣な表情で服を選んでいった。

「(服選ぶのってこんなに時間がかかるのか……) 絵里まだー?」

「もう!子供じゃないんだから待ちなさい!」

「はい……」

「んーこれね!さあナオキ、この服試着してきて!」

「はーい」

ナオキは試着室へとむかった。

1分後……

「どうだ?」

「んー……ちよつと違うわねー……」

「違うのか……」

「お客様、こちらなどどうでしょうか?」

絵里が考えていると店員さんが声をかけてきた。

名札には内田と書かれている。

「あ、確かに!えつと……ありがとうございます!内田さん!」

「いえいえ」

「さ、ナオキ!これ着て!」

「はーい……(服選ぶのって大変なのか……?)」

1分後……

「これでどうだ？」

「うん！ かつこいいわよ！ 内田さん、このままお会計お願いします」

「かしこまりましたー」すると内田さんは服に付いていた札をはずして会計した。

「悪いな絵里、服買わせちゃって…」

「いいのよこれくらい」

「ありがとうございますー」

「さ、ナオキの服も買ったし、どこ行こっか？」

「うーん……絵里は行きたいところあるのか？」

「あるわよ！」

「じゃ、そこに行こう！」

「いっぱいあるわよ？」

「時間はまだまだあるし大丈夫じゃね？」

「それなら行きましょ！」

絵里はナオキにひつついた。

「絵里ちゃん楽しんで……」

「本当の目的を忘れてるのでは？」

「むしろナオキくんとデートが目的なんじゃ…」

「むー……」

穂乃果・海未・ことり・真姫は小声で言った。

ライブの日……

控え室……

「絵里、ちよつといい？」

真姫が絵里に話しかけた。

「どうしたの真姫？それに穂乃果と海未とことりも」

「実はね…ナオキくんのことなんだけど……」

ことりが言った。

「ナオキがどうかしたの？」

「ナオキがなぜ名字を使っていないのか心当たりはありますか？」

海未は言った。

「実は私も気になってたのよ…」

「絵里ちゃんも？」

「ええ……」

「気になるわね……」

「そうだ！絵里ちゃん、ナオキさんとデートして聞き出してよ！」

穂乃果が言った。

「デ……デート!?!」

「そうね…絵里とナオキは付き合ってるんだからいいんじゃない?」

「お願いします…絵里」

「絵里ちゃん！」

「わかったわ…なら明日にするわ」

そして現在……

「ま、大丈夫でしょ、絵里だから」

真姫は言った。

「ねえねえ、あそこにいるのって……」

みんな穂乃果が指さした方向を見た。

「あれは……にこちゃん?あと希ちゃんと花陽ちゃんと凜ちゃん!」

「にや?あ!ことりちゃんだ!あと穂乃果ちゃんに海未ちゃんに真姫ちゃんもいるにや

！」

凜は後ろを見ていった。

「あらー…みんな揃っちゃったんやね…」

希は言った。

「絵里ちゃんたち行っちゃうよ…」

花陽は言った。

「はやく行くわよ！」

にこは言った。

女性ファッション店『ウーマン』

「ナオキどつちがいい？」

「おれが選ぶのか!？」

「いいからいいからー」

「んー……………どつちも似合うと思うけどなー、絵里スタイルいいし、可愛いし……………」

「もう……………選んでよー」

絵里は顔を膨らました。

「(かわいい……………) わかったよ……………あ、でもどつちが一番似合うんじゃないかな？」

「ほんと？ならこっちにするわ！」

「ほんとにいいのか？おれが選んだやつで…」

「ナオキが言うんだからいいのよ！」

「ありがとうございましたー」

「あ、絵里おれが持つよ！」

「あ…ありがとう…」

2時間後……

アクセサリー屋さん『ダイヤモンド・クラフト』

「おー綺麗だなー……」

「でしよー…あ、これとかどう？」

「おー！ハラシヨー！これと組み合わせたりとかどうだ？」

「いいわねーハラシヨー！」

2人はアクセサリーのことで盛り上がった。

「ねえナオキ！また2人でアクセサリーを作りましょう！」「いいねー」

「私、これ買ってくる！」

絵里はレジへむかった。

「ん？『指輪作ります』か……」

ナオキはその広告の方へむかった。

「すみません、指輪って石持ってきても作ってくれるんですか？」

「はい、お作りできますよ！」

「そうですか……また持ってきます」

「お待ちします！」

「お待たせー」

「おっ、終わったか」

「うん！ナオキ……お腹すいてない？」

「そういえば……もう12時かカフェに行くか？」

「うん！」

ナオキと絵里はカフェにむかった。

穂乃果たちもそれを追った。

カフェ『イート&カフェ』

「お待たせしました！」



「ありがとうございます！」

「んー…ハラシヨー！いい香りねー……」

「ああ……」すると絵里は下を向いていった。

「ねえ……ナオキ、聞きたいことがあるんだけど……」「どうしたんだ？」

ナオキはコーヒーを飲んだ。

「どうしてナオキは名字を使わないの？」

絵里がそう言うのとナオキはコップをとめ、飲むのをやめた。

するとナオキの表情は暗くなった。

「……………気になるよな…やっぱり……」

「無理になら話さなくてもいいわよ」

「いや、いつか話す時がくるとおもってたよ……お前らもこつちに來たらどうだ？」

ナオキは遠くを見ていった。

「気づいてたん？」

「当たり前だ」

そして10人で机を囲んだ。

そしてナオキは話した。

「おれはこの名字が嫌いなんだ……『香川』という名字が……」

「なんで？ 小さい時気に入ってたじゃないの？ 『珍しいから』って……」

絵里は言った。

「ああ……話したろ、大阪であつたこと……ミツヒデの名字が香川なんだよ……だからおれはあいつと同じ名字が嫌なんだ……」

「ナオキ……」

海未は言った。

「まだそんなこと引きずってるの？ いい加減……」誰にだって……忘れたいけど忘れられない……辛い……思い出すだけでイライラする……心が痛くなる……そういう思い出があるんだ……」

ナオキはこの言葉を遮って言った。

「ナオキ……」

絵里は言った。

「いつまでウジウジしてるのよ……」

真姫は言った。

「ウジウジなんかしてね……」してるでしょ？ なによ！ そんなの堂々としてればいいのよ！ いつまでも過去のこと引きずり回して、これからもずっと香川って名乗らないつもり

？一生活わないつもり？ふざけないで！」

「真姫……それくらいに……」

海未は言った。

「(づ)……(づ)めん……」

「いや……真姫の言う通りだ……」

「え？」

「たしかにな……おれは心のどこかで名乗りたいつて思ってたのかもな……でも過去から逃げて名乗りたくなかった……真姫、ありがとう……おれは香川ナオキって名乗る！」

ナオキの目は決意の目だったが、まだどこか闇を抱えているようだった。

「ナオキ……」

絵里は言った。

「みんな心配かけてすまん……でも今は絵里とデート中だから2人つきりにしてくれ  
るか？」

「そっやね……」

希は言った。

「そうだね、帰ろっか」

「ことりは言った。」

「すまんな……」

そしてナオキと絵里以外は帰っていった。

「絵里……」

「ん？」

ナオキは息を吸っていった。

「ごめんな……黙ってて……」

「いいのよ別に……話しにくかったんでしょ？」

「ほんとにごめん……ん……」

「めっ……」

すると絵里は人差し指でナオキの口をおさえた。

「もう謝らないの……わかった？」

「はい……」

「よろしい」

すると絵里は人差し指を離した。

「じ……じゃあ……次はどこいく？」

ナオキは言った。

「そうねー……あそこに行きましょー！」

絵里はゲームセンターを指さした。

「わかったー！」

ナオキと絵里はゲームセンターにむかった。

ゲームセンター「エンジョイ・センター」

「ねえ、これなに？」

「ああ…プリクラだ、写真を撮るんだ。ま、おれもあんまり撮ったことないんだけど」

「ねえねえ、撮りましょーよ！」

「いいよ……」

「やったー！」

「はーいくつついてー」

プリクラの機械が喋った。

「ほらナオキ、もつとくつついてー！」

「あ…ああ……」

「3. 2. 1はい、チーズ…パシャ…あと2枚！」

「これデコレーションできるのね…ハラショー！」

「そうだな……」

「ナオキ顔あかーい…ふふっ……」

「絵里があんなにくつつくからだろ…」

「なによ、いつも腕組んでるじゃないの」

「それはそうだけど…」

「ほら、時間なくなるわよ」

「そうだな……」

ナオキと絵里は1枚ずつデコレーションするのだった。

「写真はどこからでてくるの？」

「そつちだろ？さ、でようか」

「あ、でてきたー！さーてナオキはどんなデコレーションを……うーん、名前を書いただけ…ナオキらしいわね…ふふっ…」

「そういう絵里はどうなんだよ……」

「私？私はね、相合傘に私たちの名前とか色々」

「ほー…さすが絵里だなー」

ナオキはそう言うのと絵里の頭をなでた。

「もう……」

「次は何がしたい？」

「そうね… UFOキャッチャーがいい！」

「よし、行こうか！」

「私これ欲しい！」

絵里はクマのぬいぐるみを指さした。

「よしー！」

ナオキは5000円を入れた。

そして20000円使った……

「もうちよつとよ！頑張って！」

「よし！取れたー！」

「ハラシヨー！」

「はい、絵里！」

「ありがとう、ナオキ！……うーん……かわいい！」

絵里はぬいぐるみをほっぺでスリスリした。

「(かわいい……) さ、次はどこいく？」

「あれもやりたい!!」

絵里はホットケーキを指さした。

「ああ！いいぜ！」

「絵里、強い……」

「えっへーん！ジュースおごってね！」

「わかったよ……」

「もうこんな時間か……」

「楽しかったわね……」

「なあ……絵里、屋上に行ってみるか？」

「いいわね、行きましょー！」

ナオキと絵里は屋上へむかった。



「わぁー……」

屋上に出ると綺麗な夜景が広がっていた。

「どうだ、綺麗だろ？」

「うん……そういえば、周りの人たちみんなカップル？」 「ん？ ああ……そうみたいだな」

「ここってデートスポットなのかな？」

「さあ？ ちよつと待つて……」

ナオキはスマホでここを調べ始めた。

「(なにになに……カップルは1度でも行くべきデートスポット、いい雰囲気になれるかも) へえー……やっぱりデートスポットみたいだな」

「へー……ねえ、もつとフェンスの方に行きましようよ！」

「え……あ……ああ……(やべえ、たけえ……)」

「ナオキ大丈夫？ 顔色悪いわよ？」

「そ……そんなことねえよ……」

ナオキは高いのが苦手なのだ。

ナオキは知らないうちに絵里を強く引き寄せていた。

「ちよつと……ナオキ……」

「ん？……あ……」

ナオキの顔と絵里の顔の距離が近くなった。

「ナオキ……………」

「絵里……………」

ドキドキ……………」

(ナオキの鼓動が聞こえる……………)

(絵里の鼓動が聞こえる……………)

「ナオキ……………」

絵里はナオキの首に手をまわした。

「絵里……………」

ナオキは絵里の頭の後ろと腰を持ち、絵里を引き寄せた。

そして2人は……………キスをした……………

「ん……………私のファーストキス……………ナオキでよかったわ……………」

「おれもファーストキスが絵里でよかった……」

ナオキは絵里を抱きしめた。

「ふふふ……今日のことは……ずっと私は忘れない……ナオキも忘れないでね……」

「ああ……絶対……忘れない……」

そして2人は帰路についたのだった。

次回へ続く

## 第26話「Dancing stars on me!」

「朝か……………」

ナオキはデートのことを思い出していた。

「おれ…………絵里とキスしたんだよね……………／／／／」

ナオキは顔をあかくした。

絢瀬宅…………

「私…………ナオキとキスしたのよね……………／／／／／」

絵里も顔をあかくした。

「おはよう…………絵里」

「おはよう…………ナオキ」

「行こうか…………」

「ええ…………」

ナオキと絵里は学校へむかった。

「その…絵里、昨日はありがとうな…」

「え…うん…こちらこそ…」

「ナオキくん、えりち、おはよう！」

「あら希、おはよう！」

「おはよう…」

「昨日のデートはどうやった？」

「え…えーつと…楽しかったわよ！ね、ナオキ」

「あ…うん！また行こうな？」

「え…ええ…」

ナオキと絵里は誤魔化すように笑った。

「ふーん……（これはなにかあるな……）」

放課後…

部室……

「そんじや、ハロウィンイベントのこと言うぞ」

「はい！」

「このハロウィンイベントはアキバをハロウィンストリートにするお祭りだ。その最終日におれたちが、sとA—R—I—S—Eがライブをするんだ」

「A—R—I—S—Eと一緒にー」

「緊張するね…」

「うん……」

花陽とことりは言った。

「あ、すみません、今から1度弓道部に顔を出してきます」海末が言った。

「あ、アルパカさんにお水やらなきや…」

「凜も行くー！」

花陽と凜は言った。

「私もちよつと出るわ…（トイレなんてナオキの前で言えない）」

「えりち、そういう時はお花をつみに行くっていうんやで」

絵里と希は言った。

「ちよつと希！／＼／＼」

絵里は顔をあかくした。

「(お花?花壇かな?) あ…おれはちよつと電話してくるわ」ナオキは言った。  
「わかった!待ってるね!」

穂乃果は言った。

「みんないない間なにする?」

真姫は言った。

「ライブのこと話ずに決まってるでしょ」

にこは言った。

「でもただ話すだけじゃ面白くない!これを使うよ!」

穂乃果は言った。

そしてお馴染みのあの劇がはじまったのだ……

「もしもし?おじさん、電話しろってなんのよう?」

「ああ実はな……」

ナオキは運営側の人というおじさんと電話していた。

「え?音ノ木に来る?」

「ああ、μ'sというスクールアイドルを見たくてな…それに…ナオキの大事な人も…」

「お…おじさんまで……」

「ハハハ、じゃ…今から行くからしつかり伝えるんだぞ」「はい」

部室……

「ただいまー」

ナオキが戻ると絵里と真姫がなにか話していた。

穂乃果とことりとにこと真姫はなにか持っていた。

「なに話してるんだ？てか、真姫なんだよそのゴーレム……」

「ちよつと、ナオキからもなにか言つてよ！絵里が私のゴーレムくれて言うのよ！」  
「だつてかわいいし！ほしいわよ！」

「(かわいい……のか?)と……とにかく絵里、それは真姫のだから……」

「そうよ！これはサンタさんに貰ったんだから！」

そう真姫が言うと同が固まった。

「ごめんなさい、真姫……そんな大切なものとは知らず……私は……」

絵里は深刻な表情をして言った。

「わ……わかればいいのよ」

「んー……」

ナオキはなにか考えていた。



「ただいま戻りましたー」

「海未ちゃん遅いよ!」

「すみません…」

「あ、そうだみんなに話すことがあるんだ!」

「ん?」

「実はな、このあとラブライブ!実行委員会の会長が音ノ木に来ることになった!」

「えー!!」

みんな驚いた。

「なんでいきなり!?!」

にっこが言った。

「あーさつき電話しに行つたら?それ」

「なんでナオキくんが会長さんと電話を?」

花陽が聞いた。

「あれ?言わなかったっけ?おれのおじさん、会長なんだよ」

「言つてない!」

ナオキがそう言うときみんなが声を合わせて言った。

キンコンカンコーン……

「2年生、香川ナオキくん……今すぐ理事長室に来てください……繰り返しします……」

「あ、おじさん、来たみたいだな……絵里着いてきてくれ！ほかのみんなは迎える準備しといてくれー」

「はーい」

ナオキと絵里は理事長室にむかった。

「なんで私？」

「わかるだろ？おれの彼女だから……」

「なるほどね……」

理事長室……

「失礼します！」

ナオキと絵里は声を合わせて言った。

「おーナオキ！久しぶりだな！」

「おじさん！久しぶり！」

「は……はじめまして、絢瀬絵里と言います……」

「おー君がナオキの彼女かい？」

「はい……」

「ナオキ……いい子と付き合ってるじゃないか……大事にしるよー」

「言われるまでも……それより、sに会いに来たんだろ?」「そうだったな……南さん、ありがとうございました」

そう言うとなオキのおじさんは立ち上がった。

「いえいえ……」

理事長も立ち上がった。

「それでは失礼しました!」

3人は部室へとむかった。

「それにしてもここはいいところだなー」

「だから言ったじゃんか」

「ここが私たちの部室です……」

「ほほう……」

「ただいま……」

パン!パン!パン!

ドアを開けるとクラッカーがなった。

「わっ!」

「ようこそ！音ノ木坂学院へ！」

「ハハハ……びつくりしたな……手厚い歓迎……感謝する」

「ここまでしなくても……」

「ハハハ……」

ナオキと絵里は言った。

「じゃ、紹介するな……ラブライブ！実行委員会会長の『伊藤晋三』……おれのおじさんだ」

「よろしく！」

「よろしくおねがいます！」

みんなが声を合わせて言った。

「いやーμ sは素晴らしいねー」

晋三は言った。

「どうもありがとうございます！」

穂乃果は言った。

「君がリーダーだね？」

「はい！高坂穂乃果と言います！」

「おー元気がいいね……μ sの活躍はいつも耳にしてるよ」

「ありがとうございます！」

「しかし、みんな輝いている……」

晋三はメンバーを見渡して言った。

「か…輝いている？」

「ああ…A—RISEに負けない程にな…」

「あ…A—RISEに!？」

「ああ…ステージ…楽しみにしてるよ、なにか困ったことがあるならいつでもナオキを  
通して言っておいで、力になれることなら力になろう…」

「ありがとうおじさん」

「ああ…じゃあそろそろ帰るかな…」

「晋三さん！ありがとうございました！」

「ありがとうございました！」

穂乃果が言うともみんな声を合わせて言った。

「こちらこそ…そうだ絢瀬さん」

「はい…」

「ナオキがこれから迷惑かけると思うがよろしく頼むぞ」「は…はい！」

そして晋三は帰って行った。

「とりあえず、穂乃果と凜とにこは明日、ライブの告知に行ってくれ」

「えー面倒くさーい」

にこが言った。

「え…テレビの取材来るんだけどいいの…?」

「テレビ!? やっぱり行くわ!」

にこはテレビと聞くと立ち上がった。

「態度かわりすぎ…」

真姫は言った。

「真姫、海未…曲の方は…」

「もう出来てますよ」

「おーハラショー!」

「曲名は『Dancing stars on me!』よ…これ音楽…」

「これは歌詞です」

真姫と海未はナオキにウォークマンと歌詞の書いた紙を渡した。

「どれどれ…:うん!ハラショー!」

ナオキは言った。

「へー…私にも聞かせて」

「ああ……どうぞ」

ナオキはイヤホンと歌詞の書いた紙を渡した。

そしてその日は全員で音楽を聞き、歌い、練習は終わった。

「じゃあ、穂乃果・凜・にこ……明日頼むぞ!」

「うん!」

「頑張るにゃ!」

「任せなさい!」

翌日……

部室……

「もう始まつてるんじゃないか?」

「そうねー」

絵里が言った。

「観る?」

真姫は言つてスマホを出した。

「ならお願い！真姫ちゃん」

ことが言った。

そして真姫のスマホで中継を観るのだった。

「おい……何やってんだよ……」

ナオキは言った。

「ん？どうしたの、ナオキ？」

絵里が言った。

「このアナウンサーの人……いとこなんだけど……」

「えー！！！」

みんなが声を合わせて言った。

「この人ナオキくんのいとこだったのお!？」

花陽が言った。

「あ……ああ……おれもアナウンサーしてるのは初めて知った……」

「なんで知らないんですか……」

海未が呆れた顔で言った。

「いや……おれ……この人苦手なんだよな……ハハハ……」



「わかる気がします……」

海未が言った。

「あ、A—RISE……」

希が言った。

「うわ……」

ナオキは観るなりそう言った。

「流石A—RISEね……」

絵里が言った。

みんな深刻な顔をした。

帰り道……

「流石A—RISE……やるわね……」

絵里は言った。

「そうだな……」

ナオキは言った。

「ナオキはどう思う?」

「どうって?」

「私たち、A—RISEに勝てると思う？」

「勝てる…絶対勝てる」

ナオキは即答した。

「ふふっ……相変わらずね…ナオキは」

そう言うと絵里はナオキにもたれた。

ナオキはそんな絵里の肩を持ち、引き寄せるのだった。

翌日……昼休み…

「はい、ナオキ」

絵里はナオキに弁当を渡した。

「ありがとう絵里…いつも悪いな」

「いいのよ別に…だってナオキは料理下手だから心配だし…」

「正直に言うなあー」

ナオキは言った。

「さ、食べて食べて！」

「いただきます！」

ナオキは絵里の作ったお弁当を平らげるのだった。

部室……

「インパクト?」

ナオキが言った。

「はい…A—R—I—S—Eに勝つにはまずはこのだらけた雰囲気を変えねばなりません  
……」

海未が言った。

「で、どうするの?」

にこは言った。

「はい…それは………」

「あなたの思いをリターンエース…高坂穂乃果です!」

「誘惑リボンで狂わせるわ!西木野真姫!」

「むかないで…まだまだ私は青い果実…小泉花陽です…」

「スピリチュアル東洋の魔女…東條希!」

「恋愛未満の化学式…園田海未です!」

「私のシュートでハートのマークつけちゃうぞ！南ことり！」

「キュートスプラーツシュ！星空凜！」

「必殺のピンクポンポン…絢瀬絵里よ！」

「君のために打つぜホームラン！香川ナオキ！」

「そして私…不動のセンター矢澤にここー」

「私たち、部活系アイドル…*μ's*です！」

「つて…私だけ顔見えないじゃない！」にこがつつこんだ。

「ーついいか？」

「どうしたの？」

ナオキが穂乃果に聞いた。

「花陽は何部？」

「演劇部？」

「海未は？」

「それは化学部だよ！」

「なるほど…」

「ナオキくん、『君のために打つぜホームラン！』だってー…君つてえりちのことやろ？」

希がニヤニヤしてナオキに聞いた。

「なっ……」

ナオキは顔をあかくした。

「凶星やー」

「うっせー／＼／＼」

「えりちのこの衣装どう？似合ってるでしょ？」

「や……やめてよ希……」

ナオキは絵里を見つめた。

「もう……そんなに見ないでよ……」

「似合ってるな……かわいい……」

「やろー？」

「もう……」

絵里は顔をあかくした。

「ていうかこの衣装でステージ上がるのは無理でしょ……」真姫が言った。

「たしかに……」

海未が言った。

「とりあえず部室に戻ろう……」

「はーい」

部室……

「なんで色んな部活の衣装を着ることになったんだ？」

ナオキは言った。

「はい……なにか新しさが必要と思ったので……」

海未が言った。

「そうか……（このままでいい気もするんだけどな……）」

「ほな……ウチがカードのお告げをみんなに伝えてみよか……」

希は言った。

そしてタロットカードの山をだした。

そして出したのは……

『CHANGE』

「いっちばーん！」

穂乃果の格好をしたが凛屋上に出た。

「ハラシヨー！はやいわね穂乃果」

絵里の格好をした希が言った。

「そして凜も！」

凜（穂乃果役）と希（絵里役）が声を合わせて言った。

「（うう………：恥ずかしいです………でもここで意地を見せなければ………）にやーにやー!!」

さあ、今日も練習行つくにやー!!」

凜の格好をした海未が言った。

「はやく練習しましょうよ………」

真姫の格好をしたことりが言った。

「あー真姫ちゃんやる気だにやー」

「べ……別にそんなことないわよ………」

「ちよつとことり！それ私の真似でしょ？やめて！」

希の格好をした真姫がでてきた。

「オコトワリシマス」

「おはよう……希」

希（絵里役）が言った。

「あー1人だけやらないのはずるいにやー」

「べ……別にそんなこと………」

「にゃ？」

「……言った覚えないやん……」

「ハラシヨー！」

「にっこにっこにー♪あなたのハートにっこにっこにっこにー♪笑顔届ける矢澤にっこにっこにー♪青空もーにっこにっこにー」

にこの格好をした花陽がでてきた。

「おーにこちゃんは思ったよりにこちゃんっぽいねー」

凜（穂乃果役）が言った。

「にっこにっこにー」

「にこちゃーん……にこはそんな感じじゃないよー」ことりの格好をしたにこが花陽（にこ役）の肩に手を置いて言った。

「おにぎりは最高ですー！はむっ！」

花陽の格好をした絵里が言った。

「おはようみんなー！」

ナオキの格好をした穂乃果が言った。

「あらナオキ……おはようー！」

希（絵里役）が穂乃果（ナオキ役）に近づいた。



「絵里……」

「あつ……」

穂乃果（ナオキ役）が希（絵里役）を抱きしめた。

「ちよつとナオキ……みんな見てるわよ……」

「いいじゃないか……ちよつとぐらい……」

「ナオキ……」

「絵里……」

希（絵里役）と穂乃果（ナオキ役）が顔を近づけた。

「なにをやっているんですか……」

「ギクッ！」

希（絵里役）と穂乃果（ナオキ役）が後ろを振り向くとすごいオーラをはなつ海未の

格好をしたナオキがいた。

「覚悟は………出来ていますね………」

ナオキ（海未役）が笑って言った。

「(ゴ)……(ゴ)めんなさい………もうしません………」

穂乃果と希は言った。

「さ、部室に戻るぞー」

ナオキが言った。

「はーい」

部室……

「なんでロツクの衣装になったんだよ……理事長室に呼ばれて注意されたし……」

ナオキが言った。

「アハハハハ……」

ことりが苦笑いをした。

「だって……A—R—I—S—Eに勝てるだけのインパクトが……」

穂乃果が言った。

「みんなまだ気づかないのか？」

「なにをですか？」

海未が言った。

みんなもハテナマークを浮かべている。

「はあー……『μ sはこのままが1番いい』っていうこと……」

「あ……」

みんな声を合わせて言った。

「たしかにそうね！」

絵里が言った。

「私たちはこのままが一番いい……」

海未が言った。

「みんなわかったな？」

「はい！」

「今までののはなんだったのよ……」

「よし！ことり衣装は？」

「絵はできてるよ！」

「それなら花陽とにこと希とことりで衣装作ってくれ！」

「はい！」

ことりと花陽とにこと希は言った。

「それ以外のメンバーは練習だ！作業開始！時間はないぞ!!」

「はい！」

帰り道……

「ナオキ……ありがとう、気づかせてくれて……」

「ああ……／＼／＼」

ナオキは顔をあかくして言った。

「これはお礼……（チュツ……）」

絵里はナオキの正面にまわりキスした。

「つ……絵里……」

「ふふつ……驚いた顔かわいい……」

ナオキは顔をあかくした。

「じゃあ絵里……また明日な」

「ええ……また明日」

絵里は絢瀬家の部屋に入って行った。

ナオキも自分の部屋に入って行った。

そしてライブ当日……

「よし！みんな準備はできてるな？」

「はい！」

「よし！行つくよー！いち！」

「に！」

「さん!」

「よん!」

「ご!」

「ろく!」

「なな!」

「はち!」

「きゆう!」

「じゆう!」

「μ, s!ミュージック…スタート!」

「おれは先に行ってるからな」

「あれを使ってやるのは初めてやね…」

希は言った。

「大丈夫さ!どうなるかは伝えたからな!じゃ、またあとで!」

ナオキは先に控え室から出て行った。

「μ, sのみなさん準備お願いしまーす」

スタッフが言った。

「はーい！」

「それじゃ、行こう！」

穂乃果が言った。

「あれ？ナオキくんじゃーん！」

司会の人（ナオキのいところ）がナオキをみつけていった。

「（ちっ…見つかったか…）久しぶり！こんなところで会えるなんて！」

ナオキは言った。

「ほんとだよー！ナオキくんはなんでここに？」

「あれ？言わなかったっけ？おれ音ノ木坂学院の模擬男子生徒になって、  
ト役してるんだよ」

「そうなの…次は、sだったね！頑張つて！」

「言われるまでもない…」

A—RISEのステージが終わった。

「ツバサさん、あんじゅさん、英玲奈さんお疲れ様です」ナオキが言った。

「ありがとう…」

「次はあなたたちの番ね」

「楽しみにしているぞ」

「はい！ありがとうございます！」

そしてナオキはストリートの真ん中に出た。

「はい！みなさん、続いては音ノ木坂学院スクールアイドル $\mu$ sのステージです！曲は『Dancing stars on me!』です！サビのところで手拍子するところもあるのでみなさんで盛り上がりましょう！それではモニターをご覧下さい！」

ナオキはそう言うとき大きな箱のようなものところの端にある椅子に座り、機械を操作した。

するとモニターにはPVのようなものが始まった。

歌： $\mu$ s 操作：香川ナオキ

みんなが上を向くことに1人1人のイメージカラーが浮かんでくる。

「it's a magical 不思議が偶然をまねいてる？」「会えたのは」「会えたのは」「すてきな運命」

「it's a magical 流れる星は味方なの」「願いましよ」「願いましよ」「願いましよ」「明日の奇跡を」

「Dancing stars on me!」「手を伸ばしたら」「いつか」「つかめそうだよ」「だから」「はての綺麗な」「輝きのそらをく目指そう…目指そう!」  
そして明るくなった。

すると大きな箱のようなものの扉が開けられた。

「カメラさん、アングルは箱と逆にしてください!」

「はい!」

「もつともつと踊らせて」パンパン!

「みんなみんなとまらない」パンパン!

「今日くだけ魔法く使い 　どんな夢を見ようかな」

するとそこから s がでてきた!

実は最後の希・凜・穂乃果のアップは前々から撮っていて、その時にはみんなは出口へむかっていたのだ。

モニターの映像はカメラに切り替わった。

「もつともつと踊らせて」パンパン!

「みんなみんなとまらない」パンパン!



「涙は青春のダイヤモンド　君を〜」「君を〜」「かざる光〜」

「よし！大成功だ！」

曲が終わると歓声と拍手が湧いた。

「よし！絶対ラブライブで優勝するぞー！」

穂乃果が言った。

「おー！！」

そしてそれに続いてみんなが言った。

「はい、以上！*Ms*のステージでしたー！そちらの箱の中に入れてもらっても構わないので時間がある方はどうぞ見て行ってください！ありがとうございます！！」

ナオキはそう言うともみんなの元へ走って行った。

そしてハロウィンイベントの最後の夜をむかえるのだった……

帰り道……

「ハラシヨ〜！……見て、ナオキ！とても綺麗よー！」

「ハラシヨ〜！綺麗だなー」

ストリートで飾られている光る飾りを見ていた。

「ええ……」

ナオキと絵里は腕を組んで帰っていた。

「ステージ、最高だったよ！絵里の衣装も可愛かったし」「そう？……ありがとう……」  
「少し、店見ていくか？」

「ええ！」

「あ、ここにするか『ハロウィンイベント限定ショップ』だつてさ」  
「行きましよう！」

「いらつしやいませー！」

「わー！いっぱいあるわね……」

「（絵里がはしやいでる……かわいいな……）あ……これは……」

ナオキは何かを見つけコソツと会計を済ませた。

「あれ？ナオキ……どこ？」

「ここだよー」

「もう！どこ行つてたの？」

絵里は顔を膨らませて言った。

「いやあーちよつとトイレに……」

「そうなの……それは？」

絵里はナオキの持っていた袋を見た。

「あ……見つかつちやつたか……」

「なにが入ってるのよ？」

「とりあえず帰るまで中身は秘密だ」

「えー…見せてよー」

「ダメだ、ちゃんと帰ったら見せてやるから……さ、行くぞ」

ナオキは絵里の頭に手を置いて言った。

「はーい……」

そして2人は帰って行った。

μ sのライブが終わったところ……ある問題が起きようとしていた……

高坂宅……

「あ……あああ……あああああ……やっぱり！」

雪穂が何か書類を見ていった。

音ノ木坂学院生徒会室……

「わかったなマチコ……やるんだ……」

「でも……お兄ちゃん……それは……」

「おれの言うことが聞けないのかマチコ!!やるんだ!これは命令だ……」

「………わかったよ……お兄ちゃん……」

「わかればいい……あいつにはまた苦しんでもらわないとな……ハハハハハ……」

「うん……それじゃあね……」

「ああ……頼んだぞ……」

マチコは電話をきった。

「ごめんなさい……ナオキ先輩……」

マチコは書道部の予算申請書を承認ボックスに入れた……

次回へ続く……

## 妄想外伝「ことりの誕生日」

9月11日……

「ことりを除くメンバーで緊急会議が行われようとしていた……  
なぜなら12日はことりの誕生日だからだ

「お前らわかってるな……練習終わったあとでできるだけみんなバラバラでことりにバレないようにおれの部屋に集合だ……」

ナオキはことり以外のみんなにボソツと言った。

「了解……」

ことり以外のみんなは声を揃えた……ボソツと……

練習後……

「穂乃果ちゃん！今日一緒に帰ろー」

「ことりは言った。」

「(づ)……(づ)めん！ことりちゃん！ほ……穂乃果……やることあるんだよ！」

（穂乃果が、穂乃果ちゃんが、1番危ない……）ことりと穂乃果以外のみんなは思った。「じゃあ、私先に帰るわ……妹たちの世話しないとイケないから」

にこは言った。

「わ……私も黄金米があるから……」

花陽は言った。

「凜は病院にアレルギーのお薬貰いに行かないと……」

凜は言った。

「あ……お母さんが言ってた患者さんって凜のことだったのね……私もついて行くわ……」

真姫は言った。

「ウチはバイトがあるから……すぐに」

希は言った。

「私は道場で鍛錬があるので……」

海未は言った。

「私はナオキと……」

絵里は言った。

「なにーラブラブしたいのー」

希は言った。

「もう……それより希、はやく行かないと」

「そうやった！お先ー」

希は走って行った。

そしてみんな帰って行った。

「うーん……みんな忙しいんだなー」

ことりは一人で帰路についた。

「でも久しぶりだなー……一人で帰るのは……いつも穂乃果ちゃんと海未ちゃんと一緒だったし……」

ことりは周りの景色を見ながら言った。

そしてサーッと風が吹き、草木とことりの髪を揺らした。

ナオキ宅……

「よし、みんな集まったな……」

ナオキは言った。

「いやあードキドキしたよー」

穂乃果が言った。

「さ、明日のことを話し合いましょう」  
海未は言った。

10分後……

「じゃあ、そういうことで……みんなOKか？」  
「はーい」

南宅……

プルルルル…プルルルル…

「ん？穂乃果ちゃんからだ…もしもし？」

「もしもしことりちゃん？明日暇？」

「暇だけどー…どうして？」

「えつと…久しぶりに幼なじみ4人で出かけたいなーって」

「いいねー、わかった！」

「あ、あの公園で待ち合わせね！」



「わかった！バイバーイ！」

「バイバーイ！」

「幼なじみ4人つてことは私と穂乃果ちゃんと海未ちゃんとナオキ君だね！たのしみだなあー……」

高坂宅……

「よし！3人にメールだ！」

ことりちゃんには伝えたよ！

集合はあの公園で！

絢瀬宅……

「お、穂乃果からメールだ……うん！まずは上手くいったみたいだな」

「明日頼むわよ？」

絵里が言った。

「ああ！」

「さ、ことりへのプレゼント作りましょう！」

「そうだな……」

ナオキは絵里と一緒にことりへのプレゼントを作っていた。

「いたっ……」

「!?どうしたの？指切っちゃった？」

「大丈夫だよ絵里……」

「大丈夫じゃないわよー……ほら、血がにじんできてる……すぐに手当しないと……」

「大丈夫だって、こんなもん睡かけてたら治るよ……」

「そう？……なら……」

そう言うとき絵里はナオキの怪我した指を舐めだした。

「ちよっ………絵里……なにを……」

「ん？睡かけてたら治るってナオキ言ったから……」

「そ……そうか………あ……ありがと……」

絵里はそのままナオキの指を舐め続けた。

「さ、これでよし！絆創膏はりましょうか……」

「あ………ああ………（絵里って結構大胆だな………）」

そう思うナオキだった。

そしてことりへのプレゼントが完成した。

「できたー！」

「ハラシヨー！うまくできたわね」

「ああ！これも絵里のおかげだよ！」

「そ…そんなこと…」

「じゃ、おれは帰るな。明日に備えて寝ないとな…」

「そうね…」

「すまん…おれがドジなばかりに…」

「いいのよ…指…大丈夫？」

「ああ…ありがとう…」

そう言うとナオキは絵里の頭をなでた。

「もう…なによ…ふふつ…はやく帰らないと明日寝坊するわよ？」

「そうだな…じゃあ、また明日！」

「バイバイ！」

ナオキは帰ってそっこう寝たのだった。

翌日12日……

神田公園……

「ここも久しぶりだなー……」

ナオキは言った。

「あー！ナオキくん！おーい」

穂乃果はナオキを見つけると声をかけた。

「おー穂乃果、おはよう」

「おっはよー！」

「おはようございませす…穂乃果が早いなんて珍しいですね」

海未が来て言った。

「あ、そうだ！2人にお願ひがあるんだ！実は……」

「ごめーん！待ったー？」

こつりが慌てて来た。

「ううん…今来たところだよ」

「よかったー……」

「さ、行こうか」

そして4人は歩き出した。

「でも久しぶりですね……この4人で出かけるのは」

海未が言った。

「そうだねー」

穂乃果は言った。

「ああ……おれは大阪に行つてたからな……」

ナオキは言った。

「何年ぶりだろー?」

ことりは言った。

「うーん……10年ぶりぐらいですかね?」

「ほえー……」

ショッピングモール……

ゲームセンター『エンジョイ・センター』

「ねえねえ!プリクラ撮ろうよ!」

穂乃果が言った。

「海未ちゃんは撮ったことなかったっけ？」

「いえ……1度だけ弓道部の試合帰りに撮りましたよ」

ことりと海未は言った。

「さーはやくはやくー！ナオキくんもー！」

穂乃果はそう言っってことりと海未の手を引つ張った。

「ハハハ……」

撮影後……

「さ、次はデコレーションだな……」

「私やるよー」

ことりは言った。

「ことりー！」

「どうしたの？海未ちゃん……」

「その……ついてきて下さいー！」

「ええー……じ……じゃあ、行つてくるうー……」

海未はことりを引つ張つて行つた。

「よし！穂乃果今だ！」

「うん！」

10分後……

「ごめーん……写真は？」

「ことりは言った。」

「また後で渡すよー」

穂乃果は言った。

「ナオキくーん！これ取って！」

穂乃果がくまのぬいぐるみを指さした。

「なんでおれ？」

「絵里ちゃんと言ってたよ？ナオキくんUFOキャッチャー上手だった」

「ああ……わかったよ」

ナオキは500円入れた。

「もうちよつと！もうちよつと！」

「ナオキくん頑張つて！」

穂乃果とことりが言った。

「ちよつ…穂乃果…揺らすな……」

「あ……」

4人は声を合わせた。

「穂乃果……」

海未が言った。

「ごめんなさい……」

「大丈夫だよ、まだ1回しかしてないし……」

そしてナオキは2回目でゲットした！

「すごい！本当にナオキくんうまい！」

「あと3つ取るか……」

そしてナオキはあと3つくまのぬいぐるみをゲットした。

「はい、ことり、海未」

「え……いいの？」



「ありがとうございます…」

「あと1つはだれにあげるの？」

「絵里にあげるつもりだ」

「やっぱり…」

「ナオキと絵里は仲がいいんですね…」

「あ…ああ…／／／／」

ナオキは顔をあかくした。

「あー、顔あかくなつたー」

穂乃果が言った。

「う…うるせー…／／／」

穂乃果と海未とことりは笑った。

1時間後…

「そろそろ行くか」

「そうですね…」

「うん！」

ナオキと海未と穂乃果は言った。

「どこに行くの？」

ことりは言った。

「内緒だ…行くぞ」

ナオキがそう言うのと4人は歩き出した。

(どこに行くんだろ……) ことりは思った。

しばらく歩くと穂乃果の家に着いた。

「あれ？穂乃果ちゃんの家……？」

「ただいまー！さ、あがって……」

穂乃果が言った。

「おじやましまーす……」

「ことり…先に行け……」

ナオキは言った。

「え…うん……」

ことりはドアを開けた。すると……

パン！パン！パン！パン！パン！パン！

「わっ！」

「せーの！」

「ことり！ことりちゃん！誕生日おめでとー！！」

絵里の掛け声でみんなが声を合わせて言った。

「えっ……えっ……」

ことりは驚いた。

「えへへーびつくりした？」

凜が言った。

「うん……みんな……ありがとう……」

ことりは涙目で言った。

「ことりちゃん泣いてる!? もう！ナオキくんのせいだよ！」

「なんでおれ!？」

「うふふ……アハハハハ……」

「ハハハハハ……」

そしてみんな笑った。

「さ、はやくケーキ食べましょー！ことりのためにチーズケーキ作ったのよ」

にこが言った。

「わー！」

穂乃果は電気を消した。

「うっ……」

絵里はナオキの服を掴んだ。

（絵里……怖いのか……）ナオキは思った。

そしてナオキは口ウソクに火をつけた。

「せーの……」

「ハッピーバースデートゥーユーー！ハッピーバースデートゥーユーー！ハッピーバースデーア……ことりー！ことりちゃん！ハッピーバースデートゥーユーー！！」

ナオキの合図でみんなで声を合わせて歌った。

「ふー……」

ことりは口ウソクを消した。

そしてみんな拍手をした。

「さ、食べよー！」

「穂乃果！ことりが先ですよー！」

「わかってるよー」

穂乃果と海未が言った。

そしてみんなことりにプレゼントを渡した。

「ことり、このケーキは私からのプレゼントよ！」

「ありがとうにこちゃん！」

「凜からはこの服にゃー！」

「わー！かわいい！凜ちゃん、ありがとう！」

「わ…私からは花の髪飾りを……」

「ありがとう、花陽ちゃん！」

「私はことりに曲を作ったの」

「曲を？」

「ええ…『スピカテリブル』って言うの」

「ありがとう、真姫ちゃん！」

「ウチからはお守りや！」

「お…お守り？あ…ありがとう、希ちゃん…」

「私からはこの手作りの首飾りよ」

「わー！綺麗！絵里ちゃんが作ったんだー」

「ええ！」

「ありがとう、絵里ちゃん！」

「おれからは手作りのプレスレットだ……」

「ナオキくんが作ったの？」

「あ……ああ……」

「ありがとう、ナオキくん！」

「私からは着物です」

「着物？」

「はい！初詣にでも来てください！」

「うん、着るよ！ありがとう、海未ちゃん！」

「私からはこれ！」

「これって……」

「プリクラの……あ……」

「……ことに渡したのはプリクラの写真そこには手書きでこう書かれていた。

『ことりちゃん！一生ともだちだよ！』

「穂乃果ちゃん……あの時に……」

「そうです…穂乃果がそうしたいと言うので協力しました」

「ああ……」

「ことりちゃん！ずっとともだちだからね！」

「……………うん……………ありがとう……………ずっと……………ともだちだよ！」

そうしてケーキを食べ、誕生日会は

終わりに近づいた。

「じゃ、私からみんなにお返し！」

「ことりちゃん？」

「走り出す　　ベリベリいとれ〜いん　　甘くてすっぱくて〜」

ことりはソロ曲『ぶる〜ベリい♡とれいん』を歌った。

「君の遅刻を願っちゃ〜う　　ぶる〜ベリい♡とれいん」

そしてみんな拍手をした。

「もう一曲いくよー！」

「まさか……」

「うん！真姫ちゃんからのプレゼント…『スピカテリブル』を歌うよ！」

「風がさらう落ち葉を〜　　見守る夜のひかり……」

「ただ恋ゆえに嘆くだけなら変わらないよ……変わりたいのよ」

そしてみんな拍手をした。

（あそこにセリフつけたらいいかも……うふふ……）ことりは思うのだった。

「みんな！ありがとう!!」

ことりは言った。

（今日は……本当に……最高の1日だよ！）



## 妄想外伝「ナオキの誕生日」

9月15日……

μ、sの9人はナオキがいない間に部室で話し合っていた。

翌日の9月16日は……そう！香川ナオキの誕生日なのだ！！

「ただいまー」

ナオキが帰ってきた。

「あ……あらナオキ……おかえりなさい」

絵里が慌てて言った。

「ん？どうしたんだ？そんなに慌てて？」

「あ……慌ててないよー、それよりどうだった？」

穂乃果は言った。

「ああ……μ、sの知名度なかなか上がってきたな、しかもさ、行ったどの中学校でもサインくれーって言われるんだよ」

「えー！ナオキくんずるーい！」

穂乃果が言った。

「なんでおれなんだろう？」

「ナオキくんも人気なんじゃない？」

希は言った。

「ふーん……さ、練習するぞー」

「はーい」

ナオキは足早に屋上へむかった。

「いい……みんな、作戦通りに……」

「うん……」

練習後……

帰り道……

絵里とナオキは腕を組んで帰っていた。

「ねえナオキ、明日も色んなところまわるの？」

「ああ……本部にな……でも、sのためだ、頑張ってくるよ」

「無理しないでね……」

絵里はナオキに上目遣いで言ってきた。

「あ……ああ……わかってる……（上目遣い……やべえ……）」

「じゃあね、ナオキ！明日頑張ってね！」

「ああ！」

そして絵里とナオキは自分の部屋に入っていった。

翌日……

ナオキはラブライブ！実行委員会本部にいた。

「おーナオキ来たかー」

晋三が言った。

「おじさん、何か用？おれ色々忙しいんだけど……」

ナオキが言った。

「これを渡そうと思ってるな」

晋三はナオキにプレゼントを渡した。

「これって……」

「腕時計だ、誕生日おめでとう」

「おじさん、覚えてとったんか……ありがとう」

「さ、頑張ってるかい！」

晋三はナオキの背中を叩いた。

「いつてえーな……」

「今日はありがとうございました！」

「こちらこそ、またよろしくね」

「はい！失礼します！」

ナオキはドアを閉めた。

「やあ、ナオキくんじゃないか」

そう声をかけてきたのはラブライブ！実行委員会副会長の田中純一郎だった。

「田中さん……」

「会長から聞いたよ、今日は誕生日なんだって？」

「はい」

「おめでどう……これは私からのプレゼントだ」

「あ……ありがとうございます」

「それではな」

純一郎は歩いていった。

「やべ、もうこんな時間だ……帰んなきゃな……」

ナオキは家へと歩いて行った。

「やつほーナオキくんじゃん！」

「(げっ……) やあ……ねえちゃん……」

「これ！プレゼント！誕生日おめでとう！」

「あ……ねえちゃん……覚えててくれたのか……ありがとう……」

「いえいえ！μ s、応援してるからね！」

そういうといとこのアナウンサーリコは走っていった。

ナオキ宅前……

「やつと帰れた……フアンに捕まったり……ま、プレゼントもらえたからいいけど……」  
そしてカギをさして回した。

「あれ？開いてる？……絵里かな？ただいま……絵里、いるのかー？」  
そしてナオキはリビングにむかった。

ドアを開けると……

パン！パン！パン！パン！パン！パン！パン！パン！パン！パン！

「わっ!? な…なに?」

「ナオキ! ナオキくん! 誕生日おめでとう!!!」

μ sのみんなが声を合わせて言った。

「え……え…覚えてたのか…? てか知ってたのか……」

「私がいみんなに教えたの!」

絵里が言った。

「そうだったのか……あ……あ……ありがとう……// //」

ナオキは顔をあかくして言った。

「あーあかくなつたにやー!」

凜が言った。

「さ、ケーキ食べよ! 私とにこちゃんと絵里ちゃんで作ったんだー! だからこれは3

人からのプレゼント」

「絵里は張り切ってたからねー」

にことりとにこは言った。

「ちよつとにこー! // //」

絵里は顔をあかくして言った。

「さ、食べよ!」



真姫が言った。

「だから泣いてねーって……」

ナオキは涙をふく。

「ほらえりちー!」

希はそういうと絵里をおした。

「ちよつと希!……キヤツ!」

「うわっ!」

絵里はナオキにぶつかり一緒にこけた。

「絵里ちゃん! ナオキくん! だいじよう……ぶ……ぶ……ふえ?」

花陽はそう言ったが目の前の光景を見て驚いた。

ナオキと絵里は倒れたひょうしにキスしていた。

「ん!!……」

「ん!……ごめんなさい……」

絵里は起き上がるとそう言った。

「いや……全然……」

ナオキは言った。

「破廉恥ですう!! 大勢の前でこんな……」



「まあまあ……」

こころは海未をおさえた。

「てかえりちいつまでナオキくんにつてるん？」

希はニヤニヤしながら言った。

「あ、ごめんなさい……」

「お……おう……／＼／＼」

2人は顔をあかくした。

そしてみんなからプレゼントが手渡される。

「これ！穂乃果とお母さんとお父さんと雪穂と4人から！」「ありがとう……ほむまんなー」

「ただのほむまんじゃないよ……ナオキくん限定ほむまんだよ！」

「ま……まじか……3人にもありがとうって言っといてくれ」

「うん！」

「私からはこれです」

「ありがと……う……重っ！なんだこれ……だ……ダンベル……ハラショー……」

「ナオキは男性なのに私たちより力がないのは致命的だと思ったので」

「あ……ありがとう……海未……使わせてもらうよ」

「凜からは……じゃーん、この服だにゃ！」

「おう……ありがとう」

「あれ？反応薄いにゃ？」

「おれ……あんまり服に興味無いし……でもせつかくもらったんだ早く着ないとな」

「エヘヘ」

「わ……私からは米俵を……よいしょ！」

「おう……こんな……ありがとう、花陽……」

「わ……私からはこれよ」

「これは……ネックレスか？」

「ええ……」

「高そうだなー……」

「そう？安い方よ」

「へー」

「5000円くらい？」

「うっ!!ふえ!?!ご……5000……ハラシヨ……いいのかこんなに高いのん……」

「いいのよ別に……」

「ありがとう……大切にするよ」

「ウチからはこの花束や！」

「ハラシヨー……どこから出したんだ」

「これがスピリチュアルパワーや！」

「ありがとう……」

(この花の意味は……ありがとう……) 希はそう思っていた。

みんなからプレゼントを貰って最高の笑顔になるナオキ。

「さて！最後に本日の主役香川ナオキくんから一言！」

希が言った。

「お……おう！」

え……えーつと……今日はこんな誕生日会を開いてくれてありがとう……

みんなと出会えてよかった、みんなと笑えてよかった……みんなと過ごせてよかった

……

今まで辛い思い出ばっかりだったけどみんなのおかげで立ち直れた……

本当にありがとう……これからも……よろしく……」

ナオキは照れながら言った。

プルルルルル……プルルルルル……

「ナオキくん、電話なってるよー」

「……」

「すまん……もしもし?」

「もしもし? ナオキ?」

「お……お母さん!」

「誕生日おめでとう」

「ありがとう……」

「寂しくない? 寂しかったらいつでも戻ってきてもいいのよ?」

「うううん……全然寂しくないよ……だって今の俺には最高の仲間と……絵里がいる

から……」

「絵里ちゃんと仲良くしてる?」

「ああ……」

「また絵里ちゃん連れて来なさいよ」

「わかった……じゃ、ありがとう……」

「ええ……元気だね……」

「すまんすまん、お母さんからだった」

「ナオキくんいいこと言うなー……」

希が言った。

絵里は顔をあかくしていた。

「最高の仲間だってー」

凜が言った。

「う……うるせーよ……でも本当のことだ……ありがとう……」

ナオキは言った。

「バイバーイ！」

穂乃果は大きく手を振った。

「ありがとうなー」

ナオキは言った。

そしてみんな帰っていき、ナオキは部屋へと入っていった。

「ねえ……ナオキ……」

「うん？」

「私からもう一つプレゼントがあるの……」

「もう一つ?」

「でもさつきは偶然あげることになっちゃったけど……」「ん?なんだろう……」  
すると絵里はナオキを抱きしめてキスをした。

「ん……」

「んー………(これか……)」

ナオキも絵里を抱きしめてキスをした。

「これが……私からのプレゼントよ……おめでどう……」

「ああ……ありがとう……」

ナオキと絵里はもう一度キスをした。

## 第27話「危機」

「で、ナオキ…何買ったの？」

絵里はナオキの部屋で夜に何買ったか聞いた。

「ああ……これだ」

ナオキが取り出したのは絵里が欲しがっていたゴーレムだ。

「これって……ありがとう！ナオキ！アハハ……かわいい！」

絵里は目をキラキラさせて言った。

「嬉しそうで何よりだ……」

ナオキは言った。

絵里はゴーレムにほっぺをスリスリしていた。

だがこのとき、ナオキはまだ知らなかった…

生徒会であんなことが起きていたなんて

「みんな、昨日はお疲れ様！」

「お疲れ様でしたー」

μ sは部室で話していた。

「大成功したみたいでよかったね！」

ことりが言った。

「そうですね」

海未が言った。

「よかったね！穂乃果ちゃん！」

凜がそう言つて穂乃果の方をむくと穂乃果は落ち込んでいた。

「ど……どうしたの？穂乃果ちゃん？」

花陽はでかいおにぎりを食べながら言った。

「具合でも悪いん？」

希が言った。

「うう………体重が増えたんだよー!!」

「えー……!!」

みんなが叫んだ。



「これはダイエットですね……」

海未が言った。

「そんなー……」

「んー……おにぎり美味しい」

「ねえ……かよちん……」

「どうしたの？凜ちゃん？」

「まさかとは思うけど……」

「ん？」

「かよちん！ちよつと来て！」

「凜ちゃん!？」

「どうしたんだ？」

ナオキは不思議に思っていた。

「きゃー……」

花陽の叫び声が聞こえた。

「!?どうした!?!」

ナオキは立ち上がった。

「多分……花陽も………」

絵里は言った。

「……………なるほど……………」

ナオキも状況を理解したようだ。

「ナオキくん！」

フミコが部屋に飛び込んできた。

「どうした!? フミコ……そんなに慌てて……」

「それが……書道部の予算が承認されたみたい……」

「なんだと!？」

「そんな!？」

「なんで!？」

ナオキと海未と真姫が言った。

「予算は予算会議前には通らないはず……」

「ナオキくん、理由わかる?」

絵里と希は言った。

「いや……とりあえず真姫! マチコを呼んできてくれ!」「わかった!」

「すまん、しばらくあける！」

「ええ……」

そう言うとなオキと海未とフミコは生徒会室に、真姫はマチコを探しに行った。

「あれ？なオキくんたちは？」

凜が言った。

「ちよつとしたトラブルでね……とりあえず……」

「穂乃果ちゃんと花陽ちゃんはダイエツトやで……サボったらわしわしMAXや

でー」

「はい……」

絵里と希がそう言うとなオキと花陽は声を合わせて返事をした。

生徒会室……

「……という事案が発生した、誰か知らないか？」

なオキが言った。

「私はなにも……」

「海未に同じ……」

「私も……」

海未と真姫とフミコは言った。

「マチコは？」

「わ……私も……です……」

「そっかー……とりあえず書道部に行ってくる」

「私もお供します！」

ナオキと海未は書道部へむかった。

(ごめんなさい……ナオキ先輩……)

「マチコちゃん? どうかしたの?」

「え……ううん……なんでもないよ……」

「ならいいけど……」

(ごめんね真姫ちゃん)

書道部……

「本当にごめん!!」

「すみません!!」

ナオキと海未は書道部の部長高橋筆子に頭を下げていた。

「そう………だったの………頭を上げて？ね？」

筆子は言った。

「あ………あ………」

「ナオキ………」

海未はまだ下を向くナオキを心配した。

「次の予算会議で結論を出す！だから………この承認は取り消して欲しいんだ………」

「うん………私も不思議に思ってたの………予算会議前なのになんでだろう？って………」

「生徒会のミスだったんだ………本当に………申し訳ない………」

「ナオキくんが全部背負う必要

なんてないよ………」

「そうですよ………ナオキ………」

「あ………あ………」

「わかった！他でもないナオキくんの頼みだもの！待つわ」

「高橋さん………ありがとうございます！」

「ありがとうございます！」

ナオキと海未は頭を下げた。

生徒会室……

「……でことで一旦取り消してもらったことになった」

「あとは予算会議で結論を出すということですが……」「これはなかなか問題よ……」

ナオキと海未とフミコは言った。

「私たちも頑張るわ……ね、マチコちゃん」

「うん……」

「マチコちゃん？」

「どうしたんだ？ マチコ……元気なさそうだけど……」「そ……そうですか？ 私は全然大丈

夫ですよー！」

「ならいいけど……とりあえず、すべての部の予算表はここにある……多分おれは……役に立ってない……」

「ナオキくん……数学苦手だもんねー……」

ナオキとフミコは言った。

「真姫、マチコ……どうぞ……」

「ありがとう……」

「ありがとうございます……」

海未は真姫とマチコに予算表を渡した。

「で…予算をどうやって割り振るかだな……」

「そうだねー……」

「でも来年は生徒が増えると思いますし、合計予算額からかんがえると後期の予算は各部の希望額にはとどけることができないかと……」

「計算…してみただけどやっぱり希望額には無理ね……」

「そうだね……（私の計算能力使ったらこんな問題すぐできる……でも……）」

「希望額にはとどかないなら…各部の何割か確保できる？」

「なるほど！」

ナオキがそう言うのと真姫は電卓をたたきはじめた。

「ま……真姫ちゃん…すごい……」

「ハラシヨォー……」

「おお……」

フミコとナオキと海未は驚いた。

（それじゃダメだよ…）マチコはそう思っていた。

「ダメ……」

「そうか……とりあえず、みんな今日は帰ろう…明日の放課後残ってくれ」

「はい！」

「海未と真姫は先に帰ってくれ…おれは行くところがあるから」  
「わかりました」

(ナオキ先輩……………)

職員室前……………

「あ、先生…少しお話が……………」

「どうした？」

「昨日…生徒会室の鍵だれかとりにきましたか？」

「ああ……………たしか……………マチコだな……………」

「マチコが？」

「ああ……………集まった予算表を置くからって」

「そうですか……………ありがとうございます……………」

ナオキは歩いていった。

「犯人はマチコしかいないか……………でも……………なんで……………」

マチコ宅……………

「もしもしお兄ちゃん……………うまくいつてるよ……………」



「そうか……よくやったな……」

「でも……ナオキ先輩犯人探ししてるみたいだよ」

「そうか……ま、頑張ってくれ……妹よ……」

「はい……」

ツイッター……

「みんな……ごめんなさい……」

マチコは夜空を見上げて言った。

ナオキ宅……

「マチコ……なんで……」

プルルルルル……プルルルルル……

「絵里か……もしもし?」

「もしもしナオキ、どう?」

「ああ……結構厳しいな……」

「そう……頑張つて……としか言えないわね……」

「ありがとう……穂乃果と花陽は?」

「ちゃんとしてるわよ」

「そうか……明日も頼んどくわ」

「わかった」

「それじゃ……おやすみ……」

「おやすみナオキ……」

「……問題が一気に2つ……」

翌日……

生徒会室……

「ちよつと話がある……犯人がわかったかもしれない……」

ナオキが言った。

「えっ!？」

「ほんと!？」

「誰?」

海未とフミコと真姫は言った。

マチコは唾をのんだ。

「……………一昨日、生徒会室の鍵を借りに行ったのは……………マチコ……お前だけだ……………」

「えっ!？」

「マチコ……ちゃん?」

ナオキの言葉に海未とフミコは驚いた。

「マチコ……お前……なのか?」

「そ……それは……」

ナオキはマチコに言った。

しばらく沈黙になった。

それを解いたのは……真姫だった。

「何言ってるのよ!!」

「真姫……ちゃん……」

「だがな……鍵を借りに行ったのは……」

「だから何よ! マチコちゃんって決まった訳じゃない!! マチコちゃんは鍵を借りに行っただけで……そうだわ! 鍵を開けてトイレに行っている間に誰かが入ったんだわ!」

「誰が?」

「それは……しよ……書道部の部長の高橋先輩よ! あの人しかいないわよ! そうなのよ!

そうなのよね？マチコちゃん！このバカに言っただけでやっつて！マチコちゃんはやってないって!!」

真姫は叫んだ……これまでにないくらい……真姫の目からは涙がこぼれていた。

「真姫……少し落ち着きなさい……」

「そうよ真姫ちゃん……」

「なによ!!海末も……フミコさんも……マチコちゃんが犯人だつて言うの!?!」

「そういう訳では……」

海末は言った。

「おれはマチコと思うな……」

ナオキは言った。

「ナオキ!?!」

海末は言った。

「あなた……なに言ってるのよ!!なんでマチコちゃんだつて決めつけるのよ!高橋先輩かもしれないでしょ!!」「残念ながら……それはない……」

「どうして……」

「それはな……高橋さんもライブに来てたからだ……」

「はっ……」

「それはおれが確認している……」

「そ……それなら……他の誰かが！他の誰かが！」

「もういいの……真姫ちゃん……」

マチコが言った。

「マチコ……ちゃん？」

「もういいの……もう……」

「なに言ってるの？マチコちゃんはやってない！そうなんですよ？このバカが勝手に言ってるだけよ！ナオキがマチコちゃんを陥れようと……」

「真姫!!」

海未は立ち上がった。

「う……海未……」

「真姫ならわかるでしょう……ナオキが……そんなことする人ではないと!!」

「それは……そうだけど……でも!!」

「真姫ちゃんやめて!!……もういいの!!」

マチコが叫んだ。

「マチコ……ちゃん？」

「ナオキ先輩は悪くない……悪いのは……私なの……」 「何言ってるの？マチコちゃん

……」

「そのままの意味……だよ……わ……私がっ……やったの……」

「え……」

「ウソじゃないの!! ナオキ先輩、園田先輩、フミコ先輩、真姫ちゃん……全部話します……」

「マチコ……なんでこんなことを……ただのミスだよな? わざとじゃないよな? 間違っ  
て入れただけだよな? おれはわざとではないと信じてる……」

「そ……そうね……ミ……ミス……なら……仕方ないわよ……正直……に……言えば……よ  
かったのに……」

真姫は涙をこらえるように言った。

「いいえ……わざとです……」

「……え?」

ナオキとフミコと海未と真姫は声を合わせて言った。

「わざと……だと……なんで……なんでだマチコ!!」 「ナオキ、落ち着いて……」

海未が言った。

「すまん……なんでなんだ? 理由を聞かせてくれ……」

ナオキは深呼吸して言った。

「はい……兄から命令されました」

「マチコのお兄さんから？」

ナオキは言った。

「はい」

「なんでマチコのお兄様が？」

海未が言った。

「私の兄は……ある学校で生徒会長をしています……」

「それが……なんで？」フミコが言った。

「ある学校とは……『大坂学園』、ナオキ先輩が前にいた学校です」

「なっ!!まさか……マチコ……お前……ミツヒデの……」

「はい……ミツヒデが……香川ミツヒデが私の兄です……」

「たしかその人はナオキを陥れた……まさか……」

海未は気づいた。

「はい……私はあの日……兄に電話で命令されました。『予算表を承認ボックスに入れてそれが問題になればまたあいつは居場所を失うだろうからやれ』と……私は断ろうとしました……でも……兄は怖いんです……逆らえば……何をされるか……」

「なによ……それ……」

フミコは言った。

「それが私の兄なんです……それが香川ミツヒデという男なんです……兄はずっとナオキ先輩のことが嫌いで……私はそれを近くで聞いていました……でも……止められなかった……そしてこんなことまでしてしまつて……」

「そつか……だからマチコは名字を名乗ろうとしなかつたのか……おれと同じく……」

「はい……」

「マチコちゃん……」

「真姫ちゃん……」

「マチコちゃんは悪くないじゃない……悪いのはそのお兄さんじゃない……ね？」

「ごめん……真姫ちゃん……」

「なんで謝るのよ……なんで……」

「兄が考えたのを私は実行した……実行犯なのよ……私も悪いの……」

マチコの目からあふれる涙……真姫からも……

「なあ……マチコ……お前は……どうしたい？」

「どうしたい……つてどういうことですか？」

「自分の犯した罪を償うか否か……」



「もちろん……償います！私の計算能力を使えばこんな問題……すぐに解決できます！」

「なら、やってみな……」

「はい!!」

マチコは涙を拭いて机にむかった。

(これが私がここでできる最後の仕事……お兄ちゃんのことだ……きつと私は大阪に帰ることになる……なら!!)

「す……す……す……」

「あの計算速度……すごいです……」

「しかも電卓を使ってない……」

「マチコちゃん……」

「できました……書道部だけ少し多めにしたら完璧です……どうぞ……」

ナオキはチェックした。

「これは……書道部以外は予算がぴったり……」

「マチコちゃん……すごい……」

真姫は言った。

「あと……私……大阪に帰ります……」

マチコの突然の言葉に一同が啞然とした。

「マチコ……なにもそこまでしなくても……」

海未が言った。

「いいえ……私の兄のことなら……私に帰ってこいと命令するでしょう……」

「……間違いない……あのミツヒデならしかねん……」

ナオキは言った。

「でも兄が私を帰ってこさせる一番の理由は……」

マチコは一瞬ためらった。

「それは……私は大坂学園スクールアイドル『ナニワオトメ』のリーダーだからです

……」

みんなが驚いた。

「ウソ……だろ……」

「そんな……」

「マチコちゃんがスクールアイドルで……しかもリーダー？」

「なんで？ マチコちゃんはまだ1年生じゃない……それってミツヒデって人の妹だから

？」

ナオキと海未とフミコと真姫は言った。

「それもあるけど……私……みんなよりすごいから……どんな先輩よりも……ダンスや歌が上手だから」

「そう……なの……」

「ごめんね……真姫ちゃん……みなさん……私、皆さんをずっと騙して来たんです……でも……でも……嫌だった……辛かった……だって……みんな……優しいんだもん……こんなみんなを騙すなんて嫌だった……心が痛かった……」

マチコは涙を流しながら言った。

「マチコちゃん……」

「真姫ちゃん……ごめんね……親友……だったのに……」「ううん……これからもずっと……ずっと……と……親友……なんだから……」

「うん……」

真姫とマチコは抱き合って泣いた。

「ちよつと……でてくる……」

「ナオキ……」

廊下……

プルルルルル……プルルルルル……

「おやおや……君から電話なんて珍しいね……」

「ミツヒデ……てめえ……」

「どうしたんだい？……ああ……マチコのことバレちゃったか……」

「てめえ……変わってねーな……自分の妹だろ!!!なんで……なんであんなことさせた

!!」

「マチコが望んだことだ」

「いいや！マチコはそんなこと望んでない!!本人の口から聞いた!!」

「ほほう……そうかい……なら……マチコがおれの『ナニワオトメ』のリーダーだってこと

もっ……」

「ああ……聞いたよ……」

「まあいいさ……マチコにはこっちに帰ってきてもらう」  
「ミツヒデ……てめえは……お

れの仲間を傷つけた……マチコと親友の仲のおれの大切な仲間を……なにより……マ

チコ自身を！」

「ハハハ……ジャーナは変わらないな……人思いで……」  
「お前とは真逆だよ……」

「フフフ……違う……」

「もう切るぞ……おれはてめえを絶対許さないからな……」

「おー怖い怖い……ではな……」

ツーツーツー……

「くそっ……くそっ……くそっ!!!」

ナオキは壁を思いつきり叩いた。

生徒会室……

「落ち着いたか？」

「はい……」

「ええ……」

マチコと真姫は言った。

「さつき……兄からメールがありました……戻ってこいと……」

「そんな……」

真姫は言った。

「ごめんね……真姫ちゃん……でも楽しかった……真姫ちゃんと過ごした日々……皆さんと過ごした日々……この音ノ木坂学院で過ごした日々は」

マチコは笑顔で言った。

だが涙が流れていた。

マチコは真姫との日々を思い出していた。

真姫とマチコはある日直で一緒になった……

「西木野さんって、sの作曲してるんだよね！」

「うん……」

「またなにか聞かせて欲しいな！」

「しようがないわねー」

2人はこの会話から仲良くなった。

そしてしばらくして2人が生徒会に選ばれた。

「やったー！西木野さんと一緒だね！」

「うん！」

「しかも同じ役職！」

「そうだね……」

そして仕事をしているうちに2人は親友になっていった。

「ねえ……私達名前で呼び合わない？マチコちゃん……」「う……うん！真姫ちゃん!!」

2人は数学は100点、学年の1、2を争う仲だった。

真姫は良きライバルであり、なにより……親友だった。

かけがえのない存在だった。

それを思い出してさらに涙があふれてきていた。

「マチコ……また会えるさ……ラブライブ！の本戦……全国大会で……」

ナオキはマチコの頭に手を置いて言った。

「はい……必ず……勝ち上がってきます……だからμ'sも……」

「ああー！」

「もちろんです！」

「ええ……」

ナオキと海未と真姫は言った。

そしてその日は解散となった。

ナオキは真姫とマチコと一緒に帰らせた。

「真姫ちゃん……本当にありがとう……」

「私こそ……」

「私……絶対……勝ち上がってくるから！真姫ちゃんも頑張つてね！」

「ええ……当たり前よ！」

2人は笑ったがその笑い声は次第に泣き声に変わっていったのだった……

「真姫ちゃん……やだよお……」

「私もよ……マチコちゃん……」

「いつか会えるとわかってる……」

「わかってるけど……でも……」

2人は抱き合って泣いた。大声で泣いた。

少し冬に近づいてきた秋の夕日のもとで……

帰り道……

「そうだったの……マチコちゃんが……」

「ああ……おれは……ミツヒデを……絶対許さない……」

「ナオキって本当に人思いなんだから……そこが好き……人のために泣いて、人のために笑って、人のために怒って……昔からそうだったわね……」

「そう……か……」

「好きよ……だーいすきー！」

絵里はナオキにくっついた。

「ああ……おれも絵里のこと大好きだ……愛してる……」



翌日……

1年生教室……

(マチコちゃんは大坂学園に帰って行った。

私は1日中外をみていた。

昨日も練習も休んだ……

穂乃果と花陽のダイエットは成功した、予算もマチコちゃんの案を通した。

だけど……

マチコちゃんは音ノ木にいない……

会いたい……いますぐ会いたい……)

「まーきちゃん!!」

「わっ!なによ……凜……それに花陽……私は練習休むって……」

「真姫ちゃん……元気なさそうだから……心配で……」

「なっ……なによ……別に落ち込んでなんか……」真姫は顔をあかくした。

「わかるよ真姫ちゃん……マチコちゃんとは仲良かったもんね……」

「そう……だよね……凜たちよりも……」

真姫は花陽と凜の頭にチョップした。

「もう！2人とも…何言ってるのよ！」

「真姫ちゃん？」

「真姫ちゃん…」

「し…親友は…その…マチコちゃんだけじゃないんだから…大切な友達は…マチコちゃんだけじゃないんだから…花陽と凜も…その…私にとっては…親友よ…大切な…友達…なんだから…」  
／／／

真姫は顔をあかくして言った。

「真姫ちゃん…」

「真姫ちゃん…大好きにやー！！」

凜は真姫に抱きついた。

「もう…なによー…ふふつ…」

「ハハハ…アハハハ…」

3人は笑った。

「ふつ…真姫はもう大丈夫かな…」

ナオキは1年生の教室の外で言った。

(マチコちゃん……私……大丈夫だよ！マチコちゃんも頑張つて！)  
真姫はそう思ったのだった。

大坂学園……

「ただいま帰りました……お兄ちゃん……」

「マチコ……おかえり……さ、着替えなさい……練習しよう」

「はい……(真姫ちゃん……私……頑張るから……でも……やつぱりお兄ちゃんは怖いよ……)」

次回へ続く

## 第28話 「希の望みはμ☒sの望み」

UTX高校……

会議室……

今日は2週間後に控えた第2回ラブライブ！東京地区予選決勝の4チーム……

UTX高校のA―RISEのリーダー綺羅ツバサと生徒会長の渡辺千代子、

御茶ノ水第一高校のEast heartのリーダー東水音と生徒会長の東音美、

目黒学園のMidnight catsのリーダー江戸川黒子と生徒会長の佐藤・ア

リス・沙織、

そして音ノ木坂学院のμ☒sのリーダー穂乃果……の代理の絵里と生徒会長のナオキが集まっていた。

「皆さん集まっていたありがとうございます……今日は予選決勝を共に戦う4チームの顔合わせするために集まってもらいました……」

渡辺は言った。

（男おれだけ……）

ナオキは不安を感じていた。

「でも結局来週会えるでしょう？なんで今日なの？」

音美は言った。

「ま、いいじゃないですか…それにその為でもありますしね…」

ナオキは言った。

「なんでなのですか？」

アリスは言った。

「それはですね、来週のはテレビやネットで中継もするので打ち合わせみたいな感じで

…」

「なるほどーす」

アリスは手を合わせた。

「それでは本題に入りましょうか…」

渡辺は話を始めた。

「それでは皆さん、これでおひらきにします…ありがとうございます」  
「ありがとうございます」

「終わったー……」

ナオキは言った。

「ナオキくん……だったわね……」

渡辺が近づいてきた。

「はい！渡辺さん……」

「それに……元音ノ木坂学院生徒会長の絢瀬さんも……」 「お久しぶりね……」

渡辺と絵里は睨み合った。

「え？なに……火花散ってるんですけど……ツバサさん……どういことですか？」

「わ……私にも……」

ツバサは苦笑いした。

「ふん、よくもまあ……廃校にならずに済んだわね……残念だわ……うちのところの生徒が増えると思ったのに」

「ふん、 $\mu$   $\boxtimes$   $s$ をなめないでちょうだい……まあこれから？あなたのところの生徒がう

ちに来るかもですけどね」「さあ…どうかしらね？」

「わからないわよ…予選決勝までは」

「そのようね…ま、A—R—I—S—Eが勝つに決まってるんだけど」「ふん、μ☒sが勝つに決まってるわ」

(なにこれ怖い……………)

ナオキは思った。

「それでは失礼するわね…渡辺さん」

「ええ…また会いましょう…絢瀬さん」

UTX高校前……………

「なあ絵里、渡辺さんと何かあったのか？」

「別に…ちよつと嫌いなだけよ」

「はつきり言うなー」

ナオキと絵里は話していた。

2人はマンションにむかって歩いていった。

そして1週間後……

「さーて今日は第2回ラブライブ！東京地区予選決勝に出場する4組みのチームの皆さんに来てもらいましたー！」

リコはいつも通りのハイテンションだ。

「それでは出場チームを紹介しまーす……」

まずは1位のA—RISE!!続いて、2位のEast heart!!3位のMidnight cats!!そして最後は4位のμ's!!

以上4チームが予選決勝で戦います！それでは1チームずつ話を聞いていきましょー！まずはμ'sから！」

穂乃果はリコにマイクをむけられた。

「あつ……はい！私たちはずっとラブライブ！優勝を目標に頑張ってきました！なので！私たちはこの大会で優勝します！」

するとたくさんのシャッター音と歓声が響く。

「あれ？」

「す……すすすす……い！いきなりでした優勝宣言！」



（穂乃果……言いやがった……）

4校の会長は端で待機していた。

3校の会長の目がナオキの方にむいた。

（視線が怖い……）

「ナオキくんいい度胸じゃない……」

渡辺は怖い顔で言った。

「アハハハハ……（4人とも怖いよ……タ、レ、カ、タ、ス、ケ、テ、エ、!!）」

「チョットマツテテー」

「花陽いきなりどうしたのよ？」

「いや、だれかが『タ、レ、カ、タ、ス、ケ、テ、エ、!!』って言ってたような……」

「気のせいよ……」

花陽とにこは話していた。

「ついに……ここまで来たんや……」

希は言った。

その後Midnight catsとEasst heartのも終わり……

「そして最後はA—R—I—S—Eだ!!」

リコはツバサにマイクをむけた。

「はい……この予選決勝は本戦に匹敵するほどのものになると思いますが……勝つのは……A—RISEです」

そしてまた歓声とシャッター音が響く。

「勝者はA—RISEで決まりですね……」

渡辺が言った。

「NONO……Midnight catsが勝ちます」

アリスが言った。

「ふん……East heartが勝つのだよ」

音美は言った。

「いやいや……μsが勝たせてもらいますよ」

ナオキが言った。

はやくも会長たちの間で火花が散っていた。

その後音ノ木坂学院……

部室……

「穂乃果！なんで堂々と優勝宣言しちゃってるのよ！」  
にこが言った。

「いやーつい……」

穂乃果が言った。

「実際目指してるんだしいんじやない？」

真姫が言った。

「怖かった……」

ナオキは言った。

「よしよし……」

絵里はナオキの頭をなでた。

「曲の指定はないみたいですが……」

海未は言った。

「私は新曲がいいと思う」

にこは言った。

「そうだな……その方がいいかもしれないな……」

ナオキは言った。

「ウチは……このメンバーでラブソングを作ったらいいと思うんや」  
希は言った。

「ラブソング!?!」

9人は声を合わせていった。

「そういやム☒sにはなかったな……ラブソング……」

「確かに……」

ナオキと穂乃果は言った。

「なんでなかったんだらう?」

花陽がそう言うともみんなが海未の方をむいた。

「な……なんでこっち見るんですか……」

海未は言った。

「だって作詞は海未ちゃんなんやし……それに海未ちゃんは恋愛経験ないしな……」

「なんでないって決めつけるんですか!?!」

すると穂乃果とことりとにこと花陽は詰め寄った。

「あるの!?!」

4人は声を合わせていった。

「え……いや……その……」

「あるにや!？」

凜も加わった。

「凜まで……」

海未はどんな壁に追い詰められていった。

「ラブソングやったらえりちとナオキくんに任せとけば大丈夫やね!」

希は言った。

「は!？」

絵里とナオキは声を合わせていった。

「それもそうよね…付き合ってるんだし…」

真姫は言った。

「とりあえずえりちとナオキくんが中心で進めていこ?」希は言った。

「そうだねー」

「海未ちゃんには後で聞こうつと」

穂乃果とことりは言った。

「とりあえずえりち、ナオキくんが好きって言って!」「は!？」

「カメラまわすからねー」

「ちよつと希!」

「よいスタート！」

(いきなりなんかはじまった……)

希と絵里以外はそう思った。

「え……えーつと……」

「ん？」

絵里が照れながら言った。

(かわいい……)

ナオキはそう思った。

「す……好き……よ／＼／＼」

絵里は顔をあかくしながら上目遣いで目をウルウルさせながらナオキにそう言った。

「お……おれも……好き……だよ……／＼／＼」

ナオキは顔をあかくして言った。

(可愛すぎるだろ……)

そして顔を押しえてそう思ったナオキであった。

その後、ナオキはみんなのシュミレーションの相手にふりまわされた。

With花陽……

「これ…受け取ってください！」

「チョコか…ありがとう…」

「はい……」

「中に白米が入ってる……でもうまいな…」

With真姫……

「はいこれ…はやく受け取りなさいよ……」

「ありがとう…」

「べ…別にみんなにあげてるんだから勘違いしないでよね…」

「お…おう……」

With穂乃果……

「はいこれ穂乃果から！」

「ありがとう…」

「……」

「……」

「ほらセリフ！」

「セリフ？」

「裏に書いてあるでしょ？」

「裏？…ほんとだ……えーつと……毎年すまんな」「こ……今年のは……少し違うんだよ？」

「そうなのかい、どう違うんだー？」

「わかるでしょ……本命だよ……」

「ハラショー」

「もう！感情こもってない！もう一回！」

「えー！」

Withことり……

「はいこれバレンタインのチョコです！」

「ありがとう……」

「うまく出来てないかもだけど……」

「そうか？ことりは料理上手だからうまいと思うけどな……うん！うまいよ！」

「そう？」



「ああー！」

With凜……

「はいこれ！凜特製のバレンタインチョコにやー！」

「ありがとう……」

「頑張って作ったんだー」

「へー凜の手作りはレアだな」

「なにそれー、まるで凜が手料理しないみたいな言い方！」

「違うのか？」

「ちーがーいーまーすー！！シャーーー！」

「わわわ……わかった！わかった！すまんかった！」

With海未……

「練習お疲れ様でした」

「お疲れ様」

「その……これ……いつも頑張ってるご褒美です」

「これは？」

「その…今日はバレンタインと聞いたので…チョコを……」

「そうか…ありがとう…」

「いえ…いつもビシバシ稽古をしているのでたまには…と思つてですね」

「これからも指導よろしくな」

「はい…（恥ずかしいです……）」

With 希……

「はいこれ！バレンタインチョコ！」

「ありがとう……」

「でもまだ完成じゃないんや」

「ほえ？」

「いつくよー！希パワーたーつぷり注入…はいぷしゅ！」

「………ん？」

「ナオキくん！セリフ！裏に書いてあるよ！」

「またか……え？これやるの？」

「そうや！もう一回いくよ！希パワーたーつぷり注入…はいぷしゅ！」

「い………いただきましたー！！」

「よろしい」

Withここ

「はいこれ…」

「ありがとう…」

「あ…バッテリー切れた」

希が言った。

「なんでよ!？」

「つ…:…疲れた…:…あと腹いっぱい…:…」

ナオキは部室でぐったりしていた。

「お疲れ様ですね…」

海未は言った。

「なんでおれなんだよ…:…希…:…」

「だって男じゃん、しかもこの学校で唯一の」

希は録画した映像をみながら言った。

「でもなんにも決まらないねー……」

穂乃果は言った。

「やっぱり新曲は難しそうだね……」

「ことりは言った。」

「でももう少しだけ頑張りたい気もするわね」

絵里は言った。

「絵里ちゃんは反対なの？」

凜は言った。

「反対って訳じゃないけど……ラブソングは有利と思うのよね……」

「絵里？」

真姫は不思議そうに言った。

「明日また集まって決めよう！穂乃果の家で！」

穂乃果は言った。

「じゃあ、みんな資料になるもの持って集合な」

「はい！」

「ナオキ……私、希とよるところあるから先帰ってて」

「ああ…わかった…（こりや怒ってるな…）」

「それならナオキは私たちについてきて」

真姫は言った。

「ああ…」

ナオキは1年生と一緒に帰った。

「ねえ、絵里…怪しいと思わない？」

真姫はジューズを吸って言った。

「なんで？」

花陽は言った。

「あれだけ積極的なのだよ」

真姫は言った。

「それだけラブソングが歌いたいのかな？」

凜は言った。

「ナオキくんは何か知ってる？」

花陽は言った。

「いや…おれはなにも…」

ナオキは言った。

「ナオキにも話してない……か……」

真姫は言った。

「もしかして!?!『悪かったわねー今まで騙して』」

凜は立ち上がって絵里のモノマネをした。

「はらしよー……」

花陽は言った。

「あのメンバーに絵里ちゃんを加わったら勝てっこないよー」

「そんなわけではないでしょ……」

「なら……どうして……」

（もしかして……希の……）

ナオキは考えていた。

「ナオキ?」

「あ……ああ……何なんだろうな……とりあえず帰ろうか……みんな家まで送るよ」

ナオキは3人を家まで送っていった。

西木野宅……

「あら真姫おかえりなさい……あら？あなた……ナオキくん？」

郵便物を取った真姫のお母さんは言った。

「あ、西木野先生！お久しぶりです！」

ナオキは言った。

「真姫からは聞いてたけど顔を合わせるのはほんとに久しぶりねー」

「そうですね」

「真姫を送ってくれたの？」

「はい、すぐ暗くなるので……ちようど1年生とでかけてましたので」

「ありがとうね、またいらっしやいね」

「はい！じゃあな真姫」

「うん……」

ナオキは帰っていった。

「ふーんナオキくんかつこよくなつたじゃない……真姫、付き合っちゃえば」

「な……ママ！何言ってるのよ！ナオキには彼女もいるのよ……それに私はナオキのことそういう風にみてないし！」「ふふつ……さ、晩御飯にしましょう」

2人は家に入っていった。

絵里と希は2人で帰っていた。

「えりち……」

「どうしたの？」

「ちよつと強引すぎやない？」

「そうかしら……でも、ずつとやりたかったことなんでしょ？」

「うん……ほんと、おせっかいなんやから……」

マンション前……

「あ、絵里」

「おかえりなさい……」

「タイミングぴったりだな」

「そうね……」

「絵里……何怒ってるんだ？」

「別にー」

絵里は頬を膨らました。



「怒ってるだろ？」

ナオキは絵里の顔を覗いて言った。

「……………もう……………」

「ハハハ…あかくなつた」

「知らない！」

絵里は足早にマンションへ入っていった。

「ちよつ…待ってー、なんで怒ってんだよー」

ナオキは追いかけた。

「なによ…デレデレしちゃって…」

「デレデレ？……………ああ…あのシミュレーションか……………それで怒ってたのか？」

「……………うん……………」

「そっかー……………」

ナオキは絵里を抱きしめた。

「ちよつと……………」

「ごめん……………絵里の気持ち…わかってなかった……………おれはダメダメだな……………悪かった

……………」

「え…ええ……………わかった、許してあげるわ……………」

「ありがとう……」

「じゃあね、ナオキ！また明日」

「また明日！」

2人は部屋に入っていた。

翌日……

高坂宅……

「とりあえず、一人ひとり言葉を出していこう」

ナオキは言った。

「うーん……」

みんな考えた。

「好きだ！愛してる！……うーん、こんなじゃないよねー」

穂乃果が言った。

「好きっていう気持ちはどう表現するから……ストレートな穂乃果には難しいかもね

……」

絵里は言った。

「じゃあ参考に恋愛映画でも見ようよ！」

ことりが言った。

「恋愛映画かー……」

穂乃果は言った。

「どんな映画なん？」

希は言った。

「よく知らないけど……お母さんとお父さんがデートで映画館でみたっていった」

「へー……」

「たしかファーストキスしたとか言ってたな」

「ロマンチックやん！」

そして映画が始まった。

穂乃果と凜は開始10分で寝てしまった。

「ううう……」

「かわいそう……」

ことりと花陽と絵里は泣きながら言った。

「なによ……安っぽい話しね」

「ここは泣きながら言った。」

「にこつち、涙出とるよ……」

希が言った。

「絵里もなに泣いてんだよ……」

「感動的でしょ？」

「ま……まあ……」

「ううう……」

海未は端っこで言った。

「海未どうしたんだ？怖くねーぞ」

「そうだよ……感動的なシーンだよ？」

ナオキとことりは言った。

「わかってます……恥ずかしい……」

そしてシーンはキスしようとするシーンへ……

「ああー！」

「ことりと花陽と絵里は言った。」

絵里はナオキの手を握った。

「絵里……」

「なに?……あ……」

2人は顔を合わせた。

映画のシーンでは顔が近づいていった。

「絵里……」

「ナオキ……」

ナオキと絵里の顔も近づいていった。

「ぐはっ!!」

「ナオキ!!」

もうすぐキスする……というところで海未はナオキに座布団を投げ、テレビを消して、電気を付けた。

「恥ずかしすぎます! 破廉恥です! そしてナオキと絵里も!! こういうことは人前でするものではありません!!」

「ナオキくん……気絶してる……」

花陽は言った。

「え!? ちょ……ちよつとナオキ、大丈夫!?!」

絵里が近づいていった。

「もう海未ちゃん、手加減なしやん……」

「ナ…ナオキが悪いんです！」

「ふえ？」

「終わったにや？」

穂乃果と凜が起きた。

「とりあえず…また決め直しだね……」

「…とりは言った。」

「待って！もう新曲は無理じゃない？これだけやって全然決まらないんじゃないや完成が遅れて時間がなくなっちゃう！」

「でも……」

「実は私も思っていました……私たちの全力をぶつけない……」

「それは……」

「そうやね……」

「希?!」

「今までの曲の方がええかも知れん……今見たらカードもそう言うとしたし……」

「まって希……あなた……」

「ええやろ……一番大事なのはμ☒sなんやから」

「……………わかったわ……………」

「それならなんの曲やるか今決めよう！」

穂乃果が言った。

しばらくしてナオキは起きた。

「……………ん……………いててて……………」

「あ、おはよう……………ナオキ……………」

「ん？……………おはよう……………おれどうしたんだ？」

「海末の座布団で気絶してたのよ……………」

「そうなのか……………あれ？……………なんで絵里の顔が上に……………それになにか柔らかい……………あ……………」

ナオキは気づいた……………絵里に膝枕されてることを……………」

「お目覚めやね……………」

希がそう言うのとみんながニヤニヤしていた。

「な……………な……………絵里……………ありがとう……………」

ナオキは顔をあかくした。

「曲は『No brand girls』にしたよ……………」

花陽は言った。

「新曲は？」

「みんなで相談してやめたの」

「ことは言った。」

「そっかー……」

「ナオキも起きたし、解散しましょう……」

「そしてその日は解散した。」

「凜、花陽……先帰ってて……」

「待て、真姫……」

「なによ？」

「おれに任せて先に帰ってろ」

「……わかったわ……」

絵里と希は一緒に帰った。

その後ろをナオキは追いかけた。

「希……本当にそれでいいの？」

「うん……」



「ずっとやりたいうって言ってたじゃない……」

「なにをやりたんだ？」

「ナオキ!？」

絵里は言った。

「希…話してくれ……」

「ほんとになにもないよ……」

「嘘つけ……まあ、大体察しはついてるけどな……」

「そうなの？」

「ああ……『10人でなにかしたい』ってことだろ？」

「流石ナオキね……」

「じゃあ、ウチの部屋で話そうか……」

「ああ……」

3人は希の部屋に行った。

「お邪魔します……1人暮しなのか？」

「うん……両親の仕事の都合でずっと転校続きだったの……」

「それでね……ここに来てやっと居場所が見つかったって喜んでたの……」

「もう……」

「希……話してくれるか？」

希は黙り込んだ。

「……ナオキの言う通りよ……」

「えりち！」

「ここまで来てなにも話さない訳にはいかないでしょ？」「おれの言ったとおり……」

『10人でなにかしたい』ってことか？

「うん……それが希の夢だから……」

「夢？」

「その夢が……ラブソングってカタチになればよかったんやけど……」

「どうしてそこまで……」

「μ sは……うちにとつて……奇跡やから……」

「奇跡？」

「そう……μ sは奇跡……」

希は自分の過去の話をした。

『ウチは転校続きだった。』

「今日からこのクラスに入ることになった希ちゃんです、みんな仲良くしてね」  
でもすぐ転校するから友達は出来ずにいたの……

家に帰れば1人だった……

でも大阪の小学校に転校したときに……

あれはそこに転校して3日たった金曜日だったかな……

「えつと……希ちゃん……だっけ？何読んでるの？」

ある男の子が声をかけてきたの……

「これは……占いの本……」

「占い？なにそれ？」

「占いも知らないの？」

「うん！知らない！」

「ふふっ……」

「あ、やつと笑った」

「え？」

「ずつと笑ってなかったから心配してたんだ」

「心配？私のことを？」

「うん！僕もこの前転校してきたんだ」

「どこから？」

「東京だよ！」

「東京？」

「うん！音ノ木坂小学校つてところから来たんだ！」

「音ノ木坂？東京のどこにあるの？」

「えつとー……わからない！でもね近くに神田明神つてのがあるの！」

（神田明神……音ノ木坂……か……お母さんに聞いてみよ……）

「あら？君は転校生の……あ、希ちゃんと仲良くなったの？」

「あ、先生！そうだよ！『友達』なんだ！」

「友達……いいの？」

「え？当たり前じゃん！」

知らんまにウチは泣いててな……

「わわわわわ！な……泣かせちゃった？ご……ごめんなさい！」

「ううん……嬉しいから泣いてるの……あなたは悪くないよ……」

「そういえば君……」

「なに、先生？」

「なんでここにいるの？ここは4年生の教室よ？3年生の君がなんで？」

「え…3年生なの？」

「あれ？言ってなかったっけ…」

「うん」

「この前の朝ねートイレ行って帰るときに朝の会みてね、転校生かーってなってそれで来たの！」

「ほんとに好奇心旺盛ね…」

「うん！」

（なにこの子…おもしろい…）

「2人ともはやく帰りなさいよ」

「はーい」

「ねえ、希ちゃんは他に友達いないの？」

「……………うん……………」

「それならね！自分のこと『ウチ』って言えばいいんだよ！」

「なにそれ？」

「なんかねーその方が友達出来やすいってママが言ってたんだ！」

「ふーん……………また使ってみようかな」

「うん！」

そしてその日は帰ったの……

家に帰るとお母さんがいてね、神田明神のこととか聞こうとしたの……でも……

「ただいまー！あ、お母さん！あのね！」

「希……ごめんなさい……日曜日に引越すわよ」

「え……」

（これから楽しくなりそうだったのに……）

「いやだ！」

「え……」

「いやだ！今日、友達できたんだ！だから嫌！」

「希……友達できたのね……はじめて……だから嫌なのね……」

「うん……」

「ごめんなさいね……もう決まったことなの……」

「そんな……」

今までにないくらい早い段階での転校だった……もうその子には会えない……

（名前……なんだっけ……聞くの忘れた……また……会えるといいな……）

そして日曜日……

「いくぞー」

「さ、希…行くわよ」

「うん…」

お父さんの車に乗り込んだその時…

「希ちゃーん！」

「え？この声は…」

「希ちゃーん！」

「ちよつと待って！」

「わかった…行っておいで…」

「うん！」

ウチは車から降りた。

「希ちゃん……」

「ごめんなさい…こんなにはやく…なんで知ってるの？」「先生から昨日聞いたんだ…それ…これ、渡そうと思つて…」

「これは…タロットカード……」

「あ、そんな名前なんだ…お母さんが商店街のくじでもらったんだけど占いはしないからいらないうつて……」

「ありがとう……大事にするね！」

「うん！元気でね！『ウチ』使うんだよ！友達……できると思うから！」

「うん！バイバイ！！」

「うん！！バイバイ！希ちゃん！」

ウチは大阪を去った。

でも……その後も友達はできなかったんや……

そしてウチは高校生になってその男の子が話していた音ノ木坂というところへ入学することにしてー人暮しをはじめたの……

それがここ、音ノ木坂学院……

そして……

「みなさんはじめまして、絢瀬絵里と言います……よろしく……」

初めてであった……自分を大切にするあまり、周りと距離を置いてみんなとはうまく溶け込めない……ズルができない……まるで……ウチと同じような人に……思いは人一倍強く、不器用なぶん……人とぶつかって……ほんでウチは頑張って声をかけようとしたんや……

「あの一！」

「あなたは？」



「わ……私……（そうだ、あの男の子が教えてくれた……あの言葉……）ウチ、東條希」  
それがウチとえりちとの出会い……

その後も、同じ思いを持つ人がいるのに……どうしても手を取り合えなくて……  
にこつちは……ずつとひとりで頑張ったのにな……

真姫ちゃん見た時も熱い思いはあるけどどうやって繋がっていいかわからない……

そんな子が……あと2人いた……

μ☒sポスターを見ていた花陽ちゃん、

トイレで口紅塗ろうとしてた凜ちゃん……

それを大きな力で繋げてくれる存在が……

穂乃果ちゃん、海未ちゃん、ことりちゃんやっただ……

ナオキくんにも協力してもらってμ☒sができた……

必ずカタチにしたかった……この10人でなにか残したかったんや……

たしかに……歌というカタチになれば良かったのかも……

けど……そうじゃなくてもμ☒sはもうすでに大きなものをつくりに生み出している

……

ウチはそれで充分……夢はとづくに……』

そこまで話すと希はコップを見つめていた……

そしてそんな希の脳裏に浮かぶのは……

ひとりで食べていた食事も……ほむまんに変わって……

μsのみんなで笑って食べる……

そんな光景……

「一番の夢はとづくに……だからこの話はおしまい……」

「え……ちよつと待ってくれ……まさか……」

「思い出した？」

「ああ……ああ……思い出した！希って……あの希ちゃんなのか？」

「え？その子ってナオキなの!？」

「そうやで……やつとナオキくん気づいてくれた……証拠もあるで……」

すると希はタロットカードを入れるケースを出した。

その裏には……『かがわなおきより』と書かれていた……

「そうか……ごめん……はやく気づかなくて……全然気づかなかった……たしかに転校してきた年上の女の子に話しかけて、それですぐに転校することになって、お母さんがくれたタロットカードをあげた……そして名前教えてなかったからケース裏に名前を書いたんだ……そうだ……言った……『ウチ』って使えば友達が出来やすいって」

「そうや……ちゃんと友達もできたしな……でもそのくせにえりちとかのことはすぐ気づいたやろ？」

「だって……それは……」

「わかってるよ……ウチ、大阪に修学旅行で行って、ナオキくんに会って、あのときにはもう気づいてたんや……眩しい笑顔を見たら……すぐにわかった……」

「ならもつとはやく言ってくればよかったのに……」

「あのときはえりちとナオキくんのことでもあったからなー」

「……なら尚更……だな……謝らしてくれ……気づかなくてごめん……あとこの会話……真姫も聞いてた……」

「え？」

希は驚いた。

ナオキはスマホを取り出した。

「だから真姫……今から希のところにみんなで集合だ……そこに凜と花陽もいるだろ？」

「ええ……みんないるわよ」

「じゃ、また後で」

「まさか、みんなをここに集めるの？」

「いいだろう1度くらい……希、あのときの言葉忘れたか？さつき自分で言ってたろ…『友達』なんだからさ」

「……うん……」

「でことで希のために希の部屋に行くわよ」

真姫はみんなに言った。

「希ちゃんひとり暮らしなんだー」

「初めて知りましたね」

「うん……」

穂乃果と海未とことりは言った。

「希ちゃん……そんなこと考えてたんだ…」

「それなら尚更だにゃ！」

花陽と凜は言った。

「そうよ！……希の望みはμ☒sの望み……よね」

にこが言った。

そしてみんなが希の部屋に集まった。

「よし、曲作りするぞ」

「はい」

「みんなの言葉を紡いでか……でもなかなか出てこないよね……」

花陽は言った。

「あ、これって……」

真姫は棚にあったμ☒sの写真を見つけた。

あの講堂でのライブの後の、10人の集合写真……

「あー」

希はそれを取り返して隠した。

「そういうの飾ってるなんて意外ね」

にこは言った。

「別にええやろ……友達……なんやから……／＼／＼」

希は顔をあかくして言った。

「希ちゃん……」

ことりが言った。

「かわいいにゃー!!」

そう言つて凧は希に飛びついた。

希は枕で凧を防いだ。

「もう……笑わないでよー!」

「話し方かわつてるにゃー!」

そんな希を絵里は後ろから抱きしめた。

「暴れないの……たまにはこういふこともないとね……」絵里は言った。

「もう……」

(そっか……希はあの希ちゃんだったのか……あのときは変わったな……そりやあ氣づかんわ……あのときは違って輝いてたからな……)

ナオキは小学校時代の希を思い出した。

「あ、見てー!!」

穂乃果は雪が降っているのをみてそう言った。

「よーしー外にいくにゃー!!」

凧は走り出した。

それに続いてみんな走っていった。

そしてみんなは近くの公園で広がった。

「綺麗だなー……」

「ええ……」

みんな……空を見つめた……そして……

「想い……」

穂乃果は雪を受け止めて言った。

「メロデー……」

花陽も……

「予感……」

海未も……

「不思議……」

凜も……

「未来……」

真姫も……

「ときめき……」

ことりも……

「空……」

にこも……

「気持ち……」

絵里も……

「勇気……」

ナオキも……

「好き……」

希も言った。

そしてこの10人の言葉を紡いで新曲を作ることにしたμ☒sであった……

次回へ続く……





あれは……おれが退学してしばらくたった時だな……

「結局……人つてのは……そんなもんかよ……」

おれは人を信じられなくなった。

ある日、絵里から電話がかかってきた。

「絵里……もしもし？」

「もしもしナオキ、大丈夫？」

「あ……ああ！全然大丈夫だ！楽しいよ！」

「そ……そう？ならいいんだけど……」

「絵里もがんばれよ……」

「うん……またね」

「うん！……俺って嘘つきだな……」

おれは絵里に嘘をついた……そのことでさらに自分を追い詰めたのかもしれない

……

そしてしばらくたって次は希から電話がかかってきたんだ。

「絵里かな?……え、希さん?……もしもし、希さんが電話してくるなんて珍しいですね」  
 「あ、出てくれた!実はね、少し見て欲しいものがあるんや」

「見て欲しいもの?」

「うん!今からメールするアドレスにアクセスしてね!また電話するから!それじゃ!」

「え……ちよつと……切れた……何だったんだ?あ、メールきた……」

そして希に言われた通りにおれはメールのアドレスにアクセスした……すると……

「ん?どこだよ……客もいない……幕も下がってる……ん?声が聞こえる……」

「まもなくμ☒sのファーストライブです!」

「お急ぎください!」

それはファミコとミカの声だった。

「μ☒s……石鹸かな?いや、ライブって言ってたな……でも客がまだ入ってこない……」

そのままブザーがなった。

「あれは……穂乃果ちゃん?それに……海未ちゃんにことりちゃん……」

そして幕が上がって見えたのは穂乃果・海未・ことりの3人だった。

その3人のあの顔も……

「え……」

「ウソ……」

「ごめん……宣伝したんだけど……」

「あの3人がアイドル……でもファーストライブで観客ゼロ……」

「はあはあ……」

「花陽ちゃん？」

「あれ？ライブは？あれ？」

「歌おう！そのためにここまでやってきたんだから！」「うん……」

「はい……」

そこに花陽が走ってきて、ライブが始まった……

「I say……ヘイ、ヘイ、ヘイ、ヘイ、START：DASH!!」

ヘイ、ヘイ、ヘイ、ヘイ、START：DASH!!」

おれはそのライブを見て衝撃を受けていた。

「ハラショー……あ、また言っちゃった……でも……ほんとにすごい……μs……か

……」

おれは絵里の口癖のハラショー！をずっと使っていて、知らないうちにおれの口癖にもなっていたんだ。

でもその時のμ☒sには何かが足りない気がした。

「それは（それは）遠い（ユメの）

欠片（だけど）愛しい欠片

カナタへと…僕は DASH!!」

そしておれは拍手した……

あと、絵里から聞いたんだがこの時に全員あの場にいたんだな……

そしておれを含めて全員がああのライブを見た……

「ありがとうございます！」

そして絵里が舞台の前に行った。

「あれ？絵里……なんで笑ってないんだ……」

絵里の顔を見たが笑ってなかった……

「希さん……」

そして希から電話がかかってきた。

「ライブは見た？」

「はい…希さん……なんで絵里は笑ってないんですか？おれには自分を追い込んでるよ

うに思え……あ……」

「ナオキくんも……やろ？」

「知ってたんですか？」

「いいや、そんな気がしたただけや……『μs』って名前はな……ウチがつけたんやよ……」

「希さんが？」

「うん……ギリシャ神話に出てくる9人の女神……」

「なるほど……石鹸かと思いましたが……でも9人……まだ3人じゃないですか？なん  
で」

「もう見つけてるんよ……9人……」

「えっ!？」

「あの3人に加えて……思い出して……あの場にいた人たちを……」

「あの場に……はっ!」

おれは思い出した……あの場にはヒフミとおれを合わせて13人いた……花陽、凜、絵  
里、希、にこ、真姫……

「確かにいましたね……でもなんでおれに？」

「ナオキくんには協力して欲しいんや……μsが9人になる手伝いを……」

「それなら希さんが先に入れば」

「まだその時やない……えりちも……あんな感じやし……」「そう……ですか……」

「だからこそお手伝いして欲しいんや…とくにえりちに関しては…えりちはμ☒sに敵意を抱いている…認めていない…でも…μ☒sにえりちは絶対に必要なんや…」

「なぜそこまで……」

「…ウチの望みやから…」

「希さんの望み？」

「うん…それはまた話すよ…今は協力して欲しいんや…」

おれは黙り込んでそして言った。

「わかりました！」

「ありがとう！また後でかけなおすからな」

「はい！」

そしておれはμ☒sが9人になる手伝いをはじめた…

おれはまずは最初にライブに来た花陽を誘うように提案した…

「花陽ちゃんか…どうしてや？」

「あの子はアイドルに対しての思いが強いように感じました…でも自分にはできないと思っているかと……」

「さすがやね…正解や…」

「知ってたんですか……」

「うん……あの子はな……ずっとμsのポスター見たりしてたからな……でもあの子が入ればあと2人入るよ」

「2人も？」

「うん……女の子らしいことが似合わないと思ってる凜ちゃん……そして素直になれない真姫ちゃん……」

「……希さん、その真姫ちゃんを説得してください……」  
「おつ、考えることは同じやね……すでに実行済みよ」「ほえ？」

「真姫ちゃんはね、あの曲の作曲をしたんや！」

「ほんとですか!？」

「うん!だからねあの子さえ動かせることができれば凜ちゃんもついてくる」  
「その2人は友達なんですか？」

「ううん……凜ちゃんは花陽ちゃんの親友……だから……」  
「なるほど……」

「とりあえず、また明日真姫ちゃんにアタックしてみるわ」

「お願いします……」

そして2日後に花陽・凜・真姫が加入したと知らせが入った。



それからしばらくたって…

「電話か…絵里だ…もしもし？」

「あ、もしもしナオキ？元気にしてる？」

「ああ…そつちはどうだ？」

「え………まあ…ちよつと忙しいかな？」

「（μ☒sのことか？） そうか…たまには自分の好きなこととしてみるのもいいんじゃないか？」

「何言ってるのよ…生徒会での仕事が私のやりたいことよ…それに今は…この学校の廃校を阻止しなくつちや…」 「絵里………無理するなよ？」

「うん、ありがとう…それじゃあね」

「ああ…」

そしてまたしばらくたって…

「希さん？なにか進展はありましたか？」

「それがね、あの子達が部活申請してきたんよ」

「へー」

「それでね、にこつちが部長のアイドル研究部がもう既にあつて、あの子達をにこつちの

ところへ行かせたんよ」

「それであいつらはその部に？」

「いいや…にこつちが追い返した…」

「え……」

「にこつちにも色々あつてな…でも穂乃果ちゃんたちは諦めてないみたいやけどな  
…」

「そうですか……ま、明日にでもそのにこさんはμ~~□~~sに加入するでしょう……」

「えっ!？」

「穂乃果ちゃんたちなら……きつと……」

「ふふっ…明日が楽しみやね」

「はい……」

そして翌日……

「ほら来た…もしもし」

「ナオキくん!ほんまににこつち加入したんやけど!?!」「でしよう?。」

「すごいな…ねえ…ナオキくん」

「はい?。」

「今……楽しい?。」

「……はい……なんででしょうね……辛かったことが消えていく……あのライブのときから……」

「そうか……さ、あとはえりちを動かさなな!」

「はい!」

おれはμ☒sに励まされていたのかな…

ずっと……

そしてμ☒sの新たな動画がアップされていた。

「あれ?新しいPVか……『これからのSomeday』……」

おれはそのPVを見た……

「あれ?この赤い髪の子は……西木野病院の真姫ちゃんかな?ん?真姫……なるほど……

μ☒sに加入した真姫ちゃんはあるの真姫ちゃんか……

でもまだなにか足りない……」

おれはその時に加入させようとした真姫は小さい頃に遊んだ真姫だと気がついた。

でも……それでも……まだなにか足りない気がしたんだ……

そして……

「え!?!オープンキャンパスの結果次第で廃校!?!」

「うん……でもそろそろえりちが動き出すころや……」

「そろそろ……ですか？」

「うん……星が動き出す……」

「星……絵里のことですか？」

「そうや……」

「それでは……また……」

「うん！」

そして希との電話が終わったあとにおれは絵里に電話をかけたんだ。

「もしもし絵里？今大丈夫か？」

「ええ………どうしたの？ナオキからなんて珍しいわね……」  
「ああ………なんか声のトーン低い

ぞ？何かあったのか？」  
「え？………ううん……別に……」

「なあ絵里……」

「ん？」

「………絵里の今一番やりたいことってなんだ？やりたいことは………なんなんだ

……」

「やりたいこと？………だから学校を廃校にさせたくないって前に……」

「それは生徒会長としてじゃないのか？」

「え？」

「おれは音ノ木坂学院生徒会長絢瀬絵里に聞いているんじゃない！絵里自身に聞いているんだ……」

「私自身に？」

「ああ……絵里の本当にやりたいことは……なんなんだ？」

「知ったような口で言わないで……」

「え……」

「あなたに私の何がわかるのよ……」

「ちよつと……絵里………きれた……怒らしちゃったのか……」

かけ直しても電話に出てくれなかった。

そして翌日に希から電話がかかってきた。

「もしもし？」

「あ、ナオキくん！いよいよ動き出したよ……」

「動き出した？………はっ！絵里がですか!？」

「うん！実はね、穂乃果ちゃんたちがえりちにダンスを教わりたいうって言いに来てね」

「え……絵里が承諾したんですか？」

「うん！」

「その風景…見せてもらえることってできますか？」

「そう言うと思つて用意してあるよ…またアドレス送るからな」

「ありがとうございます！」

そして希からメールが来てそのアドレスにアクセスした…

「うわ…絵里なかなかハードなのやらしてるな…花陽ちゃんだったかな？フラフラじゃん…」

案の定、花陽は倒れた…

「かよちゃん！大丈夫？」

「もういいわ…今日の練習はここまで…」

「え!？」

「なによそれ！」

「私は正しい判断をしたまでよ……」

そして絵里は屋上から出ていこうとした…すると…

「生徒会長！」

そう穂乃果が言うと、みんな立ち上がった。

「今日はありがとうございます！」

「え？」

「明日もよろしくお願いします！」

「よろしくお願いします！」

あの時見えた絵里の目は…震えていた…

「もう一押しかな……」

その日…もう一度絵里に電話したが出てくれなかった。

すると希から電話がかかってきた。

「あ、希さん……」

「どうや？えりち…あと一押しと思わへん？」

「思います……多分穂乃果ちゃんたちは明日も絵里にお願いするでしょう……いや…絵里から屋上へむかうと思います……」

「そうやね……その可能性が高いやろうな……」

「そろそろきりますね……」

「うん……」

そしてそのあとに理事長から電話がかかってきて、音ノ木に行くことになったんだ。

そして翌日……

「あ…希さんからだ…もしもし？」

「ごめん…ウチには無理やった…」

「そう…ですか…」

「ナオキくん…頼んでええ？」

「でも…絵里はでてくれるか…」

「でるよ…えりちなら…」

「わかりました…やってみます…」

そしておれは絵里に電話をかけた…

「絵里…でてくれるかな…」

「…もしもし？」

「あ…絵里…やっとでてくれたな…」

「その…私…」

「どうしたんだよ…涙声だぞ」

「な…なにもないわよ…ほっといてよ」

「ほっとけねーよ！」



「ナオキ…なんで…なんでそこまで…なにも知らないくせに!!」

「知ってる…知ってるよ!音ノ木坂学院生徒会長絢瀬絵里としてだ…おれはおれの幼なじみの(おれの大好きな)絵里の…絵里自身のやりたいことを聞いているんだ!!」

「私自身の……」

「絵里自身の…やりたいことは?」

「私は……私は……え?」

「どうした?」

あとから聞いたがその時に穂乃果は絵里に手を差しのべたんだよな……

電話のむこうから聞こえてくる声……

「なに?練習?なら昨日言ったメニューをしつかり……」生徒会長……いや、絵里先輩……μ☒sに入ってください!」「え?」

「絵里先輩はμ☒sに必要なんです」

「なんで私…私は別にそんなこと……」

「希先輩から聞きました」

「なによ…素直じゃないわねー」

「にこ先輩には言われたくないけど」

「ちよつと待つて…私は別に」

「やってみればええんやない？」

「希……」

「挑戦してみたらどうだ？」

「ナオキ……」

「それがほんとうにやりたいことになるかもしれないぞ……」

「えりち……」

「絵里……」

「わ……私は……ずっと……追い込んだのかもね……生徒会長としての責任感に……生徒会長としてじゃない……私は……私としてこの学校を廃校にさせたくない!!」

「ああ……おれは……応援してる……ずっと……」

「うん……ありがとう……」

そして絵里は穂乃果の手を握り、μ☒sに加入したんだよね……

「これで8人……」

「いや……9人や……ウチをいれて……」

「えっ!?!」

「ナオキは知ってたの？」

「ま……まあ……」

「もう…希が手伝ってたのね…」

「いや逆やよ…ナオキくんが手伝ってくれたんや…」

「ふふっ…もう…じゃ、行きましようか…」

「行くつて…どこへ？」

「決まってるでしょ…練習よ！」

「やったー!!」

「じゃ、きるな…練習がんばれよ…」

「ええ！」

「よかった…さ、そろそろむかうか…今からむかえば来週のオープンキャンパスには着けるな…」

そしておれはこの時に大阪から東京にむかったんだ。

そしてオープンキャンパスの日……

(絵里……がんばれ……)

「皆さんこんにちは！私たちは音ノ木坂学院スクールアイドルのμ☒sです！今から披露する曲は9人になって初めての曲です！聞いてください！」

『僕らのL I V E 君とのL I F E』！」

「確かな今よりも新しい夢つかまえたい

大胆に飛び出せば O・K・マイライフ

望みは大きくね

背のびだつてば 高く遠く

まぶしいあした抱きしめに行こう

全部叶えよう」

「そうだよ 信じるだけで」

「ぐんぐん前に進むよ、」君が！」

「答えなくていいんだわかるから

胸にえがく場所は同じ」

「何度でも諦めずに探すことが僕らの挑戦」

「元気の温度は下がらない

熱いままで羽ばたいてく

あこがれを語る君の

ゆずらない瞳がだいすき…」「ダイスキ！」

そしておれは気づいたんだ…

あのととき足りないと感じたのは6人の歌声……

穂乃果・海未・ことり・花陽・凜・真姫・にこ・希そして……絵里

この9人の歌声で完璧になるということに……

おれの心に響いた歌声……

おれは知らないうちに涙を流していたんだ……

そして絵里は笑顔になった……

「そうだ……その笑顔がいいんだ……ほんとうにやりたいことは……これだろ……絵里

……よかつたな……」

そしておれはおじさんの家に帰っていったんだ

そしてあのアキバでのライブも見ていた

その後も希から写真とか送られてきたんだ……

メイド服の絵里や、合宿のときの絵里も……

そしておれは一人暮らしをはじめた

まさか……絵里と同じマンションだとはな……

~~~~~

「そして今に至るって訳さ…これで終わり」

ナオキは話し終えた。

「えー！あのとき絵里ちゃんと電話してたのってナオキくんだったの!?!」

穂乃果は言った。

「それは以外でしたね…」

海未は言った。

「そうだね…別の人かと思ってたよ…」

こころは言った。

「ナオキくん…ずっと支えててくれたんだね…」

花陽は言った。

「それは知らなかったにやー」

凜は言った。

「なによ…見てたなら出てきたらよかったのに…」

真姫は言った。

「希も…なかなかやるわねー…」

にこは言った。

「いやーそれほどでもー」

希は言った。

「ナオキがいてくれたからμ☒sはできたのかもしれないわね……」

絵里は言った。

「ああ……でもおれがこうやって元気になれたのも希があのと電話してきてくれたおかげだし、それにみんなの歌声のおかげだ……ありがとうな！これからもよろしく！」

ナオキは言った。

「そういえば歌詞完成しました」

「いつのまに!?曲名は？」

ナオキは海未にきいた。

「はい!『Snow Halation』がいいかと!」

「ハラシヨー!」

「さあ!練習するわよ!」

「はい!」

そして予選決勝に挑む曲もできて練習をはじめめるμ☒sであった……

次回へ続く……

第30話「決戦前夜と雪の災難」

絢瀬宅……

予選決勝前日、ナオキは絵里に頼まれて絵里の部屋に泊まることになった……

「お義兄さん、お茶どうぞ」

亜里沙はナオキにお茶を出した。

「お義兄さんって……絵里は風呂だからいいけどよ……」 ナオキは言った。

「えーなんですか？ いいじゃないですかー」

亜里沙は言った。

「だかな……まだ……」

「ふうーお待たせー」

「うっ……」

ナオキがなにか言いかけた時に絵里は風呂から出てきた。

「あら？ なに話してたの？」

絵里は言った。

「えっとねームsのことだよー」

「亜里沙ちゃんナイス！」 そうなんだよ…おれがμ☒sと出会った時のことを話してたんだ！」

「ふーん」

そういうと絵里は冷蔵庫へむかった。

「亜里沙ちゃん…まだ内緒だぞ…」

「はい…」

ナオキと亜里沙はボソツと話した。

「ごめんねナオキ…急に頼んじゃって」

絵里は言った。

「いや、いいよ………いよいよ明日だな………」

ナオキは言った。

「ええ………」

「私！応援行くからね！」

亜里沙は元気よく言った。

「ありがとう、亜里沙」

「さ、おれはどこで寝ようかな…」

「私の部屋でいいわよ」

「え……わ……わかった……」

「私はもう寝ますね！おやすみなさい！」

「おやすみ」

「おやすみ……」

そして亜里沙は自分の部屋へとむかった。

「おれたちも行くか？」

「そうね」

そして2人は絵里の部屋にむかった。

「お、あったかい……」

「雪も降ってるし寒かったから暖房つけておいたの」

「流石絵里！自慢の彼女！」

「も……もう……／＼／＼」

絵里の顔があかくなる。

「そ……そういえばナオキ、ちゃんと明日の挨拶は考えた？」

「ああ！バツチリだ！」

「ハラショー！流石ナオキね！自慢の彼氏！」

「仕返しかよ！」

「ええ！」

『『ええ！』じゃねーよ』

「明日も早いしそろそろ寝ましようか」

「そうだな…じゃあおれは床で寝るかな」

「……………」

「ん？どうした絵里？」

急に絵里は黙ってしまった。

「あ、なるほど……………わかった隣で寝てやるよ（実は一緒に寝たかったりして）」

「ほんと！」

絵里はとても喜んだ。

（なんだろう…可愛すぎる…）

と思うナオキであった。

そして2人は暖房をきって電気はつけっぱなしで布団に入った。

「電気は豆球でいいんだよな？」

「うん……」

「えつと……これかな？」ポチツ……

（あ、間違えた……）

ナオキは豆球にするつもりが間違つて真つ暗にしてしまった。

「ちよつと！ナ、ナオキ……な、なにしてるのよ？！豆球つて言つたじゃない……」

絵里は涙声で言つた。

「ご、ごめん！間違えた！今すぐ豆球にするから！なくなって！（泣いてる絵里もいいな……）」

そしてナオキは豆球にした。

「うう……」

「そんなに怖かつたか？」

絵里はコクリと頷いた。

（おれは今日は何回絵里にときめくのだろう）

「よしよし……ごめんなー」

ナオキは絵里の頭をなでた。

「ナオキ……」

「ん？」

「……抱きしめて……」

「……お……おう……」

ナオキは絵里の顔を自分の胸にくるように抱きしめた。

「あつたかい……」

「そうか……」

「なんだろうね……夜は冷えるはずなのに……」

「そうだな……なぜかあつたかくなる……」

ナオキの鼓動がドクドクなっている……そして絵里も……

「なあ……絵里……」

「なに？」

「おれに泊まって欲しいって頼んだのって不安だからか？」

「えつと……そう……よ……」

「そうだよな……不安になるか……」

「ええ……でもナオキといるとそんなのが吹き飛んじやう……」

「実はな……おれも不安なんだ……」

「え？」

「なんだろう……おれは舞台のみんなを輝かせたい……でも本当におれにそれができるのか……みんなを100%輝かせることができるのか……不安なんだ……でも絵里といると落ち着く……おれは自信をもてるんだ……」

「ナオキ……」

「明日……頑張ろうな……」

「ええ……んっ……」

絵里が返事をするとなオキは絵里の唇にキスをした。

「はあ……もう……んっ……」

ナオキはまだやめない……

(これは俗に言うティープキスというものである)

「はあ……はあ……もう……おしまい……」

「……すまん……」

「なんで謝るのよ……もう……ふふっ……」

「そろそろ寝ないとね」

「そうだな……おやすみ」

「おやすみ……」

そして2人はすぐに寝付いたのだった。

朝……

「ん……朝か……寒っ……」

ナオキは目が覚めた。

(しかし……おれは『やらかしたかな?』と思つてしまう……絵里の顔が近いし……寝る前にあんなことしたし……)

絵里はナオキの腕を枕にして寝ていた。

俗に言う腕枕つてやつ。

(かわいい……できることならおそ……ゴホンゴホン……これ以上言うのはまだはやい……さ、そろそろ準備せねば……)

ナオキは腕をそつとぬこうとしたのだが……

「ん……あらナオキ……はやいわね……おはよう……」

絵里は目をこすりながら言った。

(絵里を起こしてしまった……寝起きの絵里もかわいいな……)

「おはよう……おれははやめに出なきやいけないからな……ほんとは絵里をもうちよい寝か

すつもりだったけど……起こしちゃったな……」

「いいのよ……別に……うわあ……」

絵里は外を見ると言った。

「ど……どうしたんだ？……おー……」

ナオキも声をあげる。

外では雪が積もっていたのだ。

「すげえ……東京でもこんなに積もるんだな……」

「小さい時も積もったことあったわね」

「そうだな……」

ナオキは絵里を引き寄せていた。

そして布団をくるませた。

「寒くないか？」

「ううん……大丈夫よ……しばらくこのままでいさせて……」

「ああ……」

「あったかい……」

絵里はナオキにもたれた。

「なあ……絵里……もしかして緊張してる？」

「え……ま……まあね……」

「バレエ発表会の時と同じ顔してんぞ？」

「そ……そうかしら？」

ナオキは絵里を抱きしめた。

「大丈夫……おれがついてるから……」

「ええ……」

「やべ……そろそろ準備しねーと……」

「私は朝ごはん作ってくるから着替えててね」

「はーい」

絵里は部屋から出ていった。

「寒い……脱ぎたくないよー……タ、レ、カ、タ、ス、ケ、テ、エ、ウ!!」

ナオキは1人ダダをこねていたが1人であることに自分が痛くなった。

（何言ってるんだよ……おれは……）

ナオキは着替えてリビングへむかった。

ガチャ……

「んー……いい匂い……」

「あ、お……ナオキさん！おはようございます！（危なかった…）」

「おはよう！亜里沙ちゃん！（絶対お義兄ちゃんって言いかけたな）」

「さ、ナオキはやく座ってね！もうすぐできるから！」

「はーい」

ナオキは椅子に座った。

「はいどうぞ……簡単なものだけど」

絵里は玉子焼きを作った。

「おー玉子焼きか！うまそーいただきますーす！」

「いただきますー！」

「うん！絵里の玉子焼きは甘いな！」

「お口に合うかしら？」

「ああ！美味しいよ！すつごく！！」

「あ……ありがとう……／／／／」

絵里は顔をあかくした。

「やべ…そろそろ行かなきゃ」

「ほんと…ナオキ急いで！」

「あれ？おねえちゃんは急がなくていいの？」

「ええ…ナオキは学校の説明会があるから、亜里沙も雪穂ちゃんと一緒に行くでしょ？」

「うん！ナオキさん！頑張ってください！」

「ああ！それじゃ行っていくわ」

ナオキは玄関へとむかった。

「ナオキ大丈夫？忘れ物ない？」

「ああ…大丈夫だよ……むこうで待つといてくれ…終わったら絵里のところへ飛んでいくから」

ナオキは絵里の頭をなでた。

「ふふっ…わかったわよ…それじゃ行ってらっしゃい…」

「いってきます…」

ナオキと絵里は軽くキスをした。

そしてナオキは音ノ木へとむかうのだった。

マンション前…

「あれ？希じゃん、おはよう」

「おはよう、ナオキくん！」

ナオキはマンション前で希と会った。

「なんでここに？」

「カードがなあ…今日は3年生3人で行かないと後悔するって言ってたの」

「なるほど……（そうか…もうすぐ3年生は……）」

「……くん……ナオキくん！」

「は…はい!!」

「なにボーってしとるんや？」

「え…つと……ちよつと考え事を……」

「……ま…大体考えてることはわかるけどな」

「ほえ？」

「どうせウチらはもうすぐ卒業……って思ってるんやろ？」

「（ギクツ…）ハハハハ……希には隠し事は無理か……」

「えっへん！」

「じゃ、おれそろそろ行くわ」

「うん！頑張つてね」

ナオキは足を進めた。

「……………卒業……………か……………」

希は呟いた。

園田家前……………

「お、海未…おはよう！」

「おはようございます…なんでここに？」

「えっと……………なんとなく？」

「ふふっ…相変わらず優しい人ですね…」

「なんだよ……………／＼／＼」

ナオキは顔をあかくした。

「さ、行きましょう……………どうせ真姫の家にむかうのでしょうか？」

（ギクツ……………）な…なんでわかった……………」

「ナオキのことですからみんなをむかえに行くだろうと…」

「アハハ…バレてたか……………」

「バレバレです……」

2人は真姫の家にむかった。

西木野宅前……

「いつてきます」

「気をつけてね……あら」

「ん……どうしたの？……つて……ヴええ!？」

「よお、真姫おはよう」

「おはようございます」

「あらナオキくん……そちらは？」

「はい……お初にお目にかかります、園田海未と申します」

「あら礼儀正しいこと……ん？園田……あなた園田道場の？」

「はいそうです」

「ふーん……これからもよろしくね」

「はい！」

「もうなに話してるのよ！さっさと行くわよ！」

真姫はさっさと歩き出した。

「おい待てよー！……それでは…」

「失礼します…」

ナオキと海未は一礼して真姫を追いかけた。

3人はしばらく歩いた。

「…つたくなに照れてんだよ」

「照れてないわよ！」

「さ、フミコのところにむかうか」

「はい」

「家知ってるの？」

「……………あ……………」

「ウソでしょ……………」

「ナオキ……………」

「す……………すまん……………」

「あれ？ナオキくん、海未ちゃんに真姫ちゃん？」

「その声は!？」

ナオキがふりかえるとフミコがいた。

「お……おはよう……3人揃ってどうしたの？うちの前で」

「ほえ？まさか……ここがフミコンち？」

「そうだけど……」

フミコの家が真姫の家から近かったことが判明した。

「ハラショー……」

「さ、学校にむかいますよう」

「はい」

4人は音ノ木にむかった。

高坂宅……

「おねえちゃん！いつまで寝てんの！……って起きてる!？」

雪穂は穂乃果の部屋のドアを勢いよくあけて言った。

（雪でも降るの？）

雪穂はそう思った。

いや……もう降ってますね……

「なにーその反応？それじゃあ私がいつも寝坊してるみたいじゃん」

「してるじゃん」

「いつもじゃないもん！時々だもん！」

「ってそんなことはどうでもよくって、はやく行かなくていいの？ 亜里沙がナオキさんはもう行っちゃったって…」

「ああ……ナオキくんたちは学校の説明会があるからはやめに行って、そのあと会場に来るって行ってたよ」

「ふーん……ねえおねえちゃん」

「どうしたの？」

「もしかして……緊張してるの？」

「そ…そう？」

「だって……サイドテールが逆だよ……」

「え？」

穂乃果は頭をさわって確認した。

「はわわわわわ!!ほ…ほんどだ!」

「もう……世話のやけるおねえちゃんだね……」

雪穂は穂乃果の髪型をいつも通りにしようとした。

「ねえ雪穂……」

「ん？」

「……………応援……………来てね……………」

「……………わかってるよ……………」

仲のいい姉妹だこと……………

そして雪穂に直してもらい穂乃果は外を見た。

「雪……………神様のイタズラかな？」

「穂乃果ちゃーん」

「ことりちゃん！」

「まだ着替えてないのー？」

「ごめーん今から着替えるから上がってきて！」

「はーい」

絢瀬宅……………

ピンポン……………

「はーい……………って希!？」

「おはよう……………さ、行こう！」

「ちよつと待ってて……………荷物取ってくるから」

小泉宅……

「かよちーん……まだー」

「待って！あと一杯だから」

「かよちん朝からよく食べるにやー」

「だって今日は予選決勝だよ！たくさん食べて力をつけなきゃ！」

「……そうだね……凜も食べるにやー！」

「はい、ちゃんと凜ちゃんのも入れときましたよ」

花陽のお母さんが凜に卵かけご飯をだした。

「ありがとう！お婆さん！」

「いえいえ……2人とも頑張ってるね！」

「うん！」

花陽と凜は声を合わせた。

矢澤宅……

「にっこにっこにー」

「にっこにっこにー」

「にっこにっこにー♪」

「にっころとココアとにこはにっこにっこにー♪をしていた。

「おー！」

「やっぱり本物は違うねー」

「さあもう一度おねえ様にエールを！」

「うん！」

「にっこにっこにー…にっこにっこにっこにー…にっこにっこにっこにー♪」

「ありがとう！予選…絶対勝つからね！」

その時、虎太郎が勢いよくドアを開けた。

「うわあ！」

「虎太郎！静かにしなよ！」

「できたー」

「ほえ？」

虎太郎はμ☒s10人の雪だるまを作っていた。

「μ☒s…これ…虎太郎が？」

「うん……がんばれー」

「うん！お母さんに連れてきてもらいなさい！私がセンターで輝くから！」

「ほんと!？」

「ええ! だってμ☒sはナオキも含めてみんながセンターなんだから」

ピンポーン……

「はい……え……」

「おはよう……にこっち」

「なんであんた達が来るのよ……」

にこは扉を閉めようとしたが希が足で止めた。

「希がね……みんなで行きたいって」

「ウチやないよ……カードがや」

「なによそれ……」

「素直じゃないでしょ……」

「絵里もね……」

「え?」

「待っててすぐ準備するから……えっと……寒いから……中に入りなさいよ……」

音ノ木坂学院……

生徒会室……

「……つてな感じな挨拶なんだけどうかな？」

「はい……いいと思います」

「いいんじゃない？」

「うん！いいと思う！」

「……さ、講堂にむかうか」

「うん！」

海末と真姫とフミコは声を合わせた。

4人は講堂にむかった。

海末の持つ書類の中には『Snow halation』の歌詞カードがあった。

講堂……

「おい、ナオキ」

「どうしました先生？」

「すまんが開始が1時間遅れる」

「ええ!？」

4人は驚いた。

「しょうがないだろ……この雪じゃ……」

「それじゃあ…予選決勝が……」

「それならナオキくんたちは行けばいいよ！」

「フミコ……いや……それはできない……とくにおれは…海未と真姫だけでも」

「なに言ってるのよ」

「ほえ？」

「あなたを置いて会場にむかえと？ μ×sの10人目のメンバーなのに」

「そ…それは……おれは踊るわけじゃないし……」

「あなたってほんとにバカねえー」

「私たちをステージでいつも輝かしてくれるのは誰ですか？ほかでもないナオキでしょ

う……

「私たちにはナオキが必要なんですよ」

真姫と海未はため息をついて言った。

「……………そうだな……わかった……説明会を成功させてみんなの元に行こう！」

「あ、もしもしヒデコ？お願いがあるんだけど……」

そのときフミコはこそこそと電話をしていた。

そのことをナオキと海未と真姫は知らなかった。

「つてことなんだ……絵里……時間稼げるか？」

「そうね……なんとか7人でやってみるわ……私たちの出番は最初だし……なるべくはや
く、気をつけて……」

「うわあ！」

絵里がナオキと話していると突然にこと穗乃果と凜が声をあげた。

「どうしたのよ3人とも……つて……ハラシヨ……」

「おいどうしたんだ？」

「えつと……その……ステージが……」

7人の前に広がるのはとても大きなステージだった。

「とにかく……これは時間を稼げるかわからなくなってきたわ……」

「そんなけすごいのか……」

「ええ……また写真をおくるわ……」

「わかった……なるべくはやく行くようにするよ……」

電話をきつた後、絵里から写真がおくられてきた。

「どれど……これ……ハラシヨ……」

ナオキは写真を見るなり驚いた。

「どうしたの……です……か……え……」

「なに……を……ヴええ!?!」

「私にもみせ……て……でかつ!?!」

海未と真姫とフミコも驚いた。

「はやくしないとな……」

「ああ、そうだ今ねヒデコたちが雪かきしてるから」

「なら私たちも……」

「やめとけ……」

「ナオキ!?!……しかし……」

「あのな海未……まずそのスカートのままで防寒着とかも最低限しかないのに……雪かきできるか?」

「そ……それは……」

「それもそうね……今は体力を整えておきましょう……」真姫は髪の毛をクルクルしながら言った。

「そうですね……」

海未も納得したようだ。

「さて……雪は昼までらしいけど……止むかな……」

ナオキは不安そうに空を見上げた。

ラブライブ！東京地区予選決勝会場横……

ラブライブ！運営委員会本部……

廊下……

運営委員会本部には選手の控え室が整えられている。

「おやおやμ☒sのみなさんではないか」

「晋三さん……」

不安そうに空を見上げるμ☒sの前に現れたのは会長の伊藤晋三だった。

「おや？ナオキがいないようだが……あとの2人も……たしか……真姫さんと海未さん
だったかな……」

「はい……あの3人は学校の用事で遅れてきます」

絵里は言った。

「そうなのか……間に合うといいのだから……それではな……ステージ楽しみにしているぞ」

そう言うと晋三は歩き出した。

「ここから見てもステージ大きいにやー……」
凜は言った。

「ほんとうにいつぱいになるのかな？」

花陽は言った。

「それは心配ない……」

「完つ全にフルハウス……満員になるのは間違いないわ……」

そこに現れたのはA—R—I—S—Eだった。

「A—R—I—S—E……」

にこは恐る恐る声をあげた。

憧れの大スターを前に恐縮しているのだろうか……

「にこつち……あかんよ……今は同等……」

希がそう言うときにこはビシツと構えた。

「あら？ナオキくんたちがいないようだけど」

ツバサが言った。

「はい！3人は学校の用事で遅れてきます！でも本番には間に合います！」

穂乃果は言った。

「そう……」

ツバサは穂乃果に近づいてきた。

そして手を差しのべた。

「えっ……」

「今日はお互いベストを尽くしましょう……」

「はい……」

2人は握手をした。

「でも……勝つのは私たちよ……」

「……いいえ……私たちが勝たせてもらいます！」

「ふふっ……ほんとあなたって面白いわね……じゃ、健闘を祈るわ……」

そういうとA—R—I—S—Eは歩き出した。

「ナオキ……」

絵里は不安そうに空を見上げた。

胸を掴みながら……

音ノ木坂学院……

「皆さん、こんにちは！生徒会長の香川ナオキです！今日は足元が悪い中ありがとうございます！
ございます！今日はこの音ノ木坂学院の素晴らしさを伝えていけたらと思います！」

今、生徒会はこの学校を共学にしようとしています！

来年度はまだ女子だけ……男子は私だけです……

再来年度には共学にしようと考えていますのでよろしくお願いします！

それではこれからこの学校のことを説明していきますのでよろしくお願いします！」

そして音ノ木坂学院学校説明会は幕を開けた。

果たしてナオキたちは間に合うのだろうか!?

次回へ続く……

第31話「Snow halation」

無事に説明会を終えたナオキたち……だが……講堂を出ようとした時……そこには……

「ウソ……だろ……」

ナオキは膝から崩れ落ちた。

「ナオキ!!」

海未と真姫は言った。

「なんで……こんなことに……なんで……」

雪が強くなってんだよ……」

μ☒s控え室……

「え!!動けない!?!」

絵里は驚いた。

「そうなんです……今、真姫のお父様に雪の中でも対応できる万能なリムジンを出してもらおうと頼んでいるのですが……」

海未は言った。

「ダメだわ……ガレージが開かないみたい」

真姫は言った。

「それじゃあ…移動手段が…電車やバスも止まってるみたいだしな…」

「そんな…」

絵里は言った。

「10人みんな落ち込んだ。」

「大丈夫なの？」

「ここは言った。」

「わからんな…3人とも来れたらええけど…」

希は言った。

「この天気じゃ…」

花陽は言った。

「そしてみんな考えた…」

最悪の事態を……………

ピンポンパンポーン……

そんなときアナウンスが流れた。

「ライブライブ！東京地区予選決勝出場グループ及び関係者、そしてお越し頂いてる観客の皆様にお伝えします。」

天候のため開始時間を1時間遅らせていただきます……繰り返します……」
「え!？」

みんなが驚いた。

「海未! さっきの聞こえた?」

「はい! バツチリです絵里! 真姫、ナオキ! 開始時間が1時間遅れるらしいです!」
「なんだって! いける……いけるぞ!!」

ナオキは言った。

「そうね……さ、はやくむかいきましょう!」

「それでは絵里…私たちはむかいます！」

「わかったわ…気をつけてね……………」

3人ともむかうそうよ！」

「やったー！」

みんな喜んだ。

「でも……安心するのはまだ早いわよ………」

にこは言った。

「そうやね……………雪はまだ降っている」

希は言った。

「これから強くなるみたいだよ……」

花陽は言った。

「そんな!!こうなったら……雪やめえ……………!!」

穂乃果は叫んだ。

「穂乃果ちゃん?」

こごりは言った。

「どんどん強くなってるにや……」

凜は言った。

「そんな……な……」

穂乃果は膝から崩れ落ちた。

音ノ木坂学院……

「また強くなってるぞ……」

ナオキは言った。

「そんな……」

海未は言った。

「さ……行くぞ……お前らおれの後ろについてこいよ……」

「はい」

「うん」

ナオキは雪の日は傘はささない派なのでさしていない。

海未と真姫は傘で前をガードしていた。

「ナオキ！傘に入ってください……このままじゃ……」

「おれは大丈夫だ……くっ……」

風が強くなり、3人を襲った。

「ヴええ!？」

「わっ!？」

その勢いで海未と真姫はバランスを崩した。

「海未!・真姫!」

ナオキは2人の腕を掴んだ。

「ナオキ!」

海未と真姫は言った。

そしてナオキは2人を引っ張った。

「よいしょ……大丈夫か?」

「はい……なんとか……ありがとう(ご)ございます」

「別に1人でも大丈夫だったのに………ありがとう……」

「先へ進もう………みんなが待つてる……」

「はい!」

「うん!」

そしてまた3人は歩き出した。

校門のところでさらに風は強くなる。

3人は止まってしまった。

「あきらめんなあああああ!!」

ナオキが叫んだ。

「ナオキ……………」

2人は言った。

「こんな雪なんかには屈しない！絶対…………ラブライブ！で優勝するんだ…………絶対に!!!」

ナオキは叫んだ。

「そうです!!私だって…………私だって!!誰よりもラブライブ！に出たい!!やりたいのです!!!」

海未も叫んだ。

「そうよ!!この10人で…………最高の結果を残すんだから!!!」

真姫も叫んだ。

「くっ……………こんなところで……………止まってもらえっかよ……………みんなの歌う姿がみたい……………10人の言葉を紡いで作ったあの曲を歌っている姿を……………あのステージで……………だから……………だから……………絶対に行く!!そして……………俺達は……………絶対に勝つんだ!!!」

「East heart……………Midnight cats……………」

「そしてA—RISEにも負けません!!」

そして強い風がおさまって安堵した3人の前には……

必死で雪かきをする音ノ木のみんなだった。

「これは……」

ナオキは言った。

「遅いよ！ナオキくん！」

フミコは言った。

「フミコ！どこに行っただと思っただらこんなどこにいたのか!？」

「フミコがねー…ナオキくんたちがはやくむかえるようになって私に電話してきて……」
ヒデコが言った。

「それでみんなに呼びかけたの!」

ミカが言った。

「そしたらね…集まったの……音ノ木坂学院の……全校生徒が……」

フミコが言った。

「全校生徒が!？」

「ウソみたい……」

海未と真姫は驚いた。

ナオキはその光景を見て涙を流した。

「……みんな……」

「ナオキ……まだ泣くのは早いですよ……」

海未は言った。

「そうよ……泣くのは勝ってからにしない……」

真姫は言った。

「あとこれに履き替えて!」

フミコはそう言うときスノーブーツを取り出した。

「サイズが合わなくても我慢してね！」

ミカが言った。

「ありがとう……ヒフミ！」

「略すな!!」

ヒフミは声を合わせて言った。

「ま、とりあえず今は会場にむかわないと……」

「さ……行って……」

「音ノ木全校生徒で作ったこの道を……」

ヒフミは言った。

「ああ……そうだな……行くぞ……海未！真姫！」

「はい！行きましょう！みんなのところへ！」

海未は言った。

「そうね……ナオキ！ちゃんとついてきなさいよ！」

真姫は言った。

「走れー！！全力で走れー！！」

ミカは叫んだ。

3人が走ると音ノ木のみんなからの声援が聞こえてきた……

大きな声援……

その声援がさらに3人の背中を押した……

（みんなのこの作ってくれた道を……）

（無駄にはしません……）

（ありがとう……みんな……）

そして……3人は走った……走った……走った……そして……

「ナオキ！あれ！」

真姫は叫んだ。

「あれは！」

海未は言った。

「おーい！！こっちこっちー！！」

穂乃果は叫びながら手をふっていた。

凜も絵里も手をふっていた。

「みんな……………」

そしてナオキの思いは爆発した。

「絵里……………!!!」

ナオキは叫んだ。

「ナオキ……………!!!」

絵里も叫んだ。

「絵里……………!!!」

ナオキは絵里にむかって走った。

「ナオキ……………!!!」

絵里もナオキにむかって走った。

そして2人は抱き合った。

「絵里……………うつ……………うろうう……………」

「ナオキ……………間に合ったわね……………」

ナオキは絵里を抱いて……………泣いた。

「間に合いましたね……………」

「うん……………」

海未と真姫も胸をなでおろした。

「うろう……………こ……………怖かった……………」

ナオキは言った。

「もう……………ナオキ……………男でしょ？泣かないの……………」

絵里はナオキの頭をなでて言った。

「だって……………怖かったんだ……………嫌だったんだ……………ここまできて……………なにもできないなんて……………なにも残せないなんて嫌だったんだ……………後悔なんてしたくなかったんだ……………みんなです選決勝を戦いたい……………そして勝つ……………本戦でも優勝したい……………でも……………それができないって考えたら……………怖くなつたんだ……………絵里たちにとっては最後なんだ……………だから……………余計に……………嫌だったんだよ……………」

ナオキは言葉を重ねる度に絵里を強く抱きしめた。

「ナオキ……………ありがとう……………」

「ううう……………」

「もう……………いつまで泣いてんのよ、あんたは……………」

「ここは呆れた顔で言った。

「にこつちも涙でとるよ……………」

希は言った。

「なによ……………希もでしょう?」

「もう……………」

「さ、ナオキ……………涙を拭いて……………みんなにお礼をしなくつちや……………」

「そうだな……………」

ヒフミたちも走ってきた。

「みんな……………ほんとうにありがとう……………みんなのおかげでここまでこれた……………おれたち

は……………絶対勝つ!」

そしてみんな笑った。

ラブライブ!運営委員会本部……………

A—RISE控え室……………

「間に合ったようね……」ツバサが言った。

会議室……

そして4校の生徒会長が集まった。

「遅れてしまつて申し訳ありませんでした！」

ナオキは言った。

「いいんですよーナオキくん！」

東が言った。

「そうでーす！間に合ったんだからいいではありませんかー」

アリスは言った。

「ふっ……今回は許してあげるわ……」

渡辺は言った。

「それでは……各校の披露する曲名を言っていきましょう」

渡辺は議題を切り出した。

「音ノ木坂学院……μ☒sは新曲『Snow halation』です！」

ナオキは言った。

「目黒学園……Midnight catsはデビュー曲『真夜中の子ネコたち』でーす」

アリスは言った。

「御茶ノ水第一高校…East heartはデビュー曲『ハートの流星群』よ」
東は言った。

「UTX高校…ARISEは地区予選であなた達に大差をつけさせてもらった『Shocking Party』よ」

渡辺は言った。

「なに…その言い方！」

東は立ち上がって言った。

（東さんって怒ると怖いんだな…）

「なに？大差をつけさせてもらったのは事実でしょう？問題でも？」

渡辺は微笑しながら言った。

「まあまあ落ち着きましょう…」

アリスは言った。

「ふふっ……」

ナオキは笑った。

「なにがおかしいの？ナオキくん……」

渡辺は言った。

「いや……地区予選とは違うってことを見せれるなど思いまして……」
「どういうこと？」

「だって勝つのは………μ☒sなんですから……」

「言ってくれるじゃないの……勝つのはA—R—I—S—Eよ！」

「いいえ……East heartが勝つわ！」

「NoNo! Midnight catsが勝ちます！」

生徒会長たちの間で火花が散った………

そしてμ☒sの出番が近づいてきた。

μ☒sの出番は最初……

「みんなー！いよいよだぞー！準備は出来てるか？」

ナオキは言った。

「はいー！」

9人が声を合わせて言った。

そしてみんなで円陣を組んだ。

「絶対勝つわよー！」

絵里は言った。

「当たり前やん！ウチらの力、みんなに見せたるで！」

希は言った。

「ふん…みんなを大銀河宇宙No.1アイドルにここにーにこちゃんの虜にしてあげるわ
！」

にこは言った。

「ナニソレイミワカンナイ……ふふっ……絶対にだれにも負けないわ！」

真姫は言った。

「凛たちの歌をみんなに届けるにや!!」

凛は言った。

「そうだね！よし！私も全力で頑張ります!!」

花陽は言った。

「みんなで絶対予選決勝つぞー！」

ことりは言った。

「一時はどうなることかと思いましたが……音ノ木のみんなのおかげでここまでこれました……みんなの分まで……頑張ります……」

海未は言った。

「ああ……みんなを一番輝かせてやる!!任せとけ!!」

ナオキは言った。

「みんな……色んな大好きを込めて歌おう……いつくよー!!」

穂乃果は言った。

「いちー!」

「にー!」

「さん!」

「よん!」

「ごー!」

「ろく!」

「なな!」

「はち!」

「きゅう!」

「じゅー！」

「μs!!ミュージック……………スタートー!!!」

そしてステージの上で10人は手をつないだ。

そして聞こえてくる声援……

「ナオキくーん!!」

「絵里ー!!」

「希ー!!」

「にこにこー!!」

「真姫ちゃーん!!」

「凜ちゃーん!!」

「花陽——!!」

「ことりちや——ん!!」

「海未——!!」

「穂乃果——!!」

そしてナオキは絵里の手を離してマイクをもつて前へ出た。

「みなさんこんばんは！私たちは音ノ木坂学院スクールアイドルμsです！今から披露する曲はこのときのためにこの10人で作った新しい曲です！色んな大好きを込めて歌います。色んな人が支えてくれたから私たちはここに立っています…それでは………お聞きください……『Snow halation』……」

そして10人は1人ずつ目をつぶり、心の中で大好きな気持ちを込めた。

ナオキ（支えてくれたみんなが大好きで……）

絵里（学校が大好きで……）

真姫（音楽が大好きで……）

にこ（アイドルが大好きで……）

凜（踊るのが大好きで……）

花陽（メンバーが大好きで……）

希（この毎日が大好きで……）

海未（頑張るのが大好きで……）

ことり（歌うことが大好きで……）

穂乃果（μ \square sが……大好きだったから……）

そしてナオキは移動しみんなもスタンバイOK!!

そして始まった……

『Snow halation』

「不思議だね 今の気持ち」

空から降ってきたみたい」

「とくくべくつな季節の色が ときめきを見せるよ」

「はじめてく出会った時から」

予感に騒ぐ心のMelody」

「とめられないとまらない」

「な・ぜ」

届けて 切なさにはく名前をつけようか ” Snow halation ”

想いが重なるまでく待てずにく 悔しいけど好きって純情

微熱の中 ためらつてもダメだね

飛び込む勇气に賛成く まもなく Start !!

(みんなをちゃんも輝かせてるかな……)

おれは支えてくれたみんなが大好き……

なによりおれを一番支えてくれたのは…… μ ☒ s の歌声……

さあ……ラストスパートだ！)

「届けて 切なさには」

そしてナオキは青く光っていたオブジェクトを全てオレンジにかえた。

それと同時に歓声がわいた。

「名前をつけようか」

”Snow halation”

想いが重なるまでく待てずにく 悔しいけど好きって純情
微熱の中 ためらつてもダメだねく

飛び込む勇气に賛成く まもなくStart!!」

そしてμsのステージが終わると大きな歓声と拍手がわいた。

「みなさん！ありがとうございます！」

「ありがとうございます！！」

穂乃果が言うみんなが言った。

「みんな！お疲れ様!!」

ナオキはステージを終えたみんなをとびきりの笑顔でむかえた。

その後Midnight catsとEast heart……

そしてARISEのステージも終わった。

「これにて全4チームのステージは終了します。結果は2時間後にUTX高校前の電光掲示板にて発表致します……繰り返します……」

「ナオキくん」

「アリスさん……」

ステージを見上げていたナオキの前にアリスが現れた。

「……………負けましたね」

「えっ？」

「私は負けを確信しました……………Midnight catsのステージは今までで一番よかったです……………でも……………μsのステージは私を圧巻させました……………」

「そんな……………まだ結果は……………」

「私には分かりまーす……………悔しいですが、μsの勝ちです……………」

「私も同意見ね……………」

「東さん……………」

「ナオキくん……………東ってやめてくれない？妹とよく間違えられるから」

「はい……………音美さん」

「よろしい……………話は戻すけど私もアリスさんと同意見よ……………East heartも確かに今までで一番よかったですステージだった……………でも……………μsには敵わないわ」

「待つてくださいいよ……………だからまだ……………それにAIRISEだって……………」

「確かにAIRISEも凄かったわ……………」

「でもμsはAIRISEを上回ってる気がしたので……………」

「そう……………ですか……………」

「言ってくれるじゃないの…」

「渡辺さん……」

「勝つのはA—RISEに決まってるわ…」

絶対に……アリスさん、東さん……考えをあらためてみては？」

「NONO, あらためる必要はありません」

「そうね……」

「ふっ……結果発表が楽しみだわ……じゃ、またね……」

「渡辺さん！勝つのは…… μ xsです！」

渡辺は一旦止まるとまた歩き出した。

「それじゃあナオキくん、また後でね」

「それではー」

渡辺と音美とアリスは歩いていった。

(勝つ……か……でも……まだ安心はできないな……)

ナオキは μ xsの控え室にむかった。

μ xs控え室……

トントントン……

「みんなー着替えたかー？入るぞー」

ナオキはドアのノックして言った。

「うん！もういいよ！」

穂乃果が言った。

「はーい……みんなおつかれー」

「お疲れ様！」

ナオキが言うのとみんなが声を合わせて言った。

「さ、UTXにむかおう……」

μsはUTX高校へむかった。

UTX高校前電光掲示板……

「それではみなさん！お待たせしましたー！第2回ライブ！東京地区予選決勝の結果発表でーす!!」

リコは言った。

「ねえさんは元気だな……」

ナオキは言った。

みんな真剣な表情で電光掲示板をみつめた。

「うう……緊張するなー」

穂乃果は言った。

「そうだね……私たちの歌……ちゃんと届いたかな……」

こことは言った。

「大丈夫です……私たちなら……」

海未は言った。

「そうだにや！自信を持つにや！」

凜は言った。

「でも心配だよー」

花陽は言った。

「ちよつと落ち着きなさいよー」

真姫は言った。

「そういう真姫こそ脚が震えてるわよー」

にこは言った。

「にこつちもな……」

希は言った。

「大丈夫かしら？」

絵里は言った。

「大丈夫だ……俺達なら……きつと……」

ナオキは絵里の手を握って言った。

「……うん……」

絵里もナオキの手を握り返した。

「東京地区予選決勝を勝ち上がったのは……」

音ノ木坂学院スクールアイドル、μ Sだ
!!!!

「え…………おれたち…………勝ったのか…………」

ナオキは言った。

「そう…みたい…………」

絵里は言った。

「……………やった……………やった—————
!!!!

穂乃果は飛び跳ねた。

「私たち勝ったんだね!!」

「ことりは言った。」

「はい!!」

海未は言った。

「やったにゃーにゃー!!」

凜は言った。

「ゆ…夢じゃないよね!」

花陽は言った。

「やったのね…私たち!」

真姫は言った。

「ふん、当たり前よ!!」

「ここは言った。」

「そうやね…」

希は言った。

「やったわ!ハハハ!ナオキ!!」

「ああ!絵里…やったな…」

絵里とナオキは抱き合った。

みんなの目からは涙がこぼれていた。

「やはり……ですね……黒子さん……残念でしたね……」アリスは言った。

「はい……悔しいです……会長……」

黒子 (Midnight catsのリーダー) は言った。

「はあ……やはり……と言うべきでしょうか……水音……仕方ないわね……また来年があるわよ……」

音美は言った。

「おねえちゃん……私……悔しいよ……」

水音 (East heartのリーダー) は言った。

「そんな……A|R|I|S|Eが負けるなんて……」

渡辺は言った。

「仕方ないですよ、会長……」

ツバサは言った。

「悔しいですが……」

英玲奈は言った。

「相手はμ☒s…負けてもそれはありえることですよ…」

あんじゅは言った。

「……ふう……流石ね……さ、今日は解散よ……お疲れ様……」

渡辺はナオキの元へ歩いていった。

A—RISEは帰っていった。

「ナオキくん……」

「渡辺さん……」

「いつまでイチャイチャしているのかしら絢瀬さんも……」

「なーにー？嫉妬？」

「そ…そんなんじゃないわよー…」

「コホン……μ☒sのみなさん、おめでとうございます……まさかA—RISEが負けるなんてね……」

「だから言ったじゃないですか…勝つのはμ☒sだつて」

「ふふつ……まあいいわ……でも、A—RISEに勝ったからには……優勝しなさいよ！」

「当たり前です……」

ナオキは笑った。

「それでは……」

渡辺は帰っていった。

「やはり負けましたねー」

アリスは言った。

「さすがはμ☒sですね……」

音美は言った。

「アリスさん……音美さん……」

「Congratulations! μ☒sのみなさん!」

「おめでとうございます……」

「私たちに勝ったからには優勝してもらわないとですね」

「優勝しないと許しませんよ」

「はい!」

μ☒sは声を合わせて言った。

「では、See you」

「またね」

アリスと音美も帰っていった。

「よーし！みんなで明日打ち上げしようよ!!」

穂乃果は言った。

「いいねー…何する？」

ナオキは言った。

「鍋！…こんな冬には鍋にしようよ！」

穂乃果は言った。

「それじゃあ、みんなで好きなもの持ってきましょう！」にこは言った。

「おもしろそうにゃ！」

凛は言った。

「好きなものかー（それならあれを持っていこう!）」

こことは言った。

「じゃ、明日…夕方の5時に俺んちで」

「はーい!」

そしてμ☒sはナオキの家で鍋で打ち上げをすることになったのだ…

だがこのときだれも知らなかった…

あんなことが起こってしまふなんて……

次回へ続く……

第32話「恐怖の鍋パーティー」

ラブライブ！運営委員会本部：

大会議室……

予選決勝の次の日、ここでは東京地区予選決勝の授与式が行われていた。

「ラブライブ！東京地区予選決勝者μ'sには、この夕テと、第2回ラブライブ！本戦出場券を授与します！」

おめでとう！」

晋三は穂乃果にそれらを渡した。

「ありがとうございます！」

大きな歓声と拍手がわいた。

授与式後……

「ナオキ……」

晋三がナオキに声をかけた。

「おじさん！」

「おめでとう！良かったな」

「ありがとう、おじさん！」

「次は本戦だ……心してかかれよ」

「はい！」

「それと……」

「ん？」

晋三はナオキの耳元で小声で言った。

「大阪地区の予選決勝は明日だ……」

「……うん……」

「ま、がんばってくれ……応援してるよ」

晋三はナオキの肩に手をおいて会長室へとむかった。

（明日……か……真姫にも言わなきゃ……）

マチコ……

ミツヒデ……）

「……キ……ナオキ!!」

「はい……って絵里か……どうした……いきなり……」

「いきなりじゃないわよ！ずっと声かけてたのに！」

絵里は頬を膨らました。

「ごめんごめん……」

ナオキは絵里の頭をなでた。

「……もう……」

「またラブラブしてるなーおふたりさんは」

希は言った。

「……」

2人は顔をあかくした。

「2人ともあかくなってるにやー」

「ひゅーひゅー」

凜と穂乃果は言った。

「てめえらー!!」

「わー!!」

ナオキは2人を追いかけた。

「ハハハハハハ……」

みんな笑った。

香川宅……

「ふうー……ただいまー……って誰もいねーか……さ、片付けよう……」
ナオキは片付けをはじめた。

ピンポン……

「ん？まだはやいな……はい……」
ナオキはドアを開けた。

「お、絵里！どうたんだ？こんなにはやく」

「ナオキのことだから片付けてるのかなーと思って…」

「まあ寒いだろ？入れよ……」

ナオキは顔をあかくして言った。

「うん！お邪魔します…」

「セーターとかここにかけり……」

「うん……」

2人は掃除をはじめた。

そして終わって2人は座った。

「こんなもんか……流石、絵里がいると早く終わるな」

「もう……なによー……」

「ほんとのことじゃんかー」

「もう……からかわないでよー」

「ハハハハハハ……」

2人は笑った。

「まだ……時間あるな……」

「そうね……」

夕方の5時まであと2時間ある。

「絵里……」

ナオキは絵里の手を握った。

「ちよつと……」

絵里は顔をあかくした。

「おれ……みんなをちゃんと輝かせたかな……」

ナオキは絵里を見つめて言った。

「ふふっ……うん……だから勝てたんじゃないの……」

「そうか……そうだよな……」

「ありがとう……ちゅっ……」

そう言うのと絵里はナオキの唇にキスをした。

「ん！……ちゅ……」

ナオキは最初は驚いたがその後目をつぶりこたえるように舌を入れた。

「はあ……もう……せつかちなんだから……んっ……」

絵里はそう言つて唇を離したがナオキは再びキスをした。

「はあ……はあ……もう……そろそろみんな来ちゃうわ……」

「ああ……でも……」

ナオキは絵里を押し倒した。

「きゃー！……ちよつと……ナオキ……」

「絵里……」

ナオキは絵里に顔を近づけた。

マンション前……

「()やで」

希は言った。

「へー……はじめて来たわね……」

にこは言った。

8人は一緒にナオキの部屋にむかった。

「ここがナオキくんの部屋やな……」

ついでにえりちのは3つむこうやで」

「へーナオキちゃんと絵里ちゃんの部屋って近いんだね」

にこは言った。

「じゃあー！入るにやー!!」

凜は言った。

「ちよつと待ちなさい！まずはインターフォンをならしなさい！」

海未は言った。

しかし穂乃果はそれを聞かずにリビングに走っていった。

「やつほー！ー!!きた………よ………」

穂乃果はかたまった。

「あ………」

ナオキと絵里は声を合わせて言った。

「どうしたの穂乃果ちゃ………ん………」

凜はかたまった。

「こらー！だから勝手………」

海未はかたまった。

「あんたたち……………」
にこは言った。

「きやーナオキくんダイターン」

こことは言った。

「はわわわわわわわわ……………」

花陽はかたまった。

「ナオキくんも結構やるなー」

希は言った。

「なにやってるのよ……………」

真姫は言った。

「えっと……………あの……………その……………」

ナオキは言った。

「ち…違うの……………これは……………」

絵里は言った。

「いいんやで……………ナオキくんも男の子なんやし……………えりちもお年頃やしな……………」

「ていうかいつまでそうしてんのよ…にこたちに見せつけようって思ってたんの?」

「はっ!?……………ごめん……………」

ナオキは絵里を離した。

「う……うん……いいのよ……」

絵里は起き上がった。

「ていうか海未たちどうする？かたまってるけど……」

「アハハハ………なんかごめん……」

ナオキは言った。

「もう！破廉恥です！人前でこんな………こんな……」

「ごめんなさい………」

ナオキは1時間正座させられた。

「まあまあそれぐらいにしといたりー……お鍋の準備できるよー」
希は言った。

「そうですね……反省しているようですし許します」

「ははー……有り難き幸せ……」

ナオキは土下座した。

そしてみんなが席についた。

「よーし！電気消すよー！」

穂乃果は言った。

「は？ちよつと待て！なんで電気消すんだ？」

ナオキは言った。

「え？だつて闇鍋でしょ？」

「そうなの!？」

「そうやで？」

「なんで希まで！……つてみんななんで当たり前みたいな顔してんだよ！」

「え？私もはじめて聞いたわよ……（しかも電気消すつて……真っ暗になつちやうじやない……）」

絵里は言った。

「それじゃあ！消すよー!!」

「はーい!」

「だから待ってって……」

ナオキが言う前に穂乃果は電気を消した。

「きやああああああああああ!!」

絵里はナオキに抱きついた。

「絵里!（あ、そうか暗いから……）よしよし……」

「絵里ちゃん!どうしたの?」

凜は言った。

「はっ!?またナオキが?」

海未は言った。

「いや、おれが水こぼしちゃって……大丈夫、ちよつとだけだから……ふ……拭いてやるからな……」

「なら……いいんだけど……さ、はじめよう!」

穂乃果は言った。

そしてみんなは具材を入れはじめた。

（闇鍋ってことはおれと絵里以外はみんな変な食材だな……おれはうどんだけ……み

んなは一体……)

「さ、食べようか！まずはナオキくんから！」

希は言った。

「おれかよ?!……よし……」

ナオキは鍋に手を伸ばした。

「これだあああああ!!!」

ナオキはなにかをとり、口に運んだ。

「うっ……なんで……こんなものが……がはっ！」バタツ……

「ナオキ!?!」

絵里は言った。

(なんで……トマトまるまる1個……しかもこの味は……チーズケーキ……となに?
……)

ここでみんなの入れたものをチェックしよう！

ナオキ……………うどん

絵里……………豆腐

希……………紫色の染色液

にこ……………サンマ

真姫……………トマト

凜……………唐辛子

花陽……………海苔

ことり……………チーズケーキ

海未……………ピーマン

穂乃果……………ほむまん

つていう感じでしたー……………

そしてみんなは変な味とチーズケーキ味の具を食べてダウンした……………

「はっ!?! みんな……倒れてる……」

ナオキが起きるとまわりにみんなが倒れていた。

「ちっ……しゃーね……毛布敷いてやろうか……」

ナオキはみんなに毛布をかぶせて後片付けをした。

「なんだよこれ……紫色だし……チーズケーキ!? やっぱり入ってたか……色んなもん
入れすぎだろ……」

ナオキは鍋をみて驚愕した。

「これは置いとくか……」

「ん……ナオキ?」

「お、絵里……起きたか？ 具合は悪くないか？」

「ええ……あれ？ みんな倒れてる……」

絵里も驚愕した。

「とりあえずみんなこのまま寝かしとかなな……」

「そう……ね……ね……」

「ああ……」

「絵里はどうする？ ここで寝るか？」

「えっと……ナオキと一緒に寝ても……いいかしら？」

「……ああ……」

2人はナオキの部屋へとむかった。

ナオキの部屋……

「ねえ……その……」

「ん？」

「……ううん……なんでもない……」

「そうだ……もうすぐクリスマスだったな……」

「ええ……」

「その……デートに行かないか？」

「うん！行く!!」

「よし！イブにするか？」

「そうねその方がいいわね」

「じゃ、約束だ……」

「うん……」

「おやすみ……」

「おやすみ……」

そして2人は寝たのだった。

翌朝……

リビング……

「ん？あれウチら寝てたんか……あ、毛布や……ナオキくんがかけてくれたんかな？そういえばナオキくんがいないな……えりちも……」

目覚めた希は絵里とナオキがいないことに気づく。

そしてみんなが起きてナオキの部屋にむかうことになった。

「いいんですか？ 勝手に覗いちゃって」

海未は言った。

「いいじゃないじゃない！ 面白そう！」

穂乃果は言った。

「……かなー？」

「……」

「開けるで……」

希はドアを開けた。

「よお、おはよう……」

目の前にはナオキは仁王立ちしていた。

「あ……おはよう……ございます」

8人は声を合わせた。

「さ、どうしてくれようか……」

「アハハハ……」

その後8人は男坂を100往復させられたのだった……………

次回へ続く……………

第33話 「特別企画ナオキと絵里の妄想ラジオ！」

「この番組はシベリア香川のムービーラジオ！の提供でおおくりします……」

『さあはじまりました！ナオキと！』

『絵里の！』

『妄想ラジオ!!』 ↑2人

『でなにこれ？』

『これはな時々やるおれと絵里の愛の結晶だ』

『もう…愛の結晶だなんて……』

『というところで時々このラジオ形式でしていくので本編と外伝と一緒に楽しみにしてください！』

ちなみにこれは外伝じゃなくて本編として扱います！』

『ところで……ナオキ……』

『ん？どうした絵里？』

『1期のところだけストーリーがぎっくりとしか書かれてないのはなんで？』

『えつと……言わなきゃダメ？』

『うん』

『その……はやく絵里と……』

『私と？』

『付き合いたかったから……』

『え……』

『……ともかく!!これから1期リメイク版をお送りします!1部ですが……どうぞ!!!』
(前に書いたそのところを読んでもらってからの方がよくわかりますよ!)

『まずは第7話「No brand girls」の回から……』

『この回はナオキの過去が明らかになって……』

『そしてその翌日の文化祭ライブだな』

『さ、それではリメイク版をどうぞ……』

音ノ木坂学院……

部室……

「ナオキ……入ってきてはいけませんよ！」海未が言った。

「わかってるよ……」ナオキが言った。

ナオキは部室の外で待っていた。

「ナオキももういいわよー」絵里が言った。

「おつ、終わったか！」ナオキは部室へ入った。

「おー！みんな似合ってるなー！」ナオキは言った。

「今回は曲に合わせてかっこよくしたんだ！」ことりは言った。

「そうか……あれ？穂乃果は？」ナオキはみんなを見て穂乃果がいないことに気づいた。

「あ、穂乃果ならさつき遅れてくると連絡がありましたよ」海未が言った。

「そっか……（嫌な予感がする……）」

「ステージの時間まであと1時間だよ……」花陽が言った。

「穂乃果ちゃん……大丈夫かな？」凜は言った。

「あ……」真姫は外を見て言った。

「どうしたの？真姫ちゃ……ウソ……」希は言った。

そう……雨が降ってきたのだ。

「ウソでしょ……なんでこんな時に……」にこは言った。

ガチャ……

「お待たせー……」

「穂乃果！遅いですよ！」海未は言った。

「ごめんごめん……おーつとつと……」穂乃果はふらついた。

「穂乃果ちゃん!?」ことりは穂乃果を受け止めた。

「おい……声もガラガラだぞ？」ナオキは言った。

「そうかな？えへへ……のど飴舐めとくよー」

穂乃果はそう言う到着替えた。

(様子おかしかったな……本当に大丈夫なんか……) ナオキは考えていた。

そして穂乃果がでてきた。

「お待たせー！」穂乃果は元気よく言った。

(あれ？元気だな……) ナオキは不思議に思った。

「雨……強くなってるにや……」

「大丈夫かな……」凜と花陽は心配そうに言った。

「大丈夫だよ！やろう！」穂乃果は言った。

Oh, yeah! Oh, yeah! Oh, yeah!
ほら負けないよね?」

「すごい……あのときも見てたけど……どんどんすごくなってる……」ナオキは舞台裏でそう言った。

「Oh, yeah! Oh, yeah! Oh, yeah! Oh, yeah! Oh, yeah!」

「あうっ……」その時、穂乃果が倒れてしまう……

「穂乃果!」

「穂乃果ちゃん!」みんなが叫んだ。

「ほ……穂乃果!」ナオキは走って穂乃果の元へ走った!

「絵里!穂乃果は!」

「すごい熱よ……」

「……失礼……」ナオキはデコを穂乃果のデコに当てた。

「……すごい熱だな……40度ぐらいはあるな……絵里!穂乃果を運ぶから保健室を開けてきてくれ!」

「わかったー！……………大変申し訳ありません……………メンバーにトラブルがあったため……………ライブは……………中止にします……………」絵里は観客にそう言った。

文化祭ライブは穂乃果が倒れて中止になったのだった……………

廊下……………

「うう……………」

「大丈夫か…穂乃果？」

「ナオキ…くん……………ごめんね……………」

「しゃべんな……………今、海未に電話してもらってるから……………保健室で寝てろ……………」

「うん……………ごめんね……………いきなりこんなことになっちゃって……………」

「いいんだよ……………別に……………そんなことよりお前の体調の方が大事だ……………」

「うん……………ありがとう……………（優しいな…ナオキくんは……………）」

保健室……………

「あ、ナオキ！ここに寝かせて」絵里は言った。

「わかった……………さ、ここで寝てろよ……………」

「うん……………」穂乃果は返事をするらずぐに寝付いた。

「タオル絞ってこなきゃな……………」ナオキはタオルを絞りに行った。

「……………ナオキは優しいわね……………」絵里はそう呟いた。

ナオキはタオルを絞ってして穂乃果のデコに置いた。

「ナオキくん……もう少しで穂乃果のお母さんが来るみたいよ」

「あ、先生……そうですか……」

「あなたたちは先に部室へ行きなさい……穂乃果ちゃんは私に任せて」

「はい、よろしくお願いします！」

そしてナオキたちは部室へ行った。

部室……

「さ、どうする？」 ナオキは言った。

「どうするって……なにを……」にこは言った。

「活動だよ……μsの」

「え……」みんなが声を合わせた。

「こんなことが起きてしまった以上は……な……」

「待つて！でも……」絵里は言った。

「みんなはこんなことを起こしてしまうために活動していたのか？」

「それは……」

「これは明らかに連帯責任だ……」

「ここは穂乃果の体調も……ラブライブ！は……」

「辞退すべきだと思う……」

「そう……ね……」 絵里は言った。

「みんなはどうかな？」

「そうやね……」希は言った。

「そうよ……まだチャンスはあるわ……」にこは言った。

「そうだね……」花陽は言った。

「凜も賛成にや……」凜は言った。

「仕方ないわよね……」真姫は言った。

「そうですね……」海未は言った。

「うん……（穂乃果ちゃんに……いつ話せば……）……」ことりは言った。

「それじゃ……そうしようか……」ナオキは言った。

「それじゃ、明日はみんなで穂乃果の家に行きましょ……」

「そうだな……全員で中に入るのもあれだからおれと1年生は外で待機だ」

「わかったわ」絵里は言った。

そしてその日は解散となった。

『てことで「No brand girls」のリメイク版をお送りしました！』
『ナオキは優しかったわねー』

『やめろ…照れるじゃんか……』

『ふふっ…可愛いんだからー』

『絵里の方が可愛いよ…』

『もう……』

『では次回は第8話「悔しみと進展」と第9話「あらたなSTART」のリメイク版をおおくりしますー！』

『2本もやつちゃうの？』

『リメイクするところが少ないからな……』

『たしかあの回は私がナオキに……』

『は…話すな！は…恥ずかしいだろ……』

『えー』

『それではまた次回にお会いしよう！』

『感想や質問などどんどん送ってね！』

『バイバイ！』 ↑ 2人

この番組はシベリア香川のムービーラジオ！の提供でおおくりしました。

第34話 「特別企画ナオキと絵里の妄想ラジオ！Par t 2」

この番組はシベリア香川のムービーラジオ！の提供でおおくりします！

『ナオキと！』

『絵里の！』

『妄想ラジオ！』 ↑2人

『今回も読んでくれてありがとう！』

かしこいかわいい？』

『エリーチカ!!!』

『ハラショー！ 絢瀬絵里です』

『その彼氏香川ナオキです』

『2回目だねー』

『2回目だねー』

『今回もアニメ1期のところのリメイク版をおおくりします!』

『今日おくりするのは第8話「悔しみと進展」と第9話「あらたなSTART」です!』
『まずは第8話「悔しみと進展」から!』

『この回はおれと絵里の関係が進展するのがメインだからアニメのここは結構とばしたからな...』

『それではどうぞ!』

高坂宅.....

「申し訳ありませんでした!」絵里と海未とことりとにこが穂乃果のお母さんに頭を下
げた。

「あなたたち.....いいのよ!あの子がいけないんだから!」

あの子に会ってあげてちょうだい、今自分の部屋にいるから！」穂乃果のお母さんが言った。

「え……穂乃果ちゃん……動けないって……」ことりは言った。

「昨日からよくなつたのよ……暇そうにしてるからほら入って入って」

高坂宅前……

「穂乃果ちゃん、良くなつたみたいだよ！」花陽が言った。

「よかつたにやー」凜は言った。

「ああ……絵里たちに任せちゃってなんか悪いな……」ナオキは言った。

「そうね……」真姫は言った。

ガラガラガラ……

「真姫ちゃんーん、ありがとーう！」穂乃果は真姫が穂乃果のために弾いた曲の入ったCDを持って言った。

「ちよつと穂乃果！大人しくしなさい！」海未が言った。

「まだ治つてないでしょう！」にこは言った。

「えーだつてーゴホゴホ……」

「つたくなにやってんだよ……………」ナオキは言った。

穂乃果の部屋…………

「私、早く治して練習に復帰するね!ランキングもまだまだだし、頑張らなくちゃ!」穂乃果がそう言うのとみんな下をむいた。

「あれ?みんなどうしたの?」

「穂乃果…………」絵里が口を開いた。

「ん?」

「μsはラブライブ!に出場しません」

「え?」

「あーいう事態を招くためにこれまでやってきたのか…それでみんなで相談して決めたの…」

もうランキングに…………

μsの名前は…………

「ないわ……」

「そんな……」

「穂乃果だけが悪いのではありません……これは私たちみんなの責任です」海未が言った。

「ううん……海未ちゃんたちは悪くないよ……私があんな無理したから……」

「今うじうじしても仕方ないわ……これからは学校廃校を阻止するために頑張りましょう

……ね？」絵里は言った。

「うん……今日はありがとう……」穂乃果は言った。

高坂宅前……

「話せたか？」ナオキは言った。

「うん……」絵里は言った。

「それじゃあ、今日は解散にしようか……」

そしてみんな解散した。

高坂宅……

「おねえちやーん！ご飯できたよー！……あれ？」雪穂が階段を上がった。

穂乃果の部屋……

穂乃果は悔しくて……泣いていた……

(私のせいだ……私が……ちゃんとしていれば……無理をしちゃったから……)

「おねえちやーん！寝てるのー？……あつ……」

「うう……くっ……うう……」

パソコンに落ちる涙……

ランキングにμsの名前は……

なかつた……………

「おねえちゃん……………」

『はい、第8話「悔しみと進展」のアニメのところのリメイク版でしたー』

『あのときは辛かったわね……………ナオキがきてすぐだったし……………』

『そうだな……………おれたち10人の最初の壁と言ってもいいところだな……………』

『続いては第9話「あらたなSTART」です！』

「やつほー!」穂乃果が教室に元気よく入ってきた。
「おー穂乃果!もう大丈夫なのか?」ナオキが言った。
「うん!」

放課後……

屋上……

「さ、練習するぞー」ナオキが言った。

「あれ?ことりちゃんは?」穂乃果は言った。

「あ、さつき電話してくるって言ってましたよ」海未は言った。

「へー」

ガチャ!

そのときドアが勢いよく開いた。

「わあああ！」1年生メンバーが入ってきた。

「どうしたの？」穂乃果が聞いた。

「ハアハアハア……た……た……」

「た……」

「たすけて……」

真姫と凜と花陽は言った。

「はあ？たすけて？」

「じゃなくて！大変なの!!」花陽が言った。

「大変とは？」海未が言った。

廊下……

「えつと……なになに……『来年度生徒募集のお知らせ』……」

「これって!」ナオキが読み上げると1年生とことり以外のメンバーは言った。

「オーブンキャンパスのアンケート結果がよかったみたいだよ!」花陽は言った。

「あ!ことりちゃん!」穂乃果がことりの元へ走っていった。

（あれ?ことり元気ないな……）ナオキはそう思っていた。

「え?どうしたの?」ことりは言った。

「これ！」海未は生徒募集のお知らせの紙を渡した。

「これって……………」

「ことりちゃん！私たちやったんだよ！」

「うん！」

「ハラショー……………」絵里とナオキは言った。

「よし！部室でパーティーだー!!」穂乃果は言った。

「おーー!!」みんな声を合わせた。

部室……………

「ナオキくん！ジュースとお菓子買ってきてー」凜は言った。

「わかったよー……………じゃ、行ってくら」ナオキは買い出しに行った。

「みんなに話すことがあるんです……………」ナオキがいない部室で海未は言った。

「突然ですがことりが留学することになりました……………」

「2週間後に日本をたちます……………」

「え……………」花陽は言った。

「ウソ……………」真姫は言った。

「ちよつとそれ……………」にこは言った。

「みんな驚きを隠せない。」

「前から服飾の勉強したくて……………」そしたらお母さんのアメリカにいる知り合いの人が来て

みないかって……」

「文化祭などもあつてことりは気をつかっていたんです……」

「行つたきり……戻つてこないのね？」絵里は言った。

「高校を卒業するまでは……ごめんね……」

「どうして……言つてくれなかつたの？」穂乃果が言った。

「だから……文化祭とかがあつたから……」海未は言った。

「海未ちゃんは知つてたんだ……」

「それは……」

「どうして言つてくれなかつたの？ライブがあつたからつてのはわかるよ……でも……」

「私たち3人はずっと……」

「穂乃果ちゃん……ことりちゃんの気持ちもわかつてあげ……」希が言った。

「わからないよ！だつていなくなつちやうんだよ！ずっといたのに……離れ離れになつちやうんだよ！なのに……」

「何度も言おうとしたよ？でも穂乃果ちゃんライブに夢中で……ラブライブに夢中で……ライブが終わつたらすぐ話そうと思つてた……でも……あんなことに……」

聞いて欲しかったよ！穂乃果ちゃんには！一番に聞いて欲しかった！だって穂乃果ちゃんは初めてでできた友達だよ？一番の友達だよ？そんなの……そんなの当たり前だよ！！」

ことりは走っていった。

「ことりちゃん！」

「わっ……どうしたことり……あれ？行っちゃった……」

そこにナオキが帰ってきた。

「え……なんかあったの……」「ナオキには話してませんでしたね……」海未が言った。

「おい海未、ことりどうかしたのか……」

「やっぱりナオキも知らなかったのね……」絵里が言った。

「実は……ことりが……留学することになったんです……」海未はナオキに言った。

「……そう……なのか……」ナオキは驚きを隠せない……

ナオキにとつてもことりは大事な幼なじみだからだ……

「私……帰るね……」穂乃果は足早にその場を去った。

そしてその日は解散した。

そして翌日……

屋上……

そこにはことり以外のメンバーが集まっていた。

「ライブ？」穂乃果は言った。

「ええ……ことりが行っちゃう前に最後のライブをしようと思ってね」絵里が言った。

「9人の最後のライブなんだから……気合入れないとね！」にこは言った。

「ライブをやつてなんになるの？だって廃校はなくなつたし、ラブライブも辞退したし

……やつても意味無いよ」穂乃果は言った。

「あんたそれ……本気で言ってるの？……本気だったら許さないわよ！本気だったら

……」にこは叫んだ。

そんなにこをナオキは止めた。

「ナオキ！あんたなに止めるのよ！」

「まあ落ち着け……穂乃果？お前はどうしたいんだ？」

「私は……」穂乃果は少し黙って言った。

「私……スクールアイドル……やめます……」

「え!?」その答えにみんなが驚いた。

屋上をさる穂乃果をだれも止められなかった。

だが……

パシン!!

海未のビンタの音が響いた。

「最低です……あなたは……あなたは最低です!!」

穂乃果は走っていった。

「穂乃果!」 ナオキは追いかけた。

校門前……

「穂乃果!!」

「ナオキくん………」

「お前………あれは本気なのか? スクールアイドルやめるって………」

「うん………だって……私のせいだもん………私がいけなかったんだ………」

「だからあれは全員の………」

「そんな事言って………ナオキくんも私のせいだと思ってるんでしょう!!!………あ………」

「………穂乃………果………」

「ごめん………もう………」 穂乃果は走っていった。

「本心じゃないよな……………穂乃果……………おれはわかってる……………だから……………自分を責めるんじゃないぞ……………」その声は穂乃果には届かない。

屋上……………

「すまん……………止められなかった…」ナオキは言った。

「ごめんなさい……………私が……………」海未は言った。

「海未……………自分を責めるな……………」

「でも……………」海未の目からは涙が流れていた。

ナオキは海未の頭をなでた。

そして……………

「……………今のままじゃダメだな……………」ナオキは言った。

「は？なにいつてんのよ……………」にこは言った。

「μ☒sの活動は……………」

休止する……」

「なんでよーなんで……活動休止にするのよ!!」

なんでみんな黙ってるのよー」にこは言った。

「にこ……この状況なら活動はできないでしょう?」絵里は言った。

「そうだけど……ライブに出れないだけでなく……活動も休止……そんなのって……」にこは言った。

2週間後……

(穂乃果とことりはあれから学校を休んでいる……

にここと花陽と凜は練習しているようだ……

真姫はずっと音楽室でピアノを弾いている……

海未はあれから弓道部にこもりつきりだし……
おれと絵里と希は生徒会……)

「……オキ！……ナオキ!!!」絵里は言った。

「はい!!」

「なによぼーつとして……」

「あ……すまん……」

「ナオキくん……ココ最近ぼーつとしてること多いなあー」希は言った。

「そうかな?」

「ちよつと風に当たってきたら?」

「……ああ……そうさせてもらう……」

そういうとナオキは生徒会室を出た。

「ナオキも気にしてるのね……」

「そうみたいやね……」

「さて……どこいくか……あれは……海未か?」

ナオキは海未を見かけ、追いかけた。

「なんでここに来たんだろ?……………講堂か……………あのとき見たファーストライブ……………まだ心に残ってる……………ドア開いてるな…」

そしてドアから覗くと……………

「ごめんなさい!!」

「あれ?穂乃果……………それに海未……………」

「ふふっ……………ふふふふ……………」

「なんで笑うの!?!」

「私が怒ったのはあなたがことりのことを考えていなかったことではありませんよ……………あなたが自分の気持ちに嘘をついていると思っただからです……………」

「ごめん……………」

「でも……………あなたは私たちをいつも知らない場所へ連れて行ってくれます……………だから……………また連れて行ってください……………私たちの知らない場所へ……………」

「海未ちゃん……」

「さあ！ことりの元へ行つて！」

「でも……ことりちゃんは……」

すると海未は息をすって……

「だつて可能性感じたんだそうだススメー」

「後悔したくない目の前に」

「僕らの道があるー」2人と同時にナオキも小声で歌つた。

「さー行つて！ことりが待つてますよ！ことりも連れて行つて欲しいんです！止めて欲しいんです！あなたのわがままに！」

「わがまま!?!」

「ええ……ふふっ……」

「わかつた！行つてくる!!」

そして穂乃果はことりを連れ戻しに走つた。

「おつとつと……ナオキくん、いたんだ」

「そんなことはいいから早くことりのところに行つてきな」

「うん！」そして穂乃果はことりの元へ走つていった。

「やはりそこで見てましたか……」「バレてたか……そりやあ心配するだろ? 幼なじみなんだからさ」

「そうですね……さ、準備しましょうか!」

「ああ……講堂ライブの!」

そしてみんなに連絡をとり、講堂ライブをすることに!

そして……穂乃果はことりを連れて帰ってきた!

「よし……みんな! 最高のライブにしよう! 楽しんでいこう!」

「はい!」

「いち!」

「に!」

「さん!」

「よん！」

「ごー！」

「ろく！」

「なな！」

「はち！」

「きゆう！……何やってるの？次はナオキよ？」

「お、おれも!?えっとー……じゆう！」

「よーしいこう！」

そして披露したのは

『START:DASH!!』

ナオキは絵里からμsの歴史を聞いていたが実は最初から見てきたから……

「そういやファーストライブのとき言ってたな……『いつかここを満員にしてみせます！』って……満員になったな……してみせたな……」

ナオキは涙を流した。

『はい！これでリメイクは終わり!!』

『なによそのやりきった感じ…』

『まだまだこの小説は続くのよ?』

『いやあーそりゃあそうだけどさ』

『ま、とりあえずお疲れ様』

『おう……』

『感想など待ってるからね!』

『これからもよろしくお願ひします!!』

『てことでまた次回からは本編なんだけど……』

『たしか次はクリスマスデートね』

『おう……』

『楽しみねー』

『そうだな……』

『なにその素っ気ない返事は？』

『いや……その……恥ずかしいといふかなんといふか……』

『なによ……そんな顔あかくされたら……私まで……』

『………と………とりあえず!!次回もお楽しみに!!』

この番組はシベリア香川のムービーラジオ!の提供でお送りしました。

「…………オキ！ナオキってば!!朝よ！起きて!!」絵里はナオキをゆすった。

「……………ん?……………夢?」ナオキは夢を見ていた。

「どんな夢見てたのよ……………もう……………さ、朝ごはんたべるわよ！今日はデートでしょ!」
「おっ、そうだったな！よし!」

ナオキは飛び起きた。

今日は絵里とのクリスマス（イブ）デートなのだ！

次回へ続く

第35話「クリスマスデート」

クリスマススイブ……

朝……

香川宅……

「それじゃ、みんな帰ろう！」穂乃果は言った。

「そうだね……」ことは言った。

「はい！」花陽は言った。

「楽しかったにやー？」凜は言った。

「最後に『？』ついてるわよ……」にこは言った。

「泊めてくれてありがとう！」希は言った。

「お邪魔しました……泊めていたいただいてありがとう……ございました……」海未は言った。

「それじゃあね……」真姫は言った。

「あ、海未、真姫……」ナオキは2人をとめた。

「はい？」

「なに？」

「…………大坂地区予選決勝は今日だ……」ナオキがそう言うと2人は無言で頷いた。
(マチコちゃん……………)

「それじゃあな！明日の練習覚悟しろよ」ナオキは笑顔を浮かべて言った。
その笑顔に恐怖を覚えるメンバーであった……

「絵里、何時から行こうか？」

「そうね…………準備もしたいし…………15時で大丈夫かしら？」

「ああ……わかった！」

「それじゃ、また後でね！」

「おう！」

絵里はナオキの部屋をあとにした。

絢瀬宅……

ピンポン……

「はーい！」

あ、ナオキさん！」亜里沙は言った。

「よくできましたー……絵里は？」

「まだ準備してると思いますよ」

「待って！今行くわ！」絵里が言った。

「できたみたいだな……」

「楽しんで下さいね！」

「ああ……そうだ亜里沙ちゃん、勉強の方はどうだ？もうすぐ試験だろ？」

「はい！おねえちゃんに教えてもらってます！」

「そうか……社会ならおれ教えられるからわからなかったら連絡くれてもいいよ」

「はい！」

「お待たせー」絵里が走ってきた。

「よお！さ、行こうか」

「うん！じゃ、亜里沙……ちゃんと勉強するのよ？」

「わかってる！いつてらっしゃい！」

「いつてきます！」絵里とナオキは声を合わせた。

「そういえばナオキ……」

「ん？」

「今日着てるのってあの時に私が選んだ服よね？」

「ああ……」

「ナオキずつと出かける時その服じゃない……」

「だって絵里が選んでくれた服なんだし……それに……ファッションとかわかんねーし……」

「ならまた今日は選んであげる！」

「ほんとか!？」

「ええ……さー！ ショッピングモールへレッツゴー!!」

ショッピングモール……

服屋『ミント』

「いらつしやいませー……あ、あなたたち！」 内田が2人を見て言った。

「あ、内田さんだ！ お久しぶりです！」 絵里は言った。

「元氣そうねー……あのとき買った服まだ着てるのね……」

「い、いやあー……ファッションとかわからないので……」

「だからまた服買いに来たんです！」

「そうなのねーごゆっくりー」 内田は言った。

「さー！気合入れてナオキに似合う服を選ぶわよ！」絵里は肩をまわした。

「さ、ナオキ！出てきて！」

「ちよつとまって…ボタン1個ずれてた…」

「もう…何してるのよ…」

「よし！大丈夫だ！」

ナオキは試着室から出てきた。

「うん！完璧ね！もともと持ってたマフラーともピッタリだし！」

「そうなのか？」

「うん！すみませーん、お会計お願いしまーす！」

「はーい」内田さんが走ってきた。

「この服そのまま着ていきます」

「はい！かしこまりました…失礼しまーす！」内田さんは値札を切った。

「ありがとうございました！」

「いやあ…クリスマス割引があつてよかつたなー」

「そうねー」

「そーいや大広場にクリスマスツリーあつたな…行つてみるか？」
「うん！行く！」

「じゃ、行こうか……」

「ええ……」

ナオキと絵里は大広場にむかった。

大広場……

「わー！綺麗……」

絵里は大きなクリスマスツリーを見ていった。

飾りでもとも輝いていた。

絵里は目をキラキラさせてそれを見ていた。

「そーだな……」 ナオキは絵里を引き寄せた。

絵里はナオキにもたれた。

そして2人はショッピングモールを出て、商店街へむかった。

商店街……

「どこもクリスマススムードだなー」

「そうねー」

「それにどこもクリスマスセールしてるな……」

「ほんとだわ…ハラショー……」

2人は商店街を歩いていった。

「あ……綺麗……」絵里はある店の前で止まった。

「ん？……これは……ネックレス？」

「ええ……」絵里はそのネックレスを眺めていた。

「ふーん……」

2人はまた歩き出した。

「絵里、ここに入ろうか」

「うん！」

2人はアクセサリー屋さんに入った。

「いててて……」

「どうしたの!？」

「ちよつと腹痛くなつた……ちよつと待っててくれるか？」
「うん……わかつた！」

ナオキはトイレに行つた。

「お待たせー」

「あら、ナオキ遅かつたわねー、お腹大丈夫？」

「おう！大丈夫だ！さ、行こうか！」

「あ、ちよつと待って！これ買ってくるわ！」

「ああ……ふう……疲れた……」

「あら、こんなに真つ暗……」

「そうだな……」

「見て、あそこ！イルミネーションしてるみたいよ！」

「おっ、行くか！」

「うん！」

2人はイルミネーションの方へむかった。

「そのベンチに座ろうか」

「そうね」

「よししょ……」

「ひゃあ……冷たい……」

「（ひゃあ？……可愛い……）今日は寒かったからな……それに、この前の雪も残ってるだろうし……」

「そうね……」

2人は輝くイルミネーションを眺めた。

「冷えてきたわね……」

「寒いか？」

「ええ……少しだけ……」

「ならセーター貸してやるよ……」

ナオキはセーターを脱ぎ、絵里にかけて。

「あ、ありがとう……ナオキは寒くない？」

「うん、おれは全然大丈夫だよ」

「そう……でも風邪ひいちゃうわ……私のマフラー……一緒にまいてあげる」

「お……おう……」

2人は一緒にマフラーをまいた。

2人の顔は赤くなった。

「……………寒く……………ないか?……………」

「え……………う、うん……………」

ナオキは絵里の手を握った。

「ちよつと……………もう……………いきなりなんてびっくりするじゃない……」

「そうか……すまん……………」

「でも……………ありがとう……………」

絵里はナオキにもたれた。

「ああ……………」

そう言うとナオキは手を絡めた。

絵里はそれを絡めかえした。

「そうだ……………絵里に渡すものがあるんだ!」

「渡すもの?」

「セーターのポケット……見てみて」

「うん……」

絵里はナオキに貸してもらったセーターのポケットを探った。

「え……これは?」

絵里はそこから1つのケースを取り出した。

「ま、開けてみて……」

「うん……これって!」

その中には絵里が眺めていたネックレスがあった。

「ああ……欲しがってただろ?」

「い……いつ買ったの?」

「トイレ行ってくつて言っただろ?あの時……」

ナオキは顔を赤くして頬を擦りながら言った。

「あの時に……そうだったの……ふふっ……ありがとう……チュッ……」

絵里はナオキの頬にキスをした。

「絵里……チュッ……」

「チュッ……ん……くちゅ……」

「ん…………くちゅ…………はあ…………」

「はあ…………もう…………」

「そうだ…………もうすぐだった…………」

「ん？なにが？」

「大阪地区予選決勝…………」

「あ…………そうなの…………みましようよ」

「ああ……………」

ナオキはスマホでラブライブ！HPにアクセスし、大阪地区予選決勝の様態を絵里とみた。

真姫も…………海未もみていた。

大阪…………

大阪城ホール…………

「さあ！みなさん、行きますよ！」

マチコが言った。

「ああ…………」ヤマトが言った。

「ナニワオトメが負けるなんてありえへんことやし……」ユキが言った。

「油断は禁物やでー」ミクは言った。

「ミクちゃんの言う通りや……みんな気合入れて行くでー!!」メグは言った。

「さあ……行つておいで……おれの天使たち……」ミツヒデは言った。

「はい!!」マチコ以外は言った。

「はい……（真姫ちゃん……ナオキ先輩……待つてて……）」

「さあ！次が最後のチーム……大坂学園スクールアイドル……ナニワオトメだー!!」

そしてナニワオトメは『虜のアメ』を披露した。

この曲はつまりは「アメであなたを虜にしちゃうぞ♡」って感じの曲だった。

「ふおー……！！！！」

会場が盛り上がった。

メンバーの名前を叫ぶ者もいた。

大阪ではNo.1の人気を誇っているのだ。

「第2回ラブライブ！大阪代表として行くのは……………大坂学園スクールアイドル……………ナニワオトメです!!」

東京……………

「ハ……………ハラショー……………」絵里は言った。

「……………これが……………ナニワオトメ……………」ナオキは言った。

「マチコちゃん……………すごい……………」真姫は言った。

「衣装が破廉恥すぎです!!なんでか!!む……………胸をあんなに……………破廉恥です!!」海未は言った。

……………なんか一人だけ違う……………

「これは強敵になりそうだな……………」

「ええ……でも……負けない……絶対に……」

「そろそろ帰るか……」

「そうね……」

そして2人は帰っていった……

「今日のデートは楽しかったか？」

「ええ！……それに……クリスマスプレゼントも貰ったしね……」

素敵なサンタさんから……ふふっ……」

「真姫の前ではおれからって言うなよ……」

「そ……そうね……」

そしてもうすぐ全地区代表が決まろうとしていた……

次回へ続く……

第36話「ナニワオトメ」

音ノ木坂学院…

部室……

「さ、今日は練習の前に昨日行われた大阪地区予選決勝を見てもらう」

ナオキは言った。

「本当ですか?!?!」花陽が立ち上がった。

「あんた…なかなかやるわね……」にこが言った。

「ほえ? そんなにすごかったの…大阪地区予選決勝って…」穂乃果が言った。

「知らないんですか!?!」

昨日の大阪地区予選決勝は『ナニワオトメ』が圧倒的な力をみせて勝利……」

「ナニワオトメ?」ことりが言った。

「ナニワオトメは大阪学園のスクールアイドルだ……」ナオキは言った。

「あ……」みんなが声を合わせた。

「……ごめんなさい……」花陽は言った。

「いや、花陽は悪くないよ……仕方ない……ナニワオトメは人気出てきてるからな……」
「そうなの？」凜は言った。

「うん……ナニワオトメは大阪で圧倒的な人気をほこっているの……」

花陽は言った。

「でももはやその人気は関西No. 1と言ってもいいわ……」にこは言った。

「ああ……おそらく本戦では一番の強敵になるだろう……そこで……一度みんなにナニワオトメのライブをみてもらいたいんだ」ナオキは言った。

「なるほどお……はやくみたい！」穂乃果は言った。

「よし……ならみんなこのパソコンをみてくれ」

ナオキはノートパソコンを出して、昨日の大阪地区予選決勝のナニワオトメのライブをみせた。

そしてみんなが沈黙した……………

「どうだった？」 ナオキが言った。

「確かに…すごいにやー……………」 凜は言った。

「うん…」 ことりは言った。

「そうやね……………これはほんまに強敵や……………」 希は言った。

「でも……………」

「楽しみじゃない？」穂乃果が言った。

「えっ？」穂乃果とナオキ以外が声を合わせた。

「ふっ……ははははははは」ナオキが笑った。

「ナオキ？」海未が言った。

「穂乃果ならそう言うと思うってたぜ……そうだ……楽しみじゃないか？こんなにすごいアイドルと戦えるんだぜ？」

「それは……そうやけど……」希は言った。

「そして……おれは信じてる……」

おれたちなら……μ☒sなら……ナニワオトメにだって負けない……

A—RISEにも勝てたじゃないか！

絶対勝てる！」

そしてみんなが笑顔になった。

「そっやね！」希は言った。

「ええ……やってやろうじゃない！」にこは言った。

「私たちなら勝てる！」絵里は言った。

「テンション上がるにやー！！」凜は言った。

「そうですよね！」花陽は言った。

「ふふっ……そうね……（マチコちゃんたちにだって私たちは負けないんだから……）」真姫は言った。

「はい……必ず勝って見せます！」海未は言った。

「うん！頑張るぞー！」ことりは言った。

「よーし!!じゃあ練習だー!!」穂乃果は言った。

「とその前に…」ナオキは言った。

「ほえ?」

「とりあえず…ナニワオトメのことをみんなに知ってもらわないとな…練習はその後だ」

「はい……」穂乃果は座った。

「大坂学園スクールアイドル『ナニワオトメ』……」

さつきもにこや花陽が言ったけど大阪……いや関西No.1の人気と実力をほこっている……

メンバーは…

3年生の『大空ヤマト』『小日向ユキ』

2年生の『斎藤ミク』『佐藤メグ』

そしてリーダーは1年生の『香川マチコ』…

中でもマチコはどのメンバーよりもすべてにおいて優れている…

メンバーの平均バストも大きく、衣装も胸を意識している…

そしてこのチームを支えている…というか支配しているというかなんというか…

野球でいう監督みたいな立場にいるのが…

大坂学園生徒会長『香川ミツヒデ』だ…

そして…

ナオキがここでためらった。

「ナオキどうしたの？」絵里が言った。

「にこ、花陽…すまん…」

「え？」にこと花陽が言った。

「ナニワオトメはマチコ以外……全員ミツヒデの女だ……」

「え……………」みんなが声を合わせた。

「ちよつと……………」それ……………」どういうこと……………」にこが言った。

「そのままの意味だ……………」マチコはミツヒデの妹……………」そしてそれ以外のメンバーは全員ミツヒデの彼女だ……………」

「そんなこと……………」花陽は言った。

「マチコから教えてもらったんだ……………」おれも最初聞いた時は驚いたよ……………」

「なんて人なのですか……………」ミツヒデっていう人は……………」あんな破廉恥な衣装で……………」それに……………」4人と付き合っているですって……………」最低ですか!!」海未は言った。

「まあまあ……………」穂乃果は言った。

「海未ちゃん……………」ことりは言った。

「まあ海未、落ち着け……………」ミツヒデはそういうやつなんだよ……………」

でもナニワオトメが歌やダンスが優れているのは確かだ……………」

「そうやね……メンバーの実態はそんなんやけど……実力はホンモノや……」希は言った。

「ですが………」海未は言った。

「それにミツヒデたちは……μ□sを一番目の敵にしている……警戒している……と言った方がいいのかな？」

「そうなの？」絵里は言った。

「ああ………これもマチコから聞いた………」

あの4人は『μ□sは叩き潰す』『μ□sなんて敵じゃない』『私たちの方が上』『圧倒的な実力をみせてやる』と言っているらしい………

(そしておれから『全てを奪う』……か……)

「そこまで言わされて黙っていられないわね……」

「真姫……」海未は言った。

「なにが叩き潰すよ！なにが敵じゃないよ！なにが私たちのの方が上よ！

絶対μsが勝つてやるんだから！」真姫が立ち上がって言った。

「真姫ちゃん……」穂乃果が言った。

「あの真姫ちゃんが……」希が言った。

「ベ……別に……本当のこと言っただけよ！悪い？」真姫は顔を赤くして言った。

「ふっ……さ、気を取り直して練習行くぞ」

「はい！」

そして $\mu \boxtimes s$ は神田明神にむかった。
(例の階段ダツシユ)

大坂学園……

ナニワオトメトレーニングルーム……

「ワン！ツー！スリー！フォー！ファイブ！シックス！セブン！エイト！……」
ダンスコーチが手拍子している。

「よし！休憩だ！」

「はい！」

「ふうー……今日もハードやなあー」ヤマトが言った。

「そう？ウチはまだまだいけるで……ハアハア……」ユキが言った。

「ユキもばててるやんけ……」ミクが言った。

「あはは……でもミツヒデくんの頼みだもん！やらなきや！」メグは言った。

マチコは外を眺めていた。

（真姫ちゃん……見ててくれたかな……ナオキ先輩も……

もうすぐ会えるのかな……）

ガチャ……

「よお、頑張ってるか？」ミツヒデが入ってきた。

「ミツヒデくん！」マチコ以外の4人は言った。

「お兄ちゃん……」マチコは言った。

「んー……みんな汗で練習着が濡れてるぞー

なんかいいな……」

「もうミツヒデくんだったら……エツチだねー」ヤマトが言った。

「それはみんなが悪いんだよ……おれを誘惑するから」

「なに言つとんねん！」ユキはミツヒデにつっこんだ。

「あ……」みんなが声を合わせた。

「……よし、決めた……ユキ……今日は寝かせねーぜ……おれにつっこんだお仕置きだ」

「あーユキちゃんいいなー」

（これが……1週間に1回はある……お兄ちゃんの気分によつたら1週間に4人と

……

お兄ちゃんは怖い……いろんな意味で……

さらにこの4人以外にも何人も彼女さんがいる……

みんな私をお義姉ちゃんと呼べとか言ってくるし……

昔はお兄ちゃんあんなんじゃなかったのに……

なんで……)

「おい、ミツヒデー！なにイチャイチャしてんだよ！はやく練習再開させろ！」ダンスコー
チが言った。

「わかったよ……」

チンギスカン」

「ああ……さ、練習再開だ！」

「はい！」

そう、チンギスカンはナニワオトメのダンスコーチを任されているのだ。そしてナニワオトメは練習を再開した。

そして時は流れ……

沖縄……

国際通り……

大広場……

「沖縄地区予選決勝勝者は……」

首里城高校スクールアイドル……

『Wウフソー（ダブルウフソー）』だー!!』

香川宅……

「ついに決まったか……本戦に出場する全スクールアイドルが……」

「そうね……」

「だが誰が相手でも……」

「私たちが勝つ……」

あら……希からメールだわ……」

「おっ、なんだ？」

「えっと……」

『えりちー、ごめんやけど大晦日に神田明神のお手伝いしてくれへんかな？

ナオキくんも一緒にええから！』

だって……」

「大晦日……そうか……もうすぐだったな……お手伝いって言ったら絵里、巫女装束着るのか？」

「え……そうなのかしら？」

「そうだろ……みたいなー、絵里の巫女姿……」

「もう……じゃ、希にOKしとくわね……ナオキも一緒に！」

「おう！」

2人そこは希に頼まれて大晦日に神田明神の手伝いをする事になったのだった
……

次回へ続く……

第37話 「みんなで叶える物語」

大晦日……

神田明神……

男子更衣室……

「よし、これで大丈夫だ」

「ありがとうございます……式部さん」

ナオキは神主の式部納言さんに装束を着せてもらっていた。

「いえいえ……しかしすまないねえ……手伝ってもらっちゃって……」

「いえいえ！とても楽しみです！」

「ならよかった……彼女さんの巫女姿もはやく見たいんだろ？」

「なっ………は……はい………」 ナオキは顔を赤くして言った。

「ははは……私の妻も昔ここでアルバイトしててねえーそれで付き合って結婚したんだ

よ」

「へー………結婚かあ………」 ナオキはボソツと言った。

「さ、行こうか！彼女さんも待ってるよ」

「はい！」

女子更衣室……

「おー！えりちやっぱり似合ってるなあー！にこっちも！」

「ふふーん、でしょ？これでみんなにこの虜にしてやるんだから」

「そ…そうかしら？……」

「えりちははやくナオキくんに見せたいんやろ？」

「なっ…もう…希！」 絵里は顔を赤くして言った。

「ふふっ…あらあらみんな仲がいいわね…」

「あ、小町さん！」

こちらでは式部納言の妻の式部小町が手伝っていた。

「さ、はやく行くわよー！」 にこは腕をまわして言った。

「にこっち気合いはいつてるなあー」

「あ、おーい！」ナオキが手を振る。

「あ、ナオキくん…もう着替え終わってたんやね」希が言った。

「ああ…式部さんに手伝ってもらったからな」

「どうだい、似合ってるだろ？」納言さんが言った。

「はい！ナオキくん、似合ってるで！」

「ふん、なかなかやるじゃない」

「そうね……かっこいいわよ……」

「お、おう……絵里も……似合ってるよ……か……かわいい……で」ナオキは顔を赤くして言った。

「あ……ありがとう……」絵里も顔を赤くした。

「なにイチヤイチャしてんのよ……」

にこは言った。

「さ、もうすぐたくさん人くるからたくさん働いてね！」小町さんが手を叩いていった。

「はい！」

そして4人は仕事に取り掛かるのだった。

そして23時59分……

「もう1年終わりか……」ナオキは言った。

「そうやね……」希は言った。

「なんかいろいろあった1年だったわ……」にこは言った。

「そうね……」絵里は言った。

「大坂学園退学して、音ノ木に来て、みんなと出会って、μ'sのサポートすることになつて……いろんなことがあったな……」

「さ、にこっち！今年目標は！」

「え!?……えつと……そうね……もちろん……「あ、カウントダウン始まるみたいやね！」」

「ちよつと希！」

「10!9!8!……」

「なあ……絵里……」

「ん？」

「今年はありがとう……来年からもよろしくな……」

「ええ……」

「3!2!1!0!!」

そして除夜の鐘が響いた。

響く拍手の音……

「みんな、あけましておめでとう!今年もよろしく!」

「よろしくなあー」

「よろしく!」

「よろしく……」

「さ、ここからが忙しいでー」

「あら、ナオキくんじゃない」

「あ、ツバサさん！それにあんじゅさんに英玲奈さんも！おめでとうございませう！」

「おめでどう……」

「お手伝いー？」

「はい、人手が足りなかったみたいで」

「装束姿も似合ってるな」

「ありがとうございます……」

そして少し気まずい雰囲気漂う……

「ふふっ……そんなに気を使わなくてもいいのよ……」

「ラブライブ……絶対優勝しなさいよ！」

「はい！」4人は言った。

「ナニワオトメは強敵になるだろうな……」英玲奈は言った。
「でもμsなら大丈夫……頑張つてね……」あんじゅは言った。

そしてA—RISEは去っていった。

そしてどんどん忙しくなっていた。

「ちよつとこれ運んでくれる？」小町さんが言った。

「はい！」

「3人で行つてこいよ……ここは任せてくれ」

「わかつたわ……さ、にこ、希、行くわよ」

「はい」

「ほな、頼んどくわー」

3年生組は荷物を運びに行った。

「あ、ナオキさん！」

「お、亜里沙ちゃん！あけましておめでとう！」

「おめでとうございます！」

「お久しぶりです」

「お、雪穂ちゃんも来てたんだ！あけましておめでとう！」

「はい！おめでとうございます！」

「ねえねえ、ナオキさん！私ね、音ノ木坂学院に合格してμ☒sに入れますようになってお願いしたんだ！」

「あつ……………そ…そうか！絶対合格しろよ！」

「はい！」

「……………ナオキさん、これ下さい」

「あいよ！3000円だ」

「どうするんですか？」 雪穂はボソツと言った。

「ん？」

「あ…ありがとうございます！私も音ノ木に合格しますね！」

「お…おう！約束だ！（……………雪穂ちゃん……………なんか言ってたな……………）」

雪穂と亜里沙は絵里たちを探しに行った。

「ふうー……やつとすいてきたか……」ナオキはひと段落して落ち着いていた。

「あ……あのっ！」ある一人の少女が声をかけてきた。

「はい、どうしたんですか？」

「あ……あの……μ☒sの……香川ナオキさん……ですよね？」

「はい、そうですけど……」そうナオキが答えると少女は笑顔になった。

「わ……私！ナオキさんのファンなんです！」

「え？お……おれ!？」

「はい！」

「意外だなあ……おれにはファンなんてできないと思ってたよ」

「いえいえ！そんなことないですよ！私以外にもたくさんいますよ！ほら……あそこ見てください！」

「ん？」 ナオキはその少女の後ろを見た。

するとナオキを見てキャツキャツキャツ喜ぶひとたちがいた。

中には「かっこいいー」などと言っている人もいる。

「ほんとだ……」

「あの……私、μsのこと応援してますから！頑張ってください！！」

「ありがとう！絶対優勝するからな！」

「はい！」

その少女は去っていった。

そして友達とだろうか後ろで一緒にキャツキャツキャツ言っている。

「ファンかあ……おれにもいるんだなあ……感激だ……」

ナオキは一人感動していた。

「あ！ナオキくんいた！」

「お？……あ、穂乃果！みんなも」

「あけましておめでとーう！」

「おめでとーう！みんなもおめでとーう!!」

「おめでとーうございます」海未は言った。

「おめでとーう」ことりは言った。

「おめでとーう……」花陽は言った。

「おめでとーうにや！」凜は言った。

「おつ、凜スカート似合ってるな」

「えへへー……ありがとーう！」

「ナオキの装束姿も似合ってますね」海未は言った。

「うん、かつこいい！」ことりは言った。

「あははは……ありがとーう……あれ、真姫は？」

「また隠れてるの？はやく来るにやー！」凜は走っていった。

「ちよつと！」真姫が凜に押されてやってきた。

真姫は綺麗な着物に身を包んでいた。

「なんだ似合ってるじゃんか…ハラシヨー！」ナオキは親指を立てて言った。

「ヴええ!?…あ…ありがとう…」真姫は顔を赤くして言った。

「絵里たちには会ったのか？」

「うん！さつき会ったよ！」

「そっか…じゃ、また明日な」

「うん！ばいばい！」

そしてみんな帰っていった。

「お待たせー」3年生組が帰ってきた。

「おかえり…結構暇になったぞ」

「そう、ごめんね…ナオキだけにやらせちゃって」

「いいんだよ、全然……」

「お疲れ様ー」小町が現れた。

「お疲れ様です！」4人が声を合わせた。

「もう時間だし、あがってもいいわよ！みんなよく働いてくれたからお礼ははずませてもらおうわ」

「おー！小町さん太っ腹やん！」希は言った。

「ふふっ…みんなちゃんとお参りして行ってね」

「はい！」

「うわあ…また人多くなってきたな……」ナオキは着替え終わって3年生組を待っていた。

「お待ちせー」3年生組がやってきた。

「よし、行こうか！」

「うん！」3年生組は声を合わせた。

そして4人はお願い事をしにむかった。

(ラブライブ!で優勝できますように……………)

「みんな送っていくよ、夜も遅いしな」

「すまんなあー」

「ふん、別にここは大丈夫よ」

「ふふっ……………」

ナオキは希とにこを送り、絵里と2人つきりで帰った。

「ねえ…ナオキ……………」

「ん？」

「どうすればいいのかしら……………」

「なにがだ？」

「その……………これからのことを……………話すべきか……………」

「……………」ナオキは黙ってしまった。

「あ……ごめんね……急にこんなこと……」

「いや……おれは……やつぱり話すべきと思うな……」

「え？」

「それでこの先があやふやになってライブに挑むのもあれだし、それで集中できなくてあれだし……それに……やつぱりいつかはみんな話すべきことだ……話さなきやいけな……いことだ……だから話して……みんなで気持ちをあらたにして……本戦に挑みたい……」

「それがおれの考えだ……」

「そう……」

「ま、ゆっくり考えていこう……」ナオキは絵里の頭に手を置いた。

「うん……」

そして数日が過ぎて…

音ノ木坂学院……

生徒会室……

「よおー」

「あ、ナオキくん！」フミコが言った。

「すまん…フミコたちに任せちゃって」

「いいのよいいのよ！」ヒデコが言った。

「ナオキくんたちはラブライブ！に集中してね！」ミカが言った。

「ありがとう……ヒフミ！」

「略すな!!」3人は声を合わせた。

屋上…

「さー練習開始するぞ！まずはストレッチから！」

「はい！」

ストレッチは

穂乃果・ことり

海未・凛

花陽・真姫

希・にこ

絵里・ナオキ

のペアでしていた。

「自由？選曲も？」穂乃果は言った。

「はい、曲だけじゃありません：衣装や曲の長さも基本的には自由です」海未は言った。

「とりあえず全代表が1曲ずつ歌いきって：」絵里は言った。

「会場とネット投票で優勝を決める実にシンプルな方法です」花陽は言った。

「それでだな……参加チームの中では印象づけるためにやっぱり『あれ』がいると言われてるんだよ」

ナオキは言った。

「あれ？…なにそれ？」穂乃果は言った。

「それは……」

『キャッチフレーズ』だ!!」

ナオキは目をクワッと開いて言った。

部室……

「ほら見てみる……どのチームもキャッチフリーズを付けてる」
「ほんとだ……」

「例えば……KTお使い娘は『恋の小悪魔』」ナオキは言った。

「花園ガールズは『はんなりアイドル』」海未は言った。

「シンデレラズは『With 優♡』」ことりは言った。

「みんな色々考えてるわねー」絵里は言った。

「あ……ナニワオトメ……『弱肉強食』……」真姫は言った。

「これは……ミツヒデの口癖だったな……弱肉強食……あいつらしいな……」ナオキは言った。

「これ……キャッチフリーズなんか？」希は言った。

「キャッチフリーズはそのグループを一言で表す言葉ですから……ナニワオトメは……」

「食らう方だな……残りは全員肉……私たちが勝つのは最初から決まってる……ってい

うふうな感じかな……」

「ふん、言ってくれるじゃないの……」にこは言った。

「で、凜たちはどうするの？」凜は言った。

「うーっ………石鹸じゃない！」穂乃果は言った。

「ハラシヨー！」

「ハラシヨー！じゃないわ……よ！」絵里はナオキをつねった。

「痛い痛い痛い!!」

「とりあえず今日は解散しましょう」絵里はナオキの頬をつねったまま言った。

「はい……」

「痛い痛い痛い！離して！離して！お願いします！なんでもするからああああああ
!!!」

香川宅……

「うーん……一言で……か……難しいなあ……」

プルルル……

「ん？海未か……珍しいな……もしもし？」

「あ、ナオキ……少しよろしいですか？」

「ああ……どうしたんだ？」

「穂乃果がツバサさんと2人で話したのですが……それでツバサさんから聞かれたことが……『 μ を突き動かしている原動力はなにか』とのことなのです」

「 μ s 突き動かしている原動力……か……」

「それがキャッチフレーズになると思うのですが……」

「うーん……原動力か……」

「サポートしてくれてるナオキならわかると思ったのですが……」

「そうだなあ……笑顔？かな……」

「笑顔……ですか……」

「ああ……みんなの笑顔があるから見てる人も笑顔になるし……」

なんだろう？

みんなの笑顔には不思議な力があるんだよ……」

「笑顔が……原動力……」

「ピンとこないか？」

あ、ちゃんと海未の笑顔にも元氣ももらえてるからな」

「や、やめてください!!」

「はははは……じゃ、また明日な」

「はい、おやすみなさい」

「おやすみ……」

原動力……ねえ……どういう意味だろ……えつと……『原動力 意味』検索……『活動
を起こすもとなる力』……へえー……」

ナオキは原動力の意味を覚えた。

「あ、穂乃果がなんか言ってる……『餅つき』……だと……」

ナオキ「なんで餅つきなんだ？」

穂乃果「みんなにお礼したくって……だってみんなのおかげでラブライブ！に出場でき
たんだし」

ナオキ「そうだな」

花陽「た…食べていいですか？」

穂乃果「余ったらね！」

花陽「頑張って余らせませす」

ナオキ「いやいや、それは違うだろ」

穂乃果「ともかく！」

明日は朝9時に穂むらに集合！

お昼に配って、その後練習で！」

絵里「了解」

希「OK」

にこ「了解」

花陽「わかりました！」

真姫「了解」

凜「わかったにや!!」

海未「わかりました」

ことり「うん（・8・）」

ナオキ「あいよ」

翌日……

「よいしょ!!」

「よっ!」

「よいしょ!!」

「よっ!」

ナオキがついて穂乃果が水をつけていた。

「ハラシヨ……さすがナオキね…」絵里が言った。

「男らしいですね…」海未が言った。

「照れるじゃんか……よいしょ!!」

「よっ！はい！終わりだよ！」

「ふう……疲れたあ……もう動きたくない……はあはあ……」ナオキは言った。

「お、本格的ね！」

「へいらっしやい!!」穂乃果が言った。

そしてみんなにお餅を配った。

「はい！せーの……」

「にっこにっこにー♪」

にこの合言葉で記念撮影……

「あれって流行ってんのか……」

そう今、「にっこにっこにー♪」は音ノ木では一大ブームを巻き起こしているのだ。

「ナオキくん！」

「あ、カキク先輩たち！お久しぶりです！」

「だから略さないでっ!!」3人は声を合わせた。

「ははは……お餅は召し上がれましたか？」

「うん、とつてもおいしかったよ！」カオリは言った。

「おれがついたんで…嬉しいです」

「へー！すごい！これナオキくんがついてたんだ！」キョウコは言った。

「そうだ！ナオキくん！写真撮って！」クルミが言った。

「え？おれですか…」

「いいじゃん！さ！さ！」

「じゃあ私も！」

「私も!!」

そして女子の集団がナオキを取り囲んだ。

「ちよつと…ま…ま…だ…だ…ダレカタスケテー…!!」

「はあ……なんで今日はこんなに疲れるんだ………」

「お疲れ様……はい、お水」絵里はナオキに水を渡した。

「ありがとう………」

「で、穂乃果……なにか思いつきましたか？」海未は言った。

「んー……ここまで出てる………」穂乃果は首を指さして言った。

「それほんと？」真姫は言った。

「ほんとだよ！」

「さ、練習行くか……しんどいけど………」

「はい！」

神田明神……

みんなは階段ダッシュをしていた。

なんと全員がベストタイムをたたき出した。

「ハラシヨー………」

全員ベストタイム更新だぞ……

やっぱり成果出てるんだなあ……」

「みんなー!!これみてー!!」穂乃果が叫んだ。

「どうしたんですか？」海未が言った。

「これって……」ことりが言った。

「絵馬……多いわね……」真姫は言った。

「正月明けやからなあ……」希は言った。

「これ……音ノ木の生徒のじゃない？」にこが言った。

「ほんとだ……」凜は言った。

その絵馬に書かれていたのは音ノ木の生徒など多くの人たちのμsへの応援メッセージだった。

『μsが優勝しますように』

『μs大好き!頑張って!』

などなど……

「あ……これ……」花陽は雪穂と亜里沙のを見つけた。

『当日遅刻しませんように』

『大会の日晴れますように』

「みんな……応援してくれてるのね……」絵里は言った。

「そういえば……ここまでこれたのもみんなのおかげだな……」

こんなに多くの人に応援されて……支えられて……思ってもらえて……

予選決勝のときもそうだし……

μ☒sって……そういうもんかなあ……」ナオキが言った。

「そうだ……それだよ!!」

「これが……これがμ☒sなんだよ!!」

穂乃果が言った。

「これが？」花陽は言った。

「うん！」

みんなに支えられて……

こんなにたくさんの人に応援してもらえて……

私たちが……みんなの力で動いてるんだよ！

それが原動力なんだよ！」

「みんなの力……」絵里が言った。

「それが……原動力……」海未が言った。

「それが……μ☒sか……」ナオキが言った。

「それでキャッチフレーズは……これがいいと思う！
それは………」

UTX高校……

今日から本戦に出場するグループの名前とキャッチフレーズが流れるのだ。
いろんなグループ……いろんなキャッチフレーズが流れて……ついに……

エントリーNo. 11

μ
☒
S

『みんなで叶える物語』

それがμ☒Sのキャッチフレーズ……

「ん？あれは……ツバサさん……」

ナオキはツバサを見つけ、そっちへ歩き始めた。

「なるほどね……『みんなで叶える物語』か……」

「お久しぶりです」

「ナオキくん……」

「これがおれたちの原動力……ですよ」

「原動力はみんなの力ってことね」

「はい」

「ふふっ……流石……私たちのライバルだわ……」

ツバサは去ろうとしていた。

「ツバサさん!!」

「なに?」

「『みんな』ってツバサさんたちも含まれてるんですよ!

だから今のμ☒sは最強なんです!

なんだってあのA—RISEもμ☒sの原動力になってるんですから!」

「……………そうね……………私もそう思ってたわ……………」

「だから……………応援してくださいね！」

おれたちは絶対……………優勝します!!!」

「ええ……………頑張つてね……………」

当日、どうせ私たちもライブするんだし……………」

「え？」

「あら……………知らなかったの？」

第2回ラブライブ!では前回優勝者がライブを披露するの……………」

「また……………見えるんですね……………」

「ふふつ……………そういうこと……………それじゃあね……………」

練習、頑張つてね……………」

ツバサは去っていった。

「よし!また練習メニュー考えなきゃな!

そうだ!A—R—I—S—Eのみなさんにも頼もう!!……………なんでさつき思いつかなかつ
たんだ……………」

ナオキは少し落ち込んでしまった……………」

次回へ続く……

妄想外伝「絵里の誕生日」

プルルルル……プルルルル……

「あら？ナオキからだわ……………もしもし？」

「もしもし絵里？急だけど明日暇か？」

「うん……………暇だけど……………どうしたの？」

「ああ……………その……………デートに行こうぜ……………場所はおれに任せてくれ」

「うん！わかった！楽しみにしてるわね！」

「ああ……………じゃ、また明日な」

「うん……………さて、なに着ていこうかしら！」

絵里はナオキとのデートに着ていく服を選んだ。

翌日……

「なんでマンションから一緒に行かないんだ……………女心はわからん……………」

ナオキは絵里のお願いで公園で絵里と待ち合わせをしていた。

「あ、ナオキ！待った？」そこに絵里がやってきた。

「はやいな…まだ集合の10分前だぞ？」

「ナオキこそ…ふふっ…いつから待ってたの？」

「いや、おれもさつき来たところだ…さ、行こうか（ここは集合の1時間前って言わない方がよかつたのだろうか…）」

そう言つてナオキは手をだした。

「うん！」

絵里はナオキの手を握り、いつも通り指を絡めた。

そして2人は歩き出した。

「ねえナオキ…どこいくの？」

「そうだな…まずは博物館に行こうか」

「うん！」

2人は博物館へむかった。

「おーすげー!! ハラショー!!」

ナオキは歴史の展示にテンションがあがっていた。

「もう……ナオキつたら……」

「絵里! これすごいんだぜ! おれも初めて見た! 歴史の教科書にのってるやつだ!」

「はいはい……」

「あ……すまん……つまんなかったか?」

「ううん! そんなことないわよ……ただ……はしゃいでるナオキ……久しぶりに見たなーつて……」

「そうか?」

「うん……なんだか……安心するわ……」 絵里は顔を赤くした。

「……そうか……そろそろ時間か……絵里次のところに行こうか」

「え、もういいの?」

「おう! さ……」

「うん……」

2人は博物館をでた。

神田公園……

「そのベンチに座ろうか」

「ええ……」

2人はベンチに腰かけた。

「すまん……デートっぽくなくて……」

「ううん……いいの……ナオキと一緒にいたらそれでいいもの……」

「……………お……おう……」 ナオキは顔を赤くした。

「あ、赤くなってるーかわいい……ふふっ……」

ナオキは一呼吸した。

「……………ここに来てよかった……………」

「なによいきなり……………」

「μ□sと出会えてさ……………みんなと仲良くなれて……………なにより、絵里と付き合えたんだ……………来てよかった……………」

「もう……………ふふつ……………私もナオキが来てくれてよかったわよ……………あのとき……………μ□sに入るときも……………私の背中を押してくれたし……………ほんとうに感謝してるわ……………」

絵里はナオキにもたれた。

「ああ……………」

ナオキは絵里をさらに引き寄せた。

「さて、そろそろ行くか……………」

「どこに行くの?」

「内緒だ」

「なによー」

そう言つて絵里はナオキの腕に抱きついた。

「まあ、ついてこい」

そしてついたのは穂むらだった。

「あれ？穂乃果の家じゃない…なんで？」

「まあいいじゃん、さ、どうぞどうぞ…」

「ちよつと押さないでよー」

「あ、そうだ…ちよつと失礼するよー」

ドアの前まで行くとナオキは絵里の目を手で塞いだ。

「ええーちよつと…なに？」

「まあまあ……」

そうして居間につくと……

「じゃ、はずすぞー……」

ナオキは絵里の目から手を離した。

「もう一体……」

パンパンパンパンパンパンパン！

「わっ!?!えっ?」

「絵里！」

えりち！

絵里ちゃん！

誕生日おめでとう!!!」

絵里以外のμsメンバーは声を合わせて言った。

「みんな？……え？ナオキ……私をデートに誘ったのって……」

「あ……ああ……みんなが準備してる間に……時間稼ぎというかなんというか……アハハハ……（ま、普通にデートしたかったんだけど……）」ナオキは頭をかきながら言った。

「さ、絵里ちゃん！ここに座って！」穂乃果は言った。

「今日の主役は絵里ですよ！」海未は言った。

「ナオキくんは絵里ちゃんの隣ね！」穂乃果は言った。

「おう！……さ、絵里……」

そして2人は席に座った。

「はい、これは誕生日ケーキです」ことりはテーブルに誕生日ケーキをだした。

「ハラショー！チョコレートケーキだわ！」絵里はとても喜んだ。

「チョコレートケーキ作るの初めてだったから苦労したわ……」にこは言った。

「これ……ことりとにこが作ったの？」

「うん、そうだよ！これはにこちゃんと私からのプレゼント！」

「ありがとう……」

「さ、みんないくぞー……せーの！」

「ハッピーバースデートウユー……ハッピーバースデートウユー……」

ハッピーバースデーディア……

絵里ー！

えりちー！

絵里ちやーん！

ハッピーバースデートウユー！」

「みんな……ありがとう……」

「よし！プレゼントだ！穂乃果からは……この、ほむまん（チョコレート味）だよ！」
「チョコレート味のほむまん!?ありがとう！」

「私からは……なにをあげたらいいかわからなかったの……ブ○ボンのチョコレート……」

「ハラシヨー！ありがとうございます海未！」

「わ……私からは絵里ちゃんのために作ったおにぎりだよ！」

「ありがとうございます……あ、のりまいてない（ホッ……）」

「大丈夫！全部塩おにぎりだから梅干しも入ってないよ！」

「ありがとうございます花陽」

「凜からは……このネコのぬいぐるみにゃー！」

「ハラシヨー！かわいいわね……」

「でしよでしよー！」

「ありがとうございます凜」

「はい、私からはこのヘッドホンよ」

「わー！ずっと欲しかったのよー」

「そ……そうなの？私には知らなかったけど（ナオキから聞いててよかった）」真姫は髪の毛をクルクルした。

「うん！ありがとうございます真姫」

「ウチからはこれや！まあ、真姫ちゃんにも協力してもらったんやけど……」

「これは……CDと……歌詞？2つあるわね……」

「あのなー、海未ちゃんも作ったんやけど恥ずかしいからって……」

「そうなの？海未……」

「わ……私はそんなんじゃないです……」海未は言った。

「えつと……『Storm in Lover』と『硝子の花園』？」

「『硝子の花園』はウチとの……『Storm in Lover』は海未ちゃんとのデュエット曲やでー」

「デュエット……か……ありがとう希……海未も……そして真姫も」

「えつと……おれからは……うーん……ちよつと目を瞑ってくれるかな？」

「え？わかった……」絵里は目を瞑った。

「よし……じつとしてろよ……」

ドキドキドキ……

絵里の心臓の音になる。

（え？なに？もしかしてキスかしら？ふふつ……）

あら？なにか腕につけられた？

「もぅいいぞ……」

絵里は目を開けた。

「ん？……ハラショー！綺麗ー」

絵里は腕をあげて、つけられたブレスレットを見た。

「よかった、喜んでくれて……絵里のために作ってたんだけ……」

「これ……ナオキの手作りなの？」

「ああ……我ながら最高傑作と思ってるぜ」

「うん……すごく綺麗だし……なんだろう？愛を感じるわ……」

「そ……そりゃあ……その……絵里を大好きって気持ちをいっぱい込めたからな……」

その……なんだ……世界に一つだけのブレスレットってことだ」ナオキは顔を赤くした。

「……うん……ありがとうナオキ……大切にするわね」

そしてケーキを食べ終わり……

「ねえねえ絵里ちゃん！さっきのデュエット曲聞かせてよ！」穂乃果は言った。

「えー……大丈夫かしら……」絵里は言った。

「ほんならまずはウチからやなー」

「わかったわ……」

そして絵里と希…のぞえりは『硝子の花園』を歌った。

「夢の迷路…百合の迷路…」

「恋に恋する〜」

「恋する〜」

「少女の〜」

「少女の〜」

「静かな溜息は

L o n e l y …満ち足りた L o n e l y …

ラ〜ララララララ〜ラ〜ラ〜ラララララ〜

夢の迷路…百合の迷路…」

「おーーー!!!」のぞえり以外が声を合わせて言った。

「なんか…:…すごいね…:…」ことりは言った。

「ナオキちゃんと歌つてもいいかもしれないね!」穂乃果は言った。

「お…おれ!？」

「ふふっ……そうやなー……また聞かせてもらおうかー……さ、次は海未ちゃんやで！」希は言った。

「歌うんですか……」

「歌うんや！」

「さ、海未！歌うわよ！」

「はい……」

そして絵里と海未……えりうみは『Storm in Lover』を歌った。

「逢いたいのSummer！ 今年のSummer！」

あなたと私は1つのストーリー」

「だから逃げちゃだめ」

「怯えちゃだめ」

「見つめあえば Storm in Lover」

「見つめあえば Storm in Lover」

恋は嵐よ Storm in Lover」

「おー！ー！！」えりうみ以外は声を合わせて言った。

「こつちもなかなか…」穂乃果は言った。

「これもナオキくとやったら面白そうやねー」希は言った。

「またかよ！」ナオキは言った。

「そうねー」絵里は言った。

「絵里まで……………」

「え…いや…なの？」絵里は目をウルウルさせながら上目遣いをして言った。

「ぐっ…いや、嫌じゃないけど…」

「それじゃ、絵里ちゃんのお誕生日会も終わりに近づいてきたので…最後に絵里ちゃん
のソロ曲を！」穂乃果は言った。

「また歌うの……………わかったわ……………」

そして絵里はソロ曲『ありふれた悲しみの果て』を歌った。

そう……………あの日……………ナオキに歌った……………あの曲を

「きつと知らずにいた方がよかった？」

「そんな痛みを抱えながら」

「ありふれた悲しくしみ　ありふれた痛みとく

こぼれそうな涙こらえて見る星は

いつもより眩しく輝いて堕ちそうだく

私を静かにてらすけれどく

パチパチパチパチパチパチパチパチパチ

「いやー懐かしいな……あの日絵里が歌ってくれた……グスツ……」

「ナオキくん泣いてるにやー！」　凜は言った。

「だってな……うう……」

「もうなによー……でも確かにあの時は号泣だったしねー」　絵里は言った。

「……言うなよ……つたく……」　ナオキは涙をふいた。

「ほんならナオキくん！　えりち！　デュエツトの準備して！」　希は言った。

「ほんとに歌うのか!?　今から!？」　ナオキは言った。

「じゃ、歌いましょうか！」　絵里は言った。

「ああ……」

そしてナオキと絵里は『硝子の花園』と『Storm in Lover』を歌った。

「ひゅーひゅー」穂乃果と凜と希とにこは言った。

「破廉恥です……」海未はぼそつと言った。

「ナオキくんつて歌うまいねー」ことりは言った。

「絵里ちゃんとの歌声とマツチしてるつていうか……」花陽は言った。

「ナオキの曲でも作ろうかしらね……ふふっ……」真姫は言った。

「そんな……褒めすぎだ……みんなの方がうまいつて……」ナオキは顔を赤くして言った。

「また一緒に歌いましょうね」絵里は言った。

「絵里がそう言うなら……」

「それでは！これで絵里ちゃんのお誕生日会を終わります！」穂乃果は言った。

「みんな……本当にありがとう！」絵里は言った。

そして片付けをして解散した。

「なあ……絵里……まだ時間大丈夫か？」

「ええ……」

「ちよつと行きたいところあるんだ……ついてきてくれる？」

「うん！」

2人は腕を組んで歩いた。

高台……

「わあー！綺麗ー！」 絵里は目の前に広がる夜景を見て言った。

「……ああ……綺麗だ……」 ナオキは絵里を見ながら言った。

「ほんとに……」

「あ、そのベンチに座ろうか……」

「ええ……」

2人はベンチに座った。

ナオキは絵里の肩を持って引き寄せた。

「なあ絵里……」

「ん？」

「どうだった？今日は……」

「ええ……最高の誕生日だったわ……」

「そうか……よかった……」

「でも私にとって……ナオキと2人っきりの時間が最高のプレゼントだわ……」

「そっ……か……」

2人は夜景を眺めた。

「少し冷えるわね……」

「そうだな……おれのセーター貸してやるよ……」

そう言うとナオキは着ていたセーターを絵里にかけた。

「ありがとう……ナオキは寒くない？」

「おれは大丈夫だ……」

「そう……ふふっ……」

絵里はナオキにもたれた。

その絵里をナオキはさらに引き寄せた。

「絵里……」

「どうし……ん！」

ナオキは絵里にキスした。

「ん……くちゅ……ちゅっ……」ナオキは舌をいれ、肩をもち、おさえるようにディープキスをした。

「……ん……はあ……はあ……ちよつと……いきなりは……」

「はあ……そうか……なら……キスするぞ……」

「え……ちよつ……ん……」

ナオキは再びキスをした。

「ん……くちゅ……ちゅっ……」

「くちゅ……ちゅっ……んっ……ちゅっ……」

そして絵里は目を瞑り、ナオキのキスにこたえた。

「はあ…はあ…ナオキ……」

「どうした？絵里……」

「その……今日は泊まっていいかしら？」

「ああ……」

そして2人はナオキの部屋にむかった。

香川宅……

「さ、どうぞ……」

「おじやます……」

2人はリビングにむかった。

ガチャ……

「ちよつと待つてろ……」

ナオキは電気をつけた……

「!?これって……」

リビングの机にはバラが花瓶にさされて置かれていた。

「ああ……2人っきりのバースデーパーティーってやつだ……」

「ほんと……嬉しい……」

ナオキはイスを引いた。

「さ、絵里……どうぞ……」

「ありがとう……」

「紅茶でいいか？」

「ええ……」

「雰囲気的にはワインだけど……おれたちはまだ未成年だからな」

「そりやそうよ……ふふっ……」

「さ、どうぞ……」

「ありがとう……」

「それじゃ、絵里……誕生日……おめでとう……」

「ええ……ありがとう……」

2人は乾杯した。

そして紅茶を口へはこんだ。

「うん……おいしい……」

「よかった……」

「でも…嬉しいわ……ナオキと2人つきりでバスデーパーティーなんて……ありがとう
う……」

「絵里…今日はありがとう言い過ぎだろ…ハハハ…」

「だって……」

「ありがとうを言うのはおれの方だよ……」

「え？」

「絵里がいたから…おれはここにいるんだ…絵里が大好きだったから…おれはここまで
これた……絵里…生まれてきてくれてありがとう…付き合ってくれて…ありがとう
……」 ナオキは顔を赤くして言った。

「ふふっ……ふふふふ……」

「なっ…なんで笑うんだよ！」

「だって……ふふふふ……」

「だから……ははははは……」

2人は笑った。

「そうだ！」ナオキは立ち上がった。

「どうしたの？」

ナオキは冷蔵庫を開けてなにか取り出した。

「それは？」

「実は……ことりたちに教えてもらっておれも作ってみたんだ……ケーキ……」

「え！ほんとに!?!」

「ああ……口に合うかわからないけど……」

ナオキは箱を開けた。

そこにはチョコプレートケーキとその上にはチョコプレートが乗っており、『Happy Birthday!・ELI♡』と書かれていた。

「美味しそう！いただくわ！」

「ああ……」

「ナオキの手料理なんて……初めてなんじゃない？」

「そう……だな……」

そして絵里はナオキの手作りケーキを口へはこんだ。

「……んー！ー!!おいしいわ!!ハラショー!!」

「ほんとにか!？」

「うん!星……3つです!」

絵里は『チョコボーでっせ』という料理番組でおなじみのセリフを言った。

「えへへ……そうか……おいしいか……あ……ありがとう……」ナオキは照れながら言った。

「うーん……おいしいわー!」絵里はパクパクそのケーキを食べた。

「あ、絵里……ほっぺにチョコついてるぞ……」

「え?ほんと?」

「おれが取ってやるよ……」

そう言つてナオキは絵里に顔を近づけた。

ペロツ……

「ちよ……もう……そんなとり方しなくても……」絵里は顔を赤くして言った。

「え?ダメだったか?」

「そ……そんなことはないけど……」

「ふーん……あ、紅茶入ってないじゃん……入れてくるよ」

「うん……」

そして2人っきりのバースデーパーティーは続き、時間ははやく過ぎていった。

小さい頃の話や世間話をして……

ときにはからかいあつたりして……

そして……

「あ……もうこんな時間……」

「あら、ほんと」

「それじゃ、風呂わかすからな……」

「うん……あ、服どうしよう……」

「あ、それなら絵里が前に忘れていったのがあるぞ」

「え……ああ！あつたわね……また取りに来ようって思つてて忘れてたわ」

「ははは……じゃ、ちよつと待つてて」

ナオキはお風呂をわかしに行った。

そして音楽とともに『お風呂がわきました』というアナウンスが流れた。

「あ、風呂わいたみたいだな……お先にどうぞ」

「ううん……ナオキ先に入つて」

「なんでだ？」

「その……みたい番組があるのよ」

「……ああ、もうすぐチュボーでっせだったな……わかった、じゃお先に」

「ええ……」

ナオキはお風呂にむかった。

5分後……

「ふうーでたぞー」

「うん！じゃあ私、入るわね！」

絵里はお風呂にむかった。

20分後……

「そういえば洗濯機にバスタオル入れるの忘れてたな……まだ絵里入ってるから……今ならいけるか……」

ナオキは洗濯機にバスタオルを入れに行った。

今なら絵里はお風呂の中だと思っていたのだ。

お風呂場……

(ナオキも待ってるだろうしそろそろでようかしら?)

絵里はお風呂をでた。

ガラガラ……

「え……」

「あ……………」

「……………」

「……………し…失礼しました……………」

ガラガラ……………」

「これは……………」 ナオキは忍び足でリビングに行こうとした。

ガラガラ!!

「ひっ!?!」

「ナーオーキー……………」

絵里の顔は赤くなっていく。

「は……………はい……………」

「ば……………ばかあああああああ!!」

「ごめんなさああああああい!! (あれ? これ前にもあったような……………いや前は上だけだ

……………今回は……………生まれたままの姿を見てしまった……………)」

ナオキの部屋……………」

ナオキに背を向けて絵里は寝転んでいた。

「……………あの……………絵里さん？」

「なに？」

「まだ…怒ってます？」

「怒ってないわよ……………」

「いや…その……………さつきはほんとにごめん……………絵里はまだ入ってると思って……………その……………」

「……………もう……………わかった……………許してあげるわ……………」

「ありがとう……………」

そして絵里はナオキの方へ顔をむけた。

「その……………ナオキ？」

「ん？」

「ナオキは……………その……………私の……………」

「絵里の？」

「私の……………」

裸……見たい？」

「はい？（あれ？聞き間違いかな？え…絵里が裸を見たいのかって言ってたぞ？）」

「もう……だーかーら！私の……裸が見たいのかって言ってるのよ……」

「え……えつと……」

「もう……チュツ……」

絵里はナオキにキスをした。

「ん……チュツ……くちゅ……」

ナオキも舌を入れてそのキスにこたえた。

「チュツ……くちゅ……はぁ……はぁ……」

「はぁ……はぁ……」

「ナオキ……いいのよ……」

「なにが？」

「その……ナオキになら……」

「私の裸……見せてあげてもいいのよ？」

「いいのか……」

「うん……」

「ゴクツ……」

そして2人は起き上がり……

ナオキは唾をのみこんで絵里のパジャマのボタンを上から外していった……

「ねえ……ナオキ……」

「ん？」

「どうだった？」

「ああ……最高だった……」

「ふふっ……よかった……」

「絵里……誕生日……おめでどう……」

「ありがとう……ナオキとの2人っきりのパーティー……最高のプレゼントだわ……」

「ああ……」

そして2人は眠りについたのだった。

(ほんとおめでとう……絵里……おれの……世界で一番大切な人……)

妄想外伝 「凜の誕生日」

今日は凜の誕生日にや！

かよちゃんがお出かけしようって昨日言ってくれたから女の子の服着て待ち合わせ場所に行つたんだ！

でも…

「なんでナオキくんなんだにや」

「悪いか？」

「かよちゃんは？」

「お前のところにもきただろ？」

「にや？」

凜はスマホを見た、そういえば見てなかったにや…

そこには

『凜ちゃんごめんね！』

ちよつと行けそうにないからかわりにナオキくんで行ってね！』

「そんなにやー」

「まあまあ…しゃーねじゃんか…」

「ぶー…：…かよちんの為に女の子の服着てきたのに…」

「そーいやそーうだな…」

ナオキくん気づいてなかったの!?

もー最悪にやー

でも…

「似合ってる…：…かにや？」

「ああ！ものすごく」

「あ…：…ありがとう…」

な…：…なんで！なんで凜こんなこと聞いたんだろう？

「じゃ、行こうぜ」

「どこに?」

「どこがいい?」

「んー……じゃ、ゲーセンに行くにや!」

「おう!」

凧はナオキくんと一緒にゲーセンにむかったんだにや…

ナオキくんって……

お兄ちゃんみたいだにや

ゲーセンでダンスゲームしたり(凧の圧勝)

UFOキャッチャーでナオキくんにぬいぐるみとってもらったりしたにや!

「凧、行きたいところあるんだけどいいか?」

「うん!」

凧はナオキくんに連れられてゲーセンをあとにしたにや……

そしてついで場所は……

「なんでかよちんの家?」

「まあまあ……」

ナオキくんはインターフォンをならした。

「あ、ナオキくん、凧ちゃん！いらっしやい！」

「おう！入るぞ」

「どうぞどうぞー、凧ちゃんも」

「う、うん」

かよちん行けないって言ったのになんで家にいるにや？

ま、いつか！

「ちいーつす」

「え？誰かいるにや？」

パンパンパンパンパンパン

「にや!？」

「凧ちゃん！」

凧！

誕生日おめでとう!!」

にやにやにや!？」

なにが起こつてるにや!？」

誕生日おめでとうって……みんな知ってたんだ……

「今日は誕生日だろ？」

花陽は誕生日会の準備したかったからおれに凜を連れ回してくれって頼んできたんだ。

ま、時間稼ぎだな」

「そうなのかよちん？」

「うん、ごめんね……」

「全然いいにゃ！」

凜今、すっごく嬉しいんだもん！

うー……

テンション上がるにやー！！

「じゃ、みんな行くよー……せーの！」

「ハッピーバースデートゥーユーー！」

ハッピーバースデートゥーユーー！

ハッピーバースデーディア

凜ちゃん！

凜ー！！

ハッピーバースデートウユーー！！

「みんな……ありがとうにゃ！！」

「はいこれー！」

「わー！！」

歌の後にことりちゃんがケーキを持ってきてくれたんだ！

すっごく美味しそう！！

「これは私とことりからのプレゼントよ」

「にこちゃんとかことりちゃんから？」

「ありがとうにゃ！！」

なんと！

ケーキはことりちゃんとかこちゃんからのプレゼントだったんだ！

「穂乃果からはラーメンだよ！」

やったにゃ！ラーメンにゃ！

ん？この匂いは……………

「これカツプラーメンじゃん！」

「はっ!? 凜ちゃんエスパー!？」

「凜は何回も作ってるからわかるもん！」

「うう……」

「でもありがとにや……」

「凜ちゃんーん！」

「にやにや!？」

穂乃果ちゃんがいきなり飛びついてきた!?

もう離してよー!!

「私からはこれです」

「なにこれ？」

海未ちゃんはなにかをくるんで渡してきたにや……

気になるから開けるにや!

「うっ……」

「どうですか？」

「どうですか? って……なんで……」

英語の本なの……」

「なんでにや！なんでにや！」

「なんで誕生日に英語の本をもらわなきゃいけないんだにや！」

「これで勉強しなさい」

「もう！海未ちゃんの鬼！」

「大丈夫です！これは英語の本ですがまぎれもない猫の物語なのです！」
「にや？」

「ある猫がいて、その子は飼い主に捨てられ、だれにも拾われず……飼い主を探し続ける
という……」

「き……きになるにや……」

「だから勉強しなさい！」

「わかつたにや！」

凧……英語頑張るにや！

そしてこの本を読んでみせるにや！

「ウチからはこのスカートだよ！」

「かわいいにやー！ありがとにや！」

希ちゃんからののはなんだか普通だにや……

でもとつても嬉しいにや！

「私からはこのネックレスよ」

「かわいいにやー！」

あ、猫ちゃんついでる!?!」

「どう?かわいいでしょ?」

「うん!!ありがとにやー!」

ネックレスの真ん中に猫ちゃんがぶらさがってて可愛すぎるにやー!!

「おれからは……まあ……ゲーセンでとったぬいぐるみだ」

「そうだったにや!?!驚きだにや……ありがとにや!」

あの時とつてくれた猫のぬいぐるみがプレゼントかー!

大事に飾らなきや!

「私と真姫ちゃんからは曲のプレゼントだよ!」

「言い出したのは花陽だけどね」

「曲?」

なんだろう……

「曲名は『くるりんMIRACLE』よ」

くるりん……MIRACLE……

「私が作詞で、真姫ちゃんが作曲！」

凜はかちゃんが書いた歌詞を全部読んだ。

この歌は凜のためにあるような……

そんな歌……

真姫ちゃんの作ったメロディー聞いたんだけど……

「電気屋さんみたいにや」

「それが感想？」

真姫ちゃん顔赤いにや！

って言ったらきつとチヨップされるんだろうなー

「真姫ちゃん、顔赤くなってるにや！」

「むー」ベシッ

「痛いにやー!!」

うう……やっぱ叩かれた……

「なあ凜、歌ってみたらどうだ？」

「さつき聞いたばかりだし……でもやってみる！」

ナオキくんの言葉には……
力をもらえる……

そしてメロデーが流れる……

ほんとに電気屋さんみたいだにや

「新しい自分で踊れそう

くるりん！ まわって飛びだせば

揺れるスカート嬉しくなっ

もう一度くるくるりん！」

凧は歌った……みんなへのありがとうを込めて……

あのとき凧の背中を押してくれた真姫ちゃんとかよちん……

いつも一緒にいて……仲良くしてくれる……μ s……

そして……

いつも支えてくれるナオキくん……

みんな……ありがとうにや!!

この歌は変わった凧の気持ちそのもの……かにや？

「やっぱりやっぱりMIRACLE！　　きら〜り！」

毎日毎日MIRACLE！

鏡にウインク　いえーすきらきら〜

やっぱりやっぱりMIRACLE！　　きら〜り！

毎日毎日MIRACLE！

『可愛さ目指すっ』それも夢なんだから〜ん」

「おー!!」パチパチパチパチパチパチパチパチパチパチ

みんなが拍手してくれた…

嬉しかった…

「ありがとう……………」

「凜、顔赤いわよー」

にやにや!?

真姫ちゃんに仕返しされた!?

「もう……………」

凜がそう言うのとみんなが沈黙した…

にやにや!?

なにか凜、変なこと言ったかにや?

「り……凜が……」

「凜ちゃんが……」

凜が?

「超かわいいー!!!」

みんなが声を合わせて言った。

「にやにや!?か……かわいい?」

「うん!とてもかわいいよ!」

「そ……そうね……持ち帰りたいわ」

「うんうん!かわいいよ!凜ちゃん!」

「かわいいー、キュンキュンしちゃう」

「そうですね」

「かわいいやん!」

「そうね……認めてあげるわ」

「ハラシヨー!」

みんなが褒めてくれた……

「ああ……ものすごくかわいい」

にやにや!?!にやにや!?!

ナ……ナオキくんが……

か……かわいいって言ってくれたにや!?!

凧の顔が赤くなるのがわかる……

凧……どうしちゃったんだろ……

「あははは……かわいいやつめー」

ナオキくんは頭をなでてくれた。

「あ……ありがとう……にや……」

そして誕生日会は終わった……

みんな……ほんとうにありがとうにや!!!

第38話 「本戦で戦うアイドルたち」

『みんなで叶える物語』

それがおれたちのキャッチコピー

μ'sの原動力は『みんなの力』

応援してくれるみんながいてくれたからここまでこれた……

そういえば他のチームってどんなアイドルなんだろう……

えつと……

エントリーNo. 1、愛媛代表乙姫高校『シンデレラズ』

エントリーNo. 2、京都代表花園高校『花園ガールズ』

エントリーNo. 3、埼玉代表春日部高校『KTお使い娘』

これは前にみんなで見たやつか……

ほんで……

- エントリーNO. 4、北海道代表釧路高校『KUSHI6』
 エントリーNO. 5、青森代表陸奥高校『アップルガールズ』
 エントリーNO. 6、岩手代表平泉学園『ファイトウーマンズ』
 エントリーNO. 7、秋田代表秋田農業学園『あきたこまち』
 エントリーNO. 8、長崎代表島原高校『ミナトガールズ』
 エントリーNO. 9、宮城代表仙台台高校『KOKESHI』
 エントリーNO. 10、鹿児島代表薩摩高校『トリプルポテト』
 おれたち……
 エントリーNO. 11、東京代表音ノ木坂学院『μ's』
 エントリーNO. 12、香川代表讃岐高校『おうどん5（ファイブ）』
 エントリーNO. 13、山形代表米沢学園『フルーツガールズ』
 エントリーNO. 14、鳥取代表砂丘前学園『サンドスキャンダル』
 エントリーNO. 15、新潟代表越後学園『メタルG』
 エントリーNO. 16、福島代表会津若松高校『女白虎』
 エントリーNO. 17、和歌山代表高野山高校『梅少女』
 ……
 エントリーNO. 18、大阪代表大坂学園『ナニワオトメ』

.....

エントリーN.O. 19、兵庫代表神戸服飾高校『ファッションガールズ』

エントリーN.O. 20、三重代表伊勢志摩学園『あまてらす』

エントリーN.O. 21、千葉代表房総高校『房総ガールズ』

ブホッ!!おい待て!!これ意味深じゃねーか!!

.....ま、いつか.....

エントリーN.O. 22、徳島代表阿波三好学園『あわおどり』

エントリーN.O. 23、広島代表広島総合学園『もみじ乙女』

エントリーN.O. 24、高知代表坂本高校『U's』

エントリーN.O. 25、奈良代表東大寺高校『仏6（シックス）』

エントリーN.O. 26、滋賀代表琵琶湖学園『安土乙女』

エントリーN.O. 27、岐阜代表井ノ口高校『مامシスタース』

エントリーN.O. 28、愛知代表豊田学園『レースクイーンズ』

エントリーN.O. 29、熊本代表くま○ん養成学院『黒い小悪魔』

おいなんだよこの学院!!

くま○んって.....ハラシヨ.....

子供に見せたらあかんやつや.....

エントリーNO. 30、福岡代表北九州高校『鷹女子軍団』

!?

あ、鷹か……腐女子に見えた……

腐女子軍団だったら超怖いだろうな……

エントリーNO. 31、石川代表能登学園『能登ガールズ』

エントリーNO. 32、栃木代表日光学園『サンシャイン』

エントリーNO. 33、富山代表富山産業学院『フアスナーズ』

エントリーNO. 34、福井代表若狭高校『ハープエンジェルズ』

エントリーNO. 35、山梨代表甲府学院『富士9』

エントリーNO. 36、群馬代表草津高校『シルクガールズ』

エントリーNO. 37、神奈川代表小田原学院『かまぼこおとめ』

エントリーNO. 38、島根代表出雲学園『えんむすび』

エントリーNO. 39、茨城代表水戸学園『ラーメンガールズ』

エントリーNO. 40、大分代表別府高校『おんせん少女』

エントリーNO. 41、宮崎代表日向学園『ヒユウガナツ』

エントリーNO. 42、山口代表萩高校『まつかけ』

エントリーNO. 43、佐賀代表吉野ヶ里高校『弥生女子』

エントリーNo. 44、静岡代表下田高校『伊豆の踊り子』

エントリーNo. 45、岡山代表岡山動物学園『ピーチガールズ』

エントリーNo. 46、長野代表川中島高校『龍虎女』

そして

エントリーNo. 47、沖縄代表首里城高校『W（ダブル）ウフソー』

これが第2回ラブライブ！本戦に出場するスクールアイドルたちか……

強敵はやっぱりナニワオトメだろう……

だけど絶対勝つ……

「てかもう朝かよ!!」

おれは窓の外を見るとあたりはすっかり明るかった。

そう気づいたら眠たくなってきた……

「寝るか……」

おれはベッドに横になった。

そっこう寝ました……

うーん……………あれ？

なにかが……………くつついてる？

「ん……………!?!」

目を覚ますとなんと横に絵里がいた。

寝てるし……………

起こした方がいいのか……………

「おーい、絵里……………」

「ん……………あら、おはよう」

「おはよう……………じゃねーよ！なんで横で寝てんだよ!?!」

「ダメ?」

「いや……………ダメじゃないけど……………」

「ま、いいわ……」

「いいのかよ……」

絵里が起きたのでおれも起きることにした。

「さ、晩御飯にしましょう!」

「え?今何時だ?」

「え……もう夜の8時だよ?」

「まじか!?そういえば腹減った……」

「ふふっ……さ、食べましょう」

おれは晩飯をいただくことにした。

そういえば言うの忘れてたけどおれ毎日3食の飯は絵里の手料理食べさせてもらって
るんだよな……

時々絵里んちに行ったりして…

毎日絵里の手料理を食べられるなんて……

おれは世界……いや、宇宙一幸せ者だ……

「あ、そういえば……」

「ん?」

「絵里は受験いつだっけ?」

「うん………」

なんか絵里の受験なのに……

おれがドキドキしてきた………

あ、絵里と一緒にいるからか……な？

次回へ続く……

第39話「受験」

前回の妄想物語！

おれはラブライブ！本戦で戦うスクールアイドルの一覧を見た！

ナニワオトメをはじめみんな強敵だ…

でもおれたちμ'sは絶対勝つ!!

そういえば今日は絵里の入試の日なんだよなあ……………

絢瀬宅……………

絵里の部屋……………

今日は絵里の入試の日、絵里は朝起きて不安になっていた。

「大丈夫かしら……………大丈夫よ……………きつと……………」

ピンポン……………

「あ、ナオキだわ……………はい」

絵里は部屋から出て玄関にむかった。

ガチャ：

「よお！」ナオキは右手を軽く上げて言った。

「ちよつと待つてね」

「ああ」

「あ、ナオキさんだ！」

「亜里沙ちゃん、おはよう」

「おはようございます！」

「あれ？亜里沙ちゃんはなんで制服なんだ？」

「だって今日は音ノ木坂の入試ですから！」

「あれ？今日だっけ……」

「そうよ……生徒会長ならそれぐらい知つとかなないと……」

「勉強になります、先輩！」

ナオキは絵里に頭を下げた。

「ふふつ……亜里沙は雪穂ちゃんと行くみたいだから穂むらによつてもらえる？」

「おっけ」

3人は穂むらへむかった。

穂むら……

「あ、亜里沙」

「あー！ナオキさんと絵里ちゃんもいるー!!」

穂むらの前では雪穂と穂乃果がいた。

「穂乃果は音ノ木に行くのか？」ナオキは言った。

「行かないよ！」穂乃果は胸を張っていった。

「行かぬーのかよ……」

「お姉ちゃんは店の手伝いがあるんです」雪穂がフオーした。

「なるほど……ま、おれが連れていくから大丈夫だ」

「うん、お願いね！雪穂、亜里沙ちゃん、絵里ちゃんフアイトだよ！」

そして4人は音ノ木坂学院にむかった。

音ノ木坂学院前……

「じゃ、2人とも頑張つてこい！」

「はい！」雪穂と亜里沙は声を合わせた。

「それじゃ、行くね！行く、雪穂！」

「うん！それでは……」

雪穂と亜里沙は校舎に入つていった。

「じゃ、俺達も行くか」

「そうね」

絵里とナオキは絵里の受ける大学にむかった。

絵里が受けるのは千代田理系短期大学。

理系の短期大学で絵里が受けるのは理系総合学科、この学科では数学科や理科を学べ、この大学も合わせて全国有数の学科だ。

それゆえに競争率も高い。

「大丈夫かしら……」

「大丈夫だよ……絵里なら……」

「ありがとう……」

ナオキは絵里と手を握った。

絵里も手を握り返した。

千代田理系短期大学前……

「いよいよだな……」

「ええ……」

絵里がナオキの手を握る強さが強くなる。

「絵里……自信持てば大丈夫だ」

「ええ……スー……ハー……よし！」

「よっしゃ！頑張ってこい！」

「ええ！」

「ちゅっ……」そしてナオキは絵里の頬にキスをした。

「ちよつと……ふふっ……ありがとう……」絵里は顔を赤くして言った。

「待つてるからな……」

「うん！」

絵里は大学に入っていた。

「あら……たしか……ナオキくんだったわね」

「ん?……あ、あなたは確か……江戸川黒子さん!」

「覚えててくれた?」ナオキに声をかけてきたのは Midnight cats のリーダーの黒子だった。

「なんで黒子さんがここに?」

「私、ここを受験するのよ」

「そうなんですか! 頑張ってください!」

「ありがとう……で、あなたはなんで?」

「あー、絵里がここを受験するので付いてきたんです」

「なるほどね……ま、健闘を祈るわ」

「はい、ありがとうございます!」

「それじゃあね」

黒子は歩いて行つた。

千代田理系短期大学受験教室……

「それでは……はじめ！」

（緊張するなあー……あ、でも覚えてるところが大体出てるわね……
いけるかも……）

絵里は自信満々に問題に答えていた。

（終わった……あとは見直し……）

3時間後……

「これですべての科目は終了です、お疲れ様でした」
「さ、はやくナオキのところへ行かなくっちゃ！」 絵里は早足で受験教室を出た。

「寒い……………」 ナオキは絵里を待っていた。

「ナオキー！ お待たせー！」

「お疲れ！」

「ありがとう……………」

「どうだ手応えは？」

「うーん……………まあまあかな？」

「そうか……………ま、絵里なら大丈夫だよ……………帰ろうか」

「ええ……………」

ナオキと絵里は帰っていった。

一方黒子は……………

「寝ちゃった……………やばい……………ダメかも……………」

絶望していた。

絢瀬宅……………

「ただいまー」絵里は言った。

「お姉ちゃん！おかえりなさい！

ナオキさんも！」亜里沙は言った。

「亜里沙ちゃん、はやいな……」

「さつき帰ってきたところですよ！」

「どうだった？」

「うーん……まあまあ……かな？」

「絵里と一緒にだな……じゃ、おれ行くわ」

「ええ……また明日ね」

「ああ……また明日」

ナオキは自分の家に帰っていった。

香川宅……

「そーいや次の土曜日は運営委員会本部にいかなきやいけないんだったな……」

その日は出場校の生徒会長、そして出場グループの各メンバーも集まる日なのだ。

大坂学園……

生徒会室……

「土曜日は東京やったな……」

「ああ……ジャーナと会えるんちゃうか」

「ふふふ……さて……どうしたろうか……なあ……チンギスカン……」

「そりゃな……ミツヒデ……」

次回へ続く……

第40話 「裏切ったものたち」

金曜日……

「で、明日はみんなで運営委員会本部に行くぞ」

おれはみんなに明日、運営委員会本部で顔合わせがあることを伝えた。

「はーい」

「他のスクールアイドルに会えるんだ！穂乃果たのしみだよ！」

「ナオキ……」

「ん……どうしたんだ海未？」

海未が暗い顔で聞いていた。

「大丈夫……なのですか？」

大丈夫？……ああ……おそらくミツヒデのことだろう……

「ああ！全然大丈夫だ！」

「なら……いいのですが……」

「それじゃ、明日は8時にここに集合だ」

「はー！」

翌日…

土曜日……

ラブライブ！運営委員会本部……

大広間……

「じゃ、みんなはここで待っていてくれ」

おれはみんなを大広間で待機させた。

ほかのところもそうしているはずだ。

大会議室……

「では順番にエントリナンバーとグループ名と学校名とと自身のお名前をお願い致します」

「はい！エントリーN.O. 1、愛媛代表『シンデレラズ』、乙姫高校、生徒会長の神楽姫です……」

1番から順番に立ち上がって言っていた。

てかあつという間に俺の番だし……

「エントリーN.O. 11、東京代表『μΣs』、音ノ木坂学院、生徒会長の香川ナオキです！」

うわあ……緊張したあ……

「エントリーN.O. 18、大阪代表『ナニワオトメ』、大坂学園、生徒会長の香川ミツヒデだ」

おれはずつと下をむいていた。

緊張しているからではない……

ただ、あいつの顔がみたくないだけだ……

できれば声も聞きたくなかった……

「では以上で顔合わせを終わらせていただきます、ありがとうございます」
「ありがとうございますました」

終わったか……早いところ戻ろう……

そう思っておれは大広間へ早足でむかった。

~~~~~

そのころ……

大広間……

（マチコちゃん、どこだろう……）

真姫はマチコを探していた。

「あ、いた！マチコ……ちゃん……」

真姫はマチコを見つけて声をかけようとしたが……

マチコの顔は暗かった。

(なんで……あんなに……暗い顔してるの……マチコちゃん……)

「お待たせー！」

「ナオキ！早かったわね！」絵里が言った。

「ああ……全員いるな……さ、はやいとこ帰ろうか」

ナオキたちはすぐに帰ろうとした。

だが……

「待てよ……ジャーナ……」



「覚えててくれたか？」

「ああ……よく……覚えてるよ、

さ、帰るぞ……」

おれははやく帰りたかった……

「おい待てよ……久しぶりに会えたんだ……仲良く話そうぜ……」

チンギスカンはおれの腕を掴んできた……

「触んな」

おれはチンギスカンから腕を払った。

「おいおいひでえなあー……」

「うるせえ……お前と話すことなんてねえよ……」

「おやおや、これは懐かしい面々だな……」

ちつ……こいつの声は今日はもう聞きたくなかった……

「おー、ミツヒデ！今、ジャーナと話してたんだ」

「なんだよ……おれも混ぜてくれよ……」

「はあ……帰らせてくれ……お前らと話すことなんてない……」

「そういうなって……そうだ、ナニワオトメを紹介しよう」



「いらねーよ」

「おーいこつちおいでー」

なんで呼ぶんだよ……………

「どうしたの？ミツヒデくん！

あ、ジャーナじゃん！」

「久しぶりー！」

佐藤と斉藤か……………

あんなこと言つといて……………

よくそんなこと言えんな……………

おれが退学すると知った時……………

ミツヒデ、佐藤、斉藤がおれに……………

『そんなやつとは思わなかったぜ』

『マジ引くわー』

『早くでてけよ……………クズが……………』

とか言ってきたんだろ……………

それなのに……………

「なによーその顔は？」

「感動の再会じゃん！」

「そうだぞでジャーナ」

「喜べよ」

喜べない……

はやく帰りたい……

ここから逃げたい……

ただど逃げられない……

ああ………苦しい………

息が荒くなってきた………

「いい加減にしなさい!!!」

「海未………」

海未が怒鳴った。

他のグループの人たちはみんなこつちを見た。

「ああ？なんだよてめえは？」

誰だこいつ………ああ………ヤマトさんか………

「私はμsの園田海未です……」

それより……あなた達はナオキに何をしたかわかっているんですか!!

ナオキがどれだけ苦しんでいるか……

もしくはそれをわかっていて……」

「キミー……部外者は引っ込んでくれるかな? 今、ミツヒデくんたちは友達との再会に……」

「この人は……ユキさんか……」

「部外者などではありません!」

「そうよ! 誰が部外者ですって?」

「真姫……」

「そうやね……」

「希……」

「私たちは立派な関係者よ……」

「にこ……」

「ナオキくんは大切な仲間だもん!」

「そうにやそうにや!」

「穂乃果……凛……」

「ナオキ……大丈夫？」

「絵里……」

「顔色悪いよ……大丈夫？」

「だ……大丈夫……ですか？」

「ことり……花陽……」

みんながおれの周りに立ってくれた。

「まあ……自己紹介しよう……」

「おれはミツヒデ……大坂学園の生徒会長だ……こっちはチンギスカンこと佐藤英吉……そして……ナニワオトメのメンバーたちだ……」

「それくらい知ってるわよ……」

「ナオキから聞いたわよ……」

「あなた達が最低だったこともね」

「ほほう……例えば？」

「ナオキを騙し……大坂学園を退学させた……そしてナオキの心に大きな傷を残した……  
そうなのでしよう？」

「ふふふ……ビンゴ！」

そうさ、おれはチンギスカンたちと協力しておれにとって邪魔なジャーナを学園から追い出した！

何が悪い？おれにとって邪魔なやつは排除する！

いかなる手段を使ってもな……」

「なんですって……」

「チンギスカンとやら……あなたはナオキとは仲が良かったのにも関わらず裏切った……」

「半分正解だな……」

「なら言い方を変えます……」

あなたはナオキと『友達のふり』をしていた……

これでいいですか？」

「ビンゴ！」

「あんた達……想像以上に最低だわ……」

「そうかい？うちはそんなミツヒデくんが好きなんだけどな」

「照れるじゃんかヤマト」

「あなた達の目は節穴ね……」

「なに？」

「こんな男にほれるなんてね……」

「なんだと赤髪……もういつペン言ってみろ！」

「やめろヤマト……人がみてるんやぞ……」

「ごめん……ミツヒデくん……」

「そうだ……ジャーナいいこと教えてやるよ……」

「あ？」

「イズミっていただろ？お前の部活仲間……」

「ああ……」

なんでここでイズミが出てくるんだ……

「実はな…イズミもこっち側でな…あの時にお前には電話させてお前を追い詰めるのに協力してもらった…」

「なっ!?!……」

あの時……

イズミがチンギスカンのことを話してくれて……

それでチンギスカンに確認して……

そうか……

それも全部……おれを追い詰めるため……

イズミも……

おれのことを裏切ったのか……

「イズミもお前のことなんて友達だと思ってなかったんだよ!!」

「嘘だ……」

「嘘じゃねーぜ……」

「黙れ……」

「真実だ……」

おれはお前が嫌いだ……

お前が気に入らない……

おれにとつて邪魔な存在だった……

だから追い出した……

だから……それじゃ足りない……

お前は音ノ木坂学院に転入した……

そこには知り合いがいっぱいいると知ってな……

だから思つたんだ……

お前から全てを奪つてやろうってな……」

「なんですって……あなたたちは……」

苦しい……さつきより……

おれの鼓動もはやくなる……



息もどんどん荒くなる……

「はあ……はあ……はあ……」

おれは胸を抑えた。

「ちよつとナオキ!？」

「学園には、お前の友達なんて……」

もういないんだよ!!

今となつては学園中のみんながお前のことを嫌つてるぜ!!

だつてお前は近所の人を殴つて退学になつた悪者だからな!!」

「それはあなた方が仕組んだことでしょう!!」

「さ、なんのことだか……」

「あんたたち……ふざけるんじゃないわよ!!」

「イズミも……チンギスカンも……そして先生たちも……学校中がおれの側だ……」

「なんですつて!？」

「先生もな……おれの配下なんだよ……」

おれは卒業したら理事長になることが約束されている……

だから先生たちも……な?」

「そんな……」

「はははははははははは!!

ざまあねーぜ!!

うざかったんだよ……………

おれが会長になるはずだった……………

だがお前はおれに選挙で勝った……………」

「ということはナオキを信頼した人が何人も……………」

「それすらも今となつてはジャーナに入れたことを後悔してるよ!!

だって……………ジャーナに入れたばかりに痛い目にあつたんだからな……………」

なんだと……………」

「ミツヒデ、てめえ……………それでも会長かよ!!!

お前は力で全てを抑え、逆らうものは排除する……………」

そういう人間だからお前は俺に負けたんじゃないのか!!」

「うるせえ!!!

力さえあればなんでもできるんだよ!!

この世は弱肉強食……………」

弱いものは強いものに屈するしかないんだよ!!

そうじゃなきゃ、食われちゃうからな!!」

「お前なら……従うやつも食いそうだがな」

「うまいこと言うじゃねーか……」

「おれはあの時、

みんなのために頑張ると約束した……

だがお前は自分のためなんだろ？

だからおれが勝ったんだよ」

「弱いやつが強いものの上に立つなんてありえねえんだよ!!」

おれはお前がおれより上つてのが嫌なんだよ!!!

お前のことはずっと気にくわなかったんだよ」

「それも候補理由の一つか？」

「ああ……」

「そんなことで……会長になれるわけねえだろ!!」

「なれるさ!!いやなってる!!」

今!!現在!!おれが大坂学園の生徒会長だ!!

学園中のほとんどの女子はおれの女だしな……毎日最高だぜ？」

「あなたってひとは……」

「最低ね……」

「同感……」

「てめえら……そろそろいい加減にしろや……しばきまわすぞ」

「ヤマト落ち着いて……」

ユキさんがヤマトさんをとめた……

待てよ……

思い出した……

ユキさんとヤマトさんは確か……

あの時

『応援してるぜ』

『頑張ってるね』

って言ってくれた……

そうか……

この人たちも裏切ったのか……

「くっ……あなたたちは最低よ!!」

「絵里……」

「ナオキがどれだけ苦しんだか……」

ナオキがあなた達のせいでどれだけ傷ついたか……

そのことでどれだけ辛い思いをしたか……わかっているの？

私は知ってる……

だって……あんなに……涙を流して……

あんなに落ち込んで……

私はあなたたちを許さない……

私の大切なナオキを傷つけた……

あなたたちを!!!

絶対に!!

「ほほう『大切な』……ねえ……」

そんなやつなんか捨てて、おれの女になれよ……

「嫌よ……」

「なぜだ？ さあ……」

「やめなさい!!」

「園田って言ったか？」

ならお前もだ……

μ s 全員おれの女になればいいさ……」

なんだと……

「ふざけるな……………」

「あ？」

おれの怒りは限界だった。

おれは力を振り絞り絞りみんなの前に出た。

今出なきや……………ダメだ!!!!

「ナオキ……………」

「ナオキくん……………」

「ふざけんじゃねえ!!!」

お前には渡さない!!!

お前なんかには渡さない!!!

おれの絵里を……………」

そしてこのμ☒sのだれも……………」

お前なんかには渡さない!!!

みんなおれの大切な仲間だ!!

大切な存在なんだ!!」

「いいじゃんかよ……………」

ミツヒデの手が絵里に伸びる……………」

ガシッ!

おれはミツヒデの腕を掴んだ。

「なっ……」

「いい加減にしろ」

「離せよ……」

「黙れ……クズが……」

「離せって言ってるんだろ!!」

ミツヒデの拳がとんでくる……

ガシッ!

「なに!?!」

「弱いパンチだな……」

あれだけ言つといてよ……」

おれはミツヒデの拳を掴んだ。

「まあ……いい……」

そう言うのとミツヒデはおれたちから離れた。

「お前らはナニワオトメには勝てねーよ……………」

勝って……………ジャーナ!!!

お前から全てを奪ってやる!!

また会おう……………ジャーナ……………

μ☒sのみなさん……………」

そう言うのとミツヒデは去っていった。

チンギスカンも、ナニワオトメも……………

「ナオキ先輩……………みなさん……………すみません……………」

「マチコちゃん!?!」

マチコはぼそつとそう言って去っていった。

マチコは笑うことはなかった。

「やっと思ったか……………」

うっ!!!

おれはその場に膝をついてしゃがんだ。

「ナオキ!?!」

「ナオキくん!?!」





「ナオキ!!」

「ナオキくん!!」

「真姫……………みんな……………」

みんなの声が遠くなっていく……………

「ナオキ……………しつかりしてよ!! ナオキ!! ナオキ!!!」

「絵里……………」

絵里の声もどんどん遠くなっていく……………

そしておれは……………



「気を失っているわ…はやくしないと…」

真姫はナオキの服のボタンを外し、ベルトを緩めた。

「そんな……なんで…」

「絵里！あなたもしっかりして！」

ナオキに膝枕してあげて！

頭は高くした方がいいわ！」

「わ……わかったわ…」

絵里はナオキの頭を膝にのせた。

「汗を拭かなきゃ…」

真姫はハンカチでナオキの汗を拭いた。

「まだナオキの息が荒いわ……どんだん荒くなってる……」

救急車はまだなの!？」

「どうしたんだい？ μ□sのみなさん…はっ…ナオキ!？」 晋三が言った。

「晋三さん……ナオキは今意識がありません」

「何があつたんだ!？」

「それは……」

「真姫！救急車が来ました！」

「うん！晋三さん、みんなを西木野病院に連れてきて下さい！その時になにがあったか聞いてください！」

「……わかった……」

「患者はどこに？」

「あ、真姫お嬢様!!」

「はやくして！西木野病院に運んで！」

「わかりました！」

「絵里も乗って！みんなは晋三さんと西木野病院に来て！」

「わかったわ……」

「わかりました」

「私と副会長の田中の車に分かれて乗ってくれ」

そしてナオキは西木野病院に運ばれた……

救急車内……

「ナオキ……大丈夫よね……」

「絵里……きつと大丈夫よ……」

「おそらくは精神的ダメージと過大なストレスによるものでしょう……」  
「やっぱりそうね……」

もしもし？ 私……真姫だけど」

「あ、真姫お嬢様……どうされたんですか？」

「友達が倒れてね、ICUを開けておいて！救急車でむかうから」

「ICU!? そんなに……はい、わかりました」

「ナオキ……」

絵里は心配そうにナオキを見つめ、

ナオキの左手を両手で握った……

次回へ続く……

## 第4 1話「辛い過去と大切な人たち」

前回の妄想物語！

私たちはナオキと一緒にラブライブ！運営委員会本部へ！

そこではナオキは前の学校の人たちと再会……

そしてナオキは精神的ダメージと過大なストレスを与えられて……

倒れてしまったの……

ナオキ……無事でいてね……私……信じてるから……

西木野病院……

I C U ……

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

ナオキはICUに運ばれた。

「先生！ナオキは!?」絵里は真姫のお母さんに聞いた。

「少し危ないかもね……」

はやく治療してなんとかしないと……最悪の場合……

死に至るわ……」

「え!?そんな……」

「でも死に至らなくても記憶を失うかも……」

でも大丈夫……完全に治してみせるわ」

「はい、お願いします……ナオキを……助けてください……」

いつもの……ナオキに……」

絵里は今にも泣きそうな声で言った。

「絵里……パパやママに任せれば大丈夫よ……」

「そうね……」

絵里と真姫はICUの中のナオキを見つめた。



ドン！

「絵里ちゃん！真姫ちゃん！

ナオキくんは!?」

穂乃果が飛び込んできた。

その後から続々とメンバーや晋三、田中さんがやってきた。

「それが……………」

最悪の場合……死に至るかも……

そうじゃなくても記憶を失うかもしれないわ……」真姫がナオキを見ながら言った。

「ウソ……」穂乃果が言った。

「そんな……………」海未が言った。

「先生！ナオキは……………」晋三が言った。

「あなたは？」真姫のお母さんは言った。

「あ、私は伊藤晋三……………」ナオキのおじです」

「そうですか……………」

何も無いように努力します……………」

安心してください……………」

「名医の西木野先生に任せれば大丈夫ですね……………」よろしく願います……………」晋三は頭

を深く下げた。

「はい……」真姫のお母さんはICUに入っていた。  
みんなはナオキを見つめた。

「穂乃果……」

「なに、絵里ちゃん？」

「亜里沙のこと頼めるかしら？」

私……ナオキのそばにいたい……私……

「うん……わかった……」

穂乃果は電話をしにいった。

「もしもし雪穂？」

「どうしたのお姉ちゃん？」

「実は……ナオキくんが倒れちゃって……」

「え!?!大丈夫なの……」

「最悪の場合死に至るって……」

もしかしたら記憶を失うかもしれないみたい……  
なにもないのが一番いいんだよ？

…それでね絵里ちゃんからのお願い…亜里沙ちゃんしばらくうちに泊めるからお母さんに言って！

あとその後亜里沙ちゃんにも……」

「わかった……」

「それじゃ……」

穂乃果は電話を切った。

高坂宅……

「もしもし亜里沙？実は……」

「ん？」

雪穂は穂乃果から伝えられたことを話した……

「わかった……」

荷物まとめるから……むかえにきて……」

「うん……………それじゃ……………」

雪穂は電話を切つて、絢瀬宅へとむかった。

絢瀬宅……………

「お義兄さん……………大丈夫かな……………」

亜里沙は荷物をまとめながら言った。

西木野病院……………

ICU……………

ナオキはまだ苦しんでいた……………

息はまだ荒かった……………

(こんなとき……………患者がそばにいて欲しいのは……………大切な人……………はっ!?)

真姫のお母さんはICUを出て絵里のところへむかった。

「絢瀬さん!」

「はい……」

「ナオキくんのそばにいてあげて……さ、こっちへ……」

「は……はい！」

絵里はICUに入っていた。

「さ、ここに座って……」

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

「ナオキ……」

絵里は座ってナオキの左手を両手で握った。

「はあ……はあ……はあ……はあ……はあ……」

みんなは祈り続ける……

ナオキが何もなくあの元気な姿で戻ってくることを……

~~~~~  
おれは最初、ミツヒデのことはいいやつと思つてた……
あの日……ミツヒデはおれのことを助けてくれたから……

「おい、香川！てめえ、立候補を辞退しろ！」

「は、なに言つてんの？」

そう言つてくるのは3人目の会長立候補者の尾花虎次郎だった。
「そのままの意味だ、辞退しろ！」

「やだね！」

「さもなきや痛い目にあうぞ？」

「やってみろや」

「ああ……じゃあ!!」

ドン!!

「うっ……」

おれは腹を殴られた。

「耐えたか……だか次は……」

尾花は拳を構えた。

そんなとき……

「おい、なにやってんだ？」

「なっ……」

「ミツヒデくん……」

「ジャーナ、大丈夫か？」

「うん……大丈夫……」

「たしか……尾花だっけ？」

そんなことして……正々堂々戦えないのか？」

「選挙なんてめんどくせえんだよ……」

「そうだ……ちようどいいな……ミツヒデも辞退しろ」

「やだね……ならこうしよう……」

今すぐここから立ち去れ…

そうしなきゃ退学だぜ？」

「そんなこと…」

「だってそうだろう？暴力で選挙を勝とうとしてさ？そりゃあ退学だろう？」

「ちつ……」

「今立ち去ったらチクらんよ」

「はあ……わかったよ……」

尾花はそれで去っていった。

「大丈夫か？」

「うん……ありがとうミツヒデくん」

「ミツヒデでいいよ」

「じゃ、ミツヒデ……ありがとう」

「どうつてことねーよ……」

ま、あいつは多分選挙しても通らないからおれとジャーナの一騎打ちだな」

「ああ……正々堂々……頑張ろう……」

「おうー！」

おれとミツヒデは握手を交わした。

しばらくたってイズミから告げられたのは……

ミツヒデの悪行……

力で全てを抑える……

弱肉強食の男……

おれは信じたくなかった……

だが……

「尾花が退学!？」

「ああ……なんか急に自分から退学させてくれって言うてきたらしい……

……ここだけの話……ミツヒデの配下が尾花をボコボコにしたって噂だ」

「マジか……」

「さらにだ……」

尾花はミツヒデの命令でお前を襲った……」

「なに!？」

それならミツヒデは自分の配下に命令してさらにその配下をボコボコにしたっての
か!？」

「そういうことになるな……」

「なんで……」

「これはおれの推測だが……」

ミツヒデはお前を退学にしたかったんだと思う……

ボコボコにしてな……

尾花はそれに失敗したから退学させられた……」

「うーん……」

「ま、選挙で勝てばいいんだよ」

「ああ……」

そしておれは選挙で勝った……

さらにこのイズミの予測は見事に当たっていたんだ……

そしてあの事件が起きた……

おれはチングスカンをかばって退学した……

これで大坂学園にはミツヒデにとつて邪魔な存在はいなくなっただ……

……

部活仲間だったイズミも裏切った……………

高校の最初の友達……………だと思っていたチンギスカンも裏切った……………

おれを助けてくれたミツヒデも裏切った……………

応援してくれたヤマトさんとユキさんも裏切った……………

クラスメイトの斉藤と佐藤も裏切った……………

ミツヒデの行動全てが……………

おれを追い詰めるため……………

おれから全てを奪うため……………

そして今となっては大坂学園中がおれを嫌ってる……………

先生たちも……………

あのとき……校長も、担任も……

もう既におれのことを裏切っていた……

まさか……マチコも……

あの涙は……嘘だったのか……

全員……ミツヒデの配下だったのか……

「絢瀬さん……ナオキくんにとって大切な存在はなに？」

「それは……私達……μ、sだと思います……」

「なるほど……」

真姫のお母さんはICUを出た。

「真姫、μ、sのみなさん……」

ナオキくんの元へ行ってあげて……」

「はいー」

μ、sのメンバーがナオキを囲む……

「ナオキくん……頑張って……穂乃果たちが付いてるから……」 穂乃果は言った。

「ナオキ……戻ってこなかったら私はあなたを許しません!!」 海未は言った。

「ナオキくん……あの元気なナオキくんに戻ってよ……」 ことりは言った。

「ナオキくん……戻ってこなきや……いやにや!!」 凜は言った。

「ナオキくん……また大好きなご飯、一緒に食べましょう!」 花陽は言った。

「ナオキ……あなたがいないと……練習は全然進まないんだから……はやく戻ってきなさい

よー」 真姫は言った。

「ナオキ……あなた……このままだったら許さないから……ちゃんと……役目を果たしなさい

いよー」 にこは言った。

「ナオキくん……あの眩しい笑顔……もう一度見せてや……」希は言った。

「ナオキ……」

私のこともっと愛してよ……

誰よりも愛してくれるって言ったじゃない……

それに……

私たちはみんな……ナオキの味方よ……

一緒に……この10人で……一緒に……」絵里は言った。

「一緒にラブライブ！で優勝しよう!!」

9人の声が重なる……

声が……………聴こえる……………？

「ナオキくん……………頑張つて……………穂乃果たちが付いてるから……………」
穂乃果……………

「ナオキ……………戻つてこなかったら私はあなたを許しません!!」
海未……………

「ナオキくん……………あの元気なナオキくんに戻つてよ……………」

こことり……

「ナオキくん……戻ってこなきゃ……いやにや!!」

凜……

「ナオキくん……また大好きなご飯、一緒に食べましょう!」

花陽……

「ナオキ……あなたがいないと……練習は全然進まないんだから……はやく戻ってきなさいよ!」

真姫……

「ナオキ……あんた……このままだったら許さないから……ちゃんと……役目を果たしなさいよ!」

にこ……

「ナオキくん……あの眩しい笑顔……もう一度見せてや……」

希……

「ナオキ……

私のことと愛してよ……

誰よりも愛してくれるって言ったじゃない……

それに……

私たちはみんな……ナオキの味方よ……

一緒に……この10人で……一緒に……」

絵里……

「一緒にラブライブ！で優勝しよう!!」

みんな……な……

そうだ……

あのみんなが裏切るはずない……

みんなは……μ，sは……

おれを笑顔にしてくれた……

絶望していた俺を……救ってくれた……

みんなは一緒に怒ってくれて……

一緒に笑ってくれて……

一緒に悲しんでくれて……

そんなみんなが……

穂乃果……

海未……

ことり……

凜……

花陽……

真姫……

にこ……

希……

そして、絵里……

みんなが裏切るはずない……

おれはみんなを信じる……

だってみんなは……μ sは……おれの……

『大切な人たち』だから……

ああ……

心が癒されていく……

さつきまでおれを苦しめていたものが溶けていくようだ……

さつきまで感じていた……

苦しみ……

痛み……

怒り……

絶望……

みんな忘れていくようだ……

ありがとう……

これからよろしく………

そして………

すごい……奇跡だわ……」

真姫のお母さんは驚いていた。

「ということは先生……ナオキは……」絵里は言った。

「ええ………ひとまずは安心して大丈夫よ……目を覚まさない限りは記憶のことはわからないけど……」

もう命に危険はないわー！」

みんなは見つめあって……

「やったー！！！！」

喜んだ。

「ナオキくん……よかった……」穂乃果は言った。

「もう……心配かけさせて……」海未は言った。

「ほんとによかった……」ことりは言った。

「よかったにゃー……」凜は言った。

「うう……よかった……」花陽は言った。

「まだ意識は戻ってないけど……」

よかつたわ……」真姫は言った。

「ふう……心配かけさせて……バカじゃないの……ナオキは？」にこは言った。

「スピリチュアルやね……」希は言った。

「よかつた……本当に……よかつた……」絵里は言った。

みんなは目に涙を浮かべながら言った。

「よかつたですね、会長……」

「ああ……」

晋三と田中も喜んだ。

「とりあえず、もうICUに置いておく心配もなさそうだし個室に移動させましょう……」

そう真姫のお母さんが言うのと看護師たちがナオキを運んだ。

「私も……」

絵里はそれを追いかけた。

みんなもそつちにむかつた。

外を見ると暗かった……
もう夜になっていたのだ……

個室……

「しばらくすればナオキくんも目覚めると思うわ……」

「先生、ありがとうございます……」晋三は頭を下げた。

「……意識を取り戻したとき……記憶を失っていないといいけど……」

「ナオキなら大丈夫……きっと……」絵里はナオキの左手を両手で握った。

そして絵里以外の人たちはみんな帰った。

「絵里……」

「どうしたの？真姫……」

「……あまり無理しないでね……」

「わかってるわよ……」

「それじゃ……」

「うん……」

病室は絵里とナオキの2人つきり……

「ナオキ……はやく目覚めてね……」

待ってるから……チュツ……」

絵里はナオキの頬にキスをした。

次回へ続く……

第4 2話「ナオキのやりたいこと」

ここは……どこだ……

暗い……

なにかあったんだっけ……

「おーい！ナオキ！起きろ！」

「んーんー……………」

おれは目を覚ました。

「あれ？ここは……………どこ？」

「どこって……………お前のおじさんの家だよ」

「そうか……………」

そうか……………

おれは大阪から引越して東京のおじさんの家に……………

じゃない……………違う気がする……………

おれは……………確か……………

あれ？

うーん……………

「とりあえずはやく起きろ、今日はオープンキャンパスの日だろ？」

「オープンキャンパス？どこの？」

「どこのって……………音ノ木坂学院に決まってるだろ？」

音ノ木？

え……おれは……

いや……そっか……おれはもうすぐ音ノ木の模擬男子生徒として転入するんだった

……

「お前の大好きな幼なじみの……あや……あや……」

「絵里……絢瀬絵里……」

「そうそう絢瀬さん！」

「たしか生徒会長だったな……」

「うん……久しぶりだなー」

「たしか最近スクールアイドルを始めたんだったな……μ s……だったか？」

「うん……さすがおじさんだな……」

「ラブライブ！運営委員会会長……」

「まあな……」

「さ、はやく着替えて行きなさい」

「わかった！」

「おれは準備を始めた……」

「じゃ、行つてきます！」

「行つてらっしゃい！」

おれは音ノ木坂学院にむかった。

音ノ木坂学院……

講堂………

「うわあー……やっぱり女子ばっかやなあー」

おれは周りが女子ばっかだから戸惑っていた。

だつて女子校だしな……ここ……

「それでは生徒会長あいさつ、会長、よろしくお願いします」

呼ばれて出てきたのはもちろん……

「絵里………」

「皆さんこんにちは！今日は音ノ木坂学院のオープンキャンパスに来ていただきありがとうございます！
とぅーごいませす！」

ここ、音ノ木坂学院は歴史も古く、由緒ある学校です。

私たちはこの学校が大好き……

音ノ木坂学院が大好きです！

先生達も優しいですし、生徒もみんなが笑っていて……

毎日がほんとうに楽しいです！

地域のみなさんにも愛されているので歩いているとあいさつをしてくれ、励まされたりします。

でも、今……そんな私たち生徒や、先生や、地域のみなさんが大好きな音ノ木坂学院は廃校の危機にひんしています。

私は……生徒会長の義務感として廃校の危機を阻止しようとしていました……

ですが、気づきました……

私は生徒会長絢瀬絵里としてではなく、音ノ木坂学院の生徒の1人の絢瀬絵里自身としてこの大好きな学校を守りたいと……

それを気づかせてくれたのは……同級生や後輩達……

そして……遠くにいる幼なじみです。

学校の看板であるスクールアイドルμ'sの歌を聴いてください！

きつと私たちがどれだけこの学校を愛しているか……

どれだけこの学校が大好きかが伝わると思います！

これであいさつを終わります」

パチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチ

絵里が頭を下げると講堂中から大きな拍手が湧いた。

伝わってきたよ……………

絵里がどれだけ音ノ木が大好きか……………

グラウンド……………

もうすぐμ sのライブがはじまる。

おれはその結成を裏から支えた…

希さんがあのファーストライブを見せてくれたからな……………

「みなさんこんにはは！」

私たちは音ノ木坂学院スクールアイドル、μ sです！

今から披露する曲は9人で歌う初めての曲です！」

「聴いてくださいー！」

『僕らのL I V E 君とのL I F E』

そしてμ sのライブがはじまった。

その歌はおれの心に響いた。

嫌な経験を…嫌な思いをしたのに…

そんな思いがどんどん癒されていく……

ああ……ハラシヨ……

引き込まれるような感じだ……

あの9人の姿に見入ってしまう……

出来ることなら……

あの9人を……μ sを輝かせたいな……

パチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチ
大きな拍手と歓声が湧く。

おれは遠くから見ていたがわかった……

絵里……最高の笑顔だ！

おれの大好きな絵里の笑顔……

あのとき一目惚れしたあの笑顔……

踊り……

声……

「そうだ……その笑顔がいいんだ……ほんとうにやりたいことは……これだろ……絵里……良かったな……」

おれはその場を去った。

だがおれはまだ迷っていた。

音ノ木坂学院に転入するか否か……

しばらくたって…

秋葉原……

「やべえ……絵里のメイド服……」

おれは秋葉原でのライブを見た。

そしてしばらくたった夏の日……

「もしもしナオキくん？どう、ライブ見てくれた？」

「はい、すごくよかったです！」

「そう…よかった…ほんでなウチら合宿に行くことになってん

「へー」

「ナオキくんもこーへん？」

「いいんですか!？」

「ま、みんなにバレないように見とくといいよ……」

「まだ迷ってるんやろ?」

「まあ……」

「それに……」

「それに?」

「……まあ、とりあえず来てや!

えりちの水着姿も見れるでー」

「なっ……」

絵里の水着姿だと!!

これは行くしか!!

「わかりました!行きます!」

「よし!ならまた今度な、」

行き先とかは全部メールしとくから」

「はい、ありがとうございます!」

希さん!」

「ええよー、それじゃあねー」

「はい、また……」

おれは、sの合宿に行くことになった。

ま、隠れて見とくんだけど……

そして夏合宿の日……

「遊んでるなあー」

おれは木陰から隠れてみていた。

おれの服装は帽子に、ランニングするのに最適な服だ。

ま、木陰で休憩してるようには見えるだろ。

「あの白いのとピンクの水着は……絵里か……」

おれは絵里の水着姿に見とれてしまった。

おいまて、これただの変態じゃん!!

隠れて女の子の水着姿を見るなど!!

「スイカ割りか……そういやしたことねーな……」

スイカ割りなんてしたことないからにはやくやってみたいものだ…

「さ、走るか……」

おれはランニングを再会した。

きつとみんなは近くに住んでる人がランニングしてるイメージだろう…

一人を除いて……

次の日……

早朝……

おれは砂浜へきた…

なんでだろう……

「希さん……」

「ナオキくんやん……どう？みんなの様子は？」

「はい……その……なんていうか……楽しそうで……おれも混ざりたいと思いました」

「ふふっ……まだ迷ってるん？」

音ノ木坂に転入するかどうか……」

「まあ……」

「ナオキくん自分でえりちに言っただやん」

「はい？」

「ほんとうにやりたいことは？」

「はっ!？」

おれの……ほんとうにやりたいこと……

おれが音ノ木に転入するのを拒んでいるのは……

人が信じれないから……

でも……

それだけで諦めていいのか……

おれのほんとうにやりたいことはわかってる……

『μ sを支えたい、μ sを輝かせたい』

「ナオキくん……」

「はい……」

「人が信じれないのはわかるよ……」

でもな……それでも信じてくれたら嬉しいな……

ウチら……音ノ木坂の生徒を……

そして……

μ sを……」

「なんでわかるんですか……」

「ふふっ……」

そうだな……

信じてみるか……

おれはもう大坂学園の生徒じゃない……

音ノ木坂学院の生徒だ！

「わかりました……おれ音ノ木に行きます！」

「ふふっ……楽しみやね……」

「そろそろみんな起きちゃいそうですね……おれは行きますね……」

「うん……練習してるところも見てや」

「はい……それでは……」

おれは砂浜から走り出した。

おれは……笑っていた……

おれのやりたいこと……

見つけたから……

暗い……………

ここはどこだ……………

「いちー！」

声が……………

「にー！」

聴こえる……………

「さんー！」

これは……………

「よんー！」

みんな……………

「はー！」

夢か……

「ろくく！」

幻か……

「なな！」

いや……

「はち！」

そうか……

「きゆう！」

次の瞬間暗かった空間も真っ白になって

みんなが手をピースにして合わせてこつちを見ていた……

そうか……

今、おれがやりたいことは……

みんなと一緒にラブライブ！で優勝する!!!

「じゅう！」

「μ⁴ S!!」

「ミュージックーーーー………

スタートーーーー!!!」

この音は………なんだ？

ピツ…ピツ…ピツ…ピツ…ピツ…
………

「ん……………んは……………」

天井……………

暗い……………

夜なのか？

まだ意識がはっきりしないな……………

おれは右腕に刺さっている注射をみた。

「そうか……………おれは倒れて……………」

でもさっきのは……………夢か……………

懐かしい夢だな……………

おれのやりたいこと……………か……………」

おれは左の方が少し重たいように感じたからそつちをみた。

「う……………うーん……………」

え……………り……………？」

そこには絵里が寝ていた。

そして俺の声に反応してか顔を上げた。

「ナオ……キ……」

はっ!? ナオキ!!」

「え……り……絵里……」

意識がはつきりしてきた。

おれは体を起こした。

「ナオキ、私のことわかる?」

「ああ……当たり前じゃないか……」

おれの恋人を……世界で一番大切な人のことを忘れるわけないだろ……」

「もう……うっ……うう……ナオキ!!」

「おっと……」

絵里がおれの胸に飛び込んできた。

「もう……バカ!心配したんだから!」

ナオキが倒れて……病院に運ばれて……先生が最悪の場合死に至るって……そう
じゃなくても記憶を失うかもしれないって……

そして落ち着いたけどずっと意識がなかって……

何日も意識がなかったのよ!!」

「え…そんな…」

何日意識なかったんだ？」

「2日よ……」

「2日も……」

「もう……ほんとうに……心配したんだから！うっ……うう……うう……うええええええええん！！」

ナオキ！ナオキ！！ナオキ！！

うええええええん！！……」

絵里はおれの胸で泣いていた……

大きな声をあげて……

「絵里……」

おれは絵里の頭を押して絵里をおれの胸に押し付けた。

「ナオキ……」

「ごめん……心配かけて……」

うっ……ほんとにつ……うっ……ごめんっ……ひぐっ……絵里っ……ごめんっ……絵里！！

うっ……うっ……」

おれは絵里に謝って泣いた……

「ナオキ……」

「ごめん……ごめん!!」

おれは彼氏として最低だ……男として最低だ……

彼女を泣かして……女の子を泣かして……

心配かけさせたな……」

「ううん……ナオキは最低なんかじゃないわよ……

確かに心配はしたけど……

私はナオキが無事ならそれでいい……

私は……大切な人が……ナオキが無事なら……それで……いい……」

「絵里……ありがとう……」

おれたちは泣いた……

おれは謝罪の気持ちで……

絵里は無事だよかった、安心したという気持ちで……

2人には共通の想いがある……

「絵里……………」

「ナオキ……………」

「愛してる……………」

2人の声が重なった。

「さ、先生呼んでくるわね……」

絵里はおれから離れて先生のところへ行こうとした……

「だけど……」

「やだ……」

「えっ……ちよつと！」

おれは絵里を抱きしめた。

だって……

「今は離したくない……」

「えっ……」

「このままでいさせてくれ……絵里……」

「ナオキ……もう……」

「絵里……大好きだ……愛してる……」

「ふふっ……私もよ……」

おれは絵里をさらに強く抱きしめた。

絵里はそれに応えるように頭をおれの胸におさめた。

「絢瀬さーん……ナオキくんの調子は……」

「あ……」

まさかここで西木野先生がご登場とは……

おれはこの時初めてここが西木野病院だと知った……

「お……おはようございます……」

「お……おはよう……目覚めたのね」

「はい……なんとか……」

「えっと……」

楽しんでね……お邪魔しました……

「ちよつと待ってー！！！！」

夜の病院の個室でおれの声が響いた。

あとから聞いたがこの部屋は防音なんだってさ……

なんかおれのあの状態で大きな音とかでこれ以上のストレスを感じさせるとそれこそ病状の悪化に繋がるらしい……

でもな……

それも知らずに叫んじまった俺は……

バカか……

ここ病院だろ……

でも、あれから2日か……………

まったく眠くない……………

次回へ続く……………

第43話 「復活のナオキ」

「西木野先生……ほんとうにありがとうございました！」ナオキは頭を下げた。

「いいのよ……元気で何よりだわ……それに……」

真姫のお母さんは言った。

「それに？」

「あなたを救ったのは絢瀬さんはじめ……μ、sのみんなよ？」

「え？」

「あなたはμ、sのみんながあなたの周りを囲んで声をかけたら息が落ち着いたのよ」

「そうなんですか……そうか……あの声は……」

「意識がなくてもちゃんとナオキくんには届いてたようね……」

「はい……」

「まだ油断はできないし、明日退院して、しばらくは家で安静にしておくように」

「はい」

真姫のお母さんは病室をあとにした。

「なあ…絵里……」

「ん？」

「疲れてないか？ずっと見ててくれたんだろ？」

「そんなことないわよ……」

「嘘つけ……」

ナオキは絵里の頭をなでた。

「ん…もう……」

「寝ていいぞ……おれは眠たくないし……もう大丈夫だ」

「……わかったわ……」

「おやすみ……」

「おやすみ……」

「……すう……すう……」

絵里はベッドに頭をのせてすぐに寝た。

「やっぱ疲れてんじやんか……」

ナオキは絵里の頭をなでた。

朝……

「まじで眠たくなかった……ハラシヨ……」

ナオキはずっと起きていた。

「ん……」

絵里はまだ寝ていた。

「ずっと寝顔見てたけど可愛すぎだろ……」

「どう？体調は……」

「西木野先生……はい、全然大丈夫ですよ」

「そう……ならよかった……絢瀬さん……寝ちやったのね……」

「はい、疲れてたんでしよう……」

「はいこれ……朝ごはんよ……」

「おお!!なんか久しぶりのような!!いただきます!!」

「そりゃあ……2日も寝てたんだもん……」

ナオキくん……………」

「ふあい？…ゴクツ…何でしょう？」

「これは西木野先生としてではなく…真姫の母として言わせて…」

「……………」

「ありがとう……………」

「ほえ？」

「真姫はずつとこの病院を継ぐことしか考えてなくて…自分の好きなことを抑えていたのよ……………」

「そうなんですか……………」

「ええ…それが、sのみなさんと出会って変わったわ……………」

真姫はアイドル活動を好きになったのね……………」

ピアノも前より楽しく弾いてるみたいだし……………」

「そうですね……………」

「だからありがとう……………」

「いや…おれは何も……………」

「いいえ…ナオキくんが戻ってきてから真姫は前より毎日楽しそうだわ」

「えつ……………」

「真姫が今輝いているのはナオキくんのおかげよ……ありがとう……」

「はい……」

「さ、今日の夕方には退院よ」

「わかりました」

真姫のお母さんはまた病室をあとにした。

「ん……おはよう……」

「あ、起きたか……おはよう……」

今日の夕方には退院だそうだ」

「ん……んー!!」

それじゃ、帰りの準備もしないとね」

「ああ……」

夕方……

「ありがとうございます！」

「いえいえ……お大事にね……」

「はい！」

ナオキと絵里はナオキの部屋にむかった。

香川宅……

「ただいまー」

「さ、晩ご飯作るから着替えてきて」

「そっか……そういえば制服だったな……」

「ふふっ…さ、はやくはやく！」

「はい」

リビング……

ガチャ…

「あ、ナオキさん!!!」

「おっと…亜里沙ちゃん!？」

ナオキがリビングに入ると亜里沙がむかってきた。

「だ…大丈夫なんですか!？」

心配したんですよ!!」

「ああ…ごめん…心配かけた…」

ナオキは亜里沙の頭をなでた。

「無理…しないでくださいね？」

「ああ…わかってるよ…」

「ありがとう…（か…かわいい…）」

「さ、ご飯できたわよー」

「わーい！」

「おつ、うまそー!!」

「ささ、はやく食べて！」

「いただきまーす」

3人は晩ご飯を食べた。

「ごちそうさまでしたー!!」

「いやあー、腹いっぱいだわー」

「結構おかわりしたわね……」

「ナオキさん、ハラシヨー!です!」

「だって腹へってたし……」

「じゃ、私は帰りますね」

「わかった、ちゃんと明日は起きるのよ?

「ご飯は作れる?」

「大丈夫だよー」

「あれ？絵里は帰らないのか？」

「…バカ……」

「ほえ？」

「ナオキさん、ナオキさん……」

「ん？」

「お姉ちゃんは今ナオキさんに甘えたいんですよ……ずっと待ってたんですから……」

亜里沙はナオキの耳元で小声で言った。

「そうか……ありがとう……」

絵里、風呂沸かすから待っててな」

「うん!!」

絵里はナオキがそう言うのと笑顔で言った。

(かわいすぎる………)

「それではー」

亜里沙は帰っていった。

「あ、風呂沸いたみたいだな……」

「ナオキ先にいいわよ」

「そうか……じゃ、お言葉に甘えて……」

ナオキはお風呂場にむかった。

お風呂場……

「ふうー、落ち着くわー」

ナオキはお湯につかっていた。

（2日も寝てたのか……）

ずっと絵里はおれのそばにいてくれた……

ずっと心配かけさせたな……

なにかお礼をしないと……）

「ナオキー、大丈夫？」

「ああ……大丈夫だ」

「入っ
ていい？」

「ああ……」

ん？

「は！
今なんて
!!??」

ガチャ……

絵里がお風呂場に入ってきた。

「入っていい？つて言ったのよ」

「ちよ……ちよ……おまつ……なんで!？」

「その……ナオキ疲れてると思つて……体……洗つてあげようと思つて……嫌………だった
？」

「いや、そんなことない、お願いするよ」

ナオキは即答した。

ゴシゴシゴシ……

「痛くない？」

「ああ……」

「背中……大きいわね……」

「そうか？」

「ええ……ええい」

絵里はナオキの背中を人差し指でなぞった。

「ひゃあ!？」

「ふふっ……ふふふふふふふふふふ……

『ひゃあ?!』って……

「ふふふふふふふふふふふふふふ……」

「いつか仕返してやる……」

「ゴシゴシゴシ……」

「次腕洗うわよー」

「おう……」

「ふにっ……」

「おう!?!」

「もうなによー」

「い……いや……あ……当たってるんですが……」

「もーう、ナオキのエッチー！」

「嬉しいくせにー」

「……」

ナオキは顔を赤くした。

「なあーにー、**凶星**?」

「うっ……そりゃあ……男だしさ……」

「ふふっ…かわいい…（もっといたずらしちゃおうかしら…）」

「えい！」

「ふにっ…」

「ちよっ…おまつ!？」

「ふにっふにっふにっふにっ…」

絵里は胸をナオキの背中に当て続けた。

（お……おとおお……）

ハラシヨオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!

「どごっ?」

「お……おう……」

「『おう』じゃなくてー」

「……き……気持ちいいです……」

「よろしい……さ、出ましょうか……」

「先に出ていいで……おれはまだつかってるから」

「わかった」

絵里は風呂場を出た。

（絵里の……な……生の……胸……ハラシヨ……）

襲いたい……めっちゃ襲いたくなってきた……
なにを考えてるのかナオキくん……

ナオキの部屋……

絵里とナオキはベッドで添い寝していた。

「ナオキー」

「なんだ？」

「こっち向いてよー」

（言えない……）

超恥ずかしいから向けないなんて……

言えない……

向いたら襲いそうだから向けないなんて……（

「えいー」

絵里はナオキの脇をついた。

「っあん!!……あつ、しまっ!？」

ナオキから変な声が出た。

「ふふっ……ふふふふふ……なに今のー」

「う……おれは脇強く触られたらこんな声出ちまうんだよ！」

「なんで？」

「知らねーよ!こつちが知りてーわ!!」

「……………」

「……………なあ……絵里……………」

「なに?」

「……………ありがとう……おれが意識ない時……ずっとそばにいてくれて……………」

「うん……心配してたんだからね……」

「ああ……すまん……」

「でも……無事でよかった……」

「これも絵里がずっとそばにいてくれたおかげだよ……」

「そんなことないわよ……」

「そんなことあるさ……」

ナオキは絵里の方を向いた。

「ナオキ……」

「絵里……ありがとう……」

「うん……」

「(あつ……向いちやった……) ……」

「……」

2人は見つめあった……

そして……

2人は唇を合わせた。

「ちゅっ……くちゅ……んっ……」

「んっ……はあっ……んっ……」

「絵里！」

ナオキは絵里の腕を掴んでまたがった。

「ナオキ……いいわよ……」

「ああ……」

ナオキは絵里の服から手を入れ胸を揉んだ。

「んあつ……私っ……先生につ……言われたの……男の子の……ストレス解消には……こう
いうことがいいかもしれないって……」

「だから風呂も？」

「うん……」

「そうだったのか……」

「なら……応えなきやな……」

「ちゃんと用意してあるから……」

「思いつきりヤっていいわよ……」

「ん？なにをだ？」

「コンドーム？だったかしら……」

「先生からもらったの」

「ああ……あれか……」

「なら……」

「お言葉に甘えて思いつきりやらせてもらおうよ……絵里……」

「うん……優しくしてね……」

「ああ……」

「そして2人の長い夜が始まった……」

次回へ続く……

第44話「今度こそ復活のナオキ」

新宿ホテル……

大坂学園男子部屋……

「ジャーナ、目が覚めたみたいだぞ」

「そうか……ご苦労……チンガスカン……」

「ああ……思い通りになったな……」

「ああ……あいつはストレスとか受けやすいからな……心の問題だ……」

倒れることは目に見えていたが……

こんなにはやく目覚めるとは……」

「ああ……普通なら死んでもおかしくなかったのに……」

「ふっ……きつとμ，sの力だろ……」

「μ，sの？」

「仲間の力ってやつだ……」

仲間の力か……ふっ……」

「そろそろ寝たほうがいいんじゃないか？」

「明日から練習開始だろ？」

「ああ……そうだな……」

ナニワオトメの部屋……

マチコは外を眺めていた。

（ナオキ先輩……大丈夫かな……）

あのととき……助けに行こうとしたけど……お兄ちゃんが怖くてダメだった……）

「そういえばさ、ジャーナ目が覚めたらしいよ」 斉藤が言った。

「そうなの？」 佐藤が言った。

（そっか……無事なんだ……よかった……）

香川宅……

あの日の翌朝……

ナオキの隣には絵里が寝ていた。

ナオキはその寝顔を眺めていた。

「かわいいな……」

「すう……すう……ん……ナオキ……」

「かかかかかかかかかか……かわいい……」

「ん……ナオキ……おはよう……」

「おはよう……絵里……」

その……はやく服着てくれ……」

「なによ赤くしちゃって……可愛いんだから」

「うるせー……」

ナオキは顔を赤くして言った。

「はい、あーん」

「あ…あーん……」

「どう？」

「うまい……」

「でもさ…なんでおれベツドで食ってんだよ……」

「言われたでしょ？」

「ゆっくり体を休めなさいって」

「飯ぐらい食えるよ……」

「ダメ、ナオキが休んでる間は私が面倒みるからね」

「はーい（内心嬉しいんだが……）」

音ノ木坂学院……

2年生教室……

「えー、ナオキちゃんと絵里ちゃんしばらく休んじやうの？」穂乃果が言った。

「仕方ないよー」ことりは言った。

「そうです！

大体ナオキが悪いんです！絵里にまで面倒をかけて……」海未は言った。

「絵里ちゃんのはほんとうにナオキくんのこと好きなんだよー」

「よし！今日は御見舞に行こう！」

「そうですね」

「それならみんなにも言ってみよう」

放課後……

アイドル研究部部室……

「……っていうことでみんなでナオキくんの家に殴り込みだー!!」穂乃果は言った。

「殴り込みって……」

「何しにいくつもりよ……」花陽と真姫は言った。

「ラブラブしても凜たちが強制的に侵入するにや!」凜は言った。

「ラブラブって……ま、あの2人ならしてそうだけどね……」には言った。

「そうやね……ほんならなにかお土産買っていこっか」希が言った。

「そうですね、その方がナオキも喜ぶでしょう……」

「よーし!ならナオキくんの家へしゅっぱーっ!」

香川宅……

ナオキの部屋……

「くそだりー……」

「なんで熱なんか出してるのよー」

「知らねーよ……こつちが聞きてーよ……」

ナオキは何故か熱を出していた。

「とにかく寝ておきなさいよ……」

タオル乗せるからねー」

「つ……ああ……気持ちいい……」

「お水飲む？」

「飲むー」

「じゃ、お水入れてくるわね…」

絵里は水を入れに行った。

「なんで熱なんか出るんだよ……」

ピンポン……

「はーい……ってみんな!？」

「やつほー、絵里ちゃん！ナオキくんは？」穂乃果が言った。

「えつとー……それがー……熱……出しちゃって……」

「えー!？」

ナオキの部屋……

「あ、みんな……」ナオキが言った。

「なんでまた……」海未が言った。

「知らねーよ……」

「まったく……お粥作ってあげるわ……」

「ありがとう、にこ……あ、卵付きのんでお願いします……」

「注文が多いわね……わかったわよ……」

「あ、にこちゃん手伝うよー」

「あ、私も手伝うわ」

「私も手伝います……」

「こ」とりと絵里と花陽は言った。

「そう？ならお願いするわ」

「にこ」とりと絵里はお粥（卵付き）を作りに行つた。

「みんなに心配ばかりさせて……」

「はやく治して下さい……」海未はそう言つてタオルを置いた。

「はやく元気になつてもらわんとあかんね」希は言った。

「そうだにやー！」凜は言った。

「練習にならないんだよー」穂乃果は言った。

「ああ……頑張るよ……」

ナオキはお粥（卵付き）を食べ、みんなは帰宅していった。

「あーしんでえ……」

「もう…汗ダラダラじゃない……」

座れる？ 拭いてあげるわ」

ムクツ…

ナオキはそつこう起き上がった。

「行くわよー……」

「うお!? うう……気持ちいい……」

「それはどうも……」

「すまん……ありがとう……」

「もう……意識取り戻してからずっと謝ってばかりじゃない……」

「だってさ……ずっとそばにいてくれたんだろ……」

「ずっと心配かけて……その……」

「ふふっ……当たり前じゃない……」

「私の大切な人なんだから……」

「……ありがとう……ほんとうに……」

ナオキは絵里の手に手を覆うように当てた。

そしてナオキの熱もさがり、意識取り戻してから数日が過ぎてナオキは西木野病院に
行った。

西木野病院……

「うん……もう大丈夫ね」

「ほんとですか!？」

「ええ……いつも通りの生活に戻ってもいいわよ」

「ありがとうございます!」

「……でどうだった?」

「どうだった?……何がですか?」

「絢瀬さんと……やったんでしょ?」

「そういえば先生でしたね……」

絵里にあれ渡したのって……」

「で……やったんでしょ?」

「まあ……」

「どうだった?」

「どうだったって……………」

ナオキの顔がどんどん赤くなった。

「はーん……………その反応を見ると……………ふーん」

「なんすかそれ!!（西木野先生ってこんなキャラだったの!?!）」

その後ナオキは西木野先生にからかわれ続け、やつとの思いで西木野病院をあとにした。

「なんか疲れた……………」

香川宅……………

「ただいまー」

「おかえりなさい!」

「先生はなんだった?」

「ああ…楽し…ゴホン…もう大丈夫だってよ」

「そう…ならお祝いしないかね！」

「手伝うよ…」

リビンググ……

「それ取って……」

「はい……」

「ありがとう……」

絵里とナオキは2人で料理をしていた。

「なんだか魅力的だな……」

「え!？」

「その……絵里の料理している姿には……見とれちゃうよ……」

「そ…そう……」

「ああ……今すぐ抱きつきたいよ」

「も…もう……それ切って……」

絵里は顔を赤くして言った。

「はいよ……」

「いやあー美味かった……」

絵里の料理はやっぱうめーわ」

「ふふっ……ナオキも作ったのよ？」

「そうか……そうだったな……はははははは」

「……」

「……」

「ねえ……ナオキ……」

「ん？」

「……私のこと……好き？」

「当たり前じゃんか……大好きだ……」

「私もナオキのこと……大好きよ……」

「そうだ……絵里には言っただけじゃなかったな……」

「え？」

「おれは意識がない時……」

みんなが裏切るんじゃないかって思ってたんだ……
でも……

そんな時にみんなの声が聞こえてきて……

それでわかった……

みんなは裏切るはずない……

大切な人たちだから……

だから……ごめん……」

ナオキは頭を下げた。

「ナオキ……もう……そんなこと……もういいのよ……」

仕方なかったのよ……

あんなことがあつたんだもの……」

「絵里……」

「だから自分を責めないで……」

あなたの悪いくせよ……」

「ああ……ありがとう……」

恋人が絵里でよかったよ……」

「ちよつ……な……ななななによりきなり……」

「でもほんとのことだよ……」

「……うん……」

その日は2人は寝た。

翌朝……

「じゃ、私はそろそろ帰るわね」

「ああ……長い間ありがとう……」

「また泊まりに来るわよ……」

絵里はナオキの耳に近づいて……

「そのときはまたしましょう……」

「なっ……」

「ふふっ……それじゃあね……」

「あ……ああ……」

そして絵里は帰っていった。

「……また……か……」

ナオキは部屋に入っていった。

だがこの時は誰もわからなかった……
決断の 때가……近いということに……

次回へ続く……

第45話 「決断の時」

今日は音ノ木坂学院と千代田理系短期大学の合格発表だ……

千代田理系短期大学……

「それでは結果を貼りだします！」

「いよいよだな……」

「ええ……大丈夫かしら……」

「大丈夫……絵里なら……」

「うん……」

ナオキと絵里は番号表の前へ行き、絵里の番号を探した……

「2525……2525……」

「2525……あ……あ……あ……」

「まじか!？」

「ほら……あそこ……」

「2525……ほんとだ……絵里……」

「……やった……やったー!!」

絵里はナオキに抱きついた。

「うおっ!？」

「あつた! あつたわ!! 合格だわ!! はははは……」

「ああ……おめでどう……」

一方そのころ……

黒子は……

「……………」

あつ… (察し)

そして音ノ木坂学院……

雪穂と亜里沙はドキドキしながら番号を探していた……

「112……113……あつ！118!!」

あつた!!」

「私もあつた!!雪穂……」

「亜里沙……」

「やったー!!」2人は声を合わせていった。

「やった!これで音ノ木坂だよ!これで私たち音ノ木坂の生徒だよ!」

「うん……」

「μ、sだ!私……μ、sだ!!」

「あつ……」

「お姉ちゃん!!やったよ!!」

私、μ、sに入る!!」

「合格したのね……私もよ……」

「そうなの!?やったー!!」

「μ、s……か……」

「合格したのか?雪穂ちゃん……」

「ナオキさん……はい、お陰様で……」

「おめでどう……で……なにか悩み事?」

「はい……亜里沙はμ、sに入るって言ってるんですけど……でも……」

「でも?」

「あの……μ sはこれからどうするんですか？

絵里さんと希さんとにこさんが卒業したら……」

「ああ……でもその話はしない約束なんだ……」

「でも……でもそれは皆さんが決めることですよね……」

「!？」

「続けるか続けないかは、今のμ sの皆さんが決めるべきことだと思います」

「おれたちが……決めるべきこと……」

「そうだな……少し……考えてみるよ……」

「はい……では……失礼します……」

「おう……」

雪穂は帰っていった。

「おれたちが……決めるべきこと……」

「ナオキ……どうしたの？ うかない顔して……」

「いや……ちよつと雪穂ちゃんに言われてさ……『これからのこと』」

「……そう……じゃ、帰りましょうか……」

「ああ……」

「お姉ちゃん！ ナオキさん！ はやくー!!」

ナオキと絵里と亜里沙は帰っていった。

翌日……

音ノ木坂学院……

「海未……あのプリントを配ってくれ」

「はい」

「これは？」

「これからの1カ月の練習プランです」海未は言った。

「ツバサさんたちにもアドバイスをもらって休みの日とか作ってみただ……」

海未は最初……キツキツで練習入れてたから説得に苦労したでえー……」ナオキは海未を見ながら言った。

「ちよつとナオキ！」

「だってほんとのことじゃんか！」

「でも練習随分少ないね」凜は言った。

「ああ…ツバサさんたちが本番前に体調崩すといけないからって」

「だから完全にお休みの日もあるんだね」花陽は言った。

「ああ……」

「そういえば亜里沙ちゃんと雪穂ちゃん、合格したんだって？」真姫は言った。

「え？…ああ…うん…2人とも4月から音ノ木坂の生徒だよ……」穂乃果は言った。

「ん？（穂乃果……なんか元気ないな…）」ナオキは不思議そうに穂乃果を見た。

「亜里沙ちゃん、ずっとμ'sに入りたいって言ってたもんね！」ことりは言った。

「じゃあもしかして新メンバー!？」花陽は言った。

「11人目の誕生!？」凜は言った。

「ちよつと…そういう話は……」真姫は言った。

「あつ……」花陽と凜は言った。

「ごめん……卒業……しちやうんだよね……」

「……………」

部屋の空気が重くなる……

みんな悲しい目をした……

「ふっ…どうやろ？」希がにこをむいて言った。

「んっ!?!」にこはビクツとした。

「にこっちは卒業できるかどうか……」

「するわよ!!」

「……………」

また空気が重くなる……

さつきまで賑やかだった2人も下を向いた。

パン!

絵里は立ち上がって手を叩いた。

「これからの話はラブライブ!が終わるまでしない約束よ!

さ、練習しましょ!」

「はい……………」

みんなは立ち上がってグラウンドにむかったが穂乃果は立ち上がらなかった。

「穂乃果……………穂乃果!!」

「え?!なに?」

「なにじゃねーよ、練習だ」

「あ……………」

ナオキは穂乃果の頭に手を置いた。

「今は練習に集中しろ……」

「わかってるよ……でも……」

「お前の気持ちもわかる……」

でも今は……」

「うん……」

「笑えよ……」

「え？」

「お前が笑顔じゃなきや……」

みんなが暗くなっちまうだろ……」

「……うん！」

穂乃果は笑顔を作った。

「ハラシヨー！」

穂乃果は立ち上がってグラウンドにむかった。

「……やっぱり……話した方が……」

ナオキもグラウンドにむかった。

廊下……

「あらナオキ……まだ行ってなかったの？」 絵里は言った。

「ああ……なあ……絵里……」

「ん？ どうしたの？」

「……1月からずっと迷ってるのか？」

「話すべきかどうか……」

「……ええ……実はね……」

「そうか……あとズボンがズレて後ろからパンツ見えてたぞ」

「なっ……」 絵里は顔を赤くしてズボンを直した。

「イヒヒヒヒ……ダツシユ！」

ナオキは走った。

「あ、コラー……!! 待てええええええ!!」 絵里はナオキを追いかけた。

(ナオキ……私を笑わそうと……ふふっ……ありがとう……) 絵里はそう思っていた。

グラウンド……

「よし！まずはゆつくりグラウンド1周！」

「はい！」

「次！ストレッチ！」

「はい！」

「なにかあつたんですか？」

「え？」

「顔見たらわかるよ」

「うん……昨日雪穂にね……」

3年生が卒業したらどうするか聞かれちゃって……」

「そっか……」

「穂乃果はどう思うんですか？」

「スクールアイドルは続けるよ…歌も好きだし、ライブもしたい…
でも……………」

「μ'sのままでもいいかってこと？」

「うん……………」

海未と穂乃果とことりは話していた。

「どうすればいいんだろう……………」

「かよちゃん……………」

「でもまだ話さないって約束したでしょう？」

「わかってるよ……………でも……………ほんとうにこのままでいいのかな……………」

「そう……………だね……………」

「花陽はどう思うのよ……………」

「私……………私は……………スクールアイドルは続けたい……………でも……………μ'sのままでもいいの
かって……………」

花陽と凜と真姫は話していた。

「よし！次はスピードあげてグラウンド3周だ！」

「はい！」

「私も同じです……3人が抜けたμ sをμ sと言っていいものなのか……」

「μ sは……9人の女神……そしてナオキくんもいて……それでμ sって言えるんだと思っ……」

「うん……」

「なんで卒業なんてあるんだろう……」

「続けなさいよ」

「えっ!?!」

「ここがそう言う穂乃果と海未とことりは声を合わせて言った。

「メンバーの卒業や脱退があっても名前はかえずに続けていく……」

それがアイドルよ……

そうやって名前を残してもらっていくほうが卒業していく私たちだって嬉しいの……だから……うわあ!」

「ここは希と胸にあたり尻もちをついた。

「痛い……」

「その話はラブライブ!が終わるまでしない約束よ!」

「わかってるわよ……」

（ほんとうに……決めなくていいのか……

でも……おれの考えは……）

「ナオキ……ナオキ!!!」

「はい!!……どうしたんだ?」

「あれ……」

「あれ?……ん……みんななに話してるんだ……あつ……そうか……」

「ナオキも来て……」

「ああ……」

絵里とナオキはみんなの元へむかった。

「でも……ほんとうにそれでいいのかな……」

亜里沙ちゃんたちはμ sに入る気ではしょ？ちゃんと答えてあげなくちゃいけないんじゃないのかな？

もし私が同じ立場なら辛いと思う……」

「かよちゃんは……μ s 続けていきたいの？」

「それは……」

「なに遠慮してるのよ……」

全員が抜けるんじゃないんだから続けなさいよ！

あなたたち7人は残るんだから……」

「遠慮してるわけじゃないよ……」

ただ……μ s してこの10人じゃないかって……」

「……1人かけても違うんじゃないかな……」

「私も花陽と凜と同じ……」

でも、にこちゃんのいうこともわかる……」

μ s という名前を消すのは辛い……

そうなら続けた方がいいんじゃないかって……」

「でしよう？ それでいいでしょ……」

「でも……絵里ちゃんと希ちゃんにこちゃんがいないμ s をμ s と言つていいのかな？」

「そうですね……私も穂乃果と同意見です」

「私も……」

「ウチはまずはラブライブ！ に集中して……これからのことは話さない方がいいと思うな……ナオキくんはどう思う？」

みんながナオキをむいた。

「おれは……」

話すべきだと思う……これからのこと……

だって……このままあやふやにして本戦に挑むのか？

今のこの状態じゃ練習にも集中できなさそうだし……本戦でも……

そうなるならこれからのことをはっきりさせて気持ちをあらたにして本戦に挑みた

い……

そうしないと迷いをもってステージに立つことになる……

それにこれは…おれたちが決めるべきことだ……

だからおれは話すべきだと思う……

それがおれの考えだ……

絵里はどう思う？」

「私!?……私は……」

私は……決められない……

それを決めるのはナオキたちじゃないかって……」

「おれたちが?」

「私たちは、必ず卒業するの……スクールアイドルを続けることはできない……」

だからその後のことは言っではいけない……

私はそう思ってる……

決めるのはナオキたち……それが私の考え……」

「絵里……」

「そーやね……」

「ええ……」

練習後……

「よし！今日の練習は終わりだ！

お疲れ様！」

「お疲れ様でした！」

そして1年生と2年生が集まった。

「それじゃ……明日みんなで集まろうか」

「じゃ、明日…俺達だけ部室に集合……これでいいな？」

「うん……」

帰り道……

「絵里……考え……まとまったみたいだな……」

「うん……ずっと迷ってたの……」

これからのことは私たちが決めていいのか……

でもよく考えてみたら、私たちはスクールアイドルを続けられない……

続けるのは1年生と2年生なんだって……

なら……私たちが決めるべきじゃない……

そう思ったの……」

「そうか……」

高坂宅……

「ただいまー」

「おかえりー」

「あ！穂乃果さん！」

「亜里沙ちゃん！いらっしやい」

「あの……見て欲しいものがあるんです……」

「ん？なにになに？」

「えつと……μ s！ミュージック……スタート！！」

「はっ!？」

「どうですか？」

「う……うん……バッチリだと思っよ」

「本当ですか!?

私が、sに入っても問題ないですか?」

「え……あはははは……」

「ん?」

「亜里沙……お姉ちゃんは本番直前だから邪魔しないの……」

「おう……」

「ゆっくりしてってねー」

穂乃果は階段を上がっていった。

穂乃果の部屋……

「はあ……」

穂乃果はベッドに寝転んだ。

「亜里沙ちゃん……入る気満々だな……」

そのころ……

「ねえ……亜里沙……」

「ん？」

「亜里沙はμ sのどこが好きなの？」

μ sのどこが一番好きなのところ？」

「えっ……………」

「ここじゃあれだし……………外に出ようよ……………」

「うん……………」

雪穂と亜里沙は神田明神にむかった。

神田明神……………

「もう一度聞くと……………」

「亜里沙はμ sのどこが一番好きなのところ？」

「私が……………μ sが一番好きなのところ……………」

「私は……………あの10人かな……………」

「え？」

「ステージに立つ9人の女神とそれを輝かせる人……………この10人が私がμ sの一番好

きなところかな……」

「10人……私も……私も一番好きのところはあの10人……

みんなが進む……あの10人……

あの10人に……私の好きなμ sには私はない……」

「うん……だからね……一緒にスクールアイドルになつて頑張ろうよ！」

「え？」

「一緒にさ、ラブライブ！を目指そうよ！あのステージと一緒に立とう！

μ sじゃなくて私と亜里沙のいるスクールアイドルで！」

「雪穂と……私が……いる……」

「そう……」

「詳しいことはまた決めていけばいいんだよ……」

「……うん……そうだね！」

私……μ sには入らない……

私の好きなμ sに……私はいないから……」

「うん……」

園田宅……

海未は庭で素振りをしながら考えていた……

(私にとって……*ム* sはこの10人……)

誰かが入って、抜けて……それは違う……

なら……答えは……)

西木野宅……

真姫はお風呂に入りながら考えていた……

(μ , sはこの10人だけ……でもこの名前を消すのは辛い……それなら続けられ
 ……でも…それは違う気がする……にちやんたちがいない μ , sって… μ , sなの
 ?

いや違う……

それなら……答えは……)

小泉宅……

花陽は洗面所で髪の毛をセットしながら考えていた……

(スクールアイドルは続けたい……)

でもそれは μ , sとしてなのかな……

μ , sとしてじゃなくても続けられる……

でも…… μ , sがなくなるのはいや……

でも μ , sって……この10人じゃないのかな……

なら……答えは……)

星空宅……

凛は部屋から外を眺めて考えていた……

(μ s という名前をなくすのは辛い……

でも……続けたい気持ちもあるし……

μ s を私たちだけのものにしたいたいと思う……

μ s のメンバーはこの10人だけ……

11人でも……7人でもない……10人……

そうすると……答えは……)

南宅……

ことりは部屋から外を眺めて考えていた……

(9人の女神とナオキくんであ、s……)

それ以外であ、sと呼べるものはない……

だとしたら……答えは……)

高坂宅……

穂乃果はベッドに寝転んで考えていた……

(どうしよう……)

確かにあ、sはこの10人だけ……

でも……亜里沙ちゃんも入りたそうだったし……
これからもそういう人たちが出てきたら……
でも………)

「わからないよ………」

香川宅……

ナオキはソファーに座りながら考えていた……

(決めるとは言ったけどどうしよう………)

μ sはおれの大切な存在……

μ sは大切な人たち……

穂乃果……海未……ことり……花陽……凜……真姫……にこ……希……絵里……そしておれ……

μ sはこの10人だけじゃないのか……

おれの大切なμ sに……あいつら以外の人はいない……

ということとは……答えは………)

翌朝……

「いつてきまーす……」

結局決まらなかつたな……答え……」

「お姉ちゃん！」

「ん？……雪穂……亜里沙ちゃん……」

「ちよつと話があるんだけど……いいかな？」

「え？うん……」

そして亜里沙と雪穂は見つめ合い、頷いて……

「あの……私……」

私……

μ, sに入らないことにしました……」

「え？」

「昨日、雪穂に言われてわかったの……私……μ sが好き、10人が大好き、みんなと一緒に一歩ずつ進んでいくその姿が大好きなんだって……」

私が大好きなスクールアイドル、μ sに私はいない……

だから……私は……私のいるハラショー！なスクールアイドルを目指します！

雪穂と一緒に……」

「えへへ……だか色々教えてね……先輩……」

（そうだ……）

μ sは私たち10人だけ……

みんなが大好きなμ sは……

私たちなんだ……

だから……答えは……）

穂乃果は2人に抱きついた。

「そうだよね……」

当たり前のことなのに……

わかってたはずなのに……

頑張っつてね！」

「はい！」

「うん！」

……そして1年生と2年生はみんな音ノ木坂学院のアイドル研究部部室へとむかった

そう……

次回へ続く……

……決断の時……

第46話 「おれたちが決めたこと」

前回の妄想物語！

絵里ちゃんと亜里沙ちゃんと雪穂も合格し、ラブライブ！にむけて練習に入る私たち……

でもそこで話題になったのは

『これからのこと』

私たちはラブライブ！が終わるまで話さないと約束したけど……

「決めるのはナオキたち……」

それが私の考え……」

1年生と2年生は自分で答えを考え、そして私も雪穂と亜里沙ちゃんのおかげで答えを考えることができた……

そしてついに……

決断の時……

音ノ木坂学院……

アイドル研究部部室……

「みんな揃ったな……」

みんな『答え』はまとまってるか？」

「……………」

6人は黙りこんだ。

「やっぱり話しにくいか？」

「そうですね……少し……」海未は言った。

「うん……」ことりは言った。

「でも話さなきゃいけない……」花陽は言った。

「かよちん……」凜は言った。

「そうね……」真姫は言った。

「それならさ……小学生の時みたいに手をあげようよ！下向いてさ！」

穂乃果は言った。

「ああ……あれか……懐かしいな……よし、おれが見よう……みんな頭を下げて」
「うん……」

そしてみんな頭を下げた。

先に答えを知るのは……ナオキ……

（おれの答えはもう決まっている……）

「それじゃ……3年生卒業後、 μ sとして活動を続けたっていう人……

よし、手を下げて……

それじゃ……3年生卒業後、 μ sとして活動は続けないという人……

この大会が終わったら μ sをおしまいにしたいと思う人……

よし……手を……下げて……くっ……うう……うう……」

ナオキはその結果を見て涙を流した。

「ナオキ……」

「ナオキくん……」

そしてこの時みんながわかった……

みんなが出した答えは……

『この大会が終わったらμ、sはおしまいにする』

「みんなっ……同じだった……」

「え？」6人が声を合わせた。

「7人みんな……同じだった……」

みんな……μ、sはおしまいにするってのに……手を挙げた……」

「そう……だったんだ……」穂乃果は言った。

「やっぱり、みんな考えることは同じみたいですね……」海未は言った。

「うん……μ、sはこの10人だけ……」

「……ことは言った。」

「μ、sは11人でも7人でもない……」花陽は言った。

「μ、sは凜たちだけのものにした……」凜は言った。

「この……想い出を……うっ……うう……」真姫はそう言つて涙を流した。

「でも……悲しい……」

「はい……」

「うん……」

「本当に……大切な……ものだったから……」

「うん……」

「……そしてみんなが涙を流した……」

そしてしばらくして……………

「なあ……………このこと絵里たちにどう話す？」

「うーん……………」

みんなが3年生にそれを伝える方法を考えた。

「そうだ!!」

「おつ、さすが穂乃果だな…なに思いついたんだ？」

「ふふーん……………それ、はー……………」

翌日の日曜日……

μ☒s10人は集まった。

「よーし……遊ぶぞー!!」穂乃果が言った。

「遊ぶ?」にこが言った。

「いきなり全員呼び出してなにかと思えば……」絵里が言った。

「ゆっくり休むんやなかったん?」希は言った。

「家に居ても面白くないじゃん!

やっぱり外で遊ばなきゃな!」ナオキが言った。

「そ…:そうですね!」海未が言った。

「今日…:あつたかいし…:」ことりが言った。

「遊ぶのは精神的な休養だつて本で読んだことあるし!」花陽が言った。

「そうそう!」真姫が言った。

「にや…:にやー!!」凜が言った。

「なによ…今日はやけに強引ね…」にこは言った。

「だつてほら！^μ s 結成してナオキくんが入ってきてから10人揃ってちゃんと遊んだことないでしょう？」

「1回ぐらいいいかなーって」

「遊ぶって言つても何するのよ？」

「凜は遊園地に行きたいにや！」

「わ…私はまずアイドルシヨップに！」

「2人とも子供ね…私は美術館…」

「バラバラじゃない！」

「で…どうするんや？」

「んー…」

「じゃあ全部！」

「は!？」3年生は声を合わせた。

「行きたいところ全部行こうよ!!」

「それ本気？」

「うん！みんなで行きたいところ1個ずつあげて全部に行こう！」

「いいでしょう？」

「これ全部μ sだ!!」穂乃果がμ sのグッズを見て言った。
「おれのまである!?!」

ナオキは自分のグッズを見て言った。

「恥ずかしすぎです……」海未は自分のポスターを見て言った。

「伝伝伝ブルーデー完全版の予約特典はー……あつた!」

えつと……収録曲を歌っているアイドルの集合ポスター!?!」

「な……なんですつて!?!」

「にこちゃん!これは予約するしか!」

「そうね!!」

さ、花陽……予約しに行くわよ!」

「あの2人……ちよつと怖いかも……」ことりは苦笑いして言った。

「凜はこつちのかよちゃんも好きだよ!」

「絵里……何見てるんだ?」

「え?うん……他のアイドルの写真……みんな可愛いな……」

「絵里の方がかわいいさ……一番……」

「もう……」

「お二人さんはラブラブやねー」希は言った。

「そうか？」ナオキは言った。

「少しは人の目も気にしなさいよ……」真姫は言った。

「えー……めんどくせー」

「さ！伝伝伝も予約したし！次は私の行きたいところね！」にこは言った。

次はにこ希望のゲーセン……

「ああ……負けたー……」

「ふふーん……これで宇宙No.1ダンサーは私よ！」

にこは穂乃果とのダンス勝負に勝ってガッツポーズをした。

「この前負けたのが悔しかったんだね……」花陽は言った。

「それよりも……」

「とりやー！ー！」

「でやあー！ー！」

絵里と希はホッケーで接戦を繰り広げていた。

「あはははは……」ことりは苦笑いした。

「すごいことになってるにや……」凜は言った。

「ハラシヨ……」ナオキはキョトンとしていた。

「でやあ！あ……」

「ぐはっ!？」

希の打ったのがナオキの顔面に直撃した。

「ナオキ!?大丈夫……」

「絵里……あとは……頼む……必ず……希を……ガクツ……」

「ナオキー！ー!!」

「ふっ……愚かな男やな……」

「希……ナオキの敵は……絶対取る!!」

「何やってるのよ……あれ……」にこは言った。

そして絵里と希とナオキの小芝居も終わった。

「さ、次は私の行きたいところですよ！」

次は海未希望の動物園……

ことりと穂乃果はペンギンを見ていた。

「わーかわいいー！」

「ことりちゃん！ペンギンさんの真似しよ！」

「うん！」

穂乃果とことりはペンギンの真似をした。

パシヤ…

「2人とも……」海未は言った。

「でも海未が動物園来たいなんて珍しいな……なにか見たいのでもあったのか？」ナオキは言った。

「はい……フラミンゴです！」

「フラミンゴ？」海未以外の9人が声を合わせた。

「お——！」

「さすが片足立ちのプロですね……」

みんなは片足で立ってバランスをとっていた。

パシヤ……

「よっしゃ！おれもー！！」

ナオキも加わった……

「ぐぬぬぬぬぬ……おととと……」

「ナオキバランスなさすぎ……」真姫は言った。

「いやだつてさ……おわわわわわ!!」

「きやつ！」

ドサツ！

「あ、ナオキ！大丈夫……です……か……」海未の顔が赤くなった。

「いててて……うおっ!？」

ナオキはバランスを崩して絵里を押し倒していた……

プニツ……

「この感触は……」

ナオキは絵里の胸を揉んでいた。

「もう……こんなところで……ダ・イ・タ・ン……」

「えっ……あ……すまん！」

ナオキはどいた。

「ナーオーキー!!」海未と真姫とにこは言った。

「ちよ……ちよつと……待って……これは不可抗力で……」

「問答無用!!」

「に……逃げよう……おれの本能が……命の危機を感じている……ダツシュ!!」

ナオキは走って逃げた。

「あ！待てえええええ!!」

海未と真姫とにこは追いかけた。

「参りました……」ナオキは捕まって正座させられた。

「それならー……」ことりは怪しげな笑顔で言った。

「な……なんでしょう……ことりさん……」

「次は私の行きたいところでー」

ちようどお昼時だしー……

「ことりお腹すいたなー」

「おいおいおい……」

「そうですね……」海未も笑って言った。

「ここはナオキの奢りね…」真姫は言った。

「賛成の人！」

「はい」

にこがそう言うのとナオキ以外が手を挙げた。

「い…嫌だからな!!」

「ナオキくん……………」

「ん？だから嫌だって……………」

だがナオキは『あれ』を知らなかった……

ことりは胸をクツと掴んで……

目をウルウルさせ……

「おねがぁい!!」

「はっ!?(な……なんだこのことりのお願いは……頭の中に響く……なんだこれはああああ!!あああああああああ)」

わかりました……奢らせて下さい……」

「うん!それじゃ、カフェに行こう!」

次はことり希望のカフェ……

「せーの」

「ありがとうナオキ！（ナオキくん！）」

みんなが声を合わせた。

「どういたしまして……」

ナオキはそう言うとコーヒーを口に入れた。

机にはケーキやらがたくさん乗っている。

全部ナオキの奢りで……

「んー！チーズケーキ…美味しー」ことりは言った。

「はいはい……あ、絵里…ほっぺたにチョコホイップ付いてるぞ」

「え？ほんと……」

「ああ……よっ……ペロッ……」

ナオキは人差し指でそのチョコホイップをとり口に入れた。

「ありがとう……」

「うん……美味しいな……これ！」

「すみませーん！」

「はい」

「このケーキ下さい！」

「かしこまりました！」

「ナオキくんも食べるんだ……」花陽は言った。

「あれだけ『おれは絶対食べない！食べないからな！』って言ったのに……」穂乃果はナオキの真似をして言った。

「ナオキくんも真姫ちゃんと同じでツンデレだにや！」

「誰がツンデレだ（よ）!!」ナオキと真姫は声を合わせて言った。

そしてみんな食べ終わった。

「さて……次は私の行きたいところね……食べたあとは運動と行きましょ！」

次は絵里希望のボーリング場……

「一度やってみたかったのよねー！」

「あれ？ やったことなかったのか？」

「うん！ ナオキはあるの？」

「お、おう！ 絶対一位取ってやる！」 ナオキは腕をまわした。

「えー！ 手加減なしなん…」 希は言った。

「おう！」

「じゃ、負けた人はジュース奢りやで！」

「よっしゃ！」

「よっ……」

パコーン……

「パ……パーフエクト……」海未は言った。

「あつはは！ボーリングつて楽しい！」絵里は言った。

「ハラシヨ……」ナオキと絵里以外の8人が言った。

「それに引き換え……」

海未がそう言うときみんなそこで膝をついているナオキをむいた。

「馬鹿な……なぜだ……なぜ……」

「全部ガーターって……」にこは言った。

「ヘタクソだにやー」凜は言った。

「くっ……」

ポン…

希がナオキの肩に手を置いた。

「ひっ……」

「ふふふふ……負けた人はジュース奢り……やで？」

「……またか……」

ナオキは全員にジュースを奢ることになった。

「じゃ、次は私の行きたいところね……」

次は真姫の希望の美術館……

「にやははーん」凜は女の人の像の真似をした。

「ぶくく……」花陽は笑いをこらえた。

「お静かに！」真姫は言った。

「シーー！」

「ヴえええ!？」

でも逆に言われた。

「おー……鎧か……」

「西洋のものみたいですね……」

「やっぱり甲冑とは違うな……」

「そうですね……」

ナオキと海未は西洋の鎧を見ていた。

「お、あつちで試着できるみたいだな……」

「ナオキ……着てみてはどうですか？」

「そうだな……よし！」

「おー……」 ナオキ以外の9人が言った。

「どうだ？」

「似合ってますね！」 海未は言った。

「そうか？」

「記念撮影するからポーズとって！」 絵里は言った。

「え!? えーっ……」

白い月の騎士（ナイト）！

「おーー!!」

パシヤ……

「黒い月の騎士（ナイト）！」

「おーー!!」

パシヤ…

「うまく繋げてきたわねー」にこは言った。

「イヒヒー…だろ？」

そしてみんなは美術館を出た。

「さ、次はおれの行きたいところだな！」

次はナオキ希望の神田湖……

「よし！スワンボードで対決だ！」

「いいやん！」

μ sはスワンボードで競争することになった。

チームは……

凜と花陽

穂乃果と海未

ことりと真姫

にこと希

ナオキと絵里

となった……

「よっしゃー！今度こそ負けねー！！

行くぜ！絵里！！

「うん！！」

「よーい！！スタート！！」

係員の人が出た。

みんな一斉にスタート！

ナオキと絵里チームがどんどん前に出ていく！

「うおおおおおお！！」

ナオキは全力でこいだ。

「ナ……ナオキ!?」

「うおおおおおお！！おつと……」

ナオキはバランスを崩した。

プニツ…

「あ……」

「え……」

ナオキの顔は隣に座っていた絵里の胸にダイブしていた。

「(絵里の胸……………いやいやいやこんなときにしてる場合じゃねえ…)

す…すまん……………」

「う…ううん……………」

「あそこのラブラブカップルに裁きをおおおおおお!!!」

希とにこのボートがすごい勢いで突進してきた。

「なにラブラブしてるんですか!!破廉恥です!!」海未は叫んだ。

「海未ちゃん!左に行ってるよ!」穂乃果は言った。

「ちよつ……………希……………にこ……………」

「でやああああああああああ!!」

ドン!!

「おとつとおおおお!!!」

ナオキと絵里のボートが倒れそうだった。

「た…倒れる倒れる！」

「絵里！捕まってるよ！よいしょ！！」

ナオキは気合いでボートのバランスを直したが……

「あ…やべ……」

バシャーーン……

「ナオキー！！」

「やったー！！」

凜と花陽チームの勝利！！

「穂乃果が右って言ったから負けたんです！」

「海未ちゃんが左に行っただよ!!」
「うっ……」

「ハックション!!!」

くそー………」

「ごめんやでー」

「ふ……ふん! ラブラブしてるから悪いのよ!」

「なんだよそれー……ハックション!!!」

「はい、替えの服買って来たわよー」

「ナオキくんにはバツチリなの選んできたよ！」

「すまんな絵里、ことり……」

よし、着替えてくるわ………」

ナオキは着替えた。

「次はウチの行きたいところやねー」

次は希希望の浅草寺……

「おー！雷門だー！！」

「あれ？ナオキくん、来たことなかったん？」

「ああ…ハラシヨー！」

パシヤ…

「ふふっ…さ、行くでー」

みんなは雷門をくぐって奥へと歩いて行つた。

「スピリチュアルやね」

穂乃果と凜とにことナオキは煙をかけていた。

穂乃果と凜は頭に…

にこは胸に…

ナオキは頭からつま先まで全体にかけた。

そして4人がかけ終わった。

「よおーし！次は凜の行きたいところだにやー！！」

次は凜希望の花やしき……

「ねえねえ！凜これ乗る！」

「パンダカー……」ナオキは言った。

「穂乃果も穂乃果も！」

「お前らいくつだよ！」

そう言つてナオキはパンダカーに乗つてお金を入れた。

「ナオキも乗るのね……」真姫は言った。

「わーい」

「楽しいねー！」

「にこが一番似合ってるわね！」

「おもしれー!!!」

「次はお化け屋敷に入るにや！」

「えっ!?!」

「うう……離れないでね……」

「お……おう……（い……いつもより強いから……む……胸が……）」

絵里はナオキの腕に抱きついていていた。

「ぎゃああああああああ!!」

「きやああああああ!!」

お化け屋敷のラストの仕掛けによつぽど驚いたのだろう……

絵里はより強く抱きついて

穂乃果・凜・にこ・花陽はダツシユで逃げた。

「かかかかか覚悟しなさい!!わ…私が相手です!」

「待って海未ちゃん!落ち着いて!」

「海未ちゃん!」

海未は手刀を構え、希とことりはその海未を捕まえていた。

「ふん…子供ね…これぐらいで驚いて…」

真姫は口ではそう言ってるが若干ナオキに近づいている。

「みんなビビりすぎだろ…」（絵里の胸が絵里の胸が絵里の胸が…

ハラシヨオオオオオオオオ!!）」

「さ!気を取り直して次はあれに乗るにや!!」

「あれ…ああ…ローラーコースターね」真姫は言った。

「ロ…ローラーコースター!」ナオキが驚いた。

「ん?どうかしたの?顔色悪いけど」穂乃果は言った。

「い…いや…べ…別に…だ…大丈夫…だよ…あは…あははははは」

それをみて希はニヤリ笑った。

「あれやない？ナオキくんは楽しみすぎて固まってるんよー」

「は!？」

「そうなの!?!それなら早く乗るにやー!?!」凜はナオキを引っ張って行った。

「ちよっ……希iiiiiiiiii!?!」

「発車しまーす」

「ナオキ……大丈夫?」

ナオキの隣に座っていた絵里が言った。

「ダ……ダイジヨウブダヨ!!タノシミダナー!!」

ローラーコースターが動く……

ガタゴトガタゴト……

そしてローラーコースターは上に上がった。

(う……うえに上がってる……め……目を閉じねば……)

そしてローラーコースターは勢いよく下へと進んだ。

「きゃー……」とナオキ以外の9人からは楽しそうな声がある。

ナオキはというと……

「……………」

「ん？ナオキ……って気絶してる!？」

「お疲れ様でしたー」

「ナオキ！ナオキ!!」

「はっ!?!こ……ここはっ!?!」

「ナオキ大丈夫？意識なかったけど……」

「だから嫌だったんだよ……」

そうナオキは絶叫系が大の苦手だったのだ……

「以外に楽しかったね！」花陽は言った。

「そ…そうね…最初は怖いと思ったけど案外楽しいものね…」真姫は言った。

「こいつら…強い…」ナオキが言った。

「いやいや、ナオキくんが弱いだけやん」希が言った。

「ねえねえ！最後にあれに乗ろうよ！」穂乃果はBeeタワーを指さした。

「えっ!?…た…高い…」ナオキは言った。

「行こう！行こう!!」凜は言った。

「ナオキ！男ならこれぐらい平気でしょ！」にこは言った。

「い…いやあーな…おれは…」

とういうことでBeeタワーなう

家のカタチをした乗り物に10人が待機している。

9人は今か今かと楽しみにしている。

あと1人は彼女に捕まっていた。

「ナオキ……引つ付きすぎよ……」 絵里は言った。

「は……離さんといてな……」

おれ……怖いから……」 ナオキは言った。

「では上昇しまーす」

「えっ……まだこのころの準備がああああああああああ!!!」

「きやー……」

ナオキの願いもむなしくBeeタワーの家のカタチをした乗り物は上昇し上空45mに到達した。

「おー」

「きれーい……」

と9人は声をあげた。

「ねえナオキ、綺麗よ……」

「いや！おれは絶対目を開けないからな!!」

「ふふふ……こちよこちよこちよ」 穂乃果がナオキの腹をくすぐった。

「ははははは……や……やめ……ははははは……あ……」

ナオキは目を開けて窓からおもいつきり下をむいてしまった……

「た……たか……………」

「あら？ ナオキー……ナオキってばー……固まつてる……………」

「にやーーー!!!」

ベシベシベシ……

凜の往復ビンタ！

「いつてえええええええ!!…はっ!?!…おれはなにを……………」

「降下しませーす」

「え…降下……ちよつと待ってええええええええええええええええええ!!」

「あそこから見えたスカイツリーまた行きたいねー」穂乃果が言った。

「行くにやーー!!」凜は言った。

「絶対行かないからな!!!」

ナオキは言った。

そして、s一行は花やしきを出た。

「ひ…ひどい目にあつた……」ナオキは言った。

「まさかナオキにあんな弱点があつたなんてねー」にこは言った。

「意外というか……」

「ほんとうに男かにゃ？」

花陽と凜は言った。

「凜！それ結構傷つくから！おれは男だから！manだから！Mr.だから！Are you OK？」

「にゃああああ!!英語はやめるにゃー!!」

ナオキはその後も凜にむかつて英語をブツブツ言った。

「ふふふ……」

みんなから笑いの声が出た。

「それであれば穂乃果が行きたいところだけど……」絵里は言った。

「……………私は……………」

海に行きたいな……」

「海？」

「うん…誰もいない海に行つて、10人だけで行つて10人だけの景色が見たい……ダメかな？」

「穂乃果……………」海未が言った。

海じゃないよ。

行くのは海だけと言ったのは海未だから。

「賛成にゃ!」

「なんだか冒険みたいだね!」凜と花陽は言った。

「今から行くん?」希は言った。

「行くだけ行ってみようよ!」

「それじゃ…………ダツシユだな…」ナオキは言った。

「ほえ?」

「次に海に近いところ止まる電車は…………20分後に発車だ。」

「駅まで歩いて行ったら20分…………だから…………」

「み…………みんな急げえええええええ!!」穂乃果はダツシユした。

そして、sは駅まで全力ダツシユすることになったのだ。

プルルルルルル……………

「発車しまーす」

「これですー！」

「みんな乗って!!」

そしてなんとか電車に間に合った。

「ハアハアハアハア……………」

みんな流石に息をあげた。

「穂乃果……………」

「ん?」

真姫が穂乃果に近くで言った。

「心の準備……………できてる?」

「……………うん……………」

そして電車は走り、

しばらくして車窓からは海が見えた。

そして無人駅に着き、そこで降りて、そして少し歩くと海岸に出た。

「わー」

みんなその景色をみて声を上げた。

みんな橋の下に荷物を置いた。

そしてみんな海にむかって走った。

「ちようど夕日が沈むところにや！」凜が言った。

「スピリチュアルパワーのおかげやねー」希が言った。

「こういう時は日頃の行いがものを言うのよね！」にこは言った。

「ははははは……………」

「きやー！」

「冷たい！」

みんなが遊んでいるのを穂乃果は少し切なさそうな目で見た。

「穂乃果……」

「ん？」

「お前は行かないのか？」

「……うん……」

「やっぱり……少し？」

「うん……」

「でも言わなきゃ……『おれたちが決めたこと』……」

「うん……そうだね……」

「ほらー！ナオキも早く！」絵里が言った。

「おう！今行く！……おれは行ってくるからな……」

「うん……」

ナオキは海へむかって走った。

「……………」

穂乃果は静かに……そして少し悲しそうにみんなが遊んでいるのをみつめていた。

涙が出そうになるが、それを抑え海にむかって歩き出した。

そして穂乃果はみんなの元へ行き10人で手をつないだ。

左から真姫、花陽、凜、ことり、穂乃果、海未、ナオキ、絵里、希、にこの順番だ。

「夏の合宿のときも、こうやってみんなの手をつないで朝日見たわねー」

絵里が懐かしそうに言った。

「そういえばナオキはあのときはいませんでしたね」海未は言った。

「いや、いたよ」ナオキはサラツと言った。

「えー!?」ナオキと希以外のみんなが言った。

「な…なんで!?」ことりが言った。

「ん…いやあーな……」

希に言われてその近くの民宿に泊まってみんなを見てたんだよ。

ジヨギングしながら……

ほんでその日の朝に海岸に行つて希と話したんだ。

みんなが来そうだったからそこを去つただけ……やっぱり気になってな……だから後ろの気のところから眺めてた……

だからあの日……この景色をみたのは今の10人だ……」ナオキは懐かしそうに言った。

「希……あなたそんなことを……」

絵里は言った。

「ふふっ……見て欲しかったんよ……」

ウチらを……

それにあの時まだナオキくんは転入を迷ってたからその迷いを解決するきっかけに
したかった……

ナオキくんがいないと、sの全員はそろわないやし……」

「そうだったんだ……」花陽は言った。

そしてしばらく沈黙が続いた。

「あのね……」穂乃果がその沈黙を破った。

「あのね……このまえみんなで集まって『これからのこと』を決めたの……」

絵里ちゃんと希ちゃんとこちゃんが卒業した後の……sのこと……」

「穂乃果……」

1. 2年生は繋いでいた手の強さが強まっていた。

「それでね、みんな一緒の考えだった……

みんな同じ『答え』だった……

だからね……決めたの……そうしようって……

言うよ……せーっ……ごめん……言うよ……

せーの!!」

そして1・2年生は息を吸って……

「大会が終わったら……」

μ
Sは………

おしまいにします
!!!!
」

その声は夕日が沈む海に響いた。

その『答え』を聞いた3年生の繋いでいた手の強さが強まっていた。

希は目をつむり下を向いて下唇をかみ……………

絵里とには1・2年生の方向に視線を向けていた……

「やっぱりこの10人なんだよ……」

この10人がμ、sなんだよ……」穂乃果は言った。

「誰かが抜けて……誰かが入って……それが普通なのはわかっています……」海未は言った。

「でも……私たちはそうじゃない……」真姫は言った。

「μ、sはこの10人……」花陽は言った。

「誰かがかけるなんて考えられない……」凜は言った。

「一人でもかけたら……μ、sじゃないの！」ことりは言った。

「それは一人でも増えても同じこと……おれの大切な存在であるμ、sは……」

おれに勇気を与えてくれたμ、sは……

このメンバーだけ……」ナオキは言った。

そして3年生で最初に口を開いたのは絵里だった……

「そう……」

「絵里!!」

「そうやね……」

「希まで……」

「だって……」

そんなの当たり前やん……

ウチがどんな気持ちで……どんな想いで見てきたか……『μ s』という名前を付けたか……

ナオキくんを誘ったか……わかるやろ？

ウチにとつてはμ sはこの10人だけ……」

希は声はあげることがはなかつたがそれを我慢した。

だが目からは涙が流れる……

「そんなの……そんなのわかってるわよ！

私だってそう思ってるわよ……

でも……でも……だって……」

にこは海にむかって歩き出した。

「にこちゃん……」

「私がどんな想いでスクールアイドルをやってきたか……わかるでしょ？

3年生になって諦めかけて……

それがこんな奇跡に巡り会えたのよ！

こんな素晴らしいアイドルに！

仲間に巡り会えたのよ！！

終わっちゃったらもう……………」

真姫はこの前まで走った。

「だからアイドルは続けるわよ！！

絶対約束する！

何があっても続けるわよ！！

でも…μ、sは私たちだけのものにしたたい！

にこちゃんたちがいないμ、sなんて嫌なの…………

私が嫌なの！！」

真姫は目に涙を含ませて言った。

にこも我慢の限界か今にも声をあげて泣きそうになった…………

「私は…………みんなと出会って

ほんとうにやりたいことを見つけられた…………

それはナオキたちみんなのおかげ…………μ、sのおかげ…………

私は決められないって言ったけど…………

もし私も決めることになってたら……

同じ答えだったと思うわ……」

絵里は言った。

「絵里……」

ナオキは絵里を引き寄せた。

「ひぐつ……かよちん……泣かない約束なのに……ひぐつ……凜頑張ってるんだよ……なの
に……もう……うつ……」

凜は花陽の服に顔を当てて言った。

みんな今にも声をあげて泣きそうだった……

「あ……」

穂乃果が叫んだ。

「え!?」 みんなが言った。

「電車!!早くしないと電車なくなっちゃう!!」 穂乃果はそう言う走り出した。

「え!?!」

「穂乃果ちゃん!?!」

海未とことりは言った。

ナオキは見逃さなかった……

穂乃果が走った後にキラリと光るものを……

そして雨でもないなにかがナオキの頬に当たった……

「そうか……」それをみたナオキは言った。

「え？」絵里は言った。

「さー走るぞ!!」

さもなきやここで野宿だー!!」

ナオキは絵里の手を引っ張って走った。

「ちよつとー!」

そしてみんな全力で走った。

そして駅……

「ハアハアハアハア……」みんな息をあげていた。

「電車は……え……まだまだあるわよ？」絵里は時刻表をみて言った。

「え？」海未は言った。

「えへへ……ごめん……」穂乃果は言った。

「穂乃果ちゃん……………」ことりは言った。

「穂乃果はあのままいるとみんなが涙が止まらないほどに泣きそうだったからそう言っただよな？」ナオキは言った。

「そうなん？」希は言った。

「うん…………ナオキくんにはバレてたか…………えへへ…」穂乃果は舌を出して言った。

「なんだ…………」花陽は言った。

「穂乃果に一杯食わされましたね…」海未は言った。

「もう…………本気で走っちゃったじゃない…」真姫は言った。

「そうよ…………体力温存って言つといて…………結局使っちゃったじゃない…」にこは言った。

「おれは結構使ってるけどな…あははは……………」

「もう…………あはははは……………」

ナオキがそう言うときみんなが笑った。

「でももうちよつと海見てたかったな…」凜は言った。

「でも良かったです…………10人しかいない場所にこれました…………」海未は言った。

「そうね……………」

今日あそこで海を見たのは私たち10人だけ…………

今この駅でこうしているのも…私たち10人だけ…」絵里は言った。

「なんだか素敵だねー」ことりは言った。

「だったら記念に写真撮らない？」

穂乃果は言った。

「あ、それならずつと使ってたカメラと三脚あるぞ」

「そうじゃなくて……あれ！」

「……ここでみんなで撮ろうよ！」

「あれ？」花陽は言った。

「あれって……証明写真!？」にこは言った。

「いいからいいからー！」

「ちよつと待て！おれは……」

「いっくにゃー!!」凜はナオキの手を引つ張った。

「ちよつ……待つ……（これ……結構やばくねーか……狭いし周り全員女だし……）」

「あははは………やっぱり狭かった？」穂乃果は言った。

「うおっ!?(やばいやばいやばい!みんなのいろんなところが……)」

今の状況……

みんなナオキを中心に引っ付いている状態……

ゆえにみんなの胸とか尻とか色々ナオキに当たっている状態……

ナオキは手だけは触れまいとバンザイしている状態……

「ナオキ顔赤いわよ?」絵里は言った。

「ナオキくんも男の子やからねー」希は言った。

「破廉恥です!!」海未は言った。

「それはなあ………」

「ほらほら!始まるよ!」

パシヤ……

ジー……トスツ……

写真を撮り終わったあとみんなはホームへとむかった。

「ぶっ……にこちゃん頭切れてる……」

穂乃果は言った。

「ぶ。ぶっ……あははは……真姫ちゃん変な顔にや！」

凜は言った。

「凜だっってこっちの手しか写ってないでしょう？」

真姫は言った。

「にこっちこれはないやーん」

希は言った。

「あえてよ！あえて！」

にこは言った。

「これ……私の髪？」

「ことりは言った。」

「ぶっ…なんですかこれー」

海未は言った。

「ふふっ…この希、にこの顔がヒゲみたいになってる」

絵里は言った。

「ナオキくんの顔りんごみたいにあかいやん」

「そ…それは…み…みんなが…」

ナオキは言った。

「破廉恥です！」

「海未！そればっかかよ!!」

「あはははははは…」

みんな撮った写真をみて笑った。

「あははは……あはは……うっ……ひぐっ……うう……」

花陽は笑っていたがその出てくる涙を抑えられず顔を隠して泣いた……

「かよちゃん泣いてるにや……」

凜は涙を目に浮かばせて言った。

「だって……おかしすぎて涙が……うっ……うっ……うう……」

「泣かないでよ……ひぐっ……泣いちゃだよお……ひぐっ……せつかく笑ってたのにい……うっ……うう……」

凜も手を目に当て顔を隠して泣いた……

「もう……やめてよ……やめてって……言ってるのに……ひぐっ……うう……」

真姫も下を向いて泣いた……

「なんで……泣いてるの……もう……変だよ……そんなの……」

穂乃果は座っていて目からこぼれる涙が手の甲に落ちていた……

そしてポロポロと目から涙が溢れていた……

「穂乃果ちゃああああん……」

ここのりの涙は線を描き溢れ出ていた……

「うう……うっ……うう……うううっううう……」

海未は絵里の胸で声をあげて泣いていた……

そんな海未を抱きしめる絵里は静かに涙を流した……

「もう！メソメソしないでよ！

なんで泣いてるのよ！」

「にこっち……」

希は涙を浮かべながらにこに言った。

「泣かない！私は泣かないわよ!!」

「にこっち……」

希はにこをギュッと抱きしめた。

「うっ……泣かないんだから!!!」

「ふっ……」

希は目を瞑っていたがそこには大粒の涙が溜まっていた。

にこは目をウルウルさせて……

「やめてよ……そーいうの……」

やめてよ……

うっ……うわああああああん……

うわああああああああん……」

にこは耐えれなくなり誰よりも大きな声をあげて泣いた……

「ふっ……つたく……女つてのは……泣きやすいな……あははは……みんな泣いてる顔もカワイイな……うっ……」

ナオキはみんなの方を後ろにして言った。

「ナオキ……」

絵里はナオキを背後から抱きしめた。

「絵里……」

「ナオキ……」

「ナオキくん……」

そしてみんながナオキにもたれたり、抱きしめたりした。

「みんな……」

「ナオキくんは……私たちを笑顔で支えてくれた……」

「穂乃果……」

「迷っている時など……なにかあれば相談にも……のつてくれました……」

「海未……」

「ナオキくんは……裁縫とかもできたから……衣装とかも……手伝ってくれたし……アイデアももらった……」

「ことり……」

「いつも自信が無い時に……自信を持たせてくれた……」

「花陽……」

「ナオキくんは……お兄ちゃんみたいに……安心できた……」

「凜……」

「曲を作る時も……いろんなアイデアをもらった……」

「真姫……」

「悩んでいる……ことにも……真剣に……相談にのってくれた……一緒に解決して……く
れた……」

「にこ……」

「眩しい……太陽のような笑顔で……私たちを見ていてくれた……」

「希……」

「ナオキは私にいろんなものをくれた……そして一緒にいてくれた……」

「どんなときも愛してくれた……」

「絵里……」

「みんなは声をあげて出していた涙を耐えて……ナオキに言葉をかけた……」

「くっ……うう……」

ナオキの目からも涙が出てきた……

「だから……」

「ありがとう……ナオキ（くん）……」

「（こちらこそ……ありがとう……」

穂乃果……海未……ことり……花陽……凜……真姫……にこ……希……絵里……ひぐつ……うう

……うう……うつ……うううう……」

ナオキも声を出して泣いた……

目からは涙が溢れ出ていた……

みんなはナオキを中心に引つ付いて泣いた……

その10人の涙はホームに落ち……

その10人の声は一番星が輝く空に響き……

電車が来るまでみんな泣き止むことはなかった……

帰りの電車内……………

「みんな泣きつかれたのか……………」

「そうみたいね……………」

ナオキと絵里と希以外はみんな寝ていた。

左から真姫、にこ、花陽、凜、ことり、穂乃果、海未の順番で

真姫とにこ、花陽と凜、ことりと穂乃果と海未は互いにもたれて寝ていた。

3人はドア側に立っていた。

「みんながああやって泣いてるところなんて初めて見たな……………」

「そりゃあそうよ……………」

「みたことあるなら最低よ？」

「なんでだよ……………」

「ふふっ……………みんなの寝顔写真に撮ったろか……………」

「やめろ希……………」

「あはははー、冗談やって冗談！」

「そうだ……………絵里……………希……………」

「ん？」

「どうしたん？」

「絵里と希だけだぞ……声をあげて泣いてなかったの……」

「そう？」

「そうなん？」

「ああ……だから……」

ナオキは絵里と希を引き寄せた。

「ちよつと……」

「もう……」

「さあ……泣いていいぞ……みんなは起きそうにないし……」

それに思いつきり泣きたいだろ？」

「うっ……ひぐつ……もう……また泣かさんといてよ……うう……うううっ……うう……うう」

「ううう……」

希は声をあげて泣いた……

「もう……優しいんだか……わからない……わよ……ひぐつ……うっ……うう……うう……うう……」

「うううっ……ううう……ううううう……」

絵里も声をあげて泣いた……

「ああ……泣いていいんだ……思いつきり……泣け……」

その後2人は泣きやんだ……

そして駅に近づくとみんなを起こした。

みんなでファミレスで食事をした。

さつきまで泣いていたなんて嘘のようにみんな賑やかだった。

ナオキは全員を自宅まで見送り……

そして……

香川宅……

ナオキの部屋……

「ナオキ……」

「ん？」

「その……キス……して……」

「ああ……そういや今日はしてなかったな……」

「ええ……」

「じゃ……いくぞ……」

「ええ……んっ……あっ……くちゅ……んっ……」

「はあ……んっ……くちゅ……」

「はあ……はあ……」

「絵里……」

ナオキは絵里を持ち上げ、ベッドに運び、押し倒した……

その日もお楽しみだった……

そして数日後……………

音ノ木坂学院……………

アイドル研究部……………

部室……………

穂乃果はホワイトボードにあることを書いた。

「これでよし……………」

さー！練習行こう!!」穂乃果は言った。

「うん！」みんなが声を合わして言った。

「よし！走っていくわよ！」にこは言った。

「にゃーー!!」凜は言った。

「ベベの人はわしわしMAXやでえー」希は言った。

「ふええ!!」花陽は言った。

「希！破廉恥です！」海未は言った。

「なんだよそればっか！流行語かよ！」ナオキは言った。

「ナニソレイミワカンナイ！」真姫は言った。

「穂乃果ちゃん！早くー！」ことりは言った。

「あ、みんな待つてよーー!!」

穂乃果は言った。

そしてみんな屋上に向かうのだった……

そしてホワイトボードに書かれていたのは……

『フアイトだよっ！』

ラストライブまであと1週間!』

そしてあのとき10人で撮った写真も貼ってある……

ラストライブ……

第2回ライブ！本戦はいよいよ1週間後へと迫っていた……

頑張れμ☒s!!

10人で残せる最高の結果……
優勝を目指して!!!

次回へ続く……

第47話 「決戦前夜の死闘」

前回の妄想物語！

穂乃果がみんなを呼び出したと思えば遊びに行くって言ってみんなの行きたいところ遊びに行ったの…

そして最後に海に行った…そして…

「大会が終わったら…」

μ sは…

おしまいになります!!」

それが穂乃果たちが決めた『答え』…

私たちの『答え』

私たちは涙を流した…

そして気持ちをあらたにして練習に挑むのだった…

そして…ラストライブまであと1週間…

私たちは絶対に優勝する!!

私たちが残せる最高の結果!!
これが……μsの集大成!!

「これからの予定を話すぞー」

「はい！」

「まず明日は朝から抽選会だ。」

全チームが集まって順番を決める……

そして明後日はよいよ本番だ。

昼前には会場に集合してリハーサルとかをする……以上だ」

ナオキはこれからの予定を話した。

「ナオキ……」

「ん？どうした絵里？」

「……抽選会は全チームが集まる……

ということとはあの人たちも……」

「ああ……だけでももう大丈夫だ……」

あの時はほんまに超久しぶりだったからああなったわけさ」

「そう……」

「心配してくれてありがとう……」

ナオキは絵里の頭をなでた。

「もう……」

「まーたラブラブしてる……」にこは言った。

「あの時の裁きを忘れたんかな……」希は言った。

「こえーよ……」

「あはははは……」

「ところでくじは誰が引くのですか？」海未は言った。

「うーん……リーダーだから穂乃果ちゃんじゃないかな？」ことりは言った。

「まあ……そうなるわね……」真姫は言った。

「ねえ……練習まだあー？」凜が言った。

「凜ちゃんそんなに練習したかったの？」花陽は言った。

「うん！」

「よし、なら屋上に行くかし！」

「はいー！」

みんなは屋上にむかった。

屋上……

「まずはペアでストレッチから！」

「はいー！」

ペアはお馴染み

ナオキと絵里

海未と凜

穂乃果とことり

真姫と花陽

希とここ

だ。

「ナオキって前より体やわらかくなったわね」

「そうか？」

「ええ……やっぱり基礎練習は一緒にやってるからかしら？」

「ああ……そうかもな……」

そして練習をしていき……

「よし！今日はここまで！」

「お疲れ様でした！」

「みんなバツチリだった！」

明日は最終調整だな

「よし！明日も練習がんばろー！！」

「おーー！！」

穂乃果がそう言うときみんなが声を合わせて言った。

帰り道……

「絵里……」

「ん？」

「明日は最後の……」

「……うん……そうね……」

「寂しいか？」

「……少し……そうね……」

「そっか……」

翌日……

ラブライブ！運営委員会本部……

大会議室………

奥にあるスクリーンには

『Love Live!』

と書かれている。

「それでは今からラブライブ！本戦の抽選会を行います！

まずはエントリーN^o. 1、乙姫高校スクールアイドル、『シンデレラズ』
シンデレラズの人たちは立ち上がった。

「うわぁー緊張するなぁー」穂乃果は言った。

「大丈夫だ…ただの抽選会だよ」

「うん………」

「エントリーN.O. 11、音ノ木坂学院スクールアイドル、『μ☒s』
ナオキたちは立ち上がった。

「おー!!」

パチパチパチパチ……

ナオキたちが立ち上がると周りから歓声がわき、拍手もわいた。

μ☒sの注目はA―R―I―S―Eを倒したことである程度上がったが
人気は底知れず出てきていた……

みんなこの光景に笑顔になり、

にこは目をウルウルさせていた。

そして穂乃果は前に出た……

「にこちゃんー!」

「ふえ!？」

「くじを引くのはにこちゃんだよ！」

「わ…私!？」

「ふっ…そうだな…行つてこい!にこ!」ナオキは言った。

「卒業するまでは部長でしょ?」真姫は言った。

「…よし!」にこは前に歩き出した。

「いよいよだね…」穂乃果は言った。

「ええ…」にこは言った。

「代表者前へ!」

にこは歩き出してくじ箱に手を入れ……………

「これだー!!!」

にこはくじを引いた。

「でました！47番！大トリです！」

にここが引いたのは大トリだった。

「おー！！」

周りから歓声があわいた。

「イエーイ！」

「やったー！」

みんなはハイタッチをした。

そして……

「エントリーNO. 18、大坂学園スクールアイドル、『ナニワオトメ』」

ナニワオトメは立ち上がった。

「おー！！」

さすがは関西No.1の人気だろう…

ここでもそれは健在だった…

μsにとって一番の強敵である…

「ミツヒデ…」

「代表者…前へ！」

ナニワオトメの代表者はリーダーの香川マチコだった。

「できました！一番！トップバッターです！」

「おー！！」

「よくやったな、マチコ…」

「はい…お兄ちゃん…」

そしてナニワオトメは席に戻る。

「ジャーナ…覚悟してろ……」

お前から全てを奪ってやる……

希望もな………

絶望する前に辞退したらどうだ？」

「ふっ…そんなことしないさ……」

だって勝つのはおれたちだからな………」

「言ってくれるぜ………」

まあ…本戦で叩き潰してやるよ………」

「ああ…見させてもらおうよ……」

お前が育てたナニワオトメを………」

「ちっ…あんま調子にのんなよ？」

前も言ったがおれはお前が嫌いだ……

ウチんとこの生徒も教師もみんな……

わかっているよな？」

「ああ…わかっているさ………」

最初は驚いて倒れたりしたが………

もう大丈夫だ……………」

「ふっ……………ふははははは……………」

おもしれえ……………」

お前を……………μ□sを叩き潰すのが楽しみだ……………」

「そうだ……………いくつか言いたいことがある……………」

あとで話そう……………」

「つたく、仕方ねえーな……………」

「ああ……………」

ミツヒデは席へと戻った……………」

「これで抽選会を終わります！

それでは明日、頑張ってください!!」

パチパチパチパチ……………」

「で、ジャーナ…話ってなんだ？」

ミツヒデとナオキは話していた。

「ああ……まずは……」

おれの大切な人を傷つけたら……

手を出したら……

絶対許さない……」

ナオキはミツヒデを睨んだ。

「っ………（なんだ……こいつの目は……）」

ふっ……それで？

それだけか？……」

「まだあるぜ……」

おれは……

お前のことは嫌いだが恨んではない……」

「は？」

「それだけだ……」

すまん……明日……

お互いに頑張ろう……健闘を祈るよ」

「なぜだ……」

「あ？」

「なぜ……なぜお前は嫌いなやつにそこまで気を使えるんだ!!」

気に入らねえ……ウザつたらしいんだよ!!」

「そうか……ならそれでもいい……」

おれはただ……『旧友』にむかって言葉をかけたただけだ……」

「『旧友』……だと……」

「ああ……『旧友』だ……」

「おれは……」

おれは1度もお前を友達とは思ったことはねえぞ!! (これでまたあいつは……)」

「ふっ……やつぱりか……」

「な……に……(こいつ……)」

「そんな予感ほしてたさ……」

だがおれはミツヒデのことは友達と思っていたよ……

それじゃ……」

「待てよジャーナ!!」

「なんだ?」

「絶対に……叩き潰す!!!」

「ああ……」

やれるもんならやってみろ!!」

「やってやるよ……」

お前から全てを奪うために!!」

「ふっ……変わんねえーな……」

ナオキはそう言い残してその場を去った。

ドン!!

「くそっ!!調子にのりやがつて!!」

ミツヒデは壁を叩いた。

ナオキは廊下を歩いていった。

「ナオキ先輩!!」

「!?……マチコ……」

マチコが声をかけてきた。

「お久しぶりです……」

「ああ……久しぶり……」

「元気にしてたか?」

「はい……確かに辛いです、

真姫ちゃんやナオキ先輩たちに必ず会うって思って頑張ってきました！」

「そうか……」

で、なにか用事？」

「はい……謝っておきたくて……」

「謝る？」

「その……顔合わせの時は……」

申し訳ありませんでした!!」

マチコは頭を深く下げた。

「頭を上げてくれマチコ……」

それにおれも謝らなきゃいけない……」

「え？」

「おれは……お前も裏切ったんじゃないかって思ってた……」

でも違う……目を見てわかったよ……」

「疑うのも無理はありません……」

あんなことが……あつたんですから……」

「ああ……」

でも、ほんまにごめん!!」

ナオキは頭を深く下げた。

「そ…そんな！ナオキ先輩！

頭を上げてください!!」

「ありがとう……」

明日……お互い頑張ろう……」

ナオキは右手を出した。

「はい！」

マチコも右手を出してナオキと握手した。

「絶対負けないからな」

「それはこちらのセリフですよ…」

ナオキ先輩」

そして音ノ木坂学院……

アイドル研究部部室……

「ふふふふ……」

にこが鼻を高くして腕を組んで座っていた。

「にこちゃんすごいにゃー!!」凜は言った。

「あ……当たり前でしょ！私を誰だと思ってるの？

大銀河宇宙No.1アイドル！

にこにーにこちゃん……よ♡

ぶはっ……緊張したあ……」

「でも一番最後……それはそれでプレッシャーね……」真姫は言った。

「でも私はこれでよかったと思う！」

だってずっと目標にしてきたラブライブに出れて歌えるんだよ！しかもその最後！」

穂乃果が言った。

「そうやね……μ'sがその力を持ってたんやと思う……

カードもそう言うてるしね……」希は言った。

「ちよつと……私が引いたんだけど」

にこは言った。

「はいはい…そうね……」真姫は言った。

「偉いことや偉いことや」凜は言った。

「扱い雑!？」

「ははははは……」ことりは笑っていた。

「さ、練習行こうか!」ナオキは言った。

「はい!」

みんなが部室から出ていった。

「ちよつと!?!もうなによ……」

「大丈夫だよ」

「花陽……」

「みんなあんなこと言ってすごく感謝してたから……」

「わかってるわよ……」

最後まで……いつもの私たちでいようってことだしよ?」

「うん!」

「さ、練習行こうよ!」

「うん!」

そのころナニワオトメは……

「一番最初か……」ヤマトは言った。

「それはそれでプレツシャーやなあー」ユキは言った。

「ふっ……一番最初で良かったじゃねーか……」

他の弱い奴らにナニワオトメの強さを見せつけられる……」ミツヒデは言った。

「ま、いつも通りやれば大丈夫やって」斉藤は言った。

「いや……いつも通りじゃダメだ……」

いつも以上に……これまでよりさらに上のライブをしろ……」
「ミツヒデくん……」 佐藤が言った。

「絶対……ジャーナを……」

μ s を叩き潰す……」

音ノ木坂学院……

屋上……

「よしーラストーー!!」

ワン・ツー・スリー・フォー・ワン・ツー・スリー・フォー・ワン・ツー・スリー・フォー
フニイーツシュ!

よし！完璧だ！！

休憩して次は曲を流してやろうか」

「はい！」

「ふうー疲れたあー」穂乃果はマットに座った。

「はいよ、ドリンク」ナオキがクーラーボックスからドリンクを出して穂乃果に渡した。

「ありがとうございます」

「海未とことりも」

「ありがとうございます」

「ありがとうございます」

「どうにや！」凜がくるっと回って言った。

「すごいよ凜ちゃん！」花陽は言った。

「なにしてるのよ……」真姫は言った。

「なにしてんだよ……」

「はいよ、ドリンク」

ナオキは倒れた。

「ナオキ!？」

「きつとえりちが可愛すぎて倒れたんよ」

「可愛かったぜ……ハラシヨー!」

「もう……」

「穂乃果ちゃん!」

「ふえ?」

「寂しがっちゃダメ!

今はライブに集中!」

「そうだね……でも……」

「でも……なんですか?」

「ギュー!!」

穂乃果は海未とことりを抱きしめた。

「どうしたんですか!？」

「急に抱きしめたくなった!」

「私もー！ギューーー!!」

「穂乃果ー…ことりー…」

「あ！穂乃果ちゃんたちギューしてるにやー！かよちん！真姫ちゃんも！」

「ふええ!!」

「ちよつと凜！」

「面白そうやん！ナオキくん！えりち！にこつちも！」

「はあ!？」

「ちよつと希」

「なんでにこまで!？」

「ギユギユギユ…」

「ギューーー!!」

「ウチらも入れてー!!」

「凜たちもー!!」

「ちよつ…まつ…まつ…引つ張るな！うおあ!？」

ナオキは希に引つ張られつまずいた。

「きやあ!？」

「……っ……あれ？痛くない……っ……ぶほっ!?」

今の状況を説明しよう……

ナオキはつまずいて、こけて、みんなを巻き込んで

ナオキの上や下にみんながいる……

ナオキは2年生がギューしていたところにダイブしたので顔まわりには2年生の胸がある。

さらに左手では希の右手では花陽の胸を掴んでいた。

さらに絵里とにこと真姫と凜がナオキにのっかっている。

「……………おれは悪くないからな」

みんなの顔が赤くなる。

海未と花陽は意識がないようだ。

「はやくどいてよおー」穂乃果が言った。

「まずはおれの上にいる人たちがどいてくれないと……」

「あ、ごめん……」上からどいたのは絵里とにこと真姫と凜だ……

「よいしょ……いやあーすまんかったなみんな……」

「ナオキ……………」

「ナオキくん……………」

「は…はい！」

「正座……」

「はい……」

ナオキは正座させられることになった。

「だからナオキはいつもいつも！」

真姫は怒っていた。

「いやだからあれは不可抗力でな……」ナオキは言った。

「問答無用！絵里にだけならまあいいとして」

「いいんだ……」

「私たちにまで……」

覚悟は出来てるんでしょね？」

「あははははは……」

「はっ!? 私は何を!？」

「ふえ? 何があつたんだっけ?」

海未と花陽は目を覚ました。

「あ、思い出しました!

ナオキ! 破廉恥です!!」

「目覚めてそれか!!」

そしてみんながナオキを囲む。

(こ……殺される?……)

「ナオキには……」

「ゴクリ……」

「ナオキには明日のラストライブは最高のライブにしてもらおうわ！
ちゃんと私たちを輝かせなさいよね！」

「ほえ？」

みんなの顔は笑顔だった。

「……ああ……わかった……」

明日は……みんなをこれまでで一番輝かせるよ!!」

「うん！」 みんなは声を合わせた。

そしてそれからはより一層練習に励むのだった。

「よし！練習はこれで終わりだ！」

「お疲れ様でしたー！」

校舎前……

「あーあ……もう練習終わりなのかー……」凧は言った。

「仕方ないよ凧ちゃん……」花陽は言った。

「そうよ……明日に疲れを残しちゃいけないからね」絵里は言った。

「じゃあ明日！みんな時間間違えるなよー

とくに穂乃果！凧！」

「なんで私たちなの!？」

「そうにやそうにや！」

「ま、各自連絡を取り合えばいいことだけだな……」

「はい、では穂乃果のところには私が電話しますね」海未が言った。

「凧には私が」真姫が言った。

「遅刻なんてしないよ！（にゃ！）」

みんな笑った。

そして信号が青になってみんなが横断歩道を渡ろうとした……

「あっ……」

「どうしたの？花陽ちゃん……」

花陽が急に立ち止まった。

「もしかして……みんなで練習するのって……これが最後なんじゃ……」
「あっ……」

そう、10人で練習するのはこれが最後だった……

ナオキは頬をポリポリかいた。

青だった信号も赤に変わった。

「そうやね……」

「って……ナオキと絵里はわかって言わなかったんでしよう？」真姫は言った。

「そうか……ごめん……」花陽は言った。

「ううん……いいのよ……」

私も考えちゃってたから……」絵里は言った。

「ああ……おれもだ……」

ナオキは笑いながら言った。

そしてみんな振り向いた……

2人を除いて……

「ダメよ！ラブライブに集中！」

「そうだ……本番は明日だぞ……」

「ええ……わかつてるわ！」

信号が青になった。

「じゃ、行くわよ……」

にことナオキが歩き出した……

だがみんなは立ち止まったままだ。

「なにいつまでも立ち止まってるのよ？」

「……………」

「じゃ、神田明神に行こうや……

みんなでさ」

そしてみんなは神田明神にむかった。

神田明神……

「……………」

みんなは手を合わせていた。

「これでやり残したことはないわね！」にこは言った。

「うん！」花陽は言った。

「こんなに一遍にお願いして大丈夫だったかな？」凜は言った。

「平気だよ！」

だってお願いしてることはみんな一緒でしょう！」穂乃果は言った。

「え？」

「言葉は違ったかもしれないけど……」

みんなのお願いいって一つだけだったような気がするよ！」

「そうね……」絵里は言った。

「じゃあもう一度……」希は言った。

「よろしくお願いします！」

そう……

みんなの願いは1つ………

『最高のラストライブができますように』

「じゃあ今度こそ帰ろうか」ナオキが言った。

「また明日！」穂乃果が言った。

「うん……」花陽は寂しそうな顔で言った。

「もう……キリがないでしょう……」真姫が言った。

「そうよ！さっさと帰るわよ！」にこは言った。

だがみんな少し寂しそうな顔だった。

そう……みんな……

別れの挨拶をし、

まずは絵里と希とにことナオキが、

次に穂乃果と海未とことりが帰っていった。

「ほら、私たちも」

「明日また全員そろおうよ」

「うん……」

1年生が階段を降りると……

「あれ……にこちゃん？」花陽は言った。

「なんでまだいるのよ……」にこは言った。

「それはこっちのセリフ！」真姫は言った。

「あれ……みんな……」穂乃果は言った。

「穂乃果ちゃん……どうしたの？」

「えつと……なんか……」

「まだみんな残ってるかなーって……」

「だよね！」

「どうするの？これじゃあいつになっても帰れないわよ！」

「うーん……」

「それじゃあさ！合宿しようよ！」穂乃果が言った。

「ここで？」希が言った。

「違うよー！学校で！」

「学校!?」みんなが声を合わせた。

「でもさ、学校で合宿するには結構前から許可が……あ……」

みんな考えることは同じ……

みんなことりの方をむいた。

「ジ……」

「えっえっ!!」

「ことりさん……おなしやす!!」

「おなしやす!!」

ナオキが言うのとみんながことりに言っただけで頭を下げた。

「わ…わかった！お母さんに言ってみる！」

そして音ノ木坂学院……

「ことり様!!」

ありがとうございます!!!」

ナオキは土下座した。

「え…えーつと…えっへん！」

「面を上げえー」

「ははっ……」

「てかまじことりありがとうございます」

「ううん、全然いいよおー」

（いつも思ってたことだがことりの声はなんだかふわふわしている……
なんだろう……癒されるな……）

「さ、みんな先シャワー室行ってこいよ。」

おれ布団敷いとくからさ」

「わかったわ！」

さ、みんな行きましょう！」絵里は言った。

「そっやね……」

ナオキくん覗いたらアカンでえー」

希は言った。

「えっ!？」

ナオキ!!破廉恥です!!」

「覗かねえーよ!!」

「それじゃ、行ってくるねー!」穂乃果は言った。

「おう!」

9人はシャワー室へとむかった。

「さ、布団敷くか！」

およそ30分後…

ナオキは10人分の布団を敷いた。

「……よし！こんなもんだろ……」

ガラガラガラ……

「ただいまー!!」

「おっ、来たか！」

「にやにやにやー!!」

「うお!？」

凜がナオキに飛びついてきた。

「捕まえたにやー!!」

「な……なにしてんだよ凜!!」

(い……いい匂い……シャンプーの匂いか……)」

「お……おれもシャワー室行ってきていいか……」

「あ、うん！」

凜はどいた。

「あれ？絵里は……」

「えりちは今お花摘みに行ってるよ」希は言った。

「お花摘みに？……こんな夜に……風ひかないといいけど……」

「ナオキ……」海未は呆れた顔で言った。

「ん？……まあ行ってくら」

「いってらっしやーい」

ガラガラガラ……

ナオキはシャワー室へとむかった。

シャワー室……

更衣スペース……

「しっかし……学校にシャワー室ってあるんだな……」
ナオキは服を脱いでシャワー室内へと入っていった。
ここのシャワー室は何個もの個室が連なっている。

だが……

シャワー……

(ん？おいおいおいおいおい!!!)

シャワーの音聞こえますけど……)

聞こえてくる聞き覚えのある鼻歌……

「ふんふんふんふんふんふん……」

(この声は絵里!?)

キュツキュツ……

(やべえ!?出てくる!!どうしようどうしよう!!)

ガチャ……

「ふうー気持ちよかった……つて……ナオキ……う？」

「よ……よおー絵里……入ってたんだな……希がないって言ってたから入ったんだが

……」

「……………」

「いやあーあはははははは……」

「じゃ、おれ入るわ」

ナオキは個室へとはいつていった。

「ナオキ……」

「はい！（やばいやばいやばい……怒られる……）」

「……エツチ……」

「……すまん……」

「今回は希に騙されたみたいだし……ま、でも裸なんてナオキに何回も見られてるし？
触られてるし？」

別に今日見られたぐらいで怒らないわよ」

「そ……そうか……」

「でも……」

「でも？」

「またなにか奢ってね！

ナーオーキーくん！」

「は……はい……（怒ってんじゃん……）」

「じゃ、私は行くわね……」

ゆっくりして……」

「ああ……」

絵里はシャワー室内から出ていった。

ナオキはシャワーを浴び、体や頭を洗って出た。

その間約5分……

「ふう〜スッキリした……」

「ってなんでまだいるんだよ……」

「え……」

まだ絵里は着替えていた。

「えーつと……なんかごめん……」

「う……うん……」

ナオキは着替え始めた。

(た……耐えろ……おれの性欲……耐えるんだ……)

「ねえ……ナオキ……」

「ん？」

「実は……ナオキが……来てくれて少し安心してるわ……」

「覗いて欲しかったのか？」

「そ……そうじゃなくて！」

その……廊下……暗いし……」

「ああ……なるほど……」

「一緒に帰ってね……」

「わかってるよ……」

そして絵里とナオキは一緒に部室へ帰った。

「ただいまー」ナオキが言った。

「……………」

（あれ……みんなの目が怖い……）

「ど……どうしたのよみんな……」

そんな目をして……」

「2人とも……シャワー室で何やってたんですか……」海未が言った。

「そうだ！おい希！絵里入ってたじゃねーか！」

「あははははー……それより何やってたん？

一緒に帰ってきて……」

まさか……夜の営みを……」

「してない!!」ナオキと絵里は声を合わせて言った。

「ほんとですか……」

「ほ……ほんとうだ!」

「そ……そうよ! ナオキはただ私の裸を見ただけよ!」

(地雷を踏んだ気しかない……)

「はははははは裸を!!!」

はははははは破廉恥です!!!」

「絵里の裸は何回か見てるわ!!

……あ……」

「……………」

空気が固まった……

「そうなんやね……ごめんやで……」

「真面目に謝るなー!!」

そしてナオキは説教されるのだった。
(なんでだよ……………)

「はいはいご飯できたわよー」にこがフライパンを持って入ってきた。

「あ、にこが作ってたのか」

「まあね……………」

それより家庭科室のコンロ、火力弱いんじゃないの？」

「おー!!麻婆豆腐!!」穂乃果は言った。

「花陽ー、ご飯はー?」

「炊けたよー!!」

花陽が炊飯器を持って出てきた。

「そして凜はラーメンも!」凜はラーメンの皿を出した。

「いつの間にか持ってきたのよ…」真姫が言った。

「はやく飯ー！！」ナオキは言った。

「ふふっ…それじゃ、ご飯にしましょう！」絵里は言った。

飯なう

「うめー！！やっぱりにこは料理うまいな！！」ナオキは言った。

「当たり前でしょ！」にこは言った。

「もう…ナオキほっぺにご飯粒付いてるわよ…」絵里は言った。

「ああ…ありがとう…」

ナオキはそれをとって口に運んだ。

「おかわり！」

「私も！」

「花陽とナオキってこれでご飯何杯目？」

「うーん…5杯目？」

「おれは6杯目だな」

「追加で炊いておいてよかったですね」海未は言った。

そしてみんながご飯を食べ終わった。

「いやあー食った食った！」ナオキはお腹を叩いて言った。

「お粗末さま」にこは言った。

「でもまだ食い足りん……」

「ナオキは食べすぎ……」真姫は言った。

「そういや菓子とか持ってきてたな……あとで食おう」

「おつ、いいねいいねー!!」穂乃果は言った。

「学校でお泊まりって楽しいにやー!!」凜は言った。

「ねえねえ今つて夜だよね！」

「そうだけど……それがどうしたのよ？」にこが言った。

「わー!!」穂乃果が窓を開けた。

「なにやつてるのよ！寒いじゃない！」

「なんだか夜の学校ってワクワクしない？」

「そ……そうかしら……」絵里が少し震えながら言った。

「あとで肝試しとかするにやー！」

「え!?!」

「お前……お化け屋敷であんなけびびつといてよく肝試しとか言えるな……」ナオキが言っ

た。

「あ、あれは別だもん！」

「でも肝試しって楽しそうやね！」

とくにえりちは大好きだもんねー」

「ちよつと希！」

「絵里ちゃんそうなの!?!」

「い……いやあ……それは……」

真姫は部室の電気を消した。

「うっ……ナオキー」

絵里はナオキに抱きついた。

「うお!?!……よしよし……」

「絵里ちゃんもしかして……」花陽は言った。

「暗いのが怖いのですか？」

ぶっ……」海未は言った。

「海未があんな笑い方を……」ナオキはボソツと言った。

「イヒヒー、新たな発見やろー?」

「希ー!!もう……真姫！」

「はいはい……………」

「あ、待って！」穂乃果は外を見ていった。

「ん？どうした？」ナオキは言った。

「星…………綺麗だよ……………」

「ほんとだー」ことりは言った。

「ねえ…………屋上…………行ってみない？」

そしてみんなは屋上へとむかうのだった。

廊下…………

「うう…………離さないでね……………」

「わかってるよ……………」

絵里はナオキにしがみついていた。

「こんな時でもお二人さんはラブラブやねー」希は言った。

「うっせー…………」ナオキは顔を赤くした。

「ほらー！はやくはやくー！」穂乃果は屋上の入り口から言った。

屋上……

「ここ……のぼるのか……」ナオキは言った。

「うん！こつちの方が綺麗に見えるし！」穂乃果は言った。

「ナオキは先に行ってくださいね」海未は言った。

「なんでだよ……おれは最後でいいよ」

「いいことありません！」

「なんでだよ……」

あ………そっか、おれが最初に行ったら見えちゃうからな……」

「そうです！わかったならばやく行ってください！」

「わかった……わかったから……」

ナオキはのぼっていった。

「うわあー高いな……」ナオキはビビっていた。

そして続々とみんながのぼってきた。

「わー綺麗だねー」穂乃果は言った。

「そ……そそそそうだな……あはははは……」

バレバレである……

そしてそんなナオキの背後に希が迫ってきた。

「……………わっ!!」

「ぎゃああああああああああああああああああ!!」

ナオキの叫び声が夜空に響いた。

遠くからは犬の鳴き声が聞こえる。

「ナオキくん……………びつくりしすぎだにや……………」凛は言った。

「お…おれは高いの苦手って知ってるだろ!」

「わ……………綺麗だね……………」花陽は言った。

「そうね……………」にこは言った。

みんなの目の前に広がるのは夜の街の明かり……………

「光の海みたい……………」ことりが言った。

「このひとつひとつが…みんな誰かの光なんですよね……………」海未が言った。

「その光の中でみんな生活して……………」

「喜んだり……………悲しんだり……………」絵里は言った。

「この光の中にはきつと…私たちと会ったこともない…話したこともない…触れ合う

きつかけもなかった人たちが沢山いるんだよね…」穂乃果が言った。

「でも……………繋がった……………」にこは言った。

「スクールアイドルを通じて……」希は言った。

「歌を通じて……」真姫は言った。

「うん……」

偶然流れてきた私たちの歌を聞いて……

何かを考えたり……

ちよっぴり楽しくなったり……

ちよっぴり元気になったり……

ちよっぴり……笑顔になってるかもしれない……」

「素敵だにゃー……」凜は言った。

「だからアイドルは最高なのよ……」にこは言った。

「おれも……みんなの歌を聞いてなかったら……この場にはいないかもしれない……

みんなとも今こうして楽しく毎日を送っていなかったかもしれない……

でも繋いでくれたのは……

歌……

あのとき穂乃果と海未とことりの歌を聞いて……

そしてオープンキャンパスの日に9人の歌を聞いたから……

おれは今こうしている……

歌を聞いてなかったらおれは今こうしていないだろうな……」ナオキは言った。

そして雲が風に流され、満月が顔を出した。

「わー」みんなが声をあげた。

「私！スクールアイドルやって……」

よかったー！！！！

穂乃果が叫んだ。

「穂乃果!?!急にどうしたんだ」ナオキが言った。

「だって……そんな気分なんだもん！」

みんなに伝えたい気分……今のこの気持ちを!!

みんなー!!

明日精一杯歌うから……聞いてねー!!

そしてみんな顔を見合っとうなずき……

「みんなー!!」

聞いてねー!!

そしてみんなで叫んだ。

「さ、部屋に戻りましょう」絵里は言った。

「そうやね……」希が言った。

「ナオキは戻らないのですか？」海未は言った。

「い……いや……おれは……」ナオキは言った。

「もしかして降りるのが怖いにや？」凜は言った。

「……………」

「え……」

ナオキが降りるのを拒んで結局降りたのは5分後だった……………

部室……

「合宿なんだしき、なにかして遊ぼうよ！」穂乃果が言った。

「そうだな……合宿……枕……」

あ、枕投げなんてどうだ？」ナオキが言った。

「え……………」ナオキと海未以外のメンバーが言った。

「ん？おれなんかまずいこと言ったか？」

「い……いや……別に……」真姫は言った。

「そうか……なら海未！おれと勝負だ!!」ナオキは枕を持って立ち上がって言った。

「えー!!」海未とナオキ以外のメンバーが言った。

「ナ……ナオキ！悪いこと言わないわ！やめときなさい！」絵里が言った。

「そ……そうやで！ナオキくんの命を無駄にするようなことはせんでええねんで！」希が言った。

「何言ってるんだ？枕投げに命を無駄にするって……大袈裟だ……」

さ、海未！勝負だ!!」

「これはもう……ダメね……」にこは言った。

「いいでしょう……」

受けて立ちます！」

そして2人以外は端の方に固まって座った。

海未とナオキは1個ずつ枕を持っていた。
周りには補充用の枕がいくつもある……

「ぐや……………」

「勝負です!!」

最初に投げたのは……

海未だった……

ビュン!!!

みんなの脳裏には夏合宿のときの恐怖の枕投げの光景が蘇る。

……………超音速枕……………

何人もの犠牲者をだした……

あの枕投げ……………

そこで寝起きの海未が放つたもの……

それは今の状態の海未でも放つことができるのだ……

みんなナオキが負けたと思った……

ガシツ……

シュー……

「ふうー……」

「え……」ナオキ以外のみんなが声を合わせた。

「ウソ……」穂乃果が言った。

「海未ちゃんの超音速枕を……」ことりが言った。

「とめた……」凜が言った。

「しかも片手で……」希が言った。

「ハラショー……」絵里が言った。

「私のあれをとめるとは……」

「さすがナオキです……」海未は言った。

「えへへ……さすが海未だな……」

「さ、次は俺の番……だ！」

ピュン……

ナオキは枕を投げた。

「遅いですー！」

ササツ……

海未は避けた。

その枕は海未の超音速枕には到底及ばない……

だが……

攻撃回数は圧倒的にナオキの方が多い……

ピュンピュンピュンピュンピュンピュンピュンピュンピュンピュンピュン
ピュン………

ナオキは走りながら枕を投げては拾い、拾っては投げの連続だった。

「よっー！」

ナオキは海未の動く方向を予測しそこへ枕を投げた。

「しまった!？」

ドテツ……

海未はこけた……

そして………

「チェックメイトだ……海未……」

ナオキは海未の真正面……

ナオキは海未に軽くまたがり、

左手は海未の顔のすぐ横に……

右手では枕を持ち、顔のすぐ近くで枕を振りかぶった。

「くっ……私の……負けです……」

ナオキはその言葉を聞くと海未から離れた。

「おー!!!」

パチパチパチパチ……

「ナオキくんすごいにやー!」凜は言った。

「いやあーそれほどでも……」ナオキは言った。

「さ、寝ましようか」海未は言った。

「そうだな……ふわああああ……動いたら眠たくなつた……」ナオキはアクビをして言った。

布団は

グラウンド側には

上から穂乃果、ことり、凜、花陽、希

廊下側には

上から海未、真姫、にこ、絵里、ナオキ
という順番だった。

「ねえ……ナオキ……」

「ん？」

電気も消え、暗くなって絵里はナオキに小さな声で話しかけた。

「手………繋いでて………」

「ああ………」

ナオキは左手を出して、絵里は右手をだしてナオキの手を握った。

「ありがとう………」

「別におれの布団の中に入ってきてもいいぞ？」

「そ……そんなことしたらまたみんなになにか言われるでしょう……」

「そうか………」

「じゃ……おやすみ……ナオキ……」

「ああ……おやすみ……絵里……」

そしてみんなは眠りについた。

はずだった………

数分後……

(絵里……そろそろ寝たかな……)

みんなも……寝てるか……よし……)

ナオキは起き上がって隣の部屋にむかった……

次回へ続く……

第48話「夢の中でMUSIC S.T.A.R.T!!」

「よし……やるかー!」

ナオキはみんなが寝ている隣の部屋で本戦で歌う曲を聞きながら音響やライトなどのタイミングなどを確認していた。

「うーん……ここは……このライトを照らして……そうだ!ここでこうすれば……ハ
ラシヨー!……おっと……みんな……起きてないよな……」

ナオキはそーつとドアを開けてみんなを見た……

みんなぐっすりと寝ていた。

「ふう……」

ナオキはまた机にむかって座った。

「ふんふんふんふんふんふん……」

ナオキは本戦で歌う曲を聞いて鼻歌を歌った。

ウトウトウト……………

「やべえ……………眠くなってきた……………」

ナオキはそのまま寝てしまった……………

「……………オキ！ナオキ!!」

ナオキの名を呼ぶ……………誰か……………

「はっ!?……あれ……寝てた?」

ナオキは屋上で寝ていたのだった…

「もう…いくら待ってるのが暇だからって寝ることないじゃない…」

その声の主は絵里だった……

「ああ……みんな揃ったのか?」

「うん、もう……何回も呼んでるのにー」

絵里は頬を膨らまして言った。

「ごめんごめん……かわいいな……」

ナオキは立ち上がって絵里の頭をなでた。

「もう……」

「お二人さんはラブラブやねえー」希は言った。

「さ、はやく練習するわよー」にこは言った。

「はい! ナオキには後で説教を……」海未は言った。

「なんでだよ!!」

「まあまあ……」ことりが言った。

「あれ? 真姫ちゃんは?」穂乃果は言った。

「あ、真姫ちゃんは今日はお休みしてるの」花陽は言った。

「そうなんだにやー……」凜はがっかりした顔で言った。

「凜……そこまで……」

ナオキは感動した……

が……

「からかう相手がいなかったからつまんなかったにや……」

「そつちか……」

感動したおれが馬鹿だった……

あの感動を返せ……」

「あー！それじゃあさ、今日はこれでおしまいにして真姫ちゃんの御見舞に行くのはどう

かにや？」

「おつ、それいいね！」穂乃果は言った。

「いけません！日々の鍛錬を怠っては」

「むー……」

「まあまあ……たまにはこういうのもいいんじゃない……」

「「そうだよそうだよ!!」」穂乃果と凜は声を合わせて言った。

「ついでに途中でパフェ食べたり……」

アイス食べたり……はっ!? ラーメンも捨て難いにやー……ジュルリ……」

「これ御見舞だから!!」

花陽は凜を叱った。

「にや…にやあああああ……」

「でもそうしよう！」

照れてる顔が目浮かぶ……ウフフフ……」希は言った。

「えー……本当に行くのー……」

「しようがないわねー……」にこは言った。

「お願い…はやく元気になって戻ってきて……」

希がにこの耳元で言った。

「ちよつとなに勝手に!?!」

「心の声を言ったまでや」

「バカバカバカバカバカバカバカバカ……」にこが希の胸を叩きながら言った。

「ウフフフフ……」

そして屋上の柵の上に座る少女が一人……

その少女の赤い髪は風によりなびいていた。

校舎前…

そしてみんなは真姫のところに御見舞に行くために歩いていった。

みんな仲良く話していた。

「ねえ！ちよつとだけ寄り道していかない？」希は言った。

「ええ!?御見舞に行くんですよ？」海未は言った。

「さつき差し入れ持っていけば喜ぶんじゃないかって話してたのー」ことりは言った。

「ああ…それはいいですね！」海未は言った。

「それなら…私がお金を出しておくわ」絵里は言った。

「いやいや…おれが出しておくよ」

ナオキは言った。

「そう？なら…あ…あ…」

「どうしたの？」穂乃果は言った。

「ちよつと忘れ物しちゃって……」

「なにを？」

「明日授業でやるところの教科書……家で予習しようと思つてたのに……」

「予習!」

「すごい……私……したことない……」

穂乃果はとても驚いた顔で言った。

それを睨む海未であつた……

「(あーあ……こりやあ……穂乃果は海未にしごかれるな……)」

あ……おれ……財布置いてきたみたいだわ……」ナオキは言った。

「2人して忘れ物なんて……仲良しですなあー」希は言った。

「うっせー……つたく……絵里、一緒に取りに行こうか」

「そうね……みんなは先に行つてて」

「ええよ……ここで待つとくから」

「そうか? すぐ戻ってくるわ!」

2人は走つて行つた。

その校舎内に走る少女が1人……

2年生教室……

「すまん……おれの教室から先で……」

「いいのよ……そっちの方が近かったし」

「しっかしあれだな……今日は人少ないな……」

先生も職員室にいなかったみたいだし……

他の生徒も……」

「そうね……さ、行きましょう！」

「おう！」

2人は絵里の教室へとむかった。

3年生教室……

「あった……」

絵里は教科書をカバンに入れた。

「さ、はやく戻ろうか」

「ええ！」

そして2人は人の気配を感じた……

「えっ……」

「誰がいる……？」

「そんな……まさか……不審者……」

「……っ……絵里……離れるなよ……」

「うん……」

2人は恐る恐るドアの方に近づいた……

「絵里はここにいろ……」

「うん……」

「誰だ!!」

ナオキはさつと教室をでた。

そして階段を降りる人影……

すると周りは急に暗くなり……

不思議なライトが辺りを照らした……

「ハラショー……」

2人は声を合わせて言った。

「なにかが変だ……」

絵里……絶対に離れるなよ……」

「うん……」

2人は息をのんだ……

そして階段にむかって歩き、ナオキがそこに誰もいないことを確認すると2人は走って降りた……

人影は歩いていた……

そして階段を降りて壁からそつと人影が歩いて行った方向を見た。

人影は歩いていた……

「絵里……この先は確か直線だったな……」

「ええ……」

「走るぞ……」

「うん……」

ナオキは絵里の手を握って走った。

その人影は踊るように進んで行った。

そしてその人影を追って直線の廊下を走った。
「待て!!」

すると周りが真つ暗になった……

上にある丸いライトだけが照らしていた。

「なっ!?!」

「え!?!」

そしてその暗闇の先に見える……光……

2人はそこにむかって走った。

「女の子!?!」

「赤い髪……」

その少女はその光にむかって走っていき、そしてそこへ飛び込んだ。

そして伸びるいろんな色の線……

その少女はまっすぐ前を見つめ……

その光の先へと……

2人もそこを指して走った……

そしてその光をくぐると真っ白で気づくと2人は外へと出ていた……
そこにはみんながいた。

「はあはあはあ……」

「あ、帰ってきた！」穂乃果は言った。

「大変だよ！急に夜になっちゃった！」凜は言った。

「私たちも……急にあたりが暗くなっちゃって……」絵里は言った。

「なんだ……これ……明らかに変だぞ……」ナオキは言った。

「確かに……こんなの普通じゃない……私たち……夢見てるんとかやう？」希は言った。

「やめてよ……こんな時まで……」絵里は言った。

「ナオキ……」

「どうした海未？」

「失礼します……」

「え？なにを……つて……ほっぺつねるな！痛いって……あれ？

……痛く……ない……」

「「「「「ええ!」」」」」」

「痛くないって……夢なんじゃない！」にこは言った。

「そっだよー！」

そしてナオキと絵里の背後から聞こえてきた……少女の声……

そして……みんながその少女をみて驚いた……

なぜなら……

『うふ……』

「うふ……」

みんなはその顔をあげた少女とここにいない人物が重なって見えた……

「はじめまして！」その少女は言った。

「はじめ……まして……」穂乃果は言った。

「お兄ちゃんとお姉ちゃんたち面白いね！いつも仲良さそう！」

「そ…そんなことないです！」海未は言った。

「そんなことなくないー！」ことりは言った。

「い…いや……そんなつもりでは……」

「うふふふ……やっぱりおもしろーい！」

「こ…これって……」凜は言った。

「時間が戻っちゃったのお!？」花陽は言った。

「く…悔しいけど……私よりかわいい！」にこは言った。

「小さいころの真姫にそっくりだ……いや、そっくりというか……」ナオキは言った。

「ねえ…あなたはどこからやってきたの？」

「本当に……ここは夢の中?」穂乃果はしゃがんで言った。

「うふふふ……うん！」

「終わらない…パーティーのね！」

「みんなが不思議に思った……」

『終わらないパーティー』

「終わらない…パーティー？」絵里は言った。

そして少女は目を瞑った……

すると校舎のむこうから花火があがった。

ヒューーーーー…ドーン!!

みんなは声をあげた。

その後も何発も何発も花火があがった。

そして少女は後ろをむいた。

「綺麗でしょう?」

「うん!」

「あのね…私…」

お兄ちゃんやお姉ちゃんたちのことずっと前から知ってるよ!

10人になる前から……

まだみんなバラバラだったところから!

「どうしてなんだ?」ナオキは言った。

「だって…私…」

ずっと……ずっと……
ずっと……」

すると少女は光に包まれた。
そしてその少女は……

みんなが知っている真姫になった……

真姫は目を覚ますとみんなが真姫の方を見つめていた。

「みんな？」

「す……すごい……すごい……すごい……すごい!!すごいよ!!真姫ちゃんマジックが使えるなんて！」

新しいアイドルのカタチだよ！」穂乃果は言った。

「何の話？」真姫は言った。

「びっくりしたわよ……」絵里は言った。

「そうだぞ……心配したんだからな」ナオキは言った。

「え……ごめん……」

「謝ることないよ！」

「ふふつ……でもこれって……全部本当に……誰かさんの夢の中なのかもしれないわね……」絵里は言った。

「夢？」真姫は言った。

「ああ……さつき海未につねられても痛くなかったしな……」

「ふーん……失礼……」

プニーン

「だーから痛くないって……」

「そう……つまんないの……」

「おいまして真姫、『つまんない』ってどうゆう意味だよ……」

「そのままの意味だけ……」

「おいおい……」

「」「」「」「あはははははは……」「」「」「」

みんなが笑った。

「ねえねえ真姫ちゃん！さっきはなんて言おうとしたの？」穂乃果は言った。

「え？」

「ずっと……なにを思っていたの？」

「いや……その……」

真姫は少し顔を赤くして空を見上げた。

「おっおっ、なんだ？なに赤くなってるんだ？」ナオキは言った。

「ヴええ!？」

「真姫さんはなにを思ってたのかなあー？」

「そ……それは……」

「それは？」

「それは……」

「それは？」

「ん……」

「なんだ？ そんなに言えないことなのかな？」

「ナーオーキー……!!!」

真姫はナオキを捕まえようとした。

「おとつと……」

「コラー……!!!」

「ははは……照れてる照れてるー」

「照れてないわよ!!!」

真姫はナオキを追いかけた。

それをみんなは笑顔で見ていた。

そして10人でなぜかパジャマパーティーをした……
大いに盛り上がった……

ウソのような……そんな時間……

この時間は……本当に終わるのか？

終わらない……パーティー……

終わらない……その時間……

誰かが望んだ？

このみんなで過ごす時間が終わって欲しくない……

おそらくそれはみんなが思っていたのではないのだろうか……

それを一番に思っているのは……

この夢を見ている人物……………

そして少女は暗闇の中でスポットライトをあびて言った……

『終わらないパーティー……………はじめよう!』

そして10人が立っていたのは遊園地にあるステージ……………

みんなはなぜか衣装を着ていて……

そして10人は不思議に思うも……

まだ歌ったこともない……

踊ったこともない……

その曲を作った人物しか知らない……

その歌を……歌った……

そしてその歌う人たちを輝かせた……

その夢の中の……

終わらないパーティーの……

決して終わることのないステージ……

『M u s i c S . T . A . R . T !!』

ナオキは目が覚めた。

「起きた？」

「ん？……真姫か……」

真姫はナオキの横で座っていた。

「いつからそこに？」

「さつきよ……ナオキがいなかったからこつちの部屋に来てみたら……」

「なるほど……はははは……」

「何してたの？」

「いや、本戦のパフォーマンスの最終確認みたいなもんだよ」

「無理しちゃダメなんだからね……」

「はいはい……あ、そうだ」

「ん？」

「ずっとなにを思ってたんだ？」

「い……いきなりなに!？」

「あれは真姫の夢なんだろう……」

「夢……」

あ……あの夢は私だけがみたんじゃないの？」

「やっぱりお前の夢かよ……」

多分おれだけじゃない……

みんながみてると思うよ……」

「そう……」

「で……なにを思ってたんだ？」

「夢の中と同じこと言うのね……」

「ああ……気になるんでな……」

「……誰にも言わないですよ……」

「ああ……」

真姫は息を吸って言った。

ずっとなにを思っていたのか……

『ずっと……みんなのこと好きだったの……ずっと……』

真姫の頭の中では自分の声と……

幼い自分の声が重なった……

「好きだったからずっと知ってた……

バラバラだったときから……」

だから……その……ずっと好きだった……」
真姫は顔を赤くして言った。

「ははは……そうか……」

ナオキは顔を赤くした真姫の頭に手を置いた。

「ヴええ!？」

「な……なにすんのよ……」

「いや……ツンデレ真姫さんも素直になったなーって」

「ツンデレじゃないわよ!」

「ふっ……素直じゃないな……」

「やっぱり真姫はツンデレが一番だな……」

「だから!!……もう……」

「おれも好きだよ……」

「ヴええ……」

「真姫のこと……みんなのこと……」

「……ずっと好きだ……」

友達として……仲間として……大切な人たちとして……

あ！愛してるの好きなのは絵里だから」

ナオキは顔を赤くして言った。

「ふふっ……わかってるわよ……」

そんなこと一々言わなくても……」

「お……おう……」

「ふわあああああ……私、もう1回寝てくるわ……」

「ああ……また明日な……」

「うん……ナオキも無理せずにはやく寝なさいよ……」

「ああ……」

真姫は隣の部屋にまた眠りに行った。

「さて………続きだ!!」

ナオキはまた作業に戻るのだった……

そのころ……

(男の人に面とむかって好きって言われたのって初めてかも……ふふっ……)
真姫は寝転んで顔を赤くして思っていた。

1時間後……

「よし！これでいいだろう……」

ナオキの作業は終わったみたいだ。

「……おじさん、なんであんなこと……」

晋三がナオキに言ったこと、

それは……

『もう1曲用意した方がいいかもな……μ☒sは……』

「ま、用意しとくけどさ……」

一体、晋三はなにを思ってそんなことを言ったのか……

この時のナオキは分からなかった……

だがその答えはもうすぐわかる……

いよいよ……

決戦のとき……

次回へ続く……

第49話「届けたい思い」

前回の妄想物語！

ラブライブ！本戦前日、みんなで学校で合宿をした私たち！
そしたらなぜかみんなが同じ夢をみて……

「終わらないパーティー……はじめよう！」

「ずっと……好きだった……ずっと……」

ヴええ!?

私はこんなこと言ってないわよ！

そしていよいよ……ラブライブ！本戦当日をむかえたの……

『できた！これが10人の初めての曲だ!!』

『はい!』

『曲名はどうするの?』

『うーん……あ、こういうのはどうだ?……………』

『はっ!それはいいと思います!』

『でも衣装はどうするの?』

今は忙しいし……………』

『うーん……また頼むか……』

『披露するのはまだまだ先になりそうですね……………』

『そうだな……はやく披露したいな……………』

『でも練習ぐらいでならできるんじゃない?』

『それだ!さすがだな!』

よし、早速みんなのところに行こう!』

『あ、待なさーい』

『待ってくださーい』

チュンチュン……………

「ん……………すう……………あら？」

ナオキは？……………ナオキイー…

どこおー……………」寝起きの絵里は言った。

そして立ち上がって目をこすりながら隣の部屋に歩いていった。

「ナオキー…そこにいるの？」

ガチャ……………

「ナオキー……って……こんなところで寝て……」

ナオキは隣の部屋で寝てしまったらしい……

「すう……はあ……すう……はあ……」

「ふふっ……可愛い寝顔……あら……これって……」

絵里が机の上を見るとパソコンや紙や筆記用具などが散乱していた。

「ナオキ……ずっと……」

「ん……絶対に……成功させるぞおー……むにゃむにゃ……」

ナオキは寝言を言った。

「ふふっ……もう……チュツ……」

絵里はナオキの頬にキスをした。

「おつきろー……!!!」

「わっ!!」 絵里は隣の部屋から聞こえてきた声にびつくりした。

「はっ!!なに!!地震? 雷? 火事? 鬼海未襲来?……あ、絵里……おはよう……」

「あ、おはようナオキ……」

最後のは黙っておくわ……」

「最後の?……ああ……頼む……」

「なにを黙っておくのですか……」

「ひっ!？」

ナオキは恐る恐るドアの方を見ると……

寝起きの海未が立っていた。

「あの……海未さん……もしかして……聞いてました?」

「ええ……そんなに大きな声を出したら誰でも聞こえますよ……」

「あは……あは……あはははははは……」

ナオキはゆっくりと立ち上がって後退した。

「覚悟は……できてますか?」

「あはははは……」

シュツ……

ドス……

「ぐはっ!？」

海未はすばやくナオキの前へ行き、腹を殴った……

「是非に及ばず……」

「え……ちよつと!？」

バタツ……

「あららー………」 希は言った。

なぜなら……

ナオキは海未にむかって倒れたからだ……

「ナ……ナオキ!どいてください!破廉恥です!!つて気絶してる……」

「海未ちゃん………どれだけ本気で殴ったの?」 穂乃果は言った。

「えつと………多分今出せる最大の力かと………」

「あはははは………」 ことりは苦笑いした。

そして10分後……

「はっ!?!………あれ………ここは………」

「ナオキ………大丈夫ですか?」

「あれ………海未………そうか………海未に殴られて………」

「はい…………すみません…………あと…………目覚めたのならはやくどいてください…………」

「どくく…………なにから?」

「その…………私の膝から…………」

「膝?…………まじで…………」

マジである…………

ナオキは海未に膝枕されていた。

「はい…………まじです…………」

「すまん…………」

ナオキは海未の膝からどいた。

「いいえ…………私こそ…………今出せる最大の力で殴ってしまい…………申し訳ありませんでした…………」

「いや…………いいよ…………生きてるんだし」

「はい…………」

「ナオキくん大丈夫?」

「大丈夫かによ?死んでないかによ?」穂乃果と凜は言った。

「ああ…………大丈夫だ!…………よいしょつと…………絵里は?」

ナオキは立ち上がって言った。

「絵里ならにこたちと朝ごはんを作っているかと……」

「そうか……なら家庭科室だな……」

行ってくる！」

「はい……」

ナオキは家庭科室にむかった。

家庭科室……

ガラガラガラ……

「よお！ やってるか？」

「あ、ナオキ！」 絵里は言った。

「おはよう！」 ことりは言った。

「生きてたのね……」 にこは言った。

「朝ごはんのメニューはなにかなー？」

「トーストに、目玉焼きだよ！」 ことりは言った。

「おー！ うまそう……」

「もう……ナオキったら……ふふっ……」

「じゃ、おれはむこうで待ってるわ！」

「うん！楽しみにしててね！」

「ああ…わかった」

ナオキは部屋に戻った。

アイドル研究部部室…

ガチャ……

「あれ？海未たちがいない……」

ガチャ……

「あ、ナオキくん戻ってたんだ！」

隣の部屋から穂乃果が来た。

「おう、何やってんだ？」

「な…なについて……その……着替え……」

穂乃果は顔を少し赤くして言った。

「あ……それは……すまん……まだみんな着替えてるのか？」

「えっと……もう大丈夫だよ……」

「なら、布団片付けなきゃな……」

ナオキは隣の部屋に歩いていった。

「あ、ナオキ、ちょうど良かったです！手伝ってください」

海未と真姫と花陽が布団を片付けていた。

「わかった……つて……希と凜は？」

「あ、凜ちゃんと希ちゃんならシャワー浴びに行ったよ」穂乃果は言った。

「朝から？」

「そういうもんでしょ……女の子は……」真姫は言った。

「そうか……ま、布団片付けんの手伝うわ」

ナオキは布団を片付けるのを手伝った。

「ふうー……片付いた……」花陽は言った。

「あとはこれを洗濯場に持っていくだけだな」ナオキは言った。

「そうですね」海未は言った。

「じゃ、おれ行くわ」

「あ、私も行く！」穂乃果は言った。

「穂乃果だけでは心配なので私も行きます」

「私も行くわ……」真姫は言った。

「わ……私も」花陽は言った。

「よし、みんなで行くか」

ナオキと穂乃果と海未と真姫と花陽は洗濯場に布団を持って行った。

洗濯場……

「ここに置いとけばいいのか？」ナオキは言った。

「はい、そうみたいです」海未は言った。

「よいしょつと……これで最後だな」

「さ、戻ろう！朝ごはんもうすぐできるよ！」穂乃果は言った。

「朝飯！朝飯！ハラシヨー！行つくぞー！！」ナオキは走った。

「あ、コラ！」海未は言った。

「私もー！！」穂乃果も走った。

「あはははは……」花陽は苦笑いした。

「どれだけお腹すいてるのよ……」真姫は言った。

「ふふっ……私たちも戻りましょうか」

「そうね……」

「うん！」

海未と真姫と花陽も部室へと戻った。

アイドル研究部部室……

ガチャ……

「お、飯できてる！」ナオキは言った。

「あら、おかえりなさい！さ、座って」絵里は言った。

「はいーい」ナオキと穂乃果は言った。

「それじゃあ!!」

「……………いただきますーす!」……………

「うう……白米が食べたいです…

はむっ……」花陽は言った。

「食べるのかよ……」ナオキは言った。

そしてご飯を食べ終わって食器などを片付けてみんなは本戦会場へとむかう準備を
していた……

「穂乃果」

「あ、ナオキくん!」

「どうしたんだ? 考え事か?」

「あははは……わかった?」

「わかるよ……そんな顔されてたら」

「ほえ?」

「緊張……してるのか?」

「……………うん……………少し……………」

「大丈夫だ……………」

ナオキは穂乃果の頭に手を置いた。

「ナオキくん!?!」

「心配すんな……………たしかにこの大舞台だ…緊張はすると思う…おれだって今すげー緊張してんだぜ?」

「え……………そんな風には見えないよ……………」

「いい方法を教えてやる……………」

「笑え」

「笑う?」

「ああ……………お前は得意だろ?笑うの……………」

笑ってたら緊張なんて吹き飛ばさ

「……………うん!」

「いい笑顔だ……………」

「みんなー準備できてるー?」絵里は言った。

「「「「「「はい！」」」」」」

「よし！みんな行くぞー」ナオキは言った。

みんなは部室を出た。

「あれ？ナオキくんは行かないの？」ことりは言った。

「いや、先に行ってくれ…後で行く」

「うん、わかった」

「……………さて……………よくみんなにバレなかったな…端に置いてただけなのに……………」

校門前……………

「お待たせー!!」

「あ、ナオキくん遅いよ！」穂乃果は言った。

「すまんすまん……さ、行くか！」

「……………うん（はい）……………」

そしてみんなは本戦会場へとむかうのだった……

本戦会場……

「……………「うわぁー」……………」

「これが…会場…」真姫は言った。

「おつきいねー!!」穂乃果は言った。

「さすが本戦はスケールが違うわね」絵里は言った。

「こんなところで歌えるなんて……」凜は言った。

「むっ…トップアイドル並に注目を浴びているのよ！ライブ！は」

にゃは言った。

「そっか！」

「注目されてるんだ……私たち……」花陽は言った。

そしてみんな感動した……

穂乃果はずっと会場を見つめていた。

「やっとな来たわね」

「その声は……ツバサさん！」ナオキは言った。

「ハロー」

「久しぶりだな」

「あんじゅさん！英玲奈さんも！」

「いよいよね……本戦……」ツバサは言った。

「私たちはμ☒sが勝つと信じてる……」あんじゅは言った。

「応援してるから……」英玲奈は言った。

「「「「「はい！」「」「」「」」」」」

「それじゃあね……私たちはやることがあるから……」

A—RISEは会場へと入って行った。

「さ、おれたちも行くこう！」ナオキは言った。

「うん！」穂乃果は言った。

そして本戦会場ステージ前……

「「「「「うわあー!!」「「「「「」」」」」」」

「すごい照明ですね……」海未は言った。

「だろ？」ナオキは言った。

「眩しいくらいだねー」ことりは言った。

「たくさんのチームが出場するわけやから、設備も豪華やねー」希は言った。

「あれ？花陽は？」にこは言った。

「かよちゃんならトイレに行くって言ってたよ」凜は言った。

「あれえ!?みんな!?」花陽はキョロキョロしていた。

「かよちゃん!こつちにやー!」凜は手を振った。

「迷子にならないでよー!」絵里は言った。

「ここで歌うんだ……」

「「ここで歌えるんだよ!私たち!」穂乃果は言った。

「そうね……」絵里は言った。

「あ、そうだ……みんな、あそのスクリーンにご注目」ナオキはスクリーン指さした。

「なにかあるのですか？」海未は言った。

「まあまあ……見てなつて……ほら……」

「「「「「わー！！」」」」」

スクリーンには『Love Live!』という文字が浮き上がり、それが

『ラブライブ！School idol project』

という文字にかわつた……

「どうだ？おれが提案したんだ」

「ナオキくんが!？」ことりは言った。

「すごいにやー！」凜は言った。

「そうだろう？私も驚いたよ」

「あ、おじさん！」

そこへ晋三が歩いてきた。

「ナオキはよくやつてくれるよ……」

μsのみなさん、頑張つてくれ」

「「「「「はい！」」」」」

「さ、控え室に行こう！」穂乃果は言った。

みんなは控え室にむかった。

「ナオキ」

「ん…なに？」

「おれたち審査員はあくまで公平に審査するよ…わかっているな？」

「ふっ…それぐらいわかっているよ…」

でも審査員はおじさんたち役員だけじゃないでしょう？」

「ああ…審査員は会場とネット中継で観ている人たちだ…」

「楽しみだな…」

「かわったな…」

「え？」

「最初来た時は少し…元気がなかったが…今は違う…いい仲間をもったな…」

「うん……μ sはおれの大切な人たちだから…」

「そうか……それじゃあな…ステージ楽しみにしてるからな」

「はい！」

そしてナオキも控え室へとむかった。

「真姫ちゃん!!」

「マチコ……ちゃん……」

「真姫ちゃん！」

「マチコちゃん！」

「久しぶり！」

「久しぶりね！ やつと会えた！」

「うん……あの時は……ごめんね……」

「ううん……いいのよ……マチコちゃんは悪くない……」

「うん……真姫ちゃん……私、全力で勝ちにいくから……真姫ちゃんも全力で勝ちにきてね！」

「ふふっ……当たり前よ！」

「負けないから……」

「うん……私も……負けない……」

真姫とマチコは握手した。

「ジャーナ！」

「……ミツヒデ……チンギスカン……」

「ついにこの日が来た……」

おまえらを叩き潰す……その時が……」

「ジャーナ……お前はミツヒデにとつては邪魔な存在……わかってるな？」

「ふっ……」

「なにがおかしい？」チンギスカンは言った。

「いや……なんでもない……」

ただ、おれたちは負けない……

たしかにナニワオトメはすごいよ……

だが……お前たちとは覚悟が違う！」

「覚悟……ねえ……」

まあ……それも今回わかる……

お前から全てを奪うために……

おれの邪魔をする者たちをいなくするために!!!

まずはここでμ☒sを叩き潰してやる……」

「ああ……やれるもんならやってみる！」

「あとあの時の言葉を忘れんなよ……」

「あ？」

「おれの大切な人たちを傷つけたら絶対に許さない……」

「ナオキはミツヒデとチンギスカンを睨んだ。」

「くっ……」

「……お前はいつもいつもいつも……くっ……そこが嫌いなんだよ……」

「弱い者を助ける!!そんなお前がおれは嫌いなんだよ!!!」

「この世は弱肉強食……弱い者は強い者に屈するべきなんだ!!!」

「弱い者は強い者につくしか生きるすべはない……役に立たねば切り捨てる……」

「だからそれが間違ってるんだよ!」

「うるせえ!!」

「お前におれの何がわかる……」

「なに？」

「じゃあな……行くぞ、チンギスカン……」

「ああ……じゃあな……楽しみにしとけよ……μ☒sが負ける様を……」

「ミツヒデとチンギスカンは歩いて行った。」

「ミツヒデ……………チンギスカン……………」

さ、おれも行くか……………」

ナオキは控え室にむかった。

控え室……………」

「入るぞー」

ガチャ……………」

「あ、戻ってきた！」穂乃果は言った。

「遅かったじゃない……………」絵里は言った。

「ああ……………ちよつとな……………おれたちのリハはまだ先だからゆっくりするなりフォーメー

ションとかの確認するなりしてくれ」

「……………」はい！……………」

そして夜……

本戦をみようと観客が会場へと入って行った。

その観客のほとんどは各校の生徒や先生たちだがチケット販売でもチケットは完売した。

「わー！！すっごーい！！こんな大きな看板がでてる！」雪穂と亜里沙が走ってきた。

パシヤ…

「雪穂雪穂！写真！」

「はいはい」

「ここを指す写真！」

パシヤ…

「遅刻しちゃうよー」

雪穂と亜里沙は会場へと入って行った。

「こんな大きな会場で大丈夫かな…穂乃果たち…」フミコは言った。

「優勝候補とか言われてるし…」

緊張してるかも……」ミカは言った。

「大丈夫よ！誰もいない講堂に比べたらどうってことないでしょ？」ヒデコは言った。

「そうだね！」フミコは言った。

「って時間大丈夫？各校の応援席の入場って決まってるんでしょ？」ミカは紙を見ていった。

「あ、ほんとだ！」

そしてヒフミは走って行った。

「「略すな!!」」

「あの一……」

「あら、南さん！」

「やっぱり高坂先輩！お久しぶりです」

「ほんと久しぶりねー」

「ところで……これ……使います?」

ここのりのお母さんはサイリウムを差し出した。

「ふふふ……ご心配なく!」

穂乃果のお母さんとお父さんは両手の指の間に挟んでサイリウムを見せた。

「気合い充分ですね……」

「まあね……」

「さ、行きましょう!高坂先輩!」

「ええ!」

ここのりのお母さんと穂乃果のお母さんとお父さんは会場へと入って行った。

そして……いよいよ……

開幕の時……

ステージの明かりが消えると歓声があがった。

「レディースアンドジェントルメン！ボーイズアンドガールズ……」

お待たせしました！ただいまより第2回ライブ！本戦を開始致します!!」

そして大きな歓声があがり、スクリーンには『ライブ！ School ido
l project』の文字がうかんだ。

「それではルールを説明します！

この本戦では全47組の全国の予選を勝ち上がったスクールアイドルが順番にライブを披露……」

そして全てのステージが終わったら投票の開始だ！

そう…優勝を決めるのは……

ライブ！運営委員会の役員と、

ネット中継でみている君たちと、

そして……ここにいるみんなだー!!」

「おおおおおおお!!」

「全てのステージが終わったらここにいるみんなは入る時にお渡しした端末に表示されるスクールアイドルのアイコンをタッチしてください！

それで投票完了です！

ネット中継でみている人たちはインターネットから投票してください！

ラブライブ！のサイトからも投票できます！

それでは……さっそく参りましょう！

トップバッターは……

大坂学園スクールアイドル！！

『ナニワオトメ』だ!!!」

「キャー……」

そしてラブライブ！本戦が始まった。

トップバッターはナニワオトメ……

明かりが消え、そして明かりがつくとマチコたちがいた。

会場には大きな歓声があがった。

「みなさん！」

「「「「「こんばんはー！ナニワオトメです！」」」」

「私たちが披露する曲はこの日のために作った曲です……お聞き下さい……」

「「「「「F e r r i c R u l e」」」」」

『『Ferric Rule』……鉄の掟……』

ミツヒデらしいな……」ナオキは控え室で言った。

この曲はまさに弱肉強食を歌った曲だった……

それかつナニワオトメお得意の誘惑するような歌詞がある曲だった。

そして曲が終わるととても大きな歓声がわいた。

「「「ありがとうございました！」「」」」

「さすがはナニワオトメね……」絵里は言った。

「そうだね……」穂乃果は言った。

「マチコちゃん……すごい……」真姫は言った。

みんな不安になった。

「なにそんな顔してんだよ！」

大丈夫……みんななら勝てる！

絶対に勝てる!!

自信を持つていけ！」ナオキは言った。

「「「「「うん！」「「「「「」」」」」」」

「そうだよ！私たちなら大丈夫！」穂乃果は言った。

「これまで頑張ってきたんだもん！やれるよ！」ことりは言った。

「はい！たしかにあの人たちはすごいですが……私たちは負けません！」海未は言った。

「そうにや！凛たちのライブみせてやるにや!!」凛は言った。

「マチコちゃんたちには……負けないんだから……」真姫は言った。

「ナニワオトメはすごいですが、A—R—I—S—Eにも勝てたなら……勝てるよ！」花陽は言った。

「あんな胸だけのやつらには負けないわ！」にこは言った。

「ふふっ……μ☒sの力みせてやろうやん！」希は言った。

「そうね……やれる……私たちなら……」絵里は言った。

そしてその後も続々と他のスクールアイドルのステージが終わっていった……

「さ、そろそろ準備した方がいいんじゃないか？」ナオキは言った。

「そうね……さ、みんな着替えるわよ！」絵里は言った。

「……………」

「……………」

「あれ？着替えないの？」

「あのねえ……私たちに着替えるのよ？」にこは言った。

「うん、だから早く」

「えっと……………」穂乃果は言った。

「ナオキ……………」海未は言った。

「はい！」

「ナオキは女の子が着替えるのをみたいのですか……………」

「は？……………」あ……………」そっか……………」あははははは……………」

「わかつたらすぐ出る!!」

「はい!!!」

ナオキは控え室を出た。

「ナオキー、着替え終わったら呼ぶからねー」絵里は言った。

「はい……」

「なんだよ……カーテンとかあるじゃん……」

「よう……ジャーナ」

「またか……ミツヒデ……」

「ああ……感想を聞こうと思ってな……」

「感想？……ああ……ナニワオトメのステージか……」

「ああ……おれが作った曲だ……」

「だろうと思ったよ……」

「お前らしさが出てたもんな……」

「で……どうだった？」

「ああ……たしかにすごかったよ……」

「だかな…… μ ☒sの方がすごいぜ」

「あ？」

「お前もみればわかるさ……」

「ふふふ……その自信はどこから出てくるんだらうな……」

「みんなの歌……踊り……笑顔……」

その全てからさ……

おれはみんなに救われた……

みんなの歌に救われた……だからかな？」

「ふふふ……ははははははは……」

まあいい……楽しみにしとくよ……

μ☒sのライブ……ま、ナニワオトメが勝つがな……」

「勝つのはμ☒sだ……」

「ふっ……勝手に思っとけ……」

ミツヒデは控え室に戻った。

「勝つのはナニワオトメだ……」

「これは確実だ……」

「ミツヒデ……」

「チンギスカン……どうだ？」

「ああ……審査員の一部の買収には成功しているし、大坂学園の全校生徒と全教員にはネット中継を強制的にみさせて、さらに何回か投票できるようにしてある……」

「よくやった……」

「ジャーナ……お前の負けだ……」

「絶望しろ……ふふふふ……」

「入っていいわよー」

「はーい……」

ガチャ……

「おー!!みんな可愛いなあー!!似合ってるぞ!!」ナオキはみんなの衣装姿を見て行った。

「さすがことりね!」絵里は言った。

「うん!今までで一番可愛くしようって頑張ったんだ!ナオキくんにもアイデアもらったの!」ことりは言った。

「そうなの!」穂乃果は言った。

「ああ……リボンとか髪飾りとかはおれが作ったんだ」

「すごいにやー!」凜は言った。

「素晴らしいと思います!」海未は言った。

「いけそうやね!」希は言った。

「よっしゃ、みんな!準備はいいか?」ナオキは言った。

「「「「「はい!」」」」」」

「さあ、行くわよ!」絵里は言った。

そしてみんな移動した。

ステージ下……

「キャーキャーキャー!!」

外からは歓声が聞こえる。

「お客さん……すごい数なんだろうな……」ことりは言った。

「楽しみですよね……」海未は言った。

「え!」穂乃果とことりは言った。

「ほうすっかりくせになりました……たくさんの人の前で歌う楽しさが……」

「ふふっ……海未ちゃんかわったね」ことりは言った。

「大丈夫かな? かわいいかな?」花陽は言った。

「大丈夫にや! すつごくかわいいよ! えへへ……凜はどう?」凜はまわって言った。

「凜ちゃんもかわいいよ!」

「今日のウチは遠慮しないで前に出るから覚悟してね!」希は言った。

「希ちゃんか?」穂乃果は言った。

「なら……私もセンターのつもりで目立ちまくるわよ……最後のステージなんだから!」

絵里は言った。

「面白いやん……」

「おお！やる気にや！真姫ちゃん、負けないようにしないと！」

「わかっているわよ……3年生だからってボヤボヤしているとおいていくわよ……」

宇宙No.1アイドルさん……」真姫は言った。

「ふふん……面白いこと言ってくれるじゃない……」

私を本気にさせたらどうなるか……覚悟しなさいよ！」にこは言った。

「ははは……ならおれも……みんなを最高に輝かせないと……」

みんながこんなに頑張るなら……」ナオキは言った。

「さ、そろそろ時間ですよ！」海未は言った。

「うん！」

みんな……全部ぶつけよう……」

今までの気持ちと……想いと……ありがたきを……全部のせて歌おう！」

そしてみんなはいつも通りに手を出した。

「……………」穂乃果は黙った。

「ん……………」海未は言った。

「なんて言ったらいいか……わかんないや……」穂乃果は言った。

「なんだよそれ……」ナオキは言った。

「だって本当じゃないんだもん……」

もう全部伝わってる……

もう気持ちは一つだよ……

もうみんな……感じていることも……考えてることも同じ……そうでしょう?」

「そーやね……」希は言った。

穂乃果は息を吸った。

「ムッsラストライブ!全力でとばしていこう!!

いちー!」

「に!」

「さん!」

「よん!」

「ご!」

「ろく!」

「なな!」

「はち!」

「きゆう!」

「じゅう！」

「「「「「「μs!!!ミュージック……………スタート————!!!」」」」」」

「じゃ、みんな…おれは行くから！」

「うん！」穂乃果は言った。

「みんな最高に輝かせるから!!」

「「「「「「うん！」」」」」」

ステージ……………

明かりが消え、明かりがつくと後ろの方のステージにはナオキが立っていた。

「キャ—————!!」

「みなさん！お待たせしました！」

大トリは私たち、音ノ木坂学院スクールアイドル…『μs』です!!

この曲は…私たちの全てを込めて作りました…新曲です…

私たちの想いを……受け取ってください!!

ずっと夢だった……このステージで感じる……

キラキラしたような感覚……

それでは……お聞き下さい……

『K i R a | K i R a S e n s a t i o n ! 』

そして明かりが消え、ナオキはステージ裏に下がった……

「さ、行くぞ……みんな……」

そして前の円形のステージにスポットライトがともされた。

そして音楽が流れ始めるとその円形のステージの下からμSがポーズをとってあがってきた。

そしてみんな順番に上を見上げていく……

そして音楽が盛り上がるとステージは明るくなり、9色のライトが横から線をえがいてでてきた……

それは上から下へと伸びていた……

柱のオブジェクトも9色の明かりがつかいたり消えたりしていた……

『どんな明日が待ってるんだろう？なんてね』

「(僕は〜)」『僕たちは〜少しずつ手探りしてた

はげましあつて〜 ぶつかりあつた時でさえ〜』

「(わかつてた〜)」『おんなじ！夢を見てると

目指すのは』「あの太陽」

『大きなく』「輝きをつかまえる」

『いつかの〜』「願いへと近づいて」

『光の中で〜うたうんだ Sensation！

奇跡それは今さ ここなんだ〜

みんなの想い〜が導いた場所なんだ！

だから〜本当に〜今を楽しんで

みんなで叶える物語 夢のStory

「『眩しいな!』」「『いいな!』」「『おいでよ!』」

「『嬉しいな!』」「『いいな!』」「『もつとね!』」

『1つになれ心…KiRa—KiRa!!…KiRa—KiRa!!』

ここはナオキも歌うところ…

『Hi!Hi!夢は夢は終わらない』

(よし……ここだ……これはみんなには知らせてない…サプライズ……)

そして間奏の間スクリーンには

10人ひとりひとりの写真と名前が映った!

これはナオキが夜に作ったもの…

ライトもそれに合わせて色がともされる。

順番は……

ナオキ、希、真姫、海未、凜、にこ、花陽、絵里、ことり、穂乃果だった……

最後には……

『μs Kirakira Sensation!』

の文字と全員の集合写真と一緒に映った!

みんなまわりにある水からスクリーンに映るナオキのサプライズがみえた。

「1人ずつ」「飛び出して〜」

「二度となくいい」「瞬間を

つかまえる」

「いつかの〜」「願いごとおぼえて〜る?

光の中で踊ろうよ Sensation!」

『Hi!Hi!』

その声と共にベース音はのび、音楽が止まった。

「みなさん!一緒に!!」穂乃果が言った。

スクリーンには歌詞が映る……

そしてみんなが1列に並んで……

『僕と君で来たよ、ここまで』

みんなの思いが届いたよありがとう！

ついに一緒に来たよ楽しもう！

みんなで叶える物語 本気Story！』

そこは会場全体の合唱となった。

それはμS10人から応援してくれたみんなへの感謝……

A—RISE、雪穂、亜里沙、穂乃果の両親、ことりのお母さん、真姫のお母さん、ヒフミ、学校みんな、ファンのみんななど……たくさんの人に応援してもらった……

ありがとう……

そして

本気Storyのところでもまた音楽がなりはじめた！

そして金銀の紙吹雪が舞った！

『奇跡それは今さ、ここなんだ』

みんなの想いが導いた場所なんだ！

だから本当に今を楽しんでく

みんなで叶える物語 夢のStory！』

「「僕と君で来たよ ここまでく」」↑2年生

「「みんなの想いが届いたよありがとう！」」↑1年生

「「ついに一緒に来たよ楽しもう！」」↑3年生

『みんなで叶える物語 本気Story！

奇跡それは今さく ここなんだく

みんなの想いが導いた場所なんだ！

だから本当に今を楽しんでく

みんなで叶える物語 夢のStory！

「眩しいな！」「いいな！」「おいでよ！」

「嬉しいな！」「いいな！」「もつとね！」

1つになれ心…KiRa—KiRa!!』

そして曲が終わるとメンバーの各色の紙吹雪が舞った。

「海未ーーーー!!」

「ことりーーーー!!!」

「凜ちやーーーーん!!」

「花陽ちやーーーーん!!」

「真姫ちやーーーーん!!」

「希ーーーー!!」

「にこにーーーー!!」

「絵里ーーーー!!」

「ナオキくーーーーん!!」

そして10人はステージ裏へと走って行った。

その歓声はやむことを知らない……………

「みんな!!お疲れ様!!!」

「「「「「お疲れ様!!!」」」」」」

「うっ……ひぐっ……うう……」花陽は涙を流した……

「かよちゃん……うう……」

凜は花陽と抱き合った……

「にこっち……」

「希……」

「ふふっ……」

にここと希も涙を浮かべて抱き合った……

「真姫……」

「絵里……」

「ふふっ……」

真姫と絵里は涙を浮かべて手を繋いだ……

「穂乃果ちゃん……海未ちゃん……」

「穂乃果……ことり……」

「海未ちゃん……ことりちゃん……」

「「ふうっ……」」

穂乃果と海未とことりは涙を浮かべ、抱き合った……

「みんな……よくやった……ほんとに……」

ナオキも涙を浮かべた……

ナオキは花陽と凜の元へ……

「花陽……凜……」

「ナオキくん……」

「凜……頑張ったよ……」

「ああ……みてたよ……すっごく輝いてて……かわかった……」

ナオキは凜の頭をなでた。

「うん！」

「私……失敗とかしてませんでしたか？」

「ああ……完璧だったよ……練習の時よりも……よかった……」

ナオキは花陽の頭をなでた。

「そうですか……よかった……」

ナオキはにここと希の元へ……

「にこ……希……」

「ナオキ（くん）……」

「ふ……ふふん……みてた？大銀河宇宙No. 1アイドルにこにこちゃんの華麗なるダンス！」

「ああ……さすがだった……輝いてたよ……今までで1番……」

ナオキはこの頭をなでた。

「でしよう！」

「ウチ……やってよかった……ナオキくんを誘ってよかったわ……そうじゃなかったらきつと……この瞬間は……味わえてない……」

「ああ……ありがとう……誘ってくれて……」

「で、どうだった？ウチは！」

「かわいかったよ……今まででのどのステージよりも輝いてた……」

ナオキは希の頭をなでた。

「くすぐつたいやん……」

ナオキは絵里と真姫の元へ……

「絵里……真姫……」

「ナオキ……………」

「私…ちゃんとできたかしら…」

「ああ…完璧だった…」

「あ…あと！みんなの頭なでまくってるみたいだけど…べ…別に私はなでて欲しくな
かないんだからね！」

「ふっ…………素直じゃねーな…真姫は……………」

ナオキは真姫の頭をなでた。

「ヴええ……………」

「ははは…照れてる……………」

「あと…ありがとう……………」

「ん？」

「その…曲のアドバイスしてくれて……………」

「ああ…どうってことねーさ……………」

「ナオキ…………どうだった？あなたの彼女は？」

「いつも綺麗でかわいいけど…今回はもっと綺麗でかわいかつたし、輝いてた……………」

「やっぱり絵里の歌声は最高だよ……………」

ナオキは絵里の頭をなでた。

「そう……ナオキ……その……」

「ん？」

「えつと……」

絵里はモジモジした。

「なんだ？して欲しいことでもあるのか？」

「えつと……ス……」

「ス？」

「……だから……その……キス……して欲しいの……」

「なんだそんなことかよ……」

ナオキは絵里を引き寄せ……

唇に軽くキスをした……

「んっ……ありがとう……」

「ああ……」

ナオキは穂乃果と海未とことりの元へ……

「穂乃果……海未……ことり……」

「ナオキ（くん）……」

「ありがとうね……」

「ん？」

「衣装のアドバイスくれて……」

「ほとんどことりじゃねーか……」

「おれはほとんどなんにも……」

「そんなことないよ……ナオキくんがいなかったらもつと違う衣装になってたと思う

……」

「そんなことは……」

「それで……どうだった？」

「ちゃんと踊れてたかな？」

「ああ……バッチリだったよ……」

「ずっと練習してたところもできてたしな」

「ナオキはことりの頭をなでた。」

「えへへへ……うん！」

「はあ……楽しかったです……」

「海末もかわったな……」

大勢の人の前で歌うの……楽しかったか？」

「はい！堂々と歌えました！」

「そうか……ほんとうに今回のライブは堂々としてたし……1番よかった……」

ナオキは海末の頭をなでた。

「そ……そんなになでないで下さい……」

「なんだ？照れてんのか？」

「もう……あ、あとありがとうございます……歌詞の件……」

「ああ……」

「ナオキがアドバイスをくれたのですごくいい歌になりました……」

「海末の歌詞だけでも良かったと思うけどな」

「いいえ……ナオキのアドバイスがなければこんなに素晴らしい歌にはならなかったで

しょう……」

「あははは……ありがとうございます……」

「ナオキくん……私たち……こんなにたくさんさんの人の前で歌えたんだね……」

「ああ……そうだな……」

「最初は…ファーストライブのときは…幕があがっても誰もいなくて…でもその講堂を満席にして……」

そして……今……こんなにたくさんの方の前で歌ったんだ……」

「ああ……よくやった……」

普通の人なら最初に諦めてるだろう……

でもお前は違う……その穂乃果のあきらめない心が……やりたいっていう想いが……今こうして実を結んだ……」

ナオキは穂乃果の頭をなでた。

「えへへへ……ナオキくんになでもらったら気持ちいいね……」

「うるせー……」

そしてみんながナオキのまわりに来て……

みんなで笑った……

涙を浮かべながら……

抱き合って……手を繋いで……

そんなとき……

「アンコール！アンコール！アンコール！アンコール！アンコール！アンコール！……」
「……………えっ……………」

「アンコール！アンコール！アンコール！アンコール！アンコール！アンコール！……」

聞こえてくる……………大きなアンコールの声……………

ステージに照らされる……………スポットライト……………

大きな歓声……………

輝くサイリウム……………

みんなはステージの方をみつめる…

その光景をみて……………

驚きを隠せない……………

他の学校のみんな……………

他のアイドルのみんな……………

そして……………

大坂学園のみんな……………

「ミツヒデ!!!」

大坂学園のやつらが!!!」

「はあ!?!ふざけんな!!!」

なんで……………なんでなんだよ!!!」

「それはね……………お兄ちゃん……………」

「!?マチコ……………」

「それはね……………μ☒sの歌声が……………μ☒sのステージが……………みんなの心を動かしたんじゃないかな……………」

「なに……………そんなこと……………あるわけ……………」

「ウチらの負けや……………」

「ヤマト!？」

「そうやね……」

「ユキ!？」

「悔しいけど……」

「ミク!？」

「ジャーナはすごいよ……」

「メグ!？」

「お前ら……何言ってる……」

「認めなよ、お兄ちゃん!」

「マチコ……」

「心のどこかでわかっているんでしよう!？」

「もう……私たちは負けたのよ……」

「ナニワオトメはμ□sに負けたの!!」

「くっ……好きにしろ……」

「ミツヒデー!」

「ミツヒデーはどこかへ歩いて行った。」

「チンギスカンはそれを追いかけた。」

「アンコール！アンコール！アンコール！アンコール！アンコール！……」

「みんな……聞こえるか……」

アンコールだ……」ナオキは言った。

「「「「「「うん……」」」」」」

そして穂乃果の脳裏にあの時……

ファーストライブのときに講堂で絵里に言ったあの言葉が……

よみがえる……

『このまま誰も見向きもしてくれないかもしれない……』

応援なんて全然もらえないかもしれない……

でも……一生懸命頑張つて……私たちがとにかく頑張つて届けたい！

今、私たちがここに……この思いを！！』

穂乃果の目からは涙が溢れてきた。

「穂乃果……あの時の決意……」

「うん……ひぐつ……うう……」

「穂乃果……一生懸命頑張った!!」

だから届いたんだ!!

おれたちの想いは……

穂乃果の想いは……

あの時のファーストライブのときの想い……まずはおれたち……

そしてこの大勢の人たちに届いたんだ!!」

「うん……うん……やったんだね……うう……ひぐつ……」

ナオキは穂乃果を抱きしめた。

「泣け……泣いていいんだ……」

「うう……うわああああああああん……ひぐつ……うう……うわあああああああ

あん……」

穂乃果は大きな声で……

大きな涙を流して泣いた……

「ぐすつ……ありがとう……もう大丈夫……」

穂乃果は涙を拭いた。

そしてみんなも……

「そうか……」

さ、アンコールに答えよう!!」

「でも……曲はどうするの?」真姫は言った。

「衣装もこれしかないよ?」ことりは言った。

「と思うだろ?……実はな……」

「おーーい!!!」

「ほら……来た……」

「ヒデコ!? フミコ!? ミカ!」

「お待たせ、ナオキくん……言われた通り……ちゃんと持って来といたよ……これ
！」ヒデコが言った。

「これって……」

「ことりが『それは僕たちの奇跡』のPV撮影の時に作った衣装だ……

曲もちゃんと準備してあるよ

『僕らは今のなかで』だ」

「いつのまに……」海未は言った。

「ずっと衣装はおれたちが寝てた部屋の端に置いてあったで」

「「「「「「えー!!」」」」」」」

「気づきませんでした……」花陽は言った。

「でも……なんで……」凜は言った。

「いやあーな……おじさんがさ、

『μsはもう1曲あった方がいいかも』って言ったから準備したんだよ……

そしたら……」

「アンコール！アンコール！アンコール！アンコール！アンコール！……」

「それでね、ナオキくんが昨日『昼過ぎに会場に来る前に部屋に衣装置いてあるから取り

に来てくれ』って電話してきて……」フミコは言った。

「それで私たちがここに持ってきたってわけ！」ミカが言った。

「ナオキ……そんなことを……」絵里は言った。

「さすがナオキくんやね！」希は言った。

「ふん、なかなかやるじゃないの……」にこは言った。

「でもなんでこの曲なんですか？」海未は言った。

「なんだ……忘れたのか？」

「これは初めての10人の曲だ……」

「そりゃあこの場だったらこれしかないっしょ！」

『あ、こういうのはどうだ？……「僕らは今のなかで」』

そう『僕らは今のなかで』は
ナオキが来て初めて作った曲…

いくなれば……

μ☒s10人の初めての曲である……

まだ披露はしたことはないが練習でやったことはある……

そしてみんな着替えた……

「みんな!!このアンコールに全力で答えよう!!」

いちー!!」

「に!!」

「さん!!」

「よん!!」

「ご!!」

「ろく!!」

「なな!!」

「はち!!」

「きゆうー！」

「じゆうー！」

「「「「「「μs!!!」」」」」」

「ミュージック……スタートー!!!」「「「「「「」」」」」」

「よし！みんなは幕裏で待機な！」

「「「「「「はい！」」」」」」

そしてステージ……

明かりが消えると歓声がわいた。

そして明かりがついた。

円形のステージではナオキが立っていて、後ろのステージには幕が張ってある。

「キャー……！！」

「みなさん！アンコールありがとうございます!!!」

みなさんのアンコールにお答えして……もう一曲披露したいと思えます!!」

「おお!!」

パチパチパチパチ……

……

「みんな…準備はいいか？」

「「「「「はい！」「」「」「」」」」」

そしてナオキは笑顔でうなずき……

「それでは!!!お聞き下さい!!!

『僕らは今のなかで』

「キャーキャー!!!」

そしてナオキがステージ裏で音楽をならすと大きな歓声があつた。

そして幕が開いて9人はステージへ飛んで出た！

柱のオブジェクト…そして照明はすべてみんなにあつた色を出している……

そしてラストに9人は円形のステージに走った。

『輝きをまつてた』

「キヤーーーーーー!!!」

そして10人は再び後ろのステージで手を繋いだ……
左からにこ、希、絵里、ことり、穂乃果、ナオキ、海未、真姫、花陽、凜の順番に並んだ。

「せーの!!」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」」

「キヤーーーーーー!!!」

とても大きな歓声と拍手がわいた。

「これですべてのチームのステージが終わりました！」

今から1時間後に結果発表を行いますのでみなさんは30分後までに投票をお済ませ下さい！」

控え室……

「みんな、今度こそお疲れ様！」

「……………お疲れ様でした！……………」

「まさかアンコールがくるなんてなあ……」希は言った。

「そうね……」絵里は言った。

「ふん、大銀河宇宙No.1アイドルにこにーにこちゃんがでてくるんだもの……当たり前だよー」にこは言った。

「あの時の曲が披露できるなんてね」真姫は言った。

「練習でしかやったことなかったから緊張したにやー」凜は言った。

「でも……やれてよかった……」花陽は言った。

「夢みたいだねえー」ことりは言った。

「はい……とっても……最高でした……」海未は言った。
「……………」

「ん？穂乃果……どうしたんだ？」ナオキは黙り込む穂乃果に聞いた。

「私ね……あの廃校のお知らせの紙を見たときに倒れたんだ……」

「あの時ですか……懐かしいですね」海未は言った。

「それが……どうしたんだ？」

「それでね……夢をみたんだ……」

「夢？」

「うん……このラブライブ！のステージで……」

このメンバーで、この曲を歌う夢……

そしてナオキくんが横からみてくれるのもそのときに……

だからこれは……夢にまでみたステージなんだ……」

「ふっ……穂乃果の正夢ってわけか……」

「うん！」

「さ、みんな体を休めとけよ

あと一時間もすれば結果発表だ」

「……………」
「はい！……………」

観客席……

「もう決まったわね」ツバサは言った。

「ふふっ…そうね」あんじゅは言った。

「そうだな」英玲奈は言った。

「伝わったわよ…あなた達の思い………」

そしてA—RISEはμsのアイコンをタッチした。

「これはきつとお姉ちゃんたちが勝つね」雪穂は言った。

「うん！やっぱりμsはハラショー！だね！」亜里沙は言った。

「伝わったよ………」

「お姉ちゃんたちの思い………」

そして2人はμsのアイコンをタッチした。

そして穂乃果の両親も……

ことりのお母さんも……

真姫のお母さんも……

ヒフミも……

「「略すな!!!」」

音ノ木坂学院の生徒も……

見に来てくれた観客も……

他の学校のほとんどの生徒も……

μ☒sのアイコンをタッチした。

そして……

「お前ら……どういいうつもりだ……」

「……」

「おれに逆らうのか？」

逆らったらどうなるかわかってるよな!!!」

「……」

「どうした？」

さっきまでの声はどうした？

おれを前にして怯えてるのか？

ならそれでいいんだよ……

お前らは大人しくおれに従ってればいい……………」

「……………つてる……………」

「あ？誰ださっきのは？」

「おれだ……………間違ってるって言うてんだよ!!!」

「イズミか……………」

「ああ……………間違ってる……………ミツヒデのやり方は間違ってる!!」

「てめえ……………いつからそんな口きけるようになったのかな……………」

もう一遍痛い目にあいたいんか！」

ミツヒデはイズミの胸ぐらを掴んだ。

「くっ……………」

「……………わかった……………これでわからないなら次の手だ……………」

「……………」

「お前ら……………全員退学だ……………」

周りがざわついた。

「それじゃあな……………」

ミツヒデはどこかへ歩いていこうとした。

「なら……………」

「あ?」

「なら……………もうナニワオトメに強制的に入れる必要はないな……………」

イズミはμ□sのアイコンをタッチした。

それに続いて大坂学園の生徒は続々とμ□sのアイコンをタッチした。

「ふっ……………勝手にしろ……………」

お前らはもう大坂学園の生徒じゃないからな……………」

ミツヒデはどこかへ歩いて行った。

チンギスカンはそれをまた追いかけた。

そして……………

「それでは!!」

第2回ラブライブ！本戦の結果発表を行います！！

「キャーーーーー！！」

「いよいよだな……」ナオキは言った。

「「「「「うん……」」」」」

いよいよ……

優勝チームが発表される……

「優勝は……」

エ
ン
ト
リ
ー
N
o.
1
1

音ノ木坂学院スクールアイドル

『μs』です!!」

次回へ続く……

妄想外伝 「スクールアイドル紅白歌合戦!?!」

「「「「「スクールアイドル紅白歌合戦!?!」」」」」」

「そう! ラブライブ運営委員会がどこぞの放送局の毎年恒例の紅白歌合戦でスクールアイドルが出してもらえることになったんだ!

スクールアイドル何組かがライブをできる!

そして、おれたちもな!

ナオキは部室でみんなに何気に重大発表をしていた。

「紅白歌合戦って……あの紅白歌合戦!?!」ことりは言った。

「す……すごいですね!」海未は言った。

「わ……私たち……出れるんですか!?!」花陽は言った。

「そ……そうみたいね……」真姫は言った。

「ハラショー! 光栄だわ!」絵里は言った。

「ふん、ついに大銀河宇宙N.O. 1アイドルにこにーにこちゃんがああのステージに!!」に

こは言った。

「これは気合い入れらんとね！」希は言った。

「でさあーひとついい？」穂乃果は言った。

「ん？どうした？」

「紅白歌合戦ってなに？（かにや）？」

「「「「「えー……！！」「「「「「」」」」」」

「ちよ……ちよつと待てお前ら！」

あの紅白歌合戦だぞ!？」

「えーだって年末といえは……」

「ガキ使だにゃ！」

「確かにそうだけだよ!!」

「紅白歌合戦を知らないのはなかなか……」ことりは言った。

「穂乃果……凛……あなたたちは……」海未は言った。

「だって！毎年年末はガキ使だよ！」

「そうにやそうにや！」

「はあ……だからー、紅白歌合戦を知らないのは結構重症だと言ってんの！」にこは言った。

「だつてみないんだもん！むー……」穂乃果は頬を膨らまして言った。

「ぷっ……穂乃果変なの……」

「「「「「ブアアア」」」」」穂乃果と凛は言った。

「は!?!まさか……」

「ナオキくんアウト(だにや)」

すると穂乃果と凜は黒いバットみたいなものをだした。

「なんで今それすんの!?!」

「はあ……穂乃果、凜……」

出してもらえるのですからそれでは失礼です!

私が穂乃果と凜に紅白歌合戦のことを教えましょう!

「えー」

「お・し・え・ま・しよ・う!!」

「は……はい!よろしくお願いします!(にや!)」

「あはははは……」こころは苦笑いした。

「さ、おれたちは曲を決めようか」

穂乃果と凜は海未に紅白歌合戦のことを教えてもらい、

それ以外のメンバーは曲などを決めることになった。

「いいですか、紅白歌合戦の第1回は1951年でした!

しかし第1回のときは『紅白音楽合戦』というのが正式タイトルでした」

「ほえー」

「曲はなんか盛り上がるのがいいと思うわ」にこは言った。

「それはそうやねー」希は言った。

「なら『No brand girls』かな？」ことりは言った。

「確かに盛り上がるね！」花陽は言った。

「でも日本の長寿番組なんだから和風の曲もいいんじゃない？」真姫は言った。

「それなら『だってだって噫無情』とか…あ、『輝夜の城で踊りたい』もいいかもな」ナオキは言った。

「確かに和って感じね」絵里は言った。

「「「「うーん……」」」」

「というのが紅白歌合戦なのです！

わかりましたか？」海未は言った。

「は……はい……」

「よろしい……ナオキ、2人の指導終わりました！」

「おっ、お疲れさん」ナオキは言った。

「疲れだあー……」穂乃果は机に伏せた。

「凜もー……」凜も机に伏せた。

「ははは……さ、疲れてるところ悪いがはやいところ曲決めなきやな」

「はい！」

「はーい……」

屋上……

「さ、練習するぞ！」

「「「「「はい！」」」」」」

「さ、練習張り切っていくよー!!!」穂乃果は言った。

「おーーー!!!」凛は言った。

「さっきまでの元気のなさが嘘みたいだな」ナオキは言った。

みんなは紅白歌合戦にむけて練習をした。

そして……いよいよ本番のとき……

「よし!みんな準備はいいか!」

「「「「「はい!」」」」」

「やっぱり緊張するねー」穂乃果は言った。

「はい……大丈夫でしょうか……」海未は言った。

「大丈夫だよ!緊張はするけど楽しみじゃない?」ことりは言った。

「そ…そうですね!」花陽は言った。

「よおーし!いっぱい歌って踊るよー!!」凜は言った。

「もう、はしやぎすぎ…」真姫は言った。

「さ、大銀河宇宙No.1アイドルにこにーにこちゃんを全国民にみせてあげるわ!」に

こは言った。

「このライブは成功させたるでー!」希は言った。

「穂乃果……」

「なに？ナオキくん？」

「そう緊張すんな……」

「でも……」

「忘れてるぞ？笑顔……」

「あっ！」

「ははは……さ、笑顔だ！えーがーお！」

「……うん！」

「よろしい！」

ナオキは穂乃果の頭をなでた。

「ちよつと……えへへ……」

~~~~~

「えへへへ……もう……なですぎだよー……」

もうナオキくんったらー

むにやむにや……

「はっ!?!見逃した!?!」

どっち勝った? 紅? 白?」

私寝ちやつてたみたい!?

見逃しちやつたよー……紅白歌合戦……

だから結果を雪穂に聞いてみたんだ!

「ピンクー」

「ん……ピンク?」

ピンク?

そんなのあつたっけ……

「穂乃果ー、海未ちゃんたち来たわよー」

「ほんと!?!もうそんな時間!?!」

「そうよー、早くしなさい」

あわわわわわわわ

早くしなきゃ!

また海未ちゃんに怒られる!!

さ、今日は神田明神で初詣だーーー!!!







μ☒sはステージ下へと移動した。

「ここで待機してください！」

合図とともに上げます！」係員の人は言った。

「はい、わかりました！」ナオキは言った。

ステージでは……

「それでは皆様！円形のステージにご注目下さい！！

優勝チーム……『μ☒s』の登場でーす！！」

「キャーキャー！！」

すると円形のステージが上がり、みんなは色とりどりのサイリウムが振られ、名前を呼ぶ声、歓声、拍手に感動した……

「それでは、優勝旗とトロフィーの授与に移りたいと思います！」

代表者2名はこちらのステージへどうぞ！」

「だれが行く？」ナオキは言った。

「そんなの決まってるじゃない」絵里は言った。

「ナオキと穂乃果が行ってください！」海未は言った。

海未がそう言うとなオキと穂乃果以外が頷いた。

「よし、行こうか…穂乃果」

「うん！」

ナオキと穂乃果は後ろの方のステージへと進んだ。

2人が着くと同時に大きな歓声がわいた。

「それでは！優勝旗を渡してくれるのは……ラブライブ！運営委員会会長伊藤晋三さんです！」

するとステージ端から晋三が優勝旗を持って出てきた。

「そして……優勝トロフィーを渡してくれるのは……」

前回王者、A—RISEだ!!!」

その名が告げられると歓声がわいた。

そしてステージ端からA—RISEが出てきた。

そして晋三とA—RISE、ナオキと穂乃果がむかいあった。

「まずは優勝トロフィーの授与です！A—RISEのみなさん、よろしくお願い致します！」

「「はい！」」

そしてA—RISEがツバサを先頭に穂乃果の前に出た。

「穂乃果さん、ナオキくん、優勝おめでとう！」ツバサは言った。

「「ありがとうございます！」」

「これが優勝トロフィーよ」あんじゅが言った。

「さ、受け取れ」英玲奈は言った。

そしてツバサは穂乃果に優勝トロフィーを渡した。

「ほんとうにおめでとう」

「はい！ありがとうございます！」

「あなたたちのライブはすごかったわ…流石だわ」

「ほ…ほんとうですか!？」

「ふふっ……だからこうやって優勝してるんじゃないの」

「あつ……そつか……あはははは……」

「ふふっ……あなたってほんとうに面白いわね……ではあらためて……」

ほんとうに……おめでどう……」

「ありがとうございます……」

ツバサと穂乃果は握手した。

パチパチパチパチパチ……

「続いては優勝旗の授与です！

伊藤会長、よろしくお願い致します！」

「うむ」

晋三はナオキの前に出た。

「ナオキ、穂乃果さん、優勝おめでとう……」

「ありがとうございます（ゞ）ございます！」

「これが優勝旗だ……重いから気をつけろよ？」

「おじさん、おれをいくつだと思ってるんだよ……」

「ふふ……そうだな……」

晋三はナオキに優勝旗を渡した。

「おっと……意外に重たかった……」

「ははは……だから言ったろ？」

もう一曲準備して正解だっただろ？」

「うん……まさかアンコールがくるなんて……」

「μsならそんな予感がしたんだよ」

「おじさんってすごいな……」

「ははは……じゃ、あらためて……」

ほんとうに優勝おめでとう……」

「ありがとう……」

晋三とナオキは握手した。

パチパチパチパチパチ……

「さ、穂乃果……やるぞっ？」

「やるっ！」

穂乃果は最初わかってなさそうだったがわかったら笑顔で頷いた。

「いくぞっ！」

「うん！」

「セーの……………」

そして穂乃果はトロフィーをナオキは旗をあげて観客席にむかつて……

「優勝だあああああああああああああ!!!」

他のメンバーは「おー！」と言ってガッツポーズをしたり、涙をうかべ笑いあったりしていた。

そして観客の人たちは大きな歓声と拍手をしてくれた……

「μsのみなさん、ありがとうございました！」

ナオキと穂乃果は円形のステージに戻った。

「会長もありがとうございました！」

晋三は舞台袖に戻った。

「さて……でなんと!!」

前回王者A—RISEがライブを披露してくれます!!!」



「キャーキャー!!」

「マジか!?」ナオキは言った。

みんな驚いたり喜んだりした。

そして円形のステージが下がって係員の人たちの大きな拍手でむかえられたμs

……

一方ステージでは……

「それじゃあみんな!最後まで盛り上がっていこう!!」ツバサは言った。

「曲は前回の優勝したときの曲……」あんじゅは言った。

「みんな覚えてるよね?」英玲奈は言った。

「『Private Wars』」

そしてA—RISEのライブは終わった……………

「これで第2回ラブライブ！を閉会します!!

また会う機会があればお会いしましょう！」

パチパチパチパチパチ……………

そして第2回ラブライブ！はμ'sの圧倒的大差の優勝で幕を閉じた。

「みんな！これが優勝旗!!」

「そしてこれがトロフィーだよ!!」

「……………おお——!!」……………

μ ⊠ s は控え室で優勝旗とトロフィーをみてあらためて感動した。

コンコンコン……

「はい！」

「失礼します！今から記念撮影を行いますますがよろしいですか？」

入ってきたのは係員の人だった。

「お願いします！」

そして記念撮影をして、係員の人も出ていき、思わぬ人物が顔を出した。

「よお、ジャーナ……μ☒sのみなさん」

「ミツヒデ……」

「ふっ、まさか……お前に負けちまうとわな……」

「だから言ったじゃないか……」

俺たちが勝つって……μ☒sが勝つってさ」

「なんなんだよ……一体……」

「なにがだ？」

「なんなんだよ!!あれは!!」

ウチの生徒や……いろんなやつらの心を動かした……

一体なんなんだよ!!!」

「大坂学園の生徒が？」

「ああ……イズミたちが見に来てたんだよ……」

ほんとうは……ナニワオトメが勝つはずだった……

なのに……なんで……」

「それは……μsのライブがその力を持っているっていうことだよ……」

「ふっ……そんなことあるわけ……」

「あるんだよ……実際そうだろう？」

「くっ……」

おれは……ジャーナ……お前から全てを奪いたいんだよ……

お前を絶望させたい……

そのためならなんだってする……

おれの邪魔になるやつらを排除できるなら……」

「ミツヒデ……てめえ！」

「実際おれは審査委員の数名を買収し、そしてネット中継でみるおれ側のやつらは何回も投票できるようにした……」

「お前……そんなことしてたのか……」

「ああ……だから言っただろう？」

おれの邪魔になる存在になるやつを排除するためならなんだってする……」

「てめえ!!!」

ナオキはミツヒデの胸ぐらを掴んだ。

「てめえの勝手な理由で……………」

「この大会を汚すんじゃない!!」

「おれは何でもする……………今も……………これからも……………」

するとミツヒデはナオキが掴んでいた手を引き払った。

「!?お前なにを!」

「なんでもするって言ったろ……………」

「ならこれが手っ取り早い……………」

ミツヒデの手にはハサミがあった。

そしてラブライブ!の優勝旗へむかった。

「や……………やめろ!!ミツヒデ!!」

「いややめない……………おれは……………お前を……………」

「やめて!!」

「邪魔すんな……………そこをどけ!!」

そして優勝旗の前に立ちほだかったのは……………

「いや、どかない!!どかない!!たらどかない!!」

「穂乃果!!!」

「穂乃果だけじゃありません!!」

穂乃果に続いて他のメンバーも優勝旗の前に立ちはだかった。

「みんな……………」

「おれの邪魔な存在になるか……………」

だが…………おれは女にはそう最初から厳しくはしない…………」

「……………」

「まさか……………」

ミツヒデは穂乃果の手をつかんだ。

「さ、おれのものになれ……………」

「いや!!」

「抵抗しても無駄だ……………」

「この世は弱肉強食……………」

弱きものは強きものに屈するしかない……………」

「穂乃果から手を離しなさい!!」

海未が怒鳴った。

「またお前か……………」





やめろー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！

「っ…!!？」

ナオキは……

これまででなくくらいに怒っていた。

「言つたよな……」

おれの大切な人に手を出したら……

傷つけたら……許さないって……」

「言つたっけな？」

「ふざけんな!!! 殺すぞ!!!」

「っ…!!? (なんだ…こいつのこのオーラは……この威圧感……)」

「離れろ……みんなから離れろ!!! ミツヒデ!!!」

「ふっ…離れなかつたら？」

ポキポキポキ……

「ただじゃすまさねえぞ!!!」

(おれは屈するのか……ジャーナに……おれは……おれは……)



(やばい……完全に油断してた……)

パシン!!

平手打ちの音が響く……

「マ……チ……コ……」

「私……私!!」

今のお兄ちゃんなんて嫌い!! 大っ嫌い!!!

昔のお兄ちゃんの方が……好きだった……

私……昔のお兄ちゃんが好きだったんだもん!! 大好きだったもん!!」

マチコは泣きながら言った。

「マチコ……」

「昔のお兄ちゃんは……優しかった……でも……あんなことがあってお兄ちゃんは変わっちゃった……」

「あんなこと? それは一体……」

「ナオキ先輩……それは……」

「言うな!!これは命令だ!!言うな!!」

「ううん、言うもん!!」

それは……私が小学校6年生、お兄ちゃんが中学校1年生のとき……」  
マチコはミツヒデとマチコの過去について話し出した。

~~~~~

私とお兄ちゃんは元から『香川』っていう名字ではなかったんです。

元は……『土岐』という名字で岐阜県に住んでいました。

お父さん……だった人が『土岐』という名字でしたのでそれで……

でも……その人は……とてもひどい人だった……

その人はお母さんに暴力ばかり奮っていた。

私とお兄ちゃんは震えてなにもできなかった。

ただ……お母さんが叩かれたりするのをみていただけ……

でもお母さんは決して私とお兄ちゃんを恨まなかった……

そしてお母さんはお父さんの日常的な暴力に耐えられなくなり、私とお兄ちゃんを連れて大阪に住むことにしたんです。

そしてあの日……………

ピンポン……………

「はい……………つて……………ウソ……………」

お母さんはドアから来客者を覗いて驚いた……………

だつて来た客とは……………

「おーいーいるんだろ？開けろー！！」

それはお父さんだった……………

そしてお父さんは無理やりドアをこじ開け……………

お母さんを殺した………

「お母さん………」

お母さんは……弱いから殺された……弱いから強いお父さんに殺された……

弱いから……弱ければ殺される……

強ければ生きれる……

弱いものは強いものに屈するしかない!!

何度も言ってるだろ!!

だからおれは邪魔な存在……

弱いやつらを排除する!!!

それがおれが生きるため!!!

そのためならなんだってする!!!」

「お兄ちゃん……」

「だからマチコ……お前もおれに屈しとけばいいんだよ!!

みんな!!おれに屈しとけば」

「ミツヒデ……てめえ……最低だ……

お前はマチコのことを考えたことはあるのか!!

マチコがどんな気持ちで今まで過ごしてきたか……

わかってんのか!!!」

「……そんなの……」

「それに、お前のお母さんだってよ……」

弱いとか言うなよ……」

おれは強いと思うぜ、お前のお母さん……」

「は？なに言ってるんだ……」

殺されたんだ!!弱いに決まってる!!」

「だから……お母さんは……」

お前らを守って亡くなったんじゃないのか!!!」

「はっ!?!」

「そっだろ……だからおれはお前のお母さんは強いと思う……」

子供のために……」

大切な人のために命をかけたんだ……」

違うか?」

「そっだよお兄ちゃん……」

「黙れ!!黙れ黙れ黙れ黙れ!!」

うっせー!!

お前らは……おれに逆らうのか!!

お前らもおれの邪魔な存在だ!!」

「ミツヒデ!! てめえなあ!!」

ナオキはミツヒデの胸ぐらを掴んだ。

「くっ……」

「マチコは……お前を怖がっていた……お前を恐れていたんだぞ!!」

多分大坂学園の一部のやつらもきつとお前を恐れているかもしれない……」

「ふっ……それでいいんだよ……」

それが弱肉強食だからな!!」

「おれは弱肉強食はお前と違う意味だと思ってる……」

「あ? 弱肉強食の意味は一つだろ! それ以外なんてありやしない……」

「ま、確かにそれは強いものが弱いものを食らうってとれる……だがな……その弱いものは……肉となって……そして強いもののエネルギーとなる……力となる……」

おれはそう考えてる……違うか?」

「そんなの……ただの屁理屈だ……」

「それに……ヤマトさん、ユキさん、斉藤さん、佐藤さん、そしてチンギスカンは……」

お前に付いて来ている気がする……」

「……恐れずか……」

「ああ……少なくとも俺の目にはそうみえる……」

確かにマチコはお前を恐れていた……

だが少なくともチンギスカンたちはお前を恐れず付いて来てる……

疑うなら直接聞いてみる……」

「お前ら……ほんとうに……」

ミツヒデがチンギスカンたちの方をむくとチンギスカンたちは頷いた。

「ほらな……」

「はあ……」

でもそれでおれは変わらない……」

「……そうか……」

「……と思っただけだな……」

おれは……間違ってたのかもな……」

「ミツヒデ……」

ナオキはミツヒデの胸ぐらを掴んでいた手の力を緩めた。

「ふっ」

「!？」

ドスッ！

「ぐはっ!!」

ミツヒデはナオキの腹を膝で蹴った。

「ふふふ……ははははははは!!」

馬鹿め!!おれがそんなこと言うとても?

こうなったら最終手段だ………

覚悟しろ………」

ミツヒデは足を振り上げた。

「やめてー!!!」

絵里は叫んだ。

「くらえ!!!」

ドスツ!!

「ガハッ!」

ナオキは床に倒れ込んだ。

「うぜえーんだよ……お前は……いつもいつも……

くっ………」

ミツヒデはハサミを構えた。

「!?お兄ちゃん!!!それは!!!」

「うるせえ!!!おれの前から消えろ!!!ジャーナー!!!」

ミツヒデはハサミの刃をナオキにむけ、振り下ろした。

「ナオキー!!!」

絵里が叫んだ。

「ふん!」

ナオキはミツヒデの手首を叩きハサミを払い、そして腕を掴んで床に叩きつけた。

「うっ……離せ!!!」

「お前はまだわかんねーのか!!!」

お前は周りの人たちを力ずくで抑えようとした!!

だがな!!!心から付いて来てくれてる人もいるだろう!!!

「うるせえ!!おれは!!おれは!!!」

「だから!!もうその腐った弱肉強食は捨てろ!!!」

これ以上それを続ければお前を恨む人たちがでてくる……

それこそお前は殺されるぞ!!

お前は……マチコや……チンギスカンたちを悲しませたのか!!!

「そっくだよお兄ちゃん!!」

もうやめて……もう終わろうよ……こんなこと……」

「うるせえ!!うるせえ!!うるせえ!!!!!!」

おれは……このままでいい!!

そうじゃなきゃ、おれは……おれは……」

「ほんなら……ほんなら!!」

お前が昔のお前に戻れば喜ぶ人は何人いるんだ?

マチコだけじゃない……チンギスカンたちや……

亡くなったお母さんも喜ぶんじゃないのか?」

「!?昔のおれ……弱い……おれに?」

「違うよお兄ちゃん!!昔のお兄ちゃんは弱くない!!強かった!!」

「なにを言ってるんだマチコ!!!」

昔のおれは……弱い……

今の俺の方が強いんだよ!!!」

「違う!!!昔のお兄ちゃんは私がいじめられてた時助けてくれた!!」

あの時だってお母さんがいない時私を守ってくれた!!

だから私は昔のお兄ちゃんの方が好き!!

優しく、いつも遊んでくれて……

守ってくれる強いお兄ちゃんが好き!!!

今のお兄ちゃんは自分のことしか考えてなくて、優しい時もあるけどほんとうの優し

さとは違う何かで……

それに……今のお兄ちゃんは弱いよ……」

「弱い……おれが……昔の方が……強かった……?」

「そう……お前が思ってる強さは権力の強さだ……」

マチコの言ってるのは……『心の強さ』じゃないのか?」

「心の……強さ……」

「お前は……怯えてたんだろ?」

力がなければ殺されると思って…

力が弱ければ死ぬしかないと思って……」

「!?」

「そうか……おれは……おれは……うっ……」

「ミツヒデは涙を流した……」

「「「「「!?」」」」」

「お兄ちゃんが……泣いた……」

「うっ……うう……まん……」

「すまんかった……ジャーナ……」

「みんな……」

「ナオキは力を抜いてミツヒデを起こして手を出した。」

「ミツヒデ……」

「ジャーナ……」

「おれは……恨んでなかったが……お前は嫌い……だった……」

「でももういいんだ……」

「でもおれはお前に……」

「だからいいって!!」

だからさ……………

友達になろう……………」

「!?……………ジャーナ……………ああ……………」

ミツヒデはナオキの手を握った。

コンコンコン……………

ガチャ……………

「ナオキ……………」

「おじさん……」

「ミツヒデくんを渡してくれるかな……」

「言われなくても私は行きますよ……」

会長さん……」

「君がやったことは……わかっているかい？」

「はい……」

審査委員の数名を買収したり不正行為をしました……」

「よろしい……なら付いてきなさい……」

「はい……」

みんな……すまん……」

μ☒sのみなさんも……すみませんでした……」

ミツヒデは晋三に連れられて出ていった。

「ミツヒデ……」

「ナオキ先輩……」

「マチコ……」

「その……ありがとうございます！」

お兄ちゃんは……昔のお兄ちゃんに戻ったみたいです！あの目は……」

「そっか……」

「ナオキくん……」

「「ジャーナ……」」

「ヤマトさん、ユキさん、斉藤さん、佐藤さん、チンギスカン……」

「その……すまんかったな……」

「ヤマトさん……」

「その……μsのみんなにも……ナオキくんにも……ひどいこと言ったりしたな……すまんかったな……」

「いえ……もういいんです」

「その…ごめんね…」

「ユキさん……」

「ひどいことしたね……」

でもミツヒデくんは…あれがほんとうのミツヒデくんなんだよ……

ありがとう……」

「え…いえ……」

「ジャーナ……」

「……斉藤さん……佐藤さん……」

「……許してとは言わないわ……」

でも…あのときは…あんなこと言っちゃって……」

「それに…今までだって…いろいろなとやっちゃってさ……」

「ごめん……」

「もういいよ……元クラスメイトじゃん……」

「ジャーナ……」

「チングスカン……」

「……………」

「……………」

「……お前には謝っても謝りきれないな……」

おれはお前を一番苦しめてしまったのかもしれない……友達と思ってなかったとか……いろいろと……だから……ごめん……」

「いいよ……もう……」

「だからさ……」

ナオキはチングスカンに右手を出した。

「ジャーナ……」

「チングスカン……仲直りしよう！」

「また……友達になろうや……」

「……………ああ……………」

チングスカンはナオキの手を取った。

「じゃ、私たちはお兄ちゃんに付いていきます……」

「あははは……でもかっこよかったやん、ナオキくん！」希は言った。
「ほんと……かっこよかったわ……」

流石……私の恋人ね……」絵里は言った。

「な……なんだよみんな……照れるじゃんか……」ナオキは顔を赤くした。
「あー赤くなつた赤くなつたー！」穂乃果は言った。

「うるせー」

「でも……ナオキくん……」

「ん？」

「」「」「」「ありがとう！」「」「」「」

「……おれは……別に……なにも……」

「そんなことないわよ」

「絵里……」

絵里はナオキに抱きついた。

「ナオキは私たちを守ってくれた……」

私たちのために立ち向かってくれた……」

そして……あの人たちも……救つたの……」

「……………ああ……………」

ナオキは絵里の頭をなでた。

そしてその日はみんな解散したのだった……

そのころ……

「ミツヒデくん……君のやったことは普通は許されるものではない……」

「はい、わかっています……」

「だが……それで優勝していたらもつと厳しい処分をするけど……」

今回は買収された審査委員もお金を返却してきたし……
それに不正投票も行われなかった…」

「え!?!」

「ふっ……今回の件は内密に……な」

「……はいー」

ミツヒデは厳しい処分を免れた。

これもμ☒sのライブのおかげだろう…

μ☒sのライブが買収された審査委員や

不正投票しようとした人たちの心に響いたのだ……

「……………」

ナオキは会場の入り口で一人、誰かを待っていた。

「シベ……………」

「イズミ……………」

そう大坂学園の部活仲間で、裏切った者の一人、イズミである。

「すまん…待たして……………久しぶり……………」

「ああ…久しぶり……………」

そして沈黙が続いた。

「その…まずは優勝おめでとう……」

μ☒sのライプ……心に響いたよ……

だからおれは……おれたちはμ☒sに投票した……」

「そうか……ありがとう……」

「シベ……」

「すまんかった!!」

「……イズミ……」

「おれは……ミツヒデと一緒に共謀してお前を……陥れた……だから……」

「ごめん!!」

「……………ふふ……ふははははは……」

「な……なに笑ってんだよ!」

「いや……イズミが頭下げるのんって初めてだなあーって思ってたさ」

「笑うところかよ……」

「すまんすまん……で、イズミ……」

「なんや?」

「……………もう1回友達になろうぜ」

ナオキは右手を出した。

「いいんか？」

「当たり前だ……」

「……………ああ……………」

イズミはナオキの手を取った。

そして長い夜は終わったのである……………

次回へ続く……………

妄想外伝 「KKE団創立の日記念く絵里のフアングル」 プ〜

緋瀬絵里よ！

昔はよく『かしこいかわいいエリーチカ』なんて呼ばれたわ。

今でも呼ばれるけど……………

でもこういう光景をみるとやっぱり私たち『μs』は人気なんだなあーって思うわよね。

それは……………

「あ、握手してください!!」

「ええ…いいわよ」

「あ…ありがとうございます!」

最近をよく学校…音ノ木坂学院の廊下で握手を求められるわ……

ハラシヨ……………

「はいはい広がらない!」

通る人の邪魔だよー」

そう言って生徒たちの整理してくれてるのはこの学校の生徒会長で…

私の最愛の人で、私の彼氏の…

ナオキ……香川ナオキ……

ほんと……かっこいいわ……

そして30人ほどの生徒と握手した（途中で先生がいたような……）後に私はナオキと中庭に行った。

「お疲れ様」

そう言ってナオキはジュースを差し出してくれた。

「ありがとう」

私はそれを受け取って飲んだ。

もうフタは開けてあつたみたい。

流石ナオキね……

「いやあー『かしこいかわいいうエリーチカ』さんは人気ですなー」

「なによりナオキだってそうじゃない……」

だって列の整理してたときに途中で生徒と握手してたでしょう?」

「あ、バレてた……あはははは……」

「ふふっ……」

私たちつてほんとうに人気がでてきたのよねえ……

「さ、そろそろ部室に行きましよう！」

「そうだな」

そして私とナオキは部室にむかったの。

~~~~~

香川ナオキだ！

いやあー列の整理は大変だった……

おれの最愛の人で、おれの彼女である絵里、絢瀬絵里のファンは確実に多くなっている。

それはおれを含めて残りの全員に共通することだ。

みんなのファングループだってある。



おれのはたしか……

『OHN団』だったかな？

『Our Hero Naoki』の略だったな？

最初見た時は化学かと思つたよ……

ここだけの話、おれは絵里のファンでもある。

ま、当たり前だが……

それでちゃんと証拠……というか

その証？がある!!

それはだな……

## 『KKE団』

『KKE』とは『かしこいかわいいエリーチカ』を略したものだ。

で、話は戻すがおれは絵里のファングループのKKE団に所属している。もちろん入っている人全員が絵里のファンである。

ま、他のファンからすればおれ…

絵里の彼氏である香川ナオキという人物は羨ましい存在であろう…

そして恨まれてもおかしくはない…

でもこのファングループのたちは違う…

みんな絵里を愛してくれているし、

絵里の幸せを願ってくれている…

だから「ナオキ」という人物と恋人関係であることもなんら反発はない……のかな？  
でもその人たちのツイートをみてみると…

『くっそ！ナオキさん羨ましいなあー!!!』

『どうせ夜にあんなことやこんなことしてんだらうなあー!!』

『毎日チュツチュチュツチュしてるとか裏山!!』

「……………」

これ偏見すぎじゃね  
!!!???

ちよつと待って!!

なに!?

毎日チュツチュチュツチュって!!

なに!?

夜にあんなことやこんなことって!!

イミワカンナイ!!!

ま、否定はしない……………

そして!

KKE団といえぱやっぱり

『365日いつでもどこでもジョルチカパーティー』だらう!

これは絵里への愛を叫ぶんだ！

これはマジで楽しい……

前は『365日いつでもどこでもジョルチツカ祭り』だったけどいつの間にかわったんだろう……

ま、楽しいからいいんだけど！

この人たちは…KKE団の人たちは素晴らしい！！  
ハラシヨー！なんだ！！

とくに団長さん！！

あ、噂をすればなんとやら……

『シベリアさん、今いいですか？』

『いいですよー』

あ、シベリアってのはおれのネット上での名前

もちろんKKE団のメンバーのうち、シベリアがあんなオキだということは団長さんしか知らないわけで…

トップシークレット中のトップシークレットなのだ！  
ま、いつも団長さんとは絵里の話をしている……

~~~~~

仲のいい人とても連絡をとっているのかしら……

ま、まさか……

いえ……ナオキに限ってそんなことは……

「ねえ……ナオキ？」

「ん？どうしたんだ？」

「さつきから楽しそうに連絡をとっているようにみえるんだけど……」

「あ……ああ……Twitterのフォローさんだよ……趣味が合うんだよ」

「なるほど……」

よかった……

趣味が合う人啊あ……

歴史かしら？

「ちなみになんの趣味なの？」

「うっ……」

あら？

「なにかまずいことでも聞いた？」

「い……いや……」

~~~~~

「なにかまずいことでも聞いた？」

「い……いや……」

やばいやばいやばい!!

『あれだ、絵里のファングループの人と話してるんだよ』

『へ、へえー……私のファングループ……ねえ……』

ってなるのが怖い!!!

嫌われる!!??

ああああああああああ!!!

「あれだ、絵里のファングループの人と話してるんだよ!」

「え、私のファングループ!？」

「そんなのあるの!？」

予想と違う……

よかった……

「あ、ああ!すごいだろ?」

「うん!ハラシヨー!」

私のファングループかあ……」

~~~~~

「うん！ハラシヨー！」

私のファングループかあー……」

なあーんだ！

私のファングループの人とはなしてたんだ！

ん？ということは……

「ナオキもそこに入ってるの？」

「お……おう……」

ナオキの顔が赤くなった……

かーわいい……ふふっ……

「ねえねえ、どんな話をするの？」

「えーつと……絵里は可愛いとか……綺麗だとか……そんなところ……」

「……そう……」

体が熱い……

たぶん顔赤くなってるだろうな……

「……………なんだ……………」

「おれは絵里の彼氏であると同時に絵里のファンでもあるから……………な……………」
「うん……………ありがとう……………」

私のファングループに……………」

ナオキも入ってくれて……………」

嬉しいな……………」

「ねえ……………そのファングループには名前はあるの？」

「うん、あるよ……………」

『KKE団』っていうんだ」

「KKE?……………KKE:KKE……………なにかの略称？」

「ああ……………『かしこいかわいいいリーチカ』の略称だ」

「あ……………あれ、そんなに浸透してるのね……………あははは……………」

「確かあれっておれが考えたやつだよな？」

「ええ……………そうね……………懐かしいわ……………」

「ああ……………そうだな……………」

そう…『かしこいかわいいエリーチカ』はナオキが小さい時に考えてくれたの……
1度も忘れたことなんてない……

「なあ…絵里……」

「ん？」

どうしたのかしら……

~~~~~

「なあ…絵里……」

「ん？」

「愛してる……」

「ふふっ……私もよ……」

おれと絵里はみつめあい、  
キスをした……………

「お待たせしました……………た……………」  
「あ……………」

「ここでまさかの海未さんが襲来……

これは……………」

「……………こんなところで……………破廉恥です!!!」

「ぐふっ!?!」

海未の投げたカバンがおれの顔面に直撃した……

「ああ……………なんでいつも……………」



「ん？どうした絵里？」

「何やってるの？」

「え!?! あー……えー……… K K E 団の活動……」

「へー、どんなことしてるの？」

「え!?! えーつと………」

「こ、これは……… 話すべきなのだろうか………」

「どうすれば………」

「なにかまずいことなの？」

「そ、そんなことは……ない……よ？」

「ど……どうしよ………」

「ふーんなるほどー……… こういうことしてるのねー」

「あ!?! いつの間に!?!」

絵里にスマホを取られてしまった……

終わった………

「もう……」

あれ……赤くなってる……

「お……怒ってない？」

「う……うん……その……あの……」

「絵里……ん!？」

絵里はおれに優しくキスをした……

「んっ……ありがとう……」

「ほえ?……お……おう……」

「……」

絵里は顔を赤くしてモジモジしている。

これは……

「絵里……」

おれは絵里を引き寄せた。

「ナオキ……」

しやーね、祭りは中断だ……

「ちゅ……」

そしておれは絵里の唇に優しくキスをした。

「はぁ……ちゅ……」

おれが唇を離すと絵里はおれの唇に優しくキスを仕返した。

「はぁ……」

「ナオキ……んっ……くちゅ……あっ……」

「はぁ……んっ……くちゅ……くちゅ……はぁ……んっ……」

おれは絵里をソファーに押し倒してキスをして舌をいれた。

絵里もそれに応えてくれた。

「んっ……くちゅ……くちゅ……」

「あっ……ちゅ……あっ……」

おれは絵里の胸を揉んで、上の服を脱がせ、さらに胸を吸った。



「はあ……はあ……もう……おしまい……」

「ああ……」

「ナオキ……」

「ん？」

「これからも応援してくれる？」

「あたりまえだ……」

「これからも……愛してくれる？」

「あたりまえだ……」

と、きつとKKE団の人も言うだろう……



んー……おいしい♪」

希はワンカ〇でお肉を食べていた。

そりゃあ……いい肉の日割引があるから食べるよね！

## 第51話 「贈る言葉」

ナオキの部屋……

「うーん……」

ナオキは卒業式で言う送辞を考えていた。

「なんかいいのん思いつかねーかなあー……」

そしてナオキは手を叩いた。

「そうや！いい案思いついたらよかつたのに……」

思いついてないんかい！！！！

「!?誰かにつっこまれた!?」

「……気のせいか……」

ナオキはまた机にむかつて送辞を考えた。

1時間後……

ここで今までできた部分を確認しよう……

『送辞

在校生代表、香川ナオキ

卒業生の皆様、ご卒業おめでとうございます。』

「……………」

これ以上おもいつかねえええええええええええ!!!」

ナオキは頭をかかえて言った。

「じゃーね……ここは海未にでも頼むか……いやまて……確か……」

昨日の生徒会の会議にて…

『生徒会長なら送辞ぐらい1人で考えられますよね?』

『ま、ナオキなら大丈夫じゃない』

『そうそう！ナオキくんなんだから！』

『あははははは………』

「ぐおおおおおおおおおお!!!無駄にプレッシャーかけやがつてー!!!」

ナオキは頭をかかえて言った。

「もういいや………」

園田宅……

「ん？ナオキからですか………」

ナオキ『送辞無理』



「はあ……」

海未『今どれくらい考えてますか？』

画像が送信されました

海未『これだけですか……』

ナオキ『はい……すみません……』

フミコ『あははは……どんまいナオキくん』

真姫『だらしないわね……』

ナオキ『ごめんなさい……』

海未『それでは、卒業生への感謝の気持ちを書けばいいのです。

例えば文化祭とか、学校生活とか。あとは……』

ナオキ『歌……なんてどうだろう……』

海未『歌!』

真姫『歌!?!』

フミコ『歌!?!』

ナオキ『いや……歌だったら伝わるかなーって……贈る歌的な』

フミコ『そういえば音ノ木坂の卒業式って歌あるよね？』

ナオキ『この際それを送辞のところに持っていくんだ！』

真姫『いいんじゃない？』

「うーん……穂乃果が考えても同じようなことをやった気がしますね……」

海未『そうですね、それでよろしいかと』

フミコ『やっぱりナオキくんはやつたら出来る子ね！』

ナオキ『お……おう……』

それじゃ、ありがとう』

海未『いえ』

真姫『またなにかあつたら言つてね』

フミコ『いえいえー』

香川宅……

「よし……これでいける!!」

ナオキはまた送辞を書き始めた。

そして……

「できたあああああああ!!

あとは歌の方だな……………」

うーん……………」あ、そうだ……………」

西木野宅……………」

「またナオキから……………」

ナオキ『明日暇か?』

「ヴええ!? (な……………」何言ってるの!?!まさか……………」デ……………」デート……………」!?!)」

真姫『暇だけど……………」

ナオキ『いや、贈る歌の練習したいから、sの1、2年生を真姫の家に集めたいと

思ってます』

「なんだ……………」そういうこと……………」はあ……………」

真姫『わかったわ、なら明日の昼の13時頃に私の家に』

ナオキ『了解』

「部屋……片付けないと……」真姫は自室の片付けを始めた。

「あら、真姫……掃除なんかしてどうしたの？」真姫のお母さんが言った。

「あ、明日友達が来るから……」

「そう……ということはナオキくんも来るの？」真姫のお母さんは少し嬉しそうに言った。

「う……うん……」

「絵里さんは来るの？」

「こないわよ……」

「真姫、チャンスよ！」

「ヴええ!？」

「思いつきりアタックしちやいなさい！」

「ちよ……ちよつと待つてママ!？」

わ……私はそんなこと……」

「えーでも……例えばこうなるかもよー」

『あのー…真姫さん？』

『なに？』

『ちよつとくつつきすぎかと思うんですが……』

『い…いいでしょ別に……イヤ？』

真姫は上目遣いで言った。

『う……ま、どっちでもいいけど……』

『そう……』

真姫の腕に抱きつく強さが強くなる。

ナオキの顔は赤くなっていた。

『ねえ……ナオキ……』

『ん?』

『私……ナオキが好き……』

『ふえ!?ま……待て!おれには絵里が』

『そんなのどうでもいい……』

私を見て欲しいの……』

真姫は上着を少しずらして肩をチラつかせた。

『ちよっ……おまつ!』

『ナオキ……正直になってもいいのよ?』

『真姫!』

『キャツ……もう……強引なんだから……あつ……』

「というふうに…キヤツ♡」

「ならないわよ!!!もう!」

「ふふっ……じゃ、私は1度病院に行くからね」

「うん…いつてらっしやい」

真姫のお母さんは西木野病院に行った。

「ママ……何言ってるのよ……もう……ナオキは絵里のこととつても大好きなのに……  
そんなこと……」

翌日……

お昼頃……

ピンポーン……

「あ、いらつしやい……さ、入って」

「「「「おじやましませーす」」」」」

穂乃果、海未、ことり、凜、花陽、ナオキは真姫の家に行った。



リビング……

「で、みんなに頼みたいことがあるんだけど」ナオキは言った。

「二「頼みたいこと？」」「三」穂乃果とことりと凜と花陽は言った。

「ああ……実は送辞のことで……」

「送辞？」ことりと花陽は言った。

「なんだそんなこと？」穂乃果は言った。

「手伝うにゃー！」凜は言った。

「ありがとう……」

「でも広いから頑張らないとね！」

「うん！まずはどこからやればいいの？」

「二「ん？」」「三」ナオキと海未と真姫とことりと花陽は言った。

「ちよつと待て……お前らなにをするつもりだ？」

「掃除でしょ？」

「……………あ、その掃除じゃなくて送辞な……卒業式で読むやつ」

「「ああー」」

「あの去年絵里ちゃんが読んでたやつだね」

「にやにや？凧はわからないにやー」

「凧ちゃん……えつと……あ、あの生徒が読む眠たくなるやつ」花陽は言った。

「あーあれ！」

「それでわかるのね……」真姫は言った。

「ま、とにかくだ！」

それを手伝って欲しいんだよ」

「送辞を考えるのを？」花陽は言った。

「いや……実はな……歌を歌いたいんだよ」

「『歌？』」穂乃果とことりと花陽と凧は言った。

「ああ……多分みんな知ってると思うが……あの曲を歌いたいんだよ」

「あの歌……とは？」海未は言った。

「真姫がμ'sが活動休止したときに音楽室で弾いてたあの曲だ」

「ん？……ああ……あれね……あれなら簡単だしみんな歌えると思うわ」

「だろ？」

「ちよつとー！私たちはわからないよー」

「そうにやそうにや！」

「凧はともかく穂乃果は聞いたことあるでしょう？」

「ほえ？」

「穂乃果と初めてあった時…」

「…ああ！あれ！？あれならいいと思う！」

「ま、1度弾いてみるわ」

「頼む」

そして真姫は『あの曲』を弾いた。

「ああ…あれでしたか」海未は言った。

「確かにいいと思う！」ことりは言った。

「凜、この曲好きだにやー！」凜は言った。

「いい曲だよねー」花陽は言った。

「私もこの曲好きなんだ！」穂乃果は言った。

「そしてあともう1曲…これは卒業生、在校生で歌いたいんだ」

「…もう1曲!?」

「一応作っただけけど…」

「…作った!? ナオキ(くん)が!?」

「ああ……えつと……これだ」

「「「「ん？」」」」」

ナオキは歌詞カードと一緒にウォークマンを出した。  
そしてみんなそれを聞いた。

「うん！いいと思う！」穂乃果は言った。

「なんだか……卒業式にぴったりの曲だね……」ことりは言った。

「はい……流石ナオキ、いい歌詞ですね」海未は言った。

「そうね……いいメロディーだね……」

ピアノだけでもいけそうね」真姫は言った。

「なんだかうつとりするにやー」凛は言った。

「うう……なんだか涙が……」花陽は言った。

「よし、決まりだな……」

真姫、この曲ピアノで弾けるか？」

「やってみるわ」

「ねえねえ！穂乃果たちはなにをすればいい？」

「ああ……この歌詞カードを大量生産して欲しいんだ」

「いくつぐらいなの？」

「うーん…ざっと300ぐらいかな？」

「[[[[300!]]]]」

「だって…全校生徒の分と保護者と先生の分があるだろ？」

「さ、やりましょう！」

「お、流石海未だな！さ、やるぞー！」

「[[[[おー！]]]]」

そして夕方……

「終わったー……」

「疲れたにやー……」

穂乃果と凜は机にへばりついた。

「流石に疲れましたね」海未は言った。

「そうだねー」花陽は言った。

「もう手が動かないよー」ことりは言った。

「299…300つと……」

よし、みんなありがとうなー！

「ピアノの方も大丈夫よ」真姫は言った。

「真姫もありがとう！」

西木野宅前……

「それじゃ、おじやましました」海未は言った。

「また遊びに来るねー！」穂乃果は言った。

「うんうん！次は遊ぶにゃー！」凜は言った。

「あはははは……」ことりと花陽は苦笑いした。

「じゃ、みんな送ろうか。」

それじゃあな真姫」

「うん、また明日……」

「ああ……また明日」

そしてみんなは帰っていった。

「……………また……………明日……………」

小泉宅前……………

「それじゃ、花陽……………また明日な」

「うん、送ってくれてありがとうございます…」

ガチャ…

「あら花陽…おかえりなさい…」

そちらの男の子は？」

「あ、お母さん…この人がナオキくんだよ」

「初めまして！2年の香川ナオキです！

花陽さんとは一緒の部活です！」

「ふふっ…知ってるわよ」

「ほえ？」

「そりゃあ…あれだけ目立ってれば…ねえ？」

「それもそうだね」

「そうなのか!？」

「それじゃ、ナオキくん、送ってくれてありがとうね」

「いえいえ…じゃ、花陽…また明日な」

「うん！また明日…」

ナオキは歩いて行った。

「ねえ花陽…」



「ん？」

「ナオキくんって結構かっこいいわねー」

「な…何言ってるの!？」

「ふふっ…ま、頑張りなさい」

「ちよつとそれどういふこと!？」

「ふふふ…チャンスがあればとっちゃいなさいよ」

「もうお母さん…。(ダメだよ…だってナオキくんは絵里ちゃんのこと……)」

「あそこ開いてるかな……あ、開いてた……すみませーん」  
「いらっしやいませー」

香川宅……

「あらナオキ……おかえりなさい」

「絵里…来てたのか」

「うん、どこいったの？」

「ああ…ちよつと散歩…」

「そう…さ、ご飯作ってあるから早く食べて！」

「ああ…」

リビング…

「なあ…絵里…」

「ん？」

「……………いや…なんでもない……………」

「はやく寝ろよ…明日は卒業式やし」

「うん……………」

すると絵里はモジモジさせて顔を赤くした。

「ん? どうした?」

「いや……その……一緒に寝て欲しいの……ダメ?」

絵里はその状態で目をウルウルさせて上目遣いで言った。

「ああ……いいよ……」

「ほんと!? やったー!」

「ふふふ……かわいいな……」

ナオキの部屋……

「おやすみ……」

「うん……おやすみ……」

(おれは……絵里と……)

でも……なかなか勇気がでないな……ははは……寝よ……)

ナオキは一体なにを思っているのか……

それは今……ナオキしか知らない……

はずだった………

次回へ続く……



時は遡り……

沖繩……

「さーて…絵里へのお土産はなににするかなー……」

「ちよいとそこのお兄さん！」

「おれですか？」

「おうよ」

(怪しそう……)

ナオキが話しかけられたのはいかにも占い師がするフードを来た人だった。

「なんですか…宗教勧誘ですか…」

「ちやうちやう…おれは占い師や」

「あれ？関西の方ですか？」

「おーそうやねん、今はちよつと訳があつて沖繩にきとんねん」

「そうなんですね」

「でや…ちよつとこの石見てくれるか？」



するとその謎の男は石をだした。

「ハラショー……」

「綺麗やろ？」

「はい……この水色とピンク色の……」

なんていう石なんですか？」

「これはな『誓いの石』言うねん……」

『『誓いの石』……』

「ああ……この石はな…… とくに希少性がたかい占いの石やねん。

その石はな……占った相手にあつた組み合わせの色の石を渡すんや」

「ど……どれぐらい希少性なんですか？」

「うーん……そうやな……」

知る人ぞ知る石……あまり知られてへんし……プロの占いの師でも知らん人が多い……」

「ほえー……」

「あとは……そうやな……この道に金が落ちてたぐらいに驚くほどやな」

「ふあ!!」

「すごいやろ？」

「す……す……す……す……」

「で…兄ちゃん…好きな人はおるか？」

「はい…彼女がいます」

「そうかそうか…どれぐらい好きや？」

「この世で1番好き…誰よりも愛してる…」

その人がいないとダメになっちゃうぐらい…ですかね？」

「十分や…持ってけ泥棒！」

「ふあ!？」

そう言う謎の男はナオキに『誓いの石』を3つ渡した。

「ちよ…これ絶対高いやつでしょ!?!しかも3つも!？」

いくらですか!？」

「いらんいらん…君みたいな子が持った方がええねん…」

「でも…」

「その石の意味はな…」

まず水色は『誰よりも』、ピンク色は『愛する』を意味して合わせて『誰よりも愛する』

兄ちゃんみたいに一筋に愛を向ける人にピッタリや！」

「ういつす…」

「ほんでな…もう1個意味があんねん…」

「もう1個？」

「それはな……………」

そして今…………

「ん…………朝か…………」

懐かしいな…………あのときの…………

あのおっちゃん元気かな…………」

ナオキは時計を見た。

時刻は朝の6時……

「起床時間ピッタリや……」

ナオキはドヤ顔になった。

「あれ……絵里は……リビングかな……」

ナオキはリビングにむかった。

リビング……

ガチャ……

「あ、ナオキ起きたわね……おはよう！」

「おはよう」

絵里は制服の上からエプロンを着て朝ごはんを作っていた。

「あらまだ着替えてないじゃない……」

「はやく着替えなさい……生徒会はやめに行かなきゃダメでしょ？」

「そうだったな……」

ギョツ……

「ちよつと……」

ナオキは絵里を後ろから抱きついた。

「かわいいよ…絵里……」

「もう……はやくしないと遅刻しちゃうわよ」

「ああ……」

ナオキは部屋に戻って着替えてまたリビングに戻ってきた。

「ハラショー！ タイミングバツチリね」

「おつ、ちょうどできたところか」

「うん！ さ、食べて！」

「いただきます！」

食後……

「…なあ…絵里……」

「ん？」

「……最高の式にするからな」

「………うん………」

絵里はナオキにもたれた。

ナオキは絵里を引き寄せた。

「じゃ……おれは先に行くからな」

「うん……また学校で」

「ああ……いつてきます！」

「いつてらっしやい！」

音ノ木坂学院……

「はやく着きすぎたか……」

ナオキは廊下を歩いていた。

「あれ……電気がついてる……」

ナオキが部室の前を通ると電気がついているのに気が付いた。

~~~~~

音ノ木坂学院……

アイドル研究部部室……

「はあ………」

私、矢澤には部室を見回していた。

1年生のときから過ごしてきたこの部活……

でも最初は5人だったけど……

1人、また1人とやめていき、私1人になった……

でも……3年生になって……

10人になった……

なにより……”あの人”に再会できたこと……

たぶんその人は気づいてない……

ガチャ…

「なんだにこか…」

「ナオキ…」

「なにしてるんだ？」

「ちよつと思いい出に浸っていたところよ」

「そうか…卒業…できるんだな…」

「ぬあによ！その言い方!？」

「ははは…すまんすまん…」

”ここにーちゃん”

「そう…わかればいいのよ………」

って……その呼び方………」

覚えてたの？」

衝撃だった………」

忘れたと思っていた………」

でも……覚えてた………」

「まあ……ここに来た初日ににこの『ここにっここにー♪』をみたときに」
「でもあんたあのととき戸惑ってたじゃない！」

「あれは……頭に引つかかったからだ。」

それで家に帰ってわかった………」

「ここは……ここにーちゃんだつて……」

「そう……忘れてるのかと思つてたわ……」

「すまん……もつとはやく言いたかつたんやけど……ははは……」

「つたく……」

「そう……ナオキとは昔に会つて……」

『ここにー』というのを考えてくれたのは他でもない……ナオキ……

あのとき私の『にっこにっこにー♪』をみて、名前を覚えてなかつたから『ここにーちゃん』と呼ばれたのが最初だつた……

私にとって大切な思い出……

「でも、にこの本名は知らなかつたからなあー」

「そう言えば教えてなかつたわね」

「そうだな……ははは……」

「ていうかあんたそろそろ行かなくていいの？時間……」

「あ……やべー！海未に怒られる！」

「じゃーな！」

「また後で」

「あ、そうだ！」

「ん？」

「最高の式にするからな」

「ええ！期待してるわ」

そしてナオキは生徒会室にむかっていった。

「…思い出したんだっつたらはやくいいなさいよ…バカ…」

だつてナオキは私の……………

~~~~~

生徒会室……………

「ふう……………ギリギリセーフ……………」ナオキは言った。

「まったく……………どこでなにをしてたんだか…」海未は言った。

「間に合ったんだからいいじゃんか」

「穂乃果みたいなこと言わないで下さい！」

「ははは……」フミコは苦笑いした。

「はあ……」真姫はため息をついた。

「さあ！作業するぞー！」

「「おー」」

そして生徒会メンバーは体育館にむかった。

体育館……

「あ、ナオキくん！」

「どうした？ヒデコ？」

「去年の卒業式の記録って残ってる？」

「あー……たしかあったと思うぞ」

「ちよつと取ってきてくれない？」

「ああ……いいよ」

ナオキは生徒会室にむかった。

「あれは……希？」

ナオキはむかう途中、花壇で花を見る希を見かけた。

~~~~~

「こんなにつばい咲いたんやな……」

この3年間で……」

ウチ、東條希は花を見ていた。

この花はえりちとウチが初めてした活動……

ここに種植えて毎日水やりやってたなあー

「希……」

「あ、ナオキくん！どう？この髪型」

ウチは髪を撫でながら今日、このためにしてきた髪型のことを聞いた。

「ああ…すつごく似合ってる！」

希つて髪綺麗だよな」

「そ…そう…ありがとなあー」

ウチの顔…赤くなってるないかな？

「で、なんでここに？」

「いやあー、生徒会時代の思い出に浸ってたんよ」

「そうか…毎日水やりしてたもんな…」

「今もちゃんとやってくれてるみたいやね。お花さんたちが喜んでるわー」

「お、おう………」

ナオキくん少し顔赤くなってる……

かわいいなあー

「ふふっ……」

「なに笑ってんだよ……」

「いや…ナオキくんが照れてたから…ふふふふ……」

「笑うなよー…つたく………」

ナオキくんと話してると……

一緒にいるとやっぱ楽しいなあー

でも…ナオキくんはえりちを……

だつたら………

いま………

言うべきやろうな………

言いにくくなる前に………

「ナオキくん………」

「ん？ どうした？」

「ウチ……………」

「ん？」

「私……ナオキくんのこと……」

好き………一人の男の子として……好き………」

「え………」

風が吹いてきて私の……ウチの髪と花壇の花をサーッとゆらした……」

「どうして……今………」

「だって……あの沖繩から持って帰ってきたえりちへのお土産……」

「ああ……あの石のことか………」

「あれは『誰よりも愛する』の他にもう一つ意味がある……そうやる？」

「………」

「だから……ウチは今、ナオキくんに告白した………」

「ふっ……流石は希……わかってるな……」

「で、ウチへの返事は？」

「………希……ごめんな……」

お前の気持ちには応えられない…」

「そうやろね……その石を持つてるってことは……」

「まあな……」

「どうするんや？」

「いや……まだちよつと勇気がでねえーんだよ……」

「ナオキくん……ま、最後に決めるのはナオキくんやで……」

「ああ……わかつてる……」

「ま、じっくり考えり……」

「ああ……じゃ、おれそろそろ行くわ……」

「うん……」

「希……」

「どうしたん？」

「おれは希のこと、大切な仲間として大好きだよ。希が手伝いを勧めてくれなかったら今がないわけだし。」

だからおれは希とキヨリをおいたりなんかは絶対しないから……」

「ナオキくんならそう言うと思ってたよ……ふふっ……」

「そっか……じゃあな！絶対いい式にするからな」

「うん！あ、そうだ……えりち知らない？」

「絵里……さあ？一緒にはいなかったけど」

「そう……」

「また見つけたら言つとくよ」

「ありがとなー」

「それじゃー」

そう言い残してナオキくんは走って行った。

よかった……伝えられて……

~~~~~

生徒会室前……

(希……そうだったのか……)

ガチャ……

「あ、絵里……」

「あらナオキ……」

~~~~~

「あらナオキ……」

私が生徒会室で思い出に浸っていたらナオキが入って来た。

「なにしてるんだ？」

「ちよつと……思い出してたのよ……」

生徒会時代を……」

「そうか……」

「私ね……ナオキが来る前は……」

μ sに入る前はなにかに追われているような感じで……全然余裕なくて……維持ばかりはつて……ナオキにも当たったりしたわね……心配してくれたのに……」

「気にすることないさ……」

「ありがとう……でも、考えてみると……みんなに助けてもらってばかりだなーって……」

そう言つて私は窓から外をみた。

するとナオキは私を抱きしめてくれた。

「ちよつと……」

「おれさ……生徒会長やつて……」

絵里がどんなけこの学校を愛しているか……どんなけみんなのことを大事に思つてくれたのか……感じれた……

「ここには絵里の想いがぎつしり詰まつたからな……」

「ナオキ……」

そしてナオキは私から少し離れた。

「これは彼氏としてじゃなく、

現音ノ木坂学院生徒会長として……」

音ノ木坂学院の生徒のひとりとして言わせてもらおうよ……
ほんとうに……ありがとうございました……」

私の胸から……なにかが込み上げてきた……

「ナオキ……もう……式の前に泣かせないでよ……」
「すまんすまん……」

おつとそうだ……去年の卒業式の書類は……あつた」
「それを探しに来てたの？」

「ああ……ヒデコに頼まれてな。」

じゃ、おれは先に行くから」

「うん！また後でね」

「ああ！」

そしてナオキは生徒会室を出ていった。

~~~~~

「おつと、希」

「やっぱりえりちは……やったんやね」

「わかってたのかよ…ははは…」

「あら希！」

絵里は生徒会室から出てきた。

「じゃ、また後でなー」

ナオキは体育館へむかった。

体育館………

ただいま保護者がどんどん入ってきてます。

「保護者の方はこちらへどうぞー」ナオキたち生徒会は保護者の誘導をしていた。

「あ、ナオキさん！」

「ん？あ、こころちゃん…久しぶりだね」

「はい！」

「あら、あなたがナオキくんね」

「あ…あなたは？」

「にこの母です。いつも娘がお世話になってます」

にこのお母さんは一礼した。

「あ、これは…：…いえいえ！…：…こちらこそ！」

ナオキも一礼した。

「それでは…」

にこのお母さんと…、…ここあ、虎太郎は席へとむかった。

そして…：

いよいよ卒業式が始まった。



「それでは卒業生の入場です。

拍手でお迎え下さい。」

司会はフミコがつとめていた。

パチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチ……

大きな拍手が絵里たち卒業生をむかえた。

「……音ノ木坂学院はみなさんのおかげで、来年度も新入生をむかえることが出来ます。

心よりお礼と感謝を述べるとともに、卒業生のみなさんが輝く未来へ羽ばたくことを祝福し、あいさつとさせていただきます。おめでとうございます」

パチパチパチパチパチパチパチ……

長い理事長のあいさつも終わり、いよいよ送辞のときが……

(やべえ…緊張してきた……………)

「理事長、ありがとうございます。

続きまして、送辞。

在校生代表、香川ナオキ」

「はい！」

そしてナオキは壇上へとむかった。

「送辞。

在校生代表、香川ナオキ。

卒業生の皆さま、ご卒業おめでとうございます。

私は、唯一の模擬男子生徒としてこの音ノ木坂学院に転入してきました。

不安になることなどがたくさんありましたが、先輩方はそんな私に優しく接してくれ、アドバイスをくれたりもしました。

この学校生活でそんな先輩方の元気な声、優しい声かが聞けなくなると思うと悲しくなります。

さて、これからは先輩方にたくさんの方の困難が待ち受けているだろうと思います。

ですが、先輩方ならきつとどんな困難も乗り越えられると信じています。

最後に、先輩方への感謝の気持ちを込めて、この歌を歌います。」

そしてナオキは真姫に合図を出した。

真姫は壇上のピアノへとむかった。

「愛してるばんざーい！」

ここでよかつた。私たちの今がここにある。

愛してるばんざーい！

始まったばかり。明日もよろしくね。まだ。ゴールじゃない。」

ナオキは歌い出した。

あの曲を…『愛してるばんざーい』を……

真姫はピアノを弾いた。

「「笑つてよ。悲しいならふきとばそうよ。」

笑えたらかわる景色　晴れまがのぞく〜」  
 すると穂乃果と海未とことりは歌った。

「不安でも幸せへとつながる道が〜

見えてきた〜よな青空〜」

そして凜と花陽が歌った。

「ときどき雨が降るけど水が〜なくちやたいへ〜ん」

そして真姫が歌った。

「かわいちゃだめ〜だよ　みんなの夢の木よ育て〜」

そしてナオキは歌った。

「「「「愛してるばんざ〜い！」

ここでよかつた〜 私たちの今がここにある〜

愛してるばんざ〜い！

始まったばかり〜 明日もよろしくね　まだ〜ゴールじゃない「「「「

7人が歌った。

そして絵里、希、にこはじめ3年生のみんなは驚きを隠せない。

そして目をウルウルさせていた。

「さあー！」

『大好きだばんざーい！』

負けない勇気く 私たちは今を楽しもうく

大好きだばんざーい！

頑張れるからく きのうに手をふって ほら前むいてく』

ナオキがそう歌うと1・2年生の全員が歌った。

「さあー！みんなも一緒に歌おうー！」

『ラーラーラ ララララララララララ』

ラララ ラララ ララララララララーラ

ラーラーラ ラララララララララ

ララ ララララララララーラ

ラーラーラ ララララララララ

ラララ ラララ ララララララララーラ

ラーラーラ ララララララララ

ララ ララララララララーラ



続きまして答辞。

卒業生代表、絢瀬絵里」

「はいー」

絵里が壇上へとあがった。

「答辞。

卒業生代表、絢瀬絵里。

みなさん、本日は私たちの卒業を祝ってください、ありがとうございます。

私たちはこの学校が廃校になると知ったとき、『私たちには関係ない』

『私たちにはどうすることもできない』『私』がなんとかしなきゃ』など思っていました」

「絵里……」ナオキはボソツと言った。

「ですがそんなとき、ある3人の女子生徒たちが立ち上がってくれました。

この廃校の危機から学校を救うために。

そしてその思いはみんなに伝わり、その活動するメンバーも10人になり、この学校だけでなく私も救ってくれました。

ほんとうにありがとう」

「「「「「絵里（ちゃん）……」「「「「穗乃果と海未とことりとナオキと真姫と花陽と凜はボソツと言った。

「最後になりましたが、

今まで育ててくれたお母さん、お父さん、先生方、そして在校生のみなさんに感謝の気持ちを含めて歌を送ります。

卒業生起立！」

すると卒業生のみんなは立ち上がり、後ろをむいた。

そしてキョウコが壇上のピアノへとむかった。

卒業生が歌った歌は……

『Oh, Love & Peace』

パチパチパチパチパチパチパチパチ……

曲が終わると拍手がわいた。

卒業生は一礼し、絵里は席へと戻った。



「最後に全員で歌を歌おうと思います。

指揮、香川ナオキ。

伴奏、西木野真姫」

「はい！」

ナオキと真姫は壇上へとむかい、真姫はピアノへとむかった。

「みなさん、イスの下にある歌詞カードをみて歌ってください」

ナオキは言った。

そしてみんなはイスの下を触った。

すると封筒が貼り付けてあり、その中には歌う曲の歌詞カードが入っていた。

「曲名は『SENTIMENTAL Steps』です。

それでは……………」

ナオキはそう言う息を吸った。

「すれ違ってもくわからなくらい

大人になつた時にく

なつかしきへ変わるのになんて考えてたく」

「常に隣にいるから

それが当たり前すぎることを」

穂乃果と海未とことりが歌った。

「悩んだり笑ったり毎日の毎日がきつと続いてく」

真姫と凜と花陽が歌った。

「たのしいと思ういまを保存したい気持ち

初めて感じたんだよ」

穂乃果と海未とことりと真姫と花陽と凜は歌った。

『すれ違ってもくわからなくらい』

君も僕も大人になつた頃が想像できないく

だつてずっと一緒だから』

そしてみんながどんどん歌い出した。

「すれ違つてもくわからなくらい」

歌詞カードにないところを穂乃果と海未とことりが歌った。

「君も僕も大人に」

歌詞カードにないところを凜と花陽は歌った。

「なつた頃がく想像できない」

歌詞カードにないところを真姫とナオキは歌った。

「「「「だつてずっと一緒だから」」」」

「せーの！」

『木漏れ日のなかへ呼んでみたけど』

風がふいにかき消す

一瞬なんだかく切なさへとく 景色が揺れ動いた

景色が揺れ動いた』

そして会場全員が歌った。

しかし3年生はみんな涙を流していた……

「ありがとうございます！」 ナオキは一礼した。

そしてまた拍手がわいた。

ナオキと真姫は席へと戻った。

「それでは卒業生が退場します。

拍手でお見送りください」

パチパチパチパチパチパチパチパチパチ……

卒業生が退場する……

そして卒業式は終わった。

「終わった……か……」ナオキは言った。

「成功してよかったですね」海未は言った。

「さ……あとは“あれ”だね！」穂乃果は言った。

「うん！」ことりは頷いた。

「はやく戻るにやー！」凧はそう言って走って行った。

「あ、凧ちゃん待ってよー」花陽は言った。

「もう…転ぶわよー」真姫は言った。

「にやー！」

ドテン！

「だから言ったのに……」真姫は言った。

「「「「ははははは………」」」」

みんなは笑った。

「うう……」凧は鼻をおさえていた。

「つたく…大丈夫か？」

ナオキは凧に近づいて言った。

「うん……」

「さ、みんな部室に行くぞー」

「「「「はいー」」」」

「ことりちゃん……」

「なに？」

「ちゃんと”あれ”は準備できてる？」

「うん……大丈夫だよ」

「楽しみだねー」

「うん」

ことりと穂乃果はなにやら小声で話していた……

次回へ続く……

第53話(2nd Season)愛しい君と(章末回)

「どんなときもずっと」

前回の妄想物語！

ついにウチら3年生の卒業式！

その前にウチの気持ちをナオキくんには伝えられた

「1人の男の子として……好き……」

「………希………ごめん………」

まあ………そうやろうなあー

そして最高の卒業式も終わって……

「さ………あとは”あれ”だね！」

音ノ木坂学院……

アイドル研究部部室……

「ちよつと待て！これは……」

「ええー着てよー」

「やだ！絶対にやだ!!」

「ナオキくうーん……おねがぁい！」

「うっ………はい………」

3年生教室……

「みんな卒業おめでとう……うう……」

担任は泣いていたとき……

「先生泣きすぎやーん」希は言った。

「はは……すまんすまん……」



さて、これで高校生活も終わった訳だが、みんなはそれぞれの未来へと羽ばたいて行く……

ほんとうにお疲れ様！ありがとう！」

パチパチパチパチパチパチパチパチ……

(くっそ……なんでおれが……そろそろ終わるかな?)

ガラガラガラ……

「あ」キョウコが出てきてナオキを見て言った。

「キョウコさん……お……おめでとうございます」

「どうしたのキョウコ……」

「カオリー、どうした……」

カオリーとクミコも出てきた。

「あ……どうも……」

「か……………」

「「かっこいいー！！」」

「ふあ!？」

「ナオキくんそんな格好してどうしたの!？」カオリは言った。

「い…いや…部活で……………」

「うんうん!すつごく似合ってるよ!」クミコは言った。

「あ…ありがとうございます」

「なになに? 私たちへの卒業祝かな!？」キョウコは言った。

「あははは……………」

「なに騒いでるのよ…………つてナオキ……………」

「あ…ここに……………」

「ハラシヨ……………」

「絵里……………」

「なんで執事の格好してるん?」

「希……………」

そうナオキはことりたちの陰謀により執事の格好をさせられていたのだ。

(あ……いやいや……ちゃんと仕事は果たさなければ……)

「コホン……絵里お嬢様、ここお嬢様、希お嬢様……お迎えにあがりました」

ナオキは手を胸に当てて頭を下げて言った。

「「え？」」

「さ……こちら「キャー!!」……ん？」

すると3年生の集団がナオキを取り囲んだ。

「写真撮ってー!!」

「私も私もー!!」

「あ……えつ……えつと……その……た……助けて……」

10分後……

「お……終わった……」

「お疲れ様……」絵里は言った。

「で、『お迎えにあがりました』ってどういうことよ？」にこが言った。

「あ、そうだった……あらためて……」

お迎えにあがりましたお嬢様方……

さ、こちらへどうぞ……」

「「？」」

絵里と希とにこは執事姿のナオキに連れられて廊下を歩いた。

このとき女子の軍団にキャツキャ言われたのは言うまでもない……

「さ、着きましたよ」

「「（ん）は……」」

連れてこられたのは部室だった。

「さ、どうぞ……お入りください……」

ガラガラガラ……

絵里と希とにこは不思議に思うも部室に入っっていった。

すると……

「「「「卒業、おめでとうございませ〜!!」」」」」

穂乃果と海未とことりと真姫と花陽と凜は言った。

「ふふっ……さあ、パーティーの時間ですよ…

絵里お嬢様、希お嬢様、にこお嬢様…」

「「パーティー?」」

「それじゃあ!3年生の卒業を祝って……カンパ〜イ!!」

「「「「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

「「お別れ会？」」

「うん！だつてやつときたいじゃん！こういうの！」穂乃果は言った。

「でもなんでナオキが執事姿なの？」絵里は言った。

「聞かないでくれ……」ナオキは言った。

「えつとねー、私が準備したのー」ことりは言った。

「ことりが？」にこは言った。

「うん！この方がいいと思つて！」

それにナオキくんにも一度着て欲しかったんだあー」

「うんうん！」穂乃果は頷いた。

「うう……」

「あはははは……」絵里とにこは苦笑いした。

「でもウチは似合つてると思うで！」

執事さん

「その言い方やめろ!!」

「あれー？この希お嬢様にそんな口聞いていいんかなあー？

執事……なんやろ？」

「ぐぬぬぬ……希……」

「ん？なんて？」

「……いいえ……お茶をお入れしましょうか？」

希お嬢様……」

「お願い！」

「あ、私もただこうかしらナオスチャン」

「なんだそのネーミングセンスゼロの名前は……」

「ん？なにか言った？ナ・オ・ス・チャ・ン」

「いいえ……かしこまりましたにこお嬢様」

「あ、じゃあ私も」

「はい！絵里お嬢様！」

「なんで絵里（えりち）だけそんな反応いいのよ（いいん）!？」

「だって絵里お嬢様ですのよ」

「あつ……（察し）」

「絵里お嬢様……次はなにをいたしましょう？」

「うーん……なら……あーん”して」

「よろこんで……」

「「「「ちよつと待てー！！！！」」」」」

絵里とナオキ以外が言った。

「はい、何でしようか？」

「な……なななななにしようとしてるのですか!?」海未は言った。

「だから”あーん”だよ”あーん”」

「えりちもなんでそんなことお願いするん!?」希は言った。

「だって……して欲しかったんだもん……／／／」絵里は顔を赤くして言った。

「じゃあ、穂乃果にもして！」

「はい？」

「じゃあ、ことりも！」

「はあ!？」

「凜も凜もー！」

「凜まで……」

「じゃあ、ウチもー」

「おいおい……希……お嬢様も」

「し……仕方ないわね……わ……私にさせてあげるわ！」



「なんでそんなに上から目線なのかねーにこ…お嬢様は……」

「べ…別に私はして欲しくないんだからね！はやくしなさいよ」

「どっちなんだよ本物のお嬢様は！」

「じゃあ…私も……」

「花陽まで!？」

「なら……私も……」

「海未まで!?!どうなってんだ!?!天変地異かよ!?!」

「ちよつとみんな!?!」

「最初は私よ!」

「そうだ!それは譲れない!」

「だから絵里のが終わるまで順番でも決めてろ!」

「順番はじゃんけんで決めた。」

『じゃあ、絵里……なにがいい?』『お嬢様……っつてっつけて……』

『あ、すまん……コホン……絵里お嬢様……なにをお召し上がりになりますか?』

『それじゃあ……ポツキーを頂戴』

『はい……どうぞ……』

『………／／／』

『ん?お召し上がりにならないんですか?』

『その……ポツキーゲーム……して……欲しいなーっつて……／／／』

『えっ!?!』

『ダメ?／＼／＼／＼』

『い……いえ……よろこんで……』

そして2人は1本のポツキーをくわえた。

ポリポリポリポリポリ……

『チュツ………』

『ん…… (絵里……最初から……ならおれも……) くちゅ……』

ナオキは絵里の肩を掴んで舌を入れた……

(………つてならねーかなあ………)

ごめんなさい……さっきのはナオキくんの妄想でした。

「えつと……それじゃあそのチョコ食べさせて!」

「かしこまりました……はい、あーん……」

ナオキは四角いチョコレートをつまんで絵里の口へと運んだ。

「あーん……んー美味しい！」

ナオキに食べさせてもらうのは違うわね」

「なによりです、絵里お嬢様……」

（はあ……ならないか……）」

「次は私ね……」真姫は髪の毛をクルクルして言った。

「次は真姫お嬢様ですか」

「ヴェえ!!なんで私までそう呼ぶのよ!?!／／」

「ダメでしたでしょうか?」

「う……べ……別にいいけど!／／／」

「それじゃ……そのトマトをお願いするわ」

「トマト…そんなのあるの……っ……ってあるし……」

「さ、早くしなさいよ……」

「(真姫が一番お嬢様っぽいのはなぜだろう……) はい、あーん……」

ナオキは切つてあるトマトをお箸でつかんで真姫の口へと運んだ。

「あーん……うん、ご苦労だったわね」

「はっ！」

「次は私よ！」

「次はにこお嬢様ですか……なにがよろしいでしょうか？」

「そうねえ……それじゃ……そのポテチ頂戴」

「はいかしこまりました……」

はい、あーん……」

ナオキはポテトチップスをつかんでにこの口へと運んだ。

「あーん……ご苦労様、ナオスチャン」

「まだその呼び方……」

「何か言った？」

「い……いえ、よろこんでいただけてなによりです」

「はいはーい！次は穂乃果だよ！」

「次は穂乃果お嬢様ですか……」

なにがよろしいでしょうか？」

「え!?穂乃果も……お嬢様?／＼」

「なにか悪いことでも?」

「え…う…うん!なんでもない!// //

んーとねえー…じゃあ、いちご!」

「はいかしこまりました…」

はい、あーん…」

ナオキはいちごの葉っぱのところをつまんで穂乃果の口へと運んだ。

「あーん…んー…おいしい!ありがとう!」

「いえいえ…」

「次は私です…」

「次は花陽お嬢様ですか…なににしましょうか?」





「はい、まあ……」

「えつとー……それじゃあ……チーズケーキくださいな！」

「かしこまりました……」

はい、あーん……」

ナオキはチーズケーキを切ってフォークでさしてことりの口へと運んだ。

「あーん……んー……おいしいー」

「はい、よろこんでいただけただけなによりです」

「次はウチやでー！」

「次は希お嬢様ですか……」

なににいたしましたでしょうか？」

「そうやねえー……じゃあ、ポツキーくれるかな？」

「ポツキー!？」

「ん？なにか悪かった？」

「いや……別に……かまいませんよ……」

「はい、あーん……」

ナオキはポツキーのチョコじゃない方を持って希の口へと運んだ。

「あーん……ポリポリポリポリ……うん、ありがとう」

「いえいえ……（ま、そんなわけではないか……）」

「次は凜にやー!」

「次は凜お嬢様ですね……」

「なにがよろしいでしょうか？」

「あ、凜にも付けてくれるんだ／＼／＼えへへ……」

うーんと……じゃあラーメンはないから……サンドウィッチがいいにや！」「かしこまりました……」

はい、あーん……」

ナオキはサンドウィッチをつかみ凜の口へと運んだ。

「あーん……ありがとにやー」

「いえいえ……」

「よ、よろしくお願いします！」

「海未お嬢様、なにを……緊張なさっているのですか……ほら、肩の力をお抜きになつて

……」

「そ……そうですね……ふう……」

っていうかなんで私まで!?!?!/!/!/!

「ダメ……でしようか？」

「い……いえ……そんなことは……/!/」

それでは執事さん、お願いします」

「はい、なににいたしましたししょう？」

「それでは……そのほむまんを……」

「かしくまりました……」

はい、あーん……」

ナオキはほむまんを半分に割って海末の口へと運んだ。

「あ……あーん……あ……ありがとうございます……(ぎ)ぎいます……」

「いえいえ……」

「「「「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」

ぶしゅー……」

絵里以外のメンバーが頭から湯気をだして顔を赤くしていた。

「どうかしましたか？お嬢様方……(ニヤニヤ)」

「ははは……」 絵里は苦笑いした。

「そういや、ミツヒデは会長やめて、次期理事長を辞退したらしい」

「そうなの？」

「ああ……でもな、そんなミツヒデを見て大坂学園のみんなはミツヒデが会長にふさわしいって言ってるみたいだ」

「へー……ふふっ、それもナオキのおかげかもね……」

「そんなことねーよ……／／／」

それから10分後……

ここは部室の自分の荷物を整理していた。

「あれ全部にこのやったんか……」 ナオキは言った。



そして花陽はマントをかけて、王冠をかぶり、伝伝伝を持つていた。

黒板には『部長』と書かれていた。

「無理無理無理！ タ、レ、カ、タ、ス、ケ、テ、エ、!!」花陽は言った。

「アイドル研究部の部長はアイドルに詳しくなければならぬ……」

そしてこの中でアイドルに一番詳しいのは花陽よ！」にこは言った。

「でも……それなら穂乃果ちゃんが……」

「私はそんな部長だなんて……あはははは……」穂乃果は言った。

「まあ……任せられないですね」海未は言った。

「むうー……そう言われるとなんか腹立つなあー……」穂乃果は頬をふくらまして言った。

「でも……私が部長だなんて……」

「凜だつてμ，sのリーダーやったんだよ！かよちゃんならできる！」凜は言った。

「そうよ……一番適任でしょう？」真姫は言った。

「でも……」

「できるわよ……あなたなら！」

「こんなにたくさん……助けてくれる仲間がいるんだから！」

「にこちゃん……」

「もつともつと賑やかな部にしといてよね！また遊びに来るから！／／」にこは顔を赤くして言った。

「………わかりました……私、部長やります!!」

「ああ……任せたぞ！花陽！」ナオキは言った。

「うん！」

「それじゃあ音楽室に行くよー！」

「「え!?!」」



穂乃果がそう言うのと絵里と希とにこは驚いた。

「ちよつと待って！先に着替えさせてくれよ！」ナオキは言った。

「よーし！レッツゴー!!」

穂乃果は走って行った。

「ちよつと待ってください！」

「穂乃果ちゃんーん」

海未とことりは走って行った。

「凜たちも行つくよー！」

「うん！真姫ちゃんも！」

「ヴェえ!？」

凜と花陽と真姫も走って行った。

「じゃ、お先にねー！」

にこは走って行った。

「じゃ、ウチらも行くかうか！」

「ええ！」

「すまん…先に行つといてくれ…」

希と絵里は走って行った。

「……………どうしよかな……………」

ナオキは服を制服に着替えた。

「やっべ…遅くなったか……………」

ナオキは廊下を走っていた。

『羽のように、腕あぐげて

まぶしい未来へと、飛ぶよ』

「あ、もう歌ってたか……………」

ナオキは音楽室に入った。

みんなはもう歌っていた。

『きつと青春がきこえる！ その瞬間にきこえる！』

笑顔ならいつの日も大丈夫！』

真姫はピアノを弾きながら、

あとにはここ、海未、ことり、穂乃果、絵里、希、花陽、凜と並んでいた。

ナオキは穂乃果と絵里の間に入った。

『きつと青春が聞こえる！ その瞬間が見たいね！』

隣に君がいて～ (嬉しい景色)

隣は君なんだ～』

「さ、もう一回行くよー！」

せーの！」穂乃果は言った。

『きつと青春がきこえる！ その瞬間にきこえる！』

笑顔なら～いつの日も大丈夫！

きつと青春がきこえる！ その瞬間がみたいね！

隣に君がいて～ (嬉しい景色)

隣は君なんだ～』

「もう！ナオキくん遅いよー！」穂乃果は言った。

「すまんすまん……あははは……」ナオキは言った。

「ほんとに着替えちやっただなあー……」ことりは言った。

「もう絶対着ないからな！」

「えー」にこは言った。

「かつこいいと思うんやけどなあー」希は言った。

「う……うっせー／＼／＼」ナオキは顔を赤くした。

「もう……着てくれないの？」絵里は言った。

「うっ……だ……ダメだ！」

絶対着ないからな！」

「「「「「「ナオキ（くん）……………」」」」」」」

みんなは目をウルウルさせてナオキを見つめた。

「うっ……………はあ……」

わかったよ……また着てやるから……」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

「で、これからどうするの？」絵里は言った。

「えっと…そうだな…どうする？」 ナオキは言った。

「それじゃあさーみんなで校舎見てまわろうよ！この10人でつてのは最後なんだし！」

「「「「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

「あれ？」

「言つたにや!!」凛は言った。

「ふえ？…ああ!!」

「ははは…言いやがったな…穂乃果さーん」 ナオキは言った。

「”最後” つて言つたらジューズー本つて約束だよ！」 ことりは言った。

「ええー!？」

「なんか女子に奢ってもらうのは悪いーなあー」

「はっ!?!じゃあ！ナオキくんが奢つてよ！」

「それとこれとは別…前にいっばい奢つたじゃねーか」

「えー!？」

「大人しく観念しろ」

「……………はい……………」

中庭……

「ううう……」

穂乃果は財布を見ながら言った。

「穂乃果の奢りのジュースは……おいしいな……ふふつ……」 絵里は言った。

「穂乃果ちゃん、ありがとう」 希は言った。

「どういたしまして……」

穂乃果は財布を閉めた。

「穂乃果さんあざーっす」 ナオキは言った。

「もう！穂乃果をからかかってるの!？」

「うん」

『『うん』 って!?!』

「そういえば最近パン食べてないわねー」真姫は言った。

「うん、ラブライブ!もあつたし我慢してたんだ…」穂乃果は言った。

「でも昨日確かパン屋さんで…」うわああああああ!!」…って…口塞ぐな!」

穂乃果はナオキの口を両手で塞いだ。

「もう!ナオキくん酷いよ!」

「穂乃果……」海未は穂乃果を睨んだ。

「うっ……だつて食べたかつたんだもん!」

「確かにあのとき袋いっ…」うわああああああ!!」痛い痛い痛い!し…死ぬ……」

穂乃果はナオキの首をしめた。

「あ、ごめん…つい…」

「はあ…はあ…はあ……『つい』 ってな…」

「さ、はやく校舎をまわるにやー!」凜は言った。

「そうね…さ、行きましよう」にこは言った。

そして10人は校舎をまわるのだった。

アルパカ小屋……

→

地味にアルパカ初登場 W W W

「久しぶりーもふもふー」ことりは白い方のアルパカに抱きついて言った。

「メエエー……」アルパカ（白）、通称パカさんは言った。

「久しぶりだな……よしよし……」ナオキは茶色の方のアルパカをなでた。

「メエー……」アルパカ（茶）、通称アルーさんは言った。

「ナオキくんになついでるにや……」凜は言った。



「おれたち仲良しなんだよ！」

「な？」

「メエー」

「ほら、こいつも『そうだ』って言ってるだろ？」

「そうなのですか？」海未は言った。

「はあああああ!!？」

「ん？絵里どうしたんだ？そんなに離れて……」

「い……いや……別に……」

「そうか？……なんかあったのか？」

「メエエー……メエ……メエエーメエエー……プツ……」

「まじか……絵里にそんなことが……あはははは……」

「ナオキくん、なんて言ったかわかるん？」希は言った。

「ああ……こいつによると『その人が私のこと「かわいいかしら？」って言ったからつば

かけてやった』だってさ」

「おっ、正解！」

「もう……／／／／／」

「ナ……ナオキくん！」

「ん？どうしたことり？」

「ナオキくん……アルパカさんとお話できるの!？」

「え？ああ……言ってることは多少わかるけどな」

「じゃあ、こつちのパカさんは？」

「ああ……ちよつと待ってな……」

なにか言ってみて……」

「メエエー……」

「おいこら！なに言ってるんだ！」

「え!?なんて言ってるの？」

「い……いやあ……『おれは知ってるぞ！お前がその金髪の人といつもイチャイチャしてることを！』どうせ家でもあんなことやこんなことして毎日チュッチュチュッチュしてんだろ?』って……」

「あの短い言葉にそんな意味が……」穂乃果は言った。

「ナオキくん！私を弟子にしてください!!」ことりは頭を下げた。

「おう！役に立つかわかんないけどいいよ！」

「よろしくお願いします！」

「でもアルーさん、随分太ったにやー」

「そうね……」にこは言った。

「待って！」

真姫はアルーさんのお腹を見た。

「もしかして……これ……赤ちゃんじゃ……」

「……………えー!?」

「フツフーン」パカさんは言った。

『『ドヤ』 って……お前な……ま、おめでどうアルーさん、パカさん!』

「やったー!これでまた賑やかになるね!」花陽は言った。

「メエーエ」

「花陽に『ありがとう』だつてさ」

「え!?私に!？」

「いつも世話してたんだろ？」

喜んできたぞーこいつら」

「そ……そんな……／／／」

「赤ちゃん……ねえ……」希はそう言うとなオキと絵里を見た。

「……………ん?」

「メエー……メエーエ」

「はあ!? おまつ…パカさんなに言ってるんだよ! // // //」

「え? なんて言ってるの?」

「え……なんでもねえよ! // // //」

(言えない…『はやくお前もあの人の間に子供作っちゃえよ』って言ってたなんて……)

「じゃ、次行こう!」穂乃果は言った。

「じゃあなアルーさん、パカさん、また来るわ」

「メエー!」

『『待ってるよ』…か……ああ…また来るよ』

講堂……

「わー! 久しぶりに立つとやっぱりひろ……くない?」穂乃果は言った。

「そう感じるの私たちが少しだけ成長できたということかもしれない」海未は言った。

「まだ信じられないもんね…」花陽は言った。

「うん…」ことりは言った。

「ラブライブ!のステージで歌ったなんて……」

「なあ…次行くところ…おれが決めていいか？」

「ナオキくんが？」

「別に構いませんが……どこへ？」

「それはな……」

校舎の端っか……

「……だ……」

「……」「……うわぁー」「……」

そこには桜の木がたくさんあった。

「綺麗だねえー」穂乃果は言った。

「だろ？」ナオキは言った。

「こんなところがあつたなんて……」にこは言った。

「結構お気に入りの場所なんだ……こここの芝生は寝心地いいから……」

ナオキは芝生に倒れ込んだ。

そしてみんなが寝転んだ。

希、絵里、ナオキ、ことり、穂乃果、海未、真姫、にこ、花陽、凜の順番で……

みんな気持ち良さそうだった……

穂乃果は空を見上げて笑った。

そして絵里も……

「最初に9人で歌った時も……こんな青空だった……」

「あっ……」

「そう思ってたんやろ？」

「そういやそうだったな……」

あのオープンキャンパスの日は……」ナオキは言った。

「ふふっ……ええ……」

「ウチも……そう思ってたんや……」

「きつとみんなも……だろ？」

数分後……

「あれ？みんな寝てるし……」

ナオキがまわりをみるとみんなスースーと音をたてていた。

(さて……そろそろ決めなきや……)

10分後……

「……ん……あれ？寝てた……」絵里は起きた。

「よっ、おはよう」

「おはよう……ナオキは起きてたの？」

「まあな……みんな寝ちまったし……」

「ふふっ……そう……」

「さて……起こすか……」

「起こすって……どうやって？」

「まあ……見てろって……」

ナオキは立ち上がった。

「ナオキ!」

「スーーーーッ……………」

起きろーーーーー!!!

「「「「「うわあ!」「「「「「」

「はははははは……………おはよう」

みんなびっくした顔でナオキを見た。

「もう…………びっくしたやん…………」希は言った。

「そうよ…………もつと静かに起こしなさいよ」にこは言った。

「びっくしたよー」花陽は言った。

「もう…………子供ね…………」真姫は言った。

「んー…………よく寝たにやー!」凜は言った。

「でも気持ちよかったですね」海未は言った。

「うん!また来たいね!」ことりは言った。

「うん!またここで昼寝しよう!」穂乃果は言った。

「昼寝ばっかかよ…………」ナオキは言った。



「いいじゃん別に！」

「ふふふ……さ、次はどこに行く？」絵里は言った。

「あとどつかまわってないところある？」にこは言った。

「そうやね……」希は言った。

「……あ……屋上……」穂乃果は言った。

「そうか……屋上に行つてなかったな」

「それじゃあ、行きましようか！」海未は立ち上がった。

ピューーーーー

「キヤツ!？」

「あ………みえた………むぐっ！」ナオキは口を塞いだ。

海未はナオキを睨んだ。

「見ましたか……」海未は言った。

「え？な……なんのことかな？」

さ、屋上へ………行こうか………」

「ナーオーキーーーー!!!」

「お……おれは悪くねーぞ!!」

悪くねーからなーーーー!!!」

ナオキは走った。

「待てー！ー！！！」

海未はナオキを追いかけた。

そのあと捕まって説教されました……

「そうだ！最後だしさ、練習着に着替えてこいよ！」

「あ！言った!!」

「はあ!?!」

そしてナオキはジュースを奢らされたのだった……

廊下…

ナオキは1人、屋上へむかっていた。

ドタドタドタ…

「ん？」

ナオキは後ろを振り向いた。

「ナオキくーん!!」

「お、穂乃果!早かったな」

「うん!さ、行くよ!!」

「ちよっ…引っ張るなあー!!」

穂乃果はナオキの手を引っ張って屋上へと走った。

屋上…

「とうちやくーく!」穂乃果が飛び込んできた。

そしてみんな続いて入ってきた。

「はあ…引っ張るなよ」

「えへへ…ごめんごめん…」

「さ、歌おうか！」

「「「「「「歌う？今から？」「「「「「」」

「ああ……ちようど……いい曲があるだろう？」

みんなは最初はわからなかったみたいだがわかると笑顔で頷いた。

そしてことり、希、凜、穂乃果、にこ、ナオキ、絵里、花陽、海未の順番で並んだ。  
そしてナオキは音楽を流した。

歌ったのは……

『どんなときもずっと』

空には小鳥が10匹飛んでいた。

その白い羽が屋上に降ってきた。

そしてみんなはその1枚をつかんだ。

「「「「「「ふふふふ……」「「「「「」

みんなは……笑いあった……

「ふう……スッキリした……」ナオキは言った。

「屋上……か……」穂乃果は言った。

「考えてみれば……練習場所がなくてここで始めたんですよね……」海未は言った。

「毎日ここで集まって……」ことりは言った。

「毎日練習した……」真姫は言った。

「できないことをみんなで克服して……」穂乃果は言った。

「ふざけたり……笑ったり……」絵里は言った。

「全部ここだった……」にこは言った。

そしてみんな屋上の景色をみつめた。

「そうだ！」

「ん？どうしたんだ？」

すると穂乃果はバケツに水を入れてきた。

「穂乃果ちゃん!？」花陽は言った。

「見せて！」

そして穂乃果はモップで屋上になにかを書いた。

「てー！ーい！」

「穂乃果ちゃん、なに書いてるにや？」凜は言った。

「とう！えーい!!」

「あっ……これは……」希は言った。

「ふうー……できた……」

穂乃果が書いたのは……

『μ, s』



「さ、そろそろ帰ろうか……」ナオキは屋上を出て行った。  
そしてみんなが続々と出て行った。

穂乃果もバケツとモップを持って出て行こうとした……

『穂乃果ちゃーん、待ってー！』

『穂乃果！いつも言っているでしょう！』

『あはははーごめんごめん』

「これは……」

穂乃果は後ろを振り向いた。

そこには……

『いつも同じところでタイミングがずれていますよ！』

『えへへへ……ダンスって難しいねー』

そこには……穂乃果と海未とことりの幻が……



「これは…あのときの……………」

『寒いってどういうことよ!?!』

そして横を向くと……………

『正直に言っただけでしよう!』

『にこちゃんは相変わらずにやー』

そこには……………にこと真姫と凜の幻が……………

『あと30秒!』

そしてまた違うほうを向くと……………

『もう少しよ!頑張つて!』

『は……はいい……』

そこには……希と絵里と花陽の幻が……

『つたく……どうしたらいいかねえー……』

そしてドアの方をみると……

『この曲は……ここでこのライトを当てれば……』

そこには……ナオキの幻が……

『ナオキくんなに考えてるの?』

『ああ……今やつてる曲の照明とかだよ。みんながどうやったたら一番輝くかなーって』

『おおー!穂乃果も頑張らなくちゃ!』

『そうだな……お前だけタイミングがずれてたからな……同じところで……』

『うっ……海未ちゃんと同じこと言わないで!』

『仕方ありません!事実なのですから!』

『あははは……』

『さ、休憩終わったらステップの確認するぞー!』

『はーい!』

『もう!ナオキくん!疲れたよー!!』

『あはははは……』

『こら穂乃果!文句言わないの!』

『むううううう……ふん!』

『にやははは……』

『ハラシヨー!』

『おっ、花陽できたのか!』

『はあ……はあ……できました……』

『うふふふ……』

『うふふふ……』

『あははははは……』

そしてその幻のみんなとその声は次第に消えていった……

穂乃果が書いた『μ's』の文字とともに……

そして文字が消えると声は聞こえなくなった……  
幻のみんなの姿も……

穂乃果はさみしそうに屋上を出て行った……

穂乃果は出てすぐ足を止めた……

すると風が吹いて髪をゆらした……

『ここしかないようですね……』

『日陰もないし……雨が降ったら使えないけど……贅沢は言ってもらえないよね……』

「これは……最初の……はっ！」

穂乃果は後ろを振り向いて、屋上を見た。

『うん……でもここなら音も気にしなくてすみそうだね！よおーし、頑張つて練習しな  
くっちゃー！』

『ねえ……ことりちゃん、海未ちゃん』  
『ん?』

『やり遂げようね!最後まで!!』

穂乃果は泣きそうになったが……それを抑えた……  
「…………やり遂げたよ!最後まで!!」

『はい、ジューズ奢りー』

「え!?!……つて……うそ……」

『えへへ……驚いた?』

「うん……そりやあ……」

『1ついいこと教えてあげるよ』

「え?」

『まだやり遂げてないよ……』

「え!?!それってどういう!?!」

「うっ……」

すると強い風が吹いた。

『それは進めばわかる！』

フアイトだよ！』

「さっきのは……………」

穂乃果はそこに立ち尽くした……

「スピリチュアル……………だね……………」

そのころ……

生徒会室……

「はあ……」ナオキは一人ため息をついていた。

ピューーーー

その時……強い風が吹いた。

「おっと……窓開けてたか……」

ナオキは窓を閉めた。



『まだ迷ってるのかよ』

「誰……つて……お前は……」

『驚いたか?』

「まあ……そりゃあ……」

『で、まだ迷ってるのか?』

「……少し……」

『お前も男だろ? 覚悟を決めろ!』

「だがな……」

『なら……お前は絵里のことをどう思ってた?』

「それは……好きだ! 誰よりも!」

『なら……あの石』の本当の意味は?』

”あの石”……『誓いの石』か……あれの本当の意味は……」

『だろ? ということはお前の心は決まってるはずだ!』

「いやいや、これはちよいと訳が違う!」

『はあ……世話やけるなあ……』

楽しいなら』

「え……」

『ほら！さつき歌った歌の続き！』

「え!? えつと……楽しいなら……はっ……君のそばにいたい……」

『悲しいなら』

「君のそばにいたい……」

『……だろ?』

「ああ……ありがとう……」

『つたくよー……お前もつと正直になれよ』

「お前に言われたくねーよ」

『ははは……違いね……』

「でもなんでお前はいるんだ?」

『お前が迷ってたから……かな?』

「おれが……そうか……」

『ま、そういうことだ……』

「これからも……出てくるのか?」

『いや……もう必要ないだろ……』

「え？」

『お前は十分に成長した…』

おれが出てくるのもこれで最後だ』

「そうか……」

『また話したくなったら鏡にでも話しかけとけバカ』

「バカとはなんだ！」

『ははは……あ、そうだ！あとーっただけ教えてやるよ』

「ん？」

『まだ終わりじゃないぞ………』

「はあ？」

『じゃあな！がんばれよ！』

「あ、待て…それってどういう…くっ…」

そしてまた強い風が吹いた。

閉めたはずの窓がまた開いていたのだ……

「スピリチュアル……だな……」

ガチャ……

「あ、ナオキくんここにいたんやね」

「希……」

「どう？決心はついた？」

「……ああ……ついたよ……」

「そう？どうするんや？」

「わかるだろ？」

「うん……じゃ、えりち連れて来るわ」

「いや……おれから行く……」

「おっ、男やねー」

「うっせー／＼／＼」

アイドル研究部部室……

ガチャ……

「あらナオキ……どこいったの？」

絵里は言った。

「いや……ちよつとな……それよりも絵里……」

「ん？」

「これからのことについて話があるんだ……」

「(なんだろう……生徒会のことかしら?) わかったわ！」

「すまん……」

ナオキと絵里は部室を出て行った。

「ナオキ……どうしたんでしょうか？」海未は言った。

「気になるならついていく？」希は言った。

「うん！行く！」穂乃果は言った。

「行つくにゃー！」凜は言った。

「うふふ……さ、行こか……」

生徒会室……

「すまん……ちよつと……話があつて……」

「生徒会のこと？」

「いや……違う……」

「え？それじゃあ……」

（決めたんだ……おれは……）

ナオキは深呼吸をした。

「おれ……絵里のことが好きだ！」

「え？うん……そんなのわかってるわよ……なんで今更……／＼／＼／＼」

「おれは絵里のことが好きだ！誰よりも……好きだ……愛してる……」

「うん……／＼／＼／＼」

「おれ……絵里がいないとダメなんだよ……」

料理もできないし、おつちよこちよいだし、高いところもダメだし、

男として恥ずかしいところもいくつかある……」

「そんなこと……」

「だから絵里がいないとダメなんだ！」

絵里はおれを癒してくれる……」

絵里がいてくれたからおれはここにいらんだと思う……」

おれはずっとずっと……絵里のことが好きだ！」

「私も……好きよ……ナオキがいないと私もダメだわ……」

『誓いの石』……覚えてるか？」

「え？……うん……あの綺麗な石ね」

「ああ……あれの意味は……『誰よりも愛する』……」

「うん……」

「でも……もう一つ……意味があるんだ……」

「もう……一つ？」

「ああ……それは……」

『もう1個意味があんねん……』

『もう1個？』

『それはな……』

『それは……？』

ナオキの頭の中であの会話が蘇る……



「それは……………スーツ……………」

『永遠の愛を君に誓う』……………」

「え……………」

その教室の音がなくなったように静かになった……………」

「…………だから…………おれは…………」

ナオキはポケットから箱を出した。

それを絵里の前で開けた。

その中には…………

「これは…………『誓いの石』…………

しかも…………」

「ああ…………

だから絵里…………

おれと…………

おれと結婚してください!!」

その中には……

小さな誓いの石が付いている指輪があった……

「え……うそ……」

「ウソじゃない!」

おれは絵里のことが好きだ!

誰よりも……今も……これから……どんなときもずっと……

絵里のそばにいたい!!

絵里にそばにいてほしい!!

この石はな……占いの道具なんだが……

この石は昔からある誓いをするときに使われたらしいんだ……

誓いの石にもいろんな種類があつてこの誓いの石は……

『永遠の愛を君に誓う』

永遠の愛を誓う石なんだ……

だからおれは誓う！

絵里……おれは絵里を永遠に愛する！！

どんなときもずっと……

だからもう1度言うよ……

絵里、おれと結婚してください……」

絵里は涙を流した……

「……はいー」

私も……よろしくお願いします！」

「絵里……」

「ナオキ……………」

そして2人の唇は近づいた。

そして……………キスをした……………

「絵里……………これからよろしくな……………」

「ナオキ……………これからよろしく……………」

2人は抱き合った……………

生徒会室前……

「「「「「え……………」」」」」」

希以外のメンバーは驚いていた……

「ナオキくん…プロポーズしたの?……………」穂乃果は言った。

「そうみたいだね……………」ことりは言った。

「よ…喜ばしい……………ことですね……………」海未は言った。

「そ…そうだね……………」花陽は言った。

「結婚するにや?ナオキくと絵里ちゃんが!?!……………」凜は言った。

「ふん……………」真姫は言った。

「希は……………知ってたの?……………」にこは言った。

「まあなあ……………」希は言った。

ガチャ……………

「「「「「わっ!?!」」」」」」

「お前ら…また盗み聞きかよ……………」ナオキはドアを開けて言った。

「み…みんな!?!／／／」絵里は言った。

「ふふふ……………えりちおめでどう!ナオキくんも!」希は言った。

「「「「「お…おめでとう(ぎ)ぎいます)！」「「「「」

「うん、ありがとう！」

「ありがとう……」

みんなは2人の婚約を祝福した……

だがナオキにはわかった……

みんなの笑顔は”なにかを隠している笑顔”だということが……

「さ、そろそろ帰ろうかー」

「「「「「うん(ー)」「「「「「」

みんなは帰ろうと校門へとむかった……

『まだやり遂げてないよ……』

『まだ終わりじゃないぞ……………』

「あれって……………」

「どんな意味なんだろう……………」

校門……………

「ここをこえれば……………ほんとうに卒業やね……………」希は言った。

「そうね……………」にこは言った。

「ええ……………」絵里は言った。

そのとき…花陽とナオキのスマホの着信音があった。

「あ……………」

「すまん……………」

「もう……………なによこんな時に……………」



「ふええええ!!」

「花陽ちゃん!!」穂乃果は言った。

「大変です!」

「どうしたの!」穂乃果は言った。

「ここでは話せません!今すぐ部室へ行きましょう!」

花陽は穂乃果の腕を引つ張つて部室へと走つて行つた。

「えええええ!!」

「ちよつと…なんなのよ!いきなり!」絵里は言った。

「なになに?教えてー!」希は走り出した。

そしてみんなが走つた。

「大変ですううう!!」

「こんどはなんですか!」海未は言った。

「にやー!!」凜は言った。

「まだ終わつてないってこと!」ことりは言った。

「ナニソレ!イミワカンナイ!」真姫は言った。

「行つて確認してみるしかなさそうね!」にこは言った。

「ヴええ!!」真姫は言った。

「もう！みんなつたら……ナオキ？」

「まじか……あははは……」

「どうしたの？」

「さ、おれたちも行くか」

「うん！」

ナオキと絵里は手をつないで走った。

「みんな続けー！！！！」

穂乃果は叫んだ。

これからμsを待ち受けるものとは一体なんなのか!?

次回、新章へ続く……

## 東條希編

### 第54話「太陽みたいな笑顔」

ウチ、東條希！

音ノ木坂学院に通う高校3年生なんやけど…もう卒業してんねんなあー

あはは……

それじゃあ！

ラブライブ！〜1人の男の歩む道〜

東條希編、スタートやでえ!!

「おれと結婚してください!!!」

その言葉はウチの心に刺さった……

わかってたんよ……そんなの……

あの石を……『誓いの石』をみたときにウチは気づいた……

それは……

『私の恋は叶わない恋』

だと……

だから今日、告白した……  
見事にふられちゃったけどなあ……

ウチがナオキくんと出会ったのは……ウチが大阪に引っ越していたとき……  
ウチは4年生で、ナオキくんは3年生だった……

希……4年生……

「ねえねえなに読んでるの？」

「え？」

「なんの本読んでるの?」

それがウチとナオキくんの出会い……

ナオキくんのその笑顔はまるで太陽みたいだった……

ウチはその太陽みたいな笑顔をするナオキくんを好きになった……

「占いの本……」

「占い?なにそれ?」

「占いを知らないの?」

「うん!知らない!」

「ふふふ……」

「あ、やつと笑った」

「え?」

ナオキくんはそのとき占いを知らなかった。

ウチはおかしくて笑っちゃった……

ま、詳しいことは『希の望みは、sの望み』つちゆう回を読んでなあー

そしてその日……帰ると引越すということがお母さんから言われた……

嫌だった……初めて友達ができたのに……

引越しの日……

お父さんの車に乗り込んだウチ……

そこに聞こえてきたのは……

「希ちやー……んー！」

そしてナオキくんはタロットカードをもらった……

(あ、そういえば名前聞いてなかったな……)

そう思つてタロットカードケースの裏を見ると……

『かがわなおき』

「かがわなおき……くん……ナオキくんか……」

そしてもう一つ教えてもらったこと……

「ウチ……か……」

そして音ノ木坂学院に入学して、最初の日……

えりちと出会った……

えりちに話しかけたあのとき……

(うう……どうしよう……話しかけたい……でも……あれを使えば……でも……)

そんなときだった……

『ララランラーンララランラーン

ララララララララー

ラララーラララーラララララララ

ララーラーラー

ララランラーンララランラーン

ラーラーラーラーラーラー

ラーラーラーラーラーラーラーラララララーララーララー

どこからか聞こえてきた歌声……

ウチはその歌に勇気をもらった……

そして……

「あのっ！」

「あなたは？」

「私………ウチ、東條希！」



「それでねーその幼なじみがねー」

「へー……ふふふふ……」

えりちはずっと大阪にいる幼なじみのことを話していた。

えりちはその人が好きなんだ……

そして2年生になって修学旅行で大阪に行った……

「たこ焼きっておいしいわね……」

「ふふっ……やろ?」

「希は食べたことあるの?」

「うん、大阪に住んでた時があつてそれで」

「ふーん……」

「あのーすみません…落としましたよ」

「あ…ありがとうございます…す」

「ん？えりちどうしたん？」

えりちとえりちのハンカチを拾ってくれた人は固まっていた。

「え…絵里ちゃん？」

「ナ…ナオキくん…なの？」

「絵里ちゃん…絵里ちゃんだ！」

「ナオキくんなのね！」

2人は再会を喜んでいた。

ウチはこのときわかつた……

その…太陽みたいな笑顔と……名前を聞いて……

たしかに『ナオキ』っていう名前はありふれているし同姓同名っていうのも考えられ

る…

でも…あの笑顔は……

ウチの大好きな太陽みたいな笑顔のナオキくんは……その人だけ……

でも……

「はははは……こんなところで会えるなんて！ハラショー！なんで大阪に？」

「修学旅行なの！ああ……紹介するわね……」

ナオキくん、こつちが東條希……私の友だちよ

希、こつちがいつも話してる幼なじみの香川ナオキくん」

「そうか……はじめまして！

よろしくお願いします！」

「よ……よろしくね！」

ナオキくんはウチのことを覚えてなかった……

なんでなんだろう……

あとから聞けば

『希が輝いていたからあの希ちゃんだとは思わなかった』

らしいけどなあー

「そうだ、絵里ちゃん連絡先交換しない？」

「これからもいっぱい話したいし」

「そうね…」

「じゃあウチも！」

「希さんも!？」

「うん！いいやろ？」

「はい、全然！」

そしてウチはナオキくんと連絡先を交換した。

「ねえねえナオキくん！これからお昼一緒に食べない？」

「おっ、いいねー」

「希はそれでいい？」

「うん！ええよー」

そしてウチとえりちとナオキくんは一緒にお昼ご飯を食べた。

楽しかったなあー

ナオキくんとおしゃべりしたとき……  
とても楽しかった……………

「じゃあ私たちは行くわね」

「おう！バイバイ絵里ちゃん！

希さんも！」

「うん、ほなー」

「バイバイ！」

そしてウチとえりちはバスへとむかった。

そしてバスの中……

大阪を去る時にふと気がついた……………

「(そうや……ウチ……ナオキちゃんと連絡先交換したんやった……………)

ふふっ……………」

「楽しかったみたいね」

「そうやね」

嬉しかった……

だって……大好きなナオキさんと連絡先を交換したんやからな……

そしてそのときのウチはまだ知らなかった……

連絡先を交換したことで運命が動き出したことを……

それをつなげるのは……

スクールアイドルだということを……

次回へ続く……

## 第55話 「あなたを占って」

ウチは3年生になった……

でも……音ノ木坂学院が廃校になるという知らせが……

信じられへんかった……

えりちはえりちでなにかに追われてるような感じだしなあ……

でも……ある日……

穂乃果ちゃんと海未ちゃんことりちゃんがアイドル活動をする生徒会室に言いに来た。

えりちは反対みたいやったけどウチは面白そうやから賛成した。

そして穂乃果ちゃんたちはグループ名を決めてなかった。

だって堂々と『グループ名募集!』ってチラシを貼ってるし…ははは…

そんなときウチは

花陽ちゃん、凜ちゃん、真姫ちゃん、にこつち、えりち、そしてウチと合わせてなにか出来る気がした…

そして付けた名前が

ギリシヤ神話に出てくる9人の歌の女神『μ's』

そしてそこにはまだ足りない…

もう1人の存在が必要だった…

ウチは家でナオキくんにもらったタロットカードで占ったんや…

ナオキくんを…

すると…



「THE CHARIOT……戦車……正位置……」

このカードは勝利、援軍、成功などの意味がある……

ナオキくんはきつとμ、sの力になってくれる……

ついでに気になってナオキくんの今の状況を占った……

だって今ナオキくんは大阪にいるんだし、ここは東京……

ましてやμ、sのお手伝いをしてくれるなんて……可能性は低かった……

だから……占った……

すると……………

「なにこれ……………」

ウチの手は震えた……………

だって……………

そのカードは……………

『THE DEVIL』……………悪魔のカード……………しかも正位置……………

その意味は……………

『裏切り、墜落、悪循環』

「ナオキくんになにかあつたんじゃ……………裏切り……………裏切られたの？誰かに……………悪循環……………嫌なこと続き？……………電話してみよう……………」

ウチは心配になってナオキくんに電話をかけた……………

『ただいま電話にできることができません、後ほどおかけ直してください』

おかしい……

ナオキくんはウチやえりちから電話がかかってきたらすぐ出るはず……  
もう少し待ってからしよう……

それから2、3回電話したけどナオキくんは出なかつた……

絶対にナオキくんになにかあつた……

ウチはそれを確信した……

プルルルル……

「!? ナオキくん!?!」

ナオキくんから電話がかかってきた!

『あ、希さん…すみません…ちょっと取り込んでまして…』  
「いいや…全然ええでー」

ナオキくんの声はどこか元気がなかった…

「なにか…あつた？」

『……………別になんでもないですよ…』

ちよつと……………』

「ウソや…ウチは誤魔化されへんで」

『……………』

「ナオキくん！」

『はあ……………』

「退学しました…大坂学園を……………』

「え…なんで!？」

『ちよつと…ありまして……………』

それで……………』

「裏切られたの……………」

『!?!』

「違う?！」

『いいえ……そうです……裏切られましたよ……クラスメイトに……』

「悪いこととか続いている？」

『まあ……そうですね……』

やっぱり……ウチの予想は当たってた

「ごめんな……ウチ……ナオキくんが……」

『いいんですよ……』

心配してくださってありがとうございます……』

「うん……それじゃ……」

『それでは……』

ツーツーツ……

そこもおかしかった……

ナオキくんは普通自分から電話を切らない……

でもこの時はナオキくんから電話を切った……

「辛いんやろうな……」

そしてナオキくんにはファーストライブをみせて、手伝ってくれることになったんや

……

ここらへんの詳しいことは『ナオキの4 sとの出会い』の回を見てなあー

そしてそのうちにもう一度ナオキくんを占ったんや……

「死神の逆位置……挫折から立ち直る……」

ハラショーやん!!

そしてついにあの日がやってきた……

「それでは新入生を紹介します！」

理事長が紹介したのは……………

ナオキくんだった……………

ま、ウチは知ってたけどなあー  
でも知らんフリしたでー（ドヤ）

休み時間……………

「なあなあえりちー」

「ん？」

「提案なんやけどさ」

「なに？」

「ナオキくんにμ sのお手伝いみたいなのもらったらどうかな？」

「うーん……………そうね……………」

「きつとみんな賛成してくれるって！」

「なんで？」

「カードがウチにそう告げるからや」

ウチは戦車のカードを出していった。

「戦車？……」

「援軍、成功とか……そういう意味や……」

「援軍……ねえ……だからお手伝いね」

「そしてもう一つ！」

「まだあるの？」

「うん！ナオキくん生徒会に入ってもらったらしいと思うん！」

「生徒会に!？」

「うん！やっぱり唯一の男子生徒になるわけやし、そこからまたなにかみえてくると思

うん！」

「うーん……確かに……」

「でしょ！だから昼休みにナオキくん呼び出して！」

「わかったわよ……」



そしてナオキくんは、sの一員となり、生徒会の一員ともなった。

そして……

えりちがナオキくんを好きなことが発覚!!!

(やっぱりなあー)

でも……

えりちと一緒……

ウチとえりちの好きな人は……

ナオキくん……

ウチはナオキくんとえりちが付き合ったときもまだチャンスはあると思ってた……  
でも……

『誓いの石』

あれをみて思った……

もう諦めよう……

だって…あの石の本当の意味は

『永遠の愛を君に誓う』

やで？

無理に決まってるやん……………そんなの……………

もうナオキくんの心は動かない……………

「希……………おれ……………希のことが好きだ……………だから……………」

「キヤツ／／……ナオキくん……」

「希……」

「優しくしてね……／／／／」

「つてなるわけないやん!!!!」

「もう……なに考えてるんや……ウチ……／／／／／」

そしてあの日……

ナオキくんといりちにウチの過去の話をした……

「希って……希ちゃん……なのか……」

「うん……やっと気づいてくれた？」

そう……そのときにやっとナオキくんは気づいてくれた……

ウチが”希ちゃん”やったことを……

そしてみんなで言葉を出し合ったあの後……

「希……」

「ナオキくん……」

「その……ごめん……希があ希ちゃんだったって……気づかんかった……」

「ええんやよ……もう……」

「あのタロットカード……ずっと使ってくれてたんだな……」

「うん……」

「それに……『ウチ』も使ってるみたいだし……言つたろ？友達できるって……」  
「そうやね……ほんまにできたわ……」

友達……大切な……」

「そうか……よかった……」

「ナオキくん……ありがとう……」

「……おう／＼／＼」

ナオキくんこの時照れてたなあー

ほんまにかわいいわあー

そして……予選決勝も突破したウチらを待ち受けていたのは……  
ナオキくんの辛い過去だった……

その前日……

ウチはカードを落としてもうたんや……

「おっと……カードが……」

そして拾った1枚は……  
「え……これは……」

『DEATH』の正位置……

意味は……

死  
の  
予  
兆  
……  
……  
……  
……  
……  
……

次回へ続く……





ナオキくんの息は荒かった……

汗もたくさんかいてたし……

苦しそうだった……

「ナオキ!!!ナオキ!!!」

えりちはナオキくんの名前を叫びつづけた……

でも……返事もなく……それに反応する様子もなかった……

そんな……ウソ……

だって……

まさか……

ナオキくんが……

死ぬ!?

ナオキくんは救急車で西木野病院に運ばれた。

えりちと真姫ちゃんは救急車に乗っていった。

残ったウチらはナオキくんのおじさんのラブライブ！運営委員会会長の伊藤晋三さんと副会長の田中純一郎さんの2人の車に分かれて乗って向かった。

西木野病院……

ウチらはナオキくんがICUに入っていると聞かれたから急いで向かった。

ナオキくんは……

命も危うい状況だった……………

そんなとき西木野先生（真姫のお母さん）がえりちを中へと入れた。そしてその後にはウチから全員を入れてくれた。

みんなでナオキくんを囲んで祈った……………

「ナオキくん……………あの眩しい笑顔……………もう一度見せてや……………」

ウチはそう祈った……………

あの眩しい笑顔……………

太陽みたいなあの笑顔……………

みたかった……………

カードが示したのがナオキくんの運命なら……………

そんな運命なんか……………

ナオキくんならそんな運命乗り越えられるはずや……………

そしてウチらの祈りは届いたようで……………

ナオキくんの呼吸は落ち着いた……………

あ、詳しくは『辛い過去と大切な人たち』つちゆう回をみてや！

そしてナオキくんが目覚めたとえりちから連絡をもらってウチは西木野病院へと向

かった。

ガラガラ……

「えりちー？」

「あ、希じゃん！」

「ナオキくん………」

「すまん、心配かけたな……ハハハ……

絵里なら今飯食いに行ってるぜ」

ナオキくんはウチの好きな太陽みたいな……眩しい笑顔を見せて言った。

「心配したんだから……バカ……」

「……すまん……」

ナオキくんはそう言うとうちの頭をなでてくれた。

「もう……バカ！アホ！おたんこなす！ポケ！臆病者！変態！」

「それ言い過ぎな……………」

「ふふふ……………ふふふふふふ……………」

「ははははははは……………」

ウチとナオキくんは笑った。

「でもほんまに……………よかった……………」

「ああ……………ちゃんと希の声……………届いたよ……………『眩しい笑顔をもう一度みせてや』やったっけ?」

「もう! からかっているの!?!?!」

「ふふふ……………いや……………」

するとナオキくんは私の頭に手を置いて……………

「嬉しかったよ……………ありがとう……………」希ちゃん……………」

「うん……………」

なんか私……………ウチ……………このときは関西弁出てなかったんなあー

「そーいや関西弁抜けた喋り方って珍しいな」

「関西弁入った喋り方にしたのはナオキくんやで?」

「おれは『ウチ』ってつけてみーやって言ったただけだ」

「ナオキくんだつて関西弁抜けてないやん！」

「うっ…それを言われると……」

「ふふふ…ほんまに…面白いなあー…ふふふふ……」

「…おう……／／／」

ともかく…ありがとうな…心配してくれて」

「全然ええつてー……さ、ウチは帰るわー」

「おう！」

「えりちにいたずらしたらアカンでー」

「するか！／／／／」

「ふふっ……ほなー」

ウチは病室を去った……

ほんまはもつと一緒にいたかったけど……えりちのこともあるしな……

でもよかった……

運命を乗り越えたんやな……

ウチはカードを出したんや……



『JUDGMENT』……審判の正位置……復活……か……  
復活のナオキくんやね……

そして、sはラブライブ！に優勝した……

ウチはずっと……えりちとナオキくんの恋を応援していた……  
自分の気持ちを押し殺して……

辛かった……

ナオキくんとえりちがラブラブしているところをみると辛かった……  
ほんで……あの卒業式の日……

今言わなきゃ……絶対に後悔すると思った……  
だって……あの石のこともあるしな……

「私……ナオキくんのことが……

好き……1人の男の子として……好き……」

ウチはその日、ナオキくんに告白した……

私の初恋の人に……

答えはわかってた……

「……希……ごめんな……」

お前の気持ちには応えられない…」

やろうな……………

でもナオキくんは……………

「おれは希のこと、大切な仲間として大好きだよ。希が手伝いを勧めてくれなかったら  
今がないわけだし。」

だからおれは希とキヨリをおいたりなんかは絶対しないから……………」

そう言ってくれた……………

ほんならウチもいつも通りに接さないとな……………

そしてナオキくんは……………

「おれと結婚してください!!!」

えりちにプロポーズをした……

でもなんだろう……この痛み……

すつきりしたはずなのにな……

まだ未練残ってるんやろうか……

そして廊下でナオキくんに声をかけられた。

「希……」

「なに？」

「その……応えられなくてごめんな……」

「ええんやって……もう……」

「でもさ、希なら……きつとおれよりお前を愛してくれる人が見つかるよ……」

希は可愛いんだからさ」

「う……うん！／＼／＼／＼」

嬉しかった……

ナオキくんにかわいいって言ってもらえた……

そやね……うじうじしてても仕方ない！

ウチの初恋は失敗から終わったけど……

次こそは!!

「ふふん、みときなあー……」

ウチを振ったこと後悔させてやるわ！」

「ははは……希らしいな……」

「でも……」

「ん？」

「ごめんね……」

「は？なに……」

ウチはナオキくんの頬に軽くキスをした。

「……これだけ……これつきり……これで諦めれる……」

「……は?!は?!」

ナオキくんはテンパってた。

「ふふふ……ありがとなあー……」

そしてウチは校門へとむかった。

これで終わった……

ウチの初恋も……

『μ s』も……

と……思ってたんやけどなあー……

次回へ続く……

## 第57話（東條希編章末回）「希、これから進む道」

ウチの将来の夢？

そうやなあー……………

ま、決まってるんねんけどな……………

ウチは占い師になろうと思ってるんねん！

なんで占い師か？

うーん……………なんでやろうな……………

小学生のときたまたま本屋さんで見つけた占いの本……………

その本がきっかけで興味を持ち始めた『占い』……………

そしてナオキくんからタロットカードも貰ったし……………

タロットカードを得意とする占い師東條希となって世界中にウチの名を轟かせたろ

うか!!

つていうのを考えとんねん

いやあーだから大学受験も受けてへんし、欠点とらん程度に頑張つてたで!

まあ……えりちは3年生成績トップで……

ウチはその次かな?

ついでにこっちは……

中間あたりやったかな?

ウチが指導したからな(ニヤニヤ)

で、話は戻すけど……

ウチはタロットカードを使った占いを得意とする占い師になりたいん!

それまでは占いの勉強とかがしたいし、しばらくは神田明神でお手伝いしとこかなあー

……



そしたら運命の人と出会えるかもせーへんし……

ま、そんなうまいこといかんやろうけどな……あはははは……

東條希……19歳……

ウチは今、占いを独学で学びながら神田明神でお手伝いをしている……

そしてあの日……

いつも通り神田明神で掃除をしていた……

「前まではみんなでここで練習したなあ……」

「また言ってますね……希さん」

「あ、小町さん」

「最近いつも言ってますよ」

「そうですか……あはははは……未練残ってるんですかねー……」

「あ、そうそう……今日からお手伝いしてくれることになった人を紹介するわね……」  
すると小町さんは新しくお手伝いしてくれることになったという人を連れてきた。

「この子が……東條希さんよ。いろいろ教わるといういわ。」

希さん、この人が新しくお手伝いしてくれることになった……」

「西園寺京介です！よろしくお願いします！」

「よろしくなあー」

「じゃあ希さん、西園寺くんのことよろしくね」

「はい！さ、まずは掃除からや！」

西園寺くん！」

「はい！よろしくお願ひします！」

西園寺京介……20歳……

このときはまだそんな気なんてなかったけど  
一緒にいるうちに……

ウチと西園寺くん……

いや……

ウチ、希と京介くんは……

こうして出会った……

これが……『運命の出会い』つちゆうやつなんかな……

だってウチは“西園寺くん”と話すことが楽しかった。

会う日の前日なんてなにを話そうかずっと考えてたし……  
そして……

「おれと……おれと付き合ってください!!!」

「うん……ウチも好きやったよ……”京介くん”……OKや……」

「これから……よろしくお願いします……希さん!」

「名前で呼んでよ／／／」

「あ……うん、”希”  
／／／／／

そして……ウチと京介くんはお付き合いを始めたんや……

「よかったな……希……」

「うん……みつかったよ……」

ウチのことを誰よりも愛してくれる人が……」

「だから言つたろ？」

「そうやね……………」

ナオキくんがそう言ってくれるのはあと何日先なんやろう…………

次回、新章へ続く…………

## 星空凜編

### 第58話 「不思議な気持ち」

私、星空凜！音ノ木坂学院に通う高校1年生にや！卒業式も終わって、みんなで3年生のお別れ会にや！

その後……………

「おれと結婚してください!!!」

ナオキくんは絵里ちゃんにプロポーズした……………

なんでこんなにも苦しいんだろう…

なんで……………

あの日、ナオキくんはここ音ノ木坂学院に模擬男子生徒として転入してきた。

「星空凛…1年生にや…よろしくにやー!!」

初対面な……………はず……………なのに……………

なんで……………こんなにも安心して話せるんだろう……………

ナオキくんといると安心してできるし、

頼れるし……………



凜にとってナオキくんはお兄ちゃんみたいにや！

例えば……

「ナオキくーん！」

「うわあ!?!……って凜か……」

急に抱きつくな……」

「えへへー……いいじゃん別にー」

「で……英語の小テストはどうだった？」

「うつ……」

「はあ……ダメだったんだな……」

「うん……まあ……あはははは……真姫ちゃんにも怒られたにや……」  
「そうか……なら……いい考えがあるんだが……」

「にや？」

「勉強して、次のテストで真姫とかを驚かせたろうぜ」

「やるにや！」

そして凜はナオキくんに英語を教えてもらうことにしたにや！

そして……

「次、星空さん」

「はい！」

「すごいわ……満点よ！」

「えーーーーー!!!」

そのときクラスみんなが驚きの声をあげた。

えへへへ……作戦大成功にや!

「凜……すごいじゃない……見直したわ」真姫ちゃんは言った。

「すごいよ!凜ちゃん!」かよちゃんは言った。

「えへへへ……イエイ!」

凜はピースした。

ナオキくんにお礼しなきや……

「ナオキくん!ありがとうにや!」

「おう!よかったな……偉いぞー」

ナオキくんは凜の頭をなでてくれた。

「えへへ……// //」

それから困ったことがあればナオキくん相談したし、したらナオキくんは真剣に聞いてくれた。

ほんとうに……お兄ちゃんみたいにや……

でもあの日……

ナオキくんは絵里ちゃんに……

告白した……

このときもなんでかわからないけど心が痛かったな……

「はあ………」

凜は自分の部屋のベッドで寝転んでいた。

「なんだろう……この気持ち……」

凜はこの気持ちが分からなかった……

そして……ナオキくんたち2年生が修学旅行で沖縄に行ったんだけど帰ってこれなくなつて凜がμ☒sのリーダー、そしてファンクションショーのライブのセンターをすることになったんだ……

しかもセンターは……………

あんな花嫁さんの衣装なんていやにやあああああああああ!!!

だって……………凜は……………

凜には……………

女の子らしい格好なんて似合わないよ……………

「似合ってると思うよ？」

かわいいじゃん」

それは小さい時に”ある男の子”に言われた言葉……………

あの子は……今どうしてるかな？

会いたい……かな……

次回へ続く……

## 第59話 「わかつた気持ち」

「凛には女の子らしい格好なんて似合わないよ……絶対……」

凛はベッドで寝転んでいた。

パソコンをチラッと見る……

女の子らしい服のサイトを……

『はじまりたくなる Rin rin ring a bell……』

「ん……電話？」



着信音がなった……

画面を見ると……………

「えっ!?!ナ…ナオキくん!?!」

なんと電話の相手はナオキくんだったんだにや!

「も…もしもし?」

『あ、もしもし?夜遅くにすまん』

「ううん!全然いいにや!」

だって…………ナオキくんとお話したかったんだもん……

お話したら楽しいし……

『で、ライブのことなんだけどき』

「ライブの?」

『なんでセンター断った?』

「それは……………」

『女の子らしい格好は似合わないから…かな?』

「うっ……」

『凶星か……』

「……………」

凜は唇を噛み締めた。

『はあ……いいか？お前はかわいい』

「え!?!?!」

『お前に女の子らしい格好は絶対似合うから』

「そんなこと……」

『真姫から聞かせてもらったよ…』

お前の過去……』

「……………そう……なんだ……」

『その時のこと覚えてるか？』

「うん……」

当たり前じゃん……忘れるわけない……

『そのときお前は公園のベンチで泣いていた』

「え!？」

おかしい……

このことはかよちゃんも知らないはず……

なのに……

『その公園で……出会った……』

「……………」

そう、あの時……

凜は……

名前も知らない男の子と出会った……

「うーん……どうしよっかな……」

このときの凧は女の子らしい服を着ていくかどうか迷ってた……

でも……

『ララランラーン　ララランラーン

ラララ　ラララララー　ララララララララララララララ　ララーラーラーラー

ララランラーン　ララランラーン

ラーララララララー

ララーラーラー　ララーラ　ララララ

ラーラララー』

どこからか歌が聞こえてきた……

そして凧は女の子らしい服を着て学校にむかった。

でも………

「うっ……うっ……」

このとき凜は公園で泣いていた……

今日は女の子らしい服を着て行った。

でもそれをからかわれて……

凜は逃げ出した……

そしてこの公園のベンチで泣いていた……

「どうしたの?」

そんなとき……

ある男の子が声をかけてきた。

「なにかあったの?」

そうやってその子はハンカチを出してくれた……

「あ……ありがとう……」

凜はそのハンカチで涙を拭いた。

「で、なにかあったの？」

「その……女の子らしい服を着ていたら……からかわれちゃって……」  
「なんで？」

「凜には……そんな格好なんて似合わないから……」

「凜……ちゃんか……」

「そんなことないと思うけどな……」

「え？」

「いや……似合ってると思うよ？」

「かわいいじゃん！」

「そ……そうかな？」

「そうだよ！自信を持ってよ！」

「でも……またこの格好で行ったら……」

「そうか……それでまた傷つくのもよくないし……」

「やっぱり……着替えてくる……」

凜は家にむかって歩き出した。

「待って！」

「なに？」

「忘れないでね、僕は凜ちゃんその格好……似合ってると思うよ！」

ほかのみんなが似合っていないとか言っても……絶対に！」

「ありがとう……」

凜はそのまま家に帰って、着替えて、学校にむかった……

「なんで!?なんでナオキくんが知ってるの!?!」

『それは……』

それは、おれがその男の子だからだ』

「え!?!」

衝撃だった……

あのととき凜を慰めてくれて、

かわいと言ってくれた……

あの男の子が……

ナオキくとわかって……………

凜はあのときの男の子の顔を思い出した。

あの眩しいぐらいの笑顔を……

それが……………今のナオキくと重なった……

「そっか……………」

『思い出したか?』

「うん……………あのとき……………慰めてくれたのって……………『かわいい』って言ってくれたのって……………ナオキくんだったんだね……………」

『そうだ……………』

「ずっと……………気づいてたの?」

『うーん……………正直に言うと……………』

真姫からあの話を聞いた時に……………』

「それってさつきじゃん!」

『あははは……………すまん……………』



「凜なんて1日も忘れたことなかったのに！」

『でもおれとはわかんなかっただろ？』

「うっ……」

『あはははは……』

「……でも……」

『でも？』

「やっぱり無理だよ……今からじゃ……」

『そんなことないって！あんときも言ったろ？絶対かわいいからさ！』

「でも……今更……それに……」

『それに？』

「絶対……似合わないし……」

『はあ……まだ引きずってんのか……』

「だって……」

『お前の気持ちもわからんこともない……あんなことがあったんだ……』

そりゃあ誰でもすぐには立ち直れない……』

「だから……」

『でもさ！』

今の凜ならいけると思う……』

「今の……凜なら？」

『ああ……』

「でも……フォーメーションとかは……」

『なら……凜……』

「なに？……」

『凜はどうしたい？』

「え？」

『凜は……女の子らしい服……

着てみたいか？』

「……それは……」

『凜の本当の気持ちは？』

「凜の……本当の……気持ち……」

凜の本当の気持ちは……

凜はパソコンの画面を見つめる……

「凜は……………」

凜は……………

「凜……………女の子らしい服を着たいにや！」

『ふっ……………だろうな……………』

「ナオキくん……………」

『凜……………おれは今は手を貸せないが……………お前には……………仲間がいる……………』

それを忘れるな……………』

「うん……………」

『みんな……………同じ気持ちだと思うから……………』

「みんな？」

『それじゃあな！ファッションショーのライブ、頑張れよ！』

「え……ちよつ……」

切れたにや……」

でも凜は……当日も言い出せなかった……

『センターで出たい』

『あの服を着たい』

つて……」

でも……

かよちゃんは真姫ちゃん……

μsのみんなが……凜の背中を押ししてくれた……

そして凜は花嫁衣装を着て、ファッションショーのライブにセンターで出た。

そしてライブのあと……  
家で……

「あ、もしもし？ナオキくん！」

『おー凜か！見たぞー、やっぱり似合ってるじゃんか！』

「そうかな……えへへ……」

『ああ……だから言ったろ？絶対似合うって……仲間がいるって……』

みんな同じ気持ちだった』

「うん……最後はみんなのおかげにや……みんなが背中を押してくれたから……凜は……」

『そうか……』

「その……ナオキくんもありがとうにや！／／／／」

『ああ！……つて言っても全然なにもできてないけどな……』

「ふふふ……それじゃあまた！」

『おう！土産、楽しみにしとけよ！』

「うん！」

凜は電話を切った……………

そして女の子らしい服を着て……………

お出かけをした……………

そのときは……………たった1日の出会いだった……………

話したのも……………ほんの少しだけ……………

でも……………不思議と安心できた……………

本当に不思議だにや……………

それは今でも変わらない……………

それは……………

ナオキくんが好きだから……………

小さいときに『かわいい』って言ってくれたあのときから……………ずっと……………

まだ……………凛にチャンスはあるかな？

次回へ続く……………

## 第60話 「これってデート!?!」

凜は今日、ナオキくんとお出かけするにや!

……と言っても部活の買い出しで……

「たまには凜にも行かせたら?」

って真姫ちゃんが言ったんだけど、

「女の子ひとりじゃ心配だな……」

よし、おれがついていく」

ってナオキくんが言ってくれたから日曜日、今からむかうところなんだ!

「ナオキくんお待たせにや!」

「いや、全然待ってないよ……」

でもやっぱり……似合ってるな」

「そ……そうかにや!?!」

えへへへ……// // //」



ナオキくんに褒められたにやー……

「さ、行こうか!」

「うん!」

そして凜とナオキくんは買い出しにむかったにや!

……

でもこれって……デート……って言うんじや……

男の子と女の子が2人つきりでおでかけ……

やつぱりこれってデートなんじや!?!

で……でもでもナオキくんは絵里ちゃんとお付き合ひして……

これって浮気!?

いやいやいや!!!

もう……凜、何考えてるんだろう……

「おーい……りーん……りーん!!」

「わっ!?!なんにや!?!いきなり……」

「ずっと呼んでたぞ? 考え事か?」

「えつと……まあ……そんなとこにや」

「そつか……困ったことがあればなんでも言えよ? 相談にのるから」

「うん、ありがとう……// // //」

本当に……お兄ちゃんみたいだにや……

「買い出しのは大体百均で揃うし、そんなに時間かからないとおもうぞ?」

「そう……」

そうなんだ……

もつと一緒にいたいな……

凧とナオキくんは歩きながらいろんな話をした……

楽しかったにや……

そして凧とナオキくんは百均で買うものを買って、ショッピングモールにむかったにや!

「えつと……まずは……あそこだな!よし、行くぞ」

「うん!」

「これと……これと……よし、これで全部だな！」

「でもお腹すいたにゃー」

「そうか……もう15時だもんな……」

よし、あそこでケーキでも食うか」

「うん！」

そして凧とナオキくんはおやつにケーキを食べることにしたにゃ！

「なにか食べたいもんあるか？」

「えつと……あ、これ美味しそうにゃ！」

「よし……すみませーん」

「はーい」

「えつと……これと……これください!」

「かしこまりましたー」

「ありがとうナオキくん!」

「いいよこれぐらい……」

そして凜が頼んだ（ナオキくんが言ってくれたんだけど）いちごのショートケーキが来たにや!

ナオキくんはチョコケーキにや!

「……んー!おいしいにやー!」

「ふふふ……あ、ほらほつぺにクリームついてるぞ」

「え?ほんど?」

「ちよつと失礼……」

「にやあ!?!」

ナオキくんは凧のほっぺについたクリームを拭いてくれた。

「つたく…世話がやけますね…凧さんは」

「にやああああ…／／／／」

そしてお会計のとき……

「おふたりは兄妹ですか？」

「いいえ…部活仲間ですよ」

「あ、そうなんですか……てつきり兄妹だと思いました……それでは10000円になります」

「はい！」

ナオキくんはケーキをおごってくれたにや！

「ナオキくんありがとうにや！」

「いえいえ…しかしおれたち兄妹にみえたってよ」

「そ…そう／＼／＼／」

えへへ…ナオキお兄ちゃん!

「やめろ／＼／＼／」

「あはははははは…」

「さ、帰るぞー」

「はーい!」

そして凜とナオキくんは歩いた。

そのとき……

「あ……」

「どうした?」

「これ……かわいいにや…」

「ピンセット……か……」

「うん……」

「ふーん……じゃ、買ってくるわ」

「え!?!」

そしてナオキくんはそのピンセットをもってレジにむかった。

「はい、お待たせ」

「あ…ありがとう…」

「今つけるか？」

「うん！」

そして凜はナオキくんにピンセットをつけてもらったにや…

（ナオキくんの顔近いよー／／／／／）

「よし…できた…」

「に…似合ってる…かにや？」

「ああ、かわいいぞ！ハラシヨー！」

「えへへへ…／／／／／」

今日はものすごく楽しかったにや！

今度こそ帰るにや！



でも……

帰り道で……

「あれ? 星空?」

ドキッ……

この声は……

「あ、やっぱり星空じゃーん」

あのとき凜をからかった……クケコくんたち……

「凜、知り合いか？」

「うん……まあ……」

「あ、小学生のときクラスメイトだったクウタロウと」

「ケンタと」

「コウジです」

「そうか……おれは凜の先輩のナオキだ……よろしく」

凜はチラッとナオキくんを見た……

少し……怒ってたな……

「でも星空……女の子らしい格好してんな？」

「うん……まあ……」

「そういやあのときもさー」

「そうそう女の子らしい格好してるからからかって……」

ドキッ……

「おい」

「なんですか?」

「お前らよ……凜のこの格好みてどう思う?」

「どう思うって……そんなの……」

笑うしかないっしょ……あの星空が……あはははは……」

「あはははは……」

凜はただ……下をむいて唇を噛み締めていた。

「てめえら……いい加減にしろよ……」

「!?!」

「ナオキくん……」

「いいか?凜のこの格好をみて笑う?

ふざけんな!

かわいいだろうが!!」

「か……かわいい?まさかあの星空が女の子らしい格好で?」

「ははは……そうですよ……」

「てめえら……まじでいい加減にしろよ……」

「「ひっ……」」

「いいか、よく聞けよ？」

凜はあのとときお前らにからかわれて

それをつい先日まで心の傷だった……

だか……それは今もほとんどかわりはねーよ……

だからな!! てめえらのしたことは重罪だ!!!

それは一種のいじめだ!! わかってんのか!!」

「そ……それは…………」

「謝れ…………」

「はい?」

「謝れって言ってるんだよ!!」

凜に謝れ!! あのとときのことを謝罪しろ!! てめえら男だろ!!」

「うっ…………」

「ナオキくん……………」

「よし……………なら……………この写真を見ろ……………」

「「これは……………」」

「これはこの前のファッションショーでライブしたときの凛だ……………」

「かわいいだろ?」

「「はい……………」」

「ならわかったな……………」

「星空……………」

「「あのときは……………ごめんなさい!」」

「う……………うん……………」

「よし、行ってもよろしい……………」

もう誰にもしちやダメだぞー」

「「は……はい!!」」

クケコくんたちは逃げるように帰っていった……

「ふう……………」

「ナオキくん……………」

「凜……………」

「その……………ありがとう……………」

「ああ……………いいってことよ……………」

さ、帰るぞ

「うん!」

そして凜とナオキくんは帰った。

このときのナオキくんはほんとに……………かつこよかつたな……………

でも……あんなことになるなんて……ね……

次回へ続く……

## 第61話（星空凜編章末回）「凜、これから進む道」

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

どうしようどうしよう！

ナオキくんが倒れちゃった!!!

もしかして……死んじゃうの……

嫌だ……そんなの嫌だ!!!

そして真姫ちゃんのお母さんに頼まれて凜たちはナオキくんを囲んだにや……

みんなで祈った……



ナオキくんが戻ってくるのを……

「ナオキくん……戻ってこなきや……いやにや!!」

凜はナオキくんに戻ってきて欲しかった……

また……遊んで欲しかった……

お話したかった……

それだけ……

そしてナオキくんの息も落ち着いて、凜はナオキくんが目覚めたって聞いたから西木野病院に行ったにや。

ガラガラガラ……

「ナオキくん？」

「おー！凜じゃん！」

「ナオキくん……………」

「ただいま……………」

「うわああああああ!!」

「おっと……………」

凜はナオキくんに抱きついた。

泣きながら……………」

「もう……………心配したにや！」

「ああ……………ごめんな……………凜……………」

ナオキくんは凜の頭をなでてくれた。

「うん……………／／／／／」

「ちゃんと凜の声…聞こえてたよ…」

「ありがとう……………」

「えへへへ……／＼／＼／」

ナオキくんは頭をさつきより強くなでてくれた。  
でも……気持ちよかった……

「凜、そろそろ行くにやー！」

「おう！待ってるよ！」

「うん！」

凜は帰った。

そしてラブライブ！でも優勝して、卒業式の日……

「おれと結婚してください!!!」

ナオキくんは絵里ちゃんにプロポーズした……

この痛みがやつとなにかわかった……

凜もナオキくんが好きだったから……

まだチャンスはあると思ってたけど……

ここまで来ちゃうと……流石に……

どうしよう………

え、凜は将来何になりたいかって？

凜はねー……陸上選手になろうと思ってるんだ！

でもそのためにはもっといろんなことを勉強しないといけないって真姫ちゃんに言われたから……

今は体育大学を目指してるにや！

「スポーツ推薦？」

「ああ……スポーツでなんらかの成績残してればだけど……凧は陸上部に入ってなかったし……」

凧はナオキくんに相談していた。

「なんかないのー？テスト受けなくていいやつー！」

「そう文句言うな……」

あ、そういうや御茶ノ水にある体育大学はたしかスポーツ入試で入れたな……」

「スポーツ……入試？」

「ああ……たしか走ったりとかするだけで合否が決まったはずだ」

「よし！凧、そこ目指す！」

「決定はや!?ま、がんばれよ」

そう言うとなオキくんは凧の頭をなでた。

凧はまだ気持ちを伝えられてない……

凧は今高校2年生……

ナオキくんはもうすぐ卒業する……  
だから……

この気持ち……

早く伝えたい……

「わ……私………ナオキくんのこと……  
好きですにや!!!」

次回、新章へ続く……

## 園田海未編

## 第62話「海色少女の初恋」

私、園田海未と申します。

国立の音ノ木坂学院に通っている高校2年生です。

学校では生徒会副会長も務めています。

そして卒業式も終わり、お別れ会のあとに……

「おれと結婚してください!!!」

え……今なんと……

け……結婚!?



ナオキが……プ……プロポーズしたということですか!?  
め……めでたいことではないですか!

ナオキと絵里をお祝いしましょう!

……ですが……

なんなんでしょうか……この気持ちは……

心が……痛い……

わかってます……

私はナオキが好き……

これは恋なのです……

私の……初恋……

ナオキと私の出会いは2人が小学1年生のときにさかのぼります。  
私はこのときには穂乃果やことりと出会っていて、いつも遊んでいましたね……

あの日は……家にいると騒ぎ声が聞こえて、私は迷っていました。  
すると……

『ララランラーンララランラーン

ララララーラーラーラー

ララララララララララララ

ララーラーラー

ララランラーンララランラーン

ララララララララ

ララーラーラー ラーラーラーラーララララーララー』

どこからか歌声が聞こえてきて…

私は勇気をもらい、その声の元へ行きました。

それでもあと1歩が踏み出せなかった私に声をかけてくれた穂乃果によって私は穂乃果やことりと仲良くなりました…

そしてある日…

私は母上にお使いを頼まれてその帰りでした。

「はわわわわわわわわ…」

「ワン！ワン！」

私は犬に怯えていました…

「母上ええええええ…」

そんなときでした…

ビュン!

「キャンキャン……」

「あ……」

一つのボールが犬のすぐそばに飛んできてその犬は逃げていきました。

「だ……大丈夫だった?」

「ふえ?」

そのボールの主が声をかけてくれました……

「怪我してない?」

「はい……ありがとうございます……」

「いいよ……海未ちゃん」

「な…なんで私の名前を？」

「えつと…一応僕、海未ちゃんと同じクラスだよ？」

「そ…そうなんですか…」

「名前…言った方がいいね…」

僕は香川ナオキ！よろしくね、海未ちゃん！」

「はい！」

それが私とナオキの出会いでした…

それからナオキは穂乃果やことりとも仲良くなつて…

いつも遊ぶのは私と穂乃果とことり、そしてナオキでした。

そして…ナオキは…

「おはようございますーす!!」

「あ、ナオキくん来ました！」

「おはようございますー！」

「海未ちゃん、今日もよろしくね！」

「はい！」

ナオキは園田道場に通り、朝練から稽古をしました。

「「えい！やあ！えい！やあ！………」」

「海未さん、姿勢が乱れてますよ！」

ナオキくんも！」

「「はい！」」

毎日園田道場師範、園田家当主である母上、園田撫子（そのだなでしこ）と

園田道場師範代である父上、園田五郎衛門（そのだごろうえもん）から教わります。

「それでは一戦やってみましょうか」

「「はい！」」

「海未ちゃん、今日は負けないよ！」

「寝言は寝てから言ってください……」

私は面を被ります……

実は私は剣道するとき、面を被ると性格が変わってしまうみたいです。

それでこのときの私をみなさんはこう言います……

『鬼園田』と……

「よし！今度こそ！！」

「それでははじめ！！」

「てやああああああ！！」

「はあ…遅いですね……それでこの私に勝つと……」

「サツ……」

「ピュン……」

「早い!?!」

「私はすぐにナオキの背後までまわり…」

「後ろか……」



「めええええええん!!」

パシン!

「そこまで!」

「遅い!遅すぎます!それで私に勝てるのも?」

私は竹刀をナオキにむけて言いました。

「くっ……鬼園田さんにはまだ勝てねーか……」

「ふっ……当たり前です」

パンパン

「はいはいそこまで!海未さん、面をとって」

「はい、母上……」

私は面をとりました。

「ふう……疲れました……」

「はははは……海未ちゃん!絶対にいつか勝ってやるからな!」

「望むところですよ!」

そしてまた私とナオキは稽古をして、穂乃果やことりも混じって遊びました。

そんな日々を過ごしていくうちにナオキを好きになっただけですよね……

それがいつまでも続くと感じていました……

だけど3年生のとき……

「海未ちゃん……おばさん、おじさん……

僕、明後日に引っ越します……」

「え……そんな！」

「そうなんです……」

「どこまで行くんだい？」

「大阪に……行きます……」

「大阪ですか……」

「そうか……寂しくなるな……」

「そうですか……わかりました……うつ……うつ……」

「う…海未ちゃん泣かないで！」

僕まで…泣きたくなるから…ね？」

「はい…：…それでは最後にひと試合！」

「望むところだよ！」

「それでは…：…はじめ!!」

「海未ちゃん…：…手加減はなしだよ」

「わかってます…：…そんな口たたいてるなら私に勝ってみてくださいい！」  
「ああ！」

結果は私の勝ちでした。

「やっぱり最後まで勝てなかったか…：…」

「そうですね…：…また…：…やれますか？」

「わかんないけど……またやりたいな！」

「また……いつか……」

「うん！」

そしてナオキは大阪に引っ越していきました……

このときはまだあんな形で再会できるなんて思いもしませんでした……

次回へ続く……

## 第63話「そして私たちは巡り会う」

あの日、ナオキはなんと模擬男子生徒として音ノ木坂学院に転入してきました。  
さらになんと……

私と穂乃果とことりの同じクラスに入ることになったのです！

あのときいきなり『海未ちゃん』ではなくて『海未』と呼ばれたのでびっくりしまし  
た／＼／＼／

そして自分のことを『ナオキ』って呼んでくれと言われたので私はそう呼びましたが  
……

穂乃果とことりはその日のうちに『ナオキくん』と呼んでいました。

そして……あの日……

パシン！

「あなたは最低です！」

私は穂乃果にビンタしてしまいました……

ナオキは穂乃果を追いかけて、  
しばらくして戻ってきました。

詳しくは第34話『特別企画ナオキと絵里の妄想ラジオ！Part2』をご覧ください  
ね。

そして私は弓道部にこもりっぱなしになりました。

ピュン……グサツ……

「ふう………」

真ん中に矢が刺さりました……

先輩から「スクールアイドルはもういいのか」と聞かれました……  
……なんだか……複雑な気分ですね……

ピュン……グサツ……

「やあ海未さん、やってるねえー」

「わっ!?……ナオキですか……なんですか急に……」

「いや……ちよつとな……ま、気にしないでくれ……見てるから」

「わかりました……すう……」

ピュン……グサツ……

パチパチパチ……

「おー!ハラショー!流石海未だな」

「こ……これぐらい当たり前です……」

「なあ……海未……」

「はい?」

「剣道場に行かないか?」

「剣道場……ですか？」

私はナオキに誘われて剣道場へむかいました。

「勝負だ！海未！」

「勝負……ですか？」

「ああ！」

「……わかりました……でも……勝つのは私ですよ？」

「いいや……おれはもう昔のおれとは違う……勝負だ！」

「はい！望むところですよ！」

そして私とナオキは防具をつけました。

そして面を被りました……

「おっ……鬼園田さんの再来か……」

「後悔しても知りませんよ……」



「じゃあ……5つ数えたら試合開始だ」

「はい……」

「5……4……3……2……1……0！」

数え終わったと同時にナオキと私は突撃しました。

「てやああああああ!!」

バシン!!

2人の竹刀がぶつかり合いました。

グググググ……

「流石……海未だな……」

「ナオキも力をあげましたね……」

パン!

そして一旦私とナオキは後ろへと下がりました。

「ふう……めええええええん！」

「早い!?!……くっ……」

私はギリギリ避けました。

「まただ!どおおおおおお!!」

パシン！

パン！

「ふう……強くなりましたね……ナオキ……」

「……海未……悪いが……決めさせてもらおうよ……」

するとナオキは竹刀をしまう形にし、

そしてしまった竹刀の先を上にもひけるように体勢を低くして構えました。

「なんですか……そのふざけた構えは……ガラ空きですよ……」

「てやああああああ!!」

そのとき……

ビュン……

ナオキはものすごいスピードで……

「!?」

「どおおおおおおお!!」

パシン!!!

「なっ……」

ナオキのその剣は見事に私の胴台（どうだい）に当たりました……

私は……ナオキにはじめて負けたのですね……

でも……

「なんですか……今の技は……」

「天翔龍閃（あまかけるりゅうのひらめき）……あるアニメの剣術……飛天御剣流（ひてんみつるぎりゅう）の奥義だ……」

「まさか……アニメの技を再現したということですか!？」

「まあな……」

「でも……流石ですね……」

「海未……まだ落ち込んでんのか？」

「え？」

「剣を交えてわかった……今の海未の剣からは……迷い……不安とかマイナスイメージなことが感じられた……」

「……」

「海未……」

ギョツ……

「!? ナ……ナオキ／／／／／」

ナオキは私を抱きしめました……／／／／／

「海未……おれに言え……」

悩んでるなら……困ってるなら……

おれに言ってみろ……」

「わ……私は……」

私は……穂乃果にビンタをした……

それは……穂乃果が自分の気持ちに嘘をついていると思ったから……

でも……なんでビンタをしてしまったのか……

私は……穂乃果に……

なんで……

手を出してしまったのでしよう……

後悔……反省……

そんなところでしょうか……

「うっ……うう……私はっ……穂乃果につ……ごめん……なさい……

言葉で言えばよかったものをつ……」

ビンタっ……………してしまっつ……………

穂乃果は許してくれないかもしれない……………

私の気持ちに気づいてないかもしれない……………

でも……………でも……………うう……………」

私はナオキの胸の中で泣きました……………

そしてナオキは優しく私の頭をなでてくれました……………

「大丈夫……………穂乃果も……………わかってくれるよ……………だっつてお前らは……………」

いや……………」おれたち”は……………親友じゃんか……………」

「ナオキ……………」

「たしかに……………穂乃果は自分の気持ちに嘘をついてる……………それはおれにもわかった……………」

でも……………海末の方が穂乃果と長くいるんだ……………海末は穂乃果のことを考えてたから

ビンタしたんじゃないかな？」

「そう……………かもしれない……………」

私がスクールアイドルをしようと思ったのは穂乃果やことりが誘ってくれたからなのです……………」

「そうなんか……………」

「はい……………だから……………そんな穂乃果が……………『スクールアイドルをやめる』だなんて……………」

絶対自分の気持ちに嘘をついてる……

みんなを巻き込んで……仲間にしていった穂乃果が……

だからビンタしたんだと思います……」

「うん……」

「私は穂乃果が大好きです！もちろん

ことりも！みんなも！だから……だから！私は……」

「ああ……」

私はナオキの胸でずっと泣いていたのですね……／／／／／

「その……もう……大丈夫です……／／／／／」

「そうか……」

ナオキは私を抱きしめていた力を弱め、私を離しました。

「ありがとう……ごさいます……／／／／／」

「おう……」

「さ、もう1戦……するか？」

「はい！」

そして私とナオキはまた試合をするのでした……………

2人つきり……………

ですか……………

「海未……お疲れ様……」

「はい、お疲れ様でした」

「汗かいちまったな……汗も滴るいい女……ってか」

「もう……からかわないで下さい！／＼／＼／」

「いや……本当に……魅力的だな……」

汗……拭いてやろうか？」

「え……そ……そんなこと……破廉恥です……／＼／＼／」

でも……ナオキなら……」

「海未……」

「ナオキ……」

そしてナオキは私の袴に手を伸ばし……



つて……なにを考えてるのですか!!!  
／／／／

す…好きなのは…かわりないのですが…

ですがああああああ……

でも……

ナオキは絵里に告白して……

2人は付き合いました………

でもまだチャンスはあるのでしょうかね………

次回へ続く………

## 第6 4話「初恋はやがて」

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

ナオキが倒れてしまいました。

これもあの大坂学園のミツヒデとかいう人のせいなのです！

そしてナオキは西木野病院のICUに運ばれました。

そして真姫のお母さんに頼まれ、ナオキを囲んで祈りました……

ナオキがいつものナオキで戻ってくることを……

「ナオキ……戻ってこなかったら私はあなたを許しません!!」

そしてナオキの息も落ち着き、

数日後に絵里からナオキが目を覚ましたと連絡がありました。

ガラガラガラ……

「失礼します……」

「海未か……来てくれたんだな」

「ナオキ！もう……あなたって言う人は！」

「ご……ごめんごめん！悪かったって……そう怒るな……」

「もう……心配したんですから……」

「……ごめん……」

そういうとナオキは私の頭をなでてくれました。

「本当に……一番心配したのは絵里なんですよ？わかっていますか？」

なんでこんなことをいうのでしょうか……

「はいはい……重々承知してますよ……」

「ならいいのですが……」

「はははは……」

「それと……これ……ナオキが休んでいる間に受けた授業のノートです」

「あーすまん……げっ……数学……」

「まあ……頑張ってください。」

「わからないところがあれば教えますので」

「はい……」

「ほんとうに心配してくれたんだな」

「当たり前です！」

「海未はほんとうに心配したら怒るときがあるからな……」

「そう……ですね……それでは私は失礼しますね……」

「おう！あ、そうだ」

「ん？どうかしましたか？」

「心配してくれてありがとうな！」

「ちゃんと声は届いてたから」

「い……いえ……／＼／＼」

そ……それでは……／＼／＼／＼」

私は若干逃げるように帰りました…

そして私は本戦に挑む曲の歌詞を考えていました……

「うーん……決まりませんね……」

「どうだ、調子は？」

「ナオキですか……見ての通りです……」

「うーん……こういうのはどうかな？」

そしてナオキは歌詞を書き始めました。

「はっ!? す……すごい……」

「そうか？」

「はい……すっかりメロディーにも合ってますね」

「よかった……ま、こんなもんだろ」

「ありがとうございますー！」

「いいってこれぐらい……」

歌詞は自分の気持ちを素直に書けばいいんだ……焦ってるのか？」

「はい、少し……」

でもナオキのおかげで思い出せました」

「ならよかった……がんばれよ」

「はいー！」

そして私は歌詞を書き始めました。

ナオキの部分はサビにして……

そしてラブライブ！でも優勝……

卒業式も終わって、お別れ会もして……

ナオキは……………

「おれと結婚してください!!!」

絵里にプロポーズしました……………

めでたいことなのです……………

愛し合う2人が結ばれる……………

でも……………

それと同時に……………

私、園田海未の初恋は……………



叶わない恋となりました……………

でも……………この気持ちは……………

この気持ちは……………

伝えたい……………

ナオキに……………伝えたい……………

次回へ続く……………

## 第65話（園田海未編章末回）「海未、これから進む道」

「やあああああああ!!」

パシン！パシン！パシン！パシン！

パシンパシンパシンパシンパシンパシン……

パシン！

ググググ……

パン！

「流石海未だな……」

「ナオキこそ……」

私とナオキたちは3年生になりました。

ナオキと私は今、剣道場で試合をしています。

「いくぜ……………」

ナオキは「あの構え」をしました。

「また”あれ”ですか……………」

ですが……………私も成長しますよ……………」

私は息を吸って目を瞑りました。

「いくぞ!! 『天翔龍閃』！」

どおおおおおおおお!!!!」

ビュン……………」

スカツ……………」

「なに!?!」

ナオキの『天翔龍閃』は空を斬りました。

なぜなら私は……………」

「上!?!」

私はナオキに勝つために園田流の奥義を編み出しました。

「いきます!!」

「なんだと!?!」

ナオキはとても驚いていました……

なぜなら……

ナオキには私が見えているので……

「これは……一体……」

「くらいなさい! 園田流奥義!!」

『園田流星群』!

めええええええええん!!」

私と私の分身はナオキの面に向かい上から竹刀を振り下ろしながら落ちていきます。

ナオキは竹刀でガードしましたが分身の竹刀は消え失せます。

「くっ……どれが本物だ……」

パシン!

「これが本物ですよ……」

「しまっ……」

私はナオキの竹刀に私の竹刀を当てた後、姿勢を低くして…………

「どおとおおとおおお!!」

パシン!

「くっ…………とられた…………か…………」

「ふう…………成功しました…………」

「つえーなあ…………鬼園田さんは…………」

「当たり前です…………」

私は面を脱ぎました。

「だけど…………鬼園田さんは大丈夫なのか?」

「なにがです?」

「『なにがです?』じゃねーよ!」

もうすぐだろう?日本中の道場のてっぺんを決める戦いが…………

「ああ…………『日本道場最強決定戦』のことでしたか…………正直緊張しています…………」

私は「園田道場」という名前を背負って出るので…………」

「だろぅなあー」

そう、私は高校を卒業したら園田道場を継ぐのが夢なのです。

しかし、父上と母上にその力量があるかを見極めるためその大会…………

『日本道場最強決定戦』に園田道場の代表として出場しろと言われました。

ま、剣道だけでなく日舞や弓道もあるのですが……

「大丈夫でしょうか……」

「大丈夫だろ……海未なら……」

「そうでしょうか……」

「てい！」

「いたっ！な……なにするんですか!?!」

ナオキは私にチョップしました。

「自信を持って！お前ならいける！」

絶対日本一になれる！そして園田道場を継げる！」

「ナオキ……」

「みんなで応援に行くからな！」

「はい！」

私はナオキに元気づけられました。

あ……そうだ……

「ナオキ……その……／／／」

「ん？」

いつかは……伝えなきゃいけない……

「大会に優勝できたならナオキに言いたいことがあります……

優勝したら……それを聞いてください！」

「優勝しなかったら？」

「優勝しなかったら……」

「忘れてください……」

「わかった……絶対に優勝しろよ！」

「はい！」

私は優勝して……絶対に伝えます……

ナオキのことが好きだということを……

「よし！そうと決まれば試合だ試合だー!!」

「望むところですよ！」

そしてナオキと私はまた試合をしました。

「てやあああああああああああああ!!!」

私は必ず……



園田道場を継ぎます!!

そして……………ナオキに……………

この気持ちを……………

「私……………ずっとナオキのことが好きでした!」

次回、新章へ続く……………

## 小泉花陽編

## 第66話「先輩禁止2」

私、小泉花陽です…

音ノ木坂学院に通う高校1年生です…

今日は卒業式なんです！その後はお別れ会もして…

その後…

「おれと結婚してください!!!」

ナオキくんは絵里ちゃんにプロポーズしました…

それを聞いた時、胸が痛かった……………

だって……………私は……………ナオキくんのが……………す……………す……………ちゆきだから！  
あ、ごめんなさい！噛んじゃった……………

あの日、ナオキくんは模擬男子生徒として音ノ木坂学院に転入してきました。

自己紹介をしたんですけど……………

うう……………緊張しました……………

そしてある日の昼休み……………

私は飼育係なのでアルパカのアルーさんとパカさんの様子を見に行きました。

「あ……………」

なんとそこにはナオキくんがいました。

「かわいいなあー……」

ナオキくんはアルーさんとパカさんをなでていました。

「ん？たしか…花陽ちゃん」

「は…はい…なにしてるんですか？」

「いや…かわいいなあーって思ってたさ、名前なんて言うの？」

「アルーさんとパカさんです…」

「へーそんな名前なのか…」

よしよし」

「メエー……」

アルーさんとパカさんはとても嬉しそうでした。

「かよちーん！」

「あ、凜ちゃん…」

凜ちゃんが走ってきました。

「あれ？ナオキくんもいるー」

「やあ凜ちゃん」

凜ちゃんはナオキくんに馴染む早いなあー

まだ私は……

「そういや花陽ちゃんや凜ちゃんのことなんにも知らねーわ」

「凜もだにやー」

「わ……私も……ナオキ先輩のことは……」

「こら花陽ちゃん!」

「は……はい!」

「先輩禁止なんだろ?」

「あ……」

「そうだにやー!」

それならナオキくんもだにや!」

「はあ?」

『『ちゃん』って付けてるのって凜とかよちにぐらいだにや!不公平にや!』

「そ……それは……」

「それをちゃんとしたらかよちゃんも先輩つけなくなるかもよ!」

「ふええ!」

「……まったくわかったよ……」

花陽、凜……よろしくな」

「うん！ナオキくん！」

わ……私も……勇気をだして……」

「な……な……ナオキ……せん……ナオキくん……」

「おー」

い……言えました……ふう……」

「そーいや2人ともは好きな食べ物とかあるの？」

「ごはんですー！」

「ラーメンにやー！」

凜ちゃんと私は同時に言いました！

ごはんは最高です！

「お、花陽はごはんが好きなのか！」

「はいー！やっぱりごはんは……」

それから何分かごはんのことを話していた気がします！

あ、作者さんより……」

『ごはんは好きですが語れるほど詳しくないのでカットします……』

申し訳ありません』

なんと！だからごはんは……………

「おー！おれもごはん好きなんだよー！」

「そうなんですか!？」

「おう！また食いに行くか!？」

「はい！」

「凜もラーメン食べに行きたいにやー！」

「ああ！いいぜー！」

ここでナオキくんもごはんが大好きだったことが発覚しました！  
はらしよーです！

そして次の日…

「んー…ごはんはやっぱり最高ですー！」

「だよなあー！」

今、私とナオキくんはごはん屋さんにあります。

しかもナオキくんがここのごはん屋さんの無料券×2を持っていたんです！

そして私たちはそれから何回か食べに行きました！

その時間は幸せでしたあー……

ごはんが食べられるのもありましたけど…



ナオキさんと一緒……っていうのも……  
／／／／

でもなんだろうな……

初めて部室でナオキさんの顔を近くで見たとき、”初めて会った”感じがしなかった

……

どこかであつた？

ナオキさんの笑顔は……

眩しかった……

もしかして……

次回へ続く……

## 第67話「まさかの再会」

「ナオキくん……」

「なんだ？」

「私って……その……ナオキちゃんと昔一度会ってますか？」

「うーん………どうだろう………なんで？」

「………その………なんだかそう感じるの………」

「ふーん………花陽………花陽ちゃん………うーん………まじで思い出せん………」  
「そうですか………やっぱり私の勘違いなのかな？」

「じゃあ昔の話したら思い出すかもせーへんで？」

「そうですね………」

そして私は小さい頃のお話をしました。

「私は小さい頃からアイドルに憧れていて、好きでした。

家ではアイドルの真似をしてお母さん…小泉花子（こいずみはなこ）に褒められていました。

お母さんの話によると私は赤ちゃんモデルもしていたらしいです。

そしてお母さんは昔、アイドルだったんです！

そしてお父さん…小泉太陽（こいずみたいよう）と出会ったらしいです！

そして小学1年生のある日、

私は家でアイドルの真似をしました。

そのとき歌ったのは…突然聞こえてきた歌だったの…

『ララランラーン ララランラーン

ララララララララー ララララララララララララララ ララーラーラーラー

ララランラーン ララランラーン

ララララララララー ララーラーラー ラーラーララララ ラーラーラー

そのときお母さんが昔、同級生だった人を連れてきました。

そのときその方の男の子供さんもいて…

私、見られちゃったーって焦りました……

『あ……え……えーっと……』

『花陽ちゃん、またアイドルの真似をしてたのね…かわいいわよー』

『もう…知り合いの人が来るんなら言っと言ってよおー』

恥ずかしかった………

「あーそーいやおれも昔、お母さんに連れられて知り合いの家に行ったらアイドルの真似をしてる子がいたなあー」

「へえー、偶然ですなー」

「だな」

「で、その男の子がそんな私を見て…

『すっげーかわいい！ねえねえもう一回やって！』

って言ったんです！

私、嬉しくて……その男の子の前でライブをしました。

お母さんたちも笑ってそれを見ていました」

「へえー、偶然だな……おれもそんなことがあったよ」

「へえー」

「……………ん？」

「まって……『小泉』……だったな……」

「はい……………」

「……………まさか!？」

「あのときのアイドルの真似をしてた子って……………花陽？」

「あのときたくさん見てくれたのって……………ナオキくん？」

「……………えー……………!!！」

「ちよつ……………まさかこんなところで再会できるなんて!」

「ほんとう! えつと……………その……………ありがとう……」

「え？」

「あのときナオキくんが褒めてくれて、『ほんとうのアイドルになったら応援するから!』って言うてくれたから……………今、こうしてスクールアイドルをやってるの……………だから

……ありがとう……」  
「おう……」

びつくりしました……

あの男の子がナオキくんだなんて……

実は私……その男の子が初恋なんです……

だから私は……

ナオキくんが初恋の相手……

ナオキくん好きなの……

一緒にいても楽しい……

なにより笑顔が素敵……………

もしナオキさんと一緒になったら……………

「ごはん炊けたよおー」

「おつ、待ってました!」

「「いただきますーす!」」

「んー……………やっぱり白米は最高です!」

「ああ!

つて……………ごはん粒付いてるぞ…」

「ふえ? ほんとう?」

「取ってやるよ……」

「そう……ありが……」「ペロツ……」……ってなんでそうやるのお!？」

「悪いか？」

「で……でも……ほらまだ残ってるぞ……」

「ちよつと……ダメツ…………」

……ってなんでそうなるのお!？／／／／／

この気持ち……伝えたい……



次回へ続く……

## 第68話 「2人をつなぐごはん」

このナオキくんが好きっていうこの気持ちを……

伝えたい……

いや、伝えなかった………

でも………

ナオキくんは絵里ちゃんに告白して2人はお付き合いを始めました………

たしかにお似合いだと思います……

でもやっぱり………

悔しいなあ………

まだチャンスはあるかな……

そして……あのとき……

「はあ……はあ……はあ……」

ナオキくんは倒れてしまつて西木野病院のICUにいました。

そして真姫ちゃんのお母さんに頼まれてみんなでナオキくんを囲みました。

ナオキくんの無事をみんなで祈つた……

私はナオキくと話していると楽しい……

なにより2人とも大好きなごはんを食べながら話しているとつと楽しい……  
だから私は……

「ナオキくん……また大好きなご飯、一緒に食べましょう！」

そうナオキくんに言いました……………

だって私とナオキくんが一番つながれるのはごはんだと思ったから……

その後ナオキくんは回復していき、そして意識が戻つたと連絡があつたので私は西木野病院にむかいました。

ガラガラガラ……………

「ナオキくん……………」

「ん？……おー花陽、来てくれたんだな！」

「もう大丈夫なんですわね！」

「ああ……………おかげさまでな」

「そ……そんな……………私はなにも……………」

「ちゃんと届いてたよ……花陽の声……」

「声？」

「ああ……たしか……『また大好きなご飯、一緒に食べましょう！』だったっけ？」

「あ……あれのことお!? えつと……その……私………／／／」

「はははは……またごはん……食べに行こうな……」

ナオキくんはわたしの頭をなでながら言いました。

「はい……／／／／」

「そうだ」

「ん？」

「ごめんな……心配かけちゃって……」

そしてありがとう！」

ナオキくんは笑顔で言いました。

「は……はい……／／／／」

やっぱりナオキくんの笑顔って眩しいなあ……

「じゃあ私は行くね！」

「おう！」

「約束ですからね！絶対ごはん食べに行きましょう！」

「ははは……わかってるって……」

そして私は帰りました。

その後、私たちはラブライブ！で優勝！

まさか……あのラブライブ！で優勝できるなんて……

ラブライブ！ですよ、ラブライブ！

スクールアイドルの祭典！

でもまさかA|R|I|S|E、そして関西No.1のナニワオトメにも勝てるなんて思い

もしてませんでした！

うう……今思い出しても泣けてくるねえ……

あんなにたくさんのアンコール……

ほんとうに優勝したんだねえ……

そして……卒業式の日をむかえたんだ……

次回へ続く……

## 第69話（小泉花陽編章末回）「花陽、これから進む道」

卒業式は驚きの連続でした……

私はにこちゃんに次期部長に任命されるし……

なにより……

ナオキくんがアルーさんとパカさんとお話していたのが一番驚きました……

ナオキくんいつの間にあんなスキルを……

そして……



ナオキくんは絵里ちゃんにプロポーズしました……………

プロポーズ……………

婚約……………

結婚……………

ということは私にはもうチャンスはないってこと……………なの？

そんな……………

もつとはやく伝えておけばよかった……………

でも伝えなきゃ……………

たとえ叶わない恋になつたとしても……………

伝えなきゃ……………

そして私たち1年生は2年生に、  
ナオキくんたち2年生は3年生になりました。

「やっぱりごはんは最高です！」

「だよなあー！」

私とナオキくんはごはん屋さんでごはんを食べていました。

やっぱりこのときが……………

ナオキくんと一緒にごはんを食べながら話しているのが幸せです……………

そしてある日の昼休み……………

「だからあんまり動くなつて……」

妊娠してゐるんだろ？アルーさん……」

「メエー！（あんたは私の親か！）」

「はあ……もう……」

「アルーさん、ナオキくんの言うこと聞かなきゃだめだよ」

「メエー……（花陽ちゃんの言うことなら……）」

「おいこら」

「ペツ……」

「うつ……」

なんとアルーさんはナオキくんに唾をかけちやいました……

「ぷっ……ふっふっふっ……」

「笑うな……」

「メへへへ……」

「お前らもかよ……」

ナオキくんは唾を拭きながら言いました。

「……でき……花陽は将来の夢とかあるのか？」

「将来の夢……ですか？どうして急に……」

「ちよつと気になってな……」

「そうですね……」

お母さんが運営の方で働いてるからそこで働きたい……かな？」

「そうか……花子さんって花陽のお母さんだったな……」

「はい……」

それに……あのラブライブ！運営委員会で働けるなんて、一生アイドルに尽くせます

！」

「ははは……そうか……」

大学には行くのか？」

「うーん……どうしよかなあ……」

「ま、ちゃんとコネはあるからな」

「そ……そうでした！」

そうでした！

ナオキくんのおじさんはたしか運営委員会の会長さん！

それなら………確実にいける!!

そう…私はアイドルに関係する仕事につきたいの……

そして真っ先に思い浮かんだのは……

ラブライブ！運営委員会……

そこならラブライブ！の運営にも関わられるし、もう願ったり叶ったりです！  
帰ったらお母さんに言ってみようっと！

「おっ、そろそろ時間だな」

「そうですね……」

「じゃあな、アルーさん、パカさん！」

「またね」

「メエー（バイバイ）」

そして私たちは自分の教室へと戻っていききました。

はあ……もう……なんだろう……

このモヤモヤした気持ち……

どうしたら伝えられるんだろう……

「わ……私……ナオキくんのこと……  
ずっと好きでした！」

次回、新章へ続く……

## 南ことり編

### 第70話「傷と初恋」

私、南ことり。音ノ木坂学院に通う高校2年生です。卒業式のあとお別れ会をしたんです。そして……

「おれと結婚してください!!!」

それを聞いたとき、胸が痛かった……

だってナオキくんのこと好きなんだもん……

ナオキくんと出会ったのは小学1年生のとき……

穂乃果ちゃんと神田公園で遊んでたときだったんだ……

って言っても夕方で……穂乃果ちゃんが水たまりを越えたあとだったんだけど……  
すると穂乃果ちゃんがいきなり神田公園の出入口の方に走っていったの。

すると穂乃果ちゃんはある男の子を連れてきたの。

それがナオキくんだったんだ……

「穂乃果ちゃんその子誰？」

「あのね……この子が遊びたそうにしてたから連れてきたの！」

「いや……だから僕は……」

「あれ？もしかして……同じクラスの香川ナオキくんじゃない？」

「そ……そうだけど……」



「えー！そうだったんだー!?」

「穂乃果ちゃんもしかして気づいてなかったの!？」

「うん…あはははは…ごめんナオキくん…」

「もう大丈夫だよ…」

「よかったー！さ、遊ぼうよ！」

「ことりちゃん、いいでしょう?」

「うん!」

そしてナオキくんも交えて一緒に遊んだんだあゝ!

夕方だったけど……

ナオキくんの笑顔ってとろっても素敵なんだあゝ

それである日……

海未ちゃんも加わってことりと穂乃果ちゃんとナオキくんと4人で遊んだの。

「次はことりちゃんが鬼だよー!」

「もう!待て〜!」

「わー!」

コテッ

「痛っ…」

「「ことり（ちゃん）!?!」」

「ことりはこの時コケちゃったんです。

「ことりちゃん!大丈夫?」

「ナオキくん…」

「足…見せて」

「…うん…」

「血が出てる…絆創膏はるね」

「ありがとう…」

ナオキくんは私の右膝に絆創膏を貼ってくれました。

「これでよし…痛くない?」

「うん…ありがとう…」

「一応家に帰ったらおばさんに言った方がいいよ?」

「わかった…」

「よし、じゃあ続きしようよ!」

「うん!」

おばさんというのは私のお母さんのこと、名前は南すすめ（みなみすすめ）、ご存知音ノ木坂学院の理事長です！

ついでにお父さんは南鷹雄（みなみたかお）、東京都の教育委員会の教育長をしています。

話は戻して……

ナオキくんをどんどん好きになっていったのはそれがあつてから……

つまりは私の初恋だね……

ナオキくんは優しいし……

勇気もあるし……

かつこいいんですよね……

そして家でそのことをお母さんに報告したの。

そしてたらお母さん左膝のこと心配して……

もう大丈夫なのに……

そう、私は生まれたときから左膝が悪くて……

私はずっと長いスカートを履いていたんだ。

みんなに心配させちゃいけないから内緒で手術したんだけど……  
その傷がまだ気になってた……

次の日……

「ナオキくん、昨日はありがとう！」

「え？うん、いいよー。」

それよりもう大丈夫なの？」

「うん、ナオキくんのおかげで大丈夫だよ！」

「いや、そうじゃなくて……左膝……」

「え……」

驚きました……

まだ話してないのになんでわかったんだろうって……

「右膝に絆創膏貼った時にふと左膝をみたら……」

「傷がみえた？」

「うん……なんで黙ってたの？」

「それは……………」

話そうかな……

でも…………

そんなとき……

あの歌が聞こえてきたんです……

『ララランラーン ララランラーン

ララララララララー

ララララララララララララ

ララーラーラーラー

ララランラーン ララランラーン

ララララララララー

ララーラーラーラー ラーラーラー

ララララ ラーラララー』

その歌に元気を…勇気をもらって……

私はナオキくんに話しました……

左膝のこと……

そして幼稚園生のときは足を引きずってそれをからかわれたり、同情されすぎたりしたこと……

「そうだったんだね……」

「うん……だから長いスカートを履いてるの……」

「またそのときのようになるか心配だったから？」

「うん……」

「でも長いスカートだから転ぶんだよ？」

「でも……」

「穂乃果ちゃんや海未ちゃん、それに僕は……そんなことはしないから」

「え？」

「僕たちはことりちゃんといつも通り遊ぶから！」

「ナオキくん……」

「だから……その話……穂乃果ちゃんと海未ちゃんにもしよう？」

「うん……わかった！」

そしてその話を穂乃果ちゃんや海未ちゃんにも話したの……

そしたらナオキくんの言う通り、

穂乃果ちゃんと海未ちゃんはいつも通り遊んでくれた。

ナオキくんも……………

こんな日々がずっとずっと続くと思ってた……………

でも……………

3年生のとき……………

「海未ちゃんには朝話したんだけどね……………」

「なに？」

「僕……………大阪に引越すことになったんだ……………」

「え!？」

びっくりしました……………

ナオキくんが引越すことになっただなんて……………

「そんなあゝ……………」

「ことりちゃん……………」

「うっ…………ナオキくん…………もう会えないの？」

「うん…………ごめんね……………」

「でも…………ことりたちのこと忘れないでね？」

「うん！」

そしてナオキくんは大阪に引っ越しました……………

次回へ続く……………



## 第71話「選択」

私はお母さんが理事長をしている音ノ木坂学院に入学したんだ！

穂乃果ちゃんや海未ちゃんも一緒に！

実は私はナオキくんが転校してからずっと保険委員をしてたんだ……

ナオキくんに傷の手当てをしてもらったこと、そして左膝のこともあって……

そしてナオキくんとは意外なカタチで再会したの……

なんとナオキくんが音ノ木坂学院に模擬男子生徒として転入してきたんです！

しかも同じクラスでねえ

いきなり『ことり』って呼ばれたからちよつとドキドキしちゃった：／／／

ナオキくんには『これからはナオキって呼んでくれ』って言われたけど

やっぱり私は『ナオキくん』って呼ぶ方がいいからそう呼んだの！

そして文化祭の日……

穂乃果ちゃんがライブ中に倒れて……

私が留学することを打ち上げのときに話して……

穂乃果ちゃんとけんかした……

そしてμ'sの活動休止……

にこちゃんからまたしないかって連絡がきたけど……断った……

そんなとき……

ピンポーン……

「はあ〜い」

私は学校を休んでいたから家にいたの……

「よっ、ことり」

「ふえ!?! ナ……ナオキくん!?!」

「すまん……急に来ちゃって……」

「ど……どうしたの？」

「どうしたって……決まってるだろ？」

「……止めに来たの？」

「うーん……まあ……そんなところ……」

話したかったからな……ことりと……」

「……入って……」

「ありがとうございます……邪魔します……」

そしてナオキくんを私の部屋に案内した……

「お茶……入れてくるね」

「ああ……」

「お待ちせ……」

「ありがとう……」

「で、話って？」

「……ことりはどうしたい？」

「どうしたいって……それは……」

「留学して服飾を学んで……」

「でも……アイドルは？」

スクールアイドルは？

μ, sは続けたくないのか？」

「続けたいよ……でも……」

「決まったことだから無理……なのか？」

「……うん……」

2人は沈黙した……

「……なら服飾とμ, s……どっちの方がやりたい？」

「それは……」

それは……

服飾だってしたい……

でも……μ, sも……

どっちの方がしたいと言われると……

「……μ, s……」

「だろ？なら……続けたらいいじゃんか」

「でも……………だつて……………」

「おれはことに $\mu$  sを続けて欲しい」

「ナオキくん……………」

「ことりがいないと $\mu$  sはダメなんだ！衣装だつてことりが作つてるんだろ？」

「うん……………」

「それにさ…………… $\mu$  sは9人の女神……………その1人がかけたらどうなる？」

「ダメだろ？ダメなんだよ！」

「ことりは絶対いなくちゃいけない！」

「でも……………」

「わかつてるんだろ？自分でも……………」

$\mu$  sを続けたいつて……………」

「でも……………今更……………」

「…正直になれつて……………」

「正直に……………」

「出発はいつだ？」

「明日……………」

「明日……かあ……」

「ことり……ほんまに行くんか？」

「……うん……」

「……おれは……行かないで欲しい……ことりがいなくなったら寂しい……」

「ナオキくん……」

「ことり……穂乃果にはちゃんと話したのか？」

「……して……ない……」

「なんでしないんだ？」

「だって……けんかしたし……」

「けんかしたからって話さないのか？」

「なんか言うことあるだろ？」

「言うこと？」

「簡単だぞ？あんまり深く考えんな……」

「言うこと？」

「なんだろう……」

「けんかして言うこと……」

けんかして言うこと……………  
あつ……………

「ごめんなさい……………」

「わかっているじゃん……………なら明日言えよ……………」

「でも……………」

「おれから言えるのはそれぐらいだな……………」

あととは……………次第だ……………」

「……………次第?」

「ああ……………じゃあな……………」また明日」

そう言うとなオキくんは帰っていった。

「また……………明日……………か……………」

でも私は次の日、空港にむかった。

そんな私を穂乃果ちゃんが止めに来てくれた。

そして私は言った……………

「ごめん」

つて……

そして講堂ライブのあと……

「ナオキくん……」

「ことり……」

「その……ありがとう……」

「おれはなんもしてねーよ……」

「ううん……ナオキくんのおかげで自分の気持ちに正直になれた……」

穂乃果ちゃんとも仲直りできたし……

μ s も続けることができる……

だから……ありがとう……」

「おう……／＼／＼」

あゝ、赤くなつた……

かわいい……！



そしてあの日……………

ナオキくんは……………

絵里ちゃんに告白して……………

2人は付き合った……………

でもまだ……………チャンスはあるよね……………

この段階なら……………まだ……………

次回へ続く……………

## 第72話「隠し事」

私は留学するつもりだったからメイド喫茶のバイトは辞めたんだけど…  
店長さんにまたやってってくれて声をかけてもらって…

「おかえりなさいませう、ご主人様♡」

と……またやっています……

『伝説のメイドミナリンスキー』として……

そういうえばこのことナオキくんには教えてない……あははは……

ま、いつか……

ナオキくんがこんなところ来ないでしょ……

カランコロン……

ドアの開く音がしました！

「おかえりなさいませう、ご主人……さ……ま……」

「え……まさか……こと……」おかえりなさいませ、ご主人様♡「いや絶対こと……」おかえりなさいませ、ご主人様♡「……えつとー……こ……」1名様ですね、こちらの席へどうぞ♡「……はい……」

まさかまさか……なんでナオキくんがここに!?

まさかナオキくん……そんな趣味が……

「なあ……ことり?」

「なに?……あ……」

「やっぱりことりかよ……」

つい反応しちゃいました……

「あははは……とりあえず……こちらへどうぞ……」

「ああ……バイトか？」

「まあ……そんなところ……でもなんでナオキくんが？」

「いや……そこ歩いてたらこの看板みてさ……ちようど腹減ってたし入ろうかなーって」

「あははは……なるほど……私、ナオキくんにそんな趣味があつたと思つた……」

「あははは……でもあんなに隠さなくても……」

「だって……最初はみんなにも隠してたんだよ？」

ナオキくんにも隠すよ……」

「そんなもんかな？」

……まあ……とりあえず……なんか食おうかな……」

「あ、それだつたらこの『ミナリンスキー特製オムライス』がおすすめだよ！」

「ミナリンスキー？なんじゃそれ？」

「あ……そういえば言つてなかつたね……」

私ね、ここでは『ミナリンスキー』って名乗つてるの……

それがいつしか『伝説のメイドミナリンスキー』って呼ばれるほどに……」

「ほほう……すごいなあー」

「えへへへ……」

「じゃ、その『ミナリンスキー特製オムライス』を下さい！」

「かしこまりました」

そして私はミナリンスキー特製オムライスをナオキくんに出しました。

「お待たせしました、ご主人様♡」

「ありがとうございます」

そして私はケチャップをかけてスプーンですくつて、ナオキくんの口の前に差し出した。

「えっと……」

「はい、あーん」

「あーんって……それは……」

「はい、あーん！」

「うっ……あ……あーん……／／／」

ナオキくんは少し照れながらオムライスを食べました。

「どうですかあ〜?」

「うん、美味しい!ハラシヨ〜!」

「そうならよかった……」

そしてナオキくんは勢いよくそのオムライスを食べ終わりました。

「ごちそうさまでした!」

「お粗末さまでしたあ〜」

「これ……ことりが作ったのか!?!」

「うん、そうだよ!」

「すげえー!裁縫もできて、料理も出来て……ことりならいい奥さんになりそうだな!」

「え!?!……えつと……そ……そうかなあ〜?／＼／＼」

「ああ!」

「ううう……／＼／＼」

いい奥さんになれるって……／＼／＼

もう……／＼／＼

いい奥さん……

「はい、ご飯できましたよ」

「今日もうまそうだな！いただきまーす！」

「どうですかあ〜？」

「うん、うまいよ！」

「ありがとうございます」

「じゃあ次はおやつを食べようか……」

「おやつ……ですか？」

「ことり……」

「ちよつとナオキくん!？」

「さあ……ベッドに行こう……おやつの間だ……」

「もう……わかりました……さあ……行きましょう……」

……つて……ならないか……

はあ……

「じゃ、おれは帰るわ……」

「うん、ありがとう……」

「ああ！」

そしてナオキくんはお会計の方に歩いていき、支払って、店を出ようとなりました。  
「行ってらっしゃいませ、ご主人様♡」

そして……あの日……



「はあ……はあ……はあ……はあ……」

ナオキくんはラブライブ！本戦の顔合わせで倒れてしまい、西木野病院のICUに運ばれました。

どうしよう……

ナオキくんが……死んじやうかも……

そして真姫ちゃんのお母さんに頼まれてみんなでICUに入ってナオキくんを囲んだ。

そして私は祈りました……

「ナオキくん……あの元気なナオキくんに戻ってよ……」

これからもずっと……あの元気なナオキくんできて欲しい……  
そう思ったから……

……  
そして数日後……ナオキくんの意識が戻ったと聞いて、私は西木野病院にむかった

ガラガラガラ！

「ナオキくん!!」

「わっ!?!びつくりしたあー……」

「なんだことりか……」

「なんだじゃないよお！心配したんだから！」

「……ごめん……」

「そう言うとナオキくんは私の頭をなでてくれました……//」

「えへへへ……//」

「ほんとうに心配したんだよ？」

「ああ……わかつてる……ちゃんと声は聞こえたからな……」

「うん……」

「たしか……元気なおれに戻って……だったかな？」

「うん……そんなところ……」

「じゃあ……これから元気にならなきゃな！」

「うん！」

「ありがとうな……ほんとうに……」

「そんな……私はなにも……」

「いや……ことりやみんなのおかげでおれは今、こうしているんだ……」

だからありがとう……」

「……うん……／＼／＼」

じゃあ……私は帰るね……」

「ああ……また今度な！」

「うん！」

そして私は帰った。

そして私たちはラブライブ！で優勝したんだあゝ！

衣装も……

「うくん……どうしよかなあゝ……」

「どうしたんだ？」

「えっとねえ、衣装できたんだけどなにかワンポイント欲しいなあ〜って……」  
「そうかあーそれなら……」

「ん？」

そしてナオキくんはリボンなどを作り始めました。

「こんなんでどうだ？」

「す〜い！ありがとうございます！」

そしてあの衣装ができたんだあ〜！

そしてついに……あのときが……きてしまう……

次回へ続く……

## 妄想外伝（クリスマス）「聖夜の奇跡？」

「今日はクリスマスかあ……………」

おれは街を歩く間、セールの旗やサンタの格好をしている人や、まだ照らされていないイルミネーションを見てそうつぶやいた。

あと腕を組んでるカップルも…………

「なにか絵里に買つていこうか……………」

やっぱ付き合ってるんやから、クリスマスプレゼントは必要だよなあー！

穂乃果が

『予選決勝突破のお祝いもかねてクリスマスパーティーしようよ！』

つて言うから……………

「はあ……………」

思わずため息がでる…………

寒いのかなあ……………

そうだな……絵里にはネックレスでも買っていくか……

そしてあたりも暗くなり、ちよつと遅れて穂乃果の家に着いた。

「おじやましませ……」

「あ、ナオキくん来た！遅いよー！」

と、穂乃果。

「すまんすまん……みんなもう来てる？」

「うん、全員揃ってるよ！」

「そうか……」

おれは穂乃果に連れられて居間へとむかった。

ガラガラガラ……

「ナオキくん連れてきたよ！」

「みんなすまーん」

「ナオキが遅刻とは珍しいですね」

と、海未。

「いやーちよつと用事があつてだな……」

絵里から聞いたろ？」

「まあ…そうですが……」

「その用事がなにか気になるにやー」

と、凜。

「教えてよー！」

と、穂乃果。

「教えねーよ！」

「「えー！ー！」」

「穂乃果、凜、ナオキに迷惑ですよ」

「「はーい……」」

「さ、はやくしましろう！」

と、絵里。

今日はなんだかやる気があるようだ……

そしておれも席についた。

「で、なんでみんなミニスカサンタ？」

「そうだみんなミニスカサンタのコスプレをしている……」

「もくナオキくんのエッチ！」

と、希がからかってきた。

「はあ!?なにがだよ!」

「どうせみんなのパンツ見ようとしてるんやろー?」

「なんですつて!?ナオキ、破廉恥ですう!!」

「見てねーよ!!」

何言つてんだよ…つたく…」

「でもでも、みんなのこの格好…似合つてるとおもつてるよね〜?」

と、ことり。

みんな期待の目でおれをみてきた…」

「まあ…みんな似合つてるよ」

まあ…みんな似合つてるしな!

とくに絵里が!

そういやみんな顔赤いな…」

なんでだ?

「じ…じゃあ、乾杯のあいさつを部長のにこちゃんにお願いしまーす!」



「え!?にこ……?」

「はやくしろよ部長さん」

「わ…わかってるわよ……」

そしてにこは立ち上がった。

「えーっとそれじゃあ…ラブライブ!予選決勝突破に……かんぱーい!」

「「「「「「かんぱーい!」」」」」」」

「あんど……」

「「「「「「メリークリスマスー!」」」」」」」

カコン!

そしておれたちは乾杯した。

クリスマスとラブライブ!予選決勝突破を記念して……

「ぷはー!やつぱコーラは最高だ!」

「そうおれはコーラが大好きなのだ!」

「そ…そうですか?」

「そうか…海未は炭酸が苦手だったな」

「はい…」

でもラムネは大丈夫なんだよなあー……  
不思議だ……

「そういえば、真姫ちゃんは今、今年はサンタさんになにをおねがいの？」  
「ここが真姫をからかうように言った……」

「そうね……今年はテレビね」

「お……おう……どんなやつなんだ？」

「えっと……100インチだったかしら……」

「」「」「」「100インチ!」「」「」「」

「そんなに驚く?」

「いやいやいや、それは驚くに決まってるやん!」

「そう?」

「流石はお嬢様……」

「ハラショー……」

100インチってどんなけだよ!

それを買える西木野……ゴホンゴホン……サンタさんも凄いやけどな……

「あ、そういうええね！お母さんが近所の人にもらつてきた飲み物があるんだ！

混ぜて飲んだら美味しいんだって！」

と、穂乃果はビンを取り出した。

「へ〜…そんなの聞いたことない！」

私、入れてみる！」

と、ことりが言うのとみんなが続いてそれをコップに入れていった。

「ナオキくんは？」

「いや、おれは遠慮しとくよ」

「わかった…：…それじゃあ飲んでみよう！」

そして穂乃果が飲み始めるとみんながそれを飲んでいった。

「う〜ん、美味しいー！」

「そうですね！毎日飲みたいです！」

「ほんとうにおいしいねえ〜」

「すっごく美味しいにやー！」

「たしかに…いけるわね…」

「最高です！」

「なんだかスピリチュアルな味やね〜」

「そうね…どこに売ってるのかしら？」

「ナオキも飲めばいいのにい〜」

そう言つてみんなはまたそれを口に運んだ。

みんなうまそうにゴクゴクと飲んでいる……

「ははは…そんなにおいしいのか？」

ならおれも……」

そう言つておれもそれを入れて飲んだ。

「うん、うまい！なんだこれ!？」

まじでうめえーぞ!!

………ん………でもこの味………

まさか………

アルコール？

やばい気がする……………

おれはみんなの顔を確認していった……

「予想的中……………」

なんとみんなの顔が……ものすごく赤かった……

おれはアルコールに強い自信がある……

飲んだことは無かったが両親がアルコールに強いためそう思うだけだ……

これはやばいことになりそう……

「ナオキイ……」

すると絵里が急に腕に抱きついてきた。

「え……絵里!?! どうしたん?」

「ナオキは……私のこと……好き?」

「当たり前だろ? そんなこと……」

「ならキスしてよお〜」

「こ……こ……ここで!?!今!?!」

「…してくれないの?」

絵里は目をうるうるさせ、上目遣いでおれをみてきた……

「こんなんされたら……したくなる……」

「可愛すぎるぞ……絵里……」

「でも……みんながいるし……な?」

「してくれないんだ……ナオキは私のこと嫌いなんだ……」

「いや……そういうことじゃなくてだな……」

「ならキスしてよ……」

「だからそれは……」

「やっぱり……うえええええん!……」

「うおあ?!泣き出した……」

「なにこれ酔っ払ってんじゃん……はあ……」

「な……泣くな……絵里……」

「ぐすつ……じゃあキスしてよ……」

「……は……やるしかないか……」

ちよつと恥ずかしいが……………

「わかった……………／／／」

「やったー！んっ……」

絵里は目を瞑った……

そして唇をおれの方にむけた……

「よし……………」

おれは絵里の唇におれの唇を近づける……

そしてキヨリはどんどん縮まり……

「……………すまん……………チュツ……………」

おれは絵里の唇……………ではなく頬にキスをした。

「えく……………ほっぺたなの？」

「は…恥ずかしいんだよ……………みんなの前だから……………／／／」

「もう……………」

「絵里だけえく、ずるいですよおく」

ん？誰だ今言ったのは……………って……………

「海未……」

「頬にキスするなら私にもしてくださいよお」

そう言うのと海未はおれの腕に抱きついてきた。

「ちよつ……まつ……はあ!？」

「……ナオキく……ん……」

「ナオキ……」

「みんなもかよ……」

みんながおれに抱きついてきた……

正直……重い……

「みんなダメよお……ナオキは私のなんだからあ」

「……え……」

「いやいやいや、『え』じゃなくてだな……」

よし、みんな一旦離れよう!そうしよう!

「……え……」



「ですよねえ〜」

「ナオキは…私のもよね？」

「まあ…そうだな…」

「ナオキくんひどいじゃ〜」

「私とは遊びだったの〜？」

「なっ!?!花陽なに言ってるんだよ!!」

「なによ〜…絵里にはキスしたのに私にはダメだつていうのお〜？」

「にこさん…それは違うよ？」

「はい…」

「……つて真姫さん、諭吉さんそんなに渡されてもねえ!?!」

「ナオキくん…私のこと……嫌いなん？」

「希……いや……嫌いでは……ないよ？」

「それならいいじゃ〜ん！」

「いやあ〜ね、穂乃果さん、それは違うんでっせ？」

「なんですかあ〜〜!ナオキはあ〜〜、絵里だけひいきするんですかあ〜〜!?!」

「海未が1番酔いまわってるんじゃない?…?」

「ナオキくん……………」

「待て…ことり…………それは……………」

「おねがあい!!」

「ぐはっ?!…………くっ…………やるしかないのか……………」

「…………ナオキ…………(ナオキく…………)……………」

「どうする…………ナオキ……………」

「いや…………ほっぺたぐらいなら……………」

「いやいやいやいや!!」

「も…………う!!みんなダメ……………」

「ナオキはあ……………」

「私のなんだからあ……………」

「うおっ?!絵里……………」

「すると絵里はそう言っておれの唇にキスをしてきた……………」

「絵里なんかむっっちゃ舌入れてくるんですけど!!」

「ん…………んはっ…………え…………絵里……………／／／」

「んっ……これでナオキは私のものってわかったでしょ？」

「「「「「くっ……」」」」」」

みんな拳を握っている……

なんなの？これ……

「もう！なら私はほっぺたに！」

「私もおっ！」

「私もおっ！ナオキのほっぺたにチュチュっつてします！」

「凜も凜もおっ！」

「私もしますうっ！」

「ウチもおっ！」

「にこもにこもおっ！」

「それなら私はもう一度……」

「ちよつと待てお前らあああああああああ!!!」

なんなのこれまじで!?

聖夜の奇跡とは言えないぞ!!

いや……言えるのか……そうか……

じゃなくて!!!

なんかみんな目をキラキラさせておれを見てくるし……

う……………

う……………ん……………

「はあ……わかったよ……………それならほっぺただけな……………」  
と、言っても……………

あれ?みんななら

『やったー!』

とか言いそうなのに……………

「寝てるし……………」

みんなおれを抱いてスヤスヤ寝ちゃいました……………

ガラガラガラ……

「ナオキさん……」

「お、雪穂ちゃん……助けて……」

「あははは……みなさん寝ちやいましたか……」

「みてたなら助けてくれよおー……」

「すみません……入れそうになかったので……」

「てか、なにあの飲み物……アルコール入ってんじやん」

「え？なんですかそれ？」

「ほえ!？」

穂乃果が今日、おばさんが近所の人からもらったって……」

「え？お母さん……そんなのもらってたかな？」

「ん!？」

ほらそこのビン……」

「ビン？……これですか？」

お母さんに聞いてきますね。

お母さーん!」

雪穂ちゃんはおばさんにそのビンのことを聞きに行った……

「ナオキさん……そんなのもらってないって言っていましたよ?」

「そうなのか?」

「でも……」

「でも?」

「そのビン……朝起きたら机の上に『高坂穂乃果さんへ』って書かれた紙が貼ってあってお姉ちゃんに渡したって……」

「なに!?!」

シャンシャンシャンシャンシャン……

外から鈴みたいな音が聞こえる……

「まさか!?!」

サンタって……いたんだな……

これが本当の……

聖夜の奇跡ってやつかな……

「てか……みんないつ起きるんだよ……」

まだみんなはおれに抱きついたらそのまま寝ていた……

みんなの寝顔かわいい……とくに絵里……

「あははは……頑張ってください……」

ガラガラガラ……

「雪穂ちゃん!？」

うっ……見捨てられた……」

「ん……ナオキ……」

「はいはいここにいるよおー……」

絵里……寝言まで言つてやがる……

かわいい……ものすごくかわいい……

そして数時間たつてもみんな起きなかつたので穂乃果の家に泊まることにした……

でも、おれは寝れずにいた……

だつてさあー

みんな寝言言うし、いい匂いだし、

それにみんな抱きついてると来た！

最高なんだが……興奮して寝れないんだよ……



そして朝……

「んー！あれ？寝ちやつてた……」

「あ、絵里……起きたか……」

「ナオキ!?!どうしたの……つて……なんでみんなナオキに抱きついてるの?」

「覚えてないのか?」

「えつと……うん……飲み物を飲んだところまでなら覚えてるわ。」

「そこからは……覚えてないわね……」

「そうか……なら……みんなを離してくれるかな?」

「寝たい……」

「わかったわ……」

そして絵里はみんなの腕をおれから離してくれた。

「ありがとう絵里……おやすみなさい……」

そしておれは寝た……

あとから聞いたんだが、おれはこのあと絵里の胸にもたれて寝たみたいだ。

もちろん、みんなあの夜のことには覚えてなかった……  
そしておれはそのことを黙ることにした……  
うん、そうしよう………

## 第73話（南ことり編章末回）「ことり、これから進む道」

卒業式の日……

ナオキくんは執事の格好をさせたんだあ〜！

とつてもかつこよかつたなあ〜…

そして校舎をまわったときに衝撃の事実が……

なんと！

ナオキくんはアルパカさんとお話できたんです！

私はナオキくんに弟子入りすることにしたんだあ〜！

そして……

ナオキくんは絵里ちゃんにプロポーズしました………

そんなあ〜……

もう…チャンスはないのかな？

……でも……この気持ち……伝えたい……

でも怖い……

私<sup>が</sup>思いを伝えることによつて…

今の関係が壊れるんじゃないか<sup>つて</sup>思<sup>つち</sup>やう……

どうしよ……

「よーしよーし……」

「メエー（気持ちい〜）」

「そうかそうか……アルーさん、最近調子はどうか？」

「メエー……メエー……メエーメエー！」

「さ、ことり……アルーさんがなんて言ったかわかるか？」

「え〜つと……『調子はバッチグー！』……かなあ〜？」

「不正解」

「え〜！もうわからないよお〜」

「ははは……正解は『最近はお腹が重たいから辛いけど、パカさんとの子供だから大事にしなきゃって頑張ってる！』……だよ」

「そんなのわからないよお〜！」

「私たち2年生は3年生になつた……」

「私はナオキくんにもアルパカさんとお話できるように修行してもらってるんです！」

「でも難しいよお〜……」

「いいか？まずは気持ちからだ」

「気持ちから？」

「そう、アルパカと喋りたいって思うだけじゃない……」

「アルパカと喋れるって思うんだ」

「喋れる……って思う……」

「そう……」

「よし……（アルパカさんと喋れる……アルパカさんと喋れる……アルパカさんと喋れる……アルパカさんと喋れる……）

「元氣ですかあ〜？」

「メエー……メエメエー……メエー」

「あっ!？」

「わかったか？」

『『元氣だよ！それにしてもことりちゃんの声はとろけるような声だね』って……聞こえた……』

「正解だことり！やったな！」

「メエー！（おめでどう!）」

「うん！アルーさん、パカさんありがとう〜！

ナオキくんもありがとう〜！」

「いいってことよ……さ、昼休みも終わるし戻ろうか」

「うん！じゃあね、アルーさん、パカさん！またいっぱいお話ししようね！」

「メエー！（待ってるよ!）」

そして私とナオキくんは教室へと戻りました。

その途中……

「そういえばことり……」

「ん？」

「ことりつて卒業したらどうすんの？」

「え〜つとねえ〜…卒業したらアメリカの大学に行こうかなって…」

「あのときのところか？」

「うん…あそこは高校も大学もあるからお母さんの知り合いの人が卒業したら来ないかって…」

「そうか……ほんで、どんくらい行くんや？」

「2年だよ」

「2年かあ……長いようで短いのかもな…」

「そうだね…」

「迷ってるか？」

「ううん…全然……ただ…」

「ただ？」

「穂乃果ちゃんや海未ちゃんがこれを聞いてなんて言うか……気になって…」

「そうか……話してみたら？」

きつと応援してくれるよ」

「そう……だね！よし、教室に帰ったら話そう！」

「ああ！」

そう……私はアメリカで服飾の勉強をしようと思う……

そして日本に帰ってきてお店をだすんだあ〜！

でも私はアメリカに行く前にもう一つやりたいことがある……

それは………

この思いを伝えること………

でもやっぱり……今の関係が壊れるのが怖い……



「私……ナオキくんのが好きでした！」

次回、新章へ続く……

## 高坂穂乃果編

## 第74話「太陽に憧れて」

私、高坂穂乃果！音ノ木坂学院に通う高校2年！今日は3年生を見送る卒業式！……  
だったんだけど……

「おれと結婚してください!!」

け……結婚!?

それって……家族になるってこと!?

そんな……まだチャンスがあると思っただのに……

穂乃果とナオキくんの出会いはね、小学1年生のときなんだ！

「てやあああああああ!!」

「穂乃果ちゃん！」

「てやあああああああ!!」

私は神田公園で水たまりを飛び越えようとしていたんだ！

いけると思ったんだよ！でも……

ツルツ……

「わあ!!」

「穂乃果ちくくやん！」

滑ってコケちやつた……

あはははは………

「むうー……もう！なんでなんでなんでー！」

「もう無理だよ……帰ろう！」

「大丈夫！やれば出来る！」

行くよ………」

そして私はまた水たまりを飛び越えようとした……

そんなとき………

『ラランララン ラランララン

ラランラランララー

ラランラランラランララ

ララーラーラー

ラランララン ラランララン

ラランラランララー

ララーララーララー ラーラーラーララララ ラーラーラー

私は突然聞こえてきた歌声のリズムにのって走ったんだ！

このときの歌声に元気と力をもらって……

そして……

タタツ……

「す……す……いい！」

「やったー！できたよー！」

私は飛んで喜んだ！

そしてふと公園の出入口の方を見ると……

「ん？」

「どうしたの？穂乃果ちゃん……」

「ちよつと待ってて……」

私はそつちに走った。

「こんにちは！」

「わっ!!ば……バレてた？」

「うん！さつき見えたよ！」

さつきこつちを見てた1人の男の子……

「ねえねえ、一緒に遊びたいんでしよう？」

「…そんなことは……」

「だってずっと見てたもん！絶対遊びたいんだって！」

「で……でも……」

「さ、行こう！」

そう言つて私はその男の子の腕を引つ張つて走つた。

そしてことりちゃんが……

その男の子が同じクラスのナオキくんだつて言つて……もう穂乃果びつくりだよ！

それから海未ちゃんも加わつて4人で一緒に遊ぶようになったんだ！

それで……ナオキくんの笑顔つて……とっても輝いてて……まるで……太陽みたいなの……

そんな笑顔に私は憧れて……

笑顔の練習もして……

それでみんなから『穂乃果ちゃんつて太陽みたいだね』つて言われるようになった。

そんな憧れがやがて……  
恋に変わった……

そして小学3年生のとき……

ナオキくんが大阪に引越すことを話してくれた……

「ナオキくん……大阪に行っちゃうの？」

「うん……ごめんね……穂乃果ちゃん……」

「うっ……うう……嫌だ！ナオキくんとお別れなんてやだよー！」

「な……泣かないでよ……また会えるって！」

「ほんと!？」

「うん！絶対に……約束！」

「うん！約束だよ！」

そしてナオキくんは引越していった。

このときはまさかあんなカタチで再会できるなんて思いもしなかったよ！

次回へ続く……



## 第75話「大切なともだち」

そして私と海未ちゃんところりちゃんは音ノ木坂学院に入学したんだ！  
でも2年生のある日…

理事長から廃校というのが伝えられたんだ…

そして初めたスクールアイドル…『μ's』

まさかナオキくんが裏から支えてくれてたなんて…

そしてナオキくんが音ノ木坂学院に模擬男子生徒として転入してきたんだ！

急に私への呼び方を…『穂乃果ちゃん』じゃなくて『穂乃果』って…

いきなりだったからドキドキしたよ…：／／／

でも…すつごく嬉しかった！

ちゃんと約束…守ってくれたし！！

そして文化祭ライブのとき…

私は倒れちゃったんだ……

無理をしちゃったから……

そのとき、ナオキくんにおんぶされて保健室に運ばれた……

ナオキくんの背中は……安心できた……

それで音ノ木坂学院の廃校が見送られることになったんだ!!  
でも……ことりちゃんが留学するって……

だからけんかしちゃった……

それでみんながライブをしようって言ったけど……私は……

「スクールアイドル……辞めます……」

そう言っちゃった……………

そしたら海未ちゃんにビンタされて……………

私はその場から逃げ出した……………

そして、校門前……………

「穂乃果!!」

「ナオキくん……………」

ナオキくんは私を追いかけてきた。

「お前……………あれは本気なのか？ スクールアイドルやめるって……………」

「うん……………だって……………私のせいだもん……………私がいけなかったんだ……………」

「だからあれは全員の……………」

「そんな事言って……………ナオキくんも私のせいだと思ってるんでしよう!!!……………あ……………」

「……………穂乃……………果……………」

「ごめん……………もう……………」

私は走って帰った……………

ナオキくんに酷いこと言っちゃった……………

ナオキくんに嫌われちゃった……………

家に帰って…自分の部屋で泣いた……

私は落ち込んで、神田明神に行ったらにこちゃん和凜ちゃんと花陽ちゃんがいた……  
そして、絵里ちゃんが家に来て……  
それで私は押し入れから練習着を取り出して……着て……神田明神にむかった。

「ハアハアハアハア……」

私は男坂を走って登った。

「ふう……あれ？」

すると夜も遅いにお参りしている人が見えた。

そしてその人は振り向いて……

「穂乃果……」

「ナオキくん……」

その人はナオキくんだった……

私はなんて話したらいいか分からなかった……

あんな酷いこと言っちゃったから…

「穂乃果……」

「なに？」

「……練習……やってるじゃんか……」

「え……う……うん……」

「穂乃果ならそうすると思ってたよ……」

「え!？」

「穂乃果……スクールアイドル辞めるなんて……本気で思うはずないよな……」

「あれは……」

「お前がやりたいって思って始めたことなんだったら……辞めたいなんて思うはずない……」

「でも……私……」

穂乃果は辛くなってその場から逃げ出そうとした……

「穂乃果!!」

ガシッ!

「ナオキ……くん……」

ナオキくんは私の腕を掴んだ…

「穂乃果！待ってくれ！なんで逃げるんだ？」

「だって……私……ナオキくん……」

「穂乃果……」

「だから私は……」

「穂乃果……」

「ナ……ナオキくん!？」

ナオキくんは私を抱きしめてくれた。

「穂乃果……泣きたいんだろ？」

「そんなこと……」

「いいや……声が震えてたし……泣いてもいいんや……」

「うっ……うっ……」

もう……ナオキくん……ずるいよ……

「よしよし……」

ナオキくんは私の頭を撫でた。

「うっ……うっ……うええええええん……」

「辛かったよな……なにかほかに抱えてることがあるんじゃないか?」

ナオキくんはなんでもお見通しなのかな……

「わ……私……ナオキくんに酷いこと言っちゃった……『ナオキくんも私のせいだと思ってるんでしょ』って……だから……だから!!……うう……」

「おれが穂乃果を嫌うとでも?」

私は泣きながら頷いた。

「はあ……そんなわけないだろ?」

穂乃果は本心からそんなこと思ってないって信じてるし……そうだよな?

それにおれたち……”ともだち”……だろ?

おれにとつて穂乃果やみんなは……大切なともだちだ……

だから嫌ったりしない……」

「……あのときは……カツとなって……つい……だから……ごめんなさい……ナオキくん……ごめん……うっ……うう……うううう……」

「ああ……よく言ったな……穂乃果……おれこそ……辛い思いをさせてごめん……」  
「うええええええええええ……」

私はしばらくナオキくんを抱かれて泣いたんだ……

そのあいだ、ナオキくんはずっと私の頭を撫でてくれた。

「うつ……ぐすん……」

「もう大丈夫か？」

「うん……その……ありがとう……」

「ああ……」

そう言うとナオキくんは私を離れた……

「あつ……」

「ん？」

「な……なんでもない／＼／＼／」

「そうか……なにかあれば力になるで……悩み事があつたりしたらおれに言えばいい……全部受け止めてやる」

「うん……ありがとう……／＼／」

「じゃあ帰ろうか……家まで送るよ」

「うん！」

そして私はナオキくんに送ってもらったんだ！



そしてそのときのこと、背中を押されて、私は海未ちゃんにも謝ったし、ことりちゃんも止めることが出来たんだ！

そして講堂ライブのあと……

「ナオキくん！」

「穂乃果、お疲れ様！」

「うん！」

その……ありがとう！」

「ほえ？」

「あのときナオキくんが……励ましてくれたから今があるんだと思う……

だからありがとう！」

「お……おう……／＼／＼」

ナオキくんはほっぺたをかきながらそう言った。

照れてるナオキくんもかわいいんだ！

でもまさか…あんなことになるなんて…

次回へ続く…

## 第76話「リーダー」

あの日…ナオキくんは……

絵里ちゃんに告白して2人は付き合うことになったんだ……

でもでもでも！

まだ私にもチャンスがあるって思ってたんだ！

この想いを伝えればナオキくんは応えてくれるかもしれない……

そう思ってた……

もし、応えてくれたら……



私、高坂穂乃果はμ'sのリーダー……

だけど私はナオキくんの方がリーダーにむいてるって思ってた……

でもみんな私がリーダーだって……

私がリーダーにふさわしいって……

なんでなんだろう？

ナオキくんは生徒会長だし、なにかとみんなに頼られてるからリーダーにふさわしい

んだと思うんだよねえー

ということとでそのことをナオキくんに話したんだ！

ということとで生徒会室に行ってナオキくんに話したの！

なんで生徒会室かって？

そりゃあナオキくんは音ノ木坂学院の生徒会長なんだもん！

「で、穂乃果……相談ってなんだ？」

「えつとね！穂乃果、ナオキくんがμ sのリーダーがふさわしいっておもうんだよ！」  
「はあ!!何言ってるんだよ……リーダーは穂乃果がふさわしいと思うけどなあー」

「ええ!!」

「そんなに驚くか？」

「だって……ナオキくんは生徒会長だし……なにかとみんなに頼られてるし……私は……  
ナオキくんの方がリーダーにふさわしいと思ってたから……」

「はあ……なに言ってるんだよ……」

おれは穂乃果の方が絶対にリーダーにふさわしいって思う……

「でも……」

「穂乃果には……人をひきつけるなにかがある……」

おれたちみんな……穂乃果にひきつけられたんだ……」

「穂乃果……なに？」

「ああ……穂乃果はおれたちを引っ張ってくれて……誰よりも前に立ってな……」

「でもそれはナオキくんだって……」

「いいや違う……μ sを始めたのは……」

音ノ木坂学院を廃校から救うべく最初に立ち上がってみんなを引っ張って来たのは  
お前だろ？

それに…あのとき穂乃果、海未、ことり…お前たちのステージにおれは心うたれたんだ……

おれがここにいるのは他でもない…

穂乃果…お前がみんなを引っ張ったおかげだ……

それに…穂乃果が笑顔ならおれたちも笑顔になるし…／／／

「えっ…／／／」

「その…だから!!穂乃果がμ'sのリーダーにふさわしいんだ!わかったか!!／／／」

「……うん!!／／／」

「これでこの話は終わりだ…さ、部室に行くぞ!」

「うん!」

そして穂乃果とナオキくんは部室にむかったんだ!

そしてもうすぐラブライブ!の本戦!!

気合いが入る私たちだったけど……

まさかあんなことになるなんて……

「はあ…はあ…はあ…はあ……………」

ナオキくんが倒れちゃったの……

そしてナオキくんはICUに運ばれて…

みんなでナオキくんを囲んで祈ったんだ……

私は……………

「ナオキくん……………頑張って…穂乃果たちが付いてるから……………」

だから…戻ってきて……

そしてナオキくんの呼吸は落ち着いた…

でもまだ意識は戻ってなかった……

次回へ続く…



# 第77話（高坂穂乃果編章末回）「穂乃果、これから進む道」

そしてナオキくんが意識を取り戻したって連絡があつて、私は西木野病院にむかつたんだ！

ガラガラガラ…ドン！

「ナオキくん!!」

「わっ!? 穂乃果か…びっくりしたあー」

「ははは…ごめんなさい……」

「会いに来てくれたのか？」

「うん、だって……心配したんだよ？」

「すまん……心配かけて……ありがとう……」

そう言うとなオキくんは私の頭を撫でた。

「えへへへ……でも……本当によかった……無事で……」

「ああ……これも穂乃果たちがいてくれたからだ……」

「えっ!？」

「ちゃんと声は届いてたよ……穂乃果はたしか……『頑張つて……穂乃果たちが付いてるか  
ら……』だっけな？」

「う……うん……」

「ありがとうな……穂乃果……」

「うん!それじゃあ帰るね!」

「ああ……またな!」

「ナオキくん……ファイトだよ!」

そして私は帰った。

そして私たち<sup>μ</sup> sは念願のライブ!優勝を果たした。

あの時の決意……私たちの想いが……こんなにたくさんの人に届いたんだ……

そして卒業式の日……

ナオキくんは………

絵里ちゃんに………

プロポーズした………

結婚するってことは、もうチャンスがないってことなのかなあー？

でも……もうチャンスがないとしても……

この想いは……伝えたい……

そして私たち2年生は3年生になった…

「いやあー今日もパンがうまい！」

昼休み、私は海未ちゃんとことりちゃんとナオキさんと一緒に教室でお昼ご飯を食べていた。

「食べすぎですよ…」

「あはははは……」

「まあ……いいんじゃないか……いつも勉強頑張ってるし……珍しく」

「珍しくは余計だよ！」

「いつもこれぐらい勉強していれば……」

「ことりちゃん！ナオキさんと海未ちゃんがいじめてくるよー」

「えっ……え……」

「はあ……」

「穂乃果……店を継ぐために専門学校に行くんだろ？」

「そうですね！だから頑張りなさい！」

「む……どうせAOなんだから勉強しなくてもいいじゃん！」

「だーかーら！成績良くなかったらやる気があっても合格しない場合もあるんだって  
！」

「む〜……」

そう、穂乃果は穂むらを継ぐんだけど、そのためにお母さんとお父さん…高坂秋穂（こうさかあきほ）と高坂勇次郎（こうさかゆうじろう）から出された条件が専門学校で学ぶこと。

経営のためには色々身につけなきゃいけないんだってさ……

「勉強勉強ってナオキくん言うけどナオキくんだって数学とかダメじゃん！」

「うっ……」

「ナオキも穂乃果同様、頑張ってください！」

「はい……」

「そうだよ！ナオキくんも頑張ろうね！ファイトだよ！」

「穂乃果もな！」

「「あはははははは……」」

やっぱりみんなしていると楽しいなあ……

実を言うとう、まだナオキくんに想いは伝えれてない……

はやく伝えなきゃ……

そんな気持ちをずっと胸に抱えながら最後の1年を過ごしている穂乃果でした……  
いつか……ううん……この1年以内に伝えなきや……

「私……ナオキくんのが好き！」

次回、新章へ続く……

Another way (大晦日)「もう1つの大晦日」

今日は今年の最後の日、12月31日…そう！大晦日である！

まさか1年をまた東京で過ごすことになるなんて……

それに……今年は……

ピンポーン……

「はい」

ガチャ……

「あ、ナオキ！来たわね！さ、あがつて」

「おじやましませす」

なんたつて今年は……

「あ、ナオキさん！」

「やあ、亜里沙ちゃん」

「早くしないと始まるよ！」

「はいはい……」

「もう……亜里沙……ごめんね？」

「全然構わないよ……それに今年の大晦日は絵里と過ごせるんだ……最高だ」

「も……もう……／＼／＼」

そう！今年の大晦日は絵里と過ごせるんだ！！

もちろん、亜里沙ちゃんもいるけどな。

あのととき希から神田明神の手伝いをしてくれって言われたけど、あとから……

『あ、でもえりちはナオキくんと一緒にゆっくり過ごしたいと思うからやっぱりええわー』



って追記が来て、今に至る……

「ナオキさん！早くしないとガ○使始まりますよー！」

「はいよー」

「ふふっ……さ、玄関は冷えるしはやくしましょう…」

「ああ…」

そしておれと絵里はリビングにむかった。

デブー

『全員OUT』

「ははははは…そりやあ笑うわ」

「ほんですよ…ははははははは…」

「お…お腹が痛いわ……」

おれたち3人は○キ使をみてむっちや笑ってた。

おれたちが出たら完全に笑いの嵐になるだろう……

多分おれが1番ケツ叩かれる自信がある！

「それじゃあ…そろそろ年越しそば作りましょうか…」

「あ、おれ手伝うよ」

「ありがとう……」

おれは絵里と一緒に年越しそばを作ることにした。

え？「料理できないんじゃないやなかつたつけ？」…だつて？

ふん、よくわかつたな！

そうだ！できない！

だからちよつとしたお手伝いをするんだよ！

「ナオキ…お皿用意して…」

「了解！」

「ナオキ…ちよつと麵を見てて…」

「了解！」

「ナオキ…お箸だして…」

「了解！」

「ナオキ…これ持って行って…」

「了解！」

これぐらいなら手伝えるしな！（ドヤア）

「「いただきまーす！」」

ズル…ズル…ズルズルズル…

「うめえ〜」

「ハラシヨ〜！美味しいよ、お姉ちゃん！」

「ありがとう…」

「もうすぐ今年も終わりかあー…」

「なによ急に…」

「いや…今年はいろんなことがあったなーって思ってたさ……」

「ふふっ……そうね……つい最近ナオキがこっちに来たのに……もう1年が終わりだなんて……」

「そうだなあー……第1回ラブライブ！は辞退したけど、第2回ラブライブ！は地区予選決勝も突破……次はいよいよ本戦だ……」

「そうね……勝てるかしら？ 私たち……」

「勝てるよ！ 私の大好きなμ'sなら……絶対勝てるよ！」

「そうだ……勝てるさ……おれたちなら……」

「そうね……よし！ 絶対ラブライブ！で優勝するわよ！」

「ああ！」

「応援してます！」

「スー……スー……」

「亜里沙ちゃん……寝ちゃったな……」

「そうね……ふふっ……かわいい寝顔……」

「そうだな……」

おれは亜里沙ちゃんに毛布をかけるとまた絵里の隣に座った。

「亜里沙ね、『今年は絶対に起きて年を越すんだ』って張り切ってたのに……」

「そうなのか!？」

「ええ……」

「ふーん……でもなんかさあー」

「ん？」

「こうしてると……亜里沙ちゃんがおれたちの子供みたいだな……ははは……」

「こ……子供つて!?!……も……もう……まだ早いつてば……／／／／／」

「え?……あ……ああああ……す……すまん……／／／／」

「ぜ……全然いいのよ……／／／」

なんでおれこんなこと言っただ……

くそ恥ずかしい……／／／／／

「ナオキ……」

絵里な急に腕に抱きついた。

「つ……なんだよ……急に……」

「だつて……甘えたいんだもん」

「……酔つてるのか?」

「酔ってないわよ、ほら……息嗅いでみてよ……ハア……」

絵里は顔を近づけて息を吐いた。

「……うん……アルコールの匂いはしないな……」

「でしよう？」

「なら……普通に甘えたいんか？」

「うん……ダメ？」

「いいに決まってるよ……」

「やったー！ならいっぱい甘えさせてね♡」

「ああ……」

すると絵里はむっちや笑顔で言ってきた。

やばいんですけど……

「甘えるって言っても……なにしたい？」

「えーつと……じゃあ……あーんして」

「はいよ……あーん……」

そしておれはチョコレートを絵里の口の方へ運んだ。

「あーん……ん～おいしい……」

「かわいいなあ～……絵里は……」

「も……もう……／＼／＼／」

「さ……ちよつと……トイレに行かせてくれ……」

「……」

「……」

離してくれない……

「あの……絵里？」

「私も行く……」

「はい？」

ちよいまて……なんて？

私も行く………はい!?

「ちよ……それは流石にだな……」

「ダメ……なの？」

「うっ……」

絵里の上目遣いはまじでやばい……

いや……でも流石にこれは……

「じゃあ……ドアまでな……」

「……うん……」

「なんだよ…今おれとは離れないか？」

「…うん……」

「なんだそんなことか……でもトイレは別だ…ドアのところで待っててくれよ？」  
「わかつてるわよ……」

それでおれは絵里をしぶしぶ離させてドアの前で待機させ、尿をたした。

トントン…

「ん？どうした絵里？」

「その………したいんだけど……」

「まじか!? わかった…すぐかわるから！」

そしておれはすぐに流してドアを開けて絵里とかわろうとした。

だが……

キュツ……

「うお!？」

絵里はおれの服の袖を掴んできた。

「離れちゃイヤ……」

「え…でもそれは流石にだな……／／／」

「だつてえく……」



おいおいおい絵里モジモジしてんじゃん！

これ……早くしないと……

洪水になっちゃうかも……

「わかったよ……／＼／＼」

おれは絵里とトイレに入ることになった。

で、おれは絵里の方とは逆を向いてるんだが、絵里のズボンをおろす音、ぱ…パンツをおろす音、そして……その……尿をたしている音が聞こえていた。

なにこれ……／＼／＼／

そしてしばらくして尿の音も聞こえなくなつて、パンツとズボンを履く音が聞こえた。

ということは終わったな……

そして水の音……

「よし、終わったな……」

そしておれはドアを開けて、外へ出た。

だが絵里は動こうとしない……

「……………」

「ん？どうしたんだ？絵里……」

「その……付いてきて……」

「おっと……ちよつ……」

すると絵里はおれの手を引っ張ってリビングとは違うドアに向かった。

「絵里の部屋？」

ガチャ……

「ベッドに座って……」

「お……おう……」

おれは絵里に促されるまま、ベッドに座った。

そして絵里はおれの横に座って腕に抱きついてきた。

「なんでまた絵里の部屋で……」

「だって……亜里沙が起きたら甘えられないじゃないの……」

「そうか？別に大歓迎やけど……」

「でも……流石に……妹の前だと……ちよつと……甘えづらいというか……」

「そうか……」

「ねえ……」

「ん？」

「キスして……」

「さーて……どうしよかな〜？」

「え〜……も〜う！してよ〜〜！」

絵里は頬を膨らませた。

かわいい……

「して欲しい？」

「……うん……／＼／＼」

そしておれはその返事のあと、そっこうで……

「チュツ……」

「んっ……」

絵里の唇にキスをした。

おれはそのまま絵里の肩を持ち、舌を入れた。

絵里は最初は戸惑っていたもの、しばらくして舌を絡めてきた。

絵里は徐々におれの首の後ろに腕をまわしていった。

途中で唇を離すが、息を吸ってはまた唇にキスをして、舌を絡め合い……そして離し……

息を吸って……またキスをして……その連続だった……

「はあ……はあ……そろそろ戻らないと……」

「はあ……はあ……イヤ……もつとしたい……」

おれはそういう絵里に反論は出来なかった……

だって絵里にいっぱい甘えてもいって言ったんだし……

「じゃあ……まだキスするか？」

「……だけ？」

「だ……だけって……どういう……」

「だから……甘えさせてよ……」

絵里はそう言うとおれをベッドに押し倒した。

「なっ……絵里……／＼／＼」

「ん……」

すると絵里はおれの胸に顔を沈めた。

「絵里……？」

「……ナオキ……ギュ……」

そして絵里はおれに抱きついてきた。

「絵里……」

おれは絵里を抱きしめた。

「うん……」

「……ここまで甘えられちゃ……な……」

「ナオキ……ドキドキしてる……」

「当たり前だろ……こんなけ甘えられたら……」

「まだ甘えたりないわ……」

「いくらでも甘えてええで……」

「ほんと!?!」

「ああ……絵里だからな……」

「ありがとう……好きよ……チュツ……」

絵里はおれの唇にキスをした。

「んっ……おれもだ……チュツ……」

おれも絵里の唇にキスをした。

「ナオキ……私からしてもいい?」

「いいよ……今日はいっぱい甘えてもいいって言ったしな……」

「うん……」

ガチャ……

「お姉ちゃん？……あ……」

「あ……」

「と……年が明けたらちゃんと来てくださいね……」

ガチャ……

「……見られたな……」

「そうね……」

「……」

「やめるか？」

「イヤ……」

「絵里ならそう言うと思ったよ……」

「そう？」

「まだ甘えたりないだろ？」

「……まあ……少し……」

「なら……いいぞ……」

「……」

「なんだ？こないのか？」

「その……今度は……ナオキから……」

「……………」

「ダメ？」

「いいに決まってるだろ……………」

そしておれはぎやくに絵里を押し倒した……

「あつ…………ナオキ…………そこはつ…………もうつ…………あつ…………んつ…………はあ……………」

「さて…………甘えなくていいのかな？」

「…………もう…………ナオキのいじわる…………わかってるくせに……………」

「でも絵里から言つて欲しいな……………」

「もう…………もつと…………して……………」

「ああ…………もつと甘えてもいいんだぞ……………」

「んつ……………」

そしていろいろやってももうすぐ年が明けようとしていた……

「絵里……」

「なに？」

「……今年もありがとうな……」

絵里と付き合えて……本当によかったよ……来年もよろしくな……」

「……私こそ……今年もありがとう……」

ナオキと付き合えて……本当に幸せだったわ……来年もよろしくね……」

「ああ……」

「ナオキ……」

「絵里……」

おれたちは互いに名前を呼び合い、見つめ合い……そして……

互いの唇に優しいキスをした……



ゴーン……ゴーン……

除夜の鐘の音が聞こえる……

年が……明けたんだな……

でもおれたちの夜はまだ長かった……

~~~~~

「どうも！香川ナオキです！」

本日はお忙しい中、『ラブライブ！〜1人の男の歩む道〜』のAnother way
『もう1つの大晦日』を読んでいただきありがとうございます！

今年の8月からスタートした、私が主役の物語ですけれども……たくさんの出来事がありました……

ま、その詳しいことはまた後ほど話すことになるでしょう。

それより遡って読んでいただいた方がいいかも知れませんね。

それではみなさん！

良いお年をーーー!!!

来年もよろしくお願ひします!!」

Another way (お正月)「新春スペシャル!μ'sic START!」
2016

「本番5秒前!

5.....4.....3.....」

ナ「新春スペシャル!」

穂「μ'sic START!」

全「「「「「「2016!!!」」」」」」」

パチパチパチパチパチ.....」

ナ「さて、始めました!『新春スペシャル!μ'sic START!』2016
〜:〜:〜:〜:〜:みなさん、新年明けましておめでと〜:〜:ぎいませす」

穂・海・こ・凜・真・花・に・希・絵「「「「「「おめでと〜:〜:ぎいませす」」」」」」」

真「なにこれ:イミワカンナイ:」

花「ま…真姫ちゃん……」

真「だつてほんとのことでしょう？」

穂「ふふふふ…なら真姫ちゃんの疑問に穂乃果が答えてあげよう！」

この番組は…「この番組は、にこにこの可愛さをラジオの前のみんなに広めるための…」つてにこちゃん穂乃果のセリフ取らないでよ！しかも間違つてるし！」

に「え、穂乃果ちゃんのい・け・ずうく♡」

ガタツ！

こ「穂乃果ちゃん！ダメエエエエ!!」

穂「離してよことりちゃん！穂乃果はにこちゃんを倒さないといけないんだよ！」

に「わ…悪かったわよ！悪かったから…その金属バットを下ろしてええええ!!」

海「てやあつ!!」

穂「ぐふっ…」

ドタツ……

こ「穂乃果ちゃん!?!」

海「もう…ラジオでしかも生で流すのですからちゃんとしなさい！」

凜「ラジオでしかも生で流すのに穂乃果ちゃんを仕留めるのはどうかと思うにや

……」

海「し…仕方ないのです!」

ナ「さて、続けようか…えーつとこの番組は…」

希「続けるんかい!」

絵「この番組は2016年になったことを記念して、私たち音ノ木坂学院スクールアイドル『μ's』の10人が雑談などをするラジオ番組です!」

ナ「ありがとう…絵里。」

というこ…なにか話そうか?」

花「ふええええ!?決めてないのお!」

ナ「ははは…冗談だつて…」

まずはこの話題から…」

ドゥルルルルル…ジャン!

ナ「ふあ!」

海「ん?どうしたのですか?」

ナ「え…えーつと…これ…おれが言うの?／／／／」

希「もーう…早くしないと時間無くなるやーん!」

ナ「ちよつ…希!!」

希「えーつとなになに…つて…これ!／／／／」

凜「なんで希ちゃんは顔を赤くしてるにや？」

希「そ…それは…これは…ナオキくんが読むべき…でしょうか？／／／／」

ナ「はあ!？」

希「よ…読まないとワシワシするよ!／／／／」

ナ「お…覚えてろよ…／／／／」

コホン…では改めて…／／／／

『μ s 9人に聞く、ナオキくんの好きなどころ』／／／／』

穂・海・こ・凜・真・花・に・絵

「「「「「えー！ー！ー！」」」」」

ナ「てか穂乃果!?!復活したのかよ!?!」

穂「ふふーん…穂乃果は本番前に糖分を沢山とつたからだよ!

糖分さえあればなんでもできるんだよ!」

ナ「糖分ばねえー…で、みなさん…どうぞ!」

穂・海・こ・凜・真・花・に・希・絵「「「「「いやいやいや」」」」」

ナ「ならこうしよう!おれの…その…好きなどころを言ってくれたら…おれがみんなの好きなどころを言つてやる!!／／／／」

穂・海・こ・凜・真・花・に・希・絵「「「「「おー」」」」」

ナ「てことで順番はくじ引きで決めまーす!さーて…誰が出るかなあー?」
ドキドキドキドキ……

ナ「これだ!……まずは海未から!」

海「わ…私ですか!?!?!」

えつと……ナオキの好きなどころ……ナオキの好きなどころは……

どんな悩み事などに相談にのってくれるところ……です!?!

ナ「お…おう……」

なら次はおれだな……えつと…海未の好きなどころは……

友達思いなどころ…だな…」

海「友達思い……ですか?」

ナ「ああ…海未はいつつも穂乃果を叱ってるけど、それは穂乃果のことが好きだから
だろ?」

てか海未なら結婚して子供が出来ても子供のために叱ってそうだな」

海「け…結婚……したら……!?!」

(海未の妄想)

『もう！ダメでしょう！もうあの子は……』

『海未はやっぱり人思いだな……』

『そ……そうですか？』

『ああ……そこが海未の好きなのところだ……』

『ちよつとナオキ……』

子供が見てるのに……抱きしめないでください……

『そうか……なら今夜……布団の中でな……チュツ……』

『ちよつと……』

わかりました……では今夜……』

(海未の妄想終わり)

海「……………」

バタツ……

ナ「う……海未!？」

希「こ…これが私たちにも……／／／」

花「うう……」

絵「ハラショー……」

ナ「しゃーね、次行くか……次は……

おつ、凜!!」

凜「えー!?凜!」

穂「凜ちゃん…フアイトだよ!」

凜「『フアイトだよ!』じゃないにや〜……

えつと……ナオキくんの好きなのところは……

お兄ちゃんみたいなのところ…かにや……／／／／／

ナ「なるほど……」

おれが凜の好きなのところは……

女の子らしい格好が似合うところだな」

凜「そ…そうかにや?／／／

つて…そこはみんな頷くのかにや!」

ナ「ま、これはみんな思ってるどころだな…

おれはこんなに女の子らしい格好が似合う可愛い友達がいて幸せだよ」

凜「そ…そうかにや…／＼／＼」

(凜の妄想)

『どう？似合ってるかにや？』

『ああ…すごく似合ってるよ…』

『えへへへ…ありがとう…』

『でも…こんなに可愛い凜…誰にも渡したくない…』

『ちよつと…ナオキくん!』

キヤツ…つて…なんでカーテン閉めるの!』

『大丈夫…だれも見えてないよ…』

『ナオキくん…こんなところで…あつ…／＼／＼』

(凜の妄想終わり)

凜「……………／／／／」

バタツ……………

ナ「凜まで!?

よし、こうなったらどんどん行くぞ!!」

ゴクリ……………

ナ「次は……………ふっ……………希だ……………」

希「なにか嫌な予感が……………」

えっと……………ナオキくんの好きなどころは……………

太陽みたいな眩しい笑顔……………かな／／／／」

ナ「オーケーオーケー……………」

おれが希の好きなどころは……………」

ガタツ……………

クイツ……………

希「ナ……………ナオキくん!?!／／／／／(顎クイ!?!／／／／ていうか顔が近い……………／／／／)」

ナ「希の好きなどころは……………」

なんでも見通すような……………瞳だな……………」

希「……………／／／／」

(希の妄想)

クイツ……

『希……』

『ナ……ナオキくん……』

『希の瞳って……なんでも見通すような……そんな瞳だな……とても綺麗だ……』

『か……顔……近いよ……』

(こ……このままだと……キス……しちゃう……)

『希……』

『ナオキくん……』

(希の妄想終わり)

希「……」

バタツ……

ナ「ふう……さてと……次は誰かなー？」

に「り……lily white全滅……」

花「うう…タゞレゞカゞタゞスゞケゞテゞエゞ!!」

ナ「あ、花陽だ」

花「ふええええ!?

え…えつと…ナオキくんの好きなどころは…

やさしい…ところですよ…／／／／

ナ「そっか…」

おれが花陽の好きなどころは…

白米を美味しく食べてる笑顔だな」

花「そ…そうですか…／／／」

ナ「ああ…そんなときの花陽はとっても笑顔で…可愛いよ」

花「か…可愛い／／／」

(花陽の妄想)

『モグモグ…やっぱり白米は最高です!』

『ああ…そうだな…花陽の白米を食べてる時の笑顔…可愛くて…おれは好きだよ』

『そ…そんな…可愛いだなんて…／／／』

『ほんとうのことだ…ほら、もっと見せてくれ…』

『ちよつと…ナオキくん…顔が近いよお……／／／』

(花陽の妄想終わり)

花「……／／／」

バタツ…

ナ「よっしや！次だ!!次は……」

穂乃果！」

穂「ふふふふ…ナオキくん…みんなのようにはいかないよ……」

私のナオキくんの好きなところは…

守つてくれるところだよ！」

ナ「そうきたか…」

そうだな…おれが穂乃果の好きなところは…みんなを巻き込むような…みんなを
引き寄せる…そんな性格だな…」

穂「そ…そう？」

ナ「ああ…おれもそれで穂乃果に引き寄せられたんだからな…」

穂「えっ!?惹き寄せられた…／／／」

(穂乃果の妄想)

『穂乃果…おれを惹き付けたんだから…責任取れよ……』

『ナオキくん…そんな…ダイタン……あつ…／／／』

(穂乃果の妄想終わり)

穂「……………／／／／」

バタツ…

ナ「次だ次ー!!」

えーつと……次は……ことり!」

こ「えー……ことり!?!」

えーつと……ことりがナオキくんの好きなどころは……

撫でてくれるところかなあ

とつても気持ちいいし」

ナ「そうか…」

おれがことりの好きなどころは声だな…」

こ「声？」

ナ「ああ……聞いてたら癒されるような……そんな声……おれは好きだよ……」

こ「そ……そうかなあ〜／＼／＼」

(ことりの妄想)

『ことり……お前のその声……おれだけに聞かせてくれ……』

『それってどういう……キャツ……ナ……ナオキくん……』

『ことり……』

『あっ……／＼／＼／』

(ことりの妄想終わり)

こ「……／＼／＼」

ドタッ……

に「Printempsまで……」

真「もう！なにこれー!？」

絵「はははは……」

ナ「次は……にこだ!」

に「ふふふ……ついににこの番ね…」

えつとく……にこがく……ナオキくんの好きなどころはく……いつも私たちの力になってくれると・こ・ろ♡」

ナ「そつか……」

おれがにこの好きなどころは……

みんなを虜にする笑顔だな」

に「みんなを……虜に……」

ナ「ああ……おれも……にこの笑顔に虜にされたよ……」

に「そ……そう……//」

(にこの妄想)

『もつと笑ってくれ……にこ……』

『にっこにっこにー♪』

『ふふふふ……どうっ?』

『ああ……可愛いな……虜になっちゃうよ……』

『そ……そう……//』

『その笑顔…おれだけのものにしたいな……』

『え…それってどういう…キヤツ…ちよっ…ナオキ／／』

『にこ……』

『あつ……もう……やさしくしてよ……／／』

(にこの妄想終わり)

に「……………／／／／」

ドタツ……

真「にこちゃーん！」

ナ「あ、次…真姫だ」

真「ヴええ!？」

え…えーつと…ナオキの好きなところは……

う…歌声よ!ナオキの歌声が大好き!／／／／／

ナ「そうか…」

おれが真姫の好きなところは…

真姫がピアノを弾いているときだな…」

真「そ…そう…：／／／／／」

ナ「ピアノ弾いてる真姫は…とても魅力的だよ…」

真「ヴええ!?!」

(真姫の妄想)

『ふう……』

『すごいな、やつぱり上手いよ!』

『当たり前前よ…もう1曲弾いてあげるわ……』

『……真姫……』

『ヴええ!?!ちよ…ちよつと!／／／／／』

いきなり後ろから抱きつかないでよ／／／／／』

『だって魅力的だったからさ……つい……』

『ついて……もう……：／／／／／』

『真姫……いいか?』

『もう…仕方ないわね……やさしくしなさいよね……：／／／／／』

バシャ〜ン……サ〜……

ナ「はい、ということでもそろそろお別れの時間となりましたが…みなさんどうでしたか？」

穂・海・こ・凜・真・花・に・希「……………／／／／／」

ナ「…はい、楽しすぎて言葉にならないと…絵里はどうだった？」

絵「そうね…いつも通りだったわね…」

ナ「ま、そうだな……」

それでは最後に1人ずつ新年のあいさつといきましょう!

穂乃果から順番に…どうぞ!

穂「みなさん、新年明けましておめでとございます!

2016年もこの小説で活躍する穂乃果を見てくださいね!

今年も1年……ファイトだよ!

海「皆様、新年明けましておめでとございます。

2016年も精一杯頑張りたいとおもいますので、応援してくださいね。みなさんの応援が私の力となります。

今年も1年、健康で元気に過ごしてくださいね！

こ「みなさ〜ん、新年明けましておめでどうございま〜す！

2016年も、ことりのことみてくれますよね〜？

みてくれないと〜、ことりの〜〜：おやつにしちやうぞ〜！

では、今年も1年：がんばりましょ〜う！」

凜「みんなー！新年明けましておめでどうございますにやーー！！

2016年も凜の活躍：みててほしいにやーー！！

みんなの応援、待ってるにや！

じゃあ今年も1年頑張ろうにやーー！」

真「はあ：新年明けましておめでどうございます……

2016年も：その……私のこと……みて……くれても別に嬉しくないんだからね！

／／／／

お……応援なんて……気が向いたらしなさいよね……／／／／

今年も：怪我のないようにしないよ！うちの病院に来ることにならないように！」

花「新年明けましておめでどうございます！

2016年も私のこと…応援してください!お…お願いします!

みなさんお餅は食べましたか?

ふええええ!?!まだ食べてない!?

それはダメです!すぐに食べてください!!

あ!でもでも…あまり急いで食べて喉に詰まらせないようにしてくださいね!

今年も1年、がんばりましょう!」

に「にっこにっこにー♪

みんな…新年明けましておめでとうございませう!

2016年もにこのこと…もちろんみてくれるわよねえ〜!

みんなの声…ちゃんと届けてねえ〜!

今年も1年、にこと一緒に頑張ろう♡」

希「みんな、新年明けましておめでとうございませう!

2016年もウチは大活躍するって…カードがそう告げてるんや!

もちろんみんなウチのこと応援してくれるでなえ〜!

今年も1年頑張れるように…ウチのスピリチュアルパワーをあなたに注入…はい

ぶしゅ!」

絵「みなさん新年明けましておめでとうございませう!

2016年も応援してくださいね！

みんなの声はちゃんと届いてるわ！

今年も1年頑張りましょう！」

ナ「みなさん、新年明けましておめでとうございます！」

2016年も私が主役のこの小説をよろしくお願いします！

みなさんの声は私たちの力になります！

それでは今年も1年、頑張りましょう！

ということとで長々と付き合っていたいただいてありがとうございます！

それではみなさんこれからもこの小説で活躍する私たちを……」

全「……………」よろしくお願いします！！

バイバーーイ！！……………」

「はい、お疲れ様でしたー」

「……………」お疲れ様でしたー……………」

「なあ……絵里……家に帰ったら……しようか？」

「ええ……やさしくしてよ……」

「わかってるよ……」

矢澤にこ編

第78話 「笑顔の魔法使い」

にっこにっこにー♪

私、矢澤にこ。音ノ木坂学院に通う高校3年生！と言っても今日が卒業式だったんだ
けどね…

でも…その後……………

「おれと結婚してください!!」

結婚……………か……………

これで私にはチャンスはなくなつたわね……………

悔しい……………

私は小さい頃からアイドルに憧れていた。

『将来はなにになりたいの?』と聞かれたらいつも『アイドル』と答えていた。

だから私は公園で棒をマイクに見立ててミニライブをしたの。

でも、その公園であまり子供たちは遊ばない。

だってそこには遊具なんてないし、あるのは小さな土地に広がる地面やそこに植えられている桜の木数本だけ。

シーズンになると近くの人たちはこぞってここに花見にくる。

あとはお祭りの時にここに屋台が並ぶぐらいかな?

でもそれ以外はほとんど誰も来ない。

そして小4のある日、いつものように一人でミニライブをしていた時…
どこからか聞こえてくるメロディー……

そして歌声……

私はそのメロディーにのって、踊って、歌った……

「ララランラーン　ララランラーン

ララララララララー

ラララ　ラララ　ラララララララ　ララーラーラーラー

ララランラーン　ララランラーン

ララララララララー

ララーラーラー　ララーラーラーラーラーラーラーラー

楽しかった……

そのとき……

パチパチパチパチパチ……

突然聞こえてきた手を叩く音……

「誰？」

「すごい！すごいよ！ハラシヨー！」

ハラシヨー！つて……なにそれ…

でも…家族以外の人に初めてみられた…

「え…えーつと……」

「すごいよ！ほんとに！アイドルみたい！」

すごく嬉しかった……

「ここにっここにー♪」

アイドルみたいじゃなくて、アイドルなのよ！

「おー！すげえー！！」

ところで『ここにっここにー♪』つてなに？

「これはね、笑顔の魔法の呪文だよ！」

「笑顔の魔法の呪文……」

「うん！」

「僕、”ここにーちゃん”のファンになるよ！」

「ここにーって…それ、私？」

「うん！につこにつこにー♪のここにーちゃん！」

笑顔の魔法使いのここにーちゃんだー！！」

”ここにー”…うん、ここにー！

につこにつこにー♪」

「わー！かわいいー！」

「あなたはここにーのファン1号だよ！」

「そうなの!? やったー！僕にここにーちゃんのファン1号だー！！」

その男の子はとんで喜んだ。

その子の笑顔はすごく輝いていた。

その後も何回も来てくれたんだけど、

ある日……

また来た男の子はどこか落ち込んでいた。

そしてその男の子は帰っていった。

「名前……聞いてない……」

私はそうつぶやいた。

そして家に帰って……

静かに泣いた……

「また……会えるかな？」

私はそんなことを思い続けていた……

大きくなってわかってきた……

これは……

恋なんだと……………

次回へ続く……………

第79話 「偶然の出会い」

私は何回も言うけどアイドルになりたかった。

そう思ってたとき、『スクールアイドル』を知った……

私は決めたの……高校生になったらスクールアイドルになるって！

そして……てっぺんを取ってやるって！

だからUTXに行きたいなあーって思ってたわけ、でもそれは諦めるしかなかった

……

入学費とかが高いわけ!!

そんな金額……矢澤家は払えない……

ママ……矢澤景子（けいこ）はOL、パパ……矢澤浩二（やざわこうじ）は……中学3年生のときに交通事故でいなくなった。

当時生まれたばかりの虎太郎、当時小学3年生だったところ、当時小学2年生だった

ここあ、5人で暮らすためにお母さんはいっぱい働いた。

だから私は家のお手伝いをたくさんした。

だから料理とかも上手いのよ！

ま、そういうことで私は音ノ木坂学院に入学した……

そこで知り合った子たちと設立した……

『アイドル研究部』

私はこの部活を通して、スクールアイドルになったの！

でも……あの日……

みんな私にはついていけないって……

ただアイドルのことについて語りたかっただけなのに……

こんなに真面目で……きついアイドル活動をする気なんてないって……

そして私は1人になった……

だけど3年生になって……

μ, sに出会った……

あなたのハートにっここにっここにー♪
笑顔届ける矢澤にっここー♪
にっここにーっ覚えてラブにっここ！」

「……………ん？」

あれ？

なに……………私こと忘れたの!?

私が期待してたのは……………

『にっここにーっ……………にっここにーちゃん!?!』

『そうよ！ナオキっ言うのねあんた……………久しぶりね』

『うん！久しぶり!』

っっていうのを期待してたんだけど……………

この様じゃ……………忘れてるみたいね……………

ある日部室に行くとき……

「ナオキ……はやいじゃない……」

そうだが……まだ日にちも浅いからきつと

『矢澤先輩』とか『にこ先輩』とか『にこさん』とか言いそう……

「ああ……にこか……おはよう」

「ぬあんですよ!」

「ど……どうした?」

「なんでにこはすぐに呼び捨てにできるわけ!」

「いやあく、なんかいいけた……」

「なんかいいけたじゃないわよ」

「それか呼び捨ては嫌か?」

「そ……そんなことないわよ!」

「了解……」

ということになったの……

なによ……いつ……

そしてナオキと絵里は付き合った。

そして…あの日、みんなが家に来た……

やばい……

みんながいるときには、*μ* *s*をバックダンサーに、ナオキを召使いにしてる理由は詳しくはなさなかった……

そしてみんなは帰った……はず……なんだけど……

「みんな帰ったぞ、にこ」

「なんであんたは帰らないのよ……」

ナオキは帰らずに私の顔は過去になにかあったやつ顔だとかなんだと言った。

そして私は話した……アイドル研究部のこと……

ナオキはものわかりがいいわね……

私は一人になったって言えばだから家の中ではスーパーアイドルってことを理解した。

そしてナオキは帰っていった。

そして私の単独ライブの開催に動いてくれた。

そして私の単独ライブの後……

「ナオキ……」

「にこか……可愛かったぞ」

「なによそれ……口説いてるの?」

「そ……そんなんじゃないよ! おれには絵里がいるんだし! / / /」

そう……

「ふふっ……冗談よ……」

ありがとうね……ナオキがいっぱい動いてくれたんでしよう？」

「ま……まあ……おれはちよつとだけ……」

「だからありがとう……」

「おう！」

やっぱりまだ諦めないから！

まだチャンスはある！！

このときは……そう思っていた……

次回へ続く……

第80話 「喜びから」

ついに私たちは念願のラブライブ！本戦に出場できた！

まさかあのA-RISEに勝てたなんて…

夢みたい…いや…夢じゃない…

でも…そんな喜びも消し飛ばされる出来事が起きた…

それは…

「はあ…はあ…はあ……………」

ナオキが倒れた。

あのミツヒデとかいう男……絶対に許さない……

私の中には怒りと不安しかなかった……

ナオキは西木野病院のICUに運ばれた。

最悪の場合死に至るほどだった……

そして私たちはナオキを囲んで祈った……

無事で戻ってくることを……

「ナオキ……あんた……このままだったら許さないから……ちゃんと……役目を果たしなさいよ！」

戻ってこなきや……ちゃんと無事で戻ってこなきや……許さないんだから……

そしてナオキの呼吸も落ち着いた……

とりあえずは一安心ね……

数日たつてナオキが目覚めたつて連絡があつて、私は病院に行った。

ガラガラ……

私はドアを少し開けて間から病室を覗いた。

「ん？……誰だ？」

「……にこよ……」

「なんだにこか……入れよ」

「……絵里はいないの？」

「ああ……今はトイレに行つてる」

「そう……」

ガラガラ……

そう……私は絵里がいたか見ていたの……

だつてあの2人は2人つきりだったらイチャイチャイチャイチャするから!!!!

「で、もう大丈夫なの？」

「ああ…おかげ様で。今日退院できるよ」

「そうなの…なら明日から学校に？」

「いや…しばらくは家で安静にしろだとき。だから行くのはまだ先だな」

「…そう……」

「…フツ」

私がそう言うとナオキは笑った。

「な…なによ!？」

「いや…なんでも……頑張つて早く行けるようにするよ……」

するとナオキは私の頭を撫でた。

「…そ…そう……／＼／＼」

「ちゃんと役目は果たすから…絶対に……」

「…聞こえたのね……ふふっ……そうしなかったら絶対に許さないからね」

「同じこと言つてたじゃん」

「そうね……」

「おれが行くまでちゃんと練習してろよ…してなかったらメニューきつくしてやる」

「あ…あんたがそう言ったらほんとうにきつくなるじゃない!？」

「ははは…：…ならがんばれよ…：…」

「言われなくても頑張るわよ！見てなさい！あんたが次来た時びつくりさせてやるわ
!!」

「ああ…楽しみにしてる…：…」

「ええ…それじゃ、私は行くわね」

「ああ…じゃあな」

そして私は帰っていった。

「…：…ナオキに撫でられるのってこんなに気持ちよかったっけ…：…／／／」

私は帰り道でそう呟いていた。

そしてついに本戦のとき…：…

μ, sは大トリで、最後のライブを最高のカタチでむかえた。

そして私たちは見事に優勝…：…

あのステージは一生忘れない……………

これからも……………ずっと……………

そして卒業式の日をむかえたの…

朝、私は部室で思い出に浸っていた……………

そのときだった……………

次回へ続く……………

第81話（矢澤にこ編章末回）「にこ、これから進む道」

そのときだった……

ナオキが部室に入ってきた。

ナオキとは小さい頃に会ってるけど、名前は知らなかった。

そしてたぶんナオキは……

気づいてない……

気づいてるのは私だけ……

そう思っていた……

そしてナオキの口から出た言葉は……

『にこにーちゃん』って……

なんだ…覚えてたんだ……

ナオキ曰く、最初の自己紹介のときに気づいていたらしい……
なんでそのとき話さないのよ！

つたく……

……でもよかった……忘れてなかったんだ……

それがわかったただけで少しほっとしたわ……

ナオキと再会した時からずっと気にしてたから……

私のこと忘れたんじゃないかって……

だから……よかった……

ナオキが去ったあととまた一人になった部室で私は涙を流した……

でも少し笑っていた……

そうね……

もし……ナオキと一緒になれるとしたら……

「ただいまー」

「お帰りなさい……遅かったわね……」

「すまんすまん…仕事が長引いちやってな…」

「そう……／＼／＼」

「ん？どうした？なにか言いたそうだな？」

「な…なんでもないわよ…／＼／＼」

「ふくん…チュツ…」

「ん…もう…わかってるんじゃないの……」

「はははは…物足りなさそうだな？」

「そう？」

「…やりたいのか？」

「………まあ………」

「なら…行くか……」

「ええ……」

なーんてことが……

えへへへ……

そして卒業式も終わり、アイドル研究部のお別れ会もした。
そしてママに言われたから私が特別に「貸し出していた」アイドルグッズとかをまとめた。

そして花陽を次期部長に任命した。

そして校舎をまわった後……

ナオキは絵里にプロポーズしたの……

もう、私に……チャンスはなくなった……

でも、この想いは伝えたい……

いつか……きつと……

「いらっしやいませー！今日はお肉がお買い得ですよー！なんと、2525円！お買い

得ですよー！」

私は今、スーパーでパートをしている。

アイドルのオーディションを受けようとも考えたけど…家のこともあるし、しばらく考えることにしたの。

でもここはここでは『スーパー』アイドル』だから！

「にこちゃん、今日はもうあがつていいわよ」

「はいーお疲れ様ですー」

私はパートからあがるとまずは夕飯の買い物をして、一旦家に帰って、それから幼稚園に虎太郎を迎えに行く。

そして洗濯とかご飯の準備をする。

そしてここるところここあも帰ってきて、遅くならないのなら18時頃にママは帰ってくる。

遅くなったら夜の遅い時間に帰ってくる。

そういえば、最近ナオキはどうしてるのかしら？

暇などときには放課後に顔だしてるけど…なかなかできないのよねー……

「おねえ様！」

「こころ……どうしたの？」

「おねえ様は……アイドルをやらないんですか？」

「……そうね……まだ考えてるわ……」

「お姉ちゃんそればっか！」

「うっ……」

「おねえ様……」

「お姉ちゃん……」

私は……アイドルがしたい……

でも、こころたちは……

お母さんだって忙しいのに……

私はそんな考え事をしに、ファーストフード店にいた。

「はあ……」

「あれ……にこ？」

「ん？」

そんなとき聞き覚えのある声があった。

「あ、やっぱりにこだ」

「ナオキ…どうして？」

ナオキだった……

「いや、ちよつと腹ごしらえにな…」

で、どうしたんだよ…溜息なんかついて」

「聞こえてたの？」

「ああ…たまたまだよ…で、どうしたんだ？」

ナオキは私が座っていたテーブル席のむかいに座った。

「ちよつとね…こころたちにアイドルはやらないのかーって言われて…」

「そっか…ここはやりたいのか？」

「やりたいわよ…でも…」

「家のことか？」

「ええ…こころたちをほってアイドル活動をするわけにもいかないし…マ…お母さんだつて忙しいの…だから…」

「うーん…そっか…おれは行くわ」

「もう行くの？」

「ああ…今日は絵里とデートなんで…大学まで迎えに行く…」

「…そう……相変わらずラブラブねえ〜」

「うっせー／＼／」

「ふふっ……じゃあね……」

「ああ……またな！」

「ええ……」

そしてナオキは帰っていった。

アイドル……ねえ……

でももうひとつ悩み事がある……

それは、ナオキにこの想いを伝えようかどうか……

でもそれは今決断した……

伝える……伝えるべきなのだ……

「私、ナオキのことが好きだった」

次回、新章へ続く……

西木野真姫編

第82話「出会いのメロディー」

私は西木野真姫よ。音ノ木坂学院に通う高校1年生。

イミワカンナイ…なんでこんな当たり前のことを…

ともかく、今日にはにこちゃんたち3年生を見送る卒業式なの。そしてその後お別れ会をしたの。

でも……

「おれと結婚してください!!」

そう……

やっぱりナオキは絵里のこと……

それだけ愛していたのね……

私は諦めたつもりだった……

でも……このモヤモヤは……なに？

ああ……まだ諦めてないのね……

ナオキのこと……まだ諦められない……

あれは私が小学1年生のときだったわね……

私は幼稚園生のときにピアノと出会った。

それからずっとピアノ教室に通った。

そして1年生でピアノの発表会に出れることになった。

それはすごいことだった。

周りには小学5・6年生の人たちばかりだったんだもの……

結果は2位！

パパ：西木野永二（にしきのえいじ）とママ：西木野可奈子（にしきのかなこ）は仕事で来れなかったからその結果を報告した……

でも……

「なんだ1位じゃなかったのか」

そんなパパの言葉に……

「真姫ちゃんはお勉強は1番取れてるから大丈夫よ」

そんなママの言葉に……

「……うん……私……パパとママみたいなお医者さんになる……」

私は今にも出そうな涙を堪えてそう言った……

ピアノ教室はそれっきりで辞めた。

でも、やっぱりピアノは……音楽は好きだから……ピアノは弾き続けた。

そしてある日、西木野病院でピアノを弾いていた……

そんなときに聞こえてきたあのメロディー……

歌声……

私はそのメロディーをピアノで弾いて、そして弾きながら歌った……

「ララランラーン ララランラーン

ララララララララー

ラララ ラララ ラララララララ ララーラーラー

ララランラーン ララランラーン

ララララララララー

ララーラーラー ラーラーラーラーラーラーラー

気持ちよかった……

ピアノを弾きながら歌ったのは初めてだったけど……こんなに気持ちよかったんだ

……

すると……

パチパチパチパチ……

「誰？」

「えへへ……ごめんなさい……」

そして入り口からこっちに歩いてきた男の子

「君って西木野先生の子供なの？」

「そう…だけど……」

「やっぱり！なんか似てるって思ったんだー！」

「そう？」

「うん！それにさっきの歌！すつごくよかった！ピアノの音も！僕ね、さっきの歌が聞こえてここに来たんだ！」

私は褒められたのが嬉しくて自慢したくなかった。

「あのね私ね、これでも発表会で2位だったのよ！」

「ええ!? すげえー!!!」

「ふっ……」

私、笑っちゃった……その男の子のリアクションが大きくて……

それに……嬉しかったし……

「な……なにかおかしなこと言った？」

「ううん……なんにも……」

「そう……」

そのとき……

「ナオちゃん……あ、こんなところに……」

「あ、ママ！」

「探したのよ……あら？そつちの子は？」

「あのね！この子西木野先生の子供なんだよ！それにピアノすつごく上手なの！」

「そう……西木野ちゃん……でいいのかな？ありがとう……遊んでくれてたのね？」

「え……まあ……」

「そうだ！名前聞いてないや！」

僕、香川ナオキ！君の名前は？」

「私は、真姫……西木野真姫！」

「わかった！真姫ちゃんだね！これで僕たち友達だよ！」

「いいの？」

「もちろん！」

「うん！」

それからその男の子……ナオキは西木野病院に来ると必ず私のところに来た。

なにも用がなくても時々遊びに来る時もあった。

診察の時に私と友達になったことを話したみたいで……時々私の家にも招待したわ。

でも、やっぱり勉強はしないといけないから遊べる時間は限られていた。でもナオキもそんな毎日毎日来たがる訳でもなかったわね……

そして私が2年生のとき……

西木野病院にナオキが来た。

でもその顔はどこか暗かった……

「どうかしたの？」

「……真姫ちゃん……その……僕、大阪に引っ越すことになったんだ……」

「……え……」

ナオキは大阪に引っ越すことを話したの。

「ごめんね……もつと遊びたかったんだけど……」

「ううん……でも……寂しいよ……」

「な……泣かないでよ……真姫ちゃん……」

「……ひぐつ……うん……」

「それなら……約束しよう！また……会うって……」

「ほんとうに？」

「うん！いつかまた……一緒に会おうよ！」

「うん！」

そして私とナオキは指切りをした。

私は多分ナオキと出会ったあの時からナオキのことが好きだったんだ……

でもそれからどんどん勉強が忙しくなって、ナオキと遊んだことだってちよつとしか
なかつたから……

そんな私がナオキと過ごした日々の記憶は頭の奥にしまわれちゃったのね……

だからあのときだって……ね……

次回へ続く……

第83話「偶然の再会」

そして私はパパに言われて、西木野病院を継ぐために地域との縁を深めるために音ノ木坂学院に入学した。

最初は抵抗は……なかったといえば嘘になるわね……

どうせ……全部病院を継ぐためのこと……

でも……今となっては後悔なんてしてないわ……

この音ノ木坂学院に来てよかったって思ってる……

だって……μ sのみんなと出会えたから……

そしてあの日……

ナオキが模擬男子生徒として音ノ木坂学院に転入してきた。

ナオキには悪いけど、最初は思い出せなかった。

ナオキのことは好きだったということも忘れていた……

でも一緒に遊んだことも少なかったし……

でも部室で近くでナオキの顔を見たときに全部思い出した。

ナオキのことが好きだということも……

ナオキは私のことを『真姫ちゃん』ではなく『真姫』と呼んで……／＼／＼
ただ呼び捨てにされただけなのに……ただ名前を呼ばれただけなのに……ドキドキし
てた……

そして穂乃果が文化祭ライブの途中で倒れて、μ sの活動は休止になった。

私は音楽室でピアノを弾いていた。

穂乃果と私を繋いだ……あの曲……

「……さあ！」

大好きだばんざーい！

まけないゆうき 私たちは今を楽しもう

大好きだばんざーい！

頑張れるから 昨日に手をふって

ほら前向いて」

そしてそれが歌い終わると……

「ナオキ……」

ナオキがドアからこつちを見ていた。

「よお……やっぱりピアノノ……うまいな……」

「そう……で、何か用？」

「いや……通りかかったら歌が聞こえてきてさ……覗いたら真姫がピアノを弾きながら歌ってて……見惚れちゃった……あははは……」

「ヴええ……そ……そう……／＼／＼／＼」

見惚れた……

その言葉に私はドキツとした……

「確か作曲も真姫がしてんだろ？」

「まあ……」

「やっぱりすごいな真姫は……」

「あ……ありがとう……／＼／＼／＼」

「その曲……なんて曲名なんだ？」

「『愛してるばんぎーいー』よ」

「……いい曲だな……この曲……また使うかもしれないな……」
「え？」

まさか……あんなカタチでこの曲を使うことになるなんてね……

「……でもお前最近ずつと音楽室でピアノ弾いてるな……」

「……それは……ピ……ピアノを弾いていると安心するからよ！／＼／＼」

「ふくん……」

ナオキは顎をさすって少し笑って言った。

「な……なによ……」

「なんかウソ言ってるな？」

「ヴええ!!……そ……そんなこと……」

「ほんまかなあ〜？」

「ううううう……もう……わかってるんでしょ！バカ!!／＼／＼」

そして私は音楽室を出た。

本当は……穂乃果が来ると思ったから……

穂乃果と出会った時もあの曲を弾いてたし……

そしたら穂乃果がまた来て「やっぱりアイドル続ける！」って言うかも……って思っ

てた……

どうせナオキのことだからわかってるだろうけど……

その後穂乃果たちも戻ってきて講堂ライブも成功した。

最近学校がとても楽しくなった。

μ'sに入ったこともあるけど……

なによりナオキがいるから……かな……
／／／／

そしてあの日ナオキは絵里に告白して……

2人は付き合った……

私はこの時はまだ諦めてなかった……

まだチャンスはあると思っていた……

そう……この時は……まだ……

次回へ続く……

第84話 「もう少しだけ」

ある日、私はナオキに生徒会会計に選ばれた。

マチコちゃんと一緒に……

最初は正直嫌だったけど……結局やることにした……

そうしたらナオキとのいる時間も増えるし……

もしかしたら……

「……真姫、大丈夫か？」

「ええ……まあ……これぐらいは大丈夫よ」

「そうか………すまん、今日は他のみんなが用事で無理だつて言うからさ」

「いいのよ別に……」

「よかった……あれ？計算合わない……」

「もう……なにしているのよ……どれどれ……」

「ま……真姫……近づ……」

「いいでしょ……別に……」

「……そんなことされたらな……おれは……」

「きやつ……ちよつと……」

急になによ……

「真姫……おれのもんになれ……」

「……はい……」

……って何考えてるのよ私は

イミワカンナイ!!

そしてあの日……

事件が起きた……

それは、書道部の予算が承認されたこと……

その問題がわかった翌日、犯人はマチコちゃんだろうとナオキが言った。

私は……マチコちゃんを信じたかった……

マチコちゃんが犯人ではないと……

それで必死にマチコちゃんが犯人ではないと叫んだ……

だってマチコちゃんは私の好敵手（ライバル）でもあり、親友だったから……

それでナオキにも酷いこと言っ……

結局、マチコちゃんが犯人だとわかって……マチコちゃんのお兄さん……香川ミツヒデ

の命令で動いたと話して……

マチコちゃんは大阪へ戻ることとなった……

そしてマチコちゃんは大坂学園スクールアイドル『ナニワオトメ』のリーダーだった

ことがわかった……

私たちとマチコちゃんは約束した……

ラブライブ！の本戦で戦うということを……

そして次の日……

「ナオキ……………」

「ん？どうした？」

「その……………昨日は……………ごめん……………」

「ん？……………ああ……………あのことか……………別にいいよ……………気にしてないから」

「でも……………」

「……………たく……………」

するとナオキは私の頭を撫でた。

「ヴええ……………／／／」

「だから気にしてないって……………世話のやけるやつだな……………」

「な……………なによそれ……………」

「ははは……………だから謝ることねーよ」

「……………うん……………」

「さ、仕事しなきゃな！」

「わかってるわよ……………」

そして私とナオキは生徒会の仕事を始めた。

そのあとフミコ先輩や海未が来たんだけど…

正直あと少しだけ2人だけがよかったな…なんて…
／／／

そしてあの日…

「はあ…はあ…はあ…はあ…
……………」

ナオキが倒れた。

そして西木野病院のICUにナオキを運ばせた。

ナオキの容態は悪かった…

過大なストレスによって精神的にもダメージがあつて、最悪の場合死に至るほどだった…

そして死に至らなくても記憶を失う可能性もあつた…

そんなの嫌だ…

いつものナオキで…いつもの元気で…

私の大好きなナオキで戻ってきて欲しかった…

そしてみんなでナオキを囲んで祈った……

私は……私は……

「ナオキ……あなたがいないと……練習は全然進まないんだから……はやく戻ってきなさいよー!」

早く戻ってきて……ナオキ……

そしてナオキの呼吸も落ち着いた。

そして何日かたった後にお母さんからナオキの意識が戻ったって連絡があつて、私はすぐに病院に向かった。

ガラガラガラ…

「……絵里……？」

「お、真姫……」

「ナオキ……」

「絵里なら寝てるぞ……」

「そう……って……もう馬鹿！」

「うお!？」

私はナオキに近寄って言った。

「あんたどれだけ心配したと思ってるの！」

「いやあく……あははははは……」

「『あははははは……』じゃないわよ！ほんとに……心配……したんだから……バカ……」

私の声はどンドン涙声になっていた。

「……真姫……」

ナオキは今にも泣きそうな私を片手で抱きしめた。

「……ちよ……ちよつと……／＼／＼」

「ごめんな……真姫……そんなにまで心配してくれたんだな……」

「わ…私は別に……」

「なんだよ…やっぱり真姫はツンデレだな……」

「はあ!? ツ…ツンデレって…ナニソレ…イミワカンナイ!」

私はナオキから少し離れて言った。

「ツンデレってのはな…お前みたいなのやつのことを言うんだよ…」

「べ…別にそんなこと聞いてないわよ」

「そうか…でもほんまにすまんかったな……」

「もういいわよ…こうして戻ってきてくれたんだし……」

「ああ…ありがとう……」

「それじゃ…私は行くわね」

「ああ…また今度な」

「わかってる? ちゃんとゆっくり休むのよ?」

「はいはい…わかっていますよ」

「ならよろしい…それじゃ」

「ああ…それじゃあな!」

そして私は帰った。

「もう少しだけ…抱きしめて欲しかったな…／＼／」

私はそう呟いていた……

次回へ続く……

第85話（西木野真姫編章末回）「真姫、これから進む道」

そしてついにラブライブ！本戦の日が近づいてきた……

「……………どう？」

「……………そうだなあ〜」

私はナオキに本戦で使う曲を聞いてもらってた。

「やっぱり私たちのラストライブだし、それにトリ……………なにか足りない気がするの……………」

「……………少しいいか？」

「ええ…何でも言つて」

「ちよつと曲のばすか……………」

「ヴええ!？」

「いや……………やつぱりトリだから……………観客のみんなで歌つたりとか……………サビをのばしてデ
ンション上げるとか……………な？」

「はっ……………!?それだわ！」

「お……おう……」

「そう！ナオキ、いいアイデアよ!!」

「そ……そうか……よかった……うん……」

「ありがとうね」

「真姫が素直に……ハラシヨ……」

「なによそれ！」

ま、そんな感じでナオキにアイデアを貰ってラブライブ！本戦で披露した風になったの……

ほんとうに……感謝してるんだから……／／／

そしてラブライブ！本戦で私たちはマチコちゃんたちナニワオトメにも勝って……優勝した……

そして卒業式の送辞でナオキが歌を歌うと言い出した。

そしてあの日、私が音楽室で弾いて歌っていた『愛してるばんざーい！』とナオキが

考えた『SENTIMENTAL Steps』を歌うことを決めて、
sの1、2年生で
練習したりした。

そして卒業式では大成功！

いい卒業式になったわね……

そしてその後のお別れ会のあとに……

ナオキは絵里にプロポーズした……

それでたとえチャンスが無くなったとしても……

私はこの想いを伝えたい……

私の将来の夢？

そんなのわかってるでしょ……

私は西木野病院を継ぐの。

そのために大学は医学部に行く予定。

どこの大学にしようかな？

なんて……もう決まってるんだけど……

私が進む大学は『西木野大学』

医学部を専門とする大学で、卒業生は大体西木野病院での就職を目指す。

実際に今、西木野病院で働いている職員の9割は西木野大学の卒業生。

この大学の学長でもあり、創設者はパパよ！

だから私は。パパやママに試験での不正とかしないように念を押して言ったわ。

「……………」

カキカキカキ……………

私は今、生徒会室で勉強している。

「…間違ってるぞ」

「ヴええ!？」

「いいか？今となつてはまだ本能寺の変は謎に包まれている。

その説の信ぴょう性の高いひとつを書けという問題だ」

「ええ…だから『織田信長が明智光秀に暴力をふるって、その光秀の恨みが溜まつて謀反を起こした』って……」

「だから間違ってるって」

「ヴええ!？」

「いいか？まあ…それは江戸時代につくられたある物語の話だ。だから信ぴょう性は低い」

「へえ〜」

「だから…そうだな……」

『織田信長は四国地方の長宗我部元親を攻めようとしていた。だが明智光秀の家臣斎藤利三が長宗我部と親戚関係にあり、光秀は織田と長宗我部の仲介役を担っていた。しかし信長は四国地方全土を領有しようとし長宗我部と対立。神戸信孝大将の四国方面軍をも作り、長宗我部を討伐することに方向転換したので光秀は信長に反旗を翻した』が
いいかな？」

「長いわね…」

「こんなもんだろ？文字数制限ないし」

「凄いわね……」

「ここだけな（エッヘン）」

「はあ…なんで医学部なのに日本史があるのよ……」

「パンフレットに書いてあつたら？」

『医者を目指すたるもの、医学の知識のみならずほかの知識も得るべし』って」

「それで選択科目があつて……」

「真姫はおれに『日本史教えて』って言いに来た」

そう…ナオキは日本史と現代社会に関しては成績はトップ。

だからナオキに日本史を教えてもらうことにしたの。

べ…別にナオキに勉強を教えてもらいたいから日本史を選んだわけじゃないから!!

／／／／／

「ねえ…どうやったらそんなに頭に入るの？」

「う〜ん……とりあえず人つてさ、興味あることはどんどん吸い込むから…それじゃね

？」

「ふくん……」

「ま、ゆつくり覚えていこうか」

「ええ……でも……ナオキは今年卒業……」

「時間も限られてるし……」

「そうだな……よし、この1年……みっちり鍛えてやる！覚悟しろよ！」

「ええ！望むところよ！」

ナオキだったら……私の家庭教師みたい……ふふつ……

でも、まだ私は想いをナオキに伝えてない……

伝えたいのに……

勇気がでない……

ううん……でも伝えなきゃいけない……絶対に……

「わ…私…ナオキのことが…ずっと好きでした！／＼／」

次回、新章へ続く……

絢瀬絵里編

第86話「運命の出会い」

私、絢瀬絵里。音ノ木坂学院に通う高校3年生。今日は私たちの卒業式。
そしてお別れ会のあとにね……

「おれと結婚してください!!」

ナオキは私に『誓いの石』が付いてある指輪を出して、プロポーズしてくれた……
私はもちろん……

「……はいー」

だって……ずっと好きだったから……

ナオキと出会ったのは1年生のころだった……

ある日、ママ：絢瀬プロニスラヴァ里美（あやせプロニスラヴァさとみ）：ああ……マ
マはロシア人と日本人のハーフなの……：パパは絢瀬秋良（あやせあきら）って言うの。

ママが日本に留学してきて音ノ木坂学院に入学、そしてアルバイト先の先輩がパパ
だったの。

で、ママの同級生の人がある日遊びに来たの。

そのとき、私は近所の教会でバレエの練習をしていたの。

そしてどこからか歌が聞こえてきて、

私はその歌を歌いながら踊ったわ。

「ララランラーン　ララランラーン

ラララララララー

ラララ　ラララ　ラララララララ　ララーラーラー

ララランラーン　ララランラーン

ラララララララー

ララーラーラー　ララーラーラーラーラーラーラー

気持ちよかった……

すると……

パチパチパチパチ……

「誰？」

そんなとき聞こえた手を叩く音……

「凄いな……さっきの……」

「そう……ありがとう……君、名前は？」

「僕は……ナオキ……香川ナオキ……」

「ナオキくん……ね……私は絢瀬絵里……よろしく……」

「よ……よろしく……」

「で、なんでここに？」

「えっと……ママの友達の子供がここにいるって聞いたからここに来たんだ……そしたら……」

「あなたのママの？」

なるほど……私のママの友達ね……」

「なら絵里ちゃんが……ママの友達の子供？」

「そうみたいね……」

「ねえ、さっきのやつもう一度やってよ！」

「さっきの？」

「うん！だって凄く綺麗だったから！」

「あ……ありがとう……」

私は最初は警戒してたわ……

でもその子はともも明るくて、安心した……

だから……

「わかったわ！ならそこでみてて！」

「うん！」

そして私はもう一度さっきのをやった。

その後、教会を案内したりしたわ。

「ここが……」

「絵里」

「あ、ママ！」

「ナオちゃん」

「あ、ママ！」

「2人で遊んでたの？」

「うん！もう友達だから！」

「友達？」

「え、そうなんでしょ？」

「……うん！友達！」

「良かったじゃない絵里、日本で初めての友達よ」

「そうなの？やったー！」

ナオキはそれを聞いて飛んで喜んだ。

そう……ナオキは私の日本で初めての友達……

そしてナオキが帰った後……

「はあ……」

「ん？どうしたの絵里？溜息なんかついて……」

「ママ……あのね……なんか変なの……」

「変？」

「うん……なんだか……ナオキくんのことを考えると……胸が苦しいの……」

「……ふふっ……そう……」

「そうか……絵里もついに……」

「もう！ママもパパもなによ！はやく教えてよ！」

「ふふっ……あのね絵里……それは……”恋”よ」

「恋？」

「絵里はナオキくんのことを好きなんだよ……」

「好き？」

「ええ……私がパパを好きなのと同じよ」

「……そっか……ありがとう……パパ！ママ！」

そう……私はこのときにはナオキに恋をしていた……

ナオキのことが好きだった……

ナオキのことを愛していた……

それが私の初恋……

そしてナオキはほぼ毎日のように遊びに来たの。

遊んで、ナオキが来たときとか帰るときにはほっぺたにキスをしたわ。
ナオキだったら最初は慌ててたけどこれはあいさつだって教えたらず普通だったわ。

あとは私が「ハラショー！」って言うのが口癖だからナオキも「ハラショー！」って
気に入ってたなあ

その時にもナオキは亜里沙と会ってるの。

亜里沙はナオキのこととても気に入ってたわ。

そんな毎日が3年ほど続いたある日……

「絵里ちゃん……あのね……」

「どうしたの？」

「その……僕、大阪に引越すことになったんだ……」

「え……大阪って……」

「そうなの……寂しくなるわね……」

「うん……」

「ナオキくん……また……会えるよね？」

「うん！また会いたい！絵里ちゃんに！」

「それなら約束……」

「うん、約束……」

「僕、『ハラシヨー！』ずっと使うから！」

「うん！2人を繋ぐ言葉ね……」

私とナオキは指切りをした。

そしてナオキは大阪に引越した。

そのあともずっとナオキのことを考えていたわ。

でも、それからしばらくたって私はロシアに行くことになった。
ロシアでも同じ……ずっとナオキのことを考えていた……

バレエをロシアでもしてたけど、全力で挑んだオーディションで優勝できなかった。
悔しかったなあ……

それから1年後、私はまた日本に戻った。

私はやっぱりまだナオキ以外は友達ができなかった。

やっぱりこの見た目かな？あははは……

中学……音ノ木坂中学校に上がってもあまり毎日が変わらなかった。

でも、何回か告白されたけど私にはナオキという心に決めた人がいるから全部断ったわ。

そして私はいっしょか『誰も引き寄せない硬い人』って言われていたわ。

だから友達もできなかつたわよ……

そして私は音ノ木坂学院に進学した。

このときからママとパパはロシアで暮らすけど、私は妹の亜里沙と一緒にマンションで暮らすことにしたの。

1年生のときに先生から生徒会長をしてくれと頼まれたの。

私はそのときはもう友達だった希と一緒に生徒会に入った。

希は副会長をしてもらったわ。

そして毎日が過ぎていって、私は2年生になった……………

次回へ続く……………

第87話 「運命の人」

そして私たち2年生は修学旅行で京都と大阪に行くことになった。

2泊3日で、

1日目は京都散策（希と2人で）

2日目はU○Jで遊んだ（希と2人で）

そして3日目は大阪散策、

この日も希と2人でまわっていた。

希は前にこつちに来たことあるらしいけど…

オススメされたたこ焼きは美味しかったわ…

思わず「ハラショー…」って言っちゃった…

そして…

「あのーすみません…落としましたよ」

「あ……ありがとうございま……す」

「ん？えりちどうしたん？」

私はそのハンカチを拾ってくれた人の顔をみて……固まった……

だってその人は……

「え……絵里ちゃん？」

「ナ……ナオキくん……なの？」

「絵里ちゃん……絵里ちゃんだ！」

「ナオキくんなのね！」

だってその人は……ナオキだったんだから！

「はははは……こんなところで会えるなんて！ハラシヨー！なんで大阪に？」

「修学旅行なの！ああ……紹介するわね……」

ナオキくん、こつちが東條希……私の友だちよ

希、こつちがいつも話してる幼なじみの香川ナオキくん」

「そうか……はじめまして！」

よろしくお願いします！」

「よ……よろしくね！」

ほんとうに偶然の再会だった……

もしかして……ナオキって運命の相手なんじゃないかってこのときは嬉しかったわ。

「そうだ、絵里ちゃん連絡先交換しない？」

「これからもいっぱい話したいし」

「そうね……」

「じゃあウチも！」

「希さんも!？」

「うん！いいやろ？」

「はい、全然！」

そして私は希はナオキと連絡先を交換した。

嬉しかったなあ……

うふふふ……／／／／

「ねえねえナオキくん！これからお昼一緒に食べない？」

「おっ、いいねー」

「希はそれでいい？」

「うん！ええよー」

そして3人でお昼ご飯を食べに行ったの。

そして今までにあつたこと、昔のこと、色んなこと話したわ。

「でも、絵里ちゃん……すごく綺麗になったね」

「え!?!……そ……そう? // // //」

もう……綺麗になっただなんて…… // // //

えへへへへ…… // // //

「ん? どうした顔赤いぞ?」

「え……そ……そうかしら…… // // //

こ……こ……暑いからかな? あははは……」

「そうか……ならいいけど……」

もう……バカ…… // // //

そして……

「じゃあ私たちは行くわね」

「おう！バイバイ絵里ちゃん！

希さんも！」

「うん、ほなー」

「バイバイ！」

私と希はバスに向かった。

バスの中で私はメールが来たことに気づいた。

相手は…ナオキ……

『絵里ちゃん気をつけて帰ってね！

今日は楽しかったよ！』

うふふふ……

私は返信をした。

『ええ…私も久しぶりにナオキさんと話せてよかったわ。』

これからはいっぱいメールとか電話で話せるわね』

そしたらナオキから返信が来た。

『そうだね！』

これなら毎日絵里ちゃんとお話できるね！』

もう…／／／／

なら……

『そうだ！』

ねえねえ…もう名前で呼び合いましよようよ！

ナオキ！』

えい！

私は親指に力を入れて送った。

そして返信が来た。

私はドキドキしながらそれを開いた。

『うん！わかったよ！』

絵里！』

よし！

私はガッツポーズをした。

『ありがとう！』

それじゃあまた話しましょう』

『うん！またね！』

私は嬉しくてスマホを抱きしめた。

そのとき希に「どうかしたん？」

って言われたけど「べつつにー」って言ったわ。

ふふふ…これからいつでもナオキと話せるんだあ〜って思うとすごく嬉しかったわ。

そして家に帰って、亜里沙にナオキと会ったって伝えたら「私も話したい！」って言い出して、ナオキにそれを伝えたら別にいいって言うから電話をかけて亜里沙にしばらく話させて、そのあと私も話したわ。

その日の夜は寝不足になって、次の日にお昼寝たくさんしちゃった…あははは…

でもこのときはまたナオキと会えるなんて思ってたわ…

次回へ続く…

第88話 「運命のとき」

そして私は3年生になった……

だけど……理事長から『学校廃校』の知らせが告げられた……
私は……どうすれば……生徒会長として……何をすべきか……

ナオキから電話がかかってきたら笑顔で振る舞えた。

でも心の中では少し、追い詰められていた……かな……

でも、ナオキの声……少し変だったな……

ちよつと落ち込んでるような……

そして私の前に現れた……

穂乃果、海未、ことりの3人だった……

スクールアイドル……

最近どんどん流行ってるのね…

たしか部活動でだったかしら？

でも、最初は私は反対だった…

思いつきで行動しても…：意味がないって思ったから…

スクールアイドル？

そんなもの、私から見れば雑魚よ雑魚。

素人集団のお遊びにしか思えない。

穂乃果たちもお遊びでしてるなら…

ってね…

でも、違った…

本気だった…

穂乃果たちは本気で…スクールアイドルでこの音ノ木坂学院を廃校から救おうとし

ていた…

そんな姿に私も少し…憧れていた…

もう一度…ナオキと出会ったときのように歌って踊りたい…

ある日、ナオキは…：私に電話をしてきて…

「……………絵里の今一番やりたいことってなんだ？やりたいことは……………なんなんだ……………」

「やりたいこと？……………だから学校を廃校にさせたくないって前に…」

「それは生徒会長としてじゃないのか？」

「え？」

「おれは音ノ木坂学院生徒会長絢瀬絵里に聞いているんじゃない！絵里自身に聞いているんだ……」

「私自身に？」

「ああ……絵里の本当にやりたいことは……………なんなんだ？」

そんな言葉は私の心に刺さった……………

そして私の口から出た言葉は……………

「知ったような口で言わないで……」

「え……」

「あなたに私の何がわかるのよ！」

そして私は電話を切った。

ああ……言っちゃった……

私の目からは涙が零れていた。

私……もう……ナオキに……

ナオキから電話がかかっても出なかったわ……

いえ……出れなかったという方が正しいかな……

その2日後、希からも同じことを言われて……私は希に想いをぶつけた。

そして自教室に走っていった。

そしてナオキから電話がかかってきた……

私は……通話のボタンを押した……

「……もしもし?」

「あ……絵里……やつとでてくれたな……」

「その……私……」

「どうしたんだよ……涙声だぞ」

「な……なにもないわよ……ほつといてよ」

「ほつとけねーよ!」

「ナオキ……なんで……なんでそこまで……なにも知らないくせに!!」

「知ってる……知ってるよ!音ノ木坂学院生徒会長絢瀬絵里としてじゃない……おれはおれの幼なじみの……絵里の……絵里自身のやりたいことを聞いているんだ!!」

「私自身の……」

「絵里自身の……やりたいことは?」

すると穂乃果が手を差し伸べてくれて、私を μ sに勧誘してくれた。

そしてナオキも……

「挑戦してみたらどうだ？」

「ナオキ……」

「それがほんとうにやりたいことになるかもしれないぞ……」

そして……私は……

「わ……私は……ずっと……追い込んだのかもね……生徒会長としての責任感に……生徒会長としてじゃない……私は……私としてこの学校を廃校にさせたくない!!」

「ああ……おれは……応援してる……ずっと……」

「うん……ありがとう……」

そして私、絢瀬絵里は、sの一員になった。

そしてオープンキャンパスの日……

私はなぜかナオキが見ていてくれるような気がしたわ……

でもほんとうに見ていてくれてたなんてね……

そしてあの日……

ナオキが音ノ木坂学院に模擬男子生徒として転入してきた。

そして……

そのときは突然だった……

「なあ……絵里……」

「どうしたの？」

「お……おれ……小さいときから……」

「小さいときから？」

「おれ……絵里のことが……」

「私の……ことが？」

「す……好きだ!!おれと……おれと……付き合ってください

……」

「え……」

ナオキは私に告白してくれた……

私の応えは……決まってる……

だって……

「ふふつ……あなたもだったのね……」

「え？」

「私もよ……私もナオキのこと……ずっと好きだったわ……小さいときからね……」

「そ……そうやったんか……」

「絵里………これからよろしくな……おれの……彼女として……」

「私からもよろしく……ナオキ……私の……彼氏として……」

そして私とナオキは付き合うことになった……

嬉しかった……

ナオキも同じ気持ちだったこと……

そしてその気持ちを伝えてくれたこと……

なにより……私のことを大切に思ってくれることが……

もしかしたら……

結婚まで行っちゃうかもって……

思っちゃう……

だって、そんなの思わないじゃない……

まだ付き合ってたよっとしか経ってないのに……ね……

次回へ続く……

第89話（絢瀬絵里編章末回）「絵里、これから進む道」

そしてついに迎えた卒業式の日……

ナオキはお別れ会のあと、私を生徒会に連れていった……

こんなときにまさか……

「どうしたの？」

「絵里……おれさ……」

「どうした……んっ！……」

「……はあ……絵里……」

「ちよつと……なんでもリボンを……まさか……どこで？」

「我慢できねーんだよ……」

「ナオキ……」

「ダメか？」

「ううん……いいわよ……」

つてなったりして／＼／＼／＼

……なわけないわよね……ははは……

ナオキは生徒会室で修学旅行のお土産でくれた“誓いの石”のもう一つの意味を教

えてくれた……

それは……

『永遠の愛を君に誓う』

そしてナオキはポケットから誓いの石が付いた指輪を出して……

「おれと結婚してください!!」

それを聞いて私は嬉しかった……

こんなにはやく……

ウソと思うくらい信じられなかった……

でも……

「ウソじゃない！」

おれは絵里のことが好きだ！

誰よりも……今も……これからも……どんなときもずっと……

絵里のそばにいたい！！

絵里にそばにいてほしい！！

この石はな……占いの道具なんだが……

この石は昔からある誓いをするときに使われたらしいんだ……

誓いの石にもいろんな種類があつてこの誓いの石は……

『永遠の愛を君に誓う』

永遠の愛を誓う石なんだ……

だからおれは誓う！

絵里……おれは絵里を永遠に愛する！！

どんなときもずっと……

だからもう1度言うよ……

絵里、おれと結婚してください……」

ナオキのほんとうの気持ち……

全力のプロポーズ……

結婚なんて……女の子の……憧れじゃない……

応えなんて決まってる……

「……はい！」

私も……よろしくお願いします！」

そして……私とナオキは婚約した……

私たちはキスをして…抱きしめ合った……
お互いの愛を確かめ合うように……

そして色々あつて、その帰り道……

「あ………」

「…どうしたの？」

「指輪……はめてないな………」

「あつ…そう言えばそうね………」

「じゃあ…絵里……指輪出して………」

そして私はポケットからナオキに渡された指輪のケースを出した。

ナオキはそれを開けて指輪を取り出した。
そして……

「絵里……さ、指出して……」

「はい……」

そしてナオキは指輪を私の左手の薬指に近づけた。

「絵里……これからよろしくな……」

「（ちん）そ……よろしくね……」

そしてナオキは指輪をはめてくれた……

私の将来の夢は……

「とりあえずは音ノ木坂学院の教師で、
そのために千代田理系短期大学に通ってるんだけど……」

「私は忘れない……」

「小さい頃に言った私の将来の夢……」

「ナオキが大阪に行つて、私がロシアに行つて、そしてまた東京に来た時にした……」

「なあ……絵里には将来の夢とかあるのか？」

「パパ……急にどうしたの？」

「いや、ふと思つてな」

「そうね……私にも気になるわね」

「ママまで」

「で、将来の夢はなんなんだ？」

「大きくなつたらなになりたいの？」

「私は……」

そう……私の将来の夢は……

正直言えば……今はもう叶ってる……

「私、大きくなったらナオキくんのお嫁さんになる!!!」

そう……私は昔からナオキのお嫁さんになりたかったの……

ナオキを支えたい……

ナオキと一緒に毎日を過ごしたい！

だってそれが私の夢だから……

これからも……そばでいてね……

ナオキ………

次回、新章へ続く……

香川ナオキ編

第90話 「女神たちとの出会い」

おれ、香川ナオキ！

音ノ木坂学院に通う高校2年で、唯一の男子生徒！

ま、今日は絵里たち3年生の卒業式で、アイドル研究部のお別れ会をして、ほんでおれは絵里にプロポーズした！

でやな……今回はおれと9人の女神たちとの出会いをお話するぜ！

くくくく希との出会いくくくくく

希と出会ったのは大阪のこと……

おれが東京から引越してわりとすぐのことだった……

おれはトイレの帰り道、4年生の教室を通ったんだ……

そしたら……

転校してきた希がいた……

最初は話しかけようか迷った。

年上だし……

ちよつと勇気が出なかった……

そして3日後……

帰ろうとする希がなにか本を読んでいた。

教室には希以外誰もいない……

どうしようかと迷っている……

”あの歌”が聞こえてきた……

どうしようかと迷ったよ……

ここは慰めに行くべきか、知らないふりをしてそのまま行くか……
でも…ほつとけなかった………

そんなとき”あの歌”が聞こえてきた

その歌に背中を押された……

「やっぱり…男なら泣いてる子を助けなきゃ……」

そしておれはその女の子…凜の元にむかった。

それが、凜との出会い……

~~~~~  
海未との出会い~~~~~

海未との出会いはある日、家に帰るときだった……  
犬の鳴き声があるからその方向をふと見ると……

同じクラスの海未が怯えていた。

おれは犬が苦手だ……

だから正直怖かった……

でも、ここで引き下がるわけにはいかない……

でも怖い……

そんなとき”あの歌”が聞こえてきた

その歌に勇気を貰った……

そして落ちていた野球のボールを犬のすぐ横を目掛けて投げた。

見事に狙ったところにいって、その犬は逃げて行った。

そしておれは海未の元へ向かった。



そのとき、”あの歌”が聞こえてきた。

そしてその方向：神田公園の方を向いた。

するとそこでは女の子2人が遊んでいた。

それは同じクラスの穂乃果とことりだった……

混ざりたかった……

でも、女の子の遊んでるのに混ざるのはちよつと気が引けた……

それで迷っていた……

すると穂乃果がなにかをしようとした……

なにをしようとしているのかおれはそれをみえた。

そしてその穂乃果は走り出して、水たまりを飛び越えようとした。

でも…失敗……

おれは少し穂乃果たちの元へ行きかけたが、留まってしまった。

そして穂乃果はもう1回やろうとした……

すると今回はリズムにのつたように走っていた。

そして穂乃果は水たまりを飛び越えた。

だが、そんな穂乃果はこっちを見た。





胸が苦しい……

なぜだ……

それは……恋してるから……

その女の子……絢瀬絵里に……

それが絵里との出会い……

運命の出会いだった……

てな感じでおれは9人の女神たちと出会ったんだ……

その女神たちとはのちにおれが東京に帰った時に再会した……

そう……音ノ木坂学院スクールアイドルμ'sとして……

それは多分ギリシャ神話のムーサから取ってあるのだろう……

てか取つてあるなこれ…名を考えた張本人に聞いたんだし…あはははは…

さて、次はなにを話そうかな…

次までに考えとくわ

次回へ続く…



## 第91話（香川ナオキ編章末回）「ナオキ、これから進む道」

そうだな……ま、おれの身辺のことを紹介しよう！

まずはおれの話し方の事だが、関西弁が少し混ざっている話し方なんやよ……

それは東京に帰ってきて、少しずつ直ってきてる……気がする……

おれのママの名前は香川樹木（かがわいつき）、パパの名前は香川トウマ、ママは大阪府警察で秘書をしている。

パパは大阪府警察の本部長をしている。

元々パパは警視総監をしていた。

ま、日本の警察のトップだな。

だが内閣総理大臣からの指示で、表向きは部下の責任を負って大阪に移るのだが、裏向きは大阪では全国一、凶悪犯罪とか麻薬の販売人、使用者が多いため、その数を減らすために優秀なパパ任命されたのだ！

ま、警視総監の方が上なんだけど……あはははは……

ママはゆえにパパの秘書なんだ！

とりあえず、だからおれは大阪に引っ越したわけ！

ほんで、音ノ木坂学院の模擬男子生徒に任命されたからおれだけ東京に戻ったんだ！

おれは最初はおじさんの家にいたんだ。

おじさんはご存知、伊藤晋三：ラブライブ！運営委員会の会長だ。

このラブライブ！運営委員会はスクールアイドルのグッズ販売などをする機関で、全てのスクールアイドルはここに申請しなければならぬ。

この運営委員会が行っているスクールアイドルのためのプロジェクトを

『ラブライブ！ School idol project』と言うんだ。

そしてその晋三の奥さん、つまりはおれのおばさんは伊藤ナオミ、おれのパパのお姉さんに当たる人だ。

おばさんはいわゆる専業主婦である。

時々おじさんの秘書みたいなことしてるとみただけだな。

ミツヒデ：香川ミツヒデは本戦のあと、会長を辞任したらしいが、みんなあのミツヒデが全校生徒の前で深々と頭を下げて、しっかり反省もしてるみたいなのでミツヒデを会長のままにしたらしい。

そして理事長の件もミツヒデは断ったらしい。

おれはミツヒデから大坂学園に戻って欲しいと言われたが、おれには使命があるし、それに絵里たちをほって行けぬーよ……

おれの使命ってなにかって？

それは……

この音ノ木坂学院を立派な共学校にすることだ！

そのために模擬男子生徒としてここに来たんだからな！

そしておれの将来の夢は新聞記者、できればジャーナリストになりたいと考えてい

る。

でも…少し悩んでいるのが現状だ……

なにせおれは……

あの日……

「おれと結婚してください!!」

「……はいー」

おれは絵里にプロポーズして婚約したんだから……

新聞記者は忙しい……

休みだつてそうたくさんない仕事だ……

それなら……絵里といれる時間がなくなってしまう……

それは嫌なんだ……

絶対に……………

だからおれは……………おれは……………

新聞記者、ジャーナリストという夢を諦める……………

そしてあの日、おじさんから来たメールの内容はこうだ……………

『話がある。』

お前たちμ sのこれからの活動のこと、そしてお前の将来のことだ。

お前たちμ sにはスクールアイドルのためにアメリカに行ってもらおう。

今日、学校から帰ったら運営委員会の本部へ来い。詳しいことはそこで話すよ。以上だ……………』

とのこと……

なんだろう……おれの将来のこと？

それに……μ sのこれからの活動のことって……

しかもなんでアメリカ……

海外でなにをしろって言うんだ……

それに……スクールアイドルのためにつて……

おれは……あいつ”が言ったことを思い出す……

『まだ終わりじゃないぞ………』

どういふことか……うつすらわかったような気がするよ……

『そうか……なら歩め……お前自身の道を……』

ああ……わかつてる……

これからも歩み続ける…おれの道を…

…おれたちの戦いはこれからだ！

あれ？これって最終回なの？



Another way (小泉花陽の誕生日)「ナオキと  
花陽の決闘…?」

タ、レ、カ、タ、ス、ケ、テ、エ、!!

あ、急にすみません……

えつとですね……

今日は私、小泉花陽の誕生日でして……

どうしてこうなってるか私にもわからないんです……

それは……

「花陽！お前に決闘を申し込む!!」

「は……はあ……」

ナオキくんが私に決闘を申し込んできました……

「お？その顔はこの状況を理解していないようだな…」

「そ…そりゃあ…」

「説明しよう！」

おれは今、花陽に決闘を申し込んでいる！」

「わ…わかつてるよお〜そんなことお〜！」

「なんだ…わかつてんのかよ…で、どうする？」

「ど…どうするって…なにで決闘するの？」

「な…なにして…わかるだろ？」

おれと…花陽だぞ？」

「ナオキさんと…私…」

ナオキさんと私で決闘するようなこと…

そんなこと…

そんなこと…

そんなこと……………

あつた……

「ごはん……………ですか?」

「ハラシヨー!」

ナオキくんは私にグープーズをしてそう言いました。

「で……………ごはんでどんな決闘をするんですか?」

「早食いだ!」

……………即答……………

でもそんなことしたら太っちやう……

「今、『太っちゃう』って思っただろ？」

「うっ……」

「ま、そう言うと思って……ちゃんと報酬は用意してある！」

「報酬って……これは任務なんですか……？」

「えっと……なんて言うんだろう……」

えっと………とりあえずこの決闘を受けてくれたら1週間ごはん屋無料券！」

「な………なんですってええええええええええええ!!」

ご……ごはん屋1週間無料券………

これはやらないと………でも………

「勝つたらなにが貰えるんです？」

「勝つたら………」

「勝つたら私とのデートできる権よ……」sの小泉花陽さん……」

そして聞こえたのはナオキくんではない声………

「あ、  
来たんですね……

ツバサさん！  
ふえ………？



「やります!!!」

「よっしゃ来た!」

「でも…やるからには手加減しませんからね……」

「は…花陽が燃えている……」

「これが……花陽のアイドルオタク魂か……ハラシヨ……」

「ふふふ…小泉さんって面白いわね…」

「さあ!ナオキくん!いざ、勝負!」

「おう!」

そして私とナオキくんの戦いが幕を開けたのです。

そしてごはん屋……

「いい？ナオキくん、小泉さん。」

ルールは簡単……ごはんを先に25杯食べた方が勝ちよ」

「了解！」

「はい！」

「それでは……レディー……ファイト！」

コン！

そのゴングの音で戦いは始まりました。

早食い対決と言えばみなさんはガブガブと勢いよく食べると思いますよね？

でも、私たちは違います！

私たちはごはんが大好きなのです！

つまりは……

「はむ……やっぱり白米は最高ですう」

「はむ……だよなあ」

「これが早食い対決……ねえ……」



それから何分たったでしようか……

時間を忘れて私とナオキくんはごはんを食べていました。

楽しかったなあ……

あ、ごはんを食べるのもですけど……

その……ナオキくんと……一緒だから……  
／  
／  
／  
／

そして……

「ごちそうさまでした!」

「まじかあ〜……はむ……」

勝ったのは私でした。

「おめでとう……小泉さん!」

「ありがとうございます!」

勝った!勝ちました!

これで……ツバサさんと……デートです!

「じゃ、行きましょうか!」

「ふええええ!?!い……今からですか!?!」

「ええ……今日、誕生日なんでしょう?」

「は……はい!」

つ……つつつつつツバサさんが……私の誕生日を……ゆゆゆゆゆゆ夢じゃないですよ

ね!? ね!?

「おめでとう……」

「あ……ありがとうございます……」

「じゃ、行きましょう!」

「はい!」

「花陽、ありがとう……楽しんで」

そしてツバサさんと私はごはん屋を出てしばらく歩きました。

「じゃ、ここにしましょう！」

「(こ)……(こ)は………」

そしてツバサさんが指さしたのは……

いかにも高そうなお寿司屋さんでした……

「た……高そうなところ……大丈夫なんですか？」

「ええ……さ、入って」

「は……はい………」

ウーーン……

「ハイラツシャイ！」

「予約してた綺羅ですけど」

「ハイ！お待ちしてやした！奥の座敷へどうぞ！」

「さ、行きましょう！」

「は……はい！」

そしてツバサさんと私は奥の座敷へむかいました。

「さ、小泉さん……ここ開けて」

「ふえ？は……はい！」

なんでツバサさんは私に開けさせるのでしょうか？

サ……

「「「「「花陽（ちゃん）（かよちん）！お誕生日おめでとう（ぎざいます）！」「「「「「「」

「ふえ……？」

な……なにが起こってるのでしょうか……

「かよちん……キョトンとしてるにやー……」

「そりやそうでしょ……」

「あははは……」

「ふふ……小泉さん」

「はい！」

「驚くのはわかるけど、はやく座らないと……みんな待ってたのよ？」

「そ……そうなんですか!？」

「今回はツバサさんにも協力してもらったんだよ！」

「ふふふ…当然のことよ……」

「で、ナオキくん……いつのまに?」

「え?あの後ツバサさんと花陽が歩いてる間に遠回りして全力で走った」

「ここに着いた時はハアハア言ってたもんなあー」

「うっせーよ……つたく……」

「さ、花陽…早く座って……」

「あつ…はい!」

「じゃあまずは穂乃果から……はい!」

「これは……」

「白米くんのぬいぐるみだよ!」

「ありがとう、穂乃果ちゃん!」

白米くんとは今、子供たちに人気のご当地キャラクターです。

「次は私ですね……はい……」

「これは……本?……つて……」

「はい、これは花陽がこれからする1週間のダイエットのメニューです」

「い……1週間も!」

「はい……だって今日はたくさんごはんを食べたんでしょう?」

「うっ……」

「ね?」

「わかりました……」

半ば……というか100%無理やりにダイエットのメニューが手渡されました……

はあ……

「私からは……これだよ!」

「これは……ごはん屋さんのあのマークのキャラクター……」

「うん!私の手作りだよ」

「ありがとう!ことりちゃん!」

ことりちゃんからはごはん屋さんのあの名も無きキャラクターの手作りの小さなぬいぐるみを貰いました!



「ウチからはこれやあゝ」

「お守り……」

「せや！これは白米の神様を祀ってる神社のお守り……」

「あ……ありがとうございます!!」

「ふふっ……喜んでもらえてなによりや」

とつても嬉しいです！

1度行ってみたいです……

「私からはこれ……」

「わく……綺麗です……」

「ふふっ……先にごはんが付いてるのがポイントよ」

「ありがとうございます……大切にします!」

流石は絵里ちゃん……

明日から付けてみようかな?

「私からはこれよ……」

「これは……秋田のスクールアイドルの『あきたこまち』のサイン!」

「手に入れるの苦労したのよ」

「にこちゃん……ありがとう!」

「ええ……」

私の憧れのスクールアイドル……あきたこまちのサインだなんて……

もちろん、A—R—I—S—Eも憧れですよ!

「凜と真姫ちゃんからはこれにやー!」

「はい……」

「これは?」

「あなたの新曲よ」

「新曲?」

「『なわとび』って言うんだよー!」

「なわとび……この歌詞……」

「気付いた?」

「この歌詞はこの前、かよちゃんと話してる時に言ったことをヒントに凜が書いたんだ」

！」

「凜ちゃん……真姫ちゃん……ありがとう……」

嬉しかった……

この歌詞は……あのとき凜ちゃんと話してた……

μ sに入る前のこと……

アイドルに憧れてたけど……なりたかったけど……勇気が出せなかった……

例えるなら……

大きなわとびに入るのを拒む子供みたいな……かな？

「おれからは……まあ……わかってるだろうけど……ごはん屋1週間無料券だ」

「ありがとうございます！」

「花陽……」

「はい！」

そう言うとなオキくんは私の耳元に口を近づけて……

「ちゃんとダイエツトしろよ……」

「……はい……」

お見通しでしたか……

ダイエット終わってから使おうと思ってたのに……

まさか期限がダイエットと被ってるなんて……

「はい……小泉さん」

「ふえ!?!こ……これは……」

「私の連絡先よ」

「つ……ツバサさんの!?!」

「な……なんですって!?!」

「かよちゃん、よかつたね!」

「うん!でも……いいんですか……私なんか……」

「あら?約束忘れたの?」

「ふえ?」

「私とのデート権……」

「え?あれってさつき……」

「あれはただここに連れてきただけ…

またしましょうね!」

「……はい!」

あ…憧れのツバサさんの連絡先とデート権をプレゼントされました!

これは……もう……最高……です……

バタツ……

私は意識を失いました……

今日は最高の誕生日でした……

第92話（マジの香川ナオキ編章末回）「約5分でわかる！これまでのラブライブ！〜1人の男の歩む道〜」

『どうも、主人公の香川ナオキです！

今日はこれまでの「ラブライブ！〜1人の男の歩む道〜」を振り返ろうと思います！結構大雑把ですので前までに投稿したものを読んでくれた方がより楽しめるかと思えます！

話数順は無視しまして、時系列でいきます！

それでは早速いきましょう！』

おれは最初、大坂学園にいた。

そこでおれは生徒会長になったんだ。

おれはいつも通りの日常を過ごしていた…そんなある日、担任の先生に連れられて校長室に行った。

そこで言われたのは、隣の席のチンギスカンが近所の人を殴った噂があるとのことだった。

だがおれは高校の最初の友達であるチンギスカンを守りたかったからおれがやった事にした。

責任感が強かったおれは退学を願いだした。

クラスメイトのナニワオトメの斉藤と佐藤、そして…この時は知らなかったが、この事件の首謀者のミツヒデにも酷いことを言われたおれは人を信じなくなった…

そしてそんなとき、希から電話を貰った。あ、希とは絵里たち3年生が2年生のときに大阪に修学旅行で来たときに出会った……というか再会した。

こんなときは気づかんかったけど希とは小さい頃に会ってたんだよな……

あんどときと違って明るかったし、輝いてたからな……

やっぱり友達出来たからかな……

ちやんとおれが教えた『うち』使ってるみたいだし……

おっと、話を戻そうか……

で、希から送られてきたアドレスにアクセスするとそれは音ノ木坂学院の講堂だった……

それは、幼なじみの穂乃果、海未、ことりの3人の4 sのファーストライブだった。

でも観客はゼロだった……

でも、その講堂にはおれも合わせて10人の $\mu$ 、 $s$ がもうすでに揃っていたんだ。

その後も希に協力して $\mu$ 、 $s$ が9人になるのを手伝ったんだ。

おれはずっと…… $\mu$ 、 $s$ を見つめていた。

絵里とはそんなときに少しだけ喧嘩したけどな……あははは……

でも、ちゃんと仲直りできた……

絵里の $\mu$ 、 $s$ 加入とともに……

そして理事長から連絡があつて、音ノ木坂学院の“模擬男子生徒”をしてくれと言われたんだ。

模擬男子生徒というのは実際に男子生徒がいるのと同じようにする……つまりは音ノ木坂学院の最初の男子生徒はこのおれだ。

そしておれに課せられたのは、この音ノ木坂学院を共学にすることだ……

でも最初は迷っていた。

本当におれが行つていいのか……

飯に行つたとしても向こうの女子生徒たちは受け入れてくれるのだろうか……

だけど希のおかげでその迷いは無くなった……

オーブンキャンパスでの $\mu$ 、 $s$ のライブを見て、そして夏合宿のみんなの様子もみて



……

おれは決断した……

音ノ木坂学院に転入することを……

そして転入して穂乃果、海未、ことりと同じクラスだったから再会した。

絵里と希とは約1年ぶりに顔を合わせた。

そこで絵里と希からお願ひされたのが音ノ木坂学院生徒会に入ることと、アイドル研究部……μ、s に入ることだった。

おれはそれを承諾し、音ノ木坂学院の唯一の男子生徒で、音ノ木坂学院生徒会役員で、さらに100人目のμ、sメンバーとなった!

……ハラショー……

そして放課後にアイドル研究部部室へと行くと、小さい頃に遊んだことのある真姫、おれが小さい頃に”にこにーちゃん”と呼んだ笑顔の魔法使いにこ、それにこの時は気づかなかつたが花陽や凜とも小さい頃に会っていたんだ。

花陽は小さい頃にママの友達の家に行った時にアイドルの真似をしていて出会って、凜は公園で泣いているところを声をかけて出会ったんだ。

で、部活仲間のイズミから連絡があつておれは電話をかけた。

それでわかつたのがチンギスカンがミツヒデと共謀しておれを陥れたことだった。

おれはそれに深く傷ついた。

それで絵里にも恥ずかしいと見せちやつたし……みんなにも……な……

絵里の歌つてくれた『ありふれた悲しみの果て』……ほんまに心に響いたな……

そしてその翌日は文化祭の日だったんだ。

μ s は屋上にステージを作つて『No brand girls』を披露した。

だけど穂乃果が倒れてしまい、そしてμ s はライブ！出場を辞退した。

それからことがわかって、穂乃果はアイドルを辞めると言い、海未も

なにかと責任を感じてた。

他のメンバーたちも色々思っていることがあつたみたいだった。

そして穂乃果と海未は仲直りして、穂乃果はことりを連れ戻しに行き、そして最初は

ゼロ人だった講堂を満員にしてみた。

そのライブで披露したのは『START : DASH!!』……ファーストライブのときに

穂乃果、海未、こたりの3人が披露した曲だった。

そして打ち上げでワン〇ルにも行つたし……ああ……たしかこんとき絵里が寝

ちやつて部屋に運んだらあれこれあつて絵里と寝たな……／／／

そういやあんとき絵里と話してる時…

「月が綺麗だな…」

って言ったんだよなあ〜!!

今ならあの意味がわかる…:

てか歴史好きなのになんで知らなかったんだよ!!

うわあああああああああ!!!

もうええや…:次行こ、次…:

で、そのことを希とかに迫られて教えたんやけど…:はあ…:

そしておれはツバサさんに電話したんだ…:

理由は、1度A—R I S Eの人たちとライブをしたからだけ…:

そのライブがまさか“あれ”の開催で叶うとは…:

で、ここまでが『1st Season〜君を思い続けて〜』の内容だな…:

ま、若干次章のことも入ってるけど…:

じゃ、ここからは『2nd Season〜愛しい君と〜』の内容だな!

そしておれは部室でみんなに運営側…つまりはおじさんから届いた手紙で知った”第2回ラブライブ!”の開催とA—R I S Eと一緒にライブが出来ることを教えた。

みんなの驚いた顔が今でも思い出せる……ぷぷっ……

そして披露する曲が新曲でなければならなかったから真姫の別荘がある山に合宿に行くことにしたんだ！

そこで真姫、海未、ことりがスランプに陥って大変だったけど、無事に曲は完成！曲名は『ユメノトビラ』！

そしておれは絵里に告白すると心に決めて学校に行つたんだ。

そして帰り道……

おれは絵里に告白した……

なんと絵里もおれを好きだった。

そしておれと絵里は付き合い始めた。

その告白するところをみんなに見られたから次の日のメニューはちよつとキツくしてやった。

そして迎えた予選の日、おれたちはA—R—R—I—S—Eと一緒にライブをした。

A—R—R—I—S—Eの『Shocking Party』も凄かったな……

でもμ'sだつて負けてない！

そして披露した『ユメノトビラ』……

μ'sのライブはA—RISEに負けないぐらい凄かった……

それからおれは絵里に生徒会室に呼び出されてなにかと思えば、おれを次期音ノ木坂学院生徒会長に任命したいという。

なんと音ノ木坂学院の生徒会長は大体が指名だという。

絵里も先生からの推薦でなつたらしい。

希とか他のメンバーも指名されたのだという。

ま、もちろんおれはOKして、全校生徒の前でその旨を伝えて、さらに新しい生徒会役員も指名した。

それは、副会長に海未、書記にフミコ、会計には真姫とマチコを指名したんだ。

そしておれに予選の結果が知らされた！

結果は4位で予選決勝に進出できることになった！

みんなには放送で言ったけどな。

だけどそんなとき、にこの問題に差し掛かる。

にこは妹たちにおれたちをバックダンサーだとか召使いなんて言ってたんだ。

それはにこの悲しい過去に関係していた。

みんながアイドル研究部に入る前はにこを合わせて5人いたらしい。

だがにこ以外は真剣にスクールアイドルをする気はなく、それに付いていけないとー

人、また1人と抜けていき、アイドル研究部はにこだけになった……

おれたちはこのためにライブをする事にしたんだ。

そのために曲も作り、衣装も作り、屋上にステージを作った。

そして、にこはこころちゃん、ここあちゃん、虎太郎くんの前でライブをして、3人の前でμ'sの1人としてアイドルをしていくと言った。

そして披露したのは『にこぷり♡女子道』だった。

そしておれたち2年生は修学旅行で沖縄に行った。

だが、台風のせいで東京に帰れなくなつて残つていた1年生と3年生は6人でライブをすることになった。

そこで差し掛かったのは凧の問題。

よく知つてる……あんどき凧が泣いていたのはスカートを履いて行つたが、男子に馬鹿にされたから。

その時のことがコンプレックスになつてしまった……

そんな凧をコンプレックスを救つたのは花陽と真姫をはじめとするみんなだった。

凧はセンターを拒んでいたが花陽たちの作戦のおかげでそのコンプレックスを克服した。

そして『Love wing bell』ライブも大成功！



そんな辛い過去からは……永遠に……

でも、今はμ'sのみんながいる……

みんながおれの味方でいてくれる……

真姫の言葉で目が覚めたよ……

おれはここから”香川”と再び名乗り始めたんだ。

そして絵里と2人つきりにしてもらって、デートを再会した。

それで最後に屋上で夜景をみたんだ……

(怖かったけど……)

その屋上はデートスポットだったんだ。

そしておれと絵里の唇は近づき……

ファーストキスをした……

そしてハロウィンライブで『Dancing stars on me!』を披露した。

だが、そんなとき生徒会である時間が起きてしまう。

それは書道部の予算が会議をなしで承認されたことだった。

犯人は先生に予算表が出された日に生徒会室の鍵を取りに来た人を聞いたらすぐに



わかった……

マチコ……

翌日にマチコに問いただすとマチコは白状した。

そしてマチコがミツヒデの妹であり、さらに大坂学園スクールアイドルナニワオトメのリーダーであることが発覚した。

だからマチコはミツヒデの命令で動いたという……

そしてマチコは大坂学園に帰って行っただ……

でもマチコと約束した……

本戦に出場して、戦うことを……

そして予選決勝の曲を作ることにしたおれたちは希のアイデアでラブソングをする事にしたんだ。

そして知った希の過去と希の望みを……

それでみんなの言葉で作った曲が……

『Snow halation』だった。

それでみんなにおれが、s 結成を裏から見守ってたことを話した。

そして予選決勝の前夜、絵里と一緒に寝た。

絵里は緊張してたみたいだしな……

おれもだけど……あはははは……

おれたち生徒会メンバーは予選決勝の日は学校説明会があったから遅れていくけど間に合う予定だったのに……

大雪のせいでやばくなった……

おれと海末と真姫は必死で予選決勝の会場に向かったんだ。

でもやっぱり雪も強く、結構吹雪いてたな……

おれたちは吹雪に耐えながらも必死に前に進んだ。

そして、校門のところから見えたのは……

雪かきをしてくれてる音ノ木坂学院のみんなだった。

そしておれたちは走った。

音ノ木坂学院のみんなが作ってくれた会場までの道を……

みんなの声援に背中を押されながら……

会場に着くと、みんながいた。

おれは絵里に抱きついて……泣いた……

そして挑んだ予選決勝……

みんなで作った『Snow halation』を披露した。

その結果、μ'sが本戦に進むことが決まった。

あと少し……あと少しで優勝だ……

てか打ち上げの(闇)鍋パーティーは怖かった……

なんだってんだよ……あれは……

でもでも、絵里とクリスマスデートも行けたし!

……ナニワオトメも本戦出場を決めた。

そしておれはみんなにナニワオトメを紹介した……

ナニワオトメのこと……

マチコ以外のメンバーはミツヒデの女であること……

でもたしかにナニワオトメは強いがμ'sなら勝てる……

おれはそう信じてる……

そして年も明けて……あつ……あけましておめでとうございます!

で、餅つきをしたりしたけどこれが重要!

キャッチフレーズも決めた。

μ s の原動力となる言葉……

『みんなで叶える物語』

それから絵里の受験もあつて、あの日を迎えたんだ。

本戦の出場アイドルたちの顔合わせ。

そこにはその学校の生徒会長もいた。

そう……あのおれを陥れたミツヒデもチンギスカンもいた。

そしてそこでおれはイズミもおれを裏切った一人で、大坂学園のみんながおれを裏切ったと言うことを知った。

ミツヒデはみんなにも手をだそうとした。

絶対にもう会いたくなかったミツヒデとかに会い、さらに本当のことを言われ、とてもないほどのストレスを感じたおれは……その場で意識を失い、倒れた。

そして救急車で西木野病院のICUに運ばれたおれは意識がない中、夢を見ていた。ミツヒデと出会った日だとかの大坂学園で過ごした、辛かった日々を……

おれの頭にはあることがよぎっていた。

もしかして、μ s のみんなもおれのことを裏切るのではないかと……

そんなとき……

「ナオキくん……頑張って……穂乃果たちが付いてるから……」

「ナオキ……戻ってこなかったら私はあなたを許しません!!」

「ナオキくん……あの元気なナオキくんに戻ってよ……」

「ナオキくん……戻ってこなきゃ……いやにや!!」

「ナオキくん……また大好きなご飯、一緒に食べましょう!」

「ナオキ……あなたがいないと……練習は全然進まないんだから……はやく戻ってきなさいよ!」

「ナオキ……あんた……このままだったら許さないから……ちゃんと……役目を果たしなさいよ!」

「ナオキくん……あの眩しい笑顔……もう一度見せてや……」

「ナオキ……」

私のこともつと愛してよ……

誰よりも愛してくれるって言ったじゃない……

それに……

私たちはみんな……ナオキの味方よ……

一緒に……この10人で……一緒に……」

「一緒にラブライブ！で優勝しよう!!」

そう……あのみんなが……

おれを救ってくれた……おれを笑顔にしてくれたみんなが裏切るはずなんてない……

そしてオープンキャンパスの日からの夢を見て、そしたら……

「いち！」

「に！」

「さん！」

「よん！」

「ご！」

「ろく！」

「なな！」

「はち！」

「きゅう！」

暗かった空間から声が聞こえて、それから周りが白くなり、みんながこつちを見ていた。

みんなのあの衣装は……和服みたいなの……やつだった。

おれがやりたいこと……

みんなと一緒にラブライブ！で優勝する！！





おれたち2年生と1年生は各自でその答えを考えた……

そして翌日、みんなが答えを言い合った。

そしてたらみんなが同じだった。

それでそれを3年生に伝えるために翌日に遊びに行くことにした。

いろんなところに行つて楽しかった……

そして穂乃果が行きたいところ……海に行つた。

そこで答えを言つた。

「「「「「大会が終わつたら……μ sは……おしまいにします!!!」」」」」

それが7人で決めた答えだ。

μ sはこの10人だけ……

駅で、みんな耐えていた涙を流した……

そしておれたちは予選決勝のために練習をはじめた。

必ず優勝すると心に決めて……

そして予選決勝前日、おれたちは最後の練習を終えて、学校に泊まることにした。

いろいろあつたけど、海未に枕投げで勝負したんだ!

ほんで勝つた!

それでみんなが寝付いたあとにおれは予選決勝の曲の準備をした。  
サプライズも用意してな……

そしておれたちはみんな同じ夢を見たんだ。

そしてついに……本戦の日!!

披露したのは新曲……『K i R a | K i R a S e n s a t i o n !』

おれのサプライズとは、間奏のときにスクリーンに映したひとりひとり  
の写真と名前、最後には全員の集合写真……

ラストライブにびったりだ……

そしておれたちはステージ裏で喜びあったり、抱き合ったり、泣いたりしたんだ。

これで……終わった……おれたちのラストライブ……  
……  
……  
……  
……

そんなとき聞こえてきたのは……

「アンコール！アンコール！アンコール！アンコール！………」

観客の人たちや審査員の人たち……

会場全体からのアンコール……

そしておれたちはそのアンコールに応えた。

おれたちにとって……

10人にとってはじめての曲……

『僕らは今のなかで』

そしておれたちが、sはラブライブ！で念願の優勝を果たした！

それから記念撮影のあと、ミツヒデが控え室に来た。

そしてミツヒデが優勝旗やみんなにまで手をだそうとした……

おれは………

これまでにないくらいに怒った……

そしてミツヒデは元のミツヒデに戻り、ミツヒデやチングスカンやイズミたちとも友達になった……

そして迎えた卒業式の日……

おれは希に告白された……

なんであのタイミングだったのか……

希だったからこそかな……

そして卒業式で送辞の最後に『愛してるばんざーい!』を歌い、

答辞では『Oh, Love & Peace』が歌われた。

そして最後に、みんなでおれが作った曲……

『SENTIMENTAL Steps』を歌った。

そうして卒業式は終わった。

そしておれはことりたちの陰謀によって執事の格好をさせられた。

ま、目的は……………

アイドル研究部のお別れ会なんだがね。

そして校舎をまわったりした。

音楽室では『きつと青春が聞こえる』をうたったんだ。

そーいやおれがアルパカと話せることってみんなに言っただけじゃなかったな……………

あと海未のパ……………これはやめとこ……………

で、屋上では『どんときもずっと』をうたったんだ。

屋上から帰り、生徒会室で”あいつ”と話した。

『まだ終わりじゃないぞ……………』

そしておれは……………

「『誓いの石』……………覚えてるか？」

「え？……………うん……………あの綺麗な石ね」

「ああ……………あれの意味は……………『誰よりも愛する』……………」

「うん……」

「でも……もう一つ……意味があるんだ……」

「もう……一つ？」

「ああ……それは……『永遠の愛を君に誓う』……」

「え……」

そしておれは誓いの石をつけた指輪を出した。

「おれと結婚してください!!」

「……はい！」

私も……よろしくお願いします！」

おれは絵里にプロポーズをしたんだ……

そして……校門を出ようとしたおれたちに新たなる知らせが……

『ということ、この物語の総集編でした！』

ま、これを読めばある程度の流れは掴めるのであとは個人編を読んでもらえばこの物語を読んだとほぼ等しいですよ！

でも…読んでくれた方がもつと面白くなります！

そして次回からはいいよ…:…ですよ！

それでは、これからもよろしくお願いします!!』

次回、新章へ続く……

The school idol movie NEW

STAGE

## 第93話「新しい知らせ」

前回のラブライブ！

卒業式を終えて、お別れ会をした私たち！

そしてその後私はナオキに生徒会室に連れられて……

「おれと結婚してください!!」

「……はいー!」

ナオキは私にプロポーズしたの。

私の答えはもちろんOK!

そして……なにやら新しい知らせが……



「はわわわわわわ……」

花陽は校門から走って部室に戻り、パソコンの“あるサイト”をみて驚いていた。

ガチャ…

「花陽ちゃん！」

そして穂乃果が入ってきた。

「ドウ……ドウームですう……」

「ドウ……ドウーム？」

そして続々とみんなが入ってきた。

すると花陽は立ち上がって……

「……ドーム大会です!!!」

「「「「「ドーム大会!」」」」」」

「そうなんです! ラブライブ! 運営委員会が”第3回ラブライブ!”の東京ドーム…通称秋葉ドームでの開催を検討しているんですう!」

「東京ドームっていつも野球やってる?」凜は言った。

「あんな大きな会場で!」絵里は言った。

「私たち…出場できるの!」にこは言った。

「いやいや、ウチらはもう卒業したやん!」希は言った。

「今月まではまだスクールアイドルよ！」

「はあ…そういうがな、恐らく開催は3月以降だ…」スクールアイドルとしては「出れないだろ？」

しかし…東京ドームか…結構な広さだな…観客も多分本戦の会場の10倍ぐらいかな？」

「……………10倍!……………」

みんなが声を合わせた。

「やっぱり……ね」

盛り上がっていると理事長が部室を覗いた。

「あれ?理事長…」ナオキが言った。

「お母さん…」ことが言った。

「その顔は聞いたようね…次のラブライブ!のこと…」

「はい!本当にやるんですか…ドームで!」穂乃果は言った。

「まだ確定ではないけどね…そして、s宛に知らせがきたわ…はい、どうぞ」

「ありがとうございます……」

そして理事長はナオキに封筒を渡した。

それにはかの有名なあの国の、ある国から送られた像…自由の女神像の切手が……

「さて……これ英語だ……」

「「「「「「ええ!」「」」」」」」

「ちよ……近つ……／＼／＼／＼」

みんなはナオキに近づいて、その手紙を覗いた。

「これって……まさか……」真姫は言った。

「……まさか……」そして穂乃果も……

「そう……あなたたちに行ってもらうのは……アメリカよ!」

「「「「「「アメリカ!」「」」」」」」

みんなは驚いた。

だが、一番驚いていたのはナオキである。

(なんだよ……アメリカに行ってもらうって……こういう事か……)

「ナオキ……どうかしたの?」絵里は言った。

「いや……おれ実は明日おじさんに呼び出されて……多分この事だろうな……」

「でも……アメリカですか……」海未は言った。

「不安か?」

「ええ……少し……」

「まあ……おれも海外に行くのは初めてだが、スクールアイドルの為だ……頑張ろう!」

そしてみんながコクリと頷いた。

「じゃ、出発は来週よ。それまでに準備とかしておきなさいね」

「「「「「はい！」「「「「「」」」」」」」」

そして理事長は理事長室へと戻って行った。

「……みんな……」 ナオキは言った。

「どうしたの？」 ことりは言った。

「ラブライブ！が終わったら、sはおしまいになると言った……だから抵抗があるのもわかる。」

でもさ、最後にいっちょスクールアイドルの為に一肌脱ごうぜ！」

そしてみんなは顔を合わせて頷いた。

「よし、それじゃあ明日もここに集合な！おれは本部に行ってからこっちに来るから」

「「「「「はい！」「「「「「」」」」」」」

そしてみんなは解散するのだった。

ナオキと絵里はマンションの前まで来ていた。

絵里はさつき付けた誓いの石が付いた指輪を見ていた。

「またお父さんとかに挨拶しなきゃな……」

「ええ……ナオキの方にもね」

「ああ……まずは亜里沙ちゃんか……」

「そうね……ふふっ……きつと喜ぶわよ」

そして2人は絵里のマンションの部屋の前まで来た。

ガチャ……

「ただいまー」

「おじやましませーす」

「あ、ナオキさんいらっしやいー！」

ドアを開けると亜里沙がリビングから出てきた。

「よお、亜里沙ちゃん」

「あれ？お姉ちゃん……指輪……」

「ふふっ……気づいた？」

「亜里沙ちゃん……おれな……絵里にプロポーズしたんだ……だからこれからは、お義兄

さん」って呼んでもいいで

「……ほんとうですか!？」

「ああ……」

「ささ……上がってください！お義兄さん！」

そして3人はリビングへと向かった……

ガチャ……

「やあ……絵里」

「卒業おめでとう……」

「パパ!?ママ!？」

「ハラショー……」

なんとそこには絵里のお父さんの秋良とお母さんの里美がいた。

「驚かせてすまなかったな」

「大事な娘の卒業の日なんだから……ちよつとサプライズ……ね」

「ナオキくんもよく来たね……」

「はい、それで……少しお話があるんですが……」

「ん？なんだ？ま、座りなさい」

「はい」

そしてテーブルを挟んで秋良と里美とナオキと絵里が座った。

「お父さん、お母さん……実は……さつき絵里に……プロポーズしました……」  
「……………」

絵里の両親は先程まで笑っていたがナオキがそう言うと言うと真剣な表情をした。

「なので……おれと絵里の結婚を認めてください！」

絵里を……娘さんを……

僕に下さい!!!」

ナオキはそう言つて頭を下げた。

「私からもお願いします！」

ナオキと結婚したいの！」

絵里も頭を下げた。

「……………」

絵里の両親は黙つたままだった……

沈黙の時間がしばらく続いた……

すると……

「ふっ……頭を上げなさい……2人とも……」秋良は言った。

「えっ……………」

「……………2人の結婚を認めよう……」

「私も同感よ……」里美も言った。

「パパ……ママ……」

「お父さん……お母さん……」

「ナオキくん……お義父さんとお義母さんと呼びなさい……」

「はい！お義母さん」

「ふふっ……それじゃあご飯にしましょうか」

「ママ、私も手伝うわ！ナオキも食べるでしょう？」

「ああ！」

里美と絵里はご飯の準備を始めた。

「そうだナオキくん……」

「はい？」

「絵里との婚約に当たって条件がある」

「条件？」

「一つは……必ず絵里を幸せにすること、次に……絵里を一番に思うこと、

次に……絵里を大事にすること……そして……」

「そして？」



「お前たちには同棲してもらおう」

「ど…同棲?!」

秋良から出された最後の条件は…なんと絵里とナオキとの同棲だった。

「ちよつと待ってよパパ! // // //

ママ…ママはいいの!?!」

「ええ…これは秋良くんと決めたことよ?」

「亜里沙はどうするのよ!?!」

「一緒に住めばいいじゃない」

「ハラシヨー！お義兄さんとお姉ちゃんと3人で暮らすの!？」

「ナオキくん…どうする？」

「……………喜んで!!」

「もう…わかつたわよ…いつから同棲すればいいの？」

「明後日からだ」

「明後日!？」

「ああ…確かナオキくんのところは広がったよな？」

「はい…そこしか空いてなかったの」

「ならちようどいいじゃないか！」

明日、準備をしておきなさい…あと大家さんにも話とかしなさいいけないぞ」

「わかりました！今から行つてきます！」

そう言ううとナオキは大家さんの元に行った。

「ちよつとナオキ〜！もう……………」

「ふふつ…それだけ絵里と一緒にいたいよ…」

「ははは…ナオキくんになら…絵里を任せても安心しそうだ」

「……………うん…／／／／」

そしてご飯の準備が終わった頃……

「はあ……はあ……OK出ました！」

「そうか……ならよかった……ささ、座りない」

「はい！」

そして5人はご飯を食べた。

「いやあくナオキくんに任せればおれたちも安心するよ」

「そうですか？」

「ああ……絵里の夢も叶ったしな……」

「ちよつとパパ！／＼／＼／＼」

「夢？」

「ええ……昔絵里に大きくなったらなになりたいてって聞いたたら、『私、大きくなったたらナオキくんのお嫁さんになる！』って言ったのよ」

「そ……そうなのか？」

「う……うん……／＼／＼／＼」

「だからすぐにOKできたんだよ。」

里美さんと決めてたんだ……もしナオキくんが絵里にプロポーズして挨拶に来たらO

Kしようつて」

「そうだったんですか…」

「だから絵里をよろしく頼んだぞ…」

「はい！」

「私たちは明後日にはロシアに帰るからね。亜里沙は一緒に帰る？」

「うん…私、スクールアイドルになって頑張らないといけないから、雪穂と練習するんだ！」

「そう…頑張るなさいよ」

「うん！」

「それでは…おれは帰りますね…」

じゃ、また明日な」

「ええ…また明日…」

そしてナオキは自分の部屋に帰っていった。

「さ、私も準備しなくちゃ！」

「食器とか少しはロシアに持って帰るわね」

「わかった…私は明日学校に行くからね」

「なんでだ？」

「ああ…アメリカに行くことになったからその予定を決めるのよ」

「そうなのか!?ライブはするの?」

「どうなのかわからないのよ」

「そうか…アメリカか…ま、楽しんでおいで」

「うん!さて、準備しなくちゃ!」

そして絵里と亜里沙は自室へと向かった。

「大きくなったな……」

「そうね……」

秋良と里美は今の絵里の姿を小さい頃の絵里の姿を重ねた。

そして翌日、ナオキの姿はラブライブ!運営委員会本部にあった……

次回へ続く……

## 第94話 「試練と準備」

前回のラブライブ！

新たな知らせを受け取ったおれたち…

そこでおれたちがアメリカに行くことがわかった。

そして亜里沙やお義父さんやお義母さんに絵里にプロポーズしたことを報告。

お義父さんたちはおれと絵里の結婚を許してくれたんだ。

それにお義父さんからの条件が絵里との同棲だった。

おれはそれを引き受けて、翌日ラブライブ運営委員会本部へと足を運ぶのだった。

ラブライブ！運営委員会本部……

会議室……

ガチャ……

「失礼します……」ナオキは会議室に入った。

「来たかナオキ！」晋三は言った。

その会議室には晋三のほかに副会長の田中など言うなれば重要ポストの人たちと

……

「お久しぶりでーす」

「なんでアリスさんがいるんですか……」

そこには目黒学園の元生徒会長のアリスもいた。

「あ、ご卒業おめでとうございます」

ナオキは頭を下げた。

「サンキューでーす」

「で、なんでいるんですか？」

「それはだな……」

お前たち々 sにはアメリカに行ってライブをしてもらうからだ」

「ライブを？」

「ああ…アメリカのテレビ局……このアリスさんのお父さんが日本のスクールアイドルを紹介したいと言ってきてな…そこでラブライブ！優勝者の々 sに行ってもらおう  
と思っ  
てね」

「アリスさんのお父さんってまさか……」

「イエス！テレビ局の社長です！」

「マジすか……」

「ああ……だからアリスさんには同行してもらおう……ちように帰る予定だったみた  
いだしな」

「そうなんですか!?!」

「イエス！大学はハーバードに通うので」

「なるほど………つて……ハーバード!?!」

「イエス！」

「ハラショー………あと、おじさんに言う事が……」

「どうした？」

「おれ、絵里にプロポーズして親御さんにも許可して貰った」

「そうか……おめでどう」

「コングラチュレーション！おめでどうございます！」

「ありがとうございます………／／／／／」

「さて……まだ話は残ってるんだ……」

「あ……言ってたな………おれの将来のことってなんなんだ？」

「それはな………お前を、次期ラブライブ！運営委員会会長に任命する！」



「なあーんだそんなことかよ。」

おれを次期会長にかゝ」

そして沈黙が続いた……………

「…つて…………えー……!!!」

「引き受けてくれるか？」

「ちよ……ちよつと待ってくれ！おれはまだ高校生だぞ!？」

「だから卒業してからだつて」

「それでもまだ18だ！そんなおれに…………」

「それはここの全員の意見だ……いいだろう？」

「……………条件があるんだろう？」

「おお！よくわかつたな！

そうだ……その条件が…………」

「アメリカでのライブの成功……」

「わかつてるじゃないか……」

アメリカでのライブを成功させて、さらに第3回ラブライブ！の東京ドーム開催を叶えることが、お前に課された条件だ。

難しいと思うがな……」

「その若さで次期会長になるにはそれができて当たり前……つてことか？」

「その通り……」

「このラブライブ！運営委員会の会長というのはいわゆる社長だ……それぐらい出来て当然だろ？」

「確かに……わかりました！」

おれ……必ずアメリカでのライブを成功させて、東京ドーム開催を叶えさせてみせませう！」

「よし、これで今日の話は終わりだ」

「はい、これが書類です」

「ありがとうございます……アリスさん」

ナオキはアリスから書類を受け取った。

「飛行機の席、ホテルのこと、出発する日時とかも書いてあるので読んでくださー

い」

「わかりました……では失礼します……」

ナオキは会議室をあとにして、音ノ木坂学院へと向かった。

「本当に大丈夫なんですか……あんなに若い子に任せても……」

「大丈夫さ………なんたっておれの………甥だから………（甥………か………）」

晋三はどこか寂しそうな……辛そうな………そんな目をしていた。

音ノ木坂学院………

アイドル研究部部室………

ガチャ………

「お待たせー」

「あ、ナオキくん来た！」穂乃果は言った。

「どんな話をしたのですか？」海未は言った。

「ああ………まずは今回はアメリカでライブをする！目的は第3回ラブライブ！をドームで

開催するためだ。

それに…アメリカのテレビ局がスクールアイドルを紹介したいんだとき。

ほんで、その社長が目黒学園の元生徒会長のアリスさんのお父さんだからアリスさんも同行することになった」

「話はそれだけだったの？」 絵里は言った。

「えつと……あと一つあるんだけど……」

「なんだ…あるんならはやく言いなさいよ」 にこは言った。

「えーつと……」

「「「「「「「ん？」」」」」」」」

みんなは言う事を戸惑うナオキを不思議に思った。

「実は…このアメリカでのライブとラブライブ！のドーム開催が叶ったら、

おれ、ラブライブ！運営委員会の次期会長になるんだ……」

「なーんだそんなことか」 穂乃果は言った。

「もつと深刻な問題かと思ったにや」 凛は言った。

「そうだよな…あははははは……」

「あははははははは……ははははは……は……つて……」

「「「「「「えー……!!」「」「」「」」」」」」

「お……驚きすぎだつて!」

「そりやあ驚きますよ!」

だつてあのラブライブ!運営委員会の会長ですよ!?

ラブライブ!運営委員会の会長と云えば、会社の社長と同じ……スクールアイドル界のトップに君臨する職……

しかもナオキくんはまだ未成年……

その歳でラブライブ!運営委員会会長になるなんて……凄いです……」花陽が凄い勢いで言った。

「い……いきなりウチらにかかるプレッシャーが……」

「まあ……そう重く感じなくても大丈夫だつて!」

みんなは楽しんでライブをすればいいんだ。

それがきつと、ドームも……おれの次期会長職も……絶対に叶うよ!」

「……そうだね!じゃあ早速、曲を決めよう!」穂乃果は立ち上がつて言った。

「その前に……」

「ほえ?」

「その前に、アメリカに行くにあたつて決めなきやいけないことがたくさんあるでしょ

う？」絵里が言った。

「そうね…パスポートとか飛行機の予約とか…」真姫は言った。

「向こうでの予定も決めないといけませんしね」海未は言った。

「あ、飛行機はもう予約されてるぞ」

「……………え!?!……………」

「いや…アメリカのテレビ局の方が飛行機の席とホテルは準備してくれてるってさ。詳しいことはまた連絡しなきゃいけないんだけど」

「ハラショー……………」

「す……凄いな…アメリカのテレビ局って……………」

「よし、そうと決まれば役割分担だな！」

まずは真姫、海未、ことりはそれぞれ曲の作業に取り掛かってくれ。

絵里と希とおれはしおり作りだ。

今回は時間がほんまに無いからそれ以外は曲の作業を手伝ってくれ」

「……………はい……………」

そしてみんな作業に取り掛かるのだった。

しおり組は生徒会室で作業をしていた。

「えつと…持ち物はパスポートと飛行機のチケットと……」

「確かアメリカにはこんなのがあつたなあ」

「あれ？希つてアメリカ行つたことあんの？」

「そりやで」

「羨ましいな……」

「えつへん！」

「もう…2人とも喋つてる暇があつたら作業して」

「は〜い」

「えつと…なにを話せたらいいかしら……自己紹介とか……」

ナオキは真剣に作業をする絵里の姿に見惚れていた。

「……ん？ナオキ、どうかした？」

絵里は自分を見ていたナオキを見て言った。

「え?!いや……別に……// // //」

「そり?」

そり言うとうと絵里はまた作業に戻つた。

(よし！集中だ……集中……)

ナオキも作業に戻った。

(よし……ちよつとイタズラしとこか……)

「あ、ちよつと電話してくるわー」

「あいよー」

ガチャ……

そして希は廊下でアメリカのホテルのホームページから部屋の希望を出した……ナオキと絵里の部屋の……

(ふふふ……驚く顔が目浮かぶ……)

夕方……

「よし！完成……」



ナオキは体を伸ばした。

「お疲れ様……」

「おつかれ〜」

「さて、あとはこれをみんなに配るだけか」

「そうね」

「でも、またパスポート持っていない人はパスポート作りに行かないといけないしね」

「そつか……またそれも連絡するか」

「さ、部室へ戻りましょう」

3人は部室へと戻るのだった。

ガチャ……

「ただい……ぐはっ!!」

「ナオキ（くん）!?!」

ナオキが部室に入るとナオキの顔になにかが当たってナオキは倒れた。

「あ……」

穂乃果と凜は声を合わせた。

「だから言わんこつちやない……」にこは呆れて言った。

「あはははは……」ことりは苦笑いしている。

「なにこれ……扇子？」絵里はナオキに当たったものを拾って言った。

「うん！今回の曲に使うんだ！」穂乃果は言った。

「面白そうやん！」

「でしよでしよ！だから……」

「……だから？」

「ひっ……」

「ナ……ナオキ……大丈夫？」絵里は言った。

「ああ……大丈夫だよ……」

それより……穂乃果、凜……」

「は……はい！」

「お前たちはこの扇子でなにをしてたのかな？」

「えつと……ダンスを考えてて、それですこし踊ってたら扇子が飛んで……」

「そしたらナオキくんがタイミングよく入ってきて……」

「そうにや！あれはナオキくんがタイミングよく入ってくるから……」

「凜ちゃん！」

「にゃ!？」

凜は口を抑えた。

「ほほう……そうかそうか……おれが悪いのか……へく……そうかい……ふふふふふふ……」

「ナ……ナオキくん……怖いにや……」

「穂乃果たち……どうなるの……」

「にことことりは作業に戻って……」

絵里と希も2人を手伝っててくれ

「「了解……」」

「みんな穂乃果たちを見捨てるの!？」

「そんなあ……」

「お前から正座しろ」

「はい……」

2人は正座させられて1時間ほど説教されたのだった……



「明日から……か……」

ナオキはそう呟いて部屋へと戻るのだった。

翌日、ナオキの部屋に絵里と亜里沙が引越すため、その作業が行われていた。

「絵里……ベッドは持っていかないか？」

「うん、ナオキのベッドで2人で寝れるでしょう？」

「うーん……そうだな……」

「……はい!？」

「え、そうじゃないの？」

「初耳なんですけど!」

「でもパパが別にいいって……」

「ちよつとお義父さん!!」

「どうしたんだ？」

ナオキは絵里の自室の前を通った秋良に声をかけた。

「お……おれと絵里って……今日から一緒のベッドで寝るんですか!？」

「なんだ……嫌か？」

「い……嫌ではありませんがね……」

そういう事はもつとはやく言ってくれれば……」

そしてナオキは絵里を見た。

すると絵里は目をウルウルさせてこちらを見て……

「ナオキ……私と寝るの……嫌？」

「OKわかった」

即答である。

「……ありがとう!」

絵里は。ペアと笑顔になって言った。

「お……おう……／／／／」

そして昼頃に作業が終わったあと、ナオキの部屋のリビングに秋良、里美、亜里沙、絵里、ナオキが座っていた。

「いやあくこれで一安心だ！」秋良が言った。

「これで安心してロシアに帰れますね」里美が言った。

「パパ、ママ、次はいつこっちにこれるの？」亜里沙は聞いた。

「そうだな…絵里の結婚式には絶対帰ってくるよ」

「もう…パパ！／／／／」

「ふふっ……じゃあナオキくん、絵里のこと頼みましたよ」

「はい！お義母さん！」

「ほらナオキ！そろそろ準備しないと」

「あつ…もうこんな時間か！はやく準備せな！」

「あ、ナオキくんちよつと待ってくれ」

「はい？」

秋良はリビングを離れようとしたナオキをとめた。

「これを……」

そしてナオキになにかを渡した。

「これって……」

「ああ……いつ帰ってこれるか分からないから今、渡しておくよ。でもまだ出せないけどな」

「まあ……」

「あととは出せるときになったら君の両親に了解を取りなさい」

「……ありがとうございます！」

そう言うとなオキはリビングを出た。

「渡したのね？」

「ああ……」

「ん？パパ、ママ……何の話？」

「しばらくしたらわかるよ」

「よし、絵里……行くぞ」



「ええ！」

「気をつけてな」

「また次帰ってきたときね」

「はい！」

「うん！いつてきます！」

そしてナオキと絵里は音ノ木坂学院へと向かった。

音ノ木坂学院…

アイドル研究部部室…

「よし、これでみんな集まったな！」

それじゃあ今からしおりを配るから目を通すように」

「「「「「「はい」「」「」「」」」」」」

そしてナオキはしおりを配った。

「とりあえずみんな表に名前は書いとけよ。」

まず1ページ目、注意事項と持ち物リストは必ず見ておくように!

次に2ページ目、飛行機の座席と部屋割りだ。色の付いてるところがおれたちの座席だ。

行きはEの左から希、おれ、絵里、真姫、海未。ほんで次の列にEからここ、花陽、凜、穂乃果、ことりだ。

帰りはGとFに上の列から絵里、おれ。次の列に凜、真姫。次の列にことり、穂乃果。EとDの2列目に海未、花陽。その次の列にここ、希だ。

ホテルの部屋は海未とことり、希と真姫、凜と花陽、穂乃果とここ、絵里とおれが一緒の部屋だ。

3ページ目と4ページ目はタウンマップだ。

5ページ目は食べたいものリストとお土産リストだ。

最後は「簡単な」英会話を載せてあるから覚えとけよ。特に凜!」  
ナオキは凜を見て言った。

「にやあ?!が…頑張るにや……」凜は震え声で言った。

「あゝ、ナオキくんちゃんと書いてくれたんだゝ」ことりが食べたいものリストを見て言った。

「チーズケーキだろ?ちゃんとご志望通りにしたで」

「ありがとう」

「もういい？早く曲作り再開したいんだけど」真姫は髪の毛をクルクルしながら言った。  
「ああ…それじゃ、作業に戻ろうか」

「「「「「はい！」」」」」」

それから曲作りや衣装作りの作業はどんどん進んだ。

「これなんだけど…どうかな？」ことりはスケッチブックをナオキに見せた。

そこには全員分の衣装のスケッチがされてあった。

「お〜！いいんじゃないか？」

でも、海末のこれ…なに…ナオキは苦笑いで言った。

「えへへへ、これも可愛いかなって」

「そ…そうだな…（なんかポン・デリングみたい…とか言わんほうがええな…うん…）」

「ふう……」

真姫と海未は息をはいた。

「おつ、終わったか？」ナオキは待つてましたのごとく言った。

「はい……一度読んでみてください」

「私は一度通しで弾いてみるわ」

「OK！」

ナオキは海未から歌詞カードを受け取り、真姫はピアノの方へ向かった。

「……」

ナオキは真姫が弾いているピアノの音を聞きながら海未の書いた歌詞を読んでいた。  
海未は出来はどうかとナオキの顔を伺っている。

「……どう？」

真姫は弾き終わると言った。

「どうでしょう？」

海末も真姫に続いて言った。

「……もうちょい延ばしてみたらどうかかな？」

「例えば？」

「うくん……サビをもう1回歌えばいいと思うんだよなあ〜」

「サビを……ですか？」

「ああ……ラストでセンターのソロでサビの最初の方を歌って、途中からみんなで……的  
な？」

「真姫、大丈夫ですか？」

「まあ……ピアノで弾いてもどうせナオキがベースの音とか入れるんだし……」

「それもそうだな……」

そう、ナオキが来てからは、μ sの曲のベースなどの音はナオキが入れているのだ。

「よし、ほんならあとはおれに任せてくれ。」

まずはみんなを集めてパート決めだ！

「ええ！（はい！）」

μ sの歌のパート決めはナオキが来てからは、1度全員がソロで歌って、ナオキが  
感覚で決めている。

「よし、パート決めするからみんな歌詞見といて〜！

まずはセンター決めるからサビを覚えること！」ナオキはみんなを前に言った。

そしてみんなが続々とサビをソロで歌っていった。

「（上手い……でもセンターにぴったりじゃないな……）じゃ、最後は絵里だ」

「ええ……」

そして絵里は目を瞑って息を吸って……

「Ah 『もしも』は欲しくないのさ

『もつと』が好きAnger

翼をただの飾りにはしない

Ah 『もしも』は欲しくないけど

『もつと』は好きAnger

明日じゃない

大事なときは今なんだと気がついて

「このころの羽ばたきはとまらない」

「!!!」

ナオキは絵里の歌声に衝撃を受けていた。

「ど……どう？」

絵里は少し不安そうに言った。

「……いい……いいよーハラショーー！」

センターにびったりだ！

よし！センターは、絵里だ!!」

「わ……私!？」

絵里は自分が選ばれたことに驚いた。

「ふん……いいんじゃない?」

私も……その……絵里の声に惹かれたし……／／／にこは照れながら言った。

「そうやね……えりちがびったりやと思う」希は言った。

そしてみんなも頷く。

「で、ことだが……絵里、やってくれるか?」

絵里は迷っていたがナオキがそう言うのと決意した表情で……





## 第95話「初めての夜」

前回のラブライブ！

アメリカでライブをすることになった私たち！

それまでの準備を始めていって、ついに曲のパート決め！

センターは絵里ちゃん！

衣装も和風をイメージしたものにしたんだあ。

そして私たちは練習を、ナオキくんはベースの音とかを入れる作業を始めたの！

「よし、完成〜と……」

「つてもう夕方か……」

ナオキは背伸びをして窓の外を見ると夕日が辺りを照らしていた。

「あ、ヘッドホン外さな……」

ナオキはヘッドホンをまだしていたことに気づき、ヘッドホンを外した。

「あら、終わったかしら？」

するといつの間にか隣にいた絵里がナオキに声をかけた。

「ん？うわあ!？」

ナオキは絵里の方を見ると驚いた。

「ふふっ…そんなに驚く？」

「そ…そりやあ驚くだろ…」

「ふふふっ…真剣な顔したナオキ…かつこよかつたわよ…」

「お…おう…」

ナオキは絵里のセリフに顔を赤くした。

「あ、照れてる…かーわいい」

ツン…

そう言ううと絵里はナオキの頬を人差し指で突つついた。

「……………」

そ…そう言えばみんなは？れ…練習終わったのか？」

「ええ…みんなとつくに帰ったわよ？」

「マジか!?絵里は待っててくれたのか？」

「ええ……そりゃあ……ナオキは私の……」

んもう！早く帰るわよ！／＼／＼」

絵里はなにか言いかけるといきなり立ち上がって言った。

「はいはい……」

ナオキも荷物をまとめて、絵里と部屋を出た。

帰り道……

「なあ……絵里……」

ナオキは力が抜けたような声で言った。

「ん、なに？」

「今日の晩飯なに？」

超腹減ったんだけど……」

「ナオキはなにがいい？」

「うくん……肉がいい！」

「……それならビーフストロガノフでいい？ちょうど牛肉切ったもの置いといたから」

「全然ええよ！うゝ…腹減った……」

「ふふつ……それじゃあ早く帰りましょう」

「ああ……」

そんなラブラブでまるで夫婦（…というかまさにそうなるのだが……）の会話を他のメンバーは後方から聞いていた。

「ねえねえ…なんで2人は晩御飯の話をしてるの？」

穂乃果は小声で言った。

「一緒にご飯食べるからじゃないのかなあ？」

ことりは小声で言った。

「それは何回かあるでしょう？でも…なにか変よ……」

真姫は小声で言った。

「あの2人……なにか隠してるわね…」

にこは小声で言った。

「とりあえず…2人を追いかけるでえ」

希は小声で言った。

そしてみんな2人の後をつけた。

2人はマンションに入った。

「ここは……いつものマンションにや〜」

凜は小声で言った。

「本当になにか隠してるのかな？」

花陽は小声で言った。

「はあ……そんなこと2人に聞けば早いでしょう？なんでつけるんですか？」海未は小声で言った。

「そんなの、2人に聞いても話さないに決まってるわ……だから証拠を先に抑えるのよ……」

「ここは小声で言った。

「さ、追いかけるでえ〜」

希がそう小声で言うともみんなはマンションへと入って行った。

ガチャ……

「ただいま〜」

「おかえりなさい〜い！」

バタン…

「え!? 2人ともナオキくんの部屋に入ったよ!？」

穂乃果は小声で言った。

「しかも亜里沙ちゃんの声も聞こえたような……」

凜は小声で言った。

「「「「「まさか!」「「「「「」

みんなは声を合わせた。

「これは明日問い詰める必要があるやん……」

「とりあえず今日は帰りましょう…証拠を抑えたからまた明日聞けばいいんだし」  
希とにこがそう言うのとみんな帰って行った。

ガチャ……

「……みんなやつと帰ったか……」

「これは明日大変そうね……」

「ま、今更隠せないし……聞かれたら話すか……」

「そうね……さ、ご飯作るわよ」

「ああ……」

バタン……

どうやらバレてたようでした……

「ん？お義兄さん、誰か来てたんですか？」

亜里沙は言った。

「いや……誰もいないよ……さ、ご飯だご飯！」

ナオキはリビングへと向かおうとした。

「その前に！」

「ん？」

「その前に着替えてきなさい！」

「は……は……」

ナオキは自室……今やナオキと絵里の部屋へと向かった。  
絵里と亜里沙はリビングへと向かった。

リビング……

ガチャ……

「着替えてきたで〜」

ナオキは着替え、リビングへと入った。

「よろしい……ご飯出来るまで待つててね」

絵里はキッチンから言った。

「お……おう……／＼／＼」

ナオキはときめいた。

キッチンで料理する絵里に……

そのエプロン姿に……

そしてご飯が出来て、机にビーフストロガノフなどが並んだ。



「「いただきまーす！」」

そして3人はご飯を食べ終わり、お風呂に順番に入って行った。

「じゃ、おれから行かせてもらおうわ…」

「わかったわ」

「どうぞどうぞ〜」

ナオキは先に風呂に入った。

その後ナオキが風呂から上がると亜里沙が入り、その後亜里沙が風呂から上がると絵里が入った。

「ふう〜気持ちよかった……」

絵里が風呂から上がり、髪を拭きながらリビングに入った。

「はい、終わりつと……」

「ありがとうございます！お義兄さん」

ナオキと亜里沙はソファに座っており、ナオキの手にはバスタオルが合った。

「ん？何してたの？」

「いや、亜里沙ちゃんの髪濡れててさ、それで拭いてたんだよ」

「ふくん……」

絵里はジト目でナオキを見た。

「な……なんだよ……」

ナオキは少し動揺した。

「なら……私も拭いてもらおうかしら」

そう言うのと絵里はナオキの隣に座った。

「お……おう……／＼／＼」

ナオキは少し照れながらも絵里の髪を拭き始めた。

「んっ……」

「気持ちいいんか？」

「まあね……んっ……えへへ……」

「やっぱりサラサラしてんな……絵里の髪」

「そう？」

「ああ……流石姉妹だな……髪を感じる……」

「んっ……でしょ？」

「小さい時からずつと言われてたんです！」

「ほくう……あ、そうだ！ 亜里沙ちゃん、おれたちアメリカでライブするんだ」

ナオキが思い出したように亜里沙に言った。

「ホントですか!? ハラシヨ―!」

亜里沙は喜んだ。

「ふふっ……しかもセンターは私なのよ」

絵里は笑って言った。

「ハラシヨ―! 凄い! お姉ちゃんセンターなの!」

亜里沙はさつき以上に喜んだ。

「ははは……喜んでくれてなによりだよ」

「うん! 私、楽しみにしています!」

「……なあ……亜里沙ちゃん」

「なんですか?」

「おれは亜里沙ちゃんのお義兄ちゃんなんだ」

「はい」

「だから……そんな敬語とか使わなくてええんやで?」

「え? でも……」

亜里沙は遠慮しているようだ。

「いいんやよ……タメで」

「……お……お義兄さんがそう言うなら……」

うん、わかった！」

「ハラシヨー！」

「……それで……お義兄ちゃん……」

「なんだ？」

「いつまでお姉ちゃんの髪を拭いてるの？」

「……あ………すまん、絵里」

するとナオキは絵里の髪を拭くのをやめた。

「え……ううん………ありがとう」

「あ、私明日学校だった！」

亜里沙は言った。

「そうか……おれたちは卒業式前に全員終わるけど、亜里沙ちゃんたちはまだ続いているのか……」

「うん！でもあともうちよつとで終わるよ！」

「そう………それなら早く寝なさい」

「うん！おやすみなさい！」

「おやすみ」

亜里沙は自室へと向かった。

「おれたちも寝るか？」

「そうね…それじゃ、行きましょう」

そしてナオキと絵里も部屋に向かった。

ナオキと絵里の部屋…

「ねえナオキ」

「ん？どうした？」

2人は一緒のベッドに入っていた。

だが……

「こっち向いてよ」

「べ…別にいいだろ……／＼／＼／＼」

ナオキは絵里の方を見ようとしなかった。

「ねえええ！向いてよ」

絵里はナオキを揺すった。

「うくん……だつてさ／＼／＼／」

「だつて……なによ？」

「その……なんか……はずい……／＼／＼／」

「なによ……今までだつて向かい合わせで寝てたじゃない……」

「で……でも……今までとは……ちよつと違うじゃんか……／＼／」

「もう……こつち向いてよ／＼！」

絵里はさらにナオキを揺すった。

「……わ……わかったよ……そつち向くから……／＼／」

「よろしい♡」

そしてナオキは絵里の方を向いた。

「ほら、これでいいか……／＼／」

「ふふつ……ナオキ顔真つ赤……かくわいい♡」

ツン……

絵里はナオキの鼻を人差し指で突つついた。

「……………／＼／」

ナオキの顔はさらに赤くなつた。

「ふふっ……………」

「……………／／／／／」

2人は見つめ合ったまま黙ってしまった。

「……………ねえ……………」

「ん？」

「これからずっと私たち一緒じゃない？」

「ああ……………そうだな……………」

「だから……………ね……………その……………ナオキが良ければなんだけど……………／／／／／」

「ん？」

絵里は顔を赤くしてモジモジしていた。

そして……………

「おやすみのキス……………して欲しいな……………なんて……………／／／／／」

「なくんだそんなことか……………」

……………

……………

え、マジで!？」

「う……うん………ダメ？」

「………ええよ………しようか………」

「!ほんと!?それじゃ……お願い………」

絵里は目を瞑り、唇をナオキの方に向けた。

(な……キ……キスなんて………いつもしてるんじゃない!す……すぐ出来る!

でもなんか違うな………プロポーズしたからか………な?)

「………おやすみ………絵里………」

「………おやすみ………ナオキ………」

そしてナオキは絵里の唇に優しくキスをした。

「………んはあ………絵里………」

ナオキは絵里の唇から唇を離すと絵里を自分の胸のところに引き寄せた。

「ナオキ!?!………もう………」

絵里は自分の体をナオキに寄せた。



しばらくして絵里は眠りについた。

「…すう…すう……………」

(絵里の寝息が聞こえる……)

これが毎日続くんか……いいね……)

ナオキは喜んでいた。

そしてナオキも眠りにつくのだった。

その日が初めてナオキと絵里が婚約して一緒に寝る夜になったのだった……………

次回へ続く……

## 第96話 「アメリカに行く準備も楽じゃないね」

前回のラブライブ！

練習を終え、ナオキくんはえりちと一緒に帰った。

それでなにか違うと思つたウチらはナオキくんとえりちを付けることにした！

一見はなにも無さそうやけどなにか隠してゐるな……

これは明日問い詰めるしかないようやね……

「えつと……なに？」

ナオキは暗い部屋で椅子に縄でくくり付けられていた。

「さ、正直に話すんやー！」

そんなナオキへ希はライトを当てて言った。

ドン！

「もう証拠は揃ってるの！正直に白状しなさい！」

「ここは机を叩いて言った。」

「(なんでこんな茶番に……)」

「だ〜か〜ら〜何を話せばいいんだよ!!」

「とぼけてと無駄やで！」

「そうよそうよ！」

「だからなにを話せばいいのか言ってくれなわからんやろ!!」

そんな言い合いが10分ほど続いた。

「はあ……はあ……だから……なんのことを……話せば……」

「はあ……はあ……わかってる……はずやで……ナオキくんなら……」

「はあ……はあ……そ……そうよ……ちやんと……証拠も……あるんだから……」

「あ、そうだ。だからその証拠って……」

「私たち、見たんだから……」

「見たつて…なにを？」

「ナオキくんとえりちが一緒の部屋に入るところ…それに亜里沙ちゃんの声も聞こえたで……」

「なんだ…そんなことか……」

言つてなかつたけど昨日からおれと絵里と亜里沙ちゃんは一緒に暮らしてるんだよ」

「そ…それつて…絵里と同棲してること!？」

「まあ…そういうこつちやな……」

「……やつぱり…ウチの考えは合つてたみたいやね…にこつち」

「くつ…信じたくなかつたけど……」

「はあ……」

「つたくよ……てかはやく縄ほどいてくんね？」

「あ、忘れてたわ」

「忘れんな！」

そしてナオキは解放され、絵里も他のみんなにナオキと同棲していることをさつき話したようだ。

「さ、曲にベースの音とか入れたからみんな聞いてみてくれ」

そう言うとなオキはノートパソコンを取り出した。

そして音楽を流した。

みんな聞かながら小声で歌ったり、ダンスを少し手だけで踊ったりしていた。

「あ、そうだ……ちゃんと曲名も考えたで！」

「本当ですか!？」

ナオキがそう言うのと海未は驚いた。

「ああ……曲名は……『Angelic Angel』だ! まあ……天使のようになっていう意味がある” Angelic ”と天使とか天使のような人、それに心も姿も美しい女性とか意味がある” Angel ” ……それでまあ……『Angelic Angel』 ……つてつけたんやけど……どうかな？」

ナオキがそう言うのとみんな顔を少し赤くしていた。

ナオキは意味がわからなかった。

「い……いいんじゃない? メロディーもよかったし……」

真姫は髪をクルクルしながら言った。

「う……うん！なんだか踊りたくなっちゃった！」

穂乃果は言った。

「そ……そうにやそうにや！」

凜は言った。

「その前に……まずは歌を合わせないとね」

絵里は言った。

「その通り……さ、隣の部屋に行こう！そっちの方が広いからいいだろ」

そしてみんなは隣の部屋でパートに分けて歌い、その後録音し、屋上で合わせてダンスをした。

「いいか？難しいだろうが扇子はこうして……こう！」

ナオキは扇子の動きがなかなか出来ない穂乃果、凜、にこ、花陽に教えていた。

4人はナオキの真似をしてできた。

「よし、その動きを忘れるなよ……次はステップをしながらだ……」

いくぞ……ワンツースリーフォー、ワンツースリーフォー……」

だが、いざステップと一緒にするとそれが上手くないかない……」

「ダメだア……！」

穂乃果は頭を抱えて両膝をついて言った。

「な……なんで出来ないの……このにこが……」

にこは両膝と両手をついて言った。

「にやにやー!! 凜は諦めないにや!」

「こうして……こう!」

凜と花陽は諦めずに何度も踊っていた。

「ほら1年生を見習え! お前らは先輩として恥ずかしくないんか! さあ……立て! 立つんだ!!」

「は……はい!!」

穂乃果とにこもまた挑戦した。

しばらくして……

「できたにやー!」

「よし、凜は合格だ!」

「で……できました……できました!」

「花陽も合格だ！」

「こ……これでどう？」

「いいんじゃないか？にこも合格だ！」

「ふ……ふふん……こんなことにこなら楽勝ね」

「よっ……ほっ……あ、できた！」

「よし、穂乃果も合格だ！」

これで全員できたな……ま、ちよつと間休憩なあゝ

休憩後、全員で合わせ見事に成功した。それからまた何回か合わし、夕方頃に練習は終わりにして部室へ向かうのだった。

「でだな……パスポート持ってないのが、おれ、にこ、穂乃果、海未、凜、花陽だったが、はやめに行くように！」

できれば明日！おれも行くけど！

「ほんで、明日と明後日は準備期間ってことで休みにするから。じゃ、解散！お疲れ様！」



「「「「「「お疲れ様でした！」「「「「「」」」」」」」」

そしてその日は解散した。

香川・絢瀬宅……

「ねえ、ナオキ？」

「ん？」

「明日はパスポート作った後どうするの？」

夕食中、絵里は明日のことをナオキに聞いた。

「ああ……明日はパスポート作ってそれから一旦本部に行く」

「本部に？」

「ああ……それから時間があれば買い物に行きたいんやけど……時間が余るかどうか……」

「あ、それなら明後日に2人で行きましょう！」

絵里は笑顔で嬉しそうな声で言った。

「おっ、いいねえ〜！」

「ほんなら明後日行こうか！」

「うん！」

2人は明後日に買い物に行くことを約束した。

「うん、おいしい〜」

亜里沙は美味しそうにご飯を食べていた。

翌日…

ナオキはパスポートを作り、ラブライブ！運営委員会本部にいた。

会長室……

「さ、どうぞで」

「ありがとう、おばさん」

ナオミはナオキにコーヒーを出した。

「はい、アリスちゃんもどうぞで」

「ありがとうございまーす」

ナオミはアリスに紅茶を出した。

「今日はおぼさんは秘書の仕事してるんだね」

「ええ…最近はほとんど毎日だけどね」

「さ、ナオミさんも座つて。」

「じゃ、これからの予定を話すぞ。」

「いよいよ出発だが…準備の方は？」

「晋三は言った。」

「うん、曲の方もバツチリだし、パスポートも作った。明日色々揃えるつもりだけどね」

「そうか…ちゃんとしてるようだな」

「当たり前だ」

「あ、そうそうパパが向こうに着いたら私とナオキくんがテレビ局に来れるようにリムジンを用意してくれるらしいです」

「リ…リムジン!? ハラショー……」

「ナオキはリムジンに乗ったこともなく、まさかこんなにはやく乗ることになるとは思わずとても驚いた。」

「ははは…さ、次だ。」

「お金は向こうのに交換しないとイケないのは分かつてるな？」

「……………あ……………」

「……………ナオキ……………向こうではほとんど円は使えないんだぞ？」

「……………わ……………忘れてた……………」

「ぶぶぶぶ……………」

アリスは大笑いする声を出さないように口を抑えて足をバタバタさせて笑っていた。

「だってそんな海外とか初めてやし！」

「わっかんねえーよ！」

「そこもちゃんとしとけよ……………」

あとそれはみなさんにも伝えてないんだろ？

念の為に伝えときなさい」

「は〜い……………」

「じゃ、次は……………」

その後も予定の確認などを話した。

話が終わり、ナオキとアリスも帰った後……………」

「ねえ……………晋三さん……………」

「なんだい？」

「……」あのとき」の判断は間違つてなかつたみたいね……」

「ああ……そうしなかつたらこんなふうになつてなかつたかも知れないな」

「そうね……でもいつかは……」

「……そうだな……」

晋三とナオミはなにかを話していた……

ガチャ……

「ただいまー」

「あ、おかえりなさい！早かつたわね！」

ナオキが帰るとリビングから絵里がエプロン姿で出てきた。

「ああ……なんかはやめに終わってな。」

それより、またお金交換しないといけないんだよな？ おれ今日おじさんに言われて思  
い出して……あははは……」

ナオキは右手で頭の後ろをかきながら言った。

「ああ……さつきグループで言ってたわね。」

希とか真姫は家に余ってるのがあるみたいだけど、他のみんなは持ってないって言っ  
てたわよ……ほら」

絵里はLINEのグループのトーク画面をナオキに見せた。

「ああ……じゃ、また交換しにいくか……」

「でも確かあそこの”シヨツピングモールSEKAI”ってお金の交換をしてくれるお  
店あったはずよ」

「そうなん!? ほんならそこ行くか?」

「それやったら明日交換できるし」

「そうね……じゃ、明日はそこに行きましよう! もうすぐでご飯出来るわよ!」

「おう!」

そして2人はリビングへと向かった。

一方そのころ……

「わーい！これがパスポートか〜！」

「初めて見ました……」

穂乃果と海未は今日作ったパスポートを見て言った。

「ふふっ……ねえねえ、明日”シヨツピングモールSEKAI”ってところに買い物に行こうよ！そこでお金の交換もできるみたいだし」

こことは言った。

「そうですね……揃えたいものもありますしね」

「え？なんでお金の交換するの？」

「穂乃果ちゃん……もう忘れたの？」

「ナオキが言っていたでしょう……」

お金の交換をしないと向こうで大変だと」

「あくそう言えばそうだった〜！」

「はあ……」

「あははは……」

海未は頭を手で抑えたため息、ことりは苦笑いをした。

「よお〜し！明日はそのシヨッピングモールなんちゃらにいくよ〜！」

穂乃果は拳を上に向けていった。

「SEKAIです……」



また一方そのころ……

「にや〜……これがパスポート……」

凧は目をキラキラさせてパスポートを見ていた。

「そう言えば真姫ちゃんってなんでパスポート持つてるの？」

花陽は言った。

「ああ……外国に何回か旅行に行ったことあるからよ」

真姫はどこか自慢げにそう言った。

「へえ〜」

「あ、そう言えばナオキくんがお金を交換しなきゃいけないって言ってたね」

「そうね……ま、私はいいけど」

「へえ〜……ねえねえ、真姫ちゃん！アメリカのお金見せてよ！」

「はあ……しようがないわね……」

そう言つて真姫はアメリカのお金を取りに行った。

「あ、そう言えば“ショッピングモールSEKAI”ってところでお金の交換できるらしいよ」

「へえく……なら明日3人で行くにや！」

「そうだね！真姫ちゃんが来たら言つてあげよう」

そして真姫が帰つてきた。

「なに話してたの？」

「あのね！明日3人で買い物に行こうつて話してたんだあ！真姫ちゃんも行くでしよう？」

「そ……そうね……行つてあげてもいいわよ。」

あ、これアメリカのお金……」

またまた一方そのころ……

「あ、にこっちゃん」

「希!？」

シヨツピングモールSEKAIでにこと希が会った。

「にこっちなにしてるん？」

「決まつてるでしょ! 準備よ準備!

明日は妹たちの面倒見なきやいけないから今日のうちに終わらせておこうと思つてね」

そう言うところにこは買い物袋を見せた。

「そういう事…」

「で、希はなんで？」

「ウチはお金を交換しに」

「あれ? 余つてるつて言つてなかったっけ？」

「そうなんやけど…足りないかなつて思つて…」

「ふくん、私も今から行こうかしら」

「その方がええと思うで。ここら辺やったらここしか交換できるところないし」

「そうね…ありがとう」

「いえいえ。またな」

そして2人は別れた。

香川・絢瀬宅……

ナオキと絵里の部屋……

「明日何買えばいいんかな？」

「うん……とりあえず服買おっか」

「え……今あるのじゃあかんの？」

「ダメ！折角アメリカに行くんだから服もかつこよくしないと！

それに、私も新しい服欲しいし」

「結局それか……」

「ふふっ……あと持ち運びできるWi-Fiのルーターもあつた方がいいわね」

「そうだな……向こうで普通に使つたら料金えぐいことになるからな……」

「ええ……さ、明日も早いしそろそろ寝ましよう」

「そうだな……」

2人は布団に入った。

「おやすみ……ナオキ……ちゅっ……」

「んっ……はあ……おやすみ……絵里……」

そして2人は眠りにつくのだった……

次回へ続く……

## 第97話（NEW STAGE章末回）「いざ、アメリカ

へ！」

前回のラブライブ！

ついに曲名も決まって、本格的になってきた練習！

でもステップしながらの扇子は難しくって…あはははは……

でも、なんとか成功したよ！

そして準備期間で休みになって私はことりちゃんと海未ちゃんと一緒にショッピングモールなんちゃらに行くことにしたの！

「だからショッピングモールSEKAIです！」

「「わあ〜！」」

穂乃果、ことり、海未の3人はショッピングモールSEKAIに来ている。

「見てみてー！パン屋さんがあるよー！」

穂乃果がパン屋を指さして言った。

「わあくあの服かわいーい！」

こことは服屋さんの前に並んでいる服を指さして言った。

「2人とも…まずはお金の交換ですよ」

海未は呆れたように言った。

「はーい」

「もう……ん？」

海未はある一点を見つめた。

「どうしたの？海未ちゃん……」

「なにかあるの？……あつ……あれは!?」

こことりと穂乃果もその方を見ると……

「見てみてー！いろんなお店があるにやーー!!」

凜は多くの店が並んでいるのをみてはしゃいでいた。

「あ……あれは……ご飯屋さん……」

花陽はあるご飯屋さんを見て言った。

「もう……2人ともはしやぎすぎ……早く行くわよ……」

真姫はエスカレーターへと向かった。

「あ、真姫ちゃん待って！」

花陽は真姫を追いかけた。

「もう置いてかないでよお……あ、あれって……」

「ん？」

3人が見つめる先には……

「ふふつ……ナオキったら……」



「いやあくだからさ……」

ナオキと絵里がデートしていた。

「ありがとうございました！」

ナオキと絵里はお金の交換を終えた。

「おお……これがアメリカのお金か……」

「うん……初めて見たわ……」

2人は交換したお金を見ていた。

「てかみんな交換したんかな？」

「うくんどうかな？」

ま、してるんじゃない？」

「そうか……あはははは……」

まだしてないよ……  
てか今そこにいるよ……

穂乃果、海未、ことり、真姫、凜、花陽の6人は途中で会って一緒にお金を交換する店に向かっていた。

「あ、ナオキくんたちだ！ねえねえどうする？ナオキくんたちを追いかける？」

穂乃果は小声で言った。

「でも……私たちも色々準備があるし……」

ことりは小声で言った。

「そうです！それに買うものだってあるでしょう？」

海未は小声で言った。

「え〜！追いかけていにゃ〜」

凜は小声で言った。

「もういいんじゃない？6人で買い物に行けば……」

真姫は呆れたように言った。

「そ……そうだよ〜」

花陽は小声で言った。

「さ、はやくお金を交換しに行きますよ!」

海未はそう言うとお金を交換する店へと歩き出した。

5人は海未を追うように歩いた。

6人はナオキたちを尾行しないことにしたのだった。

「ふう……あいつら追いかけてこないみたいだな……」

「ん? なにか言った?」

「いや……さ、どこに行く?」

ナオキは気づいてたみたいですが……

「うくん、まずは服屋さんかな?」

「OK……じゃ、行こうか」

ナオキは手を差しのべた。

「ええ!」

絵里はそう言つてナオキの差しのべた手に指を絡めた。  
ナオキもギユツと握り返した。

そして2人は服屋さんへと向かった。

服屋さんではまずは絵里の服を選んだ。

「ねえねえ、こつちなんてどう?」

絵里は掛けてあつた服を自分に当て、ナオキに見せていた。

「絵里はどんな服でもかわいいからなんでもいいと思うけどなあ」

「も……もう!……それはそれで嬉しいけど……ちゃんと選んでよ!」

絵里は途中小声で言つたが頬を膨らまして言つた。

「わ……悪かつたつて……ちゃんと選ぶから……」

「もう……あ、これはどう?」

絵里は違うものを自分に当てた。

「おお……いいんじゃないか?」

さっきのよりかわいいと思うぞ?」

「ほんと!?ならこれにするわ!」

「お…おう…… (服のことわからんけど喜んでるみたいやしいつか)」

「さ、これ買ったら次はナオキのね!」

「はいはい…絵里に任せるよ」

絵里はレジへと向かった。

「……あ……テレビ局に行く時は制服やったな…そう言えば……」

ナオキは思い出してポソツと言った。

そして次はナオキの服を選んでいた。

「それじゃあナオキは最初は制服なのね?」

「ああ…テレビ局の社長に会うんやから会うときは制服で行けって言われてたんだよ」

「そういう事はもつと早く言つてよ…」

「あははは…すまんすまん…」

ナオキは頭をかきながら言った。

「もう…ま、いいわ…とりあえずナオキが着る服を探しましょう」

「ああ……あ、これかつこいい!」

ナオキはある服を絵里に見せた。

「却下！」

「即答かよ！」

「それはダサいわ……」

「なっ!? え……絵里にダサいって言われた……」

ナオキは壁に右手をつけて下を向いた。

だが絵里はそんなナオキを気にせず、ナオキに似合う服を探していた。

「あ、これなんか似合いそう！」

絵里はナオキにある服を差し出した。

「そ……そうか？」

「うん！」

「じゃあこれにするわ！ レジ行ってくるぞ〜」

「あ、私も行く！」

ナオキと絵里はレジへと向かった。

その後、パジャマなども買って2人はカフェで休憩していた。

「ふう……広いな……」

ナオキは疲れたように言った。

「そうね……さすがに私も疲れたわ……」

「そりやああんなにはしゃいでたらな……」

「つ……ついテンション上がっちゃったわ……」

絵里はそう言うのと紅茶を口に運んだ。

「あんな絵里見るの久しぶりだな……」

ナオキはそう言うのとコーヒーを口に運んだ。

「ふう〜」

その後、ケーキを食べたあとに2人は夕飯の材料を買いに行った。

「ハラショー……さすがはSEKAIだ……なんでもありそうだな……」

ナオキは売り場を見て言った。

「そうね……さ、今日はなににしようかしら？」

ナオキは買い物カートを押しながら絵里に付いて行った。

そして夕飯の材料を買って2人はショッピングモールSEKAIを後にした。

「ナオキ……大丈夫？」

「平気平気！こんなの軽いつて！」

ナオキは買い物で買った大体のものを持っていた。

絵里はナオキのスズメで軽いものを持っている。

「ならいいけど……」

「……ところでさ……」

「なに？」

「……飛行機……落ちたりしないよね？」

「大丈夫よ……多分」

「多分つてやめて！」

「ふふっ……冗談よ」

絵里は少しドヤ顔になって言った。

「酷い！」

「ふふっ……パイロットさんは優秀だし飛行機も性能いいからきつと大丈夫よ。」

沖繩のときだつて大丈夫だったでしょう？」

「ま……まあ……そうだけだよ……」

「それに……今回は私もいるし、大丈夫よ」



「……………ああ……………」

ナオキは絵里に励まされ少し安心した。

そして2人は家に帰り、ご飯を食べ、準備を少しして寝た。

翌日から練習をして、準備は万端！

ついに……………出発の時……………

成田国際空港……………

「着いたー！みんな時間通り来るかな？」

「来るでしょ……………さすがに……………」

ナオキと絵里と亜里沙は空港に到着した。

「亜里沙ちゃんありがとうがとうな……………見送りしてくれて」

「ううん！ちゃんとお見送りしたかったから！」

亜里沙は元氣よく言った。

「ははは……いい子いい子〜」

ナオキは亜里沙の頭を撫でた。

「えへへ……」

亜里沙は喜んでいた……

が、絵里は少し羨ましそうな目で見ていた。

すると……

「あ、亜里沙ー!!」

「雪穂だ！おーい!!」

雪穂が現れた。

「やあ、雪穂ちゃん。見送りに来てくれたんか？」

「はい!!」

「そうかそうか……雪穂ちゃんも偉いなあ〜」

ナオキは雪穂の頭を撫でた。

「く……くすぐりたいですよ……」

雪穂は少し照れていた。

絵里はものすごく羨ましそうな目で見た。

すると……

「あ、ナオキくんたちだ！おーい！」

「お待たせしました〜！」

凜と花陽が来た。

凜は大きく手を振り、花陽はそんな凜の後ろを歩いていた。

「よお、おはよう2人とも」

「おはよう！」

「おはようじゃー！」

「あ、もう来とるんやね」

すると次に希が来た。

希はやはり落ち着いていた。

「お、希…おはよう」

「おはようさん」

「ねえねえ、ちよつと探検していいかにや？」

「うーん……まだ時間あるし……少しだけな。でもすぐ戻ってこいよ？」  
「はい！行こうかよちん！」

「う……うん！」

凜と花陽はどこかへ歩いて行つた。

「ほな、ウチもちよつと外の空気吸うてくるわ」

「あいよ」

希は外に向かつた。

「あとは……真姫とにこと穂乃果と海未とことりだな……」

「あ、にこさんならあそこにいますよ」

雪穂はにこのいる方に指をさした。

「あ、ほんまや……しかもご家族揃つて……」

にこは景子と虎太郎、こここあ、こころと一緒にいて『にっこにっこにー♪』をしていた。  
た。

「あ、そうだこれお守り！」

亜里沙は絵里にお守りを渡した。

「ありがとう……とこころで……雪穂ちゃんがいるのに……穂乃果は？」

絵里はお守りを受け取り、キョロキョロと周りを見て言った。

「あれ？来てませんでしたか？」

空港に着いたら先に行くって言ってましたけど……」

雪穂は『全くあのお姉ちゃんは』という顔をしていた。

すると……

「ことり、パスポートは？飛行機のチケットは？」

「大丈夫……えへへ……」

海未とことりが来た。

海未はやっぱり不安そうで、ことりは落ち着いており、愛用の枕もちゃんと持っていた。  
た。

「あ、お待ちせえ〜」

ことりがナオキたちを見て言った。

海未とことりが合流したのとほぼ同時に凧と花陽と希とにこが合流した。

すると……

「あ、お待ちせ……」

真姫もやって来た。

「もう！真姫ちゃん遅いにゃー！」

凧は言った。

「そう？時間通りだと思っただけ……」

真姫は髪の毛をクルクルして言った。

「あれ？穂乃果ちゃんがいないよ？」

花陽が不安そうに言った。

「はあ？あいつなにやってんだよ……」

誰か連絡来てねえ？」

ナオキは言った。

「はい……連絡があり……」

もう到着していると……」

海未はスマホの画面を見せて言った。

「着いてんならほよこいつの……」

ナオキは呆れたように言った。

「どうやら展望デッキにいるようです」

海未は穂乃果からのメッセージを読んで言った。

「そうか……なら……「Hi!」……あ、アリスさん！」

そこへアリスが来た。

「あれ？高坂さんがいないですね？」

「ああ……すみません……なんか今、展望デッキにいるみたいで……」  
「すぐに連れてきます！」

そう海未が言うとなオキ以外のメンバーが展望デッキに向かった。

「ふふっ……やつぱりみなさん面白いですね〜」

「そうですか？」

「はい……ライブが楽しみです〜す！」

「ありがとうございます。」

ていうか……なんかおれだけ制服だと浮いてませんか？」

「大丈夫です〜す！ パパに会ったあとに着替えればいいので〜す！」

「あははは……そうですか……（はやく着替えたい……）」

しばらくして……

「もうあなたはいつもいつも迷惑ばかりかけて！」

「うええええん……ごめんなさ〜い！」

みんなが来た。

穂乃果は海未に怒られていた。

「あはは……やつぱり、sの皆さんは賑やかですね〜」

アリスは笑いながら言った。

「はあ……これでやつと全員か……」

ナオキは少し疲れたように言った。

「うん！じゃあ番号！いち！」

「に！」

「さん！」

「よん！」

「ご！」

「ろく！」

「なな！」

「はち！」

「きゅう！」

「じゅう……」

「うん！全員いるね！」

「はあ……お待たせしましたアリスさん……」

「いえいえ……！では行きましょう！」

「アメリカへ！」



そしてみんなが頷いた。

「ほらナオキ！あれ”やらなくちゃ！”

絵里はナオキに言った。

「今はそんな力……ま、やるか……」

そしてナオキは肩を回した。

「よしーじゃあ……μ s……アメリカへ……しゅっぱーっ……」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

10人は拳を上げて言った。

μ s！いざ、アメリカへ！

次回、新章へ続く……

Another way (節分)「死ぬ気で喰らえ!そして  
鬼になりきれ!~これが節分の過ごし方~」

今日は節分!

.....  
てことで巻き寿司(恵方巻き)を食べたりするために穂むらにみんなを集めたんだが

「「「「「「巻き寿司?」」」」」」

「はあ?節分と言えば巻き寿司だろ?あ、恵方巻きとも言うか」

驚いた。みんな巻き寿司を食べたことがないという。

「ああ、恵方巻きを試みたことはあるけど食べたことないよ」

「でも食べてみたいかも!」

「はい、見たことはありますがとても美味しそうでした」

「は...白米使いますよね!?これは食べるしかありません!」

「恵方巻き？巻き寿司？凧はみたことないにや…」

「なにそれ…おいしいの？」

「そうね…少し食べてみたいかも…」

「そう言えば、近畿の方に引越したときに近所の人が食べてたっけ？」

「ハラシヨ！そんな文化があるのね！」

なんと、関東の方々はあまり巻き寿司は食べないのか！？

ま、おれも最初は戸惑ったが食べてみて、むっちゃ美味かったからその年からおれの家族は巻き寿司を食べ始めたんだけどな。

「ま、とりあえずだ。節分と言えば巻き寿司に豆まき！具材は買ってあるからみんなで巻き寿司…作ろうや！」

と言っておれはあらかじめ買ってあった恵方巻きを作るための具材を出した。

おれが用意したのは海苔をはじめ、マグロ、キュウリ、だし巻き玉子、かまぼこ、レタス、シイタケに高野豆腐、そして……

「ナオキくん、ご飯炊けたわよ」

「は～い！」

おつ、ちょうどいいや！

おれの持ってきた米でおばちゃんに炊いてもらってたんだよ!

「(ぎ)飯ですか!」

花陽が立ち上がった。

「まあ…巻き寿司だし、米はいるだろ」

「や…やっぱりそうだよね!はやく食べたいです…」

「ははは…まだ早いって…さ、作るぞー!」

「「「「「「「おー!!」」」」」」」

「えつとね、この”巻きす”っていうやつに海苔をのせて、その上にご飯をのせて…その上に具材をのせて…丁寧に巻く…つと…つと…これだけだ」

そしておれはできた巻き寿司をみんなに見せた。

「「「「「「「お〜!」」」」」」」

「な、簡単だろ?あと食べれるぐらいにしとけよ」

そしてみんなは巻き寿司を作り始めた。

しばらくしてみんなのが完成したようだ。

「よし、みんな完成したな!

次はこれの食べ方だ！」

「あ、聞いたことあります。」

確かある方角を向いて食べるんですよね？」

「その通り！今年は南南東に向かって食うんだ！」

「なあ〜んだ簡単じゃん！」

なに？

簡単……だと……？

「穂乃果……甘いぞ!!」

「ほえ?」

「いいか巻き寿司を食べるのは簡単ではないんや!!」

「いいか、まずは恵方…今年は南南東を向いて巻き寿司を一口で、一言も話さずに神様への願いを込めて食べるんだ!」

あと巻き寿司を切ったりしたらダメよ〜ダメダメ!

よそ見してもダメよ〜ダメダメ!

そして休んでもダメよ〜ダメダメ!

死ぬ気で喰らうんだ!!

わかったか!!」

おつと…久しぶりに熱く語ってしまった。

「ハ…ハラショー…これを食べるのってそれほど難しいのね…」

「ほ…穂乃果…知らなかった…これを食べるのがそんなに苦難の道だなんて…」

「凜……これを成し遂げたら成長できる気がするにや……」

「これは鍛錬……心してかからねば……」

「はあ……意外に面倒くさいのね……」

「真姫ちゃん……そんなこと言ったら縁起担がれへんでえ！真姫ちゃんやつたら巻き寿司を食べられるんやー！」

「希、寒いわよ……よし！これを成し遂げて縁起を担ぐわよ！」

「お……おいしそうなご飯……」

「できるかなあ〜？」

「よし……いいか……食べてる時は南南東を見つめ、決してよそ見をせず、一言も話さず、休まず食べきるんや!!」

そしておれは南南東を向いて巻き寿司を構えた。

絶対に一言も話さず、よそ見をせず、一口で、休まずに食べきる!!

ゴゴゴゴゴゴゴゴ……

「ナ……ナオキくんのオーラが……すごい……」

「あはははは……」



「これは私たちも見習わなければ……」

「ご飯ご飯!」

「か…かよちゃんもオーラを放ってるにや!？」

「ナニソレ…イミワカンナイ……」

「よし…やってやるわ!」

「おつ、みんなやる気やね!ウチも負けてられへんでえ!」

「あんなナオキもカツコいいわね……／＼／＼」

まずは深呼吸をして、そこから一気に……喰らう!!

「すうくく……はむっ!」

おれは大きく息を吸い込み巻き寿司に食らいついた。

そしておれはガブガブ一気に巻き寿司を死ぬ気で喰らった。

「……………ふう……………ごちそうさまでした……」

やったか……

今年も厳しかった……

久しぶりに燃えたような気がする……

!!つそ暑い……  
 だてさてみんなは……

!!?!?!?!?!  
 ……これは……

みんなが……太い……やつを……必死で食っている……!

これ、大丈夫だよね!?

勘違いとかされないよね!?

R18じゃないよね!?

いや、おれの心が汚れているだけか……?

おれの目にはみんなが……その……

アレを……しているように見えるんだが……

やばい、さつきよりもっと暑くなってきた……

はっ!?

え……絵里が……絵里が……こ……これは……お……おれの……

『ねえ…ナオキ……大きなぞ、れ…食べさせて?』

『な…なにを言つて……』

『いいでしょ?別に……ほら今も……すつごく大きいわよ……』

『うっ……それは……』

『ほら…脱がしてあげるから……ほら……はむっ……』

『絵里!?!……あつ……』



「ふう〜穂乃果……やったよ……」

「もう…食べれないよお〜」

「はあ…はあ…これで成長できましたね……」

「ご飯美味しかったです……」

「凜は疲れたにや〜」

「はあ…なんでこんなこと……」

「にここにかかれば…この程度…」

「結構疲れるんやなあ〜これ」

「でも、ナオキは早かったわね…」

「まあ…おれにかかればこんなもんだ!」

さて、巻き寿司を食べたら……これだ!!」

おれは続いて豆を取り出した。

「豆まきだね!」

「ああ…その通り!」

外へ向かって投げて『鬼は外!』

中へ向かって投げて『福は内!』

「これはわかるな?」

「でも…なんか足りへんなあ〜」

「はあ？これで十分だろ？」

希、なに言ってるんだよ？

「豆なんて外と中に向かって投げるだけで十分だろ…」

「ここはちゃんと鬼を設定してやるべきや！」

「鬼を設定って……」

「ここは公平にくじで決めよう！」

「ことり!?いつの間に……」

ことりがいつの間にかくじを作っていた……

なんなの…そんな人に向かって投げたいの？

なに？みんなSなの？

ほんでくじの結果………

「わりーこはいねーかー!!!」

おれなのかよ!!!

「鬼はく外!」

ピュン…

絵里が笑いながらおれに豆を投げてきた。

「絵里…やっぱり優しい…」

「ちつがーう!!」

「ほえ!?!なにが違うんだ?」

「ナオキくん!鬼になりきるんや!」

「お…鬼になりきるって…どうすれば…」

「だから豆が当たったらもつと苦しむんや！」

「苦しむつて……あんまり痛くなかったし……」

「なら……こうすればっ！」

ピュン！

「いてっ！ちよつ……超痛いんですけど!?!」

「それでええんや！さあ……みんなも！」

希がそう言うとなんだか寒気が……

「ま……まさか……」

おれがみんなの方を見ると……

「そうだよね……全力でやらないと……」

「ちよつとことり……ストレス発散したくなつちやつたあゝ」

「ナオキが教えてくれました……節分は死ぬ気で挑めと……」

「凜……やれる気がするにや……」

「ご飯食べたら力が湧いてきました……」

「ふふつ……やつと面白くなつたわね」

「覚悟はいいわね？」



「いつまで耐えられるんやろな?」

「ナオキには悪いけど死ぬ気でいかせてもらおうわね」

みんなの周りには黒いオーラがみえる……

で、『やる』が『殺る』に聞こえたのはおれだけかな?

でも……死ぬ気でなりきらねばいけない気がする……

これは……戦争だ……

当たって痛いなら……避けるまで!!

いや……死ぬ気で……鬼狩りを倒す!

「フツハハハハハ!よかろう人間ども!!おれを倒せるものなら倒してみろ!!みんな食べてやる!!!」

そしておれたちは声を合わせて……

「「「「「「戦闘開始!」」」」」」

そして豆まきというなの戦争は始まった。

9人の鬼狩りVS・1人の鬼……

戦力的には不利だが、おれは男だ……

いける……いけるぞ!!

でも……

ビュン!

ビュン!

ビュン!ビュン!ビュン!

「ちよつ……まつ……これまじで死ぬから!!!」

こいつらほんまに殺る気で投げてきてねえーか!?

これ当たったら超痛いぞ!?

いや、逃げてるだけじゃダメだ……

攻める!!

まずは絵里からだ!!

「絵里…すまん!!」

そう言っておれは絵里の肩を叩く。

この勝負ではおれに触られたらOUT、ゲームオーバーって訳さ。

「あらら…負けちゃった…」

「さて…まずは1人!」

その後、おれは超高速豆を避けながら、花陽、ことり、にこ、穂乃果、凜を倒して行  
た。

あとは……

「なかなかやりますね……」

「ふっ…なかなか面白いじゃない……」

「まさかここまでやるとはな……」

「えへへ…この鬼をなめてもらつちやあく困りますぜ」

あとは海未、真姫、希の3人だ。

脱落したメンバーは豆を食べていた。

ちやんと年齢＋1食べてるよな!?

いやいやそんなことは今はいいんだ……

あと3人………

まずは希から潰すか………

すると3人は分散し、おれにむかって豆を投げた。

おれはそれを避け、希に向かっていった。

そして希は焦っておれに豆を投げるがおれは希の背後へまわり、タッチした。

「よし！あと2人！」

「ふっ……甘いで……ナオキくん……」

「な……なに？」

すると希はしやがんだ。

そして………

「やばっ!!」

「鬼は………外!!」



「ああああああああああああああああ!!め……目がああああああああああああ!!うおああああああああああああああ……」

鬼のお面の目の穴のところとうまいこと入ってきておれの目にクリーンヒットした……

ジャストミイイイイイト!!

「ああああああ……」

おれは目を抑えてその場にしゃがんだ。

こ……こんな節分初めてだよ……

「ナ……ナオキ?!だ……大丈夫?!」

絵里が慌てて駆け寄ってきた。

「あ……ああ……大丈夫だよ……」

「も……申し訳ありません!決してわざとではないのです!」

海未は頭を下げた。

「病院に行く?それか私が今から治療を……」

真姫は申し訳なさそうな声で言った。

「い……いや……平気平気……いちちち……少し痛みおさまってきたわ……」  
みんな胸をなでおろした。

「あ、そう言えば外にまだ投げてないね。

福は内とかやってないよ?」

穂乃果、いいことに気がついたな!

おれも今から言おうとしたよ!

「さ、本当の豆まきをしようか……」

おれは立ち上がった。

「あ、大丈夫ですか?」

「む……無理しないで……」

海未と真姫はまだ申し訳なく思ってるのだろうかおれのことを心配してくれた。

「ああ……大丈夫だよ……さ、行こうぜ!」

そしておれは歩き始めた……が……

「うお!?!」

おれは落ちていた豆を踏み、バランスを崩した。

そして……

「キヤツ!?!」

ドテツ!

思いつきり海未と真姫を押し倒してしまった……

わざとじゃないんだよお  
!!!!



「あ……あんたねえ……」

「は……は……は……」

そして今、おれの顔は真姫の胸にあり、右手は海未の胸にあった。

やばいな……

「す……すすすすすすまん!

決してわざとじゃない!たまたまだよ!」

そしておれは起き上がり、2人からどいた。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……

海未と真姫の周りに黒いオーラが見える。

……死ぬかも……

「まだ豆が足りないのかしらね？」

「そのようですね」

「いや……もう……やめて……」

「覚悟は出来てるわよね？」

「覚悟は……出来てますね？」

「に……逃げる!!!」

おれは外へ向かって走った。

「待て————!!!」

海未と真姫は豆を投げながらおれを追いかけてきた。

おれは死ぬ気で走って逃げた。  
まだ鬼のお面を外してなかったため、はたから見ればおれは鬼になりきってるように見えるのだろう。

おれは…鬼になりきったんだ！  
今年の節分で!!

でも……………

いつまで逃げればいいのお!?

「鬼は………外!!!」

「いつてええええええええええ!!!」

後日、節分ガチ勢がいると噂が立った。

節分ガチ勢って………

さらにはテレビや新聞の取材が来たりした。

………  
そしてここは節分になるとガチ勢が現れると有名になったが、もう現れないだろうな

………  
巻き寿司のことは別として………

The school idol movie 第2章〈

アメリカで舞う女神たち〉

第98話「旅のはじまり」

飛行機内……

「えっと……私たちの席は……あつ、あつた！」

絵里は席を探し、見つけるとそこに座った。

「ふう……やつと座れる……」

ナオキはやつと座れて安心した。

「さ、空の旅を楽しもうやん！」

希は言った。

「そうね……ってナオキ……どうしたの？」

絵里は座ってから様子がおかしいナオキに声をかけた。

「……………」

「ナオキ（くん）？」

「……………おれ寝とくわ…」

「え!？」

「…………アメリカに着いたら起こして…」

「おやすみ」

「ええ……………」

ナオキはそのまま目を瞑ってしまった。

「はあ…なんでナオキは寝てるのよ…」

真姫は呆れたように言った。

「ナオキくん寝ちやったのお!？」

花陽は後ろを見て言った。

「なんでにゃ!？」

凜も後ろを見て言った。

「はあ…そんなに疲れてたってこと？」

にこは言った。

「「あははは……」」

だが穂乃果、海未、ことりはなにかを察したように笑っていた。

「…3人ともこの理由がわかるの？」

真姫はそんな3人を見て言った。

「あははは……あのね……ナオキくんって高いところじゃん……」

「それでナオキくん怖いんだよ」

「修学旅行のときもずっと目を瞑っていたんです……」

3人はみんなに説明した。

「「「「あ〜」」」」

みんなは納得して声をあげ、ナオキの方を向いた。

ナオキの額には少しだが汗が流れていた。

「ふふっ……どうやら凶星のようやね」

ポン…

「もうすぐ離陸致しますのでシートベルトを締めてください」

「さ、みなさん……シートベルトを締めてください」

海末がそう言うのとみんなはシートベルトを締めた。

「あ、ナオキシートベルト締めてないじゃない……もう……」

絵里はナオキにシートベルト締めた。

(やばい……これは……絵里の胸が当たっている……これって絵里がシートベルト締めてくれているんやよな……い……いいのか……周りから子供みたいって思われてたりしないのか……ああああ……プニプニ当たってる……)

とナオキは頭の中では騒いでいた。

だが、周りのみんなはナオキが少しにやけているのが分かっていた。

「にひ……えりちくナオキくんにやけとるよ」

(なっ……希め……)

「え……ナオキ？起きてるの？」

絵里は驚いた顔でナオキを見た。

「……バレた？」

ナオキは片目を開けて言った。

「なによ……起きてるなら自分で締めてよね……」



「ははは……すまん……」

「さ、もうすぐ離陸やで」

「なに!? ……お……おれは今度こそ寝るから!」

「ちよつとナオキ」

ナオキはまた目を瞑った。

「」「」「はあ……」「」「」「」

そして飛行機は離陸した。

(やばい……動いてる……これ……動いてる……寝たふり……寝たふり……)

ギュツ……

(?……誰かが手を握ってくれてる……)

この手の感覚は……絵里……)

絵里はナオキの手を握った。

そして小声で……

「大丈夫よ……私が付いてるから……」

そしてナオキは目を開け、絵里の方を向いた。

「絵里……」

「ふふっ……やつと目、開けたわね」

「ああ……そうだな……絵里がいるから大丈夫か……」

「ふふっ……」

そして飛行機はアメリカへと向かうのだった。

「あれ？そう言えばアリスさんは？」

穂乃果が思い出したように言った。

「ああ……アリスさんならファーストクラスに乗ってるぞ」

ナオキがさらつと言った。

「なあくんだ……」

穂乃果は安心したようにイスにもたれた。

「「「「「「「「ファーストクラス!?!」「「「「「「」

みんなが声を合わせた。

そしておそらく12時間ほどの飛行機の旅は終わりを告げるのだった……

アメリカ……

NY空港……

「はあ……やつと着いた……」

「ホントだよお〜」

「もう疲れたにや〜」

「なんでこんなに時間がかかるのよ……」

ナオキ、穂乃果、凜、にこは疲れを見せていた。

「なによ……だらしないわね……」

真姫は呆れたように言った。

「……うっせー」

「さて、そろそろ移動しないとですよー」

アリスは手を叩いて言った。

「そうですね…じゃあみんな先にホテルに行つてくれ…おれはまた向かうから」

「……………はい……………」

そしてみんなはタクシー乗り場へと向かい、アリスはナオキに「さあ、こつちですよ」と言い、リムジンが待っている駐車場へと歩いた。

「ナオキ…気をつけてね」

絵里はナオキに心配そうに言った。

「ああ…わかってる……………」

「じゃあまたあとで……………チュツ……………」

絵里はナオキの頬にキスをするとタクシー乗り場へと向かった。

ナオキはそんな絵里を見ながら頬を触り唾然としていた。

周りの人たちは「Oh…『おお…』」などと言ってナオキを見ていた。

ナオキはすぐにアリスの歩いていった方へと向かった。

「ラブラブですわねー」

「……………はい……………／／／」

駐車場……

「Hey! Alex!! 『あつ!アレックス!!』」

アリスはある男性を見つけると声を上げた。

「Oh, Ms. Alice! It's been a long time. 『ああ、アリス様!お久しぶりです。』」

「It's been a long time! 『お久しぶり!』」

「あの〜アリスさん、こちらの方は?」

ナオキは戸惑いながらアリスに聞いた。

「Oh!紹介がまだでしたー!」

ナオキくん、こちらは私のところの執事のアレックスですー!リムジンの運転をしてくれまーす!

Alex, this is Naoki Kagawa. The person who helps μs. 『アレックス、こちらが香川ナオキくん。μsをお手伝いする人よ。』」

アリスはナオキにアレックスを、アレックスにナオキを紹介した。

「Oh, indeed! Nice to meet you. 『ああ、そうでしたか  
! よろしく願います。』」

そう言つてアレックスはナオキに右手を出した。

「Nice to meet you too. 『こちらこそよろしく願います。』」

ナオキはアレックスの手を握り、握手をした。

「さあ、テレビ局ヘレッツゴーです!」

アリスはリムジンの方へと向かった。

「This way, please. 『こちらへどうぞ。』」

アレックスはナオキにリムジンのある方へ腕を伸ばした。

「OK! 『はい!』」

ナオキはリムジンへと乗り込んだ。

「リムジンって初めて乗りましたけど凄いですね…ハラショー……」

ナオキはリムジンの中をキョロキョロと見回していた。

「ふふっ…喜んでくれてるみたいでよかったです」

そしてリムジンはテレビ局へと向かった。

「おー!!」

ナオキは窓から見える立ち並ぶビル、大きな川などの景色に感動していた。

しばらくして……

「あ、あれがパパが社長のテレビ局……『Angel TV』です！」

アリスが指を指した先に大きなビルがあり、『Angel TV』という看板も出ていた。

「あれが……でけえ……」

「ふふっ……このテレビ局はアメリカでNo.1なんですよー」

「ハラシヨー……だからこんなリムジンまで……」

「イエス！」

そしてリムジンが停車した。

「着いたみたいですねー。」

「…さ、レッツゴー!です!」

「はい!」

ナオキとアリスはリムジンから降りるのだった……

次回へ続く……



Another way (バレンタインデー)「これがバ  
レンタインデーというものか！ハラショー！」

バレンタインデー……

それは女が男にチョコをあげる日……

多分こんな日本だけやろ……？  
知らんけど

どうせチヨコレート会社の野望なんだろう？

○ヤー——と○ヨ——工場に出てくる工場の野望なんじゃね？

そうだそのはず！チ○○リ○くんがきつとやっただな！

いやまで……あの工場は日本じゃないぞ！！

なんだと……なら誰が……明○か？

まさか……総理大臣!?

まさかまさかの天皇陛下!?

ま、そんなことは放っておいて……

チヨコか……おれは数名から貰ったことはあるよ？

と言つてもそれは”幼き東京時代”……

”小さい時に”絵里とか穂乃果とか海未とかことりとかにこから貰ったことある。

”小さい時に”!

大事なことなので2回言いました。

大坂学園ではそんなのなんて貰ったことない……うつ……頭が……

だが、今は東京にいる!

しかも絵里とは付き合ってるし、絶対本命くれる!

あとのみんなは義理チョコかな?

いやそれしかないだろう……

いや……まさか……そんなまさか……

絵里以外から貰えないとか!?

まさか…絵里までくれないとか!?

そんな……まさか……

おれはそんな不安を抱える中、朝目覚めた。

そしていつも通り絵里と登校しようとしたのだが……

「ごめん！先行つてて！」

NANDATO!?

なんだと!?

なぜだ……なぜ……

まさか……おれと会うとチョコをねだられるから……？

そんなことしない……のに……多分……

そしておれはトボトボと一人で登校した。

それで学校に着いたおれはふと気づく。

生徒たちの登校が早いのだと。

なぜだ……いつもならまだ大体の生徒は登校していないはず……

なぜ……なぜなんだ……

そしてみんなの視線がおれへと向いた。

「Why?」

なぜか英語を口走ってしまった。

「あ、生徒会長!」

おれが戸惑っている一人の女子生徒が走ってきた。

「ん、おはよう……ございます……」

で、なにか御用で?」

「お……おはようございます!」

えつと……その……// // //

「ん?」

なんだろう……この子顔が赤いぞ……?」

「あのつ……これ……受け取ってください!! // // //

そう言うとその女子生徒は箱のようなものを差し出した。

「ふえ!! えつと……これは?」

「て……手作りのチョコレートです! // // //

「て……手作り!? すげえ……チョコ作れるん!?

ハラショー! 有り難く貰うよ……」

ありがとう」

素直に嬉しい……

「あつ……い……いえ……／＼／＼」

するとさつきからそんなおれと女子生徒を見ていた他の女子生徒たちがおれに向  
かってきた。

「わ……私からも!／＼／＼」

「えっ!? ああ……ありがとう」

「こ……これ昨日作ったんです! 受け取ってください!／＼／＼」

「お……おお……ありがとう」

おれは女子生徒の大群に囲まれた。

「せ……先輩! こんな事もあろうかと私、大きな袋を用意しました! 良ければここに……」

「おつ……君、気が利くねえ〜! ありがとう! 君みたいな子がいいお嫁さんになるんだね」

「お……お嫁さんに!?!／＼／＼」

あ……ありがとう……ございます!」

そしておれは貰ったチョコをその袋に入れた。

「ああ……どうもありがとう。」

あ……ありがとう……ございます……」

おれはこのとき何回「ありがとう」と言ったのかな……？  
そしてみんな渡し終えたみたいで校舎へと入っていった。

「はあ……終わった……」

しっかし……みんななんでおれなんか……？

あつ、そうか！わかったぞ！



ここ音ノ木坂学院には男子生徒はおれだけ。

バレンタインではみんなチョコを渡したいはず。

でも今までは女子同士、いわゆるレ：ゴホン：違った……”友チョコ”と言うものがある。

が、そればかりだとなんだか嫌なのだろう……

そこで1度男子に渡してみたいという欲望にかられた女子生徒たちが”仕方なく”おれに渡したんだな。

しかも手作りで。

いやあくみんなやつぱり男子に渡したいんだな……うんうん……

おれはそんな名推理をしながら教室へと向かった。

うん、チョコ重い………

「あ、ナオキくんだー！」

「ん？この声は………」

そう、この聞き覚えのある元気な声は……

「おはよう！」

「おはよう穂乃果、はやいな」

「えへへへ」

でも凄い荷物だね？なにこれ？」

「ああ……みんなから貰ったチョコだよ。やつぱりみんな男子に渡してみたいんだな……」

「あははは……ナオキくん分かってないなあ」

「ん？なんか言った？」

「え……ううん！なんにも！」

「そうか……さ、はやく教室に行かねーと」

「そ……そうだね……」

おれは穂乃果と一緒に教室に向かった。

教室でもヒフミとかクラスメイトとかからチョコを貰った。

また手作り……

みんなチョコ作るの好きだなあ

てか机の中にもあったし……

これじゃあ誰から貰ったかわかんねーよ……

その後海未とことりも来て、やはりというかなんというか…驚いてました。

そしてまずは1時間目の休み時間、おれは絵里にお弁当を貰ってないのに気づいて、絵里のいる教室へと向かった。

3年生の教室のある階に行く途中も絵里の教室に向かうときも女子生徒に捕まってチヨコを貰った。

「や…やつと着いた……」

おれはやつとこさ絵里のいる教室に着いた。

ガラガラ…

「失礼しまーす……絵里はいますか〜?」

「あら、ナオキ!?!どうしたの?」

絵里が近づいてきた。

「ああ…弁当貰うの忘れてたって思ってた」

「そう言えばそうね……ちよつと待つててね」

絵里が弁当を取りに行っている間にも他の先輩方がおれにチョコを渡しに来てた。

「お待たせ〜つて…チョコ多いわね…」

「あははは……みんなやつぱり男子に渡してみたんだな」

「……そう……はいお弁当」

「ありがとう……じゃ、また」

「ええ……」

いつもは絵里と一緒に食べるんやけど……今日は生徒会の仕事があるから生徒会室で食うんだよ……

そして2時間目の休み時間……

今度はりんばなに屋上に来るように言われた。

その途中も女子生徒にチョコを貰った。

ガチャ…

「お待たせ〜」

「あ、来たにや!」

「ごめん…急に呼び出して」

「いいよ…で、何のよう?」

「えつと…その…//」

花陽がモジモジしている…

「はい、これ!バレンタインチョコにや!」

すると凧はおれにチョコを渡してきた。

「おお…ありがとう!」

「えへへ…手作りだにや!かよちんと一緒に作ったんだよ!」

「ハラショー!手作りか!」

花陽と一緒にすることは…花陽も?」

「え…えつと…//」

「ほらかよちん!」

凧は花陽の背中を押した。

「ふえええええ!？」

「おっと……」

花陽は凜に押されてバランスを崩しかけた。

おれは花陽を受け止めた。

「ふえ……ふえ!?!／／／／」

「大丈夫か？」

「う……うん……／／／／」

「さ、渡すもんがあるんやろ？」

おれは花陽を離して花陽の返答を待った。

「えつと……／／／／」

「さ、かよちん!」

「うう……これ! チョコレートですう!!／／／／／」

「ありがとう……花陽」

「い……いえ! そ……それじゃ……また!」

花陽は走って教室に帰っていった。

「あ、かよちん待ってにゃー!」

「じゃあまた部活で!」

凜も帰っていった。

「さて、帰るか……」

おれも教室に向かった。

教室に帰ると穂乃果、海未、ことりの3人がなにか話していた。

「おい、なに話してんだ？」

そうおれが声をかけると3人はビクツとしてこっちを向いた。

「い……いや……ちよつとね……」

「あははは……」

「さ、もうすぐチャイムがなりますよ」

「ん？なんだよそれ……」

なんだってんだよ……つたく……

そして3時間目の休み時間……

おれは穂乃果、海未、ことりに囲まれた。

「な…なんだよ……」  
すると穂乃果が……

「はいこれ！バレンタインチョコ！」

「お…ありがとう」

続いてことりが…

「私からもどうぞ」

「ありがとう」

「ほら！海未ちゃんも！」

「はやくはやく」

「せ…急かさないで下さい！

え……えつと……／＼／＼

海未はモジモジしていた……

なんだよ…どうせ義理チョコとかなんだからはやく渡せばいいのに……

「こ…これ！どうぞ！美味しくなかったら燃やしてくれて構いません!!」

そう言つて海未はチョコを差し出した。

「これ、海未の手作りか？」



「は……はい……3人で作りました……」

「なら絶対美味しいよ。安心しろちゃんと食べるからさ」

「そ……そう……ですか……?」

「ああ……だから燃やしたりなんかせんと、おれの胃の中に入れてさせてもらうよ。ありがとう」

「い……いえ!／＼／＼」

海未はどこか安心したようだった。

そして……待ちに待った……昼休みだ!!

「先に生徒会室に行ってもらってもいいですか?」

ちよつと用を済ませてから行きます」

「あ、私も」

「了解!」

海未とフミコがそう言ったからおれは先に生徒会室に向かった。

ガチャ…

「お、真姫…はやいな」

「ナオキが遅いだけでしょう？

海未とフミコさんは？」

「ああ…ちよつと用を済ませてから来るってよ」

「そ…そう…」

真姫は髪をクルクルさせながらそう言った。

おれはイスに座って弁当を広げた。

「ねえ…」

「ん？」

「はいこれ！受け取りなさいよ！」

「これは…チョコか？」

「そうよ！はやく受け取りなさいよ！」

「あ…ありがとう…」

「か…勘違いしないでよね！」

ママが作ってあげればって言ったから作っただけで…別にナオキのために作ったんじゃないんだから！」

「お…おう……」

おれは真姫からチョコを受け取った。

そして海未とフミコも来て昼飯を食べて、仕事をして教室に戻った。

その道中……

「あ、ちよつとトイレ行くわ…」

「わかりました…では先に戻ります」

おれはトイレに向かった。

そしてトイレから出ると……

「ふう…スッキリした…」

「ナ～オ～キ～くん！」

「わっ!？」

の…希?!?ど…どうしたんや…?？」

トイレから出ると希がいた。

「はいこれ」

「これは…チョコ?」

「せやで～! 頑張つて作つたんや」

「そうなんか…ありがとう」

「いえいえ～ほなまた部活でなあ～」

「おう!」

おれと希は別れた。

そして5時間目の休み時間…

今度はこちらに呼び出されて部室へと向かった。

ガチャ…

「お待ちせう」

「遅い!」

「すまんかったって……で、何のよう?」

するとここは急にモジモジしました。

「い……いや……その……// //」

「ん?」

「えつと……はいこれ!」

「これは……チョコ?」

「そうよ!悪い?」

「……いや……嬉しいよ。ありがとう」

「え……ええ……」

「じゃあおれ戻るわ」

「わかった……また……部活で……」

「ああ……また」

おれは教室へと戻った。

そしていつも通り部活も終えて、絵里と一緒に家に帰った。

「つたく…なんで日曜なのに学校があつたんだよ……」

「仕方ないでしょう？ 卒業式前に全部の授業終わらせないといけないから…たまにはあ  
るわよ」

「今までもそうやったんか？」

「ええ…何回かあつたわね」

「そうか……」

それでおれたちは歩いていった。

「…ねえ……」

「ん？」

「……………重たくない？」

「……………重たいです……」

おれはほとんどの……………てかこの数はおそらく全生徒から貰ったチヨコを持って  
いたんだが、くそ重たかった……

「はやく帰らなきゃね」

「そうだな……」

ちよつと急ぎめに歩き始めた。

「……ねえ……」

「ん？」

「……今日……泊まっていい？」

明日休みだし……」

「ああ……いいよ……」

「やったー！」

絵里かわいい……超かわいい……

そして絵里はおれの部屋に泊まることになって風呂にも入ってゆっくりしていた。

「うわ……冷蔵庫がいっぱいだ……」

冷蔵庫に貰ったチョコをしまうのだが、キッツキッツだった。

仕方なくクーラーボックスとかにも入れた。

そしたら絵里が風呂から出てきた。

「あがったわよ〜」

絵里が髪を拭きながら入ってきた。

「あ……ああ……」

見とれた……いっつも見とれてるけどやっぱり風呂上りの絵里は見とれちゃう……

「ん？どうしたの？」

「い……いや……なんでも……」

「そう……じゃ、ナオキの部屋に行きましょう」

「あ……ああ……」

おれたちはリビングからおれの部屋に移動した。

「ねえ……ナオキ……」

「ん？」

「今日……みんなからチョコ貰ってどう思った？」

「どう思ったって……みんな男子に渡してみたいんだな〜って」

「ふふっ……そう……」

「な……なんだよ……」

「いや……ナオキって意外に分かってないんだなあ〜って……」

「な……なにが？」



「みんな、ナオキは唯一の男子だから渡したいんじゃないのよ」

「な…なんだと!？」

それじゃあ…みんな義理チョコを他の誰でもないおれに渡したかったのか？」

「まあ…そういう事なんだけど……」

「待てよ……おれ……お返しどうしよう……今の全校生徒に渡さなきゃ……卒業する先輩たちにも……ああああ!!」

「気にするところそこなの!？」

やばいぞ……どうすれば……くっ……

「ナオキ……」

「な…なんだ?」

「ちよつと……嫉妬しちゃうなあゝつて……」

「…おれがみんなからチョコ貰ったから?」

「……まあ……」

絵里は視線を逸らして言った。

愛おしい……

「絵里……」

「え？んっ……」

おれは絵里の唇にキスをした。

「はあ……ごめん……」

「別にいいのよ……それに……私もチョコ……作ったの……」

「マジか!？」

「ええ……だから朝一緒に行けなかったのだけれど……」

「そ……そうなんか……」

やった！なによりも嬉しい！

絵里からのチョコ！

みんなのは義理だろうけど、絵里からの本命だな！ハラシヨー！

「ちよつと待っててね……」

え〜つと……」

すると絵里は鞆からチョコを探し出し、その封を開けて、それは何個かに分かれていて、1つチョコを取り出して口にくわえて……

…って、口にくわえて!?

「ちよつ…絵里!何して……」

「ん……」

絵里はベッドの真ん中に座り、口にくわえたチョコをおれの方に向けた。

「え…絵里……」

こ……これって……

こんなプレイって……あつたの……

「ナオキ……私の作ったチョコ……食べて……」

ああ……これもうダメ……

おれは絵里の方に向かい、肩を持ち、絵里の口にあるチョコを……

「はむっ……んっ……ゴクツ……ちゅっ……くちゅ……」

「んっ……んっ……んー……はあ……」

食べて、飲み込み、そのまま舌を絡め、デーパーキスをした。

一緒に唾液も……oh……ハラシヨ……

「もつと……食べたいな……」

「ええ……いいわよ……」

そして絵里はまたチョコを口にくわえて、おれはそれを食べ、飲み込んでディープキスをした。

「……はあ……まだ……残ってるな……」

「うん……全部……食べる?」

「ああ……絵里が作ってくれたチョコだ……全部食べるよ……」  
「わかったわ……」

そしてまた絵里は口にチョコをくわえて、おれはそれを食べて、飲み込み、ディープキスをする。

それを何回も繰り返した。

「はあ……はあ……はあ……次でラストか？」

「はあ……はあ……そうね……」

そして絵里は同じようにして、おれも同じようにした。

だが、おれはキスをやめない。

どんどん激しくしていった。

絵里も少し戸惑って唇を離れた時に……

「……はあ……ちよつと……」

「ん？ダメか？」

「そ……そんなことは……」

「チヨコはないけど……ここまでされたらしたくなるんだよ……」

「ナオキ……」

「絵里……」

おれは絵里の胸を揉みながら絵里の唇にキスをして……

「絵里……いいか？」

「……………うん……………」

そしておれは絵里を押し倒し、服を脱がせた……………

これがバレンタインというものか!!

ハラショー！

いろんな人からチョコ貰えたし、絵里からも貰えたし！

大変なのはホワイトデーか……みんなになにをお返ししようか……

そして絵里とやって昼頃に目覚めておれは服を着て、チョコの処理に取り掛かった。

しかもなぜか大体のチョコがハート型だったんだが……

はあ……バレンタインってのも楽しやないんだな……



## 第99話「ニューヨーク・パニック」

前回のラブライブ！

ついにアメリカに向かった私たち！

ナオキは飛行機を怖がってたわ…だらしない……

そしてアメリカに着いて、ナオキ以外はホテルに向かったの！

そしてナオキはアメリカのTV局、『Angel TV』にいた。

ナオキはアリスとともに通路を進んでいた。

「やっぱり広いですね……」

ナオキは辺りをキョロキョロしながら言った。

「このテレビ局はアメリカでNo.1なんでーす！これぐらい当然でーす！」

アリスは鼻を高くして言った。

「それさつきも聞きました……」

「……………」

「……………」

沈黙の時間がしばらく続いた。

「さ、ここが社長室です！」

「無視ですか……」

ナオキは

『なんでやねん!!!』

と全力でツツコミをしようとしたがそこはアリスが年上なのを考えてそれはやめたのだった。

コンコンコン…

「Please come in. 『どうぞ入ってください。』」

アリスがノックをすると中から男の人の声が出た。

(きつと社長さんともなれば英語なんてもうペラペラなんだろうなあ。)

まあ、おれも練習の合間に英語の先生から英語をたんまり教えてもらったんだが……

大丈夫……なのかな？もし、言ってることがわかんなかったら……

アメリカライプは失敗、おれは会長になれず、さらにみんなから軽蔑な目で見られて……うっ……頭が……)

ナオキはそんなことを考えていた。

「さ、入りますよー」

アリスは言った。

「あ、はい！」

ナオキはとてどもドキドキしていた。

ガチャ…

「パピーー！」

アリスは入った途端に手を広げて社長席に座っている男の人の元に向かった。

「おー！アリス!!」

その男の人は立ち上がり、アリスの元へ向かった。

「パピーー！ただいまでーす！」

「おかえりアリス！元気だったかい？」

「イエース！あ、そうだパピーー！あちらがナオキくんできーす！」

アリスがそう言うのと社長はナオキの方を向いた。

「やあ、君がナオキくんだね。初めまして、私がアリスの父でこのテレビ局の社長をしている佐藤歩だ。よろしく」

そう言うのと社長の歩は右手を出した。

「はい、初めまして。音ノ木坂学院生徒会長でスクールアイドル μsの香川ナオキです。よろしくお願いします」

ナオキはそう言って歩と握手を交わした。

2人は思い出したかのように名刺を交換した。

そしてナオキは耐えていた……………

本当は……………

『日本人なんか……………いい!!!』

と声に出してツツコミを入れたところだが、やはりここも心の中だけに抑えていた。

「……………いい目をしている……………」

「は……………はい?」

「いや……………君の目はとても輝いている。

だから信用できそうだよ」

「そ……それは……どうも……」

「さき、そこに座ってくれ。ライブの話をしよう」

「はい、失礼します……」

ナオキはソフアーに座った。

歩は向かいに座り、アリスは歩の隣に座った。

「ナオキくんはすごいです！」

「え？」

3人が座るとアリスは手を合わせて言った。

「パピーはすぐには人を信用しないんです。そんなパピーがすぐにナオキくんを信用するなんて！すごいです！」

「そ……そうなんですか!？」

ナオキは目を丸くした。

「うむ、でも君の目は信用できる人の目だから……」

「ふふっ……」

「さ、今度こそライブの話をしようか……」

「はい。まず、これが資料です」

ナオキはそう言って資料の入った封筒を歩に渡した。

歩は封を開けて中から資料を取り出し、目を通した。

「スクールアイドルというのは最近高校生を中心に人気がある部活動のようなものです。最初は小さな範囲でしたが、今となつては北海道から沖縄までに広がり、各都道府県に3つはスクールアイドルのグループがあります」

「おお、すごいな……」

「はい……そしてそのスクールアイドルの全国大会……メジャーで言えばワールドシリーズみたいなものが、”ラブライブ!”なんです。

そして私のおじ、伊藤晋三を会長としたラブライブ！運営委員会が行うスクールアイドルの支援などを行うプロジェクトが”ラブライブ！School idol project”と言っています」

「なるほど……つまりはそこでスクールアイドルの頂点を決めるわけだな……」

「はい、そういうことですな。」

そして第1回ラブライブ！の優勝はUTX高校のA|R|I|S|E。第2回ラブライブ！優勝が私たち音ノ木坂学院のμ'sです」

「ふむ……大体は分かった。

なかなか面白そうじゃないか……」

歩は自らのヒゲを触って言った。

「はい！スクールアイドルたちが頑張る姿にはみんなが元気を貰っていると思います  
！」

「ほほう…君がそれほどまで言うスクールアイドルがどういものか早く見たくなつた  
……」

そう言うとは歩は立ち上がり、窓の方へと歩いた。

「ナオキくん……」

「はい！」

歩は窓から外を見つめて言った。

「ライブまではまだ少し時間があるが、ライブをする場所を決めて欲しいんだ」

「場所…ですか？」

「ああ…それは君たちに任せるよ……」

「………なら一ついいですか？」

ナオキは少し考えて言った。

「なにかね？」

「この近辺で人が集まりそうな場所はどこですか？」

「集まりそうな場所……」

「そうだな…『タイムズスクエア』なんてどうだい？」

「タイムズ…スクエア…？」

「ああ…あの交差点みたいな所ですか？」

「そうだ。あそこなら人が集まりそうだぞ？」

「ライブはそこですか？」

「いいえ、また全員で決めたいと思います。」

「でも、私はそこがいいかと思えます」

「そうか…まあ、決まったら私に連絡をくれ」

「分かりました！」

あと、タイムズスクエアへのルートを教えていただきたいのですが…」

「ああ…いいとも」

すると歩はメモにタイムズスクエアまでのルートを書き出した。

（タイムズスクエアか……行ってみたかったんだよなあ〜）

ナオキは内心ワクワクしていた。

「よし、これがタイムズスクエアまでのルートだ」

「ありがとうございます！」



「どうってことないさ。ライブ…楽しみにしているよ」

「はい！ご期待に添えるように努力します！」

「ハツハツハツハツハ！面白いね〜君は。これは期待しても良さそうだな」

「ありがとうございます」

「それではな…ナオキくん」

「はい！」

歩とナオキは握手を交わした。

「あ、そうだ…長旅で疲れたろう？」

「これを含んで食べてくれ」

「い…いいんですか!?ありがとうございます！」

歩はナオキに“ある物”を渡した。

それは、あとの、お楽しみ♡

そしてAngel TVを後にしたナオキはタイムズスクエアへと足を向けた。

一方、ナオキと別れた9人はタクシーで10人が泊まるホテル：『Sun risi ng Hotel』へと向かい、絵里・穂乃果・花陽・真姫・にこ・希はホテルのロビーで海未・凜・ことりの到着を待っていた。

「遅いわね……」

真姫は言った。

「いくらなんでも遅すぎるわよ！」

にこは言った。

かれこれ6人が到着してから30分は経っている。

「道でも混んでるんかな？」

希は言った。

「でも、私たちはすぐに来れたからそんなことはないと思うけど……」

花陽は言った。

「穂乃果……ちゃんとこのホテルの名前書いたわよね？」

絵里は声を震わせながら言った。

「うん！」

穂乃果は自信満々に言った。

「じゃあ、なんて書いたか覚えてる？」

「え〜！え〜つと……え〜つと……」

穂乃果は腕を組んで考えた。

「ついでに……このホテルは『Sun rising Hotel』よ」

真姫は絵里の書いたメモを穂乃果に渡した。

「うん！ちゃんと……ちゃんと……あ……」

「「「「え……？」」」」

穂乃果はそのメモを見るなりやってしまったという表情をした。

「穂乃果……まさか……」

「あはははは……穂乃果……こんなふうに書いてない……」

「「「「えー！！」」」」

ということと海未・凜・ことりは……

『Sun rising Hotel』ではなく、

『Sun rise Hotel』の前にいた。

「「「ここがホテル……ですか？」」」

「なにか…違うような……」

「お化け屋敷みたいだにゃ〜」

すると凜は穂乃果から受け取ったメモと今いるホテルの名前を見比べた。  
そして凜は気が付いた……………

「ああああ!!聞いてたのと名前が違ううううう!!」

「「ええ〜!」」

「うう……………もう嫌ですう……………」

海未は拗ねてその場に座り込んでしまった。

「とりあえず……………みんなに電話を……………」

ぷるるるる……………

ことりがスマホを取り出すと電話がなった。

「あ、絵里ちゃんだ!

もしもし?」

『あ、もしもしことり?今どこにいるの?』

「えつと……………『Sun rise Hotel』っていうところ……」

『や……………Sun rise Hotel!?!』

と……………とりあえずそこから動かないでね!』

「う……うん……」

「絵里ちゃんは何んて言ってたの？」

凜は言った。

「ちよつとここで待ってて……」

「うう……はやくホテルに行きたいです……」

「とりあえず、連絡があるまでここで待とう？」

「そうだね……」

3人は連絡があるまでその場で待つことにした。

そのころ、タイムズスクエア……

「ハラショー！」

ナオキはタイムズスクエアに着くなり、建ち並ぶビルなどを見て目を輝かせて言った。

「人もたくさん……あそこのビルとかも使えるな……うん、バツチシだ！」

みんなに提案してみるか………」

ナオキはスマホを出して写真を撮った。

そんなとき……

ぶるるるる……

「うおーびつくりした……ん？」

絵里……もしもし？」

『あ、もしもしナオキ？大変なの！』

絵里はとても慌てていた。

「な……なにがあつたんや!？」

『それが……海未とことりと凜が違うホテルに着いちやつたみたいで……』

「なっ!?!ちゃんとメモを渡したんじや……」

『その……穂乃果のメモが間違つてたみたいで……』

「なるほど、理解した……」

で、3人はどこに？」

『えっと……「Sun rise Hotel」つてところみたい』

「Sun……rise……か……ちよつと待つてて……」

あ、Excuse me! Do you know Sun rise Hotel slightly? 『すみません! Sun rise Hotelはどこかわかりますか?』

「Then I do it near here. 『それならこの近くですよ。』」

ナオキは近くを通つた人にそのホテルの道を聞いた。

「Thank you! 『ありがとうございます!』」

ああ……道はわかつたから海未たちにそこで待つとくように言つて!」

『わかつたわ!』

「それじゃあ……」

「ええ……」

ナオキは電話をし終わると『Sun rise Hotel』へと向かつた。

「急がなきゃ……」

ナオキは走つて向かおうとした。

すると……

「お、沖繩で会った兄ちゃんやんけ！」

「ん？この声は……………」

ナオキは声のする方に顔を向けた。

「あ、石くれたおっちゃん！」

「おお…覚えとつてくれたか！」

「当たり前です！本当にありがとうございます！」

ナオキはお辞儀をした。

「…その反応とその指輪をみると……………成功したみたいやな……………」

「はいー！」

そこでナオキが再会したのは、沖繩で誓いの石をくれた占い師の人だった。

「それはよかったわ……………おめでとう！」

「ありがとうございます！これもおっちゃんが誓いの石をくれたおかげです！」

「いやいや、最後に決めたのは自分やんか」

「まあ…そうですけど…」

あれ、おっちゃんはなんでここに？」

「ああ…ちよつと妻や友達と旅行でな……………」

「1回昔にもみんなでここに来たことがあつて懐かしくなつて来たんや」



「そうなんですね……」

「それよりどうしたんや？なんか慌てとつたみたいやけど……」

「あつ！そうや！友達が違うホテルにいるんです！おれ行かなきゃ！」

「そうか……それはすまんかったな……」

「じゃあ、またいつか会おうや」

「はい、またいつか！それでは！」

ナオキはSun rise Hotelへと走って向かった。

「変わらないな………やっぱり人のために全力を尽くすのか………」

男はそう呟くと人混みの中に消えていった。

「はあはあはあはあ………」

ナオキは走っていた。

「あ、ナオキくんだ！おーい！」

凧はナオキを見ると手を振った。

「ナオキくん！」

こことは笑顔で言った。

「うう……ナオキ……？」

海未は顔を少し上げてナオキを見た。

「はあ……はあ……待たせてすまんかったな……さあ、行こう」

「うん！」

こことりと凧は返事をした。

しかし……

「うう……動きたくありません……」

海未は座り込んだままだった。

「ずっとこの調子にや〜」

「どうしようっ？」

「う〜ん……」

ナオキは腕を組んで考えた。

「しゃーね……ほら、おぶってやるから……はやくしろ……」

ナオキは海未の前に背中を向けてしゃがむと、少し照れながら言った。

「えっ……そ……それは……」

海未は顔を赤くして戸惑った。

「なんだよ……動けないんやろ？」

ほんならしゃーねーだろ！ほら！

海未はまだ少し遠慮していた。

「で……では……失礼します……」

海未はナオキの背中に乗った。

「よし、それじゃあ行くぞー」

ナオキは海未をおんぶして『Sun rising Hotel』に向かった。

そんな海未を見てことりと凜は少し羨ましく思っていた。

海未は顔を赤くしてナオキの背中に埋めていた。

（ナオキの背中……あつたかいですね……）

ナオキはおぶってからはあまり照れてはいなかったようだ。

「海未、大丈夫か？」

「は…はい！全然……／＼／＼」

「そりゃあよかった……」

「はい…（…む…胸が当たってますが…大丈夫でしょうか…？）／＼／＼」

そしてホテルが見えてきた。

「あ、3人とも！あれがおれたちが泊まるホテルだ！」

「「おお〜！」」

「やっつとですか……」

海未は涙声で言った。

「あ、ナオキく〜ん！みんな〜！」

ホテルの前で待っていた希はナオキたちを見て手を振った。

「希ちゃん！」

凜も手を振った。

そして合流した10人は海未の入る部屋へと向かった。

海未・ことりの部屋……

「うう……」

海未はベッドの上で座り込んで泣いていた。

「あはははは……ごめん！絵里ちゃんから渡されたメモ写し間違えちゃって……だって英語「今日という今日は許しません！あなたのその雑で大雑把でお気楽な性格が、どれだけの迷惑と混乱を引き起こしていると思うのですか!!」

穂乃果が言い訳をするも、それを海未は遮って怒鳴った。

「ま、ちゃんと着いたんだし……い「それは凜がホテルの名前を覚えていてナオキが近くにいたからでしょう！」

もしそうでなければ今頃、命は無かったのですよお〜! ……はあ…」  
海未は真姫の言葉も遮ってそう言っておいおいと枕に顔を沈めて泣いた。

真姫はため息をついた。

「命って……大袈裟過ぎだろ……」

ナオキは頭をかいて言った。

「海未ちゃん! みんなの部屋見に行かない?」

穂乃果は海未の機嫌を直そうと提案した。

だが海未は枕に顔を沈めたまま首を横に振った。

「ホテルのロビーも凄かったわよ?」

絵里も提案したが、海未の反応は同じだった。

「じゃあ近くのカフェに……」

穂乃果は再度挑戦するが、海未の反応は同じだった。

穂乃果は大きいため息をついた。

「あつ、そうだ!」

ナオキはなにか思い出したかのように言った。

「どうしたの?」

花陽は言った。

「花陽、その箱取ってきてくれ」

「え？ああ…これ？」

「それそれ！」

「なんなのそれ？」

穂乃果は不思議そうに聞いた。

「テレビ局の社長にみんなで食べてくれて貰ったんや…：カップケーキ！」

そう、ナオキがあのとときに受け取ったのはカップケーキだった。

すると海未はチラツとそのカップケーキの方を見た。

「おお！いいね〜！」

穂乃果は言った。

「じゃあそれ食べたなら明日からの予定を決めましょう！」

「うん！」

海未ちゃんも…食べるでしょう？」

「はっ！」

い…：…いただきます…：／／／

「（食うんかい…：）じゃ、各自部屋に戻って荷物の整理して、暗くなったら飯でも食い

ながら予定話そうや」

ナオキがそう言うともみんなは頷いた。

そして各自、自分たちの入る部屋へと向かった。

ナオキと絵里は最後に海未・ことりの部屋をでた。

「さ、行きましょう」

「ああ！」

絵里とナオキは2人が入る部屋に向かった。

「えくつとおれたたちの部屋は……ここか！」

「そうみたいね」

「じゃ、入ろうか」

ナオキはカードキーを刺してドアを開けた。

「はい、レディーファースト……」

「ふふっ……ありがとう」



2人は部屋に入った。

そして中に入って2人の目に飛び込んで来たのは……

「ちよつと希んところ行ってくる」

ナオキは荷物を置いて希のいる部屋へと向かった。

希・真姫の部屋……

「イヒヒヒ……あの2人今頃どうしてるんやろうな……」

「ん？なにか言った？」

「べつにつに〜」

希はなにか企んでいそうな顔をしていた。

「いや……その顔はなにか企んでるでしょ？」

「おお！真姫ちゃん凄いやん！」

「そんなのこれだけ一緒にいればわかるわよ」

「ふふふ……では真姫ちゃんにだけ教えてあげよう……それは……「へ〜おれにも聞かせて欲しいなあ〜」……ギクツ！」

希は真姫になにかを話そうとしたが、背後からの声に反応し、恐る恐る後ろを振り向いた。

そこには黒いオーラを纏ったナオキが腕を組んで立っていた。

「ナ……ナオキくん……」

も……もうダメやくん！女の子の部屋にノックなしで入ってきちゃ〜！あはははははは……」

「あはははは…そうだなあくすまん…ははははは」

「笑つてない！顔が笑つてないやん！」

「とりあえず説明して貰おうか？」

「さあ？なんのことかわから」「説明して貰おうか？」…え…つと…「せ…つ…め…い…し…て…も…ら…お…う…か？」……はい…」

「ナオキはなんで怒ってるの？」

するとナオキは真姫の方を向いた。

「ああ…こいつがおれと絵里の部屋をだな…ハネムーン仕様にしやがったんだよ」

「なるほど…」

実は希はしおりを作る時にナオキと絵里の部屋をハネムーン仕様にして欲しいとホテルの方に希望を出していたのだ。

「で、なんでおれたちに黙ってこんな事を？」

「そ…それは…」

「それは？」

「それは…（ここで悪ふざけって言ったら確実に…ここは違う理由を…えつと…えつと…えつと…）」

希は必死で考えた。

そして、あるひとつの答えを導き出す！

それは……

「ナ…ナオキくんとえりちはついこの間に婚約したやん？

だから……その……この旅をいい思い出に思ってもらおうと思ってハネムーン仕様に  
してもらったんや！

一種のサプライズやね！（流星にあかんかな……）」

（いや、バレバレでしょ！）

真姫は心の中でそう思っていた。

だが……

ナオキは顔を赤くして……

少し申し訳なさそうに……

「そ……そうやったんか……す……すまん……誤解やっただみたく……その……ありがとう  
う……／＼／＼」

(騙せてる……)

希と真姫は驚いた。

「わ……わかればええんやで！」

この旅、ちゃんとえりちとナオキくんのええ思い出ししてや！」

「ああ……ありがとう！」

疑って悪かったな……じゃあまたあとで」

ナオキはそう言って部屋へと戻った。

「ふう……助かった……」

「よくあれで騙せたわね」

「ほんまにな……案内ナオキくんってチヨロインやなあ〜」

希はホツと胸を撫で下ろした。

ナオキ・絵里の部屋……

「……っっていうことらしい」

ナオキは絵里に部屋がハネムーン仕様になっている理由を話した。

「そう……希もたまにはいいことするわね」

「……さ、荷物の整理するか……」

「ええ……」

ナオキと絵里も荷物の整理をした。

だが、まだまだ旅は始まったばかり……

次回へ続く……

# 第100話 「みんなで作る1人の男の歩む道」少し先のミライ

「これからお話するのは男が歩む道の”少し先のミライ”である。

「……………お〜！……………」

真姫以外の9人が驚きの声をあげた。

今、10人は真姫の知り合いである出井治（でいおさむ）がオーナーを務めている『夢の国』（ドリームカントリー）に来ている。

実は今日がオープン初日らしく、是非遊んで欲しいと真姫に招待券が届いたのだ。そして”あの条件”のこともあり、10人はここに來ることにしたのだ。

「しかしその出井さんって人、太っ腹だな…」

ナオキは感心したように言った。

「そう？他のところからもよく招待券くるわよ？」



真姫は髪の毛をくるくるして言った。

「ハラショー！流石真姫ね」

絵里は言った。

「今までどこに招待されたの？」

花陽は言った。

「えっと……U○Jとかデイ○○ーラ○ドとか…」

「すごいやん！」

希は言った。

「流石真姫ちゃんだね」

「こっちは言った。」

「さ、はやく行きましよう！」

海未は言った。

「海未ちゃんがテンション上がってるなんて珍しいね」

穂乃果は言った。

「相当楽しみなんやね」

「そりゃあ出来たばっかりの場所で遊べるんだよ！しかもタダで！テンション上がるにゃ〜！」

凜は飛び跳ねて言った。

やはりみんなテンションが上がっているようだ。

1人を除いて……………

「あれ？ナオキどうしたのよ？目が泳いでるわよ？」

にこは言った。

「ソ…ソウカナ？イヤ、オレモタノシミダヨ！アハ…アハハハハ…」

ナオキは声を震わせて言った。

「さあ、早く行こう！」

穂乃果はそう言って走った。

みんなその後を追って走った。

ところである条件とは何か気になっているところでしょう。ある条件とはナオキが

μ sひとりひとりとデートすることだ。

くラブライブ！

「で、穂乃果は何がしたいんだ？」

まずは穂乃果とのデート。

「そんなの決まってるじゃん！」

穂乃果はそう言うところあるものを指さした。

ナオキはそれを見て固まった。

「ほ…ほんまにあれ行くん？」

「うん！」

「ねえ…違うのにしない？」

「え〜！遊園地と言えばジェットコースターでしょう！」

「いや…でも…」

「何？あんたこんなにあっついジェットコースターにも乗れないの？だっらしないわね

」

にこはナオキを見て言った。

「しゃ…しゃーねーだろ！」

「つたく…それでも男？」

「うっ…」

「さあ…さあ！」

にこはナオキに詰め寄った。

「乗ろうよナオキくん！ファイトだよ！」

「で……でも……」

ナオキはまだ拒んでいた。

ドドドドドド……

「ん？」

音がする方をナオキと穂乃果は見た。

するとたくさんの人たちが走ってきた。

「穂乃果……これって……まさか……」

「ナオキくん行くよーみんなジェットコースターに乗りたいんだよー」

穂乃果はナオキを引っ張って走った。

「(やつぱりか……) だ……だから……うお!？」

ナオキはずっと拒んでいたが、穂乃果とともに走ってきた人たちの人混みに押されてしまった。

くラブライブ!く

「それでは安全バーを下げます」

人混みに押された2人はジェットコースターの最前列に乗っていた。



ジェットコースターはスピードを上げてレールの上を走った。

『きやあああああああ！』

ナオキ以外の乗客の人たちはは楽しそうに両腕をあげて声をあげた。

しかしナオキは……

「やだあああああああ!!」

ナオキおうちにかえるううううううううううううううう!!」

くラブライブ!く

「うっ……うう……」

ナオキはベンチで泣いていた。

「いやあく楽しかった〜!」

穂乃果は大満足のようだ。

「うう……怖かった……おうちに帰る……ぐすん……」

「よしよし……」

絵里はナオキの頭を撫でた。

「うう……絵里いっく」

「はいはい……」

ナオキは絵里に抱きついて泣いた。

「はあ……だらしなくてすね……」

海未は呆れたように言った。

「だってさあ……ぐすん……」

「ほら！次は私の番ですよ！」

海未は無理やりナオキの腕を引っ張った。

「うおお!？」

くラブライブ!く

パン!パン!

今、ナオキと海未は射的場にいる。

「よっしゃー!やるぜえ!!」

「さつきと違つて元気ですネ……」

「ああ！しつかし……射的つていいよなあ〜！ハラショー！」

「まあ……私も弓道をやっている身なので……」

パン！

お世辞にも可愛いとは言えない、あからさまにうざい人形に海未の撃つた弾が命中する。

ゴトツ……

「ハルウアショー！」

「からかつてるんですか？」

海未はナオキを睨んだ。

「いや、そんなことねーよ！むっちゃうまいから褒めてるんだよ！凄いやー！」

「あ……ありがとうございます／＼／＼」

照れた海未は銃口を隣の“あるぬいぐるみ”に向けた。

撃つのかと思いきや、海未は震えて撃とうとしない。

「あれ？撃たんの？」

「えつと……その……あの子が欲しいのですが……」

「ああ……あのかわいくてくりつとした目をしたくまのぬいぐるみか？（てかその隣のネ



「コキめえ……」

「はい……欲しいのですが………かわいすぎて……（と言うかこの射的場の景品はみんな可愛すぎです!!あの隣のネコちゃんなんて……可愛すぎます……）」

海未は最後の一言はボソツと言った。

「なんだ……欲しいならおれが取ってやるよ……任しとけえ!」

「え……ちよつと……」

ナオキは銃口をそのぬいぐるみに向けた。

「大丈夫……1発で仕留める……」

パン!

ストツ……

ナオキの撃った弾がぬいぐるみに命中した。

「あ………ああああああああアアアアア!!!くまさんがあああああああ  
あああ!!」

海未はその光景を見て泣き崩れた。

「う、海未!?どうした!!」

ナオキは泣き崩れた海未を支えて言った。

「くまさんが……くまさん……が……ガクツ……」  
「ちよつ……海未!? おくい!」

海未はかわいいくまさんが撃たれたことにショックを受け、気絶した。

くラブライブ!く

「はあ……あんだ最低ね」

「ほんまにナオキくん、それはないやん」

「見損なつたにや〜」

にこと希と凜はナオキを冷ややかな目で見て軽蔑したように言った。

「なんでだよ!」

おれは海未がこれを欲しいって言ったから……」

ナオキはさつき撃ち取ったくまを持つて言った。

「「はあ……」」

3人は何も理解していないナオキに呆れてため息をついた。

「うう……絵里いっ」

「はいはい……」

ナオキはまた絵里に抱きついた。

絵里はまたナオキの頭を撫でた。

「さあ……次はことりの番だよ」

「そうか……ことりは何がしたいんや？」

「えっつと……」

ことりは人差し指を顎に当てて辺りを見渡した。

「あつ、メリーゴーランドがいい！」

ことりはメリーゴーランドを指さした。

「メリーゴーランドか……よかった……」

ナオキはホッと胸を撫で下ろした。

そして2人はメリーゴーランドへと向かった。

「さあ……何に乗るかな……」

ナオキは辺りを見渡した。

「えっつと……ことりは……」

「ことりは顎に人差し指を当てながら辺りを見渡した。

「ん？馬車に乗らないんか？」

「うん、それもいいけど……」

「あつ！あれに乗りたい！」

「ことりはあるものを指さした。

「え!?そんなんあんの!?メリーゴーランドやぞ！」

「珍しいね〜！じゃあことりあれに乗るねえ〜」

「ことりはそれに向かって歩いた。

「ほんまに乗るんか？」

「ペガサスに……」

「うん！よいしょつと……」

「ことりはペガサスに乗った。

「ナオキはその隣の白馬に乗った。

「それではいつてらつしやーい！」

「ぶるるる……」

その合図とともにブザーが鳴り、メリーゴーランドが動き出した。

かつてμsが”あのライブ”で披露した『僕たちはひとつの光』のメロディーにのって……………

2人は少しその歌を口ずさみながら楽しんでいた。

「あははは…メリーゴーランドって楽しいね〜！」

「そうだな！」

そしてしばらく経って……………

「あれ？」

「ん、どうした？」

「えつと……………このペガサスが動いたような……………」

「はあ？そんなことあるわけねーだろ…はっはっは…」

「だ…だよねえ〜……………ははははは……………」

すると……………

「うわあ!？」

「なっ……………まじで動いた!？」

「え……………ええ〜!？」

ことりの乗っていたペガサスは動き出し、羽を羽ばたかせ、ことりを乗せたまま大空へと飛び立った。

「はあ!?ちよつ……ことり!?

ことり~~~~~!!!」

「わつ……ちよつ……えつ……本当に……本当に飛んでる!飛んでるよお!!あははははは……」

ことりは最初は戸惑っていたが、徐々に乗り気になり、ペガサスを操って空を飛んでいた。

「え~~~~~」

ナオキはことりが飛んで行った先を口を大きく開けて見た。

くラブライブ!〜

ナオキは”1人で”メリーゴーラウンドを降りて、みんなと合流し事情を話した。

そしてナオキはみんなにジュースを買うために出店へと向かった。

「はあ…ジエツトコースターに乗らされるわ、海未に景品を取ってやったのに何故か責められるわ、ことりはペガサスに乗ってどっか行くわ……………」

色々ありすぎだろ……………今日……………」

ナオキはその道中に疲れた様子でブツブツと言った。

そしてナオキは出店についた。

「すみませ〜ん！ジューズくださ〜い！」

「はいよ〜！何にしま……………す……………つて……………ナオキ？」

「え？……………その傷……………もしかして……………奏多？」

「おう！久しぶりだな！」

ナオキがそこで再会したのは、大阪の小学生時代の同級生の雨杏奏多だった。

「ほんまに久しぶり！なんでここに？」

「ああ…4月に東京に越してきたんだよ」

「へ〜」

ナオキと奏多は仲が良かったが、ナオキが希と別れてからしばらく経って同じクラス  
のほとんどの男子や少数の女子はナオキをいじめだした。それはナオキが奏多以外と  
はあまり交流しようとしなかったからだ。ナオキがあまり男性と交流しようしない

のはそのためだ。

奏多は最初は止めに入ったが、いじめていた人たちに顔に傷を負わされ、それから自分もいじめの対象になることを恐れ、ナオキからはキヨリを取るようにした。でもナオキは感謝していた。

そのときに奏多が止めに入っていないければナオキが傷を負っていたからだ。

だからナオキは奏多のことを嫌いにはならなかった。

それからしばらくしてナオキは転校してしまい、今まで会っていないかったのだ。

だが親同士が繋がっていたため、電話では何度かは話していたらしい。

「はいよ、ジューズ10本……」

「ありがとう!」

「で、今日はなんでここに?」

「ああ…友達と遊びに来てんだよ」

「ほほう……お前のことやから……さては女子ばっかか?」

奏多はイタズラな目でナオキを見て言った。

「なんでわかった!?!」

「ははは……お前は女の子大好きだからな」

「なっ……// //」



「つたく……変わんねーな」

「お前もな……」

「ああ……」

「じゃあ、また会える時があつたら……」

「あいよー！」

2人は手を挙げて言った。

ナオキはその後に食べ物を買ってみんなの元へと戻った。

くラブライブ！く

「で、凧はなにがしたいんだ？」

昼食後、次は凧とのデート。

2人は歩きながら話していた。

「うくん……はっ！」

「ん？どうした？」

凧は何かに気づいて声をあげて鼻をくくんくんした。

「こ、これは……ラーメンのにおい！」

「ラーメン?……くんくん……そう言えば……」

ナオキも鼻をくんくんすると、確かにラーメンのにおいを感じた。

「あ!あつちだにゃ〜!」

「ちよつ……待てよ!」

凜はにおいがする方へ走り、ナオキはそれを追いかけた。

「へいらつしやい!」

「わあ〜!ラーメンだあ〜!」

「ちよつ……はえーって……」

2人が向かった先は怪しい建物だった。

その前には小さな屋台があった。

「これは……『○ちゃんらあめん』だにゃ!」

「おつ、嬢ちゃんわかるのかい?」

「うん!凜、何回も食べたことあるにゃ!」

その屋台は凜が何回も食べたことがあるというラーメン屋の屋台だった。

「でもなんでラーメン屋の屋台がこの怪しい建物の前に?」

ナオキは言った。

「ふふふ……それはな……ここを制限時間内にクリアすると……」

「すると……?」

「なんと!ラーメン1週間無料券をプレゼント!!」

「お〜〜!!!」

凜は目をキラキラさせて喜びの声をあげる。

「ほう……1週間無料か……」

「そうだにや!しかもあの○ちゃんらあめんだよ!○ちゃんらあめん!」

「お……おう……そうか……それはよかったな……」

凜はナオキに詰め寄った。

「で、やるかい?」

「やるにや!!」

凜は即答した。

「ちよつと待てちよつと待て星空さ〜ん!

何をするかわからんやぞ!」

「あつ、そつか!おじさん、なにをしたらいいのかにや?」

凜はナオキに言われて屋台のおじさんに聞いた。

「それは……この……」

『お化け屋敷 DE 迷路』だー!!!」

屋台のおじさんは右手を広げて後ろの建物に向けて言った。

「お化け屋敷 DE 迷路?」

「そう! その名の通り、お化け屋敷の中に作られた迷路を制限時間内にクリアすれば無料券をゲットできるのだ!」

「そんなの楽勝だにや〜! ナオキくん、挑戦してみるにや!」

「(こいつみんなで花やしき行ったとき仕掛けにビビって逃げたくせに……) まあ………凜がそう言うならいいけどよ……」

「決まりだにや! おじさん、やるにや!」

「あいよ! 制限時間は50分! 頑張れよ!」

「は〜い」

そして2人は建物の中に入って行った。

「ラーメン! ラーメン! ……」

凜は「ラーメン!」と連呼しながら歩いていた。

「おい凧早いって。てか離れすぎだ」

「え〜！だつて早くしないとラーメンが逃げちゃうにや〜！」

「だからこれは迷路やから少し落ち着いて……」

「あ、行き止まりだにや〜」

「ほ〜ら、言わんこつちやね〜」

すると上から生首の模型が落ちてきて凧の顔の真正面で止まり、凧とその模型の目が合った。

そして凧の顔はどんどん青くなっていった。

「にやあああああああああ!!!」

「ちよっ…凧!」

凧はその仕掛けに驚いてどこかへと走って行った。

くらぶライブ!〜

「お〜い、り〜ん!どこだ〜?」

ナオキは凧を探していた。

「つたく……あいつどこ行つたんや？」

ナオキは頭をかいた。

すると……

「ワン！」

「ん？犬？」

「ワン！ハアハアハアハアハア……」

「おーよしよし……」

ある一匹の犬がナオキに近づいてきた。

その犬は、灰色の毛で一部が黒く、小さい割には牙が大きかった。

「ん？首輪ついてる……『ポチ』」

「……こいつポチって言うんか……」

「ワン！ハアハアハア……」

「なんだ……お前も迷子か？」

犬なら迷子の子猫ちゃん凜を見つけてくれよ……なーんてな……ははは……（こいつの飼い主も探す

か……）」

「ワン！」

「おいポチ!？」

ポチはナオキの言葉を聞くとどこかへ走って行った。

ナオキはポチを追いかけた。

「ワン！」

「!?……っちか！」

ナオキが分かれ道に差し掛かるとポチの鳴き声が出た。

その声が出た方に曲がるとポチはおすわりをして待っていた。

ナオキが近づくとまたどこかへと走って行った。

「まさか……案内してくれてんか……ハラショー！」

ナオキはポチが道を教えてくれてるのを悟り、ポチを追いかけた。

くラブライブ！く

「ひぐつ……ひぐつ……うう……」

凜はある行き止まりでしゃがんで泣いていた。

「うう……怖いにや……うっ……うう……うう……ナオキくん……」

「ワン！」

「ふえ？……ワン……ちゃん？」

凜が泣いていると目の前に一匹の犬がいた。

そうポチだ……そして……

「凜!!」

「えっ……ナオキ……くん？」

「心配したんだぞー！」

ナオキはとても真剣な顔で凜の肩を持って言った。

「っ……！……ご……ごめんなさい……」

「ふう……でもよかった……怪我不い？」

するとナオキは笑顔になって言った。

「う……うん……うっ……うう……うわ〜ん」

「おっと……よしよし……」

凜はとても怖かったのか、ナオキに泣きついた。



ナオキはそんな凧の頭を撫でた。

「うう……早く出たいにや……」

「そりゃな……立てるか？」

「……嫌にや……怖いもん……」

凧は首を横に振って頬を膨らました。

「うーん……しゃーね、おぶってやるよ」

ナオキは凧に背中を向けてしゃがんだ。

「え……ええええええええ！／＼／＼／＼」

「なんだよ……早くしろ……」

「う……うん……／＼／＼」

凧は顔を赤くしてナオキの背中に乗った。

「よし……まだいけるな……」

「ふえ？」

「ポチ！道分かる？」

「ワン！」

ポチは「任せとけ！」みたく吠えて走り出した。

「よし……ラーメン食いたいやろ？」

行くぞ!!」

「わっ!」

ナオキは走った。

「離さんように強く持つとけよ!」

「……うん……／＼／＼（あったかい……）」

やっぱりナオキくんはお兄ちゃんみたいだにや……（）」

そしてしばらく走って……

「ワン!ハアハアハアハアハア……」

「おお……この先か……時間も大丈夫そうだし少し歩こうか……」

「ワン!」

ナオキとポチはゆっくりと出口へと歩いた。

（もうすぐ着くのかにや……なんだか……眠くなってきたにや……）

「凜、もうすぐやからな……って……あれ?」

「すう……すう……」

「寝ちゃったか……泣き疲れたんかな……」

凜は泣き疲れたのか、安心したのか、寝てしまった。

その寝顔はとても笑顔だった。

そしてナオキたちは外へと出た。

「おつ、おかえり！すげーな！オープン初めての完走だ！しかも制限時間内！」

「ハラシヨー！ありがとうな……ポチ」

「ワン！ハアハアハアハアハア……」

「なんだポチ……お前中にいたんだな」

「あれ？もしかしてポチっておじさんの……？」

「ああ……すまねえーな。ポチの面倒みてもらって」

なんとポチは屋台のおじさんの飼っている犬だった。

「いえいえ、おれの友達を探してもらってここまで連れてきてくれたんでおあいこです  
よ」

「そうか……ほらよ！ラーメン1週間無料券だ！」

おじさんはナオキに券を渡した。

「ありがとうございます！」

「あんたうちのラーメン知らなかったらこの機会にでも食ってみてくれ」  
「はい、是非！」

ナオキは凜をおぶったまま、みんなの元へと向かった。

くラブライブ！く

「…ってな訳でしばらく起きねーと思うから」

「分かったわ」

ナオキはみんなに事情を話して凜をベンチに寝かせた。

「さてと…次は花陽か」

「はい！えつと…私は…はっ！」

「ん？どうしたんや「走りますよ！」…花陽お！」

花陽はあるポスターを見るとナオキの腕を引っ張って走った。

その目はまさに……”アイドルヲタクの眼”!!

だだんだんだだん!!

くラブライブ！く

「ここは……ステージ？」

2人がやって来たのは屋外ステージだった。その後ろには何故か家があった。

「はあはあ……よかった……あそこの席に座りましょう！」

「おう……で、何があるかそろそろ教えてくれよ……」

「あ、はい！これからなんとA—RISEのスペシャルステージがあるんです！」

「なっ…A—RISEの!?!」

A—RISEは高校卒業後、プロのアイドル界でもなお、名を轟かしている。

「はい！これは見るしかありません！」

そして開演時間になり、『Private Wars』のイントロが流れてきた。

『おおおおおお!!』

観客たちは「待つてました！」の如く歓声をあげた。

「Can I do ! I take it , baby !」

ツバサがステージ上の仕切りの奥から歌いながら出てきた。

「Can I do ! I take it , baby !」

英玲奈がステージ下の右側にあった仕切りの奥から歌いながら出てきた。

「Can I do ! I take it , baby !」

そしてあんじゅがステージ下の左側にあつた仕切りの奥から歌いながら出てきた。

「Can I do? I make it, baby!

Can I do? I make it, baby!」

英玲奈とあんじゅは歌いながらステージ上に上がり、ツバサは中央に向かつて3人は中央に集まつた。

「Can I do? I take it, baby! Can I do? I make it, baby!

Can I do? I take it, baby! Can I do? I make it, baby!」

そのステージはA—RISEがスクールアイドルであつた頃よりも更なる高みにいるという事実を物語つていた。

「ハラショー……」

「流石はA—RISEです……」

パチパチパチパチ……

「「ありがとうございます!」」

A—RISEは『Private Wars』を披露すると頭を下げた。

「まずは『Private Wars』を聞いてもらいました！」

ツバサは言った。

「今日はこのオープン記念ということで、ARISEのスペシャルステージなんだ」

英玲奈が言った。

「そして、スペシャルという名にふさわしいスペシャルゲストも呼んでるわよ！」

あんじゅが言うとう会場がざわついた。

「スペシャルゲストって誰なんでしよう？」

「さあーな……きつと大物に違いない……」

花陽とナオキは唾をのみこんだ。

「それでは……」

「「どうぞ〜！」」

ARISEはそう言うとうステージ裏に下がった。

するとステージ裏から男性2人が出てきた。

『キャーキャー!!』

女性の観客たちはその2人を見て歓声をあげた。

「まさか……あの2人が!」

花陽は驚きの声をあげた。

「誰や……あの2人……」

「ふええ!?! ナオキくんあの2人を知らないのお!」

「す……すまん……」

「いいですか! あの2人はトップアイドルの……」

「どうも! レナです!」

長髪でヘッドホンを首にかけ、ギターを持つている男が言った。

「ヨハにやんです!」

短髪で猫耳をつけた男が言った。

「2人合わせて……『ヨハ☆レナ』です!」

2人は手を猫の手にして背中合わせになり、ポーズをとった。

そして観客（主に女性）が大きな歓声をあげた。

（男2人が猫のポーズ……恥ずかしくないんかな? ま、イケメンだからいい感じになつてゐるんやろうな〜）

「ちっ……このポーズはやっぱり慣れないな……／／／」

レナが照れて言った。





「ありがとうございます！」

パチパチパチパチパチパチパチ……

するとステージ裏からA—RISEが出てきた。

「さて、私たちのスペシャルステージも次の曲でおしまいよ」

「最後は彼女たちA—RISEの”あの曲”を5人で歌っちゃうぜ！」

ツバサとレナがそう言うのと会場がざわついた。

「「「Shock ing Party」」」

5人がそう言うのとイントロが流れた。

「Dancing , dancing ! Non—stop dancing」

まずはツバサが歌った。

「Dancing , dancing ! Non—stop dancing」

続いて英玲奈が歌った。

「Dancing , dancing ! Non—stop dancing」

続いてあんじゅが歌った。

「Dancing , dancing ! Non—stop dancing」

続いてヨハにゃんが歌った。

「Dancing , dancing ! Non—stop dancing」

最後にレナが歌った。

「「「「Dancing , dancing ! Let me do !」」」」

そして5人が声を合わせて歌った。

観客のボルテージはMAXになった。

「「「「Dancing , dancing ! Let me do !」」」」

『おおおおおおお!!』

『キャーーーーー!!』

5人が歌い終わり、決めポーズをとると歓声がわいた。

「それではこの後も夢ドリームカントリーの国を楽しんでくださいね!」

ツバサは言った。

「さあ、私たちは後ろのレナくんの家に行こうとしましょうよ!」

「はあ!?!ヨハにやん!何言って……」

「それはいい考えだな」

「じゃあ行きましょう!」

「ふふふ……それじゃあ……」

「「「「バイバイ!」」」」

ツバサの合図で英玲奈、あんじゅ、ヨハにゃんは手を振ってステージ裏へと下がった。「ちよつと待って……バイバーイ！」

レナも遅れて手を振ってステージ裏へと下がった。

5人は裏にあるレナの家へと向かった。

「やっぱり凄かったです……」

「ははは……楽しくて何よりだよ」

花陽とナオキはみんなの元へと向かいながらステージのことを話していた。

くラブライブ！く

「次は真姫か……なにに乗りたいたんや？」

「私はやっぱりあれよ！」

真姫はあるものを指さした。

「あれ………に乗るの？」

「ええ！だってあの『機関車ドリーム』はこの目玉アトラクションよ！乗らなきゃ損よ

！」

「で……でも………」

ナオキは震えた声で言った。

「真姫ちゃん察してあげなよ………」

穂乃果は目を瞑り、真姫の肩に手を置いて言った。

「穂乃果？ どういうこと？」

「ナオキくんは絶叫系はどうせ乗れないんだよ……だからあんなパーク中を走る青い機関車の形をしたジェットコースターなんて無理なんだよ」

「なんやと………」

「え？ どうせ乗れないんでしょ？」

だつて穂乃果と乗ったあんな小規模のジェットコースターでも泣いてたじゃない」

穂乃果はニヤニヤしてからかうように言った。

「てめえ……いいやろう！ 乗つてやんよ!! 行くぞ真姫!!」

ナオキは怒って真姫の手を引っ張って歩いた。

「え……ちよつと……／／／／」

くラブライブ！く

「ナオキ……本当に大丈夫なの？」

「あ……ああ……大丈夫……大丈夫！」

真姫とナオキは機関車ドリームに乗っていた。

ナオキはやはり震えていた。

「はあ……あ、もうすぐ発車みたいね」

「お……おう！」

「それでは出発進行〜！」

アナウンスの人がそう言うのと汽笛の音が鳴り、機関車ドリームが発車した。

ゴトゴトゴトゴト……

機関車ドリームはゆっくりと坂を登った。

「た……高え……」

「さ、もうすぐスピード上がるわよ！」

「よっしや！バッチコイ!!」

そして機関車ドリームはスピードを上げてパーク中を勢いよく走った。

くラブライブ！く

「ナオキ……大丈夫？」

「うっ……お……おう……でもちよつと気持ち悪い……」

真姫とナオキは機関車ドリームを降りてみんなの元へと向かっていた。

ナオキは少し泣いていた。

「何泣いてるのよ……でも流石は目玉アトラクションね！とつても楽しかったわ！」

真姫は余韻に浸るようにつた。

「あ……ああ……楽しめて何よりやよ……うっ……もう限界!!」

「ヴええ!? ナオキ！」

ナオキは近くにあった嘔吐専用ゾーンへと走った。

そこでなにをしたかは名前を見れば分かるだろう……

くラブライブ！く

「うう……………」

「大丈夫？」

絵里はナオキの背中をさすった。

「ああ…なんとか……………」

「つたく…だらしないわね……………」

にこは呆れた顔で言った。

「ははは……………次はにこだったな……………どこがいい？」

「うくと……………いっぱいあるからにこ迷っちゃろう」

「そうですか……………」

「うくと……………あ、真姫ちゃんはなにかオススメのアトラクションとかある？」

「ヴええ!?!なんで私!?!」

「だつて、真姫ちゃんは目玉アトラクション知ってたから〜」

「まあ…にこがそう言うならおれは構わんけど」

「わかつたわよ……………それじゃあ……………『メテオフリーフォール』なんてどう？」

「『メテオフリーフォール?』」

「ええ…あれよ」



真姫はメテオフリーフォールを指さした。

「え？」

「ここはそれを見て驚きの声をあげた。」

「にこちゃん乗れないの？」

真姫はそんなにこを見て言った。

「の…乗れるに決まってるでしょう！私を誰だと思っているのよ！」

「へ…：…：…にこは乗れるんかあ。」

「すげ〜」

「何言ってるのよ？あんたも乗るのよ？」

「はあ!？」

「当たり前じゃない！ほら行くわよ！」

「ここはナオキの腕を引っ張って歩いた。」

「ちよつ…：…もう勘弁して…：…」

「タ、レ、カ、タ、ス、ケ、テ、エ、!!」

「ラブライブ！〜」

「くそっ……なんでおれが……」

ナオキはブツブツと言った。

「ふ……ふん！なによこれぐらいこのにこにかかれば楽勝よ！」

「そういう割には体震えてますけどね……」

「うっ……ナオキも人のこと言えてないじゃない！」

「うっ……今からでも遅くない！降りよう！」

「嫌よ！ここまで来て引き下がる訳には行かないわ！」

「じゃあおれだけでも……」

ナオキは安全バーを外して降りようとした。

「ちよつと待ちなさい！」

するとにこはナオキの服を掴んだ。

「うおっ！な……なんだよ……」

「に……にこを見捨てる気!?そんなの許さないわよ！」

「ほんならにこも降りたらいいやんか……」

「だ……か……ら……！」

「……………はあ……………わかったよ……………腹くくるか……………」

ナオキは乗ることにしたようだ。

「…あ……………ありがとう……………／／／／」

にこは少し顔を赤くしながら言った。

「それでは上がりますのでパーをお持ちくださいね〜」

アナウンスの人がそう言ってしばらくするとメテオフリーフォールはパーク中を見渡せるほど長い柱を登った。

「高え……………」

「……………れぐらい……………怖くないわよ……………」

2人とも声が震えていた。

そしてしばらく動かず、急に勢いよく下がり出した。

「ぎやあああああああああああ!!!」

他の乗客は喜びの声をあげるが、ナオキとにこは悲鳴をあげていた。

「うおあああああああ!!!無理無理無理!!!ぎやあああああああ!!!」

「うわあああああああ!!!ごめんなさいごめんなさい!!!ぎやああああああああああ!!!」

くラブライブ！く

「はあ……はあ……はあ………」

にことナオキはベンチに座っていた。

「にこつちもナオキくんも大丈夫？」

希は言った。

「大丈夫なわけではないでしょう……もう……嫌………」

「ほんまに……もうあれはごめんだ………」

「ははは……ならウチはナオキくんとカジノでも行こうかな」

「カジノ？未成年やのにいけんの？」

「うん！さつきそこの説明板に、『未成年もできるカジノ』って書いてあったで」

「ほほう……面白そうやな！行くか！」

「うん！」

希とナオキは未成年も出来るというカジノへと向かった。

くラブライブ！く

「で、なににする？」

「うーん……じゃあナオキくん！」

「ん？」

「ポーカーで勝負せえーへん？」

「ポーカーか……いいで！」

なにかける？」

「そうやね……（ウチは負けへん自信がある……ということとはナオキくんに恥じかかす  
ような……あー！）」

なら負けるごとに服を脱いでいくってのはどう？」

「ふあ!?ちよつと待て！お前はいけるんか？」

ナオキは焦った様子で言った。

「ふん、ウチは勝つ自信があるからな！ナオキくんは勝つ自信ないから拒むんやろ？」

「……なんやて……」

「えー？ナオキくんはウチに勝つ自信なくて服脱ぎたないから拒んでるんやろ？ああ……」

別にええで。そんな無理して勝負せんでも」

希はナオキを煽り、ナオキはそれに我慢出来なくなったのかポキポキと手を鳴らした。

「いいやろう……相手になってやるよ……」

「それでは……カードを配ります」

「はいー」

梓あずさというスタッフの手によって希とナオキに5枚ずつカードが配られた。

「チェンジは1回のみです。」

「チェンジしますか?」

「おれは2枚で……」

「ウチはチェンジなしで」

「なっ!? よっほどの自信があるようやな……」

「そりゃあ……ウチ、スピリチュアルやし」

「意味わかんねーよ」

「それでは2枚チェンジします……どうぞ」

「ありがとうございます……！」

「それではオープン！」

「2ペア！」

ナオキは2ペアだった。

希は……

「ロイヤルストレートフラッシュや……」

「はあ!？」

「ふふーん！さあ、ナオキくん……1枚脱いでもらおか」

「ちっ……」

ナオキはまずは上着を脱いだ。

「さあ、勝負はこれからやで！」

「おう！」

その後も希が勝ち続けてナオキはシャツ1枚とパンツ1枚だけになった。

「さ……寒い……」

「どうする？ギブアップする？」

「す…するもんかよ!!次や次!!」

スタツフはナオキと希にカードを配った。

「くっ…3枚や…」

希は今までノーチェンジだったのに3枚チェンジ。

ナオキは……

「ふっ……ノーチェンジで……」

「なっ!？」

「さあ…どうする?」

「(ナオキくんのこの自信は……まだウチは1回しか負けてない……ここで負けても

……) いいやろう!受けて立つで!」

「それではオープン!」

「フルハウスや!」

希は勝ちを確信した。

だが……

「ロイヤルストレートフラッシュ!」

「なんやて!？」

「ふふふ…復讐の時間やぞ……」



その後、形勢は逆転してナオキが押す形となった。

そして希はあと1枚脱げばブラが見えるところまできた。

「どうする？ギブするか？」

「ふっ…ウチがギブアツプするわけないやろ…」

「わかった…なら…勝負！」

そして2人にカードが配られた。

「ノーチェンジで」

「希もか…」

「ナオキくんもなんやね…」

「それでは…オープン！」

「フルハウス!!なっ!」

2人ともフルハウスだった。

これで勝敗を決めるのはスリーカードの強い方…

「ナオキさんはJのスリーカード…」

希さんはAのスリーカードなので希さんの勝ちです」

「くそっ！」

「ふふふ…残念やったねえ〜」

「くっそお〜……シャツ脱ぐか……」

そしてナオキはシャツを脱いでパンツだけになった。

「どう？ギブアップする？」

「ふっ…するかよ！まだパンツが残ってる！」

「ふ…ふ〜ん……なら裸にしてやるまでやん！」

「それは色々問題あると思うけどな……」

「それではカードを配ります」

スタッフが2人にカードを配った。

「5枚チェンジで……」

「ウチは3枚や……」

ナオキは5枚、希は3枚チェンジした。

「ナオキくん…続けるんか？」

今の状況から結構不利やと思うけどな〜」

「いや…わかんねーぜ……」

「ふっ…いいやろ……」

「それでは、オープン！」

「ロイヤルストレートフラッシュユヤ！」

「お前今日何回出すんや!？」

「へへへん、これもスピリチュアルパワーのおかげやね！」

「ちっ……おれは………」

希は本日4回目のロイヤルストレートフラッシュユヤを出した。

そしてナオキは………

「ハイカード………」

ハイカードだった。

「勝負ありやな………」

希はナオキとの戦いで勝利を確信した。  
だが……………

「はあ……………脱ぐか……………」

「え……………」

そう言うとナオキは手を下の方にのばした。

「ちよつと……………ナオキくん……………待って……………／＼／＼／＼／」

「ん??」

「はわわわわわ……………／＼／＼／」

希は目を両手で塞いで顔をどんどん赤くしていった。

「なんだよ……………脱ぎやいいんだろ?それならまだ勝負が続けられる」

「でも……………でも……………それじゃあ裸に……………ぷしゅく／＼／＼／」

希はついに頭から湯気を出して倒れてしまった。

「お……………おい希!しっかりしろって!」

ナオキは希に駆け寄った。

「はわわわわ……ナオキくんが……裸に……／／／／」

希はブツブツと呟いていた。

「はあ？裸に……？」

まだくつ下残ってるっての……」

ナオキは実はまだくつ下を抜いでなかったのだ。

だがその告白は希に届くことはなかった。

服を着たナオキは希に服を着せて希をおぶってみんなの元へと戻った。

くラブライブ！く

「ん……ナオキくん……？」

「おっ……起きたか……」

「あれ？ウチは一体……」

「ああ……頭から湯気出して倒れたんだよ」

ナオキはさつき起こったことを希に話した。

「あっ……／／／／」

希は思い出したか顔を赤くした。

「まあ……早くみんなのそこへ戻ろうか」

「うん……／＼／＼」

そして2人はみんなと合流した。

「希ちゃん顔赤いにや〜」

「なにかあつたの?」

凜とにこはからかうように言った。

「もう! からかわないで!／＼／＼」

希は顔を赤くして言った。

「じゃあ最後は絵里だな」

「ええ! 行きましょう!」

絵里はナオキの手を引つ張った。

「ちよつ……どこ行くか決めてんのか!？」

「ええ! もう暗くなってるから”あそこ”しかないわよ!」

そう、もう辺りはすっかり暗くなっていた。

そして絵里がナオキを引つ張って着いた先は……

「観覧車……………」

「ええ！さあ、乗りましょう！」

「あ…………ああ…………（絵里おれが高いとこ苦手なの忘れてんのかな？）」

「楽しみね〜（ナオキは高いところは苦手だけどあの景色はナオキと見たいもの…）」

そして2人は観覧車へと向かった。

「すみません、あなた達はカップル様でしょうか？」

『おおかた大門』と書いた名札を付けている店員が絵里とナオキに聞いた。

「はい、そうですけど…」

「それでしたら、もうすぐ回ってくるカップル専用ゴンドラに乗られては？」

大門がそう言うのと絵里はパーッと笑顔になった。

「是非お願いします！」

「わかりました…………あ、来ましたね…………ささ…………」

大門はカップル専用ゴンドラが来たのを確認するとドアを開けて2人に乗るように促した。

「ありがとうございます！」

「あ…………ありがとうございます…………」

ナオキは少し声が震えていた。

カップル専用ゴンドラはベンチ型のイスが1つだけあるだけだった。

2人は隣り合わせで座った。

「観覧車なんて久しぶりだわ〜」

「そうか…おれは乗ったことねーわ」

「そうなの!？」

「だって高いし、その割には遅いし……」

「なるほどね……ということは初めては私なのね!」

「ま……まあ……そゆこと……」

「ふふっ……／／／」

絵里は少し顔を赤くして笑った。

「あの……絵里……お願いがあるんやけど……／／／」

「ん?」

ナオキは照れながら言った。

「その……えつと……その……手を……繋いで欲しいな……つて……その……怖い

から……／／／／」

「はいはい……」





「と……止まったの……」

すると今度はゴンドラ内の明かりがなくなつた。

「きゃああああああ!!暗くならないでよおおおおお!!」

「止まんなよおおおおお!!」

絵里は暗いから、ナオキは一番高いところで止まったから悲鳴をあげた。

絵里はナオキに先程より強く引つ付いた。

それから絵里は前を見た。

すると……

「ナオキ……見て……」

「だって高いし……」

「いいから見てよお」

絵里に言われ、ナオキは恐る恐る目を開けて前を見た。

「お……おお」

「さつきより綺麗ね……」

「ああ……そうやな……」

さつきまで見ていた夜景はさらに綺麗になっていた。

「ロマンチックね……」

「そう……やな……」

ナオキは前を見るのが怖くなり絵里の方を向いた。  
すると絵里は視線を感じてナオキの方を見た。

「あつ……」

「……………」

「……………」

そして2人は無言になった。

「絵里……………」

「ナオキ……………」

そして2人の唇は徐々に近づいていった。

「ん……わっ!?!」

だが、2人の唇が重なり合う直前に絵里は窓の方を見て驚きの声をあげた。

「どうし……わっ!?!」

ナオキも絵里のしている方を見ると驚きの声をあげた。

その理由は……

「ジーーーーー……」

「ことり……何してんの……」

ことりはペガサスに乗ったまま、窓からナオキたちをジーツと見ていた。

「たまたま飛んでたらナオキくんたちが見えて何やってるんだろうと思って見てたの  
」

「てかお前今までどこ行ってたんや!?!」

「ずっとこのパーク中を飛んでたよ!。ペガちゃんと一緒に」

「ペガちゃんって……まあ、ええや……」

そろそろ帰るから下に降りとけよ」

「は〜い。」

行くよ！ペガちゃん！」

ことりがそう言うのとペガちゃんは降下した。

「はあ……まさかここでことりが出てくるとは……」

「そうね……あはははは……（キスしたかったのになあ〜……）」

するとゴンドラ内に明かりが復活して観覧車も再び動き出した。

「ほっ……」

2人は胸を撫で下ろした。

「よかったな……」

「ええ！」

2人は見つめ合って笑った。

「絵里……」

「どうしたの？」

するとナオキは絵里を引き寄せて……

「チュツ……」

「ん……」

優しく絵里の唇にキスをした。

それから2人は観覧車を降りると、先程のトラブルはカップル専用ゴンドラに誰かが乗ったときに故意で起こすトラブルだというのを大門に聞いた。

それでナオキは「殴っていいか？」と手を鳴らしたので絵里はそのナオキを「キスできたじゃないの」と言って沈めたという……

くラブライブ！く

「バイバイ！ペガちゃん！」

ことりはペガちゃんと別れ、飛んで行くのを手を振って見送った。

みんなは出口へと向かっていた。

「うーん！楽しかったねえー!!」

穂乃果は背伸びをして言った。

「そうですね……射的のときは戸惑ってしまいましたが、よかったです」

海未はぬいぐるみを持って言った。

「うん！ペガちゃんも飛べて楽しかったなあー！」

ことりは手のひらを頬に当てて言った。

「またラーメンいっぱい食べるにやー!!」

凜は飛び跳ねて言った。

「A—R—I—S—Eとヨハ☆レナのライブを見たなんて……幸せですう！」

花陽はライブを思い出しながら言った。

「まあ、目玉アトラクションにも乗れたしね」

真姫は髪の毛をくるくるして言った。

「今回で乗れなかったアトラクションにもまた乗ってみたいわね！」

ここは手を顎に当てて言った。

「カ……カジノ……本物のカジノに行きたい……／／／」

希は顔を両手で塞いで言った。

「ふふっ……また来たいわね。」

ねえ、ナオキ！」

絵里はナオキを見て言った。

「ああ……そうだな……」

でも今日は散々な目にあったわ……

あんな約束するんじゃないかった……」

ナオキは少し後悔気味に言った。

「まあまあ……この約束があったから”あのライブ”が出来たんだし、いいんじゃない？」

「そうやな……穂乃果の言う通りやな……」

ナオキは夜空を見上げて”あのとき”の事を思い出していた。

μ sの本当の最後のライブのことを……



みんなとそれを叶えるために約束したときのことを……

これが少し先のミライのお話……

次回へ続く……

## 第101話 「アメリカンナイト」

前々回のラブライブ！

Angel TVに着いたナオキは社長さんと打ち合わせをしてタイムズスクエアに向かった。

ホテルにいた私たちは海未たちが別のホテルに着いてしまったことを知って、ナオキは海未たちの元にダッシュで向かったの。

そして10人がホテルに着いて各自自分の部屋に入ったんだけど……

「説明して貰おうか？」

「つたく、希はなにやってるのよ……」

「でも意外にナオキはチョロくってすぐに帰っていったわ。」

「ヴええ!?! 私もチョロイって!?!」

「そして私たちは夕食を食べながら予定を話すことにしたの。」

「あのベッドならぐっすり寝れそうだな」

「そうね……布団も柔らかかったし、枕も気持ちよかったわ……」

ナオキと絵里は部屋のベッドを思い出した。

「そやな……絵里、おれが部屋に帰ったらベッドにダイブしてたもんな」

ナオキは先程の絵里を思い出し、少し笑って言った。

「もう！しょうがないじゃない！／＼／＼」

絵里は顔を膨らました。

ナオキはそんな絵里を見て頭を撫でたくなり、撫でた。

「でもむっっちゃ可愛かったぞ」

「……もう……／＼／＼」

「なんでおふたりさんはこんなところでイチャイチャしてるのかしらね？」

「にやにや？」

ナオキと絵里の前ににこが仁王立ちしていた。

「はあ……つたく、ちよつとは場所をわきまえてしなさいよ……」

「へいへい……」

「はあ……」

ここはまたため息をついた。

それから続々とみんながロビーに集まり、全員が揃ったところで近くのレストランに向かった。

10人はレストランで席についた。

円状の机で席順は、ナオキから時計回りに絵里、穂乃果、希、凜、真姫、花陽、海未、ことり、にこだ。

「えつと……とりあえずテレビ局の社長さんと話して、やることが決まったぞ」

ナオキは言った。

「やること？なにになに？」

穂乃果は言った。

「ああ……なんかライブをする場所を決めて欲しいらしい」

「ライブをする場所……この街のどこで、sらしくライブができるかが重要ね

……」

絵里は顎に手を当てて言った。

「そ…外を出歩くのですか!？」

海未は言った。

「まあ…そうなるな…問題か？」

「えつと…それは…」

「あれやよ、海未ちゃんはあることがあつて怖がつてるんよ」

希はニヤニヤして言った。

「希！」

「う〜ん…でも、実際この街を歩いて見ていった方がいいと思うんだが…」

「でも、練習もありますし…ほら、中にはジムも併設されていますし！」

海未は人差し指を立てて言った。

「ええ〜!せっかくアメリカに来たんだから色んなところ見たいにや〜！」

「そ…それなら私たちは室内で練習して、場所はナオキに任せればいいのです!外には

出ずに!」

「なんでそうなるのよ…」

「ここは呆れた顔で言った。

「それはおれも考えたけど、実際に踊るみんなに見てもらった方がやっぱいいじゃん？」

「そ……それはそうですが……」

「だろ？だから明日は早朝からしっかりと練習して、それから街を見てまわるってのはどうや？」

「それいいと思う！」

「わ……私も！」

「ことりと花陽は賛成のようだ。」

「え……でも……」

「はあ……賛成の人々？」

それでも尚迷っている海未を見て、ここは賛成の人に手を挙げるように促した。

結果は海未以外の全員が手を挙げた。

海未はその光景を見て諦めたようにため息をついた。

「決まりだね！」

穂乃果は言った。

「それじゃあそろそろ注文しましょう」

絵里は言った。

「よっしゃ……Excuse me！『すみません！』」

ナオキが店員を呼び、注文をした。



「!? 希! 何言って……// // //」

「もう…ナオキったら……// // //」

それを知られたナオキも、知った絵里も顔を赤くした。

「あ、ちゃんと凜たちの写真もあるにや〜!」

ナオキのフォルダーには、みんなの思い出の写真も入っていた。

「ふーん…絵里のほともかく、私たちのは意外ね」

「なんだよ…それある意味傷つくな……」

おれはみんなの思い出が大事なんだよ……悪いか// //

もちろん! 絵里が一番大事なんやけどな!」

ナオキがそう言うとみんな微笑んだ。

くラブライブ! (μ's 全員) く

Thank you for waiting . I brought a dishes . 『お待たせいたしました。料理をお持ちしました。』

みんなが話していると店員が夕食の料理を持ってきた。

「お、きたきた! 飯だ! デイナーだ!」



ナオキはお腹がへっていたのか、大喜びした。

「Here you are . . .」 『どうぞ。』

「Thank you . . .」 『ありがとうございます。』

「I am as above in this dish . . . Please eat  
t r e l a x e d l y . . .」 『この料理で以上になります。ごゆっくりお食べくだ  
さい。』

料理を配り終わると店員は下がった。

「さあ！食うぞー！いただきまーす!!」

ナオキはすぐに食べ始めた。

だが、ナオキとことり以外のメンバーは立ち上がり、あるものを見て驚いていた。

「「「「「ええ!」「「「「「」

「なにこれ!?!」

「でかつ!?!」

8人が驚いていたのは……………

「チーズケーキだよっ!こつちに来たら食べるって楽しみにしてたんだあ〜!」

こつちりが注文した大きなチーズケーキだった。

「これが夕食なんですか?」

海未は驚いたように言った。

「流石自由の国やねえ〜」

希は感心したように言った。

「それ……関係ある?」

真姫は希を見て言った。

「ゴクツ……お前から喋ってないで食えよ。冷めちゃうぞ」

ナオキは食べ物をのみ込んで言った。

「そうね……早く食べましょう」

絵里がそう言うのとみんな席に戻ってご飯を食べた。

くラブライブ！（ナオキ・ことり）く

「ふう……食べた食べた……」

ホテルへの帰り道、ナオキはお腹を叩いて言った。

「チーズケーキ、美味しかった〜」

ことりは満足気に言った。

「ふふっ…ナオキは相変わらずいっぱい食べてたわね」

絵里は言った。

「みんなが残したもので食べてたものね…」

にこは言った。

「だって腹へってたし」

「ことりちゃんもあんな大きなチーズケーキー人で食べたなんて凄いわよ！」

穂乃果は言った。

「だってチーズケーキだもん！」

「ナニソレ…イミワカンナイ…」

真姫は言った。

そして10人はホテルのロビーで立ち止まった。

「よし、ほんなら明日は朝から飯食って、セントラルパークでランニングするから夜ふかしして寝坊しないように！」

ほんなら各自、部屋に戻ろうか」

「「「「「はい」「「「「「」

そしてみんな部屋に戻った。

くラブライブ！（μ s 全員）く

穂乃果・にこの部屋……

「ふわ〜！お腹いっぱい」

穂乃果は部屋に入るなり、布団にダイブした。

「穂乃果寝ないでよね！ちゃんとシャワー浴びてから寝なさいよ」

「は〜い……」

穂乃果はそう言われると起き上がった。

「シャワー、先に使うわね」

「うん、わかった！」

そう言うときにはシャワー室へと入った。

くラブライブ！（穂乃果・にこ）く

海未・ことりの部屋……

ガチャ……

「ふう……気持ちよかった〜」

ことりはシャワー室から出た。

「ふふふふ……ことり……やっと出てきましたね……」

海未は一人用のソファアームに座ってカップケーキを食べ終わったのか、ことりを見て言った。

「ん？海未ちゃん……？」

「いざ……勝負です!!」

そう言っただけで海未はトランプを出した。

「う……うん……いいよ……」

ことりは苦笑いして言った。

結果はみなさんご存知のはず……

「何故なのでしょう……!!」

くラブライブ！（海未・ことり）く

真姫・希の部屋……

ガチャ…

「ただいま〜」

希はシャワーを浴びてから売店へジューズを買いに行っていた。

「真姫ちゃん……はシャワーか……」

希は返事がないので真姫はシャワーを浴びているのだと悟った。

「真姫ちゃん」

「ん？」

希はシャワー室の前で言った。

中からは真姫の声とシャワーの音が聞こえた。

「ジューズ買ってきたよ」

希はジューズの入った袋を上げて言った。

「あ、ありがとう」

「冷蔵庫に入れて置くからね」

「わかった」

希はまた歩き出した。

真姫はそれからシャワーを止めた。

「ふう……」

真姫は体を拭いてパジャマに着替えた。

「この曲で最後……か……」

真姫は静かにそう呟いてシャワー室を出た。

希はパジャマに着替えてジュースをテレビの下の棚にある小さな冷蔵庫に入れた。

「ん？」

顔を上げた希は棚の上のあるノートに気づいた。

そのノートには『Music』と書かれていた。

「真姫ちゃんのかな？」

希は冷蔵庫を閉じてその本をペラペラとめくった。

そしてあるページに目が止まった。

「これって……」

「なに勝手に見てるのよ……」

シャワー室から髪を拭きながら出てきた真姫は希に言った。

「あ……ごめん……つい、出来心やったんや……」

そう言つて希は真姫にノートを返した。

「別にいいわよ……それより……中、見たの？」

真姫はそれを受け取つて言った。

「……うん……」

真姫は自分の寝るベッドへと向かった。

「真姫ちゃん……でもそれって新曲じゃ……」

「いいの……」

私が勝手にやってるだけだから……気にしないで……

また披露したいとか、思つてないから」

真姫はタオルで隠しているが、切なそうな顔で言った。

「やっぱり真姫ちゃんは素直やないな……」

希は真姫に聞こえない大ききさでそう言った。



くラブライブ！（希・真姫）く

花陽・凜の部屋……

2人はシャワーも浴び終わり、電気を消してベッドに座って目をキラキラさせて街を眺めていた。

「わ〜！」

「綺麗だね……」

「うん……」

「……凜ちゃん……どうしたの？」

花陽は凜の方を向いて言った。

「なんか……全然知らない場所にいるって……不思議な気持ちだなくって……」

花陽はもう一度窓の方を見た。

「……本当に遠くに来ちゃったね……」

花陽はそう言うのと少し寂しそうな顔をした。

「……かよちゃん……寂しいの？」

「……うん……ちよっぴり……寂しい……」

すると凜はフードを外して花陽にもたれた。

「……大丈夫だよ……」

「ありがとう……あつたかい……」

「へへへへ……今日は一緒にベッドで寝てあげるね」

「……ありがとう……」

2人は一緒にベッドに入り寝ることにした。

くらぶライブ！（凜・花陽）く

海未・ことりの部屋……

「何故……何故……なのでですか……」

海未は両手を目に当てて言った。

「えつと……海未ちゃん、もう寝よう？明日も練習だし……」

「ダメです！まだです!!」

もう一度です！」

「ええ〜！」

「なにかある……なにかあるはずです！」

「ズルはしてないよ〜」

「ならばもう一度です！」

「そんな〜！……うう……穂乃果ちゃん！」

穂乃果・にこの部屋……

「ん？誰か呼んだ？」

「呼んでないわよ……何言ってるの？」

「そう？ならいいけど……」

「それより早く寝るわよ。」

明日も早いし、美容にも悪いし」

「え〜！もつと遊ぼうよ〜にこちゃん」

穂乃果はにこに抱きついた。

「もう！離れなさいよ！」

もうなんで穂乃果と一緒にの部屋なわけ！」

「だって……くじで決まったんだもん……」

「まあ……そうだけど……さ、わかったら早く寝る」  
「は……い……」

穂乃果は少し落ち込んだ様子で戻った。

「……………はあ……………しようがないわね……………」

「ふえ？」

「一緒のベッドで寝てあげるわよ……………」

「ほんと!? わくわく! にこちゃん大好き!」

「はいはい……………」

穂乃果とにこは一緒のベッドで寝ることにした。

電気を消してからにこはパックをした。

「ねえねえにこちゃん……………」

「ん? なによ……………」

「明日、楽しみだね……………」

「まあね……………明日も朝から練習なんだし寝るわよ……………」

「うん……………おやすみ……………」

「おやすみ……………リーダー……………」

くラブライブ！（穂乃果・にこ・海未・ことり）く

ナオキ・絵里の部屋……………

「……………なんでおれは……………」

ナオキはパソコンに向かっており、ヘッドホンを外して天井を見上げて言った。

「もう……………終わりのはずなのに……………な……………」

ナオキは画面を見つめていた。

ガチャ……………

「ナオキ出たわよ〜」

絵里はシャワー室から髪を拭きながら出てきた。

「おう……………じゃあ次入らせてもらおうか……………」

「ええ……」

ナオキはシャワー室へと向かった。

シャワー……

「おれは……まだ……みんなでやりたいと……思っているのか……ははは……」  
ナオキはシャワーを浴びながら呟いた。

「あら……パソコン付けっぱなしだわ……」

絵里はナオキがシャワー室に入った後、ナオキのパソコンが付いたままだというのに気がついた。

「あら？音楽が……」

するとどこからかすかに音楽が聞こえてきた。

絵里はそれがヘッドホンから聞こえてくるのに気がついて、不思議に思い耳に当てた。

「聞いたことないわね……パソコンに歌詞が書いてある……しかも、sって……」  
絵里はそのナオキの歌っていた曲に聞き入っていた。

「でも……なんで……」

曲が聞き終わると絵里はヘッドホンを置いて言った。

「……聞いたんか？」

「……ナオキ……」

ナオキはシャワー室から出ると絵里がパソコンのいる前にいたので言った。

「はあ……聞かれちゃまったか……」

ナオキはパソコンを閉じた。

「ナオキ……それって新しい曲じゃ……」

「……」

ナオキは返答しなかった。

「ナオキ……もしかして……」

「……多分な……きつとおれはまだ『μ s』に執着してるんやろうな……」

「ナオキ……それは……みんな同じと思うわよ？」

「……そうか……でもこれは……おれだけの曲になりそうや……」

「……ナオキ……」

絵里は切なそうな目でナオキを見た。

「ははは……そんな表情すんなよ……」

ナオキは絵里の頭を撫でた。

「……でも……」

「いいんやよ……これで……」

「……ナオキがそう言うなら……」

「さあ……明日も早いし寝ようか……」

「ええ……」

2人はハネムーン仕様のベッドに入った。

「ナオキ……」

「ん？」

「おやすみ……」

「ああ……おやすみ……チュツ……」

2人はいつものようにおやすみのキスをして眠りについた。

くラブライブ！（ナオキ・絵里）く



そして朝……

穂乃果・にこの部屋……

「ん……なに……重い……重いよ〜ん？」

「メエ〜？」

にこが重いと感じ目を開けるとパカさんがいた。

「うわあああああ!!」

にこは驚きの声をあげる。

「ぐるううう!!」

そしてアルーさんが布団の中から現れた。

「ひいひいひい!!ガクツ……」

そしてにこは気絶した……

という夢を見たにこが目を覚ました。

「……………なによさつきの夢は……………」

にこはさつき見た夢を覚えていて天井を見上げた。

さらに寝相が悪い穂乃果はこの上に乗っかっていた。

「しかも……………なにこれ……………ちよつと穂乃果——!!!!」

にこは穂乃果を横に転がした。

ゴロゴロ……………

「ん……………?なんでにこちゃんがうちにいるの〜?」

穂乃果は起き上がり、寝ぼけて目をこすりながらそう言った。

「ここはあなたのうちじゃなくてアメリカのホテルだからよ!どんなに酷い寝相なの全

く!あなたが寂しそうな顔してたから一緒に寝てあげたのに……………もう!」

ポフツ…

そう言つてにこは穂乃果に枕を押し付けた。

「ん〜あ、そうだ!私ね、夢見たんだよ!」

穂乃果は押し付けられた枕をどけて言った。

「夢?そんなの私も見たわよ……………思い出したくもないわ!」

にこはそっぽを向いて言った。

「私はね……………ライブが成功する夢を見たんだ！」

「……………ライブが？」

にこは『ライブ』というのを聞いて穂乃果の方を向いた。

「うん！みんなで楽しく歌って、踊って……………ライブが成功する夢！」

「……………そう……………ふっ……………成功するなんて当たり前じゃない！」

「うん！だよねっ！」

「さあ、早く着替えるわよ！」

「は〜い！」

にここと穂乃果は練習着に着替え始めた。

くラブライブ♡（穂乃果・にこ）く

海未・ことりの部屋…………

「ん……………ふわ〜」

ことりは起き上がり、あくびをした。

「あ、ことり……………おはようございます」

「おはよう〜海未ちゃん……早いね」

ことりが起きると既に海未は練習着に着替えていた。

「朝早いのは慣れていきますからね。」

それよりことりも早く着替えてください。もうすぐ朝食の時間ですよ」

「うん！わかった！その前にシャワー浴びてくるね」

「あ、はい」

ことりはシャワー室へと向かった。

くらぶライブ♡（海未・ことり）く

希・真姫の部屋……

ガチャ……

「ふう……希、まだ寝てるの……？はあ……」

真姫はシャワー室から髪を拭きながら出てきて希が寝ているのを見て呆れたため息

をついた。

「すう……すう……すう……」

「誰よ『明日は早く起きんとな』って言ってたのは……早く起きなさいよ」

「うくん……あと5分……むにやむにや……」

「……って言うか希、練習着に着替えてるじゃない!？」

「……バレた?」

「もう！ナニソレー!」

なんと希は既に起きて着替えており、狸寝入りをしていたのだ。

「えへへへ……んー!!気持ちいい朝やね……」

希は体を伸ばして言った。

「話しそらさないで!」

真姫は怒っているようだ。

くラブライブ♡（希・真姫）く

凜・花陽の部屋……

「凜ちゃん……凜ちゃん……起きて……」

花陽は凜を揺すつていた。

「ん……にや？なんでかよちんが凜の家にいるの？」

凜は起き上がり、目をこすりながら言った。

「もう……ここはアメリカだよ？早く着替えないと時間が……」

「そうか……アメリカにいるんだったにや……はっ！着替えなきゃ！かよちんも早くー！」

「もう……凜ちゃん……」

凜と花陽も練習着に着替え始めた。

くラブライブ♡（凜・花陽）く

ナオキ・絵里の部屋……

「ん……う？おつ……朝か……」

ナオキは目覚めると目をこすった。

「絵里はまだ……………寝てるか……………」

ナオキは右で寝ている絵里を見て言った。

「すう……………すう……………すう……………」

絵里は気持ちよさそうな寝息をたてて寝ていた。

「……………寝顔……………かわいいな……………」

ナオキは絵里の頭を撫でて言った。

「ん……………すう……………すう……………」

「ふふっ……………えい……………」

ナオキは次に絵里の頬をツンとつついた。

「ん……………ん……………」

「お、そろそろ起きるかな?」

絵里はそろそろ起きそうな仕草を見せた。

「ん……………おばあさま……………」

「ん?」

「……………おばあさま……………」

「おばあさま……………か……………やっぱり会いたいんか…最近会ってないって言ってたし……………」

「ん……おばあさま………」

「ははは……そろそろ起こすか………」

ナオキは絵里を揺すって起こそうとした。

「ん……ナオキ………」

「ん？今……おれのこと………」

「ナオキ……ふふっ……もう………」

「……っ……かわいい………」

「……ん？……ナオキ……？」

すると絵里は目を覚まし、細目でナオキを見た。

「ああ……おはよう」

「……おはよう……もう朝なの？」

「ああ……早く着替えて準備せんとな………」

「ええ……私、シャワー浴びてくるわ」

「おう……おれはその間に着替えたりしとくわ」

「わかったわ………」

絵里はシャワー室へと向かった。

「さて、着替えるか………」



ナオキは着替え始めた。

くラブライブ♡（絵里・ナオキ）く

10人は着替えて朝食を食べるためにホテル内のレストランに入るのでロビーに集まった。

「よし……これで全員やな……じゃあみんな、改めておはよう」

「「「「「「「おはよう（ございます）」「「「「「」

ナオキが言うともみんなが声を合わせて言った。

「じゃあこれから飯食いに行くぞく」

「ちゃんと力つけて練習するぞく！」

「「「「「「「おく！」「「「「「」

そして10人はホテル内のレストランに向かい、朝食を食べるのだった。

次回へ続く……

# Another way (ホワイトデー)「苦勞と幸せの ホワイトデー」

ホワイトデー……

バレンタインデーにチョコを貰った人にお返ししないといけない日……

今までやったら絵里とかだけやったけど、今回は音ノ木坂学院の全校生徒に返さなければならぬ。

直接貰ってない人もいるから確實じゃないけど、数的にはおそらく全校生徒や……

だから朝早めに登校して、おれは各学年の子たちに頭を下げてお返しホワイトチョコをあげに行く羽目になったんや……

正直辛い……

「はあ……とりあえず一段落か………」

おれはほとんどの生徒に返し終わり、机に突っ伏していた。

「ナオキくんどうしたの？」

「穂乃果か……いや、チョコのお返しを渡すのに奮戦しててな………」

「へへ」

「あ、せや……はいよ、穂乃果！チョコありがどうな」

おれは鞆からチョコを出して穂乃果に渡した。

「ありがとう！」

「こちらこそだ」

喜んでくれて何よりだ。

「おはようございます」

「おはよう」

すると今度は海未とことりが登校してきた。

「おはよう2人とも！」

はいよ、チョコありがとうございます」

「今日はホワイトデーでしたか……」

ありがとうございます！」

「わくありがとうございます！」

「こちらこそ」

くラブライブ！（ナオキ）く

それから授業が終わり、休み時間もお返しに奮戦していた。

「あ、花陽！」

「ナオキくん！おはよう」

おれは花陽を見かけたので声をかけた。

「おはよう！」

はいよ、チョコありがとうございます」

おれは花陽にチョコを渡した。

「え……え？」

あ…ああ…ホワイトデーですか！  
ありがとう！

花陽は最初、なにか分かってなかったが、思い出したら礼を言ってきた。

「（ちらり）そでだ。」

せや、凜とか知らん？」

「えつと…多分2人とも教室にいるかと…でももうすぐチャイム鳴るからあとの方が  
……」

「あ、やべー！もうそんな時間か……」

じゃあまたな！」

「うん！」

おれは花陽に手を振って別れた。

くラブライブ！（ナオキ）く

次の休み時間に1年生の教室に行った。

「あ、真姫！凜！」

「なにかよう？」

「なにかにや?」

「はいよ、チョコありがとうな。」

「これお返しだ」

おれは2人にチョコを差し出した。

「わあ!ありがとう!!」

「あ……ありがとう……//」

「(こちら)そだ」

そしておれは1年生の教室にいたまだ渡していない人にチョコを渡して自分の教室に戻った。

くら……ラブライブ……(ナオキ)くら

「……………」

おれは次の授業の内容がわからず固まっていた。

うつ……頭が……

なんの授業かって?

そんなの……わかってるやろ?

「では……この問題を……ナオキくん！」

「おれですか!？」

「あなたいつつも点数悪いでしょう？」

高坂さんという勝負よ」

「ちよつと先生それどう言う意味ですか!？」

先生の言葉に穂乃果が立ち上がった。

「だってあなた達全然数学出来てないじゃない……」

「「うっ……」」

「……で、ナオキくん。この問題の答えは？」

「えっと……」

なんだこの問題は？

まずどう解いていいすらわかんねーよ……

「コホン……」

ん？

今のは……ことり？

おれはことりの方を見た。

すると……



「!?……………82です!」

「おお!正解よ!」

「ほっ……………」

「では座つてよろしい」

「はい」

「ことりマジ天使!」

ノートに答えを書いておれに見せてくれるなんて…………

しかも解き方を聞かれてもいいように途中の式まで…………

そして数学の授業が終わつて、

「ことり、ありがとう!!」

「どういたしまして〜」

おれはことりに深々と頭を下げた。

「ことりがいなくなつたらまた点数下がつてたよ…………」

「はあ……………今回だけですよ……………次からは自力で解いてください!」

「え〜!そんな無理やて!!」

「文句言わない!!」

「は……はい……あ、まだチョコ返し終わってないから行かなきゃ！」  
「あ、逃げた！」

「ふう……脱出成功……」

おれは教室を急いで出て、廊下を歩いていた。

「えつと……あとは3年生かな？」

おれは3年生の教室へと向かった。

渡していない人たちに渡して絵里たちの教室に……

「お、希！にこー！」

「ナオキ（くん）!?!」

「どうしたん？」

「ああ……チョコのお返しをな……」

はいよ、チョコありがとう」

「おお！ありがとう！」

「まあ……受け取っておくわ」

「ははは……あ、そーいや絵里は？」

「ああ…今絵里ならトイレに行ってるわよ」

「そうか……（ならもうすぐ会えるか……）ありがどうな！それじゃ！」

おれは希とにここに手を振って、その教室にいたまだ渡していない人にチョコを渡して教室を出て、自分の教室へと向かった。

「あらナオキ」

「おお絵里！ちようどよかった」

「ん？」

「昼休み……屋上で待ってるから……」

「え？」

おれは絵里の耳元でそう言って自分の教室へと戻った。

くラブライブ！（ナオキ）く

そして昼休み……

おれは授業が終わるとすぐに屋上へと向かった。

「絵里……まだかな……」

おれは弁当を持たぬまま待っていた。

まあ、絵里から貰うの忘れてたよね。

ガチャ……

「あ、ナオキ！ごめんね、待たしちやって」

「いや、全然待つてないよ」

「で、なにか話があるの？」

「ああ……はいこれ、お返し……」

チョコありがとう……」

おれは絵里にチョコを渡した。

「ありがとう！でもなんでここで？」

「えつと……絵里以外へは本命じゃないから……なんか……」

「ふふつ……そういうこと……」

ねえ……開けていい？」

「ああ……いいよ……」

絵里はワクワクしながらラッピングを外した。

「あ、これって……GODIVA!？」

「ああ……高級……でいいんやな……？」

「ええ！買ったたくても手を出せなかったの！

ありがとう!!」

「おっと……」

絵里は余程嬉しかったのかおれに抱きついてきた。

「ナオキ……ありがとう………チュツ……」

「ん……」

絵里は抱きついたままおれの唇にキスをしてきた。

「………ふふっ………さあ、お昼にしましょう」

「ああ……」

そしておれと絵里は一緒に昼飯を食べた。

か……  
そう言えば貰った数だけ用意したチョコ、全部なくなつたからこれで全員に返したの

疲れた………

「はい、あ〜ん」

「あーん……………やっぱり絵里の料理は美味えーな」

「ふふっ……………ナオキもあ〜んってして？」

「ええよ……………あーん……………」

「あ〜ん……………ふふっ……………ナオキに食べさせてもらったらいつもより美味しいわ」

「それはよかった……………」

「ふふっ……………まだまだあるわよ。」

あ〜ん

「あーん……………」

昼休みも幸せだったとき……………

# Another way (海未の誕生日)「弥生の月に交わる剣」

「ふう……」

私、園田海未は朝から素振りをするのが日課です。

それも終わり、汗を拭きました。

「海未さん、終わりましたか？」

「はい、母上！」

「ならシャワーを浴びてきなさい。」

今日はナオキくんが来るのでしょうか？」

「あつ、そうでした！では……」

そうでした！

今日はナオキが家に来るのでした！

しかも珍しく……

それは昨日のこと……

「なあ、海未……明日暇か？」

「ええ……朝の素振りが終われば……」

「よかつた……なら海未んちに行つてもいいか？」

「えっ!？」

「いいじゃんいいじゃん! だって明日は……」わわわわわわ「……ことりちゃん! 何するの!？」

「シ〜」

「あつ、そつか……」

えつと……私たちも誘われたけど明日は用事があつて……ごめんね」

「うん、だから2人で楽しんできて〜」

明らかに怪しいです……

「わ……わかりました……」

「ありがとう! それじゃあ明日海未んちに行くから」

「はい……」



シャーーー

そんな昨日のことを思い出しながら私はシャワーを浴びています。

「ナオキと……2人つきりで……」

そしてシャワーを止めてタオルで体を拭いて下着をはき、弓道着と袴を着ました。

「海未さーん、朝食出来ましたよー!」

「はーい! くださいまー!」

朝食が出来たみたいなので私はリビングに向かいました。

「いただきます…」

「そうだ。海未は今日が誕生日だろ?」

「はい!」

「ケーキ買ってあるから夜に食べような」

「本当ですか！ありがとうございます！」

父上は誕生日ケーキを買ってくれてました！

嬉しいです！

「ふふっ…海未さん、お誕生日おめでどうございます」

「おめでどう」

「母上…父上…ありがとうございます！」

それから朝食を食べ終わり、少し自分の部屋でゆっくりしていると……

「海未さーん、ナオキくんが来てくれたわよー！」

「はーい！」

私は急いで玄関に向かいました。

「ナオキ、おはようございます」

「海未、おはよう」

「時間より早かったですね」

「ああ……早く来たかったからな」

「えっ……ああ……そ……そうですね……／／／」

ナ……ナオキったら……何を言って……／／／／

「早く体動かしたかったし！」

「え……ああ……そうですね。」

先に道場の方へ行っててください」

「え……海未さん？なに怒って……「早く行く！」は……はい！お邪魔します！」

「あらあら……」

「ナオキのバカ……」

私は一人玄関で呟いて、今日ナオキを懲らしめると決意しました。

くラブライブ……（海未低ボイス）く

「……これでよしと……久しぶりに着たな……」

「準備……出来たみたいですね」

「ああ……」

私とナオキは道場で防具を着ていました。

ナオキが私の家に来たいと言うのは久しぶりに剣道で運動をしたいからだそうで……

まあ……うつすらわかつてはいましたが……

「でも、ナオキと手合わせは久しぶりですね」

「そうだな……最近ラブライブ！のことがあったからな……」

「そうですね……久しぶりに叩きのめしてあげますよ」

「いや、前はおれ勝ったから今回も勝たせてもらうぜ」

ナオキが言う“前”とはもちろん、穂乃果がアイドルを辞めると言ったとき、私も少々悩んでいたときです。

あのときはビックリしました……

いくら悩んでいたとはいえ、ナオキに負けるとは……

しかもあんな奥義まで……

「さあ、試合をしましょう」

「ああ……」

そして私たちは向かい合って面を被りました。

私は……『鬼園田』となつて……

「合図はどうする？」

「お好きなタイミングでどうぞ」

私はニヤリと笑って言いました。

「よつぼどの自信のようで……」

ナオキはそう言うのと一度深呼吸をして……

「てやああああああああああ!!!」

突進してきました。

「やはりですか……ならばっ!!」

パシン!!

グググググ……

2人の竹刀は激しくぶつかりました。

そしてその後一旦離れました。

「はあ……はあ……」

「もう疲れたのですか?」

「………いいや………まだまだっ!!」

「そうでなければ面白くありませんっ!!」

パシン!!

パシン! パシン! パシン! パシン! パシン! パシン! パシン! ……

しばらく2人の打ち合いが続きました。

「やっぱり海未はつえーな……………」

「ナオキこそ……………」

私たちは一旦離れて息を切らしながら言いました。

「……………ならおれは……………」

そしてナオキは刀を鞘に納めるようにし、竹刀が上に向くようにし、体勢を低くして構えました。

「また”あれ”ですか？」

「当たり前だ……………覚悟しろよ？」

「ふふつ……………受けて立ちます……………」

私は竹刀を構えました。

ここで構えてるところを叩けば勝てるのかも知れません……………が、私は正々堂々と戦います……………

……………戦いたい!!

「いくぞ!!」

「はー!」

ビュン!

やはり……はやい……

「天翔龍閃!!」

あまかけりゆうのひらめき

どおおおおおおおお!!!」

パシン!!

ナオキの竹刀は胴に命中しました。

「うっ………一本取られました……」

「うっし………ふう………」

私が膝と手をつくくと、ナオキはその場に手とお尻をついて座りました。

「流石は早いですね……」

あまかけりゆうのひらめき  
天翔龍閃”

……防げませんでした」

「はははは……おれもこれを再現するには苦労したし……」

「それもそうですね……」

「もういつちよ……やるか?」

「もちろんです……」



「よっしやー！」

私たちは立ち上がりそれから試合をしました。

私は、時間が過ぎるのを忘れていました。

くラブライブ！（海未・ナオキ）く

「ふう……結構動いたな……」

「そうですね……汗もたくさんかきましたし……」

数は覚えていませんが、何戦かして私たちは道場の縁に座って汗を拭いて風に当たっています。

「もう終わりましたか？」

「母上……」

「お茶を持って来ましたよ……どうぞ……」

「ありがとうございます」

私たちはお茶を持ってきてくれて母上にお礼を言いました。

私は少しだけ飲みましたが、ナオキは一気に飲みほしました。

「……ふう……スツキリした……」

「ふふっ……汗もかいたでしょう？」

よければシャワーを浴びて行って」

「そうですね……それでは絵里に失礼ですよ」

「それではお言葉に甘えて……」

それからナオキは母上の案内でシャワーを浴びに行きました。

「ナオキは……ちゃんと覚えているのでしょうか……？」

私はボソツとそう呟いて空を見上げました。

くラブライブ♡（海未）く

ナオキがシャワーを浴びて帰ってきて、私も本日2度目のシャワーを浴びに行きました。

シャワー……………

キュツキュツ……………

「ふう……………」

私は体を拭いていました。

「なあ…海未？」

「な…なんですか!?!破廉恥です!!／／／／」

「待て待て!声だけだ!」

「そ…それなら……………」

ナオキは廊下から話しかけてきました。

「穂乃果から連絡があつてさ、穂むらに來てくれだつてさ」

「穂むらに?何故なのですか?」

「それはわからん……………とにかく行くか?」

穂乃果が穂むらに呼び出す理由……………

穂乃果は毎年私の誕生日を祝ってくれている………  
はっ!?

まさか誕生日プレゼントに限定のほむまんを!?

「行きます!」

「お……そうか………ならリビングで待たしといってもらおう?」

「あ、はい!」

ナオキがリビングの方へと向かう足音が聞こえました。

ほむまん………楽しみです♡

くらぶライブ! (海未) く

「それでは、行ってまいります!」

「行ってらっしゃい」

「すみません、お邪魔しました」

「いえいえ、また剣道しに来てもいいのよ？」

「はい！ありがとうございます！」

「ほらナオキ！早く行きますよ！ほむまんが待ってます！」

「お…おう……………それでは……………」

私とナオキは穂乃果の家である穂むらに向かいました。

くラブライブ！（海未）く

「着いた着いた……………」

「さ、入りましたよう！」

私はお店の方の入り口から入ろうとしました。

「待て海未！」

「はい？」

「こつちだよこつち」

ナオキはお店の方とは違う入り口の方を指さしました。

「そちらでしたか……」

「ああ……こつちや……」

私たちはそちらの方へ向かいました。

ガラガラガラ……

「お邪魔します」

「穂乃果く来ましたよ」

私は声を出して穂乃果を呼ぶも返事はありませんでした。

「入るぞ」

「ちよつとナオキ！勝手に……」

なんとナオキは勝手にあがり、住居スペースの戸に手をかけました。

おかしな事に電気も消えていました。

「く……暗いですよ？穂乃果の部屋なのでは？」

「海未……」

「な……なんですか……？」

「いいからこつち来て……」

「…………わかりました……」

私は腹をくくって戸の前に立ちました。

「目を瞑って……」

「え……目を？」

「ああ……はやく……」

「は……はい……／＼／＼」

め……目を瞑れなんて……破廉恥です……／＼／＼／

……

……

……あれ？

「もう開けていいぞ」

「え……あ……はい……」

私はそっつと目を開けました。

すると……

パン！パン！パン！パン！パン！パン！パン！パン！パン！

「え……………」

「……………海未（ちゃん）！誕生日おめでとー！……………」

私が目を開けるとクラツカーの音がして、ナオキを含めたみんなが……………  
「覚えててくれたんですか……………」

私はナオキを見て言いました。

「ああ……………ちよつとサプライズをな……………」

……………それに……………”親友”の誕生日を忘れるもんかよ」

「……………ありがとう……………ございます……………」

私の目からは一滴の涙が零れていました。

「え……………ちよ……………海未!？」

「あく！ナオキくんが海未ちゃんを泣かしたにや〜！」

「いや……………そんなつもりはなかって……………えつと……………ごめん！」

「ナオキは……………悪くないですよ……………ふふつ……………ただ……………嬉しくて……………ですね……………ふふふふつ……………」



私は笑いながら涙を拭きました。

「ま……まあ……座ろうや……海未……」

「はい……」

そして私とナオキも座ることにしました。

「はい、海未ちゃん！誕生日ケーキ！」

「ことり！ありがとうございます！」

「にこちゃんと一緒に作ったんだよ！」

「ふふつ、私たち2人からの誕生日プレゼントよ」

「にこも……ありがとうございます！」

ことりとにこがプレゼントと言って出してくれたケーキはショートケーキでイチゴとほむまんが半分ずつあって、真ん中にあるチョコのボードに『Happy Birthday!』と書かれていました。

「みんな行くよー！せーの！」

「「「「「ハッピーバースデートゥーユーー！ハッピーバースデートゥーユーー！ハッピーバースデーディア海未ー（ちゃん）！ハッピーバースデートゥーユーー！おめでとうー！」」」」

パチパチパチパチパチパチパチパチパチパチ……

みんなは穂乃果の合図でバースデーソングを歌ってくれました。

「みなさん……ありがとうございます！」

そしてみんなから私に誕生日プレゼントが手渡されます。

「ウチからはこの……刀のストラップをプレゼントや！」

「希、ありがとうございます！筆箱にでも付けましょうか……」

希は日本刀の形をしたストラップをくれました。

「凜からは……扇のストラップにや！」

「凜、ありがとうございます！これはどこに付けましょうか……」

凜は真ん中に日の丸が書かれた扇のストラップをくれました。

「わ……私からは親戚のお婆ちゃん畑で採れたお茶っ葉を……」

「花陽、ありがとうございます！」

花陽はいい匂いがするお茶っ葉をくれました。

「私からは新曲よ」

「新曲……？」

「ええ……タイトルは『私たちは未来の花』よ」

「真姫、ありがとうございます！」

真姫は『私たちは未来の花』という新曲の入ったCDと歌詞カードをくれました。

「私は……海未に似合いそうなスカートを選んできたの！」

「ス……スカートですか!? それに……短いような気が……／＼／＼」

「いいじゃない! 海未になら似合うわよ!」

「わかりました……絵里、ありがとうございます……」

絵里は丈の短いスカートをくれました。

せつかなのでまた着てみますか……

「次はおれやな……」

おれからは……ネックレスだ!

「わく……綺麗ですね……」

「ああ……頑張って作ったんや……」

「ナオキの手作りですか!？」

「ああ…海未に似合うと思うんやけど……」

「はい!ナオキ、ありがとうございます!」

ナオキは青色のビーズで出来たネックレスをくれました。

「最後に穂乃果から……」

「じゃーん!海未ちゃん誕生日限定ほむまん!」

「わ〜!これは夢にまで見たほむまん!穂乃果、ありがとうございます!」

穂乃果は『う』と青色で書いてあるほむまんをくれました。

味はいつものほむまんと変わりませんでした!

それからケーキや出された料理を食べたり、おしゃべりをしたりしました。

その時間は今まで穂乃果たちが開いてくれたどの誕生日パーティーよりも楽しく、短く感じられました。

やはり、sは私の中で大きな存在となっていたという事でしょう……

「それでは最後に海未ちゃんから一言！」

「はい……今日はパーティーを開いていただいてありがとうございます……」

タラタラと話すのもあれですし、真姫から貰った曲でも歌いましょうか……ナオキ  
！」

「はいはい、それじゃあセットするからちよつと待てよ〜」

そしてナオキはCDデッキを出して真姫から貰ったCDを入れて再生ボタンを押  
しました。

するといかにも『和』というイントロが流れました。

「そして私たちは巡り合う……」

私は歌いました。

ありがとうという気持ちを込めて……

「そして私たちは語り合う

赤い赤い未来の花

そして私たちは語り合う

再び会えた時は　　変わるはずでしょう？

新しいふたりに」

私が歌い終わるとみんな大きな拍手をしてくれました。

やっぱり歌うのは楽しいですね！

パーティーが終わったあと家に帰り、父上にも買ってもらったケーキも食べました！

みなさん、ありがとうございます……

私の誕生日を祝っていただいて……

Another way (UA50000突破記念)「IF  
F～ナオキと絵里の思い」

ナオキは春から音ノ木坂学院に模擬男子生徒として通っている。

そこで幼なじみの高坂穂乃果・園田海未・南ことりと同じクラスになり、幼なじみの  
絢瀬絵里やその親友の東條希とも再会し、生徒会に入った。

だが、音ノ木坂学院は廃校の危機に直面した。

ナオキは隣で絵里のことを見ていたが、自分を追い詰めているような…そんな感じが  
した。

そんなとき、穂乃果・海未・ことりがスクールアイドルを始めた。

絵里はそれに反対していた。

そしてナオキ・絵里・希は廃校の危機をなんとかするため案を考えるが思いつかない。  
やっぱり穂乃果たちスクールアイドルの力を借りた方がいいのではないかとナオキ  
は心の中で思っていたが、絵里の事もあるので口にはしなかった。

翌日、穂乃果たちは講堂の使用許可を取りに来た。

希の助言もあり、穂乃果たちに新入生歓迎会の日に講堂の使用が認められた。

そしてナオキは希から穂乃果たちを裏から一緒に支援しようと思っかけた。最初は絵里のこともあり断っていたが、毎日頑張る3人を見てナオキはそれを承諾した。

希は自身の願いでグループ名を決めた。

その名も『μ, s』……9人の歌の女神。

そしてナオキは戦車。カードの意味は援軍、成功、勝利。それはナオキの手伝いでμ, sは完全になるということを示していた。

そしてμ, sのファーストライブ。

ナオキは絵里にそのライブの様子を撮るため、カメラをセットするように言われた。

ナオキが講堂へ行くと、まだ誰もいなかった。ナオキは最前列に座り、開始を待つも、誰も来ない。チラチラとドアの方を見ても誰も来ない。

そして、開演の時間になってしまった。

ナオキは穂乃果たち3人と目を合わせることが出来なかった。

唇を噛み締めて、目を逸らし、3人の悲しみの声を静かに聞いていた。

ナオキはこのままライブは中止になるのかと思った。



そんなときだった。

1年生の小泉花陽が講堂に急いで入ってきた。花陽はライブはまだ始まってないのかと焦っていた。

そんな花陽を見てナオキら立ち上がり…………

「おい！おれはずっと待つてるんやぞ！μ s！早くライブを始めてくれ！お前たちの練習の成果を、歌声を、ダンスを見せてくれ！もう待ちくたびれたわ！」

そう言った。

穂乃果たちはその言葉に背中を押されてライブを始めた。

ナオキはライブが始まると思うとカメラの録画ボタンを押した。

披露した曲は『START：DASH!!』…それがμ sのはじまりの曲となった。

ナオキは穂乃果たちから目を離せなかった。

歌声、ダンス…とても良かった。そしてこの3人には人を引きつける何かがあった。でもナオキは違和感を感じていた。

何かが足りない。

この3人ではまだ足りないかと直感で思った。

ライブが終わると来たのはナオキは自分と花陽だけと思っていたが、明らかに拍手の音が2人の音ではなかった。

ヒフミを合わせてもそれよりは大きい。

ナオキは周りを見た。

すると、何人もの人がいた。

花陽と親友の星空凜、この曲の作曲者の西木野真姫、アイドル研究部部长の矢澤にここ。そしておそらく外には希も入るだろうと悟り、上にあつた部屋を見ると絵里がいた。

そして絵里は降りてきて穂乃果たちに「どうするつもり？」

と声をかけた。

穂乃果は

「続けますー！」

と答えた。

そして穂乃果は決意を述べた。

自分たちがここにいるこの想いを届けたい。そしてここを満員にしてみせると。

絵里は

「せいぜい頑張りなさい」

と答えてその場を去った。

ナオキはカメラを回収して

「ライブ、ハラショー！だったぜ」

と親指を立ててそう言い残して絵里の後を追ってその場を去った。

そして3人は思った：

「ハラシヨー！つて何？」

と……その意味を知るものにはここにはもういなかった。

ナオキは帰り道で絵里にカメラを渡した。なにに使うのかと聞くと、絵里は「ネットに動画をアップして3人に現実を教えてあげようと思つて」

と言つた。

ナオキはその編集してあげる作業を自分に任せろと言ひ、絵里はナオキにお願いした。

次の日に穂乃果たちはナオキに礼を言つた。

「ナオキの言葉のおかげでいいライブができた」

と。

希の占いは正しかったみたいだ。

それからナオキは作曲者である真姫が音楽室でピアノを弾いているのを目撃した。

ナオキはどこかで聞いたことのあるピアノの音と歌声だと思ひ出そうとした。思ひ出せないので音楽室に乗り込んだ。

そして西木野病院の娘と聞いて、最初に東京にいたときに会った子だと気がついた。

真姫は

「やっと気づいてくれた」

と言った。

真姫ははじめてナオキを見かけてから気づいていたという。

再会を喜び、ナオキは生徒会室へと向かった。

そして希と2人のときに $\mu$ 、 $s$ はあの3人だけじゃないはずだと聞いた。

答えはYESだった。

ナオキ自身は誰がふさわしいと思うかと聞かれて、あの場にいたヒフミ以外の人たちだと頭に浮かんだ。

そしてナオキはあまり知らない花陽と凜について調べることにした。

それからまずは $\mu$ 、 $s$ のポスターの前にいた花陽に声をかけた。

聞くと花陽はアイドルに興味があるという。

ナオキは花陽に

「 $\mu$ 、 $s$ に入るって言えば？」

と言うが花陽は声も小さいしなどと言い、自分には無理と決めつけていた。そして花

陽は用があるからとその場を去った。

それから星空凧に遭遇した。

凧の手には口紅があり、ナオキを見ると

「にやにやにやにや!？」

と口紅をポケツトに隠した。

ナオキは

「女の子なのになんで口紅を隠すんだ？」

と聞くと、

「く…口紅!? な…なんのことですか? 凧はそんな女の子らしいもの使いませんよ」

と目を逸らして言った。

ナオキは何かあると悟った。

そして凧に

「アイドルになる気とかってある？」と聞くと、凧は

「凧はそんなアイドルなんて無理です。だって女の子っぽくないし…」と言った。

ナオキは

「驚かしてすまなかったな。でもおれはかわいいと思うよ…君のこと」

と言って生徒会室へと再び足を進めた。

ナオキはその日の夜、家で考えていた。花陽と凜とは昔、どこかで会ったことがあるかもしれない。

それがわかるのはもう少し先のことだったが……

そして次の日、ナオキが渡り廊下を歩いていると花陽と真姫が発声練習をしているのを見かけた。綺麗な歌声だった。

そして凜が花陽を連れていこうとしていた。

あの3人はμ、sに入る。

そう悟ったナオキはその場を去った。

もちろん3人はμ、sに入り、μ、sは6人となった。

それからしばらく経って穂乃果たちはアイドル部設立のため書類を生徒会室に出しに来た。

だけど答えはN oだった。

その理由はこの学校にはもうすでに『アイドル研究部』というアイドルに関する部があるからだった。

穂乃果たち6人は早速アイドル研究部の部室へと向かった。

ナオキはその部室内で何があつたかは知らない。だが、穂乃果が次の日から「キャラ

作りが大事」

とか訳のわからないことを言い始めていたのでその日になにかあったに違いないと思っていた。

まあ、その話は置いて…穂乃果と海末とことりはにこと会った日の帰り道にこの過去の話を聞いた。

次の日、ナオキたちが生徒会室で作業をしていると、屋上から「にっこにっこに♪」と言う声が聞こえてきた。

おそらくにこの勧誘に成功したのだろうとナオキは悟った。

それからリーダーを決めるとかなんとかでバタバタして、結局穂乃果がリーダーということになった。

そして、sは『これからのSomeday』という新曲をアップした。

そのPVをナオキ・絵里・希は生徒会室で見ている。

「ふくん…なかなか上手くなったな」

ナオキはPVを見て言った。

「……まだまだね……」

絵里は冷たい目で言った。

「ならえりちが手伝ってあげれば…そうすれば…」  
「だったら希が手伝えればいいでしょう

……ウチじゃダメなんや……えりちじゃないと……」

希はあるカードを出して言った。

「……ダメよ……」

絵里は目をウルウルさせながら言った。

「絵里……」

ナオキは絵里に声をかけようとしたが、希にアイコンタクトで、まだ時ではないと伝えられたのでやめた。

そしてある日、スクールアイドルの祭典『ラブライブ！』の開催が告げられた。

穂乃果たちは生徒会室に理事長への申し出の許可を貰いに来たが、絵里のこともあり直接理事長室へと向かった。

そこでちょうど理事長室から出てきた絵里・ナオキ・希と鉢合わせになる。

話していると理事長が中で話さないといみんなを中へ入れた。

理事長はμ'sのラブライブ！出場の許可を認めた。

だが絵里は納得せず、それなら生徒会にも独自に動く許可をくださいと言うがそれは認められなかった。

絵里は理由がわからなかったが、ナオキと希はそれをわかっていたが絵里に言い出せ



ずにいた。

絵里はその場を去ったのでナオキもそのあとを追った。

μ sには1人でも赤点を取ればラブライブ！出場は認められないと条件を付けられ、穂乃果・凜・にこは危機を感じていた。

その頃……

「ねえナオキ……」

「どうした？」

「今度のテスト……大丈夫なの？」

「ふえ!?えつと……その………数学が……」

「はあ……生徒会役員なんだから赤点取らないでよね……」

「でもムズイんやよ!」

そして絵里は少し考えてから……

「…なら私がみっちり教えてあげるわ」

「マジで!？」

「ええ…ちゃんと勉強するのよ?」

「わっかかりました!」

そして絵里とナオキは絵里の部屋で2人っきりの勉強会をした。

「だからここはこう解いて……」

「うーん……」

「まだダメ？」

「なんか応用となるとなかなか……」

「そう……なら休憩にしましょうか」

「ああ……」

それから勉強会は続いた。

夜が遅くなったのでお開きとなり、また明日から行われることとなった。

テスト当日にはナオキも赤点なしだった。

そして絵里は理事長に呼ばれた。

ナオキと希は理事長室前で待機となった。

「なんの話なんでしょうね？」

「さあ？」

ナオキと希が話していると、練習着に着替えた穂乃果がやってきた。

そして理事長室のドアを嬉しそうにノックした。

だが返事はなく、不思議に思った穂乃果はそつとドアを開けた。

そこから漏れた理事長の声にみんなが驚愕した。

「来年度から音ノ木坂学院は生徒募集をやめ、廃校とします」

この部分だけでは廃校が決定したみたいだが、この言葉の前にはまだ言葉があった。

「オープンキャンパスでのアンケートの結果次第では、来年度から音ノ木坂学院は生徒募集をやめ、廃校とします」

だった。

理事長室に飛び込んだ穂乃果たちはその事実を聞いてホッと胸をなでおろすも、まだ安心はできない。

そして絵里はオープンキャンパスでの生徒会の仕事を貰い理事長室を出た。

「絵里……」

ナオキは不安そうに言った。

「どうするんや?」

希はカードを出して言った。

「……そんなの決まってるでしょ……」

私たち生徒会がなんとかする……

生徒会長として、絶対に廃校を阻止してみせるわ……行くわよ」

絵里は今まで以上の厳しい表情で生徒会室へと歩いて行った。

「希先輩……」

「今はウチらはウチらで頑張ろう。」

「あの<sup>あ</sup>の子<sup>こ</sup>研究部<sup>た</sup>はあの子<sup>こ</sup>たちで動くはずやから……」

「………生徒会<sup>おれたち</sup>はおれたちのできることを……つてことですよね？」

「その通りや……さ、行こか」

「はいー」

それから生徒会の他のメンバーも集め、会議を開いてオープンキャンパスの内容などを決めた。

アルパカ小屋に行ったときに絵里が唾をかけられたのでナオキが拭こうとすると力キクたちに止められた。

その理由は希がコソつとナオキに言った。

それを聞いたナオキは顔を真っ赤にした。

そしてしばらく経って、穂乃果たちが絵里にダンスを教えることに来た。

絵里はそれを承諾した。

「星が動き出したみたいやね……」

「はい……もうそろそろですかね？」

「あとひと押し……と言ったところやね」

「ひと押し……ですか……」

ナオキはそう言うのと絵里を見つめた。

μ sは絵里の指導のもとに練習していたがその練習は厳しかった。

花陽がバランスを崩して倒れると絵里は練習を切り上げた。

だが、穂乃果は去ろうとする絵里を止めて……

「今日はありがとうございました！明日もよろしくお願いします！」

「「「「「お願いします！」」」」」

ナオキはその言葉を聞いて絵里の瞳が揺れたのを見逃さなかった。

その帰り道……

「あいつら……どうやった？」

「ダメダメね……基礎からなっていないわ」

「そうか……みんな頑張ってると思うんやけどな……」

「いくら頑張っても、結果を残さなければ意味がないわ……」

「……………おれがいない間になにかあったんか？」

「……………別に……………なにもないわよ……………」

「……………話してくれないのか？」

「……………だから……………話すことなんてないわよ……………」

「ならなんで目を逸らすんや？」

「それは……………」

絵里はナオキと目を合わそうとはしなかった。

「……………まあいいよ……………無理に話さなくても……………」

「えっ？」

「じゃ、また明日な」

「ええ……………また明日……………」

そして2人は別れた。

次の日の放課後も絵里は屋上へ向かった。

だが、入るのを拒んでいた。

そこを真姫や凜に見つかり、凜に押されて屋上に出た。

「おはようございます！」

「まずはストレッチからですよね！」

「……………辛くないの？」

「辛いです」

「え？ならなんで……………」

「やりたいからです！だから…今日もよろしくお願いします！」

「……………」

それを聞いた絵里は屋上を去った。

そして廊下を歩いているときに穂乃果や妹の亜里沙に言われたことを思い出した。

「えり……希さん……」！?ナオキくん……なんで……………」

希が絵里に声をかけようとしたところをナオキは止めた。

「おれに任せてください……………」おれが……絵里を説得します……………」だから希さんはあいつらと待つててください……………」おれが絵里を連れて来ます……………」

「……………」わかった……………」あとは任したで……………」

希はナオキに絵里のことを託して屋上に向かった。

「……………」よし……………」

ナオキは腹をくくって廊下の角から出た。

「っ……絵里！……あれ？」

ナオキが腹をくくって出て絵里の名を呼んだが、その場には絵里はいなかった。

「あれ？どこ行つた？」

コツ……コツ……コツ……

ナオキが迷っていると誰かが階段を降りる音が聞こえた。

「靴の音……そうか……教室！」

ナオキは3年生の教室へと向かった。



ナオキは3年生の教室の絵里のクラスのドアからそつと覗いた。  
すると絵里が椅子に座って窓から外を見ていた。

「よし…今度こそ……」

ナオキは今度こそと腹をくくってドアを開けた。

ガラガラガラ……

「!?……ナオキ……」

「絵里……」

「何しに来たのよ……」

「何しに来たって……絵里に話をしにきた」

「私に？」

「……隣に行つていいか？」

「……ええ……」

ナオキは歩き出して、絵里の隣の席の椅子を動かして絵里の近くに置いてそこに座つた。

「なあ…絵里……おれさ、東京こっちに戻つてきて…思つてたんや……」

絵里はなんか自分を追い詰めているようで、他のことを考えすぎて自分のやりたいたいことを抑えていて……」

「だって……私がかしなきや……この学校は……」

「絵里……それは生徒会長としての義務感やろ？」

「え？」

絵里は目を丸くしてナオキの方を向いた。

「絵里がずっとなんとかしなきやとか言っていたのは生徒会長としての義務感……だから理事長は認めてくれなかったんや」

「違う……私は……違うくない！おれは音ノ木坂学院生徒会長絢瀬絵里に聞いてるんじゃない！おれは幼なじみの………絢瀬絵里に聞いてるんだよ！！絵里の本心を聞かせてくれよ！！絵里の……絵里の本当にやりたいことを………」

ナオキは立ち上がって大きな声でそう言った。ナオキが座っていた椅子は音をたてて倒れた。

「………なによ………なによなによ！！！！なんとかしなきやいけないんだからしようがないじゃない！！」

私だって……私だって好きなことやって、なんとかなるんならそうしたいわよ！！」

絵里は立ち上がり、涙を含めながら言った。絵里の座っていた椅子も音をたてて倒れた。

「絵里……」

「うっ……自分が不器用なのはわかってる……でも!!

今更アイドルをやりたいなんて……私が言えると思う?今まで散々酷いことしてきたのに……否定してきたのに……私はロシアに帰った時にバレエのコンクールを受けた。全力で楽しんでやったわ……でもダメだった……だから……だから……」

絵里は自身の思いを全てぶつけて、ナオキにこの前話したくなかったことも話して涙を流した。

「……絵里……」

「ナオキ……んっ!?!」

ナオキは絵里を抱きしめて自分の唇を絵里の唇に重ねた。

「……はぁ……絵里……おれは絵里のことが好きだ」

「えっ……?」

絵里は突然のことでびっくりした。

「ずっと好きだった。小さい時に絵里に出会ったあの時から!」

「……なんで……今……?」

「絵里が絵里自身の思いを言ったから……絵里のやりたいことを言ったからだ。」

だからおれも言わなきゃと思って……その……なんだ……絵里に自分の気持ちに素直に動いて欲しかったから……おれも自分の気持ちに素直に動いた……// //」

「……………ふふっ……………なによそれ……………」

「絵里……………おれは絵里のことが好きだ……………おれと付き合ってください……………」

「……………はい！私も好きだった……………ずっと……………ずっと……………」

「……………ありがとう……………」

ナオキと絵里はもう一度唇を合わせた。

「……………私……………やりたいことをしていいのよね？」

「ああ……………言ってみな……………絵里のやりたいこと……………」

「……………私は……………スクールアイドルをして、廃校を阻止したい！」

「ハラショー！じゃ、行こう……………」

ナオキはそう言っつて絵里に手を差しのべた。

「ええ！」

絵里はその手をとってナオキと共に屋上に向かった。

「じゃ……………絵里……………いけるな？」

「まだ緊張するわね……ははは……」

「そうか……ならおれが開けてやるよ……」

「ありがとう……すーっ……いいわよ……」

「よし……」

ナオキはドアノブに手をかけてドアを開けようとした。

そのとき……

ボタン！

「やっぱり私、2人を呼んでくるよ！」

穂乃果が勢いよくドアを開けた。

「え……」

「あ、生徒会長……」

穂乃果や絵里をはじめみんなは目を丸くした。

1人を除いて……

「つて……ナオキ！大丈夫!？」

絵里はナオキを見て言った。

「え？ナオキくん……う？ああ!!」

穂乃果は絵里の向いた方を見て言った。

「ふえ〜」

ナオキはドアと壁に挟まれていた。

「ちよつとナオキ!」

「あああああ……大変だあ……!」

「痛い……」

ナオキは鼻やデコにバツテンのテープを貼っていた。

「ごめんナオキくん!」

穂乃果は手を合わせてナオキに謝った。

みんなは笑った。

「笑うなよ……つたく……ま、そんなことより……絵里……」

ナオキは絵里の肩に手を置いて言った。

「ええ……えつと……言いにくいんだけど……その……」

「はあ……ほい……」

ナオキはなかなか言い出せない絵里の背中を押した。

「……………ナオキ……」

絵里は目を丸くしてナオキの顔を見た。

ナオキは頷いた。

「ありがとう……」

絵里はボソツとそう言った。

絵里は自らの思いを言おうとした。

だが……

「生徒会長……いや、絵里先輩……」

「!？」

穂乃果は絵里の前に手を差しのべた。

「絵里先輩……μ s に入ってください！」

絵里先輩がμ s には必要なんです！」

「……ええ！喜んで！よろしくね……」

絵里はその手をとった。

「これで9人……」

「えっ!？」

穂乃果の言葉にナオキと絵里は驚いた。

「ああ……2人を待っている間にウチもμ s に入れて言うたんよ。えりちもこともみんなに伝えてるよ」

「なによそれ……って……希には話してないわよね!？」

「それはウチがこつそり2人の話を聞いてたからだよ」

「はあ!？」

「ま……待て……どこまで聞いてたんですか？」

「どこまでって……えっと……えりちの『私が言えると思う?』のところまでかな?」

「ほっ……」

ナオキと絵里は告白のところを聞かれていないと知ると胸をなでおろした。

「うん!だからこれで9人だよ!」



穂乃果は笑って言った。

「いいや……10人だぞ……おれを入れてな」

「「「「「えっ!?!」「」「」「」」」」」

ナオキと希以外は驚きの声をあげた。

「そうやよ……μ、sはこの9人とあと1人の存在が必要なんや。だからナオキくんを入れてμ、sは完成するんや」

「そゆこと……イヒヒ……」

「……もうなによそれ……さ、私は着替えてくるわね」

「そうやね」

「ああ……オープンキャンパスまで時間がないからな」

「「「「「やったー!!」「」「」「」」」」」

みんなは喜びの声をあげた。

「あ、そうや!ナオキくん、えりち」

「ん?」

「よかったね。好きな人同士付き合えて」

「ああ……それで……って……」

「なんで希が知ってるのよ!?!／／／」

「え？あははは……聞いてたんやで、最後まで」

「の……ののの希さん！なんてことを！！／／／」

「ナオキ！逃げるわよ！」

「おう！」

絵里がそう言うとなオキは絵里の手をとって走った。

「こら！待なさーい！！」

にこはそう言って追いかけた。

「破廉恥です！待なさーい！！」

海未はそう言って追いかけた。

「μ s の絢瀬絵里とナオキ……衝撃のスキヤンダル……！」

花陽は言った。

「さ、早く追いかけてよう！」

穂乃果は言った。

みんなはナオキたちを追いかけた。

10人の顔は笑顔だった。

そしてオープンキャンパスのライブを大成功して、μ s は音ノ木坂学院の廃校阻止に大きな役割を果たしたのだった。

それから様々な問題にぶつかったが、それを乗り越えて、  
Sは第2回ラブライブ！  
で優勝した。

卒業式の日にはナオキは絵里にプロポーズした。

これがIFのストーリー……

## 第102話 「Hello? 星を数えて」

前回のラブライブ！

にっこにっこにー♪

私たちはアメリカのホテルで各自の部屋で夜を過ごした。

まあ…穂乃果と一緒にでも……悪くなかったけど……

それに、真姫やナオキはなにやら考えてたみたいだけど……

これからは練習よ！集中！集中！

にこっ♡

朝、ホテルのレストランで朝ごはんを食べた10人はセントラルパークでランニング前のストレッチをしていた。

「うーん！朝はなんだか気持ちいいね〜」

花陽は体を伸ばして言った。

「テンション上がるにや〜!!」

凜は飛び跳ねて言った。

「ほんまに……う〜ん!」

ナオキも体を伸ばして言った。

「こんな都会の真ん中に、こんな自然がいつぱいの公園があるなんて…凄いい〜」

「ことりは辺りを見渡して言った。

「さ、そろそろ行きましょう!」

絵里は言った。

「もう…何やってるのよ……」

真姫は足ふみをしながら言った。

「お、真姫は早くランニングしたいのか?」

「べ…別に!／／／／」

「ははははは……ところで……」

海末ちゃん……なにしてるの?」

穂乃果は後ろを見て言った。

みんなも後ろを向いた。

「だから大丈夫だったの……早く来い」

ナオキは呆れた様子で言った。

「本当ですか……?」

海未は恐る恐る物陰から顔を出して辺りを警戒してジッと見た。

「どんなけ警戒してんだよ……」

大丈夫やって……おれもおるしよ」

「そうだよ海未ちゃん！大丈夫だよ！」

こつこつと言った。

「……………信じてても……………よいのですね……………」

そう言つて海未は恐る恐るみんなの元へと近づいた。

「よし……………じゃあルートは朝飯んときに話した通りだ。おれが先導するから頑張つてス

ピードを合わせてくれよ……とくに凜！」

「にゃあ!」

「突つ走りすぎんなよ。それで迷子になつても知らねーぞ」

「大丈夫にゃ！ちゃんとナオキくんに合わせて走るにゃ！」

「よろしい……………それじゃあみんな行くぞ！」

「……………はい！」

「出発にや〜!」

そしてナオキを先頭にランニングを開始した。

走っている順番は、ナオキ、凜、絵里、希、ことり、真姫、穂乃果、海未、花陽、にこだ。

10人はもうすることがないと思っていた練習をすることが出来て嬉しかったのか笑顔だった。

走りながらセントラルパークの景色も楽しんでいた。

湖もあり、噴水もあり、自然もいっぱいだ。

走っているとあるアメリカ人ランナーが10人を日本人と悟り、海未に声をかけた。

「コンニチハー」

「え……あ………こんには………」

海未は少々戸惑ったが笑顔であいさつをした。

「はあ……はあ……よし………ここでストップだー!」

ナオキはステージ前の広場で足を止めた。

「ふう………うわ〜ナオキくんの言う通りだ〜!」

凜も足を止め、ナオキに教えて貰っていたステージを見て驚いた。

「ほんとね。コンサートとか開いたりしてそうね」

絵里を足を止め、ステージを見た。

「なんか登ってみたくなかった！登ってみる？」

希も足を止めて言った。

「せやな……ストレッチしたら登ってみつか」

ナオキも賛成した。

「うう〜疲れた〜」

穂乃果は走り終わり、希に抱きついた。

それから全員が足を止めて、ストレッチをした。

それが終わると9人はステージの上に並び目を瞑った。ナオキはステージ下から9人を見ていた。

並んでいる順番は、海未、真姫、希、絵里、穂乃果、ことり、花陽、にこ、凜だ。

「はあ……気持ちいい〜」

「ライブはここを舞台にするのも悪くないかもね……」

ことりと絵里は言った。

「それになんだか落ち着くしなあ〜」



希は言った。

「それはみんなと一緒にだからじゃねーか？」

ナオキは言った。

「そーやね……」

「ねえ……」

「ん？どうした真姫？」

「ちよつとだけ踊つてみない？」

真姫がそう言うのとみんな顔を合わせて笑った。

「よっしや……ならみんな並んで〜！」

ナオキがそう言つてみんなが並び直していると……

「Hello! 『こんにちは』」

アメリカ人3人組が声をかけてきた。

「He…hello… 『…こんにちは…』」

ナオキはあいさつをした。

「Are you Japanese? 『あなたたちは日本人ですか?』」

真ん中の女性が言った。

「Yes! We are Japanese high school stud

ents. 『はい！私たちは日本人の高校生です。』  
ナオキは返答した。

「You, rehe here for some performance? 『あなたたちはパフォーマンスのためにここにいるんですか?』」

その人の右側の短髪の人が言った。

「Yes! We appear for the TV program of the Angel TV. 『はい！私たちはAngel TVのテレビ番組に出演します。』」

「Oh, Angel TV! ? 『おお！Angel TV!?!』」

Angel TVは有名なテレビ局のため3人のアメリカ人は驚いた。

「Are you Japanese idols? 『あなたたちは日本人のアイドルなんですか?』」

左側のミット帽を被った女性が言った。

「Yes! We are school idols! We are called μs. 『はい！私たちはスクールアイドルなんです！私たちはμsと呼ばれていますよ。』」

「School idols? Well, Japan seems cool

！ 『スクールアイドル?まあ、日本はかっこいいようですね!』

「We, d wanna go there too! 『私たちもまたそこに行きたいですね!』」

「Well, I hope you have a fun time around here! Enjoy your stay! Bye! 『まあ、私はあなたたちにこの辺りで楽しい時間を過ごして欲しいわ!滞在を楽しんでくださいね!さよなら!』」

「Bye! 『さよなら!』」

「Bye! 『さよなら!』」

「Bye! 『さよなら!』」

アメリカ人の3人組は手を振って歩いて行った。

ナオキも手を振った。

「なんて言ってたの?」

穂乃果は言った。

「ああ…滞在を楽しんでくれだってさ………しっかしスクールアイドルってまだこっちは知られてないみたいやな」

「そうやね…日本やったら有名やけどこっちはグループもなかったはずやもんね」

「ああ……ならおれたちがアメリカにスクールアイドルを広めようぜ」  
ナオキがそう言うのとみんなが頷いた。

「でもナオキくんすごいね〜」

「ナオキくんって英語得意だったんだ〜」

「……とりと凜はナオキが英語をペラペラと話していたのに関心して言った。

「ああ……頑張って勉強したんだよ」

「数学もそれぐらい頑張って貰えれば……」

海未は呆れた顔で言った。

「うっせーな!」

ナオキは焦った様子で言った。

「よおくし!じゃあ練習たくさんやってからこの街を見に行こう!」

すると穂乃果が急に大声で言った。

「ふっ……そうと決まればみんな早く並んで並んで!」

「「「「「「はい」」」」」」」

9人は今回のライブで披露する曲の並びで並んだ。

「じゃあ手拍子に合わせて軽く踊ろうか」

「「「「「「はい」」」」」」」

「じゃあいくぞ〜！ワン！ツー！スリー！フォー！………」

9人はナオキの手拍子に合わせて『Angelic Angel』のダンスをした。すると通りかかった人たちがどんどん集まってきた。そして歓声をあげたり、指で笛を吹いたりしていた。

その練習はミニライブっぽくなってしまったようだ。

「フイニーツシュ！」

『フォー………!!』

踊り終わるとみていた人たちが拍手をしたりした。

「Thank you! We appear for the TV program of the Angel TV. Please watch it!  
! 『ありがとうございます！私たちはAngel TVのテレビ番組に出演します。観てください!』」

ナオキはちやつかりと宣伝をして頭を下げた。

そして見ていた人たちはさつき踊っていたみんなのことなどを口々に話しながらその場から去って行った。

「すごい……あれだけの人が……」

穂乃果は言った。

「うう……途中から恥ずかしくなっていました……／＼／＼／＼」

海未は言った。

「ははは……ライブが楽しみな……練習でこれだけの人を惹き付けられたら……」  
「きつと成功するわね……」

にこは笑って言った。

「そうね……」

絵里も笑って言った。

「よおくし！気合い入ってきたよー！！もつと練習だー！！」

「「「「「「おー！」「」」」」」」

穂乃果が拳を挙げるとみんなも挙げた。

それから昼前まで10人は練習を続けた。

「よし…練習はこれぐらいにすつか……」

「「「「「ふう……」」」」」」

9人はナオキが終わりりと告げると疲れた様子でその場に座り込んだ。

「ははは……今ジュース買ってくるからな」

ナオキはジュースを買いに行った。

「ねえねえ希ちゃん」

「どうしたん？穂乃果ちゃん」

「アメリカって自動販売機ってあるの？」

「ちやんとあるでえ〜」

日本と違って建物の中にあるんやけどね」

「へ〜」

しばらくみんながくつろいでいると、ナオキがジュースを持って帰ってきた。

「へい、お待たせ〜」

「ありがとう…お金はまた出すわね」

絵里は言った。

「いやいいよ…これはおれの奢りだよ」

「そう？じゃあお言葉に甘えて……」

絵里はそう言うを受け取ったジュースを飲んだ。

「さ、休憩終わったら一旦ホテルに帰って、着替えてから街へ繰り出そうか」

「「「「「「はーい」「「「「「」」」」」」」」」」

そしてジュースを飲み終わった10人はホテルに戻って着替えてロビーに集まった。

「みんな財布とか持ったな？」

「「「「「「はーい！」「「「「「」」」」」」」」

「よっしゃ、それじゃあ出発だ！」

「「「「「「おー！」「「「「「」」」」」」」」

10人は歩き出した。

「で、どこ行くの？」

穂乃果は余程楽しみなようでワクワクしながら言った。

「そうだな……どこ行く……」

「ナオキくん、決めてなかったのお!？」

花陽は驚きの声をあげた。



「す……すまん……ははは……」

「とりあえずタイムズスクエアに行くっていうのはどう?」

「流石絵里! ナイスアイデア!」

ナオキは指を鳴らしてそう言った。

「なら決まりだね! じゃあ、まずはタイムズスクエアに行こう!」

穂乃果は元気よく言った。

くラブライブ! (μ's 全員) く

タイムズスクエア……

「「「「「うわあ〜!」」」」」

「な? すごいやろ? ほらブロードウェイが広がってるぞ」

9人はタイムズスクエアの立ち並ぶビルなどに驚きの声をあげた。

「もう本当にここでもいいんじゃない?」

穂乃果は言った。

「まあ、そうしたいとこなんやけど折角やしこの街の全部を見ていこうぜ」

ナオキは言った。

「そうね、折角アメリカに来たんだもの」

絵里は言った。

「次はどこ行くん？」

希は言った。

「う〜ん……どつか良いところあるかな……？」

ナオキは腕を組んで考えた。

「やっぱりアメリカと言えば自由の女神を見に行かなきゃでしょ！」

にっこが言った。

「確かに、アメリカと言えば自由の女神よね」

真姫が言った。

「それもそうやな……よし！じゃあ自由の女神見に行くか！」

く ラブライブ！（μ s 全員）く

「お〜!!」

「見えてきたにや〜!」

穂乃果と凜は船から自由の女神が見えてきたのではしゃいでいた。

その頃…

船の中では……………

「ナオキ〜外に出ないの?」

「嫌だ!オコトワリシマス!」

「もう…ナオキ〜」

絵里はナオキの体をゆすつた。

「なんでナオキくんは出ないん?」

希は不思議そうに聞いた。

「そ…………それは……………」

「それは…………?」

そしてナオキは諦めたようにため息をついた。

「苦手なんだよ……………海は……………ここから見るのはいけるけど……………外から見るとか……………

泳ぐのは……………苦手……………なんや……………よ」

ナオキは言いたくなさそうに言った。

「ふふっ…………そうなの?」

「ははははは……」

「笑うな……／＼／＼」

ナオキは笑われて顔を赤くした。

そしてリバティ島に到着し、10人は自由の女神像を見上げた。

「撮って撮って〜！」

「なんだか穂乃果ちゃん、ヒーローみたい！」

「えっへん！」

穂乃果は自由の女神像のポーズをすることりに写真を撮って貰っていた。

「ナオキみてみて！ここからみえる景色凄いわよ！」

絵里は双眼鏡を指差してナオキの袖を引つ張った。

「あ、ナオキくんもみるん？はいどうぞ」

「ありがとう。どれどれ………お〜！確かに凄いな！」

「でしよう？」

「近くで見るとやっぱり大きいにや〜！」

「そうね〜」

凜とにこはずつと自由の女神像を見上げていた。

「ん？あれは……………」

「凜ちゃんどうしたん？」

凜が何かを見て驚いていると希が来て言った。

「希ちゃん……………あの人……………」

「ん？」

凜が指さした方にはある外国人の人がソフトクリームをあげて自由の女神像の真似をしていた。

「あれは……………この像の真似をしているのかにや？」

「そうみたいやね…凜ちゃんもやってみたら？」

「うん！こ……………こうかにや？」

凜は自由の女神像の真似をした。

「おお〜！いいやん！」

「そ……………そう？う〜ん……………あつ！」

ワターシはスクールアイドルの使者」

凜は何故か台詞をつけた。

「いいやん！」

「なにやってるのよ……………」

「花陽…大丈夫？」

真姫はカメラを構えている花陽に言った。

「うん！大丈夫だよ！じゃあ撮るよ！」

花陽は自信満々だった。

「は…はい！」

海未は少し頬をを赤くしてカメラに視線を向けた。

「はっ……………はっ……………はっ……………！」

……………ハツクション！」

パシャ！

花陽はくしゃみをしたと同時にカメラのシャッターを押してしまい、海未の顔を撮れずに首から下までしかカメラに収まらなかった。

「花陽、大丈夫ですか？」

「え……………ごめん！失敗しちゃった……………」

「もう…なんであそこでくしゃみをするのよ……」

「うう……」

「しょうがないわね…私が撮ってあげる……」

「ありがとう、真姫ちゃん」

「しっかし……腹へったな……」

ナオキはお腹をさすりながら言った。

「じゃあお昼食べに行きましようか？」

絵里は言った。

「行く！昼飯だああああ!!」

ナオキは両腕をあげて言った。

「子供みたい……」

真姫は呆れたように言った。

そして10人は昼ごはんを食べにニューヨークのメインストリートへと向かった。

その5番街にあるレストランへと向かった。

そこでたくさん料理を注文した。

「「「「「「「おっ!!」」」」」」」」

「これ……全部食べられるの!?!」

ここはテーブルに並んだ料理の数々を見て驚いた。

「まあ、食えなかつたらおれが食うし……多分……はむっ……」

「流石ナオキね……ふふっ……」

「でも絵里くんなどこよく知ってたな……はむっ……」

「知ってたっていうか、しおりを作る時に見つけたのよ」

「そうか……はむっ……まじうめえ」

ナオキはみんなが料理の量に驚いているのにも関わらずパクパクと美味しそうに食べていた。

「はわわく幸せ♡……はむっ……」

こころはチーズケーキを嬉しそうに頬張っていた。

「さ、私たちも食べましょう!」

絵里がそう言うのとみんなも料理を食べだした。

もちろん少しだが余ってナオキがほとんどを食べることになったのは言うまでもな



い……

「ふう…食った食った……」

「ごめんね、私たちの余った分まで食べてもらって…」

絵里は申し訳なさそうに言った。

「いいっていいって！美味しかったし」

ナオキは親指を立てて言った。

「さ、そろそろ行こか」

希は立ち上がって言った。

「え？どこに行くの？」

穂乃果は不思議そうに言った。

「この街を見に行くんやよ。買い物とかもしたいやろ？」

「そうだね！じゃあ早く行くにや！」

「じゃあ、会計して出ようか……」

そして10人は会計を済ませてレストランを出た。

「で、街見に行くつてどこ行くんや?」

ナオキは財布をカバンになおしながら言った。

「う〜ん……そうね……あ、メインストリートに行つてみない?」

絵里は人差し指を顎に当てながら考えて言った。

「メインストリートか……なんか凄そうやな!よし、そこに行くか!」

10人はメインストリートに向かった。

そしてメインストリートにある横並びで『LOVE』の文字の形をしたオブジェクトの前で立ち止まった。

「ここが、メインストリートよ」

絵里は言った。

「お〜!」

穂乃果は驚きの声をあげた。

「凄いにゃ〜!」

「これは確かテファニーつて言うお店で朝食とか食べちゃうんでしょう?」

「どんなお店なんだろう?にこちゃん知ってる?」

「え!? あ…当たり前でしょう!」

「おおく! なに食べられるの?」

「ス…ステーキとか…」

「全部間違ってるわよ…」

真姫は歩いてみんなの元に向かいながら言った。

「にや? 真姫ちゃんに買ったの?」

凜は真姫の手元にあるカップを見て言った。

「ん? トマトジュースよ」

真姫はカップに入ったトマトジュースを持ちながら言った。

「へく、美味しそうね」

「美味しいわよ。後で買ってきたら?」

「そうね…そうするわ」

「ねえねえ! 写真撮ろうよ!」

穂乃果は言った。

「にこちゃんと真姫ちゃんも撮ろう!」

凜はにここと真姫を引っ張った。

「ちよつと!」

「待って！トマトジュースぐらい置かせなさいよ！」

それで真姫はことりにトマトジュースを渡して、穂乃果・凜・にこ・真姫の順番で『L O V E』のオブジェクトの横に『L・I・V・E』の文字を身体で表して並んだ。

パシャ…

「うん、上手く撮れたよ！」

花陽はシャッターを押して撮り終わると笑顔で言った。

「ことり、ありがとう」

「うん、全然いいよ」

真姫はことりから持つてもらっていたトマトジュースを受け取ってそれを飲んだ。

「希、ちよつとついてきてくれない？」

「うん、ええよ」

にここと希はトマトジュースを買いに行った。

「あつ、あそこに服屋さんがあるよ！行ってみようよ」

ことりはあるお店を指さして言った。

「いいわね！ナオキの服も選んであげるわ！」

「いいって別に……」

「ダーメー！ちよつとはおしやれしてもらわないと……」

「……はあ……わかつたよ……」

そして希とにこはトマトジュースを買いに、それ以外のメンバーは服屋さんへと向かった。

くラブライブ！（ナオキ・絵里・ことり・穂乃果・海未・凜・花陽・真姫）く

「なあ……まだく？」

ナオキは数分服を選んでいる絵里に言った。

「もうちよつと待っててね。ちゃんとナオキに似合う服選んであげるから」

「は……い……」

「うくん……海未ちゃんにはこれが似合いそう！」

あ、これは穂乃果ちゃんが着たらかわいいかも！」

ことりは穂乃果と海未に服を選んでいた。

「ことりちゃんの目が輝いてるにや……」

「はらしょー」

凜と花陽は言った。

「よし、ナオキー！これ着てみて！」

「やっとか……へいへーい……」

ナオキは絵里の選んだ服を持って試着室に入った。

「穂乃果ちゃん、海未ちゃん、選んだからこれ着てみて〜」

「うん！」

「わかりました……」

穂乃果と海未もことりが選んだ服を持って試着室に入った。

それから数分後……

穂乃果と海未はことりの選んだ服を着て試着室から出てきた。

「お〜!」

凜と花陽は声をあげた。

「うん! 2人ともかわいい!」

「へえ〜変わった服だね〜」

穂乃果は自分の着た服を見回しながら言った。

「こんな恥ずかしい服……// // //」

海未は自分の着た服を抑えて顔を赤くして言った。

「流石は $\mu$  sの衣装担当ね。穂乃果も海未も似合ってるじゃない」

真姫は2人の服装を見て言った。

「そう? あ、海未ちゃんかわいいよ!」

穂乃果は海未の服装を見て言った。

「そ…: そうですか? // //」

「うん! さて、着替えよ〜つと」

「そうですね…:」

穂乃果と海未はもう一度試着室の中に入った。

そしてナオキも試着室から出てきた。

「うん、ハラシヨ―！似合ってるわよ！」

絵里はナオキの服装を見て言った。

「そうか？」

ナオキは自分の着た服を見回しながら言った。

「ええ！」

「あ、ナオキくんかっこいいよ！」

こことは言った。

「流石絵里ちゃんだにゃ〜！」

凜は言った。

「そうね…なかなか似合ってるわよ」

真姫は言った。

「そうか…なら買ってくるか…」

ナオキはそう言うともう一度試着室の中に入った。

その頃……



「なにあれ？」

「ここはトマトジュースを飲みながら街灯にかかっている靴を見上げて言った。

「ハロウインのときなんかイタズラでやるんだって…」

希もそれを見上げて言った。

「へ〜…そんなことするのね…」

「そうやで…あ、ウチらもやってみる？」

「つて…希はこれできるの？」

「イヒヒ…任せといて〜！」

希はそう言うときにこの足元をジッと見た。

「ん？どうかした？」

「にこつち靴紐緩んでるよ？」

「そこ座って」

「え？そう？」

「ここは近くのベンチに座った。

「今だ！」

「うわあ!？」

すると希は素早くにこの靴を取り上げて両方の靴紐を結んで……

「てやあ!!」

思いつきり投げた。

「ああ〜! 私の靴〜!!」

にこの靴は見事に街灯にかかったので、にこは驚きの声をあげた。

「お〜! 上手いこといったね〜」

希は手を眉のところ当ててその靴を見た。

「そんなこと言つてないで……どうしてくれるのよ〜!!」

にこは大層お怒りのようだ。

「まあまあにこっち落ち着いて……」

「落ち着いてなんかいられないわよ〜!! どーすんのよ! バカバカバカバカ……」

にこは希の肩をバカと言いなながら何度も叩いた。

「だから……ちゃんと代わりの靴を買つてあるから落ち着いて……」

「だから落ち着いてられな……つて……今なんて?」

「だから……ちゃんと代わりの靴を買つてあるから落ち着いて……」

希はそう言うも持っていた袋からにこの代わりの靴を出した。

「あ……ありがとう……」

にこはそれを受け取つて履いた。

「いえいえ…さ、みんなのところに行こか」

「ええ…」

希とにこはみんながいる服屋さんに向かった。

くラブライブ！（希・にこ）く

希とにこが他の8人に合流して、10人で色んな店でショッピングをしたりした。

「ちよつと暗くなってきたな…」

ナオキは空を見上げて言った。

「そうね…：：：楽しかったから時間なんて忘れちゃってたわ」

絵里も空を見上げて言った。

「あ、じゃああそここのぼろうよ！」

穂乃果は鉛筆みたいなピルを指さして言った。

「いいやん！行つてみよう！」

希は穂乃果に賛同した。

そしてみんなが頷いた。

1人を除いて……………

「決定だね！じゃあ行こう！」

穂乃果はそう言うのと走り出した。

「こら穂乃果！走つてはいけません！」

海未は穂乃果に注意しながら走った。

その後に続いてみんなが走った。

「あら？ナオキ…はやく行くわよ」

「え……………いや……………その……………」

「ん？……………ああ……………そう言うことね……………」

大丈夫よ…私がいるから♡」

絵里はとても高いピルを見て怖がっているナオキにウインクして言った。

「お……………おう……………」

「だから…行くわよ！」

絵里はナオキの手を引つ張って走った。

「おい絵里！」

くラブライブ！（ナオキ・絵里）く

「「「「「「わく！」「」「」「」

9人は展望台から見える街の夜景に感動の声をあげた。

「流石…世界の中心ね…」

「綺麗よねく」

「ライブもこんな景色が使えたら最高なんやけどな」

絵里と真姫と希は言った。

「はあ……なんかどこもいい場所で……迷っちゃうね」

ことりはため息をついて言った。

「そうですね……」

最初は見知らぬ土地で自分たちらしいライブが出来るか心配でしたが……この街ならできるといふ気がしてきました……」

海未は言った。

「何故かしらね……そう感じるのは……」

「ここは不思議そうに言った。

「………そっか………」

すると凜が振り返って夜景を見て、なにかわかったかのように言った。

みんなはどうしたのかという様な声をあげた。

「わかった……わかったんだよ！この街に凄くワクワクする理由が！

この街ってね……少しアキバに似てるんだよ！」

凜は目をキラキラさせて夜景をバックに両腕を広げて言った。

「この街がアキバに似てる？」

絵里は不思議そうに言った。

「うん！」

楽しいことがいっぱい!

次々新しく変化していく!

そんなところがアキバに似てるんだよ!

凜は絵里と花陽に抱きついていって、最後にはにやつははーん!と言いながらこたりに抱きついた。

「実は私も少し感じてたんだ!

凜ちゃんもそうだったんだね!」

「うん!」

そして風が吹いてみんなの髪を揺らした。

「言われてみれば…:そうかもね…:」

「なんでも吸収して、どんどん変わっていく…:」

「だからタイムズスクエアだけじゃなくて、どんな場所でも、sっぽいライブができそうって思えたのかな…?」

絵里、にこ、希は風で乱れた髪を少し直して言った。

そしてみんなが夜景にもう一度目を向けた。

「で、なんでそんないい感じの雰囲気なのになんでナオキくんが後ろに隠れてるの？」  
「ギクツ！」

残念、バレてたんやでナオキくんよ。

花陽はさつきから展望台の入り口で隠れてるナオキを見て言った。

みんなの視線も夜景からそちらに向いた。

「ほんとに……いつまでそこにいるのよ……」

真姫は呆れたように言った。

「だ……だ……だ……さ……くそほど高いじゃんか！そんなところにいけるか！無理！絶対無理！  
はやく別のところに行くぞ！」

ナオキは必死な様子で言った。

「ナオキくんもこっちにくるにや〜！」

「ちよつ……うおあ!!? 凧!!? 押すな! 押すな!!」

凧はそんなナオキの背中を押してフェンスのところまで行った。

「ほら見てよ! ナオキくん!」

穂乃果は凧に押されて自分の隣まで来たナオキに夜景を指さしながら言った。

「……………」



「……………あれ？」

ナオキは凜に押されてフェンスに突撃して見えたビルの下の光景が高かったので意識を失った。

「ん……あれ？」

「あ、ナオキ……気がついた？」

「ここで待つてゐるって言うってそのまま寝ちやうんだから……」

ナオキが目を開けると絵里が言った。

そこはビルの入り口で、ナオキは絵里に引つ張られた後にエスカレーターに乗る人が多かつたため、ナオキは後から行くから絵里は先に行つててと言つておいて展望台に行かず、そこで待つてゐる間に寝てしまったみたいだ。

「お……おう……そうなんか………つて……雨降つてんのか？」

ナオキは外を見て言った。

外は雨が降つていたので。

「さつき降り出したんだ……」

「はあ……傘なんて持つてきてないわよ？」

「困つたわね……」

「はあ……まだ行きたいところあつたのになあ〜」

「雨じゃ仕方ありませんね……」

「雨強くなるかもしれないし……ホテルに戻つた方が良さそうね……」

「寂しいな……」

穂乃果、にこ、希、ことり、海未、絵里が残念そうに言った。

「えへへ……大丈夫にや!」

すると凜がそう言つて急にビルの外に飛び出した。

「凜!」

ナオキは突然のことに驚きの声をあげた。

「Hello, 歌に呼ばれて

光りあふれる街はカーニバルみたい」

凜はそれから急に歌い出した。

そしていつの間にか着替えていた。

街で歌つて踊つて、花陽や真姫も入つて、さらに街の人たちも協力してくれていた。でもおかしな事があつた。

この曲：『Hello, 星を数えて』はまだ凜たちは知らない。

なぜならこの曲はナオキがひそかに作つていた曲。

しかもあのときのパソコンの画面は別の曲のところだったので絵里にも見られていない。

「星空にや！」

凜がそう言つてポーズをとると降っていた雨もやんで空には綺麗な星空が広がっていた。

「……オキ！ナオキ！！ナオキ!!!」

「わっ!?!あれ?ここは……?」

「ここはビルの展望台よ？」

「ナオキビックリしすぎて気絶したのよ？」

「あ……そうなん……？」

ナオキは凜に押されてフェンスに衝突して下を見て気絶して、夢を見ていたのだ。だからあの曲が歌われたのだ。

「つたくだらないわね……」

にこは呆れたように言った。

「ははは……さてと……腹へったし飯食いに行くか！」

ナオキはさつきまでとは打って変わって元気よく言った。

「ふふっ……ナオキらしいわね……」

絵里は言った。

「じゃあ、晩御飯を食べに行こう！」

穂乃果は拳を突き上げた。

そして10人はビルを降りて晩御飯を食べに向かった。

次回へ続く……

## 第103話 「ライブ前夜」

前回のライブライブ！

ついにアメリカでのライブに向けて練習を開始した凜たち！

練習をしてたら外国人の人たちにも見られたりしたにや……！

それでライブの場所を決めるために色んなところを見に行っただけどこの街の全部が凄くて決められなかったんだ……

それはこの街がアキバに似てたからなんだ！

そして凜たちはご飯を食べに行くことになった！

「うっ……うっ……」

10人はあるレストランに来ていた。

そこでなぜか花陽が泣いていた。

ソファアの席にはことり、花陽、海未、にこ、凜の順番で、イスの席には絵里、ナオキ、希、穂乃果、真姫の順番で座っていた。

みんな心配そうに花陽を見た。

「花陽ちゃんが……泣いてる……」

穂乃果が目丸くして言った。

「どうしたのよ？」

真姫はコップに入った水を一口飲んで言った。

しかし花陽は答えることなく泣き続けていた。

「にこちゃん！ なにかした？！」

凜はにこがなにかしたのではないかと頬を膨らませて言った。

「してないわよー！」

にこはそれに反論した。

「どうしたの？ 気分悪いの？」

希は心配そうに言った。

だが花陽は首を横に振る。

「ホームシック？」

絵里も心配そうに言った。

だがまだ花陽は首を横に振った。

「あ、もしかしてパンばつかだったからか？」

ナオキは思いついたように言った。

すると……

ガタン！

「その通りなんです!!」

花陽は机を叩いて立ち上がって言った。

みんなは驚きの顔を隠せなかった。

「そうか！花陽もか！実はおれもなんや!!」

ナオキも立ち上がって言った。

「本当ですよ！私は白米が食べたんです!!」

「ああ！その通りだ！」

「そう！こつちに來てからというもの……朝も昼も夜も……パンパンパンパンパン！白米が全然ないの！」

花陽は大層イライラしているからだろうか頭を抱えて言った。

「ほんまに……もうパンばつか出てくるのは嫌気がさしてきた!!」



ナオキも大層イライラしているからだろうか目を瞑りながら拳を握って言った。

「え……でも昨日の付け合せでライスが出たじゃないですか……う？」

海未がそう言うとなオキと花陽はキツと海未を睨みつけた。

「白米は付け合せじゃなくて主食！」

花陽はすごい剣幕で海未に顔を近づけて言った。

「そうや！おれらが求めてるのはあんな付け合せに成り下がったライスじゃないんやよ  
！」

「その通りです！パサパサウサフランライスとは似て非なるもの……！」

「なんかわからんけどその通りや!!」

「『ご』に『飯』と書いて『ご飯』！白米があつてご飯が始まるのですう♪」

花陽は両腕を広げて言った。

「そうや！白米がないご飯なんて……おれは認めんぞ!!」

すると注文されたパンが出された。

「うう……温かいお茶碗で真つ白なご飯を食べたい……はむっ……あつ、このパンおい  
し♪♪」

花陽は目に涙を含みながらもパンを食べて言った。

「なっ……花陽がパンの餌食に……!?!」

「まあまあ…ナオキも食べてみたら？」

絵里は驚くナオキに出てきたパンを差し出した。

「え……じゃあ……いただきます……」

ナオキはお腹がへつっていたのでパンを食べた。

「どう？」

「おっ……このパンうめえ……」

ナオキはそのパンを食べきった。

「でも、花陽ちゃんもナオキくんも凄い白米へのこだわりだね……」

「つて言っても……白米が食べられるところとかあるのかなあ？」

穂乃果とことりは言った。

「真姫ちゃん……どこかいとところ知らない？」

希は一途の希望をかけて真姫に聞いた。

「……まあ……知らなくはないけど……」

パン！

「ほんまに?! (本当ですか!?)」

ナオキと花陽は目をキラキラさせて立ち上がって真姫の方を見て言った。

「ええ……日本食が食べられるお店が並んでるところがあつて、そこに『飯屋さん』が

あったわよ」

「よし！それじゃあ早く行くぞ！」

「はい！」

「その前に頼んだ料理食べてから！」

「はい……」

海未に一喝されたナオキと花陽は大人しく座ったのでした。

く  
ライブライブ！（ナオキ・花陽）  
く

「おかわり！」

「私もおかわりください！」

「はいよ！」

レストランでの食事も終わって、10人はご飯屋に来ていた。

ナオキと花陽はこれで5杯目である。

「はあ……どれだけ白米が食べたかったのよ……」

真姫は2人を見て言った。

「ごくくつ……やつぱり白米は最高や！」

「ごくくつ……やつぱり白米は最高ですよ！」

ナオキと花陽は幸せそうな表情をして言った。

「ふふつ……ごはん粒付いてるわよ？」

「えっ……まじで？」

「取ってあげる……はむっ……」

絵里はナオキの頬に付いていたごはん粒を指で取ってそのまま口に運んだ。

「あ……ありがとう……／／／／

おっちゃんおかわり!!／／／／

「はいよー!」

ナオキは少し顔を赤くして照れながらご飯をおかわりした。

ナオキと花陽が満足したようなので、10人はご飯屋を出た。

「ありがとうございます!」

「いやあく美味かった!」

「はわあく美味しかった!」

花陽はごはん粒を頬に付けたまま言った。

花陽はそれに気づくと、そのごはん粒を食べた。

「さ、白米も食べたしホテルに戻ろうぜ!」

ナオキは拳を上突き上げて言った。

「急に元気になったわね……」

真姫はそんなナオキを見て言った。

「さ、戻りましょう」

絵里がそう言つて歩き出すと、みんなも続いて歩き出した。

「でもなんかこうしてると…学校帰りみたいだね」

穂乃果はクスツと笑つて言った。

「せやな……」

「不思議な感じね……」

ナオキと真姫は言った。

「みんなとこうしていられるのも……もう僅かなはずなのに……この街は不思議とそれを忘れさせてくれる……」

絵里は切なそうな目で言った。

「そやな……もう10人でこういう風に過ごせないと思つてたが……まさかアメリカに来ることになるとはな……」

ナオキは星空を見上げて言った。

「これもナオキくんがいてくれたからやろうな」

希は笑みを浮かべて言った。

「いいや……この10人だったからこそだよ……」

絵里、穂乃果、海未、ことり、真姫、花陽、凜、にこ、希……このメンバーだからこそ……ここまでくれたんやよ……」

「ナオキもね……」

絵里は付け加えるように言った。

「そうだよ！ナオキくんも絶対必要だったんだよ！」

「そうね……ナオキがいなかったらここまでこれなかったわ」

「そうやよ……カードもそう言うとするしね」

穂乃果と真姫と希は言った。

「お……おう……／＼／＼」

ナオキは顔を赤くして人差し指で頬をかいた。

そんなナオキを見てみんな笑みを浮かべた。

そして10人は駅に到着して地下鉄に乗るべくゲートを通って行った。

「よいしょ……ふう……座れた〜」

ナオキは座って一息ついた。

「あれ？穂乃果は？」

絵里は前の方に歩いていたら穂乃果がいないことに気づいた。

「そーいや……途中から後ろの方にいたけど……ことり、穂乃果は？」

「え……知らないよ？」

「おいおい……」

そんなことを話していると……

プルルルル……

「ちよつと……もうすぐ発車だけど!？」

「これまずいわよー!」

にこと真姫は焦った様子で言った。

プシュー……ガタン……

「あ、向こうの電車に穂乃果ちゃんが!」

ことりは向かいに止まっていた電車を見て言った。

「まじかよ!？」

みんなが窓から向かいの電車を見た。

「……………穂乃果……(穂乃果ちゃん!)……………」

みんな何度も穂乃果の名前を呼ぶが穂乃果は反対側を向いていて、さらに声も届いていなかった。



そのまま穂乃果の乗った電車はみんなと逆の方に向かった。

「穂乃果……………」

海未は穂乃果の乗った電車の行った方向を見て言った。

「ヤバイな……………」

ナオキは苦笑いで言った。

くらぶライブ！（穂乃果）く

時は遡り……………

「わわわ！大変だあああ!!」

みんなとはぐれちゃう!!」

穂乃果は地下鉄に使うカードの残金が足りず、一度チャージするために引き返して電車のホームに走って向かっていた。

そして穂乃果の前に階段が立ちはだかる。

「ハハハは……………よし……………」

てやああああああ!!とおく!!」

穂乃果は階段を駆け下りて途中のところから飛び降りて、そのまま電車に飛び込んだ。

「痛い〜痛いよ〜!」

穂乃果は鼻を打ったので抑えて言った。

その反対方向ではみんなが自分のことを呼んでいるとも知らずに……

そして電車は走って行った。

「あれ?そう言えばみんなは?」

穂乃果はみんながいなことに気づいて辺りを見渡した。

「うーん……たしか次の駅だったから降りたら会えるかな？」

そして電車の止まった駅で穂乃果は降りた。

「みんなが降りてこない……」

あれ……？

もしかして……はぐれた？

……

……どーしよー!!」

穂乃果はみんなが降りてこず、はぐれたと察して頭を抱えて言った。

「とりあえず駅から出てみよう……」

穂乃果はとりあえず駅から出てみることにした。

駅の階段を登って外に出た。

「あれ？……」

穂乃果はこの景色に見覚えがあつた。  
なぜならそこは……………

「ブロードウェイ……………だよね？」

でも帰り道わかんないや……………あははは……………」

そこはブロードウェイ。

昼間に一度来たところだった。

だが、帰り道が分からず穂乃果はとりあえず歩くことにした。

く  
ラブライブ！（ナオキ・海未・ことり・花陽・凜・真姫・絵里・希・にこ）  
く

「おい！電話に出ねーぞ！」

ナオキはホテルで穂乃果に電話をかけたが穂乃果は出なかった。

「ホテルには戻ってないし……どうしたら……」

海未はあたふたして言った。

そんなとき……

「ちよつと大変よ!!」

にこがみんなの元に走って来た。

「どうしたの?」

希は言った。

「ほ……穂乃果……スマホをホテルに置きっぱなしだわ……」

にこは息を切らしながら言った。

「「「「「えくー!」」」」」」

「ちよつと待てよ!これはどんどんやばくなってきたぞ……」

「ど……どうしたらいいのでしょうか……穂乃果……」

海未は落ち着けないようだった。

「海未……大丈夫やから……な？」

ナオキは海未の頭に手を置いて言った。

「は……はい………」

「おれがちゃんと穂乃果を見ていればっ……！」

「もうそんなこと言わないの……」

絵里は言った。

「ああ……すまん……とりあえず、おれは辺りを探してくるわ。」

ま、おそらくはタイムズスクエアの方だろうな……」

ナオキは顎に手を当てて言った。

「なら私も……！」

「いや……海未たちはここで待っていてくれ……あいつがもし帰ってきた時にみんないな

かったらダメやから……」

「わかり………ました………」

そしてナオキは外に出た。

見送るために絵里、海未、凜、真姫、ことりも外に出た。

「じゃああいつが帰ってきたら連絡くれ……」

「わかったわ」

「それじゃあ……「あ、待って！」……どうした？」

ナオキがタイムズスクエアの方に向かおうとするとことりがナオキを止めた。

「あれって……」

ことりが指さした方向を見ると……

こつちに向かつて来る人物が”1人”いた。

く  
ラブライブ……（穂乃果）  
く

「はあ……ここからどうやって帰るんだっけ？わかんないよ……」

穂乃果はとりあえず歩き続けていた。

不安でいっぱい、下を向いて歩いていった。

すると……

「……………As time goes by……………」

綺麗な歌声が穂乃果の耳に入ってきた。

「この歌は……？」

穂乃果は辺りをキョロキョロして、その声の主を探した。

すると道の反対側で歌っている女の人があった。

穂乃果はその人の元に走った。

そしてその人の歌っている姿を見て、その人の歌声に引き込まれて行った。

その女の人が歌っていたのは『As Time Goes By』

あるブロードウェイミュージカルのために作られた曲。

ブロードウェイで歌うにはうってつけの曲といってもいい。



だが穂乃果はこの曲は知らない。

その人の歌声に惹かれたのだ。

「……As time goes by

As time goes by」

その人が歌い終わると聞いていた人は拍手と歓声を贈った。

穂乃果も感激して拍手を贈った。

そんな穂乃果に気づいたからか、その人は穂乃果の方を向いた。

目が合うと穂乃果は笑みを浮かべた。

「あなた……日本人？」

「ええ〜!?おねえさんも日本人なんですか!？」

「ええ……私の名前は………高山穂稀……穂稀って読んでちょうだい」

その人は高山穂稀たかやまほまれと名乗った。

穂乃果は名前を名乗る時に不思議な間があったのになんら疑問を感じなかった。

「穂稀さんですね!私は高坂穂乃果って言います!」

「穂乃果ちゃんね……で、穂乃果ちゃんはどうしてここに?」

「あ……え〜つと……みんなとはぐれちゃって……」

「それって……お友達?」

「はい！大切な仲間です！」

「ふふっ…そう…そのお友達はどこにいるの？ホテル？」

「えっと…えっと…大きな駅のあるところの、大きなホテルです！」

「……………はい？」

「……………あはは…すみません…わかりませんよね…？」

「……………ああ…多分あそこね……………」

「ええ！？穂稀さんわかるんですか!？」

「ええ…なんとなくね…じゃあ行きましようか」

「はい！あ、お礼にマイク持ちます！」

「いいの？じゃあお言葉に甘えて…」

穂乃果は穂稀のマイクを持って駅に向かった。

く ラブライブ！（穂乃果・穂稀） く

電車の中……

「で、穂乃果ちゃんは何でみんなとはぐれちゃったの？」

「えつと……カードのお金が足りなくて、それで入れてたら違う電車に乗っちゃったみたいで……」

「ふうん……なるほどね……」

まあ……たまにいるよ？あなたみたいに迷っちゃう人は……」

「うう……／＼／＼」

穂乃果は顔を赤くしてすぼめた。

「でもまさか……ホテルの名前までわからないとは……」

そんな人はなかなかいないわよ？」

「すみません……／＼／＼」

「ふふっ……」

「でも穂稀さん凄いです！」

大きな駅のあるところの、大きなホテルつてだけでわかるなんて……!!」

「ふふっ……相変わ……ゴホン……あなたは一々動きがオーバーね……」

「うう……そうですか？」

「ええ……」

さつきも言ったけど、大体の場所はわかってるから大丈夫よ」

「何でなんですか？」

「私も一度仲間と来たことがあるからね……懐かしいわ……」

穂稀は昔を思い出しながら言った。

その表情は少し寂しさも感じられた。

「そうなんですな……」

「ええ……たしか……大きなシャンデリアもあったわね」

「はい！ありました！」

「じゃあ間違いないわ……あっ!?!」

「え……どうしたんですか？」

「マイク………忘れた……?」

「え……それなら私が持ってますよ………?」

「え……ああ……そうだったわね……あはははは……」

「ふふっ…穂稀さんって意外にドジっ子なんですね…」

「穂乃果ちゃんもね…」

「ぷくっつ……あはははは……」

2人が楽しそうに話しているとホテルの最寄り駅に着いた。

「ここよ……降りるわよ」

「はい！」

2人は電車を降りて、駅を出た。

「あ、そう言えば…穂稀さんってこっちでずっと歌ってるんですか？」

「まあね……」

穂稀は穂乃果にそう聞かれて楽しそうに昔話を始めた。

「これでもね…昔は日本でさっき言った仲間と一緒に歌ってたのよ？」

「そうなんですか!？」

「うん！」

でも…色々あつて…私たちのグループも終わりになつて…

当時はどうしたらいいかわからなくてね…

次のステップに進めるいい機会かな〜とか考えたりもしたわね…」

穂稀は星空を見上げて言った。

穂乃果はそんな穂稀の昔話を聞いて今の自分たちも同じような感じだと気づいた。

「あの……！」

「ん？どうしたの？」

「それで……穂稀さんはどうしたんですか？」

穂乃果の問いかけに穂稀は驚いた顔をした。

「ふふっ…簡単だったよ……とつても……」

今まで自分たちが何故歌ってきたのか……

自分たちがどうありたくて、なにが好きだったのか……

それを考えれば答えはとても簡単だったよ？」

「なんで歌ってきたのか……どうありたくて……なにが好きだったか……ですか……

？」

「うん！」

穂乃果は考えた。

だが、答えが見つからなかった。

「う〜ん……わかるようなわからないようななんですけど……？」

「今はそれでいいの」

「え〜！」

「それでいいのよ」

「嫌ですう〜！」

「だからいいのよ」

「え〜！」

「………今はそれでいいのよ………」

すぐにわかるから………」

「えっ？それってどういう………」

穂乃果は穂稀の言葉に疑問を感じた。

なぜその答えがすぐにわかると断言できるのか？

穂乃果はこのときは穂稀も昔は自分と同じようにわからなかったのだらうと思っ  
いた。

そして穂乃果がそんなことを考えていると………





そして海未は穂乃果に抱きついた。

「あっ……ごめん……」

「つたくよ……どこ行つてたんや……このやろう……」

ナオキは穂乃果に軽くチョップした。

「いてっ……えつと……ブロードウェイまで……」

「やつぱりあそこかよ……もうちよいでそっちに向かおうと思つてたんや……」

「そうなの？」

「ああ……でもよく1人で帰つてこれたな？」

「ううん……1人じゃないの。ここまであの人に……」

穂乃果は穂稀にお礼を言おうと振り返った。

だが……

「何言つてんや？お前”1人”やったやんけ……」

「ええ!?確かにここまで穂稀さんに……」

「なんや？穂乃果の馬鹿もついに幻覚が見えるまできたんか？」

「むうくなによその言い方……」

穂乃果は頬を膨らました。

「あ、それとも1人で寂しかったからそういう妄想をしてたとか？」

「だから違うって！」

「「「「はははは……」」」」

「もう！笑い事じゃないって！」

「ははは……すまんすまん……」

でもよかつた……穂乃果が無事で……」

「そうね……さ、明日のライブに備えて部屋に戻りましょう」

絵里がそう言うのとみんなホテルの方を向いた。

すると入り口のドアが開いて、希と花陽とにこが顔を出して穂乃果の帰りを喜んだ。

「ねえ……みんなーごめん……私リーダーなのに……みんなに心配かけちゃって……」

穂乃果は申し訳なさそうに言った。

「もういいわよ……無事だったんだし……」

真姫は言った。

「でも……！」

「……ふふつ……なら心配かけた代わりに……」

明日は穂乃果が引つ張って最高のパフォーマンスにしてもらおうかしら」

絵里はイタズラ気に言った。

「絵里ちゃん……」

穂乃果は目をウルウルさせて言った。

「そうよ……私たちの最後のライブになるんだから……」

「少しでも手抜いたら承知しないよ」

にこと希も言った。

「うん、わかった!」

そしてみんながホテルの中に入って行った。

だが穂乃果は穂稀のことが気になって後ろを振り返った。

そして穂稀が言っていたことを思い出した。

「どうした?」

「ナオキくん……」

ナオキは入ってこない穂乃果を不思議に思ってた。

「考え事か?」

「うん……ちよつとね……」

「なんなら聞くぞ?」

「……じゃあ……」

私たちがなんで歌ってきたんだろうね……」

「なんで……か……」

「うん……………」

「うくん…………好きだから？」

「好き…………だから…………？」

「ああ…穂乃果は歌うのは好きか？」

「うん！当たり前だよ！」

「ほら、答えが見つかった」

「あ…………ほんとだ…………」

「だろ？」

まあ…考え事とかあるかもやけど…………

まずは明日のライブを成功させようぜ」

「っ…………うん!!」

「あ、そういやそれどうしたんや？」

ナオキはふと穂乃果がなにか持っていることに気がついて言った。

「これ？これはだからここまで付いてきてくれた穂稀さんっていう人ので…………」

「ふくん…………」

「あ、信じてないでしょう！」

「ああ…だって確かにおれらが見たのは穂乃果だけやからな…………」

「そう……なんだ……」

「……まあ……なんだ……」

仮に穂乃果が言っていることがほんまやとしたらそれを持つといたらいんちやう？  
ほんならまたその人とも会えるかもよ？」

「そう……だね……」

「ふっ……じゃあ早く中入ろうぜ。」

「明日に備えないとな」

「うん！」

そして2人もホテルに入るのだった。

く  
ラブライブ！（ナオキ・穂乃果）  
く

穂乃果・にこの部屋……

「早くシャワー浴びちゃいなさいよ！汗かいたでしょう？」

「うん！じゃあ先に入るね！」

「あ、穂乃果！」

「なに？にこちゃん……？」

「これってどうしたの？」

にこは穂乃果が持ってきたマイクを指さした。

「ああ……ちよつと……預かりものだよ！」

「へへ」

「じゃあシャワー浴びるね！」

穂乃果はシャワー室に入って行つた。

「つたく……心配させんじやないわよ……」

くラブライブ！（穂乃果・にこ）く

海未・ことりの部屋……

2人はシャワーも浴びて着替え終わっていた。

「つたく…穂乃果は一体なにしてたんだか……」

「まあまあ…無事に帰ってきたんだからいいじゃない……」

「そうですね……」

「でも海未ちゃん……」

「なんですか？」

「あの時穂乃果ちゃんに怒鳴ったのって、それだけ穂乃果ちゃんのこと心配だったからだよな？」

「ことりがそう言うのと海未は顔を赤くして布団に入った。」

「あ…当たり前です！」

幼なじみなんですから……：／／／／

「ふふっ……きさて、明日に備えて寝よう」

「はい……」

そして2人は眠りについた。

くラブライブ！（海未・ことり）く

真姫・希の部屋……

2人はもうベッドに入って電気も消していた。

「……ねえ……希……」

「なに？真姫ちゃんから話しかけてくるって珍しいね……」

「べっ……別にいいでしょう／＼／＼」

「……その……明日は……いいライブにしてあげるから……／＼／＼」

真姫は恥ずかしいのか、どんどん声を小さめにしながら言った。

「ふふっ……ありがとう……」



そして2人は眠りについた。

くライブライブ！（真姫・希）く

凜・花陽の部屋……

「ねえねえかよちん！」

「なに？凜ちゃん……？？」

2人はさつきシャワーを浴び終わってまだ起きていた。

「明日のライブ楽しみだね！」

「うん！アメリカの人たちを驚かしたいね！」

「うん！テンション上がるにゃ〜！」

「もう…寝るのに気合い入れちゃダメだよ〜」

「だって楽しみなんだもん！」

「そうだね……」

「じゃあ…寝よつか！」

「うん！」

2人も眠りについた。

くラブライブ！（凜・花陽）く

ナオキ・絵里の部屋……

「ん……ナオキ……」

「どうした？」

2人はベッドに入って寝ようとしていたが、絵里がナオキの袖を引っ張って言った。

「その……あの……」

「なんだ？もう一回キスして欲しいのか？」

「そうじゃなくなつて！／＼／＼」

その…明日のライブ…穂乃果には引つ張つてねとか言つたけど…センターは私だし…なんだか…」

「…緊張する？」

「…うん…私はセンターだから…真ん中でみんなを引つ張つて行かないと…」

「…そうだな…」

でも絵里なら大丈夫さ…おれがセンターに選んだんや…間違いない」  
「ほんとに？」

「ああ…保証する。絵里だったら大丈夫…」

ナオキは絵里を抱きしめた。

「うん…ありがとう…」

そのまま2人は眠りについた。

そしてついに…アメリカライブ…

次回へ続く……

# 第104話「μ'sアメリカライブ～Angelic Angel～」

前回のラブライブ！

レストランとご飯屋さんで食事をした後、私はみんなとはぐれちゃったの！

「どーしょ〜！」

そこはブロードウェイで、さらに穂稀さんっていう人と会ったの。

そしてホテルに帰ったら穂稀さんがいなくて、みんなも見えてないって……

不思議だねえ〜

そしてついに……

アメリカライブ！

いっくよ〜！せ〜の！

フアイトだよ！

穂乃果・にこの部屋……

「ん……ふわあく……むにやむにや……」

穂乃果は起き上がりあくびをした。

「っ……」

「ん？にこちゃん……？」

穂乃果は窓から空を見上げているにこを見て目をこすりながら言った。

「うえっ!?穂乃果……起きたのね……おはよう」

「おはよう……何してたの？」

「ふっ……ちよつとね……」

「……にこちゃん……」

穂乃果の目はしやきつとなり、にこの隣へと歩いた。

「!?穂乃果……」

にこは隣に来て窓から空を見上げた穂乃果に驚いた。

「……にこちゃん……」

「……なによ?」

「……………いよいよだね……………アメリカライブ……………！」

「……………ふっ……………ええ……………」

にこは一瞬目を丸くしたが、それから笑い、再び空を見上げた。

「絶対に…成功させようね……………！」

「あつたり前よ！」

くラブライブ！（穂乃果・にこ）く

「うくん……………もう朝……………？」

ことりは目をこすりながら起き上がった。

「あれ？海未ちゃんは……………？」

ことりは海未がいないことに気づき、キョロキョロ辺りを見渡した。

「ふんふんふんふん……」

「ん？」

ことりはシャワー室から誰か（まあ…海未しかいないんだけど）の鼻歌が聞こえてきたので不思議そうにそつちを向いてた。

「ふふっ……」

ことりは自然と海未ちゃんも楽しみなんだなと思い、笑みを浮かべた。

シャワー……

キュツキュツ……

やがて一曲の鼻歌が終わるとともにシャワーの音が止まった。

しばらくして海未が大満足したような表情を浮かべて髪を拭きながらシャワー室から出てきた。

「海未ちゃんおはよ〜」

ことりはニヤニヤしながら海未を見て言った。

「……ことり!?!起きてたのですか……お……おはようございます……」

と……

「ん？」



「さ……さつきのは聞いてましたか？／＼／＼」

「さつきの？なんのこと？」

「ことりはもちろん聞いていたが知らないふりをした。」

「そ……そうですか……」

海未は先ほどの鼻歌を聞かれてないと思い、ほっと胸をなでおろして窓の方に向かった。

海未は笑顔で窓から空を見上げた。

そんな海未を見てことりは海未の隣に立ち、同じように空を見上げた。

「……楽しみだね……アメリカライブ……」

「はい……」

海未はさつきとは打って変わって真剣な表情になった。

「ふふっ……大丈夫だよ！」

海未ちゃんさつきだって気持ちよく歌ってたでしょ？その調子で歌ったらいいんだよ。私たちが楽しめばきつとライブは成功する！」

それを見たことりは海未が不安で緊張しているのだと思いそう言った。

「ふふっ……そうですね……」

さつきのように……って、やっぱり聞いてたんですか!?!／＼／＼」

海未はことりの言葉を聞いて笑顔になったが、ことりが先ほどの鼻歌を聞いていたと知って顔を赤くした。

「えへへ……」

「もう！ことりい／＼／＼／＼」

くラブライブ！（海未・ことり）く

凜・花陽の部屋……

凜と花陽はすでに起きていた。

「……ちん……かくよちん」

「ふえ？どうしたの凜ちゃん？」

「どうしたのって……さっきから呼んでるのにかよちん返事しないだもん」

「え？ そうなの？ ごめん……」

「どうしたの？ 緊張……してるの？」

「うん……自分たちらしいライブが出来るか……失敗しないか……そう思って……絶対成  
功させたいから……」

花陽は服の胸のところを掴みながら言った。

「かよちん……大丈夫だよ！」

「ふえ？」

「だって……ここは……ニ<sup>ア</sup>ューヨ<sup>キ</sup>ーク<sup>バ</sup>なんだよ！ だから……大丈夫にや！」

「っ……うん！ そうだよね！ よくし、頑張るぞく！」

花陽は両腕を上げて言った。

「おおくかよちんがいつになく燃えている……!!」

凜はそんな花陽を見て目をキラキラさせていた。

くラブライブ！（凜・花陽）く

真姫・希の部屋……

「ん〜！気持ちいい朝やね〜！」

希は窓際で背伸びして言った。

「そうね……絶好のライブ日和って感じね」

真姫は言った。

「まあ……ライブをするのは夜なんやけどね」

「わかっているわよそれぐらい……」

真姫は髪を弄りながら言った。

「ふふっ……」

「……希……」

「ん？」

「……最後のステージ……成功できるように頑張るから……」

「真姫ちゃん……ありがとう……」

希は優しい笑顔で言った。

♪ラブライブ！（真姫・希）  
♪

ナオキ・絵里の部屋……

ナオキは絵里が服を掴んで離さなかったため、起きてもなお絵里を抱きしめていた。  
「ん……ナオキ……？」

しばらくすると絵里が目を覚ました。

「ああ……起きたか？おはよう」

「おはよう……」

「よく眠れたか？」

ナオキは絵里の頭を撫でながら言った。

「うん……あと……」

「ん？」

「……もうちよつとこのままでもいいさせて……う？」

「……ああ……」

絵里はまだ不安が残っていて、ナオキにもう少し抱きしめていて欲しかった。ナオキはそれをわかっており、絵里の頭を撫で続けた。

「……いよいよだな……」

「……ええ……」

ナオキにとってこのアメリカライブは自分の将来がかかっているライブ……絵里にとってはセンターをつとめるライブ……

2人とも不安や緊張がみんなよりも大きかった。

そんな心情だからこそナオキは絵里と絵里はナオキといたかった。

不安なときだからこそ……

共にいて欲しい人がいる……

そばにいて欲しい人がいる……

自分自身にとって一番大事な人……

世界一愛している人……

それも本当の愛のひとつのカタチなのかもしれない……

そして互いに互いのそういう人の名を呼ぶ……

「絵里……」

「ナオキ……」

自然と2人からは不安や緊張は抜けていった。

くらぶライブ！（ナオキ・絵里）く

そして10人は朝ごはんを食べ、ごはん屋でみんな決めて決めたライブ会場のタイムズスクエアに向かった。

「えつと……あ、歩さん！」

「おお……ナオキくん！待っていたよ」

ナオキは歩を見つけると声をかけた。

歩は笑顔で反応した。

「ナオキくん、みなさん、お久しぶりでーす！」

「アリスさんも！」

歩の後ろからヒョイとアリスが出てきて手を広げて言った。

「そちらの方たちは……μ、sのメンバーかい？」

「はい！あ、紹介しますね。」

μ、sのメンバーの絢瀬絵里、東條希、矢澤にこ、小泉花陽、星空凛、西木野真姫、園田海未、南ことり、そしてリーダーの高坂穂乃果です」

「……………よろしくお願ひします！……………」

ナオキは歩にほかのメンバーを紹介した。9人は歩に頭を下げた。

歩は1人ずつの目を見ていった。



「……………うん……………みんないい目だな……………」

これは今日のライブがなおさら楽しみになったよ」

9人の目を見て歩は笑顔で言った。

「ありがとうございます！」

あと、すみません…スタッフの方を全員日本人の方にしていただいで……………」

「いいんだよ。これぐらいお安い御用さ。うちの会社は日本人も多く勤めているからね」

ナオキはみんながスムーズに動けるように歩にステージのスタッフを全員日本人にして欲しいと頼んでいたのだ。

幸い、Angelic TVには日本人スタッフが多く勤めていたので見事、全スタッフが日本人というわけになったのだ。

「ありがとうございます。」

じゃ、みんな控え室に行って着替えてこい。また行くから」

「……………はい……………」

「μ'sのみなさん、こちらへどうぞ」

スタッフの誘導で9人は控え室へと向かった。

「じゃ、私たちは今日の最終確認をしよう」

「はいー」

歩とナオキはスタッフも交え、ライブの最終確認をした。

ステージはハート型の柵と階段付きの小さな四角のステージに囲まれており、さらに照明機材が中央に書かれた円形のもの囲むように置かれていた。そこが9人が踊るところである。

さらに前の方には『Love Live! μ's』とプリントされていた。

ステージの後ろにある2本の旗にもμ'sという文字があつた。

証明などはいつも通りナオキの操作だが、今回はなんとセントラルパークでもμ'sのライブが見られ、さらにネットでも配信される。

このライブは世界からも注目されていた。

日本の高校生アイドルがアメリカでライブを披露する。

しかもスクールアイドルというのは日本にしかなく、その分期待されていた。

くラブライブ！（歩・アリス・会場スタッフ）く

そしてそれから時間ははやく感じられた。

あつという間に本番まで30分をきっていた。

今回はアメリカの人たちのμ'sへの感心が高く、セントラルパーク及びメインとなるタイムズスクエアにも人が集まっていた。

控え室では歌やダンスの最終確認をしていた。

「よし、みんなバッチリだな！

あとは本番をのりきるだけや！」

「うん！絶対に成功させるよ！」

「はい！私たちの歌を、ダンスを世界中のみなさんに届けます！」

「うん！全力で楽しむよ！」

「ううゝスーパーウルトラテンション上がるにやゝ!!」

「…そうだよね！もう楽しみで仕方ないよ！」

「ふふっ…確かに…今までは日本の人たちばかりだったけど、今回は世界中の人が見てくれる…楽しみね」

「世界中のみんなをこの大銀河宇宙N.O. 1アイドルにここにーにこちゃんの虜にしよう  
ニコよー!」

「にこっちらしいね……最高やん!

ウチらの……(最後の)……ライブを世界中のみんなに見てもらえるなんてな……」

「ええ!今回は私がセンターなんだし、いつも以上に張り切っていくわよ!」

みんな自分の思いを言った。

これが本当に9人最後のライブ……

みんなそう思い気持ちを引き締めた。

「っ……みんな……」

「「「「「「「ん?」」」」」」」

「えっと……(今は……やっぱり言うべきじゃないかな……?)………思いつきり楽しんで  
来い!!」

「「「「「「はい!」」」」」」」

ナオキは何かを隠すように言った。

そして10人はいつものように右手をピースにしてそれを合わせた。

「よし！アメリカライブ！世界中のみんなに私たちの歌を伝えて、絶対に成功させよう

！

「いちー！」

「にー！」

「さんー！」

「よんー！」

「ごー！」

「ろくー！」

「ななー！」

「はちー！」

「きゅうー！」

「じゅうー！」

「「「「「「μ's！」

ミュージック……スタートー！！「「「「「「

そして10人は大きくその手を上に挙げた。

(そうだ…今は言うべきではない…)

今はこのアメリカライブに集中！

パシン！

ナオキは立ち止まって自分の両頬を叩いた。

「よしー！」

ナオキは気持ちを引き締めてまたステージに向けて歩き出した。

く  
ラ  
ブ  
ラ  
イ  
ブ  
！  
(μ, s)  
く

「おおく夜のタイムズスクエアはすごいなあ〜」

ナオキはステージの最終確認をするためにステージの上であたりを見渡して言った。

「ふふっ…そうでしょう?」

スタッフの1人である今川<sup>いまが</sup>瑠璃<sup>るり</sup>が言った。

「はい…ここならきつと…大丈夫ですね…」

「ええ…私アイドルとかよくわからないけど、あなたたちは成功する…そう思うわ」

「…はい」

ナオキは夜空を見上げた。

そして、ついに本番のとき……

Angel TVの番組『Night time』では、スクールアイドルの紹介VTRが流れている。

その最後にμ'sのメンバーとともにラブライブ！が紹介された。そしてVTRが終わると映像はタイムズスクエアに変わった。

「よし、車のクラクションお願いします！」

ナオキは無線でそう言った。

プー！プププ！プー！プププ！……

しばらくタイムズスクエアには車のクラクションが響いた。

本番中は通行止めされているので、スタッフの車と止まった車の人にも協力してもら



い、クラクシオンを鳴らしたのだ。

それと同時にカメラも高い電光掲示板の上からどんどんステージの方を映し出した。

そこには暗いステージで目を瞑ってハート型のフォーメーションで待機している9人がいた。

タイムズスクエアの車道は右は赤、左は白のライトが照らされていた。

(いくぞみんな……………)

そしてクラクシオンの音が止まるとナオキが曲のスイッチを入れた。

デンデンデデン！

するとドラムの音が聞こえ、その音と同時にナオキは照明をつけたり消したりした。メロディーが始まると照明を全部つけた。

さらに9色の円形の明かりが周りのビルなどを照らしていた。

高い電光掲示板や横にあった小さな電光掲示板などには、さつきまではいつも通り広告が映されていたが、それが『LOVELIVE』という文字に変わった。

そしてまずは花陽・真姫・にこが、続いて希・海未・ことりが腕を広げて、まだ広げていなかった絵里・穂乃果・凜を合わせて9人が腕を広げた。

それから首を回しウインク。

それから立っていた絵里・穂乃果・凜・花陽・希が扇子を振り、その間に座っていた真姫・にこ・ことり・海未が扇子を振りながら立ち上がった。

そして9人が一回転して扇子を頭上に向けて何回か回して音楽に合わせてポーズをとった。

セントラルパークではCGで9人の姿が映し出されていた。

始まるなり、現代の技術のすごさに見ていた人は歓声をあげた。

「(い)は(ど)う?待って言わないで(わ)わかってる」

「夢に見た熱い蜃気楼(な)の(さ)」

「君は誰?なんてきかないよ(わ)わかってる」

「お互いの願いが(よ)んだ(出)会い」

この曲のダンスは扇子を使ったダンスで、扇子自体を照明に反射して光りやすくして

いたため、軌道が見えていた。

「遠ざかるほど 光る一番星 いつかそんな恋してみたかった」

「もういらぬよ胸のブレーキは」

「見つめ合うために生まれたい2人になってく」

そしてまずは穂乃果と海未が、次にことり・花陽・凜・真姫が、最後に絵里・希・ここが扇子を広げながら頭上にあげた。

そしてサビに入る前に紙吹雪が舞った。

『Ah! 「もしも」は欲しくないのさ「もつと」が好きAngel 翼をただの飾りにはしない』

Ah! 「もしも」は欲しくないけど「もつと」は好きAngel 明日じやない、大事な時は今なんだと気がついて、こころの羽ばたきはとまらない』

そして間奏に入った。

しばらく9人は踊り、最後の方になると音楽に合わせてナオキは照明をつけたり消したりして、さらにその後には絵里以外のメンバーがゆつくりと座つていき、絵里だけに水色のライトが当たった。

「Ah! 「もしも」は」

欲しくないのさ 「もつと」が好きAngel」

「「翼をただの」」

「「飾りにはしくない」」

絵里の力が入ったソロのあとに右側にもスポットライトが当たり、そこにいた海末・真姫・希・花陽が、そのあとに左側にスポットライトが当たり、そこにいた穂乃果・凜・こ・ことりが立ち上がりながら歌った。

そしてさつきよりも多くの紙吹雪が舞った。

『Ah・「もしも」は欲しくないけど「もつと」は好きAngel 明日じゃない大事なときは今なんだと気がついてくころのく羽ばたきはとまらない』

9人はステージをいっぱい使って舞うように踊った。

そして紙吹雪が舞うアメリカの夜空を見上げて中央に集まり、花陽・海末・ことり、真姫・絵里・凜、希・穂乃果・こは3列になった。

それから花陽・海末・ことりは立ったまま、真姫・絵里・凜は片膝をついて、希・穂乃果・こは両膝をついて音楽に合わせて口を隠すように扇子を広げてヒラヒラさせ、曲が終わると同時にナオキは照明を消し、9人は扇子を上げて顔を隠した。

「ふう……………」

ナオキは熱くなったからか汗をたくさんかいていた。

『Foooooooooooo!!』

μ'sのライブが終わるとタイムズスクエアやセントラルパークでみていた人たちは歓声をあげた。

座ってみていた人も立ち上がって拍手をしていた。

ネット中継やTV中継でみていた人たちも大盛り上がりだった。

「……………はあ……はあ……はあ…………………」

9人はステージの上で息をきらし、そんな光景に目をキラキラさせていた。

「みんな………お疲れ様！」

ナオキはステージの上に向かってみんなの元に向かった。

そして10人は花陽・真姫・希・海未・ナオキ・絵里・穂乃果・ことり・凜・にこの順番に並んで手を繋いだ。

「Thank you very much today!! 『本日は本当にありがとう  
ございました!!』」

ナオキがそう言うときみんなが頭を下げた。

そしてまた歓声と拍手がわいた。

10人は頭をあげると顔を合わせて笑いあった。

そしてVTRはスタジオに戻った。

と同時にネット中継も終わった。

「お疲れ様ですー！」

スタッフが言うとはかのスタッフや歩、アリスが拍手を送った。

タイムズスクエアで見ていた人たちも拍手や歓声を上げたり口笛を吹いたりしてくれた。

その光景を見て、

凜と花陽は手を組んで飛び跳ねて喜び、

穂乃果は飛び跳ねてことりはそれを見ながら喜び、

真姫は感動して服の胸のところを掴んでいる海未の肩に手を置いて見つめて笑いあい、

希とにこは最後のライブを見事成功……いや……大成功させて目に涙を浮かべて抱き

合っていた。

そして絵里とナオキは……

「っ……」

絵里は涙を目に浮かべてその光景を見ていた。

「絵里……」

ナオキはそんな絵里の頭を撫でた。

「うっ……ナオキい……」

「ああ……いいよ……」

ナオキは絵里の頭を自分の胸に引き寄せた。

「うっ……うう……」

絵里はナオキの胸の中で泣いた。

ナオキはそんな絵里の頭を撫でながら目を瞑っていた。

しばらくμ's 10人への拍手や歓声が止むことはなかった。

くラブライブ！（μ，s）く

ライブのあと、拍手や歓声に見送られながら退場し、記念撮影の後に控え室に入った。  
「みんなお疲れ！」

「「「「「お疲れく」」」」」

「いやあくまだ興奮が収まらないよく」

「うん！今でも信じられないよく」

「はい……見知らぬ土地でのライブは不安でしたが、みなさんの歓声を聞いたら安心しました……成功したんですね……！」

「もう……楽しくて楽しくて……」



「テンション上がるにや〜！」

「凜…そればかりじゃない……」

「そうやね…日本語ことばが通じないのにあれだけ喜んでた……

本当に…スピリチュアルやね！」

「ええ…にこたちなら当然の結果よ！」

「最後のライブを、最高のカタチにできたのね…ハラショー！」

穂乃果・ことり・海未・花陽・凜・真姫・希・にこ・絵里は言った。

「……ああ…そうだな……」

みんな…綺麗だった……

まさに”アメリカで舞う女神たち”だな！」

ナオキは人差し指を立ててみんなの踊っていた姿をそう表現して言った。

みんなはそれを聞いて顔を見て笑いあった。

「じゃ、おれは歩さんのところに行ってくるからみんなは着替えといて」

ナオキはそう言つて歩の元に向かった。

ガチャ…

「やあ…ナオキくん」

「うおっ!? 歩さん…びつくりさせないで下さいよ〜」

「ははは…すまんすまん」

ナオキがドアを開けると歩がいて、ナオキはそれに驚いた。

「今からそちらに行こうとしたんですよ…」

「ははは…ここで話した方が早いと思つてな」

「それは…ありがとうございます…」

「ライブ…よかつたよ!」

「*μ's*のあのステージに引き込まれたよ。

私はあれほど素晴らしいものは見たことがない!」

「ありがとうございます!」

必死に練習したかいがありました!」

「あの9人はもちろんよかつた…」

でも、それを支える君もよかつた」

「私もですか!?!」

「当たり前だ。

ナオキくんがいるから、あの9人はあれだけ素晴らしいライブができたと思うよ。

君がいたから9人はこれだけ輝くことができたんだ」

「ありがとうございます……」

「是非ともまた、ライブをして欲しいよ」

「……あの……大変申し訳にくいのですが……」

「ん？なにかね？」

「……μ'sはこのライブで……活動としては終わるつもりでいるんです……なのでもう……」

ナオキは申し訳なさそうに俯いて言った。

「そうなのか……それなら仕方ないな……」

いいライブをありがとう……μ's……」

「ありがとうございます！」

でも、実はまだライブはあるんです……」

「そうなのか？いつ？」

「それは………………です」

「そうなのか！それは楽しみだな」

「はい、楽しみにしてて下さい！」

ガチャ……

「ナオキく入っていいわよ〜」

ナオキが歩と話していると絵里がドアを開けて言った。

「あいよ〜」

それでは……今回はありがとうございました！」

「こちらこそ……頑張ってくれたまえ……」

” ラブライブ！運営委員会会長香川ナオキくん ”

「え……ちよっ!?!」

歩は手をナオキの肩に置いてそう言い残して去っていった。

「……………まだ決まってるじゃないって……………はあ……………」

ナオキは頭をかいて言った。

「もう……早くしてよ〜」

「はいはい……………」

ナオキはまた控え室に入るのだった。

「さ、帰ろうか！」

みんな忘れものすんなよ」

「「「「「「は〜い」」」」」」」」

そしてみんなは荷物をまとめて控え室を出て、ホテルに戻ろうとした。

だが10人をまず迎えたのはフカフカのベッドではなかったのであった……………

次回へ続く……………

第105話（アメリカで舞う女神たち章末回）「さらばアメリカ！おかえりム，S！」

前回のラブライブ！

作者さん壊れとる……………

いやいや、前回のラブライブ！やったな……………

ついにアメリカライブ！

おれたちは気持ちを整えて挑んだ！

結果は大成功！

みんなの踊ってる姿はまさに

”アメリカで舞う女神たち”だった。

やっとベッドで寝れる……………!!

と…思ってたなら……………

廊下……

「μ'sのみなさん、リムジンでホテルまで送っていくよ」

歩が慌てたように言った。

「歩さん……どうしたんですか?そんなに慌てて……」

ナオキは不思議そうに言った。

「実は……」

パシヤ……パシヤ……パシヤ……

「「「「「「ハラシヨ……」」」」」」

ナオキたちが外に出るとマスコミの人たちがカメラでμ'sを撮ったりしていた。みんなは驚きを隠せない。

「さ、早く！」

歩がそう言うのとボディーガードたちに囲まれて、sはリムジンに移動した。

リムジンに乗り込んだはいいものの、車はなかなか動けない。

ゆつくりと動くも、マスコミが囲んでいるのでタイムズスクエアからなかなか出れなかった。

「こんなに……もう……なにがなんだか……」

「ええ……なんで私たちが……？」

ナオキと絵里は言った。

「君たちのライブがそれほど凄かったということさ。」

この状況はいわばハリウッドスターと同じぐらいだ……」

「ハラショー……」

ナオキと絵里は歩の言葉を聞いて言った。

ほかのみんなも衝撃過ぎて啞然としていた。





穂乃果・にこの部屋……

「ふう〜づがれ」だ〜」

穂乃果は帰るなりベッドにダイブして言った。

「そうね……やっぱりスターって大変なのね……」

にこはベッドに座って言った。

「すう……すう……」

「寝てるし!?!はあ……」

にこは穂乃果に布団を乗せた。

「……………ついに……………スターになったのね……………にこ……………」

〜ラブライブ! (にこ) 〜

海未・ことりの部屋……

「うう……なんでこうなっただんですか……?」

海未はベッドで三角座りをして言った。

「ほんとうにびつくりだね」

「うう……もう寝ます……」

海未は布団に丸まった。

「うん……おやすみ……私も寝よう……」

ことりも布団の中に入った。

くラブライブ！（ことり）く

「すごい再生回数になってるよ！」

「すごいにや〜！」

花陽がアメリカライブの動画の再生回数を見ると、その多さに凜とともに驚いた。

「これ…まだまだ伸びてるよ！」

「ほんとに凜たち…スターになったんだにや〜」

「まだ信じられないよ……」

「そうだね……」

でも……もう疲れたし……寝ようよ〜ふあ〜

凜は大きなあくびをした。

「そうだね……もう寝よつか」

そして2人は眠りについた。

くラブライブ！（凜・花陽）く

真姫・希の部屋……………

「はあ……めんどくさい……………」

真姫は呆れたように言った。

「そんなこと言ってる真姫ちゃんほんまは嬉しいんやろ？」

「それは……………そうだけど……………」

真姫は顔を赤くして目を逸らして言った。

「やっぱり〜」

希はニヤニヤして言った。

「もう！寝るわよ！／＼／＼」

「あらら……………拗ねちゃった……………」

ふふっ……」

よかった…最後のライブがこれだけ成功して…と希は思っていた。

くラブライブ！（希）く

ナオキ・絵里の部屋……

「ちよっ…絵里!？」

「ナオキ……これはご褒美だから……」

く  
ラブライブ♡ (絵里)  
く

つぎの日も大変だった……

昨晚よりはマスコミは減っていたが、今でも数名いたのだ。

朝のTV番組でも、μ'sのアメリカライブやスクールアイドルのことが取り上げられていた。

それはアメリカ以外の国でも同じことだった。

そう、μ'sのライブによって、スクールアイドルは世界中から注目されるようになった。

μ'sはまたリムジンに乗り、空港に向かった。

「……………絵里…」

「なに？」

「その……………やっぱいい……………／／／／」

ナオキは絵里になにか言おうとしたが恥ずかしかったのか顔を逸らした。

「ふふっ……………」

そんなナオキを見て絵里は口を耳に近づけて…………

「……………また帰ったらしてあげる♡」

「なっ……………!?!／／／／」

「ふふっ……………」

ナオキは驚いて絵里の顔を見て、絵里はそんなナオキの顔を見て笑った。

「なに2人はこんなときにラブラブしてるのよ…………」



「ここは呆れたように言った。

「べっつに〜」

絵里は上機嫌そうに言った。

「い…いつものことじゃんか…あはははは…」

ナオキは苦笑いをした。

「はあ…でも、スターって大変なのね…」

「ここは手を頬に当てて言った。

「そうだね〜」

「ことりは言った。

「さ、もうすぐ空港に着く…降りる準備をしてくれ」

「「「「「「はい!」「」「」「」「」

そして空港に着いて降りるときもまたボディガードたちに囲まれて移動した。

「なんかもう飽きたよね…」

「それだけ人気になったってことで…」

「考えたのあんたやろ…」

テヘペロ☆

「てめえ……!!」

あ、やべー!

「おいこらシベリアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

は……はやく場面転換しなければ……!!

「あ、作者特権の場面転換すんなー!!」

くら……ら……ぶ………ライブ! (シベリア) くら

ふう……

無事に場面転換……じゃなかった……

出発ロビーに着けたみんなは歩に別れを告げようとしていた。

「歩さん……今回はお話をいただきありがとうございます!」

「こちらこそ!あんなに素晴らしいライブをありがとうございます!気をつけて帰ってくれ」

2人はかたい握手を交わした。

そして10人は飛行機に乗り込んだ。

「よっしゃ!寝るか!」

「またあ?」

ナオキがそう言うのと前の席の真姫が言った。

「でも真姫……もう夜だぜ?」

「あ……それもそうね」

真姫は納得したか、ゆったりと座った。

く  
ラブライブ！（μ s・歩・アリス・ボディーガードたち）  
く

飛行機は空を飛んでおり、機内も暗く静寂に包まれていた。

聞こえるのはエンジン音と寝息ぐらいであった。

ナオキと絵里は手を指を絡めて繋いでいたがナオキはまだ寝れずにいた……

それは昨夜のことを考えていたからだ。

自分が攻めることは何度かあっても絵里から攻められたのは今までなかったからである。

（………つたくよ………何回もやってるのになんで今回は………／／／）

「……ナオキ……」

絵里は小声で言った。

「ん? どうした絵里?」

ナオキも小声で言った。

「ライブ……楽しかったわね……」

「……そうやな……向こうの人たちにも喜んでもらえてよかった……」

「ええ……」

「……絵里……」

「なに?」

「……もたれていいか? / / /」

「ええ……いいわよ……」

「……ありがとう……」

ナオキは絵里の膝を枕にして寝転んだ。

「ふふっ……急にどうしたの?」

「……なんとなく……」

「ふふっ……そう……」

絵里はナオキの頭を撫でた。

ナオキはある考え事をしていた……

μ sのやり残していることを……

「すう……すう……」

「ん？絵里の寝息……？寝ちやったか……」

ナオキはゆつくりと態勢を元に戻した。

「ん……」

「つと……」

すると絵里の体がナオキの方に倒れてきて絵里がナオキにもたれているカタチに

なった。

「すう……すう……すう……」

「ふっ……かわいい寝顔やわ……」

そう呟いてナオキも目を瞑るのだった。

く  
ラブライブ……(ナオキ)  
く



「……………んんっ……………」

朝……………誰よりもはやく穂乃果が目を覚ました。

そして窓のブラインドから日差しが漏れているのが気になったのか腕をのばしてブラインドをあげた。

開けると同時に日差しが眩しく一時は目を瞑るも、目を開いてその前の光景に感動した。

「綺麗……………」

「……………穂乃果ちゃん?」

ことりは日差しが少し眩しく感じたとかアイマスクを外して穂乃果に声をかけた。

「ことりちゃん……………見て……………」

「ん?……………わあ〜!」

ことりは穂乃果の見る方を見て感動の声をあげた。

「ずっと起きてたの?」

ことりは完全に目が覚めたのか枕を膝において小声で言った。

「ううん……………今起きたところだよ!」

穂乃果も小声で言った。

「そうなんだ〜！」

「ねえねえことりちゃん！」

「ん？」

「ライブ……楽しかったね！」

「うん！ そうだね！」

「絶対……またみんなで来ようね！」

「うん！ 絶対に！」

「ふふっ……ふふふふ………」

2人は笑いあった。

後ろの席の真姫は一旦目を開けたがまた目を閉じた。

そして飛行機は日本の地にタイヤをつけた。

おかえり！ μ， s！

やっとゆつくりできるとみんなはアメリカのことを思い返しながら思っていた。

「もうすぐじゃない?」

「うん、この便だと思うよ!」

「ついにこのときが来たんだね!」

次回、新章へ続く……………

The school idol movie 第3章  
歩むべき道は

第106話「?↑HEARTBEAT《ハテナハートビー  
ト》・ランナウェイ!」

成田国際空港……

「帰ってきたぞにつぽーーーーーん!!!」

ナオキは到着ロビーで叫んだ。

周りからは笑い声が聞こえる。

「ナオキ恥ずかしいからやめてください!」

海未は小声で怒った。

「だって嬉しいんやよ♪」

ナオキは上機嫌なようだ。

「わく見て見て！昨日より再生回数がのびてるよ！」

花陽はスマホの画面を見せて言った。

「お〜！」

穂乃果と凜は感動の声をあげた。

「すごいね〜！どんどんのびてるよ！」

「こうして見ると改めて大成功だったと思えますね」

「ふふっ…この調子でドーム大会も、ナオキの会長職も上手く決まればいいわよね」

こことりと海未と絵里は嬉しそうに言った。

「う〜ん…エコノミーって結構疲れるのね…」

真姫は首のあたりを摩って言った。

「なにそれ…自慢？」

「ここは真姫を睨みつけて言った。」

「違うわよ！」

真姫はそういうつもりは無いと否定する。

「流石、お嬢様やね〜」

希がひよいと出てきて言った。

「ふん、別に…」

真姫はそつぽをむいた。

「あ、そう言えば真姫ちゃん！」

「ん？」

そう言うとき希は口を真姫の耳に近づけた。

「……曲はできた？」

希は真姫にしか聞こえないような小声で言った。

「ヴええ!!」

真姫はその質問に驚いた。

「どうなん？」

「だからあれは…」

「ウチはいいと思うんやけどな〜」

「だから違うって〜!」

真姫は希に強く言った。

「なにが違うんや?」

「ヴええ!」

そんな2人を見てナオキは声をかけると真姫は驚いた。

「あのね〜真姫ちゃんが…「希い!」…はいはい…」

「ん?隠し事か……?」

ま、ええや……もうすぐバスが来るみたいやしはよ行くぞ」

ナオキはそう言うときキャリーバッグを引いて歩こうとした。

「うん!さあ、帰ろう!」

穂乃果がそう言つて歩こうとした。

だが………

「わ〜本物だ〜!」

「すご〜い!」

「かわいい〜!」

「かつこいいい〜!」

「ん？」

ナオキは足を止めた。

「どうしたの？」

絵里はナオキに聞いた。

「いや……なんか視線を感じる……」

それになんかざわざわしてね？」

ナオキは周りの様子が気になっていたようだ。

「……確かに……」

絵里は周りを見回して言った。

「わ〜こつち見てるよ〜！」

「ほんとだ〜！」

「μsがこの時間に帰ってくるって本当だったんだね！」

「「やった〜！」」



「なに!？」

穂乃果は驚いた様子で言った。

「これは……一体……」

絵里は戸惑ったように言った。

「もしかしてアサシン!？」

「サーヴァント召喚されちゃったのお!？」

凜と花陽はそう言って怖がり抱き合った。

「穂乃果! あなたまさか向こうから聖杯を持ち込んだのではないのですか!？」

海未は結構真面目に穂乃果を揺すりながら言った。

「聖杯なんて知らないよ〜!」

穂乃果は必死に抵抗した。

ま、たしかにこの世界には関係ない(?) よね……聖杯って……

「そのハテナはなんだよ……」

だってわかんないじゃん?

「まあ……そうやけどな……」

「あのっ！」

そんなことを話していると一人の女の子が声をかけてきた。

みんなは不思議そうにその子を見た。

「あれ？君は確か正月に神田明神でいた……」

「……っはい！覚えててくれたんですか!？」

その子はナオキが正月に神田明神でお手伝いをしているときにナオキを訪ねてきたフアンの子であった。

「ああ……よく覚えてるよ！

……で、どうかした？」

「あ……あのっ……サインを下さい！」

「「「「「「「え!」「」「」「」」」」」」」

みんなは驚きを隠せなかった。

「ナオキさんと一緒にいるってことは……あなたはμ sの高坂穂乃果さんですよね!？」

「は……はい！」

「μ sの南ことりさんですよね!？」

「は……はい！」

穂乃果とことりは自分の名前が呼ばれてびっくりしながら返事をした。

その女の子は目をキラキラさせていた。

「そちらは園田海未さんですよね!」

「ち…違います!」

わ…私はアーチャーです!」

海未は体をその子とは逆の方に向いて言った。

「海未ちゃん!なんで嘘つくの!」

「いつまでFat○ネタ引きずつてるにや〜!」

花陽と凜はそんな海未に怒った様子で言った。

「だって…怖いじゃないですか!」

空港でこんな…//」

海未は顔を赤くして言った。

「私…*μ*sの大ファンなんです!特に2年生組が!」

「私もそうなんです!」

「私も!」

「「お願ひします!」」

そう言つてどこから湧いてきた2人の友達と一緒に女の子は色紙を前に出した。

「え……えくつと……」

穂乃果はその光景に戸惑っていた。

するとほかのフアンの人たちもどんどん自分の推しのところに色紙などを持って集まってきた。

「これは……」

「どうするん？」

絵里と希は辺りを見て言った。

「はあ……せっかくのフアンなんだ。」

フアンサービスといこうぜ」

ナオキは言った。

それにみんなは顔を合わせて笑いあった。

急に始まったサイン会は穂乃果・凜・にこ・ことり・海未の班と希・真姫・花陽・絵里・ナオキの班に分かれた。

空港の職員の人に申し訳ないが列の整理を手伝ってもらっていた。

「もう…スターって疲れるわね〜」

「ここは嬉しそうに言った。」

「でもなんでこんなことに…?」

「ことりは首をかしげて言った。」

「ん〜…あ、もしかして…夢!?!」

「それは考えられるにや…!」

「たしかに…現実にしては出来すぎてるわ!」

「でもそうなるかどうかからが夢なの?」

「う〜ん…」

「えつと…あ!まさか…ナオキくんの自己紹介のあたりから!」

「この小説自体が凜たちの夢なのかにや!?!長い夢だにや〜」

「いや、もしかしたら…学校が廃校に!のあたりからかもよ!?!」

「そんなことないよ!ね、海未ちゃん?」

「う〜ん…」

穂乃果・凜・ここ・ことり・海未はサインをしながら話していた。

「なんかおれまですることに……」

「ふふっ……いいじゃない？」

「そうそう、ナオキくんもスターやね！」

「はあ……結構めんどくさいわね……」

「真姫ちゃん……」

「でもなんでこんな……」

「そうね……アメリカでもそうだったし……」

「でも前日本にいた時より確実に人気は出てるよね〜」

「はあ……めんどくさい……」

「真姫ちゃん……」

ナオキ・絵里・希・真姫・花陽はサインをしながら言った。

「ラブライブ! (μ s) 」

サイン会が終わったあと、職員の人に全員で頭を下げて職員の人々の提案で成田国際空港にμs 全員のサインを1枚の色紙に書いてお礼ということにした。

「やっと終わったね」

「うん……でもなんでなんだろう……?」

ことりと穂乃果は不思議そうに言った。

「ん……ん……ん? あ……ああああああ!!」

ナオキはその理由を考えているなにかを発見して大声をあげ、みんながびつくりした。

「ナオキくん!?!」

「ど……どうしたのよ……急に大声あげて……」

花陽と絵里は驚いた様子で言った。

しかしナオキは答えず、ある方向を唾然として見ていた。

みんなの視線もそちらに向く。

「「「「「「え〜〜!!」」」」」」

みんなは大声をあげた。

それは、アメリカライブのときの映像がスクリーンに流れていたからだ。

その映像の最後には

『Let's cheer μs! 「μsを応援しよう!」』

と書かれてあった。

「なんでアメリカライブの映像が?」

穂乃果は不思議そうに言った。

「と…とりあえず一旦荷物をどこかに置いて秋葉に行こう! なにかわかるかもせーへん

…」



「それなら穂乃果の家に置いておこう!あそこなら秋葉にも近いし」  
ナオキがどこに行こうか考えると穂乃果が自分の家がどうかと提案した。  
「せやな……ならまずは穂乃果の家だ!」

そして10人は勇次郎に迎えに来てもらい穂乃果の家に向かった。

くらぶライブ!(μ s)く

みんなは荷物を穂乃果の家においてそのまま秋葉に向かった。

秋葉の街にはアメリカライブの映像が流れてたり、  
あつたりとしていた。

そして10人はビルに貼ってある自分たちのポスターを見上げていた。

「「「「「「わ〜」」」」」」」

「おれ……写ってない……」

「まあ……ナオキくんは裏方だしね」

こことは両手で顔を塞ぐナオキに苦笑いで言った。

「ふ〜ん……ん？」

ああ〜！こんなところにもある〜!？」

凜は背後のドアに貼ってあったポスターを見て驚いた。

「こんな応援チラシもあったよ！」

穂乃果は配られていた応援チラシを持って言った。

「「「「「これは……」」」」」」

海未は汗をかいて言った。

「これははやめに退避するか……」

ナオキはこの状況はまずいと思ってそう言った。

「あのっ！」

「もしかして!？」

そんなときまたファンと思われる女の子が声をかけてきた。

それを見て、通行人たちもほとんどん集まっていた。

「えつと……その……とりあえず……逃げよう……」

「そ……そうだね……」

ナオキと穂乃果は小声で言った。

「えつと……申し訳ございませんが……逃げる！」

ナオキがそう言うのと10人は走った。

「あ、待ってくださいさ〜い！サインだけでも〜！」

ファンの人たちはそんなμ sを追いかけた。

〜ラブライブ！（μ s）〜

「はあ……はあ……はあ……ここまですれば大丈夫やろ……」

μ sは路地裏に入って待機していた。

「そうだね……走るの疲れたよ」

穂乃果は弱音をはいた。

「やっぱりこれ……夢なんじゃないかにや？」

凜はほっぺをつねって言った。

「また再生回数増えちやつてるよお!？」

花陽はスマホの画面を見て言った。

「それじゃあ……私たち……本当にスターになったの？」

「ことりは信じられないように言った。」

「そんなんっ！恥ずかしいです」

海未は三角座りをして顔を隠して言った。

「まあまあ……あとその状態やったらパンツ見え……破廉恥ですう！／／／……ぐはっ  
!？」

ナオキは海未を落ち着かせようと言うも、海未は顔を赤くしてゴミ箱の蓋をナオキに投げた。

それはナオキの顔面にクリーンヒットした。

そのままナオキは意識を失った……

「ん……あれ？」

「あ、ナオキ……大丈夫？」

ナオキが目を覚ますと真姫は言った。

「あ……ああ……」

「よかったら折角ライブが成功したんだからちゃんと喜びたいもんね！」  
穂乃果は元氣よく言った。

「まだ早いわよ……」

カチャ……

絵里がそう言うと、絵里とにこと希はサングラスをかけた。

「なにやってんの？」

ナオキは真面目にツツコンだ。

「（こ）を脱出するんや！」

それは最優先事項やで……」

希はナオキを見て言った。

「そうよ……なぜなら私たちは……」

スターなんでものおく!」

にこが頬をあげると、3人はある曲を歌った。

「ランナウエイだランランナウエイだ

なんなんなんで突然?」

「ランナウエイだランランナウエイだ

いきなり人気者」

「あくあ……まさかの大ブレイク」

笑顔で切り抜けてランランナウエイ!」

ここにはおかしなことがあった。

この曲……『?↑HEARTBEAT』はナオキが仲のいい3年生に落ち着いたらあげようとした曲。

つまり、まだナオキ以外は知らない曲だった。

『ごくらくから さあ、どうしよう?』

「はっ!??↑<sup>ハ</sup>HEART<sup>ナ</sup>BEAT!<sup>ハ</sup>」

ナオキはガバツと起き上がった。

「わっ!?!ナオキ……大丈夫?」

絵里は膝枕していたナオキが急に起き上がったのでびっくりした。

「あ……絵里……サングラスは?」

「サングラス?何言ってるの?」



「い……いや！なんでもない！」

ナオキは早口で言った。

「でもここからはやく抜け出さないと……」

「そうね、これは？↑HEARTBEATするしかないわね」

希とにこが言った。

「そうと決まれば……ランナウエイするわよ！」

「……………」

絵里が立ち上がって号令をかけると8人は拳をあげた。

「……………？↑HEARTBEAT《ハテナハートビート》……………？

……………ランナウエイ……………？

……………どうゆう意味やねん……………」

曲名つけたのはあなたですよ……？

次回へ続く……

## 第107話「やり残したこと」

前回のラブライブ！

ランナウェイ!!

?↑<sup>ハ</sup>HEART<sup>ナ</sup>BEAT<sup>ハ</sup>して、ランナウェイした10人は穂乃果の家に集まっていた。

ちようど雪穂もいて、11人で机を囲んで話をしていた。

「本当に凄かったんだよ〜?」

日本でもアメリカライブが終わったあとからネット中でも話題になって、ニュースにも

なっただよ？」

雪穂はパソコンの画面でアメリカライブのPVを見ながら言った。

「ふくん……てかまた再生回数増えとるし」

ナオキはその画面を覗いて言った。

「すごいわね……」

真姫は肘を机について言った。

「しかもお姉ちゃんがいなくて、お姉ちゃん目当てでお店にお客さんがいっぱい来たり、このお店もお姉ちゃんの実家つてことで有名になったから売り上げが上がったってお母さんたち喜んでたよ？」

「ウソ!？」

お小遣いの交渉しなくっちゃ……!

私のおかげで売り上げが上がったんだから!

穂乃果は雪穂の肩を持って揺らしながら言った。

「はははは……」

こことはそんな穂乃果を見て苦笑いをした。

「そんなことより、別のことを気にしなさいよ」

ここはお茶の入った湯のみを手にとって言った。

「別のこと……?」

花陽は不思議そうに言った。

「私たちはもはやスターなのよ？」

A—R—I—S—Eを見てみなさい!

人気アイドルというものは常にプライドを持ち、優雅に……慌てることなく……」

「この妄想はじまり」

「にこにこ今日はバカンスですか？」

「わ〜!きれ〜い!」

フアンの子たちが海岸でくつろいでいるにこを見て騒いでいた。

するとにこは起き上がってサングラスを上げてウインクした。

「しよ〜がないわね」

ぬいっこぬいっこぬい〜」

「この妄想おわり」

「ぬいゝぬいゝぬいゝぬいゝ」

にこは妄想で言つていたことが口に出ていた。

「…なにしてるん………?」

希は引き気味で言つた。

「づっ!」

と……とにかく!これからは外に出る時は行動や格好に注意すること!

とくにナオキと絵里!

「え!」

「え!」じゃないわよ!

あなたたちは付き合つてて、さらには結婚もするのよ!?

パラツチに目をつけられるとめんどくさくなるのよ!

「服装とか変える方がめんどくさいわ!

でもそんなことより……」

「考えなきやいけないことがあるでしょう?」

ナオキがそう言うが続いて絵里と真姫がセリフを言うも、見事に重なり顔を赤くした。

「考えなきやいけないこと？」

穂乃果はなにかわからなさそうだった。

「あ、アサシンとかのサーヴアント対策を……！」

「それはもういい！」

「いてっ！」

凜がそう言うのとナオキは凜の頭にチョップした。

「はあ……てかわからんか？」

「こんな人気が出てファンに注目されているのよ？」

「それに世界からもね……」

ナオキと絵里と真姫は言った。

「3人の言う通りやね。」

「これは間違いなく……」

希は深刻そうな顔をして言った。

「ん？」

穂乃果はまだわからなさそうだった。

「……まあ……明日になればわかるさ。」

さ、みんな今日は解散して明日部室で話し合おうか」

ナオキがそう言うともんな頷いた。

「…ナオキ……？」

絵里はナオキの様子がおかしいと思っていた。

「あ、あとおれは明日は先に本部に行っていくから」

「おっ、これは会長に任命ですかな！」

希は言った。

「や…やめろよ！まだ決まってねーって」

みんなはそんなナオキを見て笑った。

く  
ラブライブ！（μ，s）  
く



香川・絢瀬宅……

ガチャ……

「ただいま〜」

「あ、お義兄ちゃん、お姉ちゃんおかえり！」

亜里沙は2人の声を聞きつけるとリビングから飛び出してきた。

「ちゃんと留守番できたか？」

「うん！雪穂が泊まりに来てくれたんだよ！」

「そうなの？またお礼を言わなくっちゃね」

「うん！」

あ、そうだ！紅茶いれるね！」

「あ、私がやるわよ？」

「ううん、お姉ちゃんたちはゆっくりしてて！」

亜里沙はそう言い残すとリビングに走って行った。

「亜里沙ちゃん……嬉しそうやな……」

「ふふっ……そうね……」

「さ、おれたちも行くこう！」

「ええ……」

ナオキもリビングに向かった。

「……ナオキ……なにか隠してるのかしら……？」

絵里は少々不安に思うもリビングに向かった。

そしてナオキと絵里と亜里沙はリビングでゆっくりと過ごして、ナオキと絵里ははやく体を休めようと部屋に向かった。

「……ねえ……ナオキ……？」

「ん？どうした？」

絵里は隣で寝転んでいたナオキに言った。

「その……なにか隠してるのとかがあるの……？」

「っ……！」

ナオキは絵里の言葉に驚き目を丸くした。

「そ……そんなこと……」

「ウソ……心臓ドキドキしてるわよ？」

「っ……………」

「ねえ…教えて?」

「……………明日……………」

「ん?」

「……………明日……………みんなと一緒に話す。」

μ s に関係することや。

だから……………明日まで待ってくれ……………」

ナオキは真剣な表情で絵里を見つめて言った。

「……………わかったわ…ちゃんと話してね?」

「わかってるよ……………」

ナオキは少し笑顔を浮かべた。

「じゃ、おやすみ……………ちゅっ……………」

絵里はナオキの唇にキスをした。

「……………おやすみ……………」

そして2人は目を瞑った。

♪ラブライブ！（ナオキ・絵里・亜里沙）

翌朝、ナオキはラブライブ！運営委員会本部にいた。

会長室……

「ま、座りなさい」

「はい……」

ナオキは晋三に勧められソファーに腰掛けた。

「まずはアメリカライブご苦労だった。

歩さんからも連絡が来て『とても素晴らしいライブだった』と言っていたよ」

「そうなんだ……」

向こアメリカも日本も大変やったけど……あはは……」

ナオキは頬を人差し指でかきながら言った。

「ああ……μ、sのグッズの売り上げもどんどん上がっているしな」

「そうなんだ……」

「ああ……やつぱりμ、sは凄いよ」

「ありがとう……」

「これからの活動も期待しているよ」

「っ……」

「ん……どうした？浮かない顔して？」

ナオキは晋三の言葉を聞いて俯いた。

「………実は………μ、sは………ライブライブ！決勝をもって解散するってみんなで決めて  
たんだ……」

「………そうなのか……」

晋三はその言葉に驚き目を丸くした。

「……うん……」

「…………でも、わかってるだろう？」

まだ、sにはやり残したことがあるということ……」  
「……………やっぱり……………あるんだね……………」

「さすが、わかってるな……………」

「……………なんとなくわかってたよ……………」

「……………その顔はどうしようか迷ってるか？」

「……………うん……………」

「わかってるだろ？」

このライブはしないとイケない……

ということとは……」

「……………第3回ラブライブ！の最後でμ sがライブをしなくちゃいけない……………つてことやろ？」

「その通り……………」

「それに日程は6月……もちろんスクールアイドルμ sとしては出れない……………」

「でもμ sが続けるとなれば……………」

「それはできない！」

μ sはあれで終わりにすると決めた……………でも……………これを断れば……………」

「わかってるじゃないか……………」

それがお前たちで決めたことならお前たちで考えなさい……………」

「……………うん……………」

じゃ、おれ行くわ」

「ああ……また連絡してくれ」

「わかった……………」

ナオキはそう言って会長室を出た。

「……がんばれよ……」

”次期ラブライブ！運営委員会会長、香川ナオキ”

くラブライブ！（晋三）く



ナオキは本部を出て音ノ木坂学院に向かっていた。

そのころ……

音ノ木坂学院……

アイドル研究部部室……

「ふえ〜」

穂乃果は机に突っ伏していた。

「はあ……フミコたちも強引でしたね」

海未はため息をついて言った。

なにがあつたのかと言うと、穂乃果は「ライブをして欲しい」とヒフミたちに追いか  
け回され、椅子に縛り付けられて、口にガムテープを貼られて教室にいたところを海未  
に助けられていた。

そして海未に説教されたヒフミは罰として学校中の廊下を掃除させられていた。

「ほんとだよ」

みんなライブをして欲しいんだね」

「そうだね……」

「そう言えば、<sup>4</sup> s が解散するって私たち以外は知らないんだからしょうがないよね……」

花陽とことりはしよんぼりした様子で言った。

「そんな！」

3年生が卒業したらスクールアイドルは続けられないって言われなくてもわかるでしょう！」

穂乃果は体を起こして言った。

「もしかしたら、ファンのみんなにとってはスクールアイドルかそうじゃないかってことは関係ないのかも……」

真姫は肘を机について言った。

9人はパソコンの画面に目を向けた。

そこにはアメリカライブのときの映像が流れていた。

コメント欄には『すごい！』だとかライブの感想も書いてあったが、『次のライブはい

つだろうか?』『次のラブライブ!にも出場するのかな?』『新曲早く聞きたい!』など、μ'sのこれからの活動を期待しているコメントもあった。というかそのコメントの方が明らかに多かった。

「……みんな、次のライブを楽しみにしてるんだね…」

凜はしょんぼりした様子で言った。

「それなら…どうしたら…?」

穂乃果はみんなを見て言った。

みんなが俯く中、希はフツと笑っていた。

みんなは不思議に思っただけを見た。

「……ライブ……やるしかないんやない? 『最後を伝えるライブ』を……」

「ライブを……?」

「そう。」

ライブをして、ちゃんとみんなに終わりを告げる……それが、ウチらがやるべきこ

と”じゃないんかな?”

「やるべき……?」

「それに、ちょうど相応しい曲もあるし…」

希はそう言うのと真姫の方を見た。

「ちよつと希！／＼／＼」

真姫は作っていた曲のことを言われると悟り反抗した。

「いいやろ？」

実は真姫ちゃんがつ作ってたんよ……μ sの新曲を」

「づつ……」

真姫は希に言われると顔を逸らした。

「曲を……？」

「もう終わりにするって決めたのに、どうして……？」

花陽と凜は驚いた様子で言った。

「……………『KiRa—KiRa Sensation!』で最後の曲だと思っていたけど、そのあと色々あったでしょう？」

だから、自分の区切りとしてね…

ただ…別にライブ披露したいとかそういう理由わけじゃなかったのよ……」

そう言つて真姫はポケットからイヤホンがついたウォークマンを取り出して机の上に置いた。

穂乃果とことりはそのイヤホンを片耳につけてその入っていた音楽を聴いた。

「……………これ……………」

「いい曲だね！」

穂乃果とことりは見つめ合つてその曲の感想を言った。

「いいなく！凜も聞きた〜いい！」

「私のソロはちゃんとある!？」

凜とにこもその曲を聞きたがつていた。

「聞いて！すごくいい曲だから！」

穂乃果はそう言つてにこにイヤホンを渡して、ことりは凜に渡した。

凜はとでもリズムに乗つていた。

「うん、いい曲ね！」

海未…これで作詞できる？」

にこはそのあと海未にイヤホンを渡した。

「はい！実は私も少し詩を書き溜めていたので」

「私も！アメリカでも衣装ばっかり見てた！」

海未とことりは言った。

「ふふっ…みんな考えることは同じつてことやね」

希は髪を弄つていた真姫を見て言った。

「どう穂乃果？」

ライブ：やってみない？」  
にこが穂乃果に言った。  
だが穂乃果は俯いた。

『なんのために歌うの？』

穂乃果の中で誰かが言った。

「なんのために……歌う……」

穂乃果はぼそつとそう呟いた。

「穂乃果ちゃん？」

希は不思議そうに言った。

「あ、ごめん！」

こんな素敵な曲があるんだつたらやらないと勿体ないよね！

やろう！『最後を伝える』最後の”ライブ”を！」

「そうと決まれば練習よ！」

私たちが音ノ木坂にいられるのは3月の終わりまで……気合い入れていくわよー！」

にこは拳を天に突き上げて言った。

すると……

ガチャ……

「ちよつと話いいかしら？」

「理事長……」

理事長が部室に入ってきた。

「あら……ナオキくんは？」

「ナオキくんなら本部の方に行ってるよ」

こどりが答えた。

「そう……なら高坂さん、園田さん、西木野さん……ちよつと理事長室まで着てくれるかしら？」

「「は……はい……」」

3人は不安そうに理事長室に向かった。

「話ってなんやろうね？えりち……」

「そうね……」

絵里は少し元気がなさそうだった。

それは、ナオキの言っていたことが気になっていたからだだった。

「えりち……どうかしたん？」



「え……な……なんでもないわよ……全然……」

「えりち……？」

希はそんな絵里を不思議に思っていた。

しばらくすると穂乃果・海未・真姫が戻ってきた。

その表情は暗かった。

「で、なんて言われたのよ？」

「ここは低いトーンの声で言った。」

「実は……」

”続けて欲しい” って……………μ s ……」

「……………！……………」

穂乃果が口を開いた。

みんな驚きを隠せなかった。

「今やA—R—I—S—Eとμ sは圧倒的な人気を誇っています。

だからドーム大会の開催にはまだ私たちの力が必要らしく……………」

スクールアイドルとしてじゃなくても、プロのアイドルとしてでもいいからμ sを

続けて欲しい……………」

そう言われました……………」

海未は低いトーンの声で言った。

「そんなの……………続けられるわけじゃないじゃないの……………」

真姫は拳を握って言った。

部室の空気が重くなった……………」

そのとき……

ガチャ…

ナオキが暗い表情で部屋に入ってきた。

「お待たせ〜……って…どうしたん？」

ナオキは部屋の空気が重いことに気づいて言った。

「実はね………」

立っていたメンバーも座ってから、穂乃果は理事長から言われたことをナオキに話した。

「……………そうか………」

「それで今から話そうとしてたんです…」

「……………」

ナオキは黙り込んでしまった。

部屋に沈黙が続いた。

その沈黙を破ったのは……………

「みんな……………」

絵里だった。

「えりち……………どうしたん？」

「……………ナオキ……………話があるんじゃないの？」

絵里がそう言うのと視線がナオキに集まる。

「絵里……………」

「ねえ……………昨日話すつて言つてたじゃない……………」

「そ……………それは……………」

ナオキは顔を逸らした。

ギョツ……………

絵里はナオキの手を握った。

「ナオキ……………勇気を出して……………」

「……………ありがとう……………」

ナオキはそう言うのと立ち上がったって息を吸った……………

「……………単刀直入に言うのと、*ム*sには”やり残したこと”がある」

「やり残した……………こと……………?」

穂乃果は言った。

「それって”最後を伝えること”じゃないん?」

希がそう言うが、ナオキは首を横に振る。

「まさか……………」

真姫は目を開いた。

「ああ……………まだライブが残ってる。

日程は……………6月」

「「「「「「「つ……………！」「「「「「」」」」」」」」

みんな驚いた。

「第2回ライブライブ！を思い出してくれ、大会の最後には”誰が歌った”？

”どんな人が歌った”？」

みんなの脳裏に浮かぶのは……………

綺羅ツバサ・統堂英玲奈・優木あんじゅのA—RISE。

この人たちは……………

「前大会優勝者……………！」

花陽は目を開いて言った。

「……………そういうことだ。」

おれたちは第2回の優勝者……

ということは第3回ライブライブ!の最後でμ sはライブをしなくちゃいけない」

「それでは……私たちの”やり残したこと”というのは……」

「ああ……第3回ライブライブ!の閉会ライブだ……

スクールアイドルとしてじゃない……

あくまで『前大会優勝者μ s』としてな」

「またもや沈黙になる……」

「……あんた……ふざけてるの……？」

「にこ」……」

ガタツ！

グツ……

ドン！

「くっ……！！」

するとこは椅子を倒して立ち上がり、ナオキの胸ぐらを掴んでダンスに押し付けた。

「にこー！ナオキー！」

絵里は止めようと立ち上がろうとするが、ナオキの視線は『来るな』と言っているようだったので立ち上がらなかった。



「ふざけんじやないわよ!!」

あんた……あの時の決断を変えるつもり!?

あんたも『大会が終わったらμ sはおしまいにする』って言ったんじゃないの!?

それに6月……?」

スクールアイドルでいられるのは3月の終わりまでよ!

ふざけんじやないわよ!!!

あのときの決断を簡単には変えられない!

ナオキもわかってるはずよ!

『最後を伝えるライブ』は3月にできるわ……でも『第3回ライブ!閉会ライブ』は

違う!!

確かに、ドームの舞台に立てるのはとても嬉しいわ……

でも……でもっ!!!

”私たち10人が決めたこと”を変えるのは嫌なのよ!!!!!!!

あんたもわかってるでしょ!?

次期ライブ!運営委員会会長だかなんだか知らないけど……

その前にあんたは……

ナオキはμ sのメンバーの1人でしょうが!!!!

!!!!

にこはものすごい剣幕でナオキを睨んで言った。  
その表情はこれまでにないくらいに怒っていた。

「わかってる……………」

わかってるよそんなの!!!

おれだつて嫌なんだよ!!!

おれだつてな…………おれだつてあのとときの決断を変えるのは嫌なんだよ!!!!

当たり前じゃないか!!!

「それならなんでもっと早く言わなかったのよ!!!

前々からわかっていれば……………」

「おれだつてわからなかったんだよ!!

ツバサさんから聞いた時は今回だけかと思っていた…………でも違った!!

おじさんに決勝の日の夜に聞いたんだ…………

『第3回ラブライブ!があつたとしたら、μ sにもA—RISEみたいにライブをし  
てもらふことになるかもな』って…………

それで第3回ラブライブ!の開催が検討されていると公表された…………

それと同時に思ったよ…………

『μ sはその日まで続けなきゃいけない』って……」

「それなら……それなら……」

「なんで話さなかったのよ!!!」

「話せなかったんだよ!!!」

アメリカライブもあって……みんなの気持ちをバラバラにたくはなかった!!!

それに、今回のライブは成功させたかった!!

ドーム大会開催のため……スクールアイドルのために!!!」

「くっ……!!!」

にこはさつきよりも強くナオキをダンスに押し付けた。

「それに……『最後を伝えるライブ』があれば……『最後のライブ』も必要じゃないか

……!!!」

「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

「……………離せ……………にこ……………」

ナオキはこの腕を掴んで離した。

にこは目を大きく開いて、ナオキを再度掴もうとはしなかった。

「みんな…考えておいてくれ……」

μ sの活動を続けるのはおれは反対だ……

でも、『最後を伝えるライブ』があれば、『最後のライブ』ファイナルライブも必要だとおれは思う……  
明日一日でゆつくり考えておいてくれ……

明後日、みんなの考えを聞こう……」

ナオキはネクタイや乱れた服を直しながらそう言う。荷物を持ってドアの方に向かった。

「ナオキ……！」

ガチャ……

「絵里……今日の晩飯はいらない……」

また……” 明後日” ……」

「つ……ナオキそれはどう言う……!!」

ガタン……

ナオキは絵里の言葉でも止まらず、部室を去った。

「ナオキ……」

絵里は手をドアの方に伸ばしたまま愛する人の名を呼んだ。

次回へ続く…

Another way (真姫の誕生日) 「真姫、自転車に乗る(小並感)」

「あの…ナオキ……………」

「ん? どうした?」

私はナオキに頼みごとがあったから生徒会の仕事中に言ったわ。

「その……………来週、凜と花陽とお出かけすることになって……………」

「ほうほう……………」

「それで、自転車で行こうってことになったのよ」

「そうなんか……………」

「でも……………その……………あの……………// //」

「……………ああ……………自転車に乗られへんってことね」

「……………うん……………// //」

そう、ナオキに頼みたいことって言うのは……………

自転車の乗り方を教えて欲しいってこと。

私は自転車の練習とかする暇がなくなつて……だから乗れないのよ……悪い？  
だけどせっかく凛と花陽が行こうつて言ってるんだし断るわけにもいなくて……  
今に至るの……

「それぐらいお安い御用や……」

じゃ、明日から練習開始な！」

「ありがとう……」

くラブライブ！(真姫)く

「ヴえ…ヴえ…ヴええ!？」

「おっと危ない…おれが支えてるからゆっくりこげよ?」

「うん……」

私は今、ナオキと特訓中!

時間は放課後の1時間、そして休日は朝からと、練習後の夕方にすることにしたの!

「ヴえ…ヴええ……ヴえ……」

私はバランスを崩さないようにゆっくりとこいでいるわ。

ちゃんとヘルメットとかカバーとか付けてるわよ!

「よし…そろそろ離すけどいいか?」

「ダメ!倒れちゃう……」

「これで何回目や!？」

「うっ…だつて〜」

「そんな言うてばつかやったらいつまでたつても乗られへんぞ!」

「うう……」

「どうする?」



たしかにナオキの言う通り……

いつまでも逃げてばっかりじゃいつまでたつても自転車に乗れない……

でも、ここは覚悟を決めなきゃ……

この真姫ちゃんが……

西木野病院の跡取りの真姫ちゃんが……

「わかったわ！離して！」

「よっしゃ！離すぞ……」

ナオキの手が離れたのがわかった。

ああ……風を感じる……

「ヴええ!？」

ガタン！

間もなく倒れた……

「おいおい！なんでこがねーんだよ！

こがなきゃそりゃあこけるわ……」

「だって……いけると思ったから……」

「つたく……ほら……」

「…ありがとう……／＼／＼」

私はナオキの手を借りて立ち上がった。

「今日のところはやめとくか……そろそろ時間やし……」

「ええ……」

「ほい、ブレザー」

ナオキは私にブレザーを渡してくれた。

そしてブレザーを着て、私はナオキに家に送ってもらった。

「じゃ、また明日な」

「うん……」

ナオキは自分の家の方に歩いて行った。

「早く明日になって欲しい……かな……？」

私はボソツとそう呟いた。

くラブライブ♡(真姫)く

それから毎日私とナオキの厳しい特訓をした。

何回も転んで、怪我をしたこともあった。

そのときはナオキはものすごく心配してくれて……／＼／

そして日曜日……

ナオキはちよつと用事があるから遅れてくるって言ってたから私は一人で練習を始めることにしたの。

でも何回も転んで……それをずっと繰り返し返していた。

「なんで……なんでよ……もう！」

もう一回!!」

私は諦めなかった……

みんな……応援してくれなきゃ許さないんだから!!

って…誰に言ってるのかしら……

それでついに……

ついに……!!!

「ヴえ……あ……倒れない……

乗れるのね……」

私はしばらくこいでから足をついた。

「やった……やった〜! はははは……よし……もう一回!」

私は嬉しくて嬉しくて、もう一回乗ってみて……やっぱり乗れて……楽しかった!

「ははは……ナオキがみたらきつと驚くわよ!」

そう思ってたら……

パチパチパチパチ……

「ヴええ!?!」

「真姫凄いやんけ!」

「ナオキ…いつからいたの?」

「ん? ずつとおったで?」

「ヴええ!?!」

「ははは…昨日見たとき乗れそうやったからいつペン隠れて見とこつて思ったら…:…ほらこの通り! さすがは真姫ちゃん!」

なによ…

ずつと見てたの?

「むく……………// //」

「あれ? 真姫…:…さん…:…?」

私は頬を膨らませて少し顔を赤くして目に涙を浮かべて拳を握った。

「むく……………// //」

「え!?! えつと…:…ごめん!」

ナオキは両手を合わせて頭を下げた。

「……………バカ……………」

「ふえ?」

「バカ……いるならいるでいるって言いなさいよ……一緒に練習して欲しかったんだから……」

「……そうか……ごめんな……」

ナオキはそう言って私の頭を撫でてくれた。

「……うん……／＼／＼」

「ははは……さ、行くの明後日やろ？」

「はやく帰ろうか」

「うん」

そして私たちは帰った。

いよいよ凜と花陽と自転車を出掛ける日！

くラブライブ！（真姫・ナオキ）く

私たち3人はまずは公園に集合することにしたの。

「あ、真姫ちゃん！」

「お待たせ〜」

「もう…遅いわよ〜」

「ごめんごめん…」

しばらく待っていると凜と花陽が到着した。

「じゃ、行くにや〜！」

そして私たちは自転車をこいだの。

で……………

「どっくの？」

「うくん……内緒かにや？」

「とりあえずついてきて！」

「ちよつと！」

もう！

ナニソレ！イミワカンナイ！

ま、とりあえずついて行くけど……

くラブライブ！（真姫・凜・花陽）く

「着いたにや！」



どうやら目的地に到着したみたい。  
でも……………

「…………高台…………？」

「うん、そうだよ！」

「なんで高台なのよ？」

「いいから行くにや〜！」

「ちよつと!?!押さないでよ〜！」

そう言つて凜は私の背中を押してきた。

それから何故か高台を登ることになって…………

でも風とか気持ちよかったわね…………

蛇と遭遇したのは別として…………

あのときは3人で猛ダツシユして登ったわね…………

「真姫ちゃん!もうちよつとだよ！」

「はあ…………はあ…………凜…………早いわよ…………」

「さ、真姫ちゃん!頑張つて！」

「花陽まで……もう、何なのよ〜」

そしてついに展望台に到着した。

「はあ……はあ……やつと着いた……」

私は膝に手をついた。

「ふふっ……」

「なんで2人とも笑ってるのよ？」

パンパンパンパンパンパンパン!

「ヴええ!」

「「「「「真姫(真姫ちゃん)！」

誕生日、おめでとう〜!!「「「「「

「え……みんな……う?え……え?」

私は状況が理解出来なかった。

展望台に着いて、顔を上げたらいきなりクラッカーの音がして、そこにはみんながい

て……

みんな……知ってたんだ……

私の誕生日……

「真姫ちゃんびつくりした?」

「え……ええ……これは……?」

「真姫ちゃんの誕生日パーティーだよ！」

私と凜ちゃんです。ここでしようって考えてみんなに協力してもらったんだ！」

「みんな……ってことは……ナオキも!？」

「ああ……凜と花陽に頼まれてな……」

『山まで3人で自転車でいきたいから真姫ちゃんに教えてあげて』 ってな……」

「そう……だったんだ……」

「じゃ、プレゼントタイムと行きますか！」

「まずは穂乃果からだよっ！はいこれ！」

誕生日おなじみの、真姫ちゃんおめでとうほむまんだよっ！」

穂乃果が渡してくれたのは、真ん中に『ま』と書かれたほむまんだったわ。

「ありがとう……穂乃果」

「次はことりだよ〜！」

えっと……私からは……これ！」

「っ……これは……」

「どう?可愛いでしょ?」

「うん……可愛い!」

「ことりが出したのは赤いワンピースだった。

「よかった〜!」

「ことりの手作りなんだよ〜」

「流石ことりね!ありがとう…」

「次はウチやね……」

「真姫ちゃんといえぼトマトということ……」

「熊本親戚からもらったトマトをプレゼントや〜!」

「ほんと!?!」

「あの日本で生産量が1位の熊本県のトマト!?!ありがとう…」

「希からは袋いっぱいに入ったトマトを貰ったわ!」

「さて……次は私ね……」

私からは……このネックレスをプレゼント〜」

「わ〜」

絵里がくれたのは、真ん中のところにトマトのカタチをしたのが付いているネックレス。  
ス。

早速付けてみましょう……

「……どう?」

「ええ……似合ってるわよ!」

「うん……ありがとう……」

「じゃあ……おれと海未からは新曲のプレゼントや!」

「新曲?」

「はい、凜が真姫とのデュエットを歌いたいと言うもので、私とナオキで作りました」

あの凜が!?

意外ね……

「えつと……『Beat in Angel』……か……」

「ああ……いい感じの曲になったと思うで?」

「2人とも、ありがとう……」

「じゃあ…私からは…ケーキのプレゼント!」

「あれ?今回はにこちゃんだけ?」

いつもはことりぐらいいと一緒に作るのに、今回はにこちゃんだけ?

おかしい……

「そうよ!悪い?」

「そ…そんなことないけど……」

「まあ……とりあえず、そこに入ってるわ!」

そう言うところにこちゃんはクーラーボックスを指さして、私に開けるように促す。

「はいはい……」

!?!?……これは……」

そこに入っていたのは……

いちごの代わりにトマトが使われているケーキだったの!

「ふふん……どう?」

「……嬉しい!ありがとう……」

「うん、ちょうどいいぐらいかな？」

「ん？どうしたの花陽？」

「真姫ちゃん、目を隠すから絶対開けちゃダメだよ！」

「わ…わかったわよ……」

そう言って花陽は私の目を隠して、歩き出した。

「もういいよ？」

「ん……わあ〜！」

私が目を開けると、風がサーッと吹いて、そこには……



綺麗な夕焼けがあたりを照らしていた。

「綺麗……………」

「でしょ？」

「この景色が私からのプレゼントだよ」

「花陽……………ありがとう……………」

「そんな夕焼けを、みんなで見た。」

「あの景色は……………一生忘れないわ……………」

それから、料理やさつきもらったケーキを並べた。

「よし、行つくよ〜！」

「せーの！」

「……………ハッピーバースデートゥーユーー！ハッピーバースデートゥーユーー！ハッピーバースデートゥーユーー！」

デーディア真姫く（真姫ちゃん）！

ハッピーバスデートトゥーユー！

おめでとう！」「」「」「」

「ふふっ…ありがとう」

それから食べてたんだけど、あることに気がついたの…：

「あれ？そう言えばもうちよつとで暗くなるわよね？

これからどうするの？」

そう、もうすぐ暗くなる。

そうなれば早めに帰らなければいけない…：

最悪の場合補導されちゃう…：

「え？ここに泊まるんだよ？」

「はあ!？」

凜が当たり前のように言ってきたけど！そんなの初耳なんだけど!?

「いいじゃんか！キャンプみたいだよ！」

「うっ……でも……」

「それに！凜からのプレゼントもまだだしね！」

「え？凜からのプレゼントって、あの曲じゃないの？」

「違うよ〜！」

凜からのプレゼントは……まだあげられないにや！」

「ん？なによそれ……」

「内緒にや〜。ふんふんふん……」

なんだか凜の楽しそうな笑いが気になるわ。

「でも寝るところはどうするの？」

「大丈夫！ちゃんとテントとか持ってきてるで！」

希が親指を立てて言った。

まあ……こういうのも悪くないかしら……

「あ、せっかくだから真姫ちゃんと凜ちゃんと、新曲歌ったら？」

「穂乃果ちゃん、ナイスアイデア！」

真姫ちゃん、準備はいい？」

「……ええ！」

そして私と凛はさつきもらつた新曲『Beat in Angel』を歌つた。

「そうね？微熱の兆候　もつと近くにおいで　I know!!　私が治してあげる」

とつても楽しかったわ……

どんだん日が落ちて行くのも忘れて……

『Oh, baby! Dance dance Angelic! wow……』

パチパチパチパチパチパチパチ……

「ふう………なんとか歌えたわね………」

「うん！真姫ちゃん流石だにや」

「凜もね……」

それからしばらくして、凜がおかしなことを言い出した……

「ねえねえ真姫ちゃん！目を瞑って寝転んで！」

「え？なんでよ？」

「いいからいいから！」

「……もう……わかったわよ…………」

私は不思議に思ってたけど、とりあえず言われるままに寝転んだ。

「よし……真姫ちゃんいいよ！」

「ん……」

「星空にや！」

「わ〜！」

私の目の前に広がったのは……………

綺麗な星空だった……………

「綺麗ね……………とても……………」

「でしょ？これが凜からのプレゼントだにや！」

「これが……………？」

「ふふっ……………ありがとう……………」

それからほかのみんなも寝転んで、みんなで星空を見上げてた。

くラブライブ！（凛・真姫）く

そして、みんなグループでテントに入ったの。

私はにこちゃんと一緒だったんだけど……

私はこっそりとテントを抜け出して……

ナオキと絵里のテントに入った。

幸い、2人とも寝てたわ……

こんなときまでラブラブなんだから……

「……………」

私はそっと、絵里が寝ている反対側に行つて……  
ナオキの隣に寝転んだ。

「……………いいわよね……今日ぐらい……  
／／／／／

私はそのまま眠りについた。



若干ナオキにもたれて……………

朝にみんなに怒られました……………

## 第108話 「葛藤の日々」

前回のラブライブ！

ハテナハートビート  
?↑HEARTBEATしてランナウェイした私たちは穂乃果の家で話をした。

そして翌日の部室では……

「ふざけんじやないわよ!!」

「おれだってわからなかったんだよ!!」

ナオキくんはそのまま部室を出て行って、明後日にみんなで答えを出し合うことになった。

「ナオキ………」

絵里は1人、リビングでナオキの帰りを待っていた。

机に突っ伏し、その机の上にはラップがしてある”ナオキの晩御飯”があった。

「ナオキのこともあるけれど……」

μ sのこれからも決めないといけないのよね……」

時は遡ること数時間前……

アイドル研究部部室……

「ナオキ……」

絵里は目を大きく開き、まだドアの方を見つめていた。

「えりち……」

希は絵里を心配して名前を呼んだ。

「……ごめん……絵里……みんな……」

にこは下を向いて拳を握って言った。

「にこちゃん……」

花陽は心配そうな表情をして言った。

部室の空気はさらに重くなっていた。  
パン！

そんなとき、手を叩いたのは海未だった。

みんなは海未の方を見た。

「ナオキにも言われたでしょう？」

明後日、答えを出さないといけない。

ファイナルライブ  
最後のライブのことを。

μ'sのこれからの歩む道は私たち全員で決めなければならない。

だから今日のところは解散にしましょう。

明日一日でじっくりと考えて、明後日また集まりましょう」

「そうね……じゃ、私は先に帰るわね……また明後日」

絵里は海未の言葉を聞くと早足で部室を出て家に戻った。

そして時は戻る……

「……6月……か……」

6月……

ナオキが明らかにした『最後のライブ』<sup>ファイナルライブ</sup>の日程。

その日は第3回ライブ！決勝の日。

その最後に前大会優勝者のμ、sがライブを披露しなければならないという。

でも絵里・希・にこの3年生は3月をもって”スクールアイドル”ではなくなる。

そのライブはナオキ曰く、あくまで”前大会優勝者μ、s”として出ることになると

いう。

だが、みんなであるとき決めた答えを変えることになる。

第2回<sup>こ</sup>ライブ<sup>大</sup>！<sup>会</sup>が終わったらμ、sはおしまいにする。

10人で活動できるのは3月の終わりまで、日は限られていた。

スクールアイドルμ sとして終える方が良いのか……

もしも、3月で終わって第3回ライブ！の最後に披露しなければ……

スクールの<sup>こ</sup>アイドル<sup>輝</sup>自体が失われてしまうかもしれない。

そんな葛藤を10人は抱えていた。

チュンチュンチュン……

「ん……朝……？」

絵里はそんなことを考えているうちに眠ってしまったようだった。

意識がまだ朦朧もろうろうとしている中、自分に何かがかかっている感触を感じた。

「毛布……？」

絵里には毛布が1枚かけられていた。

「っ……！ナオキ!？」

絵里はそれがナオキがかけてくれたものだど悟り、立ち上がって部屋に走った。

ガチャ!

「ナオキ!」

絵里は笑顔で勢いよくドアを開けた。

だが、そこにナオキの姿はなく悲しい目をした。  
ハンガーにはナオキの制服がかけられていた。

「やっぱり一度帰ってきたのね……」

絵里はぼそつとそう言つて窓の外を見た。

外は雨が降っていた。

く  
ラブライブ…（穂乃果・海未・ことり・花陽・凜・真姫・にこ・希・絵里）  
く

希はその日はバイトで神田明神にいた。

雨が降っていたので事務所の中での作業が多かった。



作業していても、休憩中でも、雨空を見上げて悩んでいた。

にはファーストフード店にいた。

ポテトやハンバーガーを食べていたが、ほとんど外を眺めていた。

ライブのこともあるが、ナオキとのことも気にしていた。

サンングラスをかけて……

ことりは自室で真姫が作っていたという曲にピッタリの衣装をスケッチブックに描いたり、休憩の合間にアメリカで撮った写真を見て笑顔を浮かべていた。

だが、時々は集中できずにため息をついた。

海未と真姫は生徒会の仕事で学校に来ていた。

誰よりも責任感の強いナオキはこの場にすら現れなかった。

2人はフミコに事情を説明し、3人で生徒会の仕事を始めた。

それが終わると海未は弓道場に、真姫は音楽室に向かった。

音楽室では凜と花陽がいた。

1年生3人で決めようと凜が2人に声をかけたのだ。

まずは真姫が作っていた曲を弾いた。

そのメロディーを凜と花陽はゆったりと聴いた。

その後3人は話し合ったのだ。

海未は弓道着を着て弓道場で正座して精神統一をしていた。

聞こえるのは雨が道場の屋根などに当たる音のみ。

海未ははたから見れば冷静のようだが、心の中では葛藤を繰り広げていた。

く  
ラブライブ…（希・にこ・ことり・海未・真姫・凜・花陽）  
く

「はあ……どうすればいいんだろう……」

雨の中、穂乃果は悩んでいた。

雪穂と一緒に来た亜里沙に「楽しくないの?」と言われたこと、理事長に「続けて欲しい」と言われたこと、そしてナオキから告げられた最後のライブファイナルライブのことを考えていた。

さらに昨日……

雪穂と亜里沙が穂乃果の部屋から出た後、穂乃果の元にある人物から電話がかかってきていた。

その人物とは……

A—RISEのリーダー綺羅ツバサ。

穂乃果はツバサに呼び出されてUTXまで走った。

そしてリムジンの中でA—RISEの3人にアメリカライブのことを言われたが、「次のライブはいつするの?」とも言われた。

穂乃果は事情を説明すると、ツバサは穂乃果に名刺を渡した。

なんと、A—R—R—I—S—Eは4月から『ユニバーサル』という大手アイドル事務所にプロデュースしてもらおうようだ。

つまりA—R—R—I—S—Eはまだ続く。

だから<sup>ライバル</sup>μ'sにも続けて欲しいのだ。

「あゝ!!」

もう意味わかんないよゝ!!」

穂乃果は雨の音に負けないほど大きな声でしゃがんで叫んだ。

そして大きなため息をついた。

「……And when two lovers woo……」

そのとき聞こえてきたのは聞いたことのある歌声だった。

「え……この声……!?!」

穂乃果はその声のする方に歩いて行った。

そこで歌っていたのはやはりアメリカで出会った穂稀だった。

「……As time goes by

As time goes by」

歌を歌い終わると穂稀は穂乃果の方を向いた。

「また会ったわね」

穂稀は穂乃果の方を見てウインクして言った。

「なんで！なんで日本こっちにいるんですか!？」

ああ〜！このマイク家にもあります！

ずっと渡したかったんですよ！

あのときも急にいなくなっただけ!!」

穂乃果は穂稀に詰め寄って言った。

「あはははは……ごめん……」

穂稀は苦笑いした。

「まだ話したいこといっぱいあるんです！マイクも返したいですし！

家が近くなので来てください!!」

穂乃果は穂稀の手を引っ張って走った。

「ああ〜ちよつと待って〜！

あ、マイクそのままだし〜!!」

穂稀はマイクなどを片付けて穂乃果とともに穂むらに向かった。

「あ、ここです。中へどうぞ」

穂むらの前に着くと穂乃果は言った。

「いいよ……」で。

私、用事思い出したから帰るわね」

穂稀は前に着くと来た方を向いて歩き出した。

「ええ!？」

折角再会できたのに……」

穂乃果は残念そうな表情をして言った。

「………ねえ……穂乃果ちゃん……」

「………はい……」

すると穂稀は立ち止まって言った。

”答え”はみつかった?」

「えっ……!？」

穂稀はアメリカで穂乃果に言ったことの答えを聞いた。

「穂乃果ちゃんはなんで歌ってきたの？」

「それは、歌うことが好きだからです！」

「じゃあ……あなたたち”はどうありたいの？」

「そ……それは……」

穂乃果が答えに迷うと穂稀はふつと笑った。

「……飛べるよ……」

「飛べる……？」

穂乃果は穂稀の言っていることがわからなかった。

「目を瞑ってみて……そうすればわかるから……」

「目を……？」

穂乃果は穂稀に言われた通り目を瞑った。

「ラランラーン ラランラーン

ララララララララー

ララララララララララララララ

ララーラーラーラー

ララランラーン ララランラーン

ラララララララララー

ララーラーラーラー ラーラーラーララララ ラーラララー

すると穂稀は口くさんだ。

「え……さっきのは……い！」

穂乃果はこの歌に聞き覚えがあった。

それに気づいて目を開けて穂稀に聞こうとした。

そのとき急に強い風が吹いた。

その風は卒業式の日に感じた”あの風”と同じ感じがした。

穂乃果が強い風に怯んで、おさまったところで目を開けた。

すると穂乃果は風が気持ちいい程度に吹き花びらが辺りを舞っている花畑の一本道



に立っていた。

「( )は……?」

穂乃果は不思議に思い辺りを見回した。

一本道の先は坂になっており、さらにその先には大きな水たまり……というより大きな湖があった。

その湖の前には穂稀が立っていた。

「この湖は今、穂乃果ちゃん自身が抱えている悩みだよ」

穂稀は湖を見て言った。

「私に抱えている……悩み……」

その湖はとても大きかった。

それだけ穂乃果の抱えている悩みは大きいということだった。

「飛べるよー!」

「つ……!? また……」

「飛べる! いつだって飛べる! あのところ」のように!!」

「あのところ……?」

すると穂乃果の頭の中に幼いころの光景が蘇ってきた。

あのところ……穂乃果がナオキと出会った時、聞こえてきた歌に力をもらい水たまりを

飛び越えたときのことが……

そして穂乃果はゆつくりと足を進め、次第にそのスピードを上げていった。やがて先程まで向かい風だった風は追い風となり、穂乃果の背中を押した。

まるで答えの決まっていっている穂乃果を「明日にススメ」と応援しているかのよう

に。  
「たあああああああ!!」

そして穂乃果は坂を駆け下りて飛んだ。

そんな穂乃果を穂稀は見送った。

だがあと少しのところで穂乃果はどんどん落ち始めた。

それは”最後の悩み”……最後のファイナルライヴのこと。

「あと少し！答えはわかっているはず！」

”穂乃果——!!”

穂乃果はその穂稀の声にさらに背中を押された。

………答えは決まった。

そのとき風が穂乃果の背中を押した。  
そして湖の先の地面に穂乃果は足をつけた。

「ん……？」

穂乃果は何故か家のベッドに寝ていた。

「あれ……なんで……？夢……？」

穂乃果は穂稀のマイクを置いた所を見るとそこにはまだマイクがあった。

そして穂乃果はベッドから出て立ち上がり、目を瞑ってそのまま天井の方を向いた。

穂乃果は自ら出した答えを呟いた。

「限られた時間の中で精一杯輝こうとする、スクールアイドルが好き。」

μ<sup>私たち</sup> sはそんなスクールアイドルでありたい……

穂稀さん……みつかつたよ……” 答え” …！」

昨日からずっとμ sの曲を流していたのだろうか、開きっぱなしのパソコンの画面

には『ススメ↓トウモロウ』のPVが終わったところが映っていた。

次回へ続く……

## 第109話 「ナオキの葛藤」

「絵里……今日の晩飯はいらない………」

また……” 明後日” ……」

「っ……！ナオキそれはどう言う……!!」

ガタン…

ナオキは絵里の言葉を待たずしてドアを閉めた。

ナオキ心はギュツと締め付けられているようだった。

「くそっ……なんで……おれはっ……！」

ナオキはその場にいることが辛くなり、走って学校を去った。

く  
ラブライブ…（ナオキ）  
く

「はあ…結構暗くなったな…」

ナオキは一人、星空を見上げていた。

スマホは電源を切っている。

ナオキもこれからどうするべきか悩んでいた。

すると……

「ナオキくん……?」

「ん……? ツバサさん……」

ツバサはナオキを見かけて声をかけた。

「どうしたの? こんなところで」

「いや……ちよつと……」



ナオキは無理矢理笑顔を作った。

「ま、ここで話すのもなんだしリムジンに乗りましょう」

ツバサはそこに止められていたリムジンを指さして言った。

「え……でも……」

「……………悩んでるんでしょう？ 4 sのこと……」

「つ……!?なんでそれを……」

「さつき穂乃果さんと話したのよ。」

聞いたわよ……ナオキくんのこともね」

「……………わかりました……」

ナオキは言われた通りにリムジンに乗り込んだ。

そこには英玲奈とあんじゅもいて、リムジンは走り出した。

「……………というわけでして……」

ナオキは部屋であったことを話した。

「なるほどね……ナオキくんはどう思ってるの？」

閉会ライブはした方がいいと思う？」

「…はい……」

ですが、それをしてしまえばあのとときの決断を変えてしまうことになる……

それに……μ sをこれからも続けて欲しいと言われたら……」

「やっぱり迷っちゃおう？」

あんじゅは脚を組んで髪をくるくるして言った。

「はい……やめてもいいんです……」

それはみんなで決めたことですから……」

「フアンの期待に応えたいか？」

英玲奈は言った。

「はい……でも……自分たちで決めた答えを変えていいのか……」

「閉会ライブはどうするの？」

「したいです……」

でも……みんなが……」

「ねえ……私たちの素直な気持ちを言ってもいい？」

「ツバサさんたちの気持ち……？」

ナオキが聞き返すとツバサは名刺を渡した。

「これは……『ユニバーサル』!？」

「これって……!？」

「ええ…A—R私I—SたEちは、続けることにしたの。ユニバーサル事務所のアイドルとしてね」

「そうなんです…」

「だからね……」

あなたたち

「μsにも続けて欲しいの」

「っ……それは……」

ナオキは3人から顔を逸らした。

「確かにこれを決めるのは君たちだ」

「だけど私たちはあなたたちにも続けて欲しい」

「同じライブライブ！を目指した…ライバルとして…」

ナオキはその言葉を聞いて拳を強く握った。

「さ、着いたわよ」

リムジンが止まるとツバサは言った。

「着いた……?」

ナオキはどこに着いたのかわからなかった。

「どこかは降りてみればわかるわよ」

「は…はい…」

ナオキは不思議に思ったが言われた通り降りた。

そこは…

「え…なんで…?」

「じゃあねナオキくん…考えておいて」

「ちよっ…ツバサさん!」

リムジンはナオキを降ろすと走り去った。

「はあ…マジか…」

降ろされたのはナオキの家のあるマンションだった。

「…行くか…」

ナオキは頭を強くかいてマンションに入った。

ガチャ…

「鍵閉まってねーし……」

ナオキはドアを開けて中に入った。

そしてリビングの明かりがついているのに気がついてリビングに向かった。

ガチャ…

ナオキはゆつくりとドアを開けた。

「すう…すう……」

そこには机に突っ伏して寝ている絵里がいた。

「……ごめんな…絵里……」

ナオキは唇を噛み締めてからそう言うのと絵里にそつと毛布をかけ、頬にキスをした。

そして部屋に行つて制服から私服に着替えてまた外に出た。

鍵を閉めたのを確認すると歩き始めた。

く ラブライブ… (ナオキ) く

ナオキはどのくらい歩いたか、どれだけ時間が経ったのかわからず、ただただ夜の秋葉を歩き続けた。

そして万世橋からμ sのポスターをぼーっと眺めた。

「はあ…期待されてるのか…おれたち…」

一体どうすべきか……

μ sを続けるか続けないか……

そして閉会ライブをするかどうか……

「閉会ライブをしなかったら……？」

きつと……ドーム大会も……

いや……スクールアイドルさえも……」

そのときだった……

グー……

「お腹すいた……」

ナオキはそう呟いて近くのコンビニに向かった。

ナオキはジュースと水とお菓子と塩おにぎりを買ってコンビニを出た。

「はむっ……」

ナオキはコンビニの外で塩おにぎりを食べていた。

食べながらナオキの頭の中に絵里と亜里沙と3人で囲んでいる光景が浮かんだ。

「絵里……」

ナオキさボソツと愛する人の名を呼んだ。

そんなとき……



「おや？ 兄ちゃん久しぶりやな〜」

「え…あ、おっちゃん!？」

沖縄で石をくれ、アメリカで再会した黒いフードをした占い師の男がいた。

「やあ! こんな夜遅くに何してるんだい？」

「いや…：ちよつと…：おっちゃんこそ…：関西に住んでるんじや…？」

「ああ…：今はこつちに住んでるんや。

まあ…：こゝで話すのもなんやしおれんちまで来るか？」

「え…：奥さんがいるんじや…？」

「いいや…：今日は出かけててな。

1人じゃ寂しかったんや」

「おっちゃんも意外に寂しがり屋なんですね」

「兄ちゃんもな」

「はははははは!!」

「まあ…：行こうや」

「はい!」

ナオキはその男の家に向かった。

「そーいや兄ちゃんの名前聞いてないな……なんていうんや？」

「あ、香川ナオキつていいいます。おっちゃんは？」

「おれは忍川おしかわナナつちゆうんや」

「ナナ……ぷくつ……」

「あ、笑つたな香川くん！」

「だつて……ナナつて……はははは」

「はいはい女みたいっていいたいんやろ！わかつとるわかつとる!!」

忍川はポケットに手を入れて言った。

「そーいえば、忍川さんつてなんでフードを被つてるんですか？」

ナオキは前々から気になっていたフードのことを聞いた。

「いやくちよつと見た目が悪いからな」

「そーなんですな」

そんなふうなたわいもない会話をしながら2人は歩いていった。

「さ、あれがおれんちや」

忍川はある一軒家を指さして言った。

「へ〜立派な家ですな〜」

「せやろ？さ、入った入った！」

忍川はナオキに入るように促した。

「わかつてますって……」

ナオキは押されながらも忍川の家に入った。

く  
ラブライブ！（ナオキ・忍川）  
く

「コーラしかないけどええか？」

「はい、大好きなので！」

「そうか…そりゃあよかつたわ」

忍川はケラケラと笑って言った。

「てゆうか、まだフード脱がないんですか？」

「ああ…もうちよいで脱ぐから」

忍川はコップと大きなペットボトルを持ってきながら言った。

そして忍川はフード脱いだ。

「ふう…久しぶりに脱いだわ」

フードを脱いだ忍川の姿はボサボサした金髪で顎の金色の髭が特徴的でアロハシャツは着ているが肌蹴っていて、十字架を首から吊り下げた奇妙な風体をした中年のおっさんだった。

「なんかおつちゃんかフード被ってるのがわかつた気がする」

「やろ？」

忍川はフードを椅子にかけて脚を組んで座った。

それからしばらく沈黙が続いた。

ナオキは心の中で葛藤を繰り広げていた。

忍川はそんなナオキを不思議そうに睨んでいた。

「なあ……香川くん……なにを悩んでいるんだい？」

「っ……!？」

ナオキはなぜ分かったのかと目を大きく開けて忍川を見た。

「おっと凶星かい？」

なら話して貰わんとな……」

忍川は机に肘をつき、手のひらに顎を置いて言った。

「っ……忍川さんには関係ないですよ……!」

「そうかい……そういや香川くんの喋り方変わったなく？」

「え？」

「なんや自覚ないんか？」

口調から関西弁なくなつとるで？」

「あ……そういえば……」

「不思議なこともあるもんやなく？」

「そうですね……」

「で、なにを悩んでるんや？おっちゃんに言うてみ？」

ナオキは迷った。

確かに忍川には関係ない……

だがナオキは不思議なことに”話したい”という気持ちになっていた。

「実は……グループを続けるかどうかで迷っているんです。

3年生は3月をもってスクールアイドルでいられません。

だからグループはおしまいにしようかと決めてたんです。

でもアメリカライブもあつて、そして今回のこの人気……もし活動をやめたらファン  
のみんなの期待に裏切ることになるのかもしれない。

それにまだ6月に大会の閉会ライブがあるんです。そのことでメンバーと衝突して  
しまつて……

大好きな人にも……ひどいことを……言つて……愛する人にもつ……ひどいこと  
をつ……言つてつ……!」

「……そうか……辛いんやろ？」

泣いてもええんや……どうせこの家には香川くんとおれしかおらんから……」

忍川はナオキの頭に手を置いて言つた。

「うっ……うう……くっ……」

ナオキは腕で涙を拭いながら泣いた。

くラブライブう！（ナオキ）く

「…なんかすみません……」

「ええってええって！男でも泣きたい時はある！

…で、香川くんはどうしたいんや？」

「どうしたいって……」

「ま、ちよつと移動しようか」

「移動？」

「せや…ついてき〜」

忍川はそう言うのと歩き出した。

ナオキはそれを追った。

「で、どこ行くんですか？」

階段を登りながらナオキは忍川を見上げて言った。

「それは着いてのお楽しみやで」

「は〜い……」

「(こ)や……」

「3階…ですか？」

「(ご)名答〜！では……」

ガチャ…

忍川はドアを開けた。



「っ………！これは………！」

ナオキの目の前に広がったのは綺麗な星空。

3階は屋上で、とても広かった。

「どうや？ 凄いやろ？」

「ハラショー！」

ナオキは屋上で手を広げて言った。

「ははは………ここで寝たら案外整理が着くかもな………そこにテントしまつてあるから手  
伝つてーな」

「わかりました！」

忍川とナオキはテントを出した。

「なんだかキャンプみたいですね」

「せやろ？ 時々こうやってみると楽しいんや」

2人は星空を見上げて言った。

「さ、やっぱり寝るのが一番や。夜も遅いし寝ようか」

「そうですね」

2人はテントに入って目を瞑った。

「すう……すう……」

「忍川さん……寝るの早いな」

ナオキは小声で言った。

ナオキはまだ寝付けずに、これからのことを決めていた。

あのときの決断を変えてしまっていたのか……

でも閉会ライブはしなくちゃいけない……

でもみんなはどう思っているのか……

自分は……

スクールアイドルのために閉会ライブをしたい……

「どうしたら……」

ナオキは再び目を瞑った……



「あ、忍川さん…おはようございます」

「おはようさん…それより、雨降ってきたぞ」

「雨!？」

ああ…その音だったんですね」

さっきの音の正体は雨だった。

忍川は外を見た。

「こりやあやみそうにないな…」

「…どうします?」

ナオキがそう聞いて忍川はずっと外を見ていた。

「……忍川…さん…?」

「なあ…香川くん……」

「…はい……」

「……この雨空はね…君の心の中みたいだよ」

「……心の…中…?」

ナオキは忍川の言葉を不思議に思っていた。

「わからんかい?」

すると忍川はテントの外に出た。

「忍川さん!？」

「さあ! スツキリしようや…」

パチン!

忍川は指を鳴らした。

すると急に強い風が吹き出した。

その風は卒業式の日感じた”あの風”と同じ感じがした。  
ナオキはその風に怯んで目を瞑った。

ナオキが目を開けるとそこは真っ黒な空間で、ナオキは白い円形のところに立っていた。

「……は……?」

「ここは香川くんの心の中やよ」

隣にいた忍川は言った。

「……が……?」

「そう……そして真っ黒なのは君が迷っているから」

「っ……!」

「いいかい? 1回しか言わへんよ?

香川くんが”答え”を見つけていくと前に進める」

すると忍川は前へと進んで行った。

そしてあるところに止まると、その横に先の白い出口が現れた。

「さあ！決断のときやよ！」

香川くん……いや……”ナオキ”！」

「っ……！」

わかりました……！」

「いい目だね……記憶と心を接続……」

忍川がそう言うのと黒い空間にビジョンがいくつも現れた。

今までの思い出のビジョン……

大切な人たちとの思い出……

「みんなっ……！」

そのビジョンを観て、ナオキの答えはどんどん固まっていった。

そして一歩、また一歩と歩み始めた。

μ'sはスクールアイドルだからこそ……

限られた時間の中で輝けるからこそこんないい思い出ができた。

スクールアイドルという存在が……

その輝きが自分の運命を変えてくれた。

この輝きを失わないためには……

閉会ライブはやるべきである。

”限られた時間の中で精一杯輝こうとするスクールアイドル”をみんなに知ってもらおう！

そして最高のカタチで、sを終わらせる。

「この限られた時間の最後の時間……!!!」

そして出口前に近づくとどれよりも大きなビジョンが現れた。

それは……



愛する人と過ごした時間……

「絵里……絵里っ!!」

そしてナオキは出口の手前の白いゾーンに止まった。

「おめでどう…… 香川くん」……

「この先が、”君の歩むべき道”や……」

「おれの……歩むべき道……」

ナオキはジツとその出口の先を見つめた。

真っ白でなにかがあるかわからない。

「さあ…これが”本当の”お別れだ……」

”もう”おれを頼るなよ？」

「なんだよそれ……」

”あのとき”だってもう最後だとか言ってたくせに」

「あははは…いいじゃんいいじゃん」

「ていうかいつまで”忍川さん”のまま”でいるんだよ……」

「いやあく気に入ってたんやけどな」

忍川は頭をかきながら言った。

すると忍川の体が光出した。

ナオキは腕で目の前を防いだ。

ナオキが目を開けるとそこには……

『ふう……やっと戻れた……』

ナオキに瓜二つの男が頭をかいていた。

「疲れるんだつたら早く戻つたらよかつたじゃんか……」おれ」

『はははは……すまん……』おれ』

「なんで”忍川ナナ”になつて現れたんだ？しかも何回も……」

『ああ……まあ、なんだ……』 未来のおれの記憶を持つて現れた”つて言えばわかるか？』

「未来の……記憶……？」

『ああ……その記憶でお前と瓜二つの姿で現れたら面白くないからな』

「待てよ……未来の記憶つてことは……！」

『はははつ……どうか？』

飯にも”忍川ナナ”みたいな姿にはならへんよ……』

「よかつた……」

『なんだよそれ……結構気に入つてたんやけど……』

「そうなんだ……」

『そんなことより早く行けよ……』

絵里が待つてゐるぞ……』

「……ああ！」

そしてナオキは最後の一步を踏み出した。

『「ありがとう……そして……さようなら……」』

「ナオキ……」

絵里はまたリビングの机に突っ伏していた。  
机にはまだナオキの晩御飯があった。

「早く帰ってきて……ナオキ……」

絵里は目を震わせてそう言って目を閉じた。



机にはナオキのために絵里が作っていた晩御飯があり……

絵里が突つ伏して眠っていた……

「っ……絵里……」

ナオキは小さな声で絵里の名前を呼んだ。

ナオキは絵里を起こさないようにそつと隣の椅子に座った。

「絵里……ごめん……」

ナオキは絵里を見て言った。

「ん…………あれ…………？」

「あ…………」

絵里が目を覚ました。

ナオキは絵里と目が合つてドキツとした。

「ナオ…………キ…………？」

「ああ…………ただいま…………」

「あつ…………ナオキ!!」

「おっと…………」

絵里はナオキを見ると抱きついた。

「ナオキ！ナオキ〜！どこ行つてたのよ!?!心配したんだから!!バカ!!」

絵里はナオキの胸で涙を流しながら言った。

「ごめん…………また心配かけちゃったな…………」

ナオキは優しく絵里の頭を撫でた。

「ナオキ…………」

「ん?」

「…………お腹…………すいてない？」

絵里は目をウルウルさせてナオキを見上げて言った。

「ああ…すいた…………絵里のご飯が食べたい」

ナオキはいつもの笑顔で言った。

「うん！ならすぐに温めるわね！」

絵里はパーっと笑顔になって、机の上にあつた料理を温め始めた。

嬉しそうに温め始める絵里を見て、ナオキは笑みを浮かべた。

「はい、どうぞ」

絵里は温め終わった料理を前に出した。

「ありがとうございます。いただきます！」

ナオキは箸を持って食べ始めた。

美味しそうに食べるナオキを絵里は嬉しそうに見ていた。

「そう言えばナオキ」



「どくつ……ん？」

「……ナオキは答えは決まったの？」

絵里は真剣な表情で言った。

「ああ……決まったよ。」全部「な」

「そう……」

「絵里はどうなんだ？」

「私も決まったわよ」

「そうか……」

ナオキは絵里の頭に手を置いた。

絵里はナオキにもたれた。

ナオキはそんな絵里をギュツと引き寄せた。

「あ、飯まだ残ってたんだっ……はむっ……」

「もう……」

「ふう…ごちそうさま」

「お粗末さま」

「やっぱり絵里の手料理は美味しいよ」

「ふふっ…ありがとう／＼／＼」

「じゃ、食器洗ってくるわ」

「え、いいわよ。私が洗うから…」

絵里は焦ったように言った。

「いいや、やらせてくれ…迷惑かけたんだから」

「それなら私も手伝うわ」

「ああ…わかった」

そしてナオキが食器を洗い、絵里が拭くことにした。

「…よし、これでラスト」

「はい」

絵里は最後のひとつを拭いた。

「よし、これで全部ね……」

「ああ……」

ナオキは絵里のエプロン姿を見た。

「んもう……なによろジロジロ見てろ／＼／＼」

「いや、絵里のエプロン姿はやっぱりいいな／＼って」

「もう……／＼／＼」

絵里は嬉しそうに顔を赤くして笑った。

「あ、でももうこんな時間か……」

ナオキは時計を見て言った。

「そうね……明日に備えて寝ましようか？」

「そうだな……」

そして2人は部屋に向かった。

ガチャ……

「あ、お義兄ちゃん！」

「お、亜里沙ちゃん…：ただいま」

ナオキと絵里が部屋に向かっていると亜里沙がドアを開けた。

「おかえり！遅かったんだね？」

「ああ…：ちよつとな」

「亜里沙も早く寝なさいよ」

「は…い」

亜里沙はそう言うのとトイレに向かった。

ナオキと絵里は部屋に向かった。

くラブライブ！（ナオキ・絵里）く

「ねえ……ナオキ……」

「ん？」

絵里はベッドに入ろうとしたナオキの袖を引つ張つて言った。

「その……寂しかったんだからね……」

「絵里……」

「だから……」

絵里はナオキに抱きついた。

「っ……絵里……!」

「ナオキ……」

絵里はナオキを目をウルウルさせて上目遣いで言った。

「絵里……」

ナオキはそんな絵里をお姫様抱っこしてベッドに優しく倒した。

「ナオキ……お願い……」

「……わかった……おれも絵里が欲しかった……」

「私もよ……ナオキ……」

そして2人は唇を合わせた。

2人の夜は長かった……

次回へ続く……

# 第110話 「未来のカタチ」Future style

」

前回のラブライブ！

おれは沖縄で出会ったおっちゃんこと忍川さんと再会して忍川さんの家に行ったんだ。

そして次の日の朝、おれも決断の時が来た。

それから忍川さんがもう1人のおれだと発覚して気づけば家に。

その夜は絵里と長い夜を過ごした。

そしてついに、全員で決断する時がきた。

チュンチュンチュン……

「ん……朝か……」

ナオキは目を覚ました。

そして隣に絵里がいないことに気づいた。

「リビングかな……？」

ナオキは服を着てリビングに向かった。

ガチャ…

「あ、おはようナオキ」

「おはよう、絵里」

ナオキがリビングに入ると絵里が制服で朝御飯を作っていた。

「もうちよつとでできるから待っててね」

「はいよ〜」

ナオキは返事をするや椅子に座った。

「はむっ……みんなと会うのは久しぶりだな…」

「そうね……はむっ……」



2人は朝ごはんを食べながら話した。

くラブライブ！（ナオキ・絵里）く

「うわあくなんか緊張するな……」

昼頃、ナオキは屋上のドアの前で止まっていた。

「大丈夫よ……ちゃんと謝ればいいことよ」

「……ああ……」

ナオキは唾を飲み込んで屋上のドアを開けた。

ガチャ……

ナオキが屋上に出てくるとみんながナオキの方を向いた。

「えつと……」

ナオキは話しくそうに顔を逸らした。

そんなとき、ナオキの背中にある感触が……

「つ……絵里……」

絵里はナオキの背中を押した。

「ありがとう……」

ナオキは小さくそう言った。

そして決意したようにみんなの方を見た。

ナオキは大きく息を吸って言った。

「みんな……ごめん!!」

おれ……「ちよつと待ちなさいよ!」

……ここに……」

ナオキが頭を下げて謝罪を述べようとするとにこがそれを遮った。

「なんで謝るのよ……」

どうせあんたみんなの気持ち考えれてなかったーとか言うつもりでしょう?」

「うっ……」

「やっぱり凶星ね……」

はあ……いい？あんたは堂々と自分の意見を言っただけ。そのお陰で私たちはもう1

度” μ s ”と向き合うことが出来た」

「そうです。この問題はいずれぶつかってしまいましたし」

「アメリカライブが決まって考えないようにしてただけ」

「またライブをしたい」

「凜も……凜たちもそう思うから……」

「μ s は3年生が卒業したら終わりってみんなで決めた」

「でも支えてくれたナオキくんがそう言うなら」

「1回ぐらいいいかならうって！」

ここに続いて海未・ことり・花陽・凜・真姫・希・穂乃果が言った。

「だから”特別に”やってあげるわ……」

『第3回ラブライブ！閉会ライブ』というカタチで」

「絵里……みんな……！」

9人はナオキに微笑んで言った。

ナオキはみんなの言葉に目を震わした。

「でも、条件があるの！」

「条件………?」

絵里がそう言うのとナオキは目を細めた。

「ナオキには、みんなとデートしてもらおうわ」

「………はい?」

みんなナオキを見て微笑む。

「今日の朝、みんなで話したのよ。」

条件付きで3月以降に一度だけライブをしようって。

ナオキへのお礼も兼ねてね」

絵里はナオキを下からのぞき込んで言った。

「……ほんとうに……？」

「「「「「うん！（はい！）」」」」」」

みんながそう言うのとナオキはパーと笑顔になった。

「ありがとう……みんな！」

「でも私たちが終わっちゃったら”スクールアイドル”から注目が離れちゃうかも……」

「そうだね……」

「閉会ライブをするしない以前にまずラブライブ！がドーム開催されるかどうか問題ね……」

花陽と凜とにこが心配そうに言った。

「ライブをすればいいだろ？」

「「「「「ライブ!？」」」」」」

ナオキがそう言うのと海未・ことり・凜・花陽・真姫・にこ・希・絵里が驚きの声をあげた。

「ああ…… スクールアイドルの素晴らしさを伝えるライブ”をしたらみんなわかってくれるんじゃないか？」

「スクールアイドルの素晴らしさを伝えるライブ……！」

絵里は目を輝かせて言った。

「μ s や A—R I S E だけじゃない。スクールアイドルのみんなが素晴らしいつて伝えればいいんだ！」

ナオキは腕を大きく広げて言った。

「今……」

” スクールアイドルの素晴らしさを伝える” 『最高のライブ』の開催を宣言する!!」

「でもどうやって……？」

こことは言った。

「スクールアイドルの素晴らしさを伝えるのなら……」 スクールアイドルみんなで”ライブをすればいいんだよ」

「「「「「え〜！」「「「「「」」」」」」」

ナオキの言葉に穂乃果以外のみんなが驚いた。

「うん！穂乃果も同じこと考えてた！」

それならみんなで同じ曲を一緒に歌おうよ！」

「流石穂乃果、その発想はなかった！」

ナオキは穂乃果に向けて親指を立てて言った。

「でもそうなるとしたら時間がないわよ!？」

「そうよ!どれだけ大変だと思ってるのよ!？」

「スクールアイドルのみんなと一緒にライブ…!それが実現したらこれはすごいことになりますよ!」

「でも、面白そう!」

「そうですね!とてもワクワクします!」

にこ・真姫・花陽・ことり・海未は言った。

「よし、じゃあそのライブのために動き出そう!おれは運営委員会の方に行ってくるから……穂乃果!」

「えっ!？」

「お前はツバサさんをお願いしてきてくれるか?」

「ツバサさんに!？」

「ああ…スクールアイドルの素晴らしさを伝えるにはμ's、そしてA—RISEの力が必要不可欠だからな」

「うん、わかった!」

「よし、じゃあ行くか！」

ナオキは運営委員会本部に向かおうとした。

「ちよつと待って」

「おつと…どうした？」

絵里がそんなナオキを腕を持って止めた。

「ちゃんと”これ”……やらないと」

そう言うのと絵里はピースをした。みんなも同じようにナオキを見てピースをした。

「ふっ…そうだなー」

ナオキもピースをして、全員でそれを合わせた。

やるのは…いつもの……

「いちー！」

「にー！」

「さんー！」

「よんー！」

「ごー！」

「ろくー！」

「ななー！」





「で、話ってなんだ？」

「ライブの話……ちゃんと決めてきた」

ナオキは真剣な表情で言った。

晋三も真剣な表情になった。

「……で、閉会ライブはしてくれるのか？」

「うん……するよ……でも、1つ条件を出していい？」

「ああ……なんだ？」

「スクールアイドルの素晴らしさを伝えるライブをしたいんだ」

「おお……続けてくれ」

「だからその開催に協力して欲しい……お願いします！」

ナオキは頭を下げた。

「協力……か……」

晋三はあごひげを触りながら言った。

「協力してもらおう代わりにちゃんと閉会ライブをする……悪くないと思うけど？」

「う……ん……」

晋三は腕を組んで目を瞑って考えた。

そして目を開けるとナオキの目を真っ直ぐ見た。

「わかった、ラブライブ！運営委員会はμ's 企画のスクールアイドルの素晴らしさを伝えるライブに協力する」

「ありがとう、おじさん！」

「解散したのにライブをしてもらうんだ。これぐらいしないとな」

晋三はソファーにもたれかかりながら言った。

「じゃ、おれは準備があるから…」

「ああ。ライブをする場所はこっちで確保しておくから安心なさい」

「ありがとう！それじゃ！」

ナオキは走り去って行った。

「さて、動いていこうか…」

晋三は立ち上がって準備を始めた。

くラブライブ！（ナオキ）く

音ノ木坂学院…

アイドル研究部部室…

「ただいま〜」

「「「「「「おかえり〜」」」」」」」

ナオキが部室に入るとみんながナオキの方を見て言った。

「おつ、穂乃果！ツバサさんには伝えてきたのか？」

「うん！それでね、話したいことがあるんだ！」

「ん…どうした？」

「あのね！ツバサさんが参加する条件としてね、私たちにみんなで歌う曲を作って欲しいって頼まれたの！」

穂乃果が嬉しそうに言った。

「お〜！ハラシヨ〜！」

「ふふっ…ナオキくんもえりちと同じこと言うな〜」

「ちよつと希く／＼／」

希が絵里を見ながらそう言うのと絵里は顔を赤くした。

「はははっ…それで花陽、全国のスクールアイドルの反応はどうだ？」

ナオキはパソコンに向かって全国スクールアイドルに呼びかけをしている花陽に言った。

「うん、何組かは参加するって言ってくれてるけど…もうちよつと話を聞いてから決めたいって言ってる人もいるんだ…」

「う〜ん…そうだよな〜」

ナオキは腕を組んで考え込んだ。

「やはりちやんと口で伝えた方がいいかもしれないね…」

「口でって言ってもどうするの？電話とか？」

海未と真姫は言った。

「会いに行くんだよ！」

すると穂乃果はワクワクしたように言った。

「そう、会いに行くのが一番。

「……………つてヴええ〜!？」

「「「「「会いに!?」」」」」」

穂乃果の言葉にみんなは驚いた。

「うん! 実際に会って話した方がきつと気持ち伝わるよ!」

「でも電車代はどうするんだ? みんな印税とかアメリカに行く時にほとんど使っただろ?」

ナオキは言った。

「大丈夫だよ!」

「はあ?」

「私たちには真姫ちゃんがいるからね! だから真姫ちゃん……!」

「ヴええ!」

「電車賃、貸して!」

「「「「「なるほど!」」」」」」

「なんでみんなこっち見るのよ〜!」

穂乃果がそう言うときみんなが真姫の方を見た。

「よし、じゃあ穂乃果と絵里と真姫・海未と希と凜・ことりとこと花陽の3グループに別れて詳しく聞きたいって言ってくれてるスクールアイドルのところに行ってくれ!」

おれは都外のスクールアイドルに電話したりしてみる!」

「「「「「「はいー」「」「」「」」」」」」

「よっしや！行こうか!!」

ナオキは勢いよく立ち上がった。

するとその衝撃で椅子が畳まりナオキの膝に当たった。

「うおっ!?!」

そしてナオキは椅子に膝カックンされた。

ゴツン!

さらにそれでナオキは机に顎をうった。

その衝撃でナオキは後ろに倒れた……

「倒れるだけでワンダーコアー!!」

ナオキは腹筋をして起き上がった。

「!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

9人は驚きの声をあげた。

「よし、じゃあ行こう！みんなが待ってる！」

穂乃果が手を出してそう言うのとことりと海未と一緒に走り出した。

「聞いてもらいたいんだ　ずっと思い続けて　とにかく動き出してみたら」

「あたらしくしいく日々のなかで」

「少しずつ生まれたみらい」

なぜか2年生組は中庭、そしてグラウンドで踊り出した。

皆さんご存知だと思うが、これはおかしなところがある。

それはこの曲『Future style』はナオキが2年生組のために作っていた



曲。

もちろんナオキ以外は存在すら知らない。

『声が聞こえる』

「はっ!? ワンダーコア!!」

ナオキはそう言つてガバツと起きた。

ナオキはいつの間にか机に突つ伏していた。

「あれ……みんなは……？」

ナオキは周りにみんながいないことに気づく。

そして机の上にメモが置かれてあることに気が付く。

ナオキはそれを手に取った。

『ナオキへ』

ナオキをとりあえず座らしておいたからお留守番よろしくね♡

あとちゃんとお仕事お願いね♡

絵里より』

「よし、頑張るか！」

ナオキはパソコンに向かいメールなどを確認し、電話を手に持ち作業に入った。

次回へ続く……

Another way (お気に入り2000人突破記念)  
 「スクールアイドル、プレイボール！」

『さあ、始めました！スクールアイドル、夢の野球対決!!』

それではまずは後攻のアイドルから紹介してもらいましょう！』

ハイテンションなアナウンサーリコはそう言うマウンドから走り去った。

『まずは、後攻のMusのスターティングメンバーを発表致します。

1 番ピッチャー高坂…高坂穂乃果

2 番セカンド矢澤…矢澤にこ

3 番ショート星空…星空凛

4 番サード紬瀬…紬瀬絵里

5 番キャッチャー園田…園田海未

6 番レフト東條…東條希

7 番ライト南…南ことり

8 番センター西木野…西木野真姫

9 番フアースト小泉…小泉花陽

以上がμ'sのスターティングメンバーです

続いて、先攻のオールスターズのスターティングメンバーを発表致します。

1 番センター 大空…大空ヤマト

2 番セカンド 斎藤…斎藤ミク

3 番ショート 佐藤…佐藤メグ

4 番サード 綺羅…綺羅ツバサ

5 番キャッチャー 統堂…統堂英玲奈

6 番レフト 小日向…小日向ユキ

7 番ライト 香川…香川マチコ

8 番フアースト 優木…優木あんじゅ

9 番ピッチャー 結城…結城舞里

以上がオールスターズのスターティングメンバーです』

ウグイス嬢のフミコがそう言うのと後攻のμ'sがグラウンドに出た。

先攻の先頭バッターのヤマトは、バッターボックスの横で素振りを始めた。

μ'sの監督はナオキ、オールスターズの監督はミツヒデだ。

そして、ゲームが始まった。

あ、申し遅れました。実況・解説はシベリアがお送りします。

さて、プレイボールがかかりました！

ピッチャー穂乃果、第一球投げました！

ストライク！

まずは安定のストレートですね。

さて、第二球目！

ヤマト打った！

これは打ち上げてしまった：レフトフライだ。

これで1アウト。

続いて二番ミクです。

おっと、一球目で打った！

センター前ヒットです。

これで1アウトランナー1塁。

続く三番バッターはメグです。

穂乃果、まずは牽制けんせいです。

セーフ：

警戒するも…ホームに投げた！おっとランナー走った！

「アウトー!」

審判がそう言うのと観客が騒めいた。

さっきの海未の投げたボール速かったですね。

あれは海未の必殺『ラブボールファイナル』ですな。

さすがは園田道場の跡取りと言うべきでしょうか。

これで2アウトランナーなしになりました。

さっきの球はストライクです。

そして二球目…ファウルボールです。

続いて三球目…打った!

セカンドゴロです。

これでスリーアウトチェンジ。

「よし、海未ナイスボールだ」

「はい、ありがとうございます」

「よし、穂乃果…ピッチャーだが一番バッター頼んだ」

「うん!任せて!」

穂乃果はバッターボックスに向かった。

さて、次はムッ s の攻撃。

一番はピッチャーの穂乃果です。

オールスターズピッチャーは舞里です。

第一球、投げました。

ストライーク！

穂乃果、いきなり振ってきました。

第二球：打った！

しかしこれはピッチャーゴロです。

穂乃果、残念そうに帰ります。

これで1アウトランナーなし。

続いて二番にこ。

ボール！

ボール！

ボール！

ボール！

これはフォアボールです。

にこ、身長の高さに救われた！



さて、三番は凜。

ここはバントか？

おっとここは一旦牽制です。

：おっとまた牽制。これは盗塁を警戒しているのか？

今度はホームに投げた！

さて第二球投げた：おっとにこ走った！凜はバントだ！ボールは転がる！

この時点でにこは二塁へ！さらに凜もセーフ。これは間に合いません。

：なるほど、にこの足の遅さを考慮して先に走らせて、さらに凜の足の速さを使って

内安打。

考えましたね。

さて、1アウトランナー2，3塁！

このチャンスでバッターは四番の絵里！

「絵里————!!お前ならいけるよ！かわいいよ————!!」

おっとナオキ監督が何か叫んでますねー。

絵里の顔が赤くなっていますねー。

おっと一球目から振った！

大きい大きい大きい!!!

入ったー！ー！ホームラン！！！！3ランホームランです。

「さすがおれの絵里だ！かわいいぞー！ー！！」

またなにか言ってますね。

さて、これで3対0。μ s がリードしています。

さて、続いては先ほどの守りでナイスプレーを見せた海未です。

バッティングにも期待です。

舞里は帽子を脱いで汗を拭いた。

さて、1アウトランナーなし。

第一球、投げた！

ストライク！

第二球…ボール。

第三球…打った！これは打ち上げてしまったか…キャッチャーフライです。

これで2アウト。

続いては6番の希。

第一球、空振り！

第二球、ファウルボール。追い込まれました。

第三球目、ボール。これはよく見ました。

第四球、打った!ライト前ヒットです。

これで2アウトランナー1塁。

続いて7番ことり!

ボール!ボール!ストライク!

第四球目!

打った!これはレフト前ヒット!

ランナーは1, 2塁。

続いでのパッターは8番真姫。このチャンスをいかせるか!?

第一球:投げた!おっと、ランナースタート!真姫空振り!

これは予想外だったか英玲奈は投げられなかった。

これでランナーは2, 3塁、1ストライク。

ピッチャー第二球:ストライク!追い込まれた!

第三球!打った!のびるのびるのびる……………

センターフライです。スリーアウトチェンジ。

おしかったんですがね…

「あく!!くそ!」

ナオキは悔しそうに声をあげた。

「ふう…危なかった…」

舞里は息を大きく吐いた。

「くっそくさあ!バッチコイ!!」

「いいわ!みせてあげるわ!」

2人はまた野球ゲームのオリジナルプロ野球略してオリプロに熱中した。

「よくゲームにあれだけ熱中できるわね…」

絵里はそんな2人を見て呆れたような、でも感心したような感じで言った。

「A—R—I—S—Eのトライアングルみせてあげるわ  
!!!!!!」

「μ'sの力にひれ伏せ!!!」

「おれたち(私たち)のたたかいはこれからだ!!!」

あ、今までのゲームでした。

Another way (お気に入り200人突破記念)

「お願い、シンデレラ！」

「ここはゼールカロ王国。

ここにはとても美しい真姫という王妃様がいました。

真姫様はほぼ毎日部屋にある魔法の鏡にあることを聞いていました。

「鏡よ鏡よ鏡さん。この世で一番美しいものは誰？」

そう聞くと鏡はこう答えます。

「それは真姫様です」

「ふん、あたりまえよ！」

鏡がそう答えると真姫様はいつも上機嫌になりました。

ある日真姫様は若葉王とエグゼクティブSEXして、身籠ります。

そして一人の女の子が産まれました。

「この子は私みたいに美しいわね。ま、私の方が美しいのだけど…

まるで絵に描いたような子だわ。

そうだ、この里を一生忘れないような優しい子に育ててほしいという願いを込めて、

絵里姫と名付けましょう」

その絵里姫と名付けられた女の子は大事に育てられてとても美しく成長しました。

真姫様もそんな絵里姫の成長を喜んでいました。

だが、絵里姫が18歳になったときのことでした。

真姫様はいつものように魔法の鏡に聞きました。

「鏡よ鏡よ鏡さん。この世で一番美しいものは誰?」

すると魔法の鏡はこう答えてしまいます。

「それは絵里姫です」

「ヴェエ!?なんですって!?もう一回聞いわ!この世で一番美しいのは誰?」

真姫様は鏡の杵を持って驚いた様子で聞き直した。

「いいえ、絵里姫です」

だが、鏡の答えは変わらなかった。

「なんですって!?あの絵里姫より私の方が美しいに決まってるじゃない!!」

「いいえ、絵里姫の方が美しいです」

「くううううう!!私より美しいなんて許さない!!」

真姫様はカンカンに怒りました。

「私が…この真姫様が美しきで負けるなんて…ありえない…!」

真姫様はそれから絵里姫に嫉妬を覚えるようになりました。

そして……

真姫様は絵里姫にだんだん厳しく当たるようになりました。

絵里姫はそれも気にせず、叱られれば「はい」と言っていることを聞いていました。ですが夜な夜な絵里姫は「なんでお母様は私にこんなにも厳しく当たるの!？」とその理由がわからず、部屋で涙を流していました。

そしてある日、真姫様は絵里姫を呼び出してこう言いました。

「絵里姫、今まで厳しく当たってごめんなさいね。」

お詫びにバギーニヤの森にお散歩に行ってきたでもいいわよ。たまには外の空気も吸ってもらわないとね」

「お母様……!」

「でも一人じゃ危ないから家来の南をつけるわ」

「はい、お母様!」

そう言つて絵里姫は嬉しそうに支度をしに自分の部屋に行きました。

だが、真姫様はとんでもないことを考えていたのです。

それは……



「いい南? バギーニヤの森で絵里姫を殺して、あの金髪を私のもと持つてくるのよー」

「はい…わかりました」

「ふふふ…絵里姫が死ねば私は世界一美しいものとなれるわ…ふふふふ…あははははっ!」

なんと真姫様は絵里姫を家来に殺させようと企んでいたのです。

そして、南は馬に絵里姫を乗せてバギーニヤの森に向かいました。

絵里姫は馬の上から景色を楽しんでいました。

「随分と奥まで来たわね…?」

「は…はい…(やつぱり私にはこんなにも美しく、純粋な心を持っている絵里姫を殺せないわ…)」

そう思い殺すことをためらった南はある場所で絵里姫を降ろして事情を話すことにしました。

「絵里姫、私は真姫様の命令であなたを殺すためにここまで連れてきました。真姫様はあなたの美しさに嫉妬しているのです。ですが、私にはあなたを殺すことなんてできません。さあ、お逃げください。あとの処理は私にお任せください!」

「わかったわ、ありがとう南。この恩は一生忘れないわ」

絵里姫はそう言うってお辞儀をすると、森の奥へと逃げて行きました。

「どうか……無事で……」

南はそう言うのと馬に乗ってバギーニヤの森から去りました。

絵里姫はバギーニヤの森をさまよっていました。

「……は……? 待って、言わないで 分かってる」

絵里姫はいまの自分の状況と似ているような歌詞のある歌を歌いながら歩いていました。

絵里姫はどんどん心細くなっていきました。

すると絵里姫はある小屋を見つけました。

そのドアなどはとても小さいものでした。

コンコン……

「ごめんください、どなたかいらつしやいますか?」

絵里姫は小さなドアをしゃがんでノックしました。

するとドアが開いて、中からピンク色の服を着た小人が1人出てきました。

「あんだだれよ?」

「私は絵里姫、ゼールカロ王国のゼールカロ城から来ました」

「なっ!? ということはあんたはお姫様!」

「はい、実は私の母に命を狙われていてもうあそこには帰れないの。お願い、ここに住まわしてもらってもいいかしら?」

「だ、だめよ! 私たちはあんたみたいなやつにかまう暇なんて…」

小人がそう言うのと、中から紫色の服を着た小人が出てきました

「まあまあにこつち、そう言わんと一緒に住んであげようや?」

「でも希!」

「ならこつちしたらどうや?」

「ここに住ましてあげる代わりにウチらの身の回りのお世話や家の留守とかをまかせるつちゆうんは?」

「それくらいお安い御用よ!」

「まあ、それなら…」

「決まりやね! さ、入って入って!」

「お邪魔します…」

こつちとして絵里姫はそこに住んでいたにこ、希、緑色の服を着た花陽、黄色の服を着た凜、白色の服を着たこつち、青色の服を着た海未、そしてオレンジ色の服を着た穂乃果という七人の小人と共に暮らすことにしました。

翌日、真姫様のもとに南が金色の髪を持って現れました。実はそれは南が馬のしつぽを金色に染めたものでした。

「これが絵里姫の髪です…体はしっかり燃やしました」

「よくやったわ南！これで私は世界一美しいものよ！ははははははは！」

真姫様はうれしくて笑いました。

それが偽物と知らずに…

「これでドンウオーリドンウオーリよ…早速鏡に聞いてみましょう」

早速真姫様は部屋の魔法の鏡に尋ねました。

「さあ、鏡よ鏡よ鏡さん。世界で一番美しいものは誰？」

「世界で一番美しいのは…絵里姫です」

「そうそう、一番美しいのはわた…ってヴェエ!? どうして絵里姫なの!? あの子は死んだはずよ!? 壊れたの?」

「いいえ、ちゃんと絵里姫は生きています」

「なんですって!? おのれ南…よくも騙したわね…!」

怒り狂った真姫様は自らのサーヴァントのアサシンに命令して南を問いただし絵里姫がいるところを探させ、それがわかるとなんと南を殺してしまいました。

そしてりんごに真つ赤な毒を塗ってそれを絵里姫に食べさせて殺そうと企んだので

す。

「さあ、アサシン。絵里姫はどこにいるのかしら?」

真姫様はアサシンに絵里姫の居場所を聞きました。

「絵里姫はバギーニヤの森の奥にある小さな小屋に七人の小人と住んでいます」

「そう…そんなところにいたのね…ふふふふ…」

真姫様は魔法で醜い老婆に変身して、黒いフードを被って変装しました。

そして真姫様は絵里姫がいるという小屋に向かいました。

ちようど小人たちは仕事に出かけており留守だったので、真姫様はリンゴ売りの振りをして小屋のドアをノックしました。

コンコンコン…

「はい、どちら様ですか?」

「私はリンゴ売りじゃ。おいしいおいしいリンゴはいかが?」

すると絵里姫はドアを開けました。

「おいしいの?」

「そりゃあもう、ほっぺたが落ちるほどおいしいよ」

「ハラショー!」

「良ければどれだけおいしいか味見してみないかい?」

「いいんですか!?じゃあお言葉に甘えて!」

絵里姫は疑うことなく渡されたリンゴを手に取りました。

「それは特別珍しく真つ赤でね。とつてもおいしいよ」

「そうなの!?それじゃあ、いただきます」

シヤリ…

絵里姫は疑うことなく、そのリンゴを一口食べました。

真姫様はニヤリと笑いました。

「うっ……………」

バタン…

絵里姫はリンゴに塗られていた毒がまわり、リンゴを落としてその場に倒れてしまいました。

「ふふふふふふ…これで本当に私は…!はははははは…!」

真姫様はそんな絵里姫を見ると喜んでその場を去りました。

そう、とうとう真姫様は絵里姫を殺してしまったのです。

しばらくして、七人の小人たちが帰ってきました。

「あ、あれ見て!絵里姫が倒れてるよ!」

穂乃果が玄関前で倒れている絵里姫を見つけて言いました。

みんなは驚き、急いで絵里姫に駆け寄ります。

みんな一人ひとり「絵里姫、絵里姫!」と声をかけますが返事はありません。

そしてみんな、絵里姫が死んだことを悟りました。

七人の小人たちは絵里姫の死をとて悲しみました。

天も絵里姫の死を悲しんでいるのだろうか、雨が降り、雷が起こり、そして嵐になりました。

真姫様は急いでセールカ口城に向かおうと走りましたが、絵里姫を殺したことで天の怒りを買って雷にうたれてそのまま崖の下へと姿を消し、命を落としました。

それから数日経って天気も晴れて、七人の小人たちは絵里姫を水晶でできた棺桶に寝かせ、地面に埋めて弔おうとしました。

そこに白馬に乗った隣のシベリア王国のナオキ王子が通りかかりました。

「ん?そこのかわいい七人の小人たち、なにをしているんだい?」

ナオキ王子は七人の小人たちに声をかけました。

「お、王子さま!」

「どうして王子様がいるのお!」

こことりと花陽は驚きの声をあげた。

「ちよつと通りかかつてな。で、なにをしているんだ？」

「はい、絵里姫がお亡くなりになってしまひ今から弔おうとしていたんです」

海未はナオキ王子に説明した。

「なに、絵里姫だと…!?あの世界一美しいということまで有名な!」

ナオキ王子は絵里姫という名を聞くと白馬から降りて棺桶に近づいた。

そしてナオキ王子は寝ている絵里姫の顔を見た。

「おお！美しい！」

ナオキ王子は絵里姫の美しさに感動し、一目惚れした。

「すまない、頼みがあるのだが…この棺桶を譲ってはくれないか？」

私の国で弔つてあげようと思うのだが…」

ナオキ王子がそう頼むと、小人たちは話し合つてその方がいいだろうと棺桶を譲るこ

とにした。

小人たちも最期までいたいとついていくことにした。

ナオキ王子は帰り道、やはり絵里姫が気になつて仕方なかつたので棺桶の蓋を開け

た。

「ああ…本当に美しい…絵里姫…」

ナオキ王子はしばらく絵里姫を眺めていた。



そしてナオキ王子の顔はどんどん絵里姫に近づき……  
ちゅっ……

ナオキ王子は唇を絵里姫の唇に重ねた。

すると絵里姫の目がゆっくりと開いていった。

「おお!絵里姫の目が!?!」

「スピリチュアルやね!」

凜と希は驚きの声をあげた。

「……は……私はどうなって……」

絵里姫は起き上がって言った。

「あなたは毒リンゴを食べて眠っていたのですよ」

「あなたは……?」

「私はシベリア王国のナオキ王子です。無事で何よりです」

絵里姫は笑顔を浮かべるナオキ王子を見て頬を赤くした。

「ところで絵里姫、提案なのですが……」

「な、何ででしょうか…？」

「私とこれからずっと、私の王国と一緒に暮らしませんか？」

「え…それって…？」

「はい…私と結婚していただけますか？」

ナオキ王子は絵里姫に片膝をついてプロポーズした。

小人たちは顔を赤くして、キヤーキヤー言っていた。

絵里姫の答えは……

「はい！よろしくお願ひします！」

そう言って絵里姫はナオキ王子の手を取った。

そしてナオキ王子と絵里姫は結婚式を挙げて結婚して、未永く幸せに過ごしましたと  
さ……

めでたし、めでたし……

スタッフロール

絵里姫……絢瀬絵里

ナオキ王子……香川ナオキ

若葉王……高坂若葉(友情出演 名前はまだ無い♪ アニライブ!より)

真姫様……西木野真姫

魔法の鏡……結城舞里(ゲスト出演 シベリア香川 ラブライブ!〜幻のメンバー〜よ  
り)

南……南すずめ(理事長)

にこ……矢澤にこ

希……東條希

花陽…小泉花陽

凜…星空凜

ことり…南ことり

海未…園田海未

穂乃果…高坂穂乃果

語り

監督

監修

シナリオ作成

撮影

脚本

編集

音響

その他もろもろ…シベリア香川

## 第111話 「未来へ羽ばたく10羽の鳥」

前回のラブライブ！

μ'sの歩むべき道を決めた私たち！

そしてナオキさんと穂乃果ちゃんが考えた最高のライブ！

「今」に……

” スクールアイドルの素晴らしさを伝える” 『最高のライブ』の開催を宣言する!!”  
スクールアイドルみんなで一つの曲を歌ってスクールアイドルの素晴らしさを伝える！  
すっごく面白そう！

そしてナオキくんが気絶してる間に私たち9人はスクールアイドルに会いに行くことにした！

「あ、もしもし……お忙しいところすみません。私、μ'sの香川ナオキと申します……」  
ナオキはメールをくれた都外のスクールアイドルに電話をして今回のライブの説明をしていた。

「ありがとうございます！詳しいことはメールでお伝えします。……はい、失礼します」

ナオキは相手の電話が切れたのを確認すると電話を切った。

「さて、次だな……」

ナオキはまた電話をした。

そんなナオキの顎にはシツプが貼られていた。

くらぶライブ！（ナオキ）

墨田区……

「ワンツースリーフォー！ファイシックスセブンエイ！」

ことり・にこ・花陽は桜橋近くで練習をしている隅田川高校スクールアイドル『春の

うらら乙女』に会いに来ていた。

3人は練習しているところから少し離れたところから見ている。

「練習してるよ〜?」

花陽は心配そうに言った。

「花陽が行きなさいよ……部長なんだから」

にこは花陽を少し押しながら言った。

「ええ!?!」

花陽は驚きの声をあげた。2人が戸惑う中、ことりは堂々と練習している3人の方に歩いて行った。そんなことりの後をそ〜つとにこと花陽はついて行った。

「すみません、*ム* *s*の南ことりです♡ちよつとお話いいですかあ〜?」

ことりは腰は曲げて姿勢を低くして、上目遣いで言った。(鼻血)

「うわ〜可愛い〜!」

「本物だ〜!」

「なんででしょうか?」

三つ編みの女の子とショートカットの女の子とポニーテールのリーダーの女の子は

ことりを見て言った。

「メールで詳しく聞きたいって言うていたと思うので教えに来ました〜」

「え!? わざわざ!?!」

「ぜ、是非お願いします!」

ことりは最高のライブのことを話した。

「……つていうことなんです」

「面白そう!」

「是非参加したいです!」

「お願いします!」

「ありがとうございます!」

ことりはリーダーの女の子の手を握った。

く ラブライブ! (ことり・にこ・花陽) く



井の頭公園……

海末・希・凜は井の頭公園でチラシを配っている井の頭高校スクールアイドル『ソフトクリームズ』に会いに来た。

「よろしくお願ひしまーす！」

「お願ひしまーす！」

そんな黒髪の女の子とえび色（きつまいもの皮の色）の髪をしたリーダーの女の子を茂みに隠れて見ていた。

「みんな凜たちと一緒にだ〜」

「頑張ってるんやね〜」

凜と希はあたたかい目で言った。

希の手にはソフトクリームがあった。

「でもどうします？突然話しかけるわけには……」

海末は遠慮したように言った。

「こういう時は、凜ちゃん……あれをやる時が来たで！」

そう言って希は凜にソフトクリームを渡した。

「うん！あれの出番だね！凜、行ってくるにや！」

凜はそう言うのとソフトクリームを受け取って2人のところに行った。

「え、なにをするんですか!？」

「まあ、見せて」

そう言つて海未と希は凜の方を見た。

「あゝ」

「なんででしょうか？」

2人の女の子は困惑していた。

なぜならその前には凜がドヤ顔でソフトクリームを天に掲げているからだ。

「ワターシはスクールアイドルの使者、ソナタたちと共にライブがしたいのじゃ……」

2人は不思議そうに見つめあつた。

「なんですか……あれは……?」

「アメリカで会得した新技よ」

「そんなバカバかしい……」

希はドヤ顔で見えていたが、海未は呆れたように言つた。

「参加してくれるにやゝ！」

凜は海未と希の方を見て飛び跳ねて言った。

「ええ〜!？」

海未は驚きの声をあげた。

〜ラブライブ！（海未・希・凜）〜

神宮橋…

穂乃果・絵里・真姫は原宿高校のスクールアイドル『ツイット』と対峙していた。「……………わかったわ…でも、ステージにたって欲しかったら私たちとダンス勝負よ！」

「勝ったら出てあげるわ！」

深緑色の髪をしたリーダーの女の子と青色の長い髪をした女の子が言った。隣には茶色のショートカットの女の子がいた。

「いいわ〜面白そうじゃない！」

「ええ!?!」

「μ，s本気、見せてあげるわ」

「ええ〜!?!」

絵里と真姫がやる気になって、穂乃果はそんな2人に驚いていた。

「そうそう、私たちが勝ったらそっちのナオキくん、貸してもらおうから」

そのとき……

絵里の表情が変わった……………

「真姫…穂乃果…」

「はい!？」

2人も絵里の”殺気”に気づいて背筋を伸ばした。

「この勝負…私に任せといてね。

こいつらはわたしが叩き潰すから……」

「はい!お願いします!」

「さ…誰から相手かしら？」

絵里は笑顔でポキポキと手を鳴らして言った。

そして絵里が3人を圧倒し勝ちました。

くラブライブ！（穂乃果・絵里・真姫）く

夕方頃…

音ノ木坂学院…

アイドル研究部部室…

部室には、穂乃果・絵里・真姫以外のメンバーが帰っていた。

「そう言えば、都外のスクールアイドルのみなさんはなんて？」

「ああ…参加はしたいけど、関東以外の人たちは来るのが難しそうなんだ。

でも来てくれる人もいるんだがな」

にことナオキは言った。

「でも賛成はしてくれたの？」

「ああ…来れるのなら来たいって言ってた」

花陽とナオキは言った。

「今のところ参加するのは何組ぐらいかにや？」

「うくん…1…2…3…：…17組ってとこかな？」

「わかったにや！」

凜はそう言うのとホワイトボードに17匹の猫を書き出した。

「よく手間のかかることを……」

とりあえず参加してくれるスクールアイドルの出身地にシール貼ってくれるか？」

「あ、ウチがやるわ」

「ありがとう」

希はホワイトボードに貼ってある日本地図に現地参加してくれるスクールアイドル

の出身地に赤いシールを貼って、参加したいけど来れないなどというスクールアイドルの出身地には青いシールを貼った。

ガチャ…

「ただいま〜」

「た…ただいま………」

そんなとき、絵里・穂乃果・真姫が帰ってきた。

「ナオキ〜！」

「おっと!? え…絵里、どうしたんだ?」

絵里は帰ってきてナオキを見つけると飛びついた。

「スクールアイドルの人が勝負を挑んできたのよ〜! それで勝ったらナオキをもらうっていうから私頑張ったのよ〜! 地味に怖かったわ〜!」

絵里は目をうるうるさせてナオキに抱きついて言った。(鼻血)

「そうなのか!? よく頑張ったな…ありがとう」

ナオキは絵里の涙を拭いて頭を撫でた。

「真姫ちゃん、穂乃果ちゃんどうしたの?」



「い……いや……まあ……」

「あの絵里ちゃん……生徒会長の時より怖かったよ……」

「そ……そうなんだ……」

真姫と穂乃果はあのとときの光景を思い出し怖がっていて、疲れた様子を見せた。そんな2人を見て花陽は苦笑いした。

「うくん……こんなもんかな〜？」

「おつ、ことり……衣装の絵できたのか？」

「うん！見て見て！トランプをイメージしてみたの！」

ことりはそう言うトランプをナオキに渡した。

「おお！流石だな！」

ナオキはその絵を見て驚いた。

「えへへ、ありがとう〜」

「海未はどうだ？」

ナオキはことりにスケッチブックを返して海未の方を見た。

「うくん……なかなか思いつきませんね……」

海未は顎に手を当てて言った。

「そうか……テーマは決まったのか？」

「はい！スクールアイドルは限られた時間で輝くものなので、『スクールのアイドルは太陽のような眩しい輝き』をテーマに考えています」

「いいテーマだな。あ、折角なんだからさ、全国のスクールアイドルから歌詞を集めてみたらどうだ？」

「ああ、なるほど！では早速……！」

海未はそう言うのとパソコンを開いてスクールアイドルに歌詞の募集をかけた。

「じゃ、私は音楽室に行くわね」

真姫はそう言うのと立ち上がった。

「真姫、あの曲は使わないの？」

「ここはこの前聞いた曲を使わないのかと不思議に思ってた。

「うん。あの曲は10人だけの曲にしたいから……」

そうやって真姫は少し顔を赤くしながら部室を出た。

「ふっ……だつてよ？」

ナオキはニカッと笑つてにこを見た。

「ふん！／＼／＼」

にこは顔を赤くしてそっぽを向いた。

く  
ラブライブ！（ことり・海未・真姫）  
く

音楽室…

真姫はピアノに向かい作曲していた。

「太陽のような眩しい輝き……か……」

真姫は海未が言っていたテーマを思い出し、明るい感じのものにしようとして鍵盤を叩いた。思いのほか作曲はスラスラと進んでいった。

そして日もどんどん暮れていったので、その日は解散となった。

翌朝……

東京駅……

8人の男女が東京の地に足をつけた。

「久しぶりやな……東京……！」

次回へ続く……

## 第112話 「三大スクールアイドル」

前回のラブライブ！

絶対に許さん……ぶっ殺してやる……ぶっ殺してやるからな!!!

ラブライブ！運営委員会本部……

会長室……

朝、ナオキは晋三に呼び出されていた。

「ナオキ、ライブをする場所が確保できたぞ」

「ありがとう！で、どこに？」

晋三はニヤツと笑って言うとなオキは驚いた。

「驚くぞ？」

なんと、秋葉原の全域だ！」

「ええ〜!？」

なんとライブの会場は秋葉原全域だった。

「な、なんであの地域を確保できたんだよ!?!」

「ああ…都知事が昔の弟分だな。快く貸してくれたよ」

「ハラショー……」

「ははは……期間は準備と合わせて2日間だけだ。準備で1日、本番と片付けで1日使ってくれ」

「短いな……」

「そんなに長くは貸し切りできないよ。あとあの件も了解してあるぞ」

「ああ…ありがとうおじさん。無理ばかり言っちゃって……」

「いいんだよ、かわいい甥のためだからな」

晋三は優しい笑みを浮かべた。

「うん…それじゃあ!」

ナオキは立ち上がってその場を去った。

「ふう…さて、また忙しくなるぞ」

晋三は仕事に取り掛かった。

ナオキは音ノ木坂学院の校門をくぐろうとした。  
すると後ろから声がした。

「ナオキくん」

「ん？あ、ツバサさん！」

ナオキが後ろを振り向くとツバサがいた。

「私たちもいるぞ」

「久しぶり〜」

「英玲奈さんとあんじゅさんも！どうしたんですか？」

「手伝いに来たのよ」

「私が作って欲しいって言ったんだけどね…」

「全部を任せるのはな…：これは」スクールアイドルのライブ」だしな。

あとこれ、お土産だ」

英玲奈は思い出されたかのようにお菓子を出してナオキに渡した。

「ありがとうございます！それじゃあ案内しますね」

ナオキはA—RISEを部室まで案内した。



アイドル研究部部室……

「あ、また参加してくれるグループが増えたよ！」

花陽がパソコンに届いたメールを確認して言った。それを聞いた凜はホワイトボードに猫の絵を書いた。

「これで20組にゃー！」

μsが最高のライブの説明動画をあげたりして”声”を広めた結果が出てきたのか、参加グループは20組を突破した。

ガチャ…

「ただいま。A—RISEの人たちが手伝いに来てくれたぞ」

「はろ」

「こんにちは」

「やあ」

ナオキが中に入ってそう言うと、A—RISEがヒヨイと顔を出して言った。

みんな驚いた表情を見せた。

「さて、何を手伝ってもらいましょうか……？」

「私は衣装を手伝えるわよ」

「私は作曲」

「私は作詞だ」

「あ、ならあんじゅさんは私と来てください！」

「わかったわ」

ことりはそう言うとおんじゅと隣の部屋に向かった。

「多分真姫は音楽室と思うのでツバサさんはそちらに！海未は生徒会室で作詞してると思うので英玲奈さんはそちらに、案内します」

「わかった（わ）」

ツバサと英玲奈はナオキについて行った。

「ここが生徒会室です」

コンコン…

「はい？」

「海未、入るぞ〜」

ナオキは生徒会室のドアを開けた。

「やあ」

「英玲奈さん!?!」

海未は英玲奈を見て驚いた。

「英玲奈さんが作詞を手伝ってくれるみたいだから甘えとけ」

「よろしく頼む」

英玲奈は海未の隣に座った。

「は…はい!」

「じゃあ頑張つて〜」

ナオキはそう言つてドアを閉めた。

「で、歌詞は集まったか?」

「はい…思った以上に集まったので……」

「でもみんなの想いが詰まった歌詞だ。さ、やるぞ」

「はい!」

英玲奈と海未は作詞に取り掛かった。

ナオキとツバサは廊下を歩いていた。

「ちゃんと整理がついたみたいね」

「はい…あとはやっていくだけです」

「そう…あ、そう言えばナオキくんって次のラブライブ！運営委員会の会長になるんでしょっ？」

「な…なんで知ってるんですか!？」

「結構広まってるわよ？知ってる人は知ってるんじゃないかしら？」

「マジすか…はあ…」

「でもいいじゃない？頑張ってるね」

「は…はい……」

♪

「ん、この音色は……？」

「ああ…真姫か…あそこが音楽室です」

ツバサはドアの方に耳を傾けて真姫の弾くピアノの音を目を瞑って聞いた。

「……いい曲ね……」

「そうですね……」

2人は真姫のピアノの音をその場で聞いた。

曲が終わるとナオキはドアを開けた。

「いい曲だったな」

「ありがとう」

「お久しぶり」

「ヴええ!？」

真姫はツバサがいることにびっくりして声をあげた。

「ツバサさんが手伝ってくれみたいだから甘えとけよ。それじゃあ」

ナオキはそう言い残して部屋に戻った。

「え、ちよっ!？」

「さ、始めましょう」

「わ…わかったわよ。どこか気になるところがあったら言つて」

「そう…じゃあ…：…こうなんてどうかしら？」

ツバサは真姫の横から顔を出して言った。

真姫は以外にツバサの顔が近くにあったからだろうか顔を赤くした。

ガチャ…

「ただいま〜つて穂乃果何やってんの？」

「ダンスだよっ！ア〜ロハ〜オエ〜」

ナオキが帰ると穂乃果はなぜかフラダンスの衣装を着て踊っていた。

「はあ…なにやってんだか…」

ナオキは頭を抱えていった。

「あ、ナオキ！参加してくれる人たちが増えたわよ！」

絵里がパソコンを見て言った。

「おっ、何組に増えた？」

「えっと…5組増えたわ！」

「じゃあこれで25組だにや〜！」

凜は喜んで猫の絵を書いた。

「いいぞ…どんだん広がってる…！」

「ええ！」

みんな喜びを隠せなかった。

『ありふれた悲〜しみ ありふれた痛みと〜…』

「あ、すまん…もしもし？」

『ああ…ナオキか？』

「おじさん!?!どうしたの?」

『実はな……全国のスクールアイドルたちが運営委員会の支部に嘆願に来て、各地で秋葉と中継を繋げて盛り上がれないかと連絡が来たんだよ』

「ええ!?!」

『どうする?』

「ハ……ハラショー……やるしかないじゃんか!」

『よし、ならちゃんとみんなに伝えとくんぞ?連絡は私がしておく』

「ありがとう!それじゃ!」

ナオキは急いで電話を切った。

「どうしたの?」

穂乃果はナオキに言った。

「このライブ……全国に中継を繋いですることになった……」

「「「「えく!?!」」」」」

「これは大きくなるぞ……このライブ!!」

「あ、見て!参加グループが一気に増えて来たわ!」

「ほんまやん!?!」

絵里が画面を見て驚くと希もそれを見て同じく驚いた。

「そうか…中継で参加できることがわかったから一気に増えたんだ！

花陽！HPに更新を!!」

「わ…わかりました！」

花陽はパソコンでHPの更新を始めた。

ピロン…

「ん、メール？」

ナオキはスマホを開いた。

「っ…!?!」

「誰からメール？」

「ま…まさか…:…なんで…:…!?!」

「ナオキ…:…?」

「ちよつと出てくる!!」

ナオキは駆け足で部屋を出た。

みんな不思議に思い顔を合わせた。





「ミツヒデ！」

「おお、ジャーナ！久しぶり」

「だからその呼び方はやめてくれって…」

「ははは…すまんつい癖でな…」ナオキ」

その人物とは…香川ミツヒデ…

かつてナオキを騙し陥れた人物である。

だが今となつては2人は親友同士である。

「でもどうして…?」

「おれたちもいるぞ?」

「お久しぶりです!」

「なっ…」英吉にマチコ!?みんなも!」

ナオキ前にはミツヒデ以外にかつてチンギスカンと呼んでいた英吉と、イズミ、マチコたちナニワオトメがいた。

「どうしてつてなにも手伝いにきたに決まってるやん」

イズミがニカッと笑って言った。

「手伝いに…?」

「ああ…スクールアイドルのライブって言ったら手伝わんと」

「それにウチらも今月で終わりやし」

ヤマトとユキは言った。

「みんな……ありがとう！」

「さ、連れてつてくれ……早く準備せなやる？」

「ああ！」

そしてナオキは8人を連れて部室に向かった。

「そっういや口調変わったな？」

「ああ……色々あつてな」

「ふっん……」

イズミとナオキは話した。

音楽室……

ガラガラガラ……

「真姫ちゃん！」

マチコは音楽室のドアを開けた。

「え…マチコちゃん…？？」

「うん！」

真姫は信じられず固まっていたが、徐々に笑顔になっていた。

「マチコちゃん！」

真姫はマチコに抱きついた。

「真姫ちゃん……！」

2人は涙を堪えながら再会を喜んで抱き合った。

「ふっ…感動の再会……ってやつかしら？」

ツバサはそんな2人を温かい目で見ていた。

そしてナニワオトメの人たちも合わせ、*Mus・A—RISE・ナニワオトメの三大スクールアイドル*が音ノ木坂学院に揃った。

その情報はすぐさま広まっていき、参加者もどんどん増えていった。

次回へ続く……

## 第113話 「スクールアイドルフェスティバル開幕！」

前回のラブライブ！

最高のライブの準備に取り掛かった私たち！

参加グループも20組を越えてどんどん広がっていく私たちの活動！

A—R—I—S—E、そしてマチコちゃんたちナニワオトメも手伝ってくれることになったの！

そして最高のライブの日はどんどん近づいてきた。

翌日……

音ノ木坂学院には……

たくさんさんのスクールアイドルが集まっていた。

主に関東のスクールアイドルだが、来れたグループは遠くから来ていた。

北は北海道、南は沖縄まで、今回のライブの参加者は現在約90組を越えている。今集まっているのはおよそ20組。

やはり元々ライブが入っていたりして、今日来れるグループは少なかつたのだ。

「みなさん、今日は集まってくれてありがとうございます！今日はここで衣装を作り、曲の練習をします！」

まずは衣装を作るのを手伝ってくれるという方はあちらのことりとにこの方まで集まってください」

ナオキがそう言うのと衣装を作ってくれる人たちはこたりの方に集まった。

「じゃあことり、にこあとはよろしくな」

「うん！」

「わかってるわよ」

「よし、じゃあ残りの人たちは3班ぐらいに分けて1班は歌の練習を先に、2班と3班はダンスの練習をしましょう！」

そして準備が開始された。

衣装班はことりとにこの説明を受けた後に各自で衣装を作り始めた。この衣装は現地で参加する人たちが増える可能性があるため大量に必要な。現地以外での参加のグループには衣装の案と見本を送っており、各自で作ってもらったことにした。

歌班は音楽室で真姫の伴奏の元で練習をしている。参加グループには歌詞と伴奏の録音を送っている。

ダンス班は凜が中心になって教える班、穂乃果が中心に教える班の2つに分かれた。ダンスはまだ全て完成していない。

なのでナオキは生徒会室で編曲をしていた。

「うくん……お祭りみたいな感じにしたらいい感じかな？」

ナオキはそんなことを呟きながらヘッドホンをしていた。

途中から誰かがいたのも気づかず……

トントン…

「おいナオキ」



「ん？なんだミツヒデか……いつからいたんだ？」

ナオキは肩を叩かれて振り返るとミツヒデがいたのでヘッドホンを外した。

「ああ……数分前からお前の作業みてたで？気づかんかったか？」

「ああ……すまん」

ナオキは笑い、頭をかきながら言った。

「まあ、あんなけ集中してたらそんなもんか」

「で、なにか用か？」

「ああ……その……改めて謝らしてくれ……ほんまにすまんかった！」

ミツヒデは深々と頭を下げた。

「ちよつ……もういいって！今は気にしないから！」

「ありがとう……それと……戻る気はほんまにないんか？」

「……ああ……ないな。おれにはこっちでやることもあるし……なにより……」

「絵里さんか？」

「ああ……絵里を放ってなんて行けない」

「そうか……それだけ聞きたかってな。あとちよつと提案なんやけど……」

「提案……？」

「ああ……このライブの名前のことなんやけど」

「ライブの名前……?」

「せや。このライブは『最高のライブ』という名前や」

ミツヒデはホワイトボードに『最高のライブ』と書いた。

「まあ、たしかに……」

「でもそれやったらインパクトに欠けるんや!」

ミツヒデは拳を強く握った。

「インパクト……か……」

ナオキの表情が真剣になった。

「せや!だからおれは考えた……」

そして思いついたのが!!」

ミツヒデは勢いよくなにかを書き始めた。

「つ……!」

「ふう……その名も……」

ミツヒデは息を吐いてペンを置いた。

『スクールアイドルフェスティバル』……』

ナオキはミツヒデが書いた文字を読んだ。

「その通り！いい名前やろ？」

「うん……スクールアイドルフェスティバルか……いいと思う！よし、早速みんなに言つてたからからネットに公開しよう！」

「おう！」

ナオキとミツヒデはみんなにこのことを伝えるために走った。

く  
ラブライブ！（ナオキ・ミツヒデ）  
く

ナオキとミツヒデによつて伝えられたそのライブの名前：『スクールアイドルフェスティバル』の名はラブライブ！運営委員会にも伝わり、追加情報としてネットに広まった。

だが……

「やっぱり期待度は低いか？」

「ああ……みたいやな……」

「A—R—I—S—E・ム　s・ナニワオトメだけでええんやないかっていう声もあるくらいやし……」

「さて……どうすれば……？」

ナオキ・英吉・ミツヒデ・イズミは話し合っていた。

「……ライブ……してみるか？」

「『ライブ!?!』」

ナオキの思わぬ発言に驚いた。

「ああ…そのライブでスクールアイドル”みんな”が輝いていることを教える。そしてこつちに来る気がない人も来る気になる。そんなライブをすればいいんじゃないか？」

「そんなライブ……できるのか……?」

英吉は不安を見せる。

「やってみたらええんちゃう?なんかおもしろそうやし」

「せやな」

ミツヒデとイズミは笑みを浮かべて言った。

「よし!早速みんなに伝えよう!」

ナオキはそう言つて昼休憩にみんなの前に立つた。

「明日、ここ…音ノ木坂学院でみんなでライブをする!!」

いきなりの宣言にみんな一時唖然とした。

『ライブ!?!』

「ああ…残念ながら世間の注目は”スクールアイドル”には向いていない。

だからライブをする!」

「でも曲はどうするの?」

真姫は言った。

「ちよーどいい曲があるんだよ」

ナオキはニヤツとしてそう言うとおあるCDを出した。

「それは……?」

絵里は不思議そうに言った。

「こーいうこーともあろうかとおれが作っていた曲だ。曲名は『Happy maker

!』」

『Happy maker!』……(あの時見た曲名と違うわね……?)」

「あぁ……『SENTIMENTAL StepS』は卒業ソングだからなんか楽しそうな曲欲しいな〜って思ってたんで」

「はやく聞かせてよ〜」

こーりは言った。

「わかったわかった。じゃあ流すぞ……」

ナオキはウォークマンをスピーカーに刺して(CDじゃないんかい)、曲を流した。

♪

その曲を聞いて、みんなリズムをとったりしていた。

曲が終わるとみんな拍手した。

「とてもいい曲ですね！」

「ええ…はやく歌いたいわ！」

「うん！はやく練習しようよ！」

マチコ・ツバサ・穂乃果は言った。

「よし、そうと決まればみんな練習だ！」

『お〜！』

みんな拳を上突き上げた。

そして『Happy maker!』の練習が始まった。

みんなの意見を出し合って相談した結果、みんながポンポンを持って楽しく歌って踊ろうと言うことになった。

衣装は下は制服のものを使い、上は各グループの名前が縫われているものを使うことにした。

衣装の準備は簡単だったため、すぐに出来た。

ナオキはラブライブ！運営委員会にも音ノ木坂学院であることを伝え、機材などの搬入を急いでもらった。

準備や練習は急ピッチで進められ、当日の昼前には準備は整った。

カメラは全部で5台用意された。1台はグラウンドに配置され、それは高い所からグラウンド全体を撮ることができるものだ。あとの4台は屋上・廊下・講堂・校舎前に配置される。撮影者はフミコ・ナオキ・ミツヒデ・英吉・イズミに任された。

この模様はネットやテレビでも中継されることになっていて注目を集めていた。

もうすぐライブが始まる。

μ s が待機する校舎前ではいつもの掛け声が響いていた。

「いちー！」

「にー！」

「さんー！」

「よんー！」

「ごー！」

「ろくー！」

「ななー！」

「はちー！」



「きゅうー！」

「じゅうー！」

「「「「「「「μ s！ミュージック……スタート！」「「「「「「」

そのあとナオキは屋上に向かっていった。

「ナオキ！」

「ミツヒデ……どうした？」

廊下を走っているとミツヒデが声をかけた。

「スクールアイドルフェスティバル……絶対に成功させよう」

ミツヒデはそう言って拳を握ってナオキに向けた。

「おう！当たり前だ」

ナオキも拳を握ってミツヒデのこぶしと合わせた。

2人は笑い合い、ナオキは屋上に向かった。

ミツヒデはナオキの背中を見届けて自分の配置の場所に向かった。

放送室ではヒデコとミカが音響機器の操作を任されている。

そしてついに……スクールアイドルフェスティバルが開幕する！

『ナオキくん、大丈夫よ』

「OK！」

無線でナオキはヒデコと話した。

「ただいまここに、スクールアイドルフェスティバルの開幕を宣言します！」

今日は秋葉と日本全国でのライブに向けて、みなさんにスクールアイドルみんなの素晴らしさを伝えます！

曲は『Happy maker!』です！

みんなで楽しみましょう！」

ナオキはマイクを通して言った。

それからしばらくしてイントロが流れ出した。とても楽しそうな曲を予感させ、イントロから体がのってくる。

イントロに合わせてカメラはどんどん校門に近づき、校舎前にいるスクールアイドル

を映した。

「心にファンファーレ」 「鳴り響く出会い」

「いつまでもあついままのきみだと」

「僕はしんじてるよ」

まずは校舎前にいる、sが穂乃果・海未・ことり↓真姫・花陽・凜↓絵里・希・に  
こ↓全員と歌い出す。

「発見へと」 「旅だちへと」

「希望がもえるブラ〜ンニユデ〜イ」

続いてカメラが切り替わり、講堂にいるA—RISEがあんじゅ↓英玲奈↓ツバサと  
歌い出す。

「面白い」 「場所に立とう」

「消えないでトキメキの予報が」

さらにカメラが切り替わり、廊下にいるナニワオトメがヤマト・ユキ↓ミク・メグ↓  
マチコが歌い出す。

そしてサビに入るとふうせんが浮かび、紙吹雪が舞った。

『大丈夫大丈夫しよう』

「「無敵さ元気なぼくたち」」  
『ハイ!』

さらに廊下にいるスクールアイドルとナニワオトメが歌った。

『レッツスマイル、レッツスマイル!へこたれない』

「「毎日Happy make r!」」

『イエイ!』

そしてカメラがまた切り替わり、講堂周辺にいたスクールアイドルと講堂から出てきたA—R—I—S—Eが歌った。

『大丈夫大丈夫楽しんで』

「「「無敵さ元気なぼくたち」」」

『イエス!』

またカメラが切り替わり、校舎前にいたスクールアイドルとMsが歌った。

『レッツスマイルレッツスマイル!聞こえる?』

『踊れ!みんなが大好き〜!』

「みんな盛り上がりつつ行くぞ〜!」

そして間奏に入るとナオキがマイクを通して言った。

μ'sは一足先に走ってどこかに向かった。

それ以外のスクールアイドルはその場で楽しく踊った。

間奏が終わる頃にはカメラはナニワオトメとA—R—I—S—Eを映した。

「「「安心より冒険だと

わらくいながらジャ〜ンピングハ〜イ」」」

「「「止まらない時間のなか

輝きを求め続けてる」」」

そしてみんなは一斉にグラウンドに向かって走り出した。

『頑張って頑張ってその先で

ステキな事が起こるよ（ハイ！）

アイムOK、アイムOK！諦めない

明日もHappy maker！（イエー！）

頑張って頑張ってやってみて

素敵な事が起こるよ（イエス！）

アイムOK、アイムOK！叫びたい

「行こうよ！みんなでもっとね〜！」大丈夫大丈夫楽しもう

無敵さ元気なぼ〜くたち（ハイ！）



て走り出した。

『頑張って頑張ってその先で

ステキな事が起こるよ（ハイ！）

アームOK、アームOK！諦めない

明日もHappy maker！（イエイ！）

頑張って頑張ってやってみて

素敵な事が起こるよ（イエス！）

アームOK、アームOK！叫びたい

「行こうよ！みんなでもっとね〜！」大丈夫大丈夫楽しもう

無敵さ元気なぼくたち（ハイ！）

レッツスマイル、レッツスマイルへこたれない

毎日Happy maker！（イエイ！）

大丈夫大丈夫楽しんで

無敵さ元気なぼくたち（イエス！）

レッツスマイル、レッツスマイル！聞こえる？

「踊れ！みんなが大好き〜！」

グラウンドのスクールアイドルの真ん中は空いており、そこにはA—RISEとナニ

ワオトメがいた。

さらにそこへ、s が到着してサビの途中でA—RISEとナニワオトメの間に入った。

『頑張って頑張ってその先で

ステキな事が起こるよ（ハイ！）

アイムOK、アイムOK！諦めない

明日もHappy maker！（イエー！）

頑張って頑張ってやってみて

素敵な事が起こるよ（イエス！）

アイムOK、アイムOK！叫びたい

「行こうよ！みんなでもつとね〜！」大丈夫大丈夫楽しもう

無敵さ元気なぼ〜くたち（ハイ！）

レッツスマイル、レッツスマイルへこたれない

毎日Happy maker！（イエー！）

大丈夫大丈夫楽しんで

無敵さ元気なぼ〜くたち（イエス！）



レッツスマイル、レッツスマイル！聞こえる？

「踊れ！みんなが大好き〜！」

頑張って頑張ってその先で

ステキな事が起〜こるよ（ハイ！）

アームOK、アームOK！諦めない

明日もHappy maker！（イエイ！）

頑張って頑張ってやってみて

素敵な事が起〜こるよ（イエス！）

アームOK、アームOK！叫びたい

「行〜こうよ！みんなでもっとね〜！」大丈夫大丈夫楽しもう

無敵さ元気なぼ〜くたち（ハイ！）

レッツスマイル、レッツスマイルへこたれない

毎日Happy maker！（イエイ！）

大丈夫大丈夫楽しんで

無敵さ元気なぼ〜くたち（イエス！）

レッツスマイル、レッツスマイル！聞こえる？

「踊れ！みんなが大好き〜！」

ウーフオー！ハイ！ハイ！ハイ！ハイ！ソレ！ソレ！ソレ！ソレ！………』

そしてみんなは飛び跳ねたりして最高に盛り上がった。

さらに曲が終わる頃に、μ's・A-RISE・ナニワオトメは混ざって中心で決めポーズをとり、周りにいたスクールアイドルもその場で決めポーズをとった。

そして曲が終わり観ていた人たちが感動に浸っている中、スクールアイドルの中心にいた穂乃果が立ち上がった。

ほかのスクールアイドルはポーズをとったまま前を見つめている。

「ネットやテレビでご覧のみなさん、私たちスクールアイドルは明後日、秋葉を中心として日本全国でライブをします！」

『スクールアイドルフェスティバル』……これはスクールアイドルだけじゃなく、みなさんにも楽しんでもらいたい……全員参加型のライブにします！

スクールアイドルフェスティバル最終日……明後日はみんなで盛り上がりましょう！

さあ、行こう！見たことのない場所へ！見たことのないステージへ！

”叶え、私たちの夢！叶え、あなたの夢！叶え、みくんなの……夢！”

そして中継が終わわり、ナオキがそれを伝えるとみんな抱き合ったり、手を取り合ったりして喜んだ。

ナオキもグラウンドに着き、ミツヒデとハイタッチした。それからナオキは、  
元へ、ミツヒデはニワオトメの元へと向かった。

みんなナオキを見ると笑顔を浮かべた。

「お疲れ様」

ナオキは笑顔でそう言った。

絵里は走ってナオキに抱きつき、ナオキは絵里を受け止めた。

そしてスクールアイドルフェスティバルの期待度はどんどん高まっていったのであつた。

次回へ続く……

## 第114話 「最高のライブに向けて！」

前回のラブライブ！

ついにスクールアイドルフェスティバルが開幕した！

スクールアイドルみんなで歌った『Happy maker!』はとっても盛り上がったんだよ！

はやくスクールアイドルみんなで、秋葉で歌いたいな……！

翌日：

明日が最終日の『スクールアイドルフェスティバル』……

それが発表されてから巷では『スクフェス』と略して言われていた。

ファンの間でもスクールアイドルフェスティバルと一々言うのが面倒でスクフェスという人が多いようだ。

話が逸れたが、この日は秋葉でのライブに備えて準備が行なわれている。

スクールアイドルの人たちはUTX前に集合。さらに参加するスクールアイドルの学校からも手伝ってくれる人が来てくれ、屋台などが出ていた。

まさにスクールアイドルフェスティバルという名が相応しいお祭りみたいなものになっていた。

そしてUTX前……

そこに集まったスクールアイドルは昨日より多かった。

昨日はおよそ20組だった。

だが今日は30組を越えていた。

「すごい……これだけの人が……！」

「すごいね〜」

海末とことりは集まってくれた人を見て驚いた。

「私たちの声が届いたんですよ……きつと……！」

マチコがそう言うのとみんなは顔を合わせて笑いあった。

「そろそろ時間じゃない？」

ツバサは腕時計を見て言った。

「あ、そうですね。じゃ、穂乃果……」

ナオキはそう言うのと穂乃果にメガホンを渡した。

「うん！」

えくみなさん、こんにちは！このライブはみんなで作り上げていくライブです！みんなで最高のステージを準備して、最高のライブを作り上げていきましょう！」

穂乃果がスクールアイドルに向けてメガホンを通して言った。

「お姉ちゃ〜ん！」

「あ、雪穂！手伝つてくれるの〜？」

雪穂が上の通路から手を振って穂乃果を呼んだ。

「う〜ん！」

「もちろんで〜す！」

雪穂の横には亜里沙がいて叫んだ。

「でも、私たちまだスクールアイドルじゃないけど手伝つてもいいの〜？」

『大丈夫！』

雪穂がそう言うとその場に集まったスクールアイドルみんなが声を合わせて言った。

「よお〜し！みんな、頑張るぞ〜！」

『お〜！』

穂乃果が掛け声をあげるとみんなが拳を突き上げた。

そして準備が始まった。

くラブライブ！（スクールアイドル）く

「よっ、雪穂ちゃん、亜里沙ちゃん」

「あ、ナオキさん！」

「お義兄ちゃん！」

ナオキは雪穂と亜里沙の元に行き、2人はナオキを見ると笑顔で近づいてきた。

「ありがとうな、手伝ってくれて」

「いえいえ！これくらい大丈夫です！」

「私たちもスクールアイドルになるんだもん！やって当然だよ！」

「ははは、そうだな……」

「そういや2人の音ノ木の制服姿は初めて見たな……？」

ナオキはふむ……と2人の真新しい制服姿を見つめた。

「そんなに見ないでください／＼／＼」

雪穂は照れて手で体を覆った。

「お義兄ちゃん、似合ってる？」

亜里沙は乗り気で両手を広げて言った。

「ああ……2人とも似合ってる！ハラシヨー！」

ナオキは親指をたてて言った。

「えへへ♪」

「あ……ありがとう……ございます……／＼／＼／＼」

雪穂は顔を赤くして頬をかきながら言った。

そのとき……

ドスツ！

「ぐほっ……！え……絵里!？」

絵里がナオキの脇腹を殴った。そのあと絵里はジト目でナオキを見た。

「なに年下の子を口説いてるのよ？」

「口説いてないし！おれはただ2人の制服が似合ってたから……」

「言い訳はいいからはやく準備しに行くの！」



「……………はい……」

「じゃあね、亜里沙、雪穂ちゃん」

絵里は2人に笑顔で言った。

「は……はい……」

「うん！」

「さ、行きましょう。ナオキ」

「はい……」

絵里は怖い笑顔でナオキの腕を引っ張って行った。

亜里沙は手を振っていたが、雪穂は顔を真っ青にしていた。

くラブライブ！（雪穂・亜里沙）く

それから準備は着々と進んでいた。

建物から垂れ幕をおろしたり、辺りに風船などを取り付けたりして、秋葉は大きなステージへと変わっていった。

「お願いしま〜す！」

「このライブは全員参加型のライブです！是非参加してください〜い！」

「よろしくお願ひしま〜す！」

「ありがとうございます！」

さらにチラシを通りかかった人に配り声もかけた。

「ふ〜！ふ〜！」

花陽は必死に風船を膨らましていた。

「これあるわよ？」

真姫は花陽にバルーンポンプを見せた。

「ふええ！」

花陽はあることに驚いて風船を飛ばしてしまった。

「いらっしやいませ〜！」

「スクールアイドルが考えたオリジナルメニューはいかかですか?」

凵とにこは屋台の店番をしていた。

そこではスクールアイドル考案のメニューが売られていた。

「あゝ」

「この白米スムージーってなんですか?」

「えっ…!? (り…凵…説明できる!?)」

「(え…:…えつと…:…) み…:μ sの小泉花陽が考えた白米のスムージーですよ!」

「(そのまんまじゃない!)」

にここと凵はアイコンタクトで話した。

凵の説明を聞いた学生はキョトンとしていた。

「に…:にこが考えた桃のスムージーは…:…いかがですか?」

にこは焦ってメニューのにこが考えたものを指さした。

「は…:白米スムージー下さい!」

「私は桃のスムージーを!」

「ありがとうございます!」

「やった〜!花陽ちゃんの考えたスムージーだよ?これは飲まなきゃだね!」

「(この人花陽推しだ…:…)」

「この人かよちん推しだにや……」

「……………」

海未は大きな紙を前に精神統一していた？

「……………てやあああああ!!」

そして目をくわつと開くと筆を手につつてなにか文字を書き始めた。

『愛弗』

これを右から書いて、ふう〜と汗を拭いた。

「これ………本当に掛けるの?」

にこはそれを見て驚いた様子で言った。

「はい!」

「やつほ〜みんな〜!ハツチャケてるかい?」

なんとここ秋葉と日本全国でスクールアイドルがライブをしてくれるんだって!

楽しみだね!楽しみだね!ワクワクするね!」

アナウンサーリコは準備されている秋葉の様子を中継していた。

そして夕方頃まで準備は続いた。

綺麗な夕日が秋葉を照らしていた。

「あとは空気を入れてこれを立てるだけやな」

「そうだな。」

よし、おれたちは紐を持つからナニワオトメのみんな空気を入れてくれ」

「「「は〜い」」」

そして仕上げにナオキとミツヒデと英吉とイズミは透明な大きなハート型のバルーンの上に付いていた紐を持ち、ナニワオトメの5人はその下から空気を入れる準備をした。

「よし、行くぞ〜！」

「「「せ〜のっ！」」」

4人がそう言って紐を引っ張った。それと同時に空気が入られた。

そして透明な大きなハート型のバルーンは立ち上がった。

中には赤と黄色の風船が入っていた。

『お〜！』

パチパチパチ…

みんなそれが立つと拍手をして、喜びの声をあげた。

「これでよし……」

「こつちもOKやぞ〜!」

4人は紐を括った。

ナオキは、sのメンバーが集まっているところに向かって歩いた。

「できた〜!」

「ところどころ曲がつてたりするけどね…」

「これも味でしょ? 手作り感が出ていいじゃない」

「ええ…」

「みんなで作ったステージでライブをする……!」

「テンション上がるにや〜!」

穂乃果・絵里・ツバサ・希・凜はステージを見て言った。

「でもなんか練習したくなっちゃうね」

「え!?!今からですか!?!」

「こつちがそう言うのと海未は驚いた。」

「もう日も暮れてきたし、A—RISEやナニワオトメも急には無理でしょ？」  
にこは言った。

「別に構わないが」

「ウチらもええで〜」

英玲奈とユキはにこに言った。

「いいね〜！」

「そうだな」

穂乃果とナオキは言った。

そして穂乃果がみんなに向けて喋りだそうとするとぎざぎざしていたみんなが穂乃果の方を向いた。

「よお〜し！明日に備えてみんなで練習だ〜!!」

『お〜!!』

穂乃果が拳をあげるとみんなも拳をあげた。

「よ〜し！頑張るぞ〜！」

「A—RISE・μ・s・ナニワオトメに付いていくぞ〜！」

「私だつて！」

穂乃果はそんな声を聞いて俯いた。

「穂乃果……」

絵里は穂乃果を見て言った。

ポン…

「っ……！ナオキくん……!?!」

ナオキはそんな穂乃果の肩に手を置いた。

「最後を伝えるのはまだだ……」

今はこのライブに集中しよう……」

「……そうだね……」

ナオキと穂乃果は小声で話した。

パン！

「よし、まずは配置の確認からしましょう！みんな、配置に着いて！」

『はいー！』

ナオキはそれから手を叩いて言うどみんなが返事をした。

それから位置の確認とともに練習をして日が沈むころには解散をした。

その日の夜…



μ sのメンバーはみんな気持ちを引き締めていた。

高坂宅…

「お姉ちゃん、いよいよだね…！」

「うん！頑張りなさい！」

「穂乃果、明日は私もお父さんも参加するからね！頑張りなさいよ！」

「うん！ありがとう！じゃあ、もう寝るね！」

「じゃ、私も寝ますか…」

「ええ…おやすみ」

「おやすみなさい」

穂乃果と雪穂は自室へと足を進めた。

穂乃果の部屋…

「……………言わなくてよかったのかな…………？」

穂乃果は夕方にスクールアイドルたちに解散すると伝えなくてよかったのか悩んでいた。

「でも、最後を伝えるのは…最後を伝えるライブで……だよね……」  
そうだ最後を伝えるライブをすることを決めていた。だから最後を伝えるのはそこ  
でいい……そう決めた。

「よし、明日に備えて寝なきや！」

穂乃果は布団に入った。

くラブライブ！（穂乃果）く

園田宅…

ブン！ブン！ブン！

海未は庭で素振りをしていた。

「海未さん…」

「あ、母上…」

すると後ろから撫子が海未に声をかけた。

「明日はライブなのでしよう？早く寝ないといけませんよ？」

「はい…わかりました……」

海未は汗を流すためにお風呂場に向かおうとした。

「海未さん……」

「はい？」

「……緊張しているのでしょうか？」

「つ……はい……まあ……」

「大丈夫ですよ、海未さんたちなら」

「ありがとうございます……」

「ライブ……私も参加しますからね」

「つ……本当ですか!？」

「はい、だから素晴らしいライブにしてくださいね」

「はい、わかりました！」

海未は嬉しそうにお風呂場に向かった。

「世話の焼ける娘だこと……」

そう言つて撫子は自室に向かった。

くラブライブ！（海未）く

「すう……すう……すう……」

ことりはもう眠りについていた。

ガチャ…

「……寝てるわね……」

すずめはことりが寝ているのを確認すると明日に備えて寝ることにした。

「……行ったかな？えへへ……」

ことりは狸寝入りをしていたようで起き上がった。

くらぶライブ！（ことり）く

小泉宅…

「う……う……う……」

「ん？真姫ちゃん寝れないの？」

「そ…そんなんじゃないわよ／＼／」

「真姫ちゃんはライブ楽しみなんだよね」

「ま…まあ…／＼／」

「凜も楽しみだにや〜！」

凜はそう言うのと真姫に抱きついた。

「ちよつと凜！／＼／」

「じゃあ私も〜」

「花陽まで〜／＼／」

「ふふふっ…」

3人は抱き合い笑いあった。

くラブライブ！（真姫・凜・花陽）く

矢澤宅…

にこは自室で窓の外を眺めていた。  
いよいよ明日はとても大きなライブが開催される。  
そのため、気を引き締めていた。

東條宅…

希は机の上にタロットカードを広げて明日のライブのことを占っていた。  
そして希は1枚のカードを引いた。

「戦車…成功…ナオキくんと同じやね」

希はそのカードを見てにっこりと笑った。

く（にこ・希）く

香川宅…

ナオキ・絵里の部屋…

「いよいよだな…」

「うん………」

「ははは…やっぱり緊張するな」

「ふふっ…そうね。スクールアイドルの輝きを伝えるためのライブ…」

私たちスクールアイドルの最高のライブにしたい…！」

「ああ…おれも頑張らなくちゃな」

「うん…頑張つてよね…ちゅっ…」

絵里はナオキの頬にキスをした。

「ああ…任しとけ」

「あ、そうだ。明日の曲聞いてみない？」

「ナイスアイデア」

そう言つてナオキはウオークマンを取り出して、絵里とイヤホンを片方ずつにつけて明日披露する曲を聞いた。

ほかのみんなもイヤホンをして、明日の曲を聞いていた。

そしてそれは、s全員が思ったこと。

いや、思い出していた。

この歌は“あるとき”に聞こえたあの歌なのだ……

『ラフランラーンラフランラーン

ラララララララ

ラララーラララーララララララ

ララーラーラー

ララランラーンララランラーン

ラーラーラーラーラー

ラーラーラーラーラーラーラララララーララー』



次回へ続く……

第115話（歩むべき道は章末回）「スクールアイドルの  
最高のライブ〜SUNNY DAY SONG〜」

前回のラブライブ！

おれたちは翌日のスクールアイドルフェスティバル最終日に向けてライブのステージを作った。

そしてついにその日を迎えた。

みんなで歌う曲は……

あのときの歌だった……

チュンチュンチュン……

スクールアイドルの最高のライブ……スクールアイドルフェスティバル最終日の朝

……

穂乃果は目を覚ました。

カーテンを開けると気持ちいい日差しがさしていた。

「ん〜！いい朝だ〜！」

穂乃果は窓の外を見て体を伸ばした。

ガラガラガラ：

「お姉ちゃ〜ん！そろそろ起きないと………つて起きてる!？」

穂乃果が外を見ていると雪穂が起こしに来たが、穂乃果が既に起きていることにびつくりした。

「大事な日なんだから起きれるよ！」

「つたく……雪穂も早くしないと」

「あ、私は今から亜里沙と行くから先に行くね」

「え〜！一緒に行こうよ〜！」

穂乃果がそう頬を膨らますと雪穂はフツと笑って後ろを向いて言った。

「最後までらい……10人で行ったら？」

「つ……雪穂……！」

穂乃果は目をうるうるさせた。

「つ……じゃあ、また／＼／＼」

雪穂は顔を赤くしてドアを閉めた。

「よしー！」

そして穂乃果は気合を入れて制服に着替えた。

そして穂乃果はあることを考えていた。

「穂稀さん、見てくれてくれるかな……？」

そう言って穂稀に返せていないマイクを見た。

くライブライブ！（穂乃果）く

ガラガラガラ……

「いつてきまぐす！」

高坂穂乃果、μ、sの発起人にしてリーダー。

「おはよう、穂乃果ちゃん！」

「昨日はよく眠れましたか？」

南ことり、穂乃果に続いて2番目にスクールアイドルを始めることを決めた。  
園田海未、ことりに続いて3番目にスクールアイドルを始めることにした。

この3人からμ、sは始まった。

「うん！じゃあ行こう！」

穂乃果がそう言うのと3人は集合場所のUTXに向けて歩き出した。

「今日は晴れてよかったね」

「うん、いいライブになりそう！」

「あ、お〜い！」

「穂乃果ちゃ〜ん！」

「ふふっ……」

星空凜、小泉花陽、西木野真姫、花陽が、sに入ることを決めたことにより凜と真姫も、sに入ることにした。

この6人で、sの活動はさらに活発化していった。

「あ、おはよう！」

「3人一緒なんだね！」

「うん！昨日はかよちんの家に泊まったんだよ！それに誰かさんが寝れないって言うから……」

凜は真姫をニヤけた顔で見た。

「べ……別にそんなんじゃないわよ！ただママが泊まっていいって言うから……／＼」

真姫は顔を赤くして逸らした。

「ママ……?」

「真姫ちゃん!」

「ママ!」

道路の向こうから可奈子がこっちに向かって手を振っていた。

「ライブ、みんなのお母さんたちも連れて参加するからね〜!」

「それってママライブう!?!」

花陽は可奈子の言葉を聞いて驚いた。

「そっういえばうちのお母さんも参加するって言ってたよ」

「はい、私のところもです」

穂乃果と海未は言った。

「さ、早く行きましょう!」

真姫はそう言って歩き出した。

「あ、待ってにゃ〜」

みんなも真姫に続いて歩き出した。

海未は可奈子に一礼してから歩き出した。

「あれは……絵里ちゃん！」

「穂乃果、みんな、おはよう。今日は張り切って行きましょう！」

絢瀬絵里、最初はμ、sの活動を否定したりするも最後は自分の本当にやりたいことを見つけてμ、sに入った。

「おっ、だれも遅刻しなかったみたいやね」

東條希、絵里が入ると同時にμ、sに入ったが、実はμ、sという名前を決めていたりとμ、sを裏から支えていた。

「あれ、ナオキくんは？」

「ナオキならお腹が痛いからまた追いかけてくるそうよ」

「あはははは……」

穂乃果はそれを聞いて苦笑いした。

「それならにこちゃんは？」

真姫は髪の毛をクルクルさせて言った。

「ふふつ……にこならきつと誰よりも早く待つてると思うわよ？」

「ふふつ……そうやね」

そして8人は歩き続けた。



「あ、にこちゃんいた！」

にこはシャッターにもたれて腕を組んで待つていた。

「んんん!!遅い！」

矢澤にこ、μ、sが所属する音ノ木坂学院アイドル研究部の部長でアイドルの想いは誰にも負けない。にこはずっとこんな素敵な仲間との出会いを待つていた。

この9人がμ、sの女神たち。

「にこちゃんが早すぎるんだにゃ〜」

「いいじゃない！ライブ当日なんだからあーでもあと1人足りないけど？」

にこはあと1人足りないと気づくと辺りを見まわした。

すると……

「はあ……はあ……はあ……すまん……お待たせ……」

香川ナオキ、μ、sのTHE<sup>戦</sup>CHARIOT<sup>単</sup>。ナオキのその援軍的存在によりμ、

sは成功すると希の占いで出て、μ、sをずっと裏から支えていた。そして音ノ木坂学院に転入するとともにμ、sに最後に入った。

この10人が音ノ木坂学院スクールアイドルμ、sだ。

この10人で数々のことを乗り越え、達成した。

「お腹は大丈夫なの？」

「ああ、大丈夫だよ」

絵里とナオキは言った。

「これで、sは全員揃ったわね」

「さ、行こうか。みんなが待ってる」

ナオキがそう言うのと9人は頷いた。

「ええ……未来のラブライブ！のため、スクールアイドルのために、全力を尽くしましょうー！」

絵里はみんなを見て言った。

「絵里ちゃん……！」

穂乃果は目をうるうるさせた。

「よくし！UTXまで競争！負けた人ジュース奢りね〜！」

絵里はそう言うのと走り出した。

みんなその言葉に驚いた。

「絵里ちゃんずるいにゃ〜！」

「負けへんよ〜!」

そしてみんな次々と走り出した。

穂乃果はそんなみんなの背中を見ると走り出そうとした。

すると……………

穂乃果の目の前を1枚の花びらが通った。

穂乃果は目でその花びらを追った。

「この花びらは……………」

穂乃果は地に落ちた花びらを拾って見つめた。

その花びらは穂稀と再会したとき、あの花畑で舞っていた花びらと同じだった。

『飛べるよ』

「っ……………」

穂乃果はその花びらに穂稀の顔がうつったような気がした。

「そうだ……………私たちは……………スクールアイドルは……………」

そう言つて穂乃果は走り出した。

『飛べるよ！』

いつだって飛べる！

あのことろのように!!」』

穂乃果は時々ジャンプしたりしながら走った。

そして穂乃果がメインステージのある通りに差し掛かったとき……………

「穂乃果!」

「ん?」

穂乃果は絵里の声に反応して立ち止まった。

「つ…………!?!」

穂乃果は目の前に広がる光景に目を丸くした。

なぜなら………

そこには明らかに昨日集まったよりはるかに多いスクールアイドルがいて、みんな同じような衣装を着ていた。

ざつと5、60組はいた。

準備だけは参加出来なかった人たち、そして4、5の声を聞いて集まった人たちも加わった。

その中にはもちろん雪穂や亜里沙もいた。さらにはヒフミたちもいた。

「こんなにくさん………!」

ここはその光景に目をうるうるさせて言った。

にこや穂乃果だけではない、10人みんながその光景に感動していた。

「みなさんの声を聞いて」

「こんなけの人数が現地に集まったんや」

マチコとヤマトは言った。

「凄い……!」

「これだけたくさん……!」

花陽と凜は言った。

「さ、いつまでその格好のままにいるつもりなんや?」

「早く着替えて来てくださいよ」

ユキとマチコは言った。

「うん、そうだね!さ、行こう!」

穂乃果がそう言うとなオキ以外の9人はUTXに向けて歩き出した。

「ナオキは男やからこっちやぞ」

「おう」

ナオキはミツヒデに連れられて男子の着替えるコーナーに向かった。

くラブライブ!（スクールアイドル）く

そして、sも着替え終わり、どんどん開始時間が近づいてきていた。ナオキはさつきいた場所でみんなを待っていた。

「おーい！ナオキくーん!!」

穂乃果が手を振ってナオキの方に走ってきた。

「おっ、準備できたか？」

「ええ！みんなバッチリよ！」

絵里はウインクして言った。

みんな今回の衣装を身にまとっていた。

「みんなかわいいぞー！」

ナオキがそう言うともんな照れた。

10人が来たのを見るとA―RISEがスクールアイドルの先頭に出てきた。

するとスクールアイドルたちは左右に分かれてメインステージへの道をあけた。そのあとA―RISEもよけた。

「ハラショー……！」

ナオキはそのステージへと続く道を見て感動した。



「さあ、時は来たわ！」

「大会と違って今はライバル同士でもない！」

「我々はひとつ！」

『私たちは、スクールアイドル！』

あんじゅ、ツバサ、英玲奈は力を入れて言ったあと、スクールアイドルみんなが声を合わせて言った。

「つ……うん！」

みんな、今日は集まってくれてありがとう！いよいよ本番です！私たちは飛べる！どこまでだって行ける！どんな夢だって叶えられる！

さあやろう！限られた時間の中で精一杯輝く、スクールアイドルの素晴らしさを……伝えるために！！

『お……！』

穂乃果が力いっぱい昇っていた太陽輝きに手を向けてから握ってそう言う、みんなが拳をあげて声をあげた。

「さあ、s……このステージへと続く道を進んで！」

ツバサは手を広げてメインステージに左腕を伸ばした。

「さあみんな……行くこう！」

ナオキがそう言うのと9人は頷いた。

そして穂乃果を先頭にμ，sはメインステージへ向けて歩き出した。

みんなそんなμ，sを笑顔で見つめた。

上空では中継用のヘリコプターが飛んでいて、周りに空を飛ぶ小型のものを合わせて何台もカメラがあった。さらに色とりどりの風船が辺りに付いていたり浮かんでいた。りしていた。

μ，sはメインステージに向けて一歩また一歩と近づいていった。

そしてμ，sはメインステージに立った。

「さあみんな……やるよー！」

穂乃果がそう言うのと10人は手をピースの形で前に出して合わせた。

そしていつもの点呼！

を  
す  
る  
は  
ず  
が  
……  
……  
……

ポン……

「っ……ミツヒデ!? 英吉、イズミも!」

するとナオキの肩にミツヒデ・英吉・イズミが手を置いた。

ほかのメンバーの肩にもほかのスクールアイドルが手を置いた。

「さあ、掛け声しようや」

「お前らだけずるいやんけ」

英吉とイズミは言った。

「ふふっ……そうだな。穂乃果ー」

ナオキはその言葉を聞いて穂乃果の方を向いた。

「……ううん、掛け声をかけるのは私じゃダメだよ」

「は? お前何言って……」

穂乃果の言葉にナオキは驚いた。

そしてナオキがみんなを見るとみんなナオキを笑顔で見つめた。

「何言ってるやよ。ナオキがふさわしいやろ?」

次期ラブライブ! 運営委員会会長さん……」

「なっ……なんでそれを……!?!」

「今の会長さんから聞いたんやよ」

「おじさんかよ……」

「ははは……だからお前がふさわしいんやよ」

ミツヒデとナオキは話した。

「そうね。穂乃果が、sのリーダーなら、ナオキはスクールアイドルのリーダーね」

「おれが……スクールアイドルの……!?!」

ナオキは目をうるうるさせて言った。

「そうやで」

「だから掛け声は頼んだわよ」

希とにこは言った。

そしてナオキは決意の表情を浮かべた。

「よし、みんな！スクールアイドルの素晴らしさをおれたちのこのライブで伝えよう！

このスクールアイドルフェスティバルを最高のライブにするぞ!!」

ナオキがそう言葉をかけるとみんなが頷いた。

その模様はしっかりとカメラに映っていた。

それはまるで大きな星。

スクールアイドルの大きな星。

「いくぞぞ!!」

スクールアイドル………」

ナオキがそう言うのと秋葉にいる人たちも全国の人たちもみんな手を下に下げた。

『ミュージック………スタート!!』

そして全員が一齐にそう言っ手て手を振りあげた。

そして全員が配置についた。

ナオキはメインステージのハート型のバルーンの後ろの幕の後ろに設置されている

機材席に、 $\mu$  sはメインステージに待機した。

UTX前のカメラはミツヒデ、メインステージの前のカメラはイズミが担当した。英吉や運営委員会から派遣されたスタッフもカメラを持って所々に散らばっていた。

「みなさん、お待たせしました！今日はスクールアイドルフェスティバル最終日！全国のスクールアイドルで1つの曲を歌います！みなさんも楽しんで歌って踊ってください！この曲は今のこの天気とスクールアイドルにぴったりの曲です。せくの！」

『SUNNY DAY SONG!!』

ナオキがそう言うともんなが声を合わせて言った。

メインステージでは $\mu$  sに向けてほかのスクールアイドルが待機、UTXではA—RISEとナニワオトメに向けてほかのスクールアイドルが待機していた。

スクールアイドル以外の現地参加者の中にはアメリカで出会ったあの女の人たち、絵里・希・ナオキ以外の $\mu$  sの親、近所の人たちもいた。

そしてついに曲が始まった。

イントロが始まるとスクールアイドルが目を瞑って下を向いて待機する中、花陽と希

が手を広げて左右に広がり、続いて海未が手を下に広げてしゃがみ、さらに続いて絵里と凜が手を広げて左右に広がり、続いて真姫が上に手を広げてしゃがみ、そしてことりが右手を、にこが左手をその場であげた。

すると後ろを向いて待機している穂乃果が見え、イントロがこれから盛り上がる時に穂乃果は両方の人差し指を上下に振り体をひねった。

イントロが盛り上がると、μ'sは広がり、そのほかのアイドルはその場で踊った。

そして手拍子するところではみんなが揃って手拍子をした。

曲のメロデーが始まる前には全員が一回転した。

そしてカメラはUTXを映した。

「楽しいねこんな夢

笑顔で喜び歌おうよ」

それがくはじまりの合図！」

「「「一歩ずつキミから 一歩ずつぼくから

どこかへ行きたい心のステップ」

まずはA-RISEとニワオトメが歌った。

そしてカメラはメインステージに切り替わった。

「「うけとめてあげるところで」





SUNNY DAY ウオウ！ソングパワ〜！（パパン！）  
 サビのときはみんなが同じダンスを合わせて踊っていた。

まずは両方の太ももを2回叩いて上に腕をあげるのを2回繰り返し、そしてそのまま腕を右、左、右、左、右、左（最後の4回は早め）に振り、続いて斜め右上に向かつて両方の人差し指を立て（某三代目のやつてるものみたいなもの）、それを次は斜め左上にして左にはねながら進み、続いて右腕を前に出して次に右腕を後ろにして左腕を前に出して右腕を前に出しながら右側に回して右にはねながら進んで、途中で両手を広げて右手を4回振って両腕を下げて肘を曲げてガッツポーズしてから胸の周りで両腕を2回まわして、右手をピースにして頭の上まであげて三の形にしてまたピースにしてから拳を握って肘を曲げて、回りながら手を広げて頭の上にあげて2回手拍子、そしてまた右手をピースにして頭の上にあげて三の形にしてまたピースにしてから拳を握って肘を曲げて2回手拍子した。

「元氣出るこんな夢

あれこれみんなでかたろうよ〜

それは〜つながりのサイン

「2歩目はしつかりと3歩目は大胆に

恐れずいけそうな予感でダ～ンス」」

まずは海未・花陽・凜・希が、次に絵里・真姫・ことり・穂乃果・にこが歌った。絵里とことりは「大胆に」のところで見えるか見えないかぎりぎりのところまでカメラに向かつてウインクして脚をあげた。なにがとは言わない。

「「「じくぶんか～ら～手をのばしたら」」」

「「もつともつとおもしろくなるよ……なるよ～！」」

そしてアングルが変わりナニワオトメとA—R—I—S—Eが歌った。

『SUNNY DAY LIFE！

SUNNY DAY LIFE！輝きになろう～

なんて言えるいまの気分をわけ～あえば～

SUNNY DAY LIFE！

SUNNY DAY LIFE！キミも踊りだす～

しあ～わせの～予感に包まれな～んでも～

(「「「「「な～んでも～」」」」」」)

でき～そうさ～(「「「「「でき～そうさ～」」」」」」)

今回のサビはスクールアイドル全員で歌ったが、2回繰り返すところはμ'sが歌った。

そして間奏に入るとみんな周りの人と手をタッチし合って思い思いに盛り上がった。

UTXではA—RISEとナニワオトメが円になって一人ひとりがまわって7人全員とタッチし合って、それがし終わると横一列に並んで踊った。

メインステージでは穂乃果以外のメンバーがV字になって、にこ・ことり・希・花陽・真姫・海未・凜・絵里と順番に穂乃果とタッチし合って、穂乃果をセンターに横一列に並んで踊った。

そしてμ<sup>4</sup> s・A—RISE・ナニワオトメ以外のスクールアイドル全員がおのおので盛り上がり、A—RISEとナニワオトメはミク・メグ・ヤマト・英玲奈・ツバサ・あんじゅ・ユキ・マチコが順番に、μ<sup>4</sup> sはことり・花陽・海未・絵里・穂乃果・凜・真姫・希・にこが順番に右脚を横に出していった。そしてみんな別々のポーズを数個とつて一回転した。

「SUNNY DAY LIFE…」

SUNNY DAY LIFE…かがやきになろう〜」

「なんて言えるいまの気分をわけあえば〜」

穂乃果以外が後ろを向いて手を背中あたりに組んでリズムにのり、穂乃果は胸のところで手を組んでから腕を前に、横に出してソロで歌って続いて海未と真姫が前を向いて歌った。



SUNNY DAY LIFE!

SUNNY DAY LIFE!輝きになろう

なんて言えるいまの気分をわけあえば

SUNNY DAY LIFE!

SUNNY DAY LIFE!キミも踊りだす

しあわせの予感に包まれなうでも

SUNNY DAY SONG!

SUNNY DAY SONG!たかく跳び上がれ

どんなことものり越えられる気がするよ

SUNNY DAY SONG!

SUNNY DAY SONG!口ずさむときは

あしたへの期待が膨らんで良い気持ち!!

「SUNNY DAY ウオウ!サンパワ〜! (パパン!)

SUNNY DAY ウオウ!ソングパワ〜! (パパン!)

「SUNNY DAY ウオウ!サンパワ〜! (パパン!)

SUNNY DAY ウオウ!ソングパワ〜! (パパン!)

「SUNNY DAY ウオウ!サンパワ〜! (パパン!)

SUNNY DAY ウオウ！ソングパワー！（パパン！）「」

『SUNNY DAY ウオウ！サンパワー！（パパン！）』

SUNNY DAY ウオウ！ソングパワー！（パパン！）『』

ラスサビが終わると、s・A・R・I・S・E・ナニワオトメが元気よく歌った。  
それに続いてみんなは手拍子をした。

『SUNNY DAY ウオウ！サンパワー！（パパン！）』

SUNNY DAY ウオウ！ソングパワー！

「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」

(パパン！)

SUNNY DAY ウオウ！サンパワー！

「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」

(パパン！)

SUNNY DAY ウオウ！ソングパワー！（パパン！）

「まだまだ～！」

『SUNNY DAY ウオウ！サンパワー！（パパン！）』

SUNNY DAY ウオウ！ソングパワー！

「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」

(パパン！)

SUNNY DAY ウオウ！サンパウ〜！

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

(パパン！)

SUNNY DAY ウオウ！ソングパウ〜！ (パパン！)』

「まだまだ〜！」

『SUNNY DAY ウオウ！サンパウ〜！ (パパン！)』

SUNNY DAY ウオウ！ソングパウ〜！

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

(パパン！) ………………』

ナオキは「まだまだ」と叫びみんな力いっぱい、元気に歌い、踊った。  
何回も、何回も。

みんなこのライブがいつまでも続くかのように思えたぐらいだ。

『…………… SUNNY DAY ウオウ！サンパウ〜！





そして曲が完全に終わると、みんな喜びの声をあげたり拍手したりした。

ナオキは成功を喜ぶみんなを幕の裏から見ている。

その裏ではナオキに向けてスタツフから拍手が送られていた。

「これほどのライブができるなんて、さすがは現会長の甥っ子だ！」

スタツフの一人、やまもとちはる山本智春は言った。

「いえいえ……私はなにも……」。

ライブをしたのはスクールアイドルのみんなですよ」

ナオキは照れながらも否定した。

「そんなことはありませんよ。」

ナオキくんは行かなくていいんですか？」

スタツフの一人、おおしまかゆみ大島冬美は言った。

「いえ……今あのスクールアイドルの輪におれは……」

ナオキの視線の先には、たくさんのスクールアイドルに囲まれて拍手を送られている

μ、sだった。

そんなとき、こっちに向かって走ってくる人影があった。

「あれは……?」

その人影は……

「ナオキ!」

「絵里!?!なにやっつてんだよ!?!」

「それはこっちのセリフよ!?!なにぼさつとしてるのよ?さ、行くわよ!」

絵里はそう言うとナオキの腕を掴んだ。

「ちよっ……行くつてどこに!?!」

「そんなの決まってるじゃない!」

みんなのところよ!?!「リーダー!」

「ちよっ……引つ張るなつて!」

絵里は笑顔を浮かべながらナオキの腕を引つ張つて走つた。

ナオキは最初は焦るも、途中から笑顔になった。

「あ、ナオキくん！」

花陽はナオキを見て言った。

「もう、何やってんのよ？」

「ここは呆れたように言った。

「遅いにゃ〜」

凜は言った。

「はやくしなさいよ〜」

真姫は髪の毛をくるくるして言った。

「待ってたんだよ〜」

「ことりは言った。

「私たちスクールアイドルのリーダーが一番遅いなんてなあ〜」

希はニヤニヤして言った。

「ふふっ……ナオキがいなくてはやちゃんと成功を祝えませんよ」

海未は言った。

「そうだよ！ナオキくんはスクールアイドルのリーダーなんだから！」

穂乃果は笑顔で言った。

「そうよ。だから遠慮なんてしないでいいのよ？」

「なっ……!? な、なんでわかった……?」

ナオキは絵里が自分の思ってたことがわかったことに驚いて言った。

「ふふっ……私はナオキの恋人よ? ナオキの考えることはある程度わかるわよ」

絵里はナオキの鼻をツンと突いて言った。

「っ……// //」

ナオキはそれをされると顔を赤くした。

「あ、なあなあえりち!」

「どうしたの、希?」

すると希が絵里の肩を叩いて言った。

「ナオキくんは頑張ったんやからご褒美でもあげたら?」

希はニヤニヤしながら浮かべて言った。

「ご褒美……? なにをあげればいいの?」

「そりやあ……ねえ?」

「……ああ、なるほど!」

近くにいたマチコはなにかに気づいたみたいだ。

「マチコ、なんかわかったんか?」

ミツヒデは不思議に思ってた。

「お兄ちゃん、それはね……ごにょごにょ……」

マチコはミツヒデに耳打ちをした。ミツヒデはその言葉を聞いて何度か頷いた。

「……ああ、なるほど」

「だからなにをすれば……?」

絵里自身はまだわかってないようだった。

「だからえりち……ナオキくんにとっての最高のご褒美は……えりちの愛のこもったキ・スやで!」

「はあ!?!?!」

希が唇を指で抑えてそう言うとナオキと絵里は顔を赤くして言った。

「おまつ……大衆の前でそんな……!?!?!」

「ナオキ……」

「な?絵里も恥ずかしいだ「ちゅっ……」ろ……」

ナオキは目を丸くした。

なぜなら絵里の唇はナオキの頬にくっついていたので。

『キャー……!』

周りのスクールアイドルは黄色い歓声をあげた。

「な……………なっ……………絵里!?!／／／」

ナオキは絵里を見ながら頬を抑えて言った。

「ナオキは……………これがいいんでしょ?」

絵里は上目遣いで言った。

「お、おう……………」

ナオキは頬を人差し指でかいて言った。

みんな笑顔を浮かべた。

「お〜い!スクールアイドルのみなさ〜ん!」

「ん……………リコねえ!?!」

ナオキが声のした方を見上げるとヘリコプターからアナウンサーリコが手を振っていた。

「写真撮るからみんな集まって〜!」

「はあ!?!いきなり……………「ほらナオキ!」ちよっ……………!?!(思いつきり胸が当たってるんだけど!?!)」

絵里はナオキにくつついた。

ほかのみんなもナオキを中心に集まった。

「なにかポーズとってよ!ポーズ!」

「ポーズだったってな……あ、なんかいいの思いついたかも」

「どうなのなの？」

ナオキがそう言うのとツバサは言った。

「ヒヒツ……みんな、手をしのカタチにしてくれ」

ナオキが笑って手をしのカタチにすると、みんなにかわかったように言った。

「いくぞ……おれがせーのって言ったら全員で『ラブライブ！』って言うんだ」

ナオキがそう言うのとみんなが頷いた。

「行つくぞ〜！せ〜の〜！」

『ラブライブ！』

パシヤ……

片付けのあと、プリントされてみんなに配られた一枚の写真には最高の笑顔で手をしのカタチにしてカメラに向かって出している秋葉に集まったスクールアイドル全員が、μ'sを中心に写っていた。



その中心にはもちろん、スクールアイドルのリーダーであるナオキがいた。

次章、完結編に続く……

The school idol movie 完結編  
そして最後のページには  
第116話「祭りのあと」

ついに……

ラブライブ！1人の男の歩む道

The school idol movie 編……

完結編突入……

みんなで叶える物語……

9人の女神、『μ s』との物語は終わりを告げる……

ラブライブ！運営委員会本部……

大広間……

スクールアイドルフェスティバル最終日の翌日、ライブに参加したスクールアイドルは集められていた。

みんなオシヤレをしていた。

遠くから来た人たちや借りたい人たちはドレスなどを貸し出されていた。

だが中には用事があり、参加出来ない人たちもいた。

そしてその中にはテレビ局の人や新聞記者もいた。

コンコンコン……

ラブライブ！運営委員会会長の伊藤晋三はマイクを軽く叩いた。  
みんなはその音を聞いて晋三の方を見た。

「え、今日は集まってくれてありがとう。そしてライブお疲れ様。とてもいいライブだった。」

日本全国だけでなく、世界中からも感想が届いているぞ。端の方に展示してあるからまた見ておいてくれ。

さて、今日はみんなたくさん食べて、飲んで、楽しんで、昨日までの疲れを癒して欲しいと思っている。

では、乾杯のあいさつを……

スクールアイドルのリーダーで……

”正式に”次期ラブライブ！運営委員会会長に決まった香川ナオキくんにしてもらおう。ナオキ、こつちに”

「はいー」

スーツを着たナオキがコップを持ってステージに向かうと大きな拍手がわいた。

「え〜どうも、音ノ木坂学院の香川ナオキです。

みなさんライブ、お疲れ様です。

ご協力いただいたみなさんもありがとうございます。

そしてパーティーを開いてくれた会長、ありがとうございます。

さて、お腹もすいたところですしはやく乾杯しましょうか。

それではみなさんお飲み物を……」

ナオキがそう言うのとみんながコップやグラスを持った。

「それでは、みんなライブお疲れ様！

乾杯!!」

『乾杯!!』

「ふう……緊張した……」

「ふふっ……お疲れ様」

ナオキは、sの席に戻り、椅子に座って疲れたように言って水色のドレスを着た絵里はそんなナオキに言った。

「でも晋三さんは太っ腹ですね。私たちのためにこのようなパーティーを開いてくれるなんて」

青い着物を着た海未は周りを見て言った。

「ほんとだよ〜！チーズケーキもおいしい♪」

白いドレスを着たことりは幸せそうに言った。

「料理もとっても美味しいし！」

「頑張つてよかったにや〜！」

オレンジ色の着物を着た穂乃果と黄色のドレスを着た凜は言った。

「やっぱり白米は最高です！」

緑色のドレスを着た花陽は幸せそうに言った。

「お肉も美味しいで！」

紫色のドレスを着た希は言った。

「もつと落ち着きなさいよ……」

赤いドレスを着た真姫はそう言つて水を飲んだ。

「う〜ん……なんだか落ち着かないわね……」

ピンク色のドレスを着たにこは言った。

「にこはレンタルしてたもんな」

「ええ……はじめてこういうの着るし、それにこんなパーティーも初めてよ」

「ははは……ま、いいんじゃないね？」

「う〜……でもちゃんと似合ってる？」

「ああ……似合つてると思うぞ？」

「そ……そう、ありがとう／＼／＼」

にこは顔を赤くした。

「はい、ナオキが好きそんなもの入れてきたから」

「おつ、ありがとう絵里！いただきまく」「ちよつといいですか!？」す……はい?」

ナオキが食べようとするところある新聞記者が声をかけてきた。

「次期ラブライブ！運営委員会会長の香川くんにお話を伺いたいんですが?」

「でも今から飯を……」「私も!」ふあ!?!」

次はテレビ局の人が話しかけてきた。

そしてたくさんの人がナオキにインタビュを申し出てきた。

「あは……あははははは……」

ナオキは結局インタビュを受け入れた。それは空腹との戦いだった。

負けないでナオキ！私信じてるから！

次回、『ナオキ、空腹で倒れる』

デユ（殿）



くラブライブ!?(ナオキ)く

なんで叩くんだよ……いつて……

「はあ……」

ナオキはさつきより疲れたようで椅子にもたれた。

「お疲れ様……」

「はははは……超疲れた……」

ナオキはそう言ってコーラを飲んだ。

「はい、今度こそ……」

「ああ……いただきます」

ナオキは疲れ気味に料理を口に運んだ。

「どう?」

「美味しいです……」

ナオキはその後まばくぱくと料理を口に運んだ。

みんなそんなナオキを見て笑顔を浮かべた。

「よお、ナオキ」

「ごくつ……よお、ミツヒデ」

ナオキが料理を食べているとミツヒデが声をかけた。隣にはマチコがいた。

「まずは正式決定おめでどう」

「おめでどうございます！」

「ありがとう2人とも」

「さつきもマスコミに人気だったな？」

「ははは……はあ……」

「お疲れみたいですわ……」

「ああ……疲れた」

「ははははっ、おれらは戻るわ。じゃあな」

「おう」

ミツヒデは手を挙げてマチコと一緒に席に戻った。

それを見るとナオキはまた料理を食べだした。

それからしばらく経ち、ナオキがお腹いっぱいになると、sは立ち上がってスクー

ルアイドルのみんなや協力してくれたスタッフにあいさつに行き、感想にも目を通した。

それが終わって席に戻ったみんなはあまり話さずにどこか深刻そうな顔をしていた。

それは……………

『「これから」の活動も楽しみにしています!』

「はあ……………」

「ねえ、ナオキくん……………」

「ん?」

ナオキがため息をつくと穂乃果が言った。

「本当にまだ言わなくていいの?」

「みんなでライブで言おうって決めただろ？」

「でも……」

「いいかみんな。伝えるのは最後を伝えるライブで……わかってるな？今は苦しいと思  
うけどな」

みんな、ナオキの言葉に頷いた。

トントン……

「ん、おじさん……」

「お話中失礼……ナオキ、しめのあいさつも頼めるか？」

「え、なんで!？」

「……そこでライブの宣伝でもすればいいんじゃないか？」

「っ……おじさん……」

「さ、前に……」

「わかった……いってくる」

みんなナオキを笑顔で送り出した。

「えくみなさん、そろそろ時間になってしまいましたので一度こちらにご注目下さい」

ナオキがそう言うときみんなナオキの方を向いた。

「ありがとうございます。」

さてみなさん、今日は楽しんでくれましたか？」

『はい！』

「ははは……それはなにより。」

それで……1つ私からお知らせがあります！」

ナオキがそう言うときみんなはざわざわしだした。

「私たちμ sは……3月31日に先日第2回ラブライブ！の本戦が行われた会場でライブをします！その名も……」

『μ s Moment Shine』です！」

『お〜！』

ナオキがそう言うときみんな驚きの声をあげた。

「さらに今回は中継をつないでライブビューイングも行います！」

みなさん、お楽しみにしてください！」

ナオキがそう言うときみんな拍手して、さらにμ sは決意の表情を浮かべた。

「あ、そうそう。さらにもう一つ……」

この度、6月に第3回ラブライブ！が東京ドームで開催されます！  
みなさんのおかげでラブライブ！はドームでの開催が決定しました！  
本当に……ありがとうございます！」

『お〜!!』

その発表にみんなが今までより大きな声をあげ、大きな拍手をした。

「今回参加できるのはランキング上位20組……第1回と同じです！だからみなさん、頑張ってラブライブ！出場を目指しましょう！」

『お〜!』

「では、これにてパーティーはおしまいにします。ありがとうございました！」  
パチパチパチパチ……

くラブライブ！（スクールアイドル）く

みんな着替え終わって、本部の前ではミツヒデたちと々々sは話していた。

「ミツヒデ、もう帰るのか？」

「ああ……せなあかんこともあるしな」

「……そうか……」

「ライブ……ビューイングで観てやるからな！」

「ああ……ありがとう！」

「それじゃあな」

「みなさん、また会いましょう！真姫ちゃんも！」

「うん、もちろんよ」

ナニワオトメとミツヒデ・イズミ・英吉は去っていった。

「さ、おれたちも帰ろうか」

「「「「「うん！（はい！）」」」」」」

μ, sは音ノ木坂学院に向かった。

これからμ, sは最後を伝えるライブ……『Moment Shine』に向けて練習をするのだった。

次回へ続く……



## 第117話「思いを言葉に」

前回のラブライブ！

スクールアイドルフェスティバルを終えた私たちスクールアイドルはパーティーに招待されたんだ！

ナオキくんの次期ラブライブ！運営委員会会長も正式決定！

さらにさらにラブライブ！がついにドーム開催されることが決定した！

そして私たちは『μ's Moment Shine』……”最後を伝えるライブ”に向けて練習するのだった。

「よし、今日はセトリ決めだ！みんな、やりたい曲を紙に書いてくれ！」

「「「「「「は〜い！」「」「」「」」」」」

今、部室ではライブでする曲のセトリ決めをしている。

みんな、自分のやりたい曲を書いている。

「1人3曲か〜」

「ソロ曲とソロで歌いたいのとみんなで歌うので3曲……やっぱり迷っちゃうね」

「そうですね。どの曲にも思い入れがありますし……」

穂乃果、ことり、海未は言った。

「やっぱりこの曲は外せないにや！」

「あ、凜ちゃんと同じだ！」

「やった〜かよちゃんと一緒〜！」

「でも被った曲はどうするの？」

凜、花陽、真姫は言った。

「その場合はその曲をする。決選投票とかはしないから」

「つまり、私たちが歌いたい曲を歌うってことね」

「いいやん！面白そうやん！」

「そうね。ライブが楽しみだわ」

ナオキ、にこ、希、絵里は言った。

「あ、そうだ。あと新曲もいくつか考えてあるし、真姫の作ってたあの曲をしようとも思ってる」

「そうなのですか？なら私も詩をまとめておかないといけませんね」

「ああ、海未頼んだ」

「じゃあナオキの考えてた新曲ってというのは？」

「ま、色々あってだな……あ、ユニットのもあるぞ」

ナオキはそう言うとうオークマンを取り出した。

「わくわく！聞かせて聞かせて〜！」

「凜も凜も〜！」

穂乃果と凜はナオキに詰め寄った。

「ちよつと待て！CDもあるから！そんなにくつついてくんない！」

そしてユニットに分かれて、ナオキが作ったという新しいユニット曲を聞いた。

「この曲かっこいいね！」

「うん！」

穂乃果・ことり・花陽は言った。

「いいやん！」

「テンションあがるにや〜！」

「そうですね！」

希・凜・海未は言った。

「なんかB i B iのイメージとはかけ離れてるような気がするわね」

「真姫ちゃん、そんなことないよ」

「そうね。ぴったりだと思っわよ」

真姫・にこ・絵里は言った。

「喜んでくれてなによりだ。うんうん」

ナオキはそんな9人を見て頷いた。

その後みんなが曲の候補を考えてナオキが集計した。

「うん、被りもあるけどこれでいいだろ。あとはおれが元々考えてたのと照らし合わせ  
て……」

「あ、ナオキ。ちよつといい？」

「ん、どうした？」

「あのね、みんなで決めたんだけど、こういうのはどうかなって……」

「ん？」

「はあああああああああ!?!」

ナオキの驚きの声が校舎に響いた。

く  
ラブライブ！（μ，s）  
く

その後、セトリを決定して練習を開始した。  
そして休憩中にナオキと海未は話していた。

「はいよドリソク」

「ありがとうございます」

「本当に作詞しなくていいの？」

「大丈夫です。ちゃんと今、していますよ」

海未はそう言ってみんなを見た。

「ふーん……」

「この曲は、私たち10人の、今までの思い出を、感じたことを詩にして歌いたいの」

「つ……海未……」

「ふふつ……だから練習することが作詞なんですよ」

「そうか……楽しみにしてるよ。海未の新しい詩」

「はい！必ずいい詩にしてみます」

海未はニヤツとして言った。

そして練習も再開され、時間はあっという間に時間は過ぎていった。

「そんじゃあ、これからの予定を話そうか」

ナオキはホワイトボードの横に立って言った。

「「「「「は〜い！」」」」」」

「これからは3月のライブと一緒に6月のライブの練習もしていく」

「え、なんでなんで？」

穂乃果は立ち上がって言った。

「あのねえ、4月と5月は何かと忙しいでしょう？」

「だから今のうちにしておこうってことでしょうか？」

にここと真姫は言った。

「なるほど〜」

穂乃果は左手に右手をポンと置いて言った。

「ま、そういうことで……そのときの曲なんだが……ナオキが作詞すべきですよね」「ナオキが作曲するべきよね」「ナオキくんが衣装のデザインをするべきだよね」……そうそう海未と真姫とことりの言うとお……りじゃねえ！なんでおれなんだ!?!おれ的にはいつも通りにしたいんだが……」

ナオキの言葉を遮って海未・真姫・ことりが言うとなオキは驚いてみんなを見た。

だが、みんなの顔には迷いはなかった。  
真つ直ぐとナオキを見つめていた。

「えっ……はっ……？」

ナオキは目を丸くしてみんなを見た。

「……そういうことみたいよ？ナオキ」

絵里はウインクして言った。

「おれが……作る……？最後の曲を……？」

ナオキは震え声で言った。

「それがいいと思うよ！」

「ナオキくんが適任だと思えます！」

「凜もそう思うにゃ〜！」

「ナオキくんがやらな誰がやるん？」

「そうよ。適任だと思おうわ」

穂乃果・花陽・凜・希・にこも言った。

「みんな……！」

ナオキは目をうるうるさせた。

そして決意したように拳を握った。



「よし、おれがみんなのために最後で最高の曲を作る!!絶対になつてやる!!」

みんなそのナオキの言葉を聞いて頷いた。

ナオキの目は燃えていた。

く ラブライブ! (ナオキ) く

「よし、やるか!」

ナオキは机に向かって作曲に取り掛かっていた。

(μ sの最後の曲……)

いざパソコンに向かうといつも通りに進まない。

やはりプレッシャーを感じているのだろう……

「腹へったな〜」

ふん！

「いつて!!」

なんだよそれ！もっとシリアスになれよ！

「うっせー！お前が書いてんだろ!?!」

いいから早く作曲しろ！夜食持ってきてやるから!!

「へいへい……」

ガチャ……

「ナオキどう、進んでる?」

「絵里……ああ、順調だよ。ちよつと構成を考えててな」

「そうなの?よかった」

「任せとけ！このおれが最高の曲を作ってやるからな！」

「ふふつ、頼んだわよ。あ、夜食作ったのよ」

「おつ、まじで!?!ありがとう！」

絵里は机に夜食のおにぎりを置いた。

「塩おにぎり握ったのよ。ちゃんと食べて集中してね」

「ああ、いただきます！ぱくっ……うん、美味しいよ」

「ふふっ、ありがとう。握ったかいがあるわ。私は寝るから集中しててね」

「ああ、じゃあこっち来て」

ナオキは絵里に膝の上に乗るように言った。

「うん……」

絵里はナオキの膝の上に乗った。

「おやすみ、絵里」

「おやすみ、ナオキ……ちゅっ……」

2人は唇を合わせた。

絵里はキスをするのとベッドに入った。

ナオキは唇に手を触れて少し笑ってからヘッドホンをして作曲作業に取り掛かった。

ナオキは書いた。

みんななどの思い出を、 $\mu$ 、 $s$ に対する思いを……

矢澤宅……

「……もう、終わりになるのか……」

にこは、sの集合写真を見ながら言った。

「多分終われば……もう……」

にこはそう言って窓の外空を見上げた。

次回へ続く……

## 第118話 「言葉を紡いで」

前回のラブライブ！

ついにライブに向けて動き出した私たち！

みんな意気込みはバツチリ！

練習や準備に励んでいた。

そして私は空を見上げて考えた。

「多分終われば……もう……」

チュンチュンチュン……

「ん……？ ナオキ……？」

絵里は目が覚めて隣にナオキが寝ていないことに気がついて起き上がった。

「もう、こんなところで寝て……」

ナオキはパソコンの置いてある机に突っ伏して寝ていた。

「ゆっくり寝かしてあげましょうか……」

絵里はナオキに毛布をかけて頬にキスをしてからリビングに向かった。

園田宅……

「ん……私、こんなところで……」

海未は目を覚まして、自分が机に突っ伏して寝ていたことに驚いた。

「ふふっ、でもちゃんとできましたね」

そう言つて海未は机の上にある『sの活動日誌を見た。

くラブライブ！（ナオキ・海未）く

そして音ノ木坂学院……

「どう……ですか？」

「……うん、いい詩だな！」

「ありがとうございます！」

「でも2つ作ってくるなんてびっくりだな」

「はい、1つに絞れなくて……まだ片方は未完成ですけどね」

「でもどっちもいいな……これはどっちも使いたいな」

「まあ、できなくはないわよ？」

「できるんですか!？」

「ええ、暇だったからもう1つ作ってたのよ」

「そんじゃあそうするか！」

「うん！（はい！）」

海未・ナオキ・真姫は部室でそう話して曲の整理をした。

ことり・にこ・花陽はそのあいだに衣装のチェックをしていた。

そのあいだ、ほかのみんなは屋上で練習をしていた。

「そう言えば、6月に披露する曲はできたのですか？」

海未は手を止めて言った。

「ああ……とりあえずはな。あとは確認するだけだ」

「早いですね」

「ねえ、確認のためにみんなで聞くっていうのはどう?」

真姫も手を止めて言った。

「そうだな……その方がいいかもな」

「じゃ、みんなを集めてきますね」

海未はそう言つて屋上に向かった。

「じゃ、私はことりたちを呼んでくるわ」

真姫は部室の隣の部屋に向かった。

「さて、いつ渡そうかな……」

ナオキはそう呟いてカバンの中の“ある物”をみつめた。

ガタン!

「曲が聞けるって本当!」

そのとき穂乃果が勢いよくドアを開けた。

「うお!?!びつくりした〜」

ナオキはそう言いながらカバンのチャックをしめた。

「何よ、うつるさいわね〜!」

「もうちよつと静かにできない?」



にこと真姫は少し怒りながら入ってきた。

「ごめんなさい……曲が聞けるっていうからテンションが上がっちゃって」

穂乃果は頭をかきながら言った。

「ははっ……さ、みんな座ってくれ」

みんな席についたのを確認するとナオキはパソコンから曲を流した。

♪

みんなその曲に聞き入っていた。

「……すごくいい曲ね」

絵里が目を瞑り、小さな声で言うともみんなは頷いた。

「この曲に、μ'sの全部が詰まってる」

「うん、そんな気がするね」

ことりと穂乃果は目を瞑って言った。

『START:DASH!!』とかを参考にして作ったんだ」

「そうなのですね」

海未は目を開けてナオキを見て嬉しそうに言った。

「よし、じゃあ早くこの曲で練習しよう！」

「「「「「「「お〜！」「「「「「」」」」」」」」」」」」

穂乃果が拳をあげてそう言うとき、みんなも拳をあげた。

♪

「あれ？さっきのと違う曲……？」

すると曲調が変わったので花陽は不思議に思っただけで言った。

「あつ、しまつ……！」

ナオキは慌てて曲を止めようとした。

ガシツ……

「させへんよ……？」

「希!？」

希はニヤニヤしてナオキの手首を掴んだ。

「ふふつ、もう諦めたら？」

「絵里……」

「もうこうなつちやつたら隠せないでしょ？」

「くつ……／＼／＼／＼」

ナオキは顔を赤くして逸らした。

「どういふこと？」

凜は首をかしげて言った。

「ナオキはね、実はまだ曲を作ってたのよ。アメリカに行く前にね」  
「まさか真姫も作ってたなんて思わなかったよ……あははは……」

その流れた曲は、アメリカで絵里に聞かれたあの曲だった。

「でもこの曲もいい曲ですね」

「確かに」

海未と真姫は言った。

「さ、早く練習やろうぜ！」

ナオキは音楽を止めて、パソコンを閉じて走って部室を出た。

「あ、ナオキくん待つにや〜！」

凜はそんなナオキを見て走り出した。

みんなも凜のあとに続いて走り出した。

く  
ラブライブ！（μ，s）  
く

その日からも練習は毎日のように行われた。

朝から夕方までみっちり練習をした。

みんな楽しんでいた。

もう味わうことがなかったであろうこの感覚を。

そしてついに前日……

μ s は会場となる第2回ライブ！本戦会場だった場所にいた。

「なんかここに来るのって久しぶりだね〜！」

「うん、そうだね！」

「懐かしいですね〜」

穂乃果・ことり・海未は言った。

「うう〜テンション上がるにや〜！」

「またこの舞台に立てるなんて……！」

「もうないと思ってたのにね」

凜・花陽・真姫は言った。

「さ、早く行きましょよ」

「そうやね。リハーサルの時間も近づいてきてるし」

「ふふっ、そうね。ちゃんとリハーサルしないと」

にこ・希・絵里は言った。

「よし、じゃあ行くぞ」

「「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

ナオキがそう言うのとみんな控え室に向かった。

そしてリハーサルも難なく進んだ。

♪

「うん、みんなバッチリだな！」

最後の曲の練習が終わるとみんなはその場に座り込んだ。

「ふえ〜疲れたよ〜」

穂乃果はタオルで汗を拭いて言った。



# 第119話「μ's～Moment Shine～最後を伝えるライブ」

前回のラブライブ！

ライブに向けて練習を進めていた私たち！順調に練習も進み、曲も完成！

そして私たちはライブの日を迎えた。

さあ、張り切って行くわよ！

ライブ当日……

μ'sは朝早くに会場に集合した。

昨晚や朝のニュースではμ'sのことが放送されていた。

μ'sはライブの確認をして開場の時間を待った。

「よし、みんな準備はバッチリだな」

「うん！バッチリだよ！」

「楽しみだね！」

「はい、またこの舞台上でライブができるなんて……」

「テンション上がるにや〜！」

「うん、楽しみだね！」

「もう、ちよつとは落ち着きなさいよ……」

「そういう真姫だつて楽しそうじゃない？」

「にこっちもな」

「ふふつ、結局みんなが楽しみつてことでしょう？」

ナオキ・穂乃果・ことり・海未・凜・花陽・真姫・にこ・希・絵里の順で言った。

「だつてまさかこんなことになるなんて思いもしなかったしな」

「そうですね。まさか飛行機に乗つてアメリカに行くことになるなんて思いもしませんでした」

「うん、短い間だつたけど楽しかったね！」

ナオキと海未と穂乃果は懐かしむように言った。

穂乃果の言葉に全員が頷いた。

「う〜！思い出したら早くライブしたくなつてきたにや〜！」

凜はテンションが上がって飛び跳ねた。



「まあまあ、もうすぐ本番なんだから落ち着けて」

ナオキは両手を何回か下げて凜に落ち着くように言った。

「さ、ライブの開演時間までもうすぐよ！みんなで最終確認をしましょう！」

「「「「「はい！」「」「」「」」」」」

絵里がそう言うのと9人は声を合わせて言った。

そしてμ'sは最終確認を始めた。

くラブライブ！（μ's）く

開演時間は刻一刻と迫っていた。

昼に開場されると観客がドツと流れ込んだ。

会場内は前と違って壁に覆われており、日の光が入らなかつた。

今回は第2回ラブライブ！とは違ってみんながμ'sのファン。

ライブビューイングの会場も開始を待つ人でいっぱいだった。

会場ではずっとμ'sの曲が流れていた。

そして開演まであと少しというところになった。

ステージ裏では9人は集まっていた。

「もうすぐ開演なのにナオキくんはまだなの!？」

「もう少しで来ると思うのだからけれど……」

穂乃果と絵里は不安そうに言った。

そう、ナオキはまだその場にはいない。

~~~~~

「やっべ遅れそう……!？」

まじでやばい!

あともう20分で開演なのに!!

急げ急げ!

そんなとき……

急にあたりが真っ暗になった。

「なんだよ……これ……」

そして聞こえてきたのは……

『なんでおればっかり……』

『人なんて……所詮は……』

『誰も信じられない……』

『どうせ信じたところでおれのことを裏切るんだ……』

それは、辛い過去を抱えていた昔のおれの声……

真つ暗な過去……

辛かったな……

英吉……チンギスカンはおれを救ってくれた……なのに……

おれは英吉をかばって退学した。

でも英吉とミツヒデたちは共謀していたことが判明した。

ほんとうに辛かった……

人も信じられなくなつたしな……

ほんとうに、ほんとうに辛かった……

みんなそれがナオキだと察して先にいつも通り手をピースにして合わすことにした。そしてその足音が近づくとみんなそっちの方を向いた。するとナオキが現れて息を切らしながらみんなの方を向いた。

「ナオキ、遅いわよ」

「いつまで待たせる気なん？」

「そうよ、こんな大事なライブに遅れるなんて許されないんだから」

「フアンみんなが待ってるんだよ！」

「そうよ。フアンみんなを待たせるわけにはいかないわ」

「真姫ちゃんの言う通りにや！」

「ふふっ、だからはやくしてください」

「みんなずっと待ってたんだよ！」

「さ、やろう！」

みんなナオキを見て言った。

「っ……ああ！」

ナオキは空いていた絵里と希の間に入り、手をピースにしてみんなに合わせてみんなと微笑んで見つめあった。

みんなの右手の人差し指には10色の色をした指輪がはめられていた。

「さあみんな、スクールアイドルは一瞬の輝き……μ'sはスクールアイドルだということをお支援助してくるみんなに伝えよう！」

このライブを、絶対に成功させよう！

いちー！」

高坂穂乃果……

「にー！」

南ことり……

「ざんー！」

園田海未……

「よんー！」

星空凛……

「ぱー！」

西木野真姫……

「ろくー！」

小泉花陽……

「ななー！」

矢澤にこ……

「はちー！」

東條希……

「きゆうー！」

絢瀬絵里……

「じゆうー！」

香川ナオキ……

「μ， s!!」

『ミュージックーーーーー………』

スタートーーーーー!!!』

”音ノ木坂学院スクールアイドル” μ s は一斉に手を振り上げた。

く ラブライブ！ (μ， s) く

観客の人たちははじまりをドキドキしながら待っていた。

照明が暗くなるとみんな声をあげた。

そして後ろの大きなステージにスポットライトが当たり、ナオキが現れた。

みんなナオキを見て拍手をした。

「レディースアアンドジェントルメン！お待たせしました！ついに『μ's～Moment Shine』開幕です！

今日はみなさん、存分に楽しんでいってください！

それでは、スタートです！」

『お〜！』

観客の人たちは期待に胸が膨らんで声をあげて拍手をした。

そしてスポットライトが消え、しばらくして後ろのスクリーンにはアメリカライブのときの映像が流れはじめた。

観客の人たちは歓声をあげた。

すると円型のステージの下からμ'sが待機した状態でリフトで上がってきた。

そう、開幕曲は『Angelic Angel』だ。

みんな、アメリカライブの感動が蘇っていた。

会場は揺れるほどの大きな声が響いていた。

曲が終わると次曲の長めのイントロが流れはじめ、それに合わせて体型を変えながら移動して待機した。

そしてイントロに合わせて腰を動かした。

『ファイバ〜!』

そう言うと同時に扇子を頭の上で広げた。

そのまま扇子を顔の前にしてさらに移動した。

曲名は『輝夜の城で踊りたい』。

「一緒に行くこう?」

「気づいてよ〜」

「他の人を見ちゃ嫌…!」

「私だけを見て…!」

「後悔するわよ?」

「楽しもう!」

「早くしなさいよ〜」

「鈍いのですね……」

「いいの?」

曲のラスサビ前には円型に並んで回って1人ずつ前に出てセリフを言った。

『ふふっ……』

ラストに後ろの大きなステージに両膝と両手をつけて横に並んで前を見て笑った。

そして次曲のイントロが流れはじめた。まさに『和』という言葉がよく似合う曲だ。

曲名は『だっただって噫無情』。

この曲はファイヤーアクションでイントロ、サビ、間奏、ラスサビのときに大ステージの前方から炎が上がった。

その炎の熱気は会場全体に伝わった。

「いつまでも、待っています……」

「本当に行っちゃうの?」

「夢の中でも、会いたいよ……!」

「ずっと一緒だよ」

「祈ってる……」

「気をつけてね?」

「待ってる……」

「必ず、帰ってくるのよ」

「いつかまた……会いましょう」

この曲もラスサビ前にはセリフがあり、扇子で自分を仰ぎながら言った。

曲が終わると観客の人たちは歓声をあげた。

そして照明が消えて、9人が並んでから照明がついた。

「みなさ～ん」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」

『「こんにちは～！」』

9人がそう言うのと観客の人たちは言った。

「私たち……」

「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」

『「うおおおおお!!」』

『「きやああああああ!!」』

「すごいね～！みんな私たちのファンなんでしょう？」

穂乃果は会場を見渡して言った。

「そうだね～！」

「それではいつもの自己紹介をしましょうか！」

海未はそう言うのと花陽を見た。

観客の人たちのブレードはすべて緑色になった。

「ふええ!? 私……? じゃあいくよ……すう……ダレカタステク〜!」

『ちよつと待つててー!』

花陽がそう叫ぶと観客の人たちはブレードを振って叫んだ。

「あ、ありがとうございます! 小泉花陽です! 今日怪我をしない、させないように気をつけてくださいね。」

次は、凜ちゃん!」

花陽は言い終わると凜の方を向いて言った。

するとブレードの色は黄色になった。

「わかったにや! みんないくよ〜!」

にやんにやんにや〜ん!」

『にやんにやんにや〜ん!』

「凜ちゃんと言えば〜?」

『イエローだよー!』

凜が元気よく叫ぶと観客の人たちもブレードを振って叫んだ。

「ありがとうございます! 星空凜です! 今日よろしくお願ひします! 次は、真姫ちゃん!」

凜が真姫の方を向いて言うのとブレードの色は赤に変わった。

「はいはい。それじゃあみんないくわよ？真姫ちゃんかわいい？」

『かきくけー！』

真姫は若干照れながらも言うのと観客の人たちは言った。

「よ……よくできました！西木野真姫です！今日は楽しんでいきなさいよね！次は海未

！／／／

真姫は顔を赤くしながら海未の方を向いて言った。ブレードの色は青に変わった。

「ふう……いきますよ……あなたのハート撃ち抜くぞ……ラブアローシユート！ト……ト

……ト……ト……ト……ト

『うっ！』

海未が弓の真似で前に向かって撃つと観客の人たちは胸をおさえた。

「ありがとうございませう！園田海未です！本日はどうかよろしくお願い致します！次

は穂乃果！」

海未がそう言って穂乃果の方を向いた。ブレードの色はオレンジに変わった。

「よ……し……みんないくよ……せ……のっ！」

『フアイトだよ！』

穂乃果が腕をかまえて掛け声をすると観客の人たちは言った。

「うん、ファイトだよっ！高坂穂乃果です！今日はみんな盛り上がりつつよ！次は、ことりちゃん！」

穂乃果がそう言つてことりの方を向いた。ブレードの色も白に変わった。

「よおし、いきますよ？ちゃんとライブ楽しんでくれないと……ことりのおやつにしちゃうぞ〜！」

『ちゅんちゅん！』

ことりが両手をワシ掴みのようにして言う。と観客の人たちは叫んだ。

「ありがとうございませ〜す！南ことりです！みなさん今日は絶対楽しんでくださいね〜！ミナリンスキーとの約束です！次は、絵里ちゃん！」

ことりがそう言つて絵里の方を向いた。ブレードの色は水色に変わった。

「さあ、みんないくわよ〜？かしこいかわい？」

『エリーチカー！』

絵里がそう言つて前に耳を傾けると観客の人たちは叫んだ。

「ハラショー！絢瀬絵里です！今日はめいっばい楽しんでくださいね〜！次は、にこ〜！」

絵里がにこを向いてそう言った。ブレードの色はピンクに変わった。

「は〜い！みんないくよ〜！さあ、みなさん〜一緒に！」

『につこにつこに〜!』

「大銀河宇宙?」

『ナンバーワーン!』

にこが掛け声をすると観客の人たちも一緒にポーズをとって言って、さらににこが続けて言うのと観客の人たちも叫んだ。

「ありがとうございま〜す! 矢澤にこで〜す! みんな、今日は最高にかわいいにこたちを見ていつてくださいいね! 最後は希!」

にこはそう言って希の方を向いた。ブレードの色は紫に変わった。

「ほなみんないくよ〜? 希パワーた〜〜〜つぶり注入! は〜いぶしゅ!」

『いただきました〜!』

希が人差し指を前に出してそう言うのと、観客の人たちは胸のあたりで手を組んで叫んだ。

「ありがとうございま〜す! 今日はこの希パワーで最後までウチらを応援してな〜!」

希はそう言うのと手を振った。

「はじまつたね〜!」

「あ、そう言えば穂乃果」

「どうしたの絵里ちゃん?」

「来てくれたみなさんにちゃんとようこそって言った？」

「……………あ……………」

穂乃果はやってしまったという表情を見せた。

「穂乃果……………」

海未はデコを押さえて言った。

「あはははは……………じゃあ遅れちゃったけど……………みなさん、『μ's～Moment Shine』へ……………」

「……………『ようこそ！』……………」

『うおおおおおおお!!』

「うん、これでもう忘れたことはないよね！」

穂乃果はみんなを見て言った。

「大丈夫なんじゃない？」

真姫は髪の毛をくるくるしながら言った。

「でもまたこのステージに立てるなんてすごいよね〜！」

凜は言った。

「そうね。それに、開幕曲は『Angelic Angel』……………みんなアメリカライブは観てくれたわよね〜？」

絵里は観客の人たちに聞いた。

『みたよおおおおお!!』

『ありがと〜!嬉しいな〜』

こことはみんなの声を聞いて喜んだ。

「そして2曲目と3曲目は和風っぽい曲を選びました〜」

「それにセリフもあるしね〜」

花陽とにこは言った。

「ほな、次の曲やろか?」

希がそう言うともみんな頷いて次曲の体型になった。

『おお!』

観客の人たちは移動する9人を見て期待の声をあげた。

「それでは聞いてください。『嵐の中の恋だから』」

『うおおおおお!!』

花陽が曲名を言うと観客の人たちは声をあげた。

照明が一旦消え、何本ものスポットライトがあたりを照らした。

そして歌い始めると一気にステージは明るくなった。

この曲はかっこいい曲調の曲だ。

「生まれ変わっても」

「私たちは」

「また惹かれあう」

「運命だって」

「わかってるから」

「どこまでもお供いたします」

「たとえ時代が」

「引き裂いたとしても」

「二人の愛は永遠なの」

そしてこの曲にもラスサビ前にセリフがあった。

曲が終わると次曲のイントロが流れた。

後ろのスクリーンにはハロウインにしたライブの映像が流れはじめた。

みんな合わせて手拍子をした。

そう、曲名は『Dancing stars on me!』。

ハロウインに秋葉で披露した曲だ。

その次に披露されたのは『るてしキスキしてる』だ。

「必ず努力はむくわれるわ」

「『当たって砕けろ』だよ！」

「あなたに幸運が訪れますように」

「ご武運を祈っています」

「いづくにやー！」

「がつ、頑張ってくださいね！」

「後悔するんじゃないわよ」

「ことりも、見守ってるからね」

「ウチに任しときー！」

この曲にもまたセリフがあり、みんなそれに合ったポーズをとって言った。

真姫は腰に手を置いて、穂乃果はファイトだよのポーズ、絵里と海未は服の胸のところを掴んで、凜は片腕を上にあげて、花陽はグツと両拳を握って、にこはツイントールの髪をはらって、ことりはニコツと笑顔を浮かべて、そして希はドヤ顔で拳を握った。

「逆さまの逆さまをみてごらん

好きは常に嫌いの裏」

希はそれからマイクを口に近づけて歌った。

「「「「「「愛してる……」」」」」」

『ふおおおおおおおおおお!!』

『きゃああああああああ!!』

最後に9人がステージの真ん中に集まってそう言うのと歓声がわいた。

照明が消えると9人はステージから下がった。

しばらくすると、今度は円型ステージに紫色のスポットライトがあたった。

観客の人たちはそこを見つめた。

リフトがあがってくると、ある3人の人たちが見えた。そしてイントロが流れた。

その曲は『Shocking Party』、歌っていたのはもちろんA—RISEだ。

遡ること数日前……

「「私たちのスペシャルライブ!?!」」

「はい、みんなが着替えている間に1曲披露して欲しいんです」

その日、UTX高校のカフェスペースでナオキはA—RISEと話していた。

「いいわよ。引き受けるわ」

「っ……ありがとうございます！」

「だって、最後のライブなんでしょ？ スクールアイドルとしては……」

「はい、まあ……」

「本当は、sとはまだ競いたかったけど……あなたたちが決めたことなら仕方ないわね」

ツバサはソファアーにもたれて言った。

「共に戦ったライバルのためなら」

「私たちは力を貸そう」

あんじゅと英玲奈も言った。

「ありがとうございます！」

ナオキは深々と頭を下げた。

そして今に至る……

A—RISEが決めポーズをして、曲が終わると歓声と拍手がわいた。

A—RISEが手を振るとリフトは下がっていった。

しばらくすると次曲のイントロが流れはじめてあたりをオレンジ・白・みどりのライ
トが照らした。

すると後ろの大きなステージの真ん中にことりが立っていた。

「キミに飛んでけ！好き好きふわふわ！」

すると両端から穂乃果と花陽が別々の方向から出てきた。

披露したのは『ふわふわーお！』。

歌うのは穂乃果・花陽・こどりのPrintempsだ。

曲が終わると観客の人たちは歓声をあげると照明が一旦消えた。

そして照明がつくと、3人が真ん中に立っていた。

「せくの」

「Printempsです！」

穂乃果の合図で3人が声を合わせて言った。

『ふおおおおおおお！！』

『きゃああああああ！！』

「いやあくこの曲は楽しいね〜！」

「そうだね！」

「ふわふわって言つてとつても楽しい！」

「衣装もいいしね〜！」

「わあ〜！ことりちゃんおへそみえちやうよく〜！」

「えへへ……ちよつと大胆かな？」

Printempsの衣装はピンクと白をベースにしたものだ。

「それでこれから披露する2曲は新曲なんだよね〜！」

『おお〜！』

「それでは聞いてください、『MUSEUMでどうしたい？』」

次に披露したのはナオキが作ったPrintempsの新曲の1つの『MUSEUMでどうしたい？』だ。

この曲が終わり少しすると、次曲のイントロが流れだした。

イントロの途中で3人ははマイクを持った。

曲名は『NO EXIT ORION』、これもナオキが作ったPrintempsの新曲だ。

曲中ずつと何本かの白いライトが会場を照らしていた。

最後は円型のステージで決めポーズをとった。

照明が消え、円型ステージのリフトが下がり出すと次曲のイントロが流れだした。

青・紫・黄色のライトがあたりを照らした。

その間に端から海未・希・凜が出てきて真ん中に集まった。

「「へい！へい！………へい！へい！」」

この曲は『微熱からMystery』で、歌うのは海未・希・凜のlily whitedeだ。

曲中で後ろの大ステージに移動し、ラストはまとまって決めポーズをした。

『ふおおおおおおおおお!!』

『きゃあああああああ!!』

そして照明が明るくなると、3人がまとまって立っていた。

「せくの」

「「lily whiteです！」」

凜の合図で3人は声を合わせて言った。

「さて、ついに私たちリリホワの番だにや〜！」

「え?! 私たちってそうやって略されてるんですか!？」

「あれ、海未ちゃん知らなかったん？」

「まあ………はい………すみません／＼／＼」

海未は顔を赤くしてうつむいた。

「あ、そうだ！私たちの衣装、風船が付いてるんだよね〜」

「そうそう！かわいいやろ？」

「そうですね！」

lily whiteの衣装は希は青色、海未はピンク、凜は緑の服に全員に風船が付いているものだった。

「じゃあ次の曲にいくにや！」

「次の2曲は新曲なんやよね！」

「そうなんですよね！でも1曲目のタイトルはなんて読むか最初はわかりませんでしたよね？」

「そうだよ！乙姫……心こころ？で恋宮殿……？ってなったもんね〜」

「ほんまは乙姫心おとひめはこころで恋宮殿こいきゆうでんって読むんやで！」

「どうやったらかう読めるんですかね……？」

「まあ、それは考えた本人が知ってるんやよ」

そう言つて希はナオキのいる方を向いた。

「さ、早くやるにや〜！」

「そうですね！」

そして3人は曲の体型になった。

「それでは聞いてください。『乙姫心で恋宮殿』」

希がそう言うのと照明が消え、観客の人たちは歓声をあげた。

「離さない……」

「離さんよ……」

「離しません……」

『ふふふつ……』

ラストでは3人がステージの真ん中でセリフを言って決めポーズをした。

次曲のイントロが流れ出すと凜がセンターになり、3人はマイクに持ち替えた。

「始まりですか？」

続いている曲は『春情ロマンティック』、大ステージから円型ステージに移動しながら

歌った。

サビのときには円型ステージに並んでいた。

曲のラストは円型ステージの中央で3人とも上を見上げた。

そしてリフトが下がっていくと、続いてピンク・水色・赤のライトがあたりを照らし

た。

タイミングを合わせて「へい！」と言いながらステージ横からこ・絵里・真姫が現

れた。

曲は『Trouble Busters』で、歌うのは絵里・真姫・にこのBibiだ。

この曲は会場が一体となって盛り上がった。

曲のラストでは大ステージの真ん中で決めポーズをとった。

『ふおおおおおおおお!!』

『きやああああああ!!』

そしてライトが一旦消えて、ライトがつくと3人が横に並んでいた。

「せいの」

「「Bibiです!」」

にこが合図をすると3人は声を合わせて言った。

「さて、ユニットのラストは私たちBibiだよ!」

「にこちゃんはしやぎすぎ」

「ふふつ、でもこの曲はテンション上がっちゃうわよね」

「そうよね〜!それに衣装もかっこいいし!」

Bibiの衣装は黒を特徴とした衣装でスカートのところにはピンク、真姫は赤、絵里は水色のプレートが付いていた。

「これから披露する2曲はなんと新曲なのよ！」

「でもどのユニットもそうなのよね」

「でもBiBiにはBiBiだけの魅力があるんだよ」

「そう言えば、BiBiってギャグ系のユニットなのよね」

「え？ギャグ系……？クール系の間違いじゃないの？」

「そうよ真姫ちゃん！いつからBiBiがギャグ系のユニットだと錯覚していたの？」

「ん……錯覚……？」

「そんな錯覚するなんて最低ね、イミワカンナイ……」

「でもそんなみんなが最高のよね」

「それではお聞きください……『最低で最高のParadiso』」

真姫がそう言うのと照明が消え、観客の人たちは歓声をあげた。

曲中はずっと何本かの水色・赤・ピンク色のライトがあたりを照らしていた。

曲の終わりには3人が大ステージで大きく横に広がり、決めポーズをとった。

次曲は『PSYCHIC FIRE』。

この曲中ではさつきと同じライトが上下に動いていた。

この曲では叫ぶところがたくさんあり、観客の人たちも最高の盛り上がりを見せた。

ラスサビ前には大ステージの真ん中に3人は集まった。

「あぶない恋がしたい」

「「「このころの火がもえて〜！」」」

「「『はい！』」」

3人が円型ステージに広がったあともBiBiコールがしばらく続いて、最後の12回のBiBiコールで3人は歌いだして最後には全員でジャンプして「はい！」と言った。

そしてラストに決めポーズをとると観客の人たちは大きな歓声をあげた。

円型ステージのリフトが下がると次曲のイントロが流れ出して、ステージ横から穂乃果・海未・ことりが走って出てきた。

披露したのは『Future style』、ナオキが作っていた曲の1つだ。

曲が終わると大ステージの真ん中に3人は集まった。

「さくて、次は私たち2年生だよ〜！」

「この3人で歌うのも久しぶりな気がするね！」

「そうですね。なんだか懐かしいような気がします」

「しかも今回は制服！なんだか新鮮だね〜」

「ステージで着ることなんてあんまりなかったもんね！」

「そうですね。でも3人で歌うのはこの1曲だけ……」

『え〜!』

海未がそう言うのと観客の人たちは声をあげた。

「ふっふっふっふっふ……3人で歌うのは1曲だけど……」

「今回は私たちひとりひとりがりが!」

「ソロで2曲歌っちゃいます!」

『お〜!』

「最初は穂乃果!」

「次は私、ことり!」

「そして最後に私、海未が歌います!」

「じゃあ早速私から!」

穂乃果が手をあげると、ことりと海未はステージ横に走っていった。

「それでは聞いてください……『きつと青春が聞こえる』」

照明が消え、スポットライトが穂乃果を照らした。

穂乃果は円型ステージに向かって歩きながら歌った。

そしてこの曲が終わると穂乃果は円型ステージにあったマイクスタンドにマイクを設置した。

時はさかのぼり……………

「あのマイクセツトを？」

「うん！穂稀さんがみてくれるかもしれないし、それにあの曲を歌うならあのマイクセツトがないと！」

「そうか……………わかった。穂乃果のソロの最後にはそれを使おう」

「うん、ありがとう！」

時は戻り……………

「アズタ〜イムゴ〜ズバ〜イ

アズタイム……………ゴ〜ズバ〜イ……………」

披露したのは『As time goes by』、穂稀が歌っていた曲を穂乃果は歌ったのだ。

英語の発音などは正直下手であった。

だが、想いがこれでもかというほどにこもっていた。

曲が終わると観客の人たちは拍手をした。

穂乃果の想いがこもった歌に感動したのだ。

穂乃果が一礼すると、マイクセットものせてリフトが下がった。

そしてスポットライトは大ステージの中央にいたことりにあたった。

ことりが披露したのは『COLORFUL VOICE』で、曲に合わせて飛び跳ねたりした。

そして曲が終わると次曲のイントロが流れだした。

ことりは円型ステージに向かって歩きながら歌った。

その曲は『スピカテリブル』。

「友だちならいいけど、恋人なら嫌なの……」

迷いのふりこが……止まらない……

私のいま、未来、あなたにある……

願いが弾ける、言えないよ……！

けど、消せないから、扉を開けてほしいの……

でも……怖いの……

怯えてる……スピカテリブル……」

この曲にはセリフがあり、ことりは切なそうにそのセリフを言った。

そして曲が終わるとリフトが下がると今度は大ステージの横にスポットライトがあ
たった。

海未が歌って横から出てきた。

海未はこれを円型ステージまで歩きながら披露したのは『Anemone hear
t』。

曲中は何本かの青色のライトがあたりを照らしていた。

曲の終わりと同時に海未は決めポーズをとり、ライトが消えた。

そして次曲のイントロが流れだした。

披露したのは『私たちは未来の花』だ。

曲が盛り上がるとステージのライトが一斉に点灯した。

曲のラストは海未は天井を見上げた。

そしてリフトは下がっていった。

しばらくするとリフトが上がってきてスポットライトがあたった。

そこには凜がいた。

「すう……Hello歌によばれて〜」

披露したのは『Hello, 星を数えて』

凜はソロパートを大ステージに向かいながら歌った。

大ステージで待機している真姫と花陽と合流して一緒に歌った。

「星空にゃ〜」

そして3人が決めポーズをとると照明が消えた。

「1年生だにゃ〜!」

照明がつくと凜が叫んだ。

「地味にこの3人だけで歌うのって初めてじゃない?」

「そう言えばそうだね。なんだか新鮮だね」

「しかも今回は制服! いかにもスクールアイドルって感じだにゃ〜!」

「そう?」

「でも制服でライブをするスクールアイドルなんてなかないよ?

校内ライブでもみんなちゃんと曲の衣装着てるし」

「へ〜」

「じゃ、そろそろ私たちがソロを歌っていきましよう」

「そうだね」

「まずは凛!」

「その次は私、真姫」

「最後は私、花陽です!」

「じゃあ早速いづくにや〜!」

凛が手をあげると真姫と花陽がステージ横に行った。

「それでは聞いてください。『Love wing bell』

凛は円型ステージに向かって歩きながらソロで披露した。

その次の曲は腕を振りながら歌った。

曲名は『くるりんMIRACLE』。

決めポーズをするとリフトが下がった。

そしてリフトが上がってくるとそこには真姫がいて『Music S.T.A.R. T!!』を披露した。

決めポーズをとると、次曲のイントロが流れだした。

曲名は『Darling!!』、曲中は何本かの赤いライトがあたりを照らしていた。

曲が終わるとリフトが下がった。

そして花陽が横からエプロン姿で出てきた。

「ご飯にしますか？お風呂にしますか？それとも……やっぱりご飯にしますか？」

花陽がそう言うのとイントロが流れ出して曲が始まった。

曲名は『好きですが好きですか？』で、円型ステージに向かって歩きながら歌った。

曲が終わり次の曲のイントロが流れだした。

曲名は『なわとび』で、みんなブレードを横に振った。

ラストで花陽は天井を見上げた。

リフトが下がると、サイレンの音が会場に響いた。

そして制服でサングラスをしたにこ・希・絵里がステージの横から飛び出してきた。

披露したのは『？↑HEARTBEAT』だ。3人とも大ステージで走り回りながら

歌った。

曲が終わると照明が消え、つくど大ステージの真ん中で3人がまとまっていた。

「ついに3年生にこく。お待ちせ〜！」

にこは会場に手を振った。

「ふふつ、制服なんてもう卒業したから着ないからなんだか変な感じね」

「そうやな〜」

「でもにこはいつでも制服が似合うんだよね！にこっ！」

「はいはい」

「さ、はやくソロで歌っていこうやん！」

「スルー!?ま、まずはこの大銀河う…「次はウチ、希が」ちよつと！なに…「そして最後は私、絵里が歌うわよ！」だくか〜ら〜！」

「じゃ、にこつち頼んだで〜」

「頼んだわよ〜」

そう言つて希と絵里はステージ横に向かった。

「なによそれ〜！」

ま、じゃあにこのソロでいっくよ〜！

まずは…『乙女式れんあい塾』！」

にこがそう言うのとイントロに合わせて何本ものライトが会場を照らした。

曲が終わると、次の曲が始まった。

曲名は『にこぷり♡女子道』

イントロでにこは走つて円型ステージに向かった。

「にこっ！」

最後はいつものポーズをして曲のラストをむかえた。リフトが下がり、希が歩きながらステージ横から歌いながら出てきた。

曲名は『友情ノーチェンジ』。

そこから歩きながら歌って円型ステージに向かった。

曲が終わり、次曲のイントロが流れ出した。希はメロディーに合わせて絵里から教えてもらったバレエの踊りをしたりした。

披露したのは『もしもからきつと』だ。

曲の終わりに希はお辞儀をした。

リフトが下がって、しばらくして絵里をのせて上がってきた。

そして1曲目のイントロが流れだした。

曲名は『soldier game』。

絵里は大ステージに向かいながら歌った。

スクリーンには観客たちからみて後ろ向きの絵里の表情が映っていた。

曲のラストには絵里は大ステージから脚をぶら下げて座った。

そしてそのまま2曲目のイントロが流れだした。

次曲は『冬がくれた予感』で、絵里は体をブラブラとしながら歌った。

そして曲が終わると照明が消えた。

照明がつかぬまま次曲のイントロが流れだした。

このイントロは『ありふれた悲しみの果て』だった。

「きつとしらずにいた方が良かった？」

そんなイタミをかかえながら……………」

だが、みんな不思議そうな表情を浮かべた。

「…………ハートブレイク！」

歌声のトーンがあがると同時に照明が一斉についた。
円型ステージでそれを歌っていたのは…………

『おお！』

『きゃあああああああ!!』

「ありふれたかなしみ

ありふくれたイタミとく

零れそうな涙堪えてみる星は

いつもよりまぶしく輝いておちそうだ

わたしを静かにてらすけれどく」

ナオキだった……………

時はさかのぼり……

「ナオキにも歌って欲しいのよ」

「はああああああああ!!」

「ダメ……かしら？」

「いやいや、おれが歌ってもいいのか!? 本当に!」

「ええ、これは9人全員の意見よ」

「でもさ……みんなはそれでいいのか？」

ナオキがそう言うときみんなが頷いた。

「だって、ナオキがいてこそそのムスでしよう? だからナオキにも歌って欲しいのよ」

「そうだけだよ……でも……っ」

ナオキがでもというとき絵里は人差し指でナオキの唇を押さえた。

「でもはなしよ? やってみたらいいんじゃない? 私たちはそれを望んでるわ」

ナオキはその言葉を聞いてみんなの顔をみまわした。

みんな笑顔でナオキを見た。

「……………わかったよ……………おれやってやる! 歌ってやる!」

そして時はもどる……

サビを歌い終わると観客の人たちは予想外の出来事に大歓声をあげた。

ナオキも制服を着ていた。

ラスサビは絵里も加わって2人で歌った。

曲のラストで2人は天井を見上げた。

曲が終わると2人は観客席の方を向いた。

「みなさん、ありがとうございます！」

「ハラショー！ サプライズ成功ね！」

「ああ、ということでは今回はおれ、ナオキが歌ってみました。みなさんどうでしたか？」

『ふおおおおおおお!!』

「ふふっ、大好評みたいね」

「そうだな。さて、ちよつとみなさんにお知らせが……」

「実は私たち……」

「「婚約しました〜」

ナオキと絵里は声を合わせてそう言つて左薬指を見せた。

『お〜!』

『ひゅひゅ〜』

『おめでと〜う!』

「いや〜ありがとうございます」

「フアンのみなさんには付き合つてからも応援してもらつて、感謝の気持ちでいっぱいです」

「そんなみなさんへのお礼もこめて、おれと絵里のデュエット曲を披露します!」

『おお!』

「それではお聞きください……」

『『Storm in Lover』』

2人が背中を合わせてそう言うといントロが始まり、腕を上下にしたりして少し離れた。

「「逢いたいこのサマー　ことしのサマー

あなたと私は一つのストーリー」

「だから逃げちゃだめ〜」

「おびえちゃだめ〜」

「みつめあえばストームインラバ〜」

2人の歌声は見事にマッチングしていた。

絵里がナオキに向かって手を伸ばすとナオキも手を伸ばし絵里の手を握り、2人はみ
つめあった。

「止まらないそう言ってもいい？」

目を逸らした方が負けよ〜」

絵里はナオキの頬に手を当ててみつめた。

「もう止まらない〜 2人だけの〜浜辺でこがれたい〜」

ナオキは絵里を見つめて髪を撫でた。

「イエス、ノー、セイイエス！恋へと〜」

「かわるこの熱さ受け止めてよ〜」

絵里は服の胸のところを掴んだ。

「イエス、ノー、セイイエス！こたえは〜」

「絵里あなのココロがきつと教えてくれる〜」

ナオキはその絵里の手をぎゅつと握った。

「逢いたいこのサマー ことしのサマー」

とけそうな情熱はあなたのせいよ」

「からだ中でよんだ」

「あなたをよんだ」

「離さないでユーアーマイラブ」

「逢いたいサマーことしのサマー」

あなたと私は一つのストーリー」

「だから逃げちゃだめ」

「怯えちゃだめ」

「みつめあえばストームインラブ」

恋はあらしよストームインラブ」

そしてまた腕を上下に振ったりして決めポーズをとった。

続いて2人は次曲のイントロが流れ出すと立ち上がり少し離れてお互いに手を伸ばした。

曲名は『硝子の花園』。

「ラーラーラーラーラーラーラーラーラーラー」

「夢の迷路」

「百合の迷路」

「ラーララーララーララーララーララーララーララーララー」

「あこがれを語る目が

遠くをさがしてるとき……

寂しくなる

わたしはここにいとりたいの……」

絵里は服の胸をとところを掴んで下を向いた。

「アア……2人きりでガラースの花園へと」

ダレもない ダレもいらなくい」

ナオキは絵里に近づいて片方の手のひらを上に向け、絵里がその手に片手を置くと優しく握ってみつめた。

「そつと壊れそうにさきたい

ヒミツのぶらんこ

あなたとゆれながらいま

ただ優しくみつめあうの」

「恋をこいする」(「恋する」)

「少女で」(「少女(?)で」)

「いられないキモチに

なぐぜ……くるしくなるゝのゝ?」

ナオキと絵里は片手で握り合い、ゆつくりと円の形にまわった。

そして絵里は片膝をついて座った。

「2人きりの花園でねむりにつくゝ」

そしてナオキは遅れて片膝をついて絵里の髪に手を当てた。

「髪をなでるその手がゝ好きゝ」

そして絵里はナオキのその手に手を当ててナオキはそのままの状態に髪をなでた。

観客の人たちは黄色い歓声をあげた。

「もゝつとゝ!」

ラスサビはそのまま立ち上がった状態で歌い、曲が終わると決めポーズをとった。

そして次曲のイントロが流れ始めた。

2人は少し離れて横に並んで歌った。

曲名は『WILD STARS』。

これは2人でこのときのために作った曲だ。

2人で協力して作ったのを思い出しながら歌い始めた。

2人が最初にサビを歌ってからAメロに入った。

「きまぐれな光でくナオキをあなたみつけるよく

シゲキにさらわれてしまえ こんな夜はく

「退屈をかかえたくボクの胸をゆらすく

とつぜんの嵐はアツイ野生の嵐だった……」

「であうくための場所をく

「ずっとずっとさがしてた

ここにキミ絵里と」

「わたし……」

「きたよ

いまから2人いまからかがやくよく

隠してく開いてく隠してく まだこれは恋じゃないの…

開いてく隠してく開いてく かくご決めておいかけてく

はじまりたい…

ワイルドスタース……」

その後も2人のパート、男性パート女性パートがあつた。

2人の歌声は見事にマッチングしていて、観客の人たちは2人の歌声に聞き入っていた。

それに2人の見つめ合う視線を見て、やはり心から愛し合っているのだと確信した。曲が終わると観客の人たちは歓声をあげて拍手をした。

ナオキと絵里は目を輝かせ、笑顔で手を繋いで1回上にあげてから下げたお辞儀をし、リフトは下がっていった。

照明が消えると、ステージにライトがあたりA—R—I—S—Eの3人が出てきた。

3人が話をして時間を稼いでいる間にみんな次曲の準備をした。

ナオキもステージ横の特設機材席につき、9人もステージ裏に待機した。

「じゃあ、そろそろ準備ができたみたいだからみんな！最後まで楽しんでね〜！」

『ワーーーー!!!』

ツバサがそう言うのと3人はステージ横に走っていった。

照明が消えると、ドアらしき音が響いてステージ上にスモークがかかった。

そして細い白のライトがステージの足もとを照らした。

9人が歌い出すとライトが一斉についてステージにいる9人が明るく照らされた。

曲は『LOVELESS WORLD』。この曲もファイアーアクションで、サビなど

の曲の盛り上がるところで炎が上がった。ラスサビ前の間奏ではみんな走って円型ステージに移動した。

そして決めポーズをとるとすべての筒から一斉に炎が上がった。

照明が一旦消えて9人が並ぶと照明がついた。

「さて、ソロパートも終わってやつと9人揃ったよ〜！」

「「「「「いえ〜い！」「「「「「」」」」」」」

9人は観客席に向かって手を振った。

「ソロで歌ったの久しぶりだったから緊張したね〜」

穂乃果はみんなの顔をみて言った。

「そうだね〜。いつもみんなまで歌ってる歌だったから余計にだよ〜」

「はい、しかも制服で……恥ずかしかったです……／／／」

「凛はとっても楽しかったよ〜！」

「ま、こういうのもいいんじゃない？」

「緊張したけど喜んでもらえてよかったです！」

「ふん、このにこにこにかかればこの程度たやすいことよ〜！」

「ふふっ、せやね。曲数が足りひんぐらいやったよ」

「そうね。できればもっと歌いたかったわね」

「穂乃果も穂乃果も〜！」

「でも仕方ありませんよ。時間の関係とかもありましたし」

「むう〜」

穂乃果は頬を膨らました。

「でもまたこの場所での衣装を着れてよかったね！」

こことはくるつと回って言った。

その衣装は本戦の日に着た『K i R a | K i R a S e n s a t i o n !』の衣装だ。

「でもな、実は残念なお知らせがあるん……」

「「ええ〜!?!」」

穂乃果と凜は声をあげた。

「なんと……残すところあと3曲になってしまったんや！」

『え〜!』

「はいいね〜」

「本当にあつという間だったわね」

「もう終わっちゃうのお!?!」

こことりと真姫と花陽は驚いた。

「じゃ、ラストスパートといきましょう！」

「そうね。みんな最後までついてきてね〜！」

『いえーい！』

ここが観客席に向かってそう言うのと観客の人たちは叫んだ。

「よし！じゃあ最後はファンのみなさんに感謝して、ラブライブ！の地区予選、予選決勝、そして本戦で披露した曲を連続で披露したいと思います！」

『おお〜！』

穂乃果がそう言うのと観客の人たちは歓声をあげた。9人は次曲の体型に並んだ。

「それでは聞いてください……」

「————『ユメノトビラ』……」

9人がタイトルコールをすると照明が消えて円型ステージだけにスポットライトがあたった。

『この曲は聞けば聞くほど味が出る』とファンの間でも人気の曲で、さらにみんなで行った合宿の末にできた曲でもある。

最初こそはあまり人気ではなく予選第4位となってしまうが、時が経つにつれどんどん人気が出てきた。

「なんだか懐かしいな……半年ぐらい前のことなのに昨日のように思えてくる……」

ナオキは画面を見て、懐かしそうに言った。

決めポーズをすると照明が消えて、9人は次の曲の体勢についた。

次の曲は『Snow halation』、あの雪の日のラブライブ！予選決勝で披露した曲だ。

大雪でナオキ・海未・真姫の生徒会メンバーが遅れるかもしれないとき、支えてくれたのは音ノ木坂学院のみんなだった。

その日を思い出させるかのように、ブレードは雪の色一色、さらに演出で雪も降らした。

「とどけて切なさには〜！」

穂乃果が腕を前に広げると、ステージに近い席の人から順番にブレードの色をオレンジに変えていった。会場の照明もオレンジで、会場全体がオレンジ色となった。

「あの日もそうだった……」

ナオキは画面を見て予選決勝の日を思い出していた。

9人が決めポーズをとると照明が消えて、次曲の体型に並んだ。

そしてついにあの曲。

あの本戦の日この場所で最後と心に刻んで披露したあの曲。

『Kirara—Kirara Sensation!』

演出はあの日と同じだった。

みんなでμ'sは最後にすると決めて挑んだラブライブ！本戦。

ナオキの辛い過去との向き合い。

そして深まった10人のキズナ。

再びミツヒデたちと友となり、男の友情を築いた。

μ'sはもちろん、会場のだれもがみんなこの曲あの日の感動が蘇ってきた。

最後と決めていたからこそあの素晴らしいステージができて、ラブライブ！で優勝することができた。

今回もそうだ。

しっかりと最後を伝えるのが今回の目的。

だからこそ、前よりももっといいパフォーマンスができた。

決めポーズをとると、大きな歓声が響いた。

『Kirara—Kirara Sensation!』のメロディーが流れて、9人は横一列に

並んだ。

「みなさん、今日は本当に……ありがとうございます！」

「「「「「ありがとうございます！」「「「「「」」」」」」」

穂乃果が観客席をみまわしてお辞儀をすると残りのみんなもお辞儀した。

9人はリフトの範囲に集まるとリフトは手を振る9人をのせて下がっていった。

そしてそれは………

あのラブライブ！本戦の日と同じ……

『アンコール！アンコール！アンコール！アンコール！アンコール！………』

あの日よりも大きなアンコールが会場に響いた。

そしてあの曲のイントロが流れ出すと大きな歓声が響いた。

ステージの両端から9人がスキップしながら出てきた。

曲はもちろん、あのときと同じ。

アンコールに応えて披露した……

『僕らは今のなかで。』

晋三に言われて念のために用意した曲だった。晋三の予想は的中率して、あの日々、Sだけにアンコールが起きた。

それは穂乃果の正夢でもあった。

そして、穂乃果の決意が叶ったとき……

みんなに想いが届いたとき。

『このまま誰も見向きもしてくれないかもしれない……』

応援なんて全然もらえないかもしれない……

でも……一生懸命頑張つて……私たちがとにかく頑張つて届けたい！

今、私たちがここに……この想いを!!』

「あのとときは嬉しかったな……」

ナオキは目をうるうるさせながら言った。

決めポーズをとり、曲が終わると9人は次曲の体型に並んだ。

まずは穂乃果にオレンジ色のスポットライトがあたり、穂乃果のソロパートだ。それからみんなにも各イメージカラーが順番に当たっていった。

曲名は『それは僕たちの奇跡』。

決めポーズをとって曲が終わると照明が消えて、9人は横一列に並んだところで照明がついた。

「アンコールありがとうございます！」

「「「「「ありがとうございます！」」」」」

9人は観客席に向かって手を振った。

「いやあくこの衣装でアンコールに答えるとあの時を思い出すね」

穂乃果は『僕らは今のなかで』の衣装を見て言った。

「うん！あのとときもみんながアンコールしてくれたもんね！」

「はい、それに今回がも……ありがとうございます！」

「みんなのアンコールの声、しっかり聞こえたよー！」

「本当に、ありがとう」

「でもみなさんの声を聞いたら、前の頃が嘘みたいだね」

「そうね。最初の頃なんて全然気がなかったわね」

「でもどんどん人気が出てきて、今はこんなにたくさんの人たちに支えられてる！」

「応援してくれるみなさんがいてくれるからこそこのμ'sなのよね」

9人は喜びをあらわにして言った。

「そんな感謝の気持ちを込めて、スタートの曲を合わせた4曲を披露したいと思います
！」

『おおー！』

穂乃果がそう言うのと観客の人たちは歓声をあげて、9人は次曲の体型に並んだ。

「それでは聞いてください……」

「『『『『START:DASH!!』』』』』」

タイトルコールのあと、イントロが流れ出した。

この曲は10人の最初の壁を乗り越えたとき、講堂で披露したものだ。

そして穂乃果の決意が叶ったときでもある。

『この講堂を満員にしてみせますー！』

「これは、sの新しいスタートの曲……」

ナオキはそう言つて自分が音ノ木坂学院に来たばかりのころを思い出し、決めてポーズをとると、9人は次曲の体型になった。

そしてイントロが流れ出してみんなはそれぞれハイタッチをして踊り始めた。

曲名は『僕らのLIVE君とのLIFE』。

音ノ木坂学院のオープンキャンパスのとき、9人が揃つて初めて披露した曲だ。

「あのときは見ていただけだったな……」

ナオキはオープンキャンパスの日、遠目からみていた9人のライブを思い出し、出していた。

あのとときのみんなの笑顔も……

みんなは決めポーズをとつた。

するとドラムの音が響いた。

「さあみんな〜！振り付け覚えてくれてる〜？」

『イエー！』

「よお〜！それじゃあ、いっくよ〜！ワン！ツー！ワンツースリーフォー！」

「~~~~~『オーイエー！オーイエー！オーイエー！一進一退！~~~~~』」

穂乃果が合図を出すと、観客も含めて全員が叫んだ。

サビの部分では観客の人たちにも振り付けがあった。

まずは右腕を3回あげて2回転を2回繰り返して、両腕を8回あげてからまた右腕を3回あげて2回転を2回繰り返して、右腕をあげて左腕をあげてカメラのポーズをした。

そして曲が終わるとライトが消えた。

「じゃあみんな……一緒に踊ろう！」

次曲の体型に並ぶと穂乃果がそう言った。

そしてスクールアイドルフェスティバル最終日に披露したあの曲のイントロが流れ出した。

曲名はもちろん『SUNNY DAY SONG』。

サビの部分の振り付けはみんなでした。

間奏で9人は大ステージに移動した。

ナオキは最高に輝く9人を見つめた。

限られた時間のなかで精一杯輝くスクールアイドルを……

Moment Shine……瞬間の輝きを伝えることが今回の目的。しっかりと伝えると心に決めているからこそ、一層輝いていたのである。

曲が終わり、9人は横1列に並んだ。

「みなさん、ありがとうございます！」

実は、私たち10人からみんなに伝えないといけないことがあるの……」

穂乃果が真剣な表情でそう言うと、ナオキが横から出てきた。

観客の人たちは不思議そうにステージを見つめた。

「私たちも、sは……今日をもって活動を終了することにしました」

穂乃果は出そうになる涙を堪えて言った。

観客の人たちはその穂乃果の言葉を聞いて言葉も出ないほどの驚きの表情を浮かべた。

「スクールアイドルは、限られた時間のなかで精一杯輝く存在……」

ことりは切ない笑顔を浮かべて言った。

「私たちは限られた時間のなかで精一杯輝こうとするスクールアイドルが大好きなんです」

海未は9人の顔を見回して言った。

「μ'sはその気持ちをお大切にしたい……10人で話し合っただけで決めました」

凜は衣装の胸のところを掴んで言った。

「確かに続けて欲しいという気持ちもわかります。ラブライブ！のために、スクールアイドルのために力をかせるようになったことも嬉しかった……」

真姫は髪の毛をくるくるして9人を見回して言った。

「μ'sはスクールアイドルであつてこそ、そして10人でいるこそμ'sなんです……だれか1人でも欠けたらμ'sではないんです！」

花陽は切なそうな笑顔で言った。

「これは本戦を前に私たちで相談して決めたことで、その答えは変わりませんでした」
ここは9人と観客の人たちを見回して言った。

「ウチらはもう、μ s を続けることは……ありません」

希は泣きそうになっているにこを見ながら言った。

「私たちはやつぱり、スクールアイドルであることにこだわりたい！だって私たちはスクールアイドルが好き……」

絵里は少々力を入れたように言った。

「そう、学校のために歌って、みんなのために歌って、同じ学生が、この10人が集まり、競い合って手を取り合っていくスクールアイドルが好きなんです。

だからスクールアイドルじゃないμ s はμ s ではないんです。

でも、スクールアイドルフェスティバルでみなさんわかってくれたはずです。スクールアイドルの、その輝きの素晴らしさを！

ラブライブ！は……スクールアイドルはこれからも大きく広がっていく！」

ナオキは声を荒らげそうになるがそれを堪え、涙も堪えて言った。

「だから……みんな……いくよ……」

せくのっ！」

「……………今日この日をもって、μ s は……おしまいにします！」……………

10人は手を繋ぎ、観客席に向かって声を合わせて言った。

それは海岸で3年生にμ'sはおしまいにすると伝えたあのときのように、今度は応援してくれるみんなに向かって言ったのだ。

その最後を聞いた観客の人たちは涙を流した。

みんなの悲しむ声を聞いて10人も笑顔で涙を流した。

ちゃんと伝えることができてよかったと……

でも悲しい……

絵里はナオキにもたれ、ナオキはそんな絵里の頭に手を置いた。

「だから、次の曲は私たちから『音ノ木坂学院スクールアイドル、μ's』へ感謝の気持ちを含めて歌わせてもらいます……」

穂乃果がそう言うのと9人はその曲の体型に並んだ。

ナオキは絵里の涙を指で拭いてから幕の横に向かった。

9人は涙を拭き、深呼吸をして心を整えた。

「それでは聞いてください……………」

「……………」そして最後のページには『……………」

9人は声を合わせてタイトルコールをした。

作詞者海未は、自分がこの曲の作詞をしているときのことを思い出していた。

机の上には作詞ノートともうひとつ、μ sの活動日誌があった。

「私たち10人の日々は輝いている……………」この活動日誌に書いてあるように頑張れば……………」

『デイズアーシャイニング……………こんな風に頑張れば』

『『ぴっかりと』』

「いつもみんなで帰っていました。だから弓道部のあとに1人きりでは帰りたくない

と、道端で立ち止まって、『私のことを見つけて欲しい』と考えていましたね……でもだんだんと1人でいることに怯えてちゃダメなんだと……」

『あのっ……弓道部の活動が終わるまで……待っててもらえませんか？／／』

『うん、いいよー！』

『3人で一緒に帰ろう！』

「自分から一緒に帰って欲しいと話しかけてみたあの日から思いはじめていましたね。

でも活動日誌を読み直してみると、最初のうちは緊張の連続で、慣れないことばかりでした。そのときのきつときぎこちなかった私に言いたいです。

『考えすぎ、気にしすぎ！』と。

でも今ではそんなことも笑い話になってしまふ。ずいぶん強くなった証拠でしょうか？

おそらくそれはみんなも同じです。

すべてが忘れられないエピソードになっているんですね。

でも、いろんなことがありましたね。

忙しく怒ったり、泣いたり……

この活動日誌も最初は真っ白なノートでしたが、どんどん思い出が増えてきました。

最後はどうなるかまだわかりません。

でも、この『μ s 活動日誌』の表紙に書きたいですね……いつか……」

控え室にあるμ s の活動日誌の表紙には小さくこう書かれていた。

『ありがとう』

『アンコール！アンコール！アンコール！アンコール！アンコール！……』

それは本日2度目のアンコール。

みんな、無茶はわかつている。

でも聞きたいのだ、μsの歌声を。

だが、そうなることは想定済み！

まだ”あの曲”が残っている！

時はさかのぼり……

「そうだ。みんなに渡すものがあるんだよ」

「全員に……ですか？」

ナオキがそう言うのと海未は首をかしげて言った。

「ああ、その通りだ……」

ナオキはそう言うのとカバンをゴソゴソと漁った。

「なにがあるって言うのよ……」

真姫は呆れたように言った。

「おつ、あつたあつた！じゃくん！」

ナオキが取り出したのは少し大きめの箱。

「なにが入ってるの？」

「ことりはその箱を見て言った。

「それはな……これだ」

「「「「「「これって!?!」「「「「「」」」」」」」」

ナオキが箱をパカッと開けると、みんなは中に入っているのを見て驚きの声をあげた。

そこには10色の色が均等に塗られている指輪があつた。

「これはおれが指輪屋さんに頼んで作ってもらったんだ。色はみんなのイメージカラー。あ、おれのなかつたからなんとなく黒にした。

「ここにはほんの一瞬だったけど、輝いていたみんななどの思い出が詰まってる……」

ナオキはその指輪のことを説明すると、みんな目をキラキラさせてその指輪を見た。

「一瞬……Moment……」

輝き……Shine……

指輪……RING……!」

海未は思いついたように言った。

「どうかしたのか?」

「思いついたんです……曲のタイトル!イメージが!」

「本当か!」

「はい!これもナオキのおかげです!ありがとうございます!」

海未は笑顔で言った。

「よかった……海未の歌詞楽しみにしてるよ!」

みんな……当日はこれをつけてライブをしよう!いや、して欲しい!」

みんなナオキの言葉に賛成した。

時のもどり……

アンコールのする中、曲のイントロが流れ出した。

観客の人たちは大きな響くような歓声をあげた。

イントロが流れる中、9人はステージ裏から続々と出てきて横一列に並んだ。

衣装は“9人の女神”にとつての始まりの曲の『僕らのLIVE 君とのLIFE』の衣装だった。

そして披露する曲は……『MOMENT RING』。

またまた作詞者海未は、作詞しているときのことを思い出していた。

海未はライブのときに人差し指にはめるナオキがくれた指輪を人差し指と親指で挟んで眺めていた。

「みんなに、聞いて欲しい……私の今の気持ちを。

でも、なにか聞いてもらいましょうか？ ああ……語りきれません。

でもみんなと出会って、これからのことは

長いようで短かったですね……

μ s の活動も終わり、みんなと会いたくなくなってくる。

そんなときはきつと歌が私たちを繋いでくれる。

たとえ遠くにいたとしても

胸の奥では私たちはわかりあえてますよね。

本戦のとき、私たちが一緒に見たフアンのみなさんのサイリウムなどの光はまるで銀

河の海みたいですね。

その素晴らしい瞬間は心ときめきます。

穂乃果が講堂で言った叶えたい願いも私たちが学校を救いたいという願いが物語を招いて、それが叶う時が来たことですよね。

それもみんなの応援の声が翼をくれたからでしょうね……飛べるよ……ですか……」
海未は穂乃果が『飛べる』と言ったときのことをふと思いついた。

「ふふっ、みんなにはありがとうと何度も何度も言っても足りないくらい感謝しています。」

この素晴らしい瞬間は素敵な経験でした。

この応援してくれるみなさんに伝えたい想いが次の扉を開いてくれますが、次はどこに行けばいいのでしょうか？

みなさんの声でスクールアイドルは、いつまでもずっと飛べます！元気いっぱい

……まだまだ飛べます！

でもすべては穂乃果の無謀な夢から始まったんですよ。でも奇跡のようにすべてが繋がっていった……

いつもいっつもどうなるんだろう？と

ドキドキして、毎日が冒険でしたね。

みんな、これから先もよろしくお願いします。

だつて……だつて……離れたりでできるわけじゃないですか……

私たちにあるのはスクールアイドルの思い出だけじゃないんですから……

それに、新しい夢が生まれてくると私たちは知っていますから。

ナオキはそんな瞬間をこの指輪に閉じ込めているつもりなんですよね。

私たちも閉じ込めていっつも眺めていたい……どの指にはめましょうか。

いつもキラリと輝いてくれますよね、本当に……綺麗ですね。

みんなキラキラしたこの毎日をずっと忘れずにいてください。

これからも続く明日への地図はいつでも白く輝き未来をえがいています。

思い出だけじゃない……

私たちは知っている。青春は指輪こごにあると……」

海未はふと、机の上にあつたラブライブ！で優勝したときにとつた10人の集合写真

を見た。

「みんなの笑顔は大好きだから、最後まで終わっても笑って欲しい……」

だからあの瞬間はいつまでも終わらない夢でいいですよね！

みんな同じ夢の途中なんです。いいんですよ、何度だって青春を感じても……！」
海未はじつと指輪を見つめ、それから窓から外を見つめた。

『いいよいいよなんどだって青春！』

間奏ではスクリーンに各メンバーの踊っているところが、花陽・凜・真姫・海未・穂乃果・ことり・絵里・にこ・希の順に名前付きで映った。最後のナオキのところは画像だった。それに合わせてステージのライトはメンバーのイメージカラーに変わっていった。

「瞬間を指輪RINGへととじこめて」

「いつもながめてたい」

「指にきざり〜！」

海未は胸で両手をギュッと握り、ことりは右手の人差し指についている指輪を眺め、穂乃果は上にあるスポットライトに向けて右手を広げて掴んだ。

このライブのときにずっと人差し指にはめていたのはナオキがみんなに贈った指輪。

それには今までの10人の思い出、青春、瞬間の日々が詰め込まれている……MOMENT RINGだった。

決めポーズをとると、大きな歓声と拍手が会場に響いた。

みんな汗を流して、息を荒らげて、互いに笑いあった。

観客の人たちはメンバーの名前を叫んだり、ありがとうと叫んだりした。

ナオキもゆつくりとみんなに近づいていき、10人は手をつないだ。

「みなさん……今日は……本当に……本当に……！」

「……………ありがとうございます……………！」

10人は深々と頭を下げ、手を振つせ！ステージ裏に下がっていった。

10人は裏で成功を喜び、花陽と凜、真姫と海未、穂乃果とことり、希とにこ、そしてナオキと絵里は互いに抱き合い涙を流した。

こうして、音ノ木坂学院スクールアイドルμ'sの最後を伝えるライブ、『μ's Moment Shine』は幕を閉じたのであった。

いよいよ次回、女神たちとの物語は終わりを告げる……

第120話（完結編最終回）「μ's、ラストミュージックスタート!～僕たちはひとつの光～」

「わ……私、ナオキのことが異性として好き／＼」

「……………え？」

6月の第3回ラブライブ！まであと1週間をきったころ、にこに神田明神に呼び出されたナオキは伝えられた想いに驚いていた。

「だから、私はずっと……ナオキのことが好きだったって言ってるの！／＼／＼」
にこは頬を赤くしながら言った。

「……そう……だったのか……でも、「ええ……わかってるわ。想いに応えられないのなんて……でもね、伝えない方がもつと辛いよ。」

あんたたちは近いうちに正式に結婚するだろうし、それまでには伝えなきゃって思ってた。

本当は、まだチャンスがあると思ってたのに……プロポーズしたとき……もう”叶わない恋”だつて思ってたわ……」……にこ……」

にこは泣くのを我慢しながら言った。

「それに、私はもう卒業した。4、5もやめた。だからほとんどもう会う機会なんてないでしょう？だから余計に焦ったのよ」

にこは涙を堪えて笑顔を見せた。

「そうか。」

でもにこ、おれもにこのこと、友達として好きだよ。だからおれはにこことキヨリをお

いたりなんかしない、絶対に。今まで通り、いや……今まで以上に……よろしくな」

ナオキはそう言って手を差し伸べた。

「ええ……ありがとう」

にこはその手を握った。

「じゃあ、もう行くわ……」

「ええ、呼び出して悪かったわね」

「構わないよ。じゃ、また練習で」

「ええ」

ナオキは手をあげて神田明神を去った。

「希、にこのこと頼む……」

「わかってるよ……」

ナオキは希とすれ違いざまに言った。

にこはナオキが行ったのを確認すると、声をあげまいと我慢して涙を流した。

「にこつち……」

「っ……希……」

「泣いてもええんよ？こんなときくらい……」

「希い……」

にこは希に抱きしめられ、顔を埋めて泣いた。

希はギュツとにこを抱きしめた。

くラブライブ！（希・にこ）く

本番前日……

穂乃果はメールで呼び出されて再会の”あの場所”に向かっていた。

その人物とは……

「穂稀さん!」

「穂乃果ちゃん、ごめんね呼び出しちゃって」

「いえいえ!あの、これ、マイクセット!いつ返そうか迷ってたんです」

穂乃果はそう言つて穂稀にマイクを渡した。

「ありがとう、穂乃果ちゃん」

穂稀は穂乃果からマイクセットを受け取った。

「そうだ。ライブよかったよ」

「見てくれたんですか!」

「うん、あの曲を歌つてくれて嬉しかったよ」

「ありがとう!ございます!と言つても穂稀さんみたいに上手くありませんでしたが

……」

穂乃果は頭の後の方をかきながら言つた。

「ううん、最初はそんなもんだよ。」

私もそうだった……」

「穂稀さんも!」

「ええ、そりやそうよ……だって穂乃果ちゃんもそうなんだから」

「やつぱり……そうだったんですね……いや、そうだったんだね」

「うん……もう隠さなくてもいいよね」

すると穂稀の体が光出した。

穂乃果は眩しくて顔を隠し、光が弱まると穂稀を見た。

そこには……

『ふう………』

もうひとりの穂乃果がいた。

「卒業式ぶりかな？」

『そうだね。それで、”最後の答え”は見つかった？』

「なにが好きだったのか………つていうのですか？」

『そうそれ、見つかった？』

「うん、私は……みんなが、*μ*、*s*が好きだったから！」

『うん、よかった。本当に見つかったみたいで』

歌うことが好きだったから歌ってきた……それはアメリカライブのことを指す。

スクールアイドルでありたかった……それは最高のライブを指す。

そして、みんなが……μ'sが好きだったから……それはもうすぐ訪れる閉会ライブのことだ。

「それを教えに現れたの？」

『その通り。そのわかった答えは、アメリカでも、最高のライブでも、そして今でも、背中を押してくれているはず』

「うん、答えがいつも私の行動を後押ししてくれた」

『だからもう大丈夫。私に頼らなくっても先に進める』

「本当に……お別れなの？」

『うん、そうだね。でも私は私、あなたは私、だから悲しくない……でしょ?』

「そうだね……」

『あなたはもう立派に成長した。』

「これからも、歌を大好きでいてね』

『わかってる……約束する……』

『約束だよ……穂乃果……』

2人はお互いの小指を絡めた。

そしてもうひとりの穂乃果の姿が徐々に消えていった。

『ありがとう……そして……さようなら』

そしてもうひとりの穂乃果の姿はそこにはなかった。

スマホのメールの欄を見ると、さつき穂稀から届いたメールは消えていた。

穂乃果は深呼吸をして、家に戻った。

そしてついに第3回ラブライブ！が東京ドームで開催された。

「優勝は……ナニワオトメだ〜!!」

『ふおおおおおおお!!』

今大会の優勝はヤマト・ユキが抜けて3人になったナニワオトメだった。

「では、優勝旗を現ライブ!運営委員会会長の伊藤晋三氏に……」

司会の人がそう言うのとステージ裏から晋三が優勝旗を持って出てきた。

そのときみんな不思議に思うことがあった。

前大会では、優勝トロフィーはその前の大会の優勝者であるA—RISEが渡して、そのあとにライブがあった。

だが、この前の大会の優勝者はμ's……μ'sは3月のライブで活動の終了を告げた。

なら今回は渡すことがあってもライブはないのだろうか。

もしかすれば優勝トロフィーを渡すのは別の人かもしれないと心配していた。

「そして優勝トロフィーを……」

前大会優勝者である、”元”音ノ木坂学院スクールアイドル、μ'sの香川ナオキくんに渡していただきます!」

『おおく!』

司会者がそう言うとなオキがトロフィーを持ってステージ裏から出てきた。

そうすると観客の人たちは歓声をあげた。

「それではまずは優勝旗から……会長、お願いします」

「うむ。」

おめでどう、ナニワオトメの諸君。

「これがラブライブ!を制覇した証の優勝旗だ」

「ありがとうございます」

ミツヒデは晋三から優勝旗を受け取った。

「続いて優勝トロフィーを……なオキくん、よろしくお願いします」

「はい!みんな、久しぶりだな」

「お久しぶりです、なオキ先輩」

「「久しぶり」」

マチコ、ミツヒデ、ミク、メグが言った。

「まずは優勝おめでどう。ナニワオトメなら優勝するって思ってたよ」

「音ノ木坂のスクールアイドルは出なかつたんですか?」

「ああ、まだ練習させなくちゃいけないからな。でもナニワオトメは凄いよ……2人が

抜けてもなお、実力は衰えていない。流石だよ」

「そんなことねーよ。おれはお前らのところの方が凄いなと思うぞ?」

「ありがとう。さ、これが優勝トロフィーだ」

「ありがとうございます!」

マチコはナオキからトロフィーを受け取った。

パチパチパチパチ……

「お二人ともありがとうございました!ナニワオトメのみなさんもお下がりにください」

ナニワオトメと晋三とはステージ裏に下がったが、ナオキはその場に残ったのでみんなが不思議に思った。

司会者はマイクをナオキに渡した。

「さて、みなさんはこう思っているでしょう。」

『μ'sは活動を終了したがこのあとのライブはどうするんだろう』と……

でも、今日この日だけ、特別に、μ'sとしての活動をしたいと思います!

それでは今日が本当のμ'sの最後のステージです!」

『おぉ〜!』

ナオキはそう言うのとステージ裏に走って行った。

すると、ステージのスクリーンにはμ'sのPVやライブ映像を集めたダイジェスト

映像が流れた。

その間、ステージ裏では……………

「すまん、お待たせ」

ナオキは息を切らして言った。

「待ってたよ！」

「さ、早く早く！」

「もう時間はありませんよ」

「テンション上がるにや〜！」

「最後なんだからバツチり決めないとね」

「うん、今度こそね！」

「さ、スクールアイドルのこにーの集大成を見せてあげなくちゃね！」

「ウチも早くしたいわ〜」

「ふふつ、みんな慌てすぎよ」

「そういう絵里も早くやりたそうだけどな」

みんな声を合わせて笑った。

「あ、ねえねえ!写真撮ろうよ!」

ことりはそう言つてスマホの付いたセルカ棒を取り出した。

そしてことりはセルカ棒を伸ばした。

「ほらみんな早く早く!」

ことりはみんなに早く集まるように言った。

穂乃果は海未を引つ張つてことりを抱きつき、花陽と凜と真姫は引つ付いて、その後で希とにこが手を繋いで、ナオキと絵里はみんながかたまっている少し横で腕を組んだ。

「いくよ!はいチーズ!」

パシャ……

「よし!写真も撮つたし、いつものやるよ!」

穂乃果がそう言うと、みんないつも通りに手をピースにして合わせて円陣を組んだ。

その目は悲しみの目ではなく、やってやるという決意の目だった。

「みんな、これがμ'sの本当の最後のライブ……今までの想い出を、気持ちも、全部込めよう!」

『おお〜!』

パチパチパチパチパチパチ……

するとステージのスクリーンが割れて真ん中から蓮はすと思われる大きなピンク色の花が出てきた。

それを見て、観客の人たちは歓声をあげて拍手をした。

それは中央ステージのところで止まった。

そして曲のイントロが流れ出すと同時にその花は開き、その中には、s 9人がいて、イントロに合わせてゆっくりと腕を広げ、胸の前で交差させて体を揺らした。イントロが盛り上がるとみんな大きな花のステージいっぱいに広がった。

そんな笑顔で踊る9人の衣装はピンクと白を中心に作られて、とてもシンプルなデザインだった。

みんなナオキが作った花の髪飾りをしていた。

照明で、みんなが足を付くとそこからいろんな花が広がった。

ナオキは機材を操作しながら曲を作っていたときのことを思い出していた。

(「μ'sは穂乃果のほのかな予感から始まって……」)

(「アゝ、高坂穂乃果なく予感からはじまり」)

(「希の望み、μ'sの望みが凜が走るように駆け抜けて……」)

(「アゝ東條希がゝ」)

(「星空凜、かけて」)

(「みんなの笑顔はまさに花が咲いたような笑顔で、それはずっと変わらない、ずっと同じなんだ……友情の笑顔」)

(「小泉花陽を咲かせる」)

(「矢澤にこえがおは」)

(「いつまでもずっとと忘れない、だってこんなにも心が1つになったんだし。」)

そんな世界を見つけた喜びを最後のときまでみんなで共に歌いたい。
そして最後までおれたちはひとつ！」

『ぼく々たちはひとつ！』

「μ、s みんなと、ファンのみんなと出会えたこと、嬉しくて……ずっと離れたくない。
嘘なんかじゃない……本当に……」

でも、涙はいらない。このまま、踊ろう……！

みんな……手を振って！もつと……もつと！

おれたちはひとつの光を追いかけてきた……

だからさよならは言わない。

またいつか、どこかで会おう。そのときは、またおれたちのことを呼んでくれるかな
？

夢は……素敵な未来に繋がった……まさに、夢の未来……」

そしてナオキの頭に、オープンキャンパスで見たステージが蘇った。

（「『僕らのL I V E 君とのL I F E』か……」

君と僕で作り上げてきたL I V E……10人で過ごしたL I F E……まさに夢みたい
だったな……」

ナオキはサビを考える前に懐かしむように、μ'sの曲の一覧を見た。
そしてふとひとつの曲に目が止まった。

『START：DASH!!』

ナオキはその歌詞を見てサビを書こうと思った。

『産毛の小鳥たちもいつか空に羽ばたく大きな強い翼で飛ぶ』

(「そんな小鳥たちの翼はついに大きく強くなって、ついに旅立ちの日」)

『南ことりことりのツバサがついに大きくなって、旅だちの日だよ!』

(「そしてこれからのスクールアイドルみたいに遠くに広がる海の色は暖かくて……」)

『とおくくへと広がる園う田海み未の色あたたかく』

（「これはみんなが夢の中で、絵里が憧れた絵の描いたようだ。でも、やつぱりこんな素敵な日々が終わるのは切ないんだ。だから時を巻き戻してみようかな？」）

『夢のなかでえがいた絢瀬絵里の様なんだ

せつなくてときを西木野真姫戻してゝみるか？』

（「いいや、巻き戻さなくていい……だつて……だつて……だつて……」 いまが最高” だから！」）

『ノノノノ” 今がさいこ〜う”！

だつて〜だつて〜” 今がさいこ〜う”！』

（「おれたちはほのかな予感を感じて、それを信じて、これまでずっと” いまが最高” と言える光を追いかけてきたんだ」）

ナオキは曲を作り終わると、机に突っ伏して眠ってしまった。

その目からは一筋の涙が流れた。

パソコンの画面に映っていた曲名……

それは……

『僕たちはひとつの光』

「ア～ほのかな～予感からはじまり」

『ア～ひかりを～追いかけてきたんだよ～……』

9人は手をつないで両膝をついて天井を見上げた。

『ふおおおおおおお!!!!』

パチパチパチパチパチ……

「みなさん、今日は1日限りでしたがまた私たちを見てくれてありがとうございます！」

「「「「「「ありがとうございました！」「」「」「」」」」」」

9人が横に並んで、穂乃果がそう言うのと9人は声を合わせて頭を下げた。そして9人は手を振ると、花びらは閉じていった。

完全に閉じると花はまたスクリーンの方に向かって下がっていった。下がりがきるまでずっと拍手がなりやまなかつた。

ステージ裏でも、μ、sにはあたたかい拍手が送られた。

10人はみんなで抱き合って涙を流した。

そんなμ、sの耳に……ある声が届いてきた……

すると大ステージの端にピアノが現れ、真姫に赤いスポットライトがあたった。それから綺麗な伴奏がドーム中に響いた。

そして大ステージの絵里に水色の、中央ステージのナオキにもスポットライトがあたった。

ナオキは大ステージに向かって歩きながら歌った。

「いつも通りまってるよ〜」

次に希にも紫のスポットライトがあたった。

「あの、場所でまってるよ〜」

次にここにもピンク色のスポットライトがあたった。

「ヤクソクはないけれど〜」

「「きつとつたわ〜る〜」」

「「いつも通りまってるら〜」」

真姫が歌うとその次に凜にも黄色のスポットライトがあたった。

「あの、場所でまってるら〜」

次に花陽にも緑色のスポットライトがあたった。

「「かけてくる笑顔で〜」」

「「息をはずませ〜」」

続いてことりに白色のスポットライトがあたった。

「まいにちがあつという間に」

次に海末に青色のスポットライトがあたった。

「ながれるからせめて”いま”を」

次に穂乃果にオレンジ色のスポットライトがあたった。

「だいたいしたいんだ〜”いま”は〜」

「「もどらない」」

これで10人全員にスポットライトがあたった。

9人は真姫、花陽、凜、ことり、穂乃果、海末、絵里、希、にこの順番で穂乃果と海末の間にはスペースがあった。

ナオキはそこに向かって歩いていった。

この曲はナオキが考えていて、絵里にアメリカでバレた曲だ。

ナオキはこの曲に込めた想いを、作曲していたときを思い出しながら歌った。

それは、第2回ラブライブ！本戦のあとに1人自室で考えていたことだ。

μ sはその日をもって活動を終わりにする”はず”だった。でもやっぱり想いは抑えきれずに作ったのがこの曲……『これから』だった。

「みんなでもたいたいも通り会えるよな……」

大丈夫、あの場所で会えるから……

おれたちは”これから”も笑顔で色んなことを乗り越えられる……

練習の終わったあと、1日の終わりの空に照らされながら明日のこととかをみんな語り合ったあの夕暮れがなんか……とても懐かしい……」

ナオキの頭には、10人で翌日の授業のこと、練習のこと、生徒会のことなど色んなことを話したときの光景が浮かんできた。

「おれたちはこれからお願いを抱いてキラキラとした夢の糸を紡いで……」

心はすでに次の物語を探してる……ハラシヨ……素敵なことじゃん……

でもみんな、その物語……光をどこまで追いかけるんやろう……

でもさ、おれたち10人が一緒に見ると決めた輝光きはおれの胸の宝石になった……輝

く永遠の思い出になった……

でもこれはきつとみんなも同じ気持ちなんやろうな……」

ナオキはそう書いて目を瞑って上を向いた。

そして目を開けると目からは一筋の涙が流れた。

「きくせつはめぐる〜！

かわつて〜ゆく何もかも〜！

（「「「「「「「「「「「「「「」」

しぜんなことさ〜でもココロは〜少し……

（「「「「「「「「「「「「「」」

寂しがってしま〜うよ……！」

そしてラスサビ、ナオキが想いと力を入れてその部分を歌った。

「「「「「「「「「「「「「「きくみは想いを〜！」

（「おもいを〜」）

何処までおいかけろのだろう〜！

（「何処まで〜」）

いつしよにいと決めた出会いから〜だいぶ……

（「とおい〜」）

遠い所へきた〜……！」「」「」「」

そして真姫はピアノを弾くのをやめた。

「ああ〜きつとキミも〜同じキモチ〜」

真姫……

「ああ〜きつとキミも〜同じキモチ〜」

凜……

「ああ〜きつとキミも〜同じキモチ〜」

花陽……

「ああ〜きつとキミも〜同じキモチ〜」

（「〜」）……

「ああ〜きつとキミも〜同じキモチ〜」

希……

「あぁ～きつとキミも～同じキモチ～」

絵里……

「あぁ～きつとキミも～同じキモチ～」

ことり……

「あぁ～きつとキミも～同じキモチ～」

海未……

「あぁ～きつとキミも～同じキモチ～」

穂乃果……

「あぁ～きつとキミも～同じキモチ～」

ナオキ……

『あぁ～きつとみんな～同じキモチ～』

μ's……

そして全員が歌い終わると真姫はまたピアノを弾き始め、曲をしめた。

パチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチ……

観客の人たちは曲が終わると拍手をした。

「穂乃果っ……………！ことりっ……………！」

「ことりちゃんっ……………！海未ちゃんっ……………！」

ことりと海未は穂乃果に抱きついて、耐えきれずに声をあげて涙を流した。

「真姫ちゃんっ……………！かよちんっ……………！」

「凜っ……………！花陽っ……………！」

「真姫ちゃんっ……………！凜ちゃんっ……………！」

凜と真姫と花陽も抱き合って声をあげて泣いた。

「希っ……………！絵里っ……………！」

「えりちっ……………！にこっち……………！」

「希っ……………！にこっち……………！」

希とにこと絵里も抱き合って涙を流した。

ナオキは目から涙を流しながら泣いているみんなを見回した。

「つたくよ……………こんなところぞっ……………泣くなつて……………うっ……………うう……………」

ナオキは声はあげずにまだ若干耐えながら涙を流した。

そして10人は集まって肩を組んだ。

涙を流しながらも、笑顔で……………

ナオキはみんなを見回して今にも泣き崩れそうな声でこう言った……………

「みんなっ……………ありがとうっ……………！」

その言葉にみんなも同じような声でこう返した……

「……………ちっらっそっ……………！」……………

そしてみんな耐えきれずに大粒の涙を流した。

ステージ裏……

10人はステージで泣いた後、スタッフの人たちからのあたたかい拍手のなか、目に涙を含めながらも成功を喜んだ。

「みなさくさん、記念撮影しますよ〜」

そしてあるスタッフの人がカメラを構えて言った。

「じゃあナオキくんが真ん中ね!」

「おれが!?!」

穂乃果はナオキの背中を押して言った。

「ほらナオキはやく!」

「ちよつ、絵里……!」

絵里はナオキの腕を引っ張って、半ば無理矢理に座らせた。

その周りにみんなナオキに引っ付くように集まった。

「いきますよ〜!」

「「「「「「「は〜い!」」」」」」」」

「せ〜の……!」

「「「「「「「ラブライブ!」」」」」」」」

パシヤ……

10人はとびつきりの笑顔で手をしのカタチにして写真に写った。

くラブライブ！（μ，s）く

『それで、μ，sの活動は完全に終わった。

後悔はしていない。

ぶつかったこともあった、笑いあったときもあった、泣きあったときだって……
でも本当に最高の日々だった。

『いまが最高！』

ほかのスクールアイドルにも、こう言えるような活動をしてくれると……嬉しいな。

これで活動日誌を終わる。』

「よし……これで終わりか……」

あとは最後のページにこれを貼ってつと……よし！」

ガチャ……

「お義兄ちゃん！練習始まるよ！」

「早くしてください、ナオキさん！」

「はいはい……わかってるって」

ナオキは呼びに来た“新入部員”2人と一緒に走って屋上にむかった。

ナオキがさつきまで書いていたのは『μ's 活動日誌』……

そこにはμ'sのはじまりから終わりまで、全てのこと書かれていた。

そして最後のページには……………

最後を伝えるライブと本当の最後のライブのときに撮ったμ'sの集合写真が貼つてあった。

次回、新章に続く……………

Another way (希の誕生日)「今日ってウチの誕生日やんな?」

「じゃがりこ食べたい……」

ウチ、東條希は神田明神でお手伝いをしている最中にふとそう思った。

なんでか? そんなんうちに質問をしんといて。

質問するんやったらシベリアにしてや。

そんなことより、ウチは高校も卒業してみんなと会う機会も減ってきて少し寂しく感じるんや。

ずっと一緒にいたわけやし。

でもナオキくんに告白したのも卒業式の日でよかったと思ってる。

ウチは昔を懐かしむように空を見上げた。

はあ……できることなら誰かに会いたいな……

そう思ってたら……

誰かが階段をのぼってくる音が……

「ふう……久しぶりに歩くと疲れるわね」

「えりち！」

なんとえりちやった！

誰かと会いたいと思つてやんよ！

スピリチュアルやね……なんて、言うとても思つたん？ざくんねん実は待ち合わせしてたんや！！

「ごめんなさい、まだバイト中？」

「うん、でももうすぐ終わるで」

「そう、よかった」

えりちと久しぶりに会つて、なんだか不思議な気分……

「香川くご飯よ〜」

「は〜い」

あ、またあの子だ。

確か名前は……津田香川くんだつたかな？
つだかがわ

ナオキくんの名字と一緒にだつたからすぐ覚えれたわ。

で……

「えりち……?」

「えっ!? な、なに……希?」

目を丸くしていたえりちに声をかけるとえりちはびくつとした。

「ははくん……まさか香川って聞こえて、『ナオキと籍を入れたら私も香川になるのよね』なんて思ってたんとちゃう?」

「☆☆♪○?★◇*○○♪」

あ、このイミワカンナイ反応を見ると凶星みたいやね。

「まあまあえりち落ち着いて。」

「またま慌てるような時間じゃないよ?」

「希、またまってなによ……」

「え? ああ……ごめん、まだやったわ」

「なんでウチも慌てるん!」

「確かに香川って名前にはびっくりしたけど……」

「ま、まあ……よく言うやん?」

『四本足の馬でさえつまずく。』って! 猿も木から落ちるレベルで!

「あ、もうあがる時間やわ。ちよつと待っててや」

「ええ、わかったわ」

また遭遇してしまった。

でも今回は警察の人に追いかけられていた。

そしてその警察の人は狂人を押さえた。

「この私が逃げるとお思い？」

「甘いですわね、ブリオツシユよりも甘いですわ…」

「くそっ！離せっ！」

「黙らっしやい！」

『一度手をだしや大人になれない。二度手をだしや病苦も忘れる。三度手をだしや…お前たちも永遠の苦輪に悩むがいい』

「この言葉、忘れたとは言わせませんわよ！」

「忘れないよ……だけどおれは困だ……」

「なんですって……!?!」

その警察の人が周りを見ると何人かの狂った男たちに囲まれていた。

「これで終わりだ……」

「ダメっ！逃げて〜！」

「えりちは警察の人に逃げるように叫んだ。

「いいえ……決して逃げませんわ……!」

「っ……………どうして……………?」

「私は民を愛しています、そして民も私を愛してくれている

そんな民を置いて、この私だけが逃げるわけにはいきませんの!

少しでも多くの民を救うことが己の出来る、最大の責務なのですわ!」

そう叫んでからの警察の人は凄かった。

ハリウッドで見えるようなアクションで男たちを押し倒して気絶させた。

気づくと囲んでいた男たち全員が気絶していた。

「ハラショー……………!」

「スピリチュアルやね……………!」

「騒がしてしまつて申し訳ありませんですわ。それでは失礼……………」

「あのっ!お名前だけでも!」

その人はウチがそう言うのと立ち止まった。

「名乗るほどのものではありませんわ……………ローズです」

名乗つてるやん……………

その人はそう言つて搬送車両に乗り込んだ。搬送車両はその人が乗り込んでから発

車した。

「さ、今度こそ行きましょう」

「せやな」

ウチらはまた歩き出した。

くラブライブ！（希）く

「あら、あそこは……？」

「ん？ああ、神じゃ屋だよ♪」

「え、私は死なないわよ？」

「いやいや、『死んじやだよ』じゃなくて神じゃ屋だよ♪」

「ああ……なるほど」

えりちが指さしたのは最近人気のカードショップの『神じゃ屋』だった。

「入ってみる？」

「まあ、まだ時間あるし少しくらいいいわよね」

「よし、じゃあレッツゴー！」

ウチらはカードショップ神じゃ屋に入った。

そこではいつも通り熱い戦いが繰り広げられていた。
そのカードゲームの名は……………

「女神大戦〜スクールアイドル・ウォーズ〜」

「スクールアイドル? ってことは私たちのカードもあるの?」

「せやで。ちなみにウチも持ってるで」

「ハラシヨ……………」

ウチはカバンからデッキを取り出した。

すると……………

「あ、希と絵里じゃない?」

「ん……………あ、にこっち!」

「にこ!」

そこにはなんとにこっちがいたんや!

「2人とも久しぶりね」

「そうね」

「もしかしてにこっちもやってるん?」

「ええ、こころたちもしてるわよ」

にこつちが指を指した方向には、こころちゃんたちが対戦していた。

「せや。にこつちウチとやる？」

「ええ、いいわよ」

そしてウチとにこつちで対戦をすることになった。

このカードゲームは基本は攻撃して行って、相手のアイドルポイントを0にした方が勝ち。

アイドルポイントとはゲームの最初にランダムに裏向きでセットする5枚のカードで、それを攻撃すると表になる。そのカードごとに効果があり、表になると発動する。

「いくでにこつち！」

母なる大地より放たれた裁きの光

その名は……

「母ミルキーウェイ乳ツツツツツ！」

相手のステージ上の全てのカードを破壊するで！」

「なんですって!? なかなかやるわね……」

「ふっふっふ……ウチをなめらんといてや。」

そして『μ, sの東條希』でアイドルポイントにアタック!

にこ:アイドルポイント、残り2

希:アイドルポイント、残り3

「くっ……それでこそ面白いのよ!

でも誰であろうと、私を超えることは不可能だ。

つまらない日常に風穴を!」

「お姉様はつまらない日常に風穴を開けていく……希さん、終わりですよ」

「にこは聖のもの……」

聖なる剣をにこのために!その剣を振るうために、私はあなたに力を捧げるわ!

ゴッドスレイヤーひじり
神殺しの聖をサポート登場!

サポート登場とは、スクールアイドル以外のカードをステージに上げる登場方法。そのためにはアイドルポイントが3以下かつ相手より下の場合でなければならぬ……

「一発逆転のカード……」

「よくわかってるじゃない。」

神は死んだ!

『μ, sのにこにー』で『A—RISEの英玲奈』をアタック!

「くっ……………」

「そして『神殺しの聖』の効果で相手のステージのアイドルが1体だからアイドルポイントに直接アタックできる！」

さらにさつき表になったカードの効果でダブルアタックを可能に！」

希：アイドルポイント、残り1

「つ……………オープン効果発動！」

このカードが表になった時に残りアイドルポイントが1のとき、相手のアタックフェイズを強制終了！」

「くっ……………運がいいわね……………ターンエンドよ」

「さあー悪い運命を振り切るでえ!!？」

A s e c r e t m a k e s a w o m a n w o m a n ……」

「……………なによそれ……………」

「秘密は女を女にするって意味やで……………にこっち。」

『シークレットアイドル舞里』を自身の効果により特殊登場！」

「出たわね……………」

「知ってると思うけど、『シークレットアイドル舞里』はアイドルポイントが残り1の場合のみに登場できるんやで」

「知ってるわよ……」

「さらに『μ'sの絵里』を通常登場!

希でにこつちにアタック!

舞里で聖をアタック!

ラストや! さつき表になったカードの効果でえりちにダブルアタックを可能に! これで終わりやー!!」

「うわああああああ!」

くラブライブ! (希・にこ) く

「いやあく熱かったわね〜!」

「せやね〜。」

でも貴女たちのライブは素晴らしかった! 曲も! ダンスも! たがしかしまるで全然! この私を倒すには程遠いのよね!

あ、曲とかダンスっていうのはスクールアイドルウォーズに使うカードの種類のことやで!

「あれがスクールアイドルウォーズ……ハラショー！」

「やろ？ えりちもやってみる？」

「ええ！」

「それならまたあそこに3人で行きましょうよ」

「賛成〜！」

「「ふふふふつ……」」

ウチら3人は笑いあった。

「さ、遅れちゃったけど……」

「穂むらに到着ね」

「あ、ほんでなんで穂むらに集合なん？」

「それは入ってのお楽しみよ」

えりちは人差し指を鼻に当てて言った。

ガラガラガラ……

「穂乃果〜来たわよ〜」

「は〜い！ もう3人とも遅いよ〜！」

「ごめんなさい……みんなは?」

「みんな待ちくたびれてテレビ観たりスクールアイドルウォーズをやったりしてるよ」

「そうなん?」

「さ、上がって上がって!」

穂乃果ちゃんに連れられてウチらはお邪魔した。

「誰であろうと、私を超えることは不可能だ!

いっけ〜! 『しーら! かんす!』」

「ばなああああああ!」

あ、凜ちゃんが勝って花陽ちゃんが負けた。

「凜ちゃんは強いね〜」

「えへへ……」

「でもさ〜ナオキくんも素直じゃないよね〜」

穂乃果ちゃん?

「そうそう! あれだけやらないって言うてたのに対戦を見て光の速さで買いに行つたよね〜」

「絶対にナオキくんってツンデレなんだよ!」

「そうにやそうにや！」

これ……ナオキくんが聞いてたらどうなってたんやろうな。

「あらナオキ、おかえりなさい」

「おお、絵里たち来てたのか」

あちや……

それにさつき穂乃果ちゃんと凜ちゃんがびくつてなつてたし。

「そして穂乃果、凜、話は聞かせてもらった。

ほほう。だ・れ・がツンデレだつて？ まったく、これはお話かな？ よし、ちよつ

と二人ともそこに座つて、ね。じゃあO☆HA☆NA☆SIしよつか♪」

「そんな〜！」

「でもでも、ナオキくんも空気読んでよ！本日の主役が来たばっかりなのに〜！」

「ならばあえて言おうじゃないか。空気は壊すためにあるつてね！」

「む〜！ならスクールアイドルウォーズで勝負だよっ！」

「なんでそうなる!?ま、いいけどよ……」

穂乃果ちゃんが勝負を仕掛けると、ナオキくんはデッキを取り出した。

「ふふん……初心者のナオキくんはこのヴェテランの穂乃果には勝てないよ。やり方教えながらにしようか？」

「うぜー! 巻き舌うぜー!」

そう、ナオキくんはまだデツキを買ったばかり。

ベテラン(笑)の穂乃果ちゃんには……

「しゃーね、真実を教えてやるよ」

「え?」

「おれは初心者じゃねーよ……」

「な、なんだって〜!? ずつと騙してたの!?!」

「騙されてから気付くんのだ。自分の愚かさに。なんどもなんども……一体いつになったら人は愚かさを捨てれるんだろうね……」

「もう……穂乃果は怒ったからね……!!」

一度壊れた関係はもう二度と元には戻らないって。でもね、思い出してよ! 私と貴方はそうじゃなかったよ! 壊れたらもう一度繋がればいいんだよ! 待ってて、私のライブで風穴を空けて、向こう側に行っちゃった貴方の心に熱いファンサービスを届けてあげる!」

「おう、ばつちこいや!!」

そして2人のライブバトルが始まった。

2人の対戦は熱かった。

でもナオキくんはまさに規格外……

「行くぜ！おれはこのカードを発動する！

『ワールド墓穴ほりクラシック』！」

「っ……！そのカードはっ!?!」

「おれのアイドルポイントを2枚まで削る!!」

ナオキ：アイドルポイント、残り2

穂乃果：アイドルポイント、残り5

「……きた!」

「っ……!?!」

「おれは表になったこのカードの効果を発動する！

『ダブルスポットライト』!!」

「そのカードは!?!」

「その通り……おれは2人のキャラをサポート登場させる!」

「2人も!?!」

「まずは1人目……『μ'sのナオキ』をサポート登場！」

そして、2人目……『將軍輝』もサポート登場！」

「輝……?」

「なあ、穂乃果……知ってるか？」

「輝」ってさ

光に軍って書くんだぜ……」

「光に軍……?まさか……!?!」

「その通り!輝の効果発動！」

このカードがサポート登場に成功したときデッキから『將軍』と名のつくサポート専用カードをステージにサポート登場させる！」

將軍と名のつくカード……それはサポートカードの中では最高峰のもの。

それを使っていることはナオキくんは相当ベテラン……

穂乃果ちゃんのベテラン(笑)とは格が違いすぎる……!」

「これは心してかからないと……」

「おれはデッキから……『將軍ヴァームス』をサポート登場！」

そしてルールによりサポート登場を3回したので強制ターンエンドだ」

そう、サポート登場は強力なキャラをステージに出せるけどその代わりに回数には制

限がある……ナオキくんはそれを承知の上でしたんや……。

「穂乃果のターン！」

行くよ！『μ，sの穂乃果』を登場！

さらに穂乃果の効果！『リーダー！』

手札から『μ，s』と名のつくカードをサポート登場できる！

『μ，sの海未』と『μ，sのことり』をサポート登場！

「おお、2年生組を揃えてきたか」

「えへへ……行くよ！」

「穂乃果く！洗濯するからねく！」

「え、ちよつと待って！」

「ママ！パパの服と一緒に洗濯しないでって言ってるでしょ！」

「なんでお前がママとか言ってるの!?!」

「突っ込むところそこなん!?!」

「もういいよ！お母さんなんて知らない！」

あ、戻った……

「さあ、来い！」

「穂乃果は2年生組の協力効果発動！」

3人は3人の力を合計してアタックできる!

行くよ!穂乃果でヴァームースに2年生組協力アタック!

「ふっ、穂乃果……お前は判断を誤った」

「っ……!?!」

穂乃果ちゃんは見落としていた。

ナオキくんの伏せカードを……

「ああ?!?伏せカード!?!」

「落ちて着け孔明の罠だ……オープン」

ナオキくんがオープンしたのは『孔明の罠』……あくあ……

「全然落ち着けないよ!」

「アタック無効!そしてアタックフェイズを強制終了!」

「くっ……カードを伏せてターンエンド……」

「行くぞ穂乃果……」

「っ……!?!」

「おれはヴァームースの効果を発動!

ヴァームース。英語で書くとvermouth……そうベルモットの事だ……

ヴァームースをドレスアップ!

現れろ！ベルモット!!」

「もう無茶苦茶だよ〜!」

ナオキくんのヴァームースは効果でドレスアップしてベルモットになった。

「さあまだまだ行くぜ!」

おれはこのステージカードを発動する! 『行こう行こう雪の国へ♪』

さあ、見なさい、あれがシベリアだよ」

「あれが……!?!穂乃果には見える!シベリアが……!?!」

「さ、シベリア送り25ルーブルだ」

「そんなのないよ〜!なくんてね……ナオキくん、墓穴を掘ったね」

「な……に……!?!」

「私は緊急登場!その名も……!」

「穂乃果ちゃん!?!」

ガタン!

「P」

「P」

「E」

「E」

「N」

『N』

「GINせえーの!」

『PENGIN!』

「thank you!」

「穂乃果が英語を!」

「じゃなくて!穂乃果は『PENGIN!』を緊急登場!」

「なんだと!」

「PENGIN!シベリア出兵だよ!」

シベリア出兵wwww

まるで作者やん!

じゃなくて、まさか穂乃果ちゃんあのカードを持っていたなんて……恐るべし!

「ここでPENGIN!の登場か……仕方ない……おれは『ニコニー』を登場させてターンエンドだ」

なんでもこつちを……

「穂乃果のターン!」

行くよ!PENGIN!のアイス効果発動条件クリア!」

アイス効果……水系のステージカードが発動されている時だけに発動できる効果……穂乃果ちゃん、なにげに凄い！」

「ちっ……」

「私は数字を1つ宣言して効果発動！宣言した数字と同じバストを持つアイドル1人をライブから除外する！私が宣言するのは74！よってニコニーを除外する！」

「甘いぞ穂乃果！ニコニーのバストは71！よって効果は無効だ！」

「何!?サバを読んでいたというのか!？」

「うっ……なにかが刺さった……」

「にこっち……」

「そんな目しないですよ……余計心にくるわ……」

「空振りだったな……穂乃果」

「ふふん、いいもん！PENGIN！でニコニーをアタック！」

「ちっ……はむっ……」

「あれ、ナオキくんなに食べてるの？」

「ん？ああ、キャベツだよキャベツ」

「それ……セロリだよ？」

「嘘だろ……俺が今までキャベツだと思つて食べてたのはセロリだったのか……」

「まあ、いいよ別にそんなことは。」

PENGIN! の効果でそのままアイドルポイントに突っ込め〜!」

「なっ……!?!」

ナオキ: アイドルポイント、残り1

これはナオキくん……采配を誤ったんかな?

「そして穂乃果でベルモットに2年生組協力アタック!」

「ベルモットオオオオオオオ!!」

「さらに海未ちゃんをナオキくんを2年生組協力アタック!」

「おれええええええ!!」

「さらにさらにことりちゃんを輝に2年生組協力アタック!」

「輝ううううう!!」

「さらにさらにさらに! 伏せカードオープン! 『パーフエクトゲーム』!」

私のアイドルポイントが5枚で相手がそれよりアイドルポイントが少ない時、アタック

クフェイズをもう1度できる!」

「くっ……ステージカードの効果で相手のステージのキャラカードを全て手札に戻せる

が……」

「PENGIN! には通用しないよ!」

いっけろ!!」

ガタン!

「P」

『P』

「E」

『E』

「N」

『N』

「GINせえーの!」

『PENGGIN!』

「thank you!」

「ぐああああああああ!!」

くラブライブ! (希・ナオキ・穂乃果) く

「負けた……」

ナオキくんは膝から崩れ落ちていた。
あとさつきから大人しいけど凜ちゃんは……………

テケテケテケテケ

ホープ「1!」

レイ「2!」

ヴィクトリー「3!」

V「4!」

ライトニング「5!」

ONE「6!」

ビヨンド「7!」

ルーツ「8!」

カイザー「9!」

ドラグーン「10!」

未来皇「11!」

ゼアル「ちよつと多くないかにや」

ゴミ、カス、チンピラ!!!

えりちこれはとんでもなく怒ってるなあ……

「だつてよく……」

「言うことはないの?」

「えつとく……」

「い・う・こ・と・は・?」

「もう、死んじやつてもいいくらい!」

「そう……」

えりちは拳を構えた。

「待て待て待て! 冗談だから! 冗談!」

「ならちゃんと言うことがあるでしょう?」

「大変申し訳ございませんでした。今日は割り勘の予定でしたが、みなさんに焼き肉を

奢らせていただきます……」

「うん、よろしい! じゃあ……ここそこそこ……」

「まじか!? よつしやみんな肉食いに行くぞ!」

ん? ナオキくんが急に元気に……これはなんかあるな

でも……

「焼肉食べさせて〜 お腹ペコペコなんよ」

「ああ、わかってるよ。それになんで割り勘にしようと思ったか、もうわかるだろうけど
言っておく……」

「……………希（希ちゃん）！誕生日、おめでとう（ごぎいます）！……………」

そう、今日はウチの誕生日……

本当はサプライズにするつもりみたいやったけど、ここに来た時からわかったた。

だって部屋に入ったらパーティーの準備がされてたし……はははは……

「さ、焼き肉を食べに行こう！」

穂乃果ちゃんに続いてみんな外に歩いていった。

「希！」

「ん、どうしたん？」

「その……言葉にすると恥ずかしけど、本当に出会えて良かったと思ってるよ。」

希には感謝の気持ちしかないよ。

希がいなかったら絵里ともこの関係になれてなかっただろうし、こんなにもいい高校生活を遅れなかった……

ありがとう

「ナオキくん……お礼を言うのは私の方だよ……」

「そんなこと……」

そう、ナオキくんには感謝してもしきれないくらいのことがある……

そんなの一つしかない……

「焼き肉、ゴチになりまゝす！」

「そっちかよおおお!!!」

最後の一年のはじまり

第121話 「2人の少女の試練」

μ sの本当の最後のライブの2ヶ月前……つまりは4月……

μ sは先月末のライブでしっかりとみんなに最後を伝えた。

そのことはニュースや新聞でも取り上げられ、世界中を駆け回った。

そんなμ sのメンバー……

3年生組はそれぞれの道を歩み始めた。

絵里は短期大学へ進んだ。

にはアイドルのオーディションを受けたいが、家のこともありスーパーでパートとして働いている。

希は占いを独学で学びながらも神田明神での手伝いを続けている。

ナオキ・穂乃果・海未・ことりの2年生組は3年生になり、凜・真姫・花陽の1年生組は2年生になった。

そして音ノ木坂学院では入学式が行われた。

今年の入学者はμ、sの活躍もあつて前年度より明らかに多かつた。

もちろん、穂乃果の妹の高坂雪穂、絵里の妹の絢瀬亜里沙もそのうちの1人だ。

その日は入学式が終わると新生生はHRで自己紹介やら資料の配布やらを終わらして解散となる。

雪穂と亜里沙は緊張してある部屋のドアの前にいた。

「雪穂……緊張するね〜」

「だ、大丈夫だよ!」

そして2人は唾を飲み込んだ。

「い、い、い……!」

「うん！」

そして雪穂はその部屋のドアを叩こうとした。

「よお、どうしたんだ？」

「ひゃあああああああー！」

雪穂と亜里沙は急に声をかけられたので声をあげた。

「うおっ!? どうしたんだよ急に大声なんかだして」

「ナオキさんだったんですね……ほっ……」

「お義兄ちゃん！」

雪穂はほっと胸をなでおろして、亜里沙は喜んだ。

声をかけたのはもちろんナオキである。

「で、なんでこんなところで突っ立ってたんだ？」

「えっと〜」

雪穂はナオキの言葉に目を逸らした。

「……ああ、なるほど。入ろうとしたけど緊張していたって感じか？」

「ハラシヨ〜！ お義兄ちゃんすごい！」

「正解みたいだな」

亜里沙が飛び跳ねて喜ぶとナオキはニヒツと笑った。

「あはははは……やっぱり」あの”アイドル研究部ですからなんだか緊張して……」

雪穂はそう言いながら頬を人差し指でかいた。

「そんなに気を張らなくてもいいよ……だってさ……」

「えっ!?!」

ナオキはそう言つてその部屋、アイドル研究部の部屋のドアノブに手をかけた。

ガチャ……

「おれたちはお前らをむかえる準備が出来てるんだからな!」

ナオキが部屋のドアを開けると、そこには6人の少女たちがいた。

「……ようこそ! アイドル研究部へ!」

6人は雪穂と亜里沙に向かって声を合わせて言った。

「っ……!」

「もう、雪穂遅いよ!」

「穂乃果、仕方ないでしょ! 新入生もやることがあったのですから!」

「そうだよ」

「亜里沙ちゃんも久しぶりにゃ!」

「さ、早く座りなさいよ」

穂乃果・海未・ことり・凜・真姫は言った。

「ずっと待ってたんだけぞ？お前らが来るの」

「な、なんで…………？」

「なんでってそりゃあ、2人とも入部するだろ？音ノ木坂学院、アイドル研究部に」

「はい！」

2人はナオキがそう言うのと元気よく返事をした。

「だそうだ…………」部長さん…………」

「はっ…………！」

雪穂と亜里沙は気づいた…………

部屋の奥のパソコンの前にこちらを背に座っている明らか周りとは違う雰囲気を持ち

主に…………

そしてその人物はこちらに振り向き始めた。

雪穂と亜里沙は唾を飲み込んだ。

そしてその人物は腕を組んでこちらを見てきた。

「わっ、わたし…………わ、私がアイドル研究部部長の小泉花陽です！」

(囁んだ……)

その場にいる花陽以外の全員がそう心の中で呟いた。

「2人とも！」

「はいー！」

「……………ようこそっ！」

花陽は先程の硬い表情から一転、今度はぱあつと笑顔になってそう言った。

「ほっ……」

雪穂と亜里沙はなにか言われるのではないかと緊張していたのでほつと胸をなでおろした。

「じゃあ入部届けを書いてきてくださいね」

「はいー！」

花陽はそう言って入部届けを2人に渡した。

「よし、じゃあ練習するか！新歓ライブもあるし、2人にも練習がどんなもんか見てもらわないと」

「はい、じゃあみなさん着替えて屋上に集合です！」

「……………はいー！」

そしてナオキ以外のメンバーは隣の更衣室に向かった。

「さて、先に行つとくか」

ナオキは音楽プレイヤーやドリンクを持って屋上に向かった。

くラブライブ！（雪穂・亜里沙）く

「ワン！ツー！スリー！フォー！ファイブ！シックス！セブン！エイト！………」
ナオキの掛け声で6人は練習していた。

雪穂は真剣な眼差しで、亜里沙は目をキラキラさせて練習を見ていた。

「よし、10分休憩な」

「「「「ふうく」」」」

ナオキがそう言うのと6人は休憩に入った。

「2人とも、どうだった？」

ナオキは雪穂と亜里沙に言った。

「ハラシヨー！だったよ！私もあんなふうにな手くならなきやつて思った！」

亜里沙は目をキラキラさせながら言った。

「雪穂ちゃんは？」

「私は………すごいなって思いました。お姉ちゃんもいつもと違って真剣だったし」

「ちよつとそれどういう意味!？」

穂乃果は雪穂のセリフを聞いて言った。

「ははは………まあ2人とも、頑張ってくれよ」

ナオキは2人の頭をぽんぽんと優しく叩いて言った。

「はい！」

それから雪穂と亜里沙の指導を新3年生組の3人に任せて、ナオキは新2年生組の指導にあたった。

「3人だからもつと大きく動け！花陽、真姫、いつもよりもつと大きく！凛は大きすぎ！少し抑えろ！」

「はい！」

今回の新歓ライブは講堂で新2年生組がすることになっているのだ。

「よし、休憩にしようか」

「ふえ〜疲れた……」

花陽はその場に座り込んで言った。

「ナオキくん厳しいにや〜」

「そうか？いつも通りだと思おうが？」

凜もその場に座り込んで言った。

「そうよ……凜らしくないわね」

真姫はそんな凜を見て言った。

「だつて〜」

「ほらよドリンク」

ナオキは3人にドリンクを渡した。

「お義兄ちゃんっていつもあんなに厳しいんですか？」

亜里沙はストレッチをしながら穂乃果たちに聞いた。

「うん、でもあんなに気合入ってるのは久しぶりだね」

「そうだね〜」

「やつぱり新歓ライブなんです。余計に気合が入ると思います」

ことり・穂乃果・海未は言った。

「ふ〜ん……」

雪穂もそうなんだという表情をした。

「でも新歓ライブって懐かしいね〜」

「そうだね。私たちもしたもんね」

「あの誰もいない講堂の光景はあときは辛かったですけど、今となつてはいい思い出ですね」

穂乃果・ことり・海未は観客0の新歓ライブのことを懐かしむように話した。

〜ラブライブ！（穂乃果・海未・ことり）〜

「よし、今日の練習はこれまで！1年生も初日からお疲れ様」

「「「「「お疲れ様〜（です）」「「「「」

「お義兄ちゃん！一緒に帰ろう！」

「はいはい、わかってるよ。はやく着替えてこい」

「は〜い」

亜里沙は嬉しそうに更衣室に向かった。

「仲がいいですね」

海未はその光景を見てナオキに言った。

「そうか？まあ、最近亜里沙ちゃんにはおれに敬語はなるべく使わないように言ったけど、亜里沙ちゃんもそれで話しやすいんだと思う」

「なるほど……ということはまだ”あれ”を考えないとですかね？」

「だな」

2人は笑みを浮かべた。

くらぶライブ！（ナオキ・海未）く

ガチャ……

「ただいま〜！」

ナオキと亜里沙は元気よく言った。

「おかえりなさい。亜里沙、どうだった学校は？」

「うん、楽しかったよ！」

亜里沙は帰りを迎えた絵里に言った。

「そう、ならよかったわ。さ、ご飯にしましょう。さつきできたところよ」

絵里はクルツとリビングの方に向いて体を向け、顔はナオキたちに向けて言った。

「よっしゃー！じゃあ早速……その前に着替えてきてね……はい」

ナオキは意気揚々とリビングに向かおうとするが、絵里にニコツとしてそう言われたのでしゅんとなった。

「「いただきま〜す！」」

そしてナオキと亜里沙は制服から着替えて待ちに待ったご飯の時間。

ナオキはやつと食べれると勢いよく食べた。

絵里もナオキがとても美味しそうに食べるので嬉しくなった。

「そういうえば絵里って大学いつからだっけ？」

ナオキはふと疑問に思ったので言った。

「確か……月曜日に入學式で、その3日後から講義が始まるわよ」

絵里は箸を顎に当てて言った。

「そうか……絵里が行くとこってなんか結構予定がきつそうだな」

「ええ、でも2年だけだし大したことないわよ」

「そうか……卒論とかあるのか？」

「卒論は……確かなかったと思うわよ。その代わり試験が多いけどね」

「そうなのか……大変そうだな」

「ええ、でもちゃんと頑張るわよ」

絵里は片手でガッツポーズをした。

「ああ……はむっ……」

ナオキはまた一口料理を口に運んだ。

次回へ続く……

第122話「同じもの・新しいもの」

前回のラブライブ！

私と雪穂は音ノ木坂学院に入学して、さらに憧れだったアイドル研究部に入部したの！そして今日は始業式の日！私たちの高校生活のスタートの日！

「亜里沙ちゃん、準備はできたか？」

「うん！」

「じゃあ2人とも、気を付けて行くのよ」

「ああ、じゃあ……」

「「いってきます！」」

「いってらっしゃい！」

ナオキと亜里沙は元気よく学校に向かった。

絵里は笑顔で手を振って2人を見送った。

音ノ木坂学院……

「じゃ、また放課後な」

「うん！」

亜里沙はそう言つて教室に向かった。

「さて、生徒会室に行くか……」

ナオキは生徒会室に向かった。

生徒会室……

ガチャ……

「（開いてる……海未かな？）おはよう」

「あ、おはよう」

「ヴええ!!」

「ヴええ!!?なんでそんな声出すのよ!」

ナオキは海未かと思いきや真姫が居たのでびっくりした。

「いやあく海未かと思つてたら真姫だったからついな」

ナオキは頭をかきながら言つた。

「なによそれ……そんなに珍しい？」

真姫は少し怒り気味に言った。

「ああ、珍しいな」

「ヴええ!!」

真姫はナオキの返答に声をあげた。

「おはようございます」

「おはよう」

「真姫が早いなんて珍しいですね」

「もう！海未まで！」

海未も入ってきて珍しそうに言った。

「ごめん、遅れちゃった？」

そのときフミコが入ってきた。

「いや、おれたちもさっき来たところだ」

「でもそろそろ時間ですかね？」

海未は時計を見て言った。

「そうね。早く行きましょう」

そう言うのと真姫は立ち上がった。みんなはそれに続いて講堂に向かった。

くラブライブ！（ナオキ・海未・真姫・フミコ）く

講堂には全校生徒が集まっていた。

今までは満席になることはなかった。

だがこの日は1年生の人数が多く、一番後ろの1年生ゾーンが明らかに人が多かった。

「ただいまより、音ノ木坂学院始業式を始めます。まずは理事長あいさつ、理事長、よろしくお願います」

フミコがそう言うと、理事長の長いあいさつが始まった。

「……最後に、新1年生のみなさん、これから3年間楽しんで下さいね。以上です」
「理事長ありがとうございます。続いて生徒会長あいさつ。生徒会長、よろしくお願います」

すずめが微笑んでから幕横に下がると、ナオキが横から出てきた。すると大半の生徒（さらに大半が1年生）がキヤーと声をあげた。

「どうもおはようございます。生徒会長の香川ナオキです。まず……」

生徒会長のあいさつが終わると、始業式も終了した。そして各自教室に戻った。

くラブライブ！（ナオキ）く

「いやくまたみんな同じクラスだとはな」

ナオキは新クラスの教室で言った。

「そうだね！よかったく！」

穂乃果は喜んだ。

「うん、なんだか安心するね！」

ことりは笑顔で言った。

「私がいるからには、しっかりと勉強してもらいますからね。穂乃果、ナオキ！」

「うっ……」

海未がニコツとして穂乃果とナオキを見て言うとうと2人は苦い表情をした。

「はははっ、4人は仲がいいねく」

「そりやあれだけ一緒に活動してたらね〜」

「ほんと、羨ましいよ〜」

ヒデコ・フミコ・ミカは言った。

「おつ、ヒフミもまた同じか!」

「だから略すな〜!」

ヒデコ・フミコ・ミカは声を合わせて言った。

「はいは〜い、みなさん席についてくださ〜い。HR始めますよ〜」

先生が手を叩いてそう言うともんな席についた。

「は〜い、1年間このクラスの担任をすることになった夕暮童子ゆうぐれどうしと申します。よろしく

お願いします〜」

新しい担任の童子が自己紹介をするとみんな拍手をした。

「ま、自己紹介とかは各個人で頑張つてな〜。ま、名簿を見るかぎりは去年のクラスとあんまり変わつてないみたいやけど……ほな、今日はおしまい。気をつけて帰つてな〜」

ナオキたちのクラスはそうして解散となった。

「なんかあの先生、優しそつたね〜」

「うん、なんだか喋り方も優しそつたしね〜」

「あの人関西人っぽいですよね？」

「ああ、多分京都の人だろうな。雰囲気もそうっぽいし」

穂乃果・ことり・海未・ナオキは廊下を歩きながら童子のことを話していた。

「なんだか楽しくなりそうだね！みんな一緒だし！」

穂乃果がそう言うところも頷いた。

「それじゃあ、おれと海未は生徒会の仕事してから行くから」

「うんわかった！また後でね〜！」

穂乃果は手を振ってことりと部室に向かった。ナオキと海未は生徒会室に向かった。

〜ラブライブ！（ナオキ・穂乃果・海未・ことり）〜

「……つてことで今日の会議はここまで。今日は朝からお疲れ様」

「お疲れ〜」

「お疲れ様です」

「お疲れ……」

ナオキがそう言うのとフミコ・海未・真姫は言った。

ナオキ・海未・真姫はフミコに鍵を預けて部室に向かった。

ガチャ……

「お待たせ〜」

「あ、ナオキくんたち来た！」

穂乃果はナオキたち生徒会組を見て言った。

「さ、早く練習するにや〜！」

「違うよ凜ちゃん！」

「そうだぞ、今日は理事長が来るんだろ？」

「あつ……」

花陽とナオキが言うのと凜はしまったという表情を浮かべた。

「でもなんの用事なの？」

「さあ？」

真姫が言うのと海未は首を傾げた。

「ことりちゃん、なにか聞いている？」

「ううん、何も聞いてないよ」

穂乃果がことりりに聞くとことりは首を横に振った。

ガチャ……

「みんないるかしら？」

噂をすればなんとやら、すずめがドアを開けて9人いるか確認した。

「はい、ちゃんと全員います」

花陽は言った。ナオキたちは椅子に座った。

「そう。実は今日はね、ちよつとお話があるのよ」

「話って一体……？」

ナオキは首を傾げて言った。

「実はここの顧問のことなのだけれど、今までは私がその立場にいたじゃない？でも理事長としての仕事があるからほとんど何もできてないじゃない？」

理事長は椅子に座りながら言った。

「えっ……理事長ってここの顧問だったんですか!？」

雪穂はすずめがアイドル研究部の顧問だったことに驚いた。

「あれ、言ってなかったっけ？」

穂乃果は首を傾げて言った。

「言っていないよ！亜里沙は知ってた？」

「ううん……」

亜里沙は首を横に振った。

「ふふつ、ほらこう知らない人も多いでしょ？それでね、考えたんだけど顧問を別の先生にやってもらおうと思ってね」

「別の……先生に？」

凜は目を丸くして理事長を見た。

「ええ、だからちやんと先生にお願いしてあるわ」

「『』『』『』『はやつ！』『』『』『』『』」

「じゃ、入ってもらおうわね。先生どうぞ」

「は〜い」

すずめがドアを開けてそう言うところから新しい顧問という先生の声が聞こえた。

みんな緊張した面持ちでドアの方を見た。

そして入ってきたのが……

「みなさんどうも、新しくここの顧問になった夕暮童子です。よろしくお願ひします」

」

「「「あんななんかいい!!!」」」

「「「わっ!」」」

新3年生組が声をあげるとほかのみんなが驚いた。

「ふふっ、サプライズ成功みたいどすな〜」

童子はクスクスと笑った。

「この人は……?」

「ああ、おれたちのクラスの担任だよ……まさか夕暮先生がここの顧問になるとは……」

凜が戸惑っているとなオキは答えてデコを押さえた。

「ほんとびつくりだよ〜」

穂乃果は目を丸くして言った。

「ふふっ、じゃあ夕暮先生よろしくお願いしますね」

「わかりました〜任せておくれやす〜」

「すずめはそう言っただけで部屋を出ていった。」

「さて、改めてこれからよろしくな〜」

「「「「「「よろしくお願ひします!」」」」」」」」

「よろしい。ではちよつとこの部活のこと、詳しく教えてくれへんかな?」

「わかりました！」

「あなたが部長さんやね？」

「はい！部長の2年生の小泉花陽です！」

「そんなに緊張せんでええよ。もつと肩の力を抜いて……」

「は、はい……」

童子が花陽の肩を持って言った。

それから童子にアイドル研究部のことを話し、次にライブをする人のダンスをみてみたいと言ったので、みんなは屋上に行くことにした。

みんなは着替えるので、ナオキは先に童子を連れて屋上に向かった。

「まさか先生が顧問だなんて思いもしませんでしたよ」

「ふふつ、驚いてくれたみたいでよかったわ」

「本当ですよ」

「そういえば、あんた関西弁れたな」

「はい……ちよつと色々あります……あはははは……」

ナオキは頭をさすりながら言った。

「そう、今の話し方もええんちゃう？」

「はい、まあ……さ、着きましたよ」

ガチャ……

ナオキが屋上のドアを開けると、童子は外に出て空気を吸った。

「ハ……いいところやね〜」

「そうでしょう？ なかなか来ることがないですけど、おれたちにとってはかけがえの無い場所です」

ナオキは屋上を見回して言った。

「ふ〜ん……」

そしてみんなも屋上にやってきて、新2年生組は童子の前で曲を披露した。

「「ふう……」」

パチパチパチ……

「いやあく間近で見るステージは違うな〜」

「「ありがとうございます！」」

「ほな、みんな練習していつて〜。あてはここで見とくさかい」
「わかりました。じゃ、みんな練習するぞ〜！」

そして今日も練習が始まった。

「はい、みんなまた明日な。ほな、さいなら〜」

「「「「「お疲れ様です！」「「「「「」」」」」」」」

夕方……練習も終わり、みんな帰宅していった。

ガチャ……

「「「「「ただいま〜！」「」」」」」

「おかえりなさい」

今日も香川・絢瀬宅からは元気な声がしていた。

その夜……

「「「「「そういえばナオキ、新しいクラスはどう？」」」」」」

絵里はリビングでナオキに髪を拭いてもらいながら言った。

「ああ、穂乃果たちも同じクラスだったよ」

ナオキは絵里の髪を拭きながら言った。

「担任の先生は？」

「夕暮童子先生だ」

「あ、童子先生なのね」

「あれ、知ってるのか？」

ナオキは目を丸くして言った。

「ええ、私のクラスの担任だった人よ」

「へ」

「あつ、でもお酒が入った童子先生には気をつけてね？」

「ほえ？どういふことだ？」

「あの人、お酒が入ると酔っ払って大変なことになっちゃうから」

「まじか……気を付けるわ」

絵里は嫌なことを思い出している表情をしていた。

ナオキはそんな絵里の表情を見て首を傾げた。

絵里が思い出していたのはあのとき……

「おい絢瀬〜」

童子は絵里の肩に手を回した。

「先生!?! 酔っ払ったんですか!?!」

その日、童子含めた絵里のクラスは食事会をしていた。

そして童子はお酒を飲みまくり、酔っ払ってしまったのだ。

「お〜いあ〜やせ〜」

「な………なんですか………?」

「お前彼氏おるんやろ〜?」

「えっ………ま………まあ………」

「あれはやったんか? あれ」

「あれって……?」

「そんなの決まってるやんか」

すると童子は絵里の胸を掴んだ。

「ひゃっ……先生!?!」

「恋人同士がするっちゆうたら……こうしてもらって……互いに体を交えることに決まってるやろ?」

『キヤー!?!』

クラスのほかの一部人たちは黄色い歓声をあげた。

「そ……それは……」

「したことあるんか?お?」

「し……したことは……ない……です」

「えくしてないんか?しろよくしろよく!」

「先生っ!そんな大きな声で……!」

「悔しかったらちやんと彼氏とするんやな」

ポフッ!

「うおっ、急に顔を赤くしてどうかしたか?」

「う、ううん! なんでもないわよ! さ、はやく寝ましょう!」

絵里はさっさと部屋に向かった。

「ん……?」

ナオキはなにが起こったかわからなかった。

絵里は顔を赤くしてベッドに潜った。

そして枕を顔に押し付けた。

次回へ続く……

第123話「新たなる可能性」

前回のラブライブ！

始業式も終わって新クラス……っていうかメンバーはほとんど一緒だったんだがな……ま、とりあえず新クラスになった！新しい担任は前の絵里のクラスの担任で、さらに新しいアイドル研究部の顧問の夕暮童子先生！

なんか絵里は苦い顔してたけど……ま、大丈夫だろ！
とか思ってた朝、生徒会室でいたら……

コンコンコン……

「どつどつ」

ガチャ……

「失礼します」

4月のある朝に生徒会室のドアが叩かれ、ナオキの前に1人の少女が現れた。その少女の髪は右眼が隠れるほど長くメガネをしていた。

「君は……新入生か？」

ナオキは制服のリボンを見て言った。

「はい、1年生のマシユ・ライトと申します」

その名前を聞いたナオキは少し表情を歪めた。

「えつと……失礼なんだけど、マシユさんって名前からして外国の方かな？」

「はい、両親の都合で中学生のときに日本に来ました」

「へへ……ちなみにどこから？」

「カナダです」

「カナダか……珍しいな。ま、それは置いて……今日は何の用かな？」

ナオキは自分の手の指を絡め、両肘を机について言った。

「はい、実は学校案内を受けたいと思ひまして」

「学校案内を？入学式前に受けなかったのか？」

学校案内とは音ノ木坂学院の施設を見てまわるもので、新入生は入学式前に一斉に受けていたはずであつた。

「その……その時は体調不良で来れなくて……」

マシユは遠慮しがちに言った。

「ん……ああ、君のことだったのか！」

するとナオキは手をポンと叩いて言った。

「えっ!？」

「いやーね、実は放課後に呼び出そうと思ってたんだよ。学校案内を受けていない君をね」

ナオキは手を広げてマシユに向けた。

「私を……う？あつ、早まりました！すみません」

マシユは焦ったように頭を下げた。

「いやいや、謝ることなんてないよ。自分から進んで行動する……そんな人、おれは嫌いじゃないよ」

「えっ……!?!?!?!」

ナオキがニコツとしてそう言うと、マシユは目を丸くして顔を赤くした。

「それじゃあ……新入生歓迎会の日、どこか行きたい部活とかある？」

「いいえ、特には」

「ならその日は集会のあと自由になるから、終わったらここに来てくれるかな？」

「はい、わかりました」

「じゃ、またその日に」

「はい、ありがとうございます。失礼します」

マシユはお辞儀をして生徒会室を出ていった。

「ふう……これで今日やることは減ったけど当日やることが増えたなくあははは……」
ナオキは椅子の背にもたれて笑った。

くラブライブ！（マシユ）く

そして時は流れて新入生歓迎会の日……

「……ではこれで新入生歓迎会を終わります。色んな部活が体験会などを行っているの
で、興味のある部活があれば是非行ってみてください」

司会のフミコがそう言うところ、1年生が各それぞれ自分の行きたいところに向かった。
マシユは生徒会室に向かった。

「あっ……」

「おつ、来たね」

だが、生徒会室の前にはもうすでにナオキがいた。ナオキは壁にもたれていた。

「じゃあ学校案内を始めようか」

ナオキは壁から離れて言った。

「はい、よろしくお願ひします」

マシユは軽くお辞儀をした。

「うん。さて、まずここは生徒会室。なにかの申請とかがあるときはここに来たらい

よ。じゃ、移動しようか」

「はい」

その後もナオキはマシユに教室や施設の紹介をしていった。

「そして最後に、ここが講堂。集会とかではみんなここに集められる。あと部活動でも使われるときもあるんだ」

ナオキは講堂の入り口で言った。

「ここを使用したい時は生徒会に？」

「その通り。ちゃんと申請してくれれば使えるよ」

「なるほど……」

「ま、案内はこれぐらいだな」

「ありがとうございます」

「いえいえ、あつ、そうだ……これ言つとかなきや殺される」

「……はい？」

マシユはナオキの一言に首をかしげた。

「いやーね、今日はこれからここでアイドル研究部のライブがあるんだ。よかつたら観て行ってね」

「アイドル……ですか」

「そうそう、音ノ木坂学院のスクールアイドルのね。おれも作業とかあるからそろそろ行かねーと」

「あれ、先輩も出るんですか？」

「違う違う、おれは手伝いだよ。ま、暇だったら観てつてねマシユさん」

「はい、是非！」

ナオキはそう言い残して講堂の中に走って行った。

「スクール……アイドル……」

マシユはそう言うのと惹かれるように講堂に入ってしまった。

控え室……

コンコンコン……

「は〜い」

ガチャ……

「よっ、お待たせ」

ナオキは控え室のドアを開けた。

そこには2年生組のファーストライブの衣装の色違いのものを身にまとった凜・真姫・花陽がいた。凜は黄色、真姫は赤、花陽は緑だった。

「ナオキくんギリギリにや〜」

凜は呆れたように言った。

「しゃーねーだろ、生徒会の用事だったんだから」

「はあ、待ちくたびれたわ……」

真姫は髪の毛をくるくるしながら言った。

「ちよつと2人とも〜」

花陽はそんな2人をとめるように言った。

「そんなことより準備は大丈夫か？」

……ま、聞くだけ無駄か」

3人の表情は全然不安などというものではなく、いつも通りであった。

「大丈夫……今までたくさんの人の前で歌ってきたから」

「まあ、これぐらいは楽勝ね」

「よし、絶対ライブを成功させるにや！」

「よし、頼むぞみんな！」

「「はい！」」

3人は元気よく返事をした。

講堂には、ライブを楽しむにしている生徒たちが続々と入っていた。

1年生には前の席が確保されていて、雪穂と亜里沙もその中にいた。

穂乃果と海未とことりは後ろの方でステージを見つめていた。

ナオキは後ろの機材スペースに待機した。

ライブ開始のブザーがなると、みんなわくわくした様子でステージを見つめた。

幕が開いて凜にまずはスポットライトが当たり、それから真姫、花陽にも順番に当たっていった。

披露しているのは『Hello, 星を数えて』だ。

あの『Moment Shine』で披露されたのを間近で観れてみんな興奮していた。

そしてその曲が終わると3人は後ろを向いて横に並んで順番に前を振り向いた。

その曲こそ、昨年、穂乃果たちがここで披露した『START: DASH!!』だ。

みんなは、あのとき……穂乃果・海未・ことりの3人のμ'sのファーストライブのことを懐かしむように思い出していた。

あのときとは違い、今では講堂は満員、さらに数々の明るい光に包まれていた。

「ここまで大きくなったんだね……」

「うん……」

「私たちの歩んできた道は、正しかったということでしょう」
海末の言葉に穂乃果とことりは頷いた。

「「ありがとうございます！」「」

曲を披露し終わると、3人は並んであいさつをした。

講堂には拍手と歓声の音が響いていた。

「アイドル研究部は、アイドルをしてみたいと思ってる人、アイドルが大好きな人を募集
中です！」

「興味がある方は是非来てください！」

「私たちはいつでも歓迎します！」

「では、本日はライブに来てくれてありがとうございます！」

「ありがとうございます！」

パチパチパチパチ……

そうして新歓ライブは大成功に終わったのだった。

それはアイドル研究部の新たなる可能性を感じさせていた。

そして、目をキラキラと輝かせてステージを見つめる少女が1人いた。

そしてその少女を不思議そうに見つめる男も1人いた。

くラブライブ！（花陽・凜・真姫）く

「ライブはこんな感じで大成功だったぞ」

ナオキは絵里に映像を見せて言った。

「大成功してよかったわ……さて、私も頑張らなくっちゃ！」

「ああ、頑張れよ」

ナオキは絵里の頭を撫でた。

「ええ！」

絵里は短大の講義を頑張ると気合を入れた。

次回へ続く……

第124話「Dancing new stars on Otonoki !」

前回のラブライブ！

ついに迎えた新歓ライブの日！

ライブは大成功して、新たな可能性を感じた！

さあ、何人の人が来てくれるかな？

新入生歓迎会の日からしばらく経ち、アイドル研究部の部室では“ある催し”が行われていた。

「それじゃ、この催しを記念して部長の小泉さんより一言……」

「えっと……私から言えることはただひとつです。」

「ようこそ、アイドル研究部へ！かんぱい！」

「「「「「かんぱーい！」」」」」」

その催しとは、新入部員の歓迎会だった。

今年入ったのは、高坂雪穂、ふくだまゆみ 福田真癒美、おくむらたまき 奥村瑞希の4人だ。

「いや〜4人も入ってくれて嬉しいよ！」

ナオキは一年生たちを見て言った。

「私も”あの”アイドル研究部に入れてうれしいです！」

「私もです」

真癒美と瑞希は嬉しそうに言った。

「ちなみにダンス経験とかは？」

「いいえ、特にはないです」

瑞希は穂乃果の言葉に首を横に振った。

「私があります」

真癒美はキリツとした様子で言った。

「へえ〜」

「すごいですね」

「ことりと海未は関心したように言った。

「へえ〜……ちよつとウチ福田さんの実力見てみたいわ〜」

童子は思いついたように言った。

「なんだか面白そうにや!」

「おつ、星空さんはノリ気見たいやね。福田さんはどうや?」

「私は構いませんが」

「ほな、決まりやね」

童子先生はそう言つて立ち上がった。

「えっえっ!?!」

花陽はなにが起こつたかわからないようだった。

「小泉さん、屋上で星空さんと福田さんがダンス対決……構わへんよな?」

「は、はい!それじゃあ全員屋上に集合です!」

そして急に凜と真癒美のダンス対決が始まった。

凜と真癒美は動きやすい服に着替えて屋上に向かった。

「じゃ、ダンス対決は2人に同じダンスを踊ってもらつてことでいいですよね」

ナオキはパソコンを開いて言った。

「ええよ。それと、ちゃんとマイナーなスクールアイドルのダンスを選んでな。2人が見たことないようなやつを」

「わかりました。それじゃあ……………」

「それならSAOはどうでしょう?」

「SAO?」

花陽の発した聞きなれない言葉にナオキは首を傾げた。

「はい、札幌アフタースクール乙女……………略してSAO……………ラブライブ!にもエントリーもせず、ランキングも非公開に、でもファンは付いている……………そうなんですよ!ランキングに載っていないからって、ラブライブ!出ないからって、素晴らしいアイドルはいっぱいいるんです!その代表的な例がこのSAOなんです!札幌では人気なんです!超超人気なんです!逆にラブライブ!にエントリーしない方が不思議なんですよ!SAOならいいところまでいけたはずなんです!」

花陽は目の色を変えたように言った。

「お、おう……………わかったから、一旦落ち着こう……………」

ナオキは花陽の熱さに押されながらも両手を上下にして言った。

「はっ……………す、すみません……………／／／／／／／／」

すると花陽は顔を赤くしてシユンとなった。

「ま、まあ……………そのSAOっちゅうグループの踊るか。まずはダンスを覚えて〜」

「はい!」

童子はパソコンの画面を凜と真癒美に向けて、SAOのダンスの映像を見せた。

2人はその映像をじっと見つめた。2人の目は同じだった。

（うん、福田さんもいい目をしている。これは面白くなりそうだな……）

ナオキはその光景を見てニヤけてそう思っていた。

「ほな、ダンス対決開始といこか！

さっきのをもういっぺん流すから、その音楽に合わせて踊ってな。小泉さん、審判お願いしてもええか？」

「はい！任せてくださいー！」

童子に審判を頼まれた花陽はやる気満々だった。

音楽が流れ始めると、凜と真癒美はリズムに乗って踊り始めた。

「っ……………!？」

真癒美は隣で踊っている凜を見て驚いた。

なぜなら……

凜は小さな声だが、ダンスと一緒に歌っていたからだ。

「す、す……い……………！」

瑞希は両手で口を覆って目を丸くして言った。

「これが……元々、sのメンバー……」面白いじゃない……!」

真癒美はニタツと笑って楽しそうに踊った。

凜はそんな真癒美を見てさらに楽しそうに踊った。

「はあ、はあ、はあ………」

曲が終わると、全力で踊りきった2人は息をきらした。

「お疲れ様。ほな小泉さん、判定は?」

童子が言うと、みんなが花陽を見つめた。

凜と真癒美は唾を飲み込んだ。

「この勝負……凜ちゃんの勝ちです!」

「やったにや〜!」

花陽が手を凜の方に向けると凜は腕をあげて喜んだ。

真癒美は悔しそうな表情を浮かべた。

「ま、経験の差だろうな」

「経験の……差?」

ナオキがそう言うと言ったと真癒美はナオキを見て言った。

「ああ、凜はスクールアイドルとしてこの1年頑張ってきたからな。それは、sの練

習を途中からだがずっと見てきたおれたちだから言えることだし、それに、sのことを知っている君たちもわかるはずだよ」

「くっ、確かにそうですね……悔しいけど……星空先輩、ありがとうございました」

真癒美は凜に向かって頭を下げた。

「私こそありがとう真癒美ちゃん！」

凜は笑顔でそう言った。

「ほな、決着もついたことやし部室に帰ろうか」

「「「「「「はい！」「「「「「」」」」」」」」」」」」

そうしてみんな部室に戻り、新入部員の歓迎会を再開した。

くラブライブ！（凜・真癒美）く

帰り道……

幼馴染みである真癒美と瑞希は一緒に帰っていた。

「まさか真癒美が負けるなんてね」

「そう言つといて、本当は負けるってわかってたでしょう?」

真癒美は頬を膨らました。

「まあ〜ね」

瑞希はニヒツと笑った。

「でも、次は必ず勝つ……!」

真癒美は拳を見つめてギュツと握った。

「ふふつ、楽しくなりそうね」

「ええ、入部してよかったわ……あのアイドル研究部に!」

「そうだね」

2人は空を見上げて、これから先の生活が楽しくなると確信した。

ガチャ……

「ただいま〜」

「おかえりなさい〜」

ナオキと亜里沙が玄関のドアを開けると、リビングの方から絵里の声がした。

2人は靴を脱いでリビングに向かった。

ガチャ……

2人がリビングに入るといい匂いがした。

「ん〜いいにお〜い」

亜里沙は匂いを嗅いで言った。

「ただいま」

「おかえりなさい。もうすぐご飯できるから2人とも着替えてきなさい」

「は〜い」

ナオキと亜里沙は着替えるために自分の部屋に向かった。

晩御飯も食べ終わり、ナオキと絵里は自室で隣合わせで座っていた。

「やっぱり難しいか?」

「う〜ん、まあまあかしら?」

絵里は短大の、ナオキは高校の勉強をしていた。

「おれは絶対無理だわ」

「ふふつ、はやく宿題やってしまいなさい」

「は〜い」

2人の部屋にはペンの走る音だけがしていた。

「ナオキ終わった？」

絵里はナオキの方を向いた。

「すう……ん……すう……」

ナオキは机に突っ伏して寝ていた。

「寝ちゃってるのね……かわいい」

絵里はナオキの寝顔を見て言った。

そして毛布をかけて頬にキスをして、また勉強を続けた。

「ん……あれ、寝てた……？」

ナオキは夜中に目覚めて体を起こした。

隣を見ると絵里はおらず、後ろを向くと絵里はこちらを向いてベッドで寝ていた。

ナオキは絵里を起こさないようにベッドに入って、絵里の頬に優しくキスをしてまた眠りについた。

次回に続く……

Another way (にこの誕生日)「パパがくれた 笑顔のおかげで」

それは、私がまだ小さい頃の話……

「にこ、”あれ”をしてくれるか？」

「うん、いいよーにこにこにこにー♪にこにこにこにー♪」

私はいつもパパに頼まれて、パパの好きだった”にこにこにこにー♪”をしてい
た。

私の名前も『いつも笑顔でにこにこして欲しいから』って理由でパパがつけてくれた
みたいなの。

この『にこにこにこにー♪』っていう笑顔になる呪文もパパが考えてくれたの。

私が呪文を言ったり、笑顔でいるとパパが喜ぶから私はこの呪文が好き、笑顔でい
ることが好きだった。

それは私が小学生になっても、中学生になっても変わらなかった。

でも、あの日……

忘れもしない……中学3年生のときの誕生日……

私は音ノ木坂学院の入試に向けて必死に勉強していた。もうすぐ夏休みも始まる時期だったしね。

そのときは授業中だった。

私は集中して授業を受けてたの。

板書をノートに写して、先生のポイントをメモして……

ガラガラガラ……

「矢澤さん！」

「先生……どうかしたんですか？」

すると急に担任の先生が勢いよくドアを開けて私の名前を呼んだ。

「すぐに病院に行って！あなたのお父さんが！」

「っ……………」

私はその先生の表情を見てただごとではないと察した。

そして衝撃の出来事を聞いて私は鞆を持たずに病院……西木野病院に向かって走っ

た……必死で走った……

頭の中では先生の言葉が木霊した。

「はあ、はあ、はあ……………」

『今……西木野病院の方から電話があつて……』

「はあ、はあ、はあ……………パパ……………」

『あなたのお父さんが……………』

「パパ……………パパ……………」

『トラックに轢かれて運ばれてきたみたいで……………とても危険な状態みたい。お母さんにも連絡したみたいだから……………』

「パパ……………!」

ウイーン……………

私は病院に入つて、すぐに受付に向かった。

「あ、あのつ! 矢澤です! ここにパ……………お父さんが運ばれてきてるはずなんです!」

「あつ、矢澤浩二さんの娘さんね。少々お待ちくださいね」

そう言って受付の人はどこかに電話をかけた。

私は落ち着かない様子でその人を見つめた。

「……はい、わかりました。今手術室に……手術室ですね！ありがとうございます！」

……って矢澤さん！」

私は手術室に向かえばいいとわかるとすぐに走った。

(パパ……パパ……)

「えつと……こつち！」

(パパ……どうか……どうか……)

「あそこっ……！」

そして廊下の角を曲がると、手術室の前で頭を下げ座っているママがいた。

「ママっ！」

「っ……に……っ！」

私が叫ぶとママは顔を上げてこつちを見てきた。

「パパは!?」

「今……手術中よ……」

ママはそう言って手術室の方を不安そうに見つめた。

私も向くと、手術中というランプが赤くついていた。

「こころたちはどうするの？」

「こころたちは先生方が連れてきてくれるそうよ」

「そう……」

ママと2人で手術室の前で手術が終わるのを待ってた。

絶対にパパが無事だと祈りながら……

パチン……

「っ……っ！」

手術中というランプが消えて、私とママは手術室に目を向けた。

そして中から先生が出てきた。

「先生！夫は……浩二くんは!？」

ママは出てきた先生を不安そうに見つめた。

その先生は……そんなママの目を見てこう言った。

「すみません……残念ですが………」

(ウソ………)

「そんなっ……！浩二くん………」

ママは目から涙を流し、手を口に当てて膝から崩れ落ちた。

私はこのときすぐには受け止められなかった。信じられなかった。

昨日まであんなに元気で、いつものように『笑顔を見せてくれ』と言ってくれたパパが……そんなパパが………

死んだなんて……

「あと……」

まだ何かあるのかと私とママは先生の方を向いた。

「お父さんは轢かれてもこれだけは大事に持っていたそうです……」

そう言ってその先生はある袋を私に渡した。

私はその袋からあるものを取り出した。

それは、私の好きなアイドルのCDだった。

衝撃でパッケージにヒビが入っていて、メッセージカードも挟まれていた。

『こゝろ、誕生日おめでとう』

「うっ……うわああああああん!!」

それを見た瞬間、色んな気持ち……パパとの思い出が蘇ってきて、私は声をあげて泣いた。

ママはこのとき優しく私を抱きしめてくれた。

あとからわかったことだけど、パパを轢いたトラックの運転手は途中で意識を失って信号を無視して渡っていたパパを轢いてしまったらしい。

そのままトラックは電柱に激突して、運転手の人も死んだみたい。

私はお葬式の日も泣いていた。

そのあとも泣いていた。

夏休みも泣いていた。

ずっと……ずっと……

そして夏休みも終わりに近づいてきたある日……

『に……』

「つ……パパ!？」

私が仏壇の前にいると、どこからかパパの声がした。

『に……泣かないでくれ……』

「そんなの無理だよ……だって……!」

『お前はここの家の長女だ。だからしっかりしてもらわないと……』

「でも……そんな事言ったって……!」

『……笑ってくれ』

「えっ……?」

『いつものように笑ってくれ……パパを安心させてくれ』

パパが大好きな私の笑顔……

「に……」

いつでも笑顔で……

「につ……」

いつも笑顔でにこにこして……

「につ……!」

これから先もずっと笑顔で……!

「につこにつこにー♪あなたのハートにつこにつこにー♪笑顔届ける矢澤にこにこ♡」

私は笑顔で、でも目から涙を流しながら言った。

『ありがとうにこ。これからみんなを頼んだよ。その笑顔でみんなを元気にしておくれ……』

「も……もちろんにこ」

そして、パパの声か聞こえなくなつて……パパが”本当に”いなくなつたとわかつたその時、私は声をあげずに涙を流した。

「うう……いい話やな〜」

と、にこがパパとの思い出を話すと、みんなが涙を流していた。

「にこのあの呪文に、そんなエピソードがあつたなんて……」

絵里もハンカチで目を押さえて言った。

「はあ……あまり話したくはなかったんだけどね……」

「まあまあいいじゃん、おれたちは友達なんだしさ」

「ふっ、そうね」

「それじゃあにこちゃんの呪文に隠させた秘話も聞いたことだし……せーのっ！」

「「「「「「にこ（ちゃん）、誕生日おめでとう（ぎ）います（ー！」「「「「「「」」

「ありがとうにこ〜！」

今日は私の誕生日！

みんなが穂乃果の家に集まってお祝いしてくれた。

パパ……私にはこんなにも大事な仲間が、友達ができたよ。

パパがくれた笑顔のおかげで……！

第125話 「一歩先に待つものは」

前回のラブライブ！

アイドル研究部に入学して、その一員になった私たち新1年生4人！

私は星空先輩とダンス対決をすることになったんだけど、負けちゃった。

でも不思議と達成感があつて、なんだか……とつても楽しかった！

そして、いよいよ私たちも練習に本格参戦！

「全員のタイミングがズレてる！もつとそれぞれに合わせて！」

「「はい！」」

ナオキは1年生のダンスを見ていた。

ダンスは過去に s が踊ったことのあるものを使っている。

「ナオキくん1年生にも容赦ないね」

「でも、それがナオキくんらしいよね」

「そうですね」

穂乃果・ことり・海未はその光景を見て言った。

「よし、休憩〜」

「ふう……」

「「はあ〜」」

ナオキがそう言うのと真癒美はふうと一息をついて、それ以外の3人はぐったりとその場に座り込んだ。

「4人ともお疲れ様、はいよドリンク」

「「ありがとうございます」」

「ありがと〜」

ナオキは1年生4人にドリンクを渡した。

「でも福田さんはすごいね〜」

「全然疲れてないもんね！ハラシヨー！」

雪穂と亜里沙は真癒美が全然疲れてないのに感心して言った。

「まあ、伊達にダンス経験ないわよ」

真癒美は少しドヤ顔気味に言った。

「ほんと……真癒美はなんていうか……流石だわ」

瑞希は汗をタオルで拭きながら言った。

「福田さんと奥村さんは仲いいの？」

亜里沙はそう言っただリンクを飲んだ。

「うん、私たち保育園の時から一緒なの」

「ええ、私はそのときからダンスを習ってたから」

「へ〜」

そして1年生組は雑談を始めた。

「1年生たち、仲良さそうでよかったな」

「そうだね〜」

「やっぱり同じ学年なら仲良くしないと！」

ナオキと穂乃果と凜はその光景を見て笑みを零していた。

「ん……………」

「…………ナオキ、どうしたのですか？」

海未はなにか不思議がるナオキに言った。

「いや、ちよつと用事思い出したから行ってくるわ」

「生徒会のですか？なら私も…………」

「いや大丈夫だ。これはおれ個人のことだからさ。練習頼んだぞ」

ナオキは足早に屋上を去って行った。

みんなそんなナオキを不思議に思って顔を見つめ合った。

くラブライブ！（ナオキ）く

「やっぱり君だったのか……」

「先輩……バレちゃいましたか……？」

「ああ、なんとなく視線を感じてたし、それにあのライブのときだって目をキラキラさせて観てただろ？ マシユさん」

「はい……」

ナオキは屋上へ続く階段を降りたところで去ろうとしていたマシユに声をかけた。

「で、なんで練習を隠れて見てたのかな？」

「そ、それは……」

ナオキがマシユに見ていた理由を聞くと、マシユは言うのを拒んだ。

「はあ……マシユさん、もつと素直になれば？」

「えっ……？」

ナオキはため息をついてニコツとして言った。

「自分が一番わかってるだろ？」

だからアイドル研究部の練習を見てた……そうじゃないのか？」

「それはっ……」

マシユは視線をナオキから逸らした。

「マシユさん……君の気持ちを聞かせて欲しいんだ。君は、君自身はどうしたい？」

「私は……」

マシユはまだ迷っているのか、ナオキから視線を逸らして目をうるうるさせたい。
た。

「そう、ほんの少しの勇気を出せばいいんだ。勇気を出して、前に進んでごらん？」

ナオキはそう言って手をマシユに差し伸べた。

ナオキがマシユに求めることはただ一つ……

『1歩踏み出して欲しい』

ただ、それだけ……

たった1歩踏み出すだけで未来ミライは開けるのだから。

「わ……私は……したい……スクールアイドルがしたいんです！あの講堂でのライブで踊っていた先輩方の姿を見ていて、なんだか不思議な気持ちになって……なんであんなに輝けるのか……そして私も輝きたいって……！」

だから、私をアイドル研究部に入れてください！」

マシユは頭を下げて必死に大声で言った。

「ああ、歓迎するよ、マシユさん」

ナオキはニカツと笑って言った。

「ありがとうございます！」

「それじゃあ……行くか」

ナオキはそう言っつてマシユに背を向けた。

「えっ……どこに!?!」

「決まってるじゃんか……屋上だよ」

ナオキはマシユの方に目だけを向けて笑って言った。

「……つてことで、今日からこのマシユ・ライトさんはアイドル研究部の一員だ」

ナオキは屋上でみんなにマシユのことを紹介した。

「1年1組のマシユ・ライトです。よろしくお願いします」

マシユは少し緊張しながらも頭を下げた。

「もしかしてナオキが言っていた用事って……」

「ああ、この子を勧誘してたんだ」

ナオキは海未の言葉に反応した。

「それじゃあ、今年の新入部員は5人つてこと!？」

「すごいにや〜!」

花陽と凜は言った。

「これは賑やかになるね〜!」

「うん、楽しくなりそう!」

穂乃果とことりも喜んだ。

「マシユさん、あそこの4人も1年生だ。みんな仲良くしろよ」

「「「はい！」」」

1年生組は元気よく返事をした。

マシユを加えた1年生組は仲良く5人で話し出した。自己紹介などをしていて5人を見てこれから先のことを他の人たちは安心だろうと思っていた。

その後、マシユには練習を見学してもらった。

マシユは陰で三角座りをして見ていた。

「みんなタイミングずれてるぞ！全員合わせろ！福田さんはもうちよつと周りを見て！」

「「「は、はい！」」」

「……………」

マシユはそのナオキの1年生への厳しさにガクガクと涙目で震えていた。

「ちよつとナオキ・ライトさんが怖がってます！」

海未はそんなナオキを叱った。

「えっ……ご、ごめんごめん！」

ナオキはあたふたとして手を合わせてマシユに謝った。

そんなナオキを見てみんな声を出して笑った。マシユもそれにつられて笑っていた。

ナオキは少し顔を赤くして人差し指で頭をかいた。

くラブライブ！（アイドル研究部員十童子）く

「んん」

「ナオキ、どうかしたの？」

香川・絢瀬家では晩御飯を食べている途中。ナオキは箸を啜えて唸ると、絵里が不思議そうに言った。

「いや、おれの指導厳しすぎるかなって……亜里沙ちゃんは どう思う？」

ナオキは海未から注意されたことを少しばかり気にしていたのだ。

「私はスクールアイドルはそれだけ厳しいんだなって思うよ！」
「やっぱり厳しいか〜！」

ナオキは頭を抱えて言った。

「でも、いい勉強になるんじゃない？これぐらい普通よ」

絵里がそう言うのと「うんうん」と亜里沙は頷いた。

「そっか……ならいいけど」

ナオキは納得したようだがまだ不安に思っているようだ。

「それなら明日、他の1年生に聞いてみたら？」

「そうだな……一回聞いてみるか」

ナオキはそう言ってまたご飯を食べ始めた。

くらぶライブ！（ナオキ・絵里・亜里沙）

翌日の放課後……

ナオキは屋上で1年生を練習前に集めた。

「ま、今日もストレッチの後から練習していくんだけど……その……おれの練習って厳しかったか？」

ナオキの言葉に1年生組が遠慮しがちに頷くと、ナオキはやっぱりかど頭をかいた。

「それならやっぱり練習メニューを軽く……先輩、それは違います……福田さん……？」

ナオキの言葉を遮って、真癒美は一步前に出て言った。

「確かに、先輩の練習は厳しいです。ですが、私達はスクールアイドルになるんです。しかも音ノ木坂学院の！ですから私は練習が厳しいことぐらい覚悟しています！」

「そうですね。私はダンス経験はないですけど、スクールアイドルはこれだけ厳しいものなんだと思いました」

「私も同じです。私はライブを観て『やりたい』って思ったんです。でもなかなか勇気が出せなかった……そんな私に先輩は手を差し伸べてくれた。だから私はどんなに練習が厳しくても”やりたいから”続けるつもりです」

「そうですね。練習が厳しいことぐらい、音ノ木坂のアイドル研究部に入ると決めた時から覚悟してましたから」

「うんうん！」

真癒美に続いて瑞希・マシユ・雪穂・亜里沙も言った。

「そうだよナオキくん、気にしすぎだって！」

Another way (穂乃果の誕生日) 「姉妹の」 今 ”の理由」

「……………穂乃果 (ちゃん) 誕生日、おめでとう (ございます) !……………」

「ありがと〜!」

「お姉ちゃん、おめでとう」

「雪穂もありがとう」

今日は私、高坂穂乃果の誕生日なんだ!

今まではこの日って夏休みで、海未ちゃんことりちゃんぐらいしか当日に祝つてくれなかったんだけど、今回は違う。今回はμ'sのみんながいる!

穂乃果、とっても嬉しいよ!

誕生日パーティーは穂乃果の家……穂むらでして、誕生日プレゼントもいっぱい貰ったよ! やった〜! 嬉しい!

「雪穂お茶〜」

「はいはい……………」

「はあ……」

海未ちゃんは穂乃果と雪穂のいつものやり取りを見てため息をついた。

「お前、たまには自分から動けよな……」

ナオキくんは手を顎に当てて肘を机について呆れたように言った。

「え〜めんどくさいも〜ん!」

「はあ……」

今度はナオキくんと海未ちゃんが同時にため息をついた。

「雪穂ちゃんも穂乃果によくそこまでできるわね〜」

「ほんまに……雪穂ちゃんはえらいな〜」

「えへへへ、ありがとうございます」

「ありがとう、雪穂!」

あ〜、お茶美味しい!

「でもなんでそこまでするんだ? 妹だからって穂乃果にそこまでする必要なんてないだろ? だからふ……それは言わないの……痛い痛い痛い! すまんすまん、だから離して!」

「ははは……でもそれでいいんですよ。だって……お姉ちゃんはああ見えても、私の”

憧れ”ですから」

「憧れ……? 穂乃果が!? あの穂乃果だぞ?!」

「ちよつと！それ失礼じゃない！」

もう、にこちゃんは何言ってるの！穂乃果怒っちゃうよ！

でも、雪穂が私に憧れか……

やっぱりあの時からかな？

雪穂が今みたいにしてくれるようになったのは……

私は昔、不満なことがあった。

それは、「お姉ちゃんだから我慢しなさい」と怒られること。

雪穂とは2歳差で、大して離れてはいないけどやっぱり姉妹となるとそういうのはあるんだよね。

だからそれが原因で私が怒って雪穂と喧嘩しちゃうこともしばしば……

そして怒られるのはいつも私だけ……

あとあと、雪穂は今と変わらず妹のくせに私に文句ばかり言ってきてたんだ！

そういえばその度に海未ちゃんの家に行ってたっけ。

でも今みたいになったのは私が小学6年、雪穂が小学4年のときかな？

その日は朝から喧嘩しちやって、海未ちゃんとかにも文句を言ったりしてて、ずっと怒ってた。

「もう、いつつもなんで私ばかり怒られるの！」

「やっぱりお姉ちゃんだからですね〜」

「お姉ちゃんだからかな〜？」

「もうう！海未ちゃんもことりちゃんもお母さんと同じこと言う〜！」

「でも穂乃果は妹がいて嬉しいでしょ？」

「そ、それは……べ、別に嬉しくなんかないもん！」

「穂乃果ちゃん〜ん」

そう、このとき私が言ったのは本心じゃない。本当は……嬉しかったんだ。

「ふふつ、でもちゃんと仲直りしないとダメですよ？」

「……………うん」

そしてその日の休み時間に、私は雪穂の様子を見に行つたの。

「えつ……………」

私はそのとき、予想外の光景を目にしたの。

それは……

「おい雪穂、お前うつとうしいんだよ」

「そーだそーだ、学級委員だからってえらそうにするなよ」

「私はただちゃんと日直の仕事をしってって言うてるの!」

雪穂は日直の男子2人にちゃんと仕事をしろって注意してみたい。

黒板には前の授業の文字がまだ書かれていた。

「だからそれが生意気なんだよ!」

「キャツ!」

「っ……!」

そして1人の男の子は雪穂を突き飛ばした。

私は気づくと教室のドアを大きい音を立てて開けていた。

「だ、誰!」

「お姉ちゃん……?」

「あなた達、私の妹になしてるの?」

「い、妹!」

「あの名札の色……6年生だぞ?」

「ろ、6年生!？」

その子達は私の名札を見て言った。

「今、雪穂を突き飛ばしたよね?なんでそんなことしたの?」

「だ、だつてこいつが……」

「でも悪いのはあなた達だよね?あなた達が日直のお仕事をしなかったからだよね?」

「そ、それは……」

「謝つて……雪穂に謝つて!」

「お姉ちゃん……」

「ご、ごめんなさい!」

「だから私にじゃなくて、雪穂に謝つて」

その子達は私に向かって頭を下げてきたけど、私は雪穂の方に指をさして言った。

「雪穂、ごめん」

「ごめん」

「う、うん……それじゃあちゃんと仕事してよね」

その子達はそのあとしつかり仕事をした。

「お姉ちゃん……」

「雪穂、大丈夫だった?」

「うん、大丈夫だよ」

「よかったよ」

「……………ありがとう……………」

「えっ……………」

「もう！はやく自分の教室に帰りなよ〜！」

「わわわ！わかったよ〜」

雪穂に背中を押されて、私は自分の教室に戻ったの。

そして帰り道……………

「あの……………お姉ちゃん……………」

「ん、どうしたの雪穂？」

雪穂が恥ずかしくがって話しかけてきたの。

そして出た言葉が……………

「ありがとう。その……………大好きだよ、お姉ちゃん」

「うん、私も！雪穂のこと、大好き！」

「……つてことがあつたからね」

「ちよつ……話さないでよお姉ちゃん!!バカバカバカバカバカ……」

雪穂は恥ずかしがって私をほかほかと軽く何回も叩いてきた。

「なるほど……だから雪穂ちゃんは穂乃果に……」

「むう……そうですよ！」

雪穂はナオキくんの言葉に頬を膨らませて照れて言った。

「穂乃果もたまにはいいことするのね」

「たまには余計だよ！」

もう、真姫ちゃんまでそういうこと言うんだから

「でも穂乃果、わがままもほどほどにな」

「はい……」

てかなんで誕生日に怒られなきやいけないの!?

コラボ回（with 癸楓文音）「キミのいる国Ⅱおれのいる国」

「ねえ、ナオキ…次はどこ行く？」

「ん？腹減ったし飯食いに行こうぜ」

「うん、いいわよ！」

ある夏の日、香川^{かがわ}ナオキと香川^{かがわ}絵里^{えり}……2人は夫婦となり、久しぶりのデートを楽しんでいた。

忙しいナオキにとってはやっと取れた休日というわけだ。

2人は腕を組んでカフェに向かっていた。

そのころ……

成田国際空港…

「やつと着いたか…」

右目が隠れるほどの長い紫色の髪で青い目をした家業院かぎよういん零七れいな…持病である心臓病も完治し、長い休日を利用して日本に来了。

その最大の理由は…

「エリチカ…」

想い人の絵里に会うためだった。

「よし、行くか！」

レナはキャリーバッグを引いて歩き出した。

この時、2つの物語が交差する…

くラブライブ！（ナオキ・レナ）く

「いやあく楽しかったな」

「そうね」

ナオキと絵里は家に帰る途中だった。

「またデートしような」

「ええ！」

「うくん……ここは確か秋葉原って言うんだよな。色んなもの売ってるな」

レナは秋葉を歩いていた。

ナオキと絵里が秋葉を歩き、家に向かってしているとある声がした。

「エリチカ……?」

「え?この声……?」

絵里は後ろを振り返った。

「久しぶり、エリチカ!」

「その髪型……その声……レナね!」

絵里はパーアーっと笑顔になって言った。

「ああ!」

「本当にレナなのね!久しぶりね!」

「ああ……エリチカこそ!」

レナと絵里は再会を喜んだ。

「絵里、この人知り合いか?」

ナオキが絵里に言った。

「え、この人誰?」

レナも絵里に言った。

「ああ……そうね、2人は初対面だものね。」

ナオキ、紹介するわ。ロシアで知り合って一緒にバレエをしていた家業院零七。

レナ、こっちが私の夫の香川ナオキよ」

「え……夫……？」

レナは目を大きく開けて言った。

「なんだ……絵里の知り合いか。」

ナオキです。よろしくお願ひします」

ナオキはそう言うのと右手を出した。

「え……あ、レナです。よろしくお願ひします」

レナは右手を出して、ナオキの右手を握った。

「まあ……こんなところで話すのもなんですし、家に来ますか？」

「そうね、それがいいわ！レナにご馳走してあげる！」

「え、じゃあお言葉に甘えて」

3人はナオキと絵里の家に向かった。

(夫……か……)

レナは胸が苦しかった。

「ここが私たちの家よ」

「さ、あがってください」

「じゃ、お邪魔します……」

3人は家の中に入り、リビングへと向かった。

絵里はロシア料理を作っていた。

ナオキとレナは屋上で話していた。

「いやあくまさかレナが同じ年だったなんて」

「俺も驚いたよ」

レナはそう言うのとビールを一口飲んだ。

ナオキもビールを一口飲んだ。

「今ナオキはどんな仕事を？こんな大きな家だったら相当いい仕事じゃ……？」

「ああ……おれはある会社の社長をしている」

「社長!?!そりゃあこんな家が建つな……」

レナは感心したように言った。

「そりやあどうも……」

ナオキはまたビールを一口飲んだ。

「……幸せなんだな……エリチカは……」

レナは悲しそうな目でボソツと言った。

「ん？なんか言ったか？」

「え、いや！ただの独り言だ」

「そうか……」

ガチャ……

「ナオキ、レナ、ご飯できたわよ」

そのとき絵里がドアを開けて言った。

「は〜い」

「じゃ、行きますか」

「ああ……」

〜ラブライブ！（ナオキ）〜

「ごちそうさま！」

「さすがエリチカ…美味しかった」

「ふふっ…ありがとう。」

じゃ、また屋上で男同士話してたら？おつまみも用意してあるから」

「そうだな…じゃ、行かレナ」

「ああ…」

ナオキとレナは絵里からおつまみとビールを受け取って屋上に向かった。

「これは…なんて言う食べ物だ？」

レナはひとつのお菓子を手に取って言った。

「ああ…これは柿ピーっていうんだ。で、レナが今持つてるのはピーナッツだ」

「ハラシヨ…」

レナはそう言ってピーナッツを食べた。

「どうだ？」

「うん、美味しい！」

「だろ？」

それから2人は思い出やロシア・日本の話をした。

「エリチカがアイドルを？」

「ああ…絵里が高校3年生のときにな」

「へ〜」

「写真見るか？」

「え、いいのか!？」

「ああ…もちろん!」

ナオキはそれからアルバムを持ってきてレナにμ s時代のことを話した。

「…:で、μ sは本当の最後のライブを終えましたとさ…」

「いい話だな…」

「だろ? いい青春だったな…」

ナオキは懐かしそうに言った。

「エリチカもとっても幸せそうだ……」

「ああ……」

2人は優しい目で絵里の写真を見た。

「あ、そうだ……レナ」

「なんだ？」

レナはビールを一口飲んだ。

「お前、絵里のこと好きだろ？」

「うっ……ゲホゲホ……な……なに言っ……！」

レナは咳き込んでナオキを見た。

「……どうなんだ？」

ナオキは真剣な表情をしていた。

「……それは……」

レナは目を逸らした。

「……はあ……そうなんだな？」

「……ああ……俺はずっとエリチカが好きだった。ロシアで出会った時からずっとずっと……」

でも、もうお前という恋人ができてた……」

ナオキはレナの言葉に耳を傾け、ビールを飲んだ。

「で、どうする？」

「どうするって……わかんねえーよ！

俺にどうしろって言うんだよ!？」

レナは立ち上がった。言った。

ナオキはそっとビールを飲んで立ち上がった。

「おれは……絵里と付き合って、そして婚約した後も大事な仲間から告白された……!？」

「っ……!？」

「みんな、この想いだけは伝えておきたいと言っていた！だからおれにはわかる……お前もそんな気持ちだろ？」

「っ……それは……」

「伝えた方がいいと思うぜ？その気持ちだけでも……」

「でも……」

「でもでもでももうるせえーよ！

お前男だろ!?!男ならその気持ちぐらい好きな人に伝えろ!!」

「っ…………!!」

レナは歯を食いしばって拳を強く握った。

「今日、絵里に気持ちを伝えるかどうか考えておけ。明日聞くから」

「……………わかった……」

ナオキは座ってビールを飲み、柿ピーを食べた。

「お前は…………」

「……ん？」

「……………お前は優しいな…………」

レナは少し涙を浮かべて言った。

「ふっ……………よく言われるよ…………」

ナオキは微笑んでビールを飲んだ。

レナも座ってビールを飲んだ。

く
ラブライブ！（レナ）
く

翌朝…

「おはよう」

「おつ、おはようレナ」

「おはよう…座って待ってて。今朝ごはん作るから」

「ああ…」

レナも椅子に座った。

「……決まったか？」

「…ああ」

ナオキとレナは小声で話した。

朝ごはんを食べ終わり、3人はゆっくりとくつろいでいた。

「なあ…絵里、今日はレナに日本のことを教えるために出掛けないか？」
「ハラシヨー！それはいいわね！」

「いいのか!？」

「ああ…折角日本に来たんだからな」

ナオキはウインクして言った。

「じゃ、準備しないとね！」

絵里は部屋に向かった。

「わかってるな？」

「…ああ………」

3人は準備を整えて昼前に出発した。

レナは初めて見た日本の景色に驚きの連続だった。

そして3人は話したりしながらシヨッピングモールに来た。

「お、あそこは……?」

「ん?どうしたレナ?」

レナはある店を指さして言った。

「あれは……楽器屋さんね」

「なあ、あそこに行ってもいいか?」

「ああ……もちろん」

3人はレナが行きたがっている楽器屋に足を運んだ。

「これ……試しに弾いてみても大丈夫ですか?」

「ああ……いいよ」

「ありがとうございます」

レナは店の店主に許可をもらい、ベースを手を取った。

「なんの曲弾くんのだ?」

「えつと……それなら昨日聞かせてもらったあの曲でも弾こうかな……」

レナは微笑んで言った。

「昨日……まさか……!?!」

「そのまさかだよ……!」

♪

レナはベースを弾き始めた。

「つ……………！嘘だろ……………」

ナオキはその光景に目を丸くした。

「ふふつ…驚いた？」

「絵里…これはどういう……………」

「レナはね瞬間記憶能力があるのよ」

「まじか!?!……………だからあの曲を……………」

「ええ……………」

「ハラシヨ……………」

レナが弾いていたのは、昨日ナオキがμ s時代の話をしたときにレナに聞かせた

『K i R a | K i R a S e n s a t i o n !』……………

1回しか聞かせていないのにそれを弾けるのがすごいとナオキは圧倒された。

「……………思い出すわね……………」

「……………そうだな……………」

ナオキと絵里はμ sとしてあのラブライブ!の舞台に立った時のことを思い出していた。

みんなとの思い出の日々も……………

「ふう……」

「ハラショー！ すごいなレナ！」

ナオキは拍手しながらレナの方に歩いた。

「まあ……」

「瞬間記憶能力つてすごいな！ 天才だ！」

「そうか？ しかしこのベース弾きやすいな……」

「そうなのか？ どれどれ値段は………おお……結構なお値段で……」

ナオキは値札を見て言った。

「ほほう……いいのに目をつけるね」

店主が近づいてきて言った。

「それはな、ロシアのベースシストのアレクサンドルモデルのベースだよ」

「アレクサンドル……？」

「お前、アレクサンドルを知らないのか!？」

ナオキが頭に？を浮かべているとレナが驚いた様子で言った。

「ああ……」

「ナオキ、アレクサンドルはね…ロシアでは結構有名なベーシストよ」
「へ〜」

「それにベースの才能は幼少期から開花していたんだ」

「まあ…知る人ぞ知る存在だからな。」

ロシアでは知らない人はいないとも言われておるな〜」

「おお、詳しいんですね」

「これでもベーシストだからな」

「でも高くて買えねーや…」

レナはガツカリしたように言った。

「そうか……」

店主の人もガツカリしていた。

「う〜ん……ならおれが買ってやるよ」

「まじで!?!」

レナと店主は声を合わせた。

「ああ…折角日本に来たんだ。後悔して帰って欲しくないからな……はい、カードで」

「ありがとうございます!」

店主は喜んでレジに向かった。

「本当にいいのか？」

「ああ…いいって。さつきも言ったろ？」

”後悔して帰って欲しくはない” って……

「つ……！ナオキ……」

「ふっ…そういうことだ…」

「お待たせしました」

店主がそう言つてカードとレシートを持ってきた。

「ほら、レナ…早くベース持てよ」

「お…おう…」

「ありがとうございます！」

店主は深々と頭を下げた。

「さて…次はどこ行こうか？」

「レナ、行きたいところとかある？」

「うくん…あ、ゲーセンに行きたい！」

「おっけー！じゃあ行こう！」

3人はゲームセンターに向かった。

♪

「さすがはレナだな……」

「ハラシヨー！」

レナはベースの音ゲーをしており、完璧なプレイを見せていた。

「……っし……フルコンか……」

パチパチパチパチパチ……

周りに集まっていた人たちも拍手を送る。

「これ確か最難関だろ？すげーよレナ！」

「そうか？まあ……ありがとう」

「てか……腹減ってない？」

ナオキはお腹を抑えて言った。

「ああ……確かにそうだな」

「じゃ、お昼にしましょうか」

「レナは何か食べたいものとかある？」

「うーん……お寿司とかあるかな？」

「寿司か……あつたっけ？」

ナオキは絵里の方を見て言った。

「確かあつたはずよ？」

「道とかわかるか？」

「ええ……付いてきて！」

絵里は先に歩き出し、ナオキとレナもすぐに後を歩いた。

くラブライブ！（ナオキ・レナ）く

「ふうく食った食った」

「すまん……またご馳走になって」

「いって別に」

「まずナオキの方がたくさん食べてたしね？」

「ははは……確かに」

「さ、まだまだ時間はある！ いっぱい楽しもうぜ、レナ！」
「おう！」

その後もペットショップに行つてレナのヌメヌメしている動物が苦手だと発覚したり、いろんなところで遊んだりした。

「あ、ちよつとトイレ行くわ…レナ、絵里のこと頼む」
「おう！」

ナオキはトイレに駆け込んだ。

「ははは…あいつ、寿司食いすぎたからじゃないか？」

「ふふっ…」

「……………エリチカつてさ…」

「ん？」

「いつからナオキのこと好きだったんだ？」

「な……………なによ急に／＼／＼」

絵里はレナの急な質問に顔を赤くした。

「いや…なんとなくな」

「……………ずつとよ」

「ずっと……?」

「ええ……ナオキに出会ったあの日からずっと……レナと出会う前からね」

「……そうか……本当にエリチカは好きなんだな、ナオキのこと……」

「ええ……」

レナはそう言う絵里の顔を見て少し悲しそうに微笑んだ。

くラブライブ！（絵里）く

そして日も沈み、辺りもすっかり暗くなった頃に3人は香川宅に帰った。

今日はレナが日本で過ごす最後の夜、だから今日は屋上でバーベキューをしようと考えたのだ。

ジュく

「はい、肉」

「ありがとう」

「ほら、絵里も」

「ありがとう。代わらなくていいの？」

「大丈夫だ。焼きながらも食えるしな」

バーベキューではナオキが焼き、絵里とレナは食べていた。

白米のほとんどはナオキが食べたということは言うまでもない。

「ふう…食った食った」

「結局ナオキが一番食うのかよ」

「ふふっ…ナオキらしいわね」

「ははっ…さ、おれはちよつとトイレに行ってくるわ」

「わかったわ」

ナオキはトイレに行くために立ち上がった。

そしてレナを見た。

レナはその視線に気づいて、2人はアイコンタクトを取った。

(わかってるな……レナ)

(ああ…決心はついたよ)

(がんばれよ)

ナオキは屋上をあとにした。

今、屋上にはレナと絵里の2人だけになった。

今しかない……

レナはそう思っていた。

『後悔して帰って欲しくはない』

ナオキのその言葉が頭の中でこだました。

そしてレナは唾を飲み込んだ。

「なあ……エリチカ……」

「どうしたの？」

「俺さ……」

「うん……？」

絵里は首をかしげてレナを見た。

「すう……」

俺はエリチカのことはずっと好きだった」

「え……？」

絵里は予想外の発言に目を丸くした。

「ごめん……やっぱり戸惑うよな？」

俺はこつちに来るまでは知らなかったんだ……エリチカが結婚していたこと。でもさ、想いを伝えないうて辛いんだ……それが応えられないとしても。

考えたよ。俺がこの思いを伝えたらエリチカとの今までの関係が崩れるかもしれない。い。

だとしても伝えなかったんだ！この想いだけでも……エリチカに……！」

レナは真つ直ぐと絵里の顔を見て言った。

「そうなの……私なんて言うか、わかっているわよね？」

絵里もジツとレナの顔を見て言った。

「ああ……わかっているよ……」

「……ごめんなさい、レナ」

わかっていたとはいえ、レナは悲しくて唇を噛み締めた。

「もう、レナったら……涙もろいのは変わってないわね。それにすぐ目が赤くなってる」

絵里は少し笑いながら言った。

「はははは……やっぱり悔しいな……」

レナは涙を拭きながら言った。

「……ありがとう、私のことを好きでいてくれて」

絵里はニコツと笑顔で言った。

「はははは……変な……感じだな」

「ふふっ……そうね」

「はははははっ……」

レナは涙を目に浮かべながら笑った。

そしてドアの向こうでナオキは背を向けてその会話を聞いていた。

くらぶライブ！（レナ・絵里）く

翌日……

成田国際空港……

「じゃあ……俺行くわ」

「また会えるといいわね！」

「ああ……そうだな」

レナと絵里はまたの再会を願った。

「レナ、気をつけて帰れよ」

「ああ……エリチカのこと幸せにしるよ？」

「わかってるよそんなこと……また会える日を楽しみにしてるよ」

ナオキはそう言つて右手を差し出した。

「ああ……またいつか」

レナはその手を右手で握った。

そしてレナはロシアへと帰国していった。

ナオキと絵里はレナの乗った飛行機を展望デッキから見上げた。

第126話（最後の一年のはじまり章末回）「伝説となりし者たちとその輝きを目指す者たち」

前回のラブライブ！

亜里沙ちゃんたちは先輩の厳しい練習に励んでいました。

私はその様子を覗いていて、先輩に見つかって……

「そう、ほんの少しの勇気を出せばいいんだ。勇気を出して、前に進んでごらん？」

その言葉に押されて、私はアイドル研究部に入ることになったのです！

そして私たちは、東京ドームで第3回ラブライブ！を観戦していました。

6月……

μ'sをはじめとしたスクールアイドルの力で叶った『第3回ラブライブ！』の東京ドーム開催が実現した。

アイドル研究部の1年生組と顧問である童子は、ラブライブ！運営委員会が用意してくれた特別席に座っていた。

「雪穂！やっぱり先輩スクールアイドルは違うね！ハラショー！」

「ふふっ、そうだね」

「みんな、輝いてる……!」

「マシユちゃんも感動してるみたいね」

「さすがはラブライブ! ってところかしらね」

「でも次で最後なんやね〜。なんか残念やわ〜」

みんなはラストのグループが始まるまで話していた。

「あ、そろそろ始まるみたいですよ」

雪穂がステージの照明が少し暗くなったのを確認すると、ステージを指さして言った。

ステージではラストのグループのライブが披露され、曲が終わりステージから下がっていくと投票の時間となった。

投票の方法は前回と同じ、インターネットを通して行われる。サイトで投票したいスクールアイドルをタップするだけである。

「さ〜て、投票結果が締め切られたようです! 発表までもう少しお待ちください!」
司会の人がそう言うと、観客たちはざわざわし始めた。

1年生組は「どのグループに入れたの?」などと雑談をしていた。

童子は見守るような様子でステージを見ていた。

(頑張ってな……” μ s ……)

「優勝は……ナニワオトメだ〜!!」

『ふおおおおおおお!!』

優勝は、前回の第2回ライブ!の決勝で μ s と 1、2 を争ったナニワオトメだった。

そして μ s の閉会ライブ……

9人最後の歌、『僕たちはひとつの光』

そして”10人”最後の歌、『これから』が披露された。

こうして μ s は本当に終わりを迎えた。

1年生組はここまで大きくなった先輩の姿を目に焼き付けた。

童子は流石だという表情をした。

ナオキたち μ s はこうして……”伝説”となった……

「ラブライブ！（μ s）」

「いやあく流石はμ s、いいステージやったな」

童子は帰りの車の中で運転しながら言った。

その車には1年生組が乗っていた。

みんなライブの感想を言い合ったりしていた。

「ん……雪穂、どうしたの？」

「え……!?!」

「ずっと窓から外を見てるけど……」

亜里沙はずっと窓から外を眺めている雪穂を見て言った。

「いや、ちよつと……あのお姉ちゃんが最初に泣き出すなんてって思ってた……」

「きつとそれだけμ sへの想いが強かったということじゃないですか？」

マシユは雪穂の方を見て言った。

「そうね。それは一番雪穂ちゃんがわかってるんじゃない？」

真癒美がそう言うのと、雪穂は穂乃果がスクールアイドルを始めると言ったときから今

までのことを思い返した。

「それもそうだね……」

雪穂は懐かしむように笑って言った。

くラブライブ！（1年生・童子）く

ナオキは穂乃果、海未、ことり、真姫、凜、花陽、にこ、希を家まで送り、絵里と恋人繋ぎなるものをして帰っていた。

「絵里……なんだか今日は疲れたな」

ナオキは肩の力が抜けたように笑って言った。

「そうね。でもこれで本当に終わりなのね……スクールアイドル々 sは……」
絵里は星が輝く夜空を見上げて言った。

「寂しいか？」

「ええ、少し……ね」

絵里は寂しそうな表情をしてナオキにもたれた。

ナオキはそんな絵里を見て少しニヤけた。

「むう……なによ、なにかおかしい？」

「いや、絵里も正直じゃないな〜って思ってたさ」

「べ、別に私は……」

絵里はナオキとは逆の方に顔を向けた。

「今まで当たり前だったことが1つなくなる……それなのに寂しくないやつなんてそうそういないよ。」少し「じゃないだろ？絵里にとつて、μsがおしまいになるって」

「……………うん」

絵里はボソツと呟いた。

「ん、なんだって？よく聞こえないな〜」

ナオキはニヤニヤとして耳を傾けた。

「むう……そうよ、寂しいわよ！わかってるくせに！バカ！」

絵里は歩くのをやめて少々涙目になりながら頬を膨らませて言った。

「よく言えました」

ナオキは笑顔になって絵里の頭を撫でた。

「もう……」

絵里はそう言いながらも嬉しそうな表情をした。

「さ、帰ろうか。亜里沙ちゃんを待たせるわけにもいかねーし」

「そうね」

2人は笑いあつてまた仲睦まじく歩き始めた。

「ただいま〜」

ナオキと絵里は自宅に帰ってきてきて元気よく言った。

「おかえり〜!」

亜里沙はその声を聞くと元気よくリビングからとびだして、絵里に抱きついた。

「ふふっ、急にどうしたの?」

「亜里沙、μ sのライブ感動したの!だからみんなで決めたんだ!」

「みんなで……?」

「うん!アイドル研究部1年生のみんなで!」

「へ〜なんて決めたの?」

「あのね……」

『私たちも、sに負けないぐらいの“輝き”を目指そう』って！」
「っ……!?!」

亜里沙の口から出た言葉に2人は驚いた。

「ふふ、ははははははははっ」

「ナオキ……?」

「お義兄ちゃん……?」

絵里と亜里沙は急に笑い出したナオキを不思議そうに見た。

「すまんすまん。面白くってな……今年の1年生がよ」

ナオキは腹を押さえながら言った。

「私たちが……?」

「ああ、”おれたち”に負けないぐらいの輝きを目指すことは、それ相応の覚悟はあ
るってことだろうか?」

「う、うん！」

亜里沙は顔下で両拳を握って腕を曲げた。

「そうか……なら、おれも……いや、”おれたち”も全力でサポートするよ」
そう言つてナオキは亜里沙の頭に手を乗せた。

「うん！」

「ふふつ、じゃあご飯にしましょうか。2人ともお腹すいてるでしょ？」

「おう（うん）！」

そうして3人はリビングに向かった。

くラブライブ！（ナオキ・絵里・亜里沙）く

「じゃ、次は私が入るわね」

「はいよ〜」

晩御飯の後、ナオキ、亜里沙と順にお風呂に入ったので最後に絵里がお風呂場に向かった。

「ふわあ〜」

「ん、亜里沙ちゃん眠たいか？」

テレビを観ていると亜里沙があくびをしたのでナオキは尋ねた。

「うん、少し……ふわあ〜」

「多分ライブで騒いで疲れたんだよ。もう寝たら？」

「うん、そうする〜。おやすみなさ〜い」

「ああ、おやすみ」

亜里沙は目をこすりながら自分の部屋に向かった。

ナオキはニコツツとして亜里沙を見送ると、またテレビに視線を向けた。

「おれたちぐらいの……か……」

「ここまで大きくなったんだな……μ sは……」

ナオキはソファーにもたれてそう呟いて、μ sと……9人の女神たちと共に歩んできた道のことを思い出していた。

そしていつの間にか目を瞑っていた。

「ふう……お待たせ〜」

絵里は髪を拭きながらリビングのドアを開けた。

「あら、寝てる……」

絵里がナオキからの返事がないことに気がついてソファーに近づくと、ナオキは寝息をたてて眠っていた。

「すう……すう……」

「ふふっ、かわいい寝顔……」

絵里はそう呟いてナオキの隣に座った。

「ん……」

「えっ……もう……」

絵里は頭を膝に倒れてきたナオキに驚くも、ふつと笑ってナオキの頭を撫でた。

絵里はナオキの幸せそうな、子供みtainな寝顔を見て微笑んだ。

「ん……あれ、寝てた……?」

「あら、起きたの?」

「絵里……?」

ナオキは少し寝ぼけたように言った。

「ふふつ、もうナオキも疲れたんでしょ?ならちゃんと布団で寝ないと」

「ん、そうだな……膝枕ありがとうな」

ナオキは寝ぼけながらも絵里の頭をポンポンと軽く叩いた。

「はいはいわかったから……早く部屋に行くわよ」

「は……い……ふわあ」

絵里は今にも寝そうで怖いナオキの手を引っ張って部屋に向かった。

「もう、子供じゃないんだから自分で布団に入ってよね……」

「ああ、すまん……ふわあ」

絵里はナオキをベッドに寝かせ、布団を掛けた。

「じゃあ、おやすみなさい……ちゅつ……」

絵里はナオキにおやすみのキスをして、唇が離れるとナオキは眠りについた。

「さて、私は明日のお弁当の用意をしないと！」

絵里はそう言ってまたリビングに戻った。

ナオキと亜里沙のお弁当を作るために……………

次回、新章へ続く……………

この想いをアタタに

第127話「その願いは流れ星のように」

「ふわあ〜……………」

7月の朝……

ナオキは体を起こしてあくびをして背すじを伸ばした。

そしてふと机の上を見て笑みを零した。

そこには第3回ラブライブ！の閉会ライブのあと、μ's 10人で撮った写真が写真立てに入っていた。

ナオキはベッドから降りて歩いてそこに近づいた。

そしてその前に置いてあったあるキーホルダーを手にした。

「あれからまだ1カ月しか経ってないんだよな……」

ナオキはそう呟いてキーホルダーの端についている「10色の指輪」を摘んでそれを眺めた。

「『モーメントリング』か……」

その指輪の名前は μ sの終わりを伝えたライブの最後に披露した曲名と一緒にあり、そのときに10人が人差し指にはめていたものである。

あれから10人全員が思い出の品として大切にしているのだ。そこには、”あの一瞬の輝き”が詰まっているのだから……

ガチャ……

「あらナオキ、起きてたのね」

「ん、ああ……おはよう」

ナオキがモーメントリングを眺めていると、エプロンをした絵里が部屋のドアを開けた。

「おはよう。そんなところで何してるの?」

「ちよつとな……そんなことよりリビングに行くこうぜ」

ナオキはキーホルダーを置いてドアの方に向かって歩いた。

「もう、そのために呼びに来てあげたのに」

絵里はナオキを目で追いながら言っただ頬を膨らませて、ナオキを追いかけた。

そして絵里はニコツと微笑み、ナオキとの暮らしを喜んだ。

「おいまだかく？ 鍵閉めるぞ〜！」

ナオキはドアを半分開けて若干もたれて言った。

「ごめん、もうちよつと待って！」

ナオキは玄関でふうと息を吐いた。

「亜里沙ちゃん先行つとくか？」

「ううん、私も一緒に行くよ」

「そっか……」

ナオキは微笑んで言った。

「ごめん2人とも……お待たせ」

「いいよ全然、じゃあ行くか」

「ええ！（うん！）」

絵里も靴を履いて外へ出ると、ナオキはドアを閉めて鍵を回した。そして3人は歩き出した。

「絵里、本当に1人でいいの？」

「大丈夫だって。もうこの2カ月ずっと言ってるわよ?」

「だってむつちや心配なんだけど……」

3人はマンションの前で話していた。

ナオキは絵里が1人で大学に行くのが少々心配のようだ。その気持ちはわからないでもない。てかわかる。

絵里はすごく美人だし愛おしい。いくら婚約していて婚約指輪という威圧感のある超結界シールドがあるとはいえ心配なのである。

「大学はここから近いし心配いらなくて3月から言ってるでしょ?」

「うくん、でもさ……」

「大丈夫だよお義兄ちゃん、それに早く行かないと遅刻しちゃうよ?」

「そうよ。私なら心配いらなから……亜里沙、ナオキがついてこないようによろしくね」

「うん!」

亜里沙元気よく頷いた。

「なんか傷つくな、その言い方……」

「ふふっ……ごめんごめん、でも……」

絵里は少し微笑んでナオキの耳元に口を近づけ……

「心配してくれてありがとう。大好きよ……ちゅっ……」

そう小さな声で呟いて頬にキスをした。

「おう……／＼／＼」

ナオキは少し照れて返事をした。

「それじゃあ気をつけてね、いつてきます」

「いつてらっしや〜い！」

絵里が手を挙げてそう言うってから歩き出すと、亜里沙は大きく手を振った。

「じ、じゃあ……行くか」

「うん！」

ナオキと亜里沙は絵里が歩いた別の方に向かって歩き出した。

く
ラブライブ！（ナオキ・絵里・亜里沙）
く

「ちいっす」

「あ、ナオキくんおはよう！」

「おはよ〜」

「おはようございます」

ナオキは教室に入り自分の席に近づいて穂乃果、ことり、海未に挨拶をした。

「そういえばナオキくん宿題した？海未ちゃん見せてくれないんだよ〜」

「当たり前です！」

穂乃果は数学のノートを見せてナオキに言ったが、海未は身を前に出して言った。

「で、ナオキくんはなんで向こう向いてるの？」

ことりは何故か3人とは違う方を見ていたナオキに言った。するとナオキはビクツとした。

「さ、さあ？ナ、ナンノコトダカ……」

そんな汗を垂らすナオキを、海未はジト目で睨んだ。

「ナオキ……まさかとは思いますが……」

「ど、どうしたのかな？そんな怖い顔して……」

そして海未は怖い笑顔でナオキに近づいて、手をスツと差し出した。

「数学のノート、見せてください」

「な、なんで……?」

「み・せ・て・く・だ・さ・い」

「……はい」

ナオキは海未の威圧に観念したのか、大人しく数学のノートを差し出した。

海未はジト目でそのノートをパラパラとめくり、あるページを見るとため息をついた。

「やっぱりナオキもやっていなかったんですね……」

「違うんだ! 言い訳をさせてくれ!」

「問答無用!」

「ひいっ……」

ナオキは海未に怒られると体を少し後ろにずらした。

「おお、ナオキくんも仲間だね〜!」

穂乃果は目をキラキラさせてナオキを見た。

「仲間……?」

「も〜う、なんで目を逸らすの〜!?!」

ナオキが穂乃果から視線を逸らすと、穂乃果は驚き混じりに怒った。

ドン!

「ひいつ……!?!」

「とにかく! 2人ともすぐにやりなさい!」

「は、はい……」

海未がドンと机を叩いて怒ると、穂乃果とナオキは数学の宿題をし始めた。

「途中までは出来てるんだよ! でもさ、寝ちやつたんだよ!」

「うゝん、確かにヨダレみたいな跡があるね」

「ことりは顎に手を当てて言った。

「だからあと3問なんだよ!」

「でもちゃんと全部やつておかないと」

「ごもつともです……はい」

ナオキはこたりの監視の下、残りの問題を解き始めた。

「はあ……ナオキでも途中までしているのに、穂乃果は手をつけていないなんて……」

「あははは……」

「入試も近いんですから、しつかりしてください……」

海未は呆れながら言った。

穂乃果は穂むららを継ぐために専門学校を受験する予定である。

「は〜い……」

穂乃果は嫌そうな表情をして宿題に取り掛かった。

「終わったあ〜!!」

「お疲れ様〜、早かったね」

「ま、おれにかかれば当然だな」

ナオキは胸を張って言った。

「……………全部間違ってるけどね」

「ふあつく!?!」

ことがノートを確認して言うとき、ナオキは驚きの声をあげた。

「はあ……通りで早いわけですね。適当にしたんでしょう?」

海未はため息をついてジト目で言った。

「て、適当じゃねーし!おれは今出せる全ての力を解き放って、あらゆる可能性の中から適切な解答を導き出したんだよ!」

ナオキは自信満々に立ち上がって言った。

「いわゆる当てずっぽうだね」

「……………はい」

だがこどりに指摘されるとナオキはしゅんとして座った。

「穂乃果も負けてられないね！よくしし！」

穂乃果は気合いを入れてまた宿題に取り掛かった。

そんな穂乃果を見て3人は笑みを零した。

てか宿題は家でやれよ……

くらぶライブ！（穂乃果・海未・こどり・ナオキ）く

午前中の授業が終わるとナオキと海未は生徒会室に向かった。ついでに言うとう、ナオキくんの数学のノートは真っ赤でした。

「さくって昼飯だ〜」

ナオキは弁当箱を開け、両手を合わせてから食べ始めた。

「ナオキくんってお弁当で自分で作ってるの？」

フミコが不思議そうにナオキに聞いた。

「ナオキに限ってそんなことないですよ」

「そうですね〜」

真姫と海未は当たり前のように言った。

「なんかそれ傷つくな〜……はむっ」

ナオキは2人を睨んでまた一口食べた。

「あれ、そうなら誰が……？」

「絵里ですよ」

「なるほど」

フミコは一瞬で理解して昼ご飯を食べた。

「なんだよ……つたく……はむっ」

ナオキはまた一口食べた。

ナオキたち生徒会が何故昼休みにいるか。

それは、文化祭が近いからである。

文化祭は生徒会が中心となって運営しており、文化祭実行委員会がその下についている。

なので昼休みには、ステージの申請、出し物の申請などで生徒が生徒会室を訪れるのだ。

「さ、そろそろ昼休み終わりそうだし帰るか」

「そうですね」

ナオキがそう言って立ち上がるとみんな立ち上がって教室に戻っていった。

午後の授業が終わると、ナオキたちは自分たちの最低限の仕事をしてから、文化祭の仕事をつミコに任せて部室に向かった。

そして今日は……アイドル研究部にとって大事な話し合いがあった。

「ではこれから、アイドル研究部の活動について話し合います」

花陽は部員全員がいることを確認すると話し合いを始めた。

「まず議題として上がっているのは、

全員でのスクールアイドル活動についてですが……」

「とりあえず全員で1チームとしてエントリーするのは確実だろ？」

ナオキは花陽を見て言った。

「私はそれでいいかと思えます」

花陽はナオキを見ていうと、その他のみんなは頷いた。

「となると大事なのは……」

「グループ名ですね」

穂乃果と真癒美は腕を組んで言った。

「その通りです！なのでみなさん、思いついたら候補を上げてください！」

「はいはい！」

「はい、穂乃果ちゃん」

穂乃果が元気よく手を挙げたので花陽は穂乃果を指名した。

「ここはシンプルに、”O☆T☆O☆N☆O☆K☆I”なんてどう？」

「却下です」

「却下だな」

「却下ですね」

「3人とも酷いよ！」

海未とナオキと花陽はそっこう却下した。

それからもういくつか案が出るも、なかなかいい名前のは出なかった。

「ダメだ〜！全然出ないよ〜！」

穂乃果は頭を抱えて叫んだ。

「なかなか難しいものですね……」

海未も腕を組んで言った。

「そう言えば、μ'sの名前もこういう風に決めたんですか？」

瑞希は不思議に思ってた。

「ううん、あの名前はね希ちゃんが決めたんだよ」

ことりは首を振って答えた。

「そうなんですか!？」

雪穂は驚いた様子で言った。

「うん、グループ名が思いつかなくて募集したら希ちゃんが紙に書いて決めてくれたんだよ」

穂乃果は元気よく言った。

「と言っても、それがわかったのは随分あとでしたけどね」

海未は懐かしむように言った。

「そうだね〜」

「こつりもまた懐かしむように言った。

「でも今回は受け継いでいくようなものがないのですか？」

マシユは小さく手を挙げて言った。

「受け継いでいく……？」

凜は首を傾げて言った。

「はい。μ、sは、10人だけのもの”でした。ですが、今回決めるものはそうではなく、今後このアイドル研究部が受け継いでいくグループ名にすればいいのではないかと
思うんです」

「確かにそれは一理あるわね」

真姫はマシユの言葉に賛成した。

「受け継いでいけるグループ名……」

その条件を加えてみんなはさらに悩んだ。

そしてその沈黙を破ったのはもちろんこの男……

「なあ、こつりというのどうだ？」

みんなは驚いてナオキの方を見た。

「思いついちやったのお!？」

「ああ、ちよつとホワイトボード借りるぜ……」

ナオキはペンを手にとってホワイトボードに思いついた名前を書き出した。

その名は……

『Shooting Stars』

”Shooting Stars”……流れ星?」

真姫はホワイトボードを見つめて髪の毛をくるくるして言った。

「ああ、スクールアイドルは限られた時間の中で輝く存在だ。

それに、受け継いでいくんだったらその輝きは古いものから新しいものへと変わって

いって、また新しいものへ変わっていく。それが流星群みたいだなんて思ったから、流星……”流れ星”って意味の”Shooting Star”を複数にして、”Shooting Stars”って考えたんだが……どうかな？」

ナオキはこの名前を思いついた流れを説明してみんなの顔を見まわした。

そしてみんなは最初は啞然としたが、徐々に笑顔になつていき口々に「賛成」と声をあげていった。

「それじゃあ、全員が賛成なので……」

私たちは今から……

音ノ木坂学院スクールアイドル……

”Shooting Stars”です！

そしてこの名前をずっと受け継いでいくことにします！」

花陽のその言葉を聞いて全員が拍手をした。

そしてその日、ラブライブ！運営委員会が管理するHPのランキングに”Shooting Stars”の名が刻まれた。

♪ラブライブ！（Shooting Stars）♪

「えっと……………」

「さ、そこに座って……………」正座で」

「いや、いきなりなん…「はやく」…はい……………」

ご飯も食べ終わりお風呂に入って部屋に戻ったナオキは、ベッドに腕を組んで座ってニコニコとしている絵里の言うことに従って床に正座をした。

「で、なんでこうなってるかわかる？」

「いや、正直なんでか……………」

「むっ……………」

「ひい……………」

絵里がキツとナオキを睨むと、ナオキは少し涙目になって声をかすらせた。

「はあ…………海未から聞いたわ。ナオキ、宿題終わってなかったらしいじゃない？」

「あ…………そ、それは…………その…………」

ナオキは絵里から目を逸らした。

「私は昨日は先に寝ちゃったけど、宿題してって言ったわよね？」

「だからね、やったんだよ！でも途中で寝ちゃって、夜中に起きて…………布団に入りました

…………ごめんなさい」

「もう…………それでも生徒会長なの？」

「だって…………」

「とにかく！これからは気をつけなさい！」

「…………はい」

ナオキは絵里に怒られてこれから数学の宿題もきちんと家で仕上げると心に刻んだのであった。

「ああ、あと一問もあつてなかったみたいだからまた教えてあげるわね」

「はい…………」

あと正解率はできるだけあげるとも…………

そして……………

ある人物が……………

彼等の家に向かおうとしていた……………

「久しぶりに会えるんだね、”ナオにい”！」

次回に続く……………

第128話「嵐の予感……?」

前回のラブライブ!

7月になって心機一転をした私たち!

これからの活動に向けて、グループ名を決めることに!

その名前は“Shooting Stars”!流れ星って意味なんだく!

そして私たちは“Shooting Stars”として活動を始めた!

「私たちは今から音ノ木坂学院スクールアイドル……”Shooting Stars
”です!」

「だからここはこうして……」

「うくん……?」

「ダメ?」

「頭痛い……」

「でもテストなんでしょ?赤点取っちゃったらどうするのよ」

「だってさく」

もうすぐ夏休み前の最後の定期試験。

ナオキは絵里に数学を教えてもらっていた。

「もう、最低でも赤点は回避してよ？」

「善処します……」

さて、ナオキは数学を赤点回避することができているのか!?

次回、「ナオキ、赤点オンパレード」デュエルs（殴

くらぶライブ！（ナオキ・絵里）

「うくん……朝か……」

昨夜絵里を抱いてから寝たナオキは目を覚ました。

絵里はまだ隣で寝息をたてて寝ている。

ナオキは絵里を起こさないように離れて服を着て、机に向かった。

「……よう」

ナオキは数学の問題集（絵里作）を開き、問題を解き始めた。

絵里はまだ眠たそうに目を開けた。

見たのは、必死に勉強をするナオキ。
そんなナオキを見て微笑み、また目を瞑った。

「よっしや終わった〜！」

ナオキは体を伸ばして言った。

「でも結構正解が増えたな……これ、赤点回避どころか……学年1位狙えるんじゃないかね？」

ナオキはノートを見て顎に手を当ててニヤニヤとした。

「うくん、それはないわね」

「うおっ!? え、絵里……起きてたのか……」

「うん、さつきね。ちよつと見せてもらおうわね」

絵里は置いてあるノートを手にとってナオキが解いたところを見ていった。

「ど、どうだ……?」

「うくん、これならぎりぎり赤点回避できるかできないかの微妙な線かしら?」

「まだダメなのか……」

「そうね、確実に赤点は回避してもらわないと」

「は〜い……」

ナオキはそう言つてか机に顔を横にして突つ伏した。

「ふふつ、でも自力でここまで正解したのは偉いわよ……ちゅつ……」

絵里はナオキにもたれて頬にキスをした。

「ま、まあ……おれにかかればこんなもんだよ」

「ふふつ、じゃあ朝ごはん食べたら解説ね」

「は〜い」

絵里とナオキは部屋から出てリビングに向かった。

ナオキはテストに向けて必死に勉強を続けた。

絵里は真剣に勉強に励むナオキを見てまた惚れ直したのだった。

くらぶライブ♡（絵里）く

音ノ木坂学院……

アイドル研究部部屋……

ナオキは生徒会室で体を伸ばした。

練習のあとに文化祭の申請があり受け付けたところ、新たな仕事や忘れていた仕事が見つかって残ってしていたのだ。

「ふう、なんとか終わりましたね」

「なんで忘れてた仕事もあるわけ?」

「ははは……でもありがとうな、練習で疲れてるのに手伝ってもらって」

海末と真姫も1人ではいつまでも終わらないだろうと仕事を手伝った。

「いいですよこれぐらい」

「さ、早く帰りましょ」

真姫がそう言うのと3人とも荷物をまとめ始めた。

「今日は遅いし、それに危ないから2人とも送っていくよ」

「ありがとうございます」

ナオキは2人を送ってから自分の家に帰ることにした。

「そーいや海末、大会っていつなんだ?」

「8月の頭ですよ。前にも話したじゃないですか!」

「す、すまん……」

ナオキは海未を送っている道中に、日本にある道場の1番を決める大会、『日本道場最強決定戦』のことを聞いた。

「はあ……」

海未はナオキに呆れてため息をついた。

「まあ、練習付き合ってやってるんだしいいじゃないか!」

そう言ってナオキは「ははははっ!」と高笑いした。

「つたく……それと、今度の日曜日は空いてますか?」

「ああ、とくになんもないから練習付き合えるぞ?」

「なら、早朝6時からよろしくお願いします」

「りょくかい」

「では、また明日」

「おう、また明日」

そう言ってナオキは海未の家の前で海未と別れて、自分の家へと向かった。

くラブライブ！（海未・真姫）く

「ただいま〜つと」

「あ、お義兄ちゃんおかえり！」

ナオキが玄関を開けると、お風呂場に向かう亜里沙が声をかけた。

「ただいま。絵里は？」

「お姉ちゃんなら今料理作ってるよ！」

「そうか、ありがとう」

「うん！」

亜里沙は返事をしてお風呂場のドアを閉めた。

ナオキはリビングへと足を進めた。

「ただいま〜」

「ナオキ、おかえりなさい。早く着替えてね、ご飯もうすぐできるから」

「わかった……」

ナオキがリビングに入ると、絵里は底が深い鍋を混ぜながら言った。

ナオキはいい匂いがしたのでキッチンに近づいた。

「なあ、今日のメニューはなんだ？」

「気になる？」

「気になる！」

絵里がナオキの方を見て言うと、ナオキは大きく頷いて返答した。

「ふふつ、今日のメニューはシチューよ」

「おお〜！」

ナオキは絵里の肩を後ろから軽く掴んで鍋を覗いた。

「でも、まだ亜里沙がお風呂から出てきてないし、食べられないわよ？」

絵里はそう言って持っていた蓋を鍋に重ねた。

「わかってるよ。じゃあ、おれも着替えてくるわ」

ナオキはそう言って自室に向かった。

くらぶライブ！（ナオキ・絵里）く

日曜日の早朝……

園田道場では竹刀がぶつかり合う音と2人の声が響いていた。

「めえくん！」

海末の一撃がナオキの兜に直撃した。

「負けたあ〜！」

ナオキは面をくらうとお尻と手を床についた。

「ふう……ナオキの腕が鈍ってるのでは？」

海末は兜をはずし、汗を腕で拭いて言った。

「はあ？海末が強くなってるだけだろ？前までは効いてた」

あまかけりゆうのひらめき
天翔龍閃”ももう効

かなくなつたし……」

ナオキも兜をはずして言った。

「そう何度も同じ技にやられませんかよ、”鬼園田”は」

「ちつくしよ〜！」

ナオキは悔しさを含めて叫んだ。

「もうひと勝負しますか？」

「当たり前だ！次こそ勝つ！」

ナオキは兜をかぶりなおして竹刀を構えた。

「いいえ、次も勝たせていただきます!」

海未も兜をかぶって竹刀を構えた。

そして2人の竹刀はまたぶつかり合った。

その後も2人は何度も試合を続け、気づけば朝の9時となっていた。

「はあ、はあ……結構したなっ……!」

「はあ、はあ……そうですねっ……!」

2人は息をきらし、汗を垂らしながら竹刀を構えて見つめあった。

「どうする、まだやるか?」

「では、これでラストということ……!」

「了解……!」

「ふんっ!」

ナオキが返事ついでに攻撃を仕掛けると、海未はその攻撃を竹刀で受け止めた。

「くっ……!」

「くっ……てやあ!」

「なっ……!?!」

「どぅう!」

2人はそのまま睨み合ったが、海未がナオキの竹刀を弾き返し、そのまま胴に一撃をくらわせた。

「くっそお！負けたあゝ!!」

ナオキは竹刀で床を突いて悔しがった。

「これで今日は私の勝ち越しですね」

海未は兜をはずして言った。

「この試合勝ってたらおれが勝ってたんだよ！」

「ふふっ、屁理屈ですね」

「今度やる時こそ勝ち越してやるからなっ!!」

「出来るといいですね」

「こんにやろゝ!!」

ナオキはとても悔しがり、頭を勢いよく掻いた。

「ふふっ、シャワー先に浴びますか？」

「んや、海未が先に浴びたらいいよ。女の子なんだし」

「それでは、お言葉に甘えて……」

海未は頭を下げてシャワー室に向かった。

ナオキは道場の端に置いてあったカバンの中からスマホを取り出して画面を見た。

『ナオキお疲れ様♡』

何時頃に戻ってくるの?』

絵里からメッセージが来ていた。

「えっと……うーん……」

『ちよつとやりたいことあるから昼過ぎになるかも』

『わかったわ』

気を付けて帰ってきてね』

『了解しました(´・ω・´)ゞ』

ナオキはメッセージを送信すると、スマホをカバンの中に入れた。

そして、ある本を取り出してそれを読み始めた。

くらぶライブ！（ナオキ）く

「ただいま」

昼過ぎにナオキは帰宅した。

「おかえりなさい、遅かったわね？」

「ああ、ちよつとな……」

「ふん……」

「じゃ、勉強するか」

ナオキはそう言つて自室に向かった。

「怪しい……なにか隠してるのかしら？」

絵里はナオキはなにかを誤魔化そうとしているに違いないと思ひ怪しんだ。

何故わかるかつて？

そりゃあ、2人はカップルですから！

そして絵里が怪しんでいる頃……

ナオキは……

「はあ……普通にバレそうなんだが……」

ナオキはそう呟いて絆創膏が貼ってある自分の指を見つめた。
すると、スマホの着信音が鳴った。

「もしもし?」

『……………』

「ああ、平気平気……それに今日はありがとうな」

『……………』

「明日からテストだし、金曜日のテスト終わりとかどうだ?そこでもいいやろう」

『……………』

「ああ、ありがとう。それじゃあ、また明日学校で」

『……………』

ツイッター……………

ナオキは電話が終わると勉強を始めた。

2人のオモイは交差する………

次回に続く……

Another way (ナオキの誕生日)「遠くから、近くから」

「好きです！私と付き合って下さい！」

「気持ち嬉しいよ。でもごめん、おれは君とは付き合えない」

「……理由を聞いてもいいですか？」

大阪にいるとき、正直何人かの女の子に告白された。

でもいつもおれはそれを断っていた。

そして毎回のように理由を求められる。

そんなとき、おれはいつもこう答えてたんだ。

「もう心に決めた好きな人がいるんやよ。遠いところにいるけど、とても大切な幼馴染みなんや。だからすまないね」

そう、おれはずっと好きだったからこう答えていた。

「そうなんですか……わかりました」

その告白してきあ女の子は残念そうにその場を去っていった。

「はあ……」

正直なところ、こんな生活には飽き飽きしていた。

確かにおれは何回も女子から告白されてウハウハな男子高校生なのだろう。

だけどおれにはね、心に決めた人がいたんだよ。

その人と付き合いたい、心からそう思っていたから。

さて問題です！

その人とは誰でしょう？

クイズ、君の名は。

レッツシンキングタイム！

ふむふむ………

おー！流石はわかっていますな！

そう、その名はもちろん絢瀬絵里！

小さい頃に出会って、一目惚れした。

大阪に引越してから、その気持ちはどんどん大きくなって……絵里のことを思い出すだけで、考えるだけで、胸が苦しくなる……そんな日々がずっと続いていた。

絵里が修学旅行で大阪に来た時に久しぶりに再会した。

そして成長した絵里の姿を見て、おれは絵里にまた惚れた。

ああ、おれは絵里が本当に大好きなんだ。

たとえ何年、何十年かかっても……

絵里と付き合いたい。

そんなことを思い続けて、あの日が訪れる。

退学……………

そして東京への単身引越し。

さらに、模擬男子生徒として音ノ木坂学院に転入することになった。

絵里とも再会できて、これから絵里の近くにいろ……それだけですごく、ものすごく、嬉しかった。

でもおれは心のどこかで躊躇っていたのかもしれない。

現に絵里に告白を決心した日、実はおれは一睡もしていなかった。

夜、ずっと絵里に告白するか否かを悩んでいたんだ。

おれは絵里のことが好きだ。愛している。この世の誰よりも愛している。でも、絵里はどうなのか？

おれのことをどう思っているのだろうか？

もしかしたら、ただの幼馴染みとしか見ていないのかもしれない。

そんな不安を抱えて朝を迎えた。

でも伝えなきやいけないと思った。

絶対後悔する。

もしかしたら退学の一件も、神様がこのために与えてくれたのかもしれないと思っ
た。

そして、決意した。

でも案の定生徒会室で寝ちまったよな？

そしてその告白は簡単なものだったのかもしれない。

でも素直にちゃんと伝えることができた。

そして絵里の返事はOKだった。

嬉しかった……絵里も同じ気持ちだったことが……

と—————ってもっ
!!!!

嬉しかった
!!!!

そんな、遠くから想い続けた人がいま……

「……オキ、ナ〜オキつたら!」

「ん、ああ……どうしたんや?」

「『どうしたんや?』じゃないわよ!ぼーっとして、なに考えてたの?」

「ちよつと絵里のことを考えてただけやよ」

「も、もう……// //」

顔赤くした絵里かわいい(確信)。

「ほらおふたりさん、早く行くで〜」

「は〜い」

あ、なにをしてたかっていうと、生徒会の用事でほかの学校におれと絵里と希で出掛けたんだよ。

それで、絵里と希を待っててぼーっとしてたのがおれ。

「んで、なんの用事やったんや?」

「次の生徒会交流会のことよ」

「生徒会交流会……電話じゃダメやったんか?」

「ええ、資料も渡したかったみたいなのよ」

そう言つて絵里は貰つたという資料を見せてきた。

「ほえ、うわだるそう」

「そんなこと言わないの。ナオキにも出てもらうからね」

「ええ」

『『ええ』じゃないの！』

「は、い……」

おれは肩をすぼめて返事をした。

よろしいと絵里は前を向いて歩き出す。

そして背後から忍び寄る影……

その影は……を構えておれたちの方に向ける!!

「ん……う？」

おれはそれに気づいて……

笑みを浮かべた。

「絵里絵里……」

「ん、どうし……」

パシヤツ!

おれが絵里の肩を叩いてその方を向かせようとしたけど、それは間に合わずシヤツターがきられた。

「あちやくバレた?」

「の、希!」

「なんで隠し撮りしようとするかね?」

忍び寄る影とは希のこと。

希は本当は仲良く喋っているおれたちの後ろ姿を撮ろうとしたらしいんだけどな。

「だってその方が面白いやん?」

「はあ……」

「もう、撮るならちゃんと言ってくればよかったのに……」

「だってそれやったらインパクトにかけるからな」

「そういう問題じゃない！あつ……／＼／＼」

おれと絵里はたまたま声を合わせて同じことを言ったので、顔を赤くした。

「おふたりさんはほんまに仲ええな〜」

希はニヤニヤしておれたちをからかってきた。

「うっせ〜よ／＼／＼」

おれは顔を赤くしてまた歩き出した。

そのあとを2人ともついてきた。

「それで、そのときの写真がこれだ」

「へ〜」

亜里沙ちゃんはそのときの写真を見て言った。

ああ、さつきの話……実はおれが亜里沙ちゃんにしてたんだ。

亜里沙ちゃんがおれのスマホのロック画面を見て、「これいつ撮ったの〜?」ってかわいく言うからなっ!

「もう、そんな話しないでよく恥ずかしい……／＼／＼」

んもう!だから恥ずかしがる絵里はかわいいんだよっ!!!

「ははは、いいじゃん別に。減るもんじゃないし」

「そういう問題じゃないのだけれど……」

絵里はそう言っただけで出来た料理を机に置いた。

「亜里沙、”あれ”持ってきて」

「は〜い!」

「ん、あれ?」

「ふふっ……」

あれってなに?なに?ねえねえ?おれ知らね〜よ?えっえっ!?

「てかなんで目を隠すんだよ!」

「ちよつとじつとしててね」

絵里はおれの背後にまわって目を手で隠してきた。

「じゃあ、『いい』って言ったら目を開けてね?」

「わかった……」

絵里の手が離れた……

そして……

「いいわよ」

絵里の合図で目を開けた……

目の前には……

「ナオキ」

「お義兄ちゃん」

「誕生日おめでとう！」

誕生日ケーキがあった。

「これって……」

「私と亜里沙の手作りよ」

「絵里と亜里沙ちゃんの？」

「うん！頑張ったよ！」

「そうか……」

「うんうん、そうかそうか……」

「うっ……ありがとう絵里、亜里沙ちゃん！」

「もう、泣かないでよこれぐらいで」

絵里はそう言つてハンカチでおれの目を拭いた。

「さ、はやく食べよう！」

「そうね」

「ん……ああ！」

そうやって3人でおれの誕生日記念夕食が始まった。

ありがとう亜里沙ちゃん……

ありがとう絵里……愛してる。

コラボ回（withウォール）「香る絵と春の花～大人の味に魅せられて～」

「あいつら遅いな～」

「そうね～」

おれ、香川ナオキと妻である絵里は『食事処 夕歩』ゆうほに来ていた。
今日はここである1組の夫婦とご飯を食べる予定なんだよ。

ガラガラガラ……

「お待たせしました～」

「ごめんなさい、待たせてしまつて……」

おれが待ちくたびれていると部屋の障子が開き、そいつらが申し訳なさそうに入ってきた。

「遅いぞ……春人、花陽」

「待ちくたびれちゃったわ」

そいつらこそが、東京の小学校のときに仲が良く、帰ってきた時に花陽を通して再

会した別の高校に通つてた後輩の高橋春人と、その妻である花陽だ。

「本当にすみません、なんでもしますから……」

「ん、今なんでもつて……?」

「もう、そんなのいいから早く座つて座つて」

おれが冗談を言つたら絵里が普通に2人に座るように促した。

「まったく、折角面白いこと言つたのにな。ま、かわいいから許すけど。」

「さ、腹へつたし早く注文しようぜ!」

「ナオキはこのときの為にお昼ご飯抜いたもんね」

「そうなんですか!」

「ふふつ、ナオキくんらしいね」

「そりゃあ、久しぶりの外食だぜ?それに春人と花陽と一緒にとなれば尚更楽しみだったしー!」

もうおれはぺこぺこなんだよ!

早く食わせろ!!

早く食いたいし、箸をバンバンつてしようかな? いやいや、それしたらきつと絵里に怒られる……いや、怒られるのもありか……うん、いい……いいぞ!よし!

「ナオキ、注文はなににするの?」

「あ、ご飯の大盛りと、枝豆と、唐揚げと、生で」

「かしこまりました。ご注文は以上でよろしいでしょうか？」

「はい、以上です」

「では、少々お待ちください」

店員さんは注文をとって障子を閉めて行った。

いやあく楽しみだなっ!!

あれ、さっきまでなにかしようとしてたような……ま、いつか。

「そう言えばナオキさん、お仕事の調子はどうですか？」

「ああ、最近はずラブライブ!も近いし大変だよ」

そう、おれはずラブライブ!運営委員会で会長をしているんだ。

「そうなんですよね!もう席は予約済みです!」

「流石は花陽だけ」

おれと花陽は互いに親指を立てた。

「発売日になる瞬間にクリックしたもんね、花陽ちゃんは」

「だって、ラブライブ!だよ、ラブライブ!」

「わ、わかったから……落ち着こう?」

「ご、ごめん……」

「ははは、ほんと相変わらずだな」

いやあく微笑ましいなこの夫婦は。

え、おれと絵里もだつて？

当たり前じゃん。イチヤラブ過ぎてみんな嫉妬ファイア〜〜が燃えたぎるんじゃね？

「お待たせしました。生3つと枝豆です」

「ありがとうございます」

なんか喋つてたら注文の品が来たわ。

あれ、3つ……？

「花陽は飲まなくていいの？」

「うん、私はいいよ。あまりお酒に強くないし……」

「また飲みたくなったら頼んでいいんだよ？」

「うん、ありがとう」

「それじゃあ、久しぶりの再会に……」

「「「かんぱい！」「」」」

ついに飲める！食える！

「ぶはあ！やっぱりうめえ〜」

「もう、飲みすぎないですよ？」

「わかってるわかってる」

「はははは……」

おれは勢いよくビールを口に入れた。

絵里は少し口に入れてから少し微笑んで言ってきた。かわいい。

春人は苦笑いをしていた。

「ご、ご飯はまだでしょうか？」

「花陽ちゃんは一回落ち着いちゃ？」

花陽は「ご飯はまだかまだかとキョロキョロして待ちわびているようだな。

「まあまあ、枝豆食べとけって……」

「ありがとうございます……はむっ」

「花陽は残念そうに枝豆を食べた。」

そのあと注文した品全部が揃って、おれ達は話しながら食べていた。

あ、ビール4杯目です。

「でも感慨深いわね。あのときナオキが春人くんの背中を押したから今4人でこうして

飲んでいるのよね」

「そうなんですよね。あのときはお世話になりました」

「おう、いいっていいって！春人はあと一歩踏み出せなかつたんだよ。あ、ビールおかわり」

「ははは……でもあのときのことは本当に感謝してますよ」

「うん、私からも……ありがとう」

そう、この2人が結ばれてるのもおれが春人の背中を押したからとも言える。

あの日、おれは薄々思つたことを春人に言つた。

「花陽のことが好きなんじゃないか？」ってな。

そしたらそれが凶星で、なんで告白しないのかということに。

春人はそれに対して、振られるのが怖いだの、花陽に迷惑がかかるだの、恥ずかしいだと言いつつおれがチョップをくらわせたんだ。

そして「なにするんですかつ！」って頭を押さえて言う春人に言つてやつたんだ。

「本当にそれでいいのか？」「お前の花陽に対する想いはその程度なのか？」ってな。

それで最後に一押し、「お前ならいける」って背中を押したら……ほら付き合えたつてわけ。

「懐かしいなあ〜！」

そんな思い出を思い出しておれはさっきおかわりしたビールをまた一口飲んだ。
そのあともおれ達は話をしながら食事を続けて店を出た。

「いやあく食った食った」

「美味しかったわね」

「ふわあ……ご飯美味しかったです」

「10杯ぐらい食べてたもんね」

「どうする？ 次の店に行くか？」

おれは違う店に行かないかとみんなに聞いた。

「いいんじゃない？」

「明日も休みですしね」

「私はご飯が食べられるならそれでいいです！」

「んじや、行くか！」

みんなの賛成も得られたので……いざっ!!

くラブライブ！（ナオキ・春人）く

おれ達が次にやってきたのは『居酒屋 暁』だ。

その個室の座敷でおれ達4人は座つてゆつくりと酒を飲んでいた。

「結局花陽も飲むんだな」

「はい、みんなが飲んでる姿を見てたら飲みたくなりました！」

「ははは……春人はもっと飲んででもいいんだぞ？」

「いえ、僕はあまり多くは……」

「ナオキは飲みすぎね。少しは控えなさいよ」

「努力しまゝす」

そう言つておれは酒を口に入れた。

机には酒と枝豆とかのおつまみと白米が………白米!?

「花陽、それ何杯目？」

「えつと………5杯目？」

「ハラシヨ………流石は花陽ね」

花陽はやっぱり白米かあ………

「なあ春人、花陽って家でも白米ばつかなのか？」

「はい、毎日違う種類のお米が出てきますよ」

「うそ!？」

おれと絵里は信じられないセリフに声を合わせた。

「本当ですよ。しかも家の地下にはお米貯蔵庫がありますし」

「お米貯蔵庫!？」

「はい、凄いですよ。ね、花陽ちゃん」

「ごくつ……はい、お米貯蔵庫には日本中から集めたたくさん種類のお米が貯蔵してあるんです!」

「お、おう……」

「だから高橋家の食費は野菜とかじゃなくてお米に消えるんですよ」

「ハラショー……」

いや、もうハラショーしか出ないよ？

それに見てくれよあの花陽の目。

むっちやキラキラしてるし。

花陽まだお酒飲んでないよね？

あ、白米とアイドルのことになったらこんなもんか。

でも、今もまだ米のこと話してるんだぜ？

絵里も多分おれと同じ反応……あ、酒進んでるな……

さてさて春人は……

流石花陽の夫だな、むっっちゃ笑顔で頷いてる。

「でもいいものですよ？毎日違う種類の『ご飯』が食べられるのは」

「そうか……幸せそうだなにより……」

あ、日本酒追加で！」

「あとご飯と、気分がいいので日本酒も！」

「あいよー！」

「花陽もついに飲むか！」

「はい、お米のことを話したら気分がよくなりました！」

いいねいいね〜！どんどん飲んでおおう！

「んで、春人……」

「ナオキさん、結構酔ってます？」

「酔ってね〜よ！ちよつと気分がいいだけっ！それより春人……」

「は、はい……」

「家での花陽はどうだ？」

おれは隣で絵里と花陽が話し込んでるから春人に家での花陽の様子を聞いた。

「そりやあかわいいですよ。とくに白米のことになるとかわいいですね。いつも白米を炊くとなると、『今日はどのお米にしますか？』って聞いてくるのがかわいいんですよお!!」

「そうか、それはよかった!」

おれは感激してまた酒を口に入れた。

「絵里ちゃんとはどうなんですか？付き合ってる当初からラブラブだったら、今でもラブラブじゃないんですか？」

「あ、バレた？」

いやあくやっぱりかわいいぜ絵里は」

「例えば……？」

「そうだな……ひとつひとつの仕草とか全部かわいけど、仕事から疲れて帰ってきたら『おかえり』って笑顔で出迎えてくれる絵里は格別だなっ!!」

「わかります!そんな花陽ちゃんもかわいいです!!」

チラッと隣を見ると絵里と花陽が顔を隠して下を向いてるけどなにかあったのか？

ま、いつか。

「でもな、一番かわいいのはな……」

「はい……」

「ベッドの上の絵里なんだよ。やつぱりベッドの上の絵里はいいぞ？ かわいがってやる
といい声で喘ぐんだよ！ それがおれのおれ（意味深）とかおれの性欲をさらに活性化さ
せてくれるんだよ！ あの柔らかい唇もいいもんだぞ！ あの感触は最高だな……うん。
そしてやつぱり絵里のお……「てやああああああ!!」……ぐほおおお!!」

なつ、急に隣から攻撃されたぞ!?

いてえ、脇腹痛い……

「え、絵里っ！ なにするんだよ！」

『『なにするんだよ』 じゃないわよ！ なんてそんなこと話すのよ！ // // //』

「いやあ、春人に家での絵里のかわいさをだな」

「教えなくていいのっ！ // // //」

「そんな恥ずかしがる絵里もかわいいよ」

「も、もう……バカッ…… // // //」

ああ〜やっぱりかわいいなあ〜!

この照れて顔をそらすとかまじかわいいんだよっ!!

「で、そっちのベッドの上は?」

「なっ……// //」

「どうなんだ? もちろん夫婦なんだ……1回や2回ぐらいやってんだろ?」

「ま、まあ……そりゃあ……」

「ほーらやってんじゃん!で、どうだった?」

「ど、どうだったと言われても……」

「………気持ちよかったか?」

「………はい……// //」

「ははは、そうだろうな!おれも絵里とやるときはむっちゃ気持ちい……バカアアアアア

アア!!」……ぐほおおお!!」

「うわっ、また!」

くそお……また脇腹に愛しの妻絵里からパンチがとんできた……

「またかよっ!この会話のどこがダメなんだよ!」

「ダメに決まってるでしょ!!もう、怒ったわよ!お酒はもう注文したらダメよ!」

「そんなあ!!あんまりだよ絵里っ!お許しを〜!!」

「ダメっ！」

絵里はそう言っておれから酒を取り上げた。

「絵里い〜」

「も、もう、そんな目をしてダメ！もう飲んじやうからね！」

「そんなあ〜……あんまりだよ……」

おれのうる目攻撃は絵里に効果はなかったようだ。

しかも絵里におれの酒飲まれちゃ……っ……た……あ……

「ナオキさん、ナオキさんのお酒って結構キツイ方のやつなんじゃ……」

「うん、絵里大丈夫かな……？」

絵里っておれよりは弱いし……もしかしたら一口で酔っちゃうことだって……

「花陽ちゃんは大丈夫……？」

「うん、まだ平気だよ？でも……」

「でも……？」

「春人くんもナオキくんみたいに堂々としてよ！」

「えっ……うん、ごめん」

「謝るぐらいなら堂々と私の愛を叫んで！日本酒おかわりお願いします！あとご飯も

！」

「へい、かしこまりました！」

春人も大変そうだなあ………

あれ、さつきおれ褒められたのかな？

てか花陽、ちよつと酔っ払ってきてね？

~~~~~

「日本酒とご飯入りま〜す！」

「あいよ！かしこまつ☆」

俺はこの店の店主の岡薫だ。わかかわる 仲のいい友人からは「お薫」とか呼ばれる。

今日、うちの店に恐ろしい客が来ている。

なんとそいつは来てからずっとご飯を注文してきやがる。しかも大盛りで。

くそつ、なんなんだあいつはつ!!

しかも3杯目ぐらいからちよつとずつ盛って出してるんだぜ？

それでもヤツはおかわりしてきやがる……！何回炊いたと思ってるんだっ！  
くそっ、こうなったらタイムマンだ!!

ヤツがくたばるまで、ご飯を盛りながら出すまでだっ!!!

「ご飯大盛りと日本酒、持ってけ！」

「はいー！」

覚悟しろよ……

俺の全力をもって、お前の全力を打ち倒す!!!

~~~~~

「お待たせしました〜！日本酒とご飯大盛りです！」

「ありがとうございます！」

「ナオキさん、ご飯の量が注文するごとに増えてるような気がするんですが、気の所為でしょうか？」

「いや、きつと花陽がよく食べるから店員さんが盛ってくれてるんだよ」

「これはまたお礼を言わないと……」

うん、えらいな春人は。

でも気になるのが……

「ナオキいゝもつとお酒」

「絵里弱いのに強いので飲むからだったの……」

「ナオキい……」

うお……うおお……絵里のうる目の上目遣い……!!

これは、効果は抜群だっ!!!

「すみません、日本酒ふた……」ナオキはダメだつて言ったでしょ……1つで……」

「かしこまりました!」

くそつ、どさくさに紛れて酒を頼もうとしたら絵里に止められてしまった。

「もう、ナオキつたら悪いコね……そんな悪いコには……」

そう言うのと絵里はおれに近づいてきて、おれの両頬に手を当てて顔を近づけて……

「んっ……!」

「なっ……! // // //」

キスをしてきた。濃厚なやつを。ディープなやつを。

春人は予想外のこと顔に顔を赤くしている。

「んっ……ふはあ……ふふっ、悪いコはこうしちゃうんだから♡」

ああ……やばいです。おれのおれ（意味深）が疼きます。でもここは公共の場なので家でやります。

「流石ですね。こんなところでも……」

「だ、だろ？」

「声、震えてますよ？」

あれ、バレちゃった？あははは……

「はい、日本酒でっす！」

「ありがとうございます」

「ナオキお酒々」

「わかってるわかってる。はい、どうぞ」

おれはお酒をそそいで絵里にその酒器を渡した。

「ありがとう」

絵里はそうニコツとして言う。酒を口の中に入れた。

にしても絵里の笑顔はかわいい。

「春人くうくん」

「は、花陽ちゃん!？」

おっと、花陽もさらに酔ってきたか？

「キスしちや……ダメですか？」

「えっ……いい、今!？」

「だって、絵里ちゃんだってしたじゃないですかっ！」

「で、でもあれは……」

春人がおれに目線を送る。

きつと「誰か（てかおれに）助けて」と言っているのだろう。

だが断る!!!

「絵里、おいで〜」

「ん、どうしたの〜？」

絵里はおれに誘われてくつついてくる。

「キス、しようか」

「えっ、でも2人もいるし……」

「なんだよ、さつきは自分からキスしてきた癖に」

「それは……その……」

ほんとに……愛おしいな……

「絵里……」

そしておれは絵里の名前を呼びながら絵里の肩を掴んで顔を近づけた。

絵里も観念したのか目を瞑り、唇を差し出してキスを受け入れてくれた。

「ちゅっ……」

「んっ……」

そしておれと絵里は優しく唇を重ねあった。

「裏切ったな」と思っついそうな驚きの表情を浮かべる春人と、ジト目でそんな春人を見つめる花陽の前で。

「な、ナオキさん!?!」

「ほら、ナオキちゃんと絵里ちゃんがあんなに堂々とイチヤイチャしてるんだよ!?! 春人くんは悔しくないの!?!」

「え、えっつと……」

おれは絵里を押し倒してさらにキスを続ける。

「だから、春人くん……」

「花陽ちゃん……」

時々唇を離して細めで見つめてくる絵里を見つめて、また唇を重ねたりと続けている。

いつもはこんな人の前ではしないんだけど……酔ってきたのもあるし、春人を困らせてやりたいのもある。

てことでキスに集中します。

「春人くん、私達夫婦だよね？」

「うん、そうだね」

「だからキスなんてしても当たり前だよね？」

「でもね花陽ちゃん、ここはみんなが見てるし……」

「個室だから大丈夫だよ！それにナオキくん達だつて私達の前でもあんなに熱いキスしてるんだよ？」

「そ、それは……」

「ねっ、だから……ししようよ」

「そんなに詰め寄って来なくても……」

「なら早くしてよ……」

「花陽ちゃ……ちゅっ……」…んっ!」

あ、声が途切れたってことはやっどキスしたか……計画通り!

そしておれは絵里から唇を離して座った。絵里は寝転んで「はあ、はあ……」と息を荒くしている。

春人と花陽はしばらく唇を離さずにキスをして、離すと見つめあっていた。

「ほら、そっちもキスした」

「誰のせいだと思ってるんですか!」

「さあ?」

「いくらナオキさん相手でも怒りますよ?」

「ははは、冗談冗談。でも2人を見てみる」

「えっ……?」

春人はおれの言葉に疑問を抱きながら絵里と花陽を見た。

「あつ、寝てる……」

「だろ?」

2人はすうすうとかわいい寝息をたてて寝ていた。きっと酔って暴れて疲れたんだろう。

「あつ、絵里のパンツ見えた」

「ちよっ……!!」

「だって見えたもんは仕方ねーよ。お前見るんじゃねーぞ？」

「見ないですって!!」

春人はそう言つて目を自分で隠した。

「ははっ、おもしろーな」

そう言つておれは絵里のめくれているスカートをしつかりと直した。

「からかわないで下さいよ……もう」

春人はそう言つて日本酒を口に入れた。

「すまんすまん」

おれは絵里の注文した余っている日本酒を飲んだ。

「あつ、絵里ちゃんに言いますよ？」

「いいじゃんいいじゃん、おれ達の秘密ってことで」

「仕方ないですね……」

「ありがとう、春人」

そう言つておれ達は笑いあつて酒を飲んだ。

「ナオキさん、絵里ちゃんとはまだまだ仲がいいみたいで安心しました」

「春人と花陽もな」

「ナオキさん達ほどではないですけどね」

「違いねえ」

「ぷつ……はははははっ！」

「いやあく酒がうまい！」

「そうですね！」

おれ達は笑って酒を飲んだ。

「ん、春人くん……」

「花陽ちゃん……？」

花陽は寝ぼけながら春人の名前を呼んで、春人の膝に頭を乗せた。

春人は微笑んでそんな花陽の頭を優しく撫でた。

「ん、ナオキ……」

「はいはい、おいでおいで」

おれは膝を叩いて寝ぼけていた絵里をこっちに向かせて、頭を膝に乗せさせて頭を撫でてやった。

「家でもそんなことばかりしてるんですか？」

「別にいいだろうっ！」

でもお前らが家でちゃんと仲良くしてるか心配だわ」

「なっ、当たり前じゃないですかっ!」

「はははっ、冗談だつて冗談」

「ややこしい冗談言わないで下さいよ、つたく」

はははっ、春人つてからかいがあるんだよなく昔から。

そういうえば「からかいがい」つて言いにくいよな？

からかいがいからかいがいからかいがいからかいがいからかいがいからかいがい
らかいがいからかいがいからからからカラカラガラガラ……

「っ……舌嚙んだ」

「なにやつてるんですか……？」

「いや、からかいがいって言いにくいなって」

「結構酔ってます?」

「いや、そんなには」

「あははは……」

春人さんよお、お前の言いたい事はわかる。馬鹿だつて言いたいんだろ?知ってた。

「そーいや10人で飲みに行った時に花陽が言つてただけだよ。寂しがってたぜ、花

陽」

「えっ……!?!」

「『最近春人くんが甘えてこないし、私が甘えてもちやんと甘えさせてくれないんです!』ってな……」

「……………」

春人はショックを受けたのか、黙って花陽の寝顔を見つめた。

「でもさ、甘えるのが恥ずかしいなら甘えさせてやれよ」

「わかってますけど……甘えてきても……その……」

「なんだよ、恥ずかしいとでも?」

春人は静かに頷いた。

「はあ……このヘタレが。」

花陽はお前に甘えたいんだよ。だったらちやんと甘えさせてやれ。

しかも恥ずかしいだ? お前から1回でもやってるんだったら恥ずかしいもへったくりもあるか」

「うっ……ごもつともです」

「ほんで花陽はもう1つ言ってたぞ」

「もう1つ……?」

「春人くんは私のこと嫌いになっちゃったのかな?」って」

「なっ……!? そんなことあるわけ……」だけどそう思っちゃまうもんなんだよ。甘えても反応が薄いし、春人から甘えてこなかったらな……」

「もし本当に花陽のことを思うのなら、甘えさせてやれ。それが花陽の為になるし、お前から夫婦の為になる」

「僕達の……為……」

「ああ、だからこれは約束だ。」

帰ったらちゃんと謝って、そして甘えさせてやれ。もちろんこれからもずっとな」

「っ……はい!」

「よろしい……」

おれはそう言っつてそつと酒を飲んだ。

春人はグツと酒を飲んだ。

それからしばらく男2人でゆっくりと話していた。

「うっし、そろそろ帰るか」

「そうですね」

「じゃあ、先に会計済ませてくるわ」

「あ、お金少し払います！いくらですか？」

「いいよお金は。今日はおれからの奢りだ」

「えっ、それは……」

「いいって、たまには先輩らしいことさせろよ」

「……じゃあ、お言葉に甘えて……ごちそうさまです」

「おう。それじゃあちよつと待っててくれよ」

「は～い」

おれは財布だけを持って会計に向かった。

~~~~~

薫です……

ご飯の注文が来ない……



くそつ、来るのか……来ないのか……どっちなんだっ!!

「岡さん!!」

「つ……どうした!？」

「あ、あの客が……あのお客様がつ!!」

「くそつ、またか……」

「いえ……お会計です!!」

「なん……だと……!？」

お会計……?」

と、いうことは……

「俺達は勝ったのか……」

「はい……耐え切りましたっ……!!」

『おおう!』

厨房に歓喜の声が響いた。

よっしや、やったぞ!!俺達は勝ったんだ!!

この店を始めて数十年と数ヶ月と数日と数秒……こんなに達成感のあった日は初め

てだ!!

よし、これからもこの店を頑張っていくぞ!!

~~~~~

なんか厨房が騒がしかったけど気にしないでおこう。

俺と春人はお互いに愛する人をおぶって店を出た。

店を出る時に、店員さん達がすごく満足していて、なにかを達成した感じで『ありがとうございましたー!!!』

って言ってたな……うん、わからん。

「今日はありがとうございました」

「いえいえ、こちらこそ」

「おかげで今日は久しぶりに楽しく飲むことができましたよ」

「ああ、また飲みに行きたいな」

「はい、そうですね」

「それじゃあ、絵里もベッドで寝かせてやりたいからな」

「僕も花陽ちゃんを早く寝かしたいですしね」

「そうか、じゃあな。花陽と仲良く」

「そちらこそ、絵里ちゃんとお幸せに」

そう言つて互いに微笑んで別々の道を歩いていった。

「春人くん……?」

「花陽ちゃん、起きた?」

「うん……つて、ふええ!?!おんぶされちゃつてるのお!?!」

「う、うん……花陽ちゃん、疲れて寝ちやつたからね」

「そうなんだ……」

「……その……ごめんね。花陽ちゃんに不安な思いをさせちゃつてたみたいで……」

「春人くん……」

「だから……これからは甘えさせてもらうし、花陽ちゃんもたくさん甘えてね」

「うん！」

「ん、ナオキ……？」

「おお、起きちゃったか？もうすぐ家に着くからな」

「うん……」

絵里は静かに頷いておれにもたれかかった。

絵里の2つ膨らみが当たってます、はい。柔らかいです、はい。ヤヴァイです、はい。

春人に言ったけど、おれはちゃんと絵里に不安な思いをさせてないかな……？

おれはそう思つて顎を肩に乗せていた絵里に言った。

「愛してるよ、これからもずっと」

「ふふっ、私もよ」

「それなら今日は、そのアカシ……つけていいか？」

「うん、私……今日はナオキが欲しい……」

2人の考える事は一緒なんだな……

このあと家でむっちやS〇Xした。

第129話 「ゼロからの愛」

「ナオキ、今日はテスト最終日でしょ？ 帰りは早いの？」

「いや、ちよつと用事あるから帰るのは夕方かな？」

「……………そう」

「んじゃ、いってきます」

「いってきまーす！」

「いってらっしやい……………」

絵里はナオキと亜里沙を玄関で見送った。

大学の今日の講義は始まるのが遅いためまだ家を出ていない。

「……………ナオキ、私に話せないことでもあるのかしら？」

絵里は悲しそうな目で玄関を見つめながら一人そう呟いた。

音ノ木坂学院……

「終わったあ〜！」

ナオキは帰りのH Rのあとに体をのばして言った。

「そうだね〜！これで家でゆつくりできるよ〜」

穂乃果も体をのばして言った。

「ナオキはどうなのですか？」

「ああ、数学は多分、おそらく、きつと、いけた気がする」

「そうではなくて、”あのこと”です」

「ああ……ボチボチかな？」

「でもだいぶ上手くなってきたよ〜」

「それはよかったですね」

「ほえ？何の話？」

「覚えてねーのかよ……」

ナオキは頭に『？』を浮かべる穂乃果を見てため息をついた。

「前にも話したじゃないですかっ！………のことですよ」

「ああ、そのことかあ！」

穂乃果はポンと手を叩いて言った。

「ははは……じゃあ行こっか」

「そうだな。じゃあ2人ともまたな」

「はい、また月曜日に」

「またね〜!」

海未と穂乃果は一緒に教室を去っていく2人を見送った。

その2人こそ……………

ナオキとことりである。

くらぶライブ！（ナオキ・ことり）く

「どうしたんえりち、相談事って?」

あるカフェの一席に向かい合わせで絵里と希は座っていた。

親友である2人がこうして会うのは久しぶり。主に絵里も大学の講義で忙しく、希との予定が合わなかったのが理由である。

「実は……ナオキの事なのだけれど……」

「ナオキくんの……?」

希は内心、相談事があれば恋人であるナオキにすればいいのではないかと思っていた。だが、そのナオキの事で相談があるのであれば仕方ないと納得した。

「ええ……実は……ナオキが私に隠し事してるみたいなのよ……」

「隠し事……?」

「ええ……最近部活とかなない日でも帰りが遅いし、それに理由を聞いてもいつもなにか隠すように話してるし……」

「ふくん……」

「だから希……占ってもらえるかしら?」

「それぐらいお安い御用やん!」

そう胸をはって言った希はタロットカードを広げた。そしてそのナオキの隠し事に
関連するものを占った。

絵里はジーツとタロットカードを見つめた。
すると結果が出たのか希はフツと微笑んだ。

「どうだったの……？」

絵里は汗をたらして希に結果を聞いた。

「安心してええみたいよ」

「えっ……？」

「その隠し事は、えりちのことを想ってのことみたいやから」

「私の……ことを？」

「うん、だから待っててあげて」

「……わかったわ……」

「ふふっ、じゃあケーキ食べよ！」

2人はその後店を出て別れた。

希は微笑んで絵里の背中を見つめた。

「ほんまに……羨ましいなあ……」

ガチャ……

「ただいま」

「おつ、おかえり。お疲れさん」

「ジーツ……なにか隠してる？」

「えっ……ど、どうしたんだ？別に隠し事なんてないぞ？」

ナオキは帰ってくるなりジト目で見えてくる絵里に困惑していた。

そして絵里の谷間が見え、ナオキは目線を逸らした。

絵里はなぜ目線を逸らすのかとジーツと見つめ続けた。

「ま、いいわ。ご飯作るから待ってて」

「へーい」

絵里は靴をぬいでリビングに向かった。

ナオキは「ふう……」と息をはいてその後を追った。

くラブライブ（ナオキ・絵里）く

「今日も行くの？」

「ああ、夕方までには帰ってくるから」

翌朝、ナオキは微笑んで見送る絵里の頭を撫でて言った。

「うん、頑張つてね」

「ああ、行つてきます」

「行つてらっしゃい……」

お互いが手を振り、ナオキは園田道場へと向かった。

だが、絵里はまだ少し不安であった。

「で、今日もいつものか？」

「いえ、今日は徹底的にやりたいのです！」

「……と言うと？」

「『閉め切り稽古』です！」

「まじで……?？」

「もちろんです！」

海未は目をキラキラさせて言った。

「はあ……嫌なんだよなあ……あれ」

ナオキは肩を落として、道場の窓や扉を閉めた。

時期はもう夏。しかも今日は地球温暖化の影響もあつて例年よりさらに暑い。

そんな中窓などを閉め切つてするのが、『閉め切り稽古』である。

「では素振り100本！」

「おう！」

海未とナオキは防具をつけて素振りを100本した。

それが終わると次に2人は向かい合つて竹刀を構えた。

「よし来い！」

「いきます！やあー！」

「パシン！パシン！パシン！」

海未はナオキに面・小手・胴と攻撃した。

それをナオキもして、また海未・ナオキと入れ替わりでしていった。

「さて、最後の仕上げです！」

「ああ、早く終わらしたいから一気にカタをつけるぜ！」

「「やあー!!」」

「パシン！」

そして2人は一本試合をする。

これが2人のする『閉め切り稽古』である。

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

そして2人は息を荒くして、汗をダラダラとたらしながら向かい合っていた。

「なあ、海未……」

「なんですか?」

「………負けたよ」

ナオキは笑いをこぼして言った。

「ですが流石はナオキです。戦いがいがあります」

2人は笑い合つて、道場の窓や扉を開けて防具をはずして縁側に倒れた。

「久しぶりだったけど、なんとか生きてるな」

「それは大袈裟ですよ……でもやはり疲れれますね」

「はははっ……」

2人は座つて水を飲んだ。

「そういえば、今日はこのあと”本番”でしたね」

「ああ、なんか緊張してきたよ」

「ナオキなら大丈夫ですって」

「そうかな……ははは……」

ナオキは海未を見て笑った。

だが、何かに気づいたのか焦って海未から目を逸らした。

「どうしたのですか？」

海未はその理由がわからず首を傾げた。

そしてナオキが見ていた方を見た。

すると海未の道着が汗で濡れていて、肌が少し透けていた。

「つゝ／＼／＼」

海未はそれに気づくと、カーツと顔を赤くして腕で自分の体を隠すようにクロスにした。

「ハ、ハハハハ……破廉恥ですう!!!／＼／＼／＼」

「ぐほお!!」

海未はキツとナオキを睨んで全力の右ストレートをくらわせた。ナオキはそれをくらって後ろに回転して吹き飛んだ。

「……シャワーを浴びてきます」

海未はフンと言って立ち上がり、シャワーを浴びに行った。

「……痛い……」

ナオキは道場の天井を見て言った。

そしなにかを考えるようにジーツと天井を見つめた。

「いよいよ今日か……」

くラブライブ！（ナオキ）く

絵里は希とにこ………^々sの一員として、限られた時間を共に過ごした3人で久しぶりに出かけていた。

「うくん、やっぱり少しキツくなっちゃったわね〜」

「えりちもなん？うちもなんや〜」

3人はシヨップینگモールの女性用下着のコーナーにいた。

絵里と希は今のブラジャーがキツくなっているようで、前より大きめのサイズのコーナーを見ていた。

「ジーツ………」

「ね、ねえ……希？」

「どうしたん、えりち？」

「なんだか冷たい視線を感じるのだけれど……」

「ああ……それはきつと………」

2人は後ろの方に顔を向けた。

「……………なによ」

そこには冷たい視線で2人を見つめるにこがいた。

「いや、別に………」

「にこつち………ないのはわかるけど、そんな目で見つめられても………」

「悪かったわね！胸がなくて！」

にこはそう言うと言とそつぽを向いた。

絵里と希は目を丸くして見つめ合って、そして「ふふつ」と笑みをこぼした。

「なに笑ってるのよ！早く買ってきなさいよ〜!!」

絵里と希が会計を済ませた後、3人でご飯を食べてからまた遊び、そして帰路についた。

希と別れた絵里とにこは雑談をしながら歩いていった。

「ねえ、にこ………」

そして、絵里は足を止めて弱ったような声で言った。

「なに？」

にこも足を止めてなにかと問う。

「その……最近ナオキが私に何か隠してる気がするのよ」

「へ、へえ〜」

「私、どうしたらいいのかしら?」

にこはそう言う絵里を見てため息をついた。

「どうしたらいいものにも、はつきり話させればいいじゃない」

「でもそれってどうすれば……」

「も〜絵里らしくないわね!」

「えっ……?」

にこが絵里に人差し指を向けて言うのと、絵里は驚きの表情を浮かべた。

「あんなに強気だった生徒会長の絢瀬絵里が、そんな弱気でどうするのよ!」

「で、でも……」

「だーかーらー!そういうウジウジしてる絵里が気に入らないのよ!」

そんなのね、あいつに堂々とガツンと言ってやればいいのよ!」

「(にこ)……!」

絵里は目を丸くし、うるうるときかせていた。

「そうとわかれば早く帰れば!」

にこは照れを隠しながら手を仰いで、早く帰るように促した。

「……うん、わかった。ありがとうにこ！」

そう言い残して絵里は走って帰っていった。

そしてにこはある人物にメッセージを送った。

『あんた、ちゃんと謝りなさいよ』

そしてにこは「はあ……」とため息をついて、帰宅していった。

「ただいま〜」

絵里は恐る恐るドアを開けた。

夕方、そろそろナオキが帰ってくるだろうと思っていたが、玄関にはナオキの靴があった。

絵里は亜里沙の部屋を覗くが、いない。

「あ、そういえば今日は穂乃果の家に泊まりにいつてるんだっけ」

そう思い出して、念のために自分とナオキの部屋を覗くが、ナオキの姿はない。そしたらリビングにいるんだなと絵里は思い、リビングに向かった。

ガチャ……

絵里はそつとリビングのドアを開けた。

「ん……おつ絵里、おかえり」

「た、ただいま……」

そこにはやはりナオキがいて、絵里に気づくとソファから立ち上がった。

「早かったのね」

「絵里こそ、お出かけか？」

「うん、希とにことね」

「なんだか懐かしい面々だな」

「そうね……（よし、私なら言えるわ……落ち着くのよ絢瀬絵里……強気に……強気に……）」

「絵里、腹へつただろ？ご飯にするか。俺も昼飯食ってないから腹へつたよ」

「えっ……？」

絵里はそう言つて笑うナオキに目を丸くした。

「ん、もしかして絵里は腹へつてないか？」

「う、ううん、私もいっぱい遊んだからお腹すいたのよ。待ってて、すぐに支度するから」
そう言って絵里はエプロンを取ろうとした。

だが………

「いや、待ってくれ」

「ん、どうしたの？」

絵里を止めるナオキ………

「絵里は………作らなくていいよ」

「えっ、どういうこと……?」

絵里は自分の料理はいらぬのかと不安になる。

その不安も、すぐに解消された。

「その……作って……みたんだ」

「えっ……?」

そしてナオキは歩いて台所に向かった。

絵里もそのあとを追うと、コンロの上に底が深い鍋が置いてあった。

ただよう匂い……………

洗ったばかりの調理器具……………

「えっ、でも……………だって……………」

「ああ、ずっと練習してたんだ……………」

料理の……………」

ナオキが鍋の蓋をはずすと、そこには完成したカレーが入っていた。
絵里は驚きを隠せなかった。

「これ……ナオキが作ったの？」

「ああ……………」

「一人で……………？」

「ああ……………」

「最初から？」

「ああ、最初から……………」

「ナオキって料理、全然ダメだったでしょ？なんで……………」

そう、ナオキは料理は苦手、ダメダメであった。

「いやあく話せば長くなるから掻い摘んで言うのだな……………」

ずっと料理の練習してたんだよ。

基礎からしっかりと……………ゼロだった料理スキルを頑張って上げたんだ。

絵里に手作りの料理を作ってあげるために……………」

「私の……………ために……………」

これで絵里はこれまでのことに納得がいった。

ナオキの帰りが普通より遅いこと……

ナオキがいつもなにかを隠していたこと……………

希が自分のことを想ってナオキが隠し事をしてるといふこと……

全てはこのためだったのだと。

気づくと、絵里の目からは涙がほろほろと流れていた。

「え、絵里!？」

「うっ……………もう……………心配だったんだからねっ……………うう……………」

「……………ごめん、絵里……………」

ナオキは絵里の目から流れる涙を左手の指で取った。

だが、絵里はその指に違和感を覚えた。

そして指を見ると、絆創膏が貼ってあった。

「つ…………ちよつとナオキ！この絆創膏は…………!?」

絵里はナオキの手を持って驚いたように言った。

その手の指には何枚もの絆創膏が貼ってあった。

「あ、ああ…………野菜とか切る時にちよつと切っちゃつてな…………はははは…………」
「もう…………馬鹿なんだから…………」

そう言つて絵里はナオキの手をギュツと握つて、声を震わせて言った。

ナオキはそんな絵里の頭をやさしく撫でた。

「さ、食べようか。少し温めなおさないだけで」

「うん！」

絵里は涙を少し残しながらも笑顔で言った。

「よし、準備できたな」

「ええ、じゃ…………いただきます！」

「召し上がれ」

絵里はスプーンを手に取り、皿からカレーライスをすくって口の中に入れた。

「ど、どうだ……?」

ナオキは不安そうに絵里に聞いた。

「……美味しい……美味しいわ! ハラシヨ!」

「よかった……」

ナオキはホツと胸をなでおろした。

「辛くはないし、なんだかコクが出てるわね」

「それ、実は隠し味があるんだ」

「隠し味?」

「ああ、絵里の大好きなチョコレートを入れてみた」

「ほんとに!」

「ほんとほんと。」

「どうしてもチョコ入れたくてな、ことりとかにこにそんな料理ないかって聞いたんだ
よ」

「ことりとかにこに!」

「ああ……実は料理のこと、ずっとことりとかにこに教えてもらってたんだ」

「なるほど……」

絵里はその2人に教えてもらえばこれだけ上手くなるのは確かだろうと納得した。

「まあ……なんだ……その……」

ナオキは指で頬をかきながら言うのを拒んだ。

「ん、なに？」

絵里は首を傾げて言った。

「その……不安にさせてみたいで……ごめん！」

ナオキは膝に手を置いて頭を下げた。

「……………」

絵里は黙ったままナオキを見つめた。

「俺はただ絵里を喜ばせてあげたかったから黙ってただけなんだ！」

でもそれで絵里を不安にさせちゃって、心配させたみたいだし……だからごめん！」

ナオキは必死に謝った。

希から絵里に相談されたと聞いて、にこからメッセージで謝るように言われ、絵里に

悪いことをしたと思っただの。

「ナオキ……」

ううん、もういいのよ。

それに、こんなに嬉しい素敵なサプライズをしてもらったら……怒るに怒れないわよ」

「絵里……！」

「さ、ナオキも食べたなら？自分で作ったものがちゃんと美味しいか確かめないと」

絵里はそう言っただけでカレーライスを一口食べた。

「まあ、絵里が美味しいって言ってくれたら美味いだろうと思うけどな」

「確かに、ナオキの作ったカレーからはチョコが入ってるのもわかったけど、もう一つ……しっかりとわかるからとっても美味しいのよ」

絵里はウインクをして言った。

「もう一つ……？」

ナオキはわからず首を傾げた。

「ふふっ……料理にはね、絶対に欠かせない、大事な調味料があるのよ？これは教えてもらってないの？」

「ああ、全然……」

絵里はおかしいと思いつつながら食べていたが、理由がわかるとスプーンを口から離れた。

「あ、なるほどね」

「ん、わかったのか？」

ナオキも口からスプーンを離して言った。

「ええ、多分ことりとには、”それ”がナオキには教えなくても大丈夫だと思ったんじゃないのかしら？」

「で、”それ”ってなんなんだ？」

絵里はふた呼吸ほどおいた。

「それはね……………”愛”よ」

「愛……………」

「そう、愛。作る人の、食べる人への愛が、料理を何倍も美味しくするのよ」

「へく、知らなかった」

ナオキはまた一口食べた。

「だから2人は、ナオキには私への愛が最初から入ってるってわかっていたのかもね」

「ま、まあ……………それぐらい当たり前だ」

「もう、照れちゃって」

「そう言う絵里もだろ？」

そう言つて2人は笑い合つた。

「おかわり……………いるか？」

「うん、お願い」

2人はナオキが作ったカレーをおかわりして、幸せな夜を過ごした。

「よし、できた……!」

「ハラシヨー!ちゃんと完成したわね!」

「ああ、なんとか成功してよかったよ」

「ふふつ、必死に作ってたからきつと美味しいわね」

「ははは、じゃあこれが……」

絵里の分の弁当な」

「これが、ナオキの分ね」

そして2人はにこつと笑い合った。

台所のカウンターには、ナオキが作った弁当が1つ、絵里が作ったのが2つあった。

『なあ、ことり……ちよつとお願いがあるんだけど……』

『ん、どうしたの？』

『その……料理を教えて欲しいんだ』

『料理を……？別に構わないけど、なんで？』

『その……』

絵里にお弁当を作っ
てあげたいから』

次回に続く……

Another way (絵里の誕生日)「2度目の……」

「絵里、誕生日おめでとう」

「ありがとう、ナオキ」

そう言って私達はグラスを合わせる。

今日は私、絢瀬絵里の誕生日。

そして、今は私の最愛の彼氏であるナオキと2人っきりの誕生日会をしているの。

去年もみんななどの誕生日パーティーの後にナオキが用意してくれていたのだけれど、今年が違う。

「こんなところ……真姫に感謝だな」

「ふふっ、そうね」

なんたつてここは、真姫が予約をとってくれた8階建てビルの7階にある高級レストランなんだから！

だから私もちょっとオシャレをしてるの。

黒のロングドレスで、太もものあたりのところが切れていて、肩が顕になっ……その……む、胸も結構見えて……髪型もいつもとはちよつと違う。これは海未と

真姫と3人で歌った『soldier game』のときの衣装と似てるかしら。

ナオキはシンプルに黒いタキシード。ネクタイもちゃんとしているわ……やっぱりかっこいいわね〜！

「これ美味しいな」

「ふふっ、そうね。こんな料理初めてだわ」

私達は2人つきりで食事を楽しんだ。

色んな話をして盛り上がったたり、2人の思い出も話したりした。

あつという間の時間……

気付けば時間はもう21時になっていた。

「なんだ、もうこんな時間か……」

「ほんと、あつという間ね……」

「そろそろ帰るか？」

「ええ」

私達はウェイターさんにお礼を言って家に帰った。

その帰り道……

「いやあく美味かった!」

「もう、ナオキそればっかりじゃない」

ナオキ、お店を出てからずつと「美味しかった」って笑顔で言ってるの。

ふふつ、かわいいんだから……

「しっかし……最近はずかしくなってきたな」

「ええ、結構冷えるわね」

私は体をブルブルと震わせた。

夏はものすごく暑かったのに、今月になってから一気に気温が下がってきた。やっぱり

季節の変わり目だし、体調も崩しやすくなるわね。

すると、冷たかった私の手が温かい手に握られた。

「ナオキ……?」

「寒いんだろ?なら手を握って温めてやる」

ナオキは少し照れながら手をぎゅつと握ってくれた。

「ふふつ、えいつ!」

「つと……どうした?急に引っ付いてきて……」

私はそれが嬉しくてナオキにぎゅーつと引っ付いた。

「だって寒いんだもくん、ふふふっ……」

「つたく……」

私達は手を繋いで、引っ付きながら歩いた。

そして、あるところを通りかかった。

「音ノ木か……」

「なんだか懐かしいわ〜」

私が卒業してから一年、私にとっては少し懐かしい……音ノ木坂学院。

すると……

「そうだ。絵里、何かしてほしいこととかあるか？」

「えっ……?」

「ほら、今日って絵里の誕生日じゃん?ちゃんとしたプレゼント用意できなかったから、

何かしてほしいこととかあるかな〜って」

「う〜ん……」

私は何かナオキにしてほしいことがあるか考えた。

いつも色んなことしてもらってるし……あっ……あっ……!

「そうだ。ねっ、ナオキ、1つお願いいい?」

「ああ、ドンとこい!」

「まずナオキ、ここって何した場所か覚える？」
「ここ……？ああ、よく覚えてるよ」

そう、この場所は……

1年前……

『おれ……絵里のことが……す……好きだ!!!おれと……おれと付き合ってください
……』

ナオキが私に告白してくれた場所……

あの日、ここで私達は恋人となった。

「あのときのことは……昨日のように思い出せるわ……」

「本当は隠したかったんだかな……はははは……」

「なんで？別に隠すようなことなかったでしょ？」

「いやいや、お前アイドルだったろ？だから……」

ナオキは頬をかいて照れくさそうに言った。

「この仕草、かわいいのよね。」

「でも結局バレちゃったけどね。」

「ははは、そうだな……でも今はそれでよかったと思う」

「ふふっ、私もよ」

だって、隠さなかったおかげで、私とナオキも一緒の時間が増えたんだし……ふふ
ふっ。

「んで、してほしいことって？」

「うん、あのね……」

もう一度、告白してほしいの……！」

「も、もう一度!?!」

「ええ……そうよ」

私のお願いは、もう一度告白されること。

3月にはプロポーズされて婚約した。

それなのになんでって思うでしょ？

それはね……そのときの告白って簡単で、あっさりとしたものだったのよ。

確かに嬉しかったけど、やっぱり女の子としてはもつとこう……ハラショー！な告白をされたいわよね！

「まあ、絵里のためならいいけど」

「やった〜！ありがとう、ナオキ！」

さっすがナオキね！

ナオキが咳払いしたから、私はナオキの方を見た。

「あく……絵里、話があるんだけどいいかな？」

「うん、どうしたの？」

「その……こつちに帰ってきて一番会いたかったのは……絵里、お前なんだ」

「私に……？」

「だって絵里はいっぱい遊んでたし、一番離れたくなかった……！」

「ナオキ……」

ナオキ……そんなこと、一言も言っただけ……

「それに、絵里とは結構長い時間過ごしてたしき」

「うん、そうね」

どうしよう……告白されるってわかってるはずなのに、ドキドキが止まらないわ。

「だから……さ、これからも絵里と長い時間を過ごしたいんだ……」

友達としてじゃなく……

親友としてじゃなく……

恋人として過ごしたい……！」

「えっ……？」

ヤバイわ……これ……！

「絵里……おれ……おれ、絵里のことが好きだ！心から愛してる！

だから、おれと付き合ってください！」

キタ〜！何この高揚感！ハラショーだわ！10ハラショー！よ！

「……はい、私の方こそ、よろしくお願ひします！」

そしてしばらくして、ナオキは下げていた頭を上げて私の顔を見てきた。それに、何故か私はドキツとしちやった。

「……これでもいいのか？」

「え、ええ！ありがとう、ナオキ」

「いいんだよ別に。他でもない、絵里のためだし」

「嬉しい……」

「でもなんでまた告白をしてほしかったんだ？」

「だって……ナオキのあのときの告白ってシンプルだったじゃない？だからもう一度してほしいかなって……」

私のもじもじとしながら言った。

「そう、だったのか……」

「で、でも別にそれで不満だったってわけじゃないのよ？ただ……」

私は言葉の続きを言うことはできなかった。

なぜなら、ナオキが私をぎゅつと抱きしめてくれたから……

「ナ、ナオキ……？」

「……ごめんな。やつぱり、あんな告白じゃダメだったか？」

「つ……そんなことないわよ！」

私はナオキに告白されて、想いを伝えられて嬉しかったの！だからそんなことない
！」

「それなら……もつとちゃんと思いを伝えればよかったな。

おれさ、告白なんてしたことなくて、よくわかんなかったんだ。

でも絵里に好きって伝えたかった。

あんな簡単な告白だったと思う……

でもさ……絵里を好きって気持ちは変わらないから……」

「ナオキ……」

ナオキは私をさらにぎゅつと抱きしめてくれた……

「絵里……」

「なに……？」

そしてナオキは私の肩を持って見つめてきた。

抱きしめてくれてたのに離されたのは少し残念だったかな……？

「……………愛してるよ」

「んっ……………」

ナオキはそつと私にキスをしてきた……………

優しい感触……………

離したくない……………

している時間なんてわからない……………

唇を離れたら少し残念で、もつとしたいっていう気持ちになっちゃった……………

「私もよ……………ナオキ……………」

そして私達はまたキスをした……………

次はもつと濃厚なキスを……………

寒かったはずの体はどんどんと熱くなっていた……………

唇を離して、ナオキはまたキスしようとしてきた。
私は人差し指でナオキの唇を押さえた。

「続きは……家でしましょう？」

そして私達は家で………

第130話 「スピカテリブル」

前回のラブライブ！

ナオキくんは、絵里ちゃんに内緒で私とにこちゃんに料理を教わっていた。

そして、そのサプライズは大成功！

ナオキくんと絵里ちゃんの仲はもっと深まった！

そして……その裏側では……

「なあ、ことり……ちよつとお願いがあるんだけど……」

「んん、どうしたの〜？」

休み時間、ナオキはことり話しかけた。

「その……料理を教えて欲しいんだ」

「料理を……？別に構わないけど、なんで？」

ことりがその理由を尋ねると、ナオキは少し照れたように頬を人差し指でかいた。

「その……」

絵里にお弁当を作ってあげたいから」

「お弁当を……?」

「ああ……絵里には朝飯から晩飯まで全部作ってもらってる。でもおれはなにも作ってあげることできない。それが悔しいんだ……だから、絵里に料理を作ってあげたいんだ」

ナオキは真つ直ぐとことりを見つめて言った。

「うん、わかった。ナオキくんの気持ちはよく伝わったよ!」

「つ……ありがとう、ことり!」

「そうだ!にこちゃんにも手伝ってもらおうよ!」

「そうだな!あ、でも絵里にバレないように……」

「あ、サプライズにしたいんだね!」

それなら、少なくとも s メンバーには伝えておいた方がいいかもね」

「だな」

こうして、あのサプライズ計画は始まった。

ことりの家……

「じゃ、まずは料理の基礎からね」

「はいー!」

まず、ナオキはにことこりから料理の基礎を学んだ。

調味料のこと、野菜の選び方、野菜などの切り方、皮のむき方、調理器具のことなどを叩き込まれた。

ナオキはこのことをノートに書き、絵里に見つからないようにこっそりと読み返していた。

そして実践。

ナオキは野菜を切る時に何度か指も切っていた。

「っ……………」

「あ、大丈夫!」

「あんだ、これで何回目よ?」

ナオキが指を切って心配して救急箱を取ってくるこり、にこはにことてまたかと呆れていた。

「なんか切っちゃうんだよな……………いてて……………」

ナオキは消毒液がしみて痛がっていた。

ナオキはいつも料理をこりやにこに食べさせることはなかった。

一度ことりとにこに食べてもらい、味をみてもらった方がいいのかもしれない。
だがナオキはそれを嫌がった。

それは……………

初めて自分の手作りを食べてもらうのは絵里がいいからであった。

ことりとにこはそれを承知の上で、ナオキに料理を教えていた。

ナオキが作っていても、横からアドバイスしたり、次になにを入れてどうするか指示するだけだった。

そしてナオキには、どうしても実行したいことがあった。

「なあ、チョコレートを入れて美味しい料理ってあるか？」

「チョコレート？」

「うくん、色々あるけどカレーなんてどう？」

「カレーに？」

「あつ、そつかく！カレーにチョコレートを隠し味として入れると、コクが出るんだよ」

「へ……………」

「でも、なんでまたチョコレート？」

「いや、その……絵里の好物だからさ……チョコレート……」

ナオキは照れながらそう言うと、ことりとこは笑顔で見つめあった。

そして練習の日々が続いて、ついに本番当日。

希とにこに頼んで絵里を連れ出してもらい、穂乃果に頼んで亜里沙を泊めてもらった。

穂乃果には、あとで亜里沙に事情を説明してくれと頼んだ。
だがそれでは少々不安なので、雪穂にも頼んだ。

そして、サプライズは大成功！

翌朝、ナオキはメッセージアプリでそれをみんなに伝えた。

「ん〜！美味しい〜！」

「うん、いいんじゃない?」

「そうか、よかった……」

ナオキは料理を教えて貰ったことりとにこに、先日絵里に作ったチョコレートを隠し味にしたカレーを作って食べてもらっていた。

「コクも出てるし、なにより愛がこもってるわ」

「うん、教えなくてもちゃんとできてたね」

「そうだ。なんでそのことを教えてくれなかったんだよ」

ナオキは一番大事な調味料、愛を何故教えてくれなかったのかと疑問に思っていた。

「そんなの、教えなくてもナオキならわかっているってわかったからよ」

「うん、ナオキさんの料理を作っている時の顔を見てすぐにわかったよ」

「料理を作っている時の顔で……?」

「そう。ナオキくん、とても真剣に料理してたしね」

「だからことりと相談して、あえて教えないことにしたの」

「なんだよそれ……」

ナオキは肩を落として言った。

「ま、結果オーライだからいいじゃない」

にこは少々ドヤ顔でカレーライスを食べた。

「うん、そうだね！」

ことりが言うのと、ナオキは笑って息を少しはいた。

くラブライブ！（ナオキ）く

そしてナオキが食器を洗ってる間……………

ことりの部屋では……………

「ねえ、ことり……………今度こそ留学するんでしょ？」

「うん、今度こそはね……………」

「そう、寂しくなるわね……………」

にことりは、これからのことりの留学についての話をしていた。

「あのとぎ断つちやったから、今度はちゃんと行こうかなって……………」

「そう……………まあ、しつかりやりなさいよ？」

「うん……………」

ことりは少し寂しそうな目で頷いた。

「それと、ナオキにもちやんと言いなさいよ」

「ほえ？」

ことりはこの言葉にきよとんとした。

留学のことならもうすでにナオキには言っている……だとしたらなんなのか……と

……

「はあ……その顔じゃ、何かわかってないわね？」

「うん、ごめん……」

にこは呆れてため息をついた。

そして……

「あんだ、ナオキのこと好きなんですよ？」

「……………びいつ!？」

ことりの顔は徐々に赤くなっていき、声を発する時には顔をりんごのように真っ赤にしていた。

「その反応は凶星のようね」

「で、でもっ……あのっ……えっと……／＼／＼／」

ことりは顔を赤くして手と首を左右に振りながら戸惑っていた。

「そんなに隠さなくてもいいわよ……」

私も同じだったから……」

「えっ……!?!」

ことりは予想外のにこの台詞に驚いた。

「私ね……6月にナオキに告白したのよ……」

「そう……なんだ……」

「ナオキにOKされないことなんて……わかってた。

でもね、ことり……断られるより、伝えられない方がもつと苦しいのよ?」

「……………」

ことりは反論できなかつた。

まさに、にこの言ったことは自分の気持ちと同じだったからだ。

苦しい……………」

伝えられないから苦しい……………

でも、フラれるとわかっていて告白するのもまた辛いものである……………

「はあ……………」

風がさらう落ち葉をく見守る夜のひかり……………あなうたはいまごろどこにいるの……………」

「えっ……………」

ことりはにこが急に歌を歌い出したことに驚いた。

にこが歌っているのは……………

『スピカテリブル』

ことりのソロ曲である。

スピカは乙女座で、最も明るい恒星の1つ……………

テリブルの意味は恐怖……………

想いを伝えたいが、関係が崩れてしまうのが怖い……………

心の扉を開けてほしい……………でも怖い……………

ことりの今の感情と同じである……………

「……………カギをすてないで……………」

にこそそこを歌うと、ことりに歌うように促した。

「えつと……開けてみくたいのならふくみださなきや、自分を開けたい
ただ恋故に嘆くなら変わらないく……変わりたいのよ……」

ことりは歌い終わるとにこの顔を見た。

にこそ静かに頷いた。

固まった……

「……ありがとう、にこちゃん！」

そう言つてことりは部屋の扉を開けて、キッチンへと足を進めた。

「はあ……世話の焼ける後輩だわ……」

にこは息をはいてそう呟いた。

「よし、これでラストつと……」

ナオキは食器を洗い終わり、体を伸ばした。

「ナオキくん、洗ってくれてありがとうね」

「いいよいいよ。作ったのは俺なんだしよ」

ことりはキッチンで洗い物が終わったナオキに声をかけた。

「でも助かったのはほんとだよ？（ずっと昔から……）」

「……そうか……」

ナオキはなにかあるのだろうかと思いはじめた。

沈黙………

ナオキはなにか話すことがあるのかと思ひ、それを待つ。

ことりは言葉を出そうとするが、なかなか重たい口が開かない。

ことりの頭の中で、あの曲が流れる……

スピカテリブル……

想いはその歌と同じ……………

そしてことりは息を大きく吸って、真剣な眼差しでナオキを見つめた。

「ナオキくん！」

「ど、どうした？」

ナオキはいきなり大きな声を出したことにびっくりしながらも反応した。

「あのね、話があるの……………」

「話……………」

「うん……………私……………ずっと前から……………」

ナオキくんが小さい頃に、東京にいたときから……………!!」

ことりは服の胸のところを掴みながら言う。

少し気を引きかけるも、スピカテリブルという歌が、自らの背中を押す。

「ナ……ナオキくんのこと、好きでした!!」

ナオキは目を震わせてそう言うことりを真剣な表情で見た。

「……………そうなのか……………」

「うん、私…………卒業したら外国に行っちゃうし、そうしたらナオキくんにも会えなくなる。」

それに、この想いを伝えなのまま終わったら、先には進めない気がしたから
「なるほどな…………でも、悪いなこと……………」

おれはお前の気持ちに応えることはできない」

「……………うん、そうだろうね……………」

わかってたよ……………そんなこと……………」

ことりの目からは涙が溢れていた。

「ことり……」

「辛かった……伝わらないってわかってても、伝えなきゃ絶対後悔する……！
でも、怖かったの……」

今までのナオキくんとの関係が壊れるんじゃないかって……

でも、伝えなかった……!!」

ナオキは黙ってことりの言葉を聞いた。

そして、ことりの頭をポンポンと叩いた。

「ことり……よく頑張ったな……」

大丈夫、安心してくれ……

おれはことりとキヨリを置いたりなんかしない。

おれ達のこの関係は、壊れることは、壊すつもりはないから……」

「うう……ありがとう……」

ことりはナオキの体に顔を当てて、涙を流した。

ナオキはお疲れ様という風に頭を撫でた。

~~~~~

ことりもだつたか……

希、にこ、ことり……

みんなおれに想いを伝えてきた……

でも断るしかない……

だつておれには絵里がいるから……

確かに、向こうも断られるとわかつて告白するのは辛いと思う……

でも……

一番怖いのはおれなんだ……

断って、みんなが傷つくのが辛い……………

でも……………

絵里にこのこと言ったら……………？

絵里は……………どういふ風に思うんだろうか？

もしかして……………

傷ついちゃうのかな？

~~~~~

「じゃあ、テストを返します。

おそらく、みなさんはこれが期末テストの最後の教科ですね。

では、出席番号順に取りに来て下さい……………」

先生がどんどんと名前を呼んでいく。

ナオキは緊張した表情で先生を見つめる。

「香川ナオキくん」

「はい!!」

ナオキは名前を呼ばれ席を立つ。

穂乃果、海未、ことりも少し汗を垂らしてナオキを見つめる。

ナオキは教卓の前に立ち、先生から数学のテストを受け取る。

ナオキは点数を見ずに、席に戻る。

穂乃果、海未、ことりもテストを受け取って、ナオキの席に集まる。

「ことりは90点だったよ〜」

「私は86点でした」

「穂乃果は76点!」

「待て!穂乃果が76点だと!」

ナオキは数学が同レベルな穂乃果が76点をとっていることに驚いた。

「穂乃果ちゃん凄いな〜」

「やっぱり勉強の成果があつたのでしよう」

海未は珍しく穂乃果を褒めているようだ。

「穂乃果……」

「ナ、ナオキくん……!?!」

穂乃果は突然両肩を掴んできたナオキに驚きを隠せない。

海未とことりもなにを考えているのか、頬を少し染めている。

「穂乃果、お前……!」

「えっ、ええ……!?!」

クラスの他の女子も「はわわわわ」という感じでナオキ達の方を見つめた。先生はテストを返すのに必死……なはずである。

「お前……」

カンニングしたなら今のうちに言え……!」

『は?!』

ナオキ以外の人達が全員言った。

「穂乃果、確かに点数を取りたいのはわかる。

だがな、カンニングはダメだぞ?」

テストは正々堂々と、自分の力で解かなきゃダメだ。

だからカンニングしたなら今のうちに……今ならまだやり直せる……!」

「むく……!」

「穂乃果……?」

ナオキは下を向いて小刻みに揺れる穂乃果を見て首を傾げた。

「カンニングなんてしてないよ〜!!!」

穂乃果は両腕を激しく振り上げて叫んだ。

「なくんだ、穂乃果がそんないい点数とるわけないって思ってたからカンニングしたのかと思ってたよ」

「それ酷くない？」

ところで、ナオキくんは何点なの？」

「ついに来たか……この時が……!」

ナオキはそう言つて、机の上に裏向きで折つて置いていた解答用紙を手を取つた。

「せめて赤点回避だね……」

「でも今回は穂乃果でも76点なんです! ナオキならきつとそれよりいい点数を……!」

「ナオキくんも海未ちゃんも酷くない?」

そして、ことり・海未・穂乃果はもちろん、クラスの全員が気になるナオキの数学のテストの結果は……!!

「……………41点……………！ギリギリ赤点回避だ！！」

『おおく！！』

ナオキが点数を言うと、教室が歓声と拍手に包まれた。

「穂乃果の方が点数上だけど……………まあ、おめでどう！」

「やったね、おめでどう！」

「なんとか赤点回避ですね」

「ありがとう！あと穂乃果は地味にムカつく」

ナオキは赤点を回避できた喜び、穂乃果達も笑顔でその結果を讃えた。

「あ、平均点は73点です」

『……………』

その時、教室の空気が固まった。

「……………おうまい絵里……………」

でも、平均点よりは結構下回ってました。

「赤点は回避したのは褒めてあげるわ……でも……」

「なんで平均73点のテストが41点なわけ!?!あの穂乃果でも76点よ!?!」

「うう……」

その夜、ナオキは絵里に説教されました。

「ハックション!」

「お姉ちゃん大丈夫?」

「うん……風邪かな?」

穂乃果は人差し指で鼻の下をこすって、いつも通りダラダラした。

次回に続く……

第131話 「3バカといとこ」

「それじゃあ、受験勉強頑張つてな〜」

『は〜い!』

ついに今日は修業式の日だとみんなのテンションは上がっていた。

「テンション上がるにや〜!」

「コラ星空あ!!」

「「……………」」

凜が中庭を走り回って生活指導の先生に怒られるほどに。

「こりゃあ……………あいつ部活遅れてくるかな?」

「でしようね……」

「あははは……あと、穂乃果ちゃんも」

「そうだな……」

穂乃果もまた、騒ぎすぎて生活指導の先生に呼ばれていたのであった。

「ほな、みなさん夏休み楽しんでや〜」

そして、ついに念願の夏休みが始まった。

穂乃果と凜は生徒指導室にてみっちり怒られました。

「つたく……なんで学期末に生活指導くらってるんだよ」

「いめんなさい……」

アイドル研究部の部室で、ナオキは穂乃果と凜に呆れたように言った。

「流石は3バカとうたわれた2人ね」

「3バカ……?」

真姫がため息をついてそう言うのと、マシユは首を傾げた。

「ああ、3バカつてのは卒業したこと、穂乃果と凜を合わせた3人のバカのことだ」

「「へ〜」」

真癒美と瑞希とマシユは声を揃えて言った。

穂乃果と凜は服のむねのあたりを掴んでいた。

「とにかく……今日からはみっちり練習しますよ!」

「「「「「「「「「「「はーい」」」」」」」」」」」」」」」

そしてみんなは屋上に向かった。

「ん……?」

「あれ、ナオキくんどうしたの?」

花陽は立ち止まったナオキを不思議がって言った。

「いや、電話みたいだ。先に行つといてくれ」

「わかりました!」

花陽はそう言つて屋上に向かった。

ナオキはスマホを取り出して、連絡先を確認するとボタンを押してスマホを耳に当てた。

「もしもし? どうしたの奈々おばさん」

『ごめんなさいね、急に連絡して』

電話の相手はナオキのお婆の桜内奈々さくらうちななであった。

「いいよいいよ。でも珍しいね、奈々おばさんから電話なんて」

『そうね。実はね、お願いがあるのよ』

「お願い……?」

ナオキは首を傾げてそのお願いを聞いた。

ガチャ……

「お待たせ〜」

「あ、ナオキくん遅いよ〜!」

「すまんすまん」

ナオキが屋上のドアを開けると穂乃果が言った。

「電話だと聞きましたが、一体誰から?」

「ああ、親戚のおばさんからだよ。ちよつとお願いがあるつてね……
さ、ストレッツチ終わつたら？練習始めるか！」

ナオキは手を叩いて練習を始めるように言った。

今日は修業式ともあつて、なるべく早めに練習を終わらせた。

明日の夏休みからの予定を話して、今日は解散となつた。

「合宿、楽しみだな〜」

「楽しみなのはいいけど、遊ぶために行くんじゃないからな？」

「わかつてるよお義兄ちゃん！」

帰り道、ナオキと亜里沙は話しながら帰つていた。

亜里沙は合宿が楽しみだと機嫌をよくしていた。

「よし、時間もあるし今日はおれが晩飯作るか！」

「お義兄ちゃんが作るの!?!やったー!」

「よし、じゃあちよつとだけスーパ-に寄るか」

「うん！」

ナオキと亜里沙は帰り道にあるスーパ-に立ち寄ることにした。

「よし、こんなもんだろ。亜里沙ちゃん、もう欲しいものとかないか？」

「うん、ないよ！」

「よし、帰るか」

ナオキはそう言つて亜里沙と共にレジに歩き出した。

「お願いしまー……あ、にこ」

「ナオキ、久しぶりね。亜里沙ちゃんも」

「お久しぶりです！」

そこのレジの担当はにこであった。

「そういや3バカのにこはここで働いてるんだったな」

「3バカ言うな！値段上げるわよ」

「そんなことしていいのかよ！」

「ふん、まあいいわ。合計2648円です」

「はいよ、3000円からで」

「はい、3000円お預かり致します。こちら352円のお釣りとレシートになります。

ありがとうございました」

にこはお釣りとレシートをナオキに渡す。

「ありがとう。仕事頑張れよ〜」

「ええ、そつちも練習頑張れなさいよ」

ナオキと亜里沙はレジを去ると、にこは次の客の商品を打ちはじめた。

〜ラブライブ！（穂乃果・凛・にこ）〜

「ただいま〜」

「おかえり、暑かったろ?」

「ええ……ふう、涼しい……」

絵里は帰ってきてソファアにもたれた。ナオキはそんな絵里にタオルを渡し、絵里はそれで汗を拭う。

「今から飯作るし、風呂入ってきたらどうだ?」

「ええ、そうさせてもらおう……」

絵里はナオキに勧められて風呂場に向かった。ナオキはエプロンをして、料理をし始めた。

「あ、そうだ。2人に言っておかなきゃいけないことがあるんだ」

「ん？」

「ご飯中にナオキが口を開くと、絵里と亜里沙は首を傾げた。

「実は今日、親戚のおばさんから電話があったんだけどさ、ある頼み事をされたんだよ」
「頼み事って……？」

「なんかしばらくの間、その人の娘、つまりおれのいとこをしばらく預かってほしいらしいんだ」

「ちなみにその子はいくつなの？」

「えつと……確か今は中2だったはずだから……13歳か」

「その子いつから来るの!？」

亜里沙はいつから来るのか楽しみなのだろうか椅子から立ち上がって言った。

「亜里沙、ご飯中よ」

「うう……ごめんなさい……」

亜里沙はしゅんとして椅子に座った。

「で、その子はいつから？」

「明日だ」

「へえ、明日か〜！」

「ええ、楽しみね！」

「うん！」

亜里沙と絵里はお互いの顔を見て笑い合った。

「……………つて……………明日!?!」

「おつ、絵里いい反応だ」

ナオキは親指をたてて言った。

「そういうのはいいから! 明日って急すぎない!?!」

「ああ、なんか本当は結構前に言うつもりだったけど忘れてたつてさ」

「急すぎるよ! まだ心の準備が……………!」

「ナ、ナオキの親戚が明日来るだなんて……………!」

亜里沙と絵里はまさかの明日来るという知らせに焦りを見せた。

「そんな焦ることでもないつて……………」

ナオキはそんな2人を見てお茶をすするのであった。

「ねえ……」

「ん？」

「本当に明日なの？」

「まだ言ってるのかよ……」

夜、絵里はベッドで隣に寝転んでいるナオキに声をかけた。

「そしたら明日はちゃんと早起きして、服を選んで、お化粧しないと……!」

「なんで会うだけでそこまでするかね?家に帰ってきたら化粧おとすだろ?」

「別にいいでしょ!身だしなみはしっかりしないと!」

「お、おう……」

ナオキは隣で意気込む絵里を見て、少し驚きを見せた。

「そうと決まれば早く寝ないとね。じゃ、おやすみなさい」

「ははっ……ああ、おやすみ」

ナオキは笑いをこぼしてから絵里にキスをして眠りについた。

くらぶライブ！（ナオキ・絵里）く

翌日……

人も多くなってきた昼頃、ナオキと絵里と亜里沙は秋葉原駅でナオキのいとこを待っていた。

「お姉ちゃん、楽しみだね！」

「そうね……ナオキ！大丈夫かしら？髪とか乱れてないかしら？」

絵里はナオキに心配そうに聞いた。

「ははは……大丈夫だって。絵里はいつも通りかわいいよ」

「あ、ありがとう……／＼／＼／＼」

ナオキが絵里を褒めると、絵里は頬を赤くしてナオキから視線を逸らした。
すると……

「あ、ナオにいー!」

「お、来たか!」

ナオキはいとこが来たのに気づくと、その方向に向かつて手を挙げた。その先から、キャリーバッグを引っ張って走ってくる女の子がいた。

「久しぶり、ナオにいー!」

その子はナオキ達の前で止まると、ナオキを見て微笑んで言った。

「久しぶりだね、梨子ちゃん」

ナオキが梨子ちゃんと呼んだこの子こそが噂のいとこである。

「ナオキくん、久しぶりね」

「奈々おばさんも!」

梨子の後を追って奈々も歩いてきた。

絵里と亜里沙は緊張したような表情をしていた。

「あら、そちらの方々は?」

奈々はそんな2人を見て言った。

「ああ、紹介するよ。」

絵里、亜里沙ちゃん、こつちがおばの桜内奈々さんで、こつちがいとこの桜内梨子ちゃんだ。

奈々おばさん、梨子ちゃん、こつちが義妹の亜里沙ちゃん、そしておれの婚約者の絵里だ」

ナオキは絵里と亜里沙、奈々と梨子にお互いを紹介をした。

「どうも。しばらく娘がお世話になります」

奈々は絵里と亜里沙に向けて頭を下げた。

「い、いえ！こちらこそ」

絵里が頭を下げると、続いて亜里沙も頭を下げた。

「あら、どちらも礼儀正しいわね。いい彼女さんじゃない、ナオキくん」

「いやあ〜」

ナオキは頭をかいて照れたような仕草を見せた。

「ナオキに、しばらくよろしくね！」

「ああ、こちらこそ。梨子ちゃんも2人に挨拶して」

「うん！桜内梨子です。しばらくの間、よろしくお願ひします」

梨子はナオキの言う事を聞き、絵里と亜里沙に頭を下げた。

「ええ、よろしくね。私は絵里よ」

「私、亜里沙！よろしく〜！」

絵里はニコツツとして、亜里沙は手を挙げて言った。

「ふふっ、じゃあナオキくん、しばらく梨子のことよろしくね」

「はい！」

ナオキは敬礼のポーズをした。

「梨子、いい子にしているのよ？」

「わかつてるわよ」

「それじゃあね」

奈々は手を振って車の方に向かった。

梨子も奈々に向かって手を振った。

「さ、梨子ちゃん、おれ達の家に行こうか」

ナオキは奈々が去ったのを見送ると、梨子の方を向いて言った。

「うん！」

梨子も笑顔で頷いて、ナオキ達が歩き出すとその後ろを歩いて行った。

「さ、どうぞで」

「お邪魔します……」

絵里がドアを開けると、梨子は遠慮しがちに入った。

「ま、そんな遠慮しなくていいよ。しばらくはここが家つて思つとけや」

ナオキはそんな梨子の頭を撫でて言った。

「ん……わ、わかった」

「亜里沙、梨子ちゃんに部屋を案内してあげて」

「はい！梨子ちゃん、こつちだよ！」

「は、はい！」

亜里沙が家にあがると、梨子もその後を追つてあがった。

「亜里沙ちゃん、嬉しそうだな」

「そうね……さ、ご飯作らなきゃ！」

ナオキと絵里も家にあがり、リビングに向かった。

ガチャ……

「ナオに……い……？」

梨子は荷物を案内された部屋に置いてリビングに向かい、そつと入った。

「おー梨子ちゃん、どうしたんだ？」

ナオキはソファアに座っており、梨子に気づくと手を挙げて言った。

「その……あんな一部屋借りてもいいのかなって……」

「ああ、別にいいよ。誰も使ってなかったし、梨子ちゃんもお年頃の女の子だしな」
「短い間だけど、あの部屋を自由に使ってもいいのよ？」

「あ、ありがとうございます！」

「ま、突っ立ってないで座ったらどうだ？」

ナオキは梨子にソファに座るように促した。

「うん！」

梨子はどこか嬉しそうにナオキの隣に座った。

「むっ……」

絵里は不機嫌そうにナオキを睨んだ。

ナオキは視線を感じ、少しビクツとなった。

「そ、そういや、梨子ちゃんはクラブとかしてたっけ？」

「ううん、ピアノ教室に通ってるからしてないよ」

「あ、そういやそうだったな。でもしばらく会わない間に大きくなったな」

ナオキは梨子の頭を撫でて言った。

「そ、そうかな？」

「ああ、最後に会ったのは……おれが中学生の時に梨子ちゃんが大阪に来た時だったし」

「そりゃあ大きくなってるわね。私はそのときは小学生なんだし」
「そりゃそうか」

ナオキは片手で頭を抱えて「はははははっ」と笑った。

「ナオキ、もうすぐできるから食器の準備してくれる？」

「あいよ」

「あ、私も手伝います」

梨子はナオキが立ち上がると自分も手伝おうと立ち上がった。

「梨子ちゃんはいいつて、お客さんなわけだし」

「そうよ。だからゆっくりしてて」

「では、お言葉に甘えて」

梨子はそう言うソファに座った。

ナオキは食器を出すためにキッチンの方に向かった。

「さ、食べて食べて」

「い、いただきます……」

梨子はそう言って初めてのボルシチを口に入れる。

「どう？お口に合うかしら？」

絵里はロシア料理が初めてだという梨子に、自分の料理が口に合うか心配だった。

「ん、美味しい！」

「そう……！よかったわ……」

絵里はほつと胸を撫で下ろした。

「ま、絵里の料理だから美味しいのは当たり前前だけだな……」

ナオキはそう言って料理を口に入れた。

「ありがとう……梨子ちゃんも、いっぱい食べてね」

「はいー！」

梨子が美味しそうに食べる姿を見て、絵里は嬉しくなり微笑んだ。

くらぶライブ！（梨子）く

ご飯を食べ終わったあと、4人はリビングでゆっくりとしていた。

「梨子ちゃんはこの中学校に通ってるの?」

「音ノ木坂中学校に通ってます」

「梨子ちゃんもそうなんだね!」

「え?」

亜里沙が喜んでいると、梨子は少し驚いた。

「亜里沙ちゃんも音ノ木坂中学校卒業なんだよ」

「へえ、そうなんです」

「うん!あ、坂本先生はしってる?」

「はい、今は私のクラスの担任です!」

「そーなんだ!」

亜里沙と梨子はそれから中学校の話で盛り上がった。

「亜里沙ちゃんと梨子ちゃん、話が合うようでよかったな」

「そうね。」

亜里沙、今日は梨子ちゃんとお風呂に入ったら?」

「うん、そうする!」

「えっ!?!」

「さ、行こう梨子ちゃん！」

「ちよ、ちよっと〜！」

亜里沙は梨子の手を引っ張ってお風呂場に向かった。

ナオキと絵里は微笑んでそんな2人を見つめた。

コンコン……

「ん、どうぞ」

ガチャ……

「ナオにい……」

ナオキが自室で作業をしていると、梨子がドアを叩いて入ってきた。

「なんだ梨子ちゃんか……どうかしたのか？」

梨子はドアを閉めて恐る恐るナオキに近づいた。ナオキは梨子に座るように促して、

机の上の物を片付けた。

「その……勉強を教えて欲しくて……」

「ああ、そうか。梨子ちゃんは宿題があるんだったな」

ナオキは受験勉強などに集中させるために夏休みの宿題が出されていないため、思い出したように言った。

「だからわからないから教えて欲しいの!」

「はいはい、わかったから。で、どの教科だ?」

ナオキは梨子を鎮めるような仕草をして言った。

「数学」

「……………」

「ん? ナオにいい?」

梨子は教科を言った瞬間に固まったナオキを見て首を傾げた。

するとナオキは梨子の両肩に手を置いた。

「梨子ちゃん……………」

「う、うん……………」

梨子は声が真剣なトーンになったナオキに驚きながらその顔を見た。

「残念だが、おれには教えることができない……………」

「ええ!?! な、なんで?」

「それはな……………」

「そ、それは……………」

梨子は唾をのみこんでナオキの答えを待つ。

「……………おれは数学が苦手だからだ！」

「……………え……………」

梨子は予想外の答えに目を丸くした。

「すまない……………本当に、すまない……………」

ナオキは悔しい表情をして言った。

「そ、そうなんだね……………し、仕方ないよ！得意不得意は誰にもあるもんね！」

「くっ……………まさか梨子ちゃんに慰められる時がこようとは……………!!」

ナオキは床に片手をついて、もう片方で拳を握って言った。

「はははは……………」

梨子はそんなナオキを見て苦笑いをした。

「あら梨子ちゃん、どうしたの？」

そんな時、絵里が部屋に入ってきた。

「絵里さん……………実はナオにいに数学を教えてもらおうとして……………」

「ああ、大体は察したわ……………でも梨子ちゃん、理系科目はナオキは驚くほど苦手だから頼

らない方がいいわよ」

「なんかそれ傷つくんですけど!？」

「だって本当のことでしょう?」

「ははは……」

梨子はそんな2人を見てまた苦笑いをした。

その後、梨子はしっかりと絵里にわからないところを教えてくださいました。

「それで、ここはこうなるから……」

「あ、なるほど!流石は絵里さんですね!ナオにいとほ違いますね!」

「梨子ちゃんもなんかおれに酷くなってね……?」

ナオキは絵里と梨子の向かいから肩を落とした。

「それはナオキが数学苦手だから悪いのよ」

「まあ、そうなんだけだよ……」

でも梨子ちゃんが来て何事かと思えば宿題だったのか」

「ナオにいとほになにと思つたのよ……?」

「いや、また梨子ちゃんが1人じゃ寂しいから寝れないのかと」

「ナオにいとほに言ってるのよ!そんなわけないでしょ!私もう中学生よ?」

「ははは、すまんすまん。だって昔さ……………」

ナオキは昔の出来事を思い返す……

それはナオキが中学生の時、梨子が大阪のナオキの家に遊びに来たときだった……

「ん……………」

「梨子ちゃん……………」

小学生の梨子は両手でナオキの服の袖をはなさず掴んでいた。ナオキは少し戸惑っている様子を見せた。

「私、ナオにいと寝る！」

「えっ!？」

「だって……………」

梨子はナオキに隠れるようにしていた。

「きつと自分のお家じゃないから怖いのね。それじゃあナオキ、一緒に寝てあげなさい」
ナオキの母親がそう言うと、梨子はばあーつと笑顔になった。

「わ、わかったよ……」

そして今に戻る……

「いやあ……てつきりまたそんなことを言ってくるのかと……」

「言わないからっ!」

梨子は少し頬を赤くしながら言った。

「梨子も成長したようで、ナオには嬉しいよ」

ナオキは親指を立てて言った。

「ナオキ、梨子ちゃんをからかいすぎよ」

「へーい」

「絵里さん……」

梨子は目をキラキラさせて絵里を見た。

「ま、もう今日は遅いし寝なさい」

「では、そうさせてもらいます」

梨子は絵里にそう言われて勉強道具を片付けて立ち上がった。

「梨子ちゃん、夜中に枕持って突撃してくんなよ？」

「しないよ！じゃ、おやすみなさい」

「おやすみ」

梨子は顔を赤くして部屋を出ていった。

「ナオキ、楽しんでる？」

「そりゃあ、梨子ちゃんに久しぶりに会えたからな」

ナオキはそう言って「ははははっ」と笑った。

「むう……」

「え、絵里……どうしたんだよ？」

絵里が頬を少し膨らませるとナオキは少し戸惑いを見せた。

すると、絵里はナオキの胸に飛び込んで顔を埋めた。

「ん……」

「絵里……」

ナオキはそんな絵里をぎゅつと抱きしめた。

梨子はナオキの部屋を出て、自分のために用意された部屋に向かった。

だが、部屋札を思い出して驚きの表情でドアの前に戻った。

『ナオキと絵里の部屋』

「ナオキにいと絵里さんの部屋……!？」

（ナオキにいと絵里さんって一緒の部屋だったの!?!でも婚約してるのなら当たり前だろうけど……まさか……まさか……まさか……まさか……まさか……!!!）

『絵里、今日も……いいか?』

『ええ、いいわよ……来て……』

『絵里っ!』

『あんっ!もう、いつもがつつきすぎよ……あんっ……』

「つていうことが……!／／／／／」

梨子はそんなことを勝手に妄想して顔を真っ赤にした。

「と、とりあえず部屋に戻りましょう」

梨子はひとまず部屋に戻ることにした。

「…………でもやっぱりナオにいが攻めよね？でもでもここはあえて絵里さんが攻めでも……………」

梨子は部屋で一人ぶつぶつと呟いていた。

次回に続く……………

第132話「空」

「梨子ちゃん、音ノ木坂学院に来てみるか？」

「音ノ木坂学院に!？」

翌朝の朝食中に、ナオキは梨子にそう尋ねると、梨子は驚きの声をあげた。

「ああ、梨子ちゃんに会わせたい人がいるんだよ」

「会わせたい……人？」

梨子は首を傾げた。

「ああ、その通り。どうだ？来てみるか？」

梨子はナオキにそう言われ、もぐもぐと口を動かしながら考えた。

「……うん、行きたい！」

「よし、じゃあご飯食べたら準備しろよ？」

「うん！」

梨子はナオキの言葉に元気よく頷いた。

「そう言うと思って、梨子ちゃんのお弁当もちちゃんと作つてあるからね」

「ありがとうございます！」

梨子は向かいのナオキの隣に座っている絵里を見た。

こうして、梨子はナオキと亜里沙と共に音ノ木坂学院に向かうこととなった。絵里はまだ夏休み期間中ではないため、大学に向かった。

音ノ木坂学院……

「おはよ〜」

ナオキと亜里沙が部室に入ると、1年生組と2年生組が挨拶を返した。

「おつ、真姫、ちよつといいか？」

ナオキは髪の毛をくるくるとしながら参考書を読んでいた真姫に声をかけ、廊下に呼んだ。

「ん、なによ？今忙しいんだけど」

「まあまあ、そんなこと言わずに」

真姫は少しだるそうであったが、参考書を置いてナオキの方に向かった。

「で、何の用？」

「ああ、ちよつといところを紹介しようと思つてな」

「うーん。」

真姫は首を傾げたが、ナオキが手を向けた方に梨子がいたため、この子のことかと梨子の方を向いた。

「紹介するよ。桜内梨子、おれのいところでピアノを習ってるんだ」

「は、はじめまして！桜内梨子です！よろしくお願いします！」

梨子は緊張気味に一礼した。

「西木野真姫よ。よろしくね」

真姫は相変わらず髪の毛をくるくるとしながら言った。

「真姫はピアノ弾くのむっちゃ上手いんだぞ？だから梨子ちゃんのこれからに参考になればいいかなって」

「そうなんだ〜！」

梨子は目を輝かせながら真姫を見つめた。

「ねえ、梨子ちゃん……だっけ？一曲弾いてみせてよ」

「ええ!？」

真姫にそう頼まれると、梨子は頬を少し赤くして驚きの表情を浮かべた。

「お〜いいんじゃないか？」

「え、でも……私なんかで……」

「興味があるのよ。貴女がどんな風に弾くのか」

「ほう……」

梨子は自分なんかでいいのかと不安になるが、真姫はそれでも弾いてほしいと言った。ナオキは「実に面白い」という表情で真姫を見た。

「わ、わかりました！お願ひします」

「それじゃあ、音楽室に行きましょう」

真姫が音楽室に向けて歩き出すと、梨子はその後ろをついて行った。

「あくみんな、全員揃ったら着替えて先にストレッチとかしててくれ。おれと真姫は音楽室に行ってくる」

今部室にいるメンバーにナオキがそう言うのと、みんなは頷いた。そしてナオキも音楽室に向かった。

音楽室……

梨子はピアノの椅子に座り、弾く準備をした。

「じゃあ、弾いてみて。曲は……そうね、貴女の好きな曲でいいわ」

「はい！」

梨子は真姫に言われた通り、自分の好きな曲を弾き始めた。曲名は『空』で、梨子がピアノを好きになるきっかけとなった曲である。

「……………どうですか？」

曲を弾き終わると、梨子は一息はいてそう言った。

「……………」

「……………真姫？」

ナオキはなかなか反応の声を出不さない真姫を不思議に思つて名前を呼んだ。

梨子も心配そうな表情をしていた。

「正直……………驚いたわ。まさかここまで上手いなんてね。でもまだ少し足りないわ……………」

「足りない……………？」

「ええ、ちよつと失礼するわね……………」

真姫はそう言つて梨子の隣に移動してアドバイスをし始めた。ナオキは連れてきてよかつたと笑顔を浮かべた。

「そういえば……………なんでこの曲が好きなの？」

真姫は梨子に思い出したように『空』という曲が好きかを聞いた。

「えつと……………小さい頃にこの曲を初めて弾いたんですけど、その時に思つたんです。『空

を飛んでいるみたいだな』って……だからこの曲が好きなんです」

梨子は懐かしそうに楽譜に触れながらその理由を話した。

「なるほど……つまり、この曲が貴女がピアノを好きになるきっかけの曲って感じかしら？」

「つ……はい！」

梨子は『ピアノが好き』と一言も言っていないのに真姫がそれを見抜いたことが嬉しくて喜んだ。

「なら、その気持ちを大切にしておくことね。これから先、きつと役に立つから」

「はい、ありがとうございます！」

「で、そろそろ私は練習した方がいいのかしら？」

梨子にお礼を言われると、真姫は座っているナオキの方を向いて言った。

「ああ、そうだな。すまないな、急に頼んじゃって」

ナオキがそう言うのと、真姫は少し頬を赤く染めてそっぽを向いた。

「い、いいわよ別に。それじゃ、先に行ってるわね」

「ああ……」

そして真姫は音楽室を出て部室へと向かった。

「さてと、おれも行くか……」

「え、ナオに何も行っちゃおうの？」

ナオキが立ち上がり去ろうとすると、梨子は少し寂しそうな表情をした。

「そりゃあ、おれもShooting Starsの一員だからな。しっかり練習みてやらないと」

ナオキはそう言って梨子の頭を撫でた。

「うん、そうだよね！頑張つてね！」

梨子が笑顔でそう言うのとナオキは微笑み返して、手を振って音楽室を去った。梨子はそんなナオキの背中を見てからまたピアノを弾き始めた。

屋上……

Shooting Starsのメンバーは夏の暑さにも負けじと必死に練習をしている。

ランキングも順調に上がってきており、夏休みの終盤には初ライブを予定している。1年生組はスクールアイドルとして初めてのステージとなるため、一層に気合いが入っている。

「よし、10分休憩だ！しっかり水分補給するように！」

ナオキが手を叩いてそう言うと、全員が疲れたように尻もちをついた。

それを見てナオキは全員に凍らせたタオルとドリンクを渡してまわった。

そして1年生組に渡しに向かうと、1年生組は先程の練習の復習をしていた。

「ここつて……こうでしたっけ？」

マシユは不安な点を一度踊って見せて確認した。

「マシユちゃんまた同じところミスしてるわよ。こここのところは……こう！」

真癒美はマシユの間違いを訂正した踊りを見せる。

「なるほどー！」

マシユはそのところをもう一度踊った。踊り終わると、首筋に冷たさを感じて

「ひゃっ！」という声を出して驚いた。

「はははっ、すまんすまん」

「せ、先輩!？」

マシユが振り向くと、ナオキが冷えたドリンク片手にニヒヒと笑っていた。

「みんな練習に熱心なのはいいけど、休憩中はしっかりと休憩しろよ？無理して体調崩

されても困るしな」

「す、すみません……」

「わかればよろしい。はいよ」

マシユがシユンとして謝ると、ナオキはタオルとドリンクを渡した。

「ありがとうございます！」

「ほかのみんなもちゃんと休憩するようにな」

「「はい！」」

そして、他の1年生組もタオルとドリンクをちゃんと受け取って休憩した。

すると……………

♪

「ん、この音は…………？」

静かな音ノ木坂学院に綺麗なピアノの音が響き、休憩中のみんなは目を瞑って上を向いてその音を聞いた。

「いい音色だね〜」

「この音色…………梨子ちゃんね」

花陽がその音色に聞き惚れていると、真姫がこの音は梨子によるものだと見抜いた。

「梨子ちゃんって…………ナオキくんのいとこの？」

「ああ、そうだ」

ことりは練習前に聞いた梨子のことを思い出して言うと、ナオキは頷いた。

「なんというか…………癒されるね」

「うん、練習の疲れが取れていくみたいだね」

瑞希がそう言うのと、雪穂は汗を拭いて言った。みんな梨子の奏でる音色を聞いて、練習で出た疲れが取れていくように感じていた。

梨子の演奏が終わっても、みんなはまだ先程の演奏の余韻に浸っていた。

みんなは梨子が弾いた曲……『空』に強く感動を覚えた。

「よおーし！みんな、Shooting Stars初ライブに向けて、練習頑張るぞー」

「！！！！！！！！おー！！！！！！！！」

穂乃果がそう言って拳を挙げると、みんなもその後が続いて拳を挙げた。

「……少しでも、ナオにいの役に立てたかな？」

梨子は窓から空、屋上の方を見上げてそう呟いて窓を閉めた。

そして、梨子は休憩がてらに本を読もうとカバンの中からある本を取り出す。その本は薄いサイズで、表紙には金髪の女性が描かれていて、『壁ドン』と書かれていた。

それは昨夜のこと……

梨子は絵里に勉強を教えてもらい、部屋に戻り妄想をしていた。そのとき、落ち着かなくてクローゼットの扉を開いたのだ。そして、その奥にあるダンボールが気になり引つ張り出した。

そのダンボールの中身が気になり開くと、新聞紙によつてさらに見えないようにされていた。新聞紙をはがすと、その下には先程音楽室で梨子が手にした“絵里似”の金髪の女性が写っている表紙の薄い本があつた。

梨子はそのに書かれた『壁ドン』という単語が気になり、その本を読み始めた。読む事に顔が赤くなつていったが、梨子は本を読み続けた。

そして読み終わると満足気な表情を浮かべ、すっかりそのジャンルの虜になつてしまったのであつた。

そして今に戻る……

「うくん、やつぱりいいわね。でもなんでこんな素晴らしい本がアソコにあつたのかな？」

梨子は何故、誰も使っていないなかつた部屋のクローゼットの奥のダンボールの底にこの本があつたのか不思議に思つた。

「そうだ！またナオに聞いてみようつと！」

梨子はその真相をナオキに聞いてみることにして、また本を読み始めた。

「っ……………」

ナオキは突然、ぶるぶると背筋を震わせた。

「……………ナオキ、どうしたのですか？」

海未はナオキが急に背筋を震わせたのでその理由を聞いた。

「いや、なんか急に寒気が来てな」

「夏なのにですか？ 気をつけてくださいいね」

「ああ、わかっているよ……………（なんか、嫌か予感がする……………）」

ナオキは苦い表情をして海未から目を逸らした。海未はそれがわからず首を傾げた。

練習も終わり、ナオキと亜里沙と梨子は帰路についた。

梨子は練習が終わったあとに、Shooting Starsのメンバーからピアノを褒められたので上機嫌であった。

「梨子ちゃん、嬉しそうだな」

「えへへへ、だって〜」

ナオキがそう言うと、梨子は先程のことを思い出して笑顔を浮かべた。

「よほど嬉しかったんだね」

「ああ、そうみたいだな」

亜里沙とナオキは梨子を見て、笑を零して言った。

その日の夜……………

「ナオキにい……………ちよつといい?」

「ん、どうしたんだ?」

梨子はナオキが一人でリビングにいらるところに話しかけた。

「その……………この本のことなんだけど……………」

「本?」

「うん」

ナオキは勉強のことかと思っていたが、梨子が”本のこと”を聞きたいと言ったので不思議に思つて首を傾げた。

梨子は頷いて、背中に隠してあった『壁ドン』と書かれている本をナオキに見せた。

「つ……………!? 梨子ちゃん、それをどこで……………」

「えっと……部屋のクローゼットからだよ」

「あく………そこにあつたんだつた……」

ナオキはその本を見て驚きを隠せず、あつた場所を聞くと頭を抱えてしまったという表情を浮かべた。

「ナオキに、もしかしてこの本って……ナオキにいの？」

「………ああ、そうだ。いいか、その本はあげるから、絶対絵里には言うなよ？」

「え？う、うん！ありがとう！」

ナオキは梨子にそう忠告して、梨子を部屋に返した。

あの本は、実はナオキのものなのである。ナオキが秋葉原の同人誌ショップで、登場人物が絵里に似ているからという理由で買い、絵里と同棲すると決まってから隠したのだ。

「あれ、絵里に見つかりでもしたら……恐ろしい……」

ナオキはあの本が絵里に見つかれば、絵里からどんな目に合わされるか不安なのである。そんな不安からか、ナオキの顔に汗が一滴垂れた。

「ま、梨子ちゃんにあげたから大丈夫だろ」

ナオキは梨子にあげたから大丈夫だと安心して汗を拭き取った。

「ナオキ、どうかしたの？」

「ん、ちょっと練習のことだな。さて、おれも風呂入ってくるか」

絵里が風呂から出てきて声をかけると、ナオキは風呂場に向かった。

その頃、梨子は……

「ナオキに貰っちゃった〜」

梨子はあの本をナオキからもらったことが嬉しいようで、喜んでいた。

「こういう本ってどこで売ってるのかな？ やっぱりそういうお店に行かないといけないのかな？ あ、そうだ。ナオキにメッセージアプリのアカウント聞いたし、それで聞いてみようって」

梨子はスマホからメッセージアプリを起動して、ナオキにああいう本はどこで買えるのかとメッセージを送った。

リビングではナオキのスマホのバイブレーションが鳴り、そのメッセージが受信された。

絵里はその内容を見ることはなかった。

次回に続く……

Another way (UAI0万突破記念)「私を想ふ貴方の気持ちの大きさは」

ある秋の日、 μ 、 s のメンバーは練習を終えて下校していた。

「そう言えば、ナオキくんまたあの問題間違ってたよね〜」

「うっ……!」

穂乃果が数学の授業でのことを言うと、ナオキな顔を歪めて目線を逸らした。

「はあ……すっかりして下さい。これはもう、勉強会をして徹底的に指導するしかありませんね」

海未はそんなナオキに呆れたように言った。

「ええ、めんどくせえ……」

ナオキはそれを聞いて肩を落とした。

「なにが面倒臭いのですか?! 私は、ナオキのことを思っているのですよ!」

「うう……」

海未が怒鳴って、ナオキがしょぼんとすると、他のみんなは声を出して笑った。

1人を除いて……

「……………」

寂しそうで、どこか思いつめていそうな表情をしてナオキ達を見ている、ナオキの彼女でもある絢瀬絵里。そして絵里は楽しそうに笑うナオキから目線を逸らして下を向いた。

ナオキは何かを感じて、そんな絵里に目を向けた。

「絵里……………」

U A 1 0万突破記念

「私を想ふ貴方の気持ちの大きさは」

「ハラショー！」

ある日の土曜日、東京駅で絵里はある物を見て目をキラキラとさせてそう言った。

「絵里、写真撮るか？」

「うん！」

ナオキが私物のデジカメを見せて言うと、絵里は元気よく頷いた。

その姿はまさに初めての物を目の前にして興奮している子供のようであった。

「いくぞ〜……はいチーズ」

パシャツとカメラがシャッターをきる音を立てて、この旅初めての写真が撮られた。ちなみに今のは、『この度』と『この旅』をかけていて……

「ふふっ、ありがとう」

「絵里、嬉しそうだな」

ナオキはお礼を言って近づいてくる絵里に言った。

「だって、初めての新幹線よ？そりゃあテンション上がるわよー」

そう、絵里が今まで嬉しそうにしていたのは初めての新幹線を目の前にしているからだ。

「ああ、喜んでもらえてなによりだよ。さ、そろそろ乗ろうか」

「ええー！」

ナオキは絵里が返事すると、乗車券に書いてある号車の車両に乗り込もうと歩き出した。

「……ん、どうした？」

だが、ナオキは止まって振り向いて、歩く様子を見せない絵里に不思議そうに聞いた。

「……………手、繋いで」

絵里が少し頬を膨らませてキャリーバッグを持っていない手を出してそう言うと、ナオキはしばらくそんな絵里をじーつと見つめた。

「……………ふっ、わかったよ」

そしてナオキは優しそうな表情を浮かべて絵里の方に歩いて絵里の手を握った。すると絵里は嬉しそうな表情を浮かべて手を握り返して、2人は今度こそ車両に向けて歩き出した。

新幹線内では、指定席に座ったナオキと絵里が雑談をしたり、外の景色を見ながら旅を楽しんでいた。

「ふう……………落ち着くなく」

ナオキは椅子にもたれかかって一息ついた。

「ふふっ、これもナオキが『映画村特別ペアチケット』を当てたからね」

「いやあくそれほどでも」

ナオキは絵里にお礼を言われて自分の後頭部を撫でた。

それは数日前、2人が商店街を訪れた時のことだった……

「ねえナオキ、あそこでくじやってるみたいよ」

「ほう……『新井式回転抽選器を回して景品を当てて日本国内にペア旅行に行こう！』か……」

ナオキは絵里が指をさした方を見て、そこにあつたのぼり旗の文字を読んだ。

「新井式回転抽選器……？なにそれ？」

絵里は聞きなれない単語に首を傾げた。

「ああ、取っ手を持って、ぐるぐる回すと中から玉が出てくるやつだよ」

ナオキは新井式回転抽選器を回す仕草をしながら言った。

「ああ、あれのことね！よく知ってたわね？」

「だ、だろく？（本当は図書委員さんに教えて貰ったなんて言わないでおこう……ちよつとぐらい絵里にいい格好させてくれ……）」

「それじゃあ、ナオキ！お願いね！」

「おっしや！」

ナオキは腕を回してやる気満々で向かい、先程お願いされるときに渡された絵里の買い物レシートを見せて、3回引くことになった。絵里はナオキの横から、新井式回転抽選器から出てくる玉を見つめた。

1 回目は白……ポケットトテツシユが当たった。

2 回目は……白。

残るはあと1回……ナオキは唾を飲み込んでから腹をくくって、新井式回転抽選器を回す。

3 回目は……白……ではなく……

「おお！」

2 人は出てきた玉の色と景品を見比べる。

「おめでとうございませう！赤の3等！『映画村特別ペアチケット』が当たりました！」

「やった〜！」

くじ引き場所で待機していた商店街の人のベルの音と共に、ナオキと絵里は飛び跳ねて喜んだ。

そして、今に至る……

「それで、映画村って……なに？」

「知らないのかよ……！」

ナオキは絵里が映画村に行くということ喜んでいたので喜んでいたのに知らなかったのかと少し

笑いながらツツコミをいれた。

「京都つてことは景品に書いてたからわかったけど……他はあまり……」

絵里はそう言つてテヘツと舌を少し出してウイंकをした。

「仕方ない、説明しよう！

映画村とは、京都にある『大人しい足軽』とかの時代劇とかに撮影場所として使われるアトラクションやイベントはもちろん、昔風の建物とかを見るのも楽しめる所なんだ。おれは大阪にいた時に遠足で行つたことあるけど、結構面白いぜ？」

「へへ。ねえねえ、『大人しい足軽』つてどんなの？」

「あれだよ、江戸時代にある足軽が身分とかを隠して奉行となり、悪いやつを成敗する話だ」

「そうなのね。でも時代劇とかに使われるなんて……なんだか楽しみね！」

「ああ、めいっばい楽しもう。」

その……初めての2人っきりの旅行だし／＼／＼

ナオキは絵里がいる方とは逆の斜め上を向いて頬を人差し指でかいて、少し照れて言つた。

「うん／＼／＼」

絵里も頬を赤くして頷いた。絵里は今日は初めての新幹線に乗る日だけではなく、初

めてのナオキと2人っきりの旅行の日であつたようだ。

そんなこんなで2人は古都、京都の地に足をつけた。

「ん〜！ やつと着いた〜！」

ナオキは新幹線から降りて肩を伸ばした。

「そうね〜。 さ、早く行きましょう」

「ああ、 そうだな」

ナオキは頷いて、絵里の手を握つて歩き始めた。最初はナオキが引つ張る感じであつたが、しばらくして絵里が足を早めてナオキの隣まで小走りし、2人は並んで歩いた。

2人はそれから電車を乗り換えて映画村近くの駅で下車し、その駅から映画村まで歩いて辿り着いた。

「ここが映画村だ。懐かしいな〜」

「ハラショー〜！」

ナオキが映画村の入り口を指さすと、絵里は大手門風の入り口に歓喜の声をあげた。

「ま、本当はあつちなんだけど、この券を持つてる人はあの大手門から入るらしい」

「へ〜」

ナオキは大手門の右の方にあつた入り口を指さして、もう一度大手門を指さした。

「さ、早く行こうぜ」

「ええ！」

そうしてナオキと絵里は大手門に向かって歩き始めた。

~~~~~

「ねえねえナオキ！あれやりたい！」

「わかったから引つ張んなって」

絵里はナオキの服の袖を引つ張って、ある場所を指さした。ナオキは足を進めてその場所に向かう。

2人は大手門で当たった券を見せると、江戸時代風の服装をしたスタッフの人達が「来たか」という表情を浮かべて、2人の服にハート型のバッチを付けた。2人はその説明を受けずに荷物を預けさせられて、門をくぐらされて、今に至る。

「あ、いらつしやいませ！『的あて』をご利用ですか？」

「はい、お願いします！」



江戸時代風の服を着たスタッフの女の人が横から出てきてそう聞くと、絵里は返事をした。

たがその人は答えた絵里の服を見て、フツと笑みを零した。ハート型のバッチを見たのだろうか、スタッフは続けて言った。

「あ、お客様方は、特別なおお客様、のようで……お客様は弓の引き方はご存知でしょうか？」

「い、いえ」

スタッフにそう言われて、絵里は首を横に振る。

「そちらの……お客様はご存知でしょうか？」

「はい、うろ覚えですが」

次にナオキが聞かれて、ナオキは少し自信がないように答えた。

「それでしたら、一度お教えしますね」

「は、はい」

そう言つてスタッフはナオキに弓の引き方を丁寧に教えた。

「まずはこの真ん中を持って、弓矢の後ろのところを弦に付けて引つ張つて、人差し指を伸ばして、それに弓矢を乗せて……」

「ああ、思い出しました……ふんっ！」

ナオキが先に吸盤が付いている弓矢を発射して、真ん中に命中した。

ナオキは喜んで絵里の方を見るが、絵里はどこか寂しそうな表情を浮かべていた。

「ん、どうした？」

「べ、別になんでもないわよ。ナオキはやっぱり上手ね」

ナオキが理由を聞こうとすると、絵里は誤魔化すようにナオキを褒めた。それを見たスタツフは、「計画通り」という表情を浮かべた。

「じゃあ、今度は彼女さんに優しく教えてあげて下さい」

「えっ？」

スタツフがニコツとしてそう言うと、ナオキと絵里は目を丸くして驚いた。スタツフはナオキに「さあさあ」と早く教えるように言った。

「……絵里、失礼」

「ナオキ……!?!?!」

ナオキが絵里後ろにまわって机の上の弓を取ると、絵里は驚いて顔を赤くした。

「いいから……ほら、弓持って」

「う、うん……」

絵里はナオキに言われた通りに弓を持つと、ナオキは絵里の弓を持っている手に自分の手を覆い被せた。

「次に弓矢を……」

絵里は頬を赤く染めながらも弓矢を持って弦に付けると、やはりと言うべきか、ナオキはその手に自分の手を覆い被せて弓矢を引いた。絵里は弓矢をナオキと一緒に引く張ると、人差し指を伸ばして狙いを定めた。

「あ、ちよつと上の方に向けてた方がいいぞ？その方が狙いやすい」

「わ、わかつたわ……」

絵里は頷いて狙いを少し上にずらした。そして、2人は息ぴったりと同じタイミングで弓矢から手を離れた。その弓矢は見事に真ん中に命中した。

「はははっ、やったな」

「ええ！」

ナオキが絵里の顔を覗き込んで言うと、絵里はそんなナオキの顔を見て笑顔で頷いた。

「お客様方、仲がよろしいですね」

スタツフがニヤニヤとしてそう言うと、ナオキと絵里は顔を真っ赤にした。

「さ、さあ、早く全部やっちゃおうぜ」

「あつ……」

ナオキが残りの矢を撃とうと離れると、絵里は残念そうな表情を浮かべてナオキを見

つめた。

「ん、今度はどうした？」

「う、ううん、なんでもないわ」

絵里は誤魔化すように弓を構えた。そして、絵里の放った弓矢は的を外れてしまった。一方、ナオキの放った弓矢はまた真ん中に命中した。

「むう……」

絵里は少し頬を膨らましてナオキを見つめた。

「絵里、だからどうしたんだよ？言ってみな？」

「え、えくつと……その……ナオキと一緒に撃たないと当たらないくつと……」

「えっ……？」

絵里がモジモジしてそう言うと、ナオキは頬を赤く染めて驚きの表情を浮かべた。

「だから、また、一緒に……して？」

絵里は少し頬を赤く染めて、上目遣いをしながら首を少し傾げた。ナオキにはこうかはばつぐんだ！

「わかった。おれが撃ち終わるまで待つてくれ」

そう言つてナオキはシユパパパと、速攻で残っている自分の弓矢を全て真ん中に打ち込んで弓を机の上に置いて絵里の後ろに立った。

「お待たせ。さ、弓を持って……」

「うん……」

絵里が弓を構えると、ナオキは弓を持つている絵里の手に自分の手を覆い被せた。2人の周りはいチャイチャオーラに包まれていて、スタッフやその光景を見かけた人達が羨ましがるほどであった。そしてその人達はその隣の……つまりはナオキが撃つていたのを見て驚きの表情を浮かべていた。

絵里がナオキと共に放った弓矢は、全て真ん中に命中した。

「やったな。絵里は上手いな」

「違うわ。ナオキが教えるのが上手いのよ」

「はははっ、そんなことねーよ。絵里が上手いからいけたんだよ」

ナオキはそう言つて絵里の頭を左手で撫でた。

「おめでとうございます。まずはこちら、1本だけ外れたお客様の景品でございます」

「あ、かわいい！ありがとうございます」

絵里はスタッフから受け取った景品……小さなクマのぬいぐるみを見つめて、目をキラキラとさせた。

「そして、全て命中させたお客様には……この、エアージェンを差し上げます！」

「エ、エアージェン……？あ、ありがとうございます」

ナオキはその景品を見て苦笑いを浮かべながらもありがたく受け取った。

「あ、よければ景品を持って記念撮影を」

「じゃあ、お願ひします」

すると、別のスタッフがカメラを持ってやってきて2人に記念撮影はどうかと言ってきたので、ナオキは承諾して2人は横に並んで景品を掲げて記念撮影をした。

「ありがとうございます！どうぞ、お楽しみください！」

2人はその場を去って、時代劇などの撮影でよく使われるセットに足を進めた。

「おい、そこのお二人さん。ちよつと待ちな」

しかし、その道中にあるお店のおっさんに声をかけられて2人はその足を止める。

「なんですか？」

「あんたらのそのバッチ……特別なお客様みたいやな。ま、そこに座り」

「は、はあ……」

ナオキと絵里はそのおっさんに言われるがままに、テラス席に座った。

しばらく待っていると、さつきのおっさんがドリンクの入ったグラスを持ってナオキ達の方に向かってきた。

「はいよ、お代はいらねえ。特別なお客様へのプレゼントや」

「こ、これは……?」

「これは、『特製桃色ジュースカップルサイズ』や」

「へ〜カップルサイズ……!」

「……………」

「……………」

「ほい!」

「「カップルサイズ〜!?」」

2人はにこにこしてそのグラスを見つめていると、極めつけにおっさんがハート型に絡まっついて、吸い口が2つあるストローをぶつ刺すと、2人は表情を変えて言った。

「せや。ま、イチャラブして飲みな」

ガハハハと笑ってそのおっさんは店の中に入っていった。そんなおっさんの後ろ姿をナオキと絵里は呆然と見た。

ナオキは視線をそのままの状態ですごい戸惑いを見せた。だが絵里はナオキとは違い、目をうるうるさせてナオキの方を見つめていた。ナオキはそんな絵里の視線を感じたのか、ゆっくりと絵里の方に視線を向けた。

「絵里……さん?」

「ナオキ……一緒に飲みましょ?」

「の、飲みたいけど他の人が……」

ナオキは内心、絵里と巷のよくカップルが飲む方法で飲めるので飛び跳ねているが、やはり周囲の目を気にしているようであった。

「ナオキは……私と飲むの……イヤ？」

「嫌じゃないです。是非飲ませてください。お願いします」

これもまたまたこうかはばつぐんだ！ナオキは自分から頭を下げて絵里とドリンクを飲むことを所望した。

「えへへへ、やった〜」

「じゃあ、飲むか……（飲みたいとは言ったけど、どういう感じなんだろう？）」

ナオキはこれをするのでどのような感覚になるのか少し気になっていた。その気持ちは絵里も同じであった。

2人はストローを咥えてドリンクを吸った。最初は目線をしたにしていたが、ふとお互いの顔を見たことで目線が合った。その瞬間、2人の顔はどんどんと赤くなつていき、頭からボンと湯気を出した。

「や、やっぱり恥ずかしいな／＼／＼」

「そ、そうね／＼／＼」

2人はそう言ってまたドリンクを吸い始めた。だが、吸っているうちに慣れ始めたの



か、2人の表情は和らいでいき、お互いに笑顔を浮かべ、またイチャイチャオーラが放たれるのであった。

「これ……どうする?」

「うん、家でも使う?」

ナオキと絵里はナオキが持っている先程使ったストローを見て言った。

「まあ、2人つきりのときにな」

「うん!」

ナオキは絵里が頷くと、そのストローを袋に入れてカバンにしまった。

そしてナオキはチラッと、おっさんから渡されてカバンにしまったナオキと絵里が仲良く同じドリンクを吸っている写真を見て笑みを零した。

ナオキと絵里はそれから、今度こそ、セット……通称江戸の町に向かった。

そこでは、時代劇で見たことのある建物や、よく忍者が天井裏や床下から室内を覗くシーンで使われる場所もあった。2人はそこを一周して、次にレストランで映画村名物のラーメンを食べ、明治通りを散策し、中央広場にある噴水の近くのベンチに座った。

「ふう……結構歩いたわね」

「そうだな。疲れたか？」

「うん、ちよつとだけ」

絵里はそう言つて腕を前に伸ばした。

「そうか……なら、なんか飲み物買つてくるから待つてくれ」

「うん、わかつた」

ナオキは立ち上がつて自動販売機に飲み物を買ひに向かつた。

絵里はナオキの背中を見て、落ち込むように下を向いた。

「えつと……2つともポカリでいいかな？」

ナオキはお金を入れて、ポカリを2つ買った。取り出し口から出てきたポカリを取ろうとした。

そのときだった……

「えゝなに〜？」

「ナンパ？」

「感じ悪いわね……」

横の方にいた女性達をはじめ、他の人達もなにやらざわざわし始めたのだ。

ナオキは嫌な予感を感じてポカリを持って後ろを振り向いた。

「っ…………!!」

ナオキはその光景を見て大きく目を見開いて、2つのポカリを強く握った。

一方その頃、ベンチに座っていた絵里は……

「はあ…………私って、ナオキの彼女で本当にいいのかしら…………？ずっと気になって仕方ないわ…………折角のナオキとの旅行なのに……………」

絵里がずっと思いつめていたのは、『自分が本当にナオキの彼女でいいのか？』ということであった。

ナオキは明るく、誰でも頼りたくなるような性格なので、他人からの人望もある。もちろん、他の女性からも人気があるのは絵里も承知済みである。

だが、ナオキが他の女性と仲良く、楽しく話していると、『本当は自分以外の人と付き合ってもいいんじゃないか？』とついつい思いつめてしまう。

『自分と話すより、自分と一緒にいるより、他の人と一緒にいる方がいいんじゃないのか？』そんな不安はどんどん膨らみ続ける。

絵里はナオキのことは好きである。これは変わりようのない事実。だが、ナオキはどうなのか？

自分なんかより好きな人がいるんじゃないか？

そうだとしたら自分と付き合うよりは……

そんな葛藤がここ最近続いていた。

「はあ……」

絵里はまた心の中のもやもやを出すかのようにため息をついた。だがそのもやもやは消えない。

そのときだった……

「あれ？ねーちゃんー人い〜？」

「え？」

明らかガラの悪そうな若い男が絵里に話しかけてきたのだ。

周りにはそのツレだろうか、他に2人の男がいた。

絵里は不意だったので目を丸くして驚いた様子を見せた。

「こんなところで1人なんて危ないよ〜?」

「1人より、俺達と遊ぶ方が絶対楽しいよ〜?」

「え、でも……」

「でもじゃなくて、俺達と遊ぼうよ……ねえ?」

そう言つて最初に絵里に話しかけてきた男が絵里に手を伸ばした。

「嫌……嫌よ……」

「まあまあ、そう言わずに……」

その男の手は、どんと絵里に近づいていく。

絵里は目に涙を浮かべ、身を後ろに下げながら首を横に振る。

そして、恐怖で声が出せない中、目を瞑つて助けを祈る。

(ナオキ……! 助けてっ……!!)

その祈りは……

届いた……………！

「おい、おれの彼女になにしてる？」

「「あ？」」

ナオキがその男達に声をかけると、その男達はナオキを睨みつけて声を出した。

「ナオキ……………」

絵里が涙声でナオキの名を呼ぶと、ナオキは笑顔で絵里の方を向いて頷いた。その表情は「待つててくれ」と語っているように絵里は感じた。

そしてナオキは険しい表情に変わり、キツとその男達を睨んだ。

男達はナオキのその目を見て、汗を垂らし、少し後ろに下がった。

「は、はっ！彼氏だあ？そんなん関係ねえ！お前なんかより俺達と遊んだ方が楽しいに

決まってるなあー！」

「そ、そうだー！」

「ふん、んなわけねーだろ。馬鹿かてめーら。そんなことも考えられねーのか？ 彼氏であるおれと一緒にいる方がいいに決まってるだろ？ だからいいか、おれの彼女に手を出すな」

「ちっ……！ 言わせておけばア!!」

すると、最初に話しかけてきた男のダチの一人がナオキを殴ろうと拳を振りかぶってナオキに近づいた。

「あつ、ナオキっ……!!」

絵里はナオキの名を呼んで危険を知らせる。

男達は「ざまあみろ」という表情を浮かべてナオキを見る。

そして、その男の拳は、ナオキの顔面に……

「ヒッ……!!?」

「なっ……!!?」

「ナオ……キ……?」

当たることなく、ナオキに殴りかかってきた男の腕はナオキに掴まれ、代わりに男

に銃口が向けられていた。

「て、てめえ！それはっ……!?!」

「もう一度言うぞ？おれの彼女に手を出すな。さもないと……殺すぞ」

ナオキの向けてきた銃に3人の男達はビビって、戸惑っていた。ナオキの目は……マジだからであつた。

「へ、へっ！撃てるもんなら撃つてみやがれ！」

「そうか？なら撃たせてもらう」

「いや待て待て待て！」

「ん、どうした？撃つてみろつて言つたくせに命乞いか？」

「本当に撃つんかよ!?!」

「撃つき。そうだな……なら選ばせてやるよ。ここでおれに撃たれて死ぬか、大人しく引き下がつて生きるか……どうする？」

ナオキは男達を睨み続けながらそう言うのと、男達はナオキの言っていることが冗談だと思つていたが本気だと気付いた。

「へ、へっ！今日はこれぐらいで勘弁してやるよ！」

「次こそは覚えと……」

その男の捨て台詞をナオキの持つていた銃の撃つ音が遮つた。



ナオキは威嚇射撃として、空に向かって一発撃つたのだ。

「二度と現れんなよ?」

ナオキはもう一度銃口を男達に向けて、奇妙な笑顔を浮かべて言った。

「すみませんでした!!!」

3人はそう言うのと、出口の方に走り去っていった。

「絵里っ!」

「ナ……ナオキっ……!」

「絵里っ!絵里っ……!!」

ナオキは持っていた銃をカバンに入れて絵里の方に向かって走って、ベンチからなんとか立ち上がった絵里を強く抱きしめた。

「ナオキ……っ……ナオキっ!!」

絵里は最初は頭がまだ混乱したような表情だったが、ナオキの温もりを感じると、必死にナオキの胸に顔を埋めて声を出して涙を流した。

「怖かったな……ごめん……!」

「ううん、ナオキがちゃんと助けてくれたから大丈夫。ありがとう」

ナオキが絵里を抱きしめながら頭を撫でると、絵里はまだ目に涙を浮かべてナオキの顔を見上げて言った。ナオキは絵里のその涙を親指で拭いて笑顔を浮かべた。

周りの人達はナオキと絵里を笑顔で見つめて拍手をした。するとナオキと絵里は頬を赤くして照れた仕草を見せた。

「あ、そう言えばあの銃は？」

「ん、ああ、あれはあのとときもらったモデルガンだよ。絵里を助けに来る前に職員の人に使ってもいいかって許可もらってあいづらを脅したんだよ」

「えっ、でもそれがわかったらまた……」

「大丈夫だ。今頃ここに常駐してる警察の人が取っ捕まえてるだろうよ」

「よかった……」

絵里は心配事が解消されたのでホッと胸を撫で下ろした。

しかし、ナオキがさつき見せた今まで見たことのない表情、行動に驚きと疑問を隠せないのはまた事実であった。

そしてその後、ナオキと絵里はスタッフに声をかけられて、普段は戦国や江戸、さらには明治の各時代の衣装を着ることができるところに連れてこられた。ナオキと絵里はその店に着くなり2つの部屋に分かれて入らされ、わけが分からないままスタッフの指示に従って服を着させられていた。

「はい、お疲れ様です。着付け完了です」

「あ、ありがとうございます……?」

ナオキはそうは言われたものの、やはりまだ状況が掴めていなかった。

ナオキは中に水色の薄い着物、その上から黒く袖と足元の方が少し黄色く塗られている着物を着て、紫色の帯をしていた。

「では、説明致します」

「今かよ!」

「これから貴方と彼女さんは記念撮影をしていただきます」

「記念撮影……?」

「はい。貴方がたは、特別なお客様ですので」

ナオキはまた『特別なお客様』と言われて不思議に思った。

「あの、その特別なお客様って……?」さ、外で彼女さんを待ちましょう……あ、はい」

それはまだ解消されなかったみたいだ。しかし、外に連れられるとそれはすぐに解消された。

「これ、歩きにくいですね……」

「はい。でも昔はこれで生活してた人もいますよ?」

「へえ〜」

絵里は水色、薄い青色、そして濃い青色の三重に着物を着ており、濃い青色の着物の袖にはナオキのと同じく、少し黄色く塗られていた。いつもより歩きにくくて苦勞するが、同時にスタッフの説明を受けて感心した。

「さ、彼氏さんが待つてますよ」

「は、はい……」

絵里はまだ「あのこと」が心から取れておらず、少々不安じみた表情をした。

「あ、ナオキ」

「おつ、絵里。やつと来たな。」

あ、今のは、『来たな』と『着たな』をかけていて……」

ナオキがダジャレを言うつと、ひゅ〜つと冷たい風が吹いたようにナオキ以外のその場の全員が寒気を感じて無言になった。

「……ナオキ、寒いわよ」

「（ざ）めんなさい……」

「さ、さあ、気を取り直して記念撮影をしましょう！」

カメラ担当のスタッフがそう言うと、絵里はナオキの隣に歩いて行った。

そして、ナオキの腕を掴んで2人でカメラのレンズの先にあるパネルの前に立った。

そこには……………

『映画村N.O. 1カップル』

と書かれていた。

「え、これって……………」

「ああ、おれも見たときは驚いたよ」

絵里がそれを見て驚いて目を丸くすると、ナオキは自分が初めてこれを見た時のことを思い出しながら言った。

「実は、私共わたくしどもはずっと貴方がたのを見ておりました。あの類の券で入場された”特別なお客様”は、私共で『映画村N.O. 1カップル』に相応しいかどうか決めるのです。

そして、お客様方は見事それに相応しいと判断致しましたので、このような撮影になったのです」

「……………だつてさ」

「そ、そうなのね……／＼／＼／＼」

絵里は嬉しく照れているのか、頬を赤くして斜め下の方を見つめて言った。

「さて、では記念撮影をしますのでこちらを向いてくださいー！」

カメラマンのスタッフが手を振ると、ナオキと絵里は笑顔でカメラの方を向いた。

「なあ、絵里……ーっいいいっか？」

シャッターが何度かきられる中、ナオキは口を開いた。

「どうしたの？」

「絵里……最近なんか思いつめてるだろ？」

「っ……！な、なんでわかったの？」

絵里はナオキに凶星をつかれて、なぜわかったのか理由が気になって聞いた。

「そりゃあ、絵里の彼氏だからな」

「も、もう……／＼／＼／＼」

「なあ、よかつたら話してくれるか？」

ナオキがそう言うのと、カメラマンのスタッフは部品などを取り替えるためにカメラを弄り出したが、本当は2人に話す機会を与えるために部品を取り替えるフリをしていたのだった。

絵里は心の奥の不安をついに口から出した。

「……………そのつ、私ね、ずっと思ってたの……………」ナオキの彼女は私で本当によかったのか”って……………だってナオキは色んな人から信頼されてるし、楽しく話してたし……………だからナオキの彼女は……………私じゃなくてもいいんじゃないかって……………そう考えたら……………私……………!」

絵里はその不安の全てを吐き出して泣き出してしまった。ナオキは絵里がそんな不安を抱えていたのが衝撃的で、驚きを隠せずに絵里を見つめていた。

「そうだったのか……………」

「うん……………」

絵里が頷くと、2人とも無言になってしまふ。だがナオキはすぐに言葉を紡ぐ。

「安心しろ。おれはそんなこと思っちゃいない」

「えっ……………!?!」

「おれがこんなに愛おしく、心から愛したいって思うのは……………絵里だけなんだ。それに、おれがそんなこと思ってたらさ、あのときだってあんなに必死に絵里のこと守らないって。

ま、確かに他の人とも話してて楽しいけど、絵里とは近くにいるって考えるだけでも、ただ隣にいてくれるだけでも楽しいし嬉しいんだ。

だから絵里はおれの彼女に相応しくないわけがない。絵里しか、おれの彼女に……………な

つてほしくない……かな？あはははは……」

ナオキは頬を少し赤く染め、人差し指で頬をかいて言った。

絵里はそのナオキの言葉を聞いて安心したのか、片目から一粒の涙を流した。

「そう……そんなふうに思ってたのね……私、嬉しいわ……すっごく……」

絵里は自分で涙を拭きながらそう言うと、ナオキは優しい笑顔で絵里の頭を撫でた。

「ああ、だから思いつめる必要なんてないんだ。これからも、ずっとおれの傍にいてくれ」

「えっ、それって……」

絵里がナオキの言葉の意味を聞こうとするが言えなかった。それは、ナオキが絵里の頬に優しくキスをしたからである。

「ふっ、だから待っててくれよ」

ナオキは絵里の耳元でそう囁いて、絵里の鼻をツンと突いてからカメラの方を向いて頷いた。それは、フリをして欲しいと頼んだのはナオキで、スタッフにもう大丈夫だと合図をしたのである。

「じゃあ、最後の一枚撮りますよ」

スタッフはそう言ってカメラを構えた。

そして絵里はまだ少し頬を赤くしてフツと笑ってナオキの方を向いてからその腕を



両手で持った。ナオキは感触でそれがわかり、少し驚いた。

「では、笑顔でお願いしますね〜」

ナオキはカメラマンの一言で笑顔になる。

だが、絵里は……………

「ありがとう。私、待つてるからね」

そうナオキの耳元で囁いてからナオキの頬に優しくキスをした。

シャッターはそのタイミングできられたのであった。

そして2人のお互いに向ける愛はついに”永遠の愛”になった……………

Another way (お気に入り300件突破記念)  
「ことばな事件簿〜ポンコツ化通り魔事件!?!」

普段は人通りが多いこの”シベリア通り”も、真夜中となつては人通りも少なくなつていた。

一週間の仕事終わりに飲みに行った帰りだろうか、2人のスーツ姿の男性が喋りながら歩いていった。

「でさ、そいつがギャグ言ったら、空気がシベリア送りにされたわけ!」

「ははははっ、なんじゃそりや!なんて言つてたんだ?」

「つまんなすぎて覚えてねーわ!」

「がはははははっ!」

「そう言えばさ、アイドルの絢瀬絵里って”ポンコツ”だよな」

「ああ、エリーチカだろ?かしこいかわいいエリーチカじゃなくて、ポンコツかわいいエリーチカだな」

「言えてるわそれ〜」

男達はなんら警戒することなく歩き続けた。

それが命取りになるとは知らずに……

チクリと蚊に刺されたような感覚を受けても、その2人は気づくことはなかった。

「……………天誅……………」

お気に入り300件突破記念

「ことばな事件簿～ポンコツ化通り魔事件!?!～」

そしてその事件が”かの探偵”が知ったのはそれから2日後のことだった。

「通り魔事件……………」

「そうなの……………花陽ちゃん」

ソファーにもたれてパイプを啜えているのが、かの探偵……………白米探偵花陽である。そして、その前のソファーに座って手帳を持って話しているのが、シベリア警察のことりポリスである。

「うくん、被害者は？」

「被害者は男性会社員2人。居酒屋から帰るところを襲われたと思われま

「どんな風に襲われたの？」

「それが……………」

「ことりが言いずらそうな仕草を見せると、花陽は首を傾げて頭にハテナを浮かべた。

「それが？」

「……………帰ったらポンコツになってたって……………」

「っ……………なんですって!!」

花陽はテーブルに手をつけて立ち上がって大声をあげた。

「現場からその被害者の自宅の距離は約10分です」

「ふむ……………」

花陽はパイプを咥えて考え込んだ。

そのとき、ことりの携帯の着信音が鳴り、ことりは慌ててそれに応えた。

「はい、ことりポリスです。……………はい……………ええ!!……………はい、わかりました。失礼しま

す！」

「ことりは深刻な表情をして通話をやめた。

「な、なにがあっただんですか!？」

「……また被害者が出たそうです。授業中に急にポンコツになったとか」

「2件目ですか……でも不思議ですね。急にポンコツになるなんて……」

「うん……だから花陽ちゃん、犯人を捕まえるのに協力してっ!」

「うん、協力するよ!ことりちゃんと私との仲だからね!」

「ありがとう!」

ことりと花陽は見つめ合ってぎゅつと硬い握手を交わした。

そして2人はタッグを組んで、残酷な通り魔事件の解決に挑むことになったのである

!

~~~~~  
~~~~~

「……ということで、私とことりちゃんは被害者の状態を見るために、西木野総合病院に訪れているのである」

「花陽ちゃん、何してるの?」

「探偵日記を書いているんだよ!やつぱり探偵なら日記をつけなきゃだね!」

「そ、そうだね……あはははは……」

ことりは妙に目をキラキラとさせている花陽を見て苦笑いを浮かべた。そして病院に入ると、1人の女性が待っていた。

「待ってたわよ」

「ありがとう、真姫ちゃん」

「それで、被害者の病室は？」

「こつちよ、ついてきて」

真姫はことりと花陽を被害者の病室に連れていこうとした。

だが、そのとき……

「真姫ちゃん先生、大変です!!」

「つ……どうしたの、凜!」

そこで看護師を勤めている凜が慌てて走ってくると、真姫は驚いた表情を見せた。

「ポンコツ患者さんの心拍数がつ!!」

3人は凜の衝撃的な言葉を聞いて急いで病室に走った。

そこでは……

「先生……」

「そんな……………」

もう1人の看護師が悲しそうな目で真姫を見て言うと、真姫は絶望したような表情を浮かべた。

「私、署に報告してくるね……………」

「わかった……………」

ことりは署に連絡を入れるために病室を出ると、花陽はゆつくりと被害者の元に歩き出した。

その患者は……………」

息をしていなかった。

被害者は白目をむいていて、口を大きく開けてそこからヨダレを垂らしていた。その顔はまさにポンコツであった。

「…………辛かったでしょうね、ポンコツになって、死んでしまうなんて……………」

花陽は片方の拳を強く握って、帽子を目が隠れるほどに深く被った。

この数時間後、別の男性も死亡。

これを受けて、シベリア警察は「ポンコツ化通り魔事件」の対策委員会を設置。さらに、東京都全体に外出を控えるよう注意喚起し、事件の早期解決に向けて、ことりポリスと白米探偵花陽を中心に動き出した。

「これは私の探偵人生始まって以来の大事案件だよ、ことりちゃん」

「うん、私もこんな大事案件初めてだよ」

2人はことりポリスの運転するパトカーに乗って、死亡した被害者の自宅に被害者の身辺調査のために向かった。

「すみません、こんなときに」

「いえいえ、あの白米探偵花陽さんに、エリートのことりポリスに来てくださって光栄です」

最初の死亡例である被害者男性の妻であるツバサはお茶を出して言った。

「で、早速なんですが……」

「ポンコツになったときの状況ですね？」

「はい、お願いします」



そうしてツバサは被害者男性のその時の状況を語り始めた。

「主人は帰ってきた時は普通だったんです。でも、次の日のお昼頃、急にポンコツになって……最初はただドジしただけかなって思ったんです。でも、ポンコツがあまりにも酷すぎて……そして、今日の朝……うっ……」

「ツバサさん……ありがとうございます。辛かったでしょう?」

「はいっ……ことりさん、花陽さん、絶対に犯人を……主人を殺したやつを、捕まえてください!」

「はい!」

花陽とことりは、ツバサの一言に改めて犯人を必ず捕まえると決心したのであった。

まま犯人の目星もつかず、事件は解決されなかった。そうしているうちに、急にポンコツになる人がまた1人、また1人と出てきてしまう。この通り魔事件関連の死亡者も10人に膨れ上がり、ニュースでも大きく取り上げられていった。

「全然犯人の目星がつかない!被害者の身内も、友人もしっかり調べたのに……なん  
でっ!!」

花陽は自分の探偵事務所の机を思いつきり叩いて頭を抱えた。

「花陽ちゃん……」

「しかも、被害者の共通点も見当たらない！年齢もバラバラ、職もバラバラ……どうしたら……」

「……………あ」

「っ……なにかわかったの、ことりちゃん!!」

ことりがメモを見返してなにかに気づいたような声をあげると、花陽はことりの方を向いた。

「うん……被害者の趣味というか、よく観ているテレビ番組で……………」

「テレビ番組……？っ……確かに被害者が趣味であったり、よく観ているテレビ番組を合わせての共通点がある……………」

「うん、これってもしかして！」

「うん、いけるかもしれない！」

ことりと花陽は事件解決の希望を見つけて喜んだ。

そして、花陽とことりはある場所に急いで向かった。

そこは……

アイドル事務所『ハートビート』……

花陽とことりはその事務所所属のアイドル、矢澤にこ、東條希、絢瀬絵里を尋ねたのであった。

「で、私達になにか用?忙しいんだけど」

アイドルの意識が誰よりも強いにこは忙しくないのに忙しいと嘘をついた。

「まあまあにこっち、暇してたとこやしええやん」

「そうよ。折角あの白米探偵花陽さんとシベリア警察の誇るエリートのことりポリスが来てくれたのに」

「それで、本題に入りますが……」

ことりがそう言うと、3人は真剣な表情でことりを見た。

「まず、最近話題の通り魔事件はご存知ですか?」

「当たり前よ、最近話題だもん。まさか、私達を疑ってるの?」

「ええく!?!」

「いえ、そういうわけではないんです!」

にこが偉そうにそう言うと、希と絵里は驚きの声をあげるが、ことりはそれを否定する。

「ただ、被害者に共通点がありました……」

「共通点……?」

「はい。それは……」

「それは……?」

にこ・希・絵里は答えが気になって唾を飲み込む。

「それは……どの被害者も、貴女がたが出ておられる番組を観ている、もしくはファンなんです」

「えっ……?!」

3人は、花陽から告げられた被害者の共通点を聞いて驚きを隠せなかった。

「っていうことは、にこのファンが何人かこの世からいなくなってるってこと!」

「まあ、そういうことになりますね」

「……そんな……そんなことって……!!」

ことりや花陽の目の前にも関わらず、にこは顔を手で覆って大泣きをする。

希はそんなにこの背中を叩いて同情する。

「それで、一刻も早く事件を解決するためにみなさんの周りの友人関係などの周りとの関係を教えていただきたいんです」

「それぐらいお安い御用よ。ね、2人とも」

「そっやね」

「ええ、早くこの事件は解決して欲しいからね」

「ありがとうございます！」

3人の冷静で、迅速な対応にことりと花陽は頭を下げた。

そして、3人は頼まれたことを1枚の紙に書いていった。

だが、絵里の手がある人物との関係を書くときに止まる。

「どうしたんですか？絵里さん」

「その……この情報は外部には出されませんよ？」

「はい。でも、なんで……？」

「実はこの人……」

絵里が指さした人物にみんなの視線が向いた。

その人物とは……

「香川……ナオキ……さん？」

「はい。この人は私の幼馴染みで……」

絵里は言葉を濁すと、全員の視線は一気に絵里に向いた。

「この人は……私の”許嫁”なんです」

「「ええ?!?!」」

なんと、その香川ナオキという人物は絵里の許嫁……結婚を許された仲なのであった。

「ちよつと、貴女アイドルでしょ!?!なんで……」

「にこ……ごめんさい。でも、これは昔から決まっていたことなのよ……」

にこと希とことりは、信じられないという表情をしていた。

だが、花陽はなにか考え込んでいた。

「花陽ちゃん……?」

ことりはそんな花陽に声をかける。

だが、その言葉に反応はない。

(……絵里さんの許嫁……被害者のポンコツ化……でもなんでポンコツに……? あ、そう言えば……絵里さんは巷ではポンコツと言われている……ふっ、そういうことなんだね……)

すると、花陽はニヤリと笑った。

「花陽ちゃん?」

「ことりちゃん、試したいことがあるんだけど、付き合ってもらっていいかな?」

「うん、ことりは花陽ちゃんの相棒だからね!」

「まさか……わかったの?……犯人が」

「私のカンが……そう言っているんですよ」

花陽はそう言つてテーブルに置いていた帽子を取つて、深く被つた。

「さて、話は変わりますが……」

そう言つて花陽は絵里の方を向いた。

絵里は急に向かれたのでビックリした表情を見せた。

「絵里さんつてポンコツですよね」

「へっ……!?!」

「それだけです……失礼します」

花陽はそう言い残して去っていくと、わけのわからないままことりは一礼をして花陽を追つた。

「何言つてんの、あの子……?」

「さあ……?」

「……?」

3人はわけがわからずにその場に座つたまま首を傾げた。

その日の夜……………

花陽は暑いのだろうか、窓を開けたままベッドで寝息をたてて寝ていた。

すると、風の音とともにドアが開いた。

そして怪しい人影が窓から入ってきた。

その人影は、そろりそろりと花陽のベッドに近づいた。

「……………天誅……………！」

そしてその人影が注射器を構えて花陽に襲いかかろうとした。



「そこまでです……」

「なっ……!?!」

だが、寝ていたはずの花陽がそう呟くと部屋が明るくなった。

「そこまでです！大人しくその持っているモノを捨てなさい！」

すると、ドア前に待機していたことが銃口をその侵入者に向けた。それと同時に、

シベリア警察の精鋭部隊が入ってきて侵入者の周りを囲んだ。

「くそっ……なんだこれっ……!?!」

その侵入者は逃げようとする足が動かずに戸惑いを見せた。

「そこには『ゴキブリホイホイ』を広げています。もう動けませんよ……」

香川ナオキさん……」

「なっ……!?!」

「その反応を見る限り、本当にナオキさんなんです。さ、その覆面を取ってください。も

う隠せませんよ？」

花陽がそう言うのと、侵入者……ナオキは悔しそうに覆面を脱ぎ捨てた。

「なんでわかったんだ？白米探偵さんよ」

「答えは意外にも簡単でした。被害者となった人達は矢澤にこ・東條希・絢瀬絵里のファン、もしくはそのテレビ番組を観ていたという共通点がありました。さらに気になったのは被害者のポンコツになるという症状です。これはおそらくは先程言っていた”天誅”……『絵里さんをポンコツと言うくらいなら自分もポンコツになってみる』ってことなんですよね？貴方は、貴方が心から愛する絵里さんが”ポンコツ”と言われるのが耐えられなかったんですよね？その怒りも絵里さんへの愛が大きいからこそ、だからこんなことを……」

「流石は、白米探偵さんだな……」

ナオキは花陽の推理にお手上げだと頭をかいた。

「そうさ、全部白米探偵さんの言う通りさ。おれの絵里をポンコツっていうやつは絶対に許さない……！聞いててイライラするんだよ……みんなポンコツポンコツって……ふざけんなっ!!なにがポンコツかわいいうエリーチカだ!かしこいかわいいうエリーチカだろうが!!そうだ、絵里はポンコツなんかじゃなくない!あいつらがポンコツと思ってるのは、絵里のありのままの姿なんだ!!なのにつ……!!」

ナオキは怒りをあらわにして狂ったようにそう言った。

「だから白米探偵……お前も……お前にも天誅をくだす!!」

ナオキはそう言って日本刀を鞘から抜いた。

「っ……花陽ちゃん!全員、犯人を捕らえて!」

ナオキが日本刀を振りかぶると、周りを取り囲んでいた警察に取り押さえられた。

「くっ、離せっ!!おれはっ、おれはっ!!」

「もうここまでですナオキさん!」

ことりはベッドに乗ってナオキの顔の近くで銃を構えた。

「くっ……!」

「ナオキさん、貴方の気持ちもわかります。でも、やっていいことと悪いことがあります

!」

「ちっ、うるせーな……おれは絵里のためなら犯罪者にでもなつてやるよ!!」

「そんなことして、絵里さんが喜ぶと思ってるんですかっ?!?!」

「っ……!」

花陽が怒鳴り声をあげると、ナオキは目を丸くして汗を垂らす。

「貴方のやったことは立派な犯罪なんです。だからしつかり、罪を償って下さい……絵

里さんのためにも」

「くっ……おれは、ただ、絵里のためにつ……!」

そんなナオキの後悔の涙は、下に広げたゴキブリホイホイに落ちていった。

(その後ナオキさんは警察に逮捕され、牢獄の中に入っていました。)

絵里さんはショックを受けていましたが、ナオキさんがそこまで自分のことを想っていたのだと知って嬉しくなっていたのもまた事実。

ですが、ナオキさんは牢獄の中で自ら命を絶しました。

そして、ナオキさんが残した遺書には、自分が犯した犯罪を反省し、被害者家族への謝罪、愛する絵里さんへの謝罪文もありました。

絵里さんはさらにショックを受けていましたが、『ナオキさんの分まで生きるんだ』と決意して……)

「花陽さん、行きましょう!」

「はい、戸締りよろしくお願ひします」

「はい!」

(絵里さんはアイドルを辞めて、今は私の大切な秘書さんです!)

「ナオキ、行ってきます……ちゅっ……」

絵里はナオキの写真にキスをした。

白米探偵花陽とその秘書絵里はまた今日も調査に向かうのであった。

もし、あなたもとある人物をポンコツと言うと、ポンコツになってしまう……かも  
しれない。

THE END

～スタッフロール～

白米探偵花陽……小泉花陽

ことりポリス……南ことり

香川ナオキ・絢瀬絵里・矢澤にこ・東條希・西木野真姫・星空凜……本人出演

警察A……園田海未

ツバサ……綺羅ツバサ

その他モブ……色んな人

語り……シベリア

脚本……香川ナオキ

監督……高坂穂乃果

## 第133話 「水着だ！合宿だ！先輩禁止だ！」

「そろそろミーティング始めるぞ。花陽、頼んだ」

「はい！」

練習後、ナオキはみんなを座らせると、部長である花陽にバトンタッチした。

「では、これから」夏合宿 についてのミーティングを始めます！今回行く場所は、前回と同じく真姫ちゃんの家**の別荘**です」

「別荘?!」

「流石は西木野病院の跡取りですね」

花陽が行き先を言うと、瑞希は別荘という存在に驚き、真癒美は流石西木野病院の跡取りだと感心した。

「行ったらびつくりするよ?とくつても、大きいから!」

「ハラシヨー!」

穂乃果が両腕を大きく広げて言うと、亜里沙は歓喜の声をあげた。

「近くに海もあるしね!」



童子が手を叩いて言うと、その場を花陽がしめた。

その日の夜、ナオキは持っていくものがしつかりあるかどうかを確認していた。

「あ、水着がねえ……」

そしてナオキは東京での夏が初めてだからだろうか、水着がないということに気が付いてどうするか少し考え込んだ。

「ナオキっ、どうしたの？」

「つと……いや、水着がないからどうしようかなって」

ナオキは突然背中に抱きついてきあ絵里の手を触って言った。

「水着？ そう言えば私もサイズが合わなくなったら買い替えないと」

「そうなのか？ それじゃあ、明日一緒に買いに行くか？」

「うん！」

ナオキと一緒に買い物に行こう（＝明日デートしよう）と言うと、絵里はとても嬉しそうに頷いた。

翌日、2人はショッピングモールに来ていた。亜里沙は他の一年生と行くからと家で梨子と留守番をしている。



まずはナオキの水着を決めるために男性用水着コーナーに2人はいた。

「あ、これはどうだ?」

「却下」

「え〜!」

ナオキが黒く、白い骸骨の頭が何個かデザインされている水着を選んだが、絵里に却下されて落ち込んだ様子を見せた。

「ナオキはそんなのより……」

「そんなのって、お店の人に失礼だろ……」

「あ、これなんて似合うんじゃない?」

「こ、これ……?」

絵里はナオキの言葉には耳もくれずに、水色で花の模様や木がデザインされている水着をナオキにみせた。

ナオキはその水着を目を細めて見た。

「ナオキは……私が選んだ水着じゃ不満かしら?」

「それじゃあ会計してくるわ」

ナオキは絵里の不安そうな表情を見て、水着を受け取って会計に向かった。

「はあ……」

ナオキは試着室の前でため息をついた。

その理由は、ここが女性用水着コーナーの試着室前だからである。絵里に連れてこれ、  
「水着着てみるから評価してね」と言われて待たされている。

正直、ナオキは恥ずかしがっていた。

「絵里まだ〜?」

「もうちよつと待つて〜」

「早くしてくれよ……」

それ続けて恥ずかしいからと小声で言つて顔を隠した。

「もう、早く私の水着姿を見たいからつて……せつかちなんだから……／＼／＼／＼」

絵里は嬉しそうに照れてそう呟いた。絵里はせつかちなナオキも好きなようだ。

「ナオキ、いいわよ」

「え……ああ、開ければいいのか」

ナオキはてつきり絵里から出てくると思っていたのだが、絵里は外に出るのは流石に  
恥ずかしいようで仕切っているカーテンを開けてとナオキに頼んだ。

「おお……」

ナオキはやつとかという気持ちでカーテンを開けた。そして目の前の絵里の水着姿

に声を漏らした。

絵里は恥ずかしそうにもじもじとしながらチラチラとナオキの方を見ていた。ナオキはそんな絵里に結構ときめいていた。

「ど、どうかしら……?」

「似合ってる……すごく似合ってるよ」

「あ、ありがとう……// //」

絵里の選んだ水着はオレンジ色でいくつか白い大小の花の模様が付いており、白い紐の先には緑色のビーズが付いていた。さらに下にはスカートみたいに薄いオレンジ色のベールも付いていた。そして右腕には水色とピンク色の細いリングを、左腕には透き通るような水色の太いリングをしていた。

「口出すようで悪いけど……これを被っても悪くないと思う」

ナオキはその絵里の水着姿を見て何か足りないと思ったのか、近くにあつたつば広の麦わら帽子を絵里に被せた。

「ん〜……あ、いいかも!ナオキにしてはいいセンスね」

”しては”は余計だ」

絵里は鏡を見て体をひねって似合っているか確認して、お気に召したらしく嬉しそうに言った。

「じゃ、お会計してこないと。着替えるから覗かないでね」

絵里はいたずら気な表情を浮かべて言った。

「覗かねーよ！」

「ふふっ、もうちよつとだけ待っててね」

そして絵里はウインクしてカーテンを閉めた。ナオキは何事もなかったかのように先程座っていた椅子に座った。

だが、心のなかではガッツポーズをしたり飛び跳ねたりしていた。

『おれは心のくなかでく絵里の水着を待ってた』

ナオキくんは変な替え歌を作るほどに喜んでいました。

その後も足りないものを買って足して、買うものがなくなると少しシヨツピングモールを見てまわって2人は帰宅した。

くくくく

そしてついに待ちに待った月曜日……

あの穂乃果でさえ今回に限っては集合時間の30分前には集合場所である東京駅に到着していた。

「あれ、ナオキくんは?」

「そう言えば見当たりませんね。先に行くと言っていましたか……」

穂乃果と海未は先に行つたはずのナオキが見当たらないため当たりを見まわした。

「ナオキくんなら……」

花陽は苦笑いをしながらあるところを指差すと、穂乃果と海未、さらにはことりもそつちを向いた。

「そこでは……」

「ナオキ、忘れ物はない?」

「ああ、大丈夫だよ。でも、絵里も持っていきたかつたな……」

「もう、そんなこと言わないの。合宿だからOGは参加できないから仕方ないじゃない……ね?」

絵里は俯いているナオキの顔を下から覗いて首を傾げた。

「そうだけど……絵里、寂しくないか?」

ナオキは顔を上げて絵里の頭に手を置いて言った。

「ううん、梨子ちゃんもいるし寂しくないわ」

「……………ほんとに?」



「ほな、出発しよか〜」

「とその前に、1年生諸君に伝えたいことがある!」

ナオキがそう言うのと童子と1年生組は何事かとナオキの方を見た。

だが、ナオキ以外の2、3年生組は何を言うのかわかっているのだろうか、ニヤリとして1年生の方を向いていた。

「実はな、アイドル研究部では夏合宿の前になきやいけないことが1つ、あるんだよ」

ナオキは人差し指をたてて言った。

「まさか……スも乗り越えた音ノ木坂学院アイドル研究部の試練を!」

瑞希は目をキラキラさせて言った。

「はっ、〇レ〇レ島の大試練!」

マシユは手をポンと叩いて言った。

「いや、違うでしょ」

真癒美はマシユの言ったことは違うだろうとツツコミをいれた。

「まあ、どうせ”あれ”なんですすよね?」

「うん、”あれ”なんでしょ!」

「おつ、雪穂ちゃんと亜里沙ちゃんはわかってるみたいだな」

ナオキは雪穂と亜里沙の方を向いてニカッと笑顔を浮かべた。他の3人はわかって

いないようでも首を傾げる。

「もったいぶらんと、はよ教えてくなく」

童子もそれが何か気になるようだ。

「ははは、わかりました。」

では、これから1年生もだが、アイドル研究部全員は……………」先輩禁止だ!!」

「『先輩禁止』?!?」

それを聞いた1年生組の驚きの声が東京駅に響いた。

音ノ木坂学院アイドル研究部、波乱(?)の夏合宿の幕開けであった。

次回に続く……



## 第134話「砂浜で輝く星たち」

アイドル研究部御一行は電車に揺られて真姫の別荘がある近くの駅に向かっていた。

ナオキ・亜里沙と雪穂・童子が向かい合わせに座っていて、その後ろでは穂乃果・凛と海未が向かい合わせで座っていた。通路を挟んで、マシユと真姫・瑞希が向かい合わせに、その後で花陽・真癒美とことりが向かい合わせで座っていた。

「お〜！凛ちゃん、海未ちゃん、見て見て！」

「お〜！いい景色だにや〜！去年も見ただけど」

「そうですね〜」

穂乃果達3人は窓から景色を眺めて感動の声をあげていた。

「先輩達仲いいですね〜」

「あ、真癒美ちゃん、”先輩禁止”だよ」

「ふふっ、さ、私の名前呼んでみて」

「〜ことりが自分の顔を指さして言うのと、真癒美は少し戸惑いをみせた。

「え、えつと……こ、ことりっ！」

「うん、OK!」

「じゃあ次は私ね、真癒美ちゃん」

「は……う、うん、花陽」

「はい、よくできました」

花陽がそう言うところりが笑い出し、それにつられて2人も笑った。

「楽しそうね」

花陽達の後ろの席の真姫はそう呟いた。

「ははは、そうですね」

「でも、”先輩禁止”ってなんだか面白いですね」

「瑞希、そう言ってるけど”先輩禁止”ね……」

「あ、すみま……ごめん」

瑞希は頬を赤くしてシユンとした。

「じゃあ次はマシユね」

「え、えつと……」

マシユは真姫に指をさされ、目を泳がせて焦りを見せた。

「ま、真姫……ちゃん?」

「うん、よくできました」

真姫が笑顔だが若干めんどくさそうにそう言うと、マシユは嬉しそうな表情で目を輝かせた。

「先輩！できました！」

「マシユ、”先輩禁止”だって……」

「あ……」

マシユは喜んで通路の向こう側の席のナオキに声をかけたが、苦笑いを浮かべながら注意されたので目を丸くして口を開けた。

「わかつたらもう一回」

「は、はい！ナオキ……くん」

「ハラシヨー！」

ナオキは親指をマシユに向けてたてて言った。

「そういうえば、ハラシヨー！ってなんなん？」

「”ハラシヨー！”っていうのはロシア語で素晴らしいとかそんな感じの意味なんです」

「へえ、そうなんやね。流石は絢瀬はんの彼氏やわ」

童子はナオキをからかう様に言った。

「それ、関係ありますか？」

「ははは……」

雪穂は話す2人を見て苦笑いを浮かべた。

「せや、”先輩禁止”ってウチにも適応されるんかな？」

「いやいや、先生は仕方ないでしょ」

「ウチ、仲間はずれにされるんやね……悲しいわ」

童子はそう言つてすすり泣くフリをした。

「はあ……わかりましたよ。ならそれ相応の扱いをさせていただきます、童子先生」

「(ちよろいな……) ウチは呼び捨てちゃうんやね」

「それはマジで勘弁してください！」

ナオキがそう言つと亜里沙と雪穂は笑いを零した。

そんなこんなで、おのこの各々が盛り上がっていると目的の駅に着いたので下車をした。それから真姫の別荘の近くまでバスに乗つて向かった。降りてしばらく海岸線を歩くと真姫の別荘が見えてきた。

「」「」「おー！」「」「」

真姫の別荘を初めて見た童子と1年生は歓喜の声をあげた。

「さ、入るわよ」

真姫がそう言つて先に歩くとみんなはそれに続いて歩き出した。

「荷物はリビングにまとめて置いていて下さい」

「ナオキはこつちよ。童子先生も」

「あいよ」

「は〜い」

花陽はみんなに指示を出し、ナオキと童子は真姫に連れられて荷物を持って階段を登っていった。

童子は先生のため、ナオキは男子のため、2階にある部屋で寝るが、その他のメンバーは親睦を深めるためにもリビングでまとまって寝ることになっている。

「(っ)よ」

「本当にいいのか……?」

「仕方ないでしょ? ナオキ以外はみんな女の子なんだし」

「それもそうか」

「ま、最後に元通りにしてくれれば好きに使ってくれていいわよ」

「りよーかい」

真姫はナオキに部屋を案内すると、みんながいる1階に戻っていった。

「さてと……着替えるか」

そしてナオキはこれからみんなで海に出るため水着に着替え始めた。

ちなみに、読者の期待を削ぐように申し訳ないが、女子達は更衣用（行為用ではない）に用意した部屋で着替えている。

「いえーいー！」

「とおー！」

上の右が黄色、左がオレンジ、下もオレンジでところどころに白い水玉模様がある水着を着ている穂乃果と上が黄色でベールが付いていて、下が水色でこちらも水玉模様がある水着を着ている凜は砂浜を走って、勢いよく海に飛び込んだ。他のみんなも海にどんどん入っていった。赤と黒が目立っていて、上には白いリボンが、下はスカートみたいなになっている水着を着ている真姫も前回とは違って海で遊んでいた。

「ほーほーほー………」

「ナオキくん、何してるんですか？」

絵里に選んでもらった水着と、半袖のシャツを着ているナオキがぼーつとパラソルの下で白くて長いイスにもたれて空を眺めていると、白が目立ち、黒が細くそれを包んで

いるような水着を着たマシユがその顔を覗いて声をかけた。

「ただ空を眺めてるだけだよ」

「じゃあ、私も隣に失礼します」

「ああ、気持ちいいぞ〜」

マシユは隣にあつたもうひとつのイスにもたれて空を眺めた。

「私、日本の海に来たのは初めてなんです」

「そうなのか？」

「はい。東京からあまり出たことがなかったので」

「なるほどね。それなら遊んで来るといいよ。こういう時に楽しまなくちやもつたいな

いぞう?。」

「つ………はい!。」

マシユはナオキにそう言われると飛び起きて海に向かって走っていった。

「あら、ナオキはんは遊ばへんの?。」

「おれはここでぼーつてしてる方がいいんですよ」

マシユがいなくなると、次は上が色とりどりの花の模様がついていて、下が黒の水着を着ている童子がナオキの顔を覗いた。

「ふくん、つまんない男やな〜」

「はいはいすみませんね、つまらない男で」

「あら、すねてもうた？」

「すねてません」

「はいはいそうかいな」

童子はそう言つて隣のイスにもたれてみんなが遊んでいる方を見つめた。

その頃、みんなは手や水鉄砲で水を掛け合つたりして遊んでいた。

「ハラシヨ……雪穂、海の水つてしよっぱいね」

「亜里沙、あんまり飲んだらダメだよ？」

「そうなの？」

水色でピンクの花の模様が数個ついていて下はスカートみたいなものがついている水着を着ている亜里沙もマシユと同じく日本の海は初めてなので興奮しているのか、水を少し飲んだりしていた。

「ゆきほっ！」

「ん、なにお姉ちゃ……それっ！……んっ！」

「雪穂っ!？」

穂乃果が声をかけてきたので上は白を赤が、下は赤を白が包んでいるようなデザインの水色を着ている雪穂が振り返ると、穂乃果に手で海水を顔面にかけられた。亜里沙は



雪穂を心配して声をかける。

「えへへへへつ、だいせいこうう！」

「……………お・ね・え・ちゃ・ん……………」

「ひいつ……………」

穂乃果は成功したと嬉しそうな表情だったが、雪穂の声のトーンが低くなっていたのに恐怖を感じた表情に変えた。

「……………仕返しっ！」

「ぶほっ！」

「ふん、もう終わり？」

雪穂は仕返しで海水を穂乃果の顔面にかけてドヤ顔を決めた。穂乃果はいきなりの攻撃に態勢を崩して海に倒れた。

「くっ、やったなく！それっ！」

「やつ！」

「ど、どつちも頑張れ〜！」

穂乃果と雪穂の高坂姉妹が水をかけ合うのを亜里沙は応援していた。

「ヴえええ！」

真姫の顔面に水鉄砲から放たれた水がかかる。

「にやはははは、真姫ちゃん撃たれてばっかばばばばば！」

それを嘲笑っていた凜の顔面にも水鉄砲から放たれた水がかかる。

「ふん、油断大敵よ、凜」

「それを言うなら油断強敵にや〜！」

「凜ちゃん、油断大敵で合ってるよ〜！」

真姫と凜が水鉄砲で銃撃戦を繰り広げているのを白が目立ち、上はベールがぶら下が  
り、下は緑色のスカートをしている水着を着た花陽はあたふたしながら見ていた。

「真癒美、いつかの決着つけてやるわ！」

「瑞希、いつかは忘れたけどそれはこっちのセリフよ！」

「こ、これが……噂に聞くサムライ魂……！」

「そ、そうなのかな？」

上はカラフルであり胸の部分が覚えておらず、下は青いスカートをしている水着を  
着ている真癒美と上が黄色でその上から白いベールがかかっている、下は白と緑が目  
立っている水着を着ていること、オレンジで上は緑色の斜線が入っていて、下はス  
パッツみたいになっている水着を着ている瑞希とマシユは2人チームでビーチバレー  
をしようとしていた。マシユは闘士の炎を燃やす真癒美と瑞希をキラキラした目で見  
て感動の声をあげていたが、ことりは苦笑いをした。

「それじゃあいくわよ〜！」

「はーいー！」

「それっ！」

まずは真癒美チームからのレシーブ。どこかで聞いたことのあるやり取りをしてから真癒美はレシーブを放った。

「ほっ！」

それをマシユが打ち上げた。

「マシユちゃんナイス！とお！」

そして瑞希は跳んでアタックをした。

「ていー！」

「流石ことり！お返しっ！」

そしてことりが打ち上げて高く上がったボールを、真癒美は跳んで最大力でアタックをした。

だが、それはコースを思いっきり外れて少し離れたところで準備運動をまだしていた上は青色で上からボールがかかっている、下は白い短いズボンを履いている水着を着た海末の頭に当たってしまった。

「「「あ………」」」

ビーチバレーをしていた4人は表情をどんどんと恐怖の表情に変えていき、汗をだらだらとかいた。

「……………覚悟は……………出来てますね？」

「「「ぎやあああああああ！」」」

海未はギロツと4人に視線を向けて、まるで鬼のような表情を浮かべ、4人は恐怖の悲鳴をあげるのであった。

「賑やかやな〜」

「賑やかですな〜」

そんな賑やか(？)なみんなの声を聞きながら童子とナオキは空を眺めていた。

くくくく  
くくくく

みんなは遊び疲れて休憩をしていた。

「ほい、焼きそばできたぞ〜」

ナオキはお昼ご飯として、ホットプレートで焼きそばを作ってみんなに振る舞った。

「ナオキさんって料理できましたっけ？」

「できるようになったんだよ。あと”先輩禁止”だつて」

「あ、ご、ごめん……ナオキさん？」

「ナオキくんがいいよ。これからは仲間なんだからさ、雪穂」

「つ……うん、ナオキくん！」

雪穂はそう言われて嬉しそうに頷いた。

「むー！お義兄ちゃん、雪穂を呼び捨てとかずるいよ！私も”ちゃん”なしで呼んでよ！」

「はいはいわかったよ、亜里沙」

「えへへ……」

亜里沙は手を後ろで組んで喜んだ。

「よろしー！ご飯も食べたし、遊ぶぞー！」

「おー！」

「あ、食べてすぐに海に入ったら危ないですよ！待ちなさい！」

穂乃果と凜が海に向けて走り出し、それを海未が追いかける光景を見て、みんな声を出して笑った。

「さてと、片付けるか」

「あ、手伝います」

ナオキが紙皿などを片付けようとするとマシユが手伝うと言い、それに続いて1年生組全員が片付けを手伝った。

「あ、ウチのコップはまだ片付けんといてや」

「昼間からお酒って……」

「ええやんええやん、これぐらゝい」

童子はそう言つてまた酒を飲んだ。

「はははは……（こういう酒飲んでばっかの大人にはならないようにしよう）」

「ん、ナオキくんなんか失礼なこと考えへんかったか？」

「考えてませんよ、童子先生」

ナオキは童子に向かつてニコツと笑つて言つた。

1年生組は片付けが終わると海に向かつて走り出した。

ナオキは左手を空にかざし、片目を瞑つて笑顔で夏の太陽が輝く青空を見上げた。

「青い空、青い海……夏だな」

「なにカッコつけてるのよ」

「べ、別にカッコつけてねーよ！」

「ふん、どうだか」

真姫が呆れたように言うと、ナオキは真姫の方を向いて不服そうな表情をした。

「あ、ナオキくん！」

すると、マシユがナオキを呼ぶ声がした。

「ん、どうし……」

そしてナオキが反応して振り向くと、ナオキの顔面にバレーボールが激しく回転したまま当たり、しばらくナオキの顔で回って跳ね返った。

そのままナオキは後ろに半回転して飛んで座っていた真姫に飛び込んでしまった。

「きゃっっ！」

真姫はそれにびつくりして声をあげた。

「ん……あれ？この感触は……？」

「ひゃっ……しゃ、喋らないで……」

「(なんで真姫の音が……まさか……!?) ……………」

ナオキは柔らかい感触がして、真姫のあんな声をするのを不思議に思い、嫌な予感を抱えながら恐る恐る体を起こした。

そして自分が倒れていた方向を見た。

そこには、顔をトマトのように真っ赤にしてナオキを睨みつける真姫がいた。

「これが若い人達の間で噂になってるラッキースケベかいな？初めて見たわ〜」  
童子は頬を右手で押さえて左手の甲に右肘を置いて笑った。

「ま、まさか……」

「ええ……そうよ……!」

そこでナオキは事態を察する。

真姫は立ち上がって両拳を強く握って、目を瞑って眉をピクピクと動かしていた。  
「おれ……真姫のお腹にダイブしちゃった?」

真姫はゆつくりと頷いた。

ナオキはカタカタと震えながらことに助けを求めべく視線を向ける。

「ナオキくん……生きてね」

「そ、そんな……」

こどりが苦笑いでそう言ってスタスタと海の方に走っていくと、ナオキは目に涙を浮かべた。

「ナオキ……なにか言うことは?」

「え、え〜つと……」

ナオキは考えた……生きるために。

生きて東京で待つ絵里に会うために。



ここで答えを間違えば命はない。

そして、頭をフル回転させて導き出した答えは……！

「け、結構……や、柔らかかったぞ？」

「そう……」

「ほっ……」

ナオキが震えながらそう言うと、真姫は息を大きくはいて肩の力を抜いた。

ナオキは助かったと大きく息をはいて、胸をなでおろした。

「つて、許すわけないでしょ！バカー……！！」

「ですよね……」

真昼間の海岸に、パチンという頬を叩いたいい音が鳴り響いた。

そして早くも夏合宿の1日目が終わろうとしていた。

次回に続く……

Another way (クリスマス) 「仕事と私、どつちが大事なのよ!？」

12月24日の夜……クリスマスイヴある今日、結婚したナオキと絵里はご飯も食べ終わり、2人で家で仲良くゆつくりと時間を過ごしていた。

部屋の片隅にはクリスマスツリーが立ててあり、クリスマスが近づいていることを伺わせる。

だが、ナオキの言った一言で絵里はこの日始まって以来の衝撃を受ける。

それは……

「ええ、明日仕事なの!？」

「ああ……明日中に終わらしたいことが山ほどあるんだよ」

「そんな」

絵里は目をうるうるさせてナオキを見つめた。

「仕方ねーよ……夜には帰れるように頑張るから……な?」

ナオキはそんな絵里にお願いするように頭を撫でた。

「……………うん」

絵里はしゅんとして頬を膨らました。

「さてと、おれは寝ないとだけど、絵里はどうする?」

「……………まだ起きてる」

「すねてんのか?大丈夫、絵里のために頑張ってくるから。おやすみ」

ナオキはそう言つて絵里の唇に優しくキスをした。

「ん……………おやすみなさい」

唇を離すと、ナオキは先にベッドがある部屋に向かった。

「もう……………ナオキのバカっ!」

絵里は一人になったリビングでナオキの去つて行つた方に向かつて、ナオキが聞こえない程度に目に涙を浮かべて言つた。そして、冷蔵庫からチューハイを取り出して椅子に座つてそれを開けて飲んだ。

「ぶはあーん、もう……………クリスマスぐらい休みにしなさいよ、バカナオキ。確かに忙しいのはわかるけど……………こういう時ぐらい……………」

絵里はブツブツと文句を言つてまた一口チューハイを飲んだ。それでその缶の中身は空になった。

「……………ナオキのバカ……………」

絵里は机に突つ伏して涙を目に浮かべながらそう言い残して眠つてしまった。

## 小説リクエストby揺

「仕事と私、どっちが大事なのよ!？」

翌朝、ナオキが目を覚まして絵里が隣で寝ていないことを不思議に思つて目をこすりながらリビングに向かった。

「あ、いた……」

ナオキがドアを開けてリビングを覗くと、絵里が机に突っ伏して寝ていた。

「つたく……こんなところで寝てたら風邪ひくぞ〜」

「ん……ナオキのバカ……すう……」

ナオキが毛布を掛けながらそう言うと言つたので、ナオキは絵里の顔を

見つめた。

「……流石に悪かったかな？」

ナオキは頭をかいてそう呟くと、絵里の頬にキスをして仕事の準備を始めた。

「……あれ、明るい……」

絵里は眠りから目を覚まして目をこすってから体を伸ばす。そして毛布が掛けられていることに気付き、きつとナオキだろうとその毛布で体を包んだ。

「もう12時……ナオキは仕事ね」

絵里は時計を見て寂しそうな表情を浮かべてさらに毛布を引つ張った。

場所は変わって、ラブライブ！運営委員会本部……

既にその会長となっていたナオキは仕事をほぼマスターし、後見役のおじてある晋三もほとんどすることがなくなっている。

ナオキはクリスマスである今日も、少し遅めではあるが10時に出勤し、それから休む間もなく仕事をしている。

「会長、少し休憩されては？」

一人の女性社員がずっと仕事をしているナオキに声をかけた。

「いや、今日は仕事が大量にあるからね。休憩してる暇も惜しいんだ」

「あまり無理はなさらず……会長」は、一緒にクリスマスを過ごす人がいるんですから」

「……わかってる。そのためにも終わらさない」と

女性社員はその言葉を聞いて「流石だ」とナオキを見つめた。

「あれ、そう言えば今日はお弁当あるんですか？」

「うっ……いやあく、妻が朝寝てたから作ってもらえなくてね、あははは……」

ナオキは手を止めて苦笑いをして自分の頭の後ろを撫でた。

「あくあ、怒らしちゃいましたね」

「うう……」

女性社員が呆れたように言うとなオキは少しへこんでしまった。

「ちゃんと謝った方がいいですよ？きつと奥さんは会長と一日過ごしたかったと思いますから」

「……はい」

ナオキは女性社員からの叱りを受けて、また仕事を再開した。女性社員は邪魔しては

いけないとその場を去った。

~~~~~

「のじよみい〜!」

『え、えりち!? 一体どうしたん!』

絵里は今となつても親友である希に電話をかけた。すると、絵里の声を聞いた希はびっくりした。

「ナオキがクリスマスも仕事だつて……ぐすん……」

絵里は涙をすすりながら希と話す。

『あくナオキくんならクリスマスも(えりちのために)仕事しそうやなく』

「ナオキは私と2人つきりでクリスマスを一日過ごすより、仕事の方が大事なのよ……うっ……」

『あく確かに(えりちのためやったら)2人つきりよりそつちを優先しちゃうかもやなく』

「そうなのかしら?」

『多分な。でも:「うわああああん!」:え、えりち!』

希が何かを言いかけると、それを絵里の泣き声が遮った。

『え、えりち落ち着いて!』

「落ち着いてられないわよ」

『(あゝこりゃあ何か勘違いしとるんかな?) え、えりち? とりあえず落ち着こ? ナオキくんはちゃんと帰ってくるんやろ?』

「うっ……うん……」

『ほな、安心して待つき? な?』

「うっ……わかった……」

『ほなウチはそろそろ彼と出掛けるからなく。メリークリスマスやで』

「うん、メリークリスマス……」

希が彼氏と出掛けるからと電話をきくと、絵里はゆつくりとスマホを耳から離して画面を見ると、希がメッセージアプリで『ファイトやで!』と送ってきていた。

絵里は希から少し元気をもらえたのか、フツと笑ってテレビをつけ、ドラマなどを観て時間を潰した。

『今年のクリスマスはこのように！夕方から雪が降っていて、ホワイトクリスマスとなってます！あ、あそこにカップルと思われる人達がいまね！お話を聞きましょう！』

すみません、インタビュアーよろしいですか？』

『えっ、テレビ？』

『はい、どうですか？恋人と過ごすクリスマスは？』

『もう最高ですね。特別な気分になれますよ』

絵里はニュースのインタビュアーをされていたカップルの彼氏の方のセリフを聞いてブチッとテレビの電源を切った。

「なに彼女の方は顔が赤くして手で押さえてるのよ……」

絵里はプンプンと頬を膨らまして腕を組んだ。

時計を見ると時刻はもう20時を過ぎている。18時頃から降り出した雪のおかげで今日はホワイトクリスマスとなっている。

ナオキは無事に帰ってこれるだろうか少し不安になる絵里であった。

メッセージアプリではナオキが『すまん、今から帰る！』とメッセージを送信していた。本部からここまでだとまだ帰るのに時間がかかるだろうと絵里は思い、『ゆっくり

でいいから気を付けてね』と送信し、『OK』とスタンプが送信されて来た。

「はあ……あと4時間か……」

絵里は時計を見て、今日というクリスマスもあと4時間で終わってしまうと感じるとどこか寂しくなってしまう。

どう時間を潰すか考えていた絵里は、スマホの電源を入れて、ナオキもしている『シャンシャン』という音ゲーを始めた。絵里は久しぶりにゲーム内で使える石を使いLP……Love Pointsを回復してひたすらプレイしていた。

プレイが終わって時計を見ると、時間は21時30分となっていた。

流石に遅すぎると思いき心配になって、ナオキに『帰り遅いけど大丈夫?』メッセージを送る。しばらくすると、『今家の近くだからもうすぐ帰れるよ』と返信されてきた。絵里は『OK』のスタンプを送って画面を閉じた。そして絵里は机に肘をつき、顎をその手に置いてため息をついた。

絵里は頬を膨らましながら唇を尖らして、時計の針が進んでいるのを見つめてナオキの帰りを待った。

すると、ドアが開くガチャという音とナオキの声がしたので、絵里はリビングのドアの方を見つめる。

「お、ただいま。待たせたな」

ナオキは玄関で雪をはらっていたので、少し時間が過ぎてからリビングに入ってきた。

「おかえり……」

絵里は頬を膨らまし、ジト目でナオキに言った。

「なんだ、まだ不機嫌なのか？」

「ふん、何してたのよ、遅かったじゃない？」

「ああ、すまん……ちよつと色々買ってたら遅くなっちゃって」

「……色々？」

ナオキが自分の後頭部を撫でてそう言うと、絵里は首を傾げた。

それを見たナオキは笑顔を浮かべて左手で持っていた袋を持ちあげて絵里に見せた。

「さ、食おうぜ。クリスマスケーキ買ってきたからさ」

「……………え？」

そのナオキの持ちあげたものはクリスマスケーキであった。絵里は驚いた表情を浮かべて、口を開けながら目をぱちぱちとさせてそれを見つめた。

「ん、意外か？2人で過ごすクリスマスなんだ、これぐらい必要だろ？あつ、安心しろちゃんとチョコプレートケーキだし、ワインも買ってきた」

ナオキはさらに右手に持っていたワインが入っている袋を持ち上げて絵里に見せた。
「うう………」

「ほえっ!？」

ナオキが机にケーキの入っている袋とワインに入っている袋を置いて、鞆も椅子におろすと、絵里が目をうるうるさせるとさせてナオキを見つめた。

「ナオキ……!」

「おっと……どうしたんだ?いきなり抱きついてきて……」

ナオキは絵里が抱きついてくると腰に手をまわして頭を撫でた。

「うっ……だって、ナオキはクリスマス^{今日}も仕事だからって……私は、一日中ナオキと過^ごしたかったのに……寂しかったんだからねっ……バカナオキっ!」

絵里はナオキの胸で泣きながら今日溜め込んでいたものを心の底から吐き出した。

「そんなこと思ってたんだな……ごめん。でもさ、今日は明日の分まで仕事してきたんだ。クリスマスをゆつくりと2人で過^ごしたかったからさ」

「そう……なの?」

「当たり前だろ?それ以外に今日仕事した意味なんてないさ」

ナオキは顔を上げた絵里の零れる涙を親指で拭き取って言った。

「もう……それならそうと言ってよ……バカナオキ……」

「言ったぞ? 『絵里のために頑張ってくるから』って」

「なんだ、そう言うことだったのね……それなのに私……バカナオキだなんて……」

「いいんだよ、別に……気にしてないし。でも、子供みたいな絵里も可愛かったぞ?」

「なによそれ〜っ!」

絵里が頬を膨らましてナオキを見上げると、ナオキは子供を愛でるように頭を撫でた。

「さ、遅めになっちゃったけど食べようか」

「うん!」

そして2人は食器の準備をし、ケーキの箱を開け、ワインを互いのグラスに入れ合った。

「それじゃあ、遅くなっただけど……メリークリスマス」

「メリークリスマス」

2人のグラスが軽く当たる音が静かなリビングに響いた。

2人はワインを一口飲んでグラスを机に置く。

ナオキはそれからナイフで買ってきたチョコレート味のクリスマスケーキを切って、

1切れずつ自分と絵里の皿に置いた。

「さ、どうぞで」

「うん……」

「……ん、どうした？食べないのか？」

「ううん、違うの……そうじゃなくて……」

「ん？」

ナオキは絵里がなかなかケーキを食べようとしなのが何故かわからず首を傾げた。絵里はナオキに何かを頼むような目線を送るようにつめ続けた。

「……あくもしかして、食べさせて欲しいのか？」

「っ……うんー！」

ナオキがそう言うと、絵里はパーッと嬉しそうに満面の笑みを浮かべて頷いた。

「そういうことなら早く言えばやってやるのによ……ほら、あくん」

ナオキは自分の皿に乗っているケーキをフォークで絵里の一口分ほど切って、身を少し乗り出して絵里の方に腕を伸ばす。

「だって恥ずかしいんだもん……あくくん」

絵里は照れながらも少し身を乗り出し、口を開いてナオキが運んでくれたケーキを食べた。

「美味しいか？」

「んっ……美味しい」

「も、もつと食うか?」

ナオキは絵里が食べたあとに見せた愛おしく、子供みたいで、可愛い笑顔に心を“ラブレリーシユート”で撃たれたような感覚に襲われ、また自分のケーキを切り取って絵里に向けて腕を伸ばした。

「うん!」

それからナオキは絵里に自分のケーキがなくなりそうになるぐらいにケーキを食べさせた。

「あ、ナオキの分ないわね?今度は私が食べさせてあげる!」

「え、いいのか……!?!」

「当たり前よ。付き合ってる時から何回かしてあげてるでしょ?ほら、口開けて……あくん」

今度はお返しに絵里が自分のケーキの一部を切り取って腕をナオキの方に伸ばした。「それもそうだな……あくん」

ナオキは口を大きく開けてそれを食べる。

「美味しい?」

「んっ、ああ……絵里に食べさせてもらってるから凄く美味しいよ」

「っ……まだまだ食べさせてあげるんだから!」

絵里はナオキの『絵里に食べさせてもらってるから凄く美味しいよ』という言葉が頭と心に木霊こだまのように響いて、まるで”ラブナオキシユート”を撃たれたような感覚に襲われてまた自分のケーキを切り取ってナオキの口に向かつて腕を伸ばした。

そんなことを2人で繰り返していると、いつの間にかケーキはなくなっていたので、2人はゆつくりと話しながらワインを飲んでいた。

「そう言えば、なんで2人でゆつくりクリスマスを過ごしたいのに23日とか24日に仕事入れなかったの？」

「ん？だつてさ、よく言うじゃん？『本当のクリスマスは25日の21時から午前3時まで』つてさ」

「ハラショー！そんなのね、初耳だわ」

絵里はナオキから今日仕事を入れた理由を聞いて、手を合わせて喜んだ。

「ああ、そうなんだよ。おっと、そろそろか……」

「ん、どうしたの？」

ナオキが時計を見て声をあげると絵里は首を傾げた。

「絵里……」

「な、なに……？」

絵里は突然ジツと見つめてきたナオキに驚きの表情を浮かべた。

「……………目、瞑ってくれないか？」

「えっ……………な、なんで？」

「いいから……………目、瞑ってくれ」

「わ、わかったわ……………(も、もしかして……………『絵里、これがおれからのクリスマスプレゼントだよ』って言ってキスしてくるのかしら……………!?)」

絵里はそんな期待からか、ナオキの言う通り目を瞑ると唇をすぼめていた。

絵里はドキドキしながらそのままの状態にナオキの行動を待った。

「……………よし、もういいぞ」

ナオキがそう言うのと、絵里はキスではなかったのかと頭にハテナを浮かべた。だが、なにかをかけられる感覚がしたので、絵里はそつと目を開けて視線を下ろした。

「つ……………これって……………!」

絵里は驚いて視線を横にいたナオキの方に向けた。

「ああ、おれからの……………ナオキサンタからのクリスマスプレゼントだ」

ナオキはウインクをして言った。

そのプレゼントとは、チェーンが水色で、小さな銀色の十字架がぶら下がっているネックレスであった。

「これ……………昨日読んでた雑誌に載ってたネックレス……………!」

「ああ……絵里が欲しいって言ってたからさ、店も近かったし買ってきたんだ」

ナオキは目線を斜め上にながら少し赤くなっている頬を人差し指でかいて言った。
「嬉しいわ……ありがとう！」

絵里はネックレスの十字架を軽く挿んで胸で抱きしめながらナオキに礼を言った。

「ああ、いいってことよ」

「それなら私からもなにかあげないと……うくん……」

絵里はナオキに何をあげようか、腕を組んで考え始めた。

ナオキはそれを待つ間、自分の座っていた椅子にまた座り直してワインを飲んだ。

「あ、いいこと思いついた！ふふっ……」

「おっ、何くれるんだ？」

ナオキは絵里がプレゼントを思いついた様子を見せると、犬が尻尾を振るようにビシッと姿勢を直した。

「ふふっ、じゃあ横に失礼するわね……」

「お、おう……？」

絵里はそう言ってナオキの隣の椅子に座って、ナオキにぴったりくつつくように椅子を動かした。

「じゃーあ……お待ちかねのエリチカサンタからのプレゼントは……」

「おつ、なん……」

ナオキは期待を含めたセリフを言おうとするも、絵里が唐突に両方の頬を優しく手で持ってきたので言うのをやめた。

「こ・れ・よ……」

絵里はそう言ってナオキの顔を自分の方に近づけながら自分の顔もナオキの顔に近づけ、ナオキの唇に優しくキスをした。

お互い気持ちよさそうな声をあげて、唇が離れると少し息をきらしてお互いに見つめ合った。

「なあ、絵里知ってるか？」

「なにを？」

「本当のクリスマスってさ……カップルが……その……するらしい」

「そうなの？……ナオキは……シタい？」

「そうだな……絵里と一緒に……かな？」

「もう……じゃ、行きましょう……」

「ああ……」

2人はリビングの電気を消して、2人のベッドがある部屋に向かった。

だが、2人はまだ知らない……………

………
本当のクリスマス（意味深）は、12月24日21時〜3時の6時間だということを

………
そうとも知らずに、2人は雪が降ったことで少々冷たくなった互いの体を体で温めあっているのであった……………

メリークリスマス……………

第135話「First Night Umi」

合宿一日目の夜、女子メンバーがお風呂に入っている間に、ナオキはチョコレートの隠し味を入れたカレーを作っていた。

あのようにナオキは徒歩30分のところにあるスーパーに”一人で”行き、食材を買ってきていた。

「よし、あとはゆっくり煮込むだけだな」

ナオキはお玉でカレーをかき混ぜながらみんながお風呂から上がってくるのを待った。

そんなナオキの頬には、赤く手の形がついていた。

「ん〜おいし〜!」

「それはなによりだ」

お風呂から上がりの上の穂乃果が頬を押さえてそう言うと、ナオキは安心したようにカレーライスを一口、口の中に入れた。

「これ、隠し味になにか使ってるの？」

「ああ、チョコレートだな」

瑞希は隠し味の正体を知ると、納得したように頷いてからまた食べ始めた。

そしてナオキはふと真姫に目を向けると、まだ不機嫌そうな表情をしていた。ナオキはそれを見て難しそうな顔をして頬をかいた。

「ナオキ、もう先にお風呂に入ってきてはどうですか？」

「ん、そうだな……」

ナオキはそう言って最後の一口を食べ、食器を片付け、着替えやバスタオルなどを持ってお風呂場に向かった。

「ふう……」

ナオキは湯船に浸かって、その気持ちよさに息をはいた。

「いやあくこんなにかい温泉を独り占めなんて……なんか悪いなく。ははははははっ」

ナオキは露天風呂から見える星が広がる夏の夜空を見上げて言った。

周りを見回しても誰もいない。もちろん男子はナオキだけなので当たり前である。だが、それによって少し寂しい気分をナオキは感じていた。

学校でも男性の教員は少なく、やはり寂しい。だからこそナオキはこれから入ってく

るであろう男子がよりよい高校生活をおくれるように、共学に向けての活動や、校則の改善案を考えたりしているのである。

だが現実には現実。ナオキは話す相手もおらず、のんびりと寂しくそのひとときを過ごした。

「ああ……ちよつとのぼせたか？」

ナオキはいつもと比べて長風呂をしてしまい、タオルを顔に被せながら頭を押さえ、脱衣場の扇風機の前の椅子に座り込んでいた。

しばらくして少しはマシになったのか、自分の着替えなどを入れてあるカゴがある場所まで歩き、バスタオルで体を拭いてから着替え始めた。

そしてふとナオキが隣にあるカゴに目を向けると、そこにはなにかが入っていた。ナオキは気になってカゴを取り出した。

「……………」

ナオキは絶句して、そのカゴをそつと元あったところに入れた。

「おれは、見てはいけないものを見てしまったのかもしれない……」

ナオキはそう言いながらカタカタと体を震わせた。そう、ナオキが見たものとは……女性用のパンツであった。

ナオキは、みんなに言うべきかと考えた。だが、堂々と「誰か脱衣場にパンツ忘れてたぞ」とか言ってしまうと、みんなから引かれて距離を取られてしまう確率の方が高い。逆で黙っておけばなにも言われず、また後で誰かが見つけてくれるはずである。

「よし、帰ろう」

ナオキは決心して荷物をまとめて脱衣場の出口に向かい、暖簾のれんを払ってそこを出た。

「ん、真姫？」

「ヴええ……!？」

ナオキが壁にもたれていた真姫に声をかけると、真姫はびつくりしたよう数歩ナオキとは逆の方に下がった。

「どうかしたのか？はっ、まさかおれの裸を……!？」

「覗かないわよそんなの!!」

ナオキが腕で体をおおってそう言うと、真姫は顔を赤くして否定した。

「じゃあ、なんでまた？」

「……別ににもないわよ。早く行きなさいよ」

「ふーん……わかった」

ナオキは少し怪しがりながらも深く追求はせずにリビングへと戻っていった。

「……………ふう……………」

真姫はナオキの姿が見えなくなると、息をはいて脱衣場に入っていった。

「……………あつた」

そして忘れてきてしまった使用済みのパンツを自分の脱衣時に使ったカゴから取り出し、安心して胸をホツとなでおろした。真姫はそれをポケットに入れてリビングに向かった。

「いい湯だつダッ！」

ナオキはリビングに戻るなり早速顔面に枕が当たった。

「あ……………ご、ごめん、ナオキくん……………」

投げた張本人である穂乃果は、まずいという表情をして一応謝った。

「あのさ……………昼間はバレーボールぶつけられた挙句真姫にビンタされて、その次は枕か……………ハハハハハハ……………」

「ナ、ナオキくん……………?」

ナオキはゆっくりと腕を動かして枕を掴み、黒いオーラを放った。穂乃果は後ろに下がりがり、危機感を覚える。

「……………眠れ」

「ぐはっ！」

「ホノカチャン!？」

ナオキから放たれた超音速枕は見事に穂乃果の顔面に命中し、穂乃果は敷かっていた布団に倒れて眠りについた。

「みんなも遊ぶのはいいいけどほどほどにな。明日も練習なんだから」

「……………はい……………」

ナオキがニコツツとしてそう言うと、その場にいたみんなはその笑顔に恐怖を覚えたのか、少し怖がりながら返事をした。

「じゃあ、おれは部屋に行かせてもらうわ。また明日〜」

ナオキはそう言い残して階段を登って、自分の寝る部屋へと向かった。

くくくくく

「あ、もしもし絵里？」

『ナオキ、どうかしたの？』

ナオキは部屋に戻ってからベッドに座って絵里に電話をかけた。絵里もお風呂から上がって部屋でゆっくりしていたのであった。

「いや、絵里がおれの声聞きたがってるのかなって思ってたさ」

『ふふつ、ナオキもでしょ？』

「あははは……バレバレか」

どうやらナオキも絵里もお互いに愛する人の声を聞きたがっていたようだ。

『で、今日はなにをしたの？』

「今日はずつとぼーつとしてたよ」

『海に行ったのに？』

「ああ、他には飯を作ったぐらいだな」

『もう、私と行くときはそんなのなしだからね』

「へーい……」

『ふふつ、ナオキの声が聞けてよかったわ』

「ああ、おれもだよ」

『………それじゃ、またね』

「ああ……愛してるよ」

『うん……私もよ』

2人はそう言つて電話をきつた。

ナオキは名残惜しそうに、待ち受けの絵里とのツーショット写真を見つめた。ナオキが大きなため息を吐くと、部屋のドアがノックされた。

「ん、どうぞ」

「……………」

「なんだ真姫か……どうしたんだ？」

すると、真姫が少し不安な表情でゆっくりとドアを開けて部屋を覗いてきた。

「え、えつと……その……勉強を教えて欲しくて」

真姫が何か言うのをためらう様子を見せて言った。

「なんだよそんなことか。ま、そこに座ってくれ」

「あ、ありがとう」

ナオキが椅子の方に手を向けると、真姫は礼を言つて椅子に座つた。

「別に遠慮なんかしなくていいよ。でもいいのか？せつかくの合宿なのに」

「ええ。少しの時間ももつたいないのよ」

「その言葉、穂乃果達にも聞かせてやりたいよ」

ナオキがそんなことを言っている間に、真姫は机に参考書とノートを広げた。

「それで、ここなんだけど」

「えつと……ああ、これはだな……」

ナオキは真姫が問題を解いている間、ベッドに座りながら本を読んだり、スケジュールを考えたりしていた。

「真姫く、調子はどうだ……つてあれ？」

ナオキはふと視線を真姫に向けると、真姫が机に突っ伏しているのを見て驚いた表情をした。そしてナオキは立ち上がってそんな真姫に近寄った。

「すう……すう……」

「寝てるし……」

真姫は寝息をたてて寝てしまっていたので、ナオキは呆れた様子を見せた。

それからナオキは真姫の座っている椅子をずらし、脚を先にもって真姫を抱きかかえた。いわゆるお姫様抱っこである。そして寝てしまった真姫をベッドに寝かせて布団をかぶせて一息はいた。

「さて……」

ナオキはそれから尿意を感じて部屋を出てトイレに向かった。

「真姫ちゃ……」

そのナオキが去った部屋を覗いた花陽はナオキが寝るはずのベッドに寝ている真姫を見て固まった。そして何を考えたのか、顔を真っ赤にして頭から湯気を出した。

「花陽、どうかしたのですか？」

花陽についてきた海未はそんな花陽の反応に不思議そうな表情をした。そして部屋を覗くと、花陽と同じく顔を真っ赤にしてしまった。

「お前ら、どうしたんだ？」

そこにナオキが戻ってきて、顔を真っ赤にして部屋を覗く2人を不思議そうに見つめた。そんなナオキに海未はゆっくりと顔を向けた。

「ナオキ……」

「は、はい……？」

「……………破廉恥です!!」

「ぐほっ!」

すると、急にナオキの腹に海未のパンチがクリーンヒットして、ナオキはそのまま意識を失ってしまった。

意識を取り戻したナオキは重たい目をゆっくりと開けた。

「つ……………は!?」

その場所は、みんなが遊んでいた砂浜であった。しかも誰かが自分のことを引っ張っていた。そして前に別荘が見えたので、向かっているのは海であった。

「目が覚めましたか?」

「う、海未!」

ナオキは後ろ、引っ張られている方向から掛けられた声に驚いた。

「おまつ、なにを……………」

「何って、決まってるじゃないですか……………」

海未はナオキを引っ張りながら不敵な笑みを浮かべてその理由を答えた。

「破廉恥な浮気者を海に沈めるんですよ」

「……………は、浮気者？」

ナオキは海末がなにを言っているのかわからなかった。

「とぼけても無駄ですよ。真姫があなたのベッドで寝ていたのですから」

「いやいや待って待って！おれはただあいつに勉強を教えたただけで、途中で真姫が寝ちゃったから……」

「べ、べべべ、勉強（意味深）なんて、破廉恥です！」

「誤解だ……」

ナオキは海末からとんでもない誤解を受けていた。海末はどうやら受験に向けての勉強を、そっちの勉強と勘違いしているようだ。

「もう言い訳は聞きません、沈んでください！」

「やだ……」

そしてナオキは体に巻きついている違和感に気が付いた。

あ、今のは『真姫』と『巻き』ついている』をかけていて……

「あれ、海末さん……おれの体に巻きついているのはなんですか？」

「鎖ですが？」

「『鎖ですが？』じゃねーよ！まじで殺す気か!!」

「そんな、殺すだなんて物騒な。私はナオキを一旦沈めて、あとはナオキが陸まで上がっ

てくればいい話ではないのですか?」

「お前は馬鹿か!そんな死ぬに決まってるだろ!!」

「馬鹿とはなんですか馬鹿とは!早く沈めます!」

「やめろ!やめてください!ごめんなさい!何でもしますから!」

「ん、今何でもって言いましたか?」

「はい、言いました!なんでもします!」

ナオキがそう言うのと、海未は海の手前で立ち止まった。ナオキは助かったと思って安心したのか体の力を抜いた。

「なら……………」沈んでください!」

「……………」へ?」

そしてナオキは海未に海に向かって思いっきり投げられた。ナオキは力を抜いていた為、海未は軽々と投げることができたのだ。

(終わった……………)

ナオキは涙を一滴流して、ついに海に沈んでしまった。

「さて、ナオキは上がってくるでしょうか?」

海未はそう言つてナオキを投げた方向を見た。

「海未——!!」

「あ、真姫……大丈夫です、安心してください。ナオキはちゃんと沈めましたから」

海未は真姫の両肩を掴んでそう言つた。

「いやいや、そうじゃなくて!なんで沈めてるのよ!」

「え、だつてナオキは浮気を……」

「そ、そんなわけないでしょ!私はナオキに、受験の為の勉強を教えて貰つてたのよ!」

その真姫の一言に、海未は固まってしまい、目をパチパチとさせて真姫の顔を見つめた。

「……………しまったっ!」

「海未——!!」

海未はそう言つて振り返つて海に飛び込んだ。

その後、ナオキくんはしっかりと救出されました。

次回に続く……

第136話 「夏の日のもとで」

「……は……?」

ナオキは翌朝目を覚ました。起きてから「入れ替わってるー!」っていうのはもちろんなく、鎖ではなくタオルが体に巻かれた状態で寝ていた。

「目が覚めた?」

「ん、真姫か……」

ナオキは目を覚まして体を起こし、目をこすって真姫の方を向いた。

「その様子じゃ大丈夫みたいね。早く着替えて」

真姫はそんなナオキを見てそう言い捨てて部屋から去った。ナオキはまだ状況がみ込めずに首を傾げて考える仕草をした。そして、「あの出来事」が夢ではなかったと察すると顔を青ざめた。

ナオキが着替えてリビングの方に降りると、なにやら騒がしかったので不思議に思い

ながら階段を降りた。

そこでは……

「海未ちゃん落ち着いて！」

「海未ちゃん！」

「穂乃果、ことり、離してください！私は勘違いとはいえ、ナオキを海に沈めたのです！だから腹を切ります！」

穂乃果とことりが両サイドから海未の腕を掴んで、腹を切ろうとしている海未を止めていた。

「……なにやってんの？」

「あ、ナオキくん！」

「海未ちゃんを止めるのを手伝ってえ〜！」

ナオキが声をかけるとことりと穂乃果はナオキに助けを求めた。

「あく海未、おれは大丈夫だからやめよ？な？」

「いいえ！いくら許してもらえたからとこれは私のケジメなのです！ふん！」

「「わっ!？」」

「穂乃果、ことり！」

海未はそう言うのと穂乃果とことりを無理やり振り払ってナイフを自らの腹に向かつ

て構えた。

「すみません2人とも……そしてナオキっ！」

「やめろー！ー！！」

そして海未はそのナイフを腹に押し込んだ。

「うっ……！」

「海未……！」

「……あ、あれ？」

だが、海未の腹から一向に血が出なかつたので周りにいた海未はもちろん、穂乃果・ことり・ナオキも目を丸くして驚いた。

「はあ……4人揃ってなに遊んでるのよ？早く朝ごはん食べるわよ」

真姫が呆れたようにそう言っている間、海未はナイフを腹から離して見つめた。するとそれは刃の部分が押し込めるおもちやで、海未は目を丸くしながらその刃の部分を人差し指で中に押し込んでいた。

「……………すみません」

そして海未は顔を真っ赤にして3人に謝った。

~~~~~♡~~~~~

「これが、今日と明日の練習メニューです！」

朝ごはんのあと、別荘の玄関前で海未が先程とは打って変わって目をキラキラさせて画用紙に書いてある円グラフ式の練習メニューを指さした。

「ねえねえナオキくん……」

「ん、どうした？」

「なんでナオキくんが練習メニュー決めなかったの？」

「いや、練習メニューはおれと海未と花陽で分担して作ることにしたからさ」

「そんな〜！」

凜が小声でナオキに聞くと、凜は絶望したような叫び声をあげた。つまり、ナオキ以外の元々、sの面々は「またか〜またこのメニューなのか〜」というような表情を浮か

べていた。1年生組と童子は「まじでこれやんの?」というような表情を浮かべていた。ナオキ、童子、1年生組は去年の夏合宿の練習を知らないためこの練習のキツさはもちろんわかっていない。だがそれは練習メニューをみれば一目瞭然であった。しかし、ナオキは何食わぬ顔でその場に立っていた。

「ま、今日と明日はこのメニューだから、みんな頑張れよ」

「みんな、生きて帰ろうな……!」

ナオキと童子がそう言うのと、海未以外のメンバーは「そんなく!」と絶望の声をあげたのであった。

ここでアイドル研究部の今日と明日のイカれた練習メニューを紹介しよう。

まずは1日目。ランニング10km、腕立て腹筋20セット、精神統一を挟んで発声練習、そしてダンスレッスン、1日目のラストを締めくくるのは遠泳10kmである。

そして最後に2日目。ランニング15km、腕立て腹筋20セット、発声練習からのダンスレッスン、精神統一をして2日目のラストを締めくくるのはもちろん遠泳15kmである。

まさにこのメニューは去年の夏合宿と同じである。以上が、アイドル研究部の今日と明日のイカれた練習メニューである。

大体予想はついていただろうが、その後の練習風景はまさに地獄絵図であった。



元々、sメンバーは去年も経験しているからか、なんとか一つ一つの練習をこなしていった。1年生組もなんとか先輩達についていき、練習をこなしていった。そして2日目の夜を迎えた。

~~~~~ラブライブ！~~~~~

「はいよ、練習お疲れさん」

「今日はウチとナオキくんで作ったで〜」

練習が終わってすぐ、ナオキで童子はみんなに晩ごはんを提供した。みんなはあの地獄のような練習を終えたからか、お腹をすかしたハイエナが肉を喰らうようにご飯を食べた。

今日の晩ごはんのメニューはステーキである。お腹のすいた時のステーキは素敵！なんつって。あ、今のは『ステーキ』と『素敵^{すてき}』をかけていて……

「30000円……ハラシヨ……」

亜里沙は姿勢を低くして肉を正面からキラキラとした目で眺めた。

「滅多に食べられへんし、ありがたくいただかなあかんさ」

流石は大人、童子はこんなときにも動じずに手をふるふると震わせてステーキを食べていた。

「童子先生も動揺してるじゃないですか……」

真癒美はそんな童子を見て肩を落とした。

真姫のある一言の爆弾発言により、厳しい練習後の食卓の場は騒然となったのであった。その後、みんなは練習に疲れたからか、お風呂に入りすぐに眠りについた。

くくくくくくくくくくくくくくくく

翌朝、早めに目が覚めたナオキはみんなを起こさないようにして別荘の外に出た。

ナオキは砂浜まで降りるときに使った石の階段の前で止まって海を眺めた。外は少し暑かったが、海から吹いてくる風は冷たく気持ち良く感じた。

「思い出すな……」

ナオキは一人そう呟いた。

そう、ナオキは去年のこの時期にこの砂浜で、*μ*、*s*の9人が手を繋いで海を眺めている光景を見ていたのである。ナオキはそのことを懐かしんでそう呟いたのだった。

「お〜い！ナオキく〜ん！」

「ん、穂乃果か……早いな」

「ナオキくんの方こそ！ここで何してたの？」

ナオキが海を眺めていると、穂乃果が起きてきてナオキの隣まで走ってきた。

「ちよつと去年のことを思い出してな。ほら、話したことあるだろ？おれが後ろからみんなを見てたって」

「ああくそんなこと話してたね〜」

穂乃果はそう言うとう海の方に視線を向けて、ナオキと同じように海を眺めた。

聞こえるのは、海や木が風によって揺らさせる音と、波の音のみであった。

「ねえ、ナオキくん……」

「ん、どうした？」

穂乃果は頬を少し赤くして、髪は風によってサーツと揺れた。

ナオキはなかなか要件を言わない穂乃果を心配し、何か深刻な相談なのだろうかと不安になっていた。

「あのね……私……」

ナオキはじつと穂乃果を見つめる。

「私、好きだよ……ナオキくんのこと」

「……………ああ、おれも好きだよ?」

「違うの! そうじゃなくて!」

穂乃果は頬を赤く染めたまま首を大きく振った。

ナオキはそんな穂乃果を見てなにかを悟ったかのような表情をした。

「まさか……そっちの好きか?」

「うん、そうだよ……穂乃果ね、ナオキくんのことが好きだったの……気が付いたらずっとナオキくんのことを見てた……最初は憧れてるだけかと思ったんだ。でもそうじゃ

なかった。

私、ナオキくんのことが好きなんだって……!」

ナオキは最初は驚きはしたが、ここまでくれば今までは驚かなかった。これまでに希、にこ、そしてことりの告白を受けたナオキは、もしかしたら次があるかもしれないと予測していたのだ。普段は恋沙汰には鈍感気味なナオキにしては上出来である。

「そうだったのか……全然気付かなかったよ」

「ははは……やっぱり? ナオキくんってそういうのって結構鈍感だからね」

「んで、返事なんだけど……」

ナオキがそう切り出すと、穂乃果はあまり見ない真剣な表情でナオキを見つめた。

だが、そのナオキが言う返事を穂乃果はわかっていた。例えそれが予想通りの返事だとしても、穂乃果はその”仄かな可能性”を信じていた。いや、信じたかったのだ。

「……ごめん、穂乃果……」

だが現実にはそんなには甘くなかった。

小さい頃から過ごし、一時期は離れ離れになってしまったがまた東京で会えた。そんな幼馴染みであるナオキとそういう関係になりたかったが、ナオキには絵里という心に決めた人がいた。

「あ、あははは……やっぱり? そうだよ、ナオキくんには絵里ちゃんがいるもんね……」

あはははは……」

穂乃果はその悲しみを無理やり作った笑顔で隠した。だが幼馴染みであるナオキにはそれはお見通しであった。

ナオキは少し目から涙が滴る穂乃果の頭に手を乗せて、優しくその頭を撫でて笑顔で言った。

「ま、あれだ。これからは今までのように……いや、今まで以上によろしくな。幼馴染みとして、一緒に過ごした仲間として」

「う、うんっ……！」

そして朝日が先程よりも少し高く昇り、そんな2人を明るく照らしたのであった。それはまさに、2人の友情が途切れることはないと安心させるような光であった。

次回に続く……

第137話 「夏合宿の思い出に」

「よし、ラストスパートだ！」

「みんな頑張りや〜！」

砂浜で遠泳をしているみんなを待っているナオキと童子は、声を張り上げてみんなを力づけた。みんな着々と砂浜まで泳ぎ切り、泳ぎ切った人に2人はタオルを渡していった。

「ん……？」

「ナオキくんどうかしたん？」

ナオキが海の方に向かって難しそうな表情をすると、童子は不思議そうな表情をしてナオキの顔を見た。

「なんか、マシユの様子おかしくないですか？」

「マシユさんの？」

童子はナオキにそう言われてジーツと海の方、マシユが泳いでいるであろう方を見た。

「っ…………まさか…………!?!」

「ちよつとナオキくん!?!」

そしてナオキは何かに気付いたかのように表情を一変させて海に飛び込んだ。ナオキは勢いよくクロールでマシユの方に泳いでいった。童子はそんなナオキに驚くしかなかった。遠泳を終えたみんなも不思議そうにその方向を見つめた。

「はあ、はあ、はあ……………!（重たい……………服脱いだらよかつたかな?でもこうしちゃいられない……………!）」

「っあ…………ナオキ、くん……………!」

ナオキは必死にマシユのところに向かって泳ぎ続けた。そしてマシユはナオキが近づいてくるのがわかったのか、泳ぐのをやめて疲れた表情を浮かべてナオキの名を呼んだ。

「はあ…………マシユ、お前足くじいたんじゃないのか!?!」

「ナオキくん、何故それを…………!?!」

「向こうからマシユの様子がおかしかつたからまさかつて思ったんだよ…………ほら、一緒に向こうまで行こう」

「っ……………はい!」

ナオキはマシユの片腕を自分の肩にかけてその腕を持ち、さらに空いている片手でマ

シユが離れないように支えた。マシユはナオキの顔が近いからだろうか、顔を赤くして顔を逸らした。

2人はゆつくりとみんながいる砂浜に向かった。

~~~~~♡~~~~~

「お待たせ〜」

「あ、ナオキくん来た!」

穂乃果は別荘の方から水着姿で走ってくるナオキを指差して言った。

「着替えるだけにしちや遅かったわね」

「いや、濡れた服干してたら時間かかっちゃって……あはははは……」

「なるほど……」

真癒美がそう言うのと、ナオキは頭の後ろに手を置いて言った。

「あ、マシユ……どうだ足の方は?」

ナオキは真姫の治療を受けているマシユの方に歩いて、マシユの近くでしゃがんで声

をかけた。

「はい、なんとか……」

「なにがなんとかよ。普通に足首が赤くなってたじゃないの……」

「ごめんなさい……」

「とりあえず、練習は少しお預けだな」

「はい……」

ナオキがそう言うのとマシユは残念そうに返事をした。

「あれぐらいの怪我なら今日一日休めば、また明日から練習できるかもよ」

「それは本当ですかっ!？」

「え、ええ……だから今日は大人しくしておくことね」

マシユが嬉しそうに真姫に寄って言うのと、真姫は少し引き気味に言った。

「ははは……それじゃ休憩がてらにみんなに新曲を聞いてもらおうかな」

ナオキがプレイヤーをみんなに見せると、みんなは目をキラキラとさせて歓声をあげた。

「新曲出来てたのね」

「ああ、今日の朝にな」

「やはり新曲は楽しみですね」

真姫、ナオキ、海未の3人は言った。

「これが私達のデビュー曲になるんだね……!」

「ついにこのときが……!」

亜里沙と雪穂はついにスクールアイドルの曲が歌って踊れることに感動した。

「まさかナオキくん達の曲をいち早く聞ける時がくるなんて……!」

「ええ、なんだか嬉しいわね」

瑞希と真癒美は憧れ続けた<sup>々</sup> sの曲を作った3人の曲を、いち早く聞けるといふことに感動していた。

「なんだか少し緊張してきますね……」

マシユはデビュー曲を聞くことに緊張していて、目を瞑っていた。

「それじゃあ、かけるぞ〜」

ナオキはそう言ってプレイヤーの再生ボタンを押そうと指を構えた。

「あ、ナオキ……曲名は?」

「おっとそうだった、危うく言い忘れるところだったよ」

すると、海未はナオキがまだ曲名を言っていないことに気付いてそれを指摘すると、ナオキは指を止めた。

「それで、なんて曲名なの!」

凜はワクワクした様子で身を前にして言った。

「ああ、海未の考えてくれた曲名もよかったけど、こっちの方がいい感じがしてな」

「はい、断然ナオキの考えたものの方がいいと私は思います」

ナオキと海未は早朝にこの曲名を決めたときのことを話して頷いた。

「それじゃあ、今度こそ聞いてもらおうぞ」

そしてナオキは今度こそと再生ボタンを押そうと指を構えた。

みんな、曲名を楽しみにナオキの方を見つめた。

「Shooting Starsのデビュー曲の曲名は……………」

~~~~~♡~~~~~

「ワンツースリーフォー！ファイシックスセブンエイ……………」

翌日、マシユも怪我をする前みたいに動けるようになり、夏合宿は4日目を迎えた。
4. 5日目の練習メニューはナオキと花陽が担当していた。

やることはほとんどは変わっていないが、ランニングや遠泳の距離が短くなった代わりに、ダンスと歌に向けての練習の時間が増えていた。

海岸には、ナオキの手拍子と声が響いていた。みんなはそれに合わせてデビュー曲のダンスを踊っていた。

「……………はい、休憩ー」

ナオキがそう言うと、みんなは疲れたように砂浜に座り込んだ。ナオキと童子はみんなに濡れたタオルとドリリンクを渡していった。

休憩が終わると次は発声練習からの歌の練習である。

練習はあつという間に終わってしまい、お風呂のあとに晩御飯の時間になった。

その場でもダンスで踊りにくいところがないか、ダンスで改善点がないかなど、話の話題はデビュー曲のことがほとんどであった。

朝も早いため、ご飯のあとしばらくしてみんなは眠りにつき、ナオキはその間にお風呂に入ったりしていた。

夜、ナオキが部屋で作業をしていると、部屋のドアがノックされた。

「はい、どうぞ」

「ちゃんとやってるか？」

「なんだ、童子先生ですか……」

「なんだとはなんやねん……まあええわ……紅茶持ってきたで」

「あ、ありがとうございます」

童子が紅茶を机の上に置くと、ナオキは礼を言った。

「ほんで、ナオキくんは何やってるんや？明日も朝早いやろ？」

「そう言ってる割には、紅茶持ってくるんですね……」

「ほんで、何してんの？」

「（スルーしてきた……）まあ、ちよつと学校のこと……」

ナオキはそう言つて机の上の資料に目を向けた。

「学校の……？」

「はい……共学にするために、おれが過ごしてて思った改善点などをまとめてるんです」

「なるほどなく……どれどれ……男子生徒用のトイレか……」

童子は机の上の紙を覗いて興味深そうに言った。

「はい。先生達と一緒にのトイレなんですけど……なかなか気まずくて……あはははは……」

「確かになく。授業の合間とかにそこで遭遇したらなんか言われそうやしな」

「そうなんですよね〜」

「ま、あんま無理せんと早めに寝りや〜」

「は〜い……」

童子はそう言い残して部屋を出ていった。

だがナオキは見逃さなかった。その童子の手にはお酒があったということ……

くくくラブライブ！くくく

夏合宿5日目……みんなは早朝からランニングをしてから曲に向けての練習に入った。昨日の晩御飯のときに話し合っつて変更したところを確認、練習し、それからダンスと歌の練習に入った。

ことりは衣装のデザインが浮かんだらしく、みんなの練習を見ながらスケッチブック

に衣装のデザインを描いていた。

そして早いものでその日の練習メニューも終了となり、次の日の練習に備えてその日はゆっくり休んだ。

翌日から……夏合宿6。7日目の練習メニューはナオキの担当であった。

6日目は真姫の別荘で過ごす最後の夜になり、さらに7日目には東京へ帰還することになっているため、そのスケジュールの関係もあるからである。

6日目のメニューはランニングや遠泳はなく、ほとんどがダンスと歌の練習であった。だが、この日の練習は早めに終了した。

なぜかというところ……

「バーベキューだー！！」

「BBQ！テンション上がるにやー！！」

「2人とも、騒ぐのはいいけど準備してくれよ？」

「はーい！」

そう、この後にはバーベキュー、通称BBQが控えているからである。

穂乃果と凜はいつものごとくはしゃいでいたが、しつかりBBQの準備も手伝ってい

た。

「ナオキ、このバーベキューコンロはもう外に出す？」

「ああ、頼む」

真癒美は置いてあったバーベキューコンロがしまつてある箱を外に持つていこうとした。だが、その動きは外を見た瞬間に止まつてしまった。

それを不思議に思ったのか、みんなは外の方に視線を向けた。

「雨だ……」

瑞希は雨が降っているのを見て、残念そうに声を漏らした。

「これじゃあバーベキューは中止か？」

「えく!？」

ナオキが仕方なさそうに言うのと、穂乃果と凜は叫び声をあげた。

「だってこの雨じゃ無理だろ？ 出来た肉とかが濡れちゃうかもしれないし」

「でも……」

「ほら、今日じゃなくてもまた今度みんなですればいいじゃん？ な？」

落ち込む凜にナオキは焦つて凜を慰めた。

「……だ……」

「穂乃果、なんか言ったか？」

「……やだ……嫌だ！絶対パーベキューするもん！」

穂乃果は急に声を張り上げて窓の近くに歩いていった。

「穂乃果、したいのはわかるけど、この雨じゃ仕方ないだろ？」

「そうですよ。また今度すればいいのです」

「それじゃダメなんだよ！今日という日は一生に一度しかないんだよ！もう二度と訪れないんだよ！たとえ来年であつてももう同じ日はこないんだよ！穂乃果はそんなの嫌なの！！穂乃果は今日という日に、みんなでパーベキューをしたいんだよ！！」

「ほ、穂乃果！」

穂乃果は熱弁すると窓を開けて雨空を見上げた。

「ちよつと雨が入ってくるでしょ！早く閉めなさいよ！」

真姫は穂乃果の予想外の行動に驚いて声を荒らげた。

そして穂乃果は思いっきり息を吸って天が張り裂けんばかりに叫んだ。

「雨やめー！ー！ー！！」

みんな、その穂乃果の行動には鳩が豆鉄砲をくらったような表情になつてしまった。そんなことで雨がやむはずがない、何言つてんだこいつ、などとこの時は誰もが

思った。

「つたく、何言つてんだよ、そんなことで雨がやんだら誰だつて苦労しねーよ……」

ナオキは呆れて穂乃果の方から視線を逸らした。

「あ、見てください!」

「ん、なにが?」

「空が……!」

「空?………つておいおい……!」

海末とことりがびつくりした声で言うと、ナオキはもう一度窓の方に視線を向けた。そして、目の前で起こっていることに驚きを隠せずに声をあげた。

「やんだ!本当にやんだよ!!」

なんと、さっきまで降っていた雨がやんだのである。みんなそのことを信じられずに言葉を失ってしまった。

「人間その気になればなんでもできるんだよ!!」

「いやいや、そうは言ってもこれは度が過ぎてるだろ!」

「に、日本人つて凄いですね……天気まで操るなんて……!」

「もしかしてお義兄ちゃんもできるの!」

「ほら、マシユと亜里沙が変なこと覚えちゃったじゃないか!!」

マッシュと亜里沙が目キラキラさせて言うのと、ナオキは指を2人に向け、それを振って言った。

「とにかく雨やんだし早くバーベキューの準備をしようよ!」

「だからっ……!……!……!はあ、わかったよ……みんな、準備再開だ」

「「「「「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」」」」」

そしてみんなはBBQに向けての準備を再開したのであった。

~~~~~♡~~~~~

「おいし〜!」

「穂乃果、肉だけじゃなくて野菜も食べるよ?」

「わかってるわかってる〜!」

穂乃果はそう言って皿に入れてあった肉を食べた。

「ナオキくん、お姉ちゃんはいつもそう言って肉ばかり食べるから強制的に野菜を入れ

た方がいいよ」

それを横から見てた雪穂は、呆れるナオキに言った。

「おお、そうなのか！ありがとう雪穂」

「ああ〜!?もう雪穂お〜！」

ナオキが雪穂の忠告に従って野菜を穂乃果の皿に入れると、穂乃果は頬を膨らませ、涙を少し目に浮かべながら言った。

「お姉ちゃんが悪いんだよ！」

「むむむむむ……!!」

そして穂乃果と雪穂は睨み合った。それを見て穂乃果の幼馴染みであるナオキとことりは苦笑いし、海未は呆れたようにため息をついた。

「ナオキくん、レタスをください！」

「あ、じゃあ私も」

「なら私も貰おうかしら」

「私も〜！」

マシユに続いて瑞希、真癒美、亜里沙は手を挙げた。

「おう、いいぞ！どんどん食え！しかし一年生は偉いなくどこかの誰かさんとは違つてな」

「なっ……!?!」

ナオキがその誰かさん……穂乃果を見てニヤリとすると、穂乃果は驚いてから悔しそうな表情をすると、キツと皿に入れられた野菜を睨みつけた。

「そうかく穂乃果さんは一年生とは違つて野菜を食べないのかく! そうかそうか……ほら、みんな皿貸してくれ」

ナオキは穂乃果を煽つて一年生組から皿を受け取つて肉はもちろん野菜も入れて渡していくと、穂乃果の頬はどんどん膨らんでいった。

そして穂乃果は怒つたのか、もぐもぐと入れられた野菜も食べ始めた。

「美味しいにゃ〜!」

「うん、そうだね!」

「花陽ちゃんはお飯よう食べるな〜」

「……………」

「ん、真姫ちゃんどうかしたの?」

花陽は何か考えていそうな真姫に声をかけた。

「え、ううん、なんでもないわ」

「そう……はーむっ!」

花陽は心配そうな表情をしたが、それからまたお飯を口の中に入れた。

真姫も少しずつ食べていたが、やはり何かを考えていた。

「ナオキ、焼くの代わりましようか？」

海未は肉などを焼いてばかりいるナオキに声をかけた。

「ん、いや大丈夫だよ？」

「でも焼いてばかりで食べられないじゃないですか？」

「そんなことはないぞ？ちゃんとおれも食べてるし」

ナオキはそう言つて肉をひっくり返してから、組み立て式の机の上に置いてあつた皿を手に取つて肉を食べた。

「ならいいのですが……」

「私が変わるわよ」

「真癒美……だからいいって」

「大丈夫よ。私はお腹いっぱいだし」

海未がナオキが焼く係を代わりそうになく引き下がろうとすると、真癒美がナオキの横に立つてその係を代わつた。

ナオキはそう言われて皿を持ってブルーシートの上に座つた。

「おいしい！ナオキい〜！」



「えっ!? あ……童子先生……?」

しばらくナオキが食べ続けていると、先程とはどこかが違う童子がナオキの横に移動して、ナオキに声をかけた。

「そうやそうやく! はははっ!」

「くさっ……ちよつと飲み過ぎじゃないんですか?」

「あゝ? うるせえゝなゝ! どんなけ呑もうとウチの勝手やろゝ?」

「ま、まあそうですけど……」

ナオキは豹変した童子に困惑していた。

「せや。お前確か絢瀬の彼氏やったなゝ! 思い出すわ、確か絢瀬にも飲み過ぎやってあんなとき言われたなゝ」

「そ、そうなんですか……」

「ほんまにお前らはカップルやからっておもんないこと言いやがって……!」

「そりやあどう……ウチはまだ独身やのに、羨ましいやんかゝ!!」……あ、はい……」

「くそっ! もう一杯呑む!!」

童子は目に悔し涙を浮かべると、立ち上がってまた酒を取りに向かった。

「これは何言つても無駄か……」

「あれが噂の”音ノ木坂の酒呑童子”しゅてんどうしね……初めて見たわ」



「酒だ〜……むにやむにや……」

童子は呑んで騒いで疲れたのか、別荘のベッドで眠っていた。この童子が寝ている部屋までナオキが童子を運んだのである。

その頃みんなはBBQとその片付けを終え、BBQの材料と一緒に買ってきた花火をして楽しんでいた。

「とお〜！」

「にや〜！」

「こら！穂乃果、凜！」

穂乃果と凜が花火が勢いよく出ている状況で騒いでいたので海未はその2人を注意した。

「はははははつ、危ないからあんまり騒ぎ過ぎるなよ〜」

ナオキは笑ってからそう言うと、周りを見まわして真姫を探した。

そして、みんなから離れたところで1人で線香花火をしていた真姫を見つけてそこに向かおうとした。

「あ、ナオキくん……」

「花陽……どうかしたのか？」

「その……真姫ちゃん、なんだか考え事してるみたいで……」

「そうなのか!？」

「うん、だから……お願い」

「ああ、任しとけ……」

花陽はナオキを呼び止めて言うと、ナオキは頷いてまた足を真姫の方に進めた。

「真姫……」

「こっち向かないで……」

「……わかった」

ナオキはそう言つて線香花火に火をつけ、真姫はもう1本の線香花火に火をつけた。

「真姫、何か話したいことでもあるのか？」

「ええ、そうね」

「なら言つてみる」

「最初からそのつもりよ」

「ならよかった」

2人は小さな声で話し、真姫は誰にも言えなかったことをナオキに話し出す。

「私ね、ずっと前からナオキのことが好きだったの。」

仲間としてじゃなくて、一人の恋愛対象として好きなの……」

ナオキは約束通り真姫の顔は見えていない。だが、そう言う真姫の頬がうつすら赤く染まっているのはわかった。

真姫がそう言うのとナオキの線香花火はパチパチし始めた。

「そうなのか……でも……」  
「応えは言わなくて良いわよ。別にナオキの応えはわかってるんだし……」……そうか……」

そして真姫の線香花火もパチパチし始めた。真姫はそんな線香花火を見つめていた。

「だってそんなのわかりきってるもの。ナオキには絵里がいるんだし、当然よね。でもやっぱり伝えなかったのよ。それが、”叶わない恋”だとしても……ね」

ナオキは決して真姫の方を向かずにそ話を聞いた。

正直なところ、この夏合宿2度目の告白ということもあり、困惑していた。

「ずっと考えていたのはこのことなのか？」

「ええ、恥ずかしいけど……」

「でも話してくれてよかったよ。ありがとう……真姫の気持ちは嬉しいよ」

「だから応えなくていいって……ヴええ……」

真姫の声に少し力が入ってしまおうと、真姫の線香花火の火玉が地面に落ちてしまった。

その線香花火は真姫の短い初恋をしめしているかのようであった。

「ふっ、おれの勝ちだな……」

ナオキがそう言うとなオキの線香花火の火玉も地面に落ち、ナオキは立ち上がって背筋を伸ばした。

真姫は少し悔しいのか頬を膨らまして地面を見つめた。

「まああれだ、応えなくていいなら言わない。話を聞く限りは本当に応えはわかっているみたいだし。でもこれだけはちゃんとやらせてくれ……」

きつと真姫にはおれなんかよりいいやつがきつと現れるさ。だから真姫には政略結婚とか家の関係とかでして欲しくない……いやするな。真姫にはちゃんと恋愛して欲しいから……約束してくれるか？」

ナオキは夜空に堂々と構えている月と、夜空いっぱい輝く星たちを見上げて言っ

た。

真姫はそんなナオキをキラキラした目で見つめた。真姫はそんなナオキを見て「ナオキは自分のこれからのことをちゃんと心配してくれているんだ」とわかり、心が温かくなつたような感覚に襲われた。

「ええ……約束するわ。私は、私が好きな人と結婚するわ」

「よろしい……それじゃ、今まで以上によろしくな」

ナオキはそう言つて先程までいた場所に向かつて歩き出した。

「ほんと……優しいのね……」

そう呟く真姫の目から、ポツポツと数滴の涙が地面に落ちていった。

そして、夏合宿は最終日を迎え、朝から軽く練習してからアイドル研究部は東京へと帰っていったのであった。

次回に続く……





「ええ、ちよつと〜!」

そして私は亜里沙さんに腕を引つ張られてリビングに連れていかれました。  
正直、薄い本読みたかったなあ……

「くらえ!」

「ああつ!」

なにをしているかという、みなさん一度はやったことがあるんじゃないですか? 攻撃して、レースで一番を狙う……マ〇オ〇〇〇っていうゲームです。

さっきは亜里沙さんに甲羅を投げられて、私の使ってるキャラが空中を何回転もしたんです。

「へへっ、梨子ちゃん……油断大敵だよ!」

「くう……!でも、私は負けませんよ!」

私は負けじとスピードをあげたり、キノコも駆使して追い上げます。

それからは私が亜里沙さんを抜いたり、亜里沙さんが私を抜いたりしていました。

そしてそのレースの結果は……

「やった〜!私の勝ち〜!」



……聞かないでください。

「やっぱり絵里さんの料理は美味しいですね」

「お姉ちゃんだもん、当たり前だよ!」

亜里沙さんは我がことのように胸を張ってそう言いました。きっと絵里さんのことが大好きなんだな〜

「ふふっ……次はなににするんですか?」

内心、私は次に亜里沙さんと何をして遊ぶのか楽しみにしていました。

「う〜ん、そろそろ宿題した方がいいかもね。一緒にしよう!」

「わ、わかりました……」

「そういえばまだ宿題終わってなかったなあ……それまではゲームも薄い本も我慢しないと……」

「……で、なんで私の部屋?」

「いいじゃないじゃない!さ、早く終わらさないと!」

亜里沙さんは夏合宿があるから宿題をできるだけ早く終わらせたいみたい……

それから私達はほぼ無言で勉強してました。話した話題といえは……

「あ、その教科の担当誰なの？」

「えつと……齋藤先生ですね」

「ああ、あの『齋藤先生だけ☆』の？」

「そうですそうです！」

「あの先生はカモだよ！」

そういう話題でしたね。

~~~~~♡~~~~~

ナオにいと亜里沙さんは夏合宿に行って、この日から1週間は私と絵里さんの2人つきりになりました。

「……………」

「……………」

気まずいです。超気まずいです。誰か助けてください。お願いします。

なんだかナオにいを送って帰ってきてから絵里さんが機嫌悪いんですけど!
今は晩御飯を食べてるんですけどね、さつきからあまり話さないんです。

話すことといえは……

「お塩はいる?」

「はい、いただきます」

とかの必要最低限のことだけなんです!!私、何か嫌われることしたのかな?

まさか……ナオにいと仲がいいから嫉妬されてる?

そ、そんなわけ……そんなわけ……あるのかな?あつちやうのかな!?

「ごちそうさま……」

「ご、ごちそうさまでした……」

そ、そうだとしたら、な、なにかき、機嫌をとるようなことをしないと!えつと……
えつと……

「と、とても美味しかったです!こんな美味しい料理を毎日食べられるナオにいが羨ましいです!」

「そう……?それはよかったわ」

わ、笑ってくれた……!

「……………はあ……………」

ため息きたあつ!?

え、なんで、なんでなの!? 一体なにが……私には……わからない……

くくくライブ! くくく

私は今、絵里さんの部屋の前にいます。きつと私がないそのとき、絵里さんは本音を呟くはず……!!

「ふふっ……」

ん、今のは絵里さんの笑い声? さつきより機嫌がよくなってる……のかな?

「ナオキの声が聞いてよかったわ」

今ナオにいと電話中……? それで機嫌がいいのかな?

だとしたらまさか……

「……はあ……もつと話したかったなあ……」

ナオにいがいないから寂しがつてるだけ!?

まさかそれを隠すために……というかだから機嫌悪いの!?

絵里さん……可愛い……可愛すぎでしょ!? そりやあナオに何も惚れちゃうわけよ

「あら、こんなところで何してるの?」

「へっ……? え、絵里さん……!」

あ、絵里さんに見つかっちゃった……

ご、誤魔化さないと……!

「えつと……べ、勉強を教えて欲しくて……」

「ん、そのわりには勉強道具持っていないみたいだけど?」

お、おーまいが……私としたことが……

「あ、わかったわー!」

「へっ!」

ま、まさか……私が盗み聞きしてたこと、バレた……?」

「梨子ちゃん……私とお話したかったんでしょ!」

よ、よかった……!! バレてないみたいね! そう、話を合わせるのよ梨子!

「そ、そうなんです! 折角2人なんだし、そんなのいいかなって!」

「ふふつ、そうなのね。それなら部屋で待ってて、お菓子と飲み物持ってくるから!」

絵里さんはそう言ってリビングの方に行きました。とりあえず、部屋で待ってよ。

「あ、そうだ梨子ちゃん……」

「は、はい？」

「………ウソついちゃダメよ」

「は、はい……」

どうやらバレてたみたいですよ……

恐ろしや………絢瀬絵里……

~~~~~♡~~~~~

「………そしたらね、ナオキが立ち止まって………」

「キヤー……！」

あ、ごめんなさい、つい興奮しちゃって……

今、絵里さんがナオキに告白されたときのことを聞いているんです！

あと、ナオキにいと初めて会ったときのことや、小さい頃遊んだことを話してくれまし



た。

あく私もそんな恋してみたいなく……なんて、ふふっ……

「本当に、ナオにいと絵里さんが羨ましいです!好きな人同士こうやって結ばれるなんて……ロマンチックですね……」

「そうね。私もこんな恋愛するなんて思わなかったもの……」

すると絵里さんは感慨深そうな表情を浮かべてから、どこか寂しそうな表情を浮かべました。

やつぱり……ナオにいがいないから……?」

「絵里さん、もしかして……ナオにいがいないから寂しかったりします?」

「な、なに言ってるのよ。そ、そんなことないわよ。ほ、ほんの1週間くらい……」

あ、絵里さんが顔を赤くして目を逸らした。これは凶星よね。

「寂しいんですね?」

「………悪いかしら?」

「いいえ、全然!」

絵里さんって、やつぱり可愛いです!

「あ、そうだ!もつとナオにいとのお話聞かせてください!」

「そんなに聞きたいの?それなら……あ、これはナオキと初めてデートに行った時のこ

とただけどね……」

それから、絵里さんからたくさんのお話を聞きました。その話を聞いて思ったのが………ナオ絵里は尊いってことですね。

~~~~~♡~~~~~

「うくん………」

「梨子ちゃん、大丈夫？」

「は、はい！大丈夫です！」

危ない危ない、ちよつと寝かけてたみたいですよ。

私が絵里さんからお話を聞いた後に夏休みの宿題を始めて、かれこれ30分が経っています。なんとなくですが、ここで宿題を終わらさなければ後悔しそうですね！なんとなくですが！

でも………なんだか頭がくらくらします………

「本当に大丈夫?無理せずに寝てもいいのよ?」

「だ、大丈夫……です」

えつと……次はこの問題……

次の四字熟語の意味を答えなさい……

一石二鳥……これは簡単ね……

意味は……一つの行為から、二つの利益を得ること……

次は……電光石火……

あ、そういえばナオにいが昔この四字熟語の意味が、ノーマル技で必ず最初に攻撃で
きるって答えてたな……

だからよく覚えてるわ……意味は……

意味は……

……

「はっ!?あれ、あれ?」

気がつくくと私の頭の後ろには枕があり、布団が私の身を包んでいました。

そして隣から寝息が聞こえてきたのでそつちを向くと……

「ん……ナオキ……ふふっ……」

絵里さんが気持ちよさそうに寝ていました。ナオにいの名前を呟いて……

「私、寝ちやったのかな？」

机に昨日のしていた宿題が広がっているのを見ると、やはり私は寝ちやつてたみたいです。

「ん……あら、梨子ちゃん起きたのね。おはよう」

「絵里さん、おはようございます」

「ん、ん……」

絵里さんは起き上がって体を伸ばしました。

そのせいで、絵里さんの大きな胸も上に引つ張られていて……ああ、ナオにいがいたらどうなつてたのかな？

ま、いつか……さてと、今日こそは宿題終わらさないと！

「さ、朝ごはんにしましょうか」

「はー！」

と、その前に腹ごしらえです！

腹がへつては戦はできずって言いますしね！

「はい、どうぞ」

「いただきます!」

今日の朝ごはんは食パンとスクランブルエッグです!

あ、あれ……?

「絵里さん……なんで食パンが3枚余ってるんですか?」

「えっ!?えっと……」

私が食パンが余っているのを指摘すると、絵里さんはギクツとして誤魔化すように指でほっぺたを掻き始めました。

「あ、もしかしてナオにいと亜里沙さんの分も作っちゃいました?」

「ギクツ!」

「ふふっ、やっぱりそうなんですネ」

「あははは……いつも作ってるからつい……」

やっぱり、2枚はナオにいの分で、1枚は亜里沙さんの分でした!絵里さんって案外ドジなところもあるんだな。

「さ、さあ、早く食べて宿題しないとでしょ?」

「そうですね……はむっ」

絵里さんって少し怖いイメージもあったけど、いくつかかわいい一面も見れたし、ナオにいが絵里さんに惚れた理由も少しわかったような気がしました。

そして絵里さんとの2人の時間もどんどん終わりに近づいてきました。

ついに今日、ナオにいと亜里沙さんが合宿から帰ってくるんです！

絵里さんは朝から鼻歌を歌うほどに機嫌がいいし、私もちよつと嬉しいかな？

あれから宿題をしてその日のうちに全部終わって、この5日間はゆつくりと過ごしました。ナオにいに褒めてもらえるかな？えへへへ……

「梨子ちゃん、ナオキ達そろそろ着くみたいよ」

「は〜い！」

それに、この1週間で絵里さんとも仲良くなれた気がします！

以上が絵里さん、亜里沙さんと2人で過ごした日の思い出でした。

次回に続く……

第139話 「仲が良いのか悪いのか」

「……………暇だ」

ナオキは電車の窓から外を見つめてそう言った。となりの亜里沙はナオキにもたれて寝てしまっている。雪穂も眠たいのか目を細めてコクコクと首を振っていた。

「雪穂も眠たかったら寝ればいいのに……………」

「ね、眠たくないよ！お姉ちゃんと一緒にしないで欲しいな！」

「それは言えてるな」

そう、雪穂の言う通り。雪穂の姉である穂乃果は気持ちよさそうにいびきをかいて眠っていた。

「でも眠たかったら遠慮せんとウチにもたれて寝てもええんやよ？」

「そ、そんなことできませんよ！それに私は寝ません！」

「それならええんやけどな」

童子はそう言うことからスマホをまたいじり始めた。

ナオキはさつき窓からの景色を写真で撮ってメッセーリアアプリで絵里に送り、それから会話を続けている。

それから少し経つと雪穂は眠ってしまい、童子にもたれた。童子とナオキはそれを見て笑顔を浮かべた。

真姫は笑みを浮かべるナオキを見つめていた。そしてその視線はどんどんナオキの唇に向いていき、真姫は頬を少し赤く染めて顔を窓の方に逸らした。

「……………」

真姫は無言のまま自分の唇に指を当てて、あのことのことを思い出した。

数日前、ナオキが海に沈められたとき、ナオキはその沈めた張本人である海未によって引き上げられた。

「ナオキ、すみません！だから起きてください！」

海未は少し泣きそうになりながらナオキの体を揺すった。

「海未、どいて！」

すると真姫が海未を跳ね除けてナオキの胸のところに耳を当て、心臓マッサージを行なうというのを繰り返した。

「んんんん！もう！」

真姫は吹っ切れたようにナオキの唇に自分の唇を重ねて息を吹き込んだ。

「はっ……………!!!」

海未は真姫のとつた行動を見て顔を赤く染めた。

「……………ゲホッ、ゴホッ、はあっ……………」

「つ……………ナオキ!」

「これでもう安心ね……………」

ナオキが咳き込みそのまま眠ってしまおうと、2人は安堵の表情を浮かべた。

「ま、真姫……………い、今のは……………」

「つ……………誰にも言わないでよね!」

「は、はい!」

真姫は海未に先程の行為のことを聞かれると顔を真っ赤に染めて声を荒らげた。

そしてナオキはベッドに運ばれ、朝を迎えることになったのである。

「つ……………!」

真姫はそのことを思い出してか、先程より顔を赤くした。

そして真姫は恥ずかしがりながらも、自分しか聞こえないような声で呟いた。

「初めて……なのよね……」

そしてアイドル研究部の一行は東京駅に到着し、各々解散したのであった。

~~~~~♡~~~~~

「いやあく久しぶりに帰れるな」

「そうだね〜」

ナオキと亜里沙は絵里と梨子が待つ自宅に向けて足を進めながら話していた。

「帰ったら絵里と梨子ちゃんに思い出話を聞かせないとな」

「うん！合宿とつても楽しかったからいっぱい話したいことあるんだ〜！」

「それはよかった」

そんなこんな話しているとマンションの自分達の部屋のドアの前に着いていた。

そしてドアを開けて2人は声を合わせて元気よく言った。

「ただいま〜！」

「ナオキ〜！」

「おっと……！」

すると玄関付近にいた絵里がナオキに飛びついた。ナオキはそんな絵里を受け止めてギュツと抱きしめた。

「ふふっ、おかえりなさい！」

「……ああ、ただいま」

絵里がニコツとナオキを見上げて言うのと、ナオキはそんな絵里の頭を撫でて優しい声でそう言った。

「うう〜暑いから早く入ろう！」

「ふふっ、そうね。外暑かったでしょ？」

「ああ、アイスが食べたくなったよ」

「私も食べた〜い！」

「はいはい、それじゃあみんなで食べましょう」

「やった〜！」

亜里沙はアイスが食べられると喜んでリビングに向かって走っていった。

「私達も行きましたよ?」

絵里も亜里沙に続いてリビングに向かおうとした。だが、ナオキが離さないののでそれができなかった。

「ナオキ……?」

絵里はそれを不思議に思ってナオキの顔を見ると、ナオキはジツと自分の顔を見つめていた。絵里はきゅつと胸が締め付けられる感覚に襲われ、ナオキの顔を瞳を揺らして見つめた。その感覚はナオキも同じであった。

そして絵里はナオキの意図がわかったのか、ニヤリとしてナオキの顔を見た。

「な、なんだよ……」

「ナオキったら、そうして欲しいならちゃんと言えばいいのに……」

「……………悪いか?」

「ふふつ、べつにつに〜」

すると絵里は少しだけ背伸びをしてナオキの唇にキスをした。

「ん……久しぶりだな」

「ふふつ、そうね……ほら、早く行きましょう」

「ああ!」

そして絵里とキスをするナオキは元気になったようで、嬉しそうにリビングに向

かった。

「ほんと、子供みたい……ふふっ」

絵里はそう呟いてからリビングに向かった。

本当に、いところが見ているとは知らずにキスを欲しがるなんて、ナオキくんも子供です。ね。

くくくラブライブ！くくく

「それでね、お義兄ちゃんにダンス褒められたんだよ！」

「そうなの？」

「ああ、流石は前から雪穂と2人で練習してただけはあるよ」

亜里沙とナオキは、絵里と梨子にクーラーの効いているリビングでアイスを食べながら夏合宿のことを話していた。

「そういえばナオキに、亜里沙さんの呼び方とか変わってない?」

すると梨子がナオキの亜里沙への呼び方が『亜里沙ちゃん』から『亜里沙』に変わっていることに疑問を覚えたようで、質問を投げつけた。

「ああ、実はアイドル研究部には『先輩禁止』っていうのがあってな、それで亜里沙がおれにそう呼んでほしいからって言ってきたから変えたんだよ」

「へ〜……そんなルールがあるんだね〜」

「実はね、それは私発案なのよ」

「お〜〜!」

絵里が胸を張って「先輩禁止」の発案を自慢すると、亜里沙と梨子は目をキラキラさせて声をあげた。

「ふわあ〜……」

するとナオキが大きな欠伸あくびをして、他の3人は不思議そうにナオキを見つめた。

「ナオキ、眠たいの?」

「そうなのかもしれない……ふわあ〜……」

絵里がナオキに尋ねると、ナオキはまた大きな欠伸をした。

「ふふつ、別に寝てもいいのよ? きつと疲れたんでしょ?」

「そうだな……それじゃあお言葉に甘えて……」





「結構寝てたな……んんんん！」

「ふふつ、もうすぐご飯できるから座って待ってて」

「は〜い」

ナオキはゆっくりと椅子に向かって歩いて座ってご飯の時間を待った。

その後亜里沙と梨子も揃い、ナオキと亜里沙にとっては久しぶりの絵里の手料理を食す時間となった。

「んん！ やっぱり絵里の料理が一番だ！」

「うんうん！」

「も、もう！」

絵里はナオキと亜里沙に褒められて照れたのか頬を赤く染めた。

「ねえねえナオにいい！ 他にも合宿の話聞かせて！」

「おつ、聞きたいのか？ それならどこから話そうか……」

「それならマシユちゃんを支えて助けた時のことを話せばいいと思うよ！」

亜里沙がそう言った瞬間、部屋の空気が張り詰めた。ナオキも梨子は、絵里がその一言に疑問を持ったことを悟ったのだ。

「……亜里沙、詳しく」

「うん！ あのね、マシユちゃんが足をくじいてね、お義兄ちゃんがすぐに泳いでマシユ

ちゃんのところに向かって、そのままマシユちゃんの肩を持って助けたんだよ！」

「へ、へえ〜！ナオにいかっこいいね〜！」

「……………そうね」

「あははは……………（こ、怖え〜〜!!ちよつと待って、これ完全に機嫌悪いよな!?!どうしたらいいんだよ〜?!）」

梨子が空気を良くしようとして試みたが、その努力も虚しく絵里の機嫌は良くはならず、逆にとても悪くなっていた。

ナオキはそんな絵里を見て身の危険を感じていた。

「亜里沙、他に合宿中のナオキの”みんなとの”エピソードはないかしら?」

ナオキは絵里の『みんなとの』というところに恐怖を覚えて体を震わせた。そんなナオキは亜里沙の話すことが絵里の機嫌をさらに悪くしないようにと祈るしかなかった。

亜里沙はナオキのそんな不安なんて知る由もなく、ぺらぺらと夏合宿のことを絵里に話していた。

（よし、その調子だ……………これなら絵里の機嫌も少しぐらいは良くなるはず……………!）

ナオキは亜里沙が話している内容を聞いて希望を持ち、絵里の顔の方に目を向けた。絵里は明るく笑っていて、ナオキは助かったかに見えた。

だが、ナオキにはわかる。この絵里の笑顔はどんどん怒っている表情であることが。

「あとね、バレエボールが当たって真姫ちゃんのお腹にダイブしちゃったの！」

「ふふつ、亜里沙はドジね〜」

「お姉ちゃん何言ってるの？ダイブしたのはお義兄ちゃんだよ？」

「ブホッ！」

だがついに亜里沙は爆弾を投下したのである。絵里の表情は完全に黒くなり、動きも固まった。これはつまり、ナオキの終わりを示している。

「ナオキに、それはないよ……ごちそうさまでした」

「り、梨子ちゃん……!?!」

梨子はナオキを見捨てたのか、食器を片付けてリビングを去っていった。ナオキはいところにも見捨てられ、汗がたらたらと流れるように出てきた。

「……………亜里沙、お風呂に入ってきたら？疲れたでしょ？」

「うん、わかった！」

そう言うとき亜里沙はスタスタとお風呂場に向かった。

リビングには、ナオキと絵里の二人つきり……………明らかにまずい状況である。

「……………さて、おれも……「あら、どこに行くのかしら？」…いい、いや、疲れたから寝ようかな〜って……………」

ナオキはこの部屋の空気に耐えられなくなったのか、リビングから立ち去ろうと立ち

上がったが、そううまく物事は進まず、絵里に止められてしまった。

「ちよつと座つてくれる？ 話したいことがあるから………ね？」

「う、ういつす………」

ナオキは絵里の怖い笑顔と威圧感によりそれに従わざるをえず、椅子に座った。

「……………それで、真姫のお腹はどうだった？」

「違うんだ、誤解なんだ！ あれはバレーボールが顔面に回転しながら当たって、その勢いでダイブしちゃっただけなんだよ！ 決してしたかったわけじゃないんだ!!」

「ダイブしたのには変わりないじゃない？」

「そ、それは……………そうだけど……………」

ナオキはそう言うのと、返す言葉がないというふうになを向いて目を瞑った。

「……………もう知らない」

「え、絵里い……………」

絵里が怒つて立ち上がつて食器を片付け始めると、ナオキは子犬のような目で今にも泣きそうな声で言った。

だが絵里はそんなナオキには目もくれずに食器洗いを始めた。

ナオキはそんな絵里を見てシユンと落ち込んでしまい、顔を両手で塞ぎながらソファーにもたれた。その状態はまさにありふれた悲しみの果てである。

だが絵里はナオキを全く見ていない訳ではなかったのである。さつきからずっとナオキのことをチラチラと気にしながら皿洗いをしている。

そしてそんな絵里は心の中では

（あああああ、ちよつとやりすぎたかしら？嫉妬しちやつたのは認めるけど……あそこまで落ち込んだじやうなんて思わなかったわ……もう許してあげた方がいいのかしら？）

なんて自分の先程の態度を後悔していた。それから絵里は心が落ち着かないまま皿洗いを終え、濡れた手をタオルで拭いてまだ落ち込んでいるナオキの方を見た。

一方ナオキは水の流れる音が聞こえなくなり、ついに絵里からお説教をくらわされるのだと危機感を感じていた。

ナオキを気にかけてゆつくりと歩いてくる絵里の優しそうな足音は、逆にナオキの恐怖を煽ってしまった。

（絶対怒られる絶対怒られる絶対怒られる……）

そして絵里はナオキから少し離れたところに腰掛けて、チラチラとナオキの方を見ていた。

「ナ、ナオキ……」

「は、はいっ……！」

ナオキは絵里に名前を呼ばれ、ついに怒られるのかと思い少しビビったように返事をした。

「なにか言うことはある?」

「ごめん!!」

「はやっ!?!」

絵里はナオキの謝るスピードが早いため驚いて体を後ろに逸らした。ずっとナオキは両手を重ね、それを上に挙げて頭を下げていた。

「ん……その……ちゃんと反省してるみたいだし……今日のところは許してあげてもいいわよ?」

絵里は恥ずかしがっているのか頬を赤く染めて視線をナオキから逸らして言った。最早ツンデレである。

「ほ、ほんとに!?!」

「ええ……その……仕方なくなんだからね!」

もうツンデレとしか言いようがない台詞である。絵里はそう言うってから片目を開けて驚き、喜んでいるナオキの表情を見た。そんなナオキを見て絵里はキュンキュンしてしまったようでさらに頬を赤く染めた。

「でもやっぱり、絵里とこうして話したりするの楽しいわ」

「…………ふふっ、私もよ」

それから2人は笑いを零して、小さな声で見つめ合って笑った。

梨子はリビングのドアからそんな2人を覗いていて、今まで通りに仲良くしているのを確認するとホッと胸を撫で下ろした。

「…………ナオキ、お詫びと言っちゃんだけど……………いいわよ?」

絵里は笑いを止めると、少し照れながら自分の太もものあたりをポンポンと叩いて、膝枕をしてあげてもいいと意思表示をした。

「おお、なんか久しぶりだな。それじゃ、失礼して…………」

そしてナオキは迷うことなく絵里の脚に自分の頭を乗せた。

絵里は少し驚いたが、すぐに笑みを浮かべてそんなナオキの頭を優しく撫でた。そんなナオキと絵里の表情は嬉しそうなものであった。

そして、そんな2人を見ていた梨子は顔を俯けて部屋へと戻っていった。それから部屋の布団に寝転び、枕に顔を埋めた。

「ナオキ絵里……………尊い……………」

なにやら嬉しそうな声であつた。

次回に続く……



## 第140話 「夕日に照らされる一凜の花」

「あら、ナオキ出かけるの?」

ナオキ達が帰ってきて2日が経ったある日、絵里はナオキが出かける準備をしているのを不思議に思つて声をかけた。

「ああ、ちよつと凜と買い出しにな」

「ふくん、凜とね?」

「……………何か疑つてたりする?」

「べつにつに?」

「あははは……………(絶対疑つてるな、これ)」

絵里はナオキに明らか疑いの表情を向け、ナオキは苦笑いしかできなかった。

もちろんナオキにはそんなつもりは全然なく、本当にただ部活の買い出しがあるだけなのである。

「……………何時頃に帰ってくるの?」

「ん?多分夕方には帰ってくると思うよ。買い出しだけだし、そんなに時間はかからな

いと思うし」

「そう?……本当に買い出し?」

「本当だって!信じてくれよ……な?」

「……わかった」

絵里が少し頬を膨らませてそう言うと、ナオキは絵里の頭を何も言わずに撫でた。すると、絵里は嬉しそうな表情を浮かべた。

「さてと、そろそろ行くかな」

「あつ……うん、わかった」

ナオキが手を離して出かけようとすると、絵里は残念そうな声をあげて、残念そうな表情をして、残念そうに頷いた。ナオキはまだ疑ってるのかなと少し不安になり、あることを思いついた。

「うくん、信じてくれないならこれでどうだ?」

「えつ……?」

ナオキはそう言うど何をするかわかっていない絵里の方を向き、絵里を強引に引き寄せ、絵里の唇にキスをした。

さらにまだ驚く絵里の唇の中に無理やり舌を入れ、絡ませた。

ナオキが唇を離すと絵里はトロンとした目でナオキの顔を見つめた。



「そろそろ時間か……」

そしてナオキは集合時間の10分前にはこの場所にいたのである。

ナオキはスマホのホーム画面の時間を見て集合時間が近づいていることを確認して、凜が来ていないかと周りを見回した。だが凜の姿はまだ見えなかった。

それから数十分後……

「時間……間違っていないよな？」

ナオキは集合時間が過ぎたのに凜が来ないので不安になり、メッセージアプリでの凜との会話を見返して、集合時間を確認する。

だが時間はナオキが覚えていたのと同じ時間であった。

「まあ、ちよつと過ぎたところだしもうちよい待ってみるか」

ナオキは凜が遅れてくるのだろうと予測してもう少し待つことにした。

だがいくら待っても凜が来る気配はなかったので、ナオキは凜にメッセージを飛ばした。

「ニヤ〜ニヤ〜」

「ワンワン」

「そういやこの店には初めて来たな〜」

ナオキは今、シヨップイングモール内にあるペットシヨップに來ている。

猫や犬をはじめ、様々な動物の賑やかな鳴き声が店中に響いていた。そんな動物達を「かわいい〜」と目を輝かせながら見る小さな子や、吠えた犬にびつくりして泣いてしまいい親に慰められている子もいた。

そしてそんな店の奥に見覚えのある髪色をした女の子が猫を眺めていた。ナオキはため息をついてその女の子の方に向かった。

「凜さん、お楽しみのようなので」

「あ、ナオキくん来た！もう遅いよ〜？ずっと待ってたんだからね！」

「それはこっちのセリフだ！」

「にやっ!？」

この事件の経緯を説明しよう。

しびれを切らしたナオキは凜にメツセージを飛ばした。そして凜からは「今、ペット

ショップにいるから早く来てにゃ〜！」とペットショップの猫の写真と一緒に送られてきて、ナオキはまさかの事態に口を開け、それからため息をつけてこのペットショップに向かった。

実はこの凜、楽しみすぎて集合時間の1時間ほど前から来ており、暇なので巷で話題のペットショップに足を運び、そのまま集合時間を迎えたのである。

「まったく、集合時間はいいとして、集合場所くらい守れよな？」

「え、だってショップピングモールの中に集合って昨日……」

「違う！ショップピングモールの広場の噴水の前だ！お前はどこを見てるんだよ!？」

「え……あ、ほんとだ……あはははは……」

さらに凜は集合場所を間違えていた。

ナオキがスマホでメッセージアプリの凜とのトーク画面を見せると、凜は汗を垂らして間違いを誤魔化すように笑った。ナオキはため息をつくしかなかった。

「しっかりしてくれよ？ 仮にもお前はリーダーなんだから」

「は〜い……」

「さて、じゃあ気を取り直して買い出しに行くか！」

「お〜！」

凜は腕を天に突き出して元気な声で言った。

2人は先輩後輩の関係であるが、周りの人達は2人を見て仲のいい兄妹きょうだいだなど思っていたようだ。

だが不思議なことに、誰もそれが伝説のスクールアイドルμ sのメンバーの2人だということとは気づかなかったのである。

「ねえねえ、さっきのつてμ sの凜ちゃんとなオキさんじゃない?」

「そんなわけないでしょ?こんなところにあのμ sがいるわけないじゃない?」

「たしかに。いたとしたらきつとサングラス掛けたりして変装してるわよ!」

そんな女子の会話を聞いて早歩きでペットショップを出ていったみたいだが……

~~~~~ラブライブ!~~~~~

「次は……文房具か」

「あつ、あそこにや〜!」

「はいはいわかつてるからそんなに走るな〜」

ナオキと凜はペットショップを出てから買い出しを始め、最初に衣装で使う裁縫系の

物を揃え、続いては文房具を揃えようと文房具屋へと向かった。

凜は文房具屋を見つけると嬉しそうに走り出した。

「えつと……なに買うんだっけ？」

「お前なあ……」

そして店の中で凜は何を買うかわからなくなり、そんな凜にナオキは呆れたように頭を押さえて首を振った。

「あれ、ナオキくん頭押さえてるけどどうしたの？ 具合悪いの？」

「誰のせいだと思ってるんだよ!？」

「えっ!? まさか、凜のせいだっけ言うの!? それは心外にや!？」

「お前は自分の今日やってきたことを思い返せ!？」

「うくん……凜はちゃんと時間通りに来たし、お金もちゃんと忘れずに持ってきたし、ちゃんというものしか買ってないし……どこか悪いのか凜にはわからないにや」

「お前はつ……くつ……もういい、とりあえず早く買い出し終わらせるぞ」

「は……い」

ナオキは無自覚な凜に頭を悩ませるが、説教すらも諦めて買い出しを再開した。

「ありがとうございました」

ナオキ達は文房具屋で買い出しを終えて店から出た。

「やつと終わったにや〜!」

「ああ、これぐらい買えば十分だろ。あとはなにか思い当たる物とかあるか?」

「思い当たる物? う〜ん……」

「おお……」

凜が珍しく真剣に考えている……とナオキは心の中で感心した。凜もやれば出来る子なのだ。猫の手も借りたいと同じようなニユアンスで、凜の手も借りたいと言っていたナオキであったが、これを期に変えてみるのもありなのではないかと考えた。

「……………お腹すいたにや」

前・言・撒・回。

やはり凜は三バカの凜であった。ナオキの今まで考えていたことが音をたてて崩れ去った。

「ああ、そうだな」

ナオキは呆れて力が抜けたような声で言った。

だがもう時間はおやつの時間である。この時間にお腹がすくのは仕方の無いことなのである。

「あ、あそこのラーメン屋さんに行くにや〜!」

「今からラーメンかよっ!?……まあ、いいけどさ」

そして2人はラーメン屋さんに足を運び、おやつにラーメンを食べることとなった。どうでもいいことだが、作者は醤油や豚骨が好みである。

2人はラーメンを食べ終わると店を出て、食べてる途中で思い出した買い忘れていたアクセサリーを作るための材料を買いに向かった。

「わあ〜キラキラだにや〜!」

「凜、あんまり触るなよ〜」

「ええ〜なんで〜!?」

「お前が触ると壊れるだろ?」

「にやあ!? ナオキくん、それどういう意味にや〜!?」

「そのままの意味だ。あとうるさい」

「うう……」

凜はいつも通りハイテンションだったが、ナオキに軽く叱られてシユンとしてしまった。ナオキはそんな凜を見て、少しやり過ぎたかと思いつつ自分の頭を軽く掻いた。

するとナオキはお詫びにと落ち込む凜の頭を優しく撫でた。そして凜は最初はびつくりしたが、しばらくすると猫が撫でられ気持ちよさそうに唸るかのような表情を浮か

べた。

「さ、早く買い出し終わらせて帰るぞ」

「う、うん……」

ナオキはそれから気を取り直して材料を探した。

だが凧は先程の言葉を聞いて少しだけ残念そうな表情を浮かべた。もちろんナオキはそんな凧には気付いていない。

「……よし、これで買い忘れたものはないな」

「うん、これで全部だと思うよ！」

「それじゃあ帰るか」

ナオキは出口の方に足を進めて帰ろうとした。

しかし、凧がついてこないことに気付いて後ろを振り向くと、帰りたくない子供のようにならざるに立っていた。

「り、凧……どうしたんだ？」

「……ちよつと、行きたいところがあるから……その……」

凧は申し訳なきさそうにもじもじとして言うと、ナオキは一息吐いて方向転換して凧のいる所に足を進めた。

「それならそうと言えばいいのによ。で、どこに行きたいんだ？」
「つ……うん、それはね！」

凜はナオキが近くまで来ると、嬉しそうに行きたい場所を言った。
その場所とは……………

~~~~~♡~~~~~

「わあ〜！高いにや〜！」

その場所とは、シヨツピングモールの屋上であった。凜はそこへ着くなり嬉しそうに柵の近くまで走った。

「走ると危ないぞ〜！あと、なんでよりによって屋上なんだよ〜！」

みなさんご存知の通り、このナオキという男は高い所が苦手なのである。なのでナオキは柵には近寄らず、屋上へ出るためのドアの付近で凜の方を向いている。

「え〜!?だつてと〜つても眺めがいいよ?ナオキくんもそんなところでビクビクしてないでこっちに來たらいいのに！」

「ビクビクなんかしてねーよ！」

「じゃあ、なんでそんなに怖そうにしてるの？」

「は、はあ？なに言ってるんだ？おれは別に怖がってなんかないぞ！」

「じゃあ早くこつちに来てにや〜！」

「それは嫌だ！」

ナオキは頑かたくなにそこから動くことを拒んで、そんなナオキに凜は文句を言った。

そしてついには凜はナオキのところに怒った様子で近寄り、腕を引つ張つて無理やりナオキを柵に近づけようとしたが、ナオキはまるで足が床にくつついたように反抗した。

「はあ……………もういいにや……………」

「……………凜……………」

ナオキは諦めて隣に立った凜を不思議そうに見つめた。

凜はこういう状況であれば、きつとナオキが動くまで引つ張り続けるはずである。

……………だが今日は違った。

凜はナオキの隣に立ったまま、屋上から見える夕日の景色を眺めていた。

その目はどこか寂しそうで、辛そうな目であった。

そしてそんな凜を見てナオキは勇気を出して声を出した。

「……凜、なにかあったのか？」

ナオキがそう言うのと凜は目を瞑って下を向いた。それはまさになにかを考えているようだった。

「言ってもいいの？」

「ん？当たり前だ、おれはお前の仲間なんだから」

「仲間……」

「凜……？」

すると凜は腕を自分の後ろにまわして組んで、ナオキの前に立った。

凜の後ろでは夕日が眩しく輝いて、凜の赤くなっている頬はナオキにはわからなかった。

「ナオキくんの中では……」凜　「ってどういう存在なの？」

「どういう存在？ そうだなあ……兄弟がいらないおれにとつては妹みたいな存在だな。あ、それに……数少ない大切な仲間だ」

「……そう、だよね」

「それがどうかしたのか？」

ナオキは何故凜がそんなことを聞いてきたのかわからず、眉を細めて首を傾けた。

すると凜はクルッと一回転して夕日の方を向いて空を見上げた。

「でもね、凜の中ではちよつと違うんだ」

「違うって……それってどういう……？」

まだナオキは少し困惑していた。

そして凜はナオキの方に振り返って、心の奥からある言葉を絞り出した。

「凜の中ではね、ナオキくんは……特別な存在……なんだよ？」

特別な存在……その意味をナオキはわかっていた。

つまりこれは……告白なのである。

「そっか……そうなんだな」

「うん。ナオキくんは凜を妹と思ってるのかもしれないけど、私もそうなんだ。私にとつては……大好きなお兄ちゃんみたいな存在なんだよ？」

「大好きな……か」

「うん、そうだよ……」

凜は似合わない辛そうな声でそう言うと、ジッとナオキを見つめた。

ナオキはそんな凜の目をみて、凜は何かを待っているのを直感で感じた。

その何かとは……” 応え”である。

「ごめんな、凧……おれは凧のその特別な存在にはなれないよ」

凧はその言葉の意味をわかつていた。

つまりは、ナオキは『想いには応えられない』と言ったのだ。

凧は薄々こうなることはわかつていた。なにより凧はナオキには長年想ってきた絵里がいるし、これまで2人のイチヤラブっぷりは嫉妬するほど見てきたのだ。

「そっかあくやっぱりかく！」

「まさか、それを言うためにここに？」

「まあ、そんなところ……ごめんね、付き合わせちゃって」

「いいよ別に。家まで送ろうか？」

「ううん、大丈夫。これからかよちゃんと遊ぶから」

「ふっ、そうか。それなら気を付けてな」

「うん！」

「それじゃ、これからもよろしくな」

「ごちらこそ！ ばいばい！」

凧はいつも通り元気よく手を振ってナオキに別れを言った。ナオキもいつも通りに



手を振ってその場から去って行った。

ナオキが見えなくなるまで笑顔だった凜であったが、ナオキが去った途端に振っていた腕をさげて下を向いた。

夕日に照らされる屋上のコンクリートの床に水滴がぽたぽたと落ちていったが、すぐに消えてしまった。

~~~~~♡~~~~~

「ただいま〜」

「あ、おかえりなさい!」

ナオキがショッピングモールから家に帰ってくると、絵里が嬉しそうに出迎えた。

絵里はナオキが持つて帰ってきた荷物を半分持つて、2人で2人の部屋に向かった。

「久しぶりにショッピングモールに行つたから疲れたよ」

「ふふつ、お疲れ様。先にお風呂沸いてるから入ってきたら?」

「絵里達は入ったのか？」

「ええ、ナオキが最後よ」

「そうなのか……なら入ってくるわ」

ナオキはタンスからパジャマなどを取り出して風呂場へと向かった。

ナオキが出ていった部屋では、絵里が少し残念そうに髪の毛を指で挟んでクルクルと弄った。

「やつぱり気づかなかったわね……シャンプー変えたのに……」

どうやら絵里はシャンプーを変えたことに気づいてもらえなくて少し残念だったようだ。

だが、そのあとにナオキがお風呂に入って、新しいシャンプーがあったので絵里がシャンプーを変えたことに気がついてご飯中に言うと、そういう経緯があつてとは知らずに絵里がとても嬉しそうにしていたことは、また別のお話……

「あ、花陽、出てちょうだい」

「あ、はい」

そしてその頃、小泉宅では日が沈んだにも関わらずインターホンが鳴らされたので、花陽は壁に取り付けられている画面を見た。

そこには……………

「……………凜ちゃん？」

ナオキと買い出しに行っただけで、凜が立っていた。花陽は不思議に思いながらも玄関に向かつてドアを開けた。

「凜ちゃんどうしたの？」

「かよちゃん……………！」

「凜ちゃん!？」

すると凜は出迎えた花陽を見るなり花陽の胸に飛び込んで抱きついた。

花陽はわけがわからなかったが、いつもとは違う凜を見て何かあったに違いないと悟り、家の中に入れていたのであった。

次回に続く……………

第141話 「夏祭りと甘いかき氷」

「ねえねえナオに、夏祭りに行きたい！」

「夏祭りか……もうそんな時期なんだな」

「亜里沙も行きた〜い！」

アイドル研究部の合宿後の休み期間中のある日、ナオキ・亜里沙・梨子が出かけていると、梨子は見かけた夏祭りのチラシを見て行きたいと言うと、ナオキは懐かしむように言い、亜里沙は自分も行きたいと手を挙げた。

「それなら帰ったら絵里も誘ってみんなで行こうか。梨子ちゃんの思い出作りのためにもな」

「「やった〜！」」

ナオキがそう言うのと2人は飛び跳ねて喜んだ。ナオキはそんな2人を嬉しそうに笑顔で見つめた。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「夏祭り?」

「ああ、明日の夜あるみたいだ。梨子ちゃんの思い出作りのためにも4人で行くかなって」

ナオキは家に帰ってから絵里に夏祭りのことを話した。

だが、その話を聞いた絵里は何か言いたいように唇を尖らした。

「ふ〜ん……」

「……なにか言いたいことでもあるのか?」

「言っていいの?」

「もちろん!」

ナオキがそう言うのと絵里は「それなら……」と恥ずかしがる仕草を見せて、ナオキに上目遣いで言った。

「行くなら……ナオキと2人つきりでデートしたいな〜……なんて」

「っ……!!?」

ナオキはそんな絵里の姿と言葉により、ナオキは心を完全に射抜かれてしまっただけのわからない衝撃に襲われた。

「わかった。2人で夏祭りデートしよう!……小さい時……みたいに」

「……………うん」

ナオキが照れながらそう呟くと、絵里は頬を赤くして静かに頷いた。

そう、この2人が夏祭りを一緒に行くのはナオキが小さい頃に東京にいた時以来なのである。

「じゃ、海未に絵里の浴衣でも頼んでみるか？」

「ナオキのは？」

「お、おれは別にいいかなって……………ダメ？」

ナオキが苦笑いを浮かべると、絵里は頬を膨らましてコクツと頷いて前からナオキに抱きついて顔をナオキの体に埋めた。そしてその状態ナオキの顔を見上げてこう言った。

「ナオキと一緒に浴衣着てデートしたい……………」

お分かりの通り、ナオキは連続してまたわけのわからない衝撃に襲われた。

絵里のこのいわゆるおねだりはナオキには効果抜群で、ナオキはそれに従わざるをえなかった。ここで断れば絵里に申し訳ないし、なによりこれからの人生に悔いを残すこととなってしまうからである。

「わかった。海未におれの分も頼んでみるよ」

「ほんと!? ふふっ、やった〜!」

絵里は喜びを表すようにさらに強く抱きついた。ナオキは苦しいというより、絵里の胸が思いつきり当たっているの逆で心地よく感じていた。

その日の夜……

「えっ、雪穂が？」

「うん！雪穂の家で浴衣を貸してくれるんだって！」

リビングで亜里沙は嬉しそうに、雪穂が浴衣を貸してくれると言ってくれたことを話した。

「おれと絵里は海未のところに借りようと思つてな」

「そうなんだ。それならお義兄にいちゃんとお姉ちゃんあねは2人で行くの？」

「亜里沙がそう言うのと、ナオキと絵里は少しだけ頬を赤くしてそれを肯定した。」

「それなら私と梨子ちゃんこは雪穂の家からだね！」

「そ、そうですね！」

「まあ、また向こうで会えばいいだけだよ」

「ふふっ、そうですね」

そうして4人は明日にある夏祭りを楽しみに待った。

だが、このときに梨子が残念と思つていることは本人にはわからなかつたのであ

る。

~~~~~♡~~~~~

「ナオキに絵里、ようこそお越しくできました」

「いや、こつちこそ急に頼んだのにありがとうございます」

「いえ、いつもお世話になってますから」

ナオキと絵里は亜里沙と梨子を高坂宅に送った後、そのまま園田邸に向かった。園田邸に着くと海未が2人を出迎えて中に案内した。

それからナオキと絵里は当たり前だが、別々の部屋に案内された。

ナオキが案内された部屋ではもう既に浴衣が用意されていて、畳の上に胡坐あぐらをかいて海未の父である五郎衛門が座っていた。

「あ、おじさん……よろしくお願ひします」

「ん、じゃあ早く終わらすか」

「はい！」

ナオキが来たのを確認すると五郎衛門は立ち上がり、浴衣をナオキに渡した。そしてナオキは五郎衛門に手伝ってもらいながら浴衣に身を包んでいった。

「よし、いいぞ」

「ありがとうございます」

ナオキが貸してもらったのは紺色の浴衣で、デザインは至ってシンプル、主な特徴といえば縦に何本か白い線が伸びているぐらいである。

「うん、やっぱりナオキくんにはシンプルなのが一番いいな」

「そうですか？」

「ああそうとも。さて、暇になったな」

「でもおれがこんな早く出来たなら絵里も早いんじゃないや……」

ナオキがそう言うのと、五郎衛門は舌を鳴らして人差し指を何度も左右に振った。

「ちつちつちつ、甘いよナオキくん。女の子はね、着るのに時間がかかるものなんだ」

「そ、そうなんですか……?」

「その通り。俺も昔は撫子さんに待たされたものだよ」

「へえ〜」

浴衣に着替え終わったナオキはしばらくの間、五郎衛門から昔話（主に妻である撫子

との話)を聞かされた。その話を聞いてナオキは、五郎衛門と撫子がどれだけラブラブだったかを知ったのであった。

(この話、いつ終わるので……?)

~~~~~♡~~~~~

「やっと解放された……」

「全く、いくら着替えが長いからってあそこまで必死に話さなくても……」

ナオキが五郎衛門から解放されて力が抜けたように肩を落とすと、海未は呆れた表情を浮かべた。

経緯を説明すると、ナオキが五郎衛門から撫子との話をいわゆるマシンガントークで話されていると、海未が入ってきて五郎衛門を「ナオキが困っているでしょう!」と一喝。五郎衛門が軽く謝罪の言葉を言うと言と絵里の着替えが終わったからと海未はナオキを連れ出した。

「でさ、なんでおれ玄関に向かってんの?」

そして今、ナオキと海未は玄関に向かつて縁側を歩いている。ナオキはその理由がわからず、前を歩いている海未に聞いた。

「全く、ナオキは乙女心がわかつてませぬね……」

「乙女心……?」

「はあ……」

「ん……?」

海未がため息をつくとき、ナオキは眉を細めて首を傾げた。

玄関に着くと、海未に出してもらった下駄を履いて園田邸の門の前で絵里を待った。

園田邸の門はいつもここは古風な家なのだと思わせられる木製の大門で、ナオキはその門の大きな柱にもたれていた。

「絵里着替え終わってるんだろ?それにしちゃ遅いな……」

ナオキは絵里が来るのが遅いことに心配して玄関の方を少しの間見つめたが、来る気配がなく視線をまた戻して日の沈みかけている夏の空を見上げた。

その頃絵里はというと……

「海未いっやっぱり恥ずかしいわ……」

「なにを言っているんですか絵里! ナオキとデートなんて何回もしてるでしょ!」

「でも今回は浴衣だし……それに、浴衣姿を見せるのだからって初めてだし……」

絵里は玄関の扉に隠れて恥ずかしがっていた。海未はそんな絵里の背中を押してナオキのところへ行くように促した。そして、2人は何故か小声で話していた。

「もう、さつきと行って、くださいっ!」

「わわわっ!」

するとしびれを切らした海未はさつきより力を強めて絵里をナオキのいる方向に押しした。

絵里はその勢いで下駄をコツコツと鳴らしながらナオキに飛び込んでいった。

「おっと……」

そして下駄の音に気が付いたナオキは、もたれていた柱から離れて下駄の音の主の前に立って、その人物を胸で受け止めた。

ナオキは受け止めた人物が誰かは最初はわからなかったが、髪の色、匂い、受け止めた時の感触で誰かは察しがついた。

「絵里、大丈夫か?」

絵里はナオキの胸に顔を埋めたままコクリと頷いた。

ナオキが絵里の顔を見ようとすると、絵里は手でナオキの着ている浴衣を握ってそれを阻止した。

「絵里、顔見せてくれよ」

「やだ……」

ナオキは何故絵里が顔を見せてくれないのかわからず、頭を悩ましていた。

「絵里の浴衣姿見たいんだけど……」

「でも、恥ずかしい……」

「あくなるほど。でもおれは絵里の浴衣姿がすつごく見たいんだ。だから見せてくれよ？・な？」

「うう……」

ナオキが絵里に囁くように言った。

絵里は頬をさらに赤く染めて恥ずかしかったが、ナオキがそこまで言ってくれて嬉しくなり、少しずつナオキから離れていった。

「おお……」

「ど、どうかしら……？」

ナオキは絵里の浴衣姿を見て感動の声を漏らした。

絵里の着ている浴衣は色は青つぽく、所々に蝶々や葉など自然を思わせる柄や水玉模様があり、帯にはアレンジとしてビーズが使われている。そして耳からはイヤリングがぶら下がっている。さらに絵里は髪を解いており、それが浴衣姿の絵里の大人っぽさ

をより際立たしていても言える。

「ん……もう！黙ってないでなにか言つてよ！」

絵里は片手で髪を弄りながら恥ずかしがっていたが、ナオキが無言で自分のことを見つめてくるのでさらに恥ずかしくなり、髪を弄っていない方の手で持っていた青い巾着を両手で持ち、赤く染まつている頬を膨らましてナオキを見上げて言った。

「あ……ごめん、浴衣姿の絵里が可愛すぎて言葉を失つてた。ほら、言葉を失うほどの美しさつてやつ？つまり……とつても似合つてるよ」

「そ、そう？ありがとう……ナオキも似合つてるわよ」  
「そうか？ありがとう」

ナオキがそう言うのと2人は照れたように笑い声を出していった。

そんな2人を見て安心した海未は家の中に入っていった。

「じゃあ、行くか」

「うん！」

そしてナオキと絵里は夏祭りの会場へと向かった。

~~~~~ラブライブ！~~~~~

夏祭りの開かれている会場では太鼓の音や人の声が響いていた。

ナオキと絵里は会場までの道を照らす提灯ちようちんを眺めていきながら歩いていった。

「なんだか綺麗ね〜」

「ん、そうか？」

「もう、ナオキつたらロマンチックじゃないわね〜」

「……………めん」

「ふふつ……………」

ナオキが少しシユンとした表情で頭を掻きながらそう言うと、絵里は楽しそうに笑みを浮かべた。

「お、……………みたいだな」

「本当に賑やかね〜」

ナオキと絵里は入口となっていてるところから少し離れているところから会場を見つめた。

何人もの人がその会場に足を向けていて、そのほとんどの人が浴衣を着ていた。近くのお店では浴衣のレンタルをしているため、そので借りている人も何人かいるようだ。

「さてと、じゃあ……………ナオキ、早く行きましょう!……………うおっ!」

絵里はナオキの腕を引っ張って会場へと入っていった。その顔はとても嬉しそうで、

楽しそうであつた。

「安いよ安いよ〜！」

「あゝ破けちやつた」

「残念だつたね。ほら、一匹プレゼントだ」

会場となつていゝるお寺の境内では様々な屋台が並んでいて、盛り上がりを見せていた。食べ物売る者、金魚すくい網が破けて残念がる者、そしてその子に金魚をプレゼントする者、他にも色んな人が夏祭りを楽しんでいた。

境内の奥までの道中には屋台がずらつと並んでおり、奥では盆踊りが行われている。このお寺の敷地はとても広く、昔からよく夏祭りなどの地域行事で使われているらしい。この付近では一番の規模を誇つているため、観光客もよく訪れるらしい。中にはこの夏祭りの日のために遠くから来ている人もいる。

「やつぱりここは人が多いな〜」

「そうね。昔より増えてるのかしら？」

「そりゃあ10年近く経つてゐるからな、人も増えてるだろ」

「ふふつ、それもそうね。でも最後に来たのは幼稚園の頃だつたわね？」

「はははつ、そりゃあ変わつてゐるわ」

ナオキと絵里は幼い頃にここに来たことを思い出しながらぎつと出店を確認しながら奥まで歩いていった。

「絵里、なんか欲しい物あるか？」

「欲しい物？ん〜」

絵里はナオキにそう言われると周りを見回して、なにか欲しい物はないかと探した。焼きそば？りんご飴？かき氷？それとも景品のぬいぐるみとか？

そんなことを考えていると、ふと周りのカップルみんなが手を繋いだり、腕を組んだりしていることに気が付いて動きが止まった。

「ん、欲しい物見つかったのか？」

「え、ええ……」

絵里は少し頬を赤く染めて、手をもじもじとさせてナオキから視線を逸らした。ナオキはどうしたのかと頭にハテナマークを浮かべながらそんな絵里の顔を見つめた。

「あのね……周りのカップルの人達ってみんな手を繋いでるでしょ？」

「そ、そうだな……」

「だからね、私もナオキと手を繋ぎたいな〜って……ダメ？」

「……ダメじゃないけど……」

「けど？」

ナオキは目線を絵里から逸らして反対の方にして照れたように頬を人差し指で掻いた。絵里はどうしたのかと頭にハテナマークを浮かべた。

「その……こんなに沢山の人の前で手を繋ぐのは……恥ずかしい……から」

ナオキのこの付き合いたての彼氏が言うセリフに呆れることはなく、逆にそんなナオキにキュンキュンした。

すると絵里は恥ずかしがるナオキの腕にしがみついた。

「えいっ！」

「おっと……急にどうしたんだ？」

「えへへ、だってナオキかわいいんだもん」

「かわいいって……」

ナオキは最初は驚いたが、絵里にそう言われると絵里に向かって微笑んだ。

2人はその状態のまま出店を見てまわった。

~~~~~♡~~~~~

シユパン！

『お〜！』

「流石ナオキ！」

射的を行っていている出店の周りでは、ナオキが絵里の欲しいと言った景品を一発で当て、さらにそれからも連続で成功させているので歓声があがっていた。

そして残りの弾数はラスト一つとなった。

「絵里、あと一発だけど取ってほしいものとかあるか？」

「ん、じゃああれ！」

絵里は並べられている景品の中から、ずつとかわいいと思っていたクマのぬいぐるみを指差した。

「よし、任せとけ！」

ナオキは絵里の欲しがるぬいぐるみを確認して、銃で狙いを定めた。そして落とす確信を得ると最後の一発を放った。その弾は見事にクマの脳天に命中して、そのクマのぬいぐるみは台から落下した。

「ふう………」

『お〜〜!!』

ナオキがそのぬいぐるみを落とす、つまりは1プレイでパーフェクトを果たすと、周りで見ていた人達は歓声をあげた。

「え、ああ……どうも、どうも」

ナオキはそんな人達の反応に照れてペコペコと左右後ろに向かつて片手で頭を押しさえながら軽くお辞儀をした。

「あんだ、これ持てるかい？」

「え、ええ……なんとか」

「参ったよ、5発とも命中させて景品をゲットしたのはあんだが初めてだ」

「いやあ、こういうの得意ですから」

ナオキは5つの景品であるクマのぬいぐるみ、ヒーローのフィギュア、イヤホン、弁当箱、そしてスマホケースを袋と一緒に受け取り、ぬいぐるみ以外のものをそこに入れた。

「はい、絵里の欲しかったやつ」

「ありがとう！」

ナオキは絵里に欲しいと言っていた全体的に黒いクマのぬいぐるみを渡した。それを受け取ると、絵里はぬいぐるみを抱きしめてナオキに笑顔で礼を言った。

「さて、行くか」

「うん！」

ナオキと絵里は射的の出店から離れて、別の出店に向かった。

その颯爽と現れた天才スナイパーの正体を見ていた人達は帰ってから気づくことに

なるのであった。だが今はただの射的が上手い青年としか思っていない。

「それで、次はどこに行く?」

「うん……ちよつとお腹がすいてきたから何か食べたいな」

「おつ、いいね!それじゃあ……焼きそばなんてどうだ?」

「それはいいわね。それじゃあ早速行きましょう」

ナオキと絵里は出店で焼きそばを買い、近くにあつたベンチに座つてそれを食べることにした。

「ん〜美味しい!やつぱり出店と言えば焼きそばだよな!」

「ふふつ、そうね」

ナオキは焼きそばを勢いよく食べていき、絵里はそんなナオキをかわいいと思いつながらゆつくりと食べていた。

「あ、ナオキ」

「ん、どうした?」

「海苔とかソースが口の周りに付いてるわよ?」

「え、まじ!」

絵里がナオキの口周りが汚れているのを指摘すると、ナオキは目を見開いて口元を手で触った。

「ほら、じつとしてて」

「お、おう……」

すると絵里は巾着の中からハンカチを取り出して、身をナオキに近づけてナオキの口周りを優しく拭いた。

ナオキは絵里の顔との距離が急に縮まり、さらに自分の口周りを拭く絵里の優しい顔に頬を赤くして息を詰まらせた。

「はい、もう大丈夫よ」

「あ、ありがとう……」

「どういたしまして。落ち着いてゆっくり食べてね」

「わ、わかった」

ナオキは絵里にそう言われると、今度は先程と違ってゆっくりと焼きそばを食べた。絵里はそんなナオキを見て微笑むと食べるのを再開した。

焼きそばを食べ終わった2人はまた出店を見てまわることにした。

そして定番の金魚すくいの出店に立ち寄って、金魚すくいをすることにした。

「んんん……………」

様々な色の金魚が横に大きい水槽を泳ぎ回っている。

「んんん……………」

絵里はそんな金魚をじつと睨み続けて狙いを定めていた。

「つ…………たあつ!!」

そして絵里は何かを感じたように素早く網で金魚をすくい上げた。

「ふつ…………取れたわね」

絵里はそう勝利を確信する。

「いや取れてないから。網破けてるし」

「えええ?!?そんな……………」

「ははは……………(可愛すぎる。動画に撮ったから家で観よう)」

絵里は涙目になって破れた網を見つめていた。出店の人も微笑を浮かべていた。

「だって初めてだったもん。金魚すくい」

「あれ、そうだったっけ?」

「そうよ!だからこれは仕方ないのよ!」

「そ、そうだな……………(意地を張る絵里もかわいい)」

絵里は初めての金魚すくいだったからと維持を張ってナオキに破れた網を見せた。

するとナオキはお金を出店の人に渡して網とボウルを受け取った。

「ナオキ……？」

「まあ見てろつて。おれが金魚を取つてやるよ」

「ナオキ……！」

ナオキがカツコつけて歯を光らせてそう言うのと、絵里は頬を赤くし、目をキラキラとさせて胸がキュンとなる感覚に襲われながらナオキを見つめた。

「金魚は掬すくうんじゃない……救うんだ」

「ナオキ、カツコイイ……！」

ナオキは今までになくカツコつけてそう言った。

周りの通りかかった女の人もつい足を止めてそんなナオキに惚れ惚れとした。だが隣にいるのが彼女だとすぐにわかつて残念がってしまった。

「絵里は強引に掬おうとしたからダメだったんだよ。だからもつと優しく丁寧に……救う」

ナオキはそう言いながら数々の金魚を目で追つて狙いを定めていた。

「つ………今だ」

そしてある金魚が少し水面上がってきたのを狙つて網で金魚を掬った。

網に金魚が乗ったため、ナオキと絵里は勝ちを確信した。



だが金魚は網を破って水槽へと逃げていった。

「あ……………」

「惜しかったな〜」

ナオキは破れた網を目の前に持ってきて口を開けて涙目で見つめ、カクツと落ち込んだように首を落とした。

「ナオキ、どんまい」

絵里はそんなナオキを元氣付けようとナオキに声を掛けた。

「やった〜！いっぱい取れた〜！」

「わあ〜すごいわね〜！」

そして隣で子供がボウル2杯分の金魚を取っていて驚きが隠せない2人であった。

~~~~~♡~~~~~

「ふふっ、かわいい〜」

「そ、それはよかったよ」

絵里が袋に入った金魚を眺めながら言うと、ナオキは少し声を震わせながら笑みを浮

かべた。

あれからナオキは絵里に金魚を取ってあげようと奮闘し、5回目にしてやっと1匹取れて今に至る。

もうここまでくればわかつてると思うが、ナオキは金魚すくいが苦手なのである。

「ねえねえ、そろそろ花火大会の時間じゃない?」

「ん……あ、そうだな」

ナオキはスマホの時計を見て、そろそろ花火大会の時間が迫っていることを確認した。

「じゃあなんか買ってから場所取りに行くか」

「ええ!」

それからナオキと絵里は歩きながら食べ物を買っている出店を探した。と言っても、先程焼きそばを食べたためそんなにお腹はすいてないため、軽食程度の物を探した。

「さてと、何食べようかな?」

「いっぱいあるから迷っちゃうわね」

「へいらつしやい!夏といえばかき氷!かき氷だよ!」

そして2人が何を買うか迷っていると、近くからかき氷の出店の人の声が聞こえてきたのでその方向を見た。

「かき氷か」

「夏といえばかき氷よね、やっぱり」

「だな」

2人はそれからアイコンタクトを取るとかき氷の出店に足を進めた。

「へいらつしやい！なににしやす？」

「えつと……」

そのかき氷の出店では、いちご、ブルーハワイ、レモンなどのスタンダードなメニューが並んでいた。そしてナオキは見たことのないメニューを見て驚いた。

「……ぶっかけミルク？」

「そうだよ。こんなの出してるのこの店だけだ」

「こんなのって自分で言うのかよ……ちなみにこれはどんな？」

「その名の通り、ミルクをたっぷりとぶっかけたかき氷だよ」

「ミルクオンリーってことか……」

ぶっかけミルク……人によっては意味深にも捉えられる名前のそのメニューは、ただミルクをぶっかけたかき氷であった。

「それならおれはそれを頼もうかな」

「それじゃあ私はブルーハワイで」

「あいよ！400円です！」

「じゃあ、ちようどで」

「あいよっ！」

出店の人はナオキからお金を受け取ると、かき氷器で氷を削ってかき氷を2つ作った。

そして一つには青いブルーハワイのシロップをかけて、もう一つにはミルクのシロップをたっぷりとぶっかけた。

「はいよ！ブルーハワイとぶっかけミルクだ」

「ありがとうございます！」

「あ、ありがとう、ございます……（思った以上にぶっかけてるぞこれ……）」

ナオキは思った以上にミルクがぶっかけられているかき氷に圧倒されながらそれを受け取り、絵里と共に花火を見るための場所取りに向かった。

「ねえ、ナオキ……？」

「ん、どうした？」

「どこまで行くの？ここ結構人通りが少ない……というか私達以外は通らなそうなのだ

けれど……」

絵里はナオキが自分を連れて歩いていている場所を見まわして不安になっていた。そこは木と木の間にあつた小道で、出店が並んでいるところからは離れた場所にある。

「大丈夫だつて。もうすぐ着くから」

「着く……?」

そしてその小道をどんどんと進んでいき、そこを抜けると、絵里とナオキの目の前には綺麗な夜景が広がっていた。

「……は……!?!」

「ああ、……この寺の裏山だ。小さいけど、花火を見るのにはうつつけだ」

「本当に……綺麗……!」

そこは夏祭りが行われている寺の所有している小高い裏山で、先程の小道はここに繋がっていたのだ。その場所は立ち入り禁止ではなく開放されていて、その証拠にちゃんとベンチが数個並んでいる。

「寺からでも花火見える場所が用意されてるけど、人がいっぱいで見にくいからな。それだつたら……この方がいいだろ?」

「ええ、そうね……それに、……ここに来て思い出したけど、……ここつて……」

「ああ、その通り。絵里とおれが小さい時に見つけた場所だ」

そう、ここはナオキと絵里が小さい頃、ここの夏祭りに来た時にたまたま見つけた場所なのである。

「ナオキ、早く座つてかき氷食べましょ?」

「ああ、そうだな」

ナオキと絵里はかき氷が溶けないうちに、少し早歩きになつてベンチに向かつてそこに座つた。それから一息ついて2人は夏の夜空を見上げた。

そして2人はシャリシャリと氷とシロップを混ぜ合わせるようにかき氷をストロ―で出来たスプーンで刺して、頭が痛くならないようにゆつくりと食べ始めた。

「ん〜!冷たくて美味しいわね〜」

「ん、ああ!やつぱり夏といえばかき氷だな!」

「ふふつ、そうね……ふう……」

「絵里、疲れたのか?」

ナオキは絵里が疲れたような息を吐いたので心配して声をかけた。すると絵里はナオキに心配されて嬉しそうに微笑んで答えた。

「ええ、少しね。スクールアイドルをしていたとはいえ、やつぱりこんなに歩いたりしてたら疲れたわ……」

「はははっ、なんだよそれ。おばさんみたいなセリフだな……あ……」

「……………何ですって?」

絵里が疲れた様子を見せると、ナオキは爆弾発言をしてしまいましたという表情を浮かべたが、時すでに遅し。

絵里の表情は笑ってはいたが確実に怒っている。

「え、えつと……………そ、その……………、ごめんなさい……………」

「ふん!」

「絵里い……………」

絵里は先程は笑顔で怒っていたが、ナオキが落ち込んだ様子を見せると頬を膨らましてそっぽを向いてしまった。ナオキはそんな絵里を見て弱々しい声で絵里の名を呼んだ。しかし絵里はそれに動じず、怒った表情のままかき氷を食べた。

ナオキはどうやって絵里の機嫌を直そうかと考えたが、どれだけ考えてもいい方法が思いつかなかった。

そしてナオキは自分が今食べているのがかき氷であることを思い出すと、ピコーンと何かいい方法を閃いたようにかき氷を食べた。

(何よのんきにかき氷食べて……………もう知らない!)

絵里はナオキがのんきに食べていると思つて機嫌をさらに悪くした。もちろんナオキはそのつもりなのではない。これは絵里の機嫌を直すためにしていることなのであ

る。

そしてかき氷を食べてあることを確認するとベンチから立ち上がって、絵里の前にしゃがんで絵里の顔を見上げた。

「なあなあ絵里」

「ん……………なに？」

絵里は怒った声でそんなナオキを見下げた。普通ならばその目線に恐怖を覚えるが、今回は違った。

ナオキはウインクをしながらベツと舌を出して絵里を見上げた。

「……………ぷっ！ふふふふっ……………もう、ナオキったら子供ね」

「ひひっ、そうか？」

絵里の表情は子供のようなことをしたナオキを見たことで柔らかくなり、その表情に怒りというものはなく、それは先程の感情が消え去ったようであった。

そしてナオキはタイミングを見計らったように言葉を続けた。

「なあ、本当に悪かった！この通り……………だから許してください！」

ナオキが重ねた両手をあげて頭を下げ、必死に謝ると、絵里は少し考えたような表情を浮かべてから仕方ないというふう息を出した。

「もう、仕方ないわね」

「絵里……！ありがとう！」

「でも、条件があるわ」

「ん、条件……？」

ナオキは絵里に許してもらおうとまた絵里の横に座った。そして、絵里の言葉を聞いて首を傾げた。

「ええ、それを守ってくれたら今日のことは完全に許してあげる」

「完全には許されてなかったんだな……」

「当たり前よ。女の子にあんなこと言うなんて最低よ？」

「誠に申し訳ございませんでした……」

「それで、どうする？」

「守ります。守らせていただきます」

「ふふっ、よろしい……」

絵里はそんなナオキを見て笑みを浮かべると、コホンとしてから背筋を伸ばしてその条件とやらを言った。ナオキはなにを言われるのかとドキドキして絵里の顔を見つめ

た。

「で、その条件とは……？」

「それはね……えつと……」

「ん……？」

ナオキはそれを言おうとした絵里が急に頬を赤くしたので疑問を覚えた。

絵里は言いかけて辞めてと繰り返して、その条件を言おうかどうか迷っている様子を見せた。

そんな絵里を見たナオキは何かを察したのか、絵里との距離を縮めて絵里の顔を優しい表情で見つめた。

「ナオキ……？」

「絵里、そんな条件なんて言わなくても大丈夫だよ」

「えっ……!？」

絵里はそんなことを言うナオキに驚きの表情を見せた。ナオキはそんな絵里を見て微笑んだ。

そしてナオキは絵里の頭を撫でながら言葉の続きを言った。

「だからさ、条件なんて言わなくても……これから先ずつと、絵里がおばさんになって、おばあさんになっても、おれは絵里とちゃんと一緒にいるから」

「ナオキ……！」

絵里はナオキの言葉に胸を締め付けられるような感覚に襲われ、さらにその言葉に感動を覚えた。

「あ、そうだ。やりたいことあるんだけどいいか？」

「別に構わないけど……どうしたの？」

「まあまあいいから、目を瞑って」

「う、うん……」

絵里はナオキの言う通りに目を瞑って、なにをされるのかわからず不思議そうな表情を浮かべていた。

そして、ナオキは絵里の唇に自分の唇を重ねた。絵里は不意の出来事で戸惑うが、徐々にナオキを受け入れていった。それからナオキが舌を入れようとすると、絵里は自分から舌を絡ませて、2人の顔が少し離れるとその間には唾液の線が伸びていた。そこまで激しいものではなかったが、2人は興奮したからか少しだけ息を荒くしていた。

「もう、急に何するのよ……」

「はははっ、すまんすまん。ちよつと絵里を驚かせたくてな」

「なによそれ……」

「まあまあ、とりあえず鏡で舌を見てみな」

「舌を……?」

絵里はナオキにそう言われて頭にハテナを浮かべながらも巾着から手鏡を取り出して自分の舌を出して見た。

そして絵里はそれを見て驚いた表情を浮かべた。

「どうだ、驚いたか?」

ナオキとキスした後の絵里の舌の色は、水色に変化していた。

「どうしてこうなったの?」

絵里はもちろんこれに驚いていて、ナオキにこの仕掛けを聞いた。ナオキはその仕掛けを鼻を高くして答えた。

「それはな、色の変化を利用したんだよ。絵里の食べてたのはブルーハワイ、青だ。おれはミルクだから白……だからキスした時に絵里の青色になってた舌におれの白くなってる舌を絡ませたときに絵里のイメージカラーの水色になったんだ」

「なるほどー!」

絵里はそれを聞いて納得すると同時に、よくそんなことを思いついたとナオキの発想力に感心した。

そしてそんなことを話しているうちに……

ヒュ〜……………ドン!

「あ、花火だ！」

「綺麗ね……」

一発の花火が夏空に打ち上げられた。ナオキと絵里はその打ち上がった一発の花火を見上げた。

そして絵里がナオキの肩に頭を乗せると、ナオキはビクツとして頬を少し赤く染めた。

「え、絵里……？」

「ねえ、ナオキ……」

「ん、どうした？」

ナオキは絵里が小声で話し出したので、自分も小声でその言葉に反応した。

「私ね、ずっと誰かとこうして花火を見たかったの……その誰かが私のことをグツと引き寄せてくれて、一緒に花火を見れたらいいなって……」

ナオキにはわかっていた……その誰かというのは自分のことであると。

絵里は小さい頃からずっとナオキのことを想い続けていた。だからそんなことをしてもらいたい人となればそれはナオキになるのである。

ナオキは何故わかったのか……それは、自分もまた絵里と同じことを思っていたからである。

ナオキは頬を赤く染めて空を見上げている絵里の腰に手を当てて、優しく絵里を引き寄せた。

「ナオキ……!」

「絵里、一緒に花火……見ようか」

「……ありがとう」

2人は互いに寄り添いながら夜空に打ち上がっていく花火を見上げていた。

「みんな早く早く〜!」

だが、そんな雰囲気を感じ覚えのある元気な声がぶち壊した。ナオキと絵里はびっくりして引つ付いていた体を少しだけ離して、両手を太ももに置いた。そしてナオキはその声の主の方を恐る恐る見た。

「ほ、穂乃果……」

「あ、ナオキくん! あ、絵里ちゃんも! なんでこんなところにいるの!?!」
「それはこっちのセリフだ……」

穂乃果は驚きの声をあげ、ナオキは力が抜けたような声を出した。

穂乃果に続いてことり、海末、凜、真姫、花陽、亜里沙、雪穂、真癒美、瑞希、マシユ、さらになこ、希、梨子もどんどんとナオキと絵里の周りに来た。

なんと、ナオキと絵里の邪魔はするまいと2人以外のみんなで花火を見ようと、穂乃果、ことり、海未が小さい頃に見つけたこの場所にみんなを連れてきたのだが、偶然ナオキと絵里と遭遇してしまったのだ。

ナオキと絵里の2人つきりであったこの場所はみんなの乱入によつて結構な大人数になつてしまった。

「あゝもう!!」

「ナオキ!!」

するとナオキは大声をあげて柵の前まで歩いていった。そして息を思いつきり吸つて夜空に向かつて大声をあげた。

「たゝまやゝゝゝ!!」

「おつ、いいねゝ!私だつて……たゝまやゝゝゝ!!」

「凜もするにやゝゝ!たゝまやゝゝゝ!!」

ナオキがそう言うのと、穂乃果と凜も続いてナオキの横に立つて大声をあげた。そんな3人をみんなは微笑みながら花火と同時に見つめた。

それからみんなで一緒に花火を見ることとなつたのであった。

だが誰も気づくことはなかった……ナオキの目には一粒の涙があつたことを……

「た~~~~まや~~~~!!!」

~~~~~♡~~~~~

「絵里との2人っきりの時間が……」

「まあいいんじゃない？久しぶりにみんなで集まれたんだし」

「そうだけだよ……はあ……」

帰り道、ナオキは絵里に励まされながら歩いてきた。その後ろからは雪穂と梨子もついて来ている。

花火大会の後、みんなは海未の家で浴衣から私服に着替え、ナオキと絵里は海未に浴衣を返し、亜里沙と梨子は穂乃果と雪穂に浴衣を返して4人一緒に自宅まで帰っている。

「でも梨子ちゃんの思い出作りにはよかったんじゃない？ね、梨子ちゃん」

「は、はい！とても楽しかったです！」

「そうか……ならよかったよ」



「でも……」

「ん、でも……?」

ナオキ達は梨子の言葉の続きが気になるのか、梨子の方を見ながらその答えを待った。

「でも……もつとナオにいと夏祭りを見てまわりたかつたなくつて……」

「梨子ちゃん……」

ナオキは残念そうな表情を浮かべる梨子を放っておけなかった。

梨子は本当はナオキと夏祭りを見てまわりかったのだ。だが絵里との2人の時間を壊したくないからと自分の気持ちを我慢していたのである。

ナオキは立ち止まってそんな梨子ちゃんの前でしゃがんだ。

「ナオにいと……」

「ごめんな、梨子ちゃん……おれと絵里のために我慢してたんだよな?」

「ナオにい……」

ナオキが梨子の頭を優しく撫でてやると、梨子は目をうるうるさせるとさせてそんなナオキを見つめた。

「それなら約束しよう。またいつか、梨子ちゃんと一緒に夏祭りを見てまわる」

「本当……?」

「ああ本当さ。男に二言はない」

ナオキは梨子の頭を撫でていた手を離して、小指を立てて梨子の前に出して笑顔を浮かべた。

「っ……うん！約束だからね！」

梨子はそんなナオキを見て涙を拭き取って笑顔で頷いて、自分の右手の小指とナオキの小指を絡ませた。

この2人の約束は叶うのはいつになるのか……このときは2人を含めて誰も知る由もなかったのである。

だが、これだけは言える。

この願いは必ず叶う……ということが。

次回に続く……

## 第142話 「ドキドキ海水浴！」

「そうだ、海に行こう」

「どうしたのよ急に」

ナオキが絵里と2人で部屋で休んでいる時に急にこう言うと、絵里は困惑の言葉を出した。

「いや、絵里と2人で海に行きたいなって思ってた。ほら、夏祭りだって結局は2人つきりじやなかつただろ？」

「そうね……でも梨子ちゃんとかまた落ち込んだりしない？」

「そうかあ……ならいつそ2人も誘ってみるか？」

「そうね。どうせ2人つきりじやなくなるならそうしましょ」

「よし決まりだな」

ナオキはそう言うとおある人物に電話をかけた。絵里は早速どんな服を着ていこうか迷っているみたいだ。

「あ、もしもし真姫か？」

『私の携帯にかけてきてる時点でそれしかないでしょ?』

ナオキが電話をかけたのは真姫だった。真姫は電話に出るなり呆れ声でそう言った。

「まあ、そうだけだよ……」

『で、なにか用?』

「ああ、実はな……」

それからナオキは真姫に海に行きたい旨を伝えてお願いをした。真姫はナオキの急なお願いにも関わらず、それを受け入れてくれた。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

ここは西木野病院が支援をしている最近出来たばかりのホテルのプライベートビーチで、ナオキが真姫にお願いしたときちようど試しに使ってみて欲しいと言われていたのだとここを勧められて4人でここを使うことにしたのだ。つまり、ここにいるのはナオキ、絵里、梨子、亜里沙の4人だけである。

「梨子ちゃんいくよ……えい！」

「きゃっ！私だつて……えい！」

亜里沙と梨子は海水を掛け合つて楽しんでた。

亜里沙の水着は合宿のときと同じものであつたが、梨子は全体的にピンク色の水着で花の模様が広がつていて、腰の辺りにピンクの花がついていてそこから布が伸びていて、胸の辺りには赤い花もついていた。さらにネックレスとイヤリングもしており、太ももにビーンズを2つ巻いていた。

「楽しそうだな……」

「ちよつとナオキ、なんでそんなにのんびりしてるのよ？」

「ん……？」

ナオキがパラソルの下のマットでのんびりと体を伸ばしていると、絵里が頬を膨らましてナオキの頭のあたりからナオキを見下げて言った。

「ナオキはそんな絵里を見上げ、じーっと美しいかわいいうエリーチカの水着姿を拝んだ。ナオキと絵里の水着はもちろん合宿の前に選んだものである。」

「そ、そんなにジロジロ見ないでよ、バカ……」

「え、ああ……すまん」

絵里はナオキが自分の水着姿をじーっと見てくるので恥ずかしくなり、顔を赤くして

目線を横に逸らした。

ナオキは言葉では謝ったが、その後も絵里から目線を逸らそうとはせずじーつと絵里を見つめていた。

「ん……もう！だからそんなに見ないでつてば！」

「いでっ！」

すると絵里はナオキがずっと見つめているのが恥ずかしすぎである物をナオキの顔に投げつけた。

ナオキは声をあげてそれが当たった鼻のあたりをさすりながら、投げつけられた物を手探りで探した。

「つたく、なに投げつけたんだよ……」

「ナ、ナオキが悪いのよ!? 私のことずっとジロジロ見てくるから……」

ナオキは恥ずかしがる絵里のセリフを聞きながら投げつけられた物を探し出して手に持つて顔の前に持つてきた。

「ぎ、サンオイルかよ……」

ナオキが投げつけられた物とはボトル状のサンオイルであった。しかも見たところ新品で中身がたっぷり入っていた。これは結構痛いであろう……

「じゃあナオキ、罰としてそれ塗ってね」

「投げつけられた時点で罰ゲームな気が……」なにか言った？」……いえ、なんでもありません」

絵里はナオキにそう言う上上の水着の紐をほどいて、自分の両腕を合わせて枕にしてうつ伏せになってマットの上に寝転んだ。絵里の背中あちわの肌は紐をほどいたことにより顕あちわになっていた。

ナオキは手にサンオイルを垂らし、罰ゲームとして絵里のこの綺麗な肌に日焼け止めを……

(ん、待てよ……これって罰ゲームというより……ご褒美じゃね?)

ナオキは塗ろうとした直前に、これが自分にとつてはご褒美であると気づいた。だがそこで出てきた疑問は、絵里はこれをわかっているのかということである。もしかしたらロシアではこれはある一種の罰ゲームなのかもしれない。はたまた絵里はナオキにとつてご褒美になるとわかってこれをお願いしたのか？絵里が自分にサンオイルを投げつけたことを悪く思っているのなら合点がいく。それとも、本当に罰ゲームと思っ言っているのか。真相はナオキにはわからない。だが、これはまたともないチャンスなのである。このチャンスを逃すなナオキ！これは男の夢なのだから!!

ちなみに、絵里はこのサンオイルを塗るといふ手間を掛けさせる罰ゲームと思っる。

「い、いくぞ……う？」

「うん……んっ……んっ……！」

ナオキがまずゆつくりと優しく塗ると、絵里は気持ちよさそうな声を漏らした。ナオキはその声を聞く度に自分の欲情が湧き上がってくるのを感じたが、頑張つて抑えていた。

「んっ……ナオキ、ちゃんと脚にも塗つてね？」

「わ、わかった……！」

ナオキは背中に塗り終わると、次は絵里のスラツと伸びている綺麗な脚に塗り始めた。

そしてナオキはこのとき考えた。これはある意味罰ゲームなのではないかと。この湧き上がる欲情を抑え、さらにそれで絵里の体に日焼け止めを塗りきる……まるでこれは、ご褒美という名の罰ゲームである。

「んっ……」

「つていうか、なんで絵里ずつとそんな声出すんだよ!？」

「え？そうねえ……ナオキの塗り方が気持ちいいからかしら？」

「そ、そうか……」

目を瞑つて顔を腕に置いて横に向けながら笑顔で言っていたが、ナオキは顔を真っ赤

にしていた。言っておくが、決して暑いからではない、熱いのだ。

「ナオキ、もうそれぐらいで大丈夫よ」

「そうか……ふう……」

ナオキは暑くて汗をかいたのと、絵里の肌に手で直接サンオイルを塗った緊張感から大きな息を吐いた。絵里はもちろん暑いから疲れたのだろうとしか思っていない。

「ナオキ、ありがとう。なにか飲む？」

「ああ、頼む」

ナオキがそう言うと、絵里は上半身を起こしてクーラーボックスから飲み物を取り出した。ある一つの動作を忘れて……

「はい、スポーツドリンク」

「ああ、ありがとッ……!!??」

「ん……?」

絵里は取り出したスポーツドリンクを渡そうとすると、自分を見て顔を赤くして慌てふためいて、拳の果てに右手で目を隠したナオキを不思議に思っって首を傾げた。

「ナオキ、どうしたのよ？」

「いや、あの、そのっ!!」

「もうなによ！飲み物いらなの!?!」

「いや、欲しいけど……その……」

「もう！何か言いたいなら言つてよ！」

絵里はナオキが何も言わずにこちらを見なかったので、頬を膨らましてナオキに迫った。ナオキは絵里が自分に迫っているのをわかってさらに顔を赤くした。

そしてナオキはついに勇気を振り絞つてその理由を恐る恐る話した。

「えつと……丸見え……なんだよ……」

「丸見え……？」

絵里はキョトンとしてとりあえず下の方に視線を向けた。

「っ……!?!」

「……………」

そして絵里はやつと自分の水着の上をあのとときに脱いでつけ忘れたことに気がついた。マツトの方を見ると紐がほどかれた自分の水着がまだあった。

ナオキは絵里が怒っていないか確認するために自分の目を隠していた手の人差し指と中指を離した。そこから見えた絵里は、先程まで丸見えであった胸を腕で覆い隠して顔を赤くして頬を膨らましてナオキのことを睨んでいた。

「ナオキ……」

「な、なんだ……？」

「ん〜！海を眺めながら食べる焼きそばは最高だな！」

「ふふつ、そうね。あ、また海苔つけてるわよ」

「ん、ああ、すまん」

絵里は焼きそばと一緒に貰ったお手拭きでナオキの口周りを拭いた。

そんな2人を梨子は不思議そうに見つめた。

「さつきビンタしてたのにもういつも通りになってる……」

「さっきのが誤解だったってことがわかったからだよ、きつと」

亜里沙も梨子と一緒に2人の方を見つめながらそう言うと、梨子は納得したように頷いた。

「ナオキ、ほつぺたは大丈夫？」

「平気だつて。心配してくれてありがとう」

ナオキが頭を撫でてやると、絵里は嬉しそうな表情をした。

さて、状況を説明しよう。あのビンタのあとに絵里がさらにサンオイルのボトルを投げつけようとする、ナオキが起こったことを全て話した。それを聞いて許すか許さないか迷った絵里にさらに一言……

「何回も見てるじゃないか」

「この一言で全ての誤解が解けたのだ。そのあとにホテルのプライベートビーチにある海の家を試食をすることになり、海を眺めながらの昼食となったのだ。」

「でも真姫さままだな。タダで楽しめるし、タダで食えるし、万々歳だ」

「そうね。また今度お礼しなくちゃね」

「先生ってそんなにお金持ちだったんだね」

「そうだよ！ なんとたつて真姫ちゃんのはあの西木野病院の……つて先生？」

「亜里沙は自分のことのように胸を張つて真姫のことを自慢しようとしたが、梨子が言った『先生』というワードに疑問を覚えて首を傾げた。」

「先生って……真姫のことか？」

「うん、そうだよ！」

「なんでまた真姫を先生って……？」

「ナオキと絵里も亜里沙と同じくそのワードが気になっているようだ。」

「それはですね、初めて先生に会ったときにピアノを教えて貰つて、それから先生のことを調べていったらピアノのコンクールでいつも上位を取っていたことを知つて、それでこの前練習を見てもらった時にそう呼んでもいいつて先生が言ってくれたんです！」

梨子はとても嬉しそうにその理由を述べた。ちなみにこの前というのはナオキが凜に告白される前日のことで、この日、梨子は出かける先も告げずに出かけていったのだ。実はその日に梨子は真姫の家に行つて、ピアノの練習を見てもらつていたので。

「なるほどな。でもこれじゃあさらに真姫に頭が上がらないな」

「ふふつ、そうね」

「また先生にピアノ教えて貰わないと!」

梨子がやる気満々に腕を構えると、それを見た3人は笑みを浮かべた。

それから昼食を終えて少し休憩をしてから、梨子と亜里沙はまた海の方に走つていった。

「2人とも元気だなあ……」

「そうね……ねえ、本当に大丈夫?」

「ああ、大丈夫だつて。もう心配しなくても大丈夫だから」

絵里はまだナオキにビンタしたことを申し訳なく思っているようだったが、ナオキは心配いらないと頭を撫でた。

「うん……」

だが絵里はそれでもなおそのことを気にしていた。

するとナオキは絵里が被っていた麦わら帽子を取った。絵里は「あつ……」という声

を出したが、その声をあげると同時にナオキの顔が自分に接近していた。

そしてナオキは麦わら帽子で梨子と亜里沙からこちら側が見えないようにして、絵里の唇に自分の唇を重ねた。

ナオキはその唇を離すと、麦わら帽子を顔を赤くしている絵里に被せた。

「これで信じてくれ。もう大丈夫だって」

「わ、わかった……」

絵里は恥ずかしながらるようにそう呟やくとお返しとばかりにニヤリと笑った。

「じゃあ、ナオキ！海で遊びましょうよ」

「いやーだ！おれはここで優雅なひと時を過ごすんだ！」

だかナオキは午前中と変わらずに海に向かおうとせず、ずっとパラソル下のマットで子供みたいに駄々をこねていた。

絵里はそんなナオキの腕を頬を膨らまして引っ張っていた。ナオキの引っ張られている腕には絵里の二つの膨らみが当たっていた。

「もう子供みたいにく〜！（かわいいけど）許さないんだからね〜！」

「絶対に、嫌だっ……！」

ナオキはここまで嫌がるのは何故だろうか？決してナオキは海は嫌いではない。ただ海で遊ぶのが苦手なだけである。つまり、ナオキはこれまで海にあまり来たことはな

いので、何をして遊べばいいのかわからないのだ。水遊びならプール、またはお風呂場ですればいいだろうという思考回路をナオキは持っているのだ。

「もう、こうなったら……!」

「な、なにをする気だ……!?!」

絵里はナオキがいつまで経つても動く気配を見せないのに耐えられなくなると、ナオキから離れて海の方に向かった。ナオキは絵里が諦めたものだと思つて安心してホッと息を吐いた。

「ナ〜オキ♡」

「ん、どうし……」

ナオキは絵里に名前を呼ばれて顔を下げたのだが、絵里の水鉄砲によりその顔面に大量の海水をくらわされた。

「作戦成功ね」

「……………」

絵里はナオキに水鉄砲をくらわせることが出来て、ニヤニヤとした表情を浮かべた。

ナオキは目を閉じたまま無言でいて、その顔からは海水がポタポタと落ちていつていた。前髪も海水がかかったせいで濡れていた。

「えいっ」

絵里はさらに残っていた少量の海水を発射して、ナオキに追加攻撃をくらわせた。

「絵里……」

「な、なに……？？」

そしてナオキが右手で顔の水を拭きはらってから絵里の名を呼ぶと、絵里はついにナオキも怒る時が来たのかと警戒した。仏の顔も三度までとはこのことをいうのだと絵里は心から学んだ。そして体でもそれを学ぶ……

「……………やりやがったなあ〜！」

「キヤーー！」

ということではなく、ナオキはそう言つて絵里の狙い通りに海に向かって逃げる絵里を追いかけた。

「これは、お返しだっ！」

「きゃっ！ やったわね……えいっ！」

それから絵里に追いついたナオキはさっきのお返しとばかりに両手で海水を掬つて絵里にぶっかけ、絵里も海水を両手で掬つて反撃した。

それからナオキと絵里はお互いに海水をかけあつて楽しみ、途中から梨子と亜里沙も加わつてナオキと絵里、梨子と亜里沙のチームで水をかけあつた。

それが終わつて4人はビーチバレーをしたり、スイカ割りをしたり、砂浜で山を作つ

たりして遊んで、ナオキにとっては海での楽しみ方を知るいい機会となった。

~~~~~♡~~~~~

「いやあく海で遊ぶのって結構楽しいな！」

「ナオキに、昼過ぎとは全然違いますね〜」

「あの時は『いやーだー！』って言ってたのにね〜」

「ふふつ、余程楽しかったんじゃない？」

4人は帰りの電車の中で今日の思い出を話していた。とくにナオキは初めてしつかりと海を楽しめたようで満足気な表情を浮かべていた。

そんなとき、ナオキのスマホの通知音が音を出した。

「ちよつとナオキ、ここ電車の中よ？ マナーモードにしておかないと……」

「あ、すまん……海でマナーモードを解除してそのままだったみたいだ」

ナオキはしまったという表情をしてポケットからスマホを取り出して、届いたメッセージを確認した。

「で、誰からだったの？」

「ああ、奈々おばさんからだ」

「お母さんから？」

梨子は自分の母親からのメッセージだと知ると、何の用なんだろうと頭を傾げた。

「えつと、『予定通り月曜日の夕方に迎えに行くからよろしくお願いね』……だつてさ」

そう、次の月曜日、つまり明後日は梨子の母である奈々が梨子を迎えに来る日なのである。それを聞いて亜里沙は少し寂しそうな表情をした。

「えへ、もう帰っちゃうの？」

「まあ、元々この予定だったからな」

「でも……」

「亜里沙、ダメよ。また遊べばいいじゃない、ね？」

シユンとする亜里沙に絵里は優しく語りかけて頭を撫でた。そして亜里沙はまだ名残惜しそうに頷いた。

「よし、そしたら明日はご馳走にしないとな！」

「ふふつ、そうね。私張り切っちゃうわよ」

「やった〜！楽しみにしてるね、ナオにい、絵里さん！」

ナオキと絵里は自分達の料理を楽しむにする梨子を見て、さらにやる気に満ち溢れ

た。

そして誰よりも残念がっていた亜里沙は梨子になにかしてあげられないのかと頭を悩ますのであった。

次回に続く……

## 第143話「思い出のパレッタ」

「ごちそうさまでした!」

海水浴の翌日、梨子はナオキと絵里が作ったご馳走を完食した。

梨子にとって今日の2人の料理は、ここに泊まりに来た長い日々の最後の晩御飯になるのだ。

「美味しかったか?」

「うん、とつても!」

「ふふつ、こんな嬉しそうな梨子ちゃんを見たら、頑張つて作ったかいがあるわね」

「ああ!」

ナオキと絵里は見つめ合つて、料理をしているときのことを思い出しながら笑顔を浮かべた。

だが、亜里沙はそんな梨子を見て何故か料理を食べるスピードを早めた。

「ごちそうさま!それじゃあ私、部屋にいるから!」

「え、ちよつと亜里沙!」

亜里沙は口の中に料理を流し込むように食べると、亜里沙は焦った様子で部屋に向かって走っていった。

絵里は止めようとするも、声をかけたときにはもう亜里沙の姿はリビングになかった。

「亜里沙さん……」

「やっぱり、梨子ちゃんと離れるのが辛いのかしら？」

「そうかもな……亜里沙は梨子ちゃんを妹みたいに可愛がってたからな」

リビングに取り残された3人は突然去っていった亜里沙を心配して、リビングのドアの方にそんな視線を向けた。

「さて、片付けるか」

「あ、私手伝うよ！最後までらい何かして帰りたいから！」

「ありがとう、助かるよ」

そうしてナオキと梨子は食器の片付けを始めた。

「私、亜里沙の様子を見てくるわね」

「ああ、わかった」

絵里は亜里沙のことが心配で、その場を2人に任せて自分は亜里沙の部屋に向かった。

ナオキと梨子は久しぶりのいここ2人っきりの会話を楽しみながら食器を洗った。

「でも練習着を着るのも久しぶりか〜」

ナオキは食器を洗ってお風呂から出た後、自室のダンスから今まで愛用していた練習着を取り出してカバンに入れた。

「この1週間あつという間だったものね」

「ああ、絵里とも色んなところに行けたしな」

「も、もう……」

ナオキがニヒツと笑顔を浮かべてそう言うのと、絵里は恥ずかしがるようにもじもじとしました。

「で、亜里沙はどうだった？」

「あ、そのことなんだけどね……」

「ん……？」

ナオキは絵里から先程急ぎ足で去っていった亜里沙の様子をコソコソつと聞くと、安心したような表情を浮かべた。

それから2人は明日に備えて眠りについた。





「なんだかこの顔ぶれ、久しぶりだな」

「そうですね」

「なんだかあの頃を思い出すね」

「……………だな」

ナオキ、海未、花陽はそんな3人を見て、sとして10人で過ごした日々を思い出していた。

「さ、みんな早く座って」

すると、真姫が手をパンパンと叩いて立って話しているみんなを急かして席に座らせた。

「なんであんたが仕切ってるのよ」

「しゃーねーだろ。だって真姫は、先生、なんだから」

「ヴェエ……………!?!」

「先生……………?」

「どういうこと?」

ナオキが言った一言に真姫は顔を赤くして、花陽と凜は疑問の声を漏らして首を傾げ、他のメンバーも頭の上にハテナマークを浮かべていた。それもそのはず、真姫が梨子から先生と呼ばれている理由を知っているのは2人以外に、ナオキと絵里と亜里沙だ

けだからである。

「梨子ちゃんも真姫にピアノのこといっぱい教えてもらってみたいだからそう呼んでるみたいなの」

絵里の説明にみんなは納得した声をあげて真姫の方に視線を送ると、真姫は頬を赤くしてそっぽを向いた。

「ほら、早く始めなさいよ。真姫せんせーい」

「わ、わかつてるわよー!」

にこが嫌味全開な言い方でそう言うと、真姫は怒ったように声をあげてから気を取り直すようにコホンと目を瞑りながら右拳に息をかけた。

「では、これより”梨子”の演奏会を始めるわ」

「真姫が梨子ちゃんを呼び捨てで呼んで……」

「ちゃん付けてたら呼びにくかったのよ!……じゃあ梨子、お願いね」

真姫はナオキの一言に取り乱すが、すぐに落ち着いた声でピアノ椅子に座っている梨子に声をかけた。

梨子は最初こそは緊張していたが、和んでいるみんなを見て少し表情が柔んでいた。そんな梨子を心配していたナオキも安心したような表情を浮かべた。

「ナオキ、どうしたの?」

「ん？いや、なんでもないよ」

隣に座っていた絵里は急に微笑んだ。ナオキを見て声をかけたが、ナオキは絵里を向いて笑顔でそう言う。と梨子の方に視線を向けた。

そして音楽室がピアノコンクールのように静まる中、梨子は一度立ち上がってみんなに向かつて一礼し、みんなから拍手を受けた。それが静まるとまたピアノ椅子に座って大きく深呼吸をした。

まず梨子が演奏したのは初めて真姫やみんなに披露した曲、『空』であつた。

この曲は梨子がピアノを好きになるきっかけとなつた曲で思い入れも深い。

梨子が小さい頃、音楽の教師をしている父に連れられて行つたピアノコンクールで一位を取つた少し歳上の女の子が弾いていた曲がこの『空』という曲で、その人が弾いていたこの曲を聴いて空を飛んでいるような感覚を覚え、いつかその人のようにピアノを弾けるようになりたいと思ひピアノを習ひ始めたのである。

そして、その弾いていた人物が真姫だと知つたのはつい最近のことである。

ピアノの特訓を真姫の家に行つた時に、真姫が取つた数々のコンクールのトロフィーや楯たてを目にして、その横に置いてあつた写真の人物があのととき『空』を弾いていた人物と似ていたことで発覚した。それから梨子は真姫のことを“先生”と呼ぶことになり、真姫は梨子を“梨子”と呼ぶようになったのである。

真姫の特訓を乗り越えた梨子の『空』は、前とはまるで比べものにはならなかった。その曲を聴いているみんなは、目を瞑ると容易に晴天の夏空が想像できた。太陽がさんさんと輝き、雲ひとつない夏の青空を……

その曲が終わるとみんなは始まるときよりも大きな拍手をし、音楽室に少数ではあるがみんなの拍手の音が響いた。梨子はそんな光景に感動を覚えて目をうるつとさせて深々とお辞儀をした。その拍手はそんな梨子をまるで包むように温かかった。

「梨子、今までで一番よかったわよ」

「先生、ありがとうございます！」

真姫も梨子の演奏を素直に褒め、他のみんなも各々感動の声をあげていた。

そんな声を受けた梨子は、真姫とアイコンタクトを取ってから2人で頷いてまだ感動が残っているみんなの顔を見た。

「えっと、実はもう一曲演奏したい曲があるんです。演奏しても……いいですか？」

「ああ、もちろん！」

「穂乃果ももつと梨子ちゃんの曲聞きた〜い！」

「つ……ありがとうございます！では……」

みんながナオキと穂乃果に続いてもちろんと頷くと、梨子は嬉しそうにピアノ椅子に

座った。みんなはどんな曲が披露されるのかワクワクして梨子を見つめた。

音楽室はまた静寂に包まれ、梨子は深呼吸をしてから鍵盤を押してその静寂を破った。その音はまさに梨子の空間をその場に広げる役割をしていたと言える。それから梨子は流れるように演奏しながらある曲を歌い始めた。

「ゆめのとびらぐずつと探し続けた、キミとボクとのつながりを探しくてくた〜」

「この曲は……」

『ユメノトビラ』……ですね」

ナオキと海未は驚いた表情をしながらその曲を聴き続けた。真姫はみんなの反応を見てドヤ顔を浮かべていた。μ sの面々は懐かしさを感じながらこの曲を聴くのを楽しんだ。

梨子は真姫の家でμ sの『ユメノトビラ』のPVを見たことによりこの曲にどハマりして、初めての弾き語りに挑戦することを決意した。

梨子の歌声は透き通るようなもので、自身が弾いているピアノの音と見事にミックスして、素晴らしい音色を奏でていた。

「ふう………」

梨子はピアノを弾き終わると両手を太ももに置いて大きく安堵の息を吐いた。

そしてみんなは期待を大きく上回った梨子の演奏に今日一番の拍手を梨子に送った。梨子は立ち上がって達成感に満ちた笑顔を浮かべて深々とお辞儀をした。

「梨子、やったわね」

「はい！」

「まさか、今日みんなを集めたのって……」

「ええ、梨子の『ユメノトビラ』をみんなに聴いてもらおうと思ってね」

真姫はまたもやドヤ顔で今回みんなを集めた理由を言おうと、それを聞いたみんなは驚いた表情を浮かべた。

「あなたのそのドヤ顔はムカつくけど……よかったわよ」

「なによそれ!？」

「ありがとうございます！」

「すごい！君はピアノが得意なフレンズなんだね！」

「あ、ありがとうございます……?」

「ここは真姫に文句を言ったが梨子の演奏を素直に褒めた。それから猫のフレンズの褒めはじめ、みんなも口々に「すごい！」と梨子のことを褒めた。

「でもまさかあの曲を弾くなんて予想外だよ」

「私、この曲を初めて聞いたときから好きになったんです！だからこれを歌いたいわなっ

て言ったら先生が楽譜をくれて、それで練習したんです！」

ことがまだ驚きが収まらない声でそう言うと、梨子は嬉しそうに真姫と特訓していたときのことを話した。

「ほう、あの真姫が……」

「な、なによ！ 悪い!?!」

「いや、全然」

ナオキは珍しそうに真姫を見ていたが、真姫がそんなナオキに照れ隠しからか顔を赤くして声を荒げると、ナオキは頬を上げてそう言った。

「あつ、ナオキ。そろそろ時間なんじゃ……」

「そうだな……梨子ちゃん、行こうか」

「うん、わかった」

絵里が時計を見てナオキに見せると、ナオキは談笑してる梨子に声をかけた。梨子はすぐに頷いて姿勢を正してみんなの方を見た。

「みなさん、これからナオにいのこと、よろしくお願いします」

梨子は礼儀正しくお辞儀をしてOGを含めたアイドル研究部のみんなにそう言った。

「こ、こちらこそ！ 不束者ですがよろしくお願ひ致します」

「……海未って時々わけわからないこと言うよね？」

「ははは……確かに」

海末が慌てた様子でそう言ったが、そんな海末を見て真癒美と瑞希は小さな声で話して苦笑いを浮かべた。

さらに海末の言葉を聞いた絵里は心配そうな表情をしてナオキの制服の袖をキュツと掴んだ。ナオキはそんな絵里を不思議そうな顔で見つめてからニコツと微笑んだので、絵里の先程の表情は安心したような表情に変わった。

「り、梨子ちゃん！」

「ど、どうしたんですか?……亜里沙さん」

すると急に声をあげた亜里沙にびっくりした梨子は、驚きがまだ収まっていない感じで亜里沙の方を向いた。

亜里沙は恥ずかしそうに背中に手をまわしながら梨子に近づいた。

梨子はそんな亜里沙を見て首を傾げて、後ろの方ではナオキと絵里が亜里沙のことを応援しているような仕草をしていたのでさらに首を傾げた。

「こ、これ! あげる!」

「え、私に……?」

「うん……梨子ちゃんと話したりしてて楽しかったし、妹ができたみたいで嬉しかったし、何かお礼をしたくて……」



梨子は亜里沙が照れながら差し出したラッピングされた箱を感激して目をうるうるさせて眺めていた。そして、ゆっくりとその箱に手を伸ばしてそれを受け取った。

「開けてもいいですか？」

「うん……」

亜里沙が頷くと梨子はリボンを解いて箱を開け、その中身をドキドキしながら確認した。

「これは、バレッタ……!」

「かわいい! 亜里沙ちゃんが作ったの?」

梨子が入った中に入っていた周りが白で真ん中がピンクのバレッタで、ことりは横から覗き込んで驚きと歓喜が混ざった声をあげた。

「ううん、私のお小遣いで買ったの! でも包装は自分でしたんだけどね」

亜里沙がけろつと言ったそのセリフで受け取った本人である梨子と、昨日の時点でそれを知っていたナオキと絵里以外のみんながカクンと体勢を崩した。

「なーんだ。てつきり亜里沙がそのバレッタを作ったと思ったよ」

「作ろうと思ったけど時間がなくて……」

雪穂が亜里沙に近づいてそう言うと、亜里沙は少し残念そうな声で言った。

「とつても嬉しいです! ありがとうございます! ぎいいます、亜里沙さん!」

「ま、眩しい！眩しいよ雪穂！」

「う、うん、そうだね。とりあえず落ち着こう？」

申し訳ない気持ちがあつた亜里沙だったが、梨子の眩しい喜びの笑顔に腕で目を隠した。

「梨子ちゃん、私が付けてあげるね」

「はい。お願いします！」

梨子からバレツタを手渡されたことりは少し悩んだ表情を見せた後に思いついた表情に変えて、鼻歌を歌いながら梨子の髪を弄っていた。

バレツタを付けるだけだったので、衣装の髪型にするときより時間は短めであったが、ナオキはそれだけのためにそんなに時間がかかるものかと疑問に思っていた。

「……よし。できたよ〜」

「ありがとうございます！」

梨子は頭の後ろの方に付けられたバレツタを、ことりが構えた鏡を通してキラキラした目で見つめた。

亜里沙はそんな梨子を見て嬉しそうな表情を浮かべた。みんなが口々に「似合ってる」と梨子を見て言うのと梨子は恥ずかしがってはいたが、嬉しそうな表情をしながらもじもじとしていた。

「亜里沙さん、本当にありがとうございます！これ、大切にしますね！」

「うん！また遊びに来てね。待ってるから！」

「ああ、また暇な時においで」

「そのときは歓迎するわよ！」

「つ……はい！」

亜里沙、絵里、ナオキの温かい言葉に、梨子はとても嬉しそうな笑顔をナオキ達に向けて振りまいた。

その後、梨子は音ノ木坂学院の前まで迎えに来た奈々に連れられて車で家へと帰っていった。

去っていく車を見つめながら、ナオキは梨子が去る前に残していた言葉を思い出してフツと笑いを零した。絵里もそんなナオキの顔を除いて、2人は見つめあつて笑顔を浮かべた。

「よし、じゃあちよつとだけ練習するか！」

「「「「「「「はい！」」」」」」」」

ナオキが声をあげると、絵里達OG以外のみんなは返事をして校舎へと走つていった。

「じゃあ、私達も行く？」

「そうやね。1年生の子らの練習は見たことないしね」

「ふん、この私が今のアイドル研究部の実力を確かめてあげるわ!」

「ああ、お願いするよ」

それからナオキ、絵里、希、にこも校舎に向かつて歩いていき、Shooting Starsの初ライブに向けての練習が再び開始されたのであった。

そしてナオキは校舎に向かいながら梨子の言葉を思い出していた。

『ナオにいいあのね、私決めたことがあるんだ』

『ん、なんだ?』

『私ね……この音ノ木坂学院を受験して、ここの生徒になる!』

次回に続く……

## 第144話「ぶつかる想いと奥義」

「ん、なにか入ってる？」

ある日の練習から帰るとき、ナオキは自分のロッカーに朝見た時にはなかった何かが入っていることに気付き、それを疑問に思いながらも取り出した。

その“何か”とは感触からして便箋に入った手紙で、届け主の名前は書いていなかった。ナオキはさらに疑問の表情を浮かべ、中身に名前が書いてあるか確かめるために封を開けた。

ナオキは中に入っていた折られている手紙を取り出して、その場でひろげて内容を確認した。

「これは……！」

ナオキはその内容を読んで衝撃を受けて、手紙の最後にあつた届け主の名前を見て「やはりか」と呟いて手紙を便箋に戻した。

その手紙の内容とは……………

『突然こんな手紙を送つてごめんなさい。本当は直接伝えたかったけれど、やっぱり恥ずかしくてみんなみたいに伝えることはできません。』

私はあなたのことが好きです。

仲間として、友達としてじゃなくて、1人の男の子として好きです。

返事はいりません。だって応えは聞かなくてもわかるから。ナオキくんには絵里ちゃんがいるから。

これからも、よろしくお願いします。

### 小泉花陽』

ナオキは返事はいらないと書いてあつたが、しつかりと返事を書いて次の日に花陽のロッカーに手紙を入れた。

その手紙には、花陽の気持ちに応えられないということと、これからも今まで通りに仲良くやっていこうということを書いた。

だが、同じくナオキが花陽からの手紙を受け取った翌日、ナオキと亜里沙が練習で不在中のことであつた……

「ん〜！ やつぱり天気がいい日の掃除な気持ちがいいわね〜」

絵里は自分とナオキの部屋で掃除機をかけながらそんなことを呟いていた。

それから絵里は鼻歌を歌いながら掃除機をかけたりして部屋を掃除していた。

「あら、これは……？」

そしてナオキの机の上に積み上げられていた本を片付けていると、本と本の間に挟まっていた何かがヒラリと落ちたのでそれを手に取つた。だが絵里はその“何か”には見覚えがあつた。

それは昨日、絵里がお風呂からあがり、部屋に入るとナオキが慌てたように本と本の間に挟んだものであつた。

その“何か”とは、ナオキが花陽から貰つた手紙である。

絵里はその正体を知らずにすでに開いていた便箋を開いて、中に入っていた手紙を取り出した。

そして絵里はその中身を読んで目を大きく見開いた。

「花陽が……ナオキのことを……好き……!?」

~~~~~♡~~~~~

「ただいま〜」

「おかえりなさい!」

ナオキと亜里沙が練習から帰ってきて疲れたような声で言うと、絵里はそんな2人の疲れを癒すような笑顔で出迎えた。

「私先にお風呂入る〜」

「はいはい。もう沸いてるから入ってきなさい」

「は〜い」

亜里沙は疲れと汗をたくさんかいて気持ち悪かったからか、ふらふらと流れるように部屋に荷物を置いてからお風呂場に向かった。

「ははは……今日は暑かったからな」

にあり、その状況を改善しようとして日本道場委員会はこの催しを開催することにしたのである。

この催しでは各道場の代表が3つの分野の合計得点を競い、日本道場のNo. 1が決められる。男性代表は空手、柔道、剣道、女性代表は日舞、弓道、剣道をすることになっている。と言っても女性代表は数名しかいないため、剣道に関しては男女混合となっている。

そして海未もこの日のために練習を重ね、本番の日を迎えていた。

海未がこの大会に参加する理由は、園田道場の跡継ぎとしての力量があるかどうかを父親と母親に見極めてもらうためである。この大会の結果次第で海未が園田道場を継げるかどうかがかかるのである。

”絶対に園田道場を継ぐ”と心に決めて、海未はこの大会に挑んだ。

そんな海未を応援するために海未の両親をはじめ、絵里達3人を含めたアイドル研究部のみんなや音ノ木坂学院のクラスメイトや生徒達、さらに地域の人達もその場に駆けつけていた。

この都立体育館は全部で3館に分かれていて、女性代表は左側、男性代表は右側で行い、最後の剣道は真ん中の体育館で行われている。つまり海未は左側の体育館からス

タートする。

最初の分野の日舞では、小さい頃から母親である撫子に叩き込まれた日舞を披露して審査員と観客を魅了して堂々の1位を獲得した。

続いての弓道では素晴らしい精神力と集中力を見せて、全10本命中と大会の女性代表で唯一の結果を残し、こちらでも堂々の1位を獲得した。

「園田さん！今のお気持ちをお聞かせください！」

「はい。この日に向けて積み重ねてきた練習の成果がよい形で発揮出来ているので嬉しく思います」

海末はμsのメンバーだったということで大会では注目されている存在で、それに加えて2分野で素晴らしい成績を出しているので取材に来ていた人達からインタビューを受けていた。

「次の剣道は男性代表と混合になりますが意気込みの方をお願いします！」

「はい。私は相手が誰であろうと負ける気はありません。必ず勝って、優勝します」

海末のその宣言に記者達は歓声をあげ、それと共にシャッター音が鳴り響いた。

その頃男性代表側の体育館では……………

「一本！」

『おおお〜!!』

「これはビックニュースだ！今すぐサイトに流せ！」

「は、はい！」

「なんてこった……………まさか、全国大会優勝者が無名の選手に負けるなんて……………なんてやつだ、あいつは」

観客が驚いた表情で見つめる体育館の真ん中の畳の上では、柔道の高校生全国大会で優勝していて体格もしっかりとしている名の知れた選手、西郷一鉄が仰向けで唾然として天井を見上げていた。

その選手を見つめて手を差し伸べる選手がいた。その手を一鉄は取って立ち上がり、そのまま握手をした。

「まさか俺が負けるなんて……………お前、名前は何？」

「僕は白鉄 大地だ」

「白鉄大地……………聞いたことない名前だな？これほどの実力を持つてるお前が、なんで大

会に出て来なかったのか不思議なくらいだ。なんで出なかったんだ？」

「出れなかったんだよ。お金がなかったね」

「そうか、それは残念だ。なら次はまたお手合わせ願おうかな」

「(こちらこそ)」

2人が熱い握手を交わすと大きな歓声が湧いた。

海未はこの大地という人物を知る由もなく、ゆつたりと仲間と一緒に昼ご飯を食べていた。

くくくラブライブ！くくくくく

昼過ぎ、都立体育館の中央にある館では男女の代表が混合で剣道の試合を行っていた。日本道場の一番の者は男女関係なく決めるべきであるという考えから、剣道だけは男女混合の試合になったのである。このことは初めからわかっていたことなので、参加している女性の代表は男性にも劣らない実力を持っている。実際に数名の男性代表がある女性代表に負けていることがそれを物語っている。

この剣道の試合では3本先取、または相手の降参したときや戦闘不能になった場合に

勝利する。戦闘不能なんてあるのか？ときつと疑問をお持ちであろう。だがしかし、次々と男性代表を倒していつているこの女性代表はそれを実行している。

「そこまで！」

審判のその一言にその“鬼”は竹刀を納めて礼をしてから後ろにさがった。同時に観客から大きな歓声があがった。

「やった〜！海未ちゃん〜！」

その鬼……海未は面をはずして、恥ずかしさをにじませながら穂乃果に應えるように小さく右手を振った。

「園田道場代表、園田海未。決勝進出！」

審判が海未の決勝進出決定の声をあげると会場の歓声はさらに大きくなり、海未は頬を少し赤く染めて各方面にお辞儀をした。メディア関係者もそんな海未のことを写真で撮ったり、ネットで知らせたりしていた。

そして海未は一旦選手控え室へと向かったが、その隣を“ある選手”が通過したことは気がつかなかった。その選手は海未の横を通り過ぎてからニタツと頬を上げた。

「ふう……」

海未は控え室のベンチに座って一息ついて、もうすぐ自分の相手が決まる試合が始まる会場と中継で繋がれているTVを見つめた。

『準決勝第2試合！無名道場代表白鉄大地、風切道場代表風切かざきり天下てんか！前へ！』

審判の言った選手の名前に海未は眉を細めて、アップされた選手の顔を見た。

「白鉄大地……無名道場……どちらも聞いたことがないですね」

海未は道場とその代表の名前を聞いたことがなく首を傾げた。だがその相手の名は聞いたことがある。

風切道場……日本でも有名な道場の部類に入る道場で数々の名選手を輩出している。そして剣道界で最も注目されている選手がこの風切天下という男なのである。風切道場の跡継ぎで、その風を切るように早く強い剣で剣道の全国大会で優勝した。ちなみに海未はこの大会の予選とラブライブ！の日程が被っていたので参加しなかった。

『はじめ！』

と、そんなことを考えている間に試合がはじまった。

「一本！」

「風切流奥義、”神速の剣”……」

やはり早い……と大地は攻撃を受けながら体でそれを感じた。天下は当たり前のよ

うにニタツと笑みを浮かべた。

風を切るような力強い剣、風切流奥義の神速しんそくの剣により大地は胴を取られた。

そして2人は次のラウンドに向けて竹刀を構えた。

「はじめ！」

「やあああああああああ！」

その合図とともに突っ込んだのは大地であつた。大きな声とともに勢いよくぶつかった竹刀の音が響いた。

「くっ……………！」

「いい剣筋だ。けどっ……………！」

「なっ……………!?!」

「ふん！」

天下は大地の竹刀を余裕の表情を浮かべて払い、素早くがら空きとなつた大地の防具の腹にあたる部分を竹刀で突いた。

「かはっ……………！」

「これぞ風切流奥義、”神速の剣 突き”」

防具越しに少し痛みが来るほどの威力に大地は数歩下がってしまった。

「1本……………君、大丈夫かい？」

「え、ええ……大丈夫です。やれます」

審判は膝から崩れて腹を押さえ咳き込んでいた大地に声をかけた。

それから大地は息を整えてから立ち上がり体勢を立て直した。

「では、はじめ！」

「お前の快進撃もここまでだ。名もなき英雄さん！」

2本を先守した天下はこのまま勝利を掴むべく一気に攻めかかった。

だが大地が目を瞑って竹刀を横に構えていたため、天下は諦めたかと勝利を確信して面を狙った。

だがその後に響いたのは竹刀が防具にヒットした音……ではなく、竹刀と竹刀が勢いよく”同じような威力”でぶつかった音で、会場はそんな大きな音に一気に静寂に包まれた。天下は大地が自分の剣を受け止めたことに驚いた。

それから大地は天下の竹刀を払って、息を大きく吸ってから勢いよく空きとなった胸を突くと鈍い音がした。その剣を受けた天下は後ろに吹き飛ばされしまい、背中を引かずって倒れてしまった。

「一本。そこまで！」

審判は倒れ込んだ天下に近づくと天下は気絶しており、戦闘不能と判断してそれを告げた。

戦うのは何のため……？

片方は夢であつた道場を継ぐため……

もう片方は、大切なものを守るため……

2人は歩き、歓声が響き渡っている会場に向かった。

必ず勝つと心に決めて決戦の舞台に足を踏み入れた。

『さあ……この日本道場最強決定戦もいよいよ最後の種目の決勝戦となりました！なんと両者ここまで無敗！つまり、ここで勝つたどちらかがこの大会の総合優勝者となり、日本道場最強の名を得ることになります！』

実況者も熱く実況する中、観客もそれに負けないぐらい盛り上がっていた。

女性でありながらも無敗。さらに数名の男性を一撃で戦闘不能にして、その強さから幼い頃から“鬼園田”の異名を持つ園田海未。

そして大会以前は無名であつたがその無名とは思えない実力でここまで無敗で勝ち上がり、今までの成績からすれば“最弱”という言葉が相応しいとされてあ無名の剣王

の白鉄大地。

この2人の入場とともに観客の歓声はさらに大きなものとなり、この試合の注目度が感じて取れた。

2人は防具をつけて面と竹刀を持った状態で会場の真ん中まで歩いて行き、審判の前で初めて対峙して審判の言葉と同時に礼をした。

「あなたが園田さんですね。鬼園田の……」

「そうです。ご存知なんですね」

「そりやそうですよ。なんとたつて有名人ですから……僕みたいな『無名』と違って」

「有名も無名も関係ありません。全力でいきます」

海未がそう告げて振り返り柵の外に出ていくと大地は驚いた表情を浮かべたが、それから微笑みを浮かべて柵の外へと向かった。

「ただいまより、日本道場最強決定戦、男女混合剣道の決勝戦を行います！」

審判が会場に響き渡るような声でそう言うのと、観客は待つてましたと言わんばかりに大歓声をあげた。

海未と大地は面を被って集中力を高めていた。

「園田道場代表、園田海未。前へ！」

「（私はこの試合に勝って、必ず園田道場を継いでみせます。そして……）……はい！」
海未は自らの夢とナオキとした約束のために勝利を誓い、返事をして柀内へと入っていった。

「無名道場代表、白鉄大地。前へ！」

「（僕はこの試合に勝って、絶対に”みんな”を、大切なものを守ってみせる！）……はい！」

大地もこの大会で優勝すると強く心に決めた”あの”瞬間を思い出して、力強く返事をして柀内に入ってしまった。

両者は対峙して竹刀を構えて試合開始の合図を待った。

「はじめー！」

「やあああああああ!!」

その声と同時に両者は響き渡らんばかりの声を張り上げて攻撃を仕掛けた。激しくぶつかった竹刀の音が試合の開始を告げるように会場に響き渡った。

2人は竹刀を一度ぶつけたまま睨み合い、お互いに一步も譲らない状況が続いていた。

「女の子なのに、すごい力だ……！流石は鬼園田」

「それほどでも……！」

お互いが相手を跳ね返そうと力を入れていたが状況は変わらずにいたが、観客はそれをつまらなく感じることはなく、逆に興奮してその状況を観ていた。

「1つ、聞いてもよろしいですか？」

「なにかな？」

「あなたは何故戦うのですか？」

「……大切な存在を守るためだよっ！」

そしてキリがないと2人は一旦距離を取って息を整え、また竹刀をぶつけ合った。

「それは、どういう……？」

海未が言葉の意味を聞くと大地は言いにくそうな表情をしていたが、言うことを決断したからか口を開いた。

「道場みんなのためだよ。無名道場はお金もなくて存続のピンチなんだって師匠が言ってたんだ。でも無料で門下生を引き受けているんだ。だから道場を存続させるためには、師匠を、門下生のみんなを守るためにはこの大会で優勝しなきゃならないんだ!!」

そしてついに海未が大地の剣に押し負けてしまい、大地はチャンスと踏んで一気に突進した。

「めええええん!!」

その声と竹刀が面を叩く音が鳴り響くと、会場は先程までの熱気が嘘みたくに静かになった。

「一本！」

だが、審判の声を合図にするかのように歓声が湧いた。

『先制は白鉄選手！ ついにここまで一本も取られなかった園田選手に黒星が付いた！』

実況者もこの状況には興奮が抑えられずに雄叫びをあげるように叫んだ。

だが海未は焦ることなく息を吐いてからまた竹刀を構えると、大地もまだまだ試合を楽しみにしているような表情を浮かべて竹刀を構えた。

「はじめ！」

海未はラウンド開始の合図を聞くと素早く大地との距離を詰めた。

「なっ……!?!」

大地は一瞬で自分のすぐ前まで来ていた海未に驚いて少し体を引いてしまった。その隙に海未は力が若干抜けていた大地の竹刀を弾いて、素早く面を竹刀で叩いた。

「めええええええん！」

「い、一本！」

『き、決めたく！ 園田選手、素早く一本を取り返しましたく！』

観客や実況者が興奮する中、大地はあまりにも一瞬の出来事に理解が追いつかずには唾然としていた。

「あなたの勝たなければいけない理由がわかって安心しました。ですが、私にだって勝たなければいけない理由があるのです。だから、全力でいきます！」

「……………ふっ、面白い。じゃあ僕も全力でいかせてもらおう！」

2人は楽しそうな笑顔を浮かべて竹刀を構えて審判の合図を待った。

「はじめ！」

2人は合図と同時に激しく竹刀をぶつけ合ってから連続で何度も交えた。観客は何度も聞こえる激しい衝突音に息を飲み込んで試合を見守った。それから一度竹刀を思いつきりぶつけ合って大きな音が響き、2人はお互いから距離を取った。

「はあ、はあ……………（これじゃあ埒らちが明きませんね。なら、あの技を……………！）」

海末は「あの技」なるものを使うと決めると、乱れていた息を整えて大きく深呼吸をしてから目を瞑って竹刀を構えた。

「つ……………（なにを考えているんだ？でも今がチャンス……………！）」

大地はこの機会を逃さずに右サイドから海末の後ろに回り込み、がら空きの背後から面を狙った。

決まったとほとんどの人が思った。

「っ……！…（今です！ナオキ、あなたの技お借りします！）」

そのとき、海未は左脚を大きく振って地面を引きずりながら体を回転させ、目で捉えられないほど素早く大地に向かい胴を斬りあげるように攻撃した。その衝撃で大地は回転して背中から地面に落ちた。

「カハッ……！…（なにが起こったんだ……!?!）」

「い、一本！園田海未、王手！」

審判の判定を聞いても観客は歓声をあげられず、驚いた様子で一本を取った海未を見つめていた。

「あの技は……」

「ナオキ何か知ってるの？」

「ああ、あの技はおれが海未との練習で使った技のアレンジだ」

「ナオキの技のアレンジ……?」

ナオキが呟くように言葉を発すると、隣にいた絵里は気になってそのことを聞いた。

「ああ、おれの技……天翔龍閃は刀を鞘に収めたみたいな動作をしてから放つ。でも

さっきのは普通に構えた状態から放つて、しかもあれは相手の動きを”見ていた”……

そうじゃなきゃあんな動きはできない」

「そ、そうなのね……」

ナオキが戦闘ものでよくありそうな解説を披露すると、絵里だけではなく他のみんなも少し戸惑っているような仕草をしていた。

そしてしばらく倒れていた大地であつたが意識を失うことはなく、苦し混じりにゆつくりと体を起こした。

「さ、さっきの技は……!?」

「さっきの技は私の友人の技をアレンジしたものです」

「アレンジ……か」

大地はそう呟くと竹刀を構え、追い込まれたことで焦っていた心を落ち着けた。海末も追い込んだことで気を抜くことはなく逆に気を引き締めた。

「はじめー!」

その合図と共に2人は同時に攻撃を仕掛け、お互いに竹刀を押し合いながら円を描くように動いていた。

「じゃあ僕も技を使わせてもらおうよ。」コピーカウンター「……!」

「つ……!? (急に力が強くなりましたね。でもこの動きはまさか……!?!)」

海末は大地の急に上がった力に押されながらもなんとかそれを押し返そうとした。

だがそれをするにはできなかつた。

大地は海末の竹刀を払い、大きく息を吸ってからそれによつてから空きとなった胴を

勢いよく突いた。それによって海未は後ろに飛ばされてしまい、少し背中を引きずって停止した。

「一本！」

「女の子相手に使ってしまうなんて……」神速の剣 突き……

審判が海未に近づく中、大地は勝利を確信したのか大きく息を吐いた。

それを観ていた一部の観客も「あの技は耐えられない」そう思っていた。

「つ……やはり効きますね、その技は」

「なっ……!?!」

大地は自分の攻撃が当たったところをさすりながら立ち上がる海未を見て衝撃を受けた。先程まで試合が終わったと思っていた観客もざわざわとし始めた。

説明しよう！

”コピーカウンター”とは自分がくらった技をコピーし、それを何倍もの威力にして相手にくらわせる技なのである！一度コピーした技は頭と体に記憶されているのでいつでも打つことができるが、自分の目でその技の動作が見えていることが条件だぞ！

「私も追い込まれてしまいましたね。でも、負けません」

「なんで君はあれをくらって……」

「なんでと言われましても……日頃の鍛錬の成果と言えば良いのでしょうか？」

「お、おう……（この人はどんな鍛錬をしているんだ!? 流石は鬼園田）」

大地は「コピーカウンター」神速の剣 突き」を耐えた海未がしている鍛錬の厳しさを想像して唾を飲み込んだ。だが実際はそんな厳しいものではない。ただ耐えたことになんと答えたらわからなかったので海未はそう言ったまでであった。

「次が最後の勝負になります！ここで一本取った者を勝利とする！」

審判がそう言うのと観客は会場が揺れんばかりの歓声をあげ、海未と大地は竹刀を握る力を少しばかり強めた。この試合の勝者はこの大会の優勝者、つまり日本道場最強となるのだからおのずと力が入るだろう。

「園田さん……僕は奥義を使います」

「言ってもいいんですか？警戒されて決まりにくくなりますよ？」

「大丈夫です。必ず決めますから」

「ふふつ、そうですねか……なら私も奥義を使わせていただきます」

「望むところです。僕の最弱さいじやくを以って、君の最強を打ち破る！」

2人はお互い奥義を使うと宣言したからか、さらに気を引き締めて試合開始を待っていた。

「最終戦。いざ尋常に……」

審判が右腕を伸ばし右手の指を全て合わせて伸ばした状態で頭上まで上げると、2人

は合図と同時に奥義を仕掛けようと力を溜めた。

「……………はじめ!!」

そして審判がその腕を胸の前まで振り下ろすと、2人は奥義を使うための力を解き放った。

それは一瞬の出来事だったが、2人にとっては人生のターニングポイント。明らかに実際の時間よりは長く感じられた。

……………2人の運命はこの一瞬で決まる。

「無名流奥義……………」
「いっとうしゅら刀修羅!!!」

下を向き、右脚を後ろにずらして両脚を肩幅より少し広めにひろげて姿勢を低くして、さらに竹刀の先を海末の方に向けた状態で頭より少し上のところで構えた大地は、修羅の様な目で海末を睨んでその奥義の名を叫んだ後に目に捉えられないほどの速さで突撃した。

説明しよう!

”一刀修羅”とは無名流の奥義で、極限まで高めた自分の力を全て解放しとてつもない速さと強さで相手に攻撃する。だがこの技はその威力、スピードから1日に一度しか出すことができず、その一刀に全てを賭ける技なんだ!まさに最強、さいきょう最弱の

技だ!!

「うおおおおおおお!! (これで、終わりだ……い)」

大地はこの技を使ったことで勝ちを確信していた。これで道場が救える、またあの楽しい鍛錬の日々が迎えられる、と心の中で安堵していた。

だが刹那、大地の竹刀は大きな音をたてて地面に叩きつけられた。

「っ……!!」

それを叩いたものの正体は海末の竹刀であった。さらに海末はその衝撃を利用して空中へと場所を移動して竹刀を振り上げていた。

大地は衝撃の後に海末が空中にいることに気がついたが反応できなかった。一刀修羅の反動で使った直後は力が完全に入らなくなつて動けなくなつてしまい、気づくことはできても防ぐことはできない状態なのだ。

「これで終わりです……園田流奥義! 園田流星群!!」

海末は空中に移動した直後にその奥義の名を叫んで分身した。その分身は力を使い切つた大地の夢か幻か、または現実かわからない。しかし大地にはそんなことを考えている余裕はなかった。

「てやあああああああ!!」

「くっ……!! (終わった……か)」

海未とその分身はまるで流星群のように大地に降り注ぎ、海未本体の竹刀が大地の面に直撃した。

大地は反動で力が抜けていた上に海未の奥義をくらったのでそのまま横向けに倒れてしまった。

そんな一瞬の出来事を近くで見ていた審判、もちろん会場にいた観客も何が起こったのか事細かくわからなかった。

わかるのはただひとつ……勝負が決まったということである。

「一本! そのままで! よって勝者……園田道場代表、園田海未!」

『おおおおおおおおお!!』

審判が勝者の名を告げると観客は今日一番の大きな歓声をあげた。そんな歓声には拍手の音も混じっていた。

それと同時に担架を持ったスタッフが現れて倒れていた大地を乗せた。

「つ……園田さん、ありがとう」

「(こちらこそ、ありがとうございました)」

「海未、おめでどう」

「ありがとうございます。ナオキも今まで練習に付き合ってくれてありがとうございます。ありがとうございました」

「いいよそれぐらい。それで、前に優勝したらおれに言いたいことがあるって言ったよな？」

「……は、はい」

そう、海未はナオキとの練習の時に『優勝したら言いたいことがある。優勝したら聞いてほしい』と伝えていた。そしてその約束の通り優勝したのでナオキはそれを聞ききたのだ。

「おれに言いたいことってなんなんだ？」

ナオキがそう聞くと海未は途端に恥ずかしくなり、なんとか誤魔化してその場から逃げたいとまで思っていた。

だがこんなところで逃げたら園田道場の恥、日本道場界の恥とも言える。

そんな心臓が飛び出そうなぐらいの緊張を深呼吸をして落ち着けた。

「そ、そのっ……えっと……です、ね」

海未はまだ落ち着けていないのか頬を赤く染め、声を強くしたのかと思えば顔を逸らしてためらっているような仕草を見せた。

ナオキは海未がなにを言いたいのかわからないので眉を細めて頭を傾げた。

そして海未はやつと決心をせずと心の中で眠らせていた感情を吐き出した。

「わ、私……園田海未はっ、あ、あなたのことがっ……！」

「っ……！」

海未は道着の胸元を両手で掴みながらナオキの顔を見上げるような状態で頬を赤く染めて言葉を振り絞った。

「ナオキのことが……好きなんです！」

ナオキはその言葉を聞いて拳を握る力を強くして海未の顔を見つめた。

「う、海未……」

「わかってます。ナオキには絵里がいる。だから応えられない。ですが、この気持ちは今伝えなければいけないと思ったんです」

「……返事は、ごめんとしか言えない。でも海未の気持ちは正直に嬉しいよ。ただ、一言

だけ言うとしたら……好きになつてくれてありがとう。海未ならきつとおれより近い人が見つかるよ」

「つ……はい！」

海未はナオキの言葉に安心したのか涙を少し浮かべた笑顔で返事をした。

「じゃあ海未、これからよろしくってことで」

ナオキはそう言つて笑顔を浮かべながら握手をしようと海未に右手を差し伸べた。

しかし海未はその右手を取ることはなく、なにを考えたのか思いついたように笑みを零した。

「おい海未、なに笑つて……」

ナオキが言葉を言いかけると、海未は髪を揺らしながら顔を自分の顔の目の前まで近づけていた。

そして海未はそのままの勢いでナオキの唇に軽く口付けをした。

ナオキはその直後に目を大きく見開いて、今起こったことをしっかりと理解できずに頭の中を謎が駆け回っていた。だが自分が海未にキスされたとわかつた途端に顔を赤く染めた。ちなみにナオキは絵里以外の女の子から唇にキスされたのは初めてであったのだ。正確にいうとこれで2回目である。

「ふふつ、これつきりです。私の初めてはナオキがよかつたので」

海未は人差し指を伸ばして自分の唇に当ててウィンクした。その言葉の後に海未は自分にか聞こえないほど小さな声で呟いた。

「それに、真姫だけなんてズルいですから……」

もちろん、ナオキには聞こえるはずもない。

「お、お前なあ！」

ナオキが顔を赤くしたまま声を張り上げてそう言うのと海未は口元を軽く握った拳で隠して笑った。ナオキも仕方なさそうな表情を浮かべて笑みを浮かべていた。

「じゃあ、おれ達は帰るけど海未はどうする？」

「いえ、私は今日の反省をしたので先に帰って行ってください」

「……海未は真面目だなあ。じゃあまた練習で」

「はい。また練習で」

ナオキが手を振って控え室を去ると、海未は挙げていた手を下ろして天井を見上げた。

「……………失恋とはこんなにも悲しいんですね……………」

海未の浮かべたその涙は、ナオキと対面しているときに抑えていたものを解放したように流れていくのであった。

その夜……………

『えりちどうしたん？こんな夜遅くに』

「ごめんなさい希。ちよつと聞きたいことがあつて……………」

次回に続く……………

第145話 「熱い愛でアナタを想う」

「絵里……今、なんて……？」

おれは今絵里がなんて言ったのか聞き取れなかった。いや、正確には聞き取ってはいたがそのことを信じたくなくて認めていなかったのである。

「……ならもう一度言うわ」

絵里は無情にも冷たい表情をしておれにもう一度あの言葉を言おうとした。

嘘であつて欲しい。今日がエイプリルフールかなにかであつて欲しいと心から願っていた。

「私達、終わりにしましょう……」

「っ……………!？」

否、それは本当だった。それに絵里の目は本気だ。冗談を言うような目じゃなかったが、冗談であつて欲しい。

「じよ、冗談だよな……？嘘だと言つてくれよ？……な？」

おれはそう言つて目の前に座っている絵里の肩を持つと手を伸ばした。

……でもその手は弾かれた。

「……………え？」

「冗談なんかじゃないわ。私は本気よ」

おれの手を弾いた絵里はそう言うのと立ち上がつて部屋のドアの方を向いた。

「待つてくれ、絵里……！おれ、絵里なしじや……絵里がいなきや……！！」

「……………さようなら」

おれは必死に絵里を呼び止めようとしたが、無情にも絵里はそう告げて歩き始めた。

「待って、待ってくれ絵里！絵里ッ!!」

おれは必死に去っていく絵里に手を伸ばしたが、その手は全然絵里には近づいてはいなかった。

いや、近づくと言うよりかは絵里がどんと遠ざかっていったと言うべきであろう。

「絵里ッ！絵里……！絵里………え、り……！」

おれは絵里が見えなくなってもずっと絵里に手を伸ばし続けた。

だがその手は届くことはなく、あたりはこれからのおれの人生を暗示するかのよう
に暗闇に包まれていった。

「絵里……絵里……!!」

「ナオキつてば、ナオキ!」

「はっ……!!?」

絵里は隣でうなされていたナオキを揺らして目を覚まさせた。

そんなナオキは全身汗だくで息も荒かった。

「ナオキ、大丈夫?」

「え、り……?」

「ええ、そうよ。どうしたの?」

ナオキは目を大きく開いて絵里を見つめた。絵里はそんなナオキの顔を不思議そうに見つめ続けた。

「っ……絵里!!」

「ナ、ナオキ!」

絵里は急に抱きついて来たナオキに驚いた。だが自分を抱きしめる力の強さと震えた声で自分の名前を呼んでいるナオキを見て、とても辛い悪夢を見たのだろうと察してナオキの頭を優しく撫でた。

「……………れ」

「ええ、わかったわよ」

そんなナオキがかすれた声で言った一言を絵里はよく聞き取れなかったが絵里は優しく言葉をかけて、ナオキが寝付くまで頭を撫で続けた。

第145話「熱い愛で君を想う」

「じゃあ行つてきます」

「行つてきまゝす！」

「行つてらっしゃい」

朝、ナオキと亜里沙は練習があるため学校に向かった。

8月ともなるとクーラーなしでは過ごせない日々が続いており、絵里は薄いシャツとショートパンツ姿で2人を見送った後にソファに座って、ソーダ味の四角いものが棒に刺さっているアイスクリームを食べていた。

「ん……………」

絵里はそのアイスクリームを啜えながらふとスマホのホーム画面のある画像を見つめた。

その画像は全国のスクールアイドルと共に歌い踊った『スクールアイドルフェスティバル』の終わりに、絵里がナオキの頬にキスをしたときの写真であった。ナオキは頬を赤く染めて不意を突かれたように驚いた表情をしていた。

絵里はその画像から視線を外して、自分の左手の薬指にはめている“誓いの石”が付いている婚約指輪に向けた。これはナオキが卒業式の日、プロポーズしてくれたときにはめてくれたものだ。

そして絵里は不安そうな表情を浮かべて一点を見つめて、昨夜希から聞いたことを思い出していた。

それは昨夜の出来事であった。

絵里は応援で疲れたであろうナオキが隣で寝付いたあと、ナオキを起こさないようにベッドを抜け出して部屋を出てリビングに向かった。

そして絵里はメッセージアプリで希に電話をしてもいいか確認してから電話をかけた。

『えりちどうしたん？こんな夜遅くに』

「ごめんなさい希。ちよつと聞きたいことがあつて……」

『聞きたいこと？』

「その……ナオキのことなんだけど……」

『ナオキくんの？』

希はナオキが料理サプライズをしたときみたいに、また不安になったのかと思つて話すように促した。

「希は……ナオキが他の人から告白されていることつて知つてるの？」

『えっ……!?!』

絵里は希が音ノ木坂学院在学中によく女子から相談を受けていて、さらにタロットカードを使った占いを得意としているのもあるためなにか知つていのではないかと思つて聞くと、希は少々驚いたような声をあげた。

絵里が返答を待つ中、希はこのことを言おうか否か迷つていた。希はこのことはすでにナオキから絵里に話されていることだと思つていたので。しかし実際は違つた。ナオキは絵里に話していなかったのだ。自分がナオキに告白したこと。そして、他の μ sのみんなも「叶わなくてもこの想いだけは伝えておきたい」という気持ちで告白したということ。

「希……黙ってるってことは知ってるのね？」

『……そうや』

希は電話越しに伝わる絵里からの威圧に押し負けたように口を開いた。そしてこの際だと希は言葉を繋げた。

『多分ナオキくんは言ってるやろうから言うけどな？ウチもナオキくんに告白したんや』

「希……も？」

『うん。あと穂乃果ちゃん、海未ちゃん、ことりちゃん、真姫ちゃん、花陽ちゃん、凜ちゃん、そしてにこっちゃんもや』

「み、みんなが……!?!」

絵里はまさか自分以外のメンバー全員が告白したとは思ってもしなかったの
で、その分驚きは大きなものだった。

『ウチから話しとくべきやったね。ごめん、えりち……』

『ううん、希が謝ることじゃないわ。希は……みんなはただナオキに気持ちを伝えただけだもの』

『えりち、ありがとう。でもナオキくんはきつと……!』

「それじゃあね、希。ありがとう」

絵里は希の言葉を聞かずに通話終了のボタンを押した。

希は絵里に言葉を伝えきれなかったことに不安を覚えた表情で、通話が終了したこと
で画面が切り替わったスマホを見つめながら呟いた。

その画面には卒業式の日希が絵里とにこと一緒に撮った写真が壁紙にしてあった。

「きつとナオキくんは、えりちのことを想って……！」

そして現在……

絵里はナオキが告白されてたことを知ったが、そのことに関しては別に気にしてはい
ない。気になっているのは『何故ナオキはこのことを自分に話さなかったのか』という
ことである。

もしかしたらナオキは誰かの告白をOKしているかもしれない。

もしかしたらナオキは誰かの告白を受けて自分とどちらを取るか迷っているかもし
れない。

もしかしたら、もしかしたら……

もう誰かと繋がっているのかもしれない。

まさかそんな昼ドラみたいなのドロドロなことが起こっているなんて信じたくはないが、もしかしたらそんなことが起こっているかもしれない。

「可能性があるとしたら……海未？」

絵里は何故かナオキがOKしそうな相手に海未を選んで、勝手に2人のくつついた妄想を膨らませた。

『い、いけませんっ、こんなことっ……!!』

『なんだよ、誘ってきたのは海未じゃないか』

『で、ですがっ、あっ……!!』

『本当に、綺麗な体してるなあ……絵里にはない魅力を感じるよ……!!』

『もう、私としてるときに、絵里の名前は禁止です……ちゅっ……』

「なんてことが……!?!」

絵里は唾えていた棒を床に落とし、そして頭を両手で抱えながら両膝をついて震えていた。

絵里の不安は次第に大きくなっていき、絵里の心を強く、強く締め付けていった。

「ナオキ……どうして……!」

そう小さな声で言った絵里の目から一粒の涙が零れ落ちた。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「よし、そこまで!」

ナオキがそう言うのと、踊りきって疲れた Shooting Stars のメンバーは「やっと練習が終わった」とその場に座り込んだ。

今日も気温は高く、夏なんだということを感じさせる日であった。ナオキは疲れ切っているみんなにドリンクとタオルを配って、自分もしっかりと水分補給をした。水分補



給は大事だよ!!

ナオキがドリンクを飲んでいると真っ黒だった自分のスマホの画面が点灯したこと  
に気づきスマホに手をのぼし、出ていた通知からメッセージアプリを起動した。

「希からか……」

ナオキは希からのメッセージに目を通すと右眉をピクツと動かして表情を硬くした。

「お義兄ちゃんどうしたの?」

「すまん亜里沙、ちよつと先に帰るわ」

「う、うん……」

「みんなすまんな。また明日!」

ナオキはそう言うのと部室の鍵を取り出して、屋上に持ってきていた荷物をまとめて部  
室に残りの荷物を取りに向かった。それを取ると部室に戻ってきた海未にその場をお  
願いして急いで帰っていった。

「(どういふことかわからないけど、早く帰らなきゃ……!)」

ナオキは帰り道を走りながら希から届いたメッセージの内容を思い返していた。

『ナオキくん、えりちのために早く帰ってあげて。えりち、悲しんでたよ。だから早く  
帰ってあげて』

絵里は何故悲しんでいるのかナオキは分からなかったが、何かあったことには変わりはない。だからナオキは急いで帰る。

途中で信号が赤に変わり、ナオキは信号が早く青に変わるのを祈りながらその場で駆け足をしていた。こうしている間にも絵里が悲しんでいると考えると胸が苦しくなり、1秒でも早く帰りたいと思っていた。だが信号は無情にもなかなか変わらない。

「……………よしー」

そしてやつと青に変わると夏休みだからか多くの人が行き交っていたが、ナオキはそれらを心の中で謝りながらもその人と人との間を通って走った。

ついに自分が住んでいるマンションに辿り着くと、ラストスパートだと絵里達と暮らしている部屋まで階段で向かった。

それから部屋の前に着くと息を整えてドアを開けた。

「ただいま……………」

ナオキは少しひかえめの音量でそう言ったが絵里は出てこない。いつもならばドアの開く音を聞いて出てくるはずなので、ナオキは首を傾げた。

「絵里……………あれ？」

靴を脱いで、今度はリビングのドアを開けて絵里の名前を呼ぶがそこに絵里の姿はな

かった。

「となると……部屋かな？」

ナオキはリビングのドアを閉めてから自分と絵里の部屋に足を進めた。

そして部屋のドアを開けると絵里がベッドの上で窓の方を向きながら三角座りをしていた。ドアが開いた音に反応した絵里は下げていた顔を少し上げた。

「絵里、ただいま」

「……おかえりなさい」

絵里は顔が見えない程度にナオキの方を向いて言葉を返した。

「絵里っ……!？」

ナオキは絵里が少しだけ振り向いたその一瞬で、絵里の目の下の方が少し光ったのが見えて部屋に足を踏み入れた。

「ねえ、ナオキ……」

ナオキが近づこうとすると絵里は小さく低い声でそう言った。

ナオキはその声を聞いて絵里が怒っていることを悟って足を止めた。

ナオキが足を止めると絵里は指で目を拭ってベッドから立ち上がってナオキを怒った顔で見上げた。

「ど、どうした……？」

ナオキは声を若干震わせながら口元をピクピクと動かせた苦笑いで絵里を見つめていた。

「ナオキ、私に隠してることかない？」

絵里のその目は決して優しいものではなく、まさに絵里の生徒会長時代、つまりはμsに加入する前の絵里を思わせるものであった。

ナオキにはそんな絵里の言葉に返す言葉も持っていなかった。

何故なら事実だからである。

ナオキは絵里にある隠し事をしてきた。故に言えなかった。そうしたら誰のために隠し事をしてきたのかわからなくなってしまふからである。

「……どうなの？」

絵里はナオキが口を開こうとはしないのでさらに威圧をかけた。

ナオキは決して口は開かまいと唇を力一杯閉じて堪えていた。

だがその行為は逆に自分が隠し事をしていると肯定しているようなものであった。

そして絵里はキリがないと見たのかついに話の展開を進めた。

「……………希から聞いたわ」

「っ……………！」

ナオキはマズイと思つて下を向いたまま目を見開いた。床に流れた汗が滴つていくのが目に見えていた。

「なんで黙つてたのよ。みんなに告白されたこと……………」

「そ、それは……………」

ナオキは言い辛そうに目線をさらに横へと逸らした。

「ナオキの……………ナオキのバカっ！」

「……………はっ？」

そんなナオキを見た絵里はついに声を荒げた。

ナオキはその言葉に驚いた表情を浮かべて絵里の顔を見つめた。

「ナオキは、私と一緒に嫌なの？他の人の方がいいの!？」

絵里は今にも泣きそうな声でそう言うと、今度はナオキが焦ったように口を開いた。

「そ、そんなわけないだろ!?!なに言ってるんだよ。おれは絵里と一緒にいたい!これからもずっと……!」

「だったらなんで言ってくれなかったのよ!!」

「絵里……」

「ずっと、ナオキが隠し事してるのになって心配だった。しかもその内容がみんなから告白されたことだなんて、そんなの不安になるに決まってるでしょ!ナオキの分からず屋!私の気持ちぐらい考えてよ!!」

まるで溜まったものを吐き出したような絵里の言葉を聞いていたナオキはなにかが頭の中で切れる感覚を感じた。するとナオキの体は小刻みに震え、歯を食いしばった状態で口元をピクピクと動かし、なにかを抑えようとはしていたが限界がきたらしく珍しく怒鳴り声をあげた。

「おれが絵里の気持ちを考えてない？……バカ言ってるじゃねーよ！おれは絵里が傷つくと思つてこのことを黙つてたんだよ！絵里の気持ちを考えないわけないだろ！おれは……おれは、絵里のために……!!」

「だから私のためになってないのよ！私は告白されたことぐらい言つて欲しかったのよ！あのときの料理のサプライズは嬉しかったわ。でもこんなサプライズなんて嬉しくない！確かに言わない方がいいことだつてあるわ。でもこんなこと隠されてたらなにかまずいことがあるんじゃないかって不安になるはずでしょ!？」

「だからおれは絵里にそう思つて欲しくなくて……!」

「だったら言えばよかつたじゃない！言つてもし私が落ち込んだりしたら……慰めたらおしまいな話じゃない！ナオキが私を一番愛してるって証明してくれれば済む話じゃない!!」

「そ、それは……」

「もう……もうナオキなんて知らない!!」

「っ……絵里!」

そう言い残して部屋の外へ去ろうとする絵里の腕をナオキは慌てたように掴んだ。

「……………放して」

絵里は小さいがはつきりとした声でそう言うと言と掴んでいたナオキの手を振り払った。

ナオキはその勢いで床に尻餅をついてしまい、驚いた表情で絵里を見つめた。絵里はそのナオキを少しの間だけ見つめ、部屋の外へと走っていった。

その直後ナオキの顔にはなにか冷たいものが当たり、しばらくしてから玄関のドアが開いて閉まる音がした。

「絵里……………」



くくくラブライブ！くくく

「え、り……………」

ナオキは絵里の名を呟いて力が抜けたように顔を下げて視線を床に向けた。

心にあるのは危機感、そして罪悪感である。

このままでは”あの夢”みたいに絵里と離れることになってしまうかもしれない。そんなのは嫌だ。追いかけてなきや。だが、そんな行動を起こそうとしているナオキを押し返さねばならない。さえ込むように来るものが罪悪感である。

絵里は泣いていた。自分が泣かせてしまった。

その事実が言うことを聞かない。

「くっ……………（動け、動けよ！追いかけてなきや……………追いかけてなきや、いけないのに……………！）」

顔に当たったのは絵里の流した涙。悲しみの涙。絵里を泣かせてしまったというそ

の罪悪感がナオキを包み込んでいた。

「お義兄ちゃん……う？」

「あ、亜里沙……」

ナオキは開いたままのドアからこちらを見る亜里沙に視線を移した。

だが亜里沙はそんな様子のナオキを心配していたのではなく、逆にナオキを諫めるような視線を送っていた。

「お義兄ちゃん、お姉ちゃん走ってどこか行っちゃったけどどうしたの？」

亜里沙は帰って来るとき、マンションの出口から絵里が走って出て行くところを目撃していたのだ。

「お姉ちゃん、泣いてたよね？」

「うっ……」

そして亜里沙はそんな絵里の目から涙が流れていたのを見逃さなかった。ナオキはそれを指摘されて斜め下を向いて体の力を強めた。

「……追いかけないの?」

「それは……」

体が動かないんだ……なんて言えない。絵里を傷つけたという罪恶感、絵里と離れることになるかもしれないという危機感、恐怖感がナオキ自身を縛り付けている。

だが亜里沙はそんなナオキを許すわけはなかった。

亜里沙は怒った様子を見せながらナオキに近づき、何かと自分を見上げたナオキの頬を力一杯にひっぱたいた。ナオキはいきなりのもことで目を丸くして亜里沙に叩かれた頬を触った。

「あ、りゃ……?」

「お義兄ちゃん、亜里沙はなんで追いかけないのって聞いてるの。喧嘩したのかもしれないけど、喧嘩するお義兄ちゃんとお姉ちゃんなんて私見たくない! 私は仲の良いお義兄ちゃん達が好きなのツ!!」

ナオキはそう叫ぶ亜里沙の顔を驚いた表情で見つめた。そんな亜里沙からはこれま

での大人しく優しい子供のような亜里沙は想像できなかった。

「だから……だからっ……!」

亜里沙は先程までの怒った表情のまま涙を浮かべ、まさに今にも声をあげて泣きそうな感じだった。

また女の子を泣かせるのか? そんなこともうしたくない。

それに、追いかけてあげなければいけない。大切な人とまたこの日々を過ごすために……  
3人でまた笑顔で食卓を囲むために。

ナオキはそれを固く決意すると先程まで動かなかった体を起こして泣きかけている  
亜里沙の頭を優しく撫でた。

亜里沙は頭を撫でられた感触を感じてゆっくりと顔を上げた。

「亜里沙、ありがとう。そうだよな、モタモタしてたら絵里にもっと怒られそうだ」

「お義兄ちゃん……!」

「おれ、絵里を迎えに行つて来る。ご飯はこれで好きなもの買つておいで」

「うん、わかつた! 待つてるからね! お姉ちゃんが一緒じゃなきゃ入ったらダメだから  
ね!」

「ああ、絶対に一緒に戻つて来るよ」

ナオキはそう言つて亜里沙にお金を渡してから出口に向かつて走り出した。

亜里沙はそんなナオキを信じて見送り、一旦荷物を置くために自分の部屋に向かつて。

~~~~~♡~~~~~

時間は過ぎていき、先程まではまだ明るかったがどんどんと暗闇がひろがついていつていた。

「えりちー！」

ここは希の住んでいるマンションの近くにある公園。希は自分の部屋から飛び出してきた絵里から連絡を受けてここへ来たのだ。

「の、希い……」

灯りが照らされているベンチでぼつりと座っていた絵里は希が近づいて来ると弱々しい声をあげて泣きついた。

「え、えりち……？」

希はそんな絵里に何があつたのかすぐにはわからなかつたが、とりあえず絵里を落ち

着けるために包み込むように優しく抱きしめた。

「落ち着いた？」

「……………うん」

絵里は頷くと希から少し離れて先程まで座っていたベンチに腰掛けた。希はそんな絵里の隣のスペースに座って俯く絵里を心配している表情で見つめた。

「それでどうしたん？話やったら聞くで？」

「……………実は、ナオキと喧嘩しちゃったの」

「えっ…………？」

希は驚いた表情を浮かべた。何故、ナオキと絵里は喧嘩してしまったのか。ナオキと絵里が喧嘩したことなんて今までなかった。あったとしてもそれは仲睦まじい感じの喧嘩であった。だがこの絵里の様子を見る限りはそんな生ぬるい喧嘩ではないのだろう。

さらに希は罪悪感すらも感じていた。おそらく喧嘩したのはあのことだ。自分が絵里に教えなければこんなことにはならなかったのではないか？そんな不安が希の中を駆け回る。

「私……わかってたのに」

「えっ……？」

希は絵里が何をわかってたのかわからず、不意にもだらしないう声を漏らしてしまつた。

絵里は希が声を漏らしても言葉を止めずにそのまま口を動かすことを続けた。

「わかつてたのよ……ナオキは私のことを想つて黙つてたことなんて。希からあのことを聞いた時にわかつたことなのに……!!」

「えりち……」

「なのに私、ナオキに酷いこと言つちやつた……やつぱりナオキが隠していることが不安で、それで……！私、最低よね。こんな私、ナオキが許してくれるはずないわ。嫌いになられて当然よね……」

絵里は自分のナオキにしたことを後悔しているのか今にも声をあげて泣きそうな勢いで言つた。

希は今まで絵里がこのような弱音を吐いたことはあまり見たことがなかつた。ナオキと2人つきりのときはどうかはわからないが、ここまで弱気な絵里は知らなかつた。だがこんなときにこそ親友である自分が支えになつてあげねばと希は決心した。

希は今にも泣きそうな絵里とは違い落ち着いた感じで言葉を紡いだ。

「ナオキくんはえりちのこと嫌いにならへんと思うで？だってナオキくん、本気で、心の底からえりちのこと愛してる。それにウチやみんなから告白されたときに、ナオキくんは毎回断る理由はたったひとつやったんやで」

「ふえっ……？」

希が絵里に語ったことは、ナオキにとつては告白を断るには十分すぎるものなのである。絵里はそれがわかっていないのか弱々しい声を出して希を見つめた。

『私……ナオキくんのこと……好き……1人の男の子として……好き』
卒業式の日在花壇の前で告白した希。

『わ……私、ナオキのことが異性として好き』

6月、μ sの最後のライブを前に神田明神で告白したにこ。

『ナ……ナオキくんのが好きでした!!』

ナオキの初めてのの料理を教え、食べさせてもらった後に自宅で告白したことり。

『私、好きだよ……ナオキくんのこと』

夏合宿の朝、*μs*が9人の時にラブライブ！優勝を誓ったあの海岸から朝日を見つめて告白した穂乃果。

『私ね、ずっと前からナオキのことが好きだったの』

夏合宿の夜、みんなで花火をしているときにナオキを隣に呼び出して告白した真姫。

『凜の中ではね、ナオキくんは……特別な存在……なんだよ？』

ナオキとショッピングモールで買い出しをしいったとき、夕日によって照らされていた屋上で告白した凜。

『私はあなたのことが好きです』

言葉で伝える勇気が出なかつたので、手紙を書いて告白した花陽。

『ナオキのことが……好きなんです！』

日本道場最強決定戦で優勝し、前々から優勝したら伝えたいこととして保留していた

ことを控え室で伝えて告白した海未。

それらの告白を全て断つたナオキのその理由はただひとつ。

それ以外の理由なんて存在するのだろうか？ いやない。

絵里の脳内には告白され付き合うことになったナオキとの想い出がまるでスライドショーのように流れていった。

「それはな……」

ナオキくんにはえりちがいるから……やで」

「っ……！！」

『す……好きだ!!おれと……おれと……付き合ってください……』

嬉しかった。

帰って来たナオキと2人で下校しているときに突然告白されたあのとき、絵里は心の底から嬉しかった。

それは自分も同じだったから。

そのときの感情、光景が脳内で想い出されて、何かが絵里の中から込み上げて来た。

「それに……それが、何よりの証拠なんじゃない？」

「あつ……」

希が視線を下げてそう言うと、絵里は希の視線の先……左手の薬指にはめているもの、つまりは「誓いの石」が使われているオンリーツの婚約指輪に視線を移した。

『おれは絵里のことが好きだ！誰よりも……今も……これからも……どんなときもずっと……絵里のそばにいたい!!絵里にそばにいてほしい!!』

この石はな……占いの道具なんだが、この石は昔からある誓いをするときに使われたらしいんだ。誓いの石にもいろんな種類があつてこの誓いの石は……「永遠の愛を君に誓う」、永遠の愛を誓う石なんだ。

だからおれは誓う！絵里……おれは絵里を永遠に愛する!!どんなときもずっと……

だからもう一度言うよ……絵里、おれと結婚してください……」

ナオキの心の中にはいつも絢瀬絵里という最愛の人がいた。

つまりナオキはあのときの誓いをずっと守り続けている。だから他の人の告白を受けても断り、そして絵里のことを想ってそのことを黙り続けていた。

だが後にそのことを知って、ついカツとなつて酷いことを言つてナオキの前から逃げ出した。

あのときの言われた誓いは、絵里の心の中にもしつかりと残っている。

絵里はそのときのことを、自分がしてしまったことを思い出し、胸が締め付けられるように痛くなった。

絵里は服の胸のあたりをギュツと掴むと、太ももに何粒かの涙が落ちていった。

「でも、今更ナオキにあわせる顔なんてないわ……」

絵里が落ち込んでしまふのはわからないでもない。

相手の気持ちをつかろうともせず、自分の思い込みで思ったことをぶつけて、傷つけた。自分がもしその立場であれば、その相手が自分の好きな人であれば、きつと絵里と

同じようになっただであらう。

すると希のスマホが着信を受信して振動した。希はそのバイブレーションになにかを確信して、スマホの画面を絵里に見せながら言葉を続ける。

「本当にそうやるか？ ナオキくんがほんまにえりちのこと好きやつたら……」
「えっ……？」

絵里はその希の震えるスマホの画面を見て驚きの表情を浮かべた。

なぜなら、その画面には写真とともにその着信の主である人の名前が表示されていたからだ。

その人物こそ……

「ナオキ……！」

恋人の香川ナオキであった。

さらに希はまるで話す内容がわかっているかのように電話に出た。

『っ……もしもし!?』

「ど、どうしたん!? そんな慌てた声して……」

電話が繋がるなりナオキは慌てた様子で声を発した。希は理由はわかっていたがなにも知らないのを装ってナオキに問うた。

その内容は希の予想通りであった。

『絵里を、絵里を知らないかっ!?』

「えりち……? どうして?」

『その……絵里を怒らせたみたいで出て行っちゃったんだ。だから今思い当たるところを走りまわって……どこにいるか知らないか!?』

「あのこと……なんやね」

『……ああ、そうだ。希、教えたんだろ?』

「怒ってる?」

『いいや、全然。第一悪いのはおれの方だし。おれがすっかり絵里の気持ちを知ってればこんなことには……絵里が泣くことはなかったのに……』

「それ、ちゃんとえりちに言うんやで?」

『ああ……それで、なにか知ってることは?』

「そうやなあ……あつ、そういえば洗濯しているときにえりちが公園の方に走っていく

のを見たなあ〜」

「ほんとか!？」

「うん。ウチがああの親友を見間違えるはずないからな。今どこなん?」

『今は音ノ木の校門前だ。とりあえずそこに向かってみるよ。希の住んでるマンションの近くだよな?』

「そうやで。早く探してあげて」

『わかつてる。ありがとうな、それじゃ!』

ナオキは希の返答を待たずに急ぐように電話を切った。

これまでのナオキと希の会話は、希のスマホがスピーカーモードにされていたため絵里にも聞こえていた。その間絵里は声を出すまいと唇を噛み締めて必死に堪えていた。

「ナオキくんもうすぐ来るよ?」

「でも……」

「さっきのナオキくんの声聞いてたでしょ?今頃ナオキくん、ここに向かって全力疾走してると思うで?」

希の言う通り、ナオキは音ノ木坂学院から公園に向かって全力疾走をしていた。

絵里はまだ不安そうな様子で、どうしようかと迷っている仕草を見せた。だが希はそんな絵里を見ると優しい表情を浮かべて絵里に背を向けた。

「の、希……!?!」

「ウチがいたらお邪魔そうやからね。ちゃんと仲直りするんやで〜」

「ちよ、ちよつと……!?!」

希が絵里に背を向けて去って行くと、絵里はそんな希を止めるように声を出して腕を伸ばした。だが希は止まることなく、そのまま表通り側とは別の出入り口から自らの部屋へと向かった。

そして絵里はその公園に一人になった。

灯りが照らすその下で絵里は不安そうな表情を浮かべていた。まさに、暗い公園で絵里の存在を目立たせるような役割を灯りは果たしていた。

そのときだった。

誰かが地面を蹴る音が大きく周りに鳴り響き、その音は次第に大きくなっていた。そしてその音の主は息を切らしながら表通り側の公園の入り口のところまで止まったので、絵里はその人物の方を見た。

絵里は遠目であったがその人物の正体をよく知っていた。

その人物は下げていた顔を上げて、灯りに照らされている絵里を見て硬直した。

その人物が誰かはわかりきっていた。この状況でここに来るのは1人しかいない

……

「ナオキ……！」

「え、り……？」

2人は目の前にいる恋人の名前をお互いに聞こえないように呟いた。

絵里はなんて声をかけようかと周りに視線を泳がしながら迷っていた。

その状況で最初に動いたのはナオキであった。

「っ……絵里ッ！」

ナオキはそう言うスタートダッシュを決めて絵里のいるところまでダッシュをした。

絵里は怒られると思ってグツと目を瞑った。怒られてもいい、自分はそれをほどのことをしたのだからと覚悟を決めていた。

だが、絵里の予想を裏切るような行動をナオキは取った。

もちろん、いい意味で。

「絵里っ……………」

「えっ…………!？」

今日の絵里は驚いてばかりである。

今度は走って向かってきたナオキにギョツと抱きしめられて驚いた。

ナオキのその抱擁は強かったが、とても温かく優しいものであった。

「絵里…………ごめん！おれ、絵里の気持ち全然わかってなかった！」

「ナオキ……………」

「おれはあのことを絵里に言ったら絵里が傷つくと思っただ。だから隠してた。でも本当は違った。絵里が教えて欲しかったって怒ったときに気付いたんだ…………おれはまだ絵里の気持ちをちゃんと理解できてなかった。全然わかってなかった。だから絵里を傷つけて、嫌な思いをさせて……………」

一旦言葉を止めたナオキの脳裏には絵里が出て行くときに涙を流した光景が思い出

され、さらに今でも少し絵里の目に残っている水滴を悲しげに横目で見つめた。

「……………泣かせてっ、おれは最低だ！ごめん、絵里……………」

そのとき、ナオキの絵里を抱きしめる力が少し強まった。

絵里はその力の強さに辛さは感じなかった。逆に感じたのは、一筋の熱い愛である。ナオキは自分のことを本当に、一筋に愛してくれているという気持ちがこの抱擁によって伝わってきたのだ。

他の女から告白を受けたとしても、好意を向けられていたとしても、何があってもこのナオキは絶対に自分を裏切ったりはしない。自分へ向けるこのとても熱い愛を冷ますことはない、絵里は確信させられた。

……………その気持ちは、絵里も同じである。

絵里の浮かべていた涙も目の揺れと同時に頬をたどって流れ、ナオキの服に染み込んだ。
だ。

「あ、謝らないといけないのは私の方よ……………ナオキは私のために黙ってくれていたのに、私気付いていたのに、ナオキに酷いこと言っちゃったもの……………ごめん……………ごめんなさい

……!!」

絵里は顔をナオキの肩に埋めて涙を流したが、声をあげることが抑えてはいたがしゃつくりのような声は漏れていた。

ナオキは泣くまいと涙を堪えてはいたが、絵里が見つかったという安心感から涙を流せずにはいられなくなってしまう、一筋の涙を目から流した。

そしてナオキは瞑っていた目を開け、絵里の両肩を掴んで子供のように手で涙を拭き取りながら泣いている顔を見つめた。しゃつくりみたいな声を漏らしながら涙を拭き取ろうとはしていたが、それは止まらず溢れたように流れていた。

「絵里……」

「うっ、ひぐっ……なあに……?」

ナオキが絵里の名を呼ぶと、絵里はある程度涙を拭き取った顔を少しあげてナオキの方を見た。

するとナオキはそんな絵里の顔を見るなり無理やり自分の唇を絵里の唇に重ねた。

「んっ、んんんっ、んっ……!」

絵里は急なことで驚いて塞がれた口で声をあげながら、苦しくてナオキの唇を離そう

とした。だが、ナオキはそれに反抗するようにさらに力を強めて絵里を離そうとはせずに口づけを続けた。絵里はそれに抵抗し続けていたが、離れられないとわかりナオキからのキスを受け入れて気持ち良さような表情をした。ちなみに、舌入れていない。

「んっ、んはあっ……はあ、はあ、はあ……もう、急にされたらっ……い」

ナオキは絵里の唇から自分の唇を離すと、キスをする前と同じように絵里を抱きしめた。

絵里は息を荒くしていて、ナオキにもたれかかるように抱きしめられていた。

「絵里、こんなことで許してくれとは言わない。でもさ、おれ本当に絵里のことを誰よりも一番愛してるんだ。この愛に、あのとときの誓いに嘘なんてない！おれは絵里のことが、どんなものよりも……どんな人よりも大好きだ！」

「……わかっている。ナオキの熱い想い、しっかりと伝わったわ。ナオキはずっと私のことを考えてくれていたのね。私、本当に嬉しいわ……」

すると絵里は少し力が抜けたナオキの腕をほどいて少し距離を取った。

「あつ、絵里……」

ナオキは絵里をまだ抱きしめていたかったのか、名残惜しそうな声を弱々と発した。絵里はそんなナオキを見て可愛いと思うと同時にクスクスと控えめに笑った。

「だからね、許してあげる」

「本当か!？」

「ええ、私も悪かったところもあるもの。そしてなにより、私もナオキのこと……大好きだから」

絵里はナオキに向かって眩しいぐらいの笑顔を浮かべた。その笑顔の瞳にはもう水滴などはなかった。

ナオキはそんな絵里の美しさに見惚れたことでさらに絵里のことを好きになった。

「じゃあ、帰ろうか……おれ達の家」

「ええー!」

ナオキが右手を差し伸べると、絵里は薬指に指輪がつけられている左手を出してその手の上に重ねた。

さらにナオキは絵里を引き寄せて指を絡めて歩き始めた。絵里は初めはびっくりしたが幸せそうな表情に変えてナオキの肩にもたれて歩いた。

月が輝く綺麗な夏の夜空はそんな2人を祝福するようであった。

それからおれ達はいつも通り話して、笑い合いながら帰っていた。

あと亜里沙のことを話したら絵里に思いつきり腹を肘で突かれた。痛い。

そして安心したからかおれのお腹が虫が鳴くみたいに音を立てると、おれと絵里は思わず声を出して笑ってしまった。

「もう、ナオキったら」

「ははは、安心したから腹減ってきた」

「ふふつ、それじゃあ帰ったらご飯にしましょうか。簡単なものになっちゃうけれど」

「じゃあサンドウィッチで」

「それは勘弁してください」

おれはサンドウィッチが苦手だ。絵里はそれを承知の上でそう言ったからか、おれが苦い表情でお願いすると可笑しそうに笑っていた。ああ……好き。

「冗談よ。炒飯でいい？」

「十分だ。大盛りでよろしく」

「ふふつ、わかったわよ」

絵里はそう言うとおれの顔から視線を外して前を向いた。

これからも喧嘩することがあるかもしれない。それは仕方のないことだ。でも、喧嘩をしてもおれ達はこうやって仲良く過ごしていける気がする。いや、そう思う確信がある。

何故ならおれはずっとこれからも、心から絵里のことを愛し続けるからだ。それは絵里も同じ気持ちだ。ってこの機会に気づくことができたから。

「私の顔になにか付いてるの？」

「へっ……!?!」

「だって、ナオキがずっと私の顔を見つめてたから……」

「あ、ああ……」

絵里は不思議そうにおれが見つめていた理由を問いただして来た。ここは考え事をしてただけとは言えないな。

「で、どうしたの？」

「えっと……」

やばい、いい答えが思いつかない……!これはピンチなのでは?こうなったら誤魔化さねば。とりあえず空を……ああ、いいこと思いついた。

「もう、なにニヤけてるのよ!」

おっと、つい顔がニヤけてしまった。でも誤魔化せる範囲内かなこれは。

「いや……月が綺麗だなんて思ってたさ」

おれがそう言うのと絵里は一瞬固まって、次第に顔を赤くしていった。まあ、この言葉の意味はわかっているはずだから当然だよな。おれも言った側だけど恥ずかしい。

これはおれと絵里が付き合う前に意味もわからずにただ単に月が綺麗だったからおれが発した言葉で、絵里はそのときわかってたみたいだけど結構恥ずかしいこと言ったんだよねあゝ。

意味は……私はあなたを愛しています。つまりは“I love you”だ。

「ふふっ……私もよ、ナオキ」

絵里は頬を赤く染めながらその顔をおれの腕にもたれかかせてきた。それと同時に絵里の髪からいい匂いがおれの鼻を刺激した。

絵里……おれはずっと君を愛すると誓うよ。

これから先にながらうとも、なにが起ころうとも愛し続ける。

だから………

だから………

ず・つ・と・お・れ・の・隣・に・い・て・く・れ・………

次回に続く………

第146話 「ナオキと絵里のハラショー!な旅行～前編

〜

「ん、ん……?」

ナオキはカーテンの間から差し込んでいる陽の光を目に浴びて目を覚ました。隣に目を向けるとYシャツがはだけている状態の絵里がまだ寝息を立てながら寝ていた。

簡潔に言うと、2人は仲直りをして自分達が住んでいる部屋に帰ってきたのだが、里沙はコンビニで会った穂乃果と雪穂に連れられて高坂宅に行き、そのまま泊まりをすることになったそうで、そこにはナオキと絵里しかいなかった。

それからご飯を食べ、別々にお風呂に入り、後から出てきた絵里が裸Yシャツで部屋にいるナオキの元に行った。

それを見たナオキは戸惑ってはいたが、結局絵里の誘惑に負けて襲ってしまい朝を迎えたのである。

つまりは昨夜はお楽しみであったのであります。部屋には2人しかいなかったのですが絵里は絵里で思うまま喘ぐことができたし、ナオキはナオキで欲望のままに犯すことが

できたし、ウインウインだね!!

てなわけで朝チュンを迎えたナオキは体を起こして背筋を伸ばした。そして絵里を起こさないようにベッドから出て制服に着替えた。今日も Shooting Stars の練習があるので学校に行かなければいけないからである。

「ん、ん………朝?」

ナオキが着替えていると絵里が目を覚まし、半分目を開けてまだ完全に眠気が覚めていない様子で声をあげた。

「おはよう。起こしちゃったか?」

「ん………もう行くの?」

「ああ、そろそろ行かないと間に合わないからな」

ナオキはそう言って身だしなみを整えるために洗面所に向かった。絵里は若干うとうとしながらもはだけていたシャツのボタンを留めて、引き出しから出した下着を履いてリビングに向かった。

ナオキは支度が終わると部屋に戻り荷物を取って、部屋にいなかった絵里がいるであろうリビングに向かった。

リビングにいた絵里は椅子に座ってコップに入った水を飲んで一息ついていた。

「絵里、ちよつと水を一杯もらえるか?」

「いいわよ。はい」

「おう、ありがとう」

ナオキは絵里が先程まで持っていたコップを受け取り、絵里が少しだけ飲んでいた水を全部飲み干してそのコップを絵里に渡した。所謂関節キスである。

「じゃあ、いつてくる」

「うん、いつてらっしゃい」

2人は挨拶を交わすと関節キスでは飽き足らず、お互いの唇に直接キスをした。最近ではナオキと亜里沙が一緒に行くためでできなかったが、今日ここには2人しかいないため久しぶりにできたのだ。2人はそんな特別なキスをゆつくりと味わうように少し離しては重ねと数回繰り返した。

「ん……すまん、そろそろ行かないと」

「ん……わかった。でも、最後に一回だけ……んっ」

ナオキが名残惜しそうに絵里から顔を離すと、絵里が上目遣いでさらにその目をうるうるたさせてナオキを見つめたのでナオキは我慢できなくなり最後に優しくキスをした。

「……じゃあ、いつてきます」

「……いつてらっしゃい」

そしてナオキは練習のため音ノ木坂学院に向かうのであった。

~~~~~♡~~~~~

「えっと……」

学校に着いたナオキはその場の状況に言葉を失っていた。

ナオキが今いるのはアイドル研究部部室の更衣室に当たるところだ。そこでナオキは穂乃果、海未、ことり、真姫、花陽、凜、そしてここに囲まれて正座させられていた。そのメンツの表情は決して穏やかなものではなく厳しいものであった。

「ナオキ……」

「は、はいっ!?!」

ナオキは鬼のように怖く低い声で名前を呼ばれてビビりながら返事をした。もちろんその声の主は鬼園田こと園田海未である。

「なんでこうなっているか、わかりますか?」

「わ、わかんないです……」

ナオキがそう言うともみんなはさらに厳しい視線をナオキに浴びせた。

「ごめんなさい……」

『はあ……』

ナオキが肩身を狭くして謝罪の言葉を述べるとみんなは一斉にため息をついた。

「あのね、あんたなんで絵里に話さなかったのよ」

「うぐつ……」

「亜里沙ちゃんから昨日聞いたよ?」

「つたく、ちゃんと仲直りはしたんでしようね?」

「そ、そりやあもちろん!」

にこ、穂乃果、真姫からの攻めに対してナオキははつきりと声を出した。

「でも言わなかったことは事実だよね?」

「ぐぬ、ごもつともでございます」

「そうだよ!凜達が怒っているのはそこなんだよ!」

珍しく攻めて来た花陽、凜からの言葉をナオキはシユンとした様子で聞いた。

「まあまあ、みんな落ち着こうよ」

「ことり……!」

ついに良心が現れたとナオキは感動して期待の目でことりを見つめた。

「仕方ないよ。ナオキくんはそういう人なんだからいくら言っても意味があるとは思えないよ」

「……?」

と思っていたが真実は違った。この中に良心的な存在なんていないとこの時点でナオキは確信した。

「さあ、説明してもらいましょうか? 絵里に私達からの告白のことを言わなかった理由と昨日のことを」

海未が不機嫌そうな声でそう言うときみんなは変わらずナオキを咎めるような目で見つめた。そしてナオキは隠す必要もないと判断し、みんなに事の全てを話すことにした。

話したら絵里が傷つくと思い、絵里のために告白されたことを黙っていたこと。でも絵里にとつては教えて欲しかったみたいで喧嘩に発展してしまい絵里が怒って出て行ってしまった。でも誤解も解けてちゃんと仲直りした。やったことに關してはもちろん言わなかった。だが本人にはわからないがやったことは雰囲気でもみんなに悟られていた。女の勘って怖い。

「……つてというのが全部です」

ナオキの弁明を聞くとみんなはなるほどと頷いた。



「まあ、きつと絵里がたつぷりと怒ってそうだし私達は別に怒らないわ」

ナオキはこの言葉に安心を覚えてほつと胸を撫で下ろした。ナオキはもう何も言われないうちで思っていたのだが、そんなわけはなく続けなう海未が言葉を続けた。

「ですが、絵里を悲しませたのは事実です。ナオキはそれをわかつているのですか?」

「わ、わかつてるよ……」

昨日の絵里の涙は忘れるはずがない。絵里の悲しんだ目、表情、そして声はナオキの脳裏にしつかりと刻まれていて、今でもそれはすぐに思い出すことができる。だがその度にナオキの胸はしめつけられ、あのとときの自分の想いが溢れ出てくるようであった。

「なのでナオキには罰を与えます」

「ば、罰!」

罰とは一体なんなのか、ナオキはその正体について頭をフル回転させて考えた。

太ももに石板を何個も重ねられる?

綱でくくられた状態で天井から吊るされ「ブーリブーリ」という掛け声とともに回転させながら叩かれる?

回転する丸い板に貼り付けられていつ当たるかわからない矢を射られる?

それとも………

アイアン・メイデン  
死 刑？

『キヤー—————』

どこからか悲鳴が聞こえたナオキはその恐怖から身震いをした。

「じゃあ……」

そう言った真姫はスタスタとナオキの元に近づいた。

ナオキは罰を執行するのは真姫なのかと悟り目を瞑ってこれから起こることを受け止めようとした。

「……は……」

「……あれ？」

ナオキはなにかされなかったので目を開けてパチパチとさせた。真姫は真姫で封筒をナオキに差し出していたので尚更である。

ナオキはそれを受け取り、地獄への招待状かと怖がりながらその封筒を開けた。

その中身とは……………

「……………なんだこれ？」

「なんだとはなによ。西木野病院所有のリゾートホテルの招待状よ」

ナオキは地獄への招待状ではなかったのでホッと胸を撫で下ろし、それと同時に西木野の凄さを改めて実感した。

「で、なんでこれが罰なんだ……………？」

そう、これは罰ではない。どちらかというところ褒美である。罰であるならそこで無給アルバイトとかをさせたらいいのにと考えはしたが、口に出せば「そう言うならそうしましょ」と路線変更されそうなので黙っておくことにした。

「ナオキには罰として絵里と仲良く一緒にデートしてもらいます」

「なんか一部だけ強調されてたんですがそれは」

「要するに思う存分イチャイチャしてこいってことよ」

「な、なんだよそれ……………」

ナオキはにこから言われたことに頬を少し赤く染め、その頬を人差し指で掻いて目線を斜め下に逸らした。

「ナオキくんが絵里ちゃんに悪いと思ってるなら、絵里ちゃんとしつかりと楽しんで来てね」

天使だ……と思うこの状況であつたが、ナオキにはその花陽の笑顔から少し威圧を感じていた。

「は、はい……」

「じゃあ、早速帰って準備しないと！明日だよ、明日！」

「はあ!? 明日って……練習あるだろ? しかも今は大事な時期だし……」

穂乃果がまるで自分が行くかのようなテンションでそう言うと、ナオキはこいつ頭いかれてんじゃねーのぐらいの勢いでそう言った。

「大丈夫、ちゃんとみんなの了承は得てるから」

「いや、本人の了承は得ていないんですがねことりさん……このこと絵里は知らないよな?」

「知ってるわけないにや。頭いかれたかにや?」

「お前にだけは言われたくねえ……!」

「それどういう意味にや〜!」

凜がナオキに反論するとその場にいた全員の動きが止まり、その空間は沈黙に包まれた。

「ププツ……ハハハハハッ！」

するとナオキが耐えられなくなり我慢していたもの全てを出すように笑った。それにつられて先程まで怒っていたみんなも笑ってしまった。

この光景からわかること。それはどんなことがあつてもこのメンバー……絵里や希を含めた、s10人の絆は決して崩れないということである。

「ハハハッ……つまりは、おれから絵里に伝えて一緒に行けつてことだろ？」

ナオキが笑いの余韻が残っているような表情でそう言うと、みんなはその通りと言わんばかりにうんうんと頷いた。

「ありがとう。じゃあ有り難く使わせてもらおうよ。花陽、海未、少しの間練習頼んだ」

「は、はい……！」

「ま、任せてください……！」

「」「」「ははははは……」「」「」「」

花陽と海未がそう言うのと、みんなは何故か苦笑いを浮かべた。

「ん……？まあ、とりあえず今日も帰るわ。あ、穂乃果。その間亜里沙のこと頼んだ」  
「ま、任せといてえ！」

穂乃果は何故か語尾を張り上げていたがナオキは気にせずに横に放置していた荷物を持った。

「それじゃ、お先に。ゆっくりと楽しませてもらうぞ」

ナオキはそう言つて部屋を出て行き、絵里の待つ自宅に帰つて行つた。

みんなは見つめ合つて親指をビシツと立ててドヤ顔をキメた。

~~~~~♡~~~~~

「ただいま〜」

「おかえりなさい!?!早かつたわね」

たまたま廊下にいた絵里はさつき出かけたナオキが早く帰つて来たことに驚きを隠せなかつた。

「ああ、実は真姫からこんなものを貰つてな……」

「これは……リゾートホテルの招待状!?!」

絵里はナオキに手渡されたりゾートホテルの招待状を見てさらに驚いたりアクションをした。

「真姫達に絵里とここに遊びに行つてこいつて言われてさ、お言葉に甘えることにしたんだ」

「へえ〜……それで、いついくの?」

「明日」

「へえ〜明日?………つて明日!?!」

絵里はナオキが帰つて来てから驚いてばかりである。そんな表情の絵里もかわいい。つまり絵里はなにをしてもかわい。つらい。しんどい。最強。

「ああ、もう貸し切つてるみたいだな。そこに書いてあつた」

「貸し切り!?ハ、ハラショー………」

絵里は貸し切りと聞いた瞬間にカタカタと体を震わせながらそう言うと、ナオキはかわいいなと思ひながらそんな絵里を温かい目で見つめていた。

「つてことで明日の準備をするために帰つて来たんだ」

「なるほど!みんなは許してくれたの?」

「ああ、だからおれはここにいます」

「ふふつ……じゃあ準備しましょうか」

「OK!」

それから2人は明日を楽しみにして胸を躍らせながら準備に取り掛かった。

準備している途中に真姫からメッセージがきて移動費も負担しようかと言ってきたのだが、流石にそれは悪いと思つて断つた。

ま、自宅から東京駅までリムジンで送つてもらふことになつたのだが。

~~~~~♡~~~~~

東京駅に着いた2人は真姫と運転手の人に礼を言つてから構内へと入つていき、電車に揺られて目的地へと向かつた。

そのリゾートホテルは足立区付近にあるそうで、ホテルの1階にはいくつかの種類の温泉があり、さらに少し値段が高めの部屋には露天風呂も付いている。もちろん1階にも露天風呂があるらしい。だがこのホテルは温泉だけではない。2階と3階は娯楽施設のスペースになつていて、ゲームセンターやカラオケなど様々な年齢層の人が楽しめるようになってる。



最寄り駅に着くと駅の入り口付近にそのホテルの従業員らしき人物が送迎用のバスとともに2人を待ち構えていた。

ナオキと絵里は頭を下げてきたのでホテルの従業員とわかり、その人の元へ向かった。

「どうも、香川様と絢瀬様ですね。お待ちしております。私、西木野リゾートホテル支配人の梅島<sup>うめしま</sup>真司<sup>まじ</sup>と申します。この度は当ホテルをご利用いただきありがとうございます」

「(支配人かよ……)」

「(ずっと普通の従業員さんかと思ってたわ……)」

「それではホテルまでこのバスで向かいますのでどうぞお乗りください」

「あ、ありがとうございます」

ナオキと絵里は従業員……支配人の梅島の運転によってホテルまで向かった。2人は戸惑いを隠せずにいた。

「えつと……梅島さんはいつもこうしてお客さんを送迎してるんですか?」

「ハハハツ、ご冗談を。こんなこと滅多にありませんよ」

「で、ですよね……あはははは……」

ナオキと絵里の戸惑いはさらに大きくなった。

「ですが真姫お嬢様の頼みですから、これぐらいお安い御用です」

「(西木野家すげえ……)」

「(ハラショー……)」

ナオキと絵里は改めて西木野家の凄さを身をもつて感じ、戸惑いがさらに大きくなったのであつた。

ホテルが近づいてくると2人は感動の声を上げ、それを聞いた梅島は嬉しそうな表情をしてホテルの説明をした。

「当ホテルは温泉、娯楽施設があるリゾートホテルです。ホテルの周りには散歩道があり、湯冷ましにご利用されるお客様が多いですね。それらの他にも様々なサービスがご利用いただけますので、お気軽に従業員にお問い合わせください」

「は、はい……」

2人はホテルの説明を受けたが、そのホテルの豪華さを実感して何故か緊張したような表情になつた。

くくくラブライブ！くくく

「こちらがおふたりのお部屋になっております。オートロック式ですのでこちらのカードキーをお使いください」

「ありがとうございます」

「では、ゆっくり……」

フロントにいた従業員に部屋へと案内されたナオキと絵里は、緊張した面持ちでカードキーをかざした。すると鍵が開いた音がなり2人は肩をビクツと上げた。ゆっくりとドアを開けながら2人は部屋の中がどれだけ豪華なのかを想像していた。

ホテルは洋式っぽかったのでやはり部屋もベッドが2つ並んでいて備え付けのユニットバスもあるのだろうかなど、様々な想像を膨らませながらその部屋へと2人は足を踏み入れた。

「この匂いは……畳かな?」

「ん〜……いい匂いね〜」

ナオキと絵里が部屋に入ると畳のいい匂いが2人を迎えた。そこは和風な雰囲気がある部屋で畳が敷き詰められていて奥の方には扉があった。

絵里は嬉しそうに靴を脱いでその扉の方へと向かって期待の目を浮かばせながら開けた。その扉の先は小さな更衣室になっており、さらにその先にはガラス張りの扉が

あつて絵里はさらに目をキラキラさせながらその扉を開けた。

「わあ〜！」

絵里はその先にある光景に思わず声をあげてしまった。

そこは石畳が敷き詰められているテラスで、外側には木で出来ていて底が若干深い四角い箱状のものがあつた。その箱状のものの壁側には何かが出てくると言わんばかりの穴があつた。

「ほう……ここがパンフレットにあつた露天風呂か」

絵里がその光景に感激していると、ナオキがこのホテルのパンフレットを開きながら絵里の横に立つた。

「いつもらつたの？」

「ん？いや、なんか机の上に置いてあつたからさ」

「へえ〜」

絵里は興味深そうにナオキが持っているパンフレットを覗き込もうとすると、ナオキは絵里が見やすいように少しパンフレットの位置を下げた。絵里がその心遣いに気付いてナオキの顔を見つめた。

「な、なんだよ……」

「ん？ナオキ優しいな〜と思って」

「そ、そうか……」

「ふふっ、照れてるの?」

「て、照れてねーし!」

ナオキはからかわれて視線を少しだけ逸らすと絵里は可笑しそうに笑った。

絵里の笑いが止まり目を開けるとナオキの目と視線が合い、それに気付いた2人は無言でお互いを見つめ合った。

「絵里……」

「ナオキ……」

お互いの名前を呼んだ2人の顔は徐々に近づいていき、2人の唇がまじで重なる5秒前という状況になっていた。

あと数センチ……あと数ミリ……

プルルルルルル……

だがそこで部屋にあった備え付けの電話が鳴り出したので2人の動きは止まってしまった。

「あ、おれ出るよ」

「え、ちよつと……それ、出ていいの?」

「大丈夫大丈夫。備え付けの電話はそういうもんだからさ……はい、香川です」

絵里はナオキが電話に出るために離れると残念そうな声をあげたが、それを誤魔化すかのように疑問をぶつけた。

ナオキは受話器を耳に当てながら相槌を打っていたが、ふと絵里と視線が合うと「またあとでな」と言わんばかりに唇に指を当ててウインクをした。絵里はその仕草にパアーツと笑顔になって嬉しそうに頷いた。

「はい、わかりました。失礼します」

「なんて連絡だったの?」

「ああ、昼食の準備ができたから持って来るってよ」

「へえ、持つてきてくれるのね」

「部屋が旅館に似てたからそんな気はしてたけどな」

「ふ〜ん」

受話器を置いたナオキと絵里はそう会話したあとに部屋の真ん中にあつた机の周りがある程度片付けて昼食を出迎える準備をした。

それからしばらくすると従業員数名が昼食の料理を持ってやってきた。何名かの従

業員が食事の準備をしてる間に、1人の従業員が口を開いた。

「この度はご利用いただきありがとうございます。朝食の準備の間に少しご説明させていただきます。当ホテルにご宿泊中は隣の寝室にご利用いたします、浴衣をご利用ください。こちらにお持ちするお食事、お飲物はお代わり自由ですので電話でお申し付けください。何か困ったことなどがございましたらフロントまで電話を掛けていただければ対応致します。それでは、どうぞお楽しみください」

そう言い残して従業員達は部屋から出て行った。

「寿司だな……」

「寿司ね……」

「高そうだな……」

「高そうね……」

2人は机の上に並べられた豪華なお寿司にすこぶる驚いていた。その驚きからなかなか箸を持たず食事を始めなかった。

「……よし、食べよう!いただきます!」

「い、いただきます!」

だが目の前の料理の誘惑には耐えられることはなく、2人は並べられていたお寿司の一つを口の中に入れた。

「なにこれめっちゃうめえ！」

「ほんとに！ネタはもちろん美味しいけれど、シヤリも柔らかくてお醤油に合うわね」

2人は一度食べると辞められなくなり、それからはほぼ無言でお寿司を食べていた。

豪華なお寿司が並んでいた舟形の容器は僅か数分で綺麗になつてしまった。

ちなみに私はガリが好きです。ネタで言えばたまごとかマグロとか色々。

「ごちそうさまでした……」

2人はしつかりと手を合わせて作ってくれた人とこんな素晴らしい旅を用意してくれたみんなに感謝した。

「じゃあ、おれはこの容器を返しに行ってくるわ」

「えっ、呼んだら取りに来てくれるんじゃない……？」

「こんな美味しいもの食わせてもらったんだ。お礼はしないとな」

「あ、じゃあ私も……！」

ナオキが容器を返しに行こうと立ち上がると、絵里も一緒に行こうと立ち上がろうとした。だがナオキはそんな絵里に座るようジェスチャーで伝えた。

「ま、絵里はここで待ってろって」

「え〜なんで〜？」

「ほら、絵里先に着替えたいだろ？おれが行ってる間に着替えたらいいって」



「そ、そう?じゃあ……お言葉に甘えて」

絵里はそう言うのと浴衣に着替えるために横の寝室に向かい、ナオキはカードキーと容器を持って部屋を出た。

「えつと厨房は……ここか」

ナオキは周りをキョロキョロしながら歩き続け、厨房という文字を見つけるとホッと安心したような声を漏らした。

「すみませ〜ん」

「は〜い!」

そしてナオキは厨房の前で中の人に聞こえるように声を出した。すると女の人の声がかして一息をついてその人が来るのを待った。

「は〜いなんでしようか……あ」

その人はナオキの顔を見るなり「しまった」と言わんばかりの表情をして声を出した。

「お前、なにやってんだよ……………穂乃果」

「い、いやあくあはははは……………」

ナオキにバレてしまった穂乃果はどうか誤魔化そうと苦笑いを浮かべた。だがナオキはそんな穂乃果をジーツツと睨み続け、穂乃果はその視線を恐れて変な汗を垂らしていた。

「穂乃果、どうしたのですか？……………あ」

「穂乃果ちゃんも海未ちゃんもどうしたの？……………あ」

「このお皿洗うわよ……………あ」

「ご飯炊けたよお……………あ」

「みんななにしているのよ。早く終わらさない……………あ」

「ねえねえ、凜はあとをすれば……………あ」

「ほらみんな、ナオキくんは食いしん坊やし絶対連絡くるから早く準備しないと……………あ」

そしていたのは穂乃果だけではなかった。海未、ことり、にこ、花陽、真姫、凜、さらには希もいた。みんなナオキの顔を見るなり穂乃果のときと同じような表情をしてその場で固まってしまった。

「はあ……………お前ら、なんでここにいるんだ？」

ナオキもこれには呆れるしかなかった。

「フッフッフ……バレちゃく仕方ない。私達は、デート見守り戦隊なのだ!」

「……………はい?」

そして穂乃果が訳のわからないことを言い出したのでナオキはさらに呆れた表情をしたが、それを合図にみんなが横に並び出したので少し身を引いた。

するとどこからともなく変なBGMが流れ出した。

「お饅頭のように甘い愛をお届け! キュアほむら!」

「あなたのハート撃ち抜くぞ……キュ、キュアラブアロ……!」

「甘い声、深い愛! キュアミナリンスキー♡」

「猫のように引つ付くにや! キュアキャット!」

「お帰りなさい、ご飯にしますか? キュアライス……!」

「はあ、跪いて犬のように欲しがりなさい……キュアクイーン」

「溢れる笑顔! キュアにこにく、にこっ♡」

「愛をたくっぷり注入! キュアスピリチュアル!」

「私達、8人揃って……」

「「「「「ナオキ(くん)と絵里(ちゃん)のデートを見守る!」」」」」

「「「「「デート見守り隊、μ、sマイナス2!」」」」」

「……………」

みんながそれぞれポーズをキメて名乗りをあげたが、ナオキは口をポカーンと開けてみんなを細目で見つめた。

「うう〜キマったね!」

「テンション上がるにや〜!」

「練習したかいがあるやん!」

「ま、このにこにーにかかればこれぐらい楽勝よ」

「うう、もうやりたくないです……」

「恥ずかしい……」

「楽しかったね、真姫ちゃん」

「そう?」

みんなが盛り上がる中、ナオキはずっと冷たい視線を送り続けていた。みんなは盛り上がりつつそれを誤魔化そうとしていたがその視線に耐えられず、笑い声も徐々に小さくなっていった。

「……もう終わったか?」

「はい、終わりました」

「じゃあ、お前らなんでここににいるんだ?」

ナオキはみんなの茶番を最後まで見届けるとみんながここにいる理由を聞いた。

「だ、だからナオキさんと絵里ちゃんのデートを見守るために……」

「それはお前達の茶番でよくわかった」

「「「「「うぐっ……」」」」」

みんなはナオキの“茶番”という言葉に胸に矢を射られた感覚を覚えて奇妙な声を漏らした。

「おれが聞いているのはな、なんでお前らがここ厨房にいるのかってことだ」

「「「「「ああ……」」」」」

みんなナオキのその言葉に納得の声をあげた。するとみんなは顔を見て頷きあつてから海未が口を開いた。

「えつとですね、ナオキと絵里が喧嘩したのは少なからず私達にも責任があると思いついて……それでこのホテルに貸し切りをお願いしたのです」

「でもね、やっぱりこのホテルを貸し切りにするのは少々厳しかったのよ。時期的には一番儲かるから」

「だから真姫ちゃんのコネと、ウチらが貸し切ってる間は無給で働くことを条件に貸し切ってもらったんや!」

海未に続いて真姫と希がそう言うと、さらに続いてみんながうんうんと二度頷いた。それを聞いたナオキは驚いた表情に変わり、少々目をうるうるとさせてみんなの顔を見

回した。

「まさか……このお寿司ってみんなが作ったのか？」

「うん……」

「そうだったのか……（だからこんなにも美味しかったのか……）」

ナオキは絵里と食べた豪華で美味しいお寿司がみんなが作ったと知るとその美味しさに納得がいった。

料理の最大の調味料は、”愛”。そのことを絵里に初めて手料理を振舞った時に教えられた。なので、そのお寿司にはみんなの愛が詰まっている。みんながナオキ達へのお詫びと、この時間を心から楽しんで欲しいと思う気持ちを込めて作ったものなのだから美味しいに決まっている。

「フツ……ありがとう、みんな」

ナオキは嬉しそうに笑い声を漏らし、笑顔でみんなにお礼を言った。

するとお礼を言われたみんなは顔を見合わせ、微笑み合ってからナオキの方を向いて笑顔で言葉を発した。

「「「「「「どういたしまして！」「「「「「」」」」」」」」

~~~~~♡~~~~~

「ただいま」

ナオキは厨房でみんなによりしく伝えた後、部屋に戻ってそのドアを開けた。先程は気付かなかったが、実はこの部屋の扉は二重になっており、1つはオートロック式のドアなのだが、それに続いて靴を脱ぐスペースがあり。和風の雰囲気を出すためか障子があつた。これが2つ目の扉である。その障子は来た時には閉まっていなかったが、今回は絵里が着替えるためかそこを閉めたみたいだ。

「絵里、入っていいか?」

「ええ、いいわよ」

ナオキはトラブルを避けるために絵里に確認を取ってから障子を開けた。

「あつ、おかえりなさい」

「お、おお……」

絵里は旅館の浴衣に着替えた状態でナオキを迎えた。どうやら汗を流すためにシャワーを浴びたらしく髪も解いてあり、タオルを首から掛けながらクーラーの涼しい風に

当たっていた。

ナオキはそんな絵里に見惚れてその場に立ち尽くしていた。絵里は前から浴衣や着物などの和服がよく似合うと思っただが、今回もよく似合っている。浴衣からチラッと見える絵里の白い肌はなんとも例えがたい素晴らしいものである。

するとまだ拭き取りきれしていない水滴が一滴ポタッと落ち、絵里の肌をつたって浴衣の中へと消えていった。

「ナオキ、なんでそこに突っ立ってるのよ？ここ、涼しいわよ？」

「ああ、ごめん」

ナオキがそんな絵里に見惚れていると絵里が自分の近くの畳をポンポンと叩いてナオキを呼び、ナオキは今にでも襲いたいという欲情を抑えてそこに向かって座った。

「遅かったわね？なにしてたの？」

「ああ、実はかくかくしかじか……」

ナオキは絵里に時間が掛かってしまった理由を聞かれて、

「「「「デート見守り隊、μ s マイナス2！」「「「「「」」」」」」」

つまりはみんなのことを洗いざらい話した。

「へえ、みんなが……」

「ああ、だからこれからはコソコソしないで堂々と働いてくれて伝えといた」

「そう……」

「あ、でも、絵里と2人つきりっていうのは変わらないから!大丈夫!」

「ナオキ……ふふっ、私が残念がってるって思ったの?」

「ほえ?ち、違うのか?」

「ええ、ただみんながそんな風に思ってくれたことが嬉しくて……」

「……そうだな」

ナオキはそう優しい声で同感の言葉を出すと、クーラーの方を見上げて涼しい風を浴びた。

「でも一番嬉しいのは……」

「ん……?!」

ナオキは絵里の言葉の続きを聞こうと絵里の方を向いたが、その絵里の顔がとても近いことに驚いた表情を浮かべた。

「ナオキが私のことを心配してくれてたってことよ」

絵里は囁くような小さな声でそう言うとなオキの唇にしばらくの間自分の唇を重ね、満足したらその唇を離した。

その後絵里はトロンとした目でナオキを見つめ、ナオキはまだ驚いた目で絵里を見つめていた。

「ん、ああ、どういたしまして……（これ反則だつてまじで……さつき欲情抑えたのに、頑張つて我慢したのに……どうしよう、襲いたい……!!）」

「ナオキ？ どうかしたの？」

ナオキがよからぬ事を考えていると、絵里は何かを考えていそうなナオキの顔を心配して下から覗き込んだ。

「へっ!?! い、いや！ なんでもないよなんでも!! おれもちよつと着替えてくるわ！」

「え、ええ……」

するとナオキは頬を赤く染めて慌てるように浴衣が置いてある寝室へと入つていった。

ナオキはそこに入つてすぐには着替えず壁に手をついて、つい体外に出そうになった欲情をなんとか抑えた。

「（ずるいずるいずるいことは、しちやーダメだよこーら……）」

ナオキは何故か心の中でそんな歌をうたつて顔を真っ赤にしていたそうなの……
まだまだ2人の旅行は始まったばかり……

次回へ続く……

第147話 「ナオキと絵里のハラショー!な旅行～後編」

〜

ナオキは色々落ち着いて浴衣に着替えると寝室を出て、クーラーの風を浴びている絵里の隣に座った。

「あ〜涼しい〜……」

「ふふつ、こんなところにいちや動きたくなくなるわね」

「はははっ、確かに」

ナオキは声を出して笑ってから、絵里がクーラーの効いている部屋で寝転がりながら濃い色のパジャマ姿で「夏休みなんて家に引きこもってナンボでしょ」という姿を想像してしまつて顔を引きつって苦笑いを浮かべた。

「(ま、あるわけないか……)でも折角だし遊びに行くか」

「っ……うん!」

ナオキが娯楽施設へ遊びに行こうかと誘うと絵里はとても嬉しそうに頷いた。そう、絵里はずっとナオキと2人でそこで遊びたかったので最高の喜びであった。

ナオキは絵里の手を握って立ち上がると、絵里もそれにつられて立ち上がり、クラーを切つて最低限の荷物を持って娯楽施設へと向かった。

~~~~~♡~~~~~

西木野リゾートホテル2階にある娯楽施設は様々な世代が楽しめるようになって、そこにはカラオケ、ボーリング、ゲームセンター、卓球、ビリヤード、さらにリクライニングチェアや将棋などのボードゲームであそべる場所などがある。

まず2人はゲームセンターでホッケーやコインゲーム、さらにダンスゲームや音ゲームをした。

さらにナオキはダンスゲームをしている時にやたら激しく揺れる絵里の胸に目を取られて成績が悪かった。

「ゲームセンターって色んなものがあるのね！」

「ああ、子供向けの乗り物とかあるし、本当にこのホテルの娯楽施設は色んな世代を意識してるな」

「ええ、部屋にいただけでも満足できそうなのにこうも施設が充実したら帰りたくなくなっちゃうわね」

「はははっ、確かに!それは言ってる」

「でしょ?ねえねえ、次は何する?」

「うくん、そうだなあ……」

ナオキは絵里にそう聞かれると考える様子を見せながら周りを見まわした。

ホラー系のゲームは絵里が怖がるし(見たいけど我慢)、スロット系は単純に興味が無いしやっついても盛り上がりにくいし、格ゲーはやった事がないし、シューティングゲームは……

『わあ、ナオキ、ハラショー!上手なのね!』

『ま、まあな!おっと……』

『あつ、ありがとう……』

『いいよこれぐらい。さ、次のステージだ』

『うん!』

「(そして深まるふたりの仲……これだ!) 絵里、あれやろうぜ!あれ!」

ナオキは何かを妄想して近くにあったゾンビを撃って倒していくシューティング

ゲームを指さしてそれを推した。

「ええ……ゾンビ……」

だが絵里は紹介画面に出てきていたゾンビに少し恐怖を覚えていた。これもホラーの1種になるのだろうか？

「大丈夫だ。おれが絵里を守るから」

「っ……ナオキ……うん、私やるわ！」

ナオキがそんな絵里を見て自信満々に親指を立てると、絵里は腹をくくってやる気に満ちた表情をした。

そして2人はシューティングゲームを開始した。舞台は絶対零度のエリアで、そこに存在する研究所のゾンビを一掃するゲームであった。絵里は怖がっていたしここはナオキがかつこよく絵里をリードしてゲームを進める……はずだった。

「グア〜！」

「きや〜！」

「……………」

絵里は出てきたゾンビに悲鳴をあげながら銃を乱射した。リロードする時には表示

が出るため、それが出る度に絵里は慌ててリロードしてまた乱射していた。

一方、絵里を助けると宣言していたナオキはゾンビを撃つて倒そうとしたらそのターゲットを絵里に撃たれていた。さらに絵里がリロードしているときに処理をして、体力が多い敵に攻撃を加えていたぐらいのサポートもしていた。

「……クリアしたし」

「ゾ、ゾンビは……?」

「全部倒したよ。主に絵里が」

「へ?」

絵里は腕をプルプルさせながら銃を構えて怖がる様子を見せたが、ナオキの一言に驚いて可愛い声を漏らしてゲームの画面に視線を向けた。

画面に表示されていたトータルスコアを確認すると、明らかに敵のゾンビを多く倒した絵里の方が高かった。

「絵里、ハラショー!だな」

「……………」

「絵里……?」

「もう、違うところで遊びましょう!」

「え、ちよつと待つ……ええ!?!」

ナオキは絵里の叩き出したスコアを褒めたのだが、絵里は何故か頬を膨らまして少し怒った様子を見せてまだゲームセンターに未練がありそうなナオキの腕を引っ張って出口に向かった。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

それから2人はカラオケに行き、1時間ほど思いっきり歌った。

それが1時間で終わった理由はまたもや絵里であった。絵里はナオキが歌った『いとしのエリー』という曲を聞いて顔を真っ赤にして、ナオキの腕を引っ張ってそこを出たのだ。

ナオキは『エリー』の部分を意識して『絵里』に変換して歌ったのでその理由に納得である。

カラオケの後、2人はボーリング……………をスルーして卓球とビリヤードをした。

結論から言うとナオキは動く度に揺れる絵里の胸や浴衣が少しめくられてチラツと見える絵里の肌に見惚れて全敗した。男だから是非もないよネ！

「もう、ナオキちゃんと本気出した？」



「ほ、本気だったよ！おれは女の子相手でも全力だからな！」

ビリヤードが終わった後、絵里は頬を膨らませながらナオキを見上げて言うと、ナオキは何故か胸を張ってそう言い切った。

「でも、だったらなんでナオキはずっと負け続けなのよ？」

「え、絵里が強いから……?」

「ふくん、そう」

「ごめんなさい。絵里に見惚れてました」

ナオキは絵里の素っ気ない返事に何かを感じて恐れたのかすぐに頭を下げ、正直に負け続けていた理由を話した。

「そ、そう……」

すると絵里は急に顔を赤くして腕を組みながらそんな顔を横に逸らしてそう言った。その理由を作ったナオキも自分の言ったことに恥ずかしさを覚えたらしく頬を赤くして、絵里とは逆の方に顔を逸らした。

「そ、そうだ！汗もかいたことだし温泉に入ろう！」

「そ、そうね！私も早く温泉に入りたいと思ってたのよ！」

「よし、じゃあ行こうか！」

ナオキと絵里は恥じらいを誤魔化すかの様にそう言って1つ下の階に向けて足を進

めた。

しかし、その足のある人が言葉をかけて制止させた。

「ナオキ、絵里」

「おお、海未。どうした?」

その人物はこの旅館でナオキと絵里が泊まっている間に手伝っている

「「「「「デート見守り隊、ム、スマイナス2!」「「「「「」

の旅館の従業員用浴衣を着ている海未であった。

「食事のご用意が出来たので呼びに来たのですが……タイミングが悪かったみたいですね」

海未は2人が温泉に向かおうとしていることを察して申し訳なさそうに笑顔を浮かべた。

すると、そんな海未の様子を見たナオキと絵里は顔を見合わせてニコツと微笑んだ。

「あくでも動いたから腹へったな」

「そうね。温泉より先に晩御飯が食べたいわ」

「じゃあ海未、おれ達部屋に戻ってご飯待つてるからな」

「あ、いえ、違うんです。晩御飯はレストランで食べていただきます」

「「レストラン……?」」

海未は嬉しそうな顔をしてそう言うと2人を連れてそのレストランなる場所へと向かった。

~~~~~♡~~~~~

「どうぞ、あちらのお席でお待ちください」

ナオキと絵里は海未に案内されたレストランの窓側の席に向かった。

「綺麗……!」

「ああ……綺麗な星空だ」

ナオキと絵里はその席から見える綺麗な星空を目をキラキラとさせて眺めた。

ナオキは怖いたため決して下を見ず、上ばかりを見ていた。

「さ、座ろうぜ」

ナオキはそう言うといすを引いて絵里に座るように促した。

「ふふつ、じゃあお言葉に甘えて」

絵里はドレスの裾を持つように浴衣を裾を持ってお辞儀をしてからナオキが引いたイスに座った。ナオキは絵里が座っているイスを優しく押すと、その向かい側のイスに

座った。

そのテーブルには赤いテーブルクロスが敷かれており、真ん中には赤い薔薇が数本水の入った瓶に入れられていた。店内の灯りは少し暗めであったがレストランの雰囲気にはびつたりの明るさであった。

しばらくすると真姫がやって来て、テーブルの上に置かれていたワイングラスに水を注いだ。

「こんなレストランでよかったかしら？」

「ええ、当たり前よ！」

「こんな所、滅多に來れないからな」

「そう、それはよかったわ」

真姫は安堵の表情を浮かべてから誰かに合図を出すかのように指を鳴らした。

するとレストランに何故かあったステージのライトが点灯して、オーケストラの綺麗で心落ち着くような演奏が始まった。

ナオキと絵里は突然音楽が鳴り出したので驚いてはいたが、心地よい演奏に聞き惚れるように目を瞑りながら耳をすました。

「この音楽とレストランの雰囲気びつたりだな。水もとても美味しいよ」

「そう、ありがとう。あとその水は近くの山の山頂の水よ。パイプを引っ張って出るよ

うにしているのよ」

「ハラショー!だからこんなにも美味しいのね!」

「これが、THE TENNENSUIだな!」

ナオキはどこか外国人みたいな発音で「ザ・天然水」と言うと、絵里と真姫は無言で笑みを浮かべた。

「え、いや、笑ってないでなんかツツコンで欲しいんだけど……」

「じゃ、もうすぐ料理が来るからしばらく待っててね」

「うん、ありがとう」

ナオキの本音は意外と簡単に零れたのだが、絵里と真姫はそんな本音をさらつと流して会話をすると、真姫はレストランの厨房の方へと去っていった。

「な、なんの料理が出るのかわく……」

「もう、そんなに落ち込まないでよ。そんなナオキもかわいいと思うわよ……ふふっ」

「つ……うるせえ……」

絵里が顎を左手に置き、その腕の肘を机につけてからかう様にそう言うとナオキは頬を赤くして照れる仕草を見せた。絵里はそんなナオキを微笑みながら眺めていた。

くくくライブライプ！くくく

「腹が全然膨れてない……………」

「ふふつ、あの量じゃナオキみたいな男の子のお腹は膨れないのかしら？」

「それはおれが食いしん坊ってことか？」

「さあ、どうでしょうね？」

絵里が楽しんでそうな表情でそう言つて廊下を歩くスピードを上げると、ナオキはその背中を見て不満そうな表情で一息吐くと絵里を追つてスピードを上げた。

先程のレストランで出されたのは所謂、フルコースというものであった。

フルコースはナオキにとつては縁がなかったものであったからか、料理の量がこれ程まで少ないとは思わなかったみたいで真姫が終わりを告げると鳩が豆鉄砲をくらつたような目を浮かべていた。料理が来る前にたくさん食べると張り切っていた分、余計に衝撃を受けたのである。

さて、今2人はレストランを出ると一旦部屋に戻つて用意されていたバスタオルと温泉内を持つて入る用のタオルを取つて温泉へと向かっている。最低限の貴重品は小さな巾着袋に入れている。

「あ、着いたわよ。温泉ー」

2人が温泉の入口の前に着くと、絵里はそれに気が付いて振り返って言った。

もちろんではあるが男湯の入口には青色の布に白色で『男』と描かれている暖簾が、女湯には赤色の布に白色で『女』と描かれている暖簾が掛かっていた。

「ははっ、嬉しそうだな」

「温泉が楽しみなのは当たり前でしょ?ふふっ、早く入りたいわ!」

ナオキが温泉に着いて嬉しそうにしている絵里を見て笑みを浮かべると、絵里ははしゃぐ子供みたいな感じで言った。

「それじゃ、温泉タイムと行きましようか」

「ええー!じゃ、あがったらここに集合ね!」

「了解。また後でな」

ナオキは控えめに手を振って楽しそうに暖簾をくぐっていく絵里を手を振って見送ると、自身も暖簾をくぐった。

今日このホテルを客として利用しているのはナオキと絵里のみなので温泉も貸切状態。

しかもここの温泉は前話で説明したように1階に何種類かのものが広がっている。つまり、このホテルだけで軽い温泉巡りが出来るのである。泉質が違うものは2種類あ

るが、そのお湯をさらにいくつもの浴槽に分けていて、あるものは真ん中から泡が吹き出していたり、体の部分を刺激するように勢いよくお湯が出ていたりしている。あとは露天風呂、サウナ、そしてそれぞれの浴槽の雰囲気を変えるために銅像を置いたりしていた。

ナオキは広い更衣室でホテルの浴衣を脱いだ。普通に広い更衣室ではあるが、利用しているのがナオキだけだからだろうかさらに広く感じていた。

「ま、この方が気楽でいいけど」

ナオキはそう呟くとタオルを持つて温泉内へと入っていった。広い温泉を独り占めできるなんて普段では体験できないことなので温泉は好きでも嫌いでもないナオキでもテンションが上がっていた。

ナオキが温泉へと繋がる扉を開けると暖かい空気がブワツと襲い掛かってきた。通常であれば話し声などが温泉内に響いているのだが、今回は例外だ。

「いやあくこんなところで一人なんて！」

「おお、やっと来ましたか」

「1人で……………」

「まあ、遠慮することはありませんよ。どうぞくつろいでください」

「……………」

なんとということでしょう。先程まで1人だと思っていた空間が……………先に湯に浸かっていた支配人梅島の一言で壊れてしまいました(劇的なんちゃらのBGMを掛けながら)。

「あ、ああ、では、失礼します」

ナオキは数秒固まっていたが、それから失っていた意識が戻ったかのように梅島の言葉に反応して湯に浸かった。

「どうですか?楽しんでいただけられますか?」

「はい、とっても」

「それはよかったです」

それから2人は無言になった。ナオキはお互い無言になってしまった空間に、先程と

は打つて変わつて気まずくなつてしまつた。

すると気まずくて動揺しているからか表情が苦くなつていたナオキを見てフツと笑いを零した。

「なにかおかしいですか？」

「いいえ、なんだか気まずそうだなと」

「うっ……」

凶星を突かれたナオキの表情は苦しげなものになり、それを見た梅島は笑い声をあげた。ナオキは笑われたことを恥ずかしがって頬を少しだけ赤く染めた。

笑い声が止まつてふとナオキは梅島の顔を見ると、その表情は豊かなものではなく真剣なものであつた。

「あの……どうかされたんですか？」

ナオキはそんな梅島を不思議に思つて口を開いた。すると梅島は「ふう……」とひと息をついてナオキの顔を見た。

「香川様、これから私はここの支配人ではなく、一人の大人として話してもよろしいでしょうか？」

「は、は……」

ナオキは梅島の言っていることのわけがわからずに返事をしたのだが、その理由はそ

のあとすぐにわかることになる。

梅島はコホンと喉を鳴らすと天井を見あげて語るような口調で話し出した。

「真姫お嬢様からおふたりが喧嘩したことを聞きました……と言えはわかるかな？」

「っ……!？」

「なんでお嬢様が無関係な私に話したのか……聞きたいかい？」

「……お、お願いします」

「実は私は“バツイチ”なんだよ……」

「は、はぁ……」

ナオキは反応に困った。急にバツイチだというカミングアウトをされたが、ナオキはどうコメントすればいいのかわからない。その事と、真姫に喧嘩したことを聞いた理由がどう繋がるのか。全くわからない。

そんなことを考えているナオキをよそに、梅島は話すことを止めることなく淡々と語っていく。

「前の妻と別れたのはね、ほんの些細な喧嘩だったんだよ」

「えっ……?？」

ナオキは「ほんの些細な喧嘩」というワードを聞いて、驚いた声を漏らして梅島の顔を見た。

「ああ、ほんの些細な喧嘩だよ……」

梅島はそう言うとき悲しい目をして自分が浸かっているお湯に映る自分の表情を見つめた。

ナオキはその梅島の話当真剣に聞いていた。

梅島はあのと看のことを思い出しながらナオキに語った。

「私はその妻との結婚記念日のためにサプライズパーティーを開こうと思っていたんだ。プレゼントも買って、ワインや料理も用意して、妻へのお礼を込めて開こうと思った。」

でも、妻にとっては「私が隠し事している」という印象の方が強かったみたいなんだ。

そしてその前日、妻は私に不満をぶつけてきたんだ……」

『あなた、私になにか隠してるでしょ!?!』

『えっ、いや……それは……』

『あなたが隠し事してるってことぐらい、私にはお見通しですからね!』

『いや、だから、その……これは……』

『もう言わなくていい、わかってるわ。男の人が妻に隠し事なんてひとつに決まってるわ……浮気、してるんでしょ?』

『なっ……!?浮気なんてしてないぞ!』

『嘘よ!嘘に決まってるわ!浮気してるんでしょ!』

『だから違うって!私はただ……』

『言い訳はよして!言い訳なんて聞きたくない!』

『言い訳……?ふざけるなよ!!浮気してないって言ったらしてないんだよ!!』

『じゃあなんでそんなに怒るのよ!』

『そっちの方こそ!!!』

『っ……もう、いいわ。私達、これでおしまいみたいね……』

『ああ、そうみたいだな!それなら今から役所行って持ってこいよ!』

『ええ、持ってくるわよ……』 離婚届』

「そして私と妻は離婚届にサインをして、その日のうちに出しに行ったよ。」

次の日は記念日だった。私は一人寂しく『こんなはずじゃなかった』と思いながらワインを飲んで、料理を食べて……………」

ナオキは話していくうちに目を瞑っていた梅島の顔を見ることは出来ず、自身もお湯に映る自分の顔を見つめていた。

「だからね、君たちには選択を誤ってほしくない。お互いにお互いを理解して、お互いがお互いのことを考えて、過ごしていつてほしい。そう私は思う。決して、私の、私達のようなことにはなつて欲しくない……………」

「だから真姫は梅島さんに……………」

「ああ、そうだ。私が同じような体験をしているからこそ、真姫お嬢様は私に体験談を話すように頼まれたんだろう……………」

「そうなんですか……………」

「はははっ、少し空気を重くしてしまったね。では私は上がらせてもらうよ」

梅島はそう言うのと立ち上がって温泉の仕切りを跨いで床のタイルに足をつけた。

「つ……………あのっ!」

するとナオキも立ち上がって梅島の背中を見つめた。梅島は何事かとナオキの方に振り向いた。

「……………ありがとうございました!」

「ふう……」

ナオキは更衣室で扇風機に当たりながらコーヒー牛乳を飲んでいた。

やっぱり温泉上がりはコーヒー牛乳だよね！あゝでもラムネも捨て難い……皆さんは何飲みますか？え、飲まない？怠惰ですねえ……

「久しぶりの温泉気持ちよかったなあ……」

ナオキはあれからしばらく温泉を巡って一人の温泉を満喫したのだ。全部を巡りきる前にのぼせてしまったので現在こうしている。

「さて、そろそろ出るか」

ナオキはそう言うと頭からつま先までもう一度拭き直し、浴衣を着て荷物をまとめて暖簾を潜って更衣室を出た。

「あ、ナオキ〜！」

「絵里、先に出てたのか？」

ナオキが暖簾を潜るとペットボトルのお茶を持っている絵里が近くのソファアームに座って手を振っていた。ナオキはそんな絵里の隣に腰掛けた。

「ええ！あ、そうだ。このお茶、飲まない？」

「お茶……てかこれホットじゃん!？」

ナオキは絵里の持っていたペットボトルに『HOT』と書かれていることに驚いた。

「ん？ナオキ知らないの？」

「な、なにがだよ……」

「お風呂上がりって、冷たい飲み物より温かい飲み物の方が体にいいのよ？」

「へ、へえ……」

ナオキがにわかには信じがたそうな返事をする、絵里は少し機嫌を損ねて頬を膨らました。

「あ、信じてないでしょ？」

「まあ……2割ぐらい？」

「なによそれ……あのね、温かい飲み物は冷たいものより内臓にかかる負担が小さくて、免疫力向上や整腸作用、冷え性の改善、基礎代謝アップなどにも繋がるって言われているの。お風呂に入ってから汗をかいてから上がって冷たい飲み物を飲んでも体に吸収されないから、常温の水とか温かいお茶が最適なのよ」

「なるほど……でも本能的にお風呂上がりは冷たい飲み物を飲みたくなるよな？」

「それは否定しないわ。でも健康に気を付けたら温かいお茶を飲むべきなのよ」

「……………飲めと？」

「うん」

絵里はお風呂上がりになり温かいお茶を飲んでいた理由を説明するとナオキにペットボトルを差し出した。ナオキはあまり飲む気ではなかったが、絵里が飲めと迫ってくるのでそれを受け取って少し飲んだ。

「どう？」

「どうって……普通だけど？でも気分的にはやっぱりコーヒー牛乳かな？」

絵里にペットボトルを返したナオキはまだ飲みかけのコーヒー牛乳を全部飲んで、その瓶を専用の回収ケースの中に入れた。

絵里もそんなナオキを見ながら残りのお茶を飲んで専用の回収ケースの中に入れた。

「ふう……ねえ、ちよつと散歩しない？」

「散歩？あく湯冷ましによく使われる散歩道があるって梅島さんが言ってたな」

「そうそう、そこに行きましよう！」

「わかったよ。じゃあ行こうか」

「うん！」

ナオキと絵里は横に並びながら廊下を進んで、その散歩道の方に向かって歩いた。

~~~~~♡~~~~~

「うーん!涼しいわね」

「でも灯りがついててよかったな」

「ちよつと〜!からかわないでよ〜!」

散歩道で絵里は体を伸ばしてその場の空気を体全体で感じた。ナオキはそんな絵里の横を歩きながらその気持ちいい空気を吸った。

「ははっ……でもここは空気もおいしいし、本当にいいところだな」

「そうね」

2人は散歩道で熱くなった体を冷めるために話しながら歩いていた。だがナオキは絵里が少しだけ寒そうに感じていることを察して、自分の羽織っていた羽織を優しく絵里に掛けた。

「ほら、風邪ひくぞ」

「あ、ありがとう……」

絵里が少し驚いた顔で見るとナオキは照れ気味に言った。絵里も少し頬を赤く染めて笑みを零した。

そして2人はそつと手を繋いで散歩道を歩いていった。

それから2人は涼しい空気に当たりながら散歩道を満喫したのだが、流石に外に出すぎて体が冷えてしまったので一旦ホテル内に戻ろうと近くの出入口からホテルに入った。

「絵里、どうする？また温泉入るか？」

「ううん、その……入りすぎてのぼせちゃいそうだから部屋の露天風呂に入りたいな  
くって……」

「ん？いいぞ。おれもちょうど入りたかったし」

絵里がチラチラとナオキに視線を送りながら言うのと、ナオキは絵里がそうしている理由がわからずに快諾し、2人は部屋へと戻っていった。

部屋に戻ると露天風呂へと続く扉に「お湯を張りましたのでどうぞ入ってくださいませ」という札が掛けられてあった。

「……絵里、先に入るか？」

「ううん、お先にどうぞ。私はちよつと……やりたいことがあるから」

「わかった……（絵里が1番入りたそうにしてたのに、なんでだ？）」

ナオキは不思議に思いながらもお風呂場へと向かっていった。更衣室のドアが閉まると絵里はソワソワして落ち着いてはいなかった。

「あ……いい湯だ〜！」

ナオキはお湯に浸かると気持ちよさそうに声を上げた。

そこから見える夜空もまた綺麗なものであった。都会の空では見ることができない星がここでは見ることができると。星々がそれぞれに輝いていて、自分達の輝きを見つめようと頑張るスクールアイドルのようだとナオキは感じていた。

「この夜空、絵里と見たいなあ……」

そんな素晴らしい夜空だからこそ恋人と見たいと思うのだが、流星にすぐには無理そうなのでまた後で一緒に見ようと割り切って目を瞑った。

その瞬間、重いドアが横に開けられる音が響いた。

「……………へっ!？」

そのドアを開ける人間は限られてくる。この部屋に泊まっている人間か、ホテルの従業員かのどちらかだ。だが絵里が部屋にいるため後者はまずないだろう。

だとすれば、ドアを開けた人間は……

「え……絵里、どうして?」

絵里だ。タオルを体に巻いて隠すところは隠している。だが絵里の大きなお胸は隠しきれずに上の方は見えてしまっている。でも隠すところは隠しているのでセーフだ。だからR18ではない。

「だって……その……」

絵里は恥ずかしかつてモジモジしながら頬を赤くして何か言うのを躊躇ためらっていたが、そんな仕草もナオキのナオキを刺激していた。

「と、とりあえず浸かれよ……風邪ひくぞ」

「う、うん……」

ナオキは先程まで絵里を凝視していたがサッと視線を外の方に向けて少し横にずれると、絵里はゆつくりと歩いてナオキの横に浸かった。

「……なんでまた入ってきたんだ？」

「えっ?! えっと、その……ナオキと入りたかったから……」

「ん、ん、ん、っ……!!」

ナオキは絵里のそのセリフにハートを貫かれて真っ赤になった顔を片手で隠して絵里とは逆の方を向いて変な声を抑え気味に出した。

「わ、私変な事言っただかしら!？」

「い、いや、大丈夫。ただ絵里がそう言ってくれて嬉しかっただけだよ」

「そ、そう……? ふふっ……」

ナオキがそう言うと絵里は若干頬を赤く染めて嬉しそうに微笑んだ。

「あ、そうだ。絵里見てみるよ。空、綺麗だぞ」

「空? ……あ、ほんとね! ハラショー!」

絵里はナオキの言う通りに空を見ると綺麗な星々が夜空に広がっていた。思わず絵里は感激の声を上げた。

2人はそんな空を静かに眺めて、その場はとてもしい雰囲気になった。ナオキはお風呂の底に付けていた絵里の手に自分の手を重ねた。絵里は触れられた瞬間はびっくりしたものの、それからナオキの手の指に自分の手の指を絡めてナオキにより引っ付いた。

「……………あのさ、絵里」

「ん？どうしたの？」

ナオキが空を見ながらそう言うと、絵里はナオキを不思議そうに見た。

「おれさ、絵里のことわかつてるつもりで全然なにもわかつてなかった。だからあんな喧嘩しちやっつたんだ……………本当にごめん」

「もういいのよ。私だってナオキが私のためにしてくれていたのにわかつてなかったもの。お互い様よ」

「ああ、おれ達は、その、これから……………ふ、夫婦になるわけだし？お互いにお互いを理解して、考えていかないといけないと思うんだ」

「ナ、ナオキ……………！」

「だからさ……………おれ、絵里のこともつと知りたいたんだ」

「えっ……………!？」

「絵里と2人で色んなところに出掛けて、色んなこととして、数え切れない時間を絵里と過ごして、絵里のこともつと知りたいたい……………！」

「ふふっ、そうね、私も……………だから……………」

「んっ……………!？」

ナオキが油断していたところに絵里は自分の唇をナオキの唇に重ねた。





翌日、チェックアウトの日を迎えたナオキと絵里はホテルの最寄り駅で支配人梅島に礼を言った。

「おふたりとも。これから末永く仲良く、お幸せに」

「は、はい……」

2人は梅島の言葉に少し照れながら返事をした。すると梅島はそんな2人を見て優しく微笑んだ。

「では、またのご利用をお待ちしております」

そう梅島が言うと2人は笑顔で一礼をして駅のホームへと向かっていった。

そんな2人は心の中ではこう思っていた。

こんな高いところに2度目は来れるはずがない……と。

そして、

「「「「「デート見守り隊、μ, s マイナス2」」」」」

はよく働いてくれたと夕方までそのホテルでくつろいで、西木野家のリムジンでそれぞれの家へと帰っていったのだった。

次回に続く……

## 第148話 「始まりの流れ星」

「ワン、ツー、スリー、フォー、ファイブ、シックス、セブン、エイト！ワン、ツー………」  
夏もいよいよ終盤。Shooting Starsのファーストライブを3日前に控えて練習も追い込みになっていた。

この前の日には夏休みの宿題が終わっていないなかった凜は1日中真姫の監視の元で宿題を終わらせた。

「よし、休憩だ！」

ナオキがパンと手を叩いてそう言うともみんな疲れたのか溶けるようにその場に座つた。

ナオキはそんなみんなに凍ったタオルとスポーツドリンクを渡してみんなをねぎらった。

「いよいよライブだね！」

「ちゃんと踊れるかな？」

「大丈夫よ。練習の成果をしっかりと発揮すれば」

「真癒美の言う通りだよ！大丈夫！」

亜里沙、瑞希、真癒美、雪穂はそう言っただけで初めてのライブに緊張はしているが、楽しみなように笑顔で話していた。

だがマシユはそんなことはなく、なんだか少し気まずい表情をしていた。

「マシユちゃんどうかしたの？」

「い、いえ！なんでもありません！なんでも」

「そう？ならいいけど……練習、頑張ろうね！」

「はい！」

瑞希はマシユを心配して声を掛けるがマシユは誤魔化す感じで返事をした。瑞希らも無理に聞いても話さないだろうと察してそれからも追求しなかった。

そして10分ほど休憩してからみんなはまた練習を再開した。

1年生は次のライブが自身にとって初めてのライブになるため、練習に気合いが入っているのが感じられた。

一方、μsでライブを経験したメンバーも多少は不安を感じていた。今までは9人でステージで踊っていた。でも今回は11人という大人数だ。この人数でのライブに慣れるまで時間はかかったが、今ではしっかりと踊れている。だがやはりその状態での本番は初めてなので不安になるのも仕方が無い。

そして時間は早いもので1日の練習は終わりを迎えて、みんな着替えて帰宅していった。

ナオキを除くメンバーはダンスや歌の自主練習をしているが、ナオキはステージでのライトなどのタイミングの確認、フォーメーションの確認、そして当日のスケジュールの確認などを行っていた。

ナオキは、sのときも、今でも、こうしてみんなを裏から支えている。みんなが輝けるようなステージを作ってみんなで輝く……それがナオキの役割だからだ。

「はい、お水。ちゃんと水分補給しないとダメよ」

「ありがとう、絵里」

ナオキは絵里が持つて来てくれたコップに入った水を飲むとまた資料に目をやった。

絵里は邪魔をしないように心の中で応援の言葉を掛けて、ナオキが座っているソファを離れて椅子に座ってナオキを見つめた。

「ふう……とりあえず今日は寝るか。絵里、お待た……」



みんながイメージするのはどんなものなのか？

新たな仲間と一緒に最高に輝いている自分？

それとも緊張している自分？

それとも踊りながらも不安になっている自分？

しかし、不安だろうがなんだろうが、その根本にあるのは“楽しみ”という感情である。

その証拠に、固くなっていったみんなの表情はどんどんと柔らかくなっていく。

「よーしみんな！練習にや〜！」

「！！！！！！！！おー！！！！！！！！」

凛は目を開けてみんなの顔が見えるように前に立って元気よく言うと、みんなは拳を上げて声を上げてリハーサルを開始した。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

リハーサルも終わり開場時間になると、このライブを楽しみにしていた観客がドツと

入場してきた。

講堂内の席はその観客であつという間に埋まっていき、先程まで静かだった空間が一気にざわざわしだした。その中には卒業生である絵里、希、にこの姿もあつた。

「ハラシヨ……!」

「もうこんなにくさくさんお客さんが……!」

ステージ袖から講堂の様子を伺っていた亜里沙とマシユはその様子に驚いたが、同時に感動していた。

「ふ、ふん、これぐらい普通でしょ」

「そう言う真癒美も脚震えてるけどね」

「うっ……」

真癒美は余裕ぶっていたが、仲がいい瑞希にそれを見破られて表情を少し崩した。

「でもやっぱり緊張するね……初ステージ……」

雪穂がそう言うのと一年生のみんなは急に表情が固くなつて、より緊張した様子を見せた。

「大丈夫だよ」

「お義兄ちゃん!」

「「「ナオキくん!?!」」」

そんな1年生のところになオキが現れると、亜里沙は嬉しそうにその名を呼んで、他のみんなは驚いたようにその名を呼んだ。(キミノゼンゼンセカラボクハ以下略)
「みんな練習の通りにすれば大丈夫さ。それに失敗を恐れてはいけない。自分を信じてやれば必ず成功する」

「練習、通りに……!」

「失敗を恐れずに……!」

「自分を、信じて……!」

みんなの緊張した表情はナオキの励ましの言葉で柔らかくなり、笑顔が戻っていった。

ナオキもそんな笑顔を見て嬉しそうな表情を浮かべた。

「さあ、着替えてから最終チェックだ。急いだ急いだ」

「「は、はい!」」

ナオキがそう言うのと1年生はまるでこれから始まるライブが楽しみになったかのような表情で控え室に向かっていった。

ナオキはそんなみんなの後ろ姿を微笑みながら見つめた。

~~~~~ライブライブ!~~~~~

「ナオキくん、準備できたよ〜!」

「よし、じゃあ入るぞ」

凜がドアの向こうのナオキに向かって声をかけると、ナオキは控え室のドアを開けて中に入った。それから全員の衣装姿を見まわした。

今回の衣装は Shooting Stars の名に相応しい、全体的に薄暗い青つばく夜空の星座をイメージした衣装だ。

腹回りには薄暗い青い布に星をイメージした白い粒が散らばっていて、真ん中には白い星型の模様が線で繋がっていた。さらにその下には黄道十二星座のマークが金色で刻まれており、胸辺りから上は白い布で胸元が見えているバージョンとしつかりと首辺りまで布が続いているバージョンがあった。布が続いている人は首元でリボンを結んでいた。胸元が見えている人のものは肩からヴェールが掛かっており、見えてない人は白い布がさらに続いていた。さらにはショートパンツのバージョンとスカートのあるバージョンもあり、靴や脚より下にも違いが見られた。

全員共通で帽子をかぶっており、さらには表は薄暗い青で内面はキラキラと輝いているマントを首から掛けていた。

「うん、やっぱりみんな似合ってるな。ほんまにみんなべっぴんさんやわ〜」

「じゃあ、最後に1回ダンスの確認だ！」

「「「「「「「はい！」」」」」」」」

童子とナオキは衣装を身にまとったみんなを鼓舞した。それからダンスや歌の最終確認をして Shooting Stars は初ライブに挑むべく控え室を出た。

ステージ横に待機するとライブを待ちわびている人達の話し声が聞こえて来た。なにを話しているかは定かではないが、人が多い分ザワザワ声は大きく聞こえていた。

『もう間もなくライブが開演となります。皆様、もう少々お待ちください』

フミコがアナウンスをすると待機していた観客は期待の歓声をあげた。その歓声を聞いた1年生はより緊張感を高めていき、声に出しはしなかったがみんな不安そうな表情をしていた。

それを見た童子はニタリとして素早く真癒美の後ろにまわり込んでその2つの膨らみを掴んで、そのままその膨らみを勢いよく揉みまくった。

「っ、あんっ!?ちよっ、童子っ、先生っ……! なにつ、してるんですかっ……! ああっ……!!」

「おお〜! ええ胸しとるな。しかもこんないい声出してえ……先生、興奮するわあ

……」

ナオキは頬を赤く染めて気まずそうな表情をしながら目を瞑り、両耳を塞いで真癒美達の方から顔を逸らした。

そのナオキが遮断した世界では童子が真癒美の胸を揉み続け、揉まれた真癒美が声をあげていた。

「はあ、はあ、はあ……やつと終わった……」

「ま、真癒美……大丈夫?」

「(お姉ちゃんもお義兄ちゃんにされたらあんなふうになるのかな?)」

「せ、先生!なにやってるんですかっ!?!」

瑞希はしゃがんで腕を胸で覆いながら息を荒くする真癒美に苦笑いを浮かべながら声をかけ、雪穂は童子に驚きと混じった声をあげた。

「うう……はっ、ナオキくん!」

「は、はいっ!」

「………見えました?」

「見てないです。耳も塞いでました」

真癒美はそう言うナオキを赤くした頬を膨らませながらキツと睨んだ。真癒美に睨まれたナオキは必死に自らの無罪を主張した。

マシユは呆然とした表情だったが、その光景をみて何かがこみ上げてきて口から息を吐き出した。そしてその出した息でリミッターが外れて笑い声をあげた。

「お、おいマシユ……ここ笑うタイミングじゃないぞ？」

「あはははっ、ご、ごめんなさい。で、でも、なんだかおかしくって……あはははははははっ！」

ナオキはマシユが笑っていることに不満を持った表情をするも、マシユがいつも通りの笑顔を浮かべていることに安心感を抱いていた。だがそれはナオキだけではなく他のメンバーも同じであった。

メンバーはマシユの笑いにつられて笑い声を次々にあげていった。

「いや、なんでみんなまで……ふふっ、ははははははっ！」

そしてついには笑うなど言っていたナオキまで声をあげて笑った。

その光景はいつも通り過ぎていく音ノ木坂学院スクールアイドル、Shootin  
g Starsの面々であった。

「ふふっ、上手いこといったみたいやな……」

童子はボソツと誰にも聞こえないような声でそう呟くと生徒達と同じように笑った。そう、童子はこうなることを見越して真癒美の胸を揉んだのだ。

みんな、とくに1年生は緊張で表情が固くなっておりこのままでは練習通り、いやそれ以下になる可能性だってあった。なのでその緊張を解く方法として童子は、自分が真癒美の胸を揉み、それから唯一の男子であるナオキに真癒美が怒り、それをみた緊張して笑いの沸点が低くなっているであろう誰かが笑い、さらにそれにつられてみんな笑うだろうとふんでいたのだ。

それが見事に的中。みんなはこうして笑ったことで緊張が和らいでいった。

「よし、みんな大丈夫だな」

「「「「「「「はい！（うん！）」」」」」」」」

ナオキの言葉に返事をしたみんなの表情は緊張しているものではなく、やる気に満ち、若干緊張はしているがこれからのライブを、これから起こることを楽しみにしているものであった。

「童子先生、なにかありますか？」

「せやね〜……うちもちゃーんと見てるさかい、みんなしつかり練習の成果出してくるんやで」

「「「「「「「はい！」」」」」」」」

「じゃあ最後に部長。一言よろしく」

「ふええ!?なーんて、しつかり考えてますっ!」

「ふふっ、かよちゃんにこちゃんみたいだにや〜」

「確かに!」

凜は今の花陽の姿に前部長であるにこの面影を感じてそれを声に出すと、納得した元?  
?sの面々は懐かしむような笑い声をあげた。

「では、あらためて……みなさん!来てくれた皆さんにとって、今日というこの日を特別な日にしてあげましょう!じゃ、次はナオキくん!」

「はあ!?ここでおれに振るのかよ……ま、いいや。」

みんな、今日がいよいよパフォーマンスライブだ。今日まで積み重ねてきたものを悔いなくここで出し切ろう。きつと成功する。だから自信を持って、輝いてこい!」

「「「「「「「はい!」」」」」」」」

ナオキのその力強い一言にみんなは元気よく返事をした。

「じゃあみんな!あれ”をやるにや〜!」

すると凜は元気よく言った言葉に対してみんなが頷くと、人差し指と中指を立てて前に出した。それに続いて童子以外のみんなも同じ指の立て方で手を出した。

「あれ、童子せんせーはしないの〜?」



「え？うちもやってええの？」

「もちろんだよ！だって童子せんせいもShooting Starsの、音ノ木坂学院アイドル研究部の一員だもん！」

「穂乃果ちゃん……」

だが穂乃果は手を出さない童子に声をかけると、その言葉に心撃たれた童子はみんなの顔を見まわした。みんな優しく微笑みながらこの輪に童子が参加することを今か今かと望んでいた。

そして童子はみんなと同じように手を出して？。×sのときは10人で作っていた”星”は13人で作るものとなった。

「じゃあいつくよ〜！いちー！」

「にー！」

「さんー！」

まず番号を言ったのは穂乃果……ではなく、Shooting Starsのリーダーの凛、アイドル研究部部長の花陽、副部長の真姫であった。

「よんー！」

「ごー！」

「ろくー！」

そしてそれに続いたのが現在3年生である穂乃果、ことり、海未だ。

「なな！」

「はち！」

「きゆう！」

「じゆう！」

「じゆういち！」

3年生に続いたのは新入部員である1年生の雪穂、亜里沙、真癒美、瑞希、マシユだ。

「じゆうに！」

「じゆうさん！」

そして最後にサポート役のナオキ、顧問の童子が番号を言った。

「Shooting Stars！」

『ミュージック……スタートー！』

そしてみんなは掛け声とともに手を振り上げてジャンプをした。

『みんなで輝きになろう』

そんな想いを込めてShooting Starsはファーストライブに臨んだ。



『おおおおお——!!』

そして大きな歓声とともに講堂が暗転してそのまま幕が開いた。

その先には新たな音ノ木坂学院スクールアイドルであるShooting Starsの姿があつた。

そして暗転した講堂にツリーチャイムの音が響き、スポットライトはセンターの凛とその両端の花陽と真姫を照らした。

「「さあ、流れ星のように」」

それからステージ全体に明かりがつきShooting Stars全員の姿が観客の目に入った。

「「キラキラと」」

「「「「輝こう」」」」

1年生が歌い終わるタイミングで全員が右手の人差し指をたてた状態で右腕を振り下げた。

『Shooting Stars!』

そして全員一斉にその腕を振り上げて自分たちから見て右下に振り下ろし、そのまま

右回りでターンをした。そのターンのあとに曲が盛り上がり、曲が盛り上がるとともに観客も大きな歓声をあげた。

「「Shining!」」

「「暗い夜空を飾る無数の星」」

「「空に灯りを与える星」」

まず歌い始めたのは穂乃果と海未、ことりとマシユだ。マシユは初めての披露だったがことりの支えもあり楽しく歌った。

「「Shooting!」」

「「そんな輝く星達が」」

「「次々に地上へと流れてゆく」」

続いて歌い始めたのはマシユ以外の1年生組。

雪穂と亜里沙、真癒美と瑞希は特に仲がいい2人の組み合わせで息がぴったりだった。

「「星から星へ」」

「「受け継がれていく光」」

「「たった一瞬輝く流れ星」」

「「「さあ、みんなで輝こう!」」」

そしてチームの中心である花陽、真姫、凜の2年生組が歌うと何色かの線状のライトが講堂全体を照らしてついに曲はサビに入った。

『Shooting Stars! 最高の輝きを目指して』

「あの日見た」

「流れ星のように」

「輝こう」

「私達の思いは」

「流れ星のように」

「」「」「受け継がれていく」「」「」

全員で声を合わせて綺麗な歌声を披露した。

それから凜と穂乃果、現リーダーと元リーダーに続いて2年生、3年生そして1年生がまるでひとつの星が流れたあとに幾つもの星が流れていくように歌った。

『一瞬の光 その一瞬の輝きこそ流れ星

流れ星のように キラキラと輝こう!』

「輝きになろう」

そしてついに曲の最後、凜がはじめの時のように腕を上げるとその両端の花陽と真姫から順番にみんな腕を上げていった。

『Shooting Stars!』

その腕を歌声を合わせてははじめのように降ろしていつて右回りにターンをした。

Shooting Starsのダンスはまさに輝く星達が夜空を舞っているかのようだった。そんな姿に講堂の誰もが魅了された。

『ワァ——!!』

曲が終わると講堂の観客達は大きな歓声をあげた。その声ははじめの時よりも大きく、観客達の期待を大きく上回るステージだったと言えよう。

「みなさん、ありがとうございます！」

では、私達Shooting Starsの自己紹介を簡単にしていこうと思います  
！じゃあことりちゃんから！」

全員が1列に並ぶとセンターにいた凜はそう言って1番左端にいたことりにバトン  
タッチした。

「はい！南ことりです！今日は私たちのライブに来てくれてありがとうございます！  
みなさんご存知かと思いますが——」

そしてことりから順番に、穂乃果、海未、花陽、凜、真姫と慣れたように観客に向かっ  
てお礼などを含めた自己紹介をしてみた。

真姫の隣にいたマシユは自分の出番が近づく事に緊張していった。

「——これからも前と変わらさず頑張つていくから応援よろしくお願いします。じゃあ次からは新しく入った1年生。マシユ、よろしく」

「は、はいっ！マ、マシユ・ライトと言います！えっと、あんまりこういう経験はないんですけど、先輩達の姿を見てスクールアイドルに憧れてはじめました！そんな先輩達に遅れを取らないよう頑張ります！よろしくお願いします！えっと……亜里沙ちゃん！」

マシユは焦っていたがなんとか挨拶をこなして隣の亜里沙にバトンタッチした。

「うん！私は絢瀬亜里沙です！私はお姉ちゃんは絢瀬絵里です！私はお姉ちゃん、μsにずっと憧れていました！なので、お姉ちゃんと一緒にスクールアイドルができてとても嬉しいです！これから応援よろしくお願いします！次は雪穂！」

亜里沙は元氣よく挨拶をこなした。そんな挨拶を見て絵里は1人感激していて、隣にいたにこや希になだめられていた。

「高坂雪穂です。あそこにいる穂乃果の妹です。お姉ちゃんはμsの一員でした。でも、私はお姉ちゃんに負けないぐらいのダンスを、歌を身につけたいと思っています。みなさん、応援よろしくお願いします！次は瑞希」

雪穂は興奮気味だったが挨拶を冷静にこなした。その挨拶の途中では観客達を含めたみんなは笑っていた。穂乃果は頬を膨らませていたが。



「どうもみなさん、はじめまして！奥村瑞希です。漢字で書くと“みずき”と読まれがちですが、“たまき”です。私は昔からスクールアイドルに憧れていました。なのでこうして音ノ木坂学院でスクールアイドルをやれていることがとても誇りです！みなさん、これからも応援よろしく願います！最後は真癒美！」

瑞希は終始明るく挨拶をこなして真癒美にバトンタッチした。

「はじめまして、福田真癒美です。私は昔からダンスを習っていました。といつてもこういう大人数で踊ることはなかったのだとても楽しいです。先輩達に負けぬよう頑張りますので応援よろしく願います」

最後の真癒美は落ち着いてクールに挨拶を終わらせて凜にアイコンタクトを送った。

「以上が音ノ木坂学院スクールアイドル、Shooting Starsのメンバーです！Shooting Starsは流れ星のようにずっとこの音ノ木坂学院で受け継がれていきます。この名前がこの先ずっと残っていくようにみなさんも応援、よろしく願います！それでは、今日は私達のファーストライブにお越しくださり、ありがとうございました！」

『ありがとうございます！』

全員が礼をすると観客達は歓声をあげて大きな拍手を響かせた。その拍手の音は幕が完全に閉まるまでなり止むことはなかった。

S h o o t i n g   S t a r s のファーストライブは大成功に終わった。

次回へ続く……

## 第149話（章末回）「早すぎる終わり」

ファーストライブ終了直後……

控え室……

「みんな、お疲れ様！」

「「「「「「「お疲れ様です！」「「「「「」」」」」」」」」」

「みんなよかったで〜！」

ここでナオキと童子を含めた *Shooting Stars* の面々はライブの終了を喜んだ。

「ライブ、凄かったね！」

「そうだね。お客さん達の歓声はまだ耳から離れないよ！」

ずっと近くで、*S*を見続け、そして憧れていた亜里沙と雪穂は興奮した様子で話した。

「あそこのターン、練習通りに出来てよかった〜」

「確かにあそこは難しかったです！」

「2人共練習のときはよくあそこで失敗してたものね」

瑞希、マシユ、真癒美は練習のことも思い出しながらライブ中の自分のダンスの成功を喜んだ。

「さてと、じゃあみんなは着替えたら部室に集合。おれは講堂を片付けてくる」

「ほんならウチはひと足先に部室に行つとくわ〜」

そう言うとなオキと童子は控え室から出ていった。他のメンバーは控え室の鍵を閉めて部室へと向かった。

~~~~~♡~~~~~

「それでは、ライブの成功を祝って、カンパ〜イ！」

凜が乾杯の号令をかけるとみんなは手に持ったコップをカコンと合わせて声を合わせた。

「うくん、お酒飲みたいわ〜」

「ダメですよ、ここ学校ですし」

「ケチな生徒会長やわ〜」

童子はコップに入っているのがお酒ではないことに不満を漏らしながらもお茶を一気に飲み干した。

「雪穂？なにしてるの？」

「なんだかネットの反応気になっちゃって……」

「あ、それ私も気になる！」

「そうね」

雪穂がパソコンを睨んでいると1年生の他の面々も群がって画面を凝視した。

ナオキはそんな1年生達を微笑ましく思いながら見つめていた。それは2年生や3年生も同じであった。

「私達も最初はあるな感じだったね」

「かよちゃんが一番パソコンを睨んでたもんね〜」

「もおくやめてよ凜ちゃん」

凜が去年の花陽のことを話題に出すと花陽は頬を赤くして右腕をパタパタと振っていた。

「でも海未ちゃんは怖いからって両耳塞いで目を瞑ってたもんね〜」

「そ、それは言わないでください!」

穂乃果が去年の海未のことを話すと海未は顔を赤くして両手を前に出してその手を左右に振っていた。

「今の花陽も海未も去年とあんまり変わらない気がするけどな」

「ふええ!?!」

「ええ!?!」

そんな花陽と海未を見ながらナオキは苦笑いを浮かべながらそう言う。2人は驚いた表情をした。

「す、すごい!まだ動画上げてないのに私達の話が話題になってるよ!?!」

「え!?!ほんと!?!」

「でも結局いつも穂乃果が一番騒いでるじゃん」

「」「確かに」「」

「お姉ちゃん……」

亜里沙の興奮の声に反応して1年生達に混じった穂乃果を見たナオキの言葉に他の2年生、3年生は共感して、雪穂は呆れた表情を浮かべてため息を吐くように呟いた。

「あれ、そう言えばマシユは?」

「さっきパソコンの画面見たあとに出ていったで？ スマホ握ってたから多分電話ちゃうかな？」

「あ、じゃあついでに私呼んでくるよ」

「ああ、すまん」

ナオキがマシユがいつの間にかいなくなっているのに気がつくとき、ことりが部屋を出てマシユを呼びに行った。

~~~~~ラブライブ！~~~~~

「マシユちゃん、どこに行ったのかな？」

部屋を出たことりはキョロキョロとマシユを探しながら廊下を歩いていた。

「で、でもっ……！」

「……この声は、マシユちゃん？」

するとこつりの耳にマシユらしき声が聞こえたのでその方向へと足を進めた。

そこにはマシユがスマホを耳に当てていた。そんなマシユの額には汗が一滴流れていた。

「お父さん、前に”それ”は来年だって……急にそんな……」

(マシユちゃん、お父さんと何を話してるのかな……？でもあの表情、まるで”あのとき”の私みたい……)

ことりがマシユの表情を見ながら思い出しているのは去年、海外にいるすずめの知り合いから来た留学の誘いの手紙を読んだときのことである。

そのとき留学したい気持ちもあった。でも幼馴染の穂乃果達や、sのみんなと別れたくないという気持ちもあり、一番の幼馴染の穂乃果に相談することすらできなかった。だが、穂乃果が引き止めてくれたおかげで自分は今こうしてまだ日本にいる。

ことりはあのときの自分と同じ焦り、動揺をマシユも今感じているようにその表情から伺えたのだ。

「あ、まだ話は……はあ……」

マシユが電話を終えたのを確認するとことりはマシユの方へと歩き始めた。

「マシユちゃん……」

「あつ、ことりちゃん……」



そして、ことりとマシユの距離はゆっくりとどんどん縮まっていった。

~~~~~♡~~~~~

アイドル研究部、部室……

「よし、これで送信つと……」

「お義兄ちゃん、何してるの？」

「ん？これだよこれ。これでライブ来てくれてありがとうって呟いたんだ」

ナオキが何をいっているのか気になっていた亜里沙に、ナオキはスマホの画面を見せた。それは情報発信ツールのアプリのホーム画面であった。ナオキはそのアプリを使って今日のライブに来てくれたファンのみんなへのお礼のメッセージを呟いた。

実はこのツール、μs時代からメンバー全員が使っており、みんな日常でのことやライブなどのことをそこで呟いていたのだ。

余談だがナオキと絵里が付き合っているというのはここから全国に広まっていったのだ。

「反応は返ってきたの？」

「ああ、『1曲だけでしたがとても充実しました！』とか『これからの活躍期待してます！』とか来てたぞ」

「おお、好反応だね！」

ナオキがその眩きに反応したファンの人のコメントを読み上げると穂乃果はとても嬉しそうに目をキラキラとさせた。

すると静かに部室のドアが開いてことりとマシユが入ってきた。みんなそっちの方を見たが、マシユの浮かない表情を確認すると何事かと顔を傾げた。

部室には少し重い空気がたちこんでいた。

「……………何かあったのか？」

ナオキはそのみんなが口を開くのを戸惑っている重い空気の中、マシユのその表情の理由を聞いた。

マシユはその理由を言うことに抵抗感を見せたが、隣にいたことりの後押しによって

腹をくくった。

「あの、実は私……………」

ことりはそんなマシユを見守る様に見つめ、その他のみんなはじーつと何かを言おうとするマシユの顔を見つめた。

「実は私……………マシユ・ライトは急なのですが、11月にカナダに帰ることになりました……………」

「……………は？」

各々がマシユの告白に啞然とする中、ナオキは急な告白に戸惑うかのような声を漏らした。

「嘘……………なんで？」

瑞希は両手で口を押さえ、目を開いて信じられないという表情をしながら言葉を発した。

「本当は来年に帰ると聞かされていたのですが、さつき父から連絡があつて、11月にカナダにある会社に帰ることになった……と」

みんなマシユの言葉を静かに聞いていた。

いや、みんななんと声をかけたらいいのかわからずに言葉を発することができなかった。

だがこいつは違った。

みんなが静寂する中、ナオキは大きな音をたてて立ち上がった。

「マシユ、家の場所教えてくれ」

「な、なんで……」

「決まつてるだろ……マシユのお父さんに言ってマシユを日本に残してもらおう……!」

ナオキの抑えきれない気持ちを重ねた声にみんなが驚きの声をあげた。

「無茶よ、よしなさい」

「そうですよ。それにマシユを1人残すなんて到底お父様が許すとは思えません!」

「そんなのやってみなくちゃわかんないだろ!」

興奮しているナオキを真姫、海未が止めようとしたがナオキは止まらなかった。

「もう大丈夫なんです。仕方ないんです……もう……」

「仕方ないわけないだろ！」

「つ……ナオキ、くん……？」

「そんなの、そんなないだろ！だって、マシユはまだ、スクールアイドルを知ったばかりで、みんなでスクールアイドルを始めたばかりじゃないかつ……！そんな、こんなすぐに……！」

「ナオキくん……！」

みんなナオキの言葉を否定する気なんて起きなかつた。

ナオキはマシユが4月にスクールアイドルのライブを初めて見て、憧れたときからマシユを知っていた。

マシユは初心者ながらみんなに負けないように頑張り、今日やっとスタートをきったところなのだ。だが、マシユが急に11月に日本を、Shooting Starsを離れてカナダに帰ってしまうことになった。ナオキが止めない理由などそこには存在しないのだ。

「本当は私も離れたくありません。だって、まだみんなとスクールアイドルを始めたばかりで、これから頑張ろうって思ったんです」

「だったら尚更……!」

「でも、私には残ることができません。父は私を一人置いていくことなんてしてませんし、私も家族とは離れたくありませんから……」

「だったら、スクールアイドルはどうするんだよ……マシユはあんなにスクールアイドルに憧れていたじゃないか!」

「ちゃんと続けます。例えば Shooting Stars のメンバーではなくても、カナダでスクールアイドルをしていこうと思います」

マシユは涙を目に浮かべながら笑顔を浮かべてそう宣言した。

「……………後悔、しないか?」

「しません」

ナオキはそんなマシユの表情を見つめて興奮している気持ちを抑えた。そしてことが留学しそうになったときのこと、みんなで考えて、s は終わってもスクールアイドルは続けると宣言したときのことを思い出して口元を緩めた。

「……………そうか。マシユがそう言うなら……仕方ないな」

「ナオキくん……!」

みんなはナオキがマシユを止めることを辞めたことを確認し、ホッと安心したように息を漏らした。

「マシユ、絶対スクールアイドル続けるんだぞ。約束だ」

「っ……はい！」

するとナオキは優しくそう言って右手の小指をたててマシユの前に出した。マシユはそれを見て同じく右手の小指を立ててナオキの指に絡めて、所謂指切りげんまんをした。

「じゃあ、マシユのお別れライブするにや〜！」

凜の言葉にみんながやる気を見せて「おー！」と言うとマシユは驚いた表情を見せていた。

「当たり前だろ？ Shooting Starsのマシユの最後と、これからのマシユの活動を応援するためのライブ」

「っ……はい！」

マシユはみんなの気持ちが嬉しくて涙を流した。それを見たみんなは笑い声をあげて、近くにいたことりはマシユの涙をハンカチで拭いた。

そしてナオキはそんな光景を見てこう思ったのであった。

——マシユが体調を崩してあの日に学内見学をしたのは運命だったのかもしれない……と。

なお、ナオキがマシユが指切りげんまんをしたことを凜が絵里にチクったことにより夜に嫉妬した絵里から無視され続けて、ハーブレイクありふれた悲しみありふれた痛みとしたことはまた別のお話。

「辛い」

ゴールまでの一歩

第150話「変わらぬ日常を変える日」

——ここまで再会し、付き合ひ、そして婚約したナオキと絵里。

そこまで至るまで様々な道を歩んできたナオキと絵里。

時にはぶつかり合ひ、時には甘い時間を過ごしてきたナオキと絵里。

そんな2人の関係は……

ついに、ゴールへと向かい始める。

ラブライブ！〜1人の男の歩む道〜

ゴールまでの一歩

午前6時……

「ん、ああ……?」

ナオキは連続で同じ音を流す目覚まし時計の音で目を覚まし、まだ目が覚めきつていなさそうな声をあげながら目覚まし時計のアラームを止めた。

午前6時10分……

「おはよう」

「あ、おはよう! 今日もいい天気よ」

リビングに入るとお弁当を作っていたエプロン姿の絵里が笑顔で出迎えた。そして机の上には朝ご飯であるトーストとバターが用意されていた。

ナオキはお湯を沸かし紅茶のパックが入っているコップにお湯を流し込んでから席についた。

「いただきます」

「はいどうぞ」

そしてナオキはトーストにバターを塗って朝ご飯を食べ始めた。
亜里沙は少し遅れて起床して朝ご飯を食べ始めた。

午前7時……

『本日は各地快晴となるでしょう』

「はい、これナオキと亜里沙のお弁当ね」

「ありがとう」

「ふあひいふあほおーほおふえーひゃん（ありがとうーおねーちゃん）」

「亜里沙、口に物を入れながら話したらダメよ？」

「んっ……はーい！」

今日もこの3人は笑顔である。

午前7時30分……

「それじゃあ行つてきます」

「行つてきまーす！」

「行つてらっしやい。気をつけてね」

「絵里もな」

ナオキと亜里沙は大体いつも絵里より先に家を出る。そして行く際のキスをしたいたがその気持ちを抑えているナオキと絵里であつた。

絵里はまだ夏休み中のため家で留守番だ。

「なんで数学で抜き打ちテストがあるんだ!」「なんで数学で抜き打ちテストがあるの!？」

「あはははは……」

「はあ……」

そう、先程の授業は数学。そしてその数学で抜き打ちテストが行われ、見事にナオキと穂乃果が撃破されたのであった。

絶望しているナオキと穂乃果を見てこどりは苦笑いを浮かべ、海未はため息を漏らしていた。

そのとき、チャイムが鳴ってみんなが不思議そうにスピーカーを見つめた。

「香川くん、香川ナオキくん。至急、理事長室まで来てください。繰り返します——」

「……………は？」

そしてみんなの視線はそのアナウンスを聞いてスピーカーからナオキの方に向いた。

「ナオキ、あなた一体何をしたんですか!？」

「違つ、おれは何も……」

「お母さん……理事長から直々の呼び出してそんなでない事だよ？」

「まさかナオキくん……」

「だから違うつて！」

「いつかやるつて思つてました」

「おい誰だ今言つたの！」

海末やことり、穂乃果やクラスメイトからも心配されたりして、それに反論していたナオキだが、むっっちゃ焦つてる。

そしてナオキはある結論に至る……

「待てよ、まさか数学の成績悪すぎて卒業が危ういから……とか？」

「「なるほど」」

「つて、納得するな！」

「とにかく、早く理事長室に行つた方がいいよ！」

「そ、そうだな……行つてくる」

ナオキは穂乃果の言葉を聞いて、みんなにその姿を見られながら理事長室へと向かった。

くくくラブライブ！くくく

「つたく、なんだよみんなジロジロ見てきて……」

ナオキは理事長室に向かいながら、その道中にいた生徒からある意味注目されたことに対しての愚痴を零しながら歩いていった。

そして理事長室前に着くとその扉を緊張した面持ちで見つめた。

「……………理事長室ってこんなに威圧感あったっけ？」

ナオキは妙な威圧感を放っている理事長室の木製扉を見つめて固唾を飲んだ。

（くそつ、止まるんじゃないやねえぞおれ。男だろ！男なら覚悟を決める……………！）

そしてナオキは勇気を振り絞ってその扉をノックした。

「はい、どうぞ」

「し、失礼します！」

ナオキがドアを開けると理事長であるすずめが奥にある机に両肘をつけて手を組んでいた。その表情に笑顔はなく、深刻なものであった。

「わざわざ呼び出してごめんなさい」

「い、いえ。それで……なんの御用で？」

ナオキは机の前にピシツとした姿勢で立ちすずめの目を見た。その目に若干の恐怖をも覚えていた。

「やはりあなたには連絡が入っていないみたいね……」

「え……？」

すずめの言葉にナオキは驚きの声を漏らした。

そしてすずめは一旦目を瞑り、再び目を開いて言葉を紡いだ。

「来月末に会議が決まったわ。ついに最終段階よ。音ノ木坂学院の共学のためのね」

「っ……本当ですか!？」

ナオキはすずめの言葉に驚いて嬉しそうに言った。

ナオキは共学化を叶えるための試験的な生徒、模擬男子生徒として音ノ木坂学院に入学した。そして今まで自分の経験を活かして、男子が元女子校で過ごすにあたっていいこと、悪いことをまとめて報告したりまとめたりしていたのだが、最終的には先生や音ノ木坂学院を支援している人、同窓会会長などの前でプレゼン、会議をして共学をする

か否かを決めなければいけないのだが、その会議の日程がついに来月末、10月の末だということが決まったのだ。

「だからこれからはそれに向けての準備などをしてもらうことになるわ。あと少しだけ
どよろしくね」

「はい！（よかった、卒業が危ないとかの話じゃなかった……）」

ナオキは会議が決まったことと、成績の話ではなかったのと二重の意味で安心した。

「あと、音ノ木坂学院の模擬男子生徒ということに自覚を持って、その……もう少し成績
を上げましょうか。特に数学……」

「あ、はい……努力します……」

訂正、成績の話もありました。

「会議が決まったの!?!すごいーい!」

「おめでとうございます!」

「ああ、ありがとう」

教室に帰って会議が決まったことを話すと、ことりと海未はそれを喜ぶと同時にこれ

「へえ、やつと決まったのね」

「ああ、絵里にも協力してもらってたし決まってよかったよ」

家に帰り、ナオキが入学したての頃から共学のための活動に協力してもらっていた絵里に会議が決まったことを報告すると、絵里は嬉しそうにそのことを祝福した。

「でも本当の勝負はこれからよ？ 決して気を抜かないでね」

「ああ、わかってるよ」

ナオキはそう言うのとコップに入っていた冷たいお茶を飲み干した。水分補給、大事。

「ということとで……！」

「ひっ……!?!」

ホットしたナオキであったが、絵里がドシツと机の上に置いた本の音に恐怖の声を出した。

「さ、数学の本買ってきたからこれで勉強してね」

「えつと……『馬鹿でもわかる優しい数学』、『馬鹿と数学と過去問』、『数学の基礎は算数にありー有名進学塾の数学教師が熱血解説ー(特典DVD付)』……oh……」

つまりナオキは馬鹿と言われているのだ。恋人から。強く生きて……！

と、そこでナオキのスマホに着信が入り、そのバイブでスマホが揺れた。

「あ、電話だ。ちよつと席外すぞ」

「はいはい……（逃げたわね）」

ナオキはそのスマホの画面を見るとリビングから出てドアを閉めてその着信に出た。

「もしもし？ どうし……」ナオキ早く大阪に帰ってきて……は？」

ナオキが電話に出ると女性の焦った声がナオキの耳に入った。ナオキは急すぎて意味がわからなかった。

「だから、大阪に帰ってきて！ 早く！」

「だからなんでだよマ……お母さん……」

その電話の相手とはナオキの母親の樹木いっきであった。

「理由はこつちに来てから話すからとりあえず早く来て！ あ、絵里ちゃんと一緒にね」

「え、ええ……」

ナオキはその無茶振りとも取れる樹木の言葉に言葉を失った。

ナオキも急に大阪に帰ってこいと言われて「おう帰る帰る」とは言えないのである。

第一、もう授業も始まっている。高校生のナオキには厳しいと言えよう。

「いや、でもね、おれには授業という名の学生の宿命がありましたね」

「大丈夫！ すずめちゃんには伝えてあるから！」

「……………」

樹木がすずめに許可を得たという衝撃の事実にはナオキは無言になるほかなかった。

自分の通っている学校の理事長がそう言っているならば仕方ないと、ナオキはほぼ呆れた感情を含めて返事をした。

「わかったよ。絵里にはおれから説明するから」

「それじゃあ待つてるからね！明日、楽しみに待つてるわ！」

「は、明日って!?!…………切れた」

ナオキは通話が終わって待ち受けになっているスマホ画面を呆然と見つめ、しばらくすると肩を落としてため息をついた。

「明日って…………」

大阪に帰ってこいというだけで急だったのに、明日に帰ってこいとはさらに急な頼み事にナオキはお疲れのご様子である。

「じーっ…………」

「ん、どうした亜里沙？」

ナオキは何故か自分を見つめてくる亜里沙を見て不思議に思っ首を傾げた。

「えいえい…………お、怒った？」

すると亜里沙はナオキが怒らないか気弱そうに心配しながら少し目をうるうるとさ

せ、若干首を傾げて、ナオキのお腹を軽く叩いてそう言った。

まさにそれは天使……（合掌）

「怒ってないよ」

ナオキはそんな亜里沙を微笑ましく思いながら優しい笑みでそう言った。

「えいえい。怒った？」

「……………」

そして今度は絵里がナオキの背を亜里沙と同じように叩くと、ナオキは黙り込んで絵里を見つめた。

ある程度予想はついているだろうが、このときナオキは死に近い体験をしていた。絵里の死んでしまうほど脅威的な可愛さに天にも登る思いをしているのだ。

（ご飯10杯はいける……）

（私なら20杯いけます！）

（花陽は黙つとれ……）

「あ、あれ、本当に怒っちゃった？」

「……………はっ!? いやあ、ごめんごめん。怒ってないよ」

ナオキは意識を取り戻したようにハツとして今にも泣きそうな絵里の頭を優しく撫でた。

「そう……よかったわ。ご飯、出来てるわよ」

「はい」

そしていい匂いが漂っているリビングに絵里と亜里沙がひと足先に入ると、ナオキはそつと手にまだ持っていたスマホの画面を見つめた。

「……よし、また見よう。グッジョブ、おれ」

そしてナオキはその電源を切ってポケットにしまい、リビングへと入っていった。
え？ナオキのスマホになが映ったか気になる？

それは超可愛いマジ天使マジ女神KKE恋人絵里の「怒った？」が動画で撮られていたのだ。いつの間にか録画ボタンが押させていてフォルダに保存されていた。

因みにこれは故意ではない……恋だけに、ね！（超全開のドヤ顔）

~~~~~♡~~~~~

「荷物はこれぐらいでいいかしら？」

「ん、いいんじゃないか？」

絵里とナオキは明日の出発に向けての準備をしていた。

2人とも滞在期間は何日かは知らないがそれほど長くはならないと思ってるので、持っていくものはせいぜい貴重品や着替えなどである。

「あ、化粧品洗面台だったわ。ちよっと取ってくるわ」

絵里はそう言つて部屋から出て洗面台に向かった。

ナオキは部屋のドアが閉まると机の引き出しから黒色のクリアファイルを取り出して、中に入っている”紙”を見つめた。

(ま、ちようどよかったかな……)

そしてナオキはその紙をまたファイルの中になおして、そのファイルを持っていくカバンの奥の方に入れた。

ナオキと絵里、2人の物語の舞台は一旦大阪へ……

次回に続く……



## 第151話「帰省」

——新大阪駅。

「帰ってきてしまった……」

「新幹線の中で言ったこと覚えてる？」

「はい、勉強になりました」

大阪に着いたナオキは二重の意味で疲れていた。

まずは本当に学校を（理事長公認で）サボって大阪に帰省してしまったこと。それと新幹線の中で絵里にガツツリ数学を教えて貰っていたこと。そして新幹線の長旅での疲れである。……あ、三重か。

「なあ、流石に家に着いたら勉強はいいだろう？」

「そうね……考えておくわ」

「……………え？あの、それは……………」

「さて、お義母様はまだかしら？」

「絵里さん、聞いてますか!？」

「そう言えばお義母様とは最近会ってなかったわね。ナオキ、探して」  
「つたく、しようがねくな。え〜つと……」

絵里はキョロキョロしてナオキの母親がまだ迎えに来ていないか確認したが、ナオキの方がわかるからとナオキにバトンタッチした。

ナオキは髪の毛を掻きながら母親を探すためにキョロキョロした。

「あ、いた」

「どこ?」

「ここちちに来てる人」

絵里はナオキが指差した方をじーっと見つめ、こちらへ向かってくるある人影を見つけて慌てて髪や服装を気にした。

「嫌な予感しかない……」

「え、どうして?」

—— 刹那。ナオキの体は締め付けられるような感覚を感じた。

いやまあ、本当に締め付けられてるんだけどね、母親に。

「ナオキ〜! 会いたかったわよ〜!」

「痛い! 痛いから離してくれっってお母さん!」

「あつれえ〜おつかしいわね〜? 私の知ってるナオキは私のこと”ママ♡”って呼ぶん

「だけどなあ〜」

「この歳にもなつて呼ぶか！」

「はっ……!!?これが噂に聞く反抗期……!!?」

「親離れです」

「ママ悲しいわ……およよよよ」

「あとそろそろ離してくれないですかね。その、周りの視線が……気になるから」

「そうね、ごめんごめん」

ナオキは母親がやつと離れると大きく息を吐いて滴る汗を拭いた。

香川<sup>かがわ</sup> 樹木<sup>いっき</sup> ナオキの母親で、大阪府警本部長であるナオキの父、香川 トウマの秘書を務めている。父親は元々警視総監という警視庁の長であつたが部下の失態の責任を負つて大阪府警本部長に降格……とは表向きの理由で、トウマは昔優秀な警察官で様々な難事件を解決に導いて来たこともあり、大阪で多発している麻薬取締、凶悪犯罪を解決するために大阪府警に派遣されたとあうのが本当の理由なのである。

「お久しぶりです。 絢瀬絵里です」

「え、嘘!?!本当にあの絵里ちゃん!?!久しぶりね〜!こんなに可愛くなつて〜!」

「あ、ありがとうございます……」

絵里は樹木に褒められて頬を少し赤くした。

「ナオキも隅に置けなくなつたわねこのこの」

樹木はニヤニヤしながらナオキの胸のあたりを肘でつんつんと突いた。ナオキは鬱陶しく感じているような表情を終始浮かべていた。

「べ、別にいいだろ！ さ、早く帰ろうぜ」

「はいはい、そんなに焦らなくても大丈夫よ。さ、行きましようか」

そしてナオキと絵里は合流した樹木と共にナオキの実家へと向かうのであった。

——香川家。

「ただいま」

「お邪魔します」

「はい、おかえりなさい。ご飯にする？ お風呂にする？ それとも……え・り・ちゃん？」

「きやつ」

「はあ……」

ナオキは実家に帰って早々母親のジョークを聞かされて大きなため息を吐いた。

「さて冗談はさておき、とりあえず部屋まで案内するわね」

「おれ達はどこで寝たらいいんだ？」

「元ナオキの部屋よ。物は全部片付けてあるから広いし、2人ならゆつくり出来るわよ」  
「わかった。それじゃあ荷物先に置いてくる」

「私も行く」

「ごゆつくり〜」

ナオキと絵里は樹木に見送られて2階にある、ナオキがこの家に住んでいる時に自室として利用していた部屋に向かった。

「懐かしいな、この部屋」

「ちゃんと布団も用意してくれてるわね」

「とりあえず荷物置いてゆつくりしようぜ。なんで帰省してくれって言われたのかわからないけど」

「そうね」

絵里はそう言つて荷物を置くとカバンの中からある本を取り出した。ナオキはそれを見ると危機感を感じた表情をした。

「暇なら今のうちに勉強しておきましょうね」

「あ、そうだ！久しぶりにお母さんに会つたし、お話したいからリビングに行こうか」

な」

「逃がさないわよ？」

「お、お許しを〜！」

それから夕方までナオキはみつちりと絵里から数学を叩き込まれたのであった。

——夕方。

「お、ナオキ。本当に帰ってきてきたのか」

「お父さん、その言い方はないと思う」

「だって樹木が寂しいからナオキを呼び戻すって言うてて、俺は冗談だと思ってたんだよ」

「よし、お母さんと話そう」

「その前にこの問題を解く！」

「は、はい……」

「お久しぶりです、絢瀬絵里です」

「おお、あの絵里ちゃんかい!? 美人になったねえ〜。しかもナオキを尻に敷いてるとき

た！これは傑作だ！」

帰宅してきたナオキの父、トウマはガハハハハツと大笑いした。ナオキはそんな父親の態度に歯を食いしばながらも数学の問題を解いた。

「じゃあ俺は先にリビングにいるから、勉強が終わったら降りて来なさい」

「はい、ありがとうございます」

トウマはそう言うのと部屋のドアを閉めて階段を降りていった。

「おい樹木〜！ナオキは絵里ちゃんとイチャイチャしたいらしいから先にご飯食べてよ  
うぜ〜」

その大きな声を聞いてナオキだけではなく絵里も大きな音をたてて立ち上がってトウマを追いかけた。そんな2人の顔は真っ赤だった。

「ははははっ、すまんすまん」

「もう、トウマさん。からかうのは程々にしないと」

「それお母さんが言うか？」

「ははははっ、それは言えてるな」





「いや、ないからなく!」

トウマの得意料理であるお好み焼きを食べた後、絵里は樹木とトウマに東京でのナオキのことを話して盛り上がっていた。ナオキは洗い物をしながらその会話に参加した。

「どうかナオキ、洗い物出来たんだな」

「洗い物ぐらい出来るよ。それに料理も出来るし」

「それは本当か!？」

「ナオキ料理出来るようになったの!？」

「ナオキの料理、凄く美味しいんですよ」

「いいなく私も食べてみたい」

「また時間があればな」

ナオキは言葉ではそう言っていたものの、両親から褒められたことに照れていた。絵里はそれがわかってクスクスと静かに笑った。

「絵里ちゃん、他にも聞かせて!」

「はい、えっとこれは——」

「まだ続くのか……」

それから絵里がまた東京でのことを話し出すとナオキはため息をついた。

樹木とトウマはとても楽しそうに絵里の話を聞いていた。なにより、自分達の息子が

自分達が見ていないところでしっかりと成長していることを確認出来たととても嬉しく思っていた。そしてそのことをナオキは知る由もなかった。

絵里がお風呂に入っている間、リビングは樹木とトウマ、そしてナオキのみになった。それから3人は何も話すことはなく、ただただゆったりとテレビ番組を見ていた。

だがナオキはどこか落ち着かない様子を見せていて、もちろんそれには樹木とトウマも気づいていた。しかし2人はナオキ自身からその理由を話すのを待っていた。

「あ、あのさ……」

「ん、どうしたんだ？」

「えつと……これ、見てほしいんだけど」

ナオキは少し頬を赤くしながらポケットからある紙を取り出して、スツと樹木とトウマの前に差し出した。トウマはその紙を開くと目を見開いてそれを見つめ、樹木はそれを覗くと両手で口を塞いで目をうるうるるとさせた。

「そういうことだから……よろしく」

ナオキは視線を2人から逸らして少し赤くなっている頬を人差し指で掻きながらそ

う言った。

「……………大丈夫なのか？」

「大丈夫。すっかり心に決めたから」

「そう、なら私達は止めないわ。やりたいことをやりなさい」

「ありがとう……………ママ、パパ」

ナオキが照れくさそうに言うのと樹木とトウマは嬉しそうに笑った。そうして家族水入らずの時間はすぐに過ぎていった。

絵里はナオキ達に気を使っていつもより長めに湯船に浸かっていた。そして天井に左手をかざして、その手の薬指をぼーつと見つめた。そのとき思い出していたのはナオキにプロポーズをされた時。すると絵里の頬がポーつと赤くなった。それはのぼせたのか、それとも……………？

「つ……………そ、そろそろ出ようかしら」

そして絵里は慌てて湯船から上がった。

髪の毛や体に付いている水滴もしつかりと丁寧に拭き取ってからパジャマに着替えた。それから、ナオキの両親からどう思われるかを気にしているのか、自分の体の匂いを嗅いでからリビングへと向かった。

「お風呂ありがとうございま——」

「——うん、ビールが美味しい！」

「ナオちゃん、ビール持ってきて〜」

「だからもうその辺にしとけて！飲みすぎだ！」

「え、えつと……」

リビングに入った絵里はその場の状況が飲み込めずにいた。トウマと樹木はビールを片手に何やら騒いでいて、その前に座っているナオキは2人を叱っている。訳がわからない。

「つたくもう……絵里、出たんだな」

「うん、次入る？」

「そうするよ。この2人に構うのがめんどくさくなったら先に部屋に戻っていいから」

「ひっどーい！」

「それが親に対して言う言葉か！」

「はははは……」

ナオキはそんな酔った両親の言葉に反応することがダルそうに思いながら風呂場へ

と向かった。絵里はそんな光景に苦笑いを浮かべながらリビングのドア付近に立っていた。

「絵里ちゃん絵里ちゃん、こっち来て」

「え？あ、はい……」

ナオキが風呂場に入ったことを音で確認した樹木は小さな声で名前を呼んで絵里を自分の方に来るように手招きをした。絵里がこちらに来て向かいの席に座るとトウマと顔を合わせて頷いた。

「絵里ちゃん、ナオキとは上手くいっているかい？」

「は、はい……」

「そうか、それはよかった」

「ナオちゃん、迷惑ばかりかけてるでしょう？」

「い、いえ、そんなことは。いつも色々助かっています」

「ナオキの勉強も見てくれてるんだらう？つたく、情けない」

「それは……まあ」

「ふふつ、ナオちゃんはずっと理系科目は苦手だったから。私達とは大違いね」

「おふたりは理系科目が得意なんですか？」

「ああ、そうなんだ。不思議だよなあ……」

「任せてください！私がナオキを理系科目でいい点数が取れるように鍛えます！」  
「それは助かるな！」

「そうね〜」

樹木とトウマはビールを飲みながら絵里とナオキのことを話した。絵里は時々頬を赤くしたりしていて、樹木とトウマはナオキの話を聞いて盛り上がっていた。絵里もそんな2人のテンションにつられ、つつい沢山ナオキのことを話してしまった。

「さ、そろそろ部屋に行つた方がいいんじゃないか？ナオキがこの光景を見たらなんて言うか」

「そ、そうですね」

「……………あ、そうだ」

絵里が立ち上がって自分達が寝る部屋へ向かおうとすると、トウマは何かを思い出したかのように絵里を呼び止めた。

呼び止められた絵里はキョトンとしてトウマを見つめた。するとトウマと樹木は先程とは打って変わって真剣な表情をして絵里の顔を見つめた。

「……………ナオキはいつも強がつているけど、本当は誰よりも心が弱いんだ。辛いことがあればすぐ抱え込んでそれを周りに察しさせないようにする。そして誰よりも落ち込んだりしてしまう。あの子は誰かが支えてやらないといつか自分で自分を壊してしまう。」

だから絵里ちゃん、ナオキのこと、よろしく頼むよ」

「私からもお願いするわ。あの子はきつと、近くに絵里ちゃんがいるだけで安心すると思うから」

「……………はい、任せてください」

トウマと樹木からそう言われると頬を赤くして少し嬉しそうに絵里は頷いてリビングを出ていった。そんな絵里を見送った2人はゆつくりとビールを飲むのであった。

「……………幸せなやつだな」

「ええ、あのときからこうなることを望んで育ててきた……………それが叶ってよかったわ」

「そうだな……………」

トウマと樹木は懐かしむように、だかどこか寂しそうに“あのとき”を思い出しながらビールを喉に通した。

そしてそんなナオキの久しぶりの帰省の初日はあつという間に終わりを迎えた。

豆電球をつけていて少し明るい部屋の天井を両手に頭を乗せながらじーつと見つめているナオキはあることを考えていた。隣から絵里の寝息が聞こえていて、度々その寝顔を見つめて幸せそうな表情をした。だが、その幸せそうな表情の裏には少しの不安が

あった。それはほんの小さな不安だった。だがそんな小さな不安も時間が経つ事にどんどんと広がっていき、ナオキの心を染めていった。

その不安とは――

(おれは、本当に絵里を幸せにできるんだろうか……………)

次回に続く……………



# 第152話 「ナオキの何分かかるかわからないクッキング」

「ん、朝か……」

翌日、ナオキはスッキリしたように目を覚ました。それは久しぶりに充分な睡眠を取れたことが本人にもわかるような感覚であった。

ナオキはふと隣に目を向けると絵里はいなかったため、とりあえずリビングに向かった。

「あ、やっと起きたわね。何時だと思ってるの？」

「え、もうそんな時間なのか？」

「時計見てみなさい」

ナオキはリビングでクーラーにあたっていた絵里に言われて、壁にかかっている時計に目をやった。すると時計の針はてっぺんにふたつの針が重なりかけていた。

「もう12時じゃん……」

「本当よ。お義母様かあが用意してくれていた朝ご飯も昼ご飯になっちゃったわ」

「……すいません」

ナオキは渋々絵里に頭を下げると、机に置いてあったラップがさかれているお皿をレンジで温めた。そのお皿の上には目玉焼きとベーコンが盛られていた。そして温めが終わるご飯をお茶碗に盛ってからそれらを持っていき席について昼ご飯を食した。

この時間にもなれば樹木とトウマも仕事に行っているためこの家には不在だ。そのためこの家にはナオキと絵里の2人だけ。2人は毎日するような会話をして盛り上がっていて、特別何かあるわけでもなく時間だけが経過していった。

「なあ、絵里」

「なに？」

「……なんでおれ達って大阪に来たんだ？なんでおれは帰省することになったんだ？」

「さ、さあ……？」

絵里もナオキの質問に首を傾げる。こういう時間を過ごしているとそう思いたくなくなるのも仕方がない。そして2人はどこかそわそわした気分にもなっていた。

「落ち着かない……」

「そ、そうね……」

「……ちよつと出かけるか？」

「いいわね、散歩！行きましよう！」

「よし、じゃあ準備するか！」

ナオキは早速立ち上がって部屋に行き、パジャマから普段着へと着替えた。絵里はナオキを部屋から追い出してから私服に着替えはじめた。

「絵里遅いなあ……」

ナオキは玄関で靴を履いて暇そうにしながら出かける準備をしている絵里を待っていた。ナオキ自身、こんなことは何度か経験しているため「いつものことか」と割り切つて待っているのだが……

「慣れないよなあ……」

ナオキはそういうと両手を床につけて天井を見上げてため息を吐いた。

—— 20分後

「お待たせ〜」

「やつと来たか……さ、行くか」

絵里がやつと来るとナオキは立ち上がってから背筋を伸ばして、絵里が靴を履き終わると2人は家を出た。

ナオキと絵里は特に行き先もなくナオキの実家がある街を歩いていた。住宅街はとも落ち着いていそうな雰囲気だが、商店街の方に進むと賑やかな声が聞こえてきて活気がある街だと感じる。

「あら、もしかして香川さんところのナオキくん？」

「はい、そうですけど……」

「あ、やっぱり!? 大きくなったなく! 私のこと覚えてるか?」

「……………あつ、もしかして喫茶店のおばちゃん!?」

「そうそう、覚えててくれたんやね〜」

しばらく歩いたところでナオキに声をかけたのは、住宅街の中にある喫茶店の人であった。この人はナオキのことを小さい頃から知っていて、よく休日に樹木と来ていた時に良くしてもらっていた。さらにナオキが懐いたので樹木やトウマがいない間

には預かってもらったりもしていて、香川家にとつてはとてもお世話になっていた人なのである。

「あら、そちらの方は？」

「はじめまして。絢瀬絵里と申します」

「一応おれの彼女だよ」

「ええ、そうなん!?!あの小さくて可愛かったナオキくんが彼女をね……おばちゃん嬉しいわ」

「その話はしないでくださいよ」

「でも確か東京では頑張ってるんやよね? 樹木ちゃんからは話聞いとるよ」

「またあの母親は……」

ナオキは近所の人に自分のことをペラペラ話す樹木の姿を想像しておデコを右手の親指、人差し指、中指で押さえた。絵里はそんなナオキを見ながら同情していたが口からは苦笑いの声しか出なかった。

「久しぶりにお茶でもしていく? ちようど暇やったのよ」

「ほんならそうさせてもらいます。絵里もええよな?」

「……………ナオキ、関西弁戻ってる」

「……………ほんまに?」

「ふふっ……行きましようか」

そして喫茶店のおばちゃんの誘いでナオキと絵里はその喫茶店に入って休憩することにした。ナオキはおばちゃんと話しているうちに関西弁が戻ってしまったが直ぐに治った。ナオキだけに。

~~~~~

サインを描いて喫茶店を出たナオキと絵里は商店街の方に向かって足を進めた。さつきも聞こえてきていた活気ある音は、商店街に近づくにつれてより大きく聞こえてきた。

この商店街にはナオキも昔はよく樹木と一緒に来ていた。ナオキは商店街の入り口、雰囲気はどこか懐かしさを感じていた。そして様々な店の呼び込みを懐かしそうに聞きながら目的のお店に向かった。

「ナオキ、なにか買うの？」

「ああ、折角だしお母さんとお父さんにご馳走しようと思つてな」

「へへ、なにを作るか考へてある？よかつたら手伝うわよ」

「ありがとう。実は、”あれ”を作ろうと思つてな」

「あれ？」

ナオキが絵里に”あれ”の正体を教えると、絵里は「ハラショー！」と両手を合わせて言った。思い立ったが吉日、2人は早速その料理の材料を買いに色んなお店に向かった。

——夕方。

「さて、作るか！」

ナオキの母親と父親がそろそろ帰つて来るであろう時間に向けてナオキは絵里の監

修の元、あるものを作り始めた。

まずは味の素と本だしで作っただし汁に、小麦粉と卵と山芋を混ぜて生地を作る。

「生地から作るのね〜」

「ああ、これは生地から作るのが一番美味しいからな」

「確かに。イチから作るのは面倒だけど、だからこそ美味しい料理が出来るのね」

「その通り！」

そして次は4分の1に切ったキャベツをみじん切りにする。

しかしこのナオキ、みじん切り初挑戦ともあり少し緊張していた。

「ナオキ、大丈夫？」

「あ、ああ……みじん切りってこんな感じだよな？」

「違うわ、先に芯を落とすの。それからキャベツを縦にしてから千切りをするの」

「みじん切りなのに千切り……？」

「……………家庭科の授業受けたことある？」

「い、いやあくあんまり覚えてなくて」

「もう、すっかりしてよね」

「すみません」

ナオキは絵里に怒られながらも芯を落としたキャベツを慎重に千切りにした。絵里

はスピードが遅くて少しイライラしていたが、初心者なら仕方ないだろうと笑みを浮かべながら息を吐いた。

そして次に千切りにしたキャベツの方向を変えて切る。

「それで最後は包丁の先端を左手で固定して、柄を持つている手元を動かして更に細かくしたら完成よ」

「なるほど、そうやればいいんだな！ありがとう」

さらに千切りにしたキャベツを更に細かく切り刻む。

トントントントン……と包丁が木のまな板との音が心地よく感じながらナオキは手を動かした。

「——よし。あとはキャベツと生地を混ぜるだけ……」

最後に前もって作っていた底が深い鍋に入っている生地とみじん切りにしたキャベツを混ぜ合わせる。

さあ、みなさんご一緒に！

——レッツ・ラ・まぜまぜ〜！

「ハラショー！完成ね！」

「ああ！さて、次はホットプレートとの準備だ！」

続いての作業はホットプレートに移行する。ホットプレートにお肉を3枚ほど並べてそれを両面焼く。今あるホットプレートの大きさに3つ分のスペースがあるのでさらに6つのお肉を並べた。

そして先程作った生地を円形になるようにお肉に乗せる。これであとはちようどいい具合に焼けるまで待つだけ。

——さあ、これは何を作っているのでしょうか！正解はこのあとすぐ！

——ガチャ

「ただいま〜」

「お、ちようどいいところだ」

「ごめんなさい。すぐにご飯作る……あら？」

ちようどナオキが焼いていたそれをひっくり返した時、トウマと樹木が帰ってきてリビングの扉を開けた。

「おつ、この匂いは……!」

トウマはリビングに入るなり、ナオキが焼いていたものの香ばしい匂いに反応して鼻をピクピクとさせた。

——お分かりいただけただろうか？

ナオキが作っていたのは関西名物、いや、大阪名物と言ってもいい、大阪に来たならこれを食べなきゃ損!

その名は……君の名は——!

「そう、お母さんとお父さんが好きな”お好み焼き”だよ」

「ナオキが生地から作ったんですよ」

「そうなのか!? 凄いいじゃないか!」

「いつの間にそこまで料理ができるようになったの? ママ嬉しいわ〜!」

「ちよつ、引っ付くなって!!」

樹木が嬉しそうに自分の頬でナオキの頬をスリスリとすると、ナオキは恥ずかしそうに樹木を突き放そうとしていた。

「もうそろそろじゃないのか？」

「あ、そうだった。……よっ！」

ナオキは仕上げにいい具合に焼きあがったものをひっくり返した。これで好み焼きの完成だ！

「……美味しそうだな」

「早くスーツから着替えたなら？ そうじゃないと食べさせないよ」

「そうよ、トウマさん。先に頂いてますからね」

「「はやつ！」」

樹木に続いて着替えて席についたトウマを迎え、ナオキは出来上がったお好み焼きをお皿に盛ってトウマに渡した。

——だが実はまだお好み焼きの完成ではない。最後の仕上げが残っている。

焼いている途中、机の上に用意しておいたお好み焼きソースとマヨネーズ。これをお好み焼きの上にかけて、それをスプーンで全体的に広げる。そしてさらに青のりと鰹節をひと掴みずつお好み焼き全体にかける。これらの調味料はお好みでどうぞ。お好み

焼きだけになあ！

「ええ!? ソースだけじゃなくてマヨネーズもかけるの!？」

「ああ、美味しいぞ? 俺ので試してみるか?」

「い、いいの?」

「いいぞ」

「ねえ、ナオちゃん。私達も早く食べていい?」

「あ、忘れてた。では……」

「……いただきます!」

ついに実食の時間。4人は手を合わせて感謝の気持ちを込めながらそう言った。トウマと樹木は「待ってました」と言わんばかりにお好み焼きをひと口サイズにお箸で切ってからそれを口の中に含んだ。

「美味しいう〜う〜!」

「……よかった」

ナオキは両親が自分の作った料理を「美味しい」と言ってくれて嬉しかったのか、安心したように息を吐いてポソツと呟いた。

「さて、じゃあ絵里もこのお好み焼きを……はい」

「えっ、あつ、ありがとう……はむっ……」

絵里は少し戸惑いながらもナオキがお箸で持つているひと口サイズのお好み焼きを口に入れてもらった。そしてそれを口の中でしっかりと味わいながら食べた。

「あらナオちゃんダイタ〜ン」

「はっ!?!」

「親の前で彼女に”あーん”をすることは、お主なかなかやりおるな」

「べ、別にそんなつもりじゃ……」

ナオキはトウマと樹木に”あーん”したことを指摘されたことで恥ずかしくなったのか、頬を赤くして右手人差し指で右の頬を掻いた。

この仕草はナオキの照れた時に見せる癖でもある。それを今でもしているナオキを見たトウマと樹木は「自分達の息子は相変わらずだ」と心の中で呟いて安心したような笑みを互いに浮かべた。

「うん、美味しい!ソースとマヨネーズの合わさった味がしっかり焼かれたお好み焼きととてもマッチしてるわ。それに青のりと鰹節がさらに味を引き立てている……!」
「Oハラショーよ!」

「それはよかった。そっちにもかけるか?」

「かける!」

「はいはい」

絵里もお好み焼きにソース以外にもマヨネーズ、青のり、鰹節をナオキ達と同じようにかけて食べた。そしてナオキは自分のものを食べながら新しいお好み焼きを作り始めた。

みんなも機会があればこの味を体験してみよう！以上、何分かかるかわからないクッキングでした！

~~~~~

———夕食後。

ナオキはお皿などを洗いながらビールで疲れを癒している両親を見て懐かしみを感じていた。ふと先程まで両親が使っていたお皿に目をやると、それにはカスも残つておらず、両親が綺麗に隅々まで食べ尽くしたことがわかった。ナオキにとってそれは嬉しいことでもあったが可笑しくも感じた。

「ふふつ、よかったわね」

「ああ……」

ナオキの付近で洗い終わったお皿を拭きんで拭いている絵里が囁くとナオキは嬉しそうに返事をした。

そして洗い物が終わったナオキは手を拭きながらTVを観て和んでいる両親の姿を見てひと言、本当は声に出したいがその声を喉でクツと止めて心の中で呟いた。

『よかった。これで少しは親孝行できたかな?』

——そして大阪帰省の日が早くも2日目が終わろうとしていた。

次回へ続く……



## 第153話 「共に歩む人」

——朝。

「ナオキ、明日で東京に帰るんだろ？」

「ん、まあ……」

「なら絵里ちゃんも観光でも行ってきたらどうだ？」

「観光か……」

朝ご飯を食べている最中、トウマはナオキと絵里に大阪観光を勧めた。ナオキが考え始めると押し時と考えた樹木は目をキラーンと光らせた。

「例えば道頓堀とか心齋橋とか？」

「通天閣とかも良いかも」

「絵里ちゃんも行きたいわよね!? 観光！」

「は、はい……」

「ならこれが交通費ね。楽しんで来なさい」

「は、はあ……」

樹木からお金が入った封筒を手渡されたナオキはほぼ強制的に絵里と出かけることになった。

——内心とてもはしゃいでいるが。

~~~~~

——新今宮駅。

「着いた〜！」

駅から出たナオキは体を伸ばして大阪の街の空気を吸った。

駅近くには動物園もあり休日には子供連れの人が多い。そこから正面を見ると通天閣を見ることができ、さらに右を向けばあべのハルカスがドンとそびえ立っていて、大阪に来た人は皆「大阪に来たな」と思うことができる。

「あそこまで歩くの？」

「そうだな。絵里には歩きながら大阪の街を堪能して欲しいし」

「ふふつ、ありがとう」

ナオキと絵里は早速大阪の街の景色を眺めながら通天閣に向けて足を進めた。

—— 絢瀬絵里は大阪の街を歩きながら “あのとき” のことを思い出していた。
修学旅行で大阪の街を希と共に観光していたあのときのことを……

『あのーすみません、落としましたよ?』

『あ、ありがとうございます……す……す……』

『え、絵里ちゃん?』

『ナ、ナオキくん……なの?』

「やっぱりここは賑わってるわね」

「そうだな」

ナオキと絵里はいわゆる「新世界」と呼ばれるエリアに足を踏み入れ、相変わらずのその街の賑わいに声を漏らした。

新世界とは、真ん中にそびえ立つ通天閣、通天閣のお膝元で美味^{うま}くて安いB級グルメが勢揃いしているジャンジャン横丁、そして大きなフグ提灯の『つぼらや』の看板などで有名な大阪の下町の名称である。

「折角だし串カツとか食べてみたいわね」

「串カツか。それなら——」

「——串カツならあのお店がオススメやで！」

ナオキと絵里が大阪名物串カツの話をしていると、2人の前に1人のおっさんがある。お店を指差しながらズザザザと滑って登場した。

「あ、やつぱり『八重勝』ですよ」

「兄ちゃん知ってるんか!？」

「そりやあ有名ですからね」

「兄ちゃん、やるな」

「いえ、1年前まで大阪に住んでましたから」

「なるほど、それで……それより、あの店の串カツ食べていきや！」

そう言い残すとおっさんは最初にいたベンチに戻って腰掛けた。

「入るか？」

「ええ、折角だしね」

ナオキと絵里は先程のおっさんから教えて貰った串カツ屋、八重勝に足を運んだ。

「いらつしやいませー!!」

『いらつしやいませー!!』

店内に入ると元気な店員さんの声が耳に入ってきた。この独特な雰囲気は東京では滅多に体験出来ないことだ。

そのお店は全席がカウンター席で、いつもなら行列ができるほど混んでいるのだが今日は珍しく席が空いていた。2人は運が良かったらしい。それでも席は9割ほど埋まっているが。

ナオキと絵里は空いていた席に座った。カウンターにあるガラスケースの中にも串カツなどが並んでいて、店員さんが今も大量の串カツを揚げている。

「烏龍茶と串カツとどて焼きを2人分、あとじやがいもとウインナー、それととり唐揚げを1本ずつ下さい」

「かしこまりましたー！」

ナオキは独断でさつと注文して商品が置かれるのを待った。食べ物が来る前に烏龍茶が置かれ、ナオキと絵里はグラスを合わせてゆっくりと烏龍茶を口に入れた。

「へいお待ち！」

「ありがとうございます」

「わあ〜美味しそう！」

「じゃあ……」

「いただきます！」

2人は置かれた串カツにタレをつけてそれを食べた。無料で置かれているキャベツも串カツと一緒に味わった。

串カツを囓むと油をまとったカツの音、食べている間も聞こえてくる他のお客さんのカツを食べる音、そして今も店員さんがカツを揚げている音が食欲を噴水の水のように湧き出させている。

それからナオキ達は談笑することはなく、ただ無我夢中で串カツを味わった。

~~~~~

その後、通天閣に登って大阪の景色を眺めて（ナオキは相変わらず窓に近づくことはなくずっとビリケンさんと戯れていた）、ビリケンさんの人形焼カステラ、釣鐘まんじゅう、それにアイスクリームをお供に新世界の街を食べ歩きした。

そして歩き疲れた2人は長椅子が置いてあるたこ焼き屋さんを見つけて、そこでたこ焼きを食べながら休憩することにした。

「絵里、熱いから気をつけろよ。はむっ……」

「分かってるわよ。ふー、ふー、はむっ……ん、美味しい！」

「そりやそうだ。本場のたこ焼きだからな」

「おっ、兄ちゃんわかってるね」

「そりやあ大阪出身ですから」

そのたこ焼き屋の店員とも会話しながらナオキと絵里は美味しそうにたこ焼きを頬張った。たこ焼きももちろんそうだが、大阪の人が持つこのフレンドリーとでも言うべきところも大阪のひとつの名物と言えるだろう。

——そんな雰囲気がある時には人を油断させる。荷物を自分の身の近くに置いてあるから大丈夫だと勘違いしてはいけない。危険はいつだってすぐ側にいるのだから。

「っ……兄ちゃん危ない!!」

「えっ……?」

その危険にいち早く気付いたのはたこ焼き屋の店員だった。

だがその忠告は間に合わず、ナオキの鞆は一瞬のうちに盗られてしまった。その犯人はナオキの鞆を抱えて全力で走り去った。

「泥棒や——!!!」

新世界の街に店員の叫び声が響き渡り、通行人はざわざわとし出してお店の方に視線を向けた。



絵里はただ一瞬の出来事に言葉を失っていた。そしてふとナオキのいた方に目を向けたがその場にナオキの姿はなかった。

ナオキは自分の鞆が盗られたとわかった瞬間に血相を変えてその犯人が逃げた方に走っていった。

「……へへっ、上手いこといったな」

「てめえー！ー！！待てやオラアアアアー！ー！！！！」

「えっ……!?」

犯人の男は成功したと思っていたが背後から聞こえてきた声に驚いて走りながらその方向に目をやった。すると鞆の持ち主であるナオキが叫びながら向かってきていた。そして犯人は逃げるスピードを上げた。

どんだんナオキと犯人の距離は縮まってはいたが、その手は犯人に一向に届かない。（あれを奪われるわけにはいかない……あれだけは……!!）

ナオキは内心無理かと思ってしまった。でも諦めきれない。そんな思いが伝わったのか、ナオキの目に飛び込んできたのは騒ぎを聞きつけてその光景を珍しそうに

見ているグローブを持った男の子だった。そしてその子はグローブをはめている逆の手にゴム製の野球ボールを持っていた。

「あ、ちよつと！ボール貸してもらえるかな？すぐに返すから！」

「う、うん……」

「ありがとう！」

ナオキはその少年からボールを受け取ってキツとまだ逃げ続ける犯人の背中を睨みつけた。

そしてナオキは少し助走をつけてボールを犯人めがけて全力で投げた。

そのボールは迷うことなく少し上下に揺れるぐらい速いスピードで犯人の腰めがけて向かった。

「ぐほっ……！」

そしてそれが犯人の腰に命中すると、犯人はその勢いでバランスを崩してうつ伏せに倒れ込んだ。

「よ……！」

—————  
ピ————ツ!!

ナオキはそれを確認すると犯人を取り押さえようと走り出そうとすると、商店街に笛の音が鳴り響いた。その音と同時に警察官が怒号と共にその犯人を取り押さえた。

「大人しくしろ!! 窃盗の現行犯で逮捕する!」

「じつとしろと言っている!!」

「いや、じつとしてるやんけ……」

「……ナイスツツコミ」

ナオキは警察官の言葉に的確なツツコミを繰り出した大阪の人に感激しながらも鞆の無事を確認するために犯人の方に向かった。

「あの……自分の荷物を確認しても?」

「あ、大丈夫です。ご協力ありがとうございます」

「い、いえ。自分の荷物が盗られて必死だっただけで……」

「それと後であそこの交番で少しお話を伺ってもよろしいでしょうか?」

「ええ、構いませんよ」

「では、また後ほど」

そう言つて警察官が犯人を連れてその場から去るとナオキに対して暖かい拍手が周りの人々から送られた。

「あつ、そうだ……!」

ナオキは思い出しかの様に焦りながら鞆の中のあるものを探して取り出した。そしてその中身を見て安心したかのように息を吐いた。

その後借りたボールを拾って先程の少年のもとに向かい、少年の前でしゃがんでボールを返した。

「ありがとう、君のおかげで大事な荷物を取り返せたよ」

「ううん、大丈夫！それよりお兄ちゃんってミュージズの香川ナオキでしょ？」

「え、っ……!?ま、まあ……」

「やっぱり」

少年は最初からナオキのことを見抜いていたかのような口ぶりを見せるとナオキは今日一番の驚きの声を出した。その周りの人の反応を見る限り、犯人を追いかけていたのはXのメンバーであるナオキということをつかっていたようだ。ナオキは東京に帰ってからみんなに何か言われることを密かに覚悟した。

そして少年の頭を感謝の気持ちを込めてポンポンと優しく撫でるように叩くとその場から走ってきた方向へ戻ることにした。

~~~~~

——夕方。

すっかり日も落ちかけていて、夕日が昼間の新世界の街とは違う姿を人々に見せていた。

ナオキと絵里はそんな夕日に向かうように歩きながら今日の出来事を振り返っていた。

「みんなへのお土産も買ったし、先生方のおじさん達のもOK」

「あと亜里沙のもね」

「ああ。亜里沙にもお好み焼き作ってやらないとな」

「ふふっ、きつと喜ぶわよ」

「喜ぶ顔が目には浮かぶよ」

2人は亜里沙がお好み焼きを食べて「ハラショー！」と笑顔で言う姿を想像して幸せそうな笑顔を浮かべた。

——そんな絵里は1つの疑問を持っていた。

それは犯人を追いかけたナオキを見て思ったことだ。確かに自分の荷物を盗られたら必死に取り返そうとするだろう。だがあれほど必死に、それが無ければこの世の終わりにみたいな印象を泥棒を追いかけるナオキの表情から受けた。それは絵里の思い違いなのかもしれないが、ナオキの近くにいたからこそ、彼女だからこそ、婚約者だからこそ直観的に感じたのだ。

「あ、あのね……ひとつ、聞いてもいい？」

「ん？どうした？」

ナオキの実家近く、街まで少し距離があるところに絵里は立ち止まった。ナオキは絵里から少し離れたところに立ち止まる。

そこから2人を挟んだ先にはビルが建ち並んでいて、沈みかけている夕日がビルの間から2人の様子をそつと窺うように覗いていた。

「——なんでナオキはあんなにも必死に鞆を取り返そうとしたの？」

絵里は帰り道にずっと迷っていた気持ちを通り切り、勇気を振り絞って気になっていたことを聞いた。夕日は変わらず2人を照らしていた。

「えつと……に、荷物を盗られたら普通取り返そうとするだろ？」

「それはそうだけど……ナオキは盗られたらあんな表情かおしないと思うの」

「そ、そんなこと分からないだろ？もしかしたらおれはそういう表情かおをするかも……」

「……………」

「……………無言で見るのはやめてくれ」

「じゃあ話して」

「……………本当は、もうちょっと後に言うつもりだったんだけどな」

「……………」

絵里が無言でナオキを見つめると、ナオキは絵里からの視線が苦しくなつてその理由を話すことにした。ナオキはまだ少し戸惑いながらも鞆から“あるもの”を取り出した。

「……とりあえず、見てくれ」

絵里はナオキから手渡された小さなファイルを受け取ってその中身を確認した。

中に入っていたのは何重にか折りたたんでいた1枚の紙。

その紙を丁寧丁寧に開いていく。

「えっ……!?!」

開き終わり、その意外な正体が顕になってナオキの方に視線を移した。

するとナオキの頬は赤くなっており、夕日がそんなナオキを照らしてさらに赤く見せている。

——熱い。身体が熱い。

これは嬉しいから？夕日の日差しが当たっているから？それとも今が夏だから？

わからない。わからないが、ナオキに見つめられて心臓がドキドキと音を立ててい

る。

——長い沈黙が続いた。

そしてナオキはスーツと息を吸いこんでから力強く、また優しい声で言った。

「絵里、その……まだ書けないところは勿論あるし、まだタイミング的には早いかもしれない。でも、おれはそれぐらい本気だ。だから……そこに名前を書いてくれないか？ 出すのはもうちよつと後になるかもしれないけど」

ナオキの言葉を聞いて、いま自分が置かれている状況を理解して、頬を赤くして涙を流してもう一度ナオキから渡されたものを見つめた。

何故、自分の両親とナオキの両親の名前が書いてあるのかわからない。いつこれに書いてもらったのだろう。

そしてナオキの名前が書いてある横の欄が空白が目立つように空いていた。

「……………書いて、くれるか？」

「っ……………！」

「え、絵里……………!？」

絵里は目に涙を浮かべながらナオキの胸に飛び込んだ。そして泣き叫びそうな気持ちを堪えて必死にナオキに想いをぶつけた。

「そんなのっ……………書くに決まってるじゃない、バカっ……………！」

「……………ありがとう」

ナオキはそう言った絵里の頭を優しく撫でた。その顔には安堵の表情が浮かんでいた。た。

それもそのはず、その空欄の少し上に書いていたのは——

『妻になる人』

さらにその上には『婚姻届』と書いてあった。

そう、これは婚姻届。

絵里の両親が帰ってきた時、つまり卒業式の日になオキが貰ったものだ。それから大切に保管していて、大阪に帰ってきた時に自分の両親からも許可を貰った。未成年が結婚するには同意書でも可能だが、両親に婚姻届のその他の欄に「この婚姻に同意します」と記入してもらった上で署名と押印が必要で、さらに証人の欄には両親の父親の名前が書いてあった。

——— 2人の愛はこの1枚の紙でさらに深まった。

~~~~~

——翌日　新大阪駅。

「ナオキ、もう行くのか？」

「ああ、東京でもやることがあるから」

「お世話になりました」

ナオキと絵里はこの日に東京に帰るため、トウマと帰る前最後の会話をしていた。ナオキは少し寂しそうな声で返答して、絵里はしっかりと頭を下げてお礼を言った。

「いいんだよ。またいつでも来るといい。君のもうひとつの家になるんだから」  
「えっ、あつ………はい」

絵里はトウマの言葉の意味をすぐにわかり動揺して顔を赤くした。

そして、樹木はと言うと………

「……あの、離してくれない？」

「嫌だ！離さないわ！」

「コラコラ……」

「離して！離してトウマさん！」

樹木はナオキとの別れを惜しんでナオキをガツシリと掴んでいたが、トウマに呆気なく引き剥がされた。絵里はそんな賑やかな3人を見て微笑んだ。

「お母さん落ち着けて………帰って来れなくても、また時々電話するからさ」

「ナオキ……！待ってるからね〜！」

「だから引つ付くなって！暑い!!恥ずかしい!!」

樹木にそう言うナオキの頬は暑いからなのか、それとも照れているからなのか赤く染まっていた。

「ナオキ、そろそろ時間じゃないか？」

「もうそんな時間か……じゃあ、そろそろ行くわ」

「ああ、しつかりやれよ」

「体には気をつけるのよ〜」

「……うん」

「本当にお世話になりました」

ナオキと絵里は樹木とトウマに最後の別れを告げて改札を通過していった。

絵里と話しながら楽しそうに歩くナオキの後ろ姿を見た樹木とトウマは少し寂しそうな微笑みを浮かべていた。

「……また、寂しくなるわね」

「……ああ、そうだな」

ナオキが単身で東京へ引越すことになった時、2人は不安にもなったが悔しくも思った。ナオキは言ってみれば辛い体験をして大阪にいたくなくなつて東京に行ったのだ。そんな息子に寄り添ってあげられず、励ましてあげることが出来ず、辛そうな背中を見送ることしか出来なかった。その時の背中与今の背中は全く違うものだった。

あの時のナオキには足りなかったもの……それは仲間、愛する人。今のナオキにはそれがある。その存在がああ時のナオキを変えた。

(ナオキ、お前は見つけたんだな。これから共に歩む人を)

トウマはそう悟るとナオキの背中が見えなくなるまで同じ方向を見つめ、見えなくなる  
と樹木の肩をポンポンと叩いて家に帰っていった。

——新幹線内。

ナオキは大阪の思い出に浸りながら窓から景色を眺めていた。新幹線の速さでゆつ  
くりと堪能できないが見ていてどこか安心感に似たものを覚えることが出来る。

しかしふと反対側に目を向けるとスースーと静かに寝息をたてながら自分の肩にも  
たれて眠っている絵里がいた。その寝顔を見てナオキは微笑みを浮かべた。

(絵里、ありがとう。今のおれがいるのも絵里のおかげだ。これからもよろしくな)

そう心の中で囁いたナオキは鞆の中にある婚姻届が入っているファイルを見て頬を  
少し赤く染めて嬉しそうに微笑んだ。

——  
次回に続く



## 第154話（章末回）「おれの夢、私の夢」

ナオキと絵里が大阪から東京に帰ってきて数日後、家で休んでいるナオキの元にある一本の電話が掛かってきた。

「もしもし?」

『もしもし? いやあ、急にすまないね』

「大丈夫、ちょうど暇だったし。それで、なにか用事?」

『ああ、実は頼みがあつてな……』

「頼み?」

電話の相手はおじの晋三だった。

晋三からの用事が頼み事だと聞いたナオキは相手には伝わらないが首を傾げた。

『そうだ。もうすぐ有名企業の社長などが呼ばれるパーティーがあるんだが、それに同行して欲しいんだ。お前と絵里さんに』

「絵里も!?!」

『ああ、良ければだが』

「ちよつと待つてくれ……なあ、絵里」

「どうしたの？」

「おじさんが出席するパーティーにおれと絵里に同行して欲しいって言ってるんだけど、どうする？」

ナオキはそのパーティーに絵里も出席するか確認するためスマホを耳から一旦離して隣に座っていた絵里に確認を取った。

「うーん、そうねえ……ナオキは行くの？」

「ああ、そのつもりだけど」

「なら私も行くわ」

「了解。おじさん、絵里も行くって」

『わかった。それじゃあ詳しいことはメッセージで送るからそれを見てくれ』

「わかった。じゃあまた……」

ナオキは電話が切れたことを確認するとスマホを机の上に置いた。が、その直後に晋三からのメッセージが来たので少しビクツと肩を上にも動かした。

そのメッセージにはパーティーの日時と場所、そしてその日の夕方に晋三の家に来るようにと付け足されていた。

「服装はどうなの？」

「服装は……スーツとドレスらしいけどおじさんとおばさんが貸してくれるみたいだ。どうする？」

「私、ドレスは持つていないから借りようかしら？」

「おれは制服でいいんだろうけど……折角なら借りようかな。じゃあ返信しとくわ」

ナオキは服を借りる旨を晋三に伝えて、視線をまたテレビに向けた。

ナオキ達は今、スクールアイドルの特集番組を見ていた。最近では新しいスクールアイドルがどんどん結成されているらしい。亜里沙は目をキラキラさせながらテレビに張り付いていた。

「亜里沙、テレビに近づきすぎよ。離れなさい」

「は〜い」

テレビ近くに正座して観ていた亜里沙だったが、絵里に注意されると素直に離れてソファに座っているナオキの隣に座った。

ナオキ達はその番組を観て、現在の日本のスクールアイドルの数、レベルの高さを知った。

今までは自分達の学校が残る為にと無我夢中で駆け抜けた。その結果、μ'sは全国の頂点に立つことが出来た。そして今はその時感じた「輝き」を目指して活動している。それが音ノ木坂学院アイドル研究部の特徴と言えるだろう。

だが再び全国に目を向けると様々なスクールアイドルがいて、その数だけの夢、希望、目標が存在した。さらにそのスクールアイドルの波は世界にまで広がっていた。数はまだ日本ほどではないが、それはとても喜ばしいことだった。いずれは各国のスクールアイドルの踊りもみてみたいと興味も湧いてきて、様々な想像が膨らんでくる。

「スクールアイドルって少し前まではそんなに有名じゃなかったのに、最近はメジャーになってきたな」

「これもきつとμsが凄かったからだよー」

「ふふっ、ありがとう。でも私達だけじゃないわ。A—RISEもナニワオトメだってここまでスクールアイドルを大きくしたのに貢献していたもの」

「もちろん、スクールアイドルフェスティバルの時に集まってくれた全国のスクールアイドルのみんなもな」

「うんー」

番組でもμs、A—RISE、ナニワオトメ、俗に言う“三大スクールアイドル”の存在、そしてその3組が中心となって全国のスクールアイドルと行った『スクールアイドルフェスティバル』も現在のスクールアイドルの波に大きく貢献したと取り上げられていた。

それにスクールアイドルの波は高校生だけではなかった。中学生以下で「高校生になつたらスクールアイドルになりたい」と夢見ている”スクールアイドルの卵”も少なくはないらしい。

「……………楽しみだな」

ナオキがそう呟くと、絵里と亜里沙はナオキに同感する意味で頷いた。

——同時刻。

ナオキ達と同じ番組をみて興奮する女の子達がいた。

憧れ、自分もやってみたいと思う女の子達。

これはうるさく語られるんだろうなと呆れる女の子達。

「……………」、明日は早くから出発するんだから早く寝なさい」

「……………はい」

そして、明日からの予定も忘れて興奮して母親から叱られて眠りにつく女の子達。

~~~~~

——数日後。都内、某ホテル。

「では会長、私は車をまわしてきます」

「ああ、頼んだよ」

晋三達を車から降ろすと、その運転手は駐車場に車を停めるために車を発車させた。

「ハラシヨ……」

「これが高級ホテルか……」

絵里とナオキは今回のパーティーの会場になっているホテルを見上げた。アメリカに行つた時に泊まつたところも高級であつたが、それに負けないぐらいの豪華さであつた。

「さあ、行くわよ」

「驚くのはまだ早いと思うぞ、次期会長とそのご婦人」

「おじさん……！」

「はははははっ！」

まるでこの豪華な雰囲気慣れているかのように歩いていくナオミ、晋三の後をナオキと絵里は頬を赤く染めて歩いてホテルの中に足を進めた。

「伊藤会長、ご無沙汰しております！」

「なかい中井社長、この前お話させて頂いた時以来で？その節はお世話になりました」

「いえいえ。御社も中々のご活躍をなさっているようで」

「いやいや、そちらにはかありませんよ」

晋三が早速挨拶を交わしているのは大きなプロアイドル会社、ジャスティスプロダクション、略してJプロの社長だ。何人ものプロアイドルを輩出し、業界でも一二を争う会社だ。その社長と自分のおじが仲良く話しているのを見たナオキは呆気に取られていた。

「あらナオミさん、この間はどうぞも〜」

「ひさこ久子さん、こちらこそどうも。あれから毎日使わせて頂いてます」

「でしたらまた新商品が開発されましたら”試験”をお願い致します」

「はい、喜んで」

そしてナオミは近所の人と話すように会話しているのは大手化粧品メーカー、東海化粧品社の女社長だ。この話し方から察するに、2人は長い付き合いなのだろう。化粧品好きなナオミにとつてはこの女社長はいい存在なのだろう。

ナオキのお婆、いや、会長の婦人となればこのような有名な社長とも仲良くなれるのかと絵里も呆気にと取られていた。

「おや、もしや^や s の……?」

「あ、はい!」

「やつぱり! 私あなた達のファンだったのよ」

「あ、ありがとうございます」

そう呆気にと取られていると絵里はどこかで見たことある女性と握手を交わした。なんとか絞り出そうとするが中々出てこない。

「申し遅れました。私、弥生ゼミナールの取締役を務めさせていただいております、弥生やよいと申します」

「あ、どうも……弥生ゼミナールってあの……?」

「はい、恐らくご想像されているものがそうです」

絵里はその弥生という人物から名刺を受け取って初めて思い出した。

弥生ゼミナール、全国に広がる有名塾だ。生徒数は幼稚園児から高校生まで合わせても全国の塾の中でもトップで、多くの生徒が数々の有名学校への進学を成している。しかもその売り上げの一部を海外の勉強できない子供たちに向けての募金に使用して、学問においては世界的にも活躍していると言っても過言ではない。

「……有名な会社の人ばかりでなんだか気負いするなあ」

ナオキはスーツのネクタイを必要でもないのに締めながらそんなことを呟いて話している人達の顔を見回した。

「すみません、もしかして香川ナオキさんですか？」

「え、あ……はい」

そしてナオキは1人の男に話しかけられてその人の顔を見た。

その人物はJプロと同等のアイドルの輩出している、ひふみプロの社長だ。その愛嬌さからバラエティー番組にも時々出ているちよつと変わった社長だ。

「やつぱり！ いやあ、次期ラブライブ！運営委員会の会長さんだなんて、若いのに凄いですねえ」

「い、いえ、自分なんてそんな」

「いやはや、しかしあの活躍があれば当然でしょう。これから御社ともごひいきに願

いします」

「は、はい……」

ナオキはまだ若干戸惑いながらも握手を交わした。そして車の中で、「こういう機会は大切にしないといけないから勉強するといい」と晋三から言われたことを思い出し、気持ちを正してその人の顔と名前を頭に刻んだ。

「伊藤会長、本当にまだあんなに若い子に会長の席を譲っても大丈夫なのですか？」

「ええ、ナオキは必ずいい会長になります。もちろん、最初のうちは私もサポートはしますがね」

「でも18歳にその責任は重いのでは？」

「だが結局はいつか背負わなければいけないんだ。それがちよつと早まっただけです
よ」

中井と伊藤はひふみプロに続いて続々とナオキと挨拶を交わしていく光景を見ながら話していた。伊藤は若干笑顔を浮かべながら見ていたが、中井は伊藤の言葉が僅かに信じられずに苦い顔を浮かべていた。

「つ、疲れたあ……」

「お疲れ様。はい、お水」

「ありがとう」

ナオキと絵里は会場の外にある椅子に腰掛けて休憩していた。2人に取っては今まで体験したことがない事で一気に疲れが出たのだ。ナオキは特に。

「でも凄いのね、ラブライブ！運営委員会って」

「そうだな、おれも予想外だよ」

そして2人は晋三が会長を務め、ナオキが引き継ぐラブライブ！運営委員会の凄さを改めてこのパーティーで感じた。

ラブライブ！運営委員会とは、ラブライブ！の運営に関わる会社、というか団体に近いと思っていた。周りの有名企業に比べればそこまでだろうという予想を上回り、有名なアイドル会社や他企業からも一目置かれる存在だった。そのトップに今はナオキのおじの晋三が立っている。スクールアイドルが大きな注目を浴びている今、その全国大会を主催している運営委員会は評価されているのだろう。

「ぴぎやつ……!」

「ぴぎやつ……?」

すると聞いたことの無い言葉を聞いたナオキと絵里はその声のした方に視線を向けた。

そこにはピンク色のかわいいドレスを着た女の子がうつ伏せに倒れていた。

「おいおい、大丈夫か?」

「うう……お姉ちゃん……」

「お姉ちゃんと来てるのか……とりあえず涙を拭いて」

「あ、ありがとう……ごさいます……」

ナオキはその今にも泣きそうに聞き取りにくい小さな声の女の子にハンカチを手渡してから、その子が言う「お姉ちゃん」らしき人を探すために周りを見渡した。

顔を上げた女の子は赤い髪のツインテールをしていた。

「……もしかして、あの子か?」

すると廊下の曲がり角の方から慌てて走ってくる女の子が見えたので、ナオキは走っ

てくる女の子がこの子が言う「お姉ちゃん」であろうと予測した。

その「お姉ちゃん」は、赤く花の模様がついている着物に身を包んでいて、その着物に似合う綺麗な黒髪を伸ばしていた。

「ルビィ、大丈夫ですよ!？」

「うゆ……」

”ルビィ”……それが君の名前？

「は、はい……」

「へえ、珍しい名前ね」

ナオキと絵里は先程転んだ女の子の名前が珍しく少し興味を示した。

「妹を助けて下さり、ありがとうございます。わたくし私は——」

そしてルビィの「お姉ちゃん」は深く礼をして顔を上げ、ナオキと絵里の顔を見るなり動きが動画が一時停止ボタンを押されて停止するように止まってしまった。ナオキと絵里は急に動きを止めた女の子を不思議がり、首を傾げて頭の上にはてなマークを浮かべた。

「お、お姉ちゃん……?」

それはルビィも同じだった。何故自分の姉が固まっているのかわからずに無垢な目を「お姉ちゃん」に向けていた。そしてハツとした「お姉ちゃん」はルビィに耳打ちを

した。

「ルビィ、分からないの!?!あの2人は——」

「……………ピギィ!?!ほ、本当だ…………」

「お姉ちゃん」に耳打ちされたルビィは急に肩をすぼめてナオキと絵里を見つめていた。2人は動揺を隠せなかった。

そして背中にルビィが張り付いたままの「お姉ちゃん」がジリジリと2人に近づいて大きく息を吸った。

「わ、わわわわ私っ!くくくく黒澤、ダ、ダイヤ、と申しますっ!!こ、こちらは、妹の、ル、ルビィです!」

「く、黒澤、ル、ルビィ……………です…………」

ダイヤと名乗った「お姉ちゃん」は力が入っている声で自己紹介をして、妹のルビィは聞き取りにくい小さな声で改めて自己紹介をした。ダイヤは小刻みに体を震わせて顔を硬直させながらナオキと絵里の顔を見ないように視線を上にあげていた。ルビィはそんなダイヤに隠れて顔を見られないようにしていた。

「えっと、おれは——」

「——は、はい!存じておりますわ!みゆ、みゆ……………*ん*、sの、か、香川ナオキさん

と、あ、絢瀬、エリー……絵里さん、でございますよね?!

「あ、知っててくれたんだ」

「嬉しいわ! ありがとう!」

「い、いえ! 私こそ、お会いできて光栄でございますわ!」

ダイヤはやつと力を抜いて話ができるようになったのか、緊張している目から一転、その名前の通りダイヤモンドの輝きのようにキラキラと目を輝かせて絵里を見つめていた。

「もしかしてルビィちゃんも知っててくれたのかな?」

「……………うゆ」

「そうか、ありがとうね」

ナオキがしやがんでダイヤの後ろに隠れているルビィに話しかけると、ルビィはひよこつと顔を覗かせて頷いた。

「流石ナオキさんですわ! ルビィは男の人が苦手なのです。そんなルビィがこうもあつさり男の人の目を見て話すなんて……ナオキさんだから出来たことですわ!」

「あ、ははははは……」

ダイヤはナオキにも憧れの視線を向け、ナオキは若干その視線に戸惑うように立ち上がり、右の頬を右人差し指で笑い声を漏らしながら掻いた。

これはナオキが照れた時の癖で、それを知っているのはこの近くでは絵里だけ。絵里はクスツと笑ってそのことを言わずにナオキに横目を向けた。ナオキはその視線の意味に気付いて、絵里に頼むようにその頬を搔いていた人差し指を口の前に付けた。

「そう言えば、あなたのお家はどこかの社長さんなの？」

絵里が話題を変えるとナオキは内心ほっとした。

「いえ、私の家は静岡県沼津市というところの旧網元で、地元一の名家です。偶にこのような場にも呼んでいただけの程には名が知られています」

「へへ、網元って？」

「網元あみもとはな、漁網ぎよもつや漁船を所有する漁業経営者のことで、中には地域の政治とかを支配した網元もいたらしい（Wiki調べ）」

「よくご存知で！私の家は昔はそのような家だったのです」

「へえへ、凄いな。このパーティーはそんな人も呼ぶんだな」

「はい。私達以外にも数名の旧網元の名家の方が呼ばれております」

旧網元の家は黒澤家みたく現在も地域に根付き「名家」と呼ばれている家があるらしい。

中には現在も昔のような権力、財力を持っている家もあり、そのほとんどが地域の町内、あるいは市内にがいい意味で影響を与えている。

「そうなのね。またご挨拶しないと」

「だな。さて、そろそろ戻るか。2人のご両親も心配してるだろう？」

「あ、あのっ……ひとつ、聞いていただきたいことがあるのですが……」

ダイヤの振り絞って出した声が会場へ戻ろうとしたナオキと絵里の動きを止めた。2人はなにも言葉を発さずにダイヤの言葉を待った。

「あのっ、よかつたらサインくださいやい！」

「あつ、ルビィ!?わ、私もお願い致しますわ！」

「………いいよ、どこにしようか？」

ルビィとダイヤからのお願いをナオキと絵里は顔を見合わせてから快く受け入れた。

「い、いいんですか!？」

「そ、それではここに！」

「……色紙、持ってたのね」

ダイヤは返事を聞くと嬉しそうにカバンから色紙を4つ、マジックを2つ取り出した。た。

ダイヤとルビィは東京に行くことが決まり、もしかしたらμsの誰かと会えるかもしれないと色紙とマジックを持ってきていたのだ。

ナオキと絵里は2人に1枚ずつサインを書いた。こうして直接サインを求められる機会はスクールアイドルを卒業した絵里にとってはなんだか嬉しく、そして少し懐かしい気分になっていた。

「はい、どうぞ」

「あ、ありがとうございます！これは我が家の家宝に致しますわ！」

「ははは、大袈裟だな」

「いえ！そんなことありませんわ！このサインはまさに超高校級！国宝級ですわ！」
「前者は違う気がする」

2人からサインをもらったダイヤはとても大喜びで興奮していた。ルビィも目をキラキラとさせて色紙を顔に近づけて見つめている。

「ふふっ、喜んでくれて嬉しいわ」

「はい！私、ずっと^スに、スクールアイドルに憧れてて、その、大変恐れ多いのですが……」

ダイヤは色紙で目から下を隠してチラチラと2人の方を見ながらもじもじして、その様子から何かを言おうとしていることはわかる。

「お姉ちゃん、高校生になったらスクールアイドルになりたいんだよね！」

「ル、ルビィ!？」

「うっ、ご、ごめんしやい……」

ルビィがダイヤの言いたいことを暴露してしまうと、ダイヤは顔を真っ赤にして色紙で完全に顔を隠してしまった。ナオキと絵里がルビィの暴露を聞いてから何も話さないのどこか怖くも感じていた。

でも気になってチラッと色紙から目を出して2人の様子を伺うと、2人はポカーンとダイヤを見つめていた。

「——スクールアイドルに、なりたいの?」

「ピギィ!?は、はい……」

「ナオキ……」

絵里の言葉にさらにダイヤは緊張感を走らせる。まるで心臓が耳元にあるように音が大きく聞こえる。

「——凄いやないか!スクールアイドルになりたいだつて!」

「ハラショー!嬉しいわ!」

ナオキと絵里が大喜びしている様子を見たダイヤは少しホツとしたが、喜ばれたことが逆に恥ずかしくも思つてむず痒く感じた。

「よ、喜んで頂けて光栄ですわ……！」

「応援してるわね、頑張つて！」

「そそそそそんな！応援してくださるなんて……私には勿体ないですわ！」

「そんなことないわよ。私ね、こうしてスクールアイドルに憧れてなつてくれる人は応援したいと思つてるの。だからダイヤちゃんのことにも応援するわよ！」

「あ、ああああありがとうございます!!私、μ sみたいなスクールアイドルになつてみせますわ！」

「ふふっ、大きく出たわね〜」

ダイヤの目標、それは限られた時間の中で精一杯輝いてそれをやり遂げだμ sのよなスクールアイドルになることだ。

しかし、そんな目標を持つのはダイヤだけではない。全国に目を向けるとスクールアイドルを、μ sを目指す人は数え切れないほどいる。

——そしてナオキの中である思いが湧き上がってきた。

「——ダイヤちゃん」

「は、はいっ……!」

ダイヤはナオキに急に名前を呼ばれたことで緊張して肩の力が入り、身体を固めてナオキの顔を見つめた。

「——おれたちμ sみたいなのスクールアイドルになるには一筋縄じゃいかないぞ?」

「しよ、承知の上ですわ!」

「そうか……」

「……!?!」

ナオキはダイヤの答えを聞いて笑みを浮かべて右手をダイヤに差し出した。

「——」なら、限られた時間で必死に輝いてみる。それはきつと君にとつて良い体験になると思う。おれ達が経験した『輝き』を手に入れてみる」

「はい!望むところですよ!」

ダイヤはナオキの言葉に触発されてやる気に満ちた表情でナオキの右手を自分の右手でゆつくりと握った。

憧れた人のその手は力強くも優しい感触で、ダイヤはきつとその感触を思い出す度に今日という日を、この日に湧き上がってきた感情を思い出すだろう。

「お姉ちゃん、お母さんが早く帰ってきなさいって……」

「わかりましたわ。ではナオキさん、絵里さん、またどこかでお会い致しましょう。あり

がとうございました」

「こちらこそありがとう」

「頑張つてね」

ダイヤとルビイは2人にお辞儀をすると会場の方へ帰っていった。ナオキと絵里はそんな2人の背中を見守るように見つめていた。

ダイヤとルビイは喜びながら足を進め、2人に聞こえる程度の話し声でその喜びを語っていた。

「やりましたわねルビイ、あの御二方からサインを貰えましたわ！しかも握手まで……！」

「来てよかったね、お姉ちゃん！」

「私、絶対にスクールアイドルになって輝いてみせますわ！」

「うん！頑張つてね、お姉ちゃん！」

「ルビイも一緒に、ですわ！」

「ええ!!?私にもできるのかなあ……?」

「できますわよ、ルビイなら」

~~~~~

—— 帰りの車内。

ナオキは窓から流れゆく景色を眺めながらダイヤ達との出会いを思い返していた。絵里は疲れからか、ナオキの肩にもたれながら寝息をたてて眠っていた。

「なにかいいことがあったのか？」

晋三がどこか嬉しそうな顔をしているナオキを見て話しかけると、ナオキは視線を外の景色から晋三へと変えた。

「うん、ちよつとね」

「そうか、それは良かった」

「なあ、おじさん……」

「なんだ？」

ナオキは晋三に自分の今日思いついた“夢”を語った……絶対に叶えるという気持

ちを添えて。

「——おれ、運営委員会の会長になったら、日本全国のスクールアイドルを見に行きたい」

「……………いい夢だ」

晋三はナオキが夢を持ってくれたことに嬉しさを覚えた。

”自分の都合”でナオキにいきなり大仕事を任せる手前、少し申し訳なさも感じていて、ナオキが嫌々引き受けたんじゃないのかと思っていた。しかし、こうして自分が會長になった後の”夢”を持ってくれた。それはそんな不安を取り払うものであった。

そしていつの間にかナオキも目を瞑り眠ってしまった。そんな寝顔を見てそつとしてあげようと思う晋三であった。

——次章へ続く……



# Another way 「これまでのラブライブ!〜1人の男の歩む道〜映画編」

みなさんどうも、主人公の香川ナオキです。今回は振り返りということで、自分が紹介したいと思います。

## — The school idol movie へ NEW STAGE へ —

この新たな物語の始まりは、卒業式が終わってみんなで学校を出ようとした時に突然やってきた。

花陽が突然叫び出して部室まで走って行ったので、みんなでそれを追いかけた。実はおれの所にもおじさんでラブライブ!運営委員会会長の伊藤晋三からメールが来ていた。

その内容は、第3回ラブライブ!のドーム開催を検討しているということ。さらにそれに加えて、このドーム開催を叶えるためにアメリカへ行ってライブをすることが告げられた。

これだけでも目玉が飛び出そうなくらいびつくりしたのに、運営委員会に行ったおれはおじさんからさらに驚くことを聞かされた。それはアメリカでのライブの成功、そしてラブライブ！のドーム開催を実現させれば、おれを次期ラブライブ！運営委員会会長として任命するということだった。ラブライブ！運営委員会の会長というのは、世間で言うところの社長だ。そんな重役、というかトップにおれが任命されるなんて……考えただけでも胃が痛くなりそうだ。

それに、ビッグイベントはもうひとつあった。絵里の家には絵里のご両親が来ていて、おれは絵里にプロポーズしたこと、そしてその婚約を認めて欲しいとお願いをした。答えはOKだった。曰く、おれがもし絵里と婚約すればすぐに認めるつもりだったらいい。さらに、おれと絵里、そして亜里沙の3人で一緒に暮らすことになった。おれと絵里との生活も婚約したことで変化したんだ。

兎にも角にも、おれ達は全員でアメリカ行きの準備を始めた。パンフレットを作ったり、もちろん披露する曲を準備したり、衣装を準備したり、あとは日用品とかの準備。飛行機の席やホテルは、おれ達を紹介してくれるテレビ会社、『Anger TV』が用意してくれていた。しかもその社長は、ラブライブ！の頂点を共に競い合った目黒学園の元生徒会長アリスさんの父親だった。

そしておれ達々、sは飛行機に乗り込んで、ラブライブ！のドーム開催、それにおれ

のラブライブ!運営委員会会長就任を叶えるためにアメリカへ飛び立った。

確かに心境は複雑だった。1度はラブライブ!が終わったら、sを解散すると宣言したおれ達だったが、それでも最後にもう1度だけアメリカでのライブを成功させて、これから先、スクールアイドルの未来のために頑張ろうと決意した。

——みんなで叶える物語……おれ達はもう1度みんなで夢を叶える。

——The school idol movie第2章〜アメリカで舞う女神たち〜

アメリカに着いたおれ達は一旦分かれてそれぞれの目的地に向かった。おれは『Angel TV』本社に、他のみんなは『Sun Rising Hotel』というホテルに向かった。

『Angel TV』では、社長の歩あゆむさんとスクールアイドルのことを説明して、ライブのことについて話し合った。そこで言われたのが、ライブをする場所をおれ達に決めて欲しいという事だった。そこで人が集まる所を聞いてみると、ブロードウェイを紹介さ

れた。おれはまずそこに寄ってからホテルに向かうことにした。

ブロードウェイの様子をスマホに納めていると、突然絵里から電話が掛かってきた。電話によると、海未、ことり、凜が穂乃果のミスにより『Sun rising Hotel』ではなく、『Sun rise Hotel』にいるらしい。おれはそこからすぐにそのホテルへ向かおうとした。

その時再会したのは、沖縄で”誓いの石”をくれたおつちちゃんだった。けどおれは急いでいたのであまり話さなかった。

『Sun rise Hotel』で3人と合流し、拗ねている海未をおぶっておれ達が泊まるホテルに向かった。

『Sun rising Hotel』にやつと着いて、やつとゆつくり出来る時間が出来た。

希の好意により、おれと絵里の部屋はウエディング仕様になっていた。それから晩御飯も食べておれ達はそれぞれの部屋でアメリカで初めての夜を過ごし、長旅の疲れを癒した。

そしておれは絵里に”あの曲”の存在が知られてしまった。それがみんなに知られることになるのもう少し先になる。

朝御飯を食べてからおれ達は朝練をするためにホテルから近いセントラルパークに

足を運んだ。ラブライブ! 決勝に向けての練習が、*As* にとつて最後の練習と思つていたから、内心もう一度練習出来てとても嬉しかった。

セントラルパークにあったステージで練習している時に知らない人に話しかけられたり、練習を見られたりしながらもその日の朝練を終えた。このあと、おれ達はライブの場所を決めるためにアメリカの街に繰り出すことになっていた。

タイムズスクエア、自由の女神があるリバティ島、ニューヨークのメインストリート、そして高いビルにも行った。

その高いビルの屋上展望台からみんなは景色を楽しんでいたが、おれは高いところが苦手だ。だからエレベーター近くでずっといたんだ。すると凜はニューヨークがアキバに似ていると言い出し、みんな納得の声をあげていった。もちろんおれもそう思う。だから色んなところをまわっても「どこでもライブをしても良さそう」と感じたんだ。

それから晩御飯を食べるためにレストラン、そして日本料理屋さんに行つてからホテルに帰るために地下鉄に乗り込んだ。でもその電車には穂乃果の姿はなく、それは向かいの反対方向に行く電車の中にあった。

おれ達はおそらくしたら遅れてホテルに帰ってくるかもとホテルの入口で穂乃果を待った。おれがブロードウェイの方に行こうとした時、穂乃果がこちらへゆつくりと歩いてきた。何はともあれこれでひと安心した。でもこの時の穂乃果は誰かに案内され

て来たらしいが、歩いてきたのは穂乃果1人だった。変なこともあるもんだ。そしてついにアメリカライブ当日。

おれ達はメインステージとなるブロードウェイに到着した。準備が着々と進んでいき、おれ達の緊張は高まっていつていた。このアメリカでのライブがおれ達にとって最後のステージになる、だから尚更緊張していたんだ。

披露したのは絵里がセンターの新曲、『Angelic Angel』。ブロードウェイがメインステージだったが、みんなのCGをセントラルパークで映し出し、さらにみんなが持っている扇子を照明に反射させてその軌道が見えるようにした。

今までの集大成の最高のライブだった。これでみんなにスクールアイドルの、μ'sの凄さがわかってもらえただろう。

だが、ライブを終えたおれ達を待ち構えていたのはさっきのライブで興奮した人達だった。このままではおれ達が無事に帰れないので、歩さんの計らいでリムジンとボディーガードを用意してもらってホテル、そして次の日も空港まで向かった。ボディーガードに囲まれるなんてもう2度と体験しないんだろうな。

そしておれ達は久しぶりに日本に帰った。

——でも、おれ達を待ち構えていたのは予想にもしなかつた事態だった。

## The school idol movie 第3章 歩むべき道は

おれ達は無事、アメリカから日本に帰って来ることができた。空港に着いて早くバスに乗って帰ろうとしたその時、妙に周りがざわざわしていることにみんなは不快感を覚えた。

でもその後、すぐにμsのファンと名乗る女の子達がサインを求めてきた。その結果、空港では行列が出来てしまつてミニサイン会が行われた。

そして、サインを求めるファンをさばききつたおれ達は空港のスクリーンに映し出されてるμsのアメリカライブの映像を見て衝撃を受けた。アキバの街に出てみるとグッズが並んでいたりポスターが貼つてあつたりしていた。その後もファンに追われながら路地裏に避難して、隙を見て穂乃果の家まで逃げ込んだ。

翌日、ラブライブ!運営委員会に行つたおれはおじさんからあることを伝えられる。それは前々からうつすら予想していたものだった。

「μsにはやり残したことがある」

音ノ木で待つてるみんなも理事長から「μsを続けて欲しい」と言われたみたいで頭を抱えていた。しかし、みんなの中では「最後を伝える最後のライブ」が必要だとほ

ぼぼぼ固まっていたようだった。

そして部屋に入ったおれは絵里にも背中を押され、自分の考えていることを、これから待ち受けるμ、sがやり残したことを話を話した。

6月に行われる第3回ラブライブ！での閉会ライブ。スクールアイドルμ、sとしてではなく、あくまで前大会優勝者μ、sとしてするライブだ。でもそれは「あの時」の宣言を、みんなで決めた決断を曲げるものだ。

「第2回ラブライブ！が終わったらμ、sは解散にする」

そんなおれの言葉にこは怒りをあらわにして胸ぐらを掴んでおれをタンスに押し付けた。

「ふざけんじやないわよ!! あんた……あの時の決断を変えるつもり!? あんたも『大会が終わったらμ、sはおしまいにする』って言ったんじゃないの!!」

それに6月……? スクールアイドルでいられるのは3月の終わりまでよ! ふざけんじやないわよ!!! あのとときの決断を簡単には変えられない! ナオキもわかってるはずよ!

『最後を伝えるライブ』は3月にできるわ……でも『第3回ラブライブ！閉会ライブ』は違う!! 確かに、ドームの舞台に立てるのはとても嬉しいわ……



でも……でもっ!!!

” 私たち10人が決めたこと” を変えるのは嫌なのよ!!!!!!  
 あんたもわかってるでしょ!? 次期ラブライブ! 運営委員会会長だかなんだか知らないけど……

その前にあんたは……

ナオキはμ、sのメンバーの1人でしようが!!!

には全力でおれにぶつかってきた。

そして、おれも……

「わかってる……わかってるよそんなの!!! おれだって嫌なんだよ!!!

おれだってな……おれだってあのときの決断を変えるのは嫌なんだよ!!! 当たり前じゃないか!!!」

「それならなんでもっと早く言わなかったのよ!!! 前々からわかっていれば……」

「おれだってわからなかったんだよ!! ツバサさんから聞いた時は今回だけかと思ってた……でも違った!! おじさんに決勝の夜の夜に聞いたんだ……『第3回ラブライブ! があったとしたら、μ、sにもA—R—I—S—Eみたいにライブをしてもらうことになるかもな』って……

それで第3回ラブライブ! の開催が検討されていると公表された……それと同時に

思ったよ……『μ sはその日まで続けなきゃいけない』って……」

「それなら……それなら……なんで話さなかったのよ!!!」

「話さなかったんだよ!!!」

アメリカライブもあって……みんなの気持ちをバラバラにしたくはなかった!!!それに、今回のライブは成功させたかった!!ドーム大会開催のため……スクールアイドルのために!!!」

にこの怒りは収まらずおれを押し付ける力は強くなる。続けておれが「最後のライブ」も必要だと言うと空気が変わった。

そしておれはこの腕を掴んで自分の胸ぐらから離して服装を直し、みんなに明後日考えを聞くことを伝えてその場を去った。

いや、逃げたっていう方が正しいか。

そこから、みんながどんなに悩んでいたかなんとなく想像がつく。だっておれも一人で悩み続けたからだ。夜に一旦家に帰って着替えてからまた夜のアキバに出ていったが、絵里とも顔を合わせることも出来なかった。あんな出て行き方をして、どんな顔をしてみんなに会えばいいのかわからなかった。

全国大会の切符をかけて全力で戦ったA—RISEもライブルであるμ sが続い

て欲しいと思っっているみたいだ。A—RISEは「ユニバーサル」というアイドル事務所にプロデュースしてもらうらしいし。

どのぐらい時間が過ぎたのか、どのぐらい歩いたのかもわからず、ただただ悩み続けた。そんな時再会したのは沖繩で”誓いの石”を貰い、アメリカでも会った関西に住んでいるというおつちゃんだった。名前は、忍川<sup>おしかわ</sup>ナナというらしい。行き先も決まっていなかったおれは、忍川さんの家にお邪魔することになった。

忍川さんにはおれが悩んでいたということはお見通しだった。そこで初めて気がついたのは、”関西弁が抜けていた”こと。それからおれは不思議とすらすら悩みを全て打ち明けていた。忍川さんはそんなおれをその家の屋上へと案内した。そこにテントを立ててその日は休むことにした。忍川さんはすぐに寝付いていたけど、おれは寝付けずにテントの天井を見上げて思考をめぐらせていた。そしていつの間にかおれの意識は薄れていった。

朝、おれは雨の音で目が覚めた。忍川さんはこの空を「おれの心みたい」だと例えた。そして忍川さんが指を鳴らすと強い風が吹いて、おれはその勢いで目を腕で塞いでしまった。

目を開けるとさつきまで見ていた景色はなく、真っ黒な空間だけが広がっていた。忍川さん曰く、そこはおれの心の中らしい。

おれはみんなとの日々を思い出しながら前へ進む。その中でおれは“気づき”を得た。

——μ，sはスクールアイドルだからこそ、限られた時間の中で輝けるからこそこんなにいい思い出ができた。

スクールアイドルという存在が、その“輝き”が自分の運命を変えてくれた。

この輝きを失わないためには、閉会ライブはやるべきである。

”限られた時間の中で精一杯輝こうとするスクールアイドル”をみんなに知ってもらう！

そして最高のカタチでμ，sを終わらせる。

この限られた時間の最後の時間ときに！

——おれの答えは固まった。

そして判明する忍川ナナという存在の正体。卒業式の日を生徒会室で話した“あいつ”と同一人物で、沖縄でも誓いの石をおれに渡し、今回もおれを助けてくれた不思議な人。その正体は、未来のおれの記憶を持ったおれの中に存在する“もう1人のおれ”だった。それが見た目を忍川ナナという姿に変えておれの前に何度も現れた。そんな“おれ”ともお別れだ。

「ありがとう。そして……さようなら」

おれは、おれの歩むべき道へ1歩踏み出した。

そして気付くとおれは家の玄関にいた。

リビングで寝てしまっていた絵里に謝った。でも絵里が起きてしまっておれを見るやいなや抱きついてきた。そして久しぶりの絵里の手料理を食べて、明日に備えて眠りについた。

次の日、おれは屋上のドアの手前で躊躇してしまった。やはりみんなに顔を合わせ辛い気持ちが大きかった。でも絵里はそんなおれの背中を押してくれて、おれは“1歩”を踏み出した。

みんなの答えを確認して、おれ達は『最後を伝えるライブ』そして『最後のライブ』<sup>ラストライブ</sup>をすることになった。さらにおれはその場で、『スクールアイドルの素晴らしさを伝える最高のライブ』をすることを宣言した!スクールアイドルみんなで1つの曲を歌う……絶対に最高のライブになる!

ライブであるA-R-I-S-Eの協力も得ることが出来て、ラブライブ!運営委員会にも許可を貰った。あとは参加してくれる人達を集めるだけだ!

参加するスクールアイドルを集めながら、おれ達は曲の準備にも取り掛かる。海未が考えた曲のテーマは「スクールアイドルは太陽のような眩しい輝き」。そのテーマのもと真姫は作曲をして、ことりは衣装作りをしていた。

さらに、おれはおじさんからライブの場所は秋葉原全域と知らされた。早くみんなに知らせたくて、みんなの待つ音ノ木に急いで帰った。そしてそんなおれに校門で声を掛けてきたのはA—R—I—S—Eの3人だった。A—R—I—S—Eも曲や衣装作りを手伝ってくれるみたいだ。

A—R—I—S—Eと一緒に作業していた時、おれは予想外の”あいつ”からの連絡に驚いて、慌てて外に飛び出した。その人物とは少し前までは会いたくもなかった人物、ミツヒデ。そしてイズミに英吉、さらに第2回ラブライブ!の決勝で優勝をかけて争ったナニワオトメのみんなだった。

μ's、A—R—I—S—E、ナニワオトメの三大スクールアイドルが揃ったという情報はすぐに知れ渡り、参加者は続々と集まっていった！

そしてこの『最高のライブ』の名前が『スクールアイドルフェスティバル』に決まり、みんなのやる気はさらに上がっていった。

参加者は合計で90組を超え、音ノ木に集まったのはそのうちの20組ほど。しかし世間の注目はまだスクールアイドル全体に向いてはいなかった。そこでおれ達は音ノ木でライブをすることにした。今集まっているみんなで1つの曲を歌って『スクールアイドルフェスティバル』の開幕を盛り上げる!そしたらきつと世間の注目もスクールアイドルという存在そのものに向くはずだ。

披露したのは『Happy maker!』、おれが前から作っていた曲だ。ダンスは盛り上がることを重視して振り付けは簡単に踊りやすく、さらにアレンジも自由にしてきたから、みんな思い思いのダンスをした。

ここに、スクールアイドルフェスティバルが開幕された!

そして翌日、会場となるアキバでスクールアイドルみんなで協力して着々と準備を進めた。屋台もいくつか出ていて通行人の人達も足を止めて屋台に寄ったり、準備が進んでいつもの姿から変わっていくアキバを眺めていた。

その日の夜、いよいよ次の日まで迫ったスクールアイドルフェスティバル、略してスクフェスの最終日に控えたおれは昔のことを思い出していた。

それは、後にμ'sと呼ばれることになるみんなと出会った時にどこからか聞こえてきた歌声のことを思い出していた。その歌声が歌っていたのは明日おれ達が披露する

”あの曲”だった。なんで、そしてどこから聞こえてきたのか今となっては知る由もない。だけど、その歌声がおれとみんなの道を繋いでくれたということはおわかった。

さらにその歌はおれ達10人だけではなく、こうして全国のスクールアイドルとも繋げてくれた。おれはこの歌をスクールアイドルみんなで披露出来ることをとても楽しみにして眠り、ついにその当日を迎えた。

穂乃果、ことり、海未、花陽、凜、真姫、絵里、希、にこ、そしておれ。10人で集まり、この10人だけで集合場所であるUTXに向かった。絵里が競走するって言出したから走って行くことになったけどな。

メインステージがある通りでそんなおれ達を待っていたのは……

——おれ達の呼び掛けの声を聞いてアキバに集まってくれた5、60組ほどのスクールアイドルだった。

おれ達は予想以上に集まってくれたスクールアイドルを見て感動を覚えた。スクールアイドルという名の”輝き”を伝えるために集まってくれた人達がこんなに沢山いる。そして、こんなに沢山のスクールアイドルと1つの曲を披露できるとわかって、心の底から嬉しくなっていた。

今回の衣装はおれ達サポートにまわる人にも作られていて、真の意味の”みんな”で



この曲を作り上げることになる。踊るみんなからしたら、おれやミツヒデ達みたいなスクールアイドルをサポートする人もスクールアイドルらしい。

衣装に着替えたおれ達μ'sはメイנסテージのある通りに再び立った。そしておれ達はスクールアイドル達が作ったメイנסテージまでの”道”を歩んだ。いよいよ本番だ……そう思うと普段のライブより緊張してしまふ。

おれ達はメイנסテージに立つといつも通りの点呼をしようとして手をピースにしてみんなで星を作った。

——でも、今回は違った。

点呼しようとした時、おれの肩にミツヒデ、イズミ、英吉が手を置いた。他のみんなの肩にもスクールアイドル達が手を置いていた。

そう、これはμ'sのライブではない、スクールアイドルのライブなんだ。

そしていつも通り穂乃果に掛け声をお願いしようとしたが、みんなの顔はおれを見つめていた。その目はまるでおれの掛け声を待っているようだった。……実際そうだったけど。みんな曰く、今のおれはスクールアイドルのリーダーらしい。それにみんなおれが”次期ラブライブ!運営委員会会長”になることを知ってみたいだし。

——そうと決まれば……!!

「よし、みんな!スクールアイドルの素晴らしさをおれたちのこのライブで伝えよう!

このスクールアイドルフェスティバルを最高のライブにするぞ!!」

10人だけじゃない、スクールアイドルみんなで作った円陣はとても大きな星だった。

「いくぞ〜!!スクールアイドル……………」

『ミュージック…………スタート〜!!』

そしてみんなで下げた手を振り上げて、ついに、スクールアイドルによる最高のライブ、『スクールアイドルフェスティバル』が始まる。

みんなで披露する曲は『SUNNY DAY SONG』、スクールアイドルみんなで作った歌だ。しかもこの曲はメイン会場であるアキバだけではない、日本全国、世界中に中継が繋がっていて、各地でアキバからの中継に合わせて同じ歌を歌っている。でも盛り上がっているのはおれ達スクールアイドルだけじゃない、アキバをはじめ一般の人達もつられて踊ったりしていた。

その日のあのたった1度の光景は、おれは一生忘れないだろう。この思い出はこの先ずっとおれの中に残り続ける。秋葉原に“青春”という名の限られた時間の中で輝く星

”があつたのだと。

曲が終わるとみんなライブの成功を喜んだ。

裏方のおれ達もみんなと同じように喜んだ。

そしてリコねえが記念撮影をしようとおれ達に向かつてカメラを構えた。するとみんなはすぐにおれを、おれ達<sup>ら</sup> sを中心にして集まった。

おれ達は最高の笑顔で手をLのカタチにしてカメラに向かつて出しながら声を揃えた。

その揃えて言った一言は、おれ達スクールアイドルを繋げる言葉だ。

「行つくぞ〜!せ〜の!」

『ラブライブ!』

—— The school idol movie 完結編〜そして最後のページには〜

大成功に終わったスクールアイドルフェスティバルの翌日、ラブライブ!運営委員会

本部の大広間ではその成功を祝うパーティーが行われていた。そこには参加したスクールアイドルだけではなくマスコミの姿もあった。そこでおれの次期ラブライブ！運営委員会会長が正式に決まったことが公となった。

そして3月31日に『μ's Moment Shine』を開催すること、さらに「第3回ラブライブ！」が東京ドームで開催されることを発表した。

パーティーが終わり、おれ達は『最後を伝えるライブ』に向けての練習に励んだ。

後日、みんなでライブのセトリを考え、さらにおれが作った新しいユニットの曲をみんなに渡した。それに、真姫が作っていたと言っていたあの曲も披露することになり、その曲の作詞を海未がすることになった。

そしてみんなの推薦でおれが6月にある最後のライブの曲と衣装を作ることになった。

おれはこの曲を絶対最高の曲にするためにパソコンに向かい曲作りを始めた。みんなの思い出を、μ'sへの思いをそのまま歌詞にした。

海未の書いてきた詩はとても良かった。それに案が絞れなく詩は2つ用意されていたけど、その2つとも使うことになった。

そしてみんなでおれが作った6月に披露する曲を聞いてみることになり、練習や衣装チェックで離れているみんなも部屋に集まった。パソコンの中に入っていた曲を聞いたみんなの反応はとても良く、みんなでこの曲の練習を頑張ろうと気合いを入れた。

しかし、おれは油断していて、そのままアメリカに行く前から作っていた曲が流れてしまった。おれは急いで止めようとしたが呆気なく希に阻止されてしまった。そのおかげでおれがアメリカに行く前に曲を作っていたことが認知されてしまった。

それから練習の日々が続き、リハーサルも終え、ついに『μ's Moment Shine』の日がやってきた!

当日、いよいよライブ始まる。場所は“第2回ラブライブ!”が行われた会場だ。

おれは急いで舞台裏にいるみんなの元に向かうおれに不思議なことが起こった。

『なんでおればっかり……』

人なんて……所詮は……

誰も信じられない……

どうせ信じたところでおれのことを裏切るんだ……』

聞こえてきたのは辛い過去を抱えていたおれの声だった。

ただただ真つ黒な道を進んでいたおれに、スクールアイドルは、みんなは……μ's

は、そんな道に光を、輝きを与えてくれた。おれにはみんながいた。だからこそおれはここまで歩むことが出来た。そしてこれからもおれはこの道を歩み続けることができる。

「ナオキ、遅いわよ」

「いつまで待たせる気なん？」

「そうよ、こんな大事なライブに遅れるなんて許されないんだから」

「ファンのみんなが待ってるんだよ！」

「そうよ。ファンのみんなを待たせるわけにはいかないわ」

「真姫ちゃんの言う通りにや！」

「ふふっ、だからはやくしてください」

「みんなずっと待ってたんだよ！」

「さ、やろう！」

——おれが第2回ライブの前に倒れて意識を失った時、目覚める前に見たのはこの光景だ。

そして、ついに最後を伝えるライブが開幕する……！

「μ's!!」

『ミュージックーーーーー……………』

スタートーーーーー!!!』

———これがおれ達μ'sの、”スクールアイドルとして”最後のライブになる。

開幕曲はアメリカで披露した『Angelic Angel』。それから前の曲の衣装が和風ということで『輝夜の城で踊りたい』と『だつてだつて噫無情』を披露した。

みんながそれぞれコールアンドレスポンスをして、前の曲にセリフがあつたのでセリフがある『風のなかの恋だから』、ハロウインに披露した『Dancing stars on me!』、移動の時間を省くための『るてしキスキしてる』を披露して、一旦みんなは着替えのために楽屋に戻った。

その時間稼ぎにA-RISEに『Shocking Party』を披露してもらった。

そしてここからはユニット曲。

まずはPrintempsの『ふわふわーお!』、そして新曲の『MUSEUMでどうしたい?』と『NO EXIT ORION』を披露した。かわいい曲だったのが最後にはかっこいい曲を披露したことで、観客はそれに大盛り上がりだった。

次にlily white。『微熱からMystery』と新曲の『乙姫心で恋宮殿』と『春情ロマンティック』を披露。非常にノリの良い曲ばかりで、楽しく踊る3人に観客達もつられていた。

ユニットのトリはBiBi。『Trouble Busters』でいきなりボルテージを上げ、新曲の『最低で最高のparadiso』と『PSYCHIC FIRE』の「BiBiコール」でそのボルテージをさらに上げた。

ユニットの次は学年順。

まずは2年生。『Future Style』を3人で披露して、まずは穂乃果がソロで『きつと青春が聞こえる』とアメリカで聞いたという『As Time Goes By』。英語の発音は特訓したもののまだ完璧とは言えない。だけど観客の人達はその頑張りを認め大きな拍手を送った。

次にことりが『COLORFUL VOICE』と『スピカテリブル』を披露。かわいい歌声から一転、切なそうな歌声が観客の感動を誘った。

最後は海未。『Anemone heart』と『私たちは未来の花』を披露した。2曲通してかっこいい歌声にみんな魅了されたことだろう。

次に1年生。3人で『Hello, 星を数えて』を披露して、まずは凜がファッションショーでセンターを務めた『Love wing bell』、そして『くるりんMI



RACLE』で観客と盛り上がった。

その次に真姫が不思議な夢の中で聞いた『Music S.T.A.R.T!!』、そして「ドンウオーリドンウオーリ 今から超戦車」とファンの間でネタにされている『Daring!!』を披露した。ネタにされているからか、かなり盛り上がっていた。

最後に花陽が『好きですが好きですか?』でこりに負けないぐらいのかわいい歌声で観客を魅了し、『なわとび』で綺麗な歌声を披露して感動を呼んだ。

そして最後は3年生。3人で『?↑HERTBETA』を披露して、まずはにこが『乙女式れんあい塾』と『にこぷり♡女子道』で会場をにこ色に染めた。にこは夢である最高のアイドルだ。少なくともおれはそう思う。

次に希が『友情ノーチェンジ』、そしてバラード風の『もしもからきつと』を披露した。どちらも希がMusと出会ったことへの感謝とかそんな気持ちがかもっている選曲だった。

最後には絵里が『soldier game』、『冬がくれた予感』を披露した。とても透き通って綺麗な歌声にきつと観客は魅了されただろう。

しかし、それで曲が終わることがなく、絵里のソロ曲である『ありふれた悲しみの果て』のイントロが流れ出し、絵里が歌うものだとみんな思ってただろう。でも歌ったのは絵里ではなく……おれだ。観客の人達の驚いた声は今でも思い出せる。サビでは絵里

とのデュエット。さらにそこからデュエット曲が続く。

『Storm in Lover』、『硝子の花園』、『WILD STARS』。おれはこの時、ステージで歌うことの楽しさがわかった。

正直、最初は歌うことに抵抗はあった。おれはμsの一員だが、あくまで裏方でみんなを輝かせるのが仕事だと思っていた。でも、みんなが「やってみたらいい」と言ってくれたし、それに「もうこれで最後だからやってやろう」という気持ちもあった。

そのあとA—RISEがMCで観客を盛り上げてくれてる間に衣装チェンジを済ませ、『LOVELESS WORLD』を再登場曲として披露した。観客はMCで若干休憩できたのか、最初みたいな盛り上がりを見せていた。

そしてラストパートに、地区予選で披露した『ユメノトビラ』、予選決勝披露した『Snow halation』、そしてこの場所で行われた決勝で披露した『Kira—Kira Sensation!』の3曲を選んだ。あの時の思い、興奮を思い出した。曲が終わって舞台裏に下がると、観客からアンコールの声が聞こえてきた。あの決勝の時と同じだと思いつつ、μsは再びステージに現れる。曲はもちろん、『僕らは今のなかで』。そして続けて『それは僕たちの奇跡』も披露した。

次に披露したのは“始まり”の曲だ。

μsの始まりの『START：DASH!!』。

9人の女神の始まりの『僕らのLIVE 君とのLIFE』。

10人のμ、sの始まりの『No brand girls』。

そしてスクールアイドルみんなの曲の『SUNNY DAY SONG』。

まるでμ、sの歩んだ道を辿るような時間だった。そして今日、その道は終着点を迎える。

「私たちμ、sは……今日をもって活動を終了することにしました」

穂乃果から唐突に発せられた言葉に観客達は驚きを隠せない様子だった。

「スクールアイドルは、限られた時間のなかで精一杯輝く存在……」

「私たちは限られた時間のなかで精一杯輝こうとするスクールアイドルが大好きなんです」

「μ、sはその気持ちをお大切にしたい……10人で話し合ってそう決めました」

「確かに続けて欲しいという気持ちもわかります。ラブライブ!のために、スクールアイドルのために力をかせるようになったことも嬉しかった……」

「μ、sはスクールアイドルであってこそ、そして10人であるこそμ、sなんです……だれか1人でも欠けたらμ、sではないんです!」

「これは本戦を前に私たちが相談して決めたことで、その答えは変わりませんでした」

「ウチらはもう、μ、sを続けることは……ありません」

「私たちはやっぱり、スクールアイドルであることにこだわりたい！だって私たちはスクールアイドルが好き……」

「そう、学校のために歌って、みんなのために歌って、同じ学生が、この10人が集まり、競い合って手を取り合っていくスクールアイドルが好きなんです。

だからスクールアイドルじゃないμ，sはμ，sではないんです。

でも、スクールアイドルフェスティバルでみなさんわかってくれたはずです。スクールアイドルの、その輝きの素晴らしさを！

ラブライブ！は……スクールアイドルはこれからも大きく広がっていく！」

みんなの思いをしっかりと観客達に伝えて、おれ達はμ，sの最後を伝えた。

『今日この日をもって、μ，sは……おしまいにします！』

観客からもμ，sの終わりを悲しむ声、しかしそれを認めお礼を告げる声、様々な反応を聞いたおれ達は涙を止めることは出来なかった。

そんなおれ達は最後にスクールアイドル、μ，sへの感謝を込めた曲、『そして最後のページには』を披露した。

だが、この曲が終わって舞台裏に下がっても歓声は止むことがなかった。そしてこの日、2度目のアンコールの声が会場全体に広がり始めた。

——その歌は始まりの『僕らのL I V E 君とのL I F E』の衣装で

——みんなの人差し指にはめている10色の指輪と同じ色の名前の

『MOMENT RING』

そうして、最後を伝えるライブが終わった。

しかし、まだおれ達のライブは終わっていない。

東京ドームで開催された第3回ラブライブ!

その閉会ライブが、おれ達の本当の最後のライブだ。

「いちー!」

穂乃果……

「にー!」

ことり……

「さん!」

海未……

「よん!」

凛……

「いー!」

真姫……

「ろくー！」

花陽……

「ななー！」

にこ……

「はちー！」

希……

「きゆうー！」

そして絵里……

「じゆうー！」

さあ行こう。これがおれ達の、μ s の、最後のライブだ……！  
最後の円陣は、みんなで肩を組んで……

『μ s ……ラストミュージック………スタートー』  
!!!!!!

μ s コールが反響するドームに現れた大きな蓮の花のオブジェクト。

曲のイントロが流れるとその花は開いて、その中で9人の女神達が最高に輝いていた。

曲名は……『僕たちはひとつの光』。

——終わった。

曲が終わってみんなで涙を流した。

しかし、そんなおれ達の元に届いたのは……

『もう一回！もう一回！もう一回！もう一回！もう一回！もう一回！もう一回！もう一回！もう一回！もう一回！……』

その声を聞いたおれ達は、9人の、いや、10人の最後の曲を披露した。真姫の伴奏で、さらにおれも歌った、正真正銘の“10人の最後の曲”。

『これから』

曲が終わり、拍手と共に、スコールが聞こえてきた。





ライブのそれぞれで撮った集合写真を貼った。

——そして、おれと9人の女神の物語は終わった。

さくて、次回の『ラブライブ!〜1人の男の歩む道〜』は……

ナオキです。

春は出会いの季節や別れの季節と言いますね。春夏秋冬色んな特色がありますが、人にも色んな物語があるものです。

さて次回は、「これまでラブライブ!〜1人の男の歩む道〜」で『最後の一年のはじまり』編から『ゴールまでの一歩』編の振り返りをお送りします。

それでは次回もお楽しみに!

ピカピカぴかりん、じゃんけんポン!

Another way「これまでのラブライブ！〜1人の男の歩む道〜アフターストーリー編」

——最後の一年のはじまり編

——4月。

音ノ木坂学院では入学式が行われた。穂乃果の妹の雪穂、そして絵里の妹でおれの義妹の亜里沙も今日から音ノ木坂学院の生徒だ。そして2人は早速アイドル研究部に入ってくれた！

新2年生の真姫、凜、花陽は新歓ライブに向けての練習をして、新3年生の穂乃果、海未、ことりも6月の第3回ラブライブ！の閉会ライブに向けての練習に励んでいた。卒業していった絵里、希、にことも集まって10人で練習もしている。

始業式でおれは生徒会長としてみんなの前で挨拶をやり遂げた。μ'sのライブで何度も人前で話したから結構慣れてきたところがある。

3年生のクラスも穂乃果、海未、ことりと一緒になるなんて思いもなかったなあ

……あとヒフミの3人も。それに担任の夕暮童子先生は絵里が3年生のときの担任でもあり、理事長に代わって音ノ木坂学院アイドル研究部の顧問となった。

次の日、生徒会室にある訪問者がやって来た。マッシュ・ライト、新入生だけ入学式前に行われた学校案内を受けてなかったからそれを受けたいと言いにきてくれたカナダ出身の女の子だ。何はともあれ、おれは新入生歓迎会の日にこの子に学校案内をすることになった。

そして新入生歓迎会の日、学校案内を終わらせたおれはマッシュに新歓ライブの宣伝をしてから真姫、凜、花陽の元に向かった。

新歓ライブは大成成功だった。披露したのは『Hello, 星を数えて』と『STAR T: DASH!!』の2曲だ。最初は0人だった講堂。しかし、今はこうして満員のお客さんが来てくれている。そんな新歓ライブのお客さんの数を見て、μ'sの活動の成果を感じた。

新歓ライブからしばらく経ったある日、おれ達は部室で新入部員の歓迎会をした。

入ってくれたのは雪穂と亜里沙に加えて、福田真癒美、奥村瑞希の4人だ。真癒美はダンス経験もあるらしく、童子先生の提案により屋上で凜とダンス対決をした。しかしと言うかやはりと言うか、結果は凜の勝利だった。でもこの勝負が真癒美の中の闘志に火をつけた。

1年生のみんなの練習もいよいよ本格始動した。おれもついつい熱が入ってしまった。

屋上で休憩していた時、後ろから視線を感じたおれはゆつくりと屋上を出た。そして屋上へ続く階段で、やっぱりあの子がいて呼び止めた。その子はマシユ。新歓ライブの時、キラキラした目でライブを見ていたから気になっていた。そしておれはマシユを勧誘した。少しの勇気を出せば、たった一步踏み出すだけで道は開ける、それをマシユに伝えたかった。

「わ……私は……したい……スクールアイドルがしたいんです！あの講堂でのライブで踊っていた先輩方の姿を見ていて、なんだか不思議な気持ちになって……なんであんなに輝けるのか……そして私も輝きたいって……！」

だから、私をアイドル研究部に入れてください！」

こうしてマシユはアイドル研究部の一員となった。

そして訪れた第3回ライブライブ！決勝の日。おれ達々 sは最後のライブの日を迎えた。そのライブを1年生達も観てくれていた……々 sが伝説になった瞬間を。

帰ったおれと絵里を出迎えてくれた亜里沙は1年生で決めたことを教えてくれた。

『私たちも々 sに負けないぐらいの“輝き”を目指そう』

——この想いをアナタに編

新しい生活に慣れてきて、μ'sのラストライブも終わった頃、おれ達アイドル研究部はある重要なことを決めようとしていた。

それは、音ノ木坂学院アイドル研究部所属のスクールアイドルのグループ名である。

μ'sはおれ達10人のグループ名。他の誰のものでもないおれ達10人のものという認識だ。そしてこれからのこの学校のスクールアイドルの名前は同じもの、つまりはみんなで受け継いでいくものが好ましい。

そしておれはピンときてある名前を思いついた。その名は……………

——Shooting Stars

スクールアイドルは限られた時間の中で輝く存在だ。その輝きは古いものから新しいものへと変わっていった、また新しいものへ変わっていく。それが流星群みたいだなんて思ったから、流星……”流れ星”って意味の”Shooting Star”を複数にして、”Shooting Stars”って考えたんだ。

その案にみんな賛成の声をあげてくれ、おれ達のグループ名は『Shooting Stars』となった。

定期試験も近づくと、海未が参加する『日本道場最強決定戦』の練習にも力が入ってきておて、ほぼ毎日のように園田道場で汗を流している。……それに”あのこと”にも。

おれは絵里にあるサブライズを計画していたんだ。それが、絵里をあんな才モイにさせるなんて……今でも少し、後悔している。

そしてやってきたテスト最終日。

テストが終わったあと、おれとことりは一緒に教室を出てまた”あの”練習をした。絵里にバレそうになったこともあったけど、なんとか隠し通せている。

そしていよいよ”あの”本番の日を迎えた。

その日は朝から道場で海未と練習をした。今回は窓を閉め切って練習をする『閉め切り稽古』をした。夏の暑い中にするから結構キツいてけど、極限まで追い詰めた状態でする練習は確実に成果が出る。

道場での練習が終わって希とにこが絵里を連れ出してくれている間に、おれは家で準備を始めた。練習の通りに野菜を切って、具材を煮込んで、ことりとにことした練習を思い出しながら作っていく。練習は本番のように、本番は練習のようにとはよく言ったものだ。

そう、おれが計画した絵里へのサプライズ。それは料理だ。料理の知識や技術が全くない、ゼロなおれは前々からことりやにこの協力のもとで基礎の基礎練習を重ねた。まだ不慣れなところもあり、指を切ってしまうことは何度かあったが、それでも絵里のためという想いがおれの背中を後押ししたようだった。

——完成した料理はカレー。隠し味には絵里が好きなチョコレートを使った。そんなカレーを振舞って、「美味しい」と言って貰えた時はとても安心した。

そしてことりとにこに教えてもらえなかった料理に大切な調味料というものを絵里から教えてもらった。その名は、愛。しかし、その調味料はもう既に入っていたらしい……なんか照れるな。

翌朝にはおれの目標だった絵里の弁当を作ってあげることが出来た。今回のサプライズは大成功と言つてもいいだろう。これがおれから絵里へのゼロからの愛だった。

絵里に料理を振舞った日から数日後、おれはことりのにこに絵里に作ったのと同じやり方で作ったカレーをお礼として振舞った。

そしておれが食器とかを洗い終わった後だった。

「私………ずっと前から………ナオキくんが小さい頃に、東京にいたときから……!!」

ナ………ナオキくんのが、好きでした!!」

——突然だった、ことりから想いが伝えられたのは。

ことりからの告白は断つたが、ことりの涙の理由わけを聞いておれの中ではさらなる不安が湧き上がってきた。

おれには絵里がいるからという理由で、みんなからの告白を何度も断つてきた。告白をするみんなも断られるとわかっていたが、それでも告白してきた。きつとそれはとても辛いことなんだろう。ことりも言っていた通り、告白をしておれとの関係が怖いのもわかる。だってそれはおれもある意味一緒だから。おれも告白を断つてみんなが傷つくのが怖いんだ。

そしてもし、このことを絵里に言ったら絵里は傷ついてしまうんじゃないか？そんな絵里を想つての考えが、後にあんな事態を招いてしまうなんてこの時のおれは思いもしなかった。

テストの返却、修業式も終わつていよいよ待ちに待った夏休みだ。

その日に親戚の奈々おばさんから電話があつて、おれのいとこである桜内梨子ちゃんをしばらくの間預かることになった。亜里沙はとてもはしゃいでいたけど、絵里はなんだか緊張していたし、それに若干梨子ちゃんに対して嫉妬していた。

梨子ちゃんが来た次の日、梨子ちゃんを真姫に会わせるために音ノ木坂学院に連れて行った。梨子ちゃんはピアノを習っているみたいだし、真姫に会えばこれからのために



なるかもしれないし。

真姫は梨子ちゃんの弾く音に興味が湧いたらしく、真姫と2人で音楽室で梨子ちゃん  
の曲を聴くことになった。曲目は『空』、梨子ちゃんが好きな曲らしい。それに、屋上で  
の練習の休憩中に、梨子ちゃんのピアノの音色が聞こえてきて疲れていたみんなを癒し  
てくれた。

そしていよいよ夏合宿の時期がやってきた。

水着も持ち物の中に入れていたけど、おれはあいにく水着を持ってはいなかった。な  
ので休日に絵里と買いに行くことになった。ついでに絵里の水着も。

おれが選んだデザインは即刻却下されたが、絵里が選んでくれたものを買った。

おれの水着を買ったあとは絵里の水着の番だ。絵里の為とはいえ、女性用水着コー  
ナーに入るの少し抵抗があった。でも絵里の水着姿を拝めたので満足だ。

それからしばらくシヨツピングモールをまわって絵里とのデートを楽しんだ。

そして月曜日、いよいよ夏合宿の舞台である西木野家の別荘に向かうのだが、1年生  
達にはアイドル研究部恒例(?)の“あれ”を告げた。

「では、これから1年生もだが、アイドル研究部全員は……先輩禁止だ!!」

『先輩禁止〜?!?』

行きの電車の中、1年生達は早速“先輩禁止”に翻弄されていた。おれも童子先生の言葉に翻弄されたけどな。

別荘ではおれと童子先生は2階にある個別の部屋に、他のみんなはリビングで寝ることになっていた。

ちなみに初日はみんなで海で遊ぶことになっている。みんなそれぞれ海を楽しんでいる中、おれは椅子にもたれてぼーつとしていた。これがおれの海の楽しみ方だ。

そして“それ”はお昼ご飯を食べ終わった後に起こった。バレーボールがおれの顔面に直撃して、その反動で真姫のお腹にダイブしてしまった。これは大分まずい、ダイブだけに。まあ、当たり前だけど、その後真姫に思いつき頬をビンタされた。

晩ご飯の後、おれはお風呂に入ることにした。真姫の別荘のお風呂はとても大きかった。そんなお風呂を独り占めに出来て幸せな気分になっていた中、更衣室のカゴの中に女性用のパンツを見つけてしまい、それはそつと元の場所に戻しておいた。

部屋で絵里との電話が終わった後、真姫が来て勉強を教えてくださいと言ってきたから、おれは真姫がわからないところを解説した。その後真姫は問題を解いていたから自分の作業をしていた。でも真姫は今日1日で疲れたのか寝てしまったので、ベッドに寝転ばせた。そしてトイレから帰ってきたおれは、海末に海に沈められた。

次の日からはいよいよ練習が始まる。あ、おれは無事に救出されて生きています。

合宿2日目、3日目の練習メニューは海未が考えていた。みんなはそのメニューを見て絶望していた。まあ、気持ちはわからないでもないけどな。

2日目の晩ご飯は別荘の冷蔵庫にあった1枚3000円もするステーキだった。

次の日の早朝、みんなを起こさないように外に出たおれは去年の夏を思い出しながら海を眺めていた。そして珍しく早く起きて来た穂乃果から……

「穂乃果ね、ナオキくんのが好きだったの。気が付いたらずつとナオキくんのことを見てた。最初は憧れてるだけかと思っただんだ……でもそうじゃなかった。」

私、ナオキくんのが好きなんだって……!」

……告白された。

ある程度は予想はしていた。また誰かから告白されるかもしれないなど。びつくりしたのもまた事実だ。でもおれは、誰から告白されたとしても、この関係を崩したくはない。そんな思いを背負い、ハッキリと自分の気持ちを伝え、断った。

その日の練習中、マシユが足をくじいてしまうというハプニングもあったが、みんなに出来たてホヤホヤの新曲、つまりShooting Starsのデビュー曲を初お披露目した。その次の日からはついに新曲のダンス練習、歌の練習が開始された。練習をしながらの改善にはなったけど、これもまたみんなで作っていく感じがして良い。

曲の練習が続いて、ついに合宿最後の夜、みんながBBQをして盛り上がった。雨が

降ったけど穂乃果が気合いで晴らしたのは流石に信じられなかった。世の中何が起くるかわからないもんな、うん。童子先生もお酒を飲み過ぎて、”音ノ木坂の酒呑童子”モードになったりもしたな。

BBQの後はみんなで花火をした。そしておれは真姫に呼び出されていたから、真姫の隣で線香花火を見ながら耳を顔の見えない真姫に傾けた。

「私ね、ずっと前からナオキのことが好きだったの。仲間としてじゃなくて、一人の恋愛対象として好きなの……」

なんとも真姫らしい告白だった。でもそんな真姫に対してはある願いがあった。それは、「好きな人と結婚して欲しい」ということ。勝手な考えだけど、真姫は政略結婚とかそういうのに一番近そうだからそこだけが心配だった。楽しい花火の時間もあつという間に終わってしまった。

そして色々あつた合宿もついに終わりを迎え、おれ達は東京に帰った。

久しぶりの自宅でおれは安心したのか知らぬ間に寝てしまっていた。絵里と梨子ちゃんも前より仲良くなっていた気がする。

その日は合宿の思い出話で持ち切りだった。色々絵里からは責められたけど、やっぱり絵里という時が一番落ち着いた。

合宿から帰ってきてしばらく練習は休みの期間になっていた。そんな中、一応りー

ダーである凜と一緒に備品の買い出しにショッピングモールに向かった。

凜と買い物をしていると、妹がいたらこんな感じなのかなと考えてしまう。いい意味で騒がしいし、元気だしな。

買い出しが全て終わると、凜が屋上に行きたいと言い出したからそこに向かった。でもおれは高いところが苦手だ。屋上の入り口付近から動こうとしなかったら、凜が壁にもたれて凜らしくもなく黙って夕日を眺めていた。

「凜の中ではね、ナオキくんは……特別な存在、なんだよ?」

そんな凜の口から放たれたのは告白の言葉だった。だけど、告白を断った後の凜はいつも通りだった。だからおれもいつも通りにした。

凜はきつと強がっていると直感的には感じていた。でもおれはそれ以上何も言わなかったし、あくまでいつも通りにした。それが正解なのかはわからないけどな。

また別の日、おれと絵里は近くで開催される夏祭りでする浴衣デートになった。浴衣は海末の家で貸してくれることになっていた。亜里沙と梨子ちゃんは穂乃果の家で借りるみたいだ。

海末の家で浴衣に着替えていざ絵里と夏祭り浴衣デートへ。絵里の浴衣はやつぱりよく似合っていた。こうして絵里と夏祭りに行くのはおれが昔東京にいた時、大体幼稚園に通っている時以来だ。

射的をして、焼きそばを食べて、金魚すくいをいって、そしてかき氷を買って小さい頃に絵里と見つけた寺の裏山で花火を見た。

2人つきりで花火を見れると思っていたのに、まさかにご、希、梨子ちゃんを含めた Shooting Stars のみんなも来るなんて思いもしなかった。

この日はみんなにとつていい思い出になっただろうし、梨子ちゃんとまた一緒に夏祭りに行こうと約束もした。

そしてさらに別の日、絵里、亜里沙、梨子ちゃんと4人で西木野病院が支援しているホテルのプライベートビーチに行った。

おれは相変わらずのんびりとさせてもらっていた。昼過ぎからは遊んだけど。スイカ割りをしたり、ビーチバレーをしたり。梨子ちゃんも亜里沙ちゃんとはしゃいでいて、とても楽しそうだった。もちろん、絵里とも楽しい時間を過ごさせてもらった。

梨子ちゃんと話している時に、梨子ちゃんが真姫のことを尊敬の意を込めて”先生”と呼んでいることがわかったし、今回の本目的は絵里と過ごすこともあったけど、何より、もうすぐ帰ってしまう梨子ちゃんの思い出作りだった。

次の日、おれと絵里が作った料理を梨子ちゃんに食べてもらった。でもどこか亜里沙ちゃんの様子がおかしかつた。最初は辛いからだろうかと思っていたけど、絵里からその理由を聞いて合点がいった。

さらに次の日、この日から練習を再開する予定だったけど、急遽梨子ちゃんのミニ演奏会が催された。それが開かれる音楽室にはShooting StarsのメンバーだけではなくOGである絵里、希、にこも揃っていた。

その日、梨子ちゃんが弾いてくれたのは『空』だけではなかった。μ'sの曲で梨子ちゃんが気に入ったという『ユメノトビラ』をなんと弾き語りで披露してくれた。真姫曰く、この曲をみんなに聞いてもらいたくて集めたいらしい。

そして最後には亜里沙から梨子ちゃんにバレッタが贈られた。梨子ちゃんは早速それをことりに付けてもらって帰って行った。

校門まで梨子ちゃんを見送った時、梨子ちゃんから言われたことがとても嬉しかった。

それは……

「私ね……この音ノ木坂学院を受験して、ここの生徒になる!」

別の日の練習の帰る時、ロッカーの中に朝にはなかった物があつた。それは手紙で、送り主は花陽だった。内容は……

「私はあなたのことが好きです。仲間として、友達としてじゃなくて、1人の男の子として好きです」

告白だった。花陽はみんなのように直接伝えられず、手紙という形を取ったんだろ

う。返事はいらないと書いてあったけど、しっかりと返事を書いて花陽のロッカーに入れた。

そしていよいよ、日本に存在する道場の中での最強を決める大会、『日本道場最強決定戦』の日がやってきた。この日のために海末は血のにじむような特訓をしてきた。その成果を見せるときだ。この大会で海末は園田道場の跡継ぎに相応しいことを両親に示さなければならぬ。もちろん、この日はみんな海末の応援に来ている。

海末は日舞、弓道でトップの成績を収めてこの大会の優勝候補として話題になった。

そして優勝が決まる剣道の決勝戦。その相手は無名の選手でここまで海末と同じ無敗で勝ち進んでいる白鉄大地という人物だった。その勝負は「最強」を決めるに相応しい戦いだった。おれも試合を見ている時に瞬きを忘れていた。

結果はもちろん、海末の勝ちだ。これで園田道場は日本最強の道場として名を轟かせた。相手の無名道場も同じぐらいに。

そして試合が終わった後、おれは控え室に足を運んだ。前に海末から「優勝したら聞いて欲しいことがあるから聞いて欲しい」と言われていたからそれを聞きたためだ。そんな海末の口から出た言葉は……

「ナオキのことが……好きなんです！」

告白だった。



この告白をもつて、おれは、sの全員から好意を向けられていたことがわかった。そして、この”問題”は急激に加速した。

朝、おれは悪夢にうなされて目を覚ました。それは、絵里に捨てられてしまう夢だった。今でも思い出すだけで気分が悪くなる。あんな夢、2度とごめんだ。でも、この夢は不幸にもこれから起こることの暗示だったんだ。

練習中、希から届いたメッセージを見ておれは飛ぶように自宅に帰った。

帰ると、絵里は部屋で涙を流していた。

「ナオキ、私に隠してることとかない?」

——凶星だった。

「なんで黙ってたのよ。みんなに告白されたこと……」

——絵里のために黙っていた。

そうすぐ言えばもしかしたらこんな展開にはならなかったはずだ。

「ずっと、ナオキが隠し事してるのになって心配だった。しかもその内容がみんなから告白されたことだなんて、そんなの不安になるに決まってるでしょ! ナオキの分からず屋! 私の気持ちぐらい考えてよ!!」

「おれが絵里の気持ちを考えてない?」

……バカ言ってるじゃねーよ！おれは絵里が傷つくと思つてこのことを黙つてたんだよ！絵里の気持ちを考えないわけないだろ！？おれは……おれは、絵里のために……！！

「だから私のためになつてないのよ！私は告白されたことぐらい言つて欲しかつたのよ！あのときの料理のサプライズは嬉しかつたわ。でもこんなサプライズなんて嬉しくない！確かに言わない方がいいことだつてあるわ。でもこんなこと隠されてたらなにかまずいことがあるんじゃないかって不安になるはずでしょ!？」

「だからおれは絵里にそう思つて欲しくなくて……!？」

「だったら言えばよかつたじゃない！言つてもし私が落ち込んだりしたら……慰めたらおしまいな話じゃない！ナオキが私を一番愛してるつて証明してくれば済む話じゃない!!」

——おれと絵里は、はじめて怒号を交えて本音をぶつけた。これが2人にとって初めての喧嘩だつた。

そして絵里は止めるおれの手を振り払つて……外に出ていつてしまった。

おれはすぐにでも追いかけてたい。追いかけて謝つて今まで通り仲良くしたい。でも、おれの体を、絵里を泣かせてしまったことから来た罪悪感が押さえ込んでいて動かなかつた。

そんな時に帰ってきたのは亜里沙だった。亜里沙はおれに対して怒っていた。いや、怒ってくれた。亜里沙にビンタされるなんて思いもしなかったけどな。

「お義兄ちゃん、亜里沙はなんで追いかけないのって聞いているの。喧嘩したのかもしれないけど、喧嘩するお義兄ちゃんとお姉ちゃんなんて私見たくない!私は仲の良いお義兄ちゃん達が好きなのツ!!」

そう、仲良くしたいのはおれだけじゃない。絵里も、亜里沙も同じように思っている。おれはそんな気持ちも、絵里への最大の愛を力に変えて立ち上がった。

——おれは走った、みんなに電話しながら色んなところに。マンシヨンの近くの公園や秋葉周辺を走り回った。人の視線なんてどうでもよかった。そして音ノ木坂学院の前にいた時、電話をかけていた希から絵里を見たとの情報を得て、希の住んでいるマンシヨンの近くにある公園まで猛ダツシュした。絵里に早くこの想いを伝えたい、その一心で。

そしてその公園にちゃんと絵里がいた。おれは気づいたら絵里に抱きついてた。

「おれはあのことを絵里に言ったら絵里が傷つくと思ってたんだ。だから隠してた。でも本当は違った。絵里が教えて欲しかったって怒ったときに気付いたんだ。

おれはまだ絵里の気持ちもちゃんと理解できてなかった。全然わかってなかった。だから絵里を傷つけて、嫌な思いをさせて……泣かせて、おれは最低だ!ごめん、絵

里……!!」

切らした息を吐くのと同時におれは絵里に自分の想いを伝えた。

「あ、謝らないといけないのは私の方よ……ナオキは私のために黙っててくれていたのに、私気付いてたのに、ナオキに酷いこと言っちゃったもの……!ごめん……ごめんなさい……!!」

おれと絵里は無事に仲直りできた。

おれは絵里をこれから先何があろうとも、何が起ころうとも愛し続けることをこの綺麗な月の下に誓った。

次の日、おれは絵里を除くμ、sのみんなからお叱りを受けた。そして罰として絵里と2人で西木野病院所有のリゾートホテルに行くことになった。しかも貸し切りで。

ホテルには泊まる部屋に露天風呂はあるし、色々な種類の温泉、ゲームセンターやカラオケとかの娯楽施設もあった。絶対高いよな、ここ。

その日の昼ご飯は明らかに高級なお寿司だった。そしてその容器を返しに厨房に行った時、ここには居ないはずのμ、sのみんながいた。どうやら、ホテルを貸し切りにするには一筋縄では行かなかったようで、追加条件としておれ達が泊まっている間にホテルの手伝いをする事になったらしい。本当は隠れながらするつもりだったらしいけど、この機会に堂々と手伝いをしてくれと頼んだ。その方がみんなにとっても動き

やすいだろうしな。

それに、絵里との関係が上手くいっているのも、少なからずみんなの協力があってこそだから。

色んな娯楽施設で遊んで汗をかいたおれ達は温泉に向かおうとしたところに海未が現れた。そして温泉の前に食事をするようになったんだけど、場所は高級レストランだった。

初めての高級レストランに緊張していたけど、他のお客さんがいなかったのが幸いだった。メニューはいわゆるフルコース料理だったけど、あまりお腹いっぱいにならなかった。

レストランでの食事が終わり、次はお待ちかねの温泉だ。でも、貸し切りだと思って入った温泉にはホテルの支配人の梅島さんがいた。そこで梅島さんからされたのは奥さんと別れた理由だった。それは些細な喧嘩だったらしい。おれは梅島さんの気持ちを考えて、その話をしている時の梅島さんの顔を見れなかった。そんな話をしたのも真姫からの頼みだったらしい。そして梅島さんから伝えられた言葉は今でもおれの胸に残っている。

「だからね、君たちには選択を誤ってほしくない。お互いにお互いを理解して、お互いがお互いのことを考えて、過ごしていつてほしい。そう私は思う。決して、私の、私達のもの」

ようなことにはなつて欲しくない……」

温泉から出たおれ達は湯冷ましに近くの散歩道を歩いた。冷たい風がとても気持ちよかつた。

部屋に戻り、備え付けの露天風呂に2人で入ることになったけど、そこで綺麗な星空を眺めた。そしてその後は2人つきりで夜をゆつくりと過ごし、翌日チェックアウトをした。

また来れるといいなあ……

そしてついに Shooting Stars のファーストライブの日がやってきた！この日のために練習をしてきたみんなも上手くやれるか不安になったりして緊張していた。でもその張り詰めた緊張を解いてくれたのは童子先生だった。

おれ達は *μ's* の時と同じように全員で掛け声をしてライブに望んだ。そう、13人全員で。

放送席で機材を触る時、ヒフミなど有志が集まってくれた音ノ木坂学院のみんなも準備を手伝ってくれたんだ、必ず成功させる！と心の中で誓った。

Shooting Stars のたった1曲のファーストライブ。その曲はおれ達のデビュー曲だ。この曲からおれ達の“輝き”は始まる。

その曲名は……『Shooting Stars ～流れ星のように～』

ファーストライブは大成功!ここから音ノ木坂学院アイドル研究部所属、Shooting Starsの長い道が始まる……!

だけど、ファーストライブの成功を喜んでいるおれ達に衝撃的なことが知らされた。

「実は私……マシユ・ライトは急なのですが、11月にカナダに帰ることになりました……!」

それはマシユが11月にカナダに帰ってしまうということだった。本当は来年に帰る予定だったらしいんだけど、急遽11月に帰ることになったらしい。

だけどおれは、新歓ライブを見てスクールアイドルに憧れて、そしてアイドル研究部に入ってスクールアイドルになったマシユを知っている。だからこそ、おれはそれが許せなかった。

マシユのカナダへの帰国を止めようとするおれをみんなは止める。だけどおれの気持ちは収まらなかった。そんなおれを止めたのは、いや、止めてくれたのは他でもないマシユだった。マシユはおれに「カナダでもスクールアイドルを続ける」と約束してくれた。

「後悔、しないか?」

「しません」

そうはつきりと真っ直ぐ見つめられてこう言われちゃ、おれも折れるしなくなっ

た。

さらにマシユのお別れライブもすると決まったおれ達はさらに心をひとつにした。

——ゴールまでの一步編

9月、いつも通りの日常を過ごしていたおれは理事長に呼び出された。成績のことで呼び出されたと思っていたけど、実際は違った。それは、10月末に音ノ木坂学院を共学にするかどうかを決める会議が行われることが決まったということだった。ついにおれの模擬男子生徒の役目の最終段階だ！

そんなおれにお母さんから突然の帰省命令の電話が来た。しかも絵里と一緒にだ。まあ、おれにとつては少し都合が良かったんだけど、その理由はまた後程。

そして大阪に帰ってきたおれ達を迎えたのはお母さんだった。いい加減ベタベタする性格をなんとかして欲しい。恥ずかしくてしゃべらないねんまじで。

久しぶりの実家はなんだか落ち着くものがあった。お母さんとお父さんとも話が出て、ちよつとだけ嬉しかったし。でも酒が入ったこの2人だけは相手にしたくなかった!!

次の日、おれはお母さんとお父さんに料理を振る舞うべく商店街に絵里と出掛けた。



商店街に向かう途中に昔からお世話になつてゐる喫茶店のおばちゃんと再会して、喫茶店でゆっくりすることになった。でもおばちゃんと話してゐる時は関西弁が戻つてしまつていた。

買い出しから家に帰つて来ていざ調理開始!作る料理は両親の好物の大阪名物お好み焼き!しつかり生地から作るぜ!おれの手作りのお好み焼きをお父さん、お母さんも美味しいと言つてくれて嬉しかった。東京にいて親孝行なんて出来なかつたから少し申し訳なく思つてゐた節はあつた。だからこれがちよつとした親孝行になればいいな。

その次の日、両親の勧めもあつて絵里とデートをしてゐた。場所は新世界。通天閣を真ん中に広がつてゐる有名なエリアだ。

新世界で絵里と仲良くデートしてゐただけ、たこ焼きを食べてゐるおれにまさかの刺客が襲いかかった。

——泥棒だ。

おれは盗られた鞆を取り返すべく気づけば走り出してゐた。あれは盗られてはいけない、そう考えると不思議と力がみなぎつてきた。そして泥棒も捕まえて、荷物も取り返した帰り道、絵里は「なんで必死に荷物を取り返そうとしていたのか」と疑問をぶつけてきた。至つて普通のことなんだけど、絵里はおれの表情を見てただ事では無いと考へたらしい。もう隠しきれないと思つたおれは絵里に白状した。

——鞆の中に入れていた”あの紙”を渡して。

「絵里、その……まだ書けないところは勿論あるし、まだタイミング的には早いかもしれない。でも、おれはそれぐらい本気だ。だから……そこに名前を書いてくれないか？ 出すのもうちよつと後になるかもしれないけど」

「そんなのつ……書くに決まってるじゃない、バカつ……！」

その紙とは、婚姻届だ。

卒業式の日、絵里の両親に渡されたその紙をおれは大切に持っていた。大阪に帰省することになった時、おれの両親にサインしてもらういい機会だとも思った。だから都合が良かったんだ。

絵里に『妻になる人』の欄に名前を書いてもらい、おれと絵里は”共に歩む”ことをこの紙に誓った。出すのはまだ先になるけどな。

そしておれ達は翌日に東京に帰った。

大阪から帰ってきて数日後、おじさんからおれと絵里にあるパーティーに参加するように言われた。そのパーティーは有名企業の社長さん達が集まるらしく、次期ラブラブ！運営委員会の会長とその奥さんにも参加して貰いたいとのことだった。

おれはスーツに、絵里はドレスに身を包んでパーティー会場となっている高級ホテルにおじさんとおばさんと共に足を踏み入れた。

パーティーでは色んな有名企業の人に声をかけられた。この機会にラブライブ!運営委員会の大きさを知ることが出来た。

そして会場の外で休憩している時に、静岡県沼津市の旧網元の名家の娘、黒澤ダイヤちゃんとルビィちゃんに出会った。しかもダイヤちゃんは、sみたいなスクールアイドルになりたいと言ってくれた。こういう志を持つてくれる子がいてくれることがとても嬉しかった。おれ達がやってきたこと、おれ達が歩んできた道がこうやって未来のスクールアイドルに影響していることが嬉しかった。

「——なら、限られた時間で必死に輝いてみる。それはきつと君にとつて良い体験になると思う。おれ達が経験した『輝き』を手に入れてみる」

おれはダイヤちゃんと握手を交わした。

伝説のスクールアイドルの1人として、未来のスクールアイドルの1人に。

そしておれはこの出来事を経験してある目標が出来た。それはおれがラブライブ!運営委員会会長となった時にしたいこと、つまり“夢”だ。

「——おれ、運営委員会の会長になったら、日本全国のスクールアイドルを見に行きたい」

これが、今までおれが歩んできた道です。

そしてそんな歩んできた道も、ついに”最終章”を迎える……!

次章予告!

「ではこれより、音ノ木坂学院の今後についての会議をはじめます」

ついに物語は最終章に突入!

「みんな、全力で輝いてこい!」

ついにやってくる”ラブライブ!”

「みなさん、ありがとうございます!!」

仲間との別れ。

「なんで私達、勝てなかったんだろう……」

葛藤。

そして――

「ふざけないでください  
!!!!!!!」

――衝突。

「絵里、ここでしょうか」

これまで歩んできた道、その先に待つ未来は………! !

ラブライブ！〜1人の男の歩む道〜

最終章〜みんなで歩いた道、これから歩く道〜

「私達は、Shooting Starsを……脱退します」

——次回よりスタート！

最終章くみんなで歩いた道、これから歩く道く

## 第155話 「最後の文化祭」

——大阪を離れて再び東京の地へ。

——そこで再会した幼馴染、出会ったことのある少女達。そして、愛する人。

——輝きを仲間と共に目指し、そして手に入れた。そしてその輝きの素晴らしさを日本に、世界に伝えた。

——愛する人、大切な仲間と共に歩んできた男の道は長くも短くもあり、色々なことが起こる道だった。

——その道は永遠に続く。しかし、その道にもあるひとつの区切りが訪れる。

『ラブライブ！〜1人の男の歩む道〜』

【最終章くみんなで歩いた道、これから歩く道く】

~~~~~

——時は文化祭。

3年生の教室ではナオキ達が最後の準備に取り掛かっていた。

「材料は全部揃ってるね！」

「ほむまんも沢山あるよー！」

「机もよし、椅子もよし、外装内装よし……はい、完璧ですね！」

「あとは営業開始を待ただけだな」

最終確認が終わると、みんなはワイワイと話し始めた。3年生にとっては高校生活最後の文化祭。楽しみでもあり、悲しくもある。

だが誰も「悲しい」とは言わない。それはみんなで約束したからだ。文化祭が終わるまでは「最後」と考えないでおこう、「悲しい」とかそんなことは言わないでおこう、この文化祭を全力で楽しもう、と。

だから今でもみんなは笑顔を浮かべて会話をしている。

ナオキはワイワイとしているみんなを見ながら去年のことを思い出していた。

ナオキがこの音ノ木坂学院に来たのは去年の文化祭の前日だった。その日、ナオキはみんなになんで来たのか事情を話して気持ちを切り替えて、第2の高校生活を始めた。しかし、次の日の文化祭で穂乃果が倒れてしまつてライブは中止、そして第1回ライブ！を辞退。さらに追い討ちをかけるようにことりの留学問題。それを乗り越えて、sは新たなスタートを切った。

そんな日々も今となつては懐かしい思い出だ。

「でも、今年は講堂使えて良かったね！」

「そうだね」

「去年はここが外して屋上になつたもんな」

昨年度の文化祭ライブは講堂ではできなかった。ここがガラガラ（新井式回転抽選器）で白玉を出して使用許可が得られず、屋上で簡易ステージを作つてライブをするこ
とになつたのだ。

しかし今回は違う。今回は見事花陽が講堂の使用許可を引き当てて、Shootin
g Starsは講堂でのライブができることになつた。

「それに、今日はマシユの引退ライブでもあるしな」

「うん……」

「寂しくなるけど仕方ないよね……」

マシユの帰国は11月。その11月からはラブライブ！に向けての練習、ライブが続く。そしてマシユは「ラブライブ！に参加しない私が予選に出る訳にもいかないので10月のライブで最後にします」と自ら志願したため、この文化祭のライブがマシユにとって、Shooting Starsの引退ライブになる。

「でも、マシユのこともあってみんな一致団結しました。大丈夫です」

「そうだな」

ナオキは海末の言葉に笑みを零して頷いた。穂乃果とことりもそれに続くように頷く。

「4人ともくっつ、集まって〜！」

「ん、どうした？」

そんな時、ヒデコが4人を呼んだ。気付くとクラスのみんなが固まってナオキ達を待っているようだった。4人はそれを不思議に思いながらみんなの元に足を進めた。

「うん、これで全員だね！みんな、ここまでお疲れ様。泣いても笑っても今日が本番さいご。今日を最高のものにしよう！えいえい……」

『おー！』

このクラスの文化委員のヒデコの掛け声に合わせてみんなは声を合わせ、拳を突き上

げて一致団結した。

Shooting Starsのライブだけではない、このクラスの催しも最高のものになると4人はさらに気合いを入れた。

~~~~~

『え、みなさんおはようございます。今日はいよいよ文化祭です。部活でも、クラスでも、今日という日を思いつきり楽しんでください。では只今より、音ノ木坂学院文化祭を開催します!』

ナオキが校内放送で開催宣言をするとそれを聞いた生徒のみんなは拍手をしたり歓声をあげたりして、それを合図に入り口からお客さんが続々と入ってきた。

「いらっしやいませ〜!」

「どうぞ寄っていただくさ〜い!」

「来なきや損だよ〜!」

みんなお客さんと呼び込もうと元気に声を出したり、手作りの看板を掲げていた。

ナオキは最初の仕事が無事に終わって放送室で息を吐いた。

「お疲れ様です。次は見回りですよ」

「わかってるよ。じゃあ、行くか」

仕事が終わって束の間、ナオキは海未と一緒に見回りを開始した。

その最中にμ、sのファンだったという人に声をかけられ、ナオキ達は予想以上に疲れてしまった。

——生徒会室。

「見回りがこんなに疲れるとは……」

「仕方ないよ。ナオキくん達はμ、sだったんだから」

μ、sは解散してもその人気は健在だ。しかもそのうちの6名、ナオキを含めると7名は今も音ノ木坂学院でスクールアイドルを続けている。Shooting Starも元μ、sのメンバーがいるから応援しているという人も少なからずいるようだ。

「じゃあ次は私ね」

「ああ、気を付けろよ」

「わかってるわ」

真姫は何食わぬ顔で見回りに向かった。

文化祭の見回りは生徒会だけではなく、文化祭に向けて動く文化委員も参加している。

「さて、クラスの方に行くか」

「そうですね」

「じゃあ私は鍵を閉めてから行くね」

「ああ、頼んだ」

ナオキと海未はフミコより先にクラスの出し物に参加すべく生徒会室を出てその教室に向かった。

ナオキ達のクラスの出し物は喫茶店。ウェイトレスの格好をしたいという意見が多かったためこうなった。特にメイド喫茶とか執事喫茶とかそういうのではなく、ごく普通の喫茶店だ。

ナオキは少々それが意外だった。よくある展開ではここでメイド喫茶や執事喫茶に決まって、ナオキが女装させられたり執事長にされて「あの香川ナオキにお世話してもらえる喫茶店」とか変なタイトルになるからだ。ナオキ自身、そうならなくて安心している。

それにナオキの担当は調理が中心だ。これはこれで結構忙しい。

「いらつしやいませ！2名様ですね。あちらの席をどうぞ」

「いらつしやいませ。3名様でよろしいでしょうか？どうぞこちらへ」

「いらつしやいませつ！2名様ですか？こちらの席へどうぞつ！ほむまんがオススメだよつ！」

「あの3人やるね」

「流石、メイド喫茶でバイトした事だけはあるな」

「確かに」

「注文入ったよ」

「はーい！」

この喫茶店ではことり、海未、穂乃果が先頭に立つて接客を、フミコ、ミカそしてナオキを中心に調理を担当している。そして全体をまとめるのがヒデコだ。

——2年生 教室。

「へいらつしやいにや！」

「す、スーパースクールすくいはどうですか？」

凛達のクラスの出し物は縁日だ。スーパースクールすくい、射的、輪投げなど誰でも楽しめる。服装もお祭り風のものになっていて、凛はノリノリだ。

## ——1年1組 教室。

「ほ、本当にやらないといけないんですか……?」

「頑張つて! マシユさんなら絶対可愛いから!」

「わ、わかりました……」

マシユのクラスは噂のメイド喫茶だ。しかもメイド服は手作りらしく、マシユはことに衣装のこと、メイドのことを相談したりしていた。どうやらマシユは恥ずかしがっているようだったが、勇気を振り絞つていざ接客へ!

「お、お帰りなさいませ……ご、ご主人様……!」

## ——講堂。

「ロミオ……あなたは どうしてロミオなの?」

「ジュリエット……君はどうしてジュリエットなんだ……?!」

真癒美、瑞希のクラスは舞台で演劇を披露していた。演目は『ロミオとジュリエット』。ロミオは真癒美、ジュリエットは瑞希が演じていた。ダンスの練習をしている時、2人とも休憩の合間に演技の練習もしていた。その努力の成果は十分に出ていた。

## ——体育館。

「犯人はあなたですわね」

「くっ……なんで、わかったんですか?」

「それは現場に残された証拠からです」

雪穂、亜里沙も舞台上で演劇を披露するみたいだ。演目は探偵もののオリジナル劇だ。雪穂は主人公の探偵役で、亜里沙は犯人役だった。予測できない展開に客は目が釘付けになっていた。

「亜里沙可愛いわよ」

「ちよつと、恥ずかしいから辞めなさいよ」

絵里は小声でカメラを構えて盛り上がっていたが、それをにこは後ろを気にしながら絵里を押さえていた。

今年の文化祭は昨年度に比べて遥かに盛り上がっていた。それはやはりμ、sの活動の成果と言えるだろう。

μ、sのおかげで音ノ木坂学院の名は知られるようになり、入学者も前年度より多い。音ノ木坂学院入学希望の高校生や地域の人達、卒業生が来ることは例年通りだが、人数は遥かに多かった。

元μ、sの面々はその事実を嬉しみを覚えつつ笑顔で自らの役目をこなしていた。



~~~~~

「ナオキく〜ん、理事長が呼んでるよ〜」

「えっ!?!」

注文が落ち着いてひと息ついているナオキは穂乃果に声をかけられると体を震えさせた。

「ナオキくん、何かしたの?」

「してねーよ!」

ナオキは驚きながらも理事長のすずめがいる席へみんなにからかわれながら向かった。

「あそこだよ」

穂乃果に教えて貰った席にはすずめだけでなく、スーツを着た男の人と女の人が一緒に座っていた。ナオキはその光景を見て頭に被っていた三角巾、手につけていたビニール手袋を外してその席に向かって歩き出した。

「理事長」

「あらナオキくん、お疲れ様」

「おお、君がナオキくんだね」

「はい。あの、失礼ですがどちら様で……？」

ナオキは戸惑いを見せながら声をかけてきたスーツ姿の男の人に話しかけた。するとその男の人と女の人は姿勢を正してナオキの方を向いた。

「申し遅れました。私、音ノ木坂学院の同窓会長をしている兎玉こだまと申します」

「私は音ノ木坂学院理事会役員の辻つじです」

スーツ姿の女、兎玉は上半身を45度くらい曲げて頭を下げ、自己紹介をした。スーツ姿の男、辻は軽く会釈程度にお辞儀をして顔を上げるとメガネを左手で軽く押しあげてその音を鳴らした。

「し、失礼しました！生徒会長の香川です！よろしくお願い致します！」

「大丈夫ですよ。頭を上げて？」

ナオキはまさか同窓会長と理事会の役員とは思わず驚きながらも深々と頭を下げた。そんなナオキを見て兎玉は苦笑いを浮かべながら声をかけた。

「今日はね、是非とも模擬男子生徒が入った学校の様子を見てみたいということで案内をしているのよ」

「そうなんです」

「でも昨年度と比べれば遥かに盛り上がっているわね」

「あ、ありがとうございますー！」

児玉のひと言に話している様子を聞いていたクラスメイト達はホッと胸を撫で下ろした。

「しかし、この結果は、s” 9人”の活動の成果では？やはり模擬男子生徒はいなくても良かったのではないでしょうか？」

しかしそれは辻のひと言によつて緊迫の雰囲気が変わった。これにはすすめや児玉も戸惑いを隠せない。ナオキもまさかの言葉に即座に反応出来なかった。

「そ、それは——」

「——それは違います、辻さん」

「君は……」

ナオキが反論しようとするのを遮つてある人物がナオキの前に出て辻の言葉を否定した。

「お忘れですか？前生徒会長の絢瀬です」

「覚えているとも、絢瀬くん」

その人物は前生徒会長であり、たまたま恋人の様子を見に来た絵里だった。

絵里は生徒会長時代に辻はもちろん、児玉や他の理事会役員なども面識があった。

「お言葉ですが、模擬男子生徒をこの学校に、音ノ木坂学院に必要であったと私は思います」

「その理由は……？」

「まず、 μ sは9人ではなく、この模擬男子生徒のナオキを含めた”10人”です。 μ sがここまで来れたのも、音ノ木坂学院の存続が決まったのもナオキがいる μ sだからこそです」

「しかし、ステージでお客を魅了したのは9人でしょ？裏方にいた香川くんは——」

「——それは違います。裏でナオキがサポートしてくれていたからこそ、私達9人は輝けたんです。そこを勘違いしないで頂けますか？」

「……………」

辻は絵里の言葉に反論出来ずに黙ってしまった。そこへ絵里はさらに追い討ちをかけるように言葉を続けた。

「それに、ここにいるみんなの目を見てナオキが、模擬男子生徒が本当に必要ではなかったと思いますか？」

辻は絵里から視線を外して、こちらを見ている生徒達の目を見回した。

その目は全て、自分の意見に反抗している目だった。それはつまりこの香川ナオキという人物が、模擬男子生徒は必要な存在だったということ。そしてそう思われるほどに

信頼されているということ。

「……………なるほど」

辻は納得したように息を吐いてナオキの方へ視線を移した。ナオキはその視線に気づいて背筋を伸ばした。

「先程の言葉は訂正させていただくよ。すまないね、香川くん」

「い、いえ！」

「君はこの生徒から、いや、みんなから信頼されているみたいだね。絢瀬くんの言葉でよくわかったよ。では月末の会議に向けてすることがあるので失礼します。本日はありがとうございました」

「いえこちらこそ。またいらしてください」

「すぐめがそう言うのと辻は答えるように微笑んで一礼をした後、立ち上がって教室から去っていった。」

その姿を見送ると、教室にいた生徒達は近くににいる人達と微笑みあつてまた先程通りに働き始めた。

「流石絵里ちゃん！かつこよかったよっ！」

「ちよつとやめてよ〜」

「いや、本当に助かったよ。ありがとう」

「べ、別にいいわよ。だって本当のことでしょ？」

絵里は穂乃果とナオキの言葉に頬を赤くした。しかし、ナオキのお礼の言葉に一番照れているようだ。

「絢瀬さんは卒業しても変わらないわね。貴女が生徒会長をしていた時の理事会を思い出すわ」

「絢瀬さんはいつも辻さんと言いつ合っていましたからね」

「その話は辞めてください……！」

児玉とすずめが絵里の生徒会長時代のことを思い出して笑みを浮かべながら話していると、絵里はさらに顔を赤くしてその話を遮った。

「ははは……とりあえずお礼をさせてくれ。どうぞ」

「ありがとう」

ナオキは絵里がすずめ達と同じ机の席に座ると調理スペースにさがって行った。ナオキが去った後、3人は小さな声で会話をした。

「やっぱり、私の目に狂いはなかったようね。それに辻くんもこれで賛成に決めたでしょうね」

「やっぱり辻さんは試していたんですね」

「絢瀬さんは気付いていたのね。辻さんは共学にするかしないかずっと迷っていたのよ。」

それで今回、この学校を見学して決めると言ってくれたのよ」

やはり音ノ木坂学院共学の件は理事会の中でも賛否両論ある。会議までの間、すずめを初めとした賛成派の人達は周りの人達の説得をしていた。辻もその対象の一人であった。

辻は理事会の中でも発言力を持っている役員だ。嫌われるような性格をしているが、この人物を味方にするほど心強いものはない。

「やつと”流れ”がこちらに傾いたってところかしら？」

「でも安心するには早いですよ。結論は当日にならないとわかりませんから」

「……そうね」

話題が会議のことになると空気が少し張りつめる。絵里は少し気まづく感じしていて、ナオキが早く来ないかチラチラと調理スペースの方を見ていた。

しかしそんな空気の中、ナオキは平然と絵里達が座っている席まで料理を運んだ。他の席の女子生徒達は少し羨ましそうにその光景を眺めていた。

「お待たせ致しました。いちごのミニパフェとチョコのミニパフェでございます」

ナオキは丁寧にすずめと兎玉の前にいちごのものを、絵里の前にチョコのものを置いた。

「ありがとう。とても美味しそうね」

「おつまたせ〜」

「おつ、やつと来たか」

Shooting Starsの面々は部室で衣装に着替えて、一足先に講堂に来ていたナオキと合流した。

今回の衣装は前回の文化祭でも着た『No brand girls』のものを使用している。黒と白中心に構成されていて、さらに一部に黄色とメンバーカラーが使われて、ひと言で表すなら”かつこいい”がとても似合う衣装だ。1年生はかつてμ'sが着ていた同じデザインのものに袖を通すことに感動していたが、2・3年生は思い出にふけていた。

あの時は穂乃果が曲の最後に倒れてしまい、メンバー間でもことりの留学の件もあって穂乃果が抜けてμ'sがバラバラになりかけた。でもまたみんなひとつになった……そんな思い出が蘇って来て少し寂しいような気持ちにはなったが、逆にそれを力に変えて頑張ろうとも思っていた。

「よお〜し、盛り上げるぞ〜！」

「穂乃果は盛り上がり過ぎです」

「ははははは……」

「穂乃果ちゃん、凜も負けないからね〜！」

「凜ちゃん、静かにしないと……」

「そうよ。前の人達の出番はまだ終わってないんだから」

2. 3年生は出番が近づくこの状況でもいつもと変わらず話せていることに1年生達は若干羨ましくも思っていた。特にマシユはそんな先輩達の様子を気にすることが出来ない程に緊張していた。

「……マシユ」

「は、はいっ……！」

「緊張し過ぎだ。もうちょっと肩の力を抜いて」

「で、でも……」

「でもじゃない。」センターだから緊張するのはわかるけど、少しは落ち着かないと練習みたいなパフォーマンスは出来ないぞ。ほら、深呼吸深呼吸」

「は、はい……」

マシユはナオキにそう言われると大きく息を吸って深呼吸をした。それに釣られるように他の1年生も深呼吸をしていた。

そう、今回はマシユの最後のライブということもあって披露する新曲のセンターを任されている。そんなマシユを含め、みんな緊張するのは当たり前だ。しかし、だからこ

そ落ち着かなくてはいけない。

深呼吸し終わるとマシユの顔は先程の余裕のなさそうな表情から笑顔に変わっていた。それは他の1年生も同じだ。

「うん、いつも通りの良い顔になった。これなら大丈夫だ」

「あとは全力を出すだけやで。頑張つてな」

『はい！』

1年生の緊張も和らいでみんなが返事をしたところで舞台側から大きな拍手の音が聞こえてきた。それは、前の出番だった教師陣によるエ○タの神様風のネタ披露が終わったということの意味していた。

「よし、いつものやるにや〜！」

『はい！（うん！）』

凜の掛け声と共にみんなはピースの形にした手を合わせて円形に並んだ。

「じゃあみんな、今日も輝いていくにや！」

その言葉を合図に2年生、3年生、1年生、ナオキ、童子と1人ひとり順番に番号を言っていく、最後に声を合わせて手を振りあげた。

「Shooting Stars！」

『ミュージック……スタートー！』

そして、Shooting Starsの文化祭ライブが始まった。

この模様はネットでも配信されていて、沢山の人が注目している。そのことを考えるだけでさつき楽になった緊張がさらに膨れ上がってくるが、先程ナオキに言われた通りに深呼吸をして落ち着いたマシユは最後のステージへ向かう。

『続いては、アイドル研究部Shooting Starsによるライブです』
『おお——!!』

本番直前、アナウンスが流れると待ちわびていた人達の歓声があがった。それとほぼ同時に暗転し、ステージではShooting Starsの面々が配置についた。

そしてライトが付いてみんなを照らすと観客はさらに大きな歓声をあげ、曲が始まった。

まず披露したのは『Shooting Starsの流れ星のように』だ。

みんなデビュー曲として初めて披露した時より完成度をあげていた。特に成長を見せたのは1年生達だ。先輩達には負けてられないと練習をして、時には先輩達にアドバイスを貰ってそれを実践したりしてこの日を迎えた。その練習で得た力を十分に発揮できている。

そして曲が終わって観客の拍手を味わう間もなく次の曲のイントロが流れてきた。それはどこか聞き覚えのある曲。体に染み付いている不思議な感覚を感じながらもステージで踊るみんなも、観客も最高の盛り上がりを見せる。その曲は『No brand girls』だ。

2曲目が終わるとみんなは息を整えてすぐ次の曲のフォーメーションに並んだ。真ん中に1年生、その右側に2年生、左側に3年生が並び、そしてセンターにはマシユ。その光景を見た観客は少しざわざわとしたが、その声は3曲目のイントロが流れ始めるとそれはおさまった。

それはこの日のために作った新曲、『The Special Day』だ。

『私達で、一緒にまわらない？』『きつと、楽しい、祭りにくくなるよ！』

長いイントロが終わると歌い始めは2年生、それに続いて3年生が担当した。振り付けはまるで見ている人を誘うようなものだった。

2年生は凛を中心に3人で引っ付きながら、端の真姫と花陽がそれぞれ右腕と左腕を客席に向かって伸ばしてその手を広げ、3年生は穂乃果を挟んでいる海未とことりが右手と左手を繋いで空いている腕の手を広げて客席に向けて伸ばし、真ん中の穂乃果は手を広げた両腕を伸ばした。

「屋台で美味しいものを食べて」「色んな教室を巡ったりして」

1年生5人のうち両端にいるのは真癒美と瑞希だ。真癒美は箸を持って何かを食べるジエスチャーを、瑞希はその場で駆け足で一回転した。

「ねえ」「どう?」

「行きたくなつたでしょ?」

続く亜里沙と雪穂は両腕を大きく広げ、亜里沙は右腕、雪穂は左腕を客席の方に向けて、反対側の腕を斜め上に伸ばした。

そしてセンターのマシユは右手を腰にあて、ウインクしながら左手で拳銃を構えて撃つジエスチャーをした。撃つと同時に右脚を曲げて、その動きに見ていた観客は歓声をあげた。

『祭りだ!』『今日は特別な一日』『だからこそ、君と過ごしたいんだ』

『祭りだ!』『さあ、めいいっぱい楽しもうよ!』『過ごしたい、君と』

サビに入り、全員で元気よく声を出しながら一斉にジャンプしてかはらマシユ以外が合わせて歌い、その後にマシユがソロで歌った。

さらに曲の終わり直前のところでマシユは左手を腰にあてながら体を斜めにし、右脚のかかとを上げた状態で右手の人差し指を伸ばして歌に合わせて客席に向かって突き出した。

『特別な一日に』「するため♡」

そしてラスト、10人の合わさった歌声の後に音楽が消え、それと同時にマシユが少し頬を赤らめながら右手をぐっと自分の顔に近づけ、その手をLの形にして構えてニコツと笑顔を浮かべて曲を締めると、観客の大きな歓声と拍手が講堂に響いた。

「今日の文化祭、まだまだ楽しんでくださいにや〜！」

凜がそう言うときみんな手を振って、舞台の中心にいたマシユを残して手を振って舞台袖に下がって行った。

残っているマシユを観客は不思議そうに見つめていて、マシユはみんなが下がると前を見つめて深呼吸をした。そしてマシユは言葉を連ねる。

「皆さんご存知の方もいると思いますが……私、マシユ・ライトは11月にカナダへ帰ることになったため、本日をもってShooting Starsを脱退致します。なので今回は最後にみんなのご好意で、私が最後に”1人で”曲を披露させて貰うことになりました。そしてその曲は、アイドル研究部のある先輩のソロ曲です！」

マシユがそう言ってポーズをとると観客は期待の声をあげた。ステージ全体の灯りが消えて、パーライトはマシユのみを照らした。

「それでは聞いてください……『もしもからきつと』」

マシユが曲名を告げるとイントロが流れ出し、それに合わせてゆっくりと踊り始めた。

この曲は希のソロ曲の1つだ。マシユはこの曲に感動、共感を覚えて希に直接「ライブで披露させてください」とお願いして、練習を重ねて今日を迎えている。希に振り付けを教わり、バレエ経験のある絵里にもアドバイスを請うて現在に至っている。そのおかげか、マシユは歌いながらステージを舞うように踊っていた。その歌声、踊りに観客達は感動を覚え、静かにその姿を目に焼き付けるように見ていた。ダンスを教えた絵里、希も客席からその完成度を見届けた。

曲が終わると観客の暖かい拍手と言葉に包まれながらマシユはポロツと目からひと雫が流れた。マシユは観客に向かって講堂を笑顔で見まわしながら手を振ってその拍手と言葉に答えた。

ナオキはそんなマシユと目が合い、「最高に輝いてるぞ」という言葉を込めて右手の親指を立てた。マシユはそんなナオキの仕草が見えたのか、とても嬉しそうな笑顔を浮かべた。

「みなさん、ありがとうございます!!」

そうして Shooting Stars の出番が、そして Shooting Stars としてのマシユの最後のライブが終わった。

マシユが舞台袖に下がる時も観客は暖かい言葉と拍手で見送り、舞台袖ではナオキを含めたみんなと一緒に涙を浮かべながら成功を喜んだ。

丈夫なのだろうか、失敗しないだろうかと考えると足がすくんでしまう。だが、ここま
で来たからには必ずやり遂げてみせるという思いがその決意に、やる気に火をつける。

「ナオキく〜ん!」

「どうした〜?」

「ナオキくんもこつちで話そうよ〜!」

「……わかった〜。今から行く〜」

ナオキは中身のなくなった紙コップをひと握りして潰すと、立ち上がってアイドル研
究部のみんなの元に向かった。

もうほとんど暗くなつた空に一筋の流れ星が目に見えない速さで流れていった。し
かしその流れ星には誰も気づくことは無かった。

——次回に続く。

第156話「音ノ木坂学院の未来」

——10月末 日曜日。

ナオキの姿は千代田区役所の中にある教育委員会の会議室にあった。

今日は音ノ木坂学院を共学にするか否かの会議が行われる日だ。その部屋には理事長のすずめ、同窓会長の児玉、理事会役員の仕事というナオキが知っている人もいたが、その人達以外にも教育委員長、後援会長、そして理事会の他の役員数名もいた。ナオキは会議室に入ってから汗をかきっぱなしのため、喉が渇いてコップに入っているお茶を一杯口に入れた。

——落ち着こう。深呼吸、深呼吸……

ナオキはお茶を喉に通すとゆっくりと深呼吸をして気分を落ち着かせた。

「ではこれから、音ノ木坂学院の共学についての会議を始めます」

そして運命の会議がすずめのひと言をもって始まった。

「まずは模擬男子生徒の香川ナオキくんに報告をしてもらいます。香川くん、よろしくね」

「は、はいー！」

ナオキはすずめに名前を呼ばれると緊張した表情のままその場で立ち上がった。軽く自己紹介をしてから紙を持ちあげてそこに書いてあることを読み上げた。会議室にはナオキの声だけが響いた。

「まず生活面ですが、やはりトイレに関しては現状男子専用はひとつしか無く、先生方と鉢合わせになる可能性があり気まずく感じましたので、男子トイレの数を増やすことは必要かと思えます。あと、更衣室に関しましても同様です」

——流石に、トイレをしながら成績の話はやめて欲しいからな。

「続いては授業についてです。夏場は体育でプールの授業が始まります。自分の場合はプールには入らず教室内での補習になりましたが、共学になればそうとはいきません。なので主に保健体育の授業を中心に見直しが必要かと思えます」

——あの補習時間は辛かったなあ。先生もこれに関しては共感してくれてたな。

「ここからは生徒達のアンケートからわかったことをお話しします。まず、『男子がひとクラスだけにいるのはずるい!』という意見がありました。この意見から、男子生徒が入った場合のクラスの割り振りも人数を設定するなどの対応をした方が良くと思います」

——最初の頃は女子生徒がおれのいる教室を覗きに来てたってけ。

「しかし、生徒の中には男子が苦手で、そのために女子しかないこの学校を選んだとい

う人も少なからずいました。こういう子達やその親御さんなどへは説明済みですが、やはり生徒の間には少なからず不安は残ると思います。なので、そう思わせないように対策を練るべきだと思います」

——この模擬男子生徒の制度も最初は否定されていて、おれが音ノ木に入ってからその声はあつた。でも理事長達はその声をおれ自身に届かないようにしてくれてた。だからこそ、これは成功させないといけないんだ……！

「自分からの報告は以上です。残りの細かい生徒達の意見などは別紙に記載してあります」

「ナオキくん、ありがとう。座ってもらって結構よ」

ナオキは座って静かにひと息ついてから周りの反応を伺った。大人の人達はナオキの言葉を踏まえて、再びプリントに目を通していた。ナオキはその様子を緊張した面持ちで見つめていた。

「やはり、共学にするのももう少し先でもいいんじゃないですかね？やはりこの浮き上がってきた問題を改善してからでも……」

「しかし、そう言って我々は何度も共学を延期してきました。そろそろ共学に踏み切るべきだと思います。そのための模擬男子生徒だったのでは？」

ある役員のひとつでその場の空気は一変し、先程まで口を開かなかった人達が口々に自らの主張を口にした。ナオキはそれをただ聞くことしか出来なかった。

「——今年度の生徒数はスクールアイドルの活躍のおかげで増えましたし、別にこのままでもいいと思いますがね」

そしてしばらく議論が続いた後、後援会長のひとつで全員の発言が止まった。

ナオキはそのひとつに反論しようと声をあげようとした……が、それすらも遮るようにな沈黙を破ったのは理事会役員の辻だった。

「お言葉ですが、それはあまり良策ではありません」

「……何?」

「音ノ木坂学院の周りの学校はほぼ全てと言っていいほど共学です。その状況で生徒数は激減し、ついには廃校の危機に瀕しました。このままではあと数年後、また逆戻りになってしまいます。そうならない為にも一刻も早く共学にして入学者の範囲を増やす方が良策だと思えますね」

「辻さん……!」

ナオキは文化祭の時にキツイ言葉を浴びせてきた辻が本気で音ノ木坂学院のことを考えてくれているのだとわかって感動を覚えた。

「それに、香川くんは共学のためにスクールアイドルとしても頑張ってくれました。そ

の結果が今の音ノ木坂学院を作り上げている、と私は思います」

辻の言葉を聞いた後援会長はそれに反論出来ずに黙ってしまい、先程まで否定的な発言をしていた人達も口を閉じた。ナオキは、やはり辻はここで影響力のある人物の一人なのだと思えざるを得なかった。

「いくつか上がった問題点も対策さえしつかり考えれば解決するわ」

「確かに、それも一理ありますね」

しばらくして誰も発言しなくなると、すずめは全員の様子を確かめてから会議を次の段階へ進めた。

「もう意見も出ないようなので、そろそろ決めましょうか……：共学にするか否かを」

そのひと言により、いよいよ音ノ木坂学院の今後が掛かった会議は終盤に差し掛かった。

音ノ木坂学院の共学に賛成か反対か、過半数以上で数が多い方に決定する。今、この理事会に参加しているのはナオキを外して15名。本来、半々にならない人数で理事会は構成されているため、ナオキがそこに加わると半々に割れてしまう可能性がある。なのでナオキはその結果が良き方になるのを祈るしかなかった。

「それでは、音ノ木坂学院の共学に賛成か反対か、どちらかに手を挙げてください」

そのひと言が放たれた瞬間、ナオキは中で何かが締め付けられて息が詰まるような感

覚を感じた。心臓の音すらうるさく感じ、自然と息も飲み込んでしまう。

そして会議の結果は――

~~~~~

会議の翌日である月曜日、あるお知らせの紙が音ノ木坂学院の掲示板に貼られている。その紙は生徒全員にも配られていて、各自親に見せることになっている。

そしていつもなら殆ど誰も残っていない放課後の3年1組の教室からは生徒達の賑やかな声が漏れていた。

「では、ナオキくんのお役目終了と、音ノ木坂学院共学決定を祝して、かんぱーい！」



『かんぱ〜い!』

その教室に集まっていた1組、ナオキのクラスのみみんなは手に持っている紙コップを掲げて、ナオキの模擬男子生徒としての責務である音ノ木坂学院の共学決定を祝った。

ナオキは「本日の主役」と書かれているタスキを掛けられ、さらにパーティーハットを被らされた状態で椅子に座らされていた。

例の会議の結果、なんと全会一致で共学が決まった。そしてそれはしつかりとひとつひとつの問題と向き合い、改善していくという条件で成り立っている。

ナオキはみんなからお祝いと労いの言葉を掛けられ、用意されたお菓子や飲み物を貰いながら色んなことを思い出していた。

模擬男子生徒としてこの音ノ木坂学院にやって来て、唯一の男子生徒にも関わらず仲良くしてくれたクラスメイト達はじめ沢山の生徒から遠慮なく意見を言ってもらったり、偶には一緒に考えてもらったりしていた。この共学決定は自分だけの力ではないということにはナオキ本人が一番わかっていた。

「ナオキくん、お菓子食べないの?」

「穂乃果は食べ過ぎです」

『あはははは!』

「はははっ……いや、ちよつと色んなことがあつたなつて思つていただけだ」  
ナオキは止まっていた手をまたお菓子に伸ばし、偶にみんなと談笑しながらその時間を楽しんだ。

教室の片付けを済ませてクラスメイトは暗くなる前に下校していく中、ナオキ達アイドル研究部の部員は部室に向かっていた。そろそろ練習が終わり、みんな帰ってくる頃合いだ。

「あ、お疲れ様です」

「お疲れ。マシユだけか？」

「はい」

部室に入るとマシユが一人椅子に座つていて、ナオキ達は荷物を机の上に置いて自分達がいづも座つているところに座つた。

マシユは Shooting Stars を脱退した後、カナダに帰るまで少しの猶予があるためナオキと一緒にみんなのサポートにまわっている。特に最近ではナオキが忙しかつたため、ナオキの代わりにドリUNKを用意したりしていた。

「マシユすまないな、しばらくの間任せつきりにしちゃつて」

「いえ、大丈夫です。みんなのサポートは大事な役割ですのー！」

「……そうか」

ナオキは微笑みを浮かべはしたが、同時にその表情にはマシユがもう少しでいなくなってしまうという寂しさも薄らではあるがこもっていた。

「あ、ナオキくん達帰ってるにゃ！」

「おかえり。さ、早く着替えてこい。暗くなる前に帰るぞ」

「は〜い」

それから間もなく凜達が部室に帰ってきて、隣の部屋で着替えてからみんな揃って下校するのだった。

——その日の夜。

「はい、お待ちどうさま。今日はご馳走よ」

「やった〜！いただきます〜す！」

ナオキ達は絵里の用意したご馳走を囲み、亜里沙は嬉しそうに我先にと食事を始めた。

「いただきます〜！……うん、美味しい」

「ありがとう。折角共学が決定したから腕によりをかけたわ」

「絵里の作るものなら全部ご馳走さ」

「ナオキ……！」

絵里は頬を赤く染め、照れ隠しのつもりでナオキから視線を逸らして箸を進めた。そんな絵里を見たナオキからは愛おしい想いを込み上げ、ナオキはその想いを「飯ととも」に飲み込んだ。

くくくくくくくくくくくくくくくく

それから数日後、全校生徒は講堂に集められていた。ナオキは理事長に続き、ステージで言葉を述べていた。その中にはもちろん共学が決定したこと、今までの協力の感謝の言葉も折り込まれていた。そして……

「最後になりましたが、自分の生徒会長の任期は今日この日をもって終わりです。それに伴い、新たな生徒会長を指名します」

ナオキがそう言うのと講堂にいる生徒達はざわめきだした。ナオキが生徒会長になったのもこの時期で、それは全生徒会長であった絵里からの指名だった。そして今回も次の生徒会長をナオキが指名する。

「——2年、西木野真姫」

「はい」

指名されたのは現在の生徒会で役員を務めている真姫だった。真姫は名前を呼ばれると落ち着いた姿勢を保ちながら壇上に上がった。

「じゃあ真姫、あとは頼んだぞ」

「ええ」

ナオキは真姫の肩に手を置いて声をかけるとステージ袖に下がっていった。そこには現生徒会と次期生徒会のメンバーがいて、任期を終えたナオキを出迎えた。

「先程ご紹介に預かりました。私、次期生徒会長の西木野真姫です。よろしく願います。それでは他の生徒会役員を紹介します。みんな、こっちへ」

真姫が舞台袖に向かって呼びかけると続々と次役員が真姫の隣に並び、それぞれ簡単な自己紹介をした。

生徒会長、西木野真姫。副会長、七海ななみ六華りっか。会計、静しずか葵あおい。書記、京極きょうごく都呼みやこ・絢

瀬亜里沙。この5人が音ノ木坂学院を支える新たな生徒会のメンバーだ。

六華と葵は真姫のクラスメイトで、真姫直々の指名で副会長と会計を務めることになった。書記の都呼は亜里沙のクラスメイトだ。生徒会メンバーを選んである時に亜里沙が入ると名乗り出て、1年生1人は心細かろうと同じ学年で、さらに書道で硬筆2段の資格を持つ都呼に白羽の矢が立ったのだ。

自らの姉に憧れる亜里沙は、自分達に注目している生徒達を見て溢れる胸の高鳴りを感じていた。それはスクールアイドルとして立つ時とはまた別のもののように思えた。

——これが、お姉ちゃんが見ていた景色……！

亜里沙の目は希望に満ち溢れているようにキラキラと輝いていた。

——次回に続く。

## 第157話「みんなをつなぐ空に」

——某日。昼休み。

音ノ木坂学院の共学も決定し、生徒会にも一区切りついたある日、生徒会室ではナオキ・海未・真姫・フミコが揃って会議を行っていた。話し合っているのはもちろん次の生徒会についてだ。

「で、次の生徒会長だけど……真姫、お願いできるか?」

「ヴェエ!? わ、私が、生徒会長……?」

「うん、適任だと思う」

「はい。真姫なら安心して任せることができます」

真姫は突然の指名に驚いたが、他の3人はまるで打ち合わせをしたかのように賛成を唱えていて、真姫は崖まで追い詰められたような気分だった。

「わ、わかったわよ。やるわよ、生徒会長」

真姫をはじめ渋った表情をしていたが、それから意外にもあつさり受け入れるとナオキ達は喜びの表情を浮かべた。

「ありがとう真姫。じゃあ次期生徒会長は真姫に決定ということだ」

ナオキの言葉に反応して、フミコはノートに『生徒会長 2年西木野真姫』と記入した。しかし、まだ副会長・書記・会計の欄が空欄になっていた。

「じゃあ、残りの枠は真姫の指名でお願い致します」

「ヴェエ!？」

「歴代そうしてるみたいだしな。今回もそれでいいだろう」

「私達の時もナオキくんからお願ひされたもんね」

「お願いというか、急な指名でしたけれどね」

「ははは……すまん」

海未とフミコはナオキが生徒会長になった時に指名されたことを懐かしむように話した。

ナオキが生徒会長として初めて全校生徒の前に立った時、その場で副会長に海未を、書記にフミコを、そして会計に真姫と今は大阪に帰ったマチコを指名してからも随分時が経ったが、今でもつい最近起きたことのように思い出すことができる。

「うーん……」

真姫は次の他の役員を誰にするか全く検討がつかず、珍しく苦しそうな唸り声をあげていた。



「ま、まあ、そんなに焦らなくてもゆっくり考えて大丈夫だよ」

「あ、ありがとう……ございます」

真姫はそんな自分の姿を心配してくれたフミコに礼を言ったその表情からはまだ迷いが消えていなかったが、不思議とそれから『暗さ』は感じられなかった。

——そしてその日はやってきた。

講堂に集められた生徒の前で改めて生徒会長に指名された真姫。そしてその真姫が選んだ新生徒会役員達も全校生徒の前で発表された。

「副会長の七海ななみ六華りっかです。よろしくお願いします」

六華は真姫のクラスメイトで、高身長黒髪ロングでピンクと水色のピンセットを留めていて、下半分がエメラルドのような緑色の瞳をしている。指定のブレザーからお気に入りサイズのセーターを覗かせている。夏場でもセーターを腰に巻いて登校している程セーターを気に入っている。普通にしていればクールなのだが意外にもお茶目な一面もある。

「はい。会計の2年しずかの静葵あおいです。よろしくお願いします」

葵も六華と同じく真姫のクラスメイト。青に近い黒色の髪を首元まで伸ばしていて、瞳は青く、左目の下の方に小さなホクロがひとつ付いている。常に落ち着いた態度で、

それは挨拶の様子でも明らかだ。

「書記の1年生、絢瀬亜里沙です！よろしくお願ひします！」

「同じく京極きよごく 都呼みやこです。よろしくお願ひ致します」

亜里沙と共に書記に任命された都呼は亜里沙のクラスメイトだ。銀色のロングヘアで資格を持つほど書道が得意で、眼鏡とヘアゴムを常備している。亜里沙とは入学後しばらくして仲良くなり、雪穂と同じぐらい亜里沙に引付き世話を焼いている。

そんな5人の新たな生徒会は講堂での挨拶の後、初めての会議に臨んでいた。例年、最初の会議は顔合わせが主な目的になっている。

「……亜里沙、漢字間違えてるわよ」

「えっ？あ、本当だ……」

亜里沙は書記の初仕事で会議の記録を残していたが早速字が間違っていることを都呼に指摘された。その光景に一同は笑い声を漏らした。

「確か亜里沙ちゃんはロシア人のクォーターだったよね」

「そうよ。しかも、亜里沙のお姉さんは2代前の生徒会長」

「亜里沙さんはお姉さんに憧れて生徒会に入りたかったって言ってましたもんね」

「はい！」

「亜里沙、手が止まってるわよ」

「わわっ！」

都呼の指摘で少し焦った様子を見せた亜里沙に一同はまた笑い声をあげた。都呼はどこか亜里沙をからかっているようだった。

その後、ナオキ達旧生徒会メンバーが生徒会室に集まり各役職の引き継ぎを開始した。ナオキは先に真姫への引き継ぎを終わらせていて、椅子に座って引き継ぎの様子を見ていた。最早なんのために来たのだろうか。

「——引き継ぎはこんなところですかね。何か質問はありますか？」

「いえ！先輩の説明とてもわかりやすかったです！」

「ありがとうございます。副会長、頑張ってください」

「はい！」

「それに心配はまた別にありますから……」

六華は嬉しそうに敬礼のポーズをして返事をした。海未はその見た目、態度から生徒達からの人気も高い。六華もそんな生徒の一人で、真姫の指名を受けた理由には海未に憧れる気持ちもあった。

海未が少々呆れ気味に目線を送った真姫から引き継ぎを受けている新会計の葵は、海

未と同じ弓道部に所属している。葵は見た目から予想は中々つかないが人をからかうことをほぼ日常的にと言っているほどよくしていて、海未をはじめとする3年生も弓道部の部活動の時に中々苦勞している。

「……えっ、私ですか？」

「あなた以外にいないでしょう。静さんが皆さんにあまり迷惑をかけないように」

「ひいひい……?!だ、大丈夫ですよ！私だっけいざ練習となればしっかりしてるじゃないですか」

「確かにそうですが……」

——それを自分で言いますか。

と思う海未であつたが、葵の言うことは正しい。いつも人をからかつてはいるが、いざ練習や試合となれば他の部員達にも負けない集中力を発揮する。

「京極さん、字が綺麗だね」

「あ、ありがとうございます。一応硬筆2段は持っていますので」

「す、すごい……!」

「さすが都呼!」

「亜里沙は漢字の勉強をしないとね」

「うぐっ……」

書記の引き継ぎはとつくの前に終わっていて3人は仲良く雑談をしていた。

ナオキはそんな様子をただただ見ていることしかできず、ふと視線を窓の外に広がる大空に移した。今日は気持ちいいぐらいに雲ひとつない快晴だった。

「暇だったら部室でいればよかったのに」

「ん？でも前会長がいらないわけにはいかないからなあ」

「でも私、引き継ぎは香川先輩がよかったな」

「な、なによっ！」

「またあなたは……」

「ねえ香川先輩、今からでも私に引き継ぎしてくれませんか？」

葵は目をうるうるさせ自分の手の指を絡めて神に祈るようにナオキにお願いした。

ナオキはお願いされて頬を少し赤くしたがすぐに首を振って煩惱を払った。

「ダメだ。ちゃんと真姫から受けてくれ」

「ええ」

「そうですね。ナオキに会計をお願いするなど愚の直行ですから」

「愚の……直行……？」

「ナオキは数学が大の苦手なのよ。だからやめておいた方がいいわよ」

「へ、へえ……し、失礼しました」

「いや、大丈夫だ。気にすることはない」

そのナオキの言葉に本人以外が苦笑いを浮かべ、自身も心中は悲しい気持ちになっていた。

そんなこんなで全員の引き継ぎも終わり、ナオキ達旧生徒会メンバーの3人は帰り支度をした。

「これで仕事は全部終わりか……」

「はい。いい経験ができました」

「なんだか感慨深いねえ」

「そうだな」

3人はそんな会話をしながら生徒会に入って経験ことを懐かしむように思い出した。その中には大変なことももちろんあったが、何より残っているのはみんなでの生徒会室で時には真剣に、時にはたわいもない会話をしたことだった。そのことはきつといつまでも忘れないだろう。

「さて、行くか」

「はい。皆さん、後は頼みました」

「何かあったらいつでも先輩に相談してね」

『はい!』

3人の言葉に新生徒会メンバーは元気な返事をして、任期を終えた3人を見送った。

「あ、そうだ……練習に遅れるなよ、真姫・亜里沙」

「はいー！」

「わかってるわよ」

ナオキはそう言い残して生徒会室のドアを閉め、ナオキと海未はアイドル研究部の部屋へと足を進めた。

Shooting Starsは現在、ラブライブ！東京地区予備予選に向けて練習をしている。3年生にとつては最後、1年生にとつては初めてで憧れていた舞台上、それぞれの想いを胸にラブライブ！に挑む。

今回から地区予選は、北海道地区、東北地区、関東地区、東海地区、北陸地区、関西地区、四国地区、中国地区、九州地区、そして東京地区の計10地区に分かれて、それぞれ決勝に進むグループを決める。他の地区は予選決勝上位3組が本戦に進めるが、東京は地区が他と比べて狭目という理由で予選決勝を突破できるのは僅か1組だ。その分みんなの練習にも自然と気合いが入る。

さらに今回からはシード枠が設けられていて、前回大会王者もしくは前回大会王者の学校のスクールアイドルがその資格を得る。つまり、今回シード枠でラブライブ！本戦には前回王者のナニワオトメが進んでくる。μ's、A-RISEと肩を並べて”三大

スクールアイドル”とまで呼ばれたスクールアイドルグループだ。そう簡単に勝てる相手ではないことはみんながよくわかっていた。

——そして迎えた11月中旬、Shooting Starsはラブライブ！東京地区予備予選を見事突破し、僅か4組しか進めない東京地区予選決勝に駒を進めたのだった。

~~~~~

——11月末。

Shooting Starsの姿は空港にあった。その目的とは……………

「マッシュ、短い間だったけどありがとう。向こうでも元気でな」

「は、はいっ！こちらの方こそ、あ、ありがとうございました！」

それはカナダに帰るマッシュの見送りだ。その見送りにShooting Starsの面々だけではなく、絵里・希・にこのOGやクラスで特に仲の良かった人達が来ていた。

ひとりひとりマシユと言葉を交わし、マシユも時々涙を浮かべて言葉に詰まりながらもみんなからの言葉をひとつひとつ返し、それを大切に胸の奥にしまった。

だがそんな時間はあつという間に過ぎ、マシユが乗る飛行機のアナウンスが流れ始めた。それを聞いたみんなは残念そうな表情を浮かべてマシユとの別れの時間が来たのだと自覚した。ある者は鼻をすすり泣き声を抑えながら涙を浮かべ、流し、ある者はその状況を受け止めて微笑みを浮かべ、またある者はマシユに悲しみの表情は見せまいと格好をつけていつも通りの笑顔を浮かべていた。

「時間……ですな」

「はい……両親も呼んでいますし、私はこれで、失礼します」

海未は誰もがこのまま時を進めたくないからと開くことのなかった口を開くと、マシユは手を振る両親の方を向いて言葉に詰まりながら言った。

しかし、誰もそこから先は言葉を紡げなかった。このまま沈黙が1秒でも続けば、時が進まなければマシユともう少しいられる。ほんの小さな願いだった。だが、時は無情にも進んでいく。それは変えることの出来ない現実なのだ。

「……………ほらマシユ、そろそろ時間だろ?」

「ナ、ナオキくん……………」

「ナオキ……………」

そんな願いが誰よりも強いと思われていたナオキの一言にみんなが不思議そうにその男の方を見た。その表情はいつもと変わらぬ笑顔だった。

「マシユ。マシユがおれ達にカナダに帰ることになったことを教えてくれた時にした約束、覚えてるか？」

「っ……はいっ！もちろん！」

ナオキの言うマシユとの約束。それは……

『マシユ、絶対スクールアイドル続けるんだぞ。約束だ』

『っ……はい！』

「私は、絶対にカナダでもスクールアイドルを続けます！先輩達に教えてもらったことを、Shooting Starsで学んだことを忘れずに……！」

マシユは涙を流しながら笑顔を浮かべてナオキの方を向いて、改めて”約束”を宣言した。

「ああ、応援してるぞ」

ナオキの言葉に続いて先程まで黙っていたみんなも口々にマシユに応援の言葉をかけた。そんなみんなの言葉を受け取ったマシユは何度も何度も振り返って手を振った

りして見送ってくれる仲間達の姿を確認しながら両親の元へ向かった。

そして両親と合流して深く頭を下げると今度は振り返ることなく飛行機に乗り込んでいった。そんなマシユの姿が完全に見えなくなるまでみんなは見送りを辞めなかった。

みんなは展望デッキでマシユが乗った飛行機が大空を飛んでいくのを見上げて最後の見送りをした。

飛行機の中ではマシユは名残惜しそうに窓から空の下を見つめ、様々な出来事を思い出しながら涙を流した。

そして、ナオキもまた黙って飛行機を見上げていた。隣にいた絵里は、笑顔を保ってマシユの前では決して見せなかつた涙を流す恋人の小刻みに震えている手をそっと握った。その手は握り返されることはなかつたが、ナオキは絵里の優しさをしっかりと感じていた。

—— マシユ、元気でな。

ナオキはマシユと出会い、スクールアイドルに誘い、短い間過ごした日々を思い出し

て、その思い出を忘れまいと決意した。

飛行機が見えなくなり、しばらくその先を見つめたみんな名残惜しく思いながらも空港から去っていった。

~~~~~

——12月某日。

ラブライブ！運営委員会本部に用意された Shooting Stars の控え室では、本番に向けての最終準備が行われていた。化粧をして衣装、ダンスや歌詞をみなどでチェックをした。その表情には自信がみなぎっているようだった。

1年生達にとってはこれが初めてのラブライブ！だ。予備予選とはまた違う緊張感がある。この予選決勝を突破出来るのは僅か1組だけで、その狭き門を通らなければラブライブ！本戦には出場できないのだから緊張と不安でいっぱいになるのは当たり前だ。しかし、この1年生達はどこか安心しているのかもしれない。

先輩達がいるから大丈夫だと。

「Shooting Starsのみなさん！準備お願いします！」

『はい！』

スタツフが控え室まで自分達を呼びに来るとみんな元気よく返事をして椅子から立ち上がった。すると誰が何か言ったのでもなく、12人はピースした手を円形に並んでいつもの円陣を組んだ。

「じゃあみんな！マシユちゃんのためにも、応援してくれるみんなのためにも、必ずここで勝ってラブライブ！本戦に行くにや！」

『うん！』『はい！』『おう！』

凜の声に首を縦に振った童子以外のみんなが返事をした。そしてみんなでいつもの掛け声をしてから予選決勝のステージに向かった。

「Shooting Stars！」

『ミュージック……スターター!!』

——ラブライブ！運営委員会本部横、特設ステージ。

ステージの上にはスタンバイをしているShooting Stars。そんなみなに歓声を送る観客の中にはそれぞれの家族や音ノ木坂学院の生徒達もいた。抽選でShooting Starsはトリを務めることに決まっています、観客達のボルテージは自分達より前に披露したスクールアイドルによって温まっていた。

第2回ラブライブ！の予選決勝当日は大雪に見舞われ、μ'sの一部メンバーが会場に来れなくなるところだった。しかし音ノ木坂学院の生徒達のおかげで無事に会場にたどり着くことができ、本戦までコマを進めることができた。そして今回は天候にも恵まれ、最高と言っても良いコンディションで当日を迎えることができた。

時間はもう夕方。周りにはもう暗くなり始めていて建物の灯りはもちろん、街に施されたイルミネーションのライトやステージのライトが夜の街を彩っている。

ナオキは隣で童子が見守る中、曲をスタートさせるボタンを押した。

今回の衣装はファーストライブの時のものに少し手直しを加えたものだ。この衣装はShooting Starsに相応しいもので、曲のコンセプトとも合っている。そして、この場に共に立てなかったマシユと自分達をつなぐ衣装なのだ。

曲名は『思い出つなぐ星空』。マシユがみんななどの思い出を振り返りながら書いた詞だ。マシユが最後にShooting Starsに残したもの……マシユとの思い

出を胸に秘めながらメンバー達は曲を披露する。

——遠い地にいるマシユに届くように。

「胸にしまった思い出」「いつか思い出すよ」「世界つないでる星空を」

『見上げて』

歌い出しはアカペラで、穂乃果、凜、真癒美の順番に、胸に両手を重ねながら3人で背を合わせ、歌詞と歌詞の間を空けずに歌い、その周りを残りのみんなが1歩1歩ゆつくりと円を描くように歩いていた。そして真癒美の歌声の響きが収まり全員で歌うとメロディーが流れ始めた。先程のゆつくりした雰囲気とは違い、テンポも速くノリのいいメロディーだ。

『いくつもの星たちが輝いてる』

「星を見ながら思い出す」

まず歌い始めたのは海未・ことりで、メロディーが一旦収まると穂乃果が低めの声で歌ってその終わりからまたメロディーが流れ出した。

『楽しかった日々 悲しかった日々』

『何でもない日々を』

「思い出すだけでなんで」

「こんなにもみんなに会いたくなるんだろう」

真姫・花陽、雪穂・亜里沙・瑞希の歌に続き、チーム内で屈指のダンス能力を誇る凛と真癒美の息の合った歌声と対のダンスのソロパートで曲はサビに突入する。

『この空はみんなをつないでる　いつまでもどこまでも』

「みんなとの」

「思い出が」

「私の背中を押す」

全員での歌声に続き、中心で踊る穂乃果・凛・真癒美のソロだ。3人のセンターには真癒美がおり、穂乃果と凛は歌いながら上半身を横腹に両手を当てながら曲げて真癒美の方を向き、真癒美はそんな2人の顔を交互に見てか悲しそうな目をしながら観客の方を向いた。そんな彼女の姿に観客は虜になった。

『ずっとずっとつないでる』

「思い出が私を勇気付ける」

『向かって行こう　夢の先へ　大切な思いを抱きしめて』

途中に真癒美のソロを挟みながら曲のラストスパート。曲はここで最高潮の盛り上がりを見せた。最後にはメロデーも遅くなり、みんなが一行に並び両手を胸で重ねて目を瞑りながら俯いた。



『胸にしまった思い出』『いつか思い出すよ』『世界つないでる星空を見上げて』

『Shooting Stars』

そして3年生、2年生、1年生の順番に歌っていき、最後には左手は胸に添えたまま夜空に向かって人差し指だけ伸ばした右腕を、歌に合わせて下から上に伸ばす方向を変えていった。それに合わせて顔も綺麗な夜空を見上げていた。

曲が終わって、観客達はShooting Starsに歓声と拍手を送り、メンバーは顔をみんなで合わせて喜び、それから手を繋いでお辞儀をした。

ナオキはライブが終わり、童子と成功を喜んでからホツとした様子で機材席の椅子の背にもたれて夜空を見上げた。

街の灯により残念ながら星は目視することはできない。でも星は必ずこの空で輝いている。遠くの地とも繋げてくれるこの空で……

カナダではマシユは自宅の窓から空を見上げて右腕を伸ばしていた。

そんなマシユの手に持つスマホには、曲を披露し終えて空を見上げるShooting Starsのみんなが映っていた。

——そして、ついに東京地区予選決勝突破グループが発表される。一体、ラブラ

イブ！本戦にコマを進めるのはどのスクールアイドルなのか……！

——次回に続く。

## 第158話 「大きくなる気持ち」

—— ラブライブ！東京地区予選決勝、全パフォーマンス終了後。

—— UTX、大スクリーン前。

この場には予選決勝でパフォーマンスを終えたグループのメンバーやその学校の生徒、そして一般人が集まっていた。

東京地区予選決勝は特設ステージで行われていたが、そのステージには電力などの関係もあってスクリーンを取り付けることができなかった。なのでこうしてUTXのスクリーンで結果発表をすることになっている。

その結果発表を待つ人々はまだかまだかとソワソワしていた。そして……

『ラブライブ！東京地区予選』

『決勝』

『WINNER』

スクリーンに映像が映し出されると大きな歓声が上がった。さらにデカデカと表示

された文字ひとつひとつにも歓声が上がリ、出場グループのメンバーは固唾を飲んで続きの文字を待つ。

『Shooting Stars』

その結果がついに出了。結果はShooting Starsの勝利だ。

結果を伝える画面が表示され、それを見ていた人達からの大きな歓声と拍手がShooting Starsのみんなを包んだ。

「やったー！勝ったよ！」

「うん！そうだね！」

「やったにゃー！」

「いえーい！」

亜里沙と雪穂は興奮が収まり切らず互いに手を取って喜びを露わにした。

凜と穂乃果はいつもと変わらず大喜びだった。

花陽は泣きそうになりながら喜び、真姫は顔では当たり前のようにしているが内面はとても喜んでいいる。

ことりは海未にハイタッチをしようと誘い、海未はそれに恥ずかしそうに応じたが、そんな表情は喜んでいた。

童子は Shooting Stars のみんなにお祝いの言葉をかけにまわっていた。

「ついに、行けるのね……!」

「うん……!」

真癒美と瑞希は大スクリーンを見上げながらこれから先、秋葉ドームで踊れることを思っって興奮を抑えきれずにいた。

「でも……」

「? でも……?」

「——これは、先輩達のおかげなのかな……?」

「っ……!?!」

真癒美がそんな気持ちを幼馴染である瑞希に打ち明けたその姿を、ナオキは少し離れたところから見ていた。

——あいつら、やっぱり……

ナオキは歯を食いしばり拳を強く握りながら息を細く吸い込んだ。

~~~~~

——1月1日、昼前。

「ふわぁ……」

「もう、はしたないわよ」

「すまんすまん。でも昨日は遅くまで起きてたからまだ眠気が……ふわあ……」

太陽が新年初の輝きを見せているがまだ寒さが和らがない中、厚着で身を包んだナオキは絵里と亜里沙と共に神田明神に向かって歩いていった。

今日はアイドル研究部のみんなで初詣に行く……予定だったのだが、あいにく元々☒sのメンバー達は希に拉致された。では何故絵里はいるのかというところ……

『えりちの身柄は下つ端のナオキくんに預ける!』

と言われ、こうしてナオキと行動を共にしているというわけである。

「また巫女服着てお手伝いしたかったのになあ……」

「はははっ、そんなに巫女服が気に入ってたのか?」

「……………知らない」

「えっ、ちよっ、絵里……!?!」

ナオキは急に不機嫌になって早歩きをする絵里の理由がわからず困惑した。隣では亜里沙がため息をついたのでそのことにもシヨックを受けた。

——私はただまたナオキと一緒にお手伝いしたいだけなのよ、バカ。

絵里はそんなことを口に出せずに少しだけ頬を赤くしてそのまま神田明神の方に向

かつていった。

——神田明神。

「やっぱり人がいっぱいだな」

「そうね。時間ももうすぐお昼だし」

男坂の前で待ち合わせをしており、ナオキ達は男坂の方から本殿の方に向かって行く人達を眺めながらみんなが来るのを待っていた。

「あつ、来た！おくい！」

亜里沙が手を振る先には着物姿の真癒美と瑞希がこちらに向かって歩いてきた。2人は手を振る亜里沙に手を振り返してから隣にいる絵里に気が付きびつくりした表情を浮かべて小さく頭を下げた。

「あけましておめでどう！」

「あけましておめでどう。おつ、2人とも着物か」

「あけましておめでどう。似合ってるわよ」

「あけましておめでどうございます。ありがとうございます……」

「あけましておめでとうございます。えへへへ……」

新年の挨拶を交わして、着物姿をナオキと絵里に褒められた2人は照れた様子を見せた。

2人の着物はどちらも花柄のもので、真癒美は濃いピンク色、瑞希は青寄りの紫色だ。瑞希の家は着物を取り扱っているお店で、役者などをしていて着物を使用する人、部活動で使用する人、そして行事ごとで使用する人など様々な人が利用している。瑞希は偶にお店を手伝っていて、所謂その看板娘ということになる。今回は2人で瑞希の母親に着付けをもらったみたいだ。

「さ、早く行くうぜ」

ひと段落したところでナオキが男坂を登っていくと4人はその後続いた。

談笑しながら男坂を進んで登り切ると、参拝客が本殿に向かって列を成していた。そんな列を整理したり案内をしている人物にはみんな見覚えがあった。

「あつ、ナオキくん達だにゃ！あけおめにゃ！」

「あけましておめでとうございます！」

「あけましておめでとう。3人は列整理か」

「あけましておめでとう。そうよ。ほら、邪魔だから並ぶなら早く並んで」

真姫がナオキ達5人を列に並ばせると2年生達はまた自分達の仕事に戻った。列整理には警察の人も加わっていた。

参拝者の列はゆっくりゆっくりと進んでいく中、ナオキ達は賽銭を準備しながら自分の番を待っていた。絵里・真癒美・瑞希・亜里沙はスタンダードに5円玉だったり、5円を何枚か重ねたりしていたが、ナオキは5円玉を4枚、そして1円玉を1枚と合計21円を用意していた。

「あら、ナオキは20円じゃないのね。21円って何か意味があるの?」

「えっ!?!いい、いやあ、別に?ただ……」

「ただ……?」

「えつと……そ、そう!今年もニツ!と笑顔でいれるようにだよ!」

「……それって25円じゃダメなの?ニコツて」

「それはニコツ!だろ?おれはニツ!だから!」

「そ、そうなのね……」

ナオキと絵里がそんな会話をしているのをすぐ後ろから聞いていた真癒美と瑞希は吹き出しそうになる笑い声を抑えていた。ナオキはそれに気付いていたのもあって少しだけ頬を赤くした。

21円のお賽銭にはその割り切れない数字から恋愛継続や夫婦円満という意味が込

められているらしい。そう、夫婦円満。その意味に絵里が気付くのはまた別のお話。やっと賽銭を入れて本殿に向かつて手を合わせる事が出来たナオキ達は続いて御守りなどを買うためにその売り場の方に向かった。

「いらつしやいませ〜！御守りはいかがですか〜?!」

「今年の干支の置き物もありますよ〜」

「はい、350円ちようどですね。ありがとうございます」

「あけましておめでとう。穂乃果達はここで店番か?」

「あけましておめでとうございます。はい、今は私達がここの担当です」

「あけましておめでとう〜」

「あけおめ!」

売り場では2年生組が店番をしていた。ナオキ達と挨拶を交わした後もすぐに参拝客が商品を選び出したので、ナオキ達は邪魔をしてはいけないと買うものを選んだ。

「ナオキまだ?先行ってるわよ」

「ああ、すぐに追いつく!………海未、これを」

「はあ………なんで隠れて買うんですか?」

「いいだろ、別に」

ナオキは絵里にバレないように『恋愛成就』の御守りを購入してからすぐに先に行っていた絵里達に追い付き、人通りが少ない事務所の裏に向かった。

「あ、いたいた。希く、にこく」

「えりちやん。あけましておめでどう」

「あけましておめでどう」

「ええ、あけましておめでどう！」

「希さん、これはどこに運べば……！」

「雪穂！あけましておめでどう！」

「亜里沙!? あ、あけましておめでどう」

事務所の裏では希、にこ、そして雪穂が商品が入っているとと思われる荷物を運んでいた。雪穂は亜里沙達がいるとは思わず一瞬驚いた表情を見せた。

雪穂は今回姉の穂乃果達と一緒に神田明神のお手伝いをしている。なんでも、他の人達がいるとはいえ穂乃果が神社のお手伝いをするのが不安なようで、自らお手伝いを名乗り出た。

「雪穂、巫女服似合ってるわね」

「流石は和菓子屋の娘って感じ」

「あ、ありがとう……」

「さ、早く行くわよ」

「はいはい。ほな行こか、雪穂ちゃん」

「はい！じゃあ、また」

ナオキ達は雪穂達がまた荷物を運び出すと邪魔はできまいとその場から離れることにした。

それから一行は屋台を見てまわりそろそろお昼時で空腹だったお腹を少しばかり満たした。ベビーカステラや唐揚げ、フライドポテトに焼き芋、焼きそばにいちご飴、そして冷えた体を温めてくれる甘酒も堪能した。それに食べ物は飲み物だけではなく、あみだくじや射的など楽しめる屋台も多く見られた。

「ナオキくんってよく食べるよね、流石男の子って感じ」

「お義兄ちゃんも家でもご飯が余ったら全部食べてくれるんだよ！」

「……………残飯処理係」

「腹が減っては戦は出来ぬって言うからな。それに昔父親から『男ならたくさん食え。』

『そしたらいいことがあるぞ』ってひたすら言われ続けたからな。そのいいことっていうのはよくわかんないけどな」

ナオキは昔話を終えてからさつき買ったバベーカーステラを口の中に放り込んだ。

さらに屋台をまわっていたナオキの目に、あるアクセサリーを売っている屋台で見覚えのある人物が商品を選んで入った。

「ん、これか？ いやそれとも……」

「ミツヒデ……？」

「ん……？ おつ、ナオキやないか！」

その人物とはナオキがかつて通っていた大坂学園の生徒会長である香川ミツヒデだった。今はその身を引退し大学受験真っ最中で、さらにその学校のスクールアイドル、ナニワオトメのマネージャーも務めている。

「なんだよ、珍しくアクセサリーなんか見て」

「いやちよつとな。それよりも……」

ミツヒデは姿勢を正してナオキの後ろにいた絵里達に視線を送った。亜里沙・真癒美・瑞希はミツヒデと面識がないため少し警戒していた。

「初めまして、Shooting Starsの絢瀬亜里沙さん、福田真癒美さん、奥村瑞希さん。自分は香川ミツヒデ、よろしく」

「わ、私達をご存知なんですか!？」

「もちろん。だって俺らナニワオトメのライバルであるμsと同じ学校のスクールアイドルや。知らないわけないやろ」

「ナ、ナニワオトメ……!？」

「そういえば話したことなかったな。こいつはナニワオトメのマネージャーだ」

「「ええ〜っ!？」」

ナオキが声をかけた人物の正体を初めて知った3人は驚きを隠せずにいる。三大スクールアイドルと呼ばれたナニワオトメのマネージャーが自分達の目の前にいることが衝撃的だった。

「なあ、ミツヒデが来てるってことはみんなも?」

「ああ、来てるで。今日はみんなでこの”聖地”にラブライブ!の優勝祈願に来たんや」

「せ、聖地……?」

「神田明神が……?」

ミツヒデが本殿の方を親指で指しながらここに来た理由を説明すると、”聖地”というワードにナオキと絵里は首を傾げていた。それとは違い、他の3人は納得したような表情を浮かべていた。

「なんやお前から知らんのか? 伝説のスクールアイドル、μsがラブライブ! 決勝を前に

ここで優勝を祈願して見事その手に優勝を勝ち取った神田明神って結構スクールアイドルの間では有名な話やで？今日もようさんスクールアイドルの子らも見たで」

「なんだか結構恥ずかしいわね……」

「その話がそんなに浸透しているとは……」

ミツヒデが腕を広げて熱のこもった説明をすると途端に当事者である2人は恥ずかしくなり頬を赤く染めた。

「まあ、多分あいつらは絵馬の方にいると思うからまた声をかけるとええ。俺は大事な用があるさかい」

「わかった、1回寄ってみるよ。それじゃあ、またラブライブーで」

ナオキはニヤリと笑顔を浮かべて右手の拳をミツヒデに向けた。

「……ああ、負けへんで」

ミツヒデはそれに答えるように同じような表情を浮かべて右手の拳をナオキが出してきた拳に合わせた。

「そうだ。マチコはお兄ちゃんがあげたものならなんでも喜ぶと思うぞ」

「…………お前にはお見通しか。サンキューな」

ナオキはミツヒデにしか聞こえないほどの声でそう言うと、みんなを連れて絵馬が掛けられてある所へと向かった。

三ヶ日も終わり、Shooting Starsは来月のラブライブ！本戦に向けての練習を始めていた。今日は休みの日だったが1年生達は自主的に集まって神田明神で練習をしていた。かつてμ'sがしていたという男坂ダツシユを行なったのだが、これがまたキツイもので終えた人から順に倒れ込むほどだった。

「先輩達は、こんな、練習を、してたの……！」

「流石だわ……！」

「μ'sってやっぱり凄い……！ねっ、雪穂！」

みんな口々に先輩達の凄さを息を切らしながら呟いたが、唯一雪穂だけは空を見上げて息を切らしているだけだった。

「どうしたのよ、もう限界？」

真癒美は起き上がって雪穂の顔を覗いた。しかしその顔は限界だというよりは何か考え事をしているものだった。

「具合でも悪い？」

「そうなの!？」

「ううん、そういうのじゃなくて……」

雪穂は体調の不調を首を振って否定して体を起こして神田明神のお手伝いをしている時に見た絵馬を思い出した。

その絵馬のほとんどはラブライブ！優勝を祈願するもので、自分達の先輩であるμ'sの影響力というものを実感し、そしてその影響力のある人達と同じステージに立っているのだということも改めて感じさせられた瞬間だった。

「ただ、本当に凄いなって……」

その雪穂の言葉に1年生達の表情は曇っていった。それは4人とも同じ気持ちだからだ。

伝説と呼ばれているスクールアイドルμ's。当時3年生だった人達が卒業してその活動を終えた。残った1・2年生、現在の2・3年生は音ノ木坂学院スクールアイドル Shooting Starsの一員として活動を続けている。そしてそんな人達と自分達1年生は同じスクールアイドルとしてステージに立ち、これからラブライブ！決勝に挑む。しかし、自分達はスクールアイドルを始めたばかり。伝説と呼ばれるほどの先輩達との実力差は歴然としている。

——私達は先輩達と一緒に踊ってもいいのだろうか。

——この決勝に出られるのも先輩達のおかげなのだろうか。

そんな黒い思いを誰しも心の中に秘めつつも、それを一切口に出そうとしない。

「でも、私達は……私達なりに頑張らなきゃいけないんだ」

亜里沙の言葉にみんなハツとした。

先輩達に負けないぐらいの”輝き”を手にするため、自分達なりに追いつかないといけない。その気持ちで不安を和らげて力に変える。

「……さ、練習するわよ」

『おー！』

ほとんど人がいない神田明神に1年生達の元気な声が響く。それはまるで不安を見ないように声で誤魔化しているようにも感じられた。

「あの子ら、もしかして……」

この神社でアルバイトをしている希はその様子の一部始終を見ていて、1年生達の気持ちに気付いてしまった。

そのことを希は休憩中にナオキにメッセージで伝えた。ナオキは以前から気付いてはいたがそのことを口には出さなかった。

しかし、その問題に向き合う時が一步一步踏み寄せていたのだった。

——次回へ続く……

第159話「夢の舞台」

——秋葉ドーム。

ついにやってきたライブ！本戦決勝の舞台、秋葉ドーム。東京ドームという名がポピュラーだったが、スクールアイドル界限では秋葉ドームと呼ばれる事が多くなつた。

現在となつては伝説と呼ばれているスクールアイドルμ's、そしてそれを合わせた三大スクールアイドルと呼ばれるA・R・I・S・E・ナニワオトメを中心とした当時のスクールアイドル達の活動の結果、それから毎回本戦決勝はこの場所で行われている。スクールアイドルをするもの、目指すものにとつてこの場所は最大の聖地。そしてひとつの目標になっている。

その夢の舞台をいよいよ明日に控えた選手達は、一足先にリハーサルのためにこの場を訪れていた。

横に広がる本ステージ、観客席の方にある円形ステージと2つのステージを結ぶ短い通路。ステージ後方にはハート型を中心にして星型、数々の放物線風のオブジェが施さ

れていた。さらにスクリーンはステージ中央と両端の後方に1つずつ設置しており、円形ステージの真上にはぶら下がるように計8つのスクリーンがダイヤモンド型に設置してあった。

前回のラブライブ!とは違って、全体的にドーム開催にふさわしい、限られた時間の中で輝くスクールアイドルの舞台にふさわしいと言える”輝き”をあらわしていた。

「ハ、ハラショー……!」

「これが、決勝の舞台……!」

「緊張するね……」

「ええ……」

1年生達は初めての決勝の舞台に感動と緊張の思いを感じ、噛み締めていた。

2・3年生は一度立ったこのステージにまた別の思いで立つことになる。そのステージを眺めながら”あの時”のことを思い出す。

それは自分達にとって大切な時間。μsとして最後のステージに臨んだあの時間のことは一瞬忘れない思い出だ。しかし、今回はラブライブ!の挑戦者として、いち選手としてこの舞台に立つ。

「さっ、リハーサルもあるし早く行くぞ」

『はい!』

今日は全出場グループが集められてリハーサルがあり、さらに夕方にはメディアも入られて決勝の順番決める抽選会も行われる。現在もリハーサルが行われていて、中々見る事ができない他道府県のスクールアイドルに花陽は目を輝かせていた。

「かよちゃん、行くよ〜!」

「ええ〜!?あとちよつとだけえ〜!」

そんな花陽を凜が引つ張つてみんなの後を追った。筋金入りのスクールアイドル好きな花陽の姿に誰しも呆れるのではなく、逆に関心を覚えていた。

——リハーサル終了後。

ついに始まる運命の抽選会。アリーナ席に選手達が、1階席にはメディアの人達が入っていて、抽選会が始まるのを今か今かと待っていた。その模様はテレビやネットでも中継もされている。

『ではただいまより、ラブライブ!本戦決勝の抽選を行います!司会は私達、ユニバーサル所属のA—RISEがお送りします!』

ステージにラブライブ！本戦決勝の司会に抜擢された三大スクールアイドルと呼ばれるひとグループで、現在は有名アイドル事務所ユニバーサル所属のA—R—I—S—Eの3人が立つと大きな歓声があがり、メディアのものであるうしやツター音が響いた。真ん中にはリーダーの綺羅^{きらら} ツバサ、その両端に統堂^{とうどう} 英玲奈^{えれな}、優木^{ゆうき} あんじゅがマイクを持って慣れていくかのように司会進行を務めていた。

3人は巧みにその場にいる人達を盛り上げ、抽選が始まる時には場の空気は完全にあつたまっていた。

『では最初に抽選するのは前回王者、大坂学園スクールアイドル、ナニワオトメ！』

『今回の優勝候補のひとグループのナニワオトメ。今回はシード権での参加となりました』

『代表者は……リーダーの香川マチコ。たった1人の2年生ながらその実力は3年生にも劣らない。今からステージが楽しみだ』

『それではマチコさん、どうぞ！』

アリーナ席からステージへと登ったマチコは3人の解説に恥ずかしさを見せながらもステージ中央にある抽選箱の方に向かった。誰しも前回王者の順番が気になり、そのマチコの姿をジッと見つめる。

箱の中に手を入れてガサゴソとあさり、中の数字が書いてあるボールをひとつ掴んで

勢いよく引き抜く。

そこに書いてあった数字は――

『――1番！ナニワオトメ、トップバッターを引き当てた!!!』

マチコの引いた番号を受けてスクリーンの順番表の「1番」の空欄にナニワオトメの名が入った。前回王者がトップバッターということは、これ以降に披露するグループにとっては大きなプレッシャーとなる。その状況に参加グループの人達はどよめきを隠せない。

抽選を終えたマチコはステージを降りてメンバー達と喜び合っている。

『さあ、どんどん行きますよ！続いては――』

しかし時間はそんな不安になっている人達を待ちはしない。無情にもひとグループ、またひとグループとどんどん名前が呼ばれ、スクリーンに映っている順番表は埋まっていく。

それはShooting Starsももちろん一緒だ。今回引くのはリーダーである凜だ。そんな凜の表情は不安一色ではなく、どこか余裕のあるものをしていた。

「……緊張、しないの？」

「もちろんしてるよ？でもどの順番を引いても私達らしいステージをすればいいんだよ！」

そんな凜を見た真癒美は質問を投げかけたが凜の答えは即答だった。その答えに2・3年生は頷くが、1年生達には衝撃が走っていた。

『続いては音ノ木坂学院スクールアイドル、Shooting Stars!』
「行ってくるにゃ!」

『Shooting Starsとしては初出場。でもその中にはμ'sで活躍したメンバーも参加しているわ』

『代表者は、そのμ'sの一員でもあった星空凜だ』

ステージへと歩いていく凜をみんなエールと共に送り出した。

1年生達はその凜の背中を頼もしく、そして大きくも感じていた。ダンスや歌のパフォーマンスだけではない、精神面でも先輩達と自分達の差は大きく開いている、そう確信した瞬間でもあった。

『では凜さん、どうぞ!』

「これにゃ!」

『早っ!?!』

凜のくじを引いた早さに司会のA—RISEだけではなくそれを見ていた誰しもが

驚いた。しかし、元々sのメンバーは「凜らしい」と思いながらスクリーンに目を移した。

「引いた！2番にや！」

凜が引いたのはまさかのナニワオトメの次の番の2番だった。その驚きの結果に誰もが歓声をあげ、他のスクールアイドル達の不安は一層強くなってしまった。

すると凜はツバサにマイクを渡すようにゼスチャーで促していて、仕方ないという表情でツバサは凜にマイクを渡した。その光景にはナオキも呆れるしかなかった、がこの場においてはそれが最善だろうとも察していた。

『みんな、聞いて欲しいにや！』

凜が突然マイクを通して呼びかけると、会場の人達はびつくりしたように視線を凜の方に向けた。凜はみんなの視線が自分の方に向くことを待たずに言葉を続けた。

『披露する順番なんて関係ない！みんなは、自分達の最高のライブをすればいいんだよ！凜達も、ナニワオトメのみんなも同じ気持ちのはずにや！順番程度自分達らしいライブが出来ないスクールアイドルはこの場にはいないはずにや！凜は、そう信じてるから！』

凜がそう言うのと会場は一瞬静まり返った。しかし、その空気は誰かの一言で大きく変わった。

「……そうだよ。私達はできる」

「私達は勝つためにここまで勝ち上がってきたんだ」

その一言は会場全体に伝染していき、それは出場グループの人達の中で一気にやる気が満ち溢れるようだった。

「凜ちゃん……!」

「もう何言ってるのよ。これじゃあ挑発してるみたいじゃない」

「あははは……」

「でも本当のことだよ? いいぞ凜ちゃん!」

「ちよつと穂乃果……!」

凜の言葉に対する2、3年生達の反応はいつもと変わらないものだった。そのことに1年生達は驚きを隠せなかったが、同時にそんな先輩達の背中がとても大きいように感じていた。

——抽選会終了後

テレビのニュース番組やスクールアイドルの特番をしている番組では抽選会の様子が放映されていた。特にナニワオトメとShooting Starsの順番、そして

凜がステージ上から放った言葉に閃いての注目度が高かった。各番組では出場しているスクールアイドルのインタビュも放送され、今回のラブライブ！は様々なところから注目されているのだということがわかる。

Shooting Starsの面々は抽選会の帰りに神田明神でお祈りを済ませた後各自宅に帰宅した。

2年生組は仲良く真姫の家にお泊りをしていて、明日に控えた本番を前にゆつたりと体を休めた。

1年生組はそれぞれの自宅で明日への不安、緊張と直面してダンスのフォーメーションや歌詞を懸命に復習していた。そのうち雪穂はいつもと変わらぬ姉、穂乃果を見て微笑みながら溜息をついた。

3年生組にとっては最後のラブライブ！だ。決して悔いを残さないように気分を落ち着かせて敢えていつも通りの時間を過ごした。

ナオキも前までならギリギリまで照明のタイミングなどをチェックしていたが、今回はどこか落ち着いた様子を見せながら、sの思い出が詰まっている”モーメントリング”を眺めていた。

——そして、決戦の日は訪れる。

~~~~~

——ラブライブ！本戦決勝当日。

ついにこの日がやってきた。開場と同時にドツと観客が秋葉ドームに入場していった。

その中にはもちろん音ノ木坂学院の生徒達の姿もあった。自分達の歓声でShooting Starsを元気付けようと優勝を信じて誰もいないステージを見つめる。

「ひ、人がいっぱいですわあ……」

「ほらダイヤ、はぐれないようにね。ルビイちゃんも」

「は、はいっ！」

「果南さん、ありがとうございます……」

沢山の人の中には夏にナオキ達と出会ったダイヤ、ルビイ、そしてダイヤの幼馴染である青髪のポニーテールが特徴的な松浦果南の姿があった。ラブライブ！本戦決勝

のチケット抽選に、ダイヤがまさかの当選を果たして今日は幼馴染3人で来る予定であった。しかし、もう1人の幼馴染はどうしても外せない用事ができたため、急遽ダイヤの妹であるルビィを含めた3人で来ることになった。

「でも、本当に私で良かったの？」

「私はルビィと一緒に良かったですわよ。鞠莉まりさんはお家の用事があるから仕方ないですわ」

「それに、ルビィちゃんも来たがってたでしょ？ラブライブ！」

「ピイツ……！う、うゆ！」

ルビィは来れなかった姉達の幼馴染、小原おはら鞠莉まりのことを気になっているようで、ダイヤと果南はそんなルビィを安心させるために「残念」というワードを出さないようにしていた。

余談ではあるが、沼津から東京までの移動費は鞠莉が両親に頼んで出して貰っていた。

ダイヤとルビィは根っからのスクールアイドル好きだが、果南はそこまでスクールアイドルのことに詳しくない。ダイヤから耳が痛くなるほどそのことについては聞かされていたがイマイチその素晴らしさについてはわからずにいた。しかし、この人の多さとラブライブ！の世間からの注目度からその凄さを自身の肌で感じていた。

「さあ、行きますわよ！」

「うゆー！」

「さつきまでと全然違うし……」

ダイヤには人混みでの疲れはなく（吹っ飛び）、3人はドームの中に足を踏み入れていった。

「理亞、早くしないと始まりますよ」

「姉様、そんなに急がなくてもまだ時間は……！」

理亞と呼ばれた紫髪ツインテールが特徴的なその少女は、黒に近い紫髪のサイドテールが特徴的な姉に腕を引っ張られながら会場に入ってしまった。

この2人の名は鹿角かづの 聖良せいらと妹の鹿角かづの 理亞りあ。北海道からこの日のために上京してきたのだ。2人でスクールアイドルになろうと誓っている鹿角姉妹は、チケットに当選してから今日という日をとっても楽しみにしていた。姉の聖良はその行動からわかる通り1番楽しみにしていたのだ。

出場するスクールアイドルは大きな控え室に集められていて、そこで自分達の出番を待つことになる。1番手のナニワオトメはもうすでに舞台袖に待機している。



今回のラブライブ！から各スクールアイドルが披露するのは2曲となっている。それは第2回ラブライブ！の時のμ'sのアンコールが影響しているようだ。

確かにアンコールは素晴らしいステージを披露した者に贈られるものである。しかしそれは逆に他のスクールアイドルのアピールとの質や曲数の差を生むことになり、全スクールアイドルの活躍の場を奪うことになる危険がある。ラブライブ！は全スクールアイドルのためにあるもので、アンコールが起る可能性があるのなら出場グループには2曲披露してもらいアンコールは禁止するべきだ。

そういう一部からの意見があり慎重に検討された結果、今回のラブライブ！からアンコールが禁止され、その代わり各スクールアイドルは2曲披露することになった。さらに曲と曲の間では所属する学校の宣伝PVを流すことができ、その間に衣装を替えることも許可されていて、ラブライブ！はスクールアイドルのためだけではなく本格的に学校自体の宣伝の機会にもなろうとしている。

そしてあつという間に開演時間を迎えた。

開演時間となると同時に照明が暗くなり、それは観客達にラブライブ！本戦決勝の開始を告げるようだった。そしてしばらくしてある一点にライトが照らされると歓声があがり、そのライトのもとにはA—R—I—S—Eの3人が背中合わせに立っていた。

そして開幕を告げるかのようにA—RISEはある曲を披露した。それは第2回ライブの本戦決勝に向けて制作が進められていた曲、『Our Justice』だった。3人がラップ調に歌う部分が特徴的でサビ以外は殆どそれで構成されていた。そのパフォーマンスを観た誰しもがスクールアイドルA—RISEとプロアイドルA—RISEの違いに驚いていた。そう、A—RISEはあれからさらに成長していた。μsに敗北してからもライブや練習を辞めることなく積み重ねていた。その成果が実ってユニバーサルというアイドル会社からスカウトされ、現在もスクールアイドル出身のプロアイドルとして活動している。

A—RISEのパフォーマンスが終わると始まった時よりも大きな歓声が会場に響いて、3人は横一列に並んで会場全体を見回した。

『ありがとうございます！私達、今回のライブ！の司会進行を務める、綺羅ツバサと』

『優木あんじゅと』

『統堂英玲奈の』

『A—RISEがお届けします！』

「ワァ——！！」

『ついにこの、第4回ライブ！本戦決勝の日がやって来ました』

『オープニングは私達のプロデビュー曲。みんなどうだった？』

「うおおお——！！」

「よかつた〜！」

「さいこお〜！」

『ありがと〜！』

『さあ、1組目のパフォーマンスの前にまずはルール説明だ。これから各出場グループが2曲ずつ曲を披露していく』

『その中で1番良かったと思うグループに、ネットやテレビでご覧のみなさんはラブライブ！公式サイトの投票ページから投票してください！』

『会場にいる人は入場前に配った専用端末から投票してください』

『但し、投票出来るのは全グループのパフォーマンスが終わってから。会場のみなさんは携帯電話、スマートフォンの電源は切っておいてくださいね』

『もし、気分が悪くなったりしたらすぐにお近くのスタッフまで知らせてください』

『ふっ、スクールアイドルの熱気に倒れるんじゃないぞ？』

『それでは！早速1組目、トップバッターの出番よ！』

『大阪からやってきた関西の王者。その実力はスクールアイドルでもトップクラス。』

『前回ラブライブ！王者でシード権出場……』 ナニワオトメ！』

「オオ——!!」

英玲奈の紹介が終わってステージを照らすライトが消えると会場全体がそのトップバッターのグループ名に震えた。そしてステージ後方にあるスクリーン、上から下へ下げられているスクリーンにナニワオトメの名が映し出された。

A—R—I—S—Eがステージから離れるとステージ中央にある星型オブジェの後ろからナニワオトメがステージに現れてダンスの体型に並んだ。そしてイントロが流れ出し、ナニワオトメのパフォーマンスが始まった。

——ついに、ラブライブ！が開幕した。

最初から前回王者のパフォーマンスとあって会場のボルテージは初めから最高潮に達していた。そのパフォーマンスを他の参加者達は控え室にあるテレビから流れている中継映像をジッと無言で見つめていた。

「音ノ木坂学院、Shooting Starsさん！準備をお願いします！」  
『はいー！』

ナニワオトメの一曲目が終わり、大坂学園のPVが流れ出すと控え室にスタッフが次の出番であるShooting Starsを呼びに来た。返事をしたメンバーは控え室を出て待機場所へと向かった。

ナニワオトメが2曲目を披露している中、待機場所ではナオキと童子を合わせた全員が本番を前にいつも通りの円陣を組んでいた。

「いつも通りのパフォーマンスをすれば絶対勝てる！」

「その通りや。客席からみんなのこと見てるからな」

「みんな、全力で輝いてこい！」

『はい！』

リーダーである凜、顧問である童子、そしてみんなを支えるナオキの言葉はメンバーの気持ちを鼓舞した。

みんなお互いの顔を見ながらやる気に満ちた顔で頷き合い、全員が凜の顔を見つめて準備万端と合図を送った。

「……じゃあ、行くよ！いち！」

「に！」

「さん！」

「よん！」

「ぎゅー！」

「ろくく！」

「なな！」

「はち！」

「きゅう！」

「じゅう！」

凜から花陽、真姫、穂乃果、ことり、海未、雪穂、亜里沙、真癒美、瑞希が順番に番号を言ったが、その次の番号のマシユはこの場にはいない。しかしそこをどうするかはもう決めてある。

「……じゅうに！」

この場にはいなくとも、どんなに離れていてもマシユはShooting Starsのメンバーで、この夢の舞台を共に目指した仲間だ。だからその証でもある「11」という番号は誰も言わず、次の番号であるナオキはマシユが番号を言えるぐらいの時間を空けてから自分の番号を言った。

「じゅうさん！」

『Shooting Stars！ミュージック……スタートー！』

そして最後に童子が番号を言うと、全員が声を揃えてピースの形にしていた手を振り

上げた。

——カナダではマッシュがスマートフォンでラブライブ！の中継を流しながらピースした手を空に向かってかざしていた。

ナニワオトメの2曲目のパフォーマンスも終わり、ついにShooting Starsの出番が近づいてきた。

ナオキも機材席に座ってステージを見つめ、手に汗を握りながら自分達の開始時間を待った。童子は音ノ木坂学院の生徒達と共にみんなに声援を送ろうとペンライトを持って出番は今か今かと楽しみにしていた。

『伝説を受け継いで再び決勝の舞台に立つ。初出場ながら激戦の東京地区、そのひと枠という狭き門を通過したのは必然なのか！』

東京地区代表……Shooting Stars!』

「オオオ——!!!」

ツバサがShooting Starsの出番を告げると、その出番を待ちわびたかのような大きな歓声がドームに響いた。

1年生達はその歓声の大きさに体を震わせたが、先輩達の頼もしい存在や表情に少し

安心感を覚えた。

「——行こう！」

『はい！（うん！）』

ツバサがステージから離れ、凜のひと言と共に Shooting Stars はドームのステージに飛び出していった。素早く配置について曲が始まるのを待った。

（——時間だ）

照明が付くのと同時に1曲目のイントロが流れ出した。

——ナオキのパソコンの中に保存してある『楽曲フォルダ』は3種類あった。μsの曲のフォルダ、Shooting Starsの曲のフォルダ、そしてまだアイデア段階の曲のフォルダだ。

アイデア段階の曲のフォルダにはナオキが暇つぶしに考えた曲が入っていて、μsの最後を伝えるライブ、『Moment Shine』の時にはここに入っていた曲をしつかりと作り直したものを披露した。

そして今回のライブ！で披露する曲はその中からほぼ完成に近かったものだ。ナオキがスクールアイドルのために曲を作るのは最後になるだろうと、海未や真姫も加わって3人でアレンジをした。言うなれば、今回のライブ！はμsの時から曲を



作ってきた3人が作る曲の最後の披露の場となる。

1曲目に披露したのは『ENDLESS PARADE』。

衣装はそれぞれのイメージカラーの色をしたシンプルなものだった。下は短いスカートの中から長いスカートが出ている二重のもの。お腹を出して肩を出して袖が単体であるもの、肩も隠している袖も引っ付いているものの2パターンがあり、袖も長いもの短いものがあった。

パレードの始まりのようなイントロはShooting Starsの出番の始まりを告げるようなものだった。ステージのライトに照らされたメンバーを観客達は大きな歓声を上げて迎えた。曲のテンポは早くも遅くもなくゆったりとしたものだったが、どこかノリやすい雰囲気もあった。

「この時間を終わらせたくない」をテーマに作られた曲だけあって、歌詞にもその思いが込められている。歌詞はサビは全員で、それ以外を1人ずつパートを分けて歌われた。

みんなとても楽しそうに歌い、踊っていて、見ている人達の体も思わず踊るように動いていた。

そんな楽しい雰囲気の一曲目が終わり、一旦暗転するとスクリーンに全校生徒と協力して作った音ノ木坂学院の紹介PVが流れ始めた。それと同時にShooting Starsはステージ近くに用意された更衣室に駆け込んだ。

ゆつくり着替えている暇がないため、2曲目の衣装はとても簡単なものにした。1曲目の衣装も脱ぎやすく作られている。スカートは音ノ木坂学院の制服のもので、上は黒いシャツ。シャツには次の曲名が金色の文字で書かれていた。さらにそれぞれシャツのどこかしらに星型の缶バッジを付けていて、自由度が高めの衣装になっている。

学校紹介のPVも終盤に差し掛かり、みんなは次の曲に備えてステージ裏に待機していた。

『——以上、音ノ木坂学院からでした!』

PVが終わると観客達が生拍手の音が会場に響き、それと同時に照明が暗くなった。そしてそのタイミングを見計らって再びステージに飛び出した。

——夢へ向かって突き進め。

そんな思いがこの曲には込められている。それはこの曲を聞く人にはもちろん、スクールアイドルや目指す人、なによりこの曲を歌う自分達に向けてのメッセージだ。

その曲名は『Dreamin', Go!Go!!』。

曲のイントロが始まると共に照明がステージを照らし、そこにはポーズを取っている Shooting Stars の姿があった。ファンファーレのようなイントロに合わせて2種のポーズを取り、イントロが盛り上がりつついくとセンターの穂乃果と凜を中心にみんな2人1組で間隔を空けながら広がっていった。穂乃果と凜以外のペアは、海未と真姫、ことりと花陽、雪穂と亜里沙、真癒美と瑞希となっていた。

歌詞は2人ずつ歌って、歌っていないメンバーは飛び跳ねながら腕を頭上で回していた。しばらくすると観客達も真似をしてペンライトを頭上で回し始めた。

（——よし、ここは狙い通りだ。あとはあそこで乗ってくれるかどうか……）

ナオキはその光景を見てひと安心した。観客がステージで踊っているみんなにっついてペンライトを回すこの光景は、みんなの観客の人達も一緒に盛り上がりたいたいという思いから考えられたもので、これもまたこの曲のダンスの一部だ。しかし、観客と共に盛り上がるタイミングはこれだけではない。ナオキはその部分に近づくと不安になつていたが、ステージで踊るみんなを見て「必ず成功する」と確信した。

「せーのっ！」

——そしてその時は訪れた。

凜の掛け声の後サビに入り、穂乃果・海未・ことり・凜・真姫・花陽が『Go!』と

声を上げた後すぐに続いて、雪穂・亜里沙・真癒美・瑞希が『Go!』とジャンプしながら右サイドの人は右の、左サイドの人は左の拳を突き上げて元気よく叫んだ。1年生達のそれは観客達を誘うようなものだった。

最初の1回目は観客の誰もが困惑していたが、2回目は所々で1年生達に合わせて叫ぶ人が現れた。そして3回目、4回目と回数を重ねるにつれてどんどんその人数は多くなっていた。

サビが終わった後、ギターソロの間奏が始まった。その間、『はい！はい！——』と観客を煽りながら腕を上下に動かしていた。観客達もそれに応えるように同じように声を張り上げながらペンライトを振った。

間奏が終わりついに曲はラスサビに差し掛かった。今度の掛け声は観客のほぼ全てと言つてもいいほど大きかった。そんな声にみんなは感動を覚えつつも最後まで歌い切るといふ決意を揺らがせず、元気よく笑顔で歌った。

最後にイントロと同じようなメロディが流れ、ゆつくりと中央に全員が集まってポーズを決めて曲が終わった。

曲が終わると、ひと際大きな歓声がドーム全体に広がった。メンバーは息を切らし、汗を流し、手を繋いで横1列に並んでその歓声を味わった。

「せーのっ！」

『ありがとうございますー!』

そして凜の掛け声と共に全員でそのまま礼をすると、さらに大きな歓声と共に拍手が鳴り響いた。童子とナオキも立ち上がってみんなに拍手を送った。

それからみんなはステージから走って舞台袖に下がっていった。みんなが下がると共にナオキもスタッフに一礼してから、童子も目から流れた水滴を拭き取って出番を終えたみんなの元に向かった。

「さあ、どんどん行くわよ。続いては——」

Shooting Starsがステージからいなくなるとあんじゅがステージに現れ、次の出番のスクールアイドルの紹介をはじめた。

そう、まだラブライブ!は始まったばかり。ナニワオトメとShooting Starsの勢いに乗って、他のスクールアイドル達も自分達のパフォーマンスを全力で披露した。その光景を見ている誰しもが「今回のラブライブ!はどのグループが優勝してもおかしくない」と思っていた。

——控え室前。

他のスクールアイドルの出番が続いていく中、衣装から着替えたShooting

Starsはナオキと童子を加えてステージの成功を喜んだ。

「みんなお疲れ様！今までで一番良かった。パフォーマンスだったぞ！」

「うんうん。うちも涙が出てくるぐらい感動したわ。ほんまに良かったよ」

『ありがとうございます！（ありがとうございます！）』

ナオキと童子の劳いの言葉にある者は照れ、ある者は喜んだ。

3年生・2年生達の目は表情とは裏腹に若干うるうるとしていた。

1年生達は未だにドームのステージで踊ったことが信じられず、どこか上の空の状態だった。

「ねえ、これ夢じゃないわよね？」

「うん、多分……」

「夢なら覚めて欲しくないな……」

真癒美・雪穂・瑞希はぼーっとしながらそんなことを話していると、亜里沙は雪穂の頬をつねって離れた。

「……痛い？」

「うん、痛い。夢じゃ、ないんだね」

雪穂がそう言うのとやっと1年生達の顔に笑顔が現れ、お互いの顔を見て微笑みあった。

夢のような時間はすぐに終わってしまう。しかし、その限られた時間の中でShooting Starsは夜空にキラリと輝く流れ星のように、このライブ！のステージを、ドームのステージを一番の輝きを放って駆け抜けた。

「でも喜ぶのはまだ早いぞ？結果発表がまだだからな」

「ナオキくんの言う通りや。結果が出るまでは安心できひんよ」

その2人の言葉にみんなは頷いたが、1年生達は心の中でどこか安堵していた。それは、「先輩達がいるから優勝しただろう」という気持ちから来るものだった。

——そして結果発表の時は訪れた。

『みんな投票ありがとう！』

『では、第4回ライブ！本戦決勝の順位を発表します！』

英玲奈とあんじゅが堂々と宣言をすると壮大なBGMと共にスクリーンに『結果発表』という文字が大きく映し出され、観客達は待ちわびたように大きな歓声を上げた。

『どのスクールアイドルも本当に素晴らしい演技だった。どのグループが優勝してもおかしくない』

『では、まずは29位から20位を一気に発表するぞ』  
『ではお願いします!』

それから29位から順番にスクールアイドルの名前がスクリーンの順位表に表示されていった。本人達は祈って控え室からその画面を見つめていた。早く名前が呼ばれたら静かに落ち込んだり、泣いたりする人もいた。しかしこの29位以内に入るだけでもとても凄いことなのだ。

その後も順位発表は続いていき、ついに10位から4位までの入賞グループが発表されていった。そして結果発表もついにトップ3を残すところとなった。

『さあ、残すはトップ3!』

『ここでもまだ結果が発表されていない3グループに登場してもらおう!』

『大洗ドリームス! Shooting Stars!そして、ナニワオトメ!』

ツバサがグループ名を言い終わると、舞台袖からそのグループのメンバーが出てきた。そのグループの人達を観客は歓声と拍手で迎えた。

(――あとは祈るだけか……)

ナオキは応援に来ている音ノ木坂学院のみんなや童子と共に客席からみんなを見つめ、Shooting Starsの優勝を祈った。



『ではみなさん！画面にご注目！』

ツバサがそう言うのとドームにいるみんなの視線がスクリーンに集まった。

3色のグラフがゆっくりと伸びる。その下には3組のグループ名が書いてあった。

すると『大洗シスターズ』と書かれたグラフの上昇が止まり、その瞬間3位が確定した。そのグループのメンバーの1人、リーダーと思われる人がうずくまり、それを他のメンバーが抱きしめた。

『これは……！』

『ナニワオトメとShooting Starsの一騎打ちになったな！』

『さあ、優勝はどっちだ……!?!』

そして未だに並んで上昇を続ける『ナニワオトメ』と『Shooting Star S』のグラフ。メンバー達は特にそれを固唾を呑んで見守った。

「そのまま伸びろ」と両グループのメンバーとその関係者は強く祈った。

果たして優勝はShooting Starsか。それとも、ナニワオトメか。

——  
次回へ続く。

## 第160話「分裂」

——ラブライブ！本戦決勝の2日後。

決勝の翌日は休みになっていて、そのさらに翌日であるこの日はあいにくの雨だった。

音ノ木坂学院アイドル研究部の部室には2・3年生と童子がいつもの席に座っていて、雨が窓に当たると音だけが部屋に響いていた。

「……やつぱりおれ様子を——」

「——辞めなさい。逆効果よ」

我慢できなくて立ち上がったナオキを真姫は止める。ナオキは大人しくそれに従って椅子に座りなおした。みんな深刻な顔をしていて誰も喋ろうとはしなかった。いや、いつも通り話す程の空気ではなかった。

——ここにいない1年生はというと真癒美と瑞希が所属するクラスに集まっていた。真癒美は自分の席から離れようとはせずずっと窓の外を見つめていた。

「真癒美、そろそろ行くようよ。先輩達心配してるって」  
「……………うん」

親友である瑞希の言葉に返事をした真癒美は一向に立ち上がりとはせず、そんな真癒美を他のみんなは心配そうに見つめた。

——部室ではみんなの視線はある一点に集中していた。

それは、銀色に輝くトロフィー。

『ラブライブ！準優勝』の文字が台座に刻まれていて、端が赤い白い布には『第2回 音ノ木坂学院 Shooting Shooting』の文字がマジックで書かれていた。

「……………惜しかったなあ」

童子がボソツとそう呟くとみんなは静かに頷いて“あの時”のことを思い出す。

——秋葉ドーム。

ぐんぐんと伸び続ける Shooting Stars とナニワオトメのグラフ。それを誰もがじっと見つめていた。

——そしてそれは唐突に終わりを告げる。

片方のグラフが僅かにもう片方のものを超えたところで上昇が止まった。その瞬間、今日一番とも言える大きな歓声がドームに響いた。

『つ……決まった！優勝は……』

『大坂学園スクールアイドル！』

『ナニワオトメ！』

「おおおお——！！！！」

A—RISEがナニワオトメの優勝宣言を行うと、観客の歓声とほぼ同じタイミングで大きな音が鳴り響き、ステージに色とりどりの紙吹雪が舞った。

その差を付けたのは両学校の生徒数だった。第2回ライブライブ！では誰もが素晴らしいと思う演技で他学校の生徒すらムsに票を入れていた。今回もその傾向が見られたが、基本は自分の学校に、地元、母校に票が入れた。大坂学園の生徒数と音ノ

木坂学院の生徒数の差は明らかだった。

2・3年生はライバルであるナニワオトメを素直に祝福し、真姫と凜はマチコと握手を交わした。

しかし、1年生達は祝福の気持ちはあるが素直にそれができず、ずっとスクリーンに表示された最終ランキングを見つめていた。

「2位……」

「つまり、準優勝？」

「そう、だね」

瑞希・亜里沙・雪穂はそう呟き、シヨックではあったが「2位」という事実をある程度は受け止めていた。

——でも。

「うっ、うう……!」

「真癒美……」

真癒美は誰よりも深く落ち込み、涙を流した。そして瑞希の肩にデコを当て、服を掴んで声だけを出すまいと歯を噛み締めて涙を流した。瑞希はそんな真癒美を胸でギュッと抱きしめて頭を撫で、その気持ちに向き合った。

(こんなに素直な真癒美……いつ振りなんだろう?)

——中学2年生ぐらいから真癒美は強くなった。いや、強く振る舞ったと言うべきだろうか。それまでは何か上手くないことがあるとよく声を上げて涙を流していた。ダンス大会で負けた時も母親の服に顔をうずめて泣いていた。しかしそんな真癒美の姿を最近瑞希でさえ見なくなっていた。それはきつと妹の誕生が原因だろう……と瑞希は考える。

真癒美が小学3年生の時に、真子<sup>まこ</sup>という妹が産まれた。そんな真癒美の中に生まれたのは「姉として強くあらなければならぬ」という気持ちだ。それからは泣きそうになった時も我慢し、中学2年生の時には現在のように悔しくても、悲しくても素直に表に出そうとはしなかった。

そんな真癒美は今回これほど悔しがり、声を押し殺して涙を流している。瑞希は内心、とても安心していた。真癒美は変わっていないということが再確認できたからだ。

(こんなことを言えば真癒美は怒るだろうけど、私は素直な真癒美の方が好きだよ)

「いいんだよ。素直になって……」

そう囁きながら瑞希は優しく真癒美の頭を撫で続けた。

——みんなの記憶からその時の光景は離れるはずもなかった。そしてその気持ちもわかっていた。

「やっぱり、”あのこと”なのかな？」

「十中八九そうでしょうね」

「でもあんな真癒美ちゃんを立て直すにはどうしたら……」

穂乃果・海未・ことりの言葉に部室にいるみんなは唸り声をあげた。そしてナオキは決心したように静かに声を上げた。

「……あのさ、みんなに提案があるんだ」

——真癒美達のクラスの教室。

真癒美は無言で外を、他の1年生達はそんな真癒美を心配そうに見つめながら本戦決勝のことを思い出していた。

「ねえ、真癒美……何か言つてよ」

「うん……」

「真癒美つてば……！」

「うん……」



瑞希が何度も名前を呼ぼうとも真癒美の反応は変わらなかった。そんな2人を見ていた雪穂と亜里沙はどんどん表情が変わっていく瑞希に気付き、真癒美の名前を静かに呼んだり瑞希の興奮を抑えようとした。

そしてついに――

「っ……」まゆちゃん!!」

突然の大声に3人共ビクツと肩を跳ね上げて思わず顔を瑞希の方に向けた。

「な、なによ。それにその呼び方は辞めてって……」

「いつまで1人でうじうじしてるのよ!もつと素直になりなよ!」

「なっ……!」

「ずっと意識ここにあらずって感じで……悔しいなら悔しいって言えばいいじゃん!先輩達に合わせる顔がないならそう言えばいいじゃん!」

「っ……瑞希に……」たまちゃん」になにがわかるのよ!」

「わかるよ!だって私はまゆちゃんの幼馴染だよ?!考えてることぐらいわかる!」

「ちよ、ちよつと2人共……」

「雪穂は黙ってて!」

「は、はい……!」

真癒美と瑞希の息の合った声に、2人を止めようとした雪穂もたじろいでしまう。亜

里沙はどうしたらいいのかわからずにあたふたとしていた。

睨み合いを続ける2人だったが、真癒美の目からは涙が線を描いて頬を伝っていた。

「……………つてるわよ」

「真癒美ちゃん……………」

「悔しいに決まってるわよ！だって最高の演技をした！それに憧れの先輩達だった！負けるはずないと思つてた！でも、違つた……………」

「それは先輩達も『どのグループが勝つてもおかしくない戦いだつたから仕方ない』つて言つて——」

「——そうじゃない！私が言いたいの、私が、私達1年生の存在が先輩達の邪魔をしたかもしれないつてこと！」

『……………！』

その言葉に3人の心はギョツと締め付けられた。何故ならそれは凶星だつたからだ。

「みんなも思つてたでしょ？もしかしたら私達が先輩達の邪魔をしているかもしれないつて。先輩達は“伝説”とまで呼ばれたスクールアイドル。それに比べて私達はついこの前にスクールアイドルを始めた1年生……………その差は圧倒的、天と地ほどの差があるわ。」

楽しくなかつたかと言われればそうじゃない。楽しかつたし嬉しかつた。でもその

中でも『邪魔かもしれない』って気持ちもあつて……その気持ちがどんどん大きくなつて。そしてラブライブ！では準優勝。先輩達なら、先輩達だけなら優勝していたかもしれない……！そう思ったら、なんだか、悔しくて……！」

「それは私も、ううん、私達も思ってた……」

「うん……」

「……」真癒美は素直じゃない分、その気持ちを、責任を誰よりも一番重く感じてたんだと思う」

真癒美は自分の気持ちをぶつけると、歯を噛み締めて泣き声だけは漏らさないように涙を流した。しかしそれは真癒美だけが思っていることではなく、雪穂・亜里沙・瑞希も同じことを思っていたことだ。

何度もそのことを考えてしまっていたが、ラブライブ！も近くその思いが余計邪魔になると思つて心の奥にしまっていた。しかし、「ラブライブ！準優勝」という結果が鍵となつて、そのしまっていた思いは大きくなつて飛び出したのだ。

3人共、真癒美が動かないから部室に行かなかつたわけではない。それもあつたが、3人の心の中にも「先輩達に合わせる顔がない」「なんと言えはいいかわからない」「どうしたらいいかわからない」という気持ちがあり、この場を動こうにも動けなかつたのだ。その気持ちに真癒美の本音を聞いてから気が付いた。

「失礼します」

そんなことを考えていると、教室のドアの開く音と人の声がして4人の視線はそつちに向いた。

『ナオキくん（お義兄ちゃん）!?!』

その声の主はナオキで、さらにナオキの後ろには2、3年生と童子の姿もあった。4人は動揺してなんと声を出したらいいかわからず視線をずらして口を閉じた。

「……やっぱりに気にしてるのか?」

ナオキの真面目な声での問いに1年生の4人は頷くことすらできなかった。

それを見たナオキ達はお互いの顔を見て頷き合い、そしてナオキに促された花陽が1年生達の前に出た。

「みんな、かよちんの話聞いてほしいにや」

凜がそう言うのと1年生達は恐る恐る花陽の方に顔を向けた。花陽は深呼吸してから真剣な顔で真つ直ぐと1年生達を見た。

「みんなに伝えることがあります。それは——」

それは1年生にはとても予想できなかったもので、今後のShooting Starsの、アイドル研究部の運命を変える言葉だった。

「——私達は、Shooting Starsを……脱退します」

『え……?』

1年生達は自分の耳を疑った。何かの聞き間違いだと思った。恐る恐る、その言葉の”意味”を亜里沙が聞いた。

「それって3年生がってこと、だよな?」

「そ、そうだよ!もうびつくりさせないで——」

「——違うわ。今回の引退は3年生もだけど、私達2年生のことでもあるのよ」

可能性を信じたかった亜里沙と雪穂の言葉を真姫が否定する。花陽が言った引退という意味がはつきりして1年生達は再び言葉を失い、場を静寂な雰囲気支配する。

「……真癒美?」

瑞希は下唇を噛んで俯く真癒美の名を呼んだ。しかしすぐに拳を強く握ってふるふると体を震わせる様子を見て、咄嗟にその後起こるであろう最悪の事態を予測してしまった。真癒美を抑えようとしたがもう遅かった。

先程までの真癒美の心情からもう我慢をすることは不可能。コップから水が溢れて

いるのにさらに水を加えることと同じことなのだ。

「もつと早く気付くべきだった。お前達が——」

「——ふざけないでください!!!」

ナオキが何か言いかけたが、今はそれを聞く余裕すらない真癒美がその言葉を遮った。みんなの視線は嫌でも真癒美に集まった。

そして真癒美の勢いは止まらずそのまま言葉が続けた。

「なんで、なんで先輩達が辞めることになるんですか!?!それってラブライブ!に負けたからですか?!それなら余計にわからない!だって負けたのは私達のつ……!!」

「落ち着きなさい。だからそれは違うって言ったでしょ?」

「それならなんで辞めるんですか?!一緒に……みんなで輝きになろうって言ってたじゃないですか?!あの言葉は嘘だったんですか?!」

「そんなことは……」

「そういうことじゃないですか!?!私は認めない……先輩達が Shooting Stars を辞めるなんて!」

真癒美は様々な不安や不満でいっぱい余裕がなかったからか、所々で敬語になってしまっていた。一気に言葉を連ねたため息を荒くして若干の涙を流していた。

そのタイミングを見計らってナオキは先程みんなに提案したあの事を伝えた。

——数十分前。

「……あのさ、みんなに提案があるんだ」

『提案?』

「ああ、前から話してたる? おれ達2、3年生、元々sの存在が1年生にとつてプレッシャーになつてゐるつて」

「うん、みんなが集まつて話したよね」

「ああ。それでさ、このタイミングで……あれ”を実行したらいいんじゃないかなつて」

ナオキの言葉に意味のわかる2、3年生は驚きの表情を見せる。童子は何のことかわからず不思議そうにみんなを見た。

「それは……火に油では?」

「そうよ。今のタイミングはベストとは思わないわ」

「でも、もしかしたらあいつら……特に真癒美は来なくなるかもしれない。だったらいつそのタイミングで……つていうのがおれの考えだ」

一同はナオキの意見を聞いて唸り声をあげる。その意見も納得できるところがあるからだ。真癒美が1番責任を感じているのはみんなは察していた。

「ちよつと。とりあえずうちにもわかるように説明してくれへんかな？」

「あ、すみません」

痺れを切らした童子はついに説明を求めた。ナオキは苦笑いしながら謝り、童子に事情を説明した。

以前から1年生達はプレッシャー、自分達と踊ることへの不安を抱えていたこと。そして元々Sで集まってそのことについて話し合ったこと。その結果、2・3年生がShooting Starsを抜ける決断をしたということ。

「なるほどなあ。確かにその方があの子らの為かもしれないね。でももちろんあの子らが反発するのはわかってるよな？」

「はい、それはわかってます。だからこう決めてたんです。おれ達2・3年生、いえ——

——

「——来年金ノ木に残る2年生と、お前達1年生とライブ対決をして欲しい。そしてらおれ達の言っていることがわかるさ」

『えっ……!!?』



そのナオキが提示した内容に1年生達は戸惑い、驚きを隠せず声をあげた。

「先輩達、伝説と呼ばれたスクールアイドルと勝負なんて、結果はもうやる前からわかっている」と1年生達はすぐに思った。

「……怖いのかにや？みんなは怖いから対決を受けようとしなない……そうだよな？」

答えを渋っている1年生達に対して凜は挑発とも取れる発言を投げかけた。とかこれらは挑発である。凜の言ったことは凶星だったが、プライドが高く余裕がなくなっている真癒美がそれに乗らないわけがなかった。

「そんなんじゃないです！考えてただけですから！」

「ちよつと真癒美……！」

「受けるわよ、その対決！」

「「ええ〜!?」」

真癒美の宣言に1年生達は驚きの声をあげた。2. 3年生は上手くいったと笑みを浮かべた。

「決まりだな。じゃあ対決は再来週の金曜日。全力で、正々堂々と対決すること。大丈夫か？」

『は、はい!』

「よし、じゃあルールはこうしよう。」

曲とダンスは同じものを使う。でも曲の間奏部分は決めずに、そこだけ各自で考えること。それまでの練習も各自で集まってする」

「あ、1年生達はうちが練習見るからなく」

「3年生はおれが見る。それでいいだろ？」

全員、ナオキが提示したルールに納得して頷く。それを確認したナオキはポケットに入っていたUSBを童子に渡した。

「この中には曲と振り付け表が入ってます。振り付け表はコピーしてみんなに渡してやってください」

「任しとき〜」

「曲名は『Shangri-La Shower』だ。楽しみにしてるぞ」

そう言うとなオキは教室から出て、それを追うように2、3年生も出て行った。その場に残ったのは1年生達と童子だけだ。

「じゃあうちはコピーしてくるさかい、ちよつと待っててな〜」

さらに童子も出て行ったため、1年生達は教室に取り残されてしまった。誰も話そうとはせず、ずっと出口の方を見つめていた。

「……ごめん、勝手に引き受けちゃって」

「いいよ。引き受けないとあのまま先輩達辞めちゃってたもん」

「でも、どうして……」

「でもまだチャンスはあるよ！もしかしたら対決の結果次第では残ってくれるかもしれないしー！」

「それに、今の私達の力を試す機会でもあるしね」

亜里沙と雪穂のひと言でみんなは決意が固まったように互いの顔を見て頷き合った。しかし皆、心にはまだ少しの不安が残っていた。

1年生と3年生の対決の日まで2週間。今まで体験したことがない練習が始まった。

「ほなみんなまずは歌の練習やで〜」

『はい！』

（――もしかして、私達が負けたら先輩達は残ってくれるかも……）

――次回に続く。

## 第161話 「それぞれの輝き」

1年生と2年生はついに1週間後までに迫った対決の日に向けて練習を重ねていた。2年生は思い出の屋上で、1年生達は空き教室で練習しており、それぞれナオキと童子が指導していた。

掲示板や窓などの学校の所々に対決のポスターが貼られていて、学校中からの注目も高い。この対決の観客、つまり審査員は音ノ木坂学院の生徒と教職員に決まった。そしてそれにその全員が賛成してくれた。それだけアイドル研究部という存在がこの音ノ木坂学院では大きなものだということなのだろう。

「ストップストップ！みんな動きがバラバラやで！どうしたん？恋の悩みか？」

『違います！』

「あらなんや、おもしろいなあ。ほんならみんなどうしたん？まだ共通パートもできてへんやで？」

童子の言葉に1年生達は目線を逸らした。

練習を始めて1週間が経つが、歌もダンスも1部を除いてタイミングがバラバラのま

まなのである。個人パートは完璧なのだがと童子は頭を悩ませた。

「とりあえずみんな休憩な。しっかり身体休めて再開するで」

『はい！』

みんな床に座って休憩しながら何故タイミングが合わないのか考え始め、そのせいで教室内は沈黙が続いた。童子はその中でみんなの顔を見回しながら考えて、そして何か思いついたのか唐突に声を上げた。

「そうや！みんな、対決に向けての意気込みを言ってみて」

「えっ、なんで……」

「いいからいいから！はい、亜里沙ちゃん！」

童子は思いつくとすぐに亜里沙を指名し、その本人はびっくりして少し戸惑いを見せた。

「えつと……私はなんて言うか……凄く楽しみ！あのμsと勝負できることが！」

「そうかそうか。次は雪穂ちゃん」

「私は……勝ちたい。勝つてあんなことを言ったお姉ちゃんや先輩達を見返したい……！」

「うんうん。次は瑞希ちゃんな」

「私は——」

雪穂の次に指名された瑞希は、自分の隣で俯く真癒美に横目で一瞬視線を送ってから理由を語った。

「——私は、この4人で1曲を歌って踊るとは思わなくて……だから、ちよつとドキドキしてます。一体どんなライブになるんだらうって……」

「なるほどな。では最後に真癒美ちゃん」

「えっ……!?!」

最後に指名された真癒美は顔を上げ、自分に視線が集まっているのを確認して自らの気持ちと向き合った。

「私は……」

——『いつまで1人でうじうじしてるのよ!もつと素直になりなよ!』——

真癒美の脳内にあの日の瑞希の言葉、表情が蘇ってきた。

ラブライブ!本戦決勝に負けて、それが自分達のせいだと落ち込んでいた真癒美に、幼馴染であり親友の瑞希が怒り、それで軽く言い合いになったこと。その後先輩から告げられたShooting Starsの脱退。そしてその時に”思った”こと。

真癒美の心は闇のように暗かった。正直やる気にはならず、みんなのタイミングが合

わないのも自分のこの気持ちに伝染したからだと思っっている。

（——もしかして、私達が負けたら先輩達は残ってくれるかも……）

そんなことをあの時に思わなければこんなことにはならなかったのにと後悔の念が湧いてきていた。こんなことを言えばきつとまた喧嘩になってしまう。

「私は……」

咄嗟に嘘の気持ちを言おうとすると、視線に瑞希のムスツとした顔が入ってきた。きつと瑞希には真癒美が嘘を言おうとしていることなどお見通しなのだ。

もちろんそのことは真癒美自身もわかっていて、嘘をつけば余計に衝突するだろうと素直に言うことにした。

「私は正直……」負けてもいいかな”って思ってた」

そのまさかの言葉に全員が絶句した。しかし瑞希はどこかそれを予想していたという表情に変わった。

「この勝負、負けたら私達の実力がなかったことが証明される。そしたらもしかしたら先輩達は残ってくれるかもしれない。ずっとそう考えてたわ」

童子はこの瞬間に、みんなの気持ちは同じ方向を向いていないことがわかった。特に大きく分けると、真癒美以外の3人は対決に対してポジティブな考えを持っている。3人はすぐに修正できるとしても、真癒美は中々難しいだろう。

そして童子はそれを打開する方法を考え始めた。時間もあまり残されていない中でどうすればいいのか。しかしこれはあくまで本人達の気持ちの問題。解決できるのは本人達しかいないのである。

「ねえ、それ……本気で言ってる？」

雪穂のひと言で一気に空気がピリついた。それをまずいと思つた童子は止めに入ろうとした。しかし、すぐにその動きを止めてまた考え始めた。もしかしたらこのまま置いておけばいいのではないかという考えが浮かび、そこからは傍観の姿勢を取つた。

「本気よ。ここで嘘を言つてもなんの意味もないでしょ？」

雪穂は怒りたくても怒れずにいた。真癒美の言っていることに多少の理解はできるからだ。でもこのままではダンスが完成しないままライブを迎えることになってしまふ。そんな気持ちに雪穂は葛藤していた。

「それは、間違つてると思う」

すると亜里沙がはつきりとした口調でそう言うと、みんなの視線はその亜里沙のいる方向に向いた。

「なんで？ 亜里沙は先輩達が Shooting Stars を抜けてもいいって言うの？」

「違う！ 私もそれは嫌だもん。でも、その答えはきつと対決の先にあるって私は信じて



る」

「答え……？先輩達が辞めるか辞めないかっていう？」

「ううん、違うよ。きつとそれ以外にも何か目的があるんだよ。なんとなくだけどわかるんだ」

その言葉に他の1年生達は他にも理由がある可能性に気が付いてハツとした。あの先輩達が何の考えもなしに辞めるなんて言うはずがない。

「でもどんな理由があつたとしても、この先私達には先輩達がいないとともにやっていけない……そのことをわかつてもらうには負けるしか——」

「——それが間違つてるんだよ」

「え？」

「先輩達が必要なら、その気持ちを込めて踊ればいいと思うんだ。私達らしく、楽しく——」

「……………」

亜里沙の説得に真癒美は言葉を失い、少し考え込むように俯いた。

「……まっ、勝つたら勝者権限で先輩達に辞めないでくださいって言えばいいんじゃない？」

「ふふっ、確かに」

亜里沙の言葉に元気付けられた瑞希と雪穂はやる気に満ちた顔で笑い合った。亜里沙もそんな2人を見て笑顔で2回ほど首を振った。

そして3人の視線は未だに俯く真癒美に向いた。

「真癒美、悔しくない？あそこまで言われてさ。先輩達にも負けないダンスができるって見返したいって思わない？」

「……………そうね」

真癒美は久しぶりに微笑んでから天井を見上げた。ラブライブ！本戦決勝に進めることがわかった時、秋葉ドームの舞台で沢山の人達の前で踊った時、そして本戦決勝での準優勝が決定した時、さらにはそのあとから今までの自分を振り返った。

「まさかあの亜里沙に気付かされるなんてね……………」

すると真癒美は亜里沙に微笑んでから下を向いて、大きく深呼吸をしてから自分の頬を少し赤くなるぐらいの強さで叩いた。その音は教室内に響き、みんなその音に驚いて思わず体をビクツとさせた。

「ま、真癒美……………」

瑞希は突然のことだったので真癒美を心配して顔を覗き込むが、その表情を見てどこか安心したように微笑んだ。それは雪穂や亜里沙、それに童子も同じだった。

「……………ごめん、私どうかしてた。練習しよう！勝って、あんなこと言った先輩達の考え

を変えさせよう！」

『おー！』

(うん、みんな同じ方向を向いたみたいやな)

童子は笑顔でやる気に満ち溢れた1年生達を見て安心して、ずっとこちらの様子を伺っていた人物がいたドアの方に視線をやった。するともうそこに人の気配は感じられなかった。

——屋上。

「ただいま〜」

「あ、おかえり！」

「みんな、どうだった？」

屋上にいた2年生達は1年生の様子を見に行っていたナオキを迎えた。ナオキはずっと1年生達の練習の様子を見ていて、みんなが元気になったところを見て安心して戻ってきた。

「最初はやっぱりバラバラだったけど、もう大丈夫みたいだ。さ、練習を再開しよう。1年生達に負けるわけにはいかないからな」

『うん！（ええ！）』



寄せていた。一体どんなライブになるのか想像がつかないが、いいライブになることはわかっていた。

「ナオキくん！司会の練習するから見ててね〜！」

「わかったー！」

穂乃果の声掛けにナオキが手を挙げて返事をする、穂乃果・海未・ことりがライブで担当する司会の練習を始めた。

その光景をナオキは感慨深そうに見つめていた。もう3人がステージで輝く姿を見ることができないということが胸を締め付けて少し苦しくなっていた。そんなナオキに童子はその気持ちに共感するように頷き、ナオキはお礼の意味を込めて軽く頭を下げた。

色んな意味が詰まっているライブが――

『さあみなさん！お待たせしました〜！』

『ただいまより、アイドル研究部2年生と1年生の対決ライブを行います！』

『司会は私達……』

『高坂穂乃果！』

『園田海未』

『南ことりの3人でお送りします!』

『『『よろしくお願ひします!』』』

——穂乃果達3人の元気な声をもって幕を開けた。その声に反応して、この日を楽しみにしていたであろう生徒と教職員達は歓声混じりの拍手をした。

順調に進行が進む中、ステージ袖では制服姿の1・2年生が待機していた。1年生はとてども緊張していて顔を引きずって、2年生は楽しみで笑顔を浮かべながら司会を進める3年生を見続けた。

「そろそろだね」

「じゃあ、あれやろう!」

「仕方ないわね」

「真姫ちゃん、絶対楽しみにしてたにや」

「ぐええ……!?!」

「ふふふふ……」

1年生は不思議そうに小声で盛り上がる2年生を見ていた。しかし2年生が右手をピースの形にして小さく円陣を組んだので、その理由はすぐにわかった。

「いち!」

「にー！」

「さんー！」

『まきりんばな！ミュージック、スタート〜！』

みんなでした円陣の3人バージョンだ。その光景を見ていた1年生は唾然としていたが、真癒美の抑えきれずに漏れた笑い声が空気を一転させた。

「わ、笑わないですよー！」

「ご、ごめんなさい……！だ、だって、まきりんばなつて、まんまだし……！」

「つゝゝゝ！だから嫌だったのよ！考えたの誰よ！」

「ナオキくんによ」

『まきりんばな』という名前の名付け親がナオキと知った1年生は笑いを堪えきれずに揃って声を上げて笑った。しかし、これで1年生が感じていた緊張は少し和らいだ。

そしてその束の間、いよいよ2年生の順番が迫ってきたので3人はすぐに出れるように準備を始めた。

『それではまずは2年生から！』

『『『どうぞ〜！』』』

「じゃあ、行くにゃー！」

「うん（ええ）ー！」

3年生の揃った声の後に照明が消え、それと同時に2年生はステージへ駆け出した。今回対決で披露する『Shanghai Show er』は、夏合宿で作ったもうひとつの新曲だった。元データはアイデア段階の曲のフォルダのもので、この曲をデビュー曲にしようとして最初は考えてはいたが「やっぱりデビュー曲は1から作ったものがない」と改めて、この曲は本当は日の目を浴びないはずだったのだ。それがついに解放され、観客の前で披露される。

スポットライトが彼女達を照らすと、歓声と共に曲のイントロが流れ始めた。

曲調は夏の祭りをイメージされていて、お祭りの雰囲気を感じられる。共通部分のダンスもついつい一緒に踊りたくなるほど楽しそうで、これもお祭りの雰囲気に合っていた。

Aメロを花陽・凜が半分ずつ、Bメロを真姫が歌ってそのコーラス部分は花陽と凜が歌い、サビに突入する。サビはコーラスも含めて3人一緒に歌い、その後之間奏が始まった。この間奏部分は終盤を除いて2チームのオリジナルの振り付けになる。

間奏が始まるとまずは右側にいた花陽にスポットライトが当たり、音楽に合わせてテンポよく靴の音を鳴らした。いわゆるタップダンスだ。花陽のソロ部分がひと通り終わるとスポットライトは左側にいた真姫に切り替わり、同じくタップダンスを披露した。さらに真姫のソロ部分が終わるとスポットライトはセンターの凜に当たった。そ



して凜のソロ部分が終わったのを合図に、今度は3人同時に靴を鳴らした。間奏が終盤に差し掛かる前に凜だけが3回転して、その間2人が音を鳴らしていた。そして凜が回転し終わって3人同時に音を鳴らすと、共通の振り付けがある終盤に差し掛かった。

それぞれのソロ部分は2秒ほどしかなかったが、その間で完成度の高いタップダンスを披露した。3人で合わせるところも完璧にタイミングが合っていて、それを見ていた人達は思わず拍手をしてしまった。ナオキは3人の苦勞を思い出して小さくガッツポーズをした。

『『ありがとうございます!!』』

3人は全力を出し切って笑顔で汗を流しながらみんなからの拍手と声援を受け、深くお辞儀をしてからステージ袖へ下がっていった。

幕裏で喜ぶ3人を少し遠くから1年生達は見つめていた。わかっではいた先輩達の凄さを再認識し、そして先輩達へ憧れる気持ちがより強くなっていった。

「ねえねえ、私達も円陣やろう!」

「いいね〜!」

「あ、でも名前は どうする?」

「名前ねえ……」

4人は集まって唸り声をあげた。そんな1年生を2年生は微笑ましそうに見つめて

いた。

「もうここは単純に、”アイドル研究部1年”でいいでしょ」

「瑞希、単純すぎ」

「でもちよつといいかも」

「うん！ハラシヨー！」

「じゃあ決まりつてことで、真癒美！」

「えっ、私？」

瑞希に名指しされた真癒美はびっくりして自分を見つめてくるみんなの顔を見回した。

先程2年生が円陣をした時のようにこの円陣はリーダーが最初に言うもので、この場合みんなは真癒美を1年生のリーダーと認めているのと同じ意味だ。しかしもう出番は近く迷っている暇はなかった。

そして真癒美は覚悟を決めて表情は戸惑いのものからやる気に満ちたものへと変わった。

「じゃあみんな！先輩達に負けない、最高の演技を見せよう！お客さんにも、先輩達にも！」

「うん！」

恒例の円陣を組んだ4人の顔には不安はなく、ただただこのステージを楽しむことしか考えていないようだった。

「すうっ——いちー！」

「にー！」

「さんー！」

「よんー！」

『アイドル研究部1年！ミュージック……スタート〜！』

そんな4人を2年生、ステージから様子を伺っていた海未は微笑みながら見つめていた。そして海未は1年生の準備が出来たと判断して、MCで場を繋げている穂乃果達に合図を送った。

『さあ、1年生の準備が出来たみたいなので登場してもらいましょう！』

『『『どっぞ〜！』』』

そして1年生達は照明が消えるとともにさっとステージへ駆け出し、配置に付いた。それから曲が始まるまでの間は5秒ほどであったが、彼女らにとつてその僅かな時間でさえも永遠に続くと思わせるほどに長く感じるものだった。

1年生達はあれから1週間、2年生には負けないと必死に練習に取り組んだ。そしてその成果は十分本番に現れていた。

そして歌って踊っている本人達は必死で気付いていないが、それを見ている人達は感じていた。1年生は先程披露していた2年生に負けず劣らず、もしかするとそれ以上の魅力を持っているかもしれないと。

Aメロは真癒美と瑞希、雪穂と亜里沙の2組で分けて歌い、Bメロは真癒美、瑞希がソロで前半を、サビ前である後半を雪穂と亜里沙が担当した。サビはコーラスを合わせて全員で歌い、練習の時に中々揃わなかったダンスもその完成度から4人の息が合っていることを感じる事ができた。そしてサビが終わって曲は間奏に差し掛かり、ついに4人で決めた振り付けをみんなに向けて披露する。

まずは音楽に合わせてセンター寄りにいた真癒美と瑞希が右手でハイタッチしてスキップしながら左右にいる雪穂と亜里沙の方に進んだ。そして瑞希は雪穂と、真癒美は亜里沙と左手でハイタッチ。それから瑞希と真癒美はそれぞれ目を合わせながら雪穂と亜里沙の周りを1周し、両手でハイタッチをしてから仲良くハグをした。それから再び舞台の中央で真癒美と瑞希がスキップで交差しながら右手でハイタッチし、それに続くように雪穂と亜里沙も中央でハイタッチ。そして雪穂と亜里沙がセンター寄りの位置で立ち止まると共通の振り付けを披露した。

そのオリジナルの振り付けは2年生に比べれば簡単なものだったかもしれない。しかし、息の合った楽しそうな振り付けはしっかりと見ている人達の心を掴んでいた。



いた。生徒や教師達が口々にライブの感想を言い合っている中、ステージ裏で1・2年生はチラチラとステージの方を見たり、円を描きながら歩き回ったり、どこか落ち着かない様子を見せていた。

「あ、穂乃果ちゃん達が出てきたよ!」

凜はステージの向かい側から穂乃果達3年生が出てくるのを確認すると声を上げた。その声に反応して全員が目線と同じ方に向けて、客席の生徒達はさらにザワザワとした。

『皆さん、お待たせ致しました!』

『これより、投票の結果発表を行います!』

『まずは1年生、2年生はステージへ!』

海末の言葉に合わせて待機していた1・2年生は歓声を受けながらステージに出た。そして3年生を間に挟んで止まり、いよいよ対決の結果が発表される。

『どちらも素晴らしいパフォーマンスでした』

『どちらが勝つてもおかしくない対決だったと思います!』

『では、発表します!』

この瞬間、講堂の中は一気に静かになって、全員が固唾を飲んで司会の2年生に視線を向けた。1年生は祈るように手を交え、2年生はどこか落ち着いた様子で目を瞑って

下を向いていた。

『結果は、なんと——』

——両者同点です!』

そのまさかの結果に講堂全体がどよめいた。1年生は信じられないという表情で2年生を見つめた。

「同点……」

「それってもしかして……」

「多分、お前達が思っていることと同じだ」

未だにその結果に驚きを隠せない1年生の前にナオキが現れ、みんなの視線はナオキの方に向いた。

「ど、どういうことなの?」

状況がはつきりと掴めていない真癒美の言葉にナオキは頷いて、この結果の理由を語った。

「これはμsだったからだとか、同じ1年生だからとかそういうのじゃないんだ。みんなが2組のパフォーマンスを見て、悩み悩んだ末に選んだ結果が同点になったんだ。付度はここには存在しない。なら何故なのか？それは、お前達1年生は2年生と、元μsと同じぐらいの”輝き”を持っているからだ」

「輝き……」

「その通り。おれ達はこれをお前達1年生に知って欲しかったんだ。実はこうなるだろうってのはある程度予想はできていた。な？」

ナオキの問いかけに2・3年生は直ぐに頷いた。その光景に1年生達はさらに驚いたが、それと同時にふとある疑問が湧いてきた。

「でも、そしたらなんで——」

「——決勝で負けたのか、だろ？」

それはな……お前達にとっておれ達、元μsという存在がプレッシャーになつていだからだ。そのプレッシャーが本来の実力を抑えていた、つてところかな？」

その疑問に対するナオキの予想に1年生は心当たりがあったことを回想し、そして納得した。

「そもそも、なんで決勝に行けたと思う？なんでドームの舞台でパフォーマンスができたと思う？それはパフォーマンスをしたみんなの実力があつたからだ。ましてやおれ



達のおかげなんかじゃない。むしろこっちが感謝したいぐらいだ」

「「えっ……?」」

「そうだよ」

「にこちゃん、希ちゃん、絵里ちゃんが抜けて、私達はちゃんとやっていけるか不安だったんだにゃ」

「でもそんな時、あなた達が入ってくれた」

「みんなは6人になった私達に勇気を、希望をくれたんだよ」

「雪穂、亜里沙、真癒美、瑞希、それにマシユ。私達がこうして最後まで、ドームの舞台に立てたのはあなた達のおかげなのです」

「1年生のみんなが横にいる。それだけで不安なんてふっ飛んで、安心して踊ることができたんだよ!」

「それに、お前達がこのことで悩んでいることは勘付いていた。なのになんて言葉をかけていいのかわからなくて信じることしか出来なかった。だけど、今はこう言ってやれば良かったなって後悔してる……『例え輝き方が違ってても、並んで輝くことはできる』ってな」

2. 3年生から掛けられた優しい言葉に溢れ出る感情を抑えきれずに1年生は涙を流した。

『自分達は先輩達の邪魔をしているのかもしれない』『自分達のせいで優勝できなかったのではないか』『自分達は何の役にも立っていない』そう思っていた4人の心に2・3年生からの言葉は強く響いたのだ。

その光景を客席から見ている人達も感動して心をクツと締め付けられるような感覚を覚えてながら、ステージで涙を流すメンバー達を見つめていた。

2・3年生も涙を堪える中、ナオキはさらに言葉が続けた。

「2年生が脱退するって言ったのは決してお前達と踊るのが嫌だからなんかじゃないし、邪魔だからなんかじゃない。みんなにはこれから入ってくる人達と一緒にμ'sとは違う輝き方、Shooting Starsの輝き方で最高の輝きを……ラブライブ！優勝を目指して欲しい。それがおれ達、μ's 10人全員の意見だ」

「スクールアイドルはみんな違う輝きを持つているものなんだよ！だから凛達に合わせようとしなくていい、凛達と同じようにしようとしなくていい！みんなが歌いたいように歌って、踊りたいように踊って、”みんなの輝き”で今回みたいにお客さんを喜ばせて欲しい！」

涙が収まった1年生達はその凛の言葉を聞いて観客席の方に視線を向けた。すると1人、また1人と拍手の音が広がり、それはすぐに歓声が混じったものとなって講堂に響いた。

「よかったよ〜！」

「今のみんななら大丈夫〜！」

「楽しかったよ〜！」

「私達はずっと応援するわよ〜！」

様々な歓声、応援が拍手混じりに聞こえてきて、1年生達の目は再びうるうるしだした。しかし出かけた涙を拭き取った真癒美は他の3人と目を合わせて頷き、何かを決意したようにステージの向かい側に立つ2、3年生の目をしっかりと見つめた。

「わかった。私達、”新星” Shooting Starsは次のライブ！でリベンジしてみせる！だから……先輩、抜けたことを後悔しないでよね」

真癒美はそう声高に宣言するとニヤリとした表情で右手を前に差し出した。それに応えるように凜は笑顔で頷いて右手で差し出された手を握った。

「うん！期待してるにゃ〜！」

未だ鳴り止まないどころか、元々、sが抜けた音ノ木坂学院のスクールアイドル、新生……いや、”新星” Shooting Starsの門出を祝うようにさらに大きくなっていった。

~~~~~

「ん〜！終わった〜」

「お疲れさん。はいこれ、先生方から頂いたドリンクやで」

「わーい！童子せんせいありがとうございます！」

「頂きます」

「いただきます〜す！」

片付けや忘れ物のチェックが終わり、2年生と童子は席に座って先生方からもらったドリンクを飲みながらひと休みしていた。目の前に広がるのは誰もいない席とステージ。つい先程まで大盛り上がりだったのが嘘のような静けさの中ライブの興奮が蘇って、その時の光景や声を思い出していた。

「ほんまに凄かったわあ。ウチ、思い出しただけで泣きそうになるわ〜」

「そうですね。その気持ち、わかります」

「卒業式の前にいい思い出ができたね」

みんなライブの余韻に浸っているがもう来週には卒業式。このライブも数々の大切

な思い出となつて心の中に残り続けることだろう。

「卒業式と言えば……答辞は大丈夫なのですか？」

答辞……在校生からの送辞に答えるために読むもの。例年は3年生が務めていたであろう前生徒会長が担当するそれを思い出した海未は、呑気にドリンクを飲んでゐる穂乃果を見て言った。

「ふふーん、バツチリだよ！」

「本当ですか……？」

「今回はほんまやで。内容に関しては完璧やと思うわ。後はちよつとだけ誤字脱字とか言葉を直すだけ」

「……なら良いのですが」

答辞はナオキではなく穂乃果が担当のため、海未はしつかり出来てゐるか心配なようだが、少し疑いながらも童子の言葉を信じた。

「でもいつも答辞は生徒会長がやってたけど、ナオキくんがやらなくてよかつたの？」

「ああ。送辞は卒業生に贈る言葉だからなにかなつたけど、答辞は送辞への返答以外に3年間の思い出を振り返るっていう部分があると思うんだ。そうなると2年の途中から入ってきたおれじゃなくて、3年間この学校にいて、この学校と地域をよく知つていて、スクールアイドルを始めるぐらいこの学校を大好きな穂乃果が適任と思つたん

だ」

「それに生徒会長時代、ナオキはよく『やっぱり会長は穂乃果が良かったんじゃないか?』って言うてましたからね」

「え!?!ホント!?!」

「まあ、あんまり学校を知らなかったおれより、よく知っててみんなを引っ張れる穂乃果の方がいいだろ?」

「でも穂乃果ちゃんが生徒会長してたら、共学は決定してなかったかもな」

「ちよつとせんせー! それどういう意味ですか!?!」

頬を膨らませた穂乃果にみんなは笑い声をあげた。穂乃果はそんなみんなを見てさらに頬を膨らませた。

こうした、たわいも無い日常もあと少しで終わりを告げると思うと少し寂しい気持ちになってしまふみんなだったが、それはグツと心の中に留め、今浮かべている笑顔はそんな感情を表に出さないように蓋のようなものだった。

——せめてこの涙は、卒業式が終わるまでは取っておこう。

——次回に続く。

第162話「旅立ちの日に」

——春。それは出会いの季節でもあり別れの季節である。気温も段々暖かくなり、桜もどンドン咲いて春が来たことを人々に知らせる。

そしてこの音ノ木坂学院にもその日がやってきた。登校する時の風景、時間そのものでさえいつもとは違うものに感じた。

「ナオキ、忘れ物はない？」

「ああ、大丈夫だ。持つて行くものも少ないし」

「それもそうね。お義母さま達と一緒に見に行くからね」

「わかった、気を付けてな」

「ナオキもね」

玄関ではこれが最後の登校になるナオキが絵里に見送られていた。亜里沙は準備なごがあるためひと足早く家を出ている。

「じゃあ、行ってきます」

「行つてらっしゃい」

2人は挨拶と共に唇も交わし、そして制服の胸のところに薔薇のコサージュを付けたナオキはいつも通りに学校へと向かった。

「——さて！私も準備してお迎えに行きましょう！」

絵里はそれからスーツに身を包んで、この日の為に上京して来ているナオキの両親を迎えに行った。絵里もどこか気合いが入っているようだった。

ナオキにとっていつも通っている通学路はどこか特別なものを感じていた。それがこの通学路、秋葉原の街には数々の思い出が詰まっている。交差点に差し掛かった時、ふと足を止めてその大通りを眺めてしまった。ナオキにとってはとても印象的な思い出の場所だからである。

スクールアイドルフェスティバル……全国のスクールアイドルがこの秋葉に集まってライブをしたイベントだ。その最終日にここで沢山のスクールアイドルと『SUNDAY DAY SONG』を歌い、踊り、その輝きを日本全国、そして世界に伝えた。その時のことは今でも鮮明に思い出せる程、とても印象に残っている。

そしてナオキは再び音ノ木坂学院に向かって足を進めた。その道中には桜並木があり、風に煽られた数枚の花びらがヒラヒラと地面に向かって舞い落ちていた。そんな桜

ナオキが教室に入って荷物を置くと近くの席に座っているはずの穂乃果・海未・ことがいないことに気付いた。しかももう20分程で集合時間になる為、若干心配でもあった。

「それじゃあ探しに行つてきてよ。そろそろ集合時間だし」

「おれが!?……わかった、行つてくる」

「はい、お願いね」

そうフミコ達に見送られるとナオキは何も持たないまま教室を出て行き、3人がいそうなどころを目指して校内をぶらつきはじめた。

まずナオキが来たのは屋上。ここでμsの時もShooting Starsの時も時間いっぱい練習をした思い出の場所だ。

——3人はいなかった。

次に来たのは講堂。μsのファーストライブなど、アイドル研究部が校内でライブをする時はほとんどここを使っていた。卒業式は体育館で行われる為ここには誰もいない。入口の鍵も閉められていて人の気配はなかった。

——つまり3人はいなかった。

続いて来たのはアルパカ小屋。この学校のマスコットの存在のアルパカにも子供が産まれ、3匹仲良く過ごしている。それに人懐っこくナオキにも警戒することなく近付いた。

——もちろん3人はいなかった。

外をある程度巡って次に来たのは生徒会室。もちろん式の準備中のため誰もいない。ナオキと海未にとって1年間様々なことを経験した、このアイドル研究部と同じ青春の1ページを過ごした場所だ。そして、ちょうど去年絵里にプロポーズした所でもある。

——3人はここにもいなかった。
(ありがとうございました)

ナオキは『生徒会室』とドアに付けられていた札に触れて感謝の気持ちを伝え、3人を探すべく歩き出した。

そして次に来たのはアイドル研究部の部室。ナオキ達にとってこの学校生活の殆どがここでのものだったと言ってもいい。思い出を挙げるとキリがなくポンポンと出て来そう。

そんな部室前に3人は——いた。

「やっぱりここだったか。どこ行ってたんだよ」

「ナオキくんおはよー！」

「ちよつと、色々……ね？」

「あつ！もうすぐ集合時間じゃないですか!？」

「ええく!？」

「だから迎えに来たんだよ。ほら行くぞ」

3人を連れて教室に帰る途中、3人がナオキが巡った場所と同じ所を同じ順番で巡っていたのを知った。結局、みんなが考えることは一緒だったみたいだ。

——教室。

「みんな、おはようさん」

『おおー!』

「先生!すつごく綺麗！」

「ふふつ、ありがとうな」

全員が揃った教室に綺麗な着物に身を包んだ童子が入ってくると、みんなは童子に釘付けになった。口々にその容姿を褒めている間も式の開始時間は刻一刻と近づいていく。

「さつ、みんな積もる話もあるやろうけど、そろそろ式始まるさかい準備してや〜」
『はい〜!』

みんなは事前に配られた卒業式のプログラムや歌う曲の歌詞が書いてある小冊子を持ち、廊下に出席番号順で並んだ。隣のクラスもそろそろと教室から出てきて同じように並んでいた。

「穂乃果、答辞は持ってますか?」

「うん、ちゃんとポケットに閉まつてるよ。ほら!」

「穂乃果ちゃん、頑張つてね!」

「ことりちゃん、ありがとう!」

「3年生、出発するぞー」

みんなそれぞれ様々な思いを胸に在校生や教師、それに父兄ふけいが待つ式場である体育館に向かった。

———
体育館。

『卒業生が入場致します。皆様、拍手でお迎えください』

司会である生徒会会計、葵の声と共に吹奏楽部の演奏が始まり体育館のドアが同じく書記の都呼と亜里沙によって開けられた。そして拍手が鳴り響く中、本日の主役の3年生が入場してレッドカーペットの上を歩く。

「あつ、ナオキよ！撮って撮って！」

「任せろ！」

「あはははは……」

（あのバカ親……）

「穂乃果、立派になったわね……」

「……………」

（お父さん、もう泣いてる……）

（海未さん、綺麗ですよ）

（流石は私達の娘だ）

（お母様、お父様……）

（私も保護者席から見たかったわ）

（あいつの分まで写真を撮らねば）

（お父さん、張り切ってる……）

生徒は入場しながら自然とそれぞれの両親を探していて、その反応に呆れたり安心し

たり、中にはもう既に泣きそうになっている人もいた。

卒業生が着席し、それから式は何の問題もなく進んでいった。

全員での国歌・校歌の斉唱。理事長・教育委員長・PTA会長の挨拶。来賓と各祝電の紹介。そして卒業生の名前が順番にクラスの担任から呼ばれる。みんな元気よく返事をしてその場で立つ。父兄は自分の子が呼ばれるとその姿をおさめようと写真を撮り、中には成長した姿に感動して涙を流しそうな人もいた。しかし、感動しているのは全員共通のようだ。

式はメインの卒業証書授与へと移る。ナオキは代表として教師と来賓、そして在校生と舞台に向かって一礼してから舞台に登り、卒業証書を持つ理事長であるすずめの前に立った。そしてすずめにより読み上げられた証書を受け取り、また一礼をして席に戻った。

次にフミコが卒業生の代表として学校への寄贈品の目録を読み上げてすずめに渡し、それから海未が代表として在校生の代表の生徒会副会長である六華から記念品を受け取った。

そしていよいよ式も終盤に差し掛かった。

名前を呼ばれた生徒会長の真姫が舞台に立ち、在校生代表として送辞を読み上げた。

『送辞。在校生代表、西木野 真姫。』

冬の寒さも和らぎ、春の訪れが感じられるこの日にこの音ノ木坂学院を旅立たれる卒業生の皆様、ご卒業おめでとうございます。在校生一同、心よりお祝い申し上げます。

今、皆様はどんな事を思い出しているのでしょうか。十人十色という言葉があるように、1人ひとりにそれぞれの思い出があると思います。先輩方は私達後輩に沢山の事を教えていただきました。

行事や部活動の際、先輩方は先頭に立つて私達を引っ張り、時には背中を押してくださいました。そんな先輩方の姿に私達は憧れ、まさに理想の先輩でした。

いつも明るく元気な先輩方がこの音ノ木坂学院から旅立つことを考えると、胸が苦しくなります。ですが安心してください。今度は私達が先輩方の気持ちを受け継ぎ、元気な魅力ある学校にしていきます。

最後になりますが、これから先、先輩方は幾多の困難に立ち向かわなければなりません。ですが、先輩方ならきつとどんな困難も乗り越える事ができます。先輩方より一層のご活躍をお祈りすると共に、感謝の気持ちを込めてこの歌を贈ります。

——在校生、起立！——

そして真姫の合図と共に在校生は立ち上がり、六華はピアノの椅子に座って楽譜を拡げた。

在校生が贈る歌として選んだのは『さよなら大好きな人』だった。その歌の歌詞だけ

ではなく、伴奏からも別れを惜しむ気持ち伝わって来ていた。六華は弾きながら、真姫に教わって正解だったと心から安心してた。その安心が素晴らしい伴奏に繋がっていた。在校生の中には声を震わせる人もいたが、そのソプラノとアルトに分かれた綺麗な歌声は卒業生だけではなく、会場全体に感動を与えた。

曲が終わると同時に大きな拍手が響き渡り、真姫は送辞を舞台上の机に置いてから一礼をして席に戻っていった。六華も真姫に合わせて席に戻った。

その後、名前を呼ばれた穂乃果は元氣よく返事をして舞台に向かう。そして真姫が置いていった送辞に微笑みながら答辞をポケットから取り出した。

『答辞：卒業生代表、高坂 穂乃果！』

満開の桜が春の訪れを知らせてくれるこの良き日に、私達61名はこの音ノ木坂学院を卒業します！まずは素晴らしい送辞と歌を贈ってくれた在校生、私達の旅立ちを見守って下さっている教職員、来賓の方々、そして保護者の皆様にお礼を申し上げます。

ついにこの日がやって来てしまいました。今日という日を迎えて、出来ることならまだこの学校に居たいという思いが込み上げて来ます。それがとても悲しい気もしますが、この音ノ木坂学院での生活が大切なものだったんだとも感じる事ができます。

初めて先生方やクラスの人々と顔を合わせ、これからの生活に胸躍らせた入学式。

クラスのみなどと絆を深めた校外学習や修学旅行。地域の方や中学生の子達を楽しませようと努力した学校説明会や文化祭。懸命に取り組んだ部活動など、数え切れないほど沢山の思い出があります。そのどれもが私達にとってはかけがえのないものです。

いつも私達を見守ってくれた音ノ木坂学院。勉強や大切なことを教えてくださった先生方。時には励まし、支えてくれて、時には喧嘩もしたけれど、とても長い時間を一緒に過ごしてくれた在校生のみんなと共に卒業するみんな。本当にありがとうございます。私達が卒業して、これからの音ノ木坂学院を作っていくのは在校生のみんなです。みんなそれぞれの輝きをもって、この限られた時間の中で精一杯頑張ってください。

私達がこうして元気にこの学校を卒業できるのも、お父さん、お母さんのおかげです。ありがとうございます。そして、これからもよろしくお願い致します。

最後になりましたが、これからの音ノ木坂学院のますますのご活躍とご発展を心からお祈りすると共に、感謝しても仕切れない気持ちを込めてこの歌を贈ります。

——卒業生、起立！』

送辞の時と同じように、卒業生は穂乃果の掛け声と共に立ち上がり、ピアノ経験のあるフミコがピアノ椅子に座った。そして、卒業生は在校生や父兄がいる後ろを振り返って歌を披露した。

卒業生が贈る歌に選んだのは『Best Friend』だ。自分達を今日送り出してくれる人達にはもちろん、共に卒業するみんなに向けた歌。その心がひとつになつたような歌声は素敵で、素晴らしく、心地よいもので、泣きそうになりながらも堪えている人もいれば、我慢し切れずに声を抑えて泣き出す人もいた。それだけこの歌の歌詞が卒業生自身にも心に響くものだったのだろう。会場全ての人がその歌声に感動させられた。

伴奏が終わると盛大な拍手が卒業生に贈られた。そんな大喝采の中、穂乃果は答辞を机に置いてから一礼して席に戻った。フミコはこの後も伴奏を担当しているのでその場で待機していた。

『最後に、卒業生と在校生で「YELL」を斉唱します。卒業生、在校生、起立！

保護者の皆様もお手元のプログラムに歌詞が載っていますので、よければご斉唱ください』

そして舞台下には、答辞を読まない代わりにこの斉唱の指揮者に任されたナオキが待機をして、全員の視線がそのナオキに集まる。

これが卒業式最後の見せ場となる。父兄の人達もそれがわかっていて、中にはカメラを構える人もいた。

ナオキの指揮とフミコの伴奏で曲が始まった。卒業生と在校生、それぞれソプラノと

アルトに分かれて歌っていて、その歌声には自然と感情が乗っていた。見事な歌声、見事な伴奏、見事なハモリ……その非の打ち所がない素晴らしい1曲で誰もが感動していた。

最後の伴奏が終わって拍手が鳴り響き、ナオキとフミコの一礼と共にその音はさらに大きくなった。

全員着席し、2人が席に戻ると涙をすする音、声をあげて泣きそうな気持ちを抑え切れずに漏れる声の音が目立つ中、式の閉幕が告げられた。そしていよいよ卒業生が退場する時がやってきた。

担任先導の元、吹奏楽部の演奏と共にレッドカーペットを歩き出口へ向かう。途中で生徒から一輪の赤い薔薇を受け取り、色んな気持ちを噛み締めながら体育館から出て行く。そこには入場してきた時とは違う雰囲気があり、父兄の表情もまた違うものであった。

「ありがとうございます！」

最後に退場する2人が代表して出口でそう言うと、会場から惜しめない拍手が送られた。

ぶつちやけ他のボタンでも良いのだが、一番良いとされるのは心臓に近い第2ボタン。主に狙われるのは人気だった生徒、学業成績が優秀だった生徒、そして部活動などで活躍した生徒だ。つまりそんな人のボタンを手に入れた者はその恩恵にあやかるところができるという伝説から生まれたのが「第2ボタン戦争」なのだ。中には学年1位の成績を持つ卒業生の第2ボタンを手にした生徒が、翌年には学年1位になったというエピソードも存在する。

しかしそんな伝説、ナオキは知る由もなかった。何故なら昨年はその騒ぎになる前に絵里・希・にこを連れ出して部室に籠っていたからだ。

「あいつら大丈夫かな……？」

ナオキは戦争のことを思い返して穂乃果達を心配しながらも、部室に行けばいるだろうと思いきこへ向かうために立ち上がった。

「あ、でも部室に行こうとしたらまた捕まりそうだな……」

最悪の事態を考えたナオキはアイドル研究部のチャットグループに『騒ぎが収まるまで暫く避難してる。収まったら部室に行く』と発信して、大人しくその場で待機するこ
とにした。

綺麗な桜を見ながら物思いにふけり、内ポケットにしまっていた第2ボタンを取り出して、右手の人差し指と親指で挟んで目線の斜め上に掲げた。

「……そういうことか」

ナオキは昨晚と今朝に絵里から何度も言われた「絶対第2ボタンは誰にも渡しちゃダメよ」という言葉の意味をやっと理解して、なんだか照れ臭くなり頬を赤く染めた。

——数十分後……

通知音が鳴ってナオキは第2ボタンをポケットにしまい、スマホを取り出してその画面を見た。

『私達講堂に避難してるんだ！安全だからナオキくんも来てよ！』

「あいつら講堂に避難してたのか。暇だし行くか」

ナオキは立ち上がり唸り声をあげて背伸びをすると、騒ぎが収まっているのを祈りながら講堂の方に向かった。

——講堂。

ナオキは無事着くことができたが、そこは朝来た時と同じように人気はなく静かであった。穂乃果達が本当に講堂にいるのかさえも疑いつつあった。しかし、講堂のメインホールに入ったナオキはその光景に驚きを露わにした。

そこは明かりも付いていて、幕が下がっていたのだ。暗いので電気を付けたとも考えられるが、基本幕は下がっている状態が正しい。よく考えればメインホールが開いていることもおかしいのだ。セキュリティ上、開校時間は講堂に入れたとしてもメインホールには鍵がないと入れない。ましてや電気を付けようとすれば放送室の鍵も必要だ。

ナオキがおかしな点に気付き頭を悩ませていると、唐突に鳴ったブザーに驚いて体をビクツと震わせた。これは明らかに誰かが操作している証拠だ。

「えっ、ブザーが……!?!」

そしてその驚きはまだ止まらなかつた。ブザーが鳴り終えた後、幕が開いたのだ。

そこには――

――それぞれピンク・青・緑のシンプルな衣装に身を包み、手を繋いで目を瞑る穂乃果・海未・ことりの姿があつた。

「えっ、お前ら、どうして……!?」

そしてそつと目を開けた3人はナオキの方をジツと見つめた。ナオキは未だに驚きが治らず困惑した表情で3人を見ていた。

「ほらなにつつたんでんの!」

「早く一番前に座って!」

「ヒデコ!? ミカ!? つてことは……」

急に現れた2人に驚いたナオキは視線を放送席に移した。するとガラスの向こうにはフミコがいて、こちらを見て頷いた。

「ほら早く! 座らないとライブが始められないんだつてば!」

「は……? ライブ……? つて押すな押すな! 危ないから!」

ヒデコとミカに急せかされたナオキは状況を整理しながら、指定された最前列の真ん中の席に向かった。

「なあ、これは一体——」

ナオキが席に座るとその言葉を遮るようにドアの開く音が鳴り響いた。この講堂に来てからナオキの心臓に悪いことばかり起こっている。これは寿命が少し縮んだかも

しれない。

それはさて置き、その音にびっくりして入り口の方を見ると、そこにはドヤ顔でこちらを見つめる花陽がいた。

「は、花陽……!?!」

「ライブが始まるよ！ステージにご注目っ！」

「ライブ……? ってまさかこれって……!?!」

ナオキはなにかに気が付いてバツとステージに視線を戻した。すると明かりが消え、その瞬間ステージの穂乃果達は一定間隔を空けて後ろを向いた。

そして少し懐かしいようなイントロが流れ、くると回ってこちらに向き直す3人を順番に照明が照らした。ナオキはパフォーマンスをする3人を目をうるうるとさせて見つめていた。

するとすぐ後ろに人気を感じて振り返ると、花陽・凛・にこ・絵里・希・真姫が席についた。さらに後ろの方にはヒデコとミカ、放送室にはフミコがいる。そして穂乃果達が疲労している曲は『START：DASH !!』だ。

ナオキはこの状況で確信した。これはあの講堂ライブ……穂乃果・海未・ことりの3人で始まったμ's ファーストライブの再演。それはナオキがまだ大阪にいた時に中継映像で見ただけで、実際には見る事ができなかったライブだ。μ'sの始まりに間

接的にしか立ち会えず、実際にその場にいたかったと後悔していた。その思いは共に暮らす絵里にはもちろん、誰にも打ち明けずに心の奥底にしまっていた。それがわかった瞬間、感動のあまりすぐに泣きそうになった。しかし、この夢にまで見た光景を目にしつかりと焼き付けたいという気持ち涙を引つ込ませたが、姿勢は自然と前のめりになつていた。

このライブを夢中になつて見るナオキはどこか子供のようで、目を輝かせながらジツとステージを見つめている姿は誰が見ても感動しているとわかるものだった。

曲が終わり3人が決めポーズを取ると、ナオキは無意識に立ち上がって拍手をしていった。他のみんなも同じく穂乃果達に拍手を贈った。

これこそが元々、sである3年生のラストライブ。そのライブを客席から見ただけでなく、自分が夢にまで見たμ'sファーストライブの再演。まさに感無量。今死んでも悔いなく死ねるといふものだ。

「ねえ、どうだった？」

穂乃果は拍手を中々辞めないナオキにそう声を掛けると、ナオキは徐々に拍手を辞めて腕をぶら下げた。そしてそんなナオキの目からはひと雫の涙がこぼれ落ちた。

「……………最高だったよ。やっぱりお前らのパフォーマンスは世界……………いや、宇宙一だ

よ」

ナオキの涙を流しながら浮かべる笑顔に、パフォーマンスを終えた3人は嬉しそうに笑顔で涙を流した。そしてナオキは気分を落ち着かせて、さらに言葉が続けた。

「おれはあの時心が参っていた。絶望しきっていた。でもそんな時にお前達のライブを中継映像で見た。その時おれは心を救われたんだ。3人の踊る姿、歌う姿を見て元気をもらった。直接この気持ちを拍手として送ってやりたかったって後悔してたよ。でもそれを今日、叶えてくれた……本当にありがとう。お前達は、*μ's*は、最高のスクールアイドルだっ！」

「ナオキ、私達だけじゃなくて後ろのみんなにもお礼を言ってください」

「うん。みんなナオキくんのために協力してくれたんだよ」

「そうか。花陽、凜、にこ、絵里、希、真姫、ヒデコ、フミコ、ミカ……ありがとう」

「4人の高校生活を占ってる時に出てたんよ。ナオキくんは何か後悔してる事があ
るって」

「それでなんだろうって話してる時にこのことじゃないかって、絵里が」

「ま、まあ、後悔してることってこれぐらいかなって思っただけよ」

「それを聞いた私達も協力しようって思ったの」

「それで折角ならファーストライブ丸々再現しちゃおうって！それでヒフミ先輩達にも

お願いしたんだー！」

「「略すな！」」

「だってナオキくんは……私達を輝かせてくれたから！」

「みんな……！」

「「スルーされた……！」」

「ナオキくん、だから私達からもお礼を言わせて」

『私達を輝かせてくれて、ありがとう（ございます）！』

「っ……！」

「あゝ！またナオキくん泣いてる〜！」

「う、うるせえ！」

みんな、9人で過ごした日々のように笑い合っていたが、その目からは少量の涙が溢れていた。

そしてそんな空気の中、入り口のドアが開いてアイドル研究部の1年生達、そして現生徒会メンバーと童子が入ってきて、みんなの視線はそっちに向いた。しかし、その中で驚いているのは3年生だけだった。

「お楽しみのとこ悪いな〜。3年生のみんなにウチらから贈り物や」

童子のその言葉を合図に雪穂と亜里沙、生徒会の六華と葵が花束を持ってステージの

方に向かって来た。こちらに来るのに驚いている3年生を、真姫と花陽はステージ下で横一列に並べた。

「香川先輩、ご卒業おめでとうございませす!」

「七海さん、ありがとう。生徒会は大変だと思うけど、この学校のことよろしくね」

「は、はい! 任せてください!」

「……六華、ナオキは彼女持ちだからね」

「わ、わかってるよ……!」

「ん? 何話してんだ?」

「な、なんでもないです!」

「ことりちゃん! 卒業おめでとう!」

「亜里沙ちゃん、ありがとう。スクールアイドル、頑張つてね!」

「К о н е ч н о (カニエーシナ)!」

「か、金……?」

「もちろんつて意味よ」

「絵里ちゃん、そうなんだね。亜里沙ちゃん、С п а с и б о (スパスイーバ)!」

「っ………はい!」

「園田先輩、ご卒業おめでとうございます」

「静さん、ありがとうございます。くれぐれも皆さんに迷惑をかけないように」

「わ、わかってますから睨まないでください！先輩も道場のこと、頑張ってくださいね」
「ふふっ、ありがとうございます。生徒会と弓道部の両立は大変だと思いますが、どちらもしつかり頑張ってください。応援しています」

「そ、園田先輩……！」

「お、お姉ちゃん……卒業おめでとう」

「雪穂、ありがとうございます」

「私もスクールアイドル頑張るから、その……お姉ちゃんみたいなスクールアイドルになるために」

「ゆ、雪穂おっ！」

「わわっ！抱きつかないでっ！みんな見てるからっ！」

「雪穂おっ！お姉ちゃんも頑張るからねっ！」

「離してえっ！恥ずかしいっ！」

「……ありがとう」

「お姉ちゃん……」

「ヒデコ先輩！」

「ミカ先輩！」

「……フミコ先輩」

「「ご卒業おめでとうございます」」

「えっ、私達にも!？」

「当たり前じゃないですか！」

「私達知ってます。先輩達はずっとアイドル研究部を支えてくれたこと。だから

……」

「「ありがとうございます！」」

「ううっ、ありがとうございます！」

「ちよつとヒデコ〜！えへへ……」

「フミコ先輩は生徒会も頑張つてて、他の人達がスクールアイドルしてたから頑張ったんだらうなって……その、お疲れ様です」

「京極さん……ありがとう！」

六華は尊敬する生徒会の先輩ナオキに、亜里沙は大好きなスクールアイドルの先輩ことりに、葵は生徒会と弓道部の憧れの先輩海未に、雪穂は姉であり先輩でもある穂乃果に、真癒美と瑞希はアイドル研究部を裏から支えてくれた先輩ヒデコとミカに、都呼は自分の前任である生徒会の先輩フミコにひと言を添えて、色とりどりの花で構成された花束を渡した。笑顔を浮かべる者、涙を流す者……3年生はそれぞれの喜び方で渡してくれた後輩に感謝の気持ちを伝えた。そんな光景を見ていた童子も思わず涙をこぼした。

「ほなみんな、最後に写真撮るで〜」

童子が涙を横に指で飛ばして声をかけると、生徒であるみんなはざわざわとステージに登っていった。そして童子がステージ下でカメラを構えようとした時、その手を絵里が止めた。

「先生はあつちですよ。写真は私が撮りますから」

「絢瀬はん……ありがとうな」

童子はかつての教え子、絵里に礼を言うのと生徒の待つステージに登った。

希とにこが全員を指示して、絵里は受け取ったカメラを構えてシャッターチャンス伺った。

「うん、ええんやない！」

「そうね。じゃあ撮るわよ〜」

『は〜い!』

「じゃあいくわよ〜?」

3年生と担任の童子が最前列で他の生徒が後ろ2列に並んでみんなが笑顔でピースしたりしている写真は、この場にいる誰の胸にも残る思い出の1枚となった。

その後もそれぞれで色んな写真を撮り、この永遠に続いて欲しいとも思える時間は終わりを告げていった。

「お前達、本当にいいのか?」

「うん、今日はアイドル研究部のみんなで楽しんできてよ」

「折角招待されたんだから!」

「そうそう、ノープロブレム」

穂乃果達も着替え、生徒会メンバーは先に帰宅した後、校門前でナオキ達は別れを惜しむように会話をしていた。

実はナオキ達アイドル研究部の3年生は、ナオキのおじでラブライブ！運営委員会の会長の晋三に、その自宅で開かれる卒業パーティーに招待されている。そこには3年生だけでなく、その家族、元μ'sのメンバー、そしてアイドル研究部の部員も招待されている。

ナオキは折角ならヒフミも一緒にと考えたが、3人はそれを断って自らの自宅の方に帰っていった。そんなクラスメイトであり、共にアイドル研究部を支えてくれた3人が去る姿を3年生達は名残惜しそうに見つめていた。

「……さ、行くか。みんな待つてくれると思うし」

そして軽く深呼吸をしたナオキのひと言を合図に、みんなは振り返ることなくナオキを先頭に晋三の家に向かった。その途中でたわいもない会話をして、笑って、今まで通りの時間を過ごした。今日だけで沢山泣いた3年生の涙はすでに枯れていたが、なんとも言えない気持ち心が心の中に残っていた。しかし、誰もその正体に気付くことなくその道を歩いていった。

晋三の家での卒業記念パーティーでは豪華な食事が出され、みんなが思い出話に花を咲かせた。そして卒業する4人には晋三からそれぞれ卒業祝いを用意されていた。穂乃果には高級いちごの詰め合わせ、ことりには最新機能の備わったミシン、海未には有

名な弓師が作った弓、そしてナオキには晋三と行く北海道への卒業旅行が贈られた。それぞれが現在貰って嬉しいものを晋三が家族への調査の元用意したこともあつてか、4人は大いに喜んだ。

そんなパーティーもあつという間に終わりを告げて、みんなそれぞれの家に帰宅していった。ナオキ・絵里・亜里沙とナオキの両親は晋三の家に泊まることになっている。

「ごめん、おれちよつと出掛けてくる」

「えつ、今から？どこに行くの？」

「ん〜……ちよつと御礼を言いに」

卒業生組とその家族も帰ろうとした時、ナオキは唐突にコートを着て出かける準備をした。絵里に理由を聞かれたナオキはしばらく頭を悩ませた末にひと言だけ言い残して、穂乃果達と共にどこかへ走つていった。

両親などはどこに行くのか見当もつかずに首を傾げたが、絵里は答えがわかったように微笑みを浮かべた。

—— ナオキ・穂乃果・海未・ことりが来たのは、自分達がスクールアイドルをしている間に練習をしたり、ラブライブ！優勝を祈願したりと、様々な場面でお世話になつ

た神田明神だった。

いつも通りに男坂の方から入り、手と口を手水舎で清め、二拝二拍手一拝。こうする機会も今までよりは減るだろう。そしてもちろんそこでしたのは神様への御礼。そのためここまで来たのだ。

——私達を見守ってくださってありがとうございます。これからのスクールアイドルを、アイドル研究部のみんなを、よろしくお願いします。

そんな思いが神様に届いていることを信じて、ナオキ達はなにも語らず静かに神田明神を離れていった。

穂乃果の無謀な夢から始まり、その夢にみんなが賛同して、共にラブライブ！優勝、そしてスクールアイドルフェスティバル・μ'sの最後のライブまで駆け抜けた。さらに新たな仲間と新たなスクールアイドルとしてラブライブ！優勝を目指したみんななど、んだ道はこの日から分かれ道となつて、それぞれの道を歩いていく。

それぞれの夢と未来へ向かつて——

——
次回へ続く。

After way. 01 「記念遠足と決戦と」

卒業式を終え、平日が休みになったナオキ達は制服姿で千葉県にある東京ドリムライフパーク、略してTDLに来ていた。ここは世界でも有数のテーマパークで、日本だけではなく世界中からも観光客がここを訪れる。

みんなで朝早くから集まって東京を出発したおかげで、開園時間に入場することができた。顔にペイントをしたり、売店で被り物を購入してそれを被ったり、ポップコーンなどを食べたり……楽しみ方は人それぞれだ。そして今回は卒業記念の遠足なので、折角ならと全員でパークをまわることになっている。

「お、ナオキくん似合ってるぅ〜！」

「……………本当にこれ被らなきやダメか？」

「せっかく来たんだし楽しまなくちゃ〜！」

「ん〜、そうだな。あれ、穂乃果は？」

「穂乃果なら綿菓子を買に行っちゃよ」

ナオキは入り口近くの店の前で、ヒフミ達に買わされた魔法使いの帽子を被って他のクラスメイトを待っていた。

「早速食べ物ですか……」

「ふふつ、穂乃果ちゃんらしいね」

「ごめ〜ん、お待たせ〜!」

そんなナオキ達の元に綿菓子を買え終えた穂乃果とその付き添いのことりと海未が戻って来た。海未も先程ことりに買わされたカチューシャ型のネズミ耳の被り物を付けていた。

「さて、みんなも揃ったし早速アトラクションに乗りますか!」

「でもやっぱりTDLに来たらマウ——」

「——ま、まだ食べ物食べてる人もいるしひとまずパークの景色を楽しもうぜ!」

「穂乃果はもう食べたよ!」

ナオキの明らかに嫌がる態度をみんなはポカンと見つめていたが、穂乃果の無邪気なひと言の後にナオキ以外で頷き合った。ナオキは事態が悪い方向に進むことを察し、必死にそれを逃れる方法を考えていた。

「じゃあ“マウンテンコースター”に決定ということで、ナオキくんを連行!」

『お——!』

「いくやくだ〜！ジェットコースターは嫌だ〜!!!」

「ナオキ、諦めが悪いですよ。ここは腹をくくって行きますよ」

「どうか、どうかご慈悲を〜！」

ナオキは健闘むなしくパークの名物アトラクション、マウンテンコースターに連行されていった。そしてそのアトラクションが近付くごとに諦めてしまつて何かの暗示を独り言で唱えていた。

マウンテンコースターとはパークでも人気なアトラクションで、火山をモチーフにした山のオブジェクトを中心にレールが広がるジェットコースターだ。そこへ近付くごとに聞こえてくる叫び声はこれから向かう人達に何を思わせるのだろうか……

——約2時間後。

「やつと乗れたね〜」

「ついに来てしまった……」

「大丈夫ですよ。怖ければ目を瞑ればいいではないですか」

「そ、そうだよな！よ、よし……」

『それでは、出発進行！いつてらっしやい！』

ナオキがゆっくり深呼吸をして目を瞑ると、ジェットコースターはスタッフの元気の良い合図と共に動き始めた。ナオキは目を瞑っていても進んでいる感覚を感じながら恐怖に怯えるのだった。

そんなナオキの口から叫び声など出るはずもなく、他のクラスメイトの叫び声だけがその周辺に響いていた。

「いや〜楽しかったね！ナオキくんはどうだった？」

「……………ナオキ？」

ジェットコースターが停車しようと減速している時にナオキの前の席に座っていた穂乃果は振り向いて感想を求めたが、そのナオキから反応はなかった。不思議に思った隣の席の海未もナオキの方を見て声をかけるが返事はなかった。

「あれ!?!ナオキくん気絶してる!?!」

『ええ〜!?!』

それもそのはず、ナオキは最初に降下する時点で意識を失っていたのだ。ナオキの運命やいかに……………!

~~~~~

——所変わって音ノ木坂学院の屋上。

春休みに入って練習の休憩時間に、ここではある決戦が行われようとしていた。

「凜、あの時のリベンジをさせてもらおうわ!」

「真癒美ちゃん、望むところじゃ!」

「いきなり!」

それは凜と真癒美のダンス決戦だ。

真癒美がまだ入部したての時にしたダンス対決で凜に負けてしまい、そのことを今までもずっと悔しがっていた。その悔しさをバネに活動を頑張っていたが、次年度から3年生となる凜達は Shooting Stars とは別活動になってしまふ。だからその決着をつけようと今こうしてリベンジを挑んだのだ。

「で、対決するのはいいけど曲はどうするの?」

「それならまた私が——」

「——いや、今回はタップダンスでいいわよ」

『ええ〜!?!』

真癒美の自信満々の台詞にその場にいた誰もが驚きを隠せなかった。また以前のようなダンス対決になると思いきや、凧が1年生達とのステージ対決のために練習をしたタップダンスでの勝負だ。この勝負、側から見れば凧が有利な状況なのは明らかだ。

「本当にいいのにかにゃ？」

「もちろん。私、この日のためにあれからタップダンスを練習してたんだから」

「へえ……」

凧は真癒美の言葉に強い闘志を燃やし、2人の間にはバチバチと火花が激しく散っていた。

「じゃあ、準備はええか？」

「はいー!」

職員会議を終えた童子が加わって、いよいよ2人の決戦が幕を開ける。

ルールはストリートダンス対決みたいなもので、次第に早くなる同じテンポのタップ

ダンスを交互に踊っていき、どちらかが1度でも失敗した時点で勝負終了となる。

童子が再生ボタンを押すと、まずはお手本のメロディが流れ始めた。その後にはまず真凛が踊り、それと同じテンポで真癒美が踊った。最初は割と合わせやすいテンポから始まり、どんどんスピードが上がったり足を叩く回数が増えたりしていた。

2人とも一步も譲らぬ攻防を繰り返して、互いのダンスは回を増すごとにヒートアップしていき、終わりの見えない勝負となっていた。それを見ているみんなも瞬きすら忘れてその勝負に魅入っていた。

流石の2人も疲れてきて体力も限界近くになった時、真凛がギリギリでクリアして真癒美にその番が回った。これでは真癒美もクリアしてまだ勝負は続くだろうと思わせるほどのダンスだったが、その終盤に足元が狂って尻餅をついてしまった。

「やったにや〜!」

「くっ……!!」

音楽が止まると真凛は腕を上げて喜び、真癒美は全力を出し尽くした結果の敗北に悔しそうに地面を1発叩いた。

そして真凛はそんな悔しがる真癒美に手を差し伸べた。真癒美はその手を握り返し、体重を真凛に預けて立ち上がった。

「やっぱり真凛は凄いわね。負けたわ……」

「真癒美ちゃんも凄かったよ！凜も危なかったもん！」

「そうね。最初の時と比べて随分実力を上げてるじゃない」

「いや、私なんてまだまだ……実際、凜に勝てなかったし」

真癒美は凜や真姫から褒められて照れ隠しするように謙遜していた。しかし2人の言う通り、真癒美はこの1年でさらに実力をつけている。それは経験とたゆまない努力から成る実で、実は決して勝手には成らないのだ。

「これなら、任せても良さそうだね」

「えっ、なんの話？」

花陽が凜と真姫と頷き合うと、1年生達は何のことだかわからず首を傾げた。童子はそのことについて検討がついているのか納得したような表情をしていた。

「真癒美ちゃん！」

「は、はいっ！」

「真癒美ちゃんを、Shooting Starsのリーダーに任命するにや！」

「え……ええく?!」

真癒美は予想外の展開に素早く後ろに飛ぶように移動してしまうほどに驚いた。他の1年生もビックリはしたが真癒美ほど驚くことはなく、どちらかと言うとその結果に納得していた。

「そんなに驚く？」

「そうだよ。あのライブ対決の時に1年生のリーダーしてたのに」

「だ、だってあれは1年生の話であって……」

「私達2年生が抜けてこれからのShooting Starsを引つ張っていけるのは、Shooting Starsが大好きな真癒美ちゃんが適任だよ？」

真癒美はShooting Starsが大好きだったからこそ、その思いが強いかからこそ、2年生がグループを抜けると言った時に誰よりも1番反発した。それがわかっていたからこそ、他の1年生はあの時真癒美に自分達のリーダーを任せることができたのだ。

「でも、私に務まるかどうか……」

「そんなことないよ、リーダー」

「ちよつ、ちよつと瑞希っ！」

「そうだよ！リーダー！」

「任せたからね、リーダー」

「亜里沙と雪穂まで……」

「で、どないしはるんですか？リーダーさん」

「せ、先生までっ……！」

他の1年生から『リーダー』と呼ばれた真癒美は、今にも頭から湯気が出そうなくらいに顔を赤くしていた。真癒美自身は困惑していたが、他のみんなは真癒美をからかうのを楽しんでいるかのようだった。

「みんなはこう言ってるけど、どうするのかにや?」

「わ、わかりました! やります、やりますから!」

真癒美が勢いよくそう言うと、他のみんなは拍手をして新しいリーダーの誕生を祝った。そんな真癒美の顔から戸惑いは消えていたが、みんなからの祝福に照れて顔は赤いままだった。

「Shooting Starsのことは頼んだよ、リーダー!」

「期待してるわ、リーダー」

「え、えつと……頑張ってるね、リーダー」

「も、もう勘弁して〜!」

真癒美の叫び声と笑い声が屋上で響く中、Shooting Starsの新しいリーダーが誕生した音ノ木坂学院アイドル研究部は新たなスタートを切ったのだった。

~~~~~


— T D L

「ぐでえ〜……………」

マウンテンコースターの序盤で気を失ったナオキは停車前に海未によつて無理やり起こされ、それから溶けるようにベンチに座つて空を見上げていた。

「はい、お水」

「あ、ありがとう……………生き返る〜」

「あははは、まさかナオキくんがジェットコースターで気絶するとは」

「おれは高いところと絶叫系は苦手なんだよ……………」

「そ、そうなんだ」

ナオキはフミコが買ってきてくれた水のおかげで少し回復したのか、姿勢をしつかりとさせて他のみんなが乗っているビル型のフリーフォール系アトラクション、『ザ・ホラー・ビルディング』を見つめて身震いさせた。

「フミコもすまん、みんなとアトラクション乗りたかつただろ？」

「え？ いいのいいの！ 実は私、遊園地とかこういうところって苦手なんだ」

「へえ、意外だな」

「うん、よく言われる。私もあんまり絶叫系は得意じゃないし、そもそもアトラクションに得意なものが少ないから来ても意味ないと思っちゃって……」

「でもそんなに嫌がつてるようには見えなかったけどな」

「そう？あ、そしたら多分みんなと来てるってことが楽しいのかも」

「あゝそれわかる！」

「だよね！特に恋人と来たらちが……あ」

「そうだよな恋人と……え？」

フミコは口を押さえて頬を赤らめて目線をナオキから逸らした。ナオキもフミコの口から出た予想外のワードに鳩が豆鉄砲をくらったような表情をしていた。

「恋人って……もしかしてお前、付き合ってる人いるのか？」

「……………」

「……………マジか」

ナオキはさらに顔を赤くして自分と顔を合わせようとしないフミコの反応で疑問が確信に変わった。そう、フミコには彼氏がいるということだ。

「か、隠すつもりはなかったんだけど……その、別に話すことでもないかなって」

「ま、まあわからなくてもいい。おれもそうだったし……って、なんかおれまで恥ずかしく

なってきた」

「……………ふふっ、変なの」

それから話の話題は自然にフミコとその恋人のことに移っていった。

フミコ曰く、恋人とは、*μ* sも参加したUTXでのラブライブ！の予選の日に出会ったらしい。その人は当日に警備に当たっていたUTXの生徒会副会長で、遅れて到着した自分達を特別に入らせてくれたらしい。フミコもその人に一目惚れしていて、その年の冬に告白されて現在に至る。しかもそれにはヒデコとミカの後押しがあつたらしいのだ。

「流石はヒフミトリオ。仲良いな」

「もう、略さないでよ！」

「あ、ナオキくん生き返ってる！おくい！」

するとみんながアトラクションから帰ってきて、穂乃果は元気になっているナオキを見て手を振った。

「生き返ってるって……………もうちよつと別の言葉はないのか」

「だって本当のことじゃん！」

「フミコ、ありがとうございます」

「ううん、大丈夫大丈夫！私もちよつと疲れてたから」

フミコは丁寧に頭を下げる海未に両手と首を振ってそれに応えた。その後、他のみんなも続々とベンチの周りに集まって次のアトラクションを話し合っていた。

「ちよつと、そんなんで大丈夫？」

「そうだよ！まだまだお楽しみはこれからだよ！」

「休めたから大丈夫だよ」

「ああ、おれも大丈夫だ！」

「なら、次は観覧車にする？」

「……………マダチヨットキブンワルイカモー」

ナオキはみんなの顔を見ず額から汗を流しながら口笛を吹いた。そんな反応にみんなは笑い声を上げ、和やかな笑い声が周囲に響いた。

その後、レストランのテラス席で昼ご飯を食べながら近くでナイフなどをお手玉のようには扱うジャグラーのショーを見た。

そして次に一同が向かったのは、小型の船で洞窟の中を探検しながら付いている銃で沢山出てくる敵型の的を当てて行くというアトラクション、『シューティング・ケイブ』だ。これは2人乗りなので、くじ引きアプリを使ってペアを決めてどの組が1番評価が

高いか勝負することになった。ナオキと海未は別に誰とでもいいと思っていたが、他のみんなはこの2人のどちらかと組めば勝てると算段を立てていた。

しかし、世の中そんなに上手くいくことはそうそうなく……

「海未、そつちは任せただぞ！」

「ナオキも、ひとつ足りとも逃さないでくださいな」

ナオキと海未の最強ペアが完成してしまった。ナオキは右、海未は左から出てくる的を確実に素早く撃ち抜いていた。それは互いに互いの腕を信じ合っているからこそできることだ。

『くそつ、奴が来た！奴を倒さないと命はないぞ！撃て〜！』

隊長である男の声があると下から大きめの敵、この洞窟の主の的が水しぶきをあげながら現れ2人はそこを狙った。その敵的は顔、腕、手、胴体に複数あつて、2人はその全ての的を1発で撃ち抜いた。全てに1発ずつ命中すると敵は沈み、それとは別のところから現れる。

『いいぞーこれでトドメだ！撃ちまくれ!!』

主を2回倒すと次の最終エリアで時間内に何発も撃ち込むことになる。もちろん2人は撃った全てが命中。最後のエリアを抜けると外に出て、眩しいぐらいの日の光が出

迎えた。

『よし、奴は逃げたようだな。良くやった！予想以上の出来だ。コングラチュレーションズ！』

「流星は海未だな」

「ナオキこそ」

2人は大きく息を吐いて互いの腕を讃えて拳を合わせた。

「ナオキくん達凄いいね！」

「さっすがナオキちゃんと海未ちゃん！」

「いやあ、それほども〜」

「は、恥ずかしかったです……」

海未は先程のことを思い出して顔を赤く染めた。

実は『シューティング・ケイブ』のアトラクションを終え、出口付近で最終エリアで撮られる写真と同時にスコアも表示されるのだが、2人の評価はSSS+（トリプルSプラス）とそこでの最高評価だった。しかも最高評価が出たのは久しぶりでその記念撮影をされて、さらにそれを珍しがる人達の視線を浴びることになってしまったのだ。

「でも、もつと誇ってもいいと思うよ？」

「恥ずかしいものは恥ずかしいんです！」

「でもライブとかでも見られてたじゃん。人だつてさつきよりも多いし」

「それとこれとは別なんです！」

海未はそれが余程恥ずかしかつたようで、ことりや穂乃果の言葉にさらに顔を赤くして抵抗した。

「で、どうする？ 時間的に次が最後のアトラクションになりそうだけど……」

「そうか、もうそんな時間か」

ヒデコが残念そうにTDLの地図を広げて最後に行くアトラクションをどこにするかみんなで話し合った。みんなは卒業したとはいえ3月中は高校生で、さらにまだ未成年だ。保護者も連れてきていない今、夕方ぐらいが活動限界時間なのだ。

「それじゃあジャンケンで勝った人が決めるってどう？」

『賛成！』

「じゃあいくよ？ じゃくんけん……」

ヒデコの掛け声と共にみんな一斉に手をグーチョキパーの3種類のどれかにして前に出した。果たして結果は――

「……………視線が痛い」

ナオキは周りからの視線を見ないように目を瞑って頬を赤く染めていた。しかしみんなの中にはそれを楽しむ者、ナオキと同じく恥ずかしがる者もいた。

ナオキ達が乗っているのは、愉快的音楽と共に馬や馬車の乗り物がパラソル型の屋根が付いている円型の台の上をゆつくりと上下に揺れながらまわっているアトラクション、メリーゴーラウンドだ。それはおとぎの国がモチーフにされていて、白馬にかぼちゃ型や白く豪華な馬車があつてその雰囲気醸し出している。

「わくわく！いけいけ！」

「流石穂乃果……………」

「メリーゴーラウンドでここまで盛り上がるの逆にすごいね」

「でもこつちまで楽しくなってきたちゃうね（やっぱり恋人来るならこれぐらい楽しんだ方が……………」）

ジャンケンに勝利してメリーゴーラウンドを希望した穂乃果と一緒に馬車に乗っているヒフミ達は、若干恥ずかしいこの状況で楽しむことができる穂乃果に関心を覚え

「全く、なんで私がこんな……」

「ははは……」

「でも、中々様になつてゐるじゃん」

それぞれ白馬に乗つてゐる海未・ことり・ナオキも話しながら上下に揺られていた。

それぞれが落ち着いて話したり出来たりとした時間を過ごし、その中で今まで共に生活を送つた仲間との時間が永遠のものであればいいのにと心のどこかで願つていた。その原因を作つた張本人である穂乃果も、みんなが仲良く話している光景を見て微笑みを浮かべた。

穂乃果がこのアトラクションを希望した理由。それはこのようにみんながゆつくりと話す時間が大切なんだと思つたからであつた。それをナオキ・海未・ことりは察して、穂乃果らしいと互いの顔を見て微笑みを浮かべた。

「はく楽しかつた!」

「そうですね」

「写真も撮れたしお土産も買えた」

「何より思い出ができた！」

ナオキ達はパークを出て駅に向かいながら今日のことを話していた。手には家族などへのお土産を持ち、パーク入口のゲートを振り返ることなく歩いていった。しかしその笑顔の裏には寂しさがあって、一瞬悲しい目をしてしまう。

「……ことりちゃん、出発はいつだっけ？」

「来週末だよ。遠いから早めに出ないといけなくて」

「寂しくなりますね」

「うん……」

ナオキは悲しそうに会話をする幼馴染3人の背中を見つめた。そう、ことりは去年服飾の勉強へ行こうとしていたアメリカに留学する。その行こうとしていた所は日本という高校生も入ることができる専門学校で、今から入学しても問題ないと再び誘いの手紙が届いたのだ。そしてことりはそれに行くことを決めたため、もうすぐ日本を発つ。ことりだけではない。中には大学や専門学校、職場に行くために東京や地元を出る人もいる。だからこそ、今日という日をみんなかけがえのない思い出として大切に心にしまった。

~~~~~

「ただいま」

「おかえりなさい！お土産は?!」

「亜里沙、ただいま。ちゃんと買ってあるよ」

「わーい！ありがとう！」

ナオキが家に帰るとお土産を期待した亜里沙は大喜びで、まるで子供のようにはしゃいでいた。ナオキはそんな亜里沙に今日1日の疲れを癒されながら美味しそうな匂いが漂うリビングへと向かった。今日の晩御飯はボルシチのようだ。疲れてあまり腹に物が入らないナオキにとっては丁度良く、絵里はそんなナオキの状態をわかって調理していた。

「絵里、ただいま」

「おかえりなさい」

「亜里沙、お土産置いてくるね」

亜里沙はリビングに入ると思い出したかのように自分の部屋へ戻っていった。ナオ

キは一旦荷物を机の上に置くと絵里が料理しているキッチンに足を進めた。

「もうちよつと待つててね。今のうちに荷物を――」

「――これ、絵里へのお土産だ」

ナオキは絵里を後ろから抱きしめるように腕をまわし、絵里の首にTDLで買ったネックレスを掛けた。絵里は突然の行動に驚いて顔をボルシチのように赤くしたが、ネックレスを掛けられたのがわかるとそれを撫でて嬉しそうな表情を浮かべた。

「嬉しいわ、ありがとう」

「どういたしまして。お菓子も買ってきてるからまた食べようか」

「そうね。ほら、早く荷物置いてきて」

「はい」

絵里が少し叱り口調でそう言うとなオキは荷物を持って部屋へ向かった。絵里はナオキがリビングのドアを閉めたのを確認すると、その場で顔を両手で覆ってしゃがみこんで息を大きく吐いた。

「あれはズルいわ……」

絵里はそう呟いてから深呼吸をして高揚している気分を落ち着かせたが、心臓の音は激しいままだった。

—  
残り  
5  
話。

## After way. 02 「卒業旅行と雪の結晶と」

——トンネルを出るとそこは雪国だった。なんて誰かが言っていたけど、誰だっけな？

おれは今、新幹線に乗って青函せいかんトンネルを越えて北海道の地に足を踏み入れた。今日は卒業旅行でおじさんと一緒に来るはずだったけど急用で来れなくなった。もちろん絵里も誘ったけど大学の用事で行けないと言われて、こうして寂しい1人卒業旅行になっている。

新函館北斗駅に着いたけどすごく寒い……やっぱり着込んできて正解だったな。もうすぐ春が本格化してきて暖かくなるのに、外には雪が積もっていてついついはしやぎたくなる。こんなに積もった雪は最近はある見ないな。雪が降ることさえ少なくなってきたし。

さてと、確かこの駅からまた電車に乗るんだったよな……戻るか。

——新函館北斗駅から景色を楽しみながら電車に乗って、おれは五稜郭駅に到着し

た。そこからしばらく歩くとかの有名な五稜郭に着く。

五稜郭は15世紀半ば以降にイタリヤで発生した築城方式である『星形要塞』の城郭だ。でも五稜郭の場合は『稜堡式城郭』と分類されるから、星形要塞というより稜堡式の城郭だと言った方が正しいかな？これは江戸時代末期に建てられたけど完成の2年後に江戸幕府が崩壊。予算書時点から五稜郭って使われていたらしいけど、築造中は『亀田役所（亀田御役所）土塁』って呼ばれていた。元はネコヤナギっていうヤナギ科ヤナギ属の落葉低木が多く生えていたことから『柳野城』っていう別名も持つてる。

徳川 慶喜が朝廷に政権を渡した（返した）大政奉還の後、ここは明治新政府に『箱館府』が置かれた。しかし箱館戦争で榎本 武揚率いる旧幕府軍により占領された。旧幕府軍は新政府軍と戦い、新政府軍による総攻撃を受けてたくさんの死者が出た。そして弁天台場が降伏、その後千代ヶ岱陣屋が陥落して新政府軍から総攻撃開始の通知された旧幕府軍側は降伏を決定した。そして戊辰戦争は終結した。そう、この場所は戊辰戦争最後の土地なんだ！

弁天台場での戦い。ここで戦死したのはかの有名な元新撰組副長、土方 歳三だ。彼は包囲されて孤立した弁天台場の救出のため出陣した。味方の戦艦が敵の戦艦を撃沈されたのを見て「この機を逃すな！」と大喝、さらに敗走していく味方を押し出し「我この柵にありて、退く者を斬らん！」と発したらしい。馬上で指揮しながら戦っていた

がその乱戦の中、銃弾が腹部に命中して落馬し、味方が駆けつけたがその時にはもう絶命していたらしく、壮絶な死を遂げた。おれはなんとも武士らしい死に方だと思う。どつかの番組で土方は『ラストサムライ』って呼ばれてたつけ。でもこの死、敵の銃弾によるものというのが通説だけど、降伏に頑なに反対する土方を除くために味方の銃弾によるものとも言われている。しかも亡くなった歳は盟友であり、元新撰組局長の近藤勇こんどうゆうと同じ享年だったらしい。そんな土方の銅像が五稜郭タワーの展望台にあるらしいけど、高い所は嫌だから見に行かない。

と諸説あることを長々と語ってしまっただけど、おれはそんな五稜郭をくまなく見たいと思う。

——ふう、すっかり堪能してしまった。

げ、もう夕方か。そろそろ旅館に向かわないとな。旅館は函館駅の近くにあるらしいから早く行かないと。キャリアバッグも届いてるはずだ。



「ようこそいらつしやいました。ご予約の香川様でございますね?」

「はい。すみません、おじも来るはずだったんですけど」

「とんでもございません。お客様に来て頂くことが我々の幸福でございます」

ホテルに着くと旅館の仲居さんが丁寧に出迎えてくれて、そのまま部屋まで案内してくれた。変な巡り合わせか、部屋の名前は『柳の間』だった。

汗をかいたおれは部屋の入り口に『露天風呂使用中』という札を立て掛けて備え付けの露天風呂に浸かることにした。

「お〜す〜い景色……でも寒い」

露天風呂の扉を開けるとそこに広がっていたのは五稜郭の向こう側にある山に雪が積もっている光景だった。さらに夜景も綺麗で、なんとも贅沢な景色を楽しみながら露天風呂を満喫できた。

部屋着である浴衣に着替えて入り口に立て掛けてあった札を取り外しているところやうど仲居さんが来て、ご飯をもうすぐ持つてきてくれると教えてくれた。話によると北海道の名産を食べさせてくれるということで想像しただけでお腹が鳴ってくる。

仲居さんは数名で料理を運んできてくれると各料理の説明をしてくれた。カニ、ソウルフードのジンギスカン、新鮮な海の幸を使用した寿司・海鮮丼・炉端焼き、そしてザンギと呼ばれる唐揚げ……どれも1度食べたなら箸が止まらないほど美味しかった。

「ご飯を食べ終わると仲居さん達が食器を下げてくれて、しばらくすると布団を敷きに来てくれた。流石はプロ、布団を敷くにもテクっていた。絵里と今日の思い出を話しながら静かな夜を過ごし、満腹の感覚と旅の疲れからか眠気に襲われて、今日は早めに休むことにした。」

~~~~~

朝、起きて寝癖を直して朝ごはんを食べるために1階の大食堂に向かった。朝ごはんはバイキングで、メニューは選り取り見取りで何を食べようか迷ってしまった。

「ねえ、あれって、sの……」

「本当……?!北海道に来てるんだ……!」

「どうする?声掛ける?」

「でもプライベートでしょ?迷惑じゃない?」

隣の席の女の子達のごそごそ声が増えてきてしまった。でも流石に卒業旅行で囲まれるのは勘弁したいから、ごそはあの子達に静かに伝えよう。おれはそのごそごそ話

している女の子達の方を向いて「内緒にしてね」と差し指の先を鼻先に当てながら口パクで言うのと、女の子達は激しく頷いてくれた。これで騒ぎは事前防止できたな。

——しかし、この時ナオキは思わなかった。この行為が自分の株を上げると共にこの旅に一波乱を起こすことになることを——

「どうもお世話になりました」

「またのお越しをお待ちしております」

お土産を買って、仲居さんに見送られながらおれは次の目的地へと向かった。次来る時があつたらまたこと旅館に泊まらせてもらおう。

次に向かったのは函館湾の側に並ぶ金森赤レンガ倉庫だ。倉庫を含めた一帯は重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。この歴史は金森洋物店がきっかけだと言われている。渡邊^{わたなべ} 熊四郎^{くましろう}が明治時代に開業した洋物店事業の中で倉庫の必要性を考え、営業倉庫業を始めたことよって赤レンガ倉庫の出発点となつたらしい。事業は軌道に乗り業務を拡大していき、倉庫だけじゃなくてビヤホールなども展開していった。しかし創業者の死去や火災、技術の進歩による輸送の発展から倉庫業は縮小していつて

しまった。でもこの赤レンガ倉庫を見ているだけで当時のことを感じることができておれはとて満足できる。

そろそろ腹減ってきたな。どこか軽く食べれるところあるか検索してみよう。ラツキーピエロは……やめよう。こんなハンバーガー食べる気がしない。おつ、近くに白玉ぜんざいが食べれるところがあるのか。ちよつて行つてみるか。

「えつと……」か

ネットに載っていたのと外見は同じ。木造建築の屋敷風のお店で、その前には木があつて所々に若干雪が積もっている。メニューと暖簾、看板も出てるしここであつてるだろ。ネットに載っていた情報によると、ここは大正時代に建てられた屋敷をそのまま使っているらしい。ぜんざいもだけど、大正時代の建物で食べられるというのも楽しみだ。まさに甘いものと大正の雰囲気あまみじろを味わえる最高の甘味処あまみじろと言ふべきだろう。

「いらつしやいませ〜」

扉を開けるとその音で入店がわかつたみたいで奥から店員さんと思しき女の人の声があった。入り口ももちろん当時のもので石畳が敷かれているし、きつとここで靴を脱ぐんだらう。とそんなことを考えていると店員さんがこちらに来ていた。

店員さんは女の子で恐らく高校生ぐらいだろう。お店の服も大正浪漫風で、その子は

黄色っぽい着物の上に白いエプロンを掛けていて、頭にも白いひらひらしたカチューシャをしている。

「すみません、1名で大丈夫ですか？」

「はい、大丈夫で……す……」

玄関から見る事ができる内装からその店員さんに目を移すと、その子はおれを見て瞬きを何回もしながら急に黙り込んでしまった。

「えつと……どうかしましたか？」

「えつ、あつ、す、すみません！えつと、失礼ですが、あなたはμ sの……」

「ああ、はい。μ sの香川ナオキです。知っててくれたんだね、ありがとう」

その子はμ sのことを知っててくれたみたいで、おれが名乗ると毛を逆立てて奥に向かつて走っていった。

「理^り亞^あ！理亞！μ sの香川ナオキさんが来ています！」

「嘘?!とりあえず、姉様落ち着いて！」

そんな声が聞こえると奥からさつきとは別の女の子、多分理亞って子が顔を覗かせて来た。おれが小さく手を振ると驚いて顔を引つ込めた。しかもその顔はさつきの子と似ていて、さらに「姉様」って呼んでたからきつと姉妹なんだろう。

「ほ、本物だ……!」

「ど、どうしましょう！まさかこんなところで会えるなんて。とりあえずお店を貸し切りにした方が……」

「しかもこんな時に限ってお母さん達もいないし……」

「えつと……とりあえず入って大丈夫かな？」

「は、はい！どうぞー！」

2人は慌てて顔を覗かせて仲良く声を合わせていた。やっぱり姉妹なんだな。とりあえずおれは靴を脱いで入店させてもらった。

カウンター席に案内されたおれは名物の『とうふ白玉ぜんざい』を注文してその席から見える内装を眺めていた。

「本当に貸し切りにしなくても大丈夫でしたか……？」

「はははっ、大袈裟だって。大丈夫だよ」

「……そうですか」

「あ、お手洗いはどこかな？」

「お手洗いはあちらです」

「ありがとう、ちよつと借りるよ」

おれがトイレに入るとほぼ同時に入り口の開く音がした。結構人気なんだな。

「聖良！ちよつと聞いてよ！」

「ど、どうしたんですか？そんな慌てて」

「それがね、 μ s が北海道に来てるらしいの！しかもこの近くに！」

……………あれ？

「へ、へえ、そうなんですな」

「そうなの！『北海道に μ s がいた！函館に！見てたらこつちに気付いてくれた！』って書き込みがあつてね」

あの時だ！あの子がきつと書き込んだんだ。やつぱりあんな時は無視した方が良かったのか？個人名は書き込まれてないみたいだけど、まさかこんなことになるとは。

「それでね、スクールアイドルを指摘してる聖良に知らせようと思って！それにもしかしたらここに来てるかもしれないじゃん？来てたりする？」

まずい……………お願い、話さないでくれ……………！

「うーん、お客さんは来てるけど μ s は来てませんね。是非うちのぜんぎいを食べて欲しいのですか」

「そうだよね！だってこのぜんぎいは絶品だもんね！まさに、函館の宝！」

「それは言い過ぎですよ」

「だって本当のことだもん！じゃあ私、他のところ行ってみる！またね！」

「はい、また」

「ふう……あの、もう大丈夫ですよ？」

訪ねて来た友達に聖良と呼ばれた店員さんはそつとドア越しに声をかけてくれた。それを聞いて安心しておれはトイレから出た。

「ははは、ありがとう。助かったよ」

「いえ、とんでもないです」

「黙っててねって言ったんだけどな」

「あ、そろそろぜんざいができますからお先にどうぞ」

「おつ、ありがとう！」

いよいよぜんざいを食べられるのか！楽しみだ！

「……どうぞ」

「おう美味しそう！ありがとう」

「いい、いえ」

席に戻ると奥から理亜ちゃんがぜんざいを運んできてくれた。お盆の上の容器の中にあんこと白・ピンク・黄緑のぜんざいが入っていて、別で漬け物とお茶も付けてくれ

ていた。どうやらこれがセットなんだろう。

「いただきます……んっ、美味しい！」

「あ、ありがとうございます！」

「っつて、なんでまたそこに。こっちに来ても大丈夫だよ」

「は、はい……」

またおれから離れて覗くように見ていた2人は仲良く遠慮しがちにカウンターに出
てきた。

「確か……聖良ちゃんと理亞ちゃんだったね」

「は、はい！」

「姉の鹿角かづの 聖良せいらいです」

「妹の理亞です」

妹の理亞ちゃんの店の服は基本聖良ちゃんと一緒にだけど、着物の色がピンクだった。

「香川 ナオキです、よろしく。さっきの話聞いちゃったんだけど、聖良ちゃんはスクー
ルアイドルを目指してるの？」

「目指してるというか……私、来年から高校生になるんです。そこでスクールアイドル
をしようかと」

「お、そうなんだ！」

「ですが昔、理亞と2人で約束したんです。『一緒にスクールアイドルになろう』って」

理亞ちゃんは聖良ちゃんの言葉に同意するようにコクコクと頷いた。

「理亞ちゃんは何年生なんだ？」

「私は次で中学2年生、です」

「そしたら活動するのは……」

「はい。私が3年生、理亞が1年生の時です」

「でも、それでも私は姉様と一緒にスクールアイドルがしたい！」

高校生でスクールアイドル活動をしようとすれば、聖良ちゃんが3年生の時の1年間しか活動できなくなる。絵里も「もう少し早く穂乃果達やスクールアイドルに出会えたら良かったな」と言っていた。聖良ちゃんもそんな淡い後悔を抱くのではないかと思っただけ、2人を見てる限りそんなことはなさそうだ。2人の限られた時間でやることに意味を感じているんだ。

「それに、その時に向けて2人で練習もしてるんです」

「すごいな……」

『姉妹でするスクールアイドル』にそれ程まで強い思いがあるなんて。これはこの子達が出てくるラブライブ！が面白くなりそうだな。

「それにユニット名も決まってるんです。雪の日に見つけた雪の結晶……」

S a i n t S n o w
セイントスノー

「Saint Snowか……いい名前だね」

「ありがとうございます」

「あ、あの、ひとつ聞いてもいいですか？」

「いいよ。ひとつと言わず何個でも」

そう言う有理亜ちゃんはとても嬉しそうな表情を一度浮かべたけど、すぐに真面目な顔に戻ってしまった。

「あの、A—R—I—S—Eってどんなスクールアイドルだと思いましたか？」

その目はとても真剣だった。その眼差しに当てられたらつい色々話す気になっ
てしまった。

「A—R—I—S—Eか……最初は度肝をぬかれたよ。あれは並大抵の練習じゃ身に付かない
実力だ。歌唱力・ダンス・魅力のどれにおいてもトップクラスだ。素質があつたんだ、ア
イドルとしてのな」

「スクールアイドルではなく？」

「スクールアイドルとしても、プロのアイドルとしてもだ。特に一緒にライブをして、
ずっと観察してきてピンピン感じたよ。穂乃果だってA—R—I—S—Eのライブを見てス
クールアイドルになりたいって思ったぐらいだしな」

「そうなんですか!？」

「そうだ。穂乃果は学校を救うにはどうしたらいいだろうって考えている時にA—RISEのライブを見たんだ。A—RISEのパフォーマンスを見て『学校を救うにはこれしかない!』ってな」

「……でも、そんなA—RISEに、sは勝ったんですよね?」

「ああ。でも最初みんなは自信がなかった。だってあのA—RISEに勝たなきゃ本戦に出られないんだからな。でもみんな勝つために、精一杯輝くために必死に練習した。そしてその結果勝ったんだ」

「つまり、私達もA—RISEにみたいになろうとするならもつと練習しないと……!」
「私達、A—RISEに憧れてスクールアイドルを目指そうと思ったんです。だから私達の”目標”はA—RISEみたいな他者を圧倒するパフォーマンスなんです」

「なるほどな。でもおれはなろうとしなくてもいいと思うぞ?」
「……どういうことですか?」

「怒らないでくれ、決して君達の目標を否定するわけじゃない。ただ、A—RISEのパフォーマンスはA—RISEにしかできない。君達Saint SnowにもSaint Snowにしかできないパフォーマンス、個性があるはずだ」

「……!」

「つまり、目標にすべきはA—RISEというスクールアイドルではなく——」

「——自分達にしかできないパフォーマンスをすること……」

「そういうこと。目標のスクールアイドルや人がいると、いつかそれと同じ道ではないと許せなくなってしまう。そんな自分に嫌気がさしてきてしまうんだ。だからその道を進む……A—RISEの背中を追いかけるんじゃないくて、唯一無二のSaint S nowになつて欲しい。あくまでA—RISEは“憧れ”に留めて欲しい……つておれは思うぞ。まあ、どう思つかは君達の自由だ。おれはそれを否定もしない」

ちよつと言い過ぎたかな？と思いつつ残りのぜんざいを美味しくいただいた。

「あ、ありがとうございます。その言葉、大切にさせてもらいます」

「い、いいよお礼なんて！頭を上げてくれ……！」

こつこつというのやっぱりちよつとこそばゆいから苦手だ。しかし、理亞ちゃんはいい子だなあ。

「あ、そうだ。私達、前回のラブライブ！見に行ったんです」

「そうなのか！？わざわざ東京まで来てくれたんだ！ありがとう」

「とても感動しました！ね、理亞？」

「う、うん……」

結構理亞ちゃんは恥ずかしがり屋だな。さつきまでの威勢が嘘のようだ。でもこの

2人、面白いぐらい性格が逆だ。聖良ちゃんは社交的な感じがする。

「あ、そうだ。サイン書こうか？さつきも助けてもらったし、これも何かの縁だろうし」
「い、いいんですか!？」

「勿論だ。申し訳ないけど、色紙3枚とマジックを貸してもらえるかな？」

「は、はい！理亞、部屋から取ってきてください」

「わかった！」

「そんなに急がなくても大丈夫だよ。聖良ちゃん、ぜんざいもうひとつ貰えるかな？」

「はい、喜んで！」

聖良ちゃんに同じぜんざいを作ってもらってる間、このお店と聖良ちゃんと理亞ちゃん宛にサインを書かせてもらった。お店用のものは写真付きで丁寧に飾ってくれるみたいだ。なんだか芸能人みたいだな、あはははは……

「今日はありがとう。ぜんざい、とっても美味しかったよ」

「いえ、こちらこそありがとうございます。ほら理亞も」

「……あの、ありがとうございました」

「これからまたどこかに行かれるんですか？」

「いや、もう帰ろうと思ってるよ」

「そうですか。また良かったらお越し下さい。歓迎します」

「ありがとう。今度は絵里と来させてもらおうよ。Saint Snowの活躍、期待してるぞ」

「っ……はいー!」

「うん、それじゃあ」

「ありがとうございました」

2人は丁寧にドアを閉めるまで頭を下げてくれた。……あ、言い忘れた。

「そうだ。あと、友達におれが来たこと教えてあげても大丈夫だよ」

「は、はいー!」

よし、今度こそ帰ろう。空いた時間で残りのお土産も買わないとな

——さらば北海道! 待ってる東京!

——ナオキが絵里達からお叱りを受けたのはまた別の話である——

—
残り4話。

A f t e r w a y . 0 3 「2人の愛の巣と決断と」

——4月。

誰もが新生活を迎える中、ナオキは自室で1人机に向かって何やら本を広げていた。

次期ラブライブ！運営委員会の会長、つまりはそのトップに任命されているナオキは晋三から「正式に就任するまでに経済学とか勉強しておけ」と言われて現在絶賛勉強中だ。時々会社にも出向いて晋三の仕事を見学している。

「ちよつと休憩するか」

ナオキは椅子にもたれて体を伸ばして自身の労を自分でねぎらった。絵里と亜里沙はそれぞれ学校に行っていてこの家にはナオキ1人なので、現在は直接誰も労をねぎらってはくれない。

とりあえずお腹もすいたので昼ご飯を食べようとナオキはリビングへと向かった。

「ん、おじさんからだ」

ご飯中、ナオキはスマホの画面に表示されたおじである晋三の名を見て、口の中のも

のを飲み込んでからその電話に出た。

「もしもし?」

『もしもし?今大丈夫か?』

「うん、大丈夫だよ。どうかしたの?」

『いや、ちよつと話したいことがあつてだな』

「話したいこと……?」

『そうだ、実はな——』

その内容を聞いたナオキは驚きを隠せず、電話を終えたあともそのことばかり考えてしまっていた。とても勉強にも集中できなかつた。

——夕方。

絵里が帰ってきてきてナオキはそのことを話そうとリビングの机で向かい合つて座つた。絵里はなんのことも見当もつかず、少しドキドキしながらナオキの顔を見つめる。

「——実は、おじさんから電話があつて、おれ達に結婚祝いをくれるらしいんだ」

「えっ……!?そんな、まだ早いわよ……!」

「それでその結婚祝いなんだけど……」

「もう決めてくれてるのね、なんて言つてたの?」

期待に胸を膨らませる絵里はその内容にワクワクしていたが、ナオキは少し戸惑いの表情を残しながらその正体を話した。

「それが、どうやら家を買ってくれみたいで……」

「そう、家……」

「それでそのことを絵里と相談して決めてくれって、いつから暮らすとかどんな家にするのか、色々——」

「——ええ〜?! い、家って、あの家?!」

「妥当な反応だな。そうだあの家だ。ホームだ。ハウスだ」

絵里はまさかの結婚祝いに戸惑いを隠せずにあたふたとしていた。ナオキは自分と同じような反応を冷静に受け止めて共感していた。

「そ、そんなの本当にいいのかしら?」

「まあ、折角だしな。それで住みはじめる日なんだけど……」

「普通なら1年ちよつとよね。だったら来年にでも——」

それから2人はその『家』についてのことに期待に胸を膨らませながら話していた。

その時、練習から帰ってきた亜里沙は2人の話し声を耳にしてリビングのドアのドアノブを動かす手を止めた。

「——亜里沙も暮らすとなると少し大きめがいいか?」

「そうね。長い間暮らしたこと別れるのは少し寂しいけど、お母様とお父様も納得してくれるわよ」

「そうだな……でも亜里沙は納得してくれるかな？」

「でも亜里沙を一人でここに置いておくのは心配だし、一緒に新しい家で暮らす方がいいと思うわ」

「そうか……お義父さん達にはおれが説明するから、亜里沙には絵里が頼む」

「わかったわ。それじゃあご飯の支度するわね」

「ああ、お願いするよ」

「———ここを離れる？一緒に新しい家で暮らす？それって……」

亜里沙は会話の内容を聞いて現在の状況を整理した。しかしまた姉の絵里が説明してくれるからと思いい、何事もなかったようにリビングのドアを開けて元氣よく「ただいま」と言った。

~~~~~

——翌日。

「あくやっぱりだ〜！」

亜里沙は1人つきりの部室で机に突っ伏してため息混じりに言葉を吐いた。他のみんなは買い出しで出掛けていて、新入生が来る場合に備えて亜里沙が部室に待機しているのだ。

昨日、あれから晩ご飯の時に絵里から説明を受けた。ナオキのおじである晋三から2人への結婚祝いに新居をプレゼントしてくれること。自分を1人で元の家においていくのは心配なのでしばらくはそこで一緒に暮らそうと考えていること。そしてもしどうしても元の家がいいのなら新居で暮らし始める日を伸ばすか辞めるかすると絵里とナオキは言っていた。

亜里沙自身、今の家がいい気持ちがあるがそうすると絵里達の新たな生活を邪魔することになってしまう。日本に来た時からずっと暮らしているあそこを離れるのは嫌だが、同じぐらいに2人の幸せが壊れるのが嫌だ。

「どうしよう……」

亜里沙が大いに迷っている中、みんなの話し声が聞こえてきて姿勢を正した。

「たっただいま〜！亜里沙、ジュース買ってきたよ！」

「お留守番してくれた報酬よ」

「童子先生は職員室？」

「ええ、そうよ」

「「——え？」」

亜里沙の明らかにいつもと違う雰囲気になんかは少し寒気を感じて戸惑いの声を出した。亜里沙の表情は至って冷静だった。しかしその冷静がいつも通りではないのだ。そんなことを思う3人をよそに亜里沙は言葉が続ける。

「ジューズもありがとう、いただきわ。私、先生を呼んでくるわね。その間にみんな準備をして待っててね」

亜里沙はそう言い残すとゆっくりと歩いて職員室に向かって行った。その背中を見つめながら3人は固唾を飲み込んだ。

「……ねえ、亜里沙変じゃない？」

「うん、あれはまるで……そう、絵里先輩みたい」

「どこか頭でも打ったのかな？」

「これは調査する必要があるわね……」

「亜里沙……？」

雪穂、真癒美、瑞希はそんな亜里沙のことを不思議に思いながらとりあえず練習着に

着替えた。そして長年付き合っている雪穂は誰よりも一番心配していた。

——練習後。

「なあ、亜里沙ちゃん今日変やない？」

「はい。私達が買い出しから帰ってきてからずっとあんな感じでした」

「なんかうち、絢瀬さんを見るようで……」

「ははは……そうなんですよね」

「しかも職員室に来た時もあんなんやろ？先生方も『なにかあったんですか？』ってびつくりしてはったわ」

童子は真癒美・瑞希と今日の亜里沙のことを話しながら屋上の階段を降りていた。亜里沙は先に部室の鍵を開けに行っており、雪穂は雪穂で亜里沙のことで頭がいっぱいだった。

「ちよつと私、帰り道で聞いてみます」

「うん、頼んどくわな」

「雪穂になら何か話すかもしれないし」

「そうね。なんたって雪穂は亜里沙の大親友だもんね〜」  
「うん、任せて」

雪穂は亜里沙に事の真実を聞こうと固く決意をした。

「ねえ、亜里沙。何かあったの？」

「……な、なんのこと？」

帰り道、有言実行して亜里沙の今の状態についての質問を投げかけると明らかにギクツとしていた。これは何かあると確信した瞬間だった。

「だって今日の亜里沙変だったもん。ミスが多かったし、ミスしても『ごめんなさい。次は気をつけるわ』って喋り方も変だったもん！」

「そ、そうかしら……？」

「ほら今も！」

雪穂に指摘された亜里沙は口をパツと押さえて雪穂に視線だけを向けた。その表情は疑い・心配といえるものだった。

「……雪穂、怒ってる？」

「亜里沙がちゃんと話してくれたら怒らない」



「……………わかった、話すよ」

それから2人は近くの公園のベンチに腰掛けて、自動販売機で買った飲み物を飲みながらゆつくりと落ち着いて亜里沙の悩み、昨日絵里とナオキから聞いたことについて赤裸々に話した。

全てを聞き終わると雪穂は難しそうな顔をして唸り声を出した。

「亜里沙はあの場所がいいんだね」

「うん、わがままなのはわかってる。でも私はまだあそこから離れたくないの……………」

雪穂はそう言う亜里沙の真剣な眼差しに胸がグツと締め付けられ、親友だからこそできる決断をした。それには亜里沙の今の思いみたいに迷いもなかった。

「ねえ、もし亜里沙が良ければなんだけど……………」

「ん?」

その雪穂の言葉を聞いて亜里沙は戸惑っていたが、自分の中の嬉しいという気持ちにも嘘はつけなかった。

ナオキと絵里はいつもなら帰ってくるはずの亜里沙がまだ帰ってこないことを少し

心配していた。もしかしたら練習が長引いているかもしれないと思い、亜里沙へ「早めに帰ってくるんだぞ」とメッセージを送った。

しかしそれからしばらくすると玄関の開く音がして、ナオキは絵里の代わりに亜里沙を迎えようと立ち上がってリビングの扉を開けた。

するとそこには亜里沙だけではなく雪穂がいて、雪穂はナオキの姿を確認すると一礼をした。

「雪穂……? どうしてここに?」

「ちよつとナオキさんと絵里さんに話があつて」

「話? まあ、とりあえず上がってくれ」

「お邪魔します」

ナオキと絵里は何の話か想像もつかず不思議そうな表情をしつつも、亜里沙と雪穂と向かい合つて机を挟んで椅子に座った。

「それで、話つて?」

絵里に出してもらつたお茶をひと飲みすると、落ち着いた様子で雪穂は淡々と言葉を連ねた。

「あの、ナオキさんと絵里さんの新しいお家のことなんですけど……」

「えっ!？」

2人はまさかそのことを雪穂が知っていて、尚且つそのことを話題に出されるとは思わず頬を赤らめて驚きの声を上げた。

「ああ、実は亜里沙から聞いたんです。それでお話したいのは亜里沙も一緒にそつちで暮らすってことなんですけど……亜里沙」

「うん、あのね……」

「……遠慮なく言っていいわよ。亜里沙のことだったらこれは我儘わがままだから言いにくいんですしよ？」

絵里は言うのを躊躇ためらっている亜里沙の様子を見て、姉妹だからこそわかるその気持ちを察して優しく声をかけた。すると亜里沙は安心したように正直な自らの気持ちを伝えた。

「あのね、わがままだけど私……ここから離れたくないの。お姉ちゃん達と別のところに暮らすのも嫌だけどこの家も大事だから」

「それなら私達も——」

「——それはダメ!お義兄ちゃんとお姉ちゃんのお暮らしを邪魔したくないの!」

「亜里沙……」

「それでね、これは2人が許してくれるかなんだけど、私……ここで雪穂と暮らした

いー!

「あの、私からもお願いします！亜里沙がここにいたって気持ちがある間でいいんです！」

亜里沙と雪穂は2人に懇願の意味を込めて頭を下げた。亜里沙からの提案は雪穂とここで暮らすということ。2人は顔を見合わせると雪穂と亜里沙の思ったよりも早く返事をした。

「いいわよ」

「うん、亜里沙がそうしたいならそうすればいい」

「えっ……!?!」

「雪穂ちゃんのところのご両親はなんて？」

「あ、はい。絵里さん達が許すなら大丈夫だと。条件付きですが」

「そうか。なら大家さんに今から話してくる」

「うん、いつてらっしゃい」

すると話は怖いほどトントン拍子で進んでいき、ナオキは2人が戸惑っている間に大家さんのところへ出掛けていった。状況への理解が追いつかない亜里沙と雪穂は啞然として扉の方を向いていた。

「えーと……」

「雪穂ちゃん、ご飯食べて行く？」

「あ、はい。いただきます……」

「お姉ちゃん、反対しないの？」

「なに？もしかして反対して欲しかった？」

「そ、そうじゃなくて……」

絵里はいたずらに微笑んでからその理由を2人に説明した。それはいたってシンプルなことだった。

「それはね、ナオキと亜里沙がそう言い出したら許そうって話してたからよ。それに、私もここから離れるのは少し嫌だったから……」

「お姉ちゃん……！」

「でも雪穂ちゃんが一緒だから安心だね。亜里沙1人だったら心配なもの」

「ははは……ありがとうございます」

「あ、さつき言ったことはナオキには内緒だからね？」

「は〜い」

女子達の笑い声がリビングに響く中、ナオキは大家さんの部屋に向かって歩きながら晋三に電話を掛けていた。

「おじさん、あの件お願いしても大丈夫？」

『ああ、もちろんさ。絵里さんの妹さんの……えつと……』

「亜里沙だよ」

『あくそうそう。亜里沙ちゃんとは話がついたということだな』

「そういうこと。亜里沙は穂乃果の妹と一緒に暮らすらしいから」

『そうか……そうしたらこつちで準備は進めておくから。また何か聞くかもしれないが』

「わかった。じゃあ、お願いします」

電話が切れるとスマホをポケットにしまってもう暗くなってきた空を見つめて、これからの将来に期待を胸を膨らませた。

「さ、お腹もすいたし早く済ませるか」

ナオキは一人でそう呟くと少し急ぎ足で歩いていった。それは今日の晩ご飯はもちろんのこと、これからの歩む道への期待に胸を膨らましてのものだった。

# LAST Another way 「田舎移住計画 in ラブライブ!村」

——都会から離れた山中にラブライブ!村という名前の、それはのどかな村があったそう。そしてその村に最近の流行りに影響され、田舎の暮らしに憧れたある家族が引っ越してきたようだ。

「わあ〜!お父さんお母さん見てください!木がいっぱいですっ!」

「そうだね。昼寝したら気持ち良さそ〜……………zzz……………」

「ちよつとお父さん起きて。もうすぐ村長さんの家に着くわよ」

——車の後部座席の窓から目を輝かせているのはこの家族のひとりっ子のせつ菜。助手席で有言実行して眠ったのはこの一家の大黒柱である彼方かなた。そしてそんな夫に呆れながら運転するのは母親の果林かりん。この3人が今回この村に移住する虹ヶ咲にじがさき一家だ。

一家は挨拶をするためにこの村の村長の家に向かっていた。その家の前に車を止めると、その音を聞きつけた村長が扉を開けて3人を出迎えた。

「ほっほっほ、よくいらしましたな」

「お世話になります、虹ヶ咲です。貴方がこの村の村長の……？」

「いかにも。儂わしがこの村の村長、綺羅きらツバサじゃ。さあさあお疲れじやろ、中に入りなさい」

「ありがとうございます。お邪魔します」

——虹ヶ咲一家は村長であるツバサの誘いを受けて綺羅邸に入つていった。入ると居間に通されて、そこには村長の息子夫婦とその子供がいて一家を出迎えた。

「ようこそ遠路はるばるいらつしやいました。息子の英玲えれ奈なです」

「妻のあんじゆです」

「長女の聖良せいりです。そしてこつちが妹の理亞りあです」

「ん……」

お互いに自己紹介を済ませ、歳も近い子供同士は話が合ったようですぐに友達になつた。

そして一家は村長達からこの村のことと、ここに住む家族のことを聞いた。それは川沿いに住む家族達と少し山手の方に暮らす家族達のことだ。

「川沿いのところには松浦まつらさんと津島つしまさんが、そこから山手とうじょうの方には東條とうじょうさん、園田そのださん、高坂こうさかさんが住んでるよ。挨拶あいさつしに行くといい」

「山手の方に住んでる人達はこの村に私達と一緒にぐらいの時期に住み始めたんだ」



「川沿いの人達はその少し後だったかしら？」

「そうなんです。新居に一旦荷物を置かせていただいてから伺わせていただきます」

「それでは失礼します。せつ菜、行くよ……」

「はい！聖良さん、理亞さん、また遊びましょうねっ！」

「ばいばい」

——そして虹ヶ咲一家は村長の家をあとにして新居に荷物を置き、この村に自分達より前に住んでいる家族に挨拶しに行くことにした。

まず最初に訪れたのは川沿いのエリア住んでいる松浦一家のところだった。家に近付くと元気が良い子供の声が聞こえてきた。

「こんにちはっ！」

「こんにちは！あなたはだくれ？」

「千歌ちゃん、多分ママとパパが言ってた新しい人達じゃない？」

「は、はじめまして、梨子りこで——」

「——お父さくん！お母さくん！新しい人達来たよっ！」

「千歌ちゃん、先に挨拶しないとっ！」

——おやおや、千歌ちゃんはお父さんとお母さん呼びに行ってしまったようだ。梨子ちゃんは慌てて虹ヶ咲一家の人達に頭を下げてた。そんな中、千歌ちゃんが手を

引つ張つて両親を連れて戻つてきた。

「ほらあの人達だよ！」

「コラ千歌っち、引つ張らなくても歩けるよ〜」

「とうるか千歌、挨拶はした？」

「こんにちははしたよ！」

「お名前は？」

「あ、忘れてた。はい！私は長女の千歌です！」

——みなさん、この子が長女なんだということはそつと胸に潜めていてください。それがこの子のためでもありません。

「私は次女の曜ようであります！」

「改めまして、三女の梨子です」

「私は虹ヶ咲 せつ菜です。こっちは父の彼方と母の果林です」

「ちよつとせつ菜……！」

「あははは、しつかりしてるお子さんですね。千歌に爪のあかを煎じて飲ませてやりたいぐらいです。申し遅れました、私は果南です」

「ハーイ！妻の鞠莉です！マリーって呼んでね！」

「今日引つ越してきた虹ヶ咲です。よろしくお願い致します」

「しまゝす……」

——そこで親達が立ち話をしている間、興味津々の千歌はせつ菜を自分達に混ぜて元気よく走りまわって遊んで、すっかり4人は意気投合をした。

「そうだ。これさつき採れた白菜です。良かったら使ってください」

「わあ、立派な白菜……！ありがとうございます！」

「何かわからないことがあったらいつでも聞きに来てね！」

「ありがと〜ございます……何せ私達は農業初心者なもので……」

「ははは、それはみんな最初は同じですよ。良ければ最初はお手伝いしますよ」

「それは助かります〜……」

「では、そろそろ私達は次のところへ」

「それはそれは、ご苦労様デース！」

「お父さん、お母さん、もう行くんですか？」

「そうよ。ほら、さよならして」

「はい！3人ともまた遊びましょう！」

「約束だよ！」

「いつでも大歓迎であります！」

「またね〜！」

——虹ヶ咲一家は松浦一家に別れを告げて同じく川沿いのエリアに住んでいる津島家の住まいに向かった。

そこに着くとその家の畑で誰かが働いていて、子供達をそれを手伝っているので恐らくその親なのだろう。

「ん？ぴぎい！」

「どうしましたの、ルビィ？」

「お姉ちゃん、あの人達だあれ……？」

「ああ、あの人達はお母様達が言っていた新しくこの村に住む人達ではないですか？お父様〜！」

「ダイヤどうした？あ、もしかして……！」

「どうも、今日から引越してきた虹ヶ咲です〜！」

「ちよつと待っててください〜！ずら丸〜、新しい方達が来たぞ〜」

——その一家の父親はそう言うと言と子供達を連れて虹ヶ咲一家のところへ歩いてきた。すると家の中からもう一人が慌てて出てきた。

「どうも、虹ヶ咲です。これからお世話になります」

「これはご丁寧はなまるにどうも。私は善子よしこです」

「妻の花丸はなまるすら」

「私は長女のダイヤです。こっちは妹のルビイです」

「うゆ……」

「妻の果林です」

「夫の彼方でくす……」

「長女のせつ菜です」

—— お互いに挨拶を済ませ、親は親同士で子は子供同士で話を始めた。

”ピギイ” ってなんですか？

「ん、口癖みたいなものですわよ」

「うゆ……」

「それじゃあ花丸さんの”ずら”も？」

「はい、その通りですわ」

「うゆうゆ！」

「虹ヶ咲さんは都会の匂いがするずらく」

「ちよつとずら丸、失礼だつて……！」

「えへへ……よかつたらもつと嗅ぎます？」

「ちよつとお父さんまで……！」

「なんかすみません」

「いえ、こちらこそ。あだ名で呼ぶなんて仲が良いんですね」

「い、いやあくそんなさ」

「でも善子ちゃんにも”ヨハネ”っていうあだ名があるすら」

「ヨハネ……?」

「ヨハネ……!?!」

「それはあだ名じゃなくて真名しんめい! クツクツク……バレては仕方ありませんね。我が名は  
墮天使ヨハ——」

「——あく、これはめんどくさいすら。また出直すことをおススメするズラ」

「ちよつとずら丸!」

「ちよんちよん……」

「ん?」

「……ギラン」

「つ……まさか貴方も……!?!」

「……こくり」

「ちよつとお父さんも! 次のところ行くわよ! せつ菜〜!」

「は〜い! ではまた!」

「はい、さようなら」

「ば、ばいばい……」

「か、彼方さん、また交信を……!」

「おっけ……」

——めんどくさくさくになりそうなので、すっかり意気投合したお互いの大黒柱を引き剥がして、虹ヶ咲一家は山手のエリアに向かった。

「えっと、確か次はここに……」

「コラア〜! あんた達い〜!」

——山手のエリアの高坂家を目指していた時に近場から叫び声が聞こえて、一家はその主を探して辺りを見回した。すると2人の人影がこちらに向かって何かから逃げているように走ってきた。

「そ、その人達! かくまってくれえ!」

「凜<sup>りん</sup>達は今追われているにや!」

「追われている……?」

「な、何にですか?」

「鬼に追われているんだ……!」

「鬼……!?!」

「あ〜な〜た〜た〜ち〜!」

「ひいつ!?!」

——逃げてきた2人の首根つこを掴んで確保した人の顔はまさに鬼そのものだった。そして虹ヶ咲一家に気付くとその表情は笑顔に変わった。

「に、ニコッ!あなた達が今日引つ越してきた人達ニコね!高坂 にこです!につこにつこに〜」

「ど、どうも、虹ヶ咲 果林です」

「夫の彼方です……かつなかつなた〜……」

「パクられた……!?!」

「高坂 穂乃果ほのかです!」

「同じく凜です!」

「長女のせつ菜です」

「あらとつてもいい子ね〜!どこかの夫と娘とは大違い」

「ほんとほんと!」

「あんた達のことよ!」

「そんなに怒ってるからシワが増えるんだにや」

「なんですつて〜!?!んんゝ、につこにつこに〜……!」

「か、かつこいいです……!」



「え、かつこいい?」

「はい! かつこかわいいですっ! につこにつこに〜!」

「へえ〜やるじゃない。あなた素質があるわよ。につこにつこに〜♡」

「につこにつこに〜!」

——せつ菜とには意気投合して、2人が「につこにつこに〜」をしている間に穂乃果と凜はその場から逃げようと抜き足忍び足で離れるが、そんなことはわかっていたにこによつて拘束された。

「そ、それでは失礼します。これからよろしくお願いします」

「こちらこそ〜」

「なんでも聞いてね〜」

「ばいば〜い……今度はゆっくり遊ぼうね〜」

——虹ヶ咲一家は高坂一家に別れを告げて園田家が暮らす家へ向かった。

「いち! に! さん! ——」

——そこに到着すると凜々しい掛け声が聞こえてきて、その声のする方に向かっていると袴姿の人が声を出しながら竹刀を振って汗を流していた。

「ひやく! いち! に! ——」

「すみませ〜ん! 今日引つ越してきた虹ヶ咲です〜!」

「——ご……ああ、あなた方が村長の言っていた方々ですか。ようこそラブライブ！村へ。私は園田 海未と申します」

「私は果林で、夫の彼方と娘のせつ菜です」

「よろしく願います……」

「よろしく願います！」

「少々お待ちください。ただいま妻と娘を連れて来ます」

「あの人、かっこいいですね！」

「ふふつ、そうね」

「むむ、彼方ちゃんも負けてませんぞ……！」

——それから間もなく、海未が自分の家族を連れて虹ヶ咲一家の元へ戻ってきた。

「どうも、妻のことです！ほら花陽ちゃんもご挨拶」

「う、うん……は、花陽です……」

「わく、よろしく願いますっ！」

「あの、これ、お米……美味しいよ？」

「ありがとうございます！私、お米大好きですっ！」

「え、ほんと!？」

「もう仲良くなってる」

「お米頂いちやつてすみません」

「いえいえ。花陽ちゃんが絶対あげるんだって言うものですから」

——大人達は世間話を、せつ菜と花陽はお米談義に花を咲かせた。そんな有意味な時間はあつという間に過ぎていき虹ヶ咲一家は園田家に別れを告げ、まだ挨拶を済ませていない東條家へ向かった。

「彼方ちゃん、今日は世紀最大で頑張ったから疲れたよ……」

「次で最後だからあともう少し頑張つて」

「は……い……」

「お父さん、お母さん、早く早く……」

「せつ菜は元気だねえ……」

——彼方が根を上げたので果林がそれを鼓舞していたが、せつ菜は先々に進んで行っていた。

すると微かな音<sup>かす</sup>がせつ菜の耳に入り、その音のする方に向かって歩くスピードをさらに上げた。進むごとにどんどんその音の大きさが上がっていき、せつ菜はその先にあつた家の窓の先でピアノを弾く女の子の姿を見た。

「ふう……」

「わーっ！すごいですっ！感動しましたっ！」

「うええ……!?!」

——拍手を送るせつ菜に女の子は変な声を出して驚いてしまった。その声を聞きつけてか、その部屋に親と思われる人が入ってきた。

「真姫まぎどうしたの? そんな声出して……ってあらう? こんにちは。初めて見る顔ね」

「こんにちははっ! 今日引つ越して来た虹ヶ咲せつ菜です!」

「あら元気な子。私は東條 絵里えりよ、よろしくね。ほら真姫も」

「……東條 真姫です。よろしくお願ひします」

——せつ菜が先に挨拶を済ませていると、駄々をこねていた彼方を引つ張ってきた果林が東條家に到着した。

「や、やっと着いたわ……!」

「あら、そちらはせつ菜ちゃんのご両親かしら?」

「はいっ! 母の果林と父の彼方です!」

「ど、どうも……!」

「よろしくお願ひします……」

「あははは……お疲れでしょう? どうぞ中へ」

——絵里の気遣いで虹ヶ咲一家は東條家に招待され、リビングでお水をもらいながら夫が帰ってくるのを待たせてもらった。

「生き返るわ……ありがとうございます」

「いえいえ。困った時はお互い様です。何かあったら遠慮なく言ってくださいね」

「真姫さんはどうしてピアノが得意なんですか？」

「ピアノは大好きだし、いっぱい練習してるから」

「そうなんですね！すごいですつ！」

「すっかり子供同士も仲良くなっちゃって」

「ふふつ。せつ菜ちゃん、これからも真姫と仲良くしてね」

「はい、もちろんですつ！」

「夫は今出かけていますけどもう少しで帰ってくるかと……あ、帰ってきたみたいです」

——すると外からエンジン音が聞こえてくると、絵里は立ち上がって夫を出迎えに外へ出ていった。

「ほら起きて！東條さんが帰ってきたわよ」

「んん……は……は……」

「今日引越してきた方が挨拶に来てるわよ」

「おうそうかいそうかい。そしたら畑で採れたキャベツを持ってきておくれ」

「わかったわ」

——体力の限界で少し眠っていた彼方を起こし、果林達は東條家の夫を出迎える態

勢を整えた。すると話し声が聞こえてきて、その夫はゆっくりとリビングに入ってきた。

「これはどうも。夫でラブライブ！会の会長の希のぞみです。以後よろしくお願いします」

「虹ヶ咲 果林です。こちらは夫の彼方で、娘さんと遊ばせて頂いているのが娘のせつ菜です」

「どうも……」

「よろしくお願いしますっ！」

「はい、よろしく」

「これ、畑で採れたキャベツよ。良かったらまた召し上がって」

「ありがとうございます！」

「これはなんと立派な……！」

——絵里から畑で採れたキャベツを貰った後、希から村の住人による村内会であるラブライブ！会についての説明を受けた。その間、せつ菜と真姫は音楽についての話に花を咲かせていた。

「——あら、そろそろ時間じゃない？」

「お、もうこんな時間か。ウチらは先に会館で準備をするので……」

「はい、そろそろ失礼します」

「せつ菜く帰るよ……」

「はい!では真姫さん、また遊びましょうねっ!」

「うん、また来てね」

——虹ヶ咲一家は東條一家に一旦別れを告げて、自分達の住まいへと戻っていった。

そして夕方になるとこの村の住人全てが会館に揃い、虹ヶ咲一家の歓迎会が行われた。豪華な手作りの料理、お酒、ジュース、お菓子やおつまみ、そして何より温かい村の空気が虹ヶ咲一家を歓迎した。その日は夜遅くまでみんなで騒ぎ、父親陣は朝まで飲み明かしたとき。

めでたしめでたし……

「——つていうのをやらないかって運営委員会から連絡が来たんだけど」

「——つていう劇をやらなかったって運営委員会から連絡が来たよ!やろう!」

「——つていうお芝居をやらないかって運営委員会から連絡が来たけど、どうする？」  
 「——というものをやらないかって運営委員会から連絡が来ましたけど、どうしますか？」

「——つていう劇をやらないかって運営委員会から連絡が来たんですっ！これは絶対にやるべきですっ！」

おとのきさが  
 音ノ木坂学院アイドル研究部、浦うらのほしの星女学院スクールアイドル部、UTX高校スクール  
 アイドルA—R I S E、函館はこだてせいせん聖泉女子高等学院スクールアイドル S a i n t S n o  
 w、そして虹にじがさきヶ咲学園スクールアイドル同好会……それぞれ、スクールアイドルのため  
 の文化祭である『スクールアイドルフェスティバル』に参加するスクールアイドル達は  
 そのお祭りに向けて活動を続ける。

——交わることのないと思っていた”道”は思いもよらぬところで交わった。

これは今までの道とは違う道を歩んでいたら、そんな可能性がある世界でのちよつと  
 した物語でした。

「スクールアイドルフェスティバル、楽しみだなあ」



運営委員会に所属している高校生のナオキあなたはそんなことを呟いた。

—— 次回、『ラブライブ!〜1人の男の歩む道〜』最終回。

## 最終回 「1人の男の愛する人と歩む道」

『ラブライブ！〜1人の男の歩む道〜』最終回

—— 「1人の男が愛する人と歩む道」 ——

「ふう、今日は久しぶりに楽しかったわね〜」

「そうだな」

絵里とナオキは久しぶりの2人っきりのデートを楽しみ、喫茶店で向かい合わせになつて飲み物を飲みながら休憩していた。

ナオキはラブライブ！のことやらで、絵里も大学のことやらで2人共予定が合わず、たまたま絵里が休講になったこの日にデートすることにしたのだ。シヨツピングモールで買い物をして、ボーリングやカラオケのある所でたくさん遊んだ。ナオキの椅子の隣には、ゲームセンターで取った熊のぬいぐるみが袋に入れられて置かれていた。

「……なんだよ」

「ん〜、なにも〜?」

ナオキは頬杖をついて脚をぶらぶらさせながらこちらを笑顔で見てる絵里に若干照れ臭くなつた。絵里は久しぶりのデートが余程嬉しかったのかずつとニヤニヤしていた。

そしてナオキはコーヒーを一気に飲み干すとカップをお皿に置いて息を吐いた。

「……な、なあ、絵里。ちよつと行きたい所があるんだけど、いいかな?」

「ん? ええ、大丈夫よ。そしたらケーキ食べ終わるまで待つてね」

「あ、ああ、もちろん」

「ん〜、このケーキ美味しい〜!」

絵里がチョコケーキをゆつくりと味わう中、ナオキは絵里が承諾してくれた安心感と緊張感を味わっていた。

——数十分後。

「それで、ナオキの行きたいところって?」

「まあ、そうだな……着いてからのお楽しみについてこと」

「……わかった」

喫茶店をあとにして2人はナオキ先導の元、手を繋いである場所へと向かっていた。絵里はどこに行くのか検討もつかず、辺りをキョロキョロしながらナオキの足に体を委ねていた。

「……………」

ナオキが足を止めたのはある教会の前だった。今は人の気配がなかったが、庭などはしっかりと手入れされていたのできつと今日こんにちも使われているのだろうとわかる。

絵里はその教会の札、そして大きな木を見て幼き日の記憶が蘇って目をうるうるさせた。

「つ……………もしかしてここって……………」

「ああ、教会自体は変わってるけど……………おれと絵里が出逢った場所だよ」

この場所は不思議な歌に誘われて訪れた幼いナオキがバレエを踊る絵里と初めて出逢い、よく遊んで、そして互いが互いに恋心を抱いた場所だ。

「まだ残ってたのね……………」

「ああ、見つけた時はびっくりしたよ。外見が変わってわからなかったけど、あの木とこの教会の名前を見て思い出したよ」

「もしかして、これを見せるために？」

絵里は目を輝かせるほどに感動していたが、それを良い意味で裏切るような返答をナオキはした。

「……それもあるけど、もうひとつ理由があるんだ」

「え？」

予想外の返しに絵里は驚いてナオキの顔を見つめた。そんなナオキの顔は至って真剣で、自然と絵里も緊張してきてナオキの顔から目が離せなくなる。

「絵里、ここでしようか」

「するって……なにを？」

「決まってるじゃないか——」

ナオキは右膝を地面につけて絵里の左手を両手で優しく包み、絵里の顔を愛おしそうに見上げた。

この状況で教会ですることと言えば「あれ」しかない。絵里はそのことにナオキから直接言われるまで気付かなかった。

「——結婚式だよ。この教会でするんだ。絵里と初めて出逢つて、絵里に一目惚れしたこの場所で」

「っ……………!!」

この時絵里を襲つたのは言葉にならないような感覚だった。感激のあまり絵里は右手で口を塞いだがその目からは涙が溢れ出ていた。

「この教会を見つけた時から決めてたんだ。絵里と式を挙げるならここがいいって。それにここは幸い結婚式も挙げられるように改装されて、近くにブライダルの会社の事務所もあるんだ。あとは絵里の了承さえあればここで式を挙げることができる……だから絵里、おれとここで——」

「——そんなの、いいに決まつてるじゃないの……!!」

「それもそうか……ありがとう」

ナオキは微笑み、立ち上がつて嬉し涙を流す絵里を優しく抱きしめた。絵里も抱きしめ返して2人は確かな幸せを感じた。

——2人の出逢いの場所での結婚式。

この教会で不思議な歌により出逢い、別れ、また再会して恋人になつて、そしてこの教会で式を挙げる。それは奇跡というよりは運命というべきなのだろう。

「じゃあ、行こうか」

「ええ……!」

幸せいっぱいの人はその教会の近くにあるブライダル事務所に歩いて行った。

——後日、婚姻届も提出して2人の関係はまた一歩前進した。

~~~~~

——そして時は1年ほど流れた。

ナオキも無事ラブライブ!運営委員会の会長になり、絵里は短期大学を卒業して

.....

——6月28日

この日、ナオキと絵里は出逢いの場で思い出の場所である教会で結婚式を挙げることとなった。

そこには親族以外にも、s と S h o o t i n g S t a r s や童子、絵里の大学の友人やナオキの職場の人、そしてミツヒデ達やナニワオトメの面々も呼ばれていた。A — R I S E にも招待状が送られたが仕事が入り来れなくなってしまった。

「ついに、か………」

ナオキは教会の扉の前でネクタイを上げた。

前には牧師のアレクセイ・ミハイロヴィツチ・パヴロフがいる。

ナオキは式が始まるのを今か今かと待ち望んではいたが、心の整理がつくまで待つて欲しいという気持ちもあつた。

『新郎と牧師の入場です！』

扉の向こうから声を聞いていよいよかとナオキは唾をのみ、手袋を力強く握つた。

そして式場の2人のスタッフが扉を開けるとオルガンの演奏が始まり、その音と共に式を見届けてくれている人達の拍手が教会に響いた。教会の奥にあるステンドグラス

は太陽の光を受けて、教会内を明るく照らしている。壁も白の塗装がされており、それが一層教会内を明るくしてより神聖さを際立てている。

牧師が先に歩いて行き、間隔が空いてからナオキは歩き出して中に入る直前で止まって一礼した。そして左側、新婦関係者の方に向かいバラ花を一輪ずつ受け取る。その間に、教会の扉は閉められた。

ナオキはまずは絵里の大学などの友人達から花を受け取っていき、3列ほど歩くと次に右側、新郎関係者の方の後ろの列に戻り、花を受け取っていく。

「はい、おめでとうー！」

「おめでとう」

「おめでとうにゃー！」

「ありがとう」

花陽から花を受け取り、真姫と凜からも祝福の言葉をもらった。

「はい、おめでとう」

「「おめでとうー！」」

「ありがとう」

次の列ではにこから受け取り、希と雪穂からも祝福の言葉をもらう。

「どうぞ、おめでとうございます」

「おめでとうー！」

「ああ、ありがとう」

その次の列では海未から花を受け取り、穂乃果とことりからも祝福の言葉をもらった。

「おめでとうさん」

「「おめでとうございます」」

「ありがとうございます」

さらにナオキはまた左側の列に向かい、童子から花を受け取って真癒美・瑞希・マシユから祝福の言葉をもらった。

「ほら、おめでとう」

「おめでとう」

「ありがとう」

そしてまた右側の列に向かい、ミツヒデから花を受け取って英吉とイズミからも祝福の言葉をもらう。

それから亜里沙をはじめとした絵里の親戚の人達、梨子をはじめとしたナオキの親戚の人達から花と祝福の言葉をもらった。

そしてその合計12本の花束をブーケにしてもらうためにスタッフに渡して、自ら1本忍ばせて途中まで紐でくくってもらい、最後の仕上げをナオキ自身がして段差を上って牧師を見つめた。

「ただいまより、ナオキさんと絵里さんの式を執り行います。それでは、新婦の絵里さんが入場されますので皆さんご起立ください」

牧師がそう言うのと、全員立ち上がって入口を見つめた。

——数分前。

「入場したみたいね……」

絵里は控え室で新郎であるナオキが入場する時に流れるオルガンの音を聞いてそう呟いた。

「それじゃあ行きましょるか」

母の里美がそう言うのと3人は立ち上がって、スタッフの案内に従いナオキ達がいる式場に足を進めた。

「絵里、とても綺麗よ」

「ママ、ありがとう」

「それじゃあ……しつかりね」

「うん……」

そして里美は絵里にウエディングドレスのベールをかけて、人生の晴れ舞台に向かう我が娘の背中を押した。

「秋良さん、あとは……」

「ああ……」

そして父である秋良は絵里の横に立ち、絵里はそんな秋良の腕を掴んだ。それから絵里と秋良はジツと扉を見つめていた。

「——パパ……」

「なんだい？」

「その……ありがとう……」

絵里は恥ずかしそうに小さな声でそう呟いた。秋良はその言葉を聞いて溢れそうになる涙をグツと堪えて、父親らしく威厳として前を見つめた。

「……ああ、絵里がついに結婚するんだな」

「嬉しい？」

「ああ、もちろんだ」

そして、オルガンの音がまた聞こえる。それは先程とは別の曲であり、絵里自身のリクエストでもある。

『もしもからきつと』

もしもナオキと出逢ってなかったらこのような幸せな瞬間は訪れなかった。でもそんなことは考えたくはない。ナオキとの出逢い、全ての人との出会いへの感謝がこもった曲だ。

扉が開き、教会の中の人達の目線は純白の名に相応しい真っ白なウエディングドレス姿の絵里に集まり、拍手とオルガンの音が教会内に響く。参列している人達はその姿を目にして口々に綺麗と言っていた。そんな祝福に包まれながら、絵里と秋良はゆっくりと新郎であるナオキのところに向けて足を進めた。

ナオキも頬を上げてその姿を見つめる。絵里は嬉しいのか恥ずかしいのか、緊張した表情も笑顔に代わり途中から下を向いてしまう。

「絵里、顔を上げなさい。しっかりと前を、未来を見つめるんだ」

「うん、ありがとう……」

絵里は父の言葉に従って顔を上げてナオキの顔を見つめる。ナオキは絵里が近づいて来ると段差から降りて関係者の列の1列目のところまで足を進めた。

そして絵里と秋良がナオキの前まで来た。

秋良はナオキと右手で握手を交わし、左手で自らの腕を掴んでいる絵里の右手を取り、ナオキの右手と交じあわせる。そして両手でナオキと絵里の手を握った。

「ナオキくん。絵里のことよろしく頼んだよ」

「はい。必ず幸せにしてみます」

秋良はナオキの言葉を聞くと安心して強く頷いて、絵里をナオキに託して一歩後ろに下がる。

ナオキは絵里の手を引いて自らの左腕を掴ませ、2人はゆっくりと歩く。ナオキが先に段差を上がり、自らの左手を差し出す。絵里はその手を右手で掴んで段差を上がる。それをあと3回繰り返して、2人は祭壇の前で向かい合った。

「絵里、改めて……おれとこれからの将来を、これから先の道を歩んでくれますか？」

「はい、もちろんです」

ナオキが『感謝』『誠実』『幸福』『信頼』『希望』『愛情』『情熱』『真実』『尊敬』『栄光』『努力』『永遠』……全てをまとめて絵里を愛すると込めてブーケを差し出すと、絵里はその花束の中の一輪の薔薇を取り、ナオキの胸ポケットにOKの意味と12本の薔薇のうち最も大切にしたい『永遠』を込めて刺した。2人の愛を永遠のものにしたいという願いは絵里だけではなく、ナオキもまたそれと同じ想いだった。

それから2人は牧師の方を向いて並び立った。

その後、讚美歌312番を会場の全員で歌い、そのあと牧師が聖書の『愛』の項目を読んだ。

「――愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、怒らず、人のした悪を思わず、不正を喜ばずに真理を喜びます。全てを我慢し、全てを信じ、全てを期待し、全てを耐え忍びます。愛は決して絶えることがありません」

2人はその言葉を真剣に聞いていた。しかしその間お互いにチラチラと視線を送っていた。そしてその項目が読み終わると牧師からも2人にお祝いのメッセーヂが述べられた。

「ではナオキさん、絵里さん、手を繋いでください」

牧師がそう言うと、絵里はナオキの手のひらに手をのせてお互い軽く握った。

「ナオキさん、いつまでもどんな時も絵里さんを愛することを誓いますか？」

「はい、誓います」

ナオキは牧師の問いに対してはつきりとした声で答えた。

「絵里さん、いつまでもどんな時もナオキさんを愛することを誓いますか？」

「はい、誓います」

絵里は感動しているのか牧師の問いに声を震わせながら答えた。

「ナオキさん、絵里さん、これから先ずつと続く永遠の愛を誓いますか？」

「はい、誓います」

2人は互いの目と声を合わせて言った。

「おふたりの愛が証明されました！では、お互いに指輪を交換してください」

牧師はそう言うのと2つの指輪が置かれている箱を持って2人の間に立った。その指輪は婚約指輪とはまた別のものだ。ナオキは絵里の左手の薬指に結婚指輪をつけて、絵里もナオキの左手の薬指に結婚指輪をつけた。

そして2人は指からお互いの顔に目を移し笑い合う。

「では、誓いのキスを」

牧師がそう言うのとナオキは絵里のウェディングドレスのベールを上にあげた。これで2人の間を隔てるものはもうなにもない。

「つたく……なに泣いてんだよ」

「だって……嬉しくて……！」

ナオキはベールを上げると絵里の涙を拭い、そして笑顔を浮かべて絵里の顔を見つめた。絵里も笑顔になってそれに応える。

「おれも嬉しいよ、絵里。これから先ずつと、一緒にいよう。辛い時も悲しい時も、病む

時も、もちろん嬉しい時も、どんなときもだ。誓うよ……」

ナオキはそう言うのと優しく絵里の肩を掴んだ。

「ええ、私も誓うわ……だから……」

絵里は目を瞑り、ナオキに唇を差し出した。キスは何度もしているはずなのに、2人の中からは今までに感じたことのない幸せと緊張が溢れていた。

「絵里、ありがとう。」

——「これからもよろしく」

そしてナオキはそんな絵里をそつと引き寄せて自分の唇を絵里の唇に重ねた。そうして2人は今までしたキスの中で最高のキス……永遠の愛を誓うキスをした。

ここでの誓いのキスはその前に宣誓した誓いの言葉を封印する意味があり、さらに唇への口づけの意味は愛情だ。つまり互いの唇で愛情と契約を永久にする為に封じ込めることになるのだ。

そんな2人の未来を明るく照らすようにステンドグラスは太陽の光を浴びて輝き、オルガンの音色とオペラの歌声もそんな2人を祝福するかのように教会中に響いた。

——ナオキと絵里の永遠の愛はここに誓われた。

~~~~~

『——おふたりのご結婚を祝して、乾杯!』

『乾杯!』

式が終わり、教会と隣接する建物で結婚披露宴が行われていた。海未の短い祝いの言葉と乾杯の音頭と共に参列者は飲み物が入ったグラスを掲げる。

「海未、ありがとう」

「海未に任せて正解だったよ」

「い、いえ、そんな……!改めて、ご結婚おめでとうございます」

「絵里ちゃん!とつても綺麗だよ!」

「ほ、穂乃果、みんな……!」

「ナ、ナオキくんも似合ってますよ! 元気を出してください!」

「マシユ、嬉しいけどフォローになってないからな」

乾杯が終わると各食卓に食事が運ばれるまでの間、μsとShooting Stars面々はナオキや絵里へ祝いの言葉などを掛けた。そんな様子をスタッフの人や童子も写真におさめた。

「あ、先生!」

「絢瀬さんおめでとう。あ、今は香川さんの方がええんかな?」

「もう先生ってば……!」

「ナオキ! 改めておめでとう」

「ミツヒデ、みんな、ありがとう」

「お前があんな綺麗な人と一緒になれるなんてな。羨ましいわ」

絵里やナオキも久しぶりに会う童子やミツヒデ達と話が弾んだ。みんなから祝福の言葉を受けていると料理が運ばれてきて参列者達は自分の席についた。

この披露宴で出される食事はロシア料理のフルコースで、料理長も本国から来たシェフが務めている。みんな珍しい本格的なロシア料理に目を輝かせていた。

前菜であるザクースカが運ばれてしばらくすると、2人の初めての共同作業である

ケーキ入刀が行われた。その後も料理がどんどん運ばれ、絵里の大学の友人や希のスピーチがあり、ナオキと絵里は一旦お色直しのため会場を後にした。

そしてお色直しをしたナオキと絵里は『Love wing bell』の音楽と共に各テーブルを周って、記念撮影や簡単な会話をしながら1番前の自分達の席までゆっくり歩いて行った。真つ白な衣装からナオキは黒色のタキシードを、絵里は情熱的な赤のドレスに着替えていた。

『さて、続いては新郎新婦のおふたりを祝うため、サプライズゲストがお越し下さっています。それでは、お願い致します』

2人が席について司会が披露宴を進めると会場は暗転し、しばらくするとピアノ椅子に座る真姫にスポットライトが当たった。そして真姫が曲の始まりを告げるようにピアノの音を鳴らすと、新郎新婦席の近くの扉が開かれてスポットライトはそこにいたゲストに当たった。その姿を見た誰もがまさかと驚きの声をあげた。

そのスペシャルゲストの3人、ナオキと絵里は参加できないと聞いていたA—R—I—S Eは真姫の伴奏に合わせて『愛してるばんざーい！』を歌いながらゆつくりと新郎新婦席の近くまで歩いてきた。ナオキと絵里はそのサプライズに驚いていたがサプライズはそれだけでは終わらず、1番が終わったあたりからMus, Shooting St

ars、そしてナニワオトメとスクールアイドル経験者達がどんどんとその歌に参加していった。そのとんでもないサプライズに絵里はポツリと涙を落とした。

『ナオキくん、絵里さん、結婚おめでとう』

『サプライズ大成功ね』

『行けないと嘘を言ってしまったってすまない。そうしろとダsから頼まれていてな』

「とつても嬉しいです。ありがとうございます」

そんなみんなからのサプライズも終わり、祝電の紹介もされて披露宴もついに終盤に差し掛かった。主役であるナオキと絵里から参列者と2人の両親へお礼が述べられた。

『皆様、本日は私達2人の新たなスタートをこのように祝ってくださり誠にありがとうございます。私共から参列者の皆様と、ここまで育ててくれた両親へのお礼の意味も込めまして、1曲披露させて頂きます』

ナオキがそう言うのと椅子と共にアコースティックギターがスタッフにより運ばれた。ナオキはギターを持って椅子に座り、絵里はマイクスタンドの前に立ち、2人は合図を送り合うとナオキのギターによる伴奏が始まった。

曲名は『Silent tonight』で、絵里の綺麗な歌声が参列者達の涙を誘った。途中でギターソロもあり、ナオキは練習の成果を充分に発揮することができた。

曲が終わると大喝采が2人を包み、その後間も無く2人の両親と共に退場していっ

た。

参列者の拍手と歓声、そして教会と鐘の音が響く中、ナオキと絵里は教会の出入り口の扉からブーケを持って現れた。スタッフによつて投げられた花吹雪がさらに2人を祝福するかの様に宙を舞っていた。

「行くわよ〜?」

そして絵里がそう叫んで背中を向けると待つてましたと言わんばかりに女性達は階段の下に群がった。花嫁の投げるブーケを受け取った者は1番結婚が近いということ、は周知の事実。絵里がブーケを投げると女性達は我先にと宙を舞う幸せに手を伸ばした。

「あら、取れてしもうたわ〜」

そのブーケは吸い込まれるように童子の手の中に入つていくと、自然と周りからは拍手が巻き起こった。童子は少し照れくさそうに「どうも〜」と言いながら笑顔を浮かべていたが、どこか納得しているナオキと絵里であった。

——その数ヶ月後に童子が電撃結婚したことは言うまでもなからう。

「じゃあ行こうか絵里。おれ達の未来に向かって」

「ええ、どこまでも一緒に付いていくわ」

『おめでと〜!』

『おめでと〜ございます!』

『おめでと〜!』

花吹雪が舞い、参列者達の拍手と祝いの言葉を一身に受けながら、ナオキは絵里をお姫様抱っこした状態でゆつくりと短い階段を降りて行った。

——そして2人の結婚式は絵里からナオキの頬へしたキスト、参列者達の黄色い声で幕を閉じたのであった。

——道とはすなわち人生。

”男”は出会いと別れを繰り返して運命の人と巡り逢った。しかしその道は決して平坦なものではなく、途中で石ころや山や谷など様々な障害も存在した。何も無い道はつまらないものだ。その道で仲間など様々な人と出会い、笑う時もあるれば泣く時もあり、さらに時には静いさかいがあった。

嬉しみに楽しみはもちろんだが悩み苦しき道の一部なのだ。その道であるもの、経験すること全てが何かしらの意味を持つて与えられている。どれもその道を歩む者に何か教えようとしてくれているのだ。

そんなそれぞれに用意された道はイバラ道、曲がり道、分かれ道を経て他の道と交わる。共に道を歩んでいくが、その足を進めるのは他でもない自分自身なのだ。同じような道を歩もうと全く同じということは決してない。その共に歩む者は仲間と呼ぶのかもしれないし、家族と呼ぶのかもしれないし、恋人と呼ぶのかもしれないし、友達と呼ぶのかもしれない。その存在は歩む者によって違うのだ。今はいなくてもきつといつかそう思える存在が現れる。しかし立ち止まっているだけでは何も始まらない。自ら足を進めその道を歩むからこそ出会えるのかもしれない。

しかし、人間だけではなく動物にも植物にも、大きく言えばこの宇宙に生きる者全てに道はあることをお忘れなく。

人生とは道。その道の自分には見えぬ先が運命という。もしかしたら運命はすでに



決まっ  
ていて、それを教えるためにそれぞれの道には色んなものがあるのかもしれない。

——これはそんな道を歩む1人の男の物語。

——次回、『ラブライブ！〜1人の男の歩む道』終章。

## 終章くこれから歩む道く

——おれ達が卒業してから、凜・花陽・真姫は3人での活動を開始した。3人は毎月ライブに臨み、さらにShooting Starsのライブの手伝いはもちろん、他のスクールアイドルの前座を務めた。しかし、ラブライブ!には参加しなかった。その年に行われたラブライブ!には新入生を迎えた新星Shooting Starsが参加したからだ。

『第5回ラブライブ!優勝は……音ノ木坂学院スクールアイドル、Shooting Stars!』

『ワア——!!』

そしてみんなは見事、前回のリベンジを果たして優勝した。会場で実際にパフォーマンスを観たが、おれが見えない間にみんなは確実に成長していた。それこそあの時と比べ物にならないくらいにな。

凜達も無事卒業してそれぞれの道歩んだ。

あ、そういえばいとこの梨子ちゃんも音ノ木に入学した。合格発表の時にはわざわざ家まで合格を報告しに来てくれた。今にも泣きそうな顔でとっても嬉しそうだった。

そうそう、花陽を継いで部長には雪穂がなつたみたいだ。

「——伝説のスクールアイドル、μ's。それは、この音ノ木坂学院で生まれました」  
 「そしてμ'sはこの学校を廃校から救い、ラブライブ！という大会で優勝するまでに……」

私達 Shooting Starsはその想いを受け継いで今まで活動してきました」

「さらに、μ'sを中心としたスクールアイドルの力によって、ラブライブ！はドーム大会を開かれるまでになり」

「今年もまた、ドームを目指して予選が開始されることになったのです！」

「……そして、μ'sの最後のライブは——！」「……」

そういえば、亜里沙はみんなで新入生にμ'sのことを教えるんだって張り切ってたな。なんだか恥ずかしいな……あはははは。

新入生は共学になったことにより前年度よりもさらに多く、音ノ木もまた新しい道歩んでいる。理事長曰く、音ノ木坂学院の人気は盤石なものになっていくから私が生きている間は安心できそうね、だとき。

——そんな音ノ木を卒業したおれ達々 sもそれぞれの夢に向かって、共に歩んだ道からそれぞれの道へと歩んでいった。

穂乃果は卒業した後、実家の『穂むら』を継ぐために料理とその営業を学ぶことができる専門学校に進んだ。

「す、すみませ〜ん！遅れました〜！」

「高坂さん、またですか！」

「あはははは〜すみません……」

「高坂さん、また新しいお饅頭考えてたの？」

「う、うん。気付いたら朝で……」

ちゃんと卒業して穂むらで働いたら饅頭を買いに行つてやるか。

ことりはTDLに行った1週間後にアメリカに留学して、今もまだアメリカで服飾の

勉強をしている。出発の日はすっかりみんなでことりを見送った。あの時見送らず引き留めた分、今回は背中を押そうとみんなで決めただ。

「(日本語訳) ことり。ことりは卒業して日本に帰ったらどうするの?」

「(日本語訳) うーん、私は日本でお店を出したいなって! 色んな服とかアクセサリーを売ってみたいんだ!」

「(日本語訳) それはいい夢ね! 応援するわ!」

「Thank you!」

いつか帰ってきた時はみんなでご飯を食べに行きたいな。

海未は卒業後、体育大学に進学した。なんでも、日本道場最強決定戦の後に推薦入学の誘いが来たらしくて、園田道場を継ぐためにもさらに体を磨くために進学を決めたらしい。

「園田さん……ですよね?」

「はい……つて貴方は、白鉄しろかねさん!? 貴方もこの大学に?」

「うん、あの後に推薦が来たんだ。僕にも来たつてことは園田さんにも?」

「その通りです。道場のことはお聞きしています。良かったですね、存続できて」

「園田さんのおかげだよ。あの時の試合を見た大きな会社がスポンサーになってくれたんだ。その時のお礼を兼ねてお昼でもどうですか?」

「いいですね、喜んで」

あいつのことだ、きつと余裕で卒業するだろうな。ちゃんと友達ができるといいけど……大丈夫だろう。

西木野病院は名前を変えて『西木野総合病院』になった。”総合”と付いたことで今までできなかった治療も出来るようになったらしい。院長を継ぐことが決まっている真姫は推薦で入れるところ、自力で西木野大学の医学部にトップの成績で合格した。これにはおれも含むみんな驚いていた。

「——これで合ってますか?」

「流石は西木野さん、正解よ」

『おお——!』

「西木野さん流石っ！」

「べ、別にこれぐらい普通よ……後で教えてあげる」

「いいの？ありがとう！」

「というか海未より真姫の方が友達ができるか心配だ。逆にあの性格なら嫌われてもおかしくないけど……」人友達ができれば大丈夫そうだな。

凧は1年遅れで海未と同じ体育大学に入学した。凧は将来陸上選手になりたいらしく、スクールアイドルでの経験から推薦を勝ち取った。

「ハア、ハア、ハア……！」

「星空さん、また新記録よ！」

「ほ、本当ですかっ……!?ありがとうございます！」

「これなら次の記録会はレギュラーに入れても問題なさそうね。流石の運動神経だわ」  
「やったにや〜！凧、頑張ります！」

凧のことで、陸上ほぼ未経験でもすぐにレギュラーを獲得しそうだ。試合があればみんなで見に行きたいな。

希は神田明神で数年手伝いをしてお金を貯めて、自分で占いの館を開いてしまった。

これがなんと大繁盛して、瞬く間に『タロットを得意とする占い師 のぞみん』として世間に名を馳せた。

「——おふたりの相性は抜群でしょう。結婚するなら今しかない！」

「そ、そんな……！」

「ありがとうございます！早速式場を探します！」

「ちよ、ちよつと……！」

「お幸せに！」

それに1番相談が多いのは恋愛系らしい。2人の相性やら運命の人やら色々。それはどうやらおれと絵里のことが関係してゐるらしい。

花陽とにこはどうしたつて？それはもうすぐわかると思う。あ、噂をすればなんとやらだな。

「お〜い！にこ、花陽〜！」

「あ、ナオ……社長。お疲れ様です」

「お、お疲れ様です！」

「なんだよ。おれ達の仲だから今までの呼び方でも気にしないって言ってるだろ？」

「こつちが気にするのよ……です！社長になったんだからもう少し自覚してください」



「い」

「はいはいわかりましたよ、人気アイドルのにこさん」

「ふ、2人とも……」

おれは正式に就任式を終えてラブライブ！運営委員会の会長になった。おじさんは退任した後後見人として残ってもらった。

そしてラブライブ！運営委員会の事業拡大のために名前を『スクールアイドルカンパニー』通称『S. I. C.』に変えて、おれは社長になって、おじさんには後見人の意味も込めて再び会長になってもらった。

にこと花陽はこの会社所属のアイドルのメンバーのうちの1人だ。名前は『THE LEGENDs』と言って、メンバーは学生時代にスクールアイドルを経験した人をスカウトやオーディションで募った。それには普段の人柄も考慮に入れるため、直接ライブを観に行ったりしている。もちろんおれだけでは手が回らないので時々他の人にも頼んでいる。

「社長、やっぱりここでしたか」

「ああ、美書子ひしよこさん。どうかしましたか？」

「今日はこの後近くの学校へスクールアイドルの練習の見学の予定が入っています。早く準備してください」

「わかつてますよ。ちよつとみんなの様子を見たかったです。それじゃあみんな、レッスンを頑張ってください」

『はい！』

美書子さんはおれの秘書で、フルネームを新戸あらと美書子ひしょこさんと言う。名前から時々「秘書子さん」とからかわれている。と、いつも厳しくスケジュールを管理してくれています。それだけじゃなくしてお茶とかコーヒーも出してくれるし、ほとんどおれに付きっ切りだ。逆に少し申し訳なくなるが「これも仕事なので」と言われてしまつては何も返せない。

——夕方、おれは仕事を終えて絵里の待つ家に帰る。『香川』と表札があるその家は3階建てで、時々学校を終えた梨子ちゃんが遊びに来たりするが今のところは絵里と2人暮らしだ。屋上也作つて夜空を見上げながらバーベキューをしたりできるし、ただその景色を眺めてぼーつとしたりできるからお気に入りだ。

そう、この家はあの時”おれ”から見せてもらった幻と一緒に。つまりあの時の”おれ”はやっぱり未来の住まいを見せてくれたんだ。なんかあの時は不思議な体験をしたな。

「あら、ナオキ。そんなところでどうしたの？」

「絵里。買い物帰りか？」

「ええ。今から作るから待っててね」

絵里は大学を卒業後、仕事にはつかずに家でおれを支えるために家事をしてくれている。いわゆる専業主婦ってやつかな？

「重いだろ？持つよ」

「ありがとう」

おれが絵里が持ってたスーパーの袋を持ち、絵里はカバンから家の鍵を取り出してドアの鍵を開けた。

「……絵里、ただいま」

「おかえりなさい、ナオキ」

今日もまたこの2人の愛の巣に帰って来た。おれと絵里は同じ道を今歩んでいるんだと強く感じる。

——みんなそれぞれの道を歩んでいる。おれ達が共に過ごした期間はとても短いものだった。でもその時間はかけがえのないもので、これから先思い返すことが何回もあると思うし、忘れることは決してない。ずっとおれの、おれ達の中にその思い出は残り続ける。

だからこそおれはこの先ずつとスクールアイドルを、”ラブライブ!”を残してみせる  
……!

ラブライブ!はおれ達がみんなまで歩んできた道そのものなんだから——。

——ナオキが歩む道はその命尽きるまでずっと先へと続いていく。

——『ラブライブ!』1人の男の歩む道』 完結——